遠吠えは遥か彼方に

劇鼠らてこ

魔法少女は国を守る生体兵器だ。故に集められ、育成のための学園でもって管理される。

魔法少女は国のための資源だ。故に彼女らは死せども蘇る。その命に重み無し。文字通りの盾となれ。

魔法少女は国に仇為す全てを打ち砕く。故に彼女らには等級が存在する。高ければ高い程、殲滅力と殺傷能力を持つ個体として。

そんな世界にTS転生してTS百合楽しむ系おじさんの話。楽しめるとは言ってない。

目次

一、演習編

1・泡羅止頬伏筈兎修道・

おめでとう、君には魔法の才能があるよ、と。お医者さんは言った。一般家庭で一般両親と一般妹のいる私に魔法の素質があるのだと。故に家族のために、お国のために、魔法少女と呼ばれる職に就けと。泣いて喜びましたとも、家族が。それはもう。だってエリートもエリートだ。お給金もさることながら、家族の待遇もUPするときたものだから、それはもうお祭り騒ぎ。

けれど勿論、学寮に入らなきゃいけないからと、涙のお別れもした。まだまだ一緒に居たかったと。次に会えるのは五年後ね、と。あれよあれよのままに全てが決まって、私は魔法少女達の通う学園に転入することになりました。

となれば必要になってくるのは自己紹介。申し遅れました、梓・ライラック。ライラック家が次女にして【即死】の魔法に目覚めし魔法少女。一般中学校から魔法

少女学園の中等部にこの度転入いたしましては、前世が男なだけの一般魔法少女でございます。

無理があーる。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1･2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ライラック！　何を呆けている！　ここは戦場だぞ！」

「呆けているというか、諦めているというか。ここはひとつ撤退など如何でしょうか？」

「ふざけるのは学園内だけでにしろ――退路はない。ここを守り切らなければ、我々に待ち受けるのは死のみだ！」

「だから諦めてるんだけどなぁ」

スコープを覗く。

2-4倍のスコープは、しっかりとソレ――ムラサキで、ヌルテカしていて、ウネウネと動く触手を無数に持つ化け物を捉えている。

遠隔魔法の得意な魔法少女たちが光線だの光弾だのを飛ばしているけれど、あんまり効いている様子はない。魔法が効かないのだから、当然とばかりに銃火器も効かない。むしろマズルフラッシュで自らの位置を悟らせる結果になりかねないので出来れば使いたくない所存。

近接魔法を得意とする魔法少女たちは、しかしそのほぼすべてが取り込まれてしまっている。一度あの気持ち悪い色で全身を弄られ、体力を消耗させられた後にぽっくんちょ。魔法少女のエネルギー源である魔力を吸いだされながら、当然の様に息が出来ないため窒息寸前。衰弱寸前。

「ライラック！」

「とは言いますがねぇ、指揮官さん。アレSS級じゃないですか。私C級ですよ。格下も格下。これならアイツの情報細かに記録して本部に持ち帰った方がまだ実のある、」

「仲間を見捨てる等、あり得ない！」
「……ですかい」
魔力煙草を咥える。
点火の必要ないこの煙草は、魔力回復のポーションに使う薬草が練り込まれているため、気持ち程度の魔力回復効果が見込み得る。ホントに気持ち程度だけど。ただし恐ろしく不味い。
「きゃ、ぁぁあああ!?」
「アイツ、こっちまで――グゥ!?」
ありゃりゃのりゃ。
指揮官殿と問答をしている間に、魔法少女達から魔力を吸い上げて成長した紫触手君が、更なる攻撃手段を得てしまったらしい。先ほどまでは近づいてくる近接魔法少女をはたいて墜とすだけ、絡みついて取り込むだけだったところを、今やズガーンズガーンと触手を伸ばしての遠距離攻撃。
相当煩わしかったのだろう、光線や光弾を撃っていた遠隔魔法少女までもが触手に連れられて、お約束通り身体を弄られてアレヨアレヨと取り込まれていく。あ～

れ～。

「この状況でも撤退は？」

「無しだ！」

「さいで」

なら――仕方がない。

退けないというのなら、お相手しましょう。Ｒ１８っぽい触手――あるいは格上の化け物よ。

込めるのは一発の弾丸。俺の魔法を込めたその弾丸は、付与効果として【即死】を持つ。

退かば死だと、指揮官殿は言った。

あるいはアレらが――取り込まれた子達を救う手段があったのだとしても、退いてはならぬと仰った。

ならば使おう。仕方がない。俺は悪くない。

悪く思うなと、恨んでくれるなと――触手の化け物を照準に収める。

「ライラック！」

「今更遅い」

死の気配でも悟ったか、完全に茂みに隠れ切っていた俺に伸びてくる触手。あァ、好都合だ。

その触手とて、お前の一部なんだから――近づけば当てやすくなる。

軽い音が響く。サイレンサーの役割をするパーツは、本来のソレより効果が高い。放たれるは銃弾。弾丸。螺旋状を描いて飛ぶソレが、俺に向かう触手に触れて――その勢い、一切衰える事無く進み続ける。

瞬く間に触手は力を失った。あっという間に弾丸は化け物の本体に届き――その体を即死させる。

即死させたのだ。

――取り込まれた魔法少女ごと。

「……完了」

「よくやった、ライラック」

俺に目覚めた、芽生えた魔法は【即死】。

効果は対象を【即死】させる――ただそれだけ。
化け物の苗床になった魔法少女だって、化け物の一部なのだから、当然に。

ここなりしはエデン。魔法少女育成学園エデン。
国を狙い、迫り、侵略せんとする化け物たちを撃滅する、生体兵器の育成学園である。

ベランダでパラソル開いて倒したチェアに寝転がり、足を組んで煙草を吸って、アイマスクとイヤホンで外部刺激をシャットアウト。喉が渇けばトロピカルジュースを飲んで、あァさ南国。いや南国じゃないんだけど、いやさバカンスバカンス。
ここエデンは結構な高空にある。守るべき国の上空。襲われたらすぐに急行できるように、あるいは近づく兆候があれば文字通り飛んでいけるように。
昨夜の作戦で出た死者は総勢22名。ま、軍人なんだ、死にもする。殺したのが俺という事を除けば、そう珍しい話でもない。取り込まれた奴らが悪いんだ、俺は

悪くない。

「あ！　ここにいましたの、梓さん！」

聞こえないフリ聞こえないフリ。疲れて寝ているフリ。実際疲れてるし。実際微睡にあったし。イヤホンしてるし。

「梓さん。……梓さん？　もう、寝てますの？　……寝ているのなら、襲ってしまいますわよ？」

「少しは節操を持ったらどうだお嬢様」

「あ、やっぱり起きていましたのね！」

見事に引っかかってしまった。

仕方なく頭に被せた本とアイマスクを取る。魔煙草は匂いもつかないのが素晴らしい。燃えないし。

んでまぁ、本当に仕方なく安眠セットを取りますれば、陽光と共に現れるは金髪ロールのお嬢様。SS級、なんて高等なランクにいらっしゃるこのお嬢様は、C級の俺に何故かご執心なのだ。

さてここで魔法少女のランクについての説明とかこのお嬢様との出会いの話と

か、そういう面倒な説明はしないのでなんとなくで察してほしい。ヒントを出すなら、彼女は俺の魔法を知っている、ということくらいか。

「もう授業が始まりますのよ。だというのに、こんなところで何をしていましたの？」

「何をしていたか、という質問については容易に答えられよう。昨日死んだお仲間を追悼していたのさ。ああ死んじゃったね、可哀想だね、ってな」

「その方々も既に教室にいますので、わざわざ追悼する必要はないと思いますが……」

「……そうかい。そりゃそうだな、いやお嬢様、提案があるんだ。私は動きたくないので椅子ごと持って行ってはくれないだろうか？」

「間違って投げ落としてもいいのなら」

「いいよー」

「……はぁ」

まぁ、実を言うとそうなのだ。

ネクロマンシーかクローン技術か、ここエデンでは死と終わりが同等ではない。時間は多少かかるものの、化け物との戦いで死したとしても蘇る事が出来る――故

にみんな、あんな無策に突っ込むんですねぇ。俺の罪悪感とか一切気にせず突っ込んでパタパタ死んでいくものだから、いや困って困って仕方がない。

ちなみにこの蘇生が叶うのは魔法少女限定だ。エデンの下で震えて怯える一般市民には一個の命しかない。だから死んでも守れってのはまァ本当。撤退なんか以ての外、ってのも理解できる。異端は俺の方なんだろうなぁ、なんて自覚もある。

だけどさぁ。

生き返るからってさぁ。

今の今まで――ついさっきまで世間話や雑談をしていた仲間を躊躇なく殺せ、ってのはさぁ。

無理でしょ、普通に。

「なァお嬢様。ふわふわすんだけど、もしかして真面目に持ち上げてたりする？」

「そうでもしないと動かないでしょう、アナタ。そんなだから昇級に至らないのですのよ？」

「いやさ、C級で十分なお給金なんだって。ランク上げる必要性がみつからねぇのよ」

「ＳＳＳ級になることは全魔法少女の夢ですの！　必要性とかそういうことじゃないですわ」
「あらそう？　じゃ頑張ってよあと一つじゃん」
「貴女も頑張りますの!!」
近接魔法少女は基本怪力だ。身体強化の面に魔力リソースを割いているから、俺の乗ったデッキチェアごと持ち上げて運ぶ、なんてのも難なく行える。逆に遠隔魔法少女は肉体はからっきしだけど、視力だの聴力だのといった五感に優れる……だったっけな。近接でも五感に優れてるヤツいるから一概には言えないんだけど。
俺はアレよ。Ｃ級らしく、どっちもダメ。だから銃とスコープなんてもんを使ってんだ。本来は魔法の素質に目覚めなかった軍隊が使うモンだってのにな。
「……まだ、気まずいですの？」
「そりゃァなぁ。自分が殺した相手とご対面、なんてのは無理だろうよ。フツーは。ここに来るまでは。でも二度も三度もあったらまぁ慣れるよ」
「慣れた顔をしていませんが」
「顔見えんのかぃ？」

「いいえ。でも、そんな気がしたので」
魔法少女の命は軽い。
死んでもいい、なんて保険があるんだ、そりゃ軽くもなる。軽くもなるだろうけど、軽すぎるというか。
死に際する痛みはあるはずなんだ。昨日のだって、息が出来なくて苦しいだとか、体力を限界まで奪われて苦しいだとか。触手の締め付けで骨が折れるまでに至った子もいただろう。喉に入り込んだソレに不快感の度を越えた子もいただろう。触手の突きを腹に食らって、痛かった子もいるんだろう。
それをまるで、無かったことであるかのように。
昨日は大変だったねー、なんて。
いやァ、こえェのよオジサンはさ。あ、俺前世男ね。43歳。今おにゃのこだけど。
「……本当に優しいですのね、梓さんは」
「本当に優しい奴が同級生に椅子ごと運べ、なんて頼むかよ」
「私の知っている本当に優しい方は頼みますわ」

「そぉかい。そいつァ最低だな」

くすぐってぇっつーの？

このお嬢様だけじゃない、他の娘たちも純朴も純朴でさぁ、俺が殺した奴でさえ、俺の感性を優しいだのなんだの言ってくるのよ。ショージキ堪ったもんじゃないよね。生き返るからって死んでもいい、なんてのを受け入れられない、ってのが、どうして優しいに繋がんだよ。こえぇよ。

「さ、着きましたわ。デッキチェアごと入りますか？」

「遠慮しておくよ。先公からぶっ飛ばされそうだ」

「賢明ですわね」

よっこいしょ、なんてのは言葉に出さず、デッキチェアを降りる。

俺には使えない亜空間ポケットっつーのにデッキチェアをしまっていくお嬢様を尻目に、教室へイン。おやまぁ注目の的。だよね。だって俺とお嬢様以外全員席に就いているもの。

「１分の遅刻だ、ライラック」

「あァすんません。ちょいと道に迷ったお婆さんを助けてまして」

「エデンでお婆さんとなると、学園長になるが、確認をとっても？」
「ああいえ、道に迷った鳩を助けてまして」
「そうか。……アールレイデ、連行ご苦労だった。そちらへの咎めはないので安心しろ」
「つーと私にはあるんですかい？」
「魔法少女たるもの時間は厳守だ、莫迦者。罰として午後の森の掃除は単身で行ってもらうぞ」
「ワォ鬼畜教師。午後の森つったらＡ級危険域じゃないですか。私Ｃ級ですよ～？」
「だから罰になる。一度死んで、頭を冷やしてこい」
……いやァ、そりゃ勘弁願いたい。
生き返らせられるから、蘇らせられるからって、死を罰に使うのは倫理としてどーなんよ、って話。道徳の授業とかないんですかね。あるけどね。命の尊さは一般市民に向けてのみだよね。
ちなみに俺はまだ一度も死んでいない。怖いじゃないか。死んで、生き返って、

その次の俺とやらは、果たして俺なのか、っつーやつ。いや前世の俺が死んでも俺だったから俺は俺なのかもしれないけどさぁ。オレオ！　オレオレオレオ！

とりあえず席に就く。廊下からすぐの席。所謂主人公席の真反対。お嬢様も席に就いて、さぁ授業の開始。

魔法の扱い方、魔力運用の効率化、禁則事項に罰則事項。化け物の生態調査等々などなどｅｔｃ．

何が言いたいかって、ツマンネーのだ。教本に全部書いてあるし。死にたくないから全部読んだし。じゃあなんのための授業なのかって、読んでない奴と読んだとしても勘違いしてる奴のための確認作業なんだろうけど、俺はもうページ番号と行数聞かれて一言一句間違わずに言えるので優等生として処理してくださりませんかね。

「ライラック」

「へい」

「魔法少女にとって一番大切なコトは、なんだ」

「そりゃ自分の命ですわ。誰が何と言おうと」

笑いが起きる。クスクスという馬鹿にしたものじゃなく、梓さんまたふざけてる～、みたいな。ふざけてないのよお嬢ちゃんたち。大真面目なのよお嬢ちゃんたち。

「なれば、ライラック」

「ほい」

「一般市民の命と魔法少女の命――この際であれば、お前の家族とお前の命でも良い。どちらが大切だ。言ってみろ」

ひでー問題だしやがる。

まだ俺中学生だぜ？　中等部だぜ？　そんな倫理の問題ふっかけてくんじゃねぇよ鬼教師。

つっても答えは決まってる。

んなのとっくに決まってる。

「――どちらも助けます。それで十分では？」

「そういう大言壮語はSS級にでも上がってから言えC級」

「イエスマム」

そりゃ俺にだってありますよ、使命感っつーか。

大切な家族を守りたい、って意思くらいは。ただ自己を犠牲にしてまで、じゃないだけで。

同じ天秤にないんですよそれは。問いが間違ってんだYO。

「――だが」

「ん？」

「それでいい、ライラック。貴様の粗暴な口調とは裏腹の、どこまでも深い優しさは――そのままであれ。私達が正道を外れたとしても、貴様だけはその慈悲深き心のまま、私達を掬い上げてくれ。それでいい」

「えぇ……重っ」

皆が皆、揃ってうんうんと頷く。

慈悲深い。優しい。やめてやめて、おじさん褒められるの慣れてないの。つか褒められることでもねーからやめてやめて。

「つまり一生C級でいろってことですかいね」

「授業は真面目に受けろ、莫迦者」

「はーい」

俺がC級に居続けている理由。
んなの簡単に、魔力が少ないのと――内申点が、クソ程低いからである。
魔法少女のランクに内申点とかあるのおかしくね？　おかしいよね？

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

さて、言われた通りの森――午後の森。
これ別に放課後の森、とかいう意味じゃなくて、年がら年中、ひねもすひねもすその森の周りだけ午後……夕暮れ時だから、午後の森、って名前。実際空は赤暗く、生い茂る木々の葉がそれさえも隠して、いやは真っ暗な森の様相を成す。
そこの掃除とは、お察しの通り湧いて出てくる化け物共のお掃除だ。A級危険域午後の森。つまりA級以上じゃないと入っちゃだめですよ、ってェ所に放り込まれた単身C級可哀想俺。泣いちゃうぜ。

いっぺん死んで来い、というのは冗談じゃないのだ。恐怖に溺れ、苦痛に苦しみ、そして死んで――もう授業をさぼらんように、遅れないように反省しろと。恐怖政治だよね。怖い怖い。

「で、だよ」

「なんですの？」

「なんでついてきてんのか、っつー問いかけは面倒だからしないけどさ。いいの？　SS級が手伝ったとあらば、私への罰になんねーじゃん」

「あら、梓さんにマトモに罰を受けるつもりがあったとは、驚きですわね」

「いやァんなつもりは欠片もねーんだけどよ。他人への罰を勝手に肩代わりしちまったら、なんか言われんじゃねーの？　ヤだぜ、私。私に付き合わせたせいでお嬢まで罰受ける、なんてのは」

「ご安心を。そも、私がもっと早く運べば梓さんも遅刻はしなかったのです。なればこの罰は私のものでもあると言えるでしょう」

「言えねーと思うけど」

魔煙草を取り出し、その箱の側面に擦り付ける。マッチ箱みたいなもんだ。コレ

で魔煙草は起動する。
あー、苦い。不味い。けど匂いが結構好きなんだよな。
「なら、もっと尤もらしい理由を述べましょうか？」
「あァいーよいーよ。何言っても引かねえのはわかってるし」
「意中の相手と放課後デートをしたい……それ以外に理由はありませんのよ？」
「言わなくていーつったろぅに」
いやまァ、マージでありがたいことに、なんだろうね。
俺ァこの金髪ロールなお嬢様に、好かれている、らしいんだわ。明確な何かがあったとかじゃない、いつの間にか好かれてて割合辟易してるんだが、色々差し置いても見てくれがいい。あと性格も良い。声もカワイイ。なんだ、優良物件じゃないか。
魔法の素質があるのが女性だけ、っつーこともあって、この世界に同性愛を忌避するような文化は無い。というかパートナーがいた方が連携やら何やらが上がるのでカップリングは推奨されていたりいなかったり。こんだけ述べた命の軽い世界であるくせに、相方やられたらちゃんと激昂して強くなるんだからまぁ難しいオトシ

ゴロだよなぁ。

「そろそろ始めるか。とっとと終わらせて帰ってゲームでもしよう」

「ちなみに何割くださいますの？」

「十割……つーと先公が気付きそうだから、七割くらいで頼むわ。C級らしく三割はちゃんと片付けておくからよ」

「ええ、了解しましたわ」

直後――お嬢様の姿が掻き消える。

近接特化SS級お嬢様。神速にして最鋭。気付かれない程早く近づいて、斬る。ただそれだけ。こわーいこわーいお嬢様なのだ。

「んじゃまぁ、私もぼちぼち、ってな」

取り出したるは拳銃。例によって【即死】の弾丸の込められたピストルで、午後の森へと入っていく。

――あァ、そうそう。

「変身バンクはお預けだ。何故って、常に変身してるからなァ、エデンの魔法少女は」

真っ黒のスライムにソレを撃ち込みながら。
俺もお掃除を始めたのだった。

2・藍飼育因尾自防頬伏・

残酷な描写あり

魔法少女は捨て駒である。

近接は突っ込んで死ぬまで戦い、遠隔は守りなく死ぬまで戦う。背後に守るべき市民がいるから、大事な人達がいるから――何より死んでも問題ないから。

魔法少女は死兵である。

怪我も欠損も気にせず突っ込んできて、己が有する【魔法】によって化け物の討滅を成す。それはあるいは、他の魔法少女を巻き込むモノであっても――敵を滅するためならば忌避せずに行使する。

魔法少女は、けれど少女である。

その精神はまだ、いたいけな少女なのだ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

梓・ライラックとして生を受けたのは13年前。まぁ今13歳なので当然なのだけど、当時はびつくりぎゃうてんしたものだ。だって前世の俺は43歳のおじさん。中年も過ぎ行かんとしていた頃合いに、ちょいと色々あって気が付いたらばぶーばぶー。

自身を取り囲う大きな人間達――まァ俺が小さくなってたって話なんだが、その巨大さに当時は恐怖したものだ。ガリバー旅行記もびっくりな縮尺だったからな。

んでもまぁ俺も現代っ子。と言えるほど流行に乗れてるわけじゃあなかったが、異世界転生系っちゅー概念があるのは知っていたもんで、割合すんなり受け入れる事が出来た。割合すんなり受け入れて、割合すんなり幼稚園と小学校に通った。

いやさ、ベンキョーで無双してやろう、とかは一瞬考えたけど、数学はともかく他の科目はてんで違うでやんの。歴史は勿論だけど、この国の言葉、あと魔法があ

るせいで物理法則も違うし、だから理科も違う。

あ、コレは真面目に勉強しなきゃダメだな、と気付けたのが小学一年生の頃で本当に良かったと思う。ラクショーラクショーとか思ってたら真面目にやばかった。特に薬学……ポーション関係の調合知識は、エデンでは知っていて当たり前の知識であるため、すみません知りませんじゃ話にならない。

とはいえ、おじさんが子供に戻ったのである。

いやさラッキーというか、遊ぶ時間の多いこと多い事。前世と違う媒体のゲーム機やソフト、アニメーションも楽しめて、効率よく仕事、じゃねぇや、お勉強して、適度に友達付き合いをして。

これが20代前半くらいまで続くんだろ？　サイコーじゃん、とか考えていたのも束の間。

中等部に上がってすぐに、「君には魔法の才能があるよ」と来ての――コレ。

捨て駒にして死兵。エリート職というか、国防の要であるからお給金はたんまり貰えるものの、お仕事は常に死と隣り合わせ。いやまァ俺が魔法少女になったことで家族の家格も上がって色々恩返しできたっつーのはすげー嬉しいんだけどさ、な

んでまた中等部から仕事三昧になんなきゃいけねーのかって話。

だから割とサボる。魔法少女は解雇とかされないので、どんだけサボっても内申点が落ちるくらいで問題ない。D～SSSの等級の中で、一応殺傷能力がピカイチってんで最低から一個上のC級を頂いて、国家防衛機構・浮遊母艦EDENで優雅な暮らしを――。

「あー！　いました！　梓さん発見ですの!!　皆さん！　いましたのよー!!」

「ホントだ、あんなとこにいる」

「どうやって昇ったんだ……？　アイツ、飛行魔法は使えないはずだが」

……きゃいのきゃいのと煩い声が下方から。

ここはエデン。魔法少女育成学園エデン。あァそうそう転生は転生でもTS転生で、俺ぁ今女の子で、魔法少女しかいねー学園だから当然女子校で。

パラダイスって程パラダイスな職場じゃないが、腹ァ探んなくていい純朴な子ばっかでおじさん楽しいよ。お節介な子とか純粋過ぎて扱いづらい子とか除けばみんな優しくて良い子だしな。

さて、エデンは構造として浮遊する逆三角錐にでっけぇ城が乗っかってる、みた

いな形をしている。中央に一番高い塔――学園長なるヒトがいる塔と、それを囲う五つの監視塔。監視塔はちょいと外縁部に突き出してて、下にある国に近づく敵がいないか見張ってる。

　おじさんはその監視塔の上にあるちまっこいスペースにパラソルとデッキチェアを置いて、優雅なバカンスと洒落込んでいたワケですねぇ。見つかったが。何故分かったこんな僻地。

「よ、っと」

「うぉ!?」

　どうしようかなー、降りようかなー、無視しようかなー、とか考えていたら、このちまっこいスペースに降り立つ存在が一人。よ、っと。なんてかんるい感じで来てくれちゃいましたけど、俺がここまでパラソルとデッキチェア運ぶのにどんだけ苦労したと思ってんだ。俺ァお前達みたいな亜空間ポケット使えないんだぞ。

　なァんて文句を言う暇もなく、パラソルをしまわれる。金髪ロールお嬢様もそうだけど、どうしてこう他人のモンを勝手に奪いますかね。毎度毎度買ってんだぞ自腹で。まぁ毎回買っても特に問題ないお給金は貰ってんだけどさ。

「……これだから近接は」
「お前も一応近接の括りだろう、梓」
「私の得物知りません事ォ？　銃ですよ銃。拳銃とスナイパー。どーみても遠隔でしょォ」
「魔法は嘘を吐かん。何なら今この場で手合わせするか？　お前が近接である理由は一目瞭然になるが」
「手合わせしたら死ぬじゃん何言ってんの」
「別に、一人が死んだ所で問題ないだろう。今日は遠征に行っている奴もいないしな」
　青い籠手を腰に括りつけ、結構深いスリットの入った緑と白の衣服を纏うながーいポニテの少女。
　なんでもないことかのように言う≫問題ないこと≪に、少しばかり顔を顰めた。
「ああ……すまない。梓は苦手だったか。人死にが」
「好きな奴がいるかいね。で、何用さ。今の時間、授業は無いはずだけど？」
「授業は無いが実技演習がある。毎日の予定表を全て把握しているお前が知らぬは

ずがない。私達の班はお前を入れて一つだ。故に全員でお前を捜索し、連れ戻しに来た」

「私ァ今休んでんのよ。いいじゃん、いなくてもどうにかなるでしょ」

「演習項目は全員の連携力の向上及び市民奪還時の動き方について、だ。簡潔に言うとお前が来なければ私達の演習は始められない。故に私達は演習項目が達成できず、それぞれの成績に傷跡を残す。それでもお前が休みたいと言うのなら仕方がない。潔く諦めよう」

「連れてって～」

「ああ。姫抱きでいいな」

「なんでなンッ!?」

人質って奴だ。いやさ確かに、俺のせいでみんなの成績に傷をつけるのは良く無いね。失敗だった。

でもさぁ、マジで真面目に俺いらんのよ。連携力の向上と市民奪還時の動き方について、にさ。どうして【即死】が役に立つっていうんだ。そもそも五人の班で俺以外が全員Ａ級以上。動きについて行けも何も、早くて見てらんねーちゃん。

あとお姫様抱っこは本当に止めて欲しい。

近接だから身体能力高いのはわかんだけど、知ってる？　お姫様抱っこって上からの支えないからピョンピョン跳ねての移動だと結構浮遊感あって怖いんだよ？

ちなみにお姫様抱っこ自体はおじさんもう慣れちゃった。エデンに来てからみんなしてくるんだもんな。みんな俺より身長高いんだもんな。別に妬ましかねェけどさ、でけぇのにヒョイと持ち上げられるのは割と怖いんだぜ。

「あっ！　あっあっ、ミサキさん！　変わってください！　梓さんを抱っこするのは私の役目ですの！」

「拒否する。さ、とっとと行くぞ」

「あ〜!!」

これまた下の方でお嬢様が叫んでいるが、こっちァそれどころじゃない。

戦場をヒョイヒョイ跳ねまわる近接魔法少女はやっぱちげーというか、エデンのクソ高い屋根やら外壁やらを、俺を抱いたままに飛び回るのだ。姿勢を崩すことなく、明らかに垂直な壁に止まったりしながら……いやこえーのよ。安定感あるから逆にこえーのよ。

「そんなに震えるな、梓。今回は演習だ。死人は出ない」
「嫌なフラグを立てるねェ」
「フラグ？」
いんやさ、そんなこと言ったら起こりそうじゃん。
演習中に異例の何かが、とか。突然化け物が湧いて出て、とか。
そんで演習がガチの実戦になる奴。俺ァ知ってんだぞ。流行には疎いつったって限度があるからな！
んでまぁ、ぴょいぴょいしてって、辿り着いたのはエデンの外。つか下。
市民のいる街を囲う外壁の外。廃墟。なんだ、化け物の湧きポイントが近いせいで人の住めなくなった土地、って感じ。
そうそう、化け物には突然湧いて出る奴と湧きポイントが決まってる奴がいる。先日の午後の森とかは後者で、その前の触手の化け物とかは前者。基本的に前者の方が強い。強いというか対処しづらい。研究されて無いからな。
で、今回の演習はその湧きポ固定の化け物相手に連携しての攻撃をするのと、市民に見立てた人形を放り込んで無傷で奪還しろ、っちゅー奴なワケね。

「……A班。ギリギリだったな」
「はい」
「……縁に感謝しろ、ライラック。今回はお咎め無しだ」
「んじゃありがたく」
「それは感謝とは言わん」
ちなみにこの担任といいあの指揮官といい、エデンには大人の魔法少女がいる。というのも、≫魔法少女≪が発現する年齢は人に寄ってまちまちで、エデンの学園長のように老婆の時点で成る者もいれば、5歳とかの時点で発現する者もいるのだと。
んで、魔法少女になると肉体の成長が止まる。歳を取らなくなるワケで、だから見た目の年齢と魔法少女歴はイコールで結ばれないし、それこそが俺の掲げる陰謀論……魔法少女実は蘇ってるんじゃなくてクローン説を押している要素の一つなワケである。掲げるっつって言葉に出したことは無いんだけどさ。
「よし、ではA班。点呼を取る。ミサキ・縁」
「はい」

「シェーリース」
「はい」
「ユノン」
「此処に」
「梓・ライラック」
「うい」
「そして班長、フェリカ・アールレイデ」
「はい！」
以上五名がA班と呼ばれるグループ。上からA、S、A、C、SSの等級となる。
わかるかね。この場違い感。キャリーオブキャリー。Cて。A以上の班にCて。
「この廃墟群東の家に、あらゆるものを溶かすスライムが群生している。それを、どんな手を使っても良い。消してこい。ただし、建物を破壊するような行為は禁止だ」
「わかりましたの」
「それが終了したら、私の所へ戻ってこい」

「了解ですの！」
「よろしい。では行け！」
担任の言葉と共に、散ッ！　って感じで一斉に走り出すみんな。
ちなみに俺はまだ降ろされていない。俺の足で走ってもみんなに追いつけない、なんてのは担任もわかっているので何も言われない。
しかしさぁ、いる場所がわかってて、対策法も知られているとはいえ、あらゆるものを溶かすスライム、なんてのを演習に取り入れんなよ。あぶねーだろ。都合よく服だけ溶かすスライムじゃないんだぞ。マジであらゆるもの――魔法で強化された人肌だろうと骨だろうとグズグズに溶かすスライムなんだぞ。
ポニテスリットは演習だから死人は出ない、とか言ったけどさ。出るよ多分普通に。近接連中が突っ込んでいって溶かされながら悲痛な悲鳴上げて死ぬよ。やだよオジサン女の子が溶けるの見るの。
「安心しろ、梓」
「何が」
「私達は強い。この学園に来た時よりもさらに強くなっている。お前が死を忌避す

るというのなら、死にはしない。お前を悲しませるくらいなら、死なない方法を取る。それでいいだろう？」

「……怪我も無しで」

「ははっ、それは確約出来ないな！」

笑いごとじゃないんですよ。

死なない方法を取る、って言ってくれるのはめっちゃ助かる。ちょっとキュンと来たくらいには助かる。でも怪我をするな、って言葉に笑いを返すあたり、本質的な理解をしてくれてないのもわかる。怪我をする。苦痛を負う。欠損を背負う。死ぬ。それらは等価に嫌だ。俺自身もだし、みんながそうなるのも嫌だ。

蘇るから死んでもいい。蘇るからケガしても良い。

なんだそれ。倫理舐めてんのかコノヤロー。

や、でもホントにちょっとキュンと来たよ。おじさんだけど。

やめてほしい。本来なら俺が前に出て守ってやるべき年齢だろうに。いや魔法少女歴しらねーけどさ。

……強く、ねぇ。

「ミサキさん、梓さん！　あの建物ですの！　――先行しますわ！」
「あ、ちょっと」
あのお嬢様、担任の話聞いてたんだろうか。
連携力を高める演習だってのに、一人で片づける気だぞアレ。
「続く」
「参ります！」
神速のお嬢様に続くのは、背中メッシュ（シェーリース）と太腿忍者（ユノン）。建物の中では不利としか言えない魔法を持つ背中メッシュ。建物の破壊禁止命令が出てるので閉所じゃ上手く戦えないだろう太腿忍者。どう考えてもどうにかこうにか屋外に引きずり出して戦え、って話だろうに、なーんで突っ込むのか。
しかもあの二人近接じゃねぇのにさぁ。
「私達も行くぞ、梓！」
「いやちょい待ちちょい待ち、一旦外に引きずり出してから――」
作戦とすら呼べない一般論をぶつけようとした――その時。
「あ〝あ〝ぁッ!?」

「い――ぐ、ぁ……！」

……後から入った二人の、それはもう苦痛を知らせる悲鳴が轟いたのであった。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ポニテスリットに湧きポから向かいの廃墟に降ろしてもらい、彼女は突撃。まァポニテスリットは近接だからわからんでもないんだが、背中メッシュと太腿忍者はどうしたもんか。

愛用の2-4倍スコープで廃墟内を覗く。

覗いて、後悔した。

「……だから言ったのによォ」

背中メッシュは肘から先を、太腿忍者は、その片方の太腿を――溶かされている。

当然そこからの流血は止まらず、苦痛も苦痛だろうに、額に脂汗を浮かべながら自身の魔法を放とうとする姿は……なんつーか、もうちょっと自分を労われよ、って

いう。

死んでも問題ないから、痛いのも一時の我慢、という考えが根付きすぎている。あんなん慣れるはずがないのに、それを忌避する魔法少女があまりにも少ない。いるにはいるんだけどな。ちゃんと痛みを恐れる奴も。

SRを使う距離でもない。だから拳銃を取り出して、狙いを定める。

あらゆるものを溶かすスライム――アシッドスライム。色は黄色と緑。本来の討伐法は全身をぶっ潰したり消し飛ばしたりするか、どっかにあるコアを破壊する……なんだけど、部屋中に群生したアシッドスライムはどこがどれなのか、どのスライムがどこに繋がっているのかが分かりづらい。恐らく背中メッシュはその魔法【神鳴】で大規模殲滅を、太腿忍者は【光線】で貫通討滅を図ったのだろうけど、どちらも遠隔故にチャージが必要で、その隙を突かれて纏わりつかれてぐじゅるじゅる、ってカンジだろうなぁ。

【神鳴】なんざそもそも使えたのか怪しい。この廃墟普通に天井あるし。

今は太腿忍者が本来の戦い方……魔法少女に目覚める前から忍者だったという忍者スキル、手裏剣投げと苦無投げを駆使して迎撃を行っているけれど、そこはあら

ゆるものを溶かすスライム君、全部飲み込んで溶かしてしまっている。ジリ貧って奴。

そんな太腿忍者は片足を失っているので、肘から先を失った背中メッシュが肩を貸し、どうにか建物外へ逃げようとしている……みたいな状況。

二人を逃がすために殿を務めるはポニテスリット。彼女の魔法は【波動】。全身から振動を発する事の出来る近接魔法少女で、拳や蹴りから対象に触れる事無く打撃を与えられる。まさに今回みたいな触れちゃいけない系の相手に有効な魔法の持ち主であり、連携としてはまず彼女が行って、スライム達を大通りに吐き出してから、全員で叩く、が理想形。だと思うんだよなぁ。

ちなみにさっきからチラチラと視界に入る金色の線。そして忽然といなくなるアシッドスライムの一部。

それらはお嬢様の仕業だ。その得物とて溶かされないわけではないのだろうに、恐らく最小限の被害で留めながら殲滅を行っている。

……これなら確かに、出来はするのだろう。

目標の達成。連携力もクソもへったくれもあったもんじゃないが、SS級の殺傷

能力とA級の殲滅力によって、課題はクリア、になるのだろう。
果たしてそう上手く行くもんかなぁ、というのが今のおじさんの懸念。
SS級一人いればどうにかなる、なんて状況を演習に使うとは思えないのだ。今はヘマした二人のためにポニテスリットも出ているが、お嬢様一人でもなんとかなっただろうこの演習。さてはて、隠し玉は何か。
「……梓、お願い」
「ふぅっ、ふっ……お願い、します」
「――もしかしないでもさ、殺せ、って言ってんの？」
なんとか。
なんとか、こうにか、どうにか。
俺の所へ辿り着いた二人が――俺に懇願する。
だくだくと流血し、顔は蒼白、目には涙と、もう見るだけで痛々しい二人が言うのだ。
俺に。
銃を持った俺に。

「お願い、します」
「痛くて――たまらないから、どうか」
殺してください、と。
「……馬鹿が。ヤだよ。つか多分、まだ終わってない。痛むだろうが止血する。それで保って数分だろうけど、まだお前達には役目がある」
「……わかり、ました」
「ふぅ、ふぅ――ッ！」
止血用のポーションというものがある。ほら、欠損部位を焼いて止血する、みたいなのあるだろ、ドラマとかで。あれのポーション版。振りかける事で周囲の皮を集め、傷口を塞ぐ。皮膚が引っ張られる事による苦痛が発生するし、欠損が酷すぎれば皮が足りずに終わる、なんてことも少なくはない。ただこの分なら大丈夫だ。
「ゥ――ァアアア!!」
「ヅ、ぐ……！」
どちらの方が痛いのか。
全身を溶かされて死ぬ痛みと、全身の皮を引っ張られる痛み。

……知らんな。知りたくもない。

とにかく、俺に殺人を強請ってきた二人は痛みにのたうち回るも、一命は取り留めたらしい。といっても出血量が出血量だ、そう長くはない。輸血云々じゃなく、失った部位が大きすぎる。だからこの二人は、この演習がどうなろうとも死ぬ。それは確定。

はぁ。やだね。やだやだ。

なんでそんな危険な演習にさァ。しかも――殺してくれ、なんてさ。

「おぉいお嬢様！　ポニテスリット！　一旦戻ってこい！」

「はい戻りましたわ梓さん！」

「……その仇名、やめてくれと何度言ったらわかるんだ？」

流石は近接、呼びかけたら一瞬で戻ってくる。お嬢様の方は一瞬どころじゃあないが。

そして、俺の後ろで苦痛に喘ぐ二人を見た。

「やはり、殺してはやらないのか」

「ヤだってば。つかダメなんだよ。多分殺しちゃだめだ。お嬢様一人でアレを殲滅

するのもNG。多分っつか絶対、遠隔魔法少女の力が必要になる場面が来る」
「ほう」
だからちょいと離れて観察を――と言おうとしたところで、それは起きた。
もうタイミング良過ぎるだろってツッコミたくなるタイミングだ。タイミングオブタイミングだ。タイミングインタイミングかもしれない。
一匹のアシッドスライムが、湧きポの外に出る。
即座に半分ほどにまで溶かされた剣を構えるお嬢様を制し、観察を続ける。
二匹目。三匹目。四匹五匹……そのままどんどん、増えて行く。
スライム達は。
何かに怯えるように、逃げるようにして、そこから出てくる。
「ポニテスリット、飛来する酸を弾くのも出来ると見て良いよな？」
「ああ、可能だ」
「お嬢様も防御で頼む。後ろの二人のチャージが終わるまでの」
「わかりましたの」
まだ荒い息を吐く二人に振り返って――少しばかり強い口調で言う。

この班のリーダー俺じゃねェけど、ま頼むわぁ。
「お前らは、今できる最大火力の充填を開始してくれ。目標は廃墟の上方。出来るか？」
「……了解、です」
「最大火力……チャージ開始……」
遠隔魔法少女の弱点はこれだ。
自分を守る術がないのと、魔法を撃つのにチャージ時間を必要とする。戦場のように前衛がバンバン戦ってくれりゃ問題ないんだが、単身では自身の安全を完全に確保してからでないとヤバイっつー。近接は有る程度自分を魔力でコーティングできるし、そもそもが拳に炎纏わせて爆発させる、とか、クソでかい剣を創り出して斬る、とかだから問題ない場合が多い。その代わり捕まったらジ・エンドなんだけど。
さて。
「アシッドスライムが、どんどん融合して行きますのね」
「ああ……これは、スライムが天敵や強敵を前にした時に行う防衛法の一つだな。

融合し、巨大になり、威嚇兼リーチを伸ばす、あとは食われづらくする、か」

「私達を天敵認定した、というワケではなさそうですわね」

大きくなっていく。大きくなっていく。

アシッドスライムが、あらゆるものを溶かすスライムが――大通りにて、大きくなる。既に湧きポには一匹もいないのだろう。あるいは新しく湧いた者も融合したか。

その大きさは、俺達のいる廃ビルを超える程。黄色と緑の円柱――それが、竜巻のように立ち昇る。

ぶるりと震えるだけで、酸が飛び散る。此方へ来るものはポニテスリットが【波動】で弾き、他の建物へ向かうものはお嬢様が叩き切る。建物の破壊は禁止だからな。

「チャージ、そろそろ……」

「あれに、撃てば……」

「いや、違う。もうちょい待ってくれ」

「ッ……！」

つらいだろう。痛いのだろう。
すまないとは思う。お前等が悪いんだぞとも思う。だからやめてくれ、その悲痛な顔を見せるのは。心が痛くて仕方がない。
この世界に【治癒】や【回復】といった魔法を持つ魔法少女は存在しない。
故にこその、俺、なのだろうが。
知った事か。
「――来るぞ！」
それは金切り声に近かった。女性の悲鳴を彷彿とさせる、キィィイイという声。
遠方。上方。高空。
スライムに目があるのか知らんが、巨大になった円柱スライムもそちらを向いている。
そこに、いた。
そこに、来た。
「天鷲!?　S級の魔物ですのよ!?」
「なるほど――アシッドスライムは、餌か！」

超、超、超巨大な――鷲。

赤黒い羽毛はいっそうに化け物感を出していて、昏く妖しく光る眼が、ソレを完全に捉えている。

即ちアシッドスライム。研究者らによると、強靭な喉や胃袋を持つ天鷲等の鳥系化け物はスライムを美味しくいただくらしい。炭酸ジュース的な感覚で。クソどうでもいい考察ありがとう教本に載ってた研究者。

「今だ、ぶちかませ！」

「――！」

天鷲がアシッドスライムに食いついた――その瞬間に、チャージを終えた二人の魔法が飛ぶ。

太腿忍者の【光線】は一条、真っ直ぐに。スライムと天鷲の咥内を頭蓋に至るまで貫き通し、背中メッシュの【神鳴】はその巨体へ轟雷を落とす。片やＳ級の魔法だ。効くだろう。つか死ぬだろう。

ぐらり、と倒れてくる酸性の円柱。

「ポニテスリット、頼む！」

「ああ――」

それを弾くは、【波動】の魔法。俺達の周囲に張られた振動の壁は、半固体であるスライムを通さない。

「っ、もいっかい……！」

「おい、そんな無理しなくても」

「どうせ死ぬなら――最後まで!!」

これで終わりだと思った。神速のお嬢様でも無理な量の酸が落ちてきてしまうため、多少の損壊は仕方がないだろうな、なんて思いながら守られていたら――背中メッシュが、再チャージを始めたではないか。

……その傍らに横たわるは、血の気の無い顔の太腿忍者。その胸はもう、上下していない。

なんでだよ。

友達がさ、仲間が死んで、そんなに怒るならさぁ。

最初から死なない方法を取れよ。ヤだろ、身体が痛いのも、心が痛いのも。

「【神鳴】――!!」

落ちる。落ちる。

神なりし怒槌が落ちる。それはアシッドスライムの円柱を的確に貫き、蒸発させる。ポニテスリットの【波動】ギリギリのラインを攻めたその一撃は、S級らしくアシッドスライムを完全に消滅させた。

完全に、だ。

こちらの被害はない。

「……任務、完了」

「まだですの！」

呼気と共に、言葉と共に。

神速お嬢様の姿が掻き消える。次の瞬間、彼女は天鷲の上にいた。

そう、口腔から頭蓋を貫かれて尚――再び羽ばたかんとしていたコレを、地へと叩き落さんがために。

「あず、さ」

「――」

「がんばった、から――ころし、て。もう……つらい」

言う。背中メッシュが言う。
両腕の肘から先を失くした彼女が、涙を浮かべて。
死ねないと。痛いのに死ねないからと。
死にたいと。殺してくれと。
「やってやれ、梓。このまま、というのは……可哀想だ」
神速お嬢様への援護、なんてのは必要ない。
今まさに背景が如く視界の端っこで天鷲を細切れにしている最中だ。あちらは問題ない。
「梓。頼む」
「ッ……！」
「あずさ……ごめん、ね」
ポニテスリットが、背中メッシュが、言うのだ。
俺に彼女を殺せと。最後の最後まで頑張った彼女を殺せと。自分をどうか。
どうか——救ってくれ、と。
「……馬鹿が。痛いのが嫌なら、初めから無理すんじゃねぇよ」

「うん……ごめんね」
彼女に。
触れる。
ただのそれだけで――彼女は倒れた。背中メッシュ。その仇名の通り、背中を大きく露出させた少女が倒れる。俺の元に、ぱたりと。
事切れた。
「終わりましたの」
「ああ。すまないな、手伝えばよかったのだが」
「いいえ、問題ありませんわ。それより……大丈夫ですの、梓さん」
天鷲を殺し終えて戻ってきたお嬢様が気遣うのは、俺。
あぁ――本当に、ヤだ。嫌な世界だ。
救いになるんだ。
俺の【即死】は、回復も治癒の魔法も無いこの世界で――苦痛に喘ぐ少女らを、苦痛なく殺す手段として。
全魔法少女にとっての、救いなのだ。俺の【即死】こそが――唯一の。

「大丈夫だ。背中メッシュと太腿忍者と合流してから、担任の元へ行こう」
「……いや前から思っていたのだが、あだ名安直すぎないか？」
「変身中の魔法少女は衣装が変わらないんだ。安直で良いだろ」
「私だけ服装で呼ばれてないのは疎外感を覚えますわ……」
そんな、雑談を。
……ごめんな、二人とも。気を遣わせてしまって。殺してしまって。救えなくて。
強く……ねぇ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

登場人物
A班
名前　【魔法】　等級
フェリカ・アールレイデ　【神速】　SS

シェーリース【神鳴】　S
ユノン【光線】　A
ミサキ・縁【波動】　A
梓・ライラック【即死】　C

3. 舞判杏鳶否太掬伏絵鰤寝具阿伏.

魔法少女の蘇生には多少の時間がかかる。死んですぐに、あるいはその場で蘇生、なんてものが叶っていたのなら、戦場でのゾンビ戦法もやりかねんエデンにおける唯一の救い。安眠の――文字通り安らかに眠っていられる時間が少しでもある、というのを救いというのは、些か嫌悪感を抱かないでもないのだが。

とりあえず、演習の第一課目はクリアした。アシッドスライムの駆除、及びそれを餌にしている湧きポが固定されていない化け物の討伐。最初からヘンだとは思ってたんだ。だって、アシッドスライムは等級で言えばＢ級相当。群れる事が厄介なのと、半固体であるために物理が通り難い、なんて耐性は持っているものの、遠くからちまちまやれば俺でも倒せんことはない。時間はかかるが。

それをこんな、平均Ａ級の班で、連携力の向上、だなんて。ちゃんちゃらおかしいにも程があるって話。

天鷲が現れることまで予測していたのかどうかまでは定かではないが、ランダム湧きの化け物が出てくる事は織り込み済みでの演習だったのだろう。本来はアシッ

ドスライムを近接が外に出して、遠隔で仕留めている所に襲い掛かってきて、緊急時における連携力の試験……的な奴だったんだろうけど、悲しいかな、阿呆二人と馬鹿一人が先に突っ込みやがったもんで色々と台無しになったってワケだ。

こちらの損害としては死者二名、一名の武器の損傷、止血ポーション二個。

それで天鷲を仕留められたのは、まぁまぁ十分な成果ではある。お嬢様はSS級とはいえ近接だし、S級の背中メッシュは動かない敵に対してはめっぽう強いが、天鷲みたいな素早い敵には翻弄されがちだ。残るA級二人とC級の俺では天鷲を仕留めるには至らなかっただろう。

つまり、割合十二分に危険な敵だった、という話。それを死者二名で抑えられたのは僥倖……と、指揮官殿や担任は言うのだろうなぁ。俺ァんなこと口が裂けても言いたかないんだが。

「梓、ユノンとシェーリースが還ってきたぞ」

「ん。ああ、行くよ」

「歩けるか？」

「別に、今回私は何もして無いからな、疲れちゃいないよ」

「肉体的疲労の話ではなく精神的な疲労の話をしているんだが」
「それも大丈夫。……じゃないけど、四の五の言ってらんないでしょ」
まだ演習中なのだ。
もう一つの課題……市民に見立てた人形を化け物から取り戻す、というミッションが残っている。
うだうだ悩んでたって、時間は解決してくれない。
というより。
「戻った」
「戻りました」
「あー……その、大丈夫か？　痛い所とか」
「問題ない。むしろ快適。ありがとう、梓。おかげで楽に逝けた」
「私は痛くて苦しかったです、梓さん」
「……そぉかい」
言外の言葉は聞かなかった事にする。
もっと早く殺して欲しかった——なんて。知るかよ、求めんなそんな事。

「皆さん！　準備が整いましたら、先生の元に向かいますのよ！」
「ん……お嬢、武器はいいのか？」
「武器、ですの？」
「溶かされてただろ、半分くらい」
「ああ」
金髪お嬢様が、中空を抓むように指を形作って――ジッパーでも開けるみたいに、一気に引き下ろす。
そこに開くは亜空間。Ａ級以上の魔法少女が使う、余剰魔力による空間圧縮ポケット。亜空間ポケット。そんなかに、これまたズラリズラリの剣剣剣。
「予備は十分ですのよ！」
「さいで。んじゃま、行くか」
「はいですの！」
班長はソッチなんだがね、なんて思いながら。
俺達は、演習場の入り口で待つ先公……あー、担任の元へ向かった。

「来たか」
「はい。一つ目の課題は死者二名の損害を出しましたが、アシッドスライム凡そ50体、天鷲一体を仕留める結果に終わりましたわ」
「ふむ。十分だ」
想像通りの報告と想定通りの評価に嫌気が差す。
二人とも当然のことのように言ってるが、死んだんだぜ、二人も。
「では次の課題に向かえ。場所は先の廃墟を抜けた先にある湿地帯。そこにワームが巣を作っている。人間に見立てた人形は既に投入済みだ。失敗条件は人形の破壊、部位欠損、及び目標のロスト。わかったな？」
「質問いいスか」
「なんだ、ライラック」

「人形が投入されたのっていつですか」
「良い質問だ、ライラック。人形の投入時間は此度の演習開始時と同刻。この意味がわかるな？」
「も一つついいスか」
「……今私は一刻も早く演習に向かえ、と言ったのだ」
「いんやさ、わかってますよ。理解してます。その上で聞いとかなくちゃいけないんで、質問です」
「……いいだろう。なんだ」
「私ァ湿地帯で巣作りするワームってーと、マッドワームとアビスワームしか知らないんですわ。D級とS級の奴なんスわ。どっちスかね、相手すんのは」
「聞くまでもない事を聞いてまで大切な時間を減らすのか、ライラック」
　はァ。
「――ポニテスリット、運搬頼まぁ！」
「了解した――フェリカ、先行してくれ。ただし」
「突撃はしない、ですわよね！　わかってますわ！」

またも姫抱きにされる。
背中メッシュと太腿忍者は遠隔だけど、Ａ級で、しかも復活したてなので余剰魔力がある。走力強化くらいは可能だ。
一瞬にして姿が掻き消える金髪お嬢様。その後を追う。
廃墟群の、道ではなく屋根をヒョイヒョイ進んで、追う。その背は見えやしない。当然だろう。見えちまったら神速の名が廃るというもの。
まぁ、それはいい。とりあえずいい。
「背中メッシュと太腿忍者、今回は突っ込むなよ」
「……わかった、けど。その呼び方、気に入らない」
「わかりましたが名前でよんでください！」
「そこは譲れんポリシーって奴だ。で、作戦を説明する。聞く気はあるか？」
「大丈夫、言って」
ま、この班の良い所はこれだ。
魔法少女の中には高飛車な……要はＣ級のクセに私に指示しないでくださいまし!?　みたいなのもいるんだ。まァ魔法少女の等級は努力と内申点なんで、頑張

りゃ上げられる――D級、C級は頑張ってない証みたいなもんだから、気持ちはわからんでもないんだが。

　尤も上げられるのはA級まで。それ以上は才能の領域だと思う。

「先公は巣作りしてるっつってた。つーことは、最低二体以上のアビスワームがいる。最悪五、六はいる。幼体もいるかもしれねぇ。つまり危険度はSじゃなくSSだってワケ。これは理解してくれるな？」

「……間違っても、先に幼体を仕留めるのは、まずい」

「だな。幼体を傷つけられるか、近づくだけでも成体のワームが怒り狂って襲い掛かってくる事だろう。まずは成体から倒すべきだ」

「ですが、湿地帯。対象は地中に潜っていると思われます。どのようにしておびき出しますか」

　問題点はまずそこなんだよな。

【神鳴】は不味い。感電で幼体に刺激が行く可能性があるのと、人形の損壊が考えられる。あと五、六体いた場合に全匹呼び出しちまう可能性がある。アビスワームってな、文字通り深淵に引き摺り込むってカンジのワームだ。獲物を地中に引

き摺り込んで、窒息させて捕食する。泳ぎやすいから湿地帯にいるだけで、別にふつーの地面でも潜れる。

だから最悪六匹に気付かれちまうと全員引き込まれて終わり、なんてこともあり得なくはない。お嬢様は大丈夫だろうが。あと俺も。

「私の魔法で行くか？」

「【波動】も微妙だろう。自然界には起こりえない振動というのは、奴らに外敵を気取らせる結果になりかねん」

「ならば私の【光線】で」

「現状それが一番だとは思う。湿地に向かって照射、当たりゃあ御の字だし、掻き混ざすだけでも一匹二匹は釣れる。そこを金髪お嬢様に刈り取ってもらうのがベスト。あるいは私が撃ってもいいんだが、銃声は余計な刺激をしかねんのがな」

「ではそのように」

「――が、だ」

「？」

そもそもの話。

この課題は、連れ去られた市民の奪還、である。
別にアビスワームを全滅させる必要はないのだ。
「それは、そう」
「確かに……失念していました」
「ならば、【光線】で攪乱し、混乱の隙に人形を奪取するのが一番か？」
「あァ。金髪お嬢様にはそれをやってもらうつもりだ。勿論太腿忍者の護衛は俺達で全力でやる」
「任せて」
……これが一番簡単で、一番被害の出ない解決法、だと思うんだけど。
なーんかな。
そんな簡単に終わるワケないじゃん、みたいなさ。第六感っていうの？
いんやさ、先公の言葉にちょいと引っかかる所があったっつーか。
みたいな懸念は。
「きゃ、ぁあああぁああ!?」
……先行していた金髪お嬢様の悲鳴によって、的中を知らされた。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

俺達が湿地帯に辿り着いた時、そこに金髪お嬢様の姿はなかった。
速すぎて見えない、ってヤツじゃない。それだったらすぐにでも「やっと来ましたのね！」なんて言って俺達の元に合流するはずだ。
つまるところ。
「引き摺り込まれたか！」
「四の五の言ってらんなくなったな――人命最優先だ、人形なんざどうでもいい！」
「え」
「いえ、これは機なのでは？　アビスワームたちがフェリカさんに気を取られている内に、私達でどうにかして人形を奪還すれば任務達成です」
「……」
ポニテスリットは割合俺の感性に理解がある。

だから黙ってくれてはいる。けど、アイツもその方が合理的だとは思ってんだろうな。

実際座学……市民が奪われた時の対処法として習うのはソッチだ。もし近接が一人捕まって、群れがそっちに気を向けたら――ソイツは見捨てて市民の奪還を優先しろ、と。市民の命は一つ。魔法少女の命は無限。故に当然だ、と。

ヤなこった。

「ポニテスリット！　泥に向かって【波動】だ！　全力で、この湿地帯全土を揺らす勢いで！」

「そんなことをすれば、ワームに気取られる」

「梓さん！　今はその優しさ捨ててください！　たった一人の犠牲で全てが解決するんです！　フェリカさんは後で生き返ります！　何が問題なんですか！」

「問題はねぇらしいが私が嫌だっつってんだよ」

「……一つ聞くぞ、梓」

ちょいと俺のせいでギスり始めた班内に、ポニテスリットが冷静な言葉を挟む。

「【波動】を撃つのは構わない。だがそれをして、全アビスワームがこちらに来た

場合――私達まで死ぬという可能性もある。それは理解しているのか？」
「――！」
理解しているのか、なんて。
してないに決まってる。どうにかこうにか金髪お嬢様を救出して、一目散に逃げる算段だったんだ。お前等なら逃げられるだろ、っていう信頼の元だ。
けれど――もし逃げられなかったら？
俺は死にたくない。みんなが死ぬのも嫌だ。金髪お嬢様が死ぬのも嫌だ。人形は心底どうでもいい。
じゃあ、どうする。
「理解してる。んで――私が囮になる」
「……本気で言っているのか、それは」
「違いが、わからない」
おいおい、何舐めた事いってくれやがる。
こちとら殺傷能力だけはSS級に届くんだぞ。殲滅力がゴミ過ぎるのと魔力少なすぎ問題がC級に落ち着かせてるだけで。

「大丈夫だ。つか、時間が無ェ。やってくれポニテスリット」
「……断る」
「は？」
「結果的に囮にする、という作戦には同意しよう。だが、故意に仲間を囮にして自分達は逃げる、など。あり得ん」
「自分の言っている意味、理解してる？」
「梓さんは自己犠牲をカッコいいと思う方でしたか？」
やばいな。断られるとは思ってなかった。
さて説得……あァ、じゃあ任務を盾にすればいい。
「金髪お嬢様がこのまま死んだとして、誰があの人形を取りに行けるよ。湿地の泥沼ン中には多量のアビスワーム、巣には幼体がいるかもしれない。そしてまだ、誰も人形の位置を判ってない。私達の中でソレを取りに行ける奴がいるか？」
「……それは」
「む。確かに私達では無理です」
「金髪お嬢様はまだ死んでない。泥の中でもがいてる。お前等の言うように死んだ

方が速いってんなら、あのお嬢様は抵抗を止めて死ぬはずだ。死んで蘇生して、すぐにでも態勢を立て直しに合流しに来る。それをしない理由は一つだろう」

「……自分がいなくなったが最後、奴らはこっちに来る、か」

「それだけならいいんだがな」

「？」

とにかく、と。

金髪お嬢様が今どうやって抵抗しているのかは知らんが、あまり長くは持たないだろう。

救出した方がいい理由は述べた通り。先行した金髪お嬢様にしかわからない情報……俺達にとっての不確定情報で危険な情報を持っていて、なんとしてでもそれを俺達に伝えなきゃいけない。つーことは、助けて欲しいってことだ。助けた方がいいって事だ。

いいだろ、これで。

ゴリ押しの不確定要素入れまくりだが、納得しろや。

「わかった。フェリカの救出に同意する」

「私も賛意します」
「あァ、ありがとう。二人はチャージ始めておいてくれ。ポニテスリット、一発目の【波動】は全力で頼む」
「わかった」
三方。前方、後方左右で力が集い始める。
【波動】は近接だが、チャージが可能。可能なだけでしなくても使えるのが近接たる所以なのだが、最大火力時は物凄い振動を――アダマンタイタン、と呼ばれるクソ硬いゴーレムをも砕く衝撃を出せる。
それを沼地に向かって、今吐き出そう、というわけだ。
右腕を上に、左手でその肘を掴み――目を瞑って、魔力を集中させる。
俺ぁ煙草を一本。魔煙草だ。今は魔力満タンだが、こっから使うからな。あらかじめ咥えといて損はない。
「行くぞ！」
ポニテスリットの右腕が振り下ろされる。その腕、その手。その拳が水面に着いた瞬間――湿地帯の全域が、半球状に凹む。まるで上空から巨大な空気砲でも打っ

たみたいに、ボコっと。
「いた！　太腿忍者、11時の方向だ！」
「【光線】発射します！」
ドームの中に、ボコりと膨らむ山。正直もー少しばかり弱めの威力の想定だったから驚いちゃいるんだが、んなこた言ってらんない。
膨らんだ形はお嬢様のソレではない。蛇腹っつーか体節っつーか、まぁ――ワームの胴体だ。そこに向かって、太腿忍者が【光線】を照射する。天鷲の頭蓋をも貫通した【光線】だ。ワームの胴体程度、なんてことはない。それは確実にワームの身体を貫通し――その痛みにだろう、ソイツが泥面に全体を現す。マンボウかイルカかクジラか、なんてのはどうでもいい。問題は、――大当たり、って事だ。
「アレだ！　アイツの中にお嬢様はいる！」
「再チャージには時間がかかります！　それまでどうか、逃がさぬよう！」
「背中メッシュ、幼体のいる巣に向かって【神鳴】を頼む！」
「人形、壊れる。いいの？」
「あそこに人形は無い！　思いっきりやれ！」

「そうなの？　……なら、やる」

確信は無いが、多分そうだ。

そうじゃなかったとしても俺ァ金髪お嬢様を殺したくないので、演習失敗の方を取る。

空。

暗雲も無いのに――突如出現した紫電迸る雷球が、轟音を立てて――落ちる。

一瞬だ。光より音の方が速いとか、この距離なら関係ない。光も轟音も同時につんざき、幼体とアビスワームの巣を粉砕する。

となればもう、カンカンだ。

何がってアビスワームが。

半球状から元の平面に戻りつつある水面で、金髪お嬢様を飲み込んでるヤツ含めた凡そ十体のアビスワームが怒り狂ったようにその身を立ち上げた。

「ポニテスリット！　太腿忍者の護衛頼む！」

「梓、お前まさか囮になる、などと言い出すわけではないだろうな」

「はン、馬鹿言え――私がアイツラ殺すっつってんだよ！」

自らの腿や二の腕に巻き付けてあるマガジンから銃弾を取り出す。亜空間ポケットつかえねーからな、こういう工夫大事。

その銃弾は、俺専用の弾丸だ。魔法の付与を受け付ける――弾頭がスカスカで、弾丸自体の耐久性は普通のものに比べて天と地ほどの差がある特殊弾。威力は人体を貫くに至らないまである。

そこに詰め込んであるのは魔石と呼ばれる鉱石だ。簡単に言えば周囲の魔法や魔力の影響を受けた石のことで、本来は何も入ってない空っぽの綺麗な石なんだが、コイツに魔法を注入してやることで結構まがまがしい見た目になる。ソイツを更に砕いて弾薬に混ぜ込んだのがコレ。

それを――ばら蒔く。

撃つのではなく、湿地に向かって、散米が如くばらーっと。

当然、投擲したわけでもないそれはポチャンポチャンと沼に落ちた。

「チャージ、完了しまし――梓さん、危ない！」

「足元だ梓！」

「わーってるよ！」

愚直に真っ直ぐ突っ込んできた四体。
それらが俺のばら蒔いた弾丸に触れて――【即死】した。へっへっへ、殺傷能力だけはピカイチなんだよ。ソレ、文字通り死ぬほどあぶねえ障害物だ。見えねえだろ、小さすぎて。泥ン中なら尚更な。
んで、足元に来た――俺の足に巻き付いてきた奴には。
「私ァ一応近接魔法少女だっつの」
そのまま【即死】をプレゼントする。これで五体。
魔煙草をもう一本吸う。ヒェー、図体デカい相手を【即死】させんのはマジで燃費悪いんだよな。
「え」
「ん、どうし」
「ぁ」
一瞬だった。
悲鳴も無く、ただ驚きを一瞬だけあげて――背中メッシュが地中に引き摺り込まれる。

「ポニテスリット、直下に【波動】だ！」
「わかって、いる――！」
指示をするまでもなかった。既に足を振り上げていたポニテスリットの、文字通りの震脚。
辺り一帯を襲う大地震。自らの外殻を全面から破壊せんとする振動だ、それには堪らんとばかりに二体のアビスワームが地面から飛び出す。
その内の一体の口には、今まさに飲み込まれんとする背中メッシュの姿が。
「太腿忍者ァ！　あのワームの胴体ぶった切れ！」
「承知！」
【光線】は何も一点照射だけの魔法じゃない。
照射中にも方向を変えられるので、レーザーカッターが如き切断力を持つ。
腐ってもA級だ、その威力は推して知るべし。
さて、胴体を割断されたアビスワームの上体が地面へベチャリと落ちる。
既に絶命しているソイツから這い出てくるは、下半身の衣装がかなり溶けた背中メッシュ。あられもない姿におじさんは目を背けたくなるのだけど、ふざけていら

れる場合じゃない。

　地上に出てきたもう一体の方を対処せねば――と思ったら、ポニテスリットが頭部を粉砕していた。無数の触手を持つ口腔からある程度の距離までを、内側に入れた拳からの【波動】でパァンと。超絶グロキモい。

「これで七体！　金髪お嬢様は――」

「こ・こ・で・す・の!!」

　沼から一匹、アビスワームが打ちあがる。

　くの字に折れ曲がった体は、その頂点から突き破られた。それはもう、ドパァンと。こっちもグロキモい。

　そのままソイツを蹴り飛ばして、こちらへ合流してくるお嬢様。

……。

「申し訳ありませんの！　ご心配おかけしました――が、まだやれますのよ！」

「あー。亜空間ポケットにコートとかないのか、お嬢様」

「コート、ですの？　ありますけれど、作戦に用いるのですか？」

「フツーに着てくれ。全裸だぜ、今」

「……きゃっ、梓さんのえっち」

魔法少女の衣装というのは魔力で編まれている。

だから魔力を使い果たしたり、魔力を吸収されたりすると、あられもない姿になってしまうのだ。

……しかし、おじさんお嬢様のカラダ注視したワケじゃないけど……無傷だった、か？

「金髪お嬢様、傷は？」

「無いですわ。あいつら、私を飲み込むだけ飲み込んで、体内で服の中に触手を入れてきたり、魔力を吸ってきたり……そればかりでした。多分、幼体に与えるために魔力が必要で、殺してしまっては安定した魔力供給源にならない事を知っているのかと」

「私も、そう。衣装だけ溶かされて、吸い取られた」

「成程ね」

これで八体。

残り二体がどこぞかへ潜伏している。俺達の脅威度がそれなりに伝わったのだろ

う、様子見、だろうな。
「が、その幼体が死んだんだ。形振り構わず復讐してくるだろう」
「……金髪お嬢様、アンタが負けたのはなんだ？　アビスワームじゃないだろ。アンタの速度に奴らがついてこられるとは思えねえ。私が思うに、他の化け物がいると思うんだが」
「あ！　そう！　それを言うために息を止めて待っていたのですの。梓さんなら必ず助けてくれると――わかっていましたから！」
「あァよ、その信頼はありがてえ。で、危険つーのは？」
「ええ――あの人形、精神体が宿っていますわ！」
その声と同時。
沼に潜伏していたのだろうアビスワームの残り二体が、天高く持ち上げられた。
その身を、ぐちゃ、ぐちゃ、と。丸めて、潰して、丸めて、潰して――。
「ッ、ポニテスリット！　防御頼む!!」
その二つが、凄まじい速度で射出された。
こちら側に。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「うへぇ……」

被害は甚大……ってほどでもない。

ポニテスリットの【波動】が間に合ったので、衝撃自体はこちらに届いてはいない。

が。

「流石にこれは、気持ち悪いですわね」

「臓腑の、かたまり……」

「臭いです」

グチャグチャにされたアビスワームは絶命していた。多分丸められた時点で絶命していたのだろうが、そのグチャグチャボールを【波動】で弾いたものだから、臓

腑がそのまま俺達の周囲に降りかかったワケだ。
　しょうみ金髪お嬢様がアビスワームの腹から突き出てきた時も同じくらいにはグロキモかったのだけど、こっちは広範囲である分余計ヤバイ。潰れてるし。変な液出てるし。
「で、精神体か。人形を依代に憑りついて、アビスワームを手玉に取れるほどってなると、少なく見積もってもS、ヤバくてSSだな」
「驚きましたの。ワームの巣の中に人形が無い事に気付いた時には遅くて、人形ですから気配も感じ取れず……いつの間にか背後にいたソレに羽交い締めにされて、そのまま泥の中まで連行。人形をどうにかこうにか引き剥がそうともがいている内に、アビスワームに食べられてしまって」
「さっきの悲鳴はソレか」
「ええ」
　ま、いきなり後ろから抱き着かれたら誰だって驚く。
　で、だ。
　さてこの場合の問題は。

「何故人形に精神体が憑りついたのか、何故その精神体はフェリカを沼に引き摺り込んだのか、何故その精神体はSS級に届かんとするほどの念動力を持っているか。この三つだな」

「あァいや、それはどうでもいい。化け物の発生原因なんざ知るかよ。私達がすべきはなんだ。アレの奪還だろ。謂わば今はその精神体に人形を奪われてる状態だ。この事態が突発的だったのか故意的なモンなのかはこの際おいといて、私達ァアレを無力化、拘束する必要がある」

「でも、壊しちゃダメ」

「むむ……では、殺傷能力及び破壊力のある魔法は使えませんね」

「となると」

まァ、それも自然だ。

俺なんだよなぁ。対象に傷をつける事なく相手を殺せる魔法の持ち主。

精神体つっても化け物の一種で、ユーレーだとかそういうんじゃない。ちゃんと死ぬ。だから【即死】も効く。

問題は、どうやって俺があの人形に接触するか、だ。

アビスワームを丸めてぶっ飛ばすほどの念動力。俺が近づいても同じ結果になるだろう。潰れて丸めてポイだ。考えたくもない。

「私が運ぶ、というのはどうでしょう。先は後れを取りましたけれど、相手の知覚出来ない速度で動けば問題はありませんのよ」

「……それがまぁベストだわな。三人は周辺の警戒を。何かあった時のためにチャージもしといてくれ。魔力が足りない場合は下がってくれていい」

「いえ！　私にはこの苦無がありますので！」

「いざとなれば拳で戦う」

「……何も、出来ない」

「あァさ、背中メッシュは下がっててくれていい。一応魔力回復に努めて、もう一発くらいは撃てるようにしといてくれや」

「了解、した」

では、と。

金髪お嬢様に姫抱きにされる俺。

「これじゃ両手使えねえだろ」

「実際に攻撃、というかタッチするのは梓さんですの。私は運ぶに徹しますわ」
「……まァそうか。じゃ、頼むわ」
「はいですの！」
コートは着ている。
けど、それだけだ。スタイルの良いこのお嬢様のあれやそれがコート越しにダイレクトに伝わってくる。抑えるものまで溶かされてたからな、それはもう、うん。おじさん女の子で良かったよ。これ犯罪だよ普通に。いや心はおじさんだから今も犯罪だと思うんだよ。
「行きますのよ」
「あ、あぁ」
目指すは中空に浮遊する人形。
何をしているのか、何もしていないのか、精神体はその場にとどまったまま動かない。ならば好都合と——金髪お嬢様が少しばかり姿勢を屈める。
次の瞬間、俺とお嬢様は人形の真後ろにいた。
——速すぎる。流石神速。けどね、おじさん一般人なの。そんな早い展開ついて

いけないの。
「ッ、離脱しますの！」
　グゥン、なんて音がして、今の今まで俺とお嬢のいた空間が歪む。そのままこちらに追い縋る様にして球形の歪みが迫ってくるが、金髪お嬢様は器用にも足元に展開した亜空間ポケットを蹴って空中を移動。みんなのところへ辿り着いたころには、追撃も止んでいた。
「――すまん。速さについていけなかった」
「いえ、私の方こそ少し張り切り過ぎましたわ。コート越しとはいえ直で感じる梓さんの体温……ふふ」
「うわぁ」
「イチャついている所悪いが、二人とも――来るぞ」
　何が、って。
　泥の砲弾が。
「ポニスリ！」
「とうとう略されたか。まぁ、わかっている。防護はしてやるからとっとと作戦を

考えてくれ」

「助かる。……つっても、もっかい同じことするだけなんだが」

「ええ。今度は掛け声を言いますの。3カウント。それが0になったらあの人形の背後を取っていると考えてくださいまし」

「了解した。……怖いのは、相手が迎撃を考えていた場合だが」

「大丈夫。私に秘策がありますの。梓さんは安心して、というか集中して、魔法の使用をお願いしますの」

「……わかった。信じる」

泥の砲弾。最初は大きかったそれが、小さく、ガトリングが如き礫の雨に変化している。それすらも弾く【波動】は流石の一言だが、これでは接近は難しいか、なんて考えていた所に、「3、2」とカウントが入った。

オイオイ、これで行く気ですか。そうですか。じゃあ今度こそ失敗しないように集中しますねオジサンは。もう43歳の身体じゃないんだ、若い反射神経と動体視力は十二分に追いつけるはずだ。

だから。

「1――0！」
「ここ！」
触れる。しっかり人形に触れる。発動するは【即死】。
あっさりと人形は力を失い――重力に従って落ちて行く。
それは、俺も同じく。
「お嬢――ッ!?」
自由落下だ。
俺を支える金髪お嬢様。その手に力はない。
当然だろう。
「……対策の、対策は――ばっちり、ですのよ」
彼女は俺を抱きしめていた。
その全身に、泥を固めた礫を食らった状態で。
――背中から下半身にかけてを半球状に抉り取られた状態で。
尚も。
ごふ、と。

大きく血液を吐く金髪お嬢様。その身がもう保たないことなど一目瞭然。
そのまま落ちても――地面にぶち当たる痛みを味わうだけだ。
「……大丈夫です、あずさ、さん」
「何を」
落ちて行く。
落ちて行く中で、金髪お嬢様が言う。血まみれの口で、苦痛に塗れた顔で。
「勝手に……死にます、から、殺さなくても――大丈夫、ですわ」
「――ッ！」
落ちて行く。
地面までの距離はもう数mとない。
違う。そうじゃない。そういうことじゃない！
ああ。けれど、俺は。
俺は。
彼女を――殺した。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

4. 有迷伸炙途方琉度班図」蝙蝠有侠.

平和回
少し長いです。

「梓に避けられているような気がする？　……気のせいじゃないか？」
「気のせいではないですわ！　教室では勿論、いつもなら探せばすぐにいるような場所にいなかったり、視界に入ったかと思ったら次の瞬間には撒かれていたり……」
「【神速】を撒くのは相当だな……」
「……やっぱり、あの作戦がだめだったのでしょうか」
「まぁ、彼女は身を挺して守るタイプの作戦を嫌うからな」
教室。
魔法少女育成学園にはいくつかの教室といくつかの修練場、いくつかの秘密の部屋など、その全体構造を把握している者が限りなく少ない事を除けば、割合ちゃん

とした学園の体を成している。

　教室は同じ等級の者に偏りが出るようにはなっていない。各クラスに一人ずつはSS級がいる、くらいの振り分けがされている。少女フェリカ・アールレイデと梓・ライラックは同じクラス――でありながら、ここ最近どうにも話しかける機会が無いと、同じくクラスを共にするミサキ・縁に相談を持ち掛けている最中だ。

　金髪ロールの、如何にもお嬢様然としたフェリカが物思いに耽っている――それだけでも絵になるのに、クール美人の名が相応しいミサキが共にいると、それだけで何か眩しいものをみてしまったかのような気持ちになり、周囲の少女らは二人の会話に入ろうとしない。たとえ「そこに梓さん隠れてるけどね」とか思ってても何も言わない。

「でも、確かに反省はしていますの。あの後結局意識を失った私は自由落下。当然梓さんも、そして人形も。演習の失敗項目である人形の損壊が起きてしまって、百点満点の演習だった、とは言い難くなってしまいましたし……」

「一応、教師陣もあのクラスの精神体が人形に憑りついていた事は把握していなかったようだがな。後で成績表を見たら、多少の色は付けられていたよ」

「難しい、ですわよね。今までが――怪我や死など、作戦の一部でしかなかったが故に。梓さんに嫌われないようにするには、それらを避けなければ……いつか本当に愛想を尽かされてしまうというか、今がまさにその状態というか……」

「彼女は優しすぎるからな……」

梓・ライラック。

数か月前にこの学園に転入してきた【即死】の魔法を持つ少女。

等級区分はCに認定されるも、殺傷能力だけで言えばSSに届かんとされるピーキーな魔法を有す――少々の三倍くらいは、粗暴な口調の少女。

フェリカ・アールレイデは彼女に惚れている。

ミサキ・縁も好ましくは思っている。

彼女は優しいのだ。

みんなに怪我をしないで欲しい。死なないで欲しい。そんなことをするくらいなら、遠回りになっても、時間がかかっても、別の方法を取る。危ない事はしない。だからどうか、死ぬ事だけは。苦しむくらいなら怪我をするな。痛いと思うのなら自分を大切にしろ。

魔法少女になってから、そんなことを言われたのは初めてだった。

フェリカもミサキも魔法少女歴はそこそこだが――教えられた事含め、自らの理念として〝魔法少女は市民の盾〟という認識がある。だって死んでも蘇るのだ。だから死を忌避する必要は無いし、たとえ大怪我を……例えば歩けなくなる程とか、のたうち回る事さえ出来ない程の、とか。そういう怪我を負ったとしても。

死ねば、治るのだ。

だから魔法少女は盾になり得る。

「しかしまぁ、あの場ではあの作戦が最上であったと思うぞ。あの精神体の念動力は私の【波動】と相性が悪かったし、シェーリースは魔力切れ、ユノンはチャージこそしていたが、決定打を与えられたかどうかは怪しい。【光線】では人形の損壊は免れないしな。どうにか梓を人形に近づけて【即死】させる。あれ以上の作戦はないだろう」

「でも避けられていますの現に」

「……それはまぁ、気まずいんじゃないか？　曲がりなりにも自身を守らせてしまった……飛び交う礫の一切を無視して突貫し、念動力の盾になったお前は当然の

事をしたまで、と思うのかもしれないが、彼女からすれば自身の走力や機動力が無いが為にお前に負債の全てを押し付けた形になっている。優しすぎる彼女にとっては重荷だろう、それは」

「うぅ、どうすればいいんですの？　私梓さんともっともっと触れあっていちゃいちゃしてあわよくばお付き合いしたいというのに……」

「こういうのは時間が解決する、としか言えんな。あるいは他の奴に頼んで、お前の事をどう思っているか、なぜ避けているのかを聞いてもらう、とかだが……」

フェリカが周囲を見渡す。

周囲にいた者は全員サッと顔を背ける。

別にフェリカが嫌われている、とかそういうわけじゃない。

蹴られたくないだけだ。誰しも馬には。

「ミサキさん……」

「はぁ。まぁ適任か。わかった、今度聞いてくる。余り急かすな、私にも授業がある」

「ありがとうございますわ！　お礼といってはなんですが、欲しい素材とか触媒

があれば10秒とかけずに取ってきますわ！」

「要らん要らん。友達だろう、私達は。そういう七面倒な貸し借りは無しだ」

「持つべきは友人……！」

クラスメイト達は「いや梓さんならそこに」とか思ったけど、何も言わない。いなくなってたし。

ただ――少しばかり、興味を持つようになったかもしれない。このなんともいえない捕り物劇というか、痴話喧嘩というか、オトシゴロの少女達の騒動に。

とっとと付き合っちゃえよ、はクラスの総意だから。総意は言い過ぎたかもしれない。嫉妬もあるかもしれない。私の方が先に好きだったのに、もあるかもしれない。

一つ言えるのは、今日のエデンは平和である、ということくらいだろうか。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

そんな一部始終というか全部始終を聞いていたわけであるおじさんは、ハァ、と

深いため息を吐いている。

いんやさ、確かに悩んでいるし、ちょっと気まずくて避けているのは事実なんだけど、そういう理由じゃないっていうか、いやそれも含まれているけれど大部分は違うっていうか。

とりあえず気持ちの整理がつくまであの二人とは話したくない。というか純朴な魔法少女とは話したくない。あんまり理解してもらえなそうだし、なまじ理解してくれたとしても、この悩みばかりは俺の問題というか、解決しないというか……。

あぁもう、女々しいなァ俺。情けない、ほんと。この歳になって……前世含めれば50超えてるんだぞ。

「ライラック」

「あァ今は話しかけんでもろて」

「ほう？　上官相手に用件の拒否とは、貴様も中々偉くなったものだな」

やらかしたな、と素直に思った。

魔法少女育成学園は学園だけど、国家防衛機構でもある。軍隊なのだ。普段は学園っぽく学生ライフを送らせていただけているけれど、軍人である事には変わらな

い。上官の命令は絶対だ。上官が敵に突っ込めといったら従うのが普通だ。俺ァあんまり従わないんだけど。

でまぁ、今見つかって、今やらかした相手。

鬼教官――なんて言われるくらいには厳しいとされる、いつぞやの指揮官殿よりも上の階級を持つやべー相手。もう見るからに厳しいですよ、という見た目をしていて、魔法少女らしくその魔法も苛烈――【痛烈】という、A級の魔法を扱う女性だ。効果は対象に痛みを与える、っていうヤツ。殺傷能力も殲滅力もないけれど、相手が痛みを覚える化け物なら確実に怯むくらいの苦痛を与えられるらしい。しかも遠隔魔法少女なので、近づくことなく敵にデバフをかけられる有能さから、殺傷能力と殲滅力だけで見たらB止まりが良い所をA級に収まっている……まぁ、ちゃんとしたお方。

俺ァもう【痛烈】の名前からして罰を与える刻は絶対痛みを与えてくんだろな、って思って避けに避けてたんだが、いんやさお嬢から逃げるあまりこちらに捕まってしまうとは。

「あー、何用で」

「来い」
「あい」
どうしてとか何故とかｗｈｙとかそういうのは挟んじゃいけないってわかった。
拒否したら痛いの来そうで怖い。
だから従順についていく。
各教室のある塔棟ではなく塔なのは、監視塔に繋がっているためじゃない。教員塔も修練場のある塔も抜けて、生徒がほとんど立ち寄る事のない……名前の知らない塔に来た。
おどろおどろしい雰囲気漂うその塔。あれこれすわ拷問とかされる流れか？とか思ったので逃げようとした。
「私の魔法の効果範囲は目に見える範囲全てだ。覚えておけ」
「逃げんなって事スねハーイ」
「……別に、そう怖がらずとも良い。罰を与えようというわけではない。だから、素直についてこい」
「あ、そうなんスか。了解です」

それは僥倖。重畳か？　どっちでもいいというかどっちも違う気がするけど。

……にしても目の届く範囲全てに遠隔で魔法かけられんのは普通にやべーな。多分強い痛みである程チャージが長くなる、とかではあるんだろうけど、そのデバフはめちゃくちゃ役に立つ。まァ痛み感じない奴らには滅法弱そうだけど。

入った事のない塔……黒いその外壁とは打って変わって、中は清潔というかなんというか、病院、みたいだった。

実際病院なのかもしれない。白衣を着た女性や前世で言う看護師っぽい格好をした女性もいる。っぽいだけで細かい所は違うんだけど、あ、おじさんが看護師の服装に超絶詳しいとかそういうわけじゃないぞ。おじさんは不健康おじさんだったので厄介になることが多かっただけだ。

「ここだ」

「へい」

促されるまま、そこへ入る。

部屋……だけど、病室って感じはしない。患者さん達の憩いの場、休憩スペースって感じかな？　今誰もいないけど。

フリーにテレビなんかが見られる場所と、少し奥まった所に個室……パーテーションで区切られた場所がある。どうやら目的地はそこらしい。
座れ、と言われたので、んじゃお先に失礼して、と言って座る。
対面に鬼教官が座った。
……面談か何か？
「二つ、話がある。ライラック」
「はぁ」
「一つはお前について。もう一つは私について」
「へぇ」
「前者はお前の悩みを聞いてやる、という話だ。後者は私の悩みを聞いてくれ、という話だ」
「ほぉ」
「……お前はマトモな相槌が打てないのか？」
いんやさ。
いきなり連れて来られて、んなこた言われましても、って感じ。

いいよ？　おじさんいいよ？　相談とかなら全然乗るよ？　この世界ではともかく、前の世界では43歳のおじさんは経験豊富だから色々聞けるよ？

でもそれ知らないでしょうに。こっちでは13歳のおにゃのこですよおじさん。俺にわざわざ相談してくる理由が一切わからん。それともあれか、目に留まったから、程度か？

「えーと、じゃあどっちから話しますか。私ァ別に後で良いんで、先におに……じゃねェや、教官の話からでいいスか？」

「キリバチという。上官の名くらい覚えておけ。それと、鬼教官と呼ばれていることは把握している。だからそんなに怯えるな。私が味方に魔法を使う事はほぼない」

「少しはあるんだ……」

「懲罰の際はな。それにしても極稀だが」

キリバチさん。

名前もイカつい事で。

「じゃあキリバチ教官。悩みってのは、なんですかね。どうして私に、っつーのは

後で聞きますんで、結論からどうぞ」
「……殺して欲しい相手がいる」
「――」
えぇ。
いや今俺ァそれで悩んで、っつか何その相談。依頼？　いんやさ、なまじっか依頼だったとして、誰？　誰を？　魔法少女だったら死なないから……まさか一般市民を？　いいの？　それっていいの？　俺ァ最初に習ったよ、一般市民に向けて魔法を使う事は固く禁ずる、みたいなの。いいの？　いいのっていうか俺やりたくないよ？
「混乱しているようだな」
「そりゃァ、まァ。こんな病院みてぇなトコで、殺しの依頼っつーのは些か場違いですし」
「殺しの依頼とはまた物騒な捉え方をする」
「いんやそうでしょ、どう聞いても」
「ふむ。……ふむ。そうかもしれん。今のは私が悪かった。許せ」

ありゃ、もしかしてこの人天然なのか？
あと普通に生徒相手にも謝るんだな。なんというか、ちょっとイメージ変わったわ。ダメだねー、人をうわさで判断しちゃ。んなこた前世で嫌という程知ってたはずなのに、新しい環境になったからかそういう経験値がリセットされてる気がする。意識改革しねーと嫌な奴になっちゃうな。
で。
殺して欲しい相手がいる、が。殺しの依頼じゃないなら、なんだってんだって話。
「私には妹がいるんだ、ライラック」
「ほむ」
「妹も魔法少女でな。なんなら妹の方が魔法少女歴は長い。故に実年齢は少しばかりややこしいのだが、妹は妹だ。どれだけ幼かろうと、妹は妹だ」
「はむ」
「……その妹を、殺してやってほしい。それが私からの相談であり、依頼だ」
「へむ」
「どれだけ相槌でふざけて怒られないか、のラインを探っている、という事は無い

だろうな？」

「ええ勿論ちゃんと聞いていますよ」

図星も図星だったけど、ちゃんと聞いてたのはホントなのでセーフ。

えーと、要するに、幼い頃に魔法少女になって成長の止まってしまった妹さんがいるんだと。キリバチさんには。んでキリバチさんは今の見た目年齢……25歳くらいかな？　それで魔法少女になったから、見た目的にはかなり年の離れた姉妹になってると。それでも妹だから、……えー、あー。殺してやってほしい、と。

ひむ。

「お断りします」

「……理由を聞いても？」

「私ァ殺しをしたくないんですよ。人死にが大嫌いなんです。私の【即死】はあくまで化け物共に使うものであって、仲間に使うもんじゃねェ。その相手が幼い少女だってんなら尚更だ。まァ年齢関係なく嫌なんですが」

「だが、魔法少女は蘇る。お前のその魔法は……相手を痛みなく、苦しみなく、葛藤の間さえなく殺し得る最良の魔法だ。エデンにある魔法の中でも、もっとも優し

い魔法と言えるだろう」
「ホントに私の悩み聞いてくれる気あるんスか」
「すまない。失言だった。重ねて謝る。……やはりまず、お前の悩みから聞こう。そっちを解決しなければ、私の依頼も受けてはもらえなそうだ」
「解決ねェ」
　ホントにちゃんと謝る人だな、この人。気遣いもある程度できるらしい。
　すげー印象変わったわ。
「私の悩みは知ってるんで？」
「ああ。お前の担任から聞いている。仲間の死と怪我を極端に嫌う魔法少女。効率よりも仲間が傷付かない方法を取る魔法少女。その結果演習や実技の評価が下がったとしても、一切気にせずに逃走を選ぶ……異端にして慈悲深い魔法少女、と」
「どンな評価送ってんだあの人」
「とにかくお前は魔法少女でありながら、本来人間が持っているべき倫理観を失わずにいる稀有な存在であるという事は分かっている。そのせいで悩んでいるのだ、ということも」

……ん？

今、〝本来人間が持っているべき倫理観を失わずにいる〟、って言ったよな。

んじゃ、わかってンのか？　この人。魔法少女達の……エデンのみんな常識がおかしいって。死を忌避しないのが、馬鹿みてぇな事だって。

「つい数ヶ月前までは、私はエデンに染まり切った……魔法少女とは盾であるべき、という考えの持ち主だった。それが当然だと思っていたし、私のこの地位はそれによって得た地位であるともいえる。だが」

「？」

「あまりふざけるのは止せ。魔法を使いたくなる」

「はいすみません」

「……これは先の話にも繋がるのだがな。妹が、戦場においてＰＴＳＤを発症した。わかるか？」

「トラウマって奴ですね。戦場での悲劇やショックが夢だったり幻覚としてフラッシュバックする奴」

「ああ、そうだ。……自らの班員を、すべて食われたそうだ。その魔物自体は倒し

得たが、その時の光景が余程ショックだったらしい。嗜虐的にも一人ずつ、念入りに……手足を一本ずつ噛み千切られ、下半身から小刻みに、そして頭部を……という具合で、四人。あの子の目の前で、それが行われた」

「うへぇ……」

「班員の一人が【劇毒】という魔法の使い手でな、死の間際に魔物を体内から弱らせ、そこを妹が叩いて事なきを得た……ああいや、すまない。そういう言い方をするべきではなかった。まぁ、魔物は倒せたのだが……妹はあれから塞ぎ込んでしまって、〝自分はリーダーになるべきじゃなかった〟、〝判断ミスが怖い〟、〝みんなが死ぬのが、傷付くのが怖い〟と……そう言って、自室から出て来なくなった。その時にようやく私も理解したよ。そうなのだと。仲間が死ぬのは、仲間が傷付いていくのは――怖いのだと」

怖い。

嫌だ。

そうだ。その通りだ。俺のそれとは状況が違うけど、そうなのだ。

仲間が死んでいくのは怖い。仲間が傷付くのは怖い。たとえ生き返るとわかって

いても、その悲痛な声を聴くのは、その苦痛に満ちた顔を見るのは――この、どうしても埋められない喪失感を覚えるのは。

怖いんだ。

嫌なんだよ。

「だから、お前の気持ちは分かる。実戦であろうと演習であろうと、仲間が傷付かないように作戦を組み立てるその気持ちも。【即死】――殺傷能力がSSに届く程のソレでありながら、それを苦痛に喘ぐ仲間に使わないその気持ちも。全部わかる。ようやくわかるようになった、というべきだろう」

「……でも、それだけじゃないんスわ」

「殺したくない、だろう？」

あァ。すげーな、教官ってー生きモンは。

ちゃんと生徒の事見ててくれてんだね。おじさんちょっと感涙しそうだよ。感涙するって動詞としてどうなんだろうね。

「お前の悩みは通常の倫理に基づいたものだ。もしお前のその魔法が【回復】や【治癒】といったものであれば迷うことなく使っていただろう。苦痛に喘ぐ仲間に、死

にゆく仲間に、自分がしてやれることならば、と。なんの躊躇いもなく使っていた事だろう」

「そりゃァ、まァ」

「だが、そんな魔法は存在せず、お前の魔法は【即死】……たとえ結果が同じだとしても。たとえ仲間が、苦痛から解放され、救いになるのだとしても——仲間は殺したくない。だから安心しろ」

「……そりゃ、どういう」

「お前は普通だ。お前は異端じゃない。私が認めてやる。私はこの学園においてもそれなりの地位を持っている。階級を有している。その私がお前を認めてやる。仲間を殺したくない、という感情は、相手から懇願されようとも使いたくないという嫌悪感は、決して異常ではない。お前は正しいんだ。そしてそれは——優しいのだとは違う」

「！」

やばい、オジサンちょっとこの人好きになっちゃうかもしれない。

前世で考えたら歳の差すんごいけど、今来たよ完全にキュンと来た。オジサンの

悩みの一つを完全にぶち抜いてくれた。

　キリバチ教官。尊敬します。今度ご飯とかどうですか。

「ありがとうございます。……私ァ、いいんですね、これで。この感性を優しいだの慈悲深いだの言われて辟易してたんスよ。違うだろ、って。こっちが普通で、お前達が……言い方は悪いけど、壊れちゃってるんだろ、って。だから……あァいや、だけど。いいんスね。私ァ……このままで」

「ああ。お前はそのままでいろ。お前はそのままであれ。私達が……エデンが正道を外れたとしても、お前だけはそのままに、その場所から私達を掬い上げてくれ。その時にはもう、私達は深く暗い穴の底で、行先を見失ってしまっているはずだから」

「……あァ、担任にも似たような事言われましたわ。ま、わかりました。つか真面目にありがとうございます。そうやって……理解してくれる人がいるんだ、ってわかっただけで、大分胸のつっかえは取れた気がします」

「ああ」

「――が」

「む？」
む？　じゃねェのよ。
そんだけ理解があってさ、そんだけ倫理をわかっててさ。
なんだよ。
「これが解決した上で――どういう事スか。妹を殺して欲しい、ってのは。私ァ言いますよ、嫌だって。何度も」
「……まず、現状を見てもらった方が早いだろう。着いてこい、妹の部屋に案内する」
「……まァみるだけなら」
なんだかね。
そんだけわかっててさ、それでもそういう相談をしてきたってことは……大体察しはつくんだけどさ。
察しが付くだけに、つらいよ。
それは。俺も、キリバチさんも。つらいよ。

遠《ｔｅｘｔ·s1·2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ここだ、と言われて辿り着いた部屋――っつか、病室か。
ネームプレートの類はかかっていない。中から物音もしない。寝てんのか？
「入るぞ」
「はい」
ちょいと尊敬度が爆上がりしたのでちゃんと相槌する。
あ、別に普段から相手を尊敬してないとかそういうわけじゃないぞ。ふざけてもいいかな、と思ってるだけだ。
で。
入って――それが目に入った。
「……繭？」
「そう。繭だ。妹の魔法は【壊糸】と言ってな。触れたものを徐々に壊していく糸

を出す事が出来る。それで作られた自己防衛の繭……もう何も見たくないと、もう何も聞きたくないと。私の声でさえ、届けないで欲しいと。そういう心の現れだ」

「そりゃァ、また」

「これを、殺してほしい」

「……嫌ですが」

魔法少女の中には近接にも遠隔にも振り分けられないものが幾つかいる。特殊魔法って奴だな。要は自身の強化でも、遠隔で何かを打ち出すでもない……生物に似た何かを生み出す魔法の事。自立して光弾打ち出すふわふわ鼠とか、コッソリ対象に近づいてその体躯に入り込む【寄生】とか。

そういう特殊魔法は、殺せる。死がある。魔法に命がある。

だから【即死】が効く。

ただし――魔法は魔法少女の一部だ。

魔法が死ねば、魔法少女も死ぬ。だから近接と遠隔の中間なんだよな、特殊って。

そこまで優位性を保てるってわけでもないから。

で、この【壊糸】もその特殊なのだと。

だから――コレが死ねば、中の妹さんも死ぬわけだ。
「もう戦いたくないって言ってんでしょ？　もう嫌だって……仲間が死ぬのは嫌だ、って。みんなが傷付くのは嫌だ、って。んな奴わざわざ戦場に引き摺りだして戦わせるとか、無い。キリバチさんも思うトコあるとこあると思いますけど、私ァ嫌です。殺したくない」
「……そんなお前に、これを渡そう」
「あ……ン？　通信端末？」
渡される。受け取る。
通話は繋がった状態らしく、その画面に一人の少女が映った。
あァ、どことなくキチバチさんに面影を感じる。
「誰ですかね、アンタは」
――≫エミリー。そこにいる姉の妹です。初めまして、私を殺してくれる方。お名前を窺っても？≪
「殺してくれる方じゃないんで、名は名乗らんときますわ」
「エミリー、コイツは梓という。梓・ライラック。最近エデンに入った魔法少女で

――お前を殺し得る存在だ」

――≫お願いします、ライラック様。私を殺してください≪

はい、はい、はいよっと。

情報量情報量……はそんなでもねぇけど、話がはえーのよ。おじさんさ、気持ちまだぐちゃぐちゃなんよ。もうちょっと整理する時間くれない？

「嫌だ。私ァ仲間を殺したくない」

――≫そうは言わずに！　私、もう何か月もこの繭に閉じ込められていて、そろそろ我慢の限界なのです≪

「あン？　自分で閉じこもったんじゃねェのか。つか制御できねェのかよ、自分の魔法なのに」

――≫お恥ずかしい限りですが。この繭の状態は、私がＰＴＳＤを発症した時に形成したもの。ですが、もう心の整理は付きましたので、大丈夫なのです。なのですが≪

「【壊糸】は中々に耐久性のある魔法でな。暴走状態で出したためかエミリーからの干渉も受け付けず、外部からは……」

キリバチさんが自身の手袋を脱ぐ。そしてそれを繭に向かって投げる。
するとそれに――罅が入った。革手袋だぞ。なんだよ罅って。
んなツッコミする間もなく、ピシリピシリと罅は広がって――最後には砕けちまった。いや革手袋だぞ。なんだよ砕けるって。
「この通り、触れたものを徐々に壊してしまう。【壊糸】はS級でな、攻撃においても防御においても非常に効果的な魔法だ。用途の幅も広い。病室自体は反魔鉱石で出来ているから問題はないが、この繭を壊す手段がエデンには存在しないのだ」
「SS級の攻撃ぶつける、とかじゃダメなんスか」
「【凍融】や【青陽】に本気のものを撃ち込んでもらったが、無駄だったよ。多少削りはするが――それよりも先に、【壊糸】がそれら魔法を壊す」
――»この暴走した【壊糸】には何物も寄せ付けない、という拒絶の意思がふんだんに練り込まれていますので、恐らくはそれが原因かと。ですが、この通り私はもう大丈夫なので……班員にも心配をかけていますし、何より戦場に復帰するためにも、一度殺していただけないかな、と«
「PTSDは？」

――≫克服した、とは言い難いです。ですから、次からは仲間が出来るだけ傷付かない方法を取ります。たとえそれによって降格しても、私にはもう無理そうなので≪

「そりゃ良い判断だな、暴走繭」

――≫ぼ、暴走繭？≪

「今付けたあだ名だよ。んで、――断る。私ァ殺したくない。懇願されても、アンタにどんだけやる気があっても、アンタがどんだけ仲間に謝罪したくても、嫌だ。私は殺したくない」

――≫そう、ですか≪

良い事だと思う。そういう考えの魔法少女がもっと増えたらいいと思うし、戦場へ復帰して、そういう……犠牲の出ない方向を選ぶ指揮官が増えると言うのは願ったり叶ったりだ。

だけど。

「解けるはずだ。私が殺すまでもなく――本当に戦場に復帰できるくらい、回復した、っていうんなら」

――≫それは≪

「克服できたとは言い難いつったろ。つまりはそういうことなんだよ。魔法の方が、【壊糸】の方がアンタの事をよくわかってる。アンタはまだ戦場に戻っちゃダメなんだ。アンタはまだ心の整理がついちゃいない。アンタの心の中には、まだ、その時の光景を拒絶する心が残っている。今は誰にも近づいてほしくない。今は一人でいたい。今はどうか、そっとしておいて欲しい、って思いがな」

――≫いいえ、ライラック様。それは違います。私は私を信じてくれた子達を指揮する立場として≪

「それを吹き込んだの、アンタだろ、鬼教官」

「……それは、どういう意味だ、ライラック」

どういう意味も何もねェんだよな。

「アンタ、説得したんだろ。仲間が待ってる、って。それでいい、犠牲を避ける方向で全く構わない。お前はそうあっていい、って。私ン時みたいにさ。んで――だから、出てきてほしい、とか言ったんだろ」

「それは……言ったが」

「暴走繭はさ、仲間を傷つけたくないんだわ。もう傷付いてほしくないんだわ。当然その中には、アンタも含まれるんだよ鬼教官」

――≫……≪

「嫌なんだよ。私のせいで誰かが傷付くの。私のせいで誰かが心を痛めるの。嫌なんだよ。だから、アンタがそうやって毎日毎日自分トコ来て、大丈夫か、だの、無理はするな、だの……お前は間違っていない、だのって、気を遣えば遣うほど、苦しくなんだよ。自分のせいで姉を苦しめている。自分のせいで姉は毎日奔走して、自分のせいで姉は心を苛んでる……つってな。だから暴走繭は、心の整理がついたってことにして、出て行こうとした。そうすれば少なくともアンタは安心するだろ。落ち着くだろ。自分はもう大丈夫だっつーアピールをすりゃあ、少なくともアンタの心労は減るって、そう考えちまったんだよ。傷付けたくねぇから、苦しませるのが嫌だから」

すげぇわかる。

暴走繭の気持ちが。嫌なんだよな。自分の事で、相手を煩わせるの。

戦場で傷付いてほしくないだけじゃないんだよ。自分の大切な人には、身内には

――出来るだけ幸せで、平和でいて欲しいんだ。

んなのがエゴだっつーのはわかってる。独り善がりなコトだってのも理解してる。

でもさ、嫌なのは嫌で、それは治らないんだよ。

俺が――お嬢様を。

あの時、「勝手に死にますから」なんてほざいたお嬢様を――初めて、自ら、殺してしまった俺を。自分自身を、許せない――ただそれだけで避けちまってる自分が嫌になるように。

どんだけ諭されたって、どんだけ慰められたって、どんだけ理解してもらったって。

無理なんだよ。嫌なのは、嫌。我慢とかできねーんだわ。オトシゴロだからよ。

「嫌、なのか。私が……お前の事を、想うのは」

「あー、そういう解釈しちまうか。ちょいと違ェんだがな。心配してほしくないだけだよ。大丈夫なんだよ。アンタの妹はそんな弱かねェんだよ。苦しくて苦しくてたまらないし、怖くて怖くてたまらないし、嫌で嫌で仕方がないけど――弱くない

んだよ」

「弱くない……」

「コイツにはもっと休養が必要だ。本当の意味で心の整理がつくまでな。んで心の整理がついたら、たとえ暴走状態だった時に出した魔法だとしても、本当に落ち付けたなら、克服できたなら――解ける。どの時代においても魔法ってのは解けるモンさ。だからよ、鬼教官」

さっきの言葉を。

貰った言葉を。

返す。

「だから、安心しろ」

「……」

「強いぜ、アンタの妹は。私だったら、私なんかがそんな状態に陥ったら――死にかねん。死ねないらしいが、自死を選ぶ可能性が高い。でもアンタの妹は違った。ちょっと待ってくれってさ、一度待ってくれって、籠ったんだ。自衛したんだ。少しだけ時間をくれたら、頑張るから、って。それが強さだろ。何もずっとずっと前

向いて歩き続けて何があっても動じないっつーのだけが強さじゃねえんだよ。立ち止まって自分省みて無理なものは無理だって割り切ってやりたくないことはやりたくないって言えるくらい強いんだよ、アンタの妹は」

――≫姉さん。ごめんなさい。ライラック様の――言う通りです。私はまだ、ホントは、……戦場が怖い。魔法少女が国の盾であり、資源であり、兵器であることなど十も承知です。……けれど、ごめんなさい。本当にごめんなさい。もう少しだけ、時間をください。私が……鬼教官キリバチの妹として、再度自身を誇れるようになるまで、もう少しだけ≪

「……揃いも揃って、鬼教官などと呼んでくれる。それでは……教官として、正しい判断をしなくてはならないではないか」

さァて、んじゃこっからは姉妹の会話かね。

邪魔者はお暇しますか。えぇと、通信端末を棚に置いて、と。

「おい待て功労者」

「ぐぇ」

「まだそこにいろ。病室を出るのはいいが、逃げるな。逃げたら魔法を撃つ」

「ここにいます」
「よろしい」
首元を引っ張るとかはあるけど首を掴まれて引き戻されたのは初めてです。
……いんやさ、何を聞かせるってんだよ。こっからは姉妹の、妹と姉のしばしのお別れの、感動のシーンだろうが。そこにカンケーないおじさんいたら場違いでしょおかしいでしょ。
「エミリー」
――≫はい、姉さん≪
「お前の意見はよくわかった。だからもう催促はしないし、大丈夫か、とも聞かない」
――≫ありがとうございます≪
「ただし」
――≫……≪
「その……私が寂しいので、たまに会いに来て、話をするくらいは許してくれないか。私はお前と話す事で、この地獄が如き戦場でのストレスを発散できている……

気がする、のだ。その、癒し、というか」
「ワォ可愛らしイッタい!?」
バチってきた！
睨まれた瞬間静電気みたいなのがバチってきた！　こわ、こっわ！　これが【痛烈】か。やば。からかわんとこ。やっばー。
「ふん。……もう心配はしない。お前が強い子だというのはコイツに言われる前から知っていたしな。だからその、私が会いに来たいので、会いに来るのを許して欲しい。……ダメだろうか」
――»ふふ、勿論大丈夫ですよ。姉さんは寂しがり屋ですものね、昔から«
「昔の話は……ああ、いや。ありがとう。……ありがとう」
――»はい。姉さんも鬼教官、頑張ってくださいね？«
「ああ。ビシバシ行く。そこなライラック含めてな」
あァ、姉妹仲がいいのは微笑ましいね。
おじさん前世で弟いたけど折り合い悪かったしなぁ。いやアイツが毎日パチスロ行ってんのが悪いんだけど。あ、パチスロ批判したわけじゃなくて、働かないアイ

ツを批判しただけだからね。
　ちなみにこの世界にパチスロはない。無いが、国営のカジノとかはある。賭博は別に違法じゃないノネ。
「そろそろ行くよ、エミリー。また来る」
　――≫はい、姉さん。また≪
「ああ」
　言って、通信端末が切れる。
　魔石が動力源のため、魔力さえ尽きなければいつでもどこでも使えるこの通信端末は、けれど電波……電波なのか？　まぁ通信可能範囲が狭いため、遠征に行っている奴らとかとは話せない。
　んで。
　で。
　目で促されるままに病室を出て……先ほどの休憩スペースまで行くらしい。
　結構長い時間いたけど、まぁまぁ言いたい事も言えたのでちょっとはスッキリしたかな。

……鬼教官もまァ晴れやかな顔してるし、おじさんの年長者としての威厳は果たせたんじゃねェかなぁと。そう思うわけですよ。

だから何用かなぁとも思うわけですよ。

もう帰っていいんじゃないか、って。あ、でも帰るとお嬢たちと鉢合わせかねんから、夜までここにいようかなぁ。

「ライラック、どうした。座れ」

「ん、あァ、じゃあ失礼して」

いつのまにか休憩スペースまで付いていたらしい。

座って——何も切り出してこない鬼教官に何事か、と思っていたら、ウェイトレスさんがトロピカルなパフェっぽいのを持ってきてくれた。鬼教官はお茶だけだが、俺にはこんな……えぇ、いいんですか？　俺今回何もしてないスよ。依頼された殺しもしてないし。

「奢りだ。お前は授業をさぼる時、必ず監視塔や外壁の上でトロピカルジュースを飲んでいる、との報告を受けている」

「誰だそんな報告したヤツ」

「違っていたか？」
「いやあってるスけど。いただきます」
「うむ」
……美味いな。
いや美味いなオイ。これ市販してくれよ。なんで病院でしか食べられないんだよ。俺これ買うよ毎日レベルで。うま。あまー。
「世話になった」
「んー。べぷになにもひてないれふよ」
「うむ。口に物を入れて喋るな」
「んぐ。いんやさ、口に入れるモン目の前にだしといてそれは酷いスわ」
「……それは確かに、そうなのだが」
認めるんだ。
暴論だと思うんだけど、今はしおらしいのかな。
なんにせよっつかなんだこれめっちゃ美味い。誰？　作ってるの誰？　ファンになりそう。

「……そんなお前に、少しばかり聞きたい事がある」
「そんな私とは」
「いいから、聞きたい事があるのだ」
「まァいいんですが。んー。美味い。で、なんスか」
「フェリカ・アールレイデを避けていると、聞いた」
「んー。ソレ担任からの報告じゃないスね。ポニテスリットとなんか繋がりあるんスか？」
「……鋭いな。一撃で看破されるとは。というより、縁の事をポニテスリットと……ああまぁ見た目的にそうか」
あの担任は案外友人関係のいざこざには介入してこないからな。いじめなんかが発生したらすぐにでも対策取るんだろうが、こういう場合のは担任の仕業じゃない。んであの話を聞いてたクラスメイトも違う。そういうのをわざわざこの鬼教官にまで言いに来る奴らじゃない。んじゃまぁあの時それとなく探ってみる、なんてことを言っていたポニテスリットくらいしかいないだろ。
そもそもあの時鬼教官に丁度捕まったのが妙過ぎたしな。何らかの手段で近くに

いる事を察して通信端末で依頼したんだろ。
「内容を言え、っつー話であってますか」
「単刀直入に言えばそうだ。何故彼女を避けているのか教えて欲しい。先日の演習で起きた内容は粗方知っている」
「ん―」
美味いパフェを食べながらしたい話じゃないんだけどなぁ。
ま、他人様にあんだけ言っておいて俺だけうだうだ悩んでるってのもアレか。俺ももう少し大人になんねぇとなぁ。
「正直な話、庇ってもらった、っつーのは、悩みの三割くらいなんスよ。お嬢様はそういうことをしかねないって心のどこかで思っていたし、あの状況ならアレがベスト、ってのも理解してるんで」
「自分のせいで誰かが傷付くのが嫌、と言っていたが、それが三割なのか」
「はい。それは勿論嫌です。けど、私が悩んでんのはその後で……満身創痍で、地面に落ちたら更なる苦痛が待ってるお嬢様を。落下の最中でさえ、苦しそうなお嬢様を。……殺したんスよ、私ァ。【即死】で、死にそうなお嬢様を殺しました」

「……最善の判断、ではないのだな。お前の中では」
「いや、これ以上の苦しみを背負わせたくない、っつー気持ちもあるんスよ。心のどこかには。お嬢様はどうあっても死ぬ状態だった。背中から下半身の全部持ってかれてたんだ、喋れてたのが奇跡ってくらいには、死ぬ状態だった」
「では、何を悩んでいる？」
あの時。
お嬢様は、「勝手に死にますから、大丈夫です」と言った。「殺さなくても大丈夫です」と。俺が【即死】を仲間に使うのを嫌がってるって知ってたから、そう言ったんだ。
でも、そういうことじゃない。
そして俺の悩みはそこじゃない。今述べたのは三割の理由。残り四割は、そうじゃない。
「初めて、殺しました」
「どういう……報告に有る限りでは、班員を【即死】させた回数は少ないながらもあるようだったが」

「初めて自分から殺したんスよ。懇願されてでなく――殺さなくていい、って言われたのに、私ァ彼女がこれ以上苦しい思いをしてほしくない、なんて……まさに、その倫理の欠如した感情論で、私が一番忌み嫌ってた方法で……救済として、私ァお嬢様を【即死】させた。……っとに嫌になるスよ。結局その程度だったんだ、って。私の……私の常識とか、倫理観とか、諸々含めた私っつーのは、一時の感情に流されて、ずっとずっと頑張って踏ん張って我慢してきた一線を軽々と越えちまうくらいには、その程度だったんだ、って。私にとって【即死】を仲間に使う事は決して救済なんかじゃない、殺人なのに……私は」

自分の意思で、金髪お嬢様を殺したんだ。

「そういう、ことでしたのね」

「！」

ふわ、と。

背後から抱きしめられた。パーテーションのある個室スペースに音もなく入ってきて背後を取られたっつー恐ろしい体験でありながら、その抱擁が余りにも温かくて、その声に感情が乗りすぎていて――声が、出ない。

「ごめんなさい。貴女に殺人を行わせてしまって、ごめんなさい。私は……貴女が、ただ人を害する事を嫌っているのだとばかり、そう勘違いしていましたわ」

「……お嬢」

「ごめんなさい。貴女はそうではないのですね。貴女はもっと深い所で死を、殺しを嫌っている。……重ねて謝ります。私はその感覚をまだ理解できていません。魔法少女は兵器であり、資源であり、盾であり矛である。その理念を、あるいは呪縛と捉える方もいるのでしょう。ですが、私は……そちら側であり、そちら側であれとされ、そちら側として生きてきましたの」

温かい吐息が頬を撫でる。

背中に体温を感じる。今ばかりは邪な気持ちではなく、人肌という名の体温を。

あの時。

徐々に冷たくなっていくのがわかった――それでも俺を抱きしめたまま離さなかったお嬢様の。あの、記憶が。

少しずつ上塗りされて、上書きされて……靄が晴れて行く。

「申し訳ありませんわ。私が、あるいは学園の皆が、貴女の理想に寄り添うのは

難しいかもしれないと、現時点で思います。私自身でさえ――そう。けれど。けれど。……私は、貴女に救われました。独善的な懺悔で本当にごめんなさい。私は貴女に救われたのです。貴女が決してそう思っていなくとも、貴女のその自発的な殺人で――私は、痛い思いをせずに済みました。だから、ごめんなさい。貴女が今以上に悩むのだとしても、言わせてくださいまし」

ぎゅ、と。

強く、お嬢様は。

「ありがとうございます、梓さん。私を――助けてくれて」

「ッ」

「何度も申し上げます。ごめんなさい。貴女に重荷を背負わせてしまって、貴女に自身を責めさせてしまって。けれど……私は救われました。助けていただきました。だから、貴女が嫌おうとも、貴女が拒否しようとも、何度でも言わせていただきます。梓さん。貴女は優しい方ですわ。恐らくこのエデンにいる、誰よりも」

……いんやさ。

そこまで言われてさ。いや、そこまで言われたとしても、はいそうですか、じゃ

あこれから殺しまくります、にはならねェんだけどさ。
　でもさ。
　自分より年下も年下な女の子にさァ。そんだけ言われてさ。
「……頼みがあンだわ、金髪お嬢様」
「なんなりと」
「次からは、懇願してほしい。殺してくれ、って。私ァ、どうにも、自分から殺すって行為が……とてつもないストレスらしいから、せめて。せめて、責任を押し付けさせてくれ。殺してくれ。殺して欲しい。痛いから、苦しいから、お願いだから殺して欲しいって……そう言ってくれ。私ァ弱いんだよ。死ぬほど弱いから、ごめん。ごめんな。押し付ける形になるけれど……そう言ってくれないと、無理そうだ」
「わかりましたの。これからはちゃんと面と向かって言いますわ。痛いから、苦しいから、――殺してください、って」
「あァ。ま、そもそも怪我しないでくれるのが一番なんだがな」
「ごめんなさい。私達が国を守る盾である限り、それは確約できませんわ」

「わーってるよ」
わかってんだ、そんなこと。
それが魔法少女の在るべき姿だってことくらい、知ってんだ。
それでも。
ダメだね、弱いね、俺ァ。弱いわ。暴走繭とは比べ物にならないくらい弱い。お嬢様の方が、鬼教官の方が、エデンにいるあらゆる少女の方が、俺より強いんだと思うわ。
ごめんな。ほんとに。
「ところで、なのですけど」
「ん？」
「そのパフェ、一口頂いても？」
「あァ、いいよいいよ。食べな。めっちゃ美味いから」
「ほ――ホントに良いんですの？」
「え、いいよ。何、私ァそんなに独占欲強い奴に見える？」
「いえ。いいえ。では……では、頂きますわ！」

おう。
なんだ、急に元気出たな。
あァそうだ、新しいスプーンを店側に貰いに行かねェと。つか店なんかあんのかここ。マジでどっからでて来たんだこのパフェ。
「……本当に美味しいですのね。これ、パルリ・ミラのパフェですの？」
「おぉ、よく知っていたな、アールレイデ。いや、お前達の話に口を挟むのは良くないと黙ってはいたんだが……」
「パルリ・ミラ。覚えたぞ」
「それよりいいのか、ライラック」
「何がですかい」
「スプーン、返す気はない様子だが」
「ん。ん―、まぁいいスよ。お嬢様にはちょいとばかり悲しい思いさせてたんで、上げます。パフェ食べてチャラで」
「そうか。……どちらの意味も分かっている、と見るが」
「ノーコメントで」

んじゃま、そういうことで。
今日は。今日一日は――血みどろ戦場が当たり前のエデンの毎日の中でも。
トクベツ、平和な日だった、っつーことで。
……毎日こうなら、いいんだけどな。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《≪ｔｅｘｔ》

4. 有迷伸炙途方琉度班図, 蝙蝠有侠.

二、襲撃編

5・伏理伊豆律寸外間疣椅子・

魔法少女の本業は学業ではなく国防にある。

国家防衛機構・浮遊母艦ＥＤＥＮが守護する国。俺の生まれた国。そして皆の生まれた国を、なんとしてでも守る事。それが至上命令だ。その点についてはまぁ、理解はしている。やらなきゃ家族がやられるんだから、やる。

んで、そもそもなんでそんなものが必要なのか、なんでそんなシステムになったのかっつーのは……実はちょいと曖昧。曖昧にされている、っつーべきかな。そもそもなんでこんな仕組みになったのかを探っていくと、「魔法少女は国防の要であり資源であり生体兵器である」みたいな教本の一番に載ってるような答えに辿り着く。

なんか、隠してる。

それがとりあえずの所感。
ただ、襲ってくるモンはマジで襲ってくるので、どれだけお上が怪しかろうが戦わなきゃいけない。文字通り死ぬ気で、死ぬまで。
「ライラック、状況は？」
「今んとこは特に。触手の……あァ、エメラルドローパー二体は完全に死にました。こちらの損害も軽微。死者一人も無し。怪我人もありません」
「ふむ。素晴らしい成果だな」
俺達のクラスは大体この指揮官に当たる。鬼教官とは違う、Ｓ級の魔法少女である指揮官殿。
今回の作戦も同じ。
五つの監視塔の内、一方から化け物の大群が発見されたとの報告を受けて、そちら側に防衛の陣を敷き、他の方向も見回りつつ遠征出来る組が大本を叩きに突貫。その間にエメラルドローパーっつー、なんだ、Ｒ１８っぽい緑色の触手の化け物がこっち来たんで、防衛に残ってて俺の作戦聞いてくれる奴集めて対処した、って感じ。

監視塔が発見した化け物の大群のある≫大本≪は通信端末の通話可能範囲外なので、遠征組が成功したか失敗したかはそいつらが帰ってからじゃないとわからない。普通に帰ってくるか――還ってくるか、っつーな。クソめ。

一応万事滞りなく、ではある。

あるが。

「あー、指揮官殿。発言しても？」

「良い。お前の意見は稀にためになる。言え」

「稀スか。まァいいスけど。今回の侵攻、いくつか疑問点があって」

「何故魔物どもが群れを成しているのか――か？」

「それも、スね」

「ほう？」

そもそも化け物共はあんまり協力しないというか、アシッドスライムと天鷲やアビスワームと精神体のように、基本は敵対関係にある。化け物の餌が化け物だったり、獲物や敵を前にしても協力しなかったり。

だから今回の侵攻は少しばかりおかしいのだ。

監視塔の報告に拠れば、化け物の大群は様々な種類で構成されていたと。その構成の中には捕食関係にあるものや群れを良しとしないものもいて、それらが大人しく徒党を組んでいるというのは、今までの常識、研究結果からすればあり得ないと。

「それについては多分、あっちにも指揮官みてーな化けモンがいるんじゃねェかって私ァ思ってますよ」

「魔物を指揮する魔物か。……頭の隅に入れておこう。それで、それも、ということはもう一つあるんだな？」

「あー、ま、これについちゃ勘なんスけど」

「いいから言え」

「へい」

ちゃんと話聞いてくれるときは聞いてくれるんだよな。

撤退はナシなだけで。

「さっき来たエメラルドローパー……なんつーか、殺意が無かったんスわ」

「殺意？」

「えェ。ローパー種っつーと、この前のみてェにご自慢の触手で近接も遠隔も取り

込んでその魔力自分の糧にして成長してく、っつー化けモンだ。魔法少女を敵ではなく獲物であるとしか見ていない……言い方は悪いスけど、自分の周り飛んでるハエを食ってるくらいの感覚だと思うんスよ」

「確かに表現は良くないが、それは正しい」

「あァすんませんね。んで本題は、その……さっきのエメラルドローパーは、それが無かった。殺意っつーか捕食本能？　食いたい、って気持ちが無いように思えた。あー、なんつーのかな。すげー人間的な気持ちの表現しますけど、〝やらされている〟あるいは、〝仕方なく来た〟みたいな……そんな感じで」

化け物だって命は一つだ。

だから戦いとなれば死力を尽くすはず、なのに。

アイツラは、なんかなぁなぁで戦ってた。そんな気がするのだ。だからこっちの魔法少女も怪我無しで終えられた。本来はあり得ないんだ。無傷、っつーのは。多かれ少なかれ、負傷はする。湧きポ固定の化け物じゃない、ランダム湧きのちゃんとした化け物だ。それを無傷で、ってーと、俺に指揮の才能がありすぎるか――あっちにやる気が無かったか。

それしか考えられない。
「ふむ」
「さっき言ったアッチにいもいそうな指揮官みてーな化けモン含めて、なんつーかな。本命は他にある、みたいな……そんな気がするんス」
「……良い意見だ。だが、かもしれないもののために戦力を割くことは難しい。遠征に行った組もまだ戻ってきてはいない上、監視塔からは魔物共が全滅した、などという報告も届いてはいない。そうである以上、私達は今見えている脅威に対応するしかない。大本を叩き、こちらに来るものを殺す。それしかない」
「ま、そうスよね」
「だが」
指揮官殿は――こちらを正眼に捉えて、言う。
「正直、こちらの……防衛拠点の戦力は十分だ。たかだかC級一人がいなくなった所で問題は無い」
「……あァ、そうスか」
「それでは、私は他の場所を確認しに行く。……ああ、そうだ。一つだけ言ってお

くぞ、ライラック」
「なんスか」
「SSは流石に無理だが、A級がもう一人くらいいなくなっても問題は無い。それだけだ」
……いんやさ。
何あの人。ツンデレ？
というかまァ、自分は動けないから、もし本当に気になるなら見てきてくれ、っつーことなんだろう。なんだ、結構信頼されてんのかね、俺ァ。
んで、A級を一人連れて行っていい権限までくれました、と。
「――話は聞いていたぞ、梓」
「ずるいですのー!!」
そんで、茂みに此奴らが隠れていたのも知っていました、と。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

相も変わらず姫抱きで、エデン下方……というか街中の屋根の上を疾走する俺。
いやさ疾走してんのは俺じゃないんだけど。
「どうだ？」
「今ンとこは、何にも。……いや、懐かしいね。たった数ヶ月だってのに……随分長く離れていたような気がする」
「懐古を否定する気はないが、出来れば集中してくれ」
「あいや、すまん」
国だ。
俺の生まれた国。俺が守るべき国。
そして——監視塔の、死角。
「確かにここは監視塔の死角だ。エデンが上にある以上、どうしても見えない部分がある。そういう意味で、もし敵に……あの大群が陽動で、本命があるとしたら、狙うのはここだろう、という事も理解できる。だが、どのように入り込む？」
「それがわかりゃ苦労はしねェんだがよ。まァいくつか思い浮かぶ。一つは正攻法……監視塔の目ェ潜り抜けて、外部から侵入するってェ方法」

「それは、無理だな。監視塔は何も肉眼で周囲を監視しているわけではない。この国の周囲全域を覆って余る程にはしっかりと監視網が敷かれている」
「わーってる」
ついてきてもらったのは、ポニテスリット。攻撃も防御も出来る魔法少女だ、護衛にも火力にも申し分ない。遠隔はまァ、俺の銃があるしな。
んでそんなポニテスリットに抱いてもらってこんな街中駆け回ってるのは、敵が狙うとしたらここだから。何かあった時に急行できるように、っつーのと、俺の知らない部分……中学生までは普通にここで過ごすと思ってたからな、この国の知らねえ部分を目で見ようって魂胆がある。地図だけじゃあわからないものも多い。
「次、瞬間移動の類」
「瞬間移動？」
「あるものを地点Ａから地点Ｂに一瞬で移動させる、っつー奴だ」
「……そんなことが出来る魔物が存在するのなら、とっくにこの国は壊滅しているぞ」
「だよなぁ」

意外っつーのか、魔法にも化け物にもテレポーテーションを扱う奴はいない。
まァいたら困るもんな。金髪お嬢様のソレが近いとはいえ、ありゃ速く動いてるだけだし。
「次。地下の水道を通っての出現」
「それも、難しいだろう。水道が外に繋がっている事に関しては、エデン側も把握している。故に魔物を検知する仕組みがしかれている」
「あァ知ってる。でもそれがぶち抜かれてきたら？」
「……過去一度も抜かれた事は無いはずだが、それをされたら……噴水や各家の水道に魔物が流れることになるな」
「やべェよなぁ」
「だが、違う。そう思っているんだろう、梓」
「……なんだ、ポニテスリット。私の事よくわかってんな」
「お前は自身が最も信じている説を最後に置く癖がある。今までのものは誰もが考え付く杞憂だ。だが、お前は違う所に視点を置いている。お前が私にただ街を駆け回らせるだけでなく——目的地を明確にして、そこに行ってくれ、などと言ってい

る時点で明白ではあるがな」
なんだいね。
すんげー分析されてら。
そうか、おじさんそんな癖あったんだ。知らなかった。
もしかして前世からだったりすんのかな。
「……湧きポイント、っつーのがあるだろ」
「魔物の、だな」
「あァよ。あのアシッドスライムみてェな、化け物が固定された頻度で生まれてくる地点。あれがどういう理屈で生成されんのか、ってのはまだわかってなかったはずだ」
「ああ。自然環境によるもの、と考える学者は多いが、立証には至っていない」
「それがよ、もし――街中に出現したら？」
ゲーム的な知識で言えば、モンスターの湧きポっつーのはなんでか街中に寄らない。モンスターが湧かない場所に街を作っているから、っつーのは理解できるんだが……ほら、先日の演習場。

廃墟群。あれは、街中に湧きポが出来ちまった結果、人が住めなくなって廃墟になった、って場所だ。

まさに、じゃねェ？

「それが、今向かっている場所だと？」

「あァ。これは私の持論なんだがね、湧きポっつーんは、最低でも近くに食いモンが必要だ。無いと死んじまうからな、化け物共も。だから、魔力が豊富で、餌も豊富な場所。そこに湧きポが出現する。……今回の場合は――作られる、が正しいか」

「お前が指揮官と話していた魔物を指揮する魔物のことか」

「あァさ。もしそいつらの目的が新しい湧きポの作成で、今回の事は全部陽動だった、って場合よ。何が生まれると思う？」

「地獄、だろうな。一般市民は魔物に対する攻撃及び防衛手段を持たん」

「あー、そういう概念的なのじゃなくて。どんな化け物が生まれると思うか、っつー話だ」

人間の国の内部に湧きポが出来たら。

まず、食べ放題だ。人間を。だがまぁ、ここまで語っといておかしな話、化け物

は魔力を好む傾向にある。だからホントはオカシイんだよな。魔法少女の素質を持たないただの人間が狙われる、っつーのは。それが多分、お上が隠している何かに繋がるんだろうけど。

　んで話を戻すと、つまりここに現れる化け物は、人間を狙って食うような奴になると思うんだわ。苔だのなんだので増えるスライム種と違って、もっと――。

「肉食の……ウルフ系か」

「多分な。化け物指揮してんのもウルフ系だと思ってる。あいつらの遠吠えは統率効果のあるものが多い。本来は同種にしか効かねえソレを、他種の化け物にまで届かせられる程やべーのがいて、ソイツが自分達のために新たな湧きポを作ろうとしてる、ってんなら」

「――それが、ここか」

「あァ」

　辿り着く。

　そこは――学校。

　広い運動場を持つ、俺の通っていたのとは違う小学校。

地図で見た限り、この辺はポーション屋が多いんだ。ポーションっつーのは別に魔法少女にだけ効く薬じゃねェからな、一般人も使う。だから国にあっても不思議じゃないが、なんだ、ここは激戦区なのか、妙にポーション屋が多い。そのほぼ中心に位置するのがこの小学校。

ちょいと離れた所に着地して、運動場を眺める。

小さな子供たちが楽しそうに、あるいは辛そうに走り回る運動場。特段、不思議なことは無い。

「……本当にここに現れるというのなら、避難命令を出すべきだ。上に連絡して」

「あー。多分そりゃ聞き入れてもらえねェわ。俺ァC級だからな」

「私はA級だ」

「それでもダメっぽい。指揮官殿の言葉通りなら、〝何かあってからでないと上は動かない〟……っつー話だ。あの人もあの人で色々抱えてんだろな」

「そんなこと言っていたか？」

「言ってたよ。言外に」

だから、待つしかない。

国内での魔法使用は原則禁止されている。ただし、国内に化け物が現れた場合はその限りではない。全力を賭して国民を守れ。それが魔法少女の義務だ。

さて、一度下ろしてもらって、銃を構える。

「……傍から見ると、小さな子をスコープ越しに狙う変態のようだな」

「ポニテスリットの語彙に変態なんて言葉があったのが意外だよ」

「む、そうか？」

「あァさ。ま、どうでもいいんだが」

つってもまァ、スコープはまだ使っていない。

異常が現れたら肉眼で見た方が早いしな。ただ倍率確かめてただけだ。

「……ちなみに、これで何も起きなかったら、徒労も徒労、なんなら指揮官殿の命令無視してサボってた、っつーことになるが、それはいいのかい？」

「問題ない。魔法少女は解雇されんからな。降級されたとしても、また上がればいいだけの話だ」

「流石だねェ、真面目真面目」

「お前も少しは真面目な態度を取れば、すぐに昇級できるだろうに……」

「私ァいいのさ。だって昇級したら忙しくなるだろ。そんなの御免――」

軽口を叩き合う――合っている時に。

来た。

空間の――歪み！

「来た、ポニテスリット!!」

「まさか本当に来るとは、な！」

近接魔法少女のポニテスリットが急行する。金髪お嬢様には遠く及ばないものの、物凄い速度で現場へ到着し、自身の身分と状況を叫ぶ。子供たちは何が何だかわかっていない様子だったが、教師陣はちゃんと対応してくれた。必死の形相で子供たちに声をかけ、呼び集め、校舎内に誘導していく。

空間の歪みは徐々に大きくなる。脈動する。どくんどくんと、胎動するかのように。

通信端末に一つ連絡を入れて、スコープを覗いた。

「――死ね」

歪みの中心に影が生まれた――その瞬間に、射撃する。

形成なんてさせない。【即死】を纏う弾丸が、まだ芽生えてもいない意識を肉体ごと刈り取る。

だが。

空間の歪みは、それだけではなかった。

運動場に、一つ、また一つと増えて行く。そしてそれぞれの中心に化け物が形成され始める。

一発、二発、三発。

俺の魔法の特性上、掠めりゃいい。だからそこまで狙いを定める必要はない。だが、もしポニテスリットに当たったら。あるいは逃げ遅れた子供に当たったら、なんてことを考えた日には恐ろしい。だからちゃんと確認して撃たないといけない——が、んなこと言ってられる量じゃねェぞ!?

「ポニテスリット！　昇降口だ！　攻撃じゃなく、守りに転じろ——やべぇぞこの数は！」

「ッ、これだから私の魔法は、殲滅力に乏しい……！」

スナイパーなんて使ってられない。急いで降りて、拳銃に持ち替える。

全力で走って、さっきのポニテスリットの何十倍も遅い速度で運動場に辿り着いて。

辿り、着いて。

「……オオカミの巣かよ」

「守りは任せろ、梓！　だが――」

「あァ、大丈夫だ。出さねえよ、こっからは――死んでも」

ウルフの狙いは決して小学生だけじゃあない。

周囲のポーション屋、人々を含め、あらゆるところに餌がある状態だ。

小学校の柵は決して高くはない。こいつらなら軽々飛び越えられるだろう。それも阻止しなきゃいけねェが、あんまり上方に向かって銃を撃ちたくない。子供や周囲の家の二階に住む奴に当たる可能性がある。魔法少女が一般市民を殺す、なんてのは有り得ねえ。そんくらいは俺でもわかるし俺でも遵守する。つか殺したくないしな。

だから、出来るだけ平面で――仕留める。

声を張り上げたりはしねェ。しねェで、一匹。

何の言葉もなく――【即死】させる。一匹じゃすまねェ。二匹、三匹、四匹と、ポニテスリットの言うようにA級に届きかねん殲滅力と殺傷能力を以て化け物を殺していく。

もう魔煙草は起動済み。クソ不味い味が、思考をクリアにしてくれる。

流石にそこまでくれば――ウルフ共の注目はこちらに向く。

そしたらようやく口を開く。魔煙草は一旦口の中にしまって、わりィ笑みを浮かべて。うわ不味。パルリ・ミラのパフェ食べたい。

「おォよ化け物共。いっちょ遊ぼうぜ。んじゃねェと――」

殺意だ。

殺意が向いた。食い殺す、という意思を感じる。唸り声が耳朶を打つ。

その、足を踏み出した――踏み出そうとした一匹を、撃つ。

「この地は、踏ませねェからよ」

狼っつーんは連携力の獣だ。

だが、まだ生まれたて。となれば――その連携は使えない。死という恐怖を前に、そして見るからに弱そうな魔力しか持っていない魔法少女に。

奴らは、一斉にとびかかる。
その爪が、その牙が、その体が俺の身体に触れた。
「……いってぇな」
瞬間、すべてのウルフが崩れ落ちる。
俺は無傷……ではない。鋭利な爪や牙が身体に触れて、そのまま崩れ落ちたんだ。ひっかき傷みてェなのがいっぱい出来た。めっちゃ痛い。
「つか消費魔力やべーわ。この量は流石に」
魔煙草を吐き出し、全力で吸う。
少しずつ回復していく魔力と。
「……おいおい」
――またも一斉に湧き出る、ウルフの群れ。
湧きポだ。この空間の歪み一つ一つが、沸きポなんだ。
「これァよ、なァ」
銃を構えて。
頬を引くつかせて。

「絶望、って奴かい？　なァよ、オオカミさん」
その問いかけは、高い遠吠えによって掻き消された。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１．２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

6・地湾堕輪僅利井戸塔経分・

ところ変わって防衛拠点。
そこには魔物の軍勢が押し寄せていた。それはもう、軍勢が。
けれど種類はわからない。何故って。
「……アールレイデ。凄まじいな、SS級というのは」
「多分鬱憤も含まれているかと」
「ついて、いけなかった」
押し寄せる軍勢――その全てが死んでいく。細切れになって、液体になって。
駆け巡るは金色の風。それはもうグロテスクな戦場を、美しき煌めきが縦横無尽に走り回る。
無論、それ以外が何もしていない、というわけではない。
空中を来る鳥系や蝙蝠系統の魔物には遠隔が、精神体系統には特殊やそういったものに特化した近接が対応しているし、金色の風の外側でもちゃんと戦闘が起きている。

彼女の殲滅力が桁違い過ぎる、というだけで。

「……しかし、遠征隊は全滅、ですか」

「ああ。全員還ってきたが、まだ蘇生は終わっていない。終わり次第報告させなければいけないが……その前に詰められた場合は、少々激戦となるだろうな」

「梓と、ミサキは？」

「サボりだ」

「？」

そんなわけがない、という顔に、指揮官――ジュニラは苦笑する。

随分と信頼されている。C級、というのも、内申点が低すぎるせいなのだろうことはわかる。あの少女……梓・ライラックは、銃器という補助が必要ではあるものの、A級に届き得る資質を持っている。それは魔法【即死】だけでなく……作戦を立てる、ブレイン、あるいは己と同じ指揮官としての資質を。

あれは将来大物になるだろう。その性格上色々と難はあるだろうが、あるいは肩を並べて戦場に立つ日も近いかもしれない。否、追い抜かされる日も――。

「指揮官！　ヤバイのが来ましたわ!!」

「アールレイデ、ライラックの適当な口調が移っているぞ」
「それは嬉しい、でなくて！　ＳＳＳ級の魔物が来ましたの!!」
「――なんだと？」
どこだ、と。
見渡して――気付く。
先程まで戦っていた、アールレイデの攻撃範囲外で戦っていた魔法少女の姿が見えない。
「ッ、危ない！」
「!?」
硬質な音が鳴り響いた。
いつの間にか眼前に来ていたアールレイデの剣に、何かがぶつかったのだ。
「ギ、ぃ……!?」
「カ――」
次の瞬間には、横で【光線】と【神鳴】をチャージしていた二人が悲鳴を上げる。
【光線】……ユノンは腹を、【神鳴】シェーリースは喉を――食い破られていた。

みれば、アールレイデも片腕に噛み痕がある。
「ウルフか！」
「体の透明な、非常に迅いウルフですわ！　恐らく体躯はそこまで大きくは――そこ！」
アールレイデが剣を突き刺した先に、一瞬だけ剣先が見えなくなったことが判断できた。
身体も、体内のものも透明にするウルフ系の魔物。
新種だ。
「とにかく、防御が出来る方は全力で防御を！　この魔物――私達を殺してはくれませんのよ！」
「……そこまでの知能持ちは、不味いな」
「だからヤバイって言ったんですのー！」
殺してはくれない。
つまり、魔法少女を殺したら、時間はかかるものの復活するとわかっている、ということだ。だから致命傷に至るか至らないかくらいの傷を与えて、動けなくし

て、こちらの戦力を削ってきている。実際腹を抉られたユノンと喉を噛み千切られたシェーリースは息も絶え絶えではあるが――まだ死ねていない。

「――アールレイデ。介錯を」

「ッ……いえ、わかりましたの」

一瞬、驚いたような顔を見せたアールレイデだったが、即座にその速さを以て、二人の首を斬り落とした。

ライラックの【即死】程便利ではないが、人体の首を斬り落とすくらいワケはない。

「アールレイデ。私に攻撃が向かった時、次は守らなくていい」

「ど、どういうことですの!?」

先程のアールレイデの反撃に様子見を選んだのか、攻撃の止んだ相手を良い事に、作戦を伝える。

ああ、そうか。今の魔法少女は私の魔法を知らないのか。

「私の魔法は【自爆】だ。噛みつかれたら、千切られる前に道連れにする」

「……わかりましたの。ですが！　そもそも噛みつかせませんわ。現場から指揮

官がいなくなることは、こちらの陣の瓦解をも示しますの！　それを選ぶのは最後！　いいですわね！」

「わかった。なら、全力で相手をしてくれ。私はこの門を死守する」

「はいですの！」

剣を構えるアールレイデ。

……透明なウルフ。それも、アールレイデに匹敵する程の、か。

もし、アールレイデが戦闘不能に陥り――私の【自爆】も効果を成さなかった場合、最悪の事態が起こり得る。

連絡を一つ、入れておくか。

そうはならないと祈りつつ、だが。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1:2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

発砲音が響き続ける。

あるいは遠い昔の記憶。自らも通っていたような小学校で、銃声が叫びをあげ続

ける。

　こちらへ来るものは【波動】で弾き砕いてはいるものの、あきらかにあちらの方に攻撃が偏っている。梓の挑発は成功した、ということだろうが――少々、不味い。

　消耗が激しい。元々【即死】はそれなりに魔力を食う魔法だ。それを何百に至らん相手に使用するのは、意識をも朦朧とさせるだろう。それに、少なくない傷が……梓の身に刻まれていく。

　その身に触れたものを即座に殺す、殺傷能力だけで見ればSS級に届かんという魔法【即死】。だが、魔石の銃弾を使わない場合は近接魔法少女らしく触れなければいけない、という制約を持つ。生まれたてとはいえウルフは素早い種族だ。身体強化に回す魔力リソースの無い梓では、全く傷を負わない、というのは難しい。

　加勢に行きたいが……。

「魔法少女様！」

「む、どうかされましたか？」

「学生、及び教員の避難終了しました！　裏口から軍に護衛頂き、家に帰しました。ので」

「――ありがたい」
「いえ！　お勤めご苦労様です……いいえ、頑張ってください！　貴女達の無事を、祈っています！」
「はい。ありがとうございます。貴方も、すぐに避難を」
気の良い校長だ。
国民の中には守って当たり前、そもそも魔物をこんなところに近づけた時点で義務を果たしていない、などとやっかみをつけて来るものも少なくはないというのに。
そんなことをされたら。
……やる気が出るな、ふむ。
「梓！　加勢するぞ、一般市民の避難は終わったそうだ！」
「そいつァ重畳！　ところで魔煙草持ってねェか？　そろそろ魔力が限界なんだ」
「残念だが無い。私は吸わんのでな」
「そりゃ羨ましいこって！」
良かった、まだ元気だ。
全身から血を流してはいるが、深い傷は無い。どれもが浅い、ひっかき傷のよう

なものばかり。
ただやはり感じ取れる魔力が少ない。消費しすぎ、だろう。
「――だが、もう安心しろ。A級、【波動】。ミサキ・縁。……守るべき者のいない私は強いぞ？」
防御に使えるからと防衛に回されがちだが、私は近接魔法少女。それも、打って出て殴って粉砕する――そういう戦闘スタイルだ。
たかだかウルフの百や二百、すべて打ち砕いて見せよう。
……梓が少しでも、休めるように。
「ばァか、休むかよ。私もやる。七割任せた」
「……負けず嫌いめ」
「ちげェって。勝算があっから言ってんだよ。あと十分くらいだ。そこまで保てば、私達の勝ちだ」
「成程。詳細を聞きたい所だが、お相手が待ってはくれなそうだ。十分だな。いいだろう、全力で叩き潰す」
「余力は残しとけ。最悪のケースもある」

「……お前はノリ、というものを知らんらしい」
「あン？」
少しくらい、カッコつけさせてくれたっていいじゃないか。
……お前ばかりカッコいいのはずるいだろ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

さァて、所変わらず今ここだ。
ポニテスリットの加勢によって大分ラクにはなった。が、正直もう俺の魔力は底を突いてる。今はあらかじめ魔石に込めてある【即死】で戦ってるだけで、もし噛みつかれたら終わる自信がある。
……ついに死んじまうのかなァ、なんて弱気も出るが、同時にさっき通信端末に入った»10分待て«という短いメッセージがやる気を起こさせてくれる。
フン！　とかハア！　とか言いながらウルフの頭蓋を砕いていくポニスリの姿は圧巻……だが、やっぱり殲滅力に欠ける。こないだみたいに全力の【波動】を、っ

つーんならチャージが必要だし、何よりこの小学校が全壊しかねん。だからああいう戦い方しか出来ないんだろうが……おっと。

「柵は乗り越えさせないっつーの。……残弾が少々やべぇが、まぁなんとかならァよ」

湧きポからは未だ無尽蔵にウルフが湧いて出てきている。

対してこっちはジリ貧。言葉ではなんとかなる、なんて言ったが、正直何とかはならないと思っている。応援が来たとしても、この小学校及び周辺区域は廃墟と化すだろう。

……そりゃ、嫌だな。

魔法少女としても、俺としても……。あのチビ達は大事な学校を捨てなきゃいけねえし、住民も家を放棄しなきゃいけない。つか、結果的な撤退ならここでの抵抗は……まァ無意味にはならんが、今回の黒幕の思うつぼだ。

湧きポを消さなきゃならん。

「ポニスリ、湧きポ消す方法って知ってっか？」

「知らん、な！　――知っていたら、全魔法少女が全力を賭してすべての地点を

潰しに行くだろう！」

「だよな」

だが。

だがよ。

故意に生成できるってんなら、消せるのが道理じゃねェか？

一般に化け物は自然環境と魔力から生まれる、と言われてる。通説って奴だ。今回はポーション屋が近くにあるっつー条件が整っているとはいえ、エデンの直下で、街中、なんつーのは自然環境としてはこう……よくない気がすんだよな。日も当たらねえ場所多いし。人間以外の餌いねェし。

そもそもここ……運動場には魔力なんか無かった。ポーションには多少宿ってる。薬草が魔力持ってっからな。だから宿っちゃいる。だが、小学校にんなもんはない。自然環境も魔力も整ってねェのに発生した湧きポってことは、相当無理して作ってるって可能性がある。

なら。

「おい、梓!?」

「え――」

あ。

やばい。

目の前だ。

これは――死。

「死なせん。恩人だからな。ほうほう、随分とまた、地獄を呈している。よく頑張った――来たぞ、私達が！」

ななかった。

割合ちゃんと死を覚悟したけど、なんだよ、狙ってたんじゃないかってタイミングで、俺の顔を食い千切ろうとしてたウルフがギャインと跳ねた。もう、かっけぇタイミングで登場しやがる。タイミングオブタイミングだよホント。なんだよそれ。

見れば、ポニテスリットの戦っているものも、今しがた生まれたばかりのものも、その全てが吠え声を上げ、地に伏し、否、のたうち回っている。

運動場にいるウルフの全て。それが――痛みに喘いでいるのだ。

「助かりました、鬼教官」

「こういう場でくらいは名前で呼べ、と言いたいが、まぁ良い。既にここの封鎖は指示してある。周辺住民の避難勧告もな」

「手の早い事で。……けど、ちょいと試したい事があるんで、それだけやらせてくれませんかね。そのために魔煙草とか持ってませんかね」

「試したい事とやらを告げてからにしろ。魔煙草の持ち合わせは無いが、原材料であるフリューリ草ならある」

「んじゃそれ貰います」

鬼教官。

キリバチさん。

俺が連絡したのは、この人だった。まァ正確には連絡してもらったんだが、今は良い。

その魔法、【痛烈】。目に届く範囲全てに痛みを与える魔法。ウルフは動物系で、痛みをちゃんと覚える化け物だ。

どんだけ痛いか、っつーのは、運動場に転がってる奴らを見ればわかる。
逃げる事も出来ない、反撃する事も出来ない。ただただ、痛みに喘いで、叫ぶ事しか出来ない。
こえー魔法だこと。
「キリバチ上官、処理に当たります」
「ああ。頼む」
そして、鬼教官だけじゃない。
指揮官殿は言った。≪事が起きない限りはお上は動かん≫と。いや言外だから言っちゃいないんだが。
っつーのはまァ、事が起きりゃァ動いてくれるってわけだ。ちゃんとした魔法少女引き連れて、上官殿がな。
「ミサキ・縁殿、加勢いたします」
「コーネリアス・ローグン!?　また大物が……」
「いえ。自分はB級の木っ端者ですよ」
「貴女が木っ端となると、エデンの魔法少女の八割が塵芥になるのだが」

へぇ。

有名な人なんだ。

その後も、次々と知らない魔法少女たちが湧きポに張り付き、形成と同時に殺害を繰り返していく。

……クラスメイトしか知らなかったけど、やっぱいっぱいいるんだな、魔法少女。とーぜんではなるけどさ。

「それで、なんだ。試したい事というのは」

「あァさ、ちょいと湧きポを潰して見ようかって、魂胆でね」

「……何？」

手を差し出す。

話したんだからそのフリューリ草っつーのを寄越してください、と。

鬼教官は何やら難しい顔をしながら、亜空間ポケットを開いてそれをくれた。

もしゃり。

……うわー。魔煙草より不味いー。

「けど、とりあえず一発分は回復したか……うげぇ、苦いし不味いし、食う奴の気

が知れねえ」
「私は今そう思っているが」
誰がコレ魔煙草にしようとしたん？
もっと改良出来ないん？
っつー不平不満はおいといて、だ。
湧きポの一つ。
今まさに複数の魔法少女達が湧いては殺して、湧いては殺してを繰り返しているそこへ近づく。
「どうされましたか？」
「ローグン。魔物の殺害はそのままに、少しやりたいことをさせてやってくれ」
「了解いたしました、キリバチ上官」
何故、とか挟まないんだが。
なんかすげー軍人って感じするわ。
……んじゃあまぁ、お邪魔して、と。
「梓、大丈夫か？」

「あァよ。だがまァ、多分今からすることやったらぶっ倒れるから、支えてくれると助かる」
「そんな危険な事をするつもりなのか……」
「危険っつーか、魔力切れでな」
「成程」
先日、良い例があった。
鬼教官の妹。暴走繭。
特殊魔法っつー奴で、遠隔でも近接でもない、使用者と命を共にする魔法。それは、魔法を殺せば使用者も死ぬ、っつー代物だ。
それなんじゃね？　って。
自然発生じゃない、無理矢理な場所に無理矢理作り上げた湧きポ。下手人が魔法少女なのか化け物なのかっつーのはわからん。魔法少女だったら何故、って思うし、その場合殺したら……多分、俺は自分を許せなくなる、が、とりあえず今はやんないとどうしようもない。下手人が魔法少女じゃない事を祈って——俺はこの湧きポを。

――殺す。

「死ね」

声に出す必要はあんまりないんだけど。

ただ、それこそ暴走繭が言っていたように、拒絶の意思をふんだんに練り込んだ【壊糸】が本来以上の防御能力を発揮したように――思いは魔法に乗るんじゃないかな、って。

だから、殺意を込めて。

湧きポを――【即死】させる。

瞬間、俺の意識は真っ暗闇に落ちていった。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

詰め込まれる。

詰め込まれる。

クソ不味いものが、クソ苦いものが、口に詰め込まれているのを感じる。

「まァ待てよ、な？　ちょっと待てよ。起き抜けで状況把握してないんだがよ、なァ、その手に持ってるフリューリ草一旦置いてくれや、な？」

「そのような時間はない。今も防衛拠点で仲間が戦っている。だからお前には早く回復してもらう必要がある。本当は殺すべきだと思ったのだが、上官が許さないので、こうしてお前の口に魔力回復の薬草を詰め込んでいる最中だ早く口を開けろ」

知らない魔法少女が、すげー怖い顔で見てんの。

膝枕でさ、すげー怖い顔で俺の口にフリューリ草を詰め込んでくんの。

こえーって。あと不味いよマジで。

「っつか、そういうってことは」

「喋る暇があれば食え。状況は説明してやる。お前の魔法【即死】により魔物の湧き地点の一つは完全に死んだ。キリバチ上官は湧き地点の死を認め、之が効果的であるとした。故にお前は現時点において魔物の湧き地点を壊し得る唯一の魔法少女となった。なれば意識を失っている暇はない。食え。たんと食え。食って【即死】をあれら全てに発動しろ。何度意識を失えど、終わるまでは終わらせん。近くのポーション屋からフリューリ草を買い込んできている。お前の為だけにだ。さぁ食

え。わかったなら食え」
「はい」
食べる食べる食べる。
つかさ、魔煙草ってフリューリ草を魔煙草そのものの変換原理とかで起動して、その上澄みである魔力だけを吸うってモンなんだよ。フリューリ草そのものを食ってるわけじゃねぇんだよ。
だからさ、いやさ、そんな詰め込まれても。
ちゃんと魔力が回復している自分が悔しい。
「起きたか、ライラック」
「あ」
「いや喋らなくていい。食べろ。たんと食べろ。私が勝手にしゃべるから食べろ」
頷く。
うわーんあの部下にしてこの上官ありだよー。あァいや逆なのかもしれんが。
「大体の話はリヴィルから聞いたな？　あぁ、コイツの事だ」
頷く。

「お前は現状唯一の湧き地点を破壊できる魔法少女になった。その有用さは計り知れん。が、縁に話を聞いた限り、すべての湧き地点を潰せるわけではなさそうだな。お前の言う、故意に創られた湧き地点……それを特殊魔法よろしく殺したのだと」

そうだ。

もしゃもしゃ食いながら頷く。

だから、そんな期待されても困る。

「だが、それは仮説だろう」

「ム？」

「まだ試していない。もしかしたら、お前の【即死】は――全ての湧き地点に有効かもしれない、という事だ」

……いんやさ、それはそうなんだよね。

それは。

本当にそうだったら、俺は。マジの救世主になる、かもしれない。いや湧きポ固定されてない化け物も多いから救世主にはならねェんだけどさ。

「忙しくなるぞ、これが終わったら」

「うい」
「……よし、魔力も粗方回復したな！　早速だが」
「はい。殺します」
鬼教官の言う通り、七割方回復した魔力。
寝てる間にどんだけ詰め込まれたんだ。そんな効率良いモンじゃないぞ魔煙草って。
……それともフリューリ草そのものの方が効果高いのか？　フリューリ草の煎茶とか探してみるか？
「――死ね」
声に出して。
世界に告げて。
「――死ね」
呪いの言葉を。
ただその命尽きる事を願う――恐ろしい言葉を。
「死ね」

「死ね」
「死ね」
「死ね――」
何度も、何度も、言い続けた。
何度もぶっ倒れ、その度にクソ不味い草を食べさせられながら。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

それは唐突だった。
ドサ、ドサと。
何かが倒れて行く。何かが――死んでいく。
「なんだ……？」
「わかりませんの。けれど――好機、ですわ！」

自らの誇る、【神速】の突き。
それは確実に相手を捉える。動揺の隙を狙ってようやく当たった――直撃したその突きは、確かに相手の頭蓋を貫いた感触がした。
そして、それを貫いた瞬間。
「こ、れは」
「……成程。統率した魔物を透明にする能力、という事ですのね」
「こんなに、いたのか」
自身も勘違いしていた。
敵はSSS級に匹敵する透明なウルフ一匹だと。
だが、違ったらしい。
透明なウルフは一匹のウルフの能力によって隠されていただけで、他は……新種ではあるが、自ら透明になる能力を持っていないのだろう、命の尽きたウルフ。
……この死に方は、【即死】？
「……終わった、のか？」
「まだわかりませんの。遠征組の蘇生は」

「――申し訳ありません、遅れました！　遠征組突撃班ヴェネット隊以下五名、蘇生完了いたしました！」

丁度、来てくれたらしい。

自らと同じSS級魔法少女、ヴェネットさん。彼女の率いる遠征組の全員が、無事、失った魔力も傷もきれいさっぱり無くなった状態で復活した。

……自分でそんなことを考え、少し苦笑する。そんな当たり前のことを考えてしまうくらいには、梓さんの影響が大きいのかもしれませんね。

「報告を。お前達を襲ったのは透明なウルフ種で相違ないか？」

「いえ、違います」

「……では、なんだ」

簡潔な報告を求められているというのに、言い淀むヴェネットさん。

これは。

「私達を全滅させたのは――魔法少女です、ジュニラ指揮官。その魔法は恐らく、魔物を指揮する、あるいは洗脳する、といった類の」

「そうか。……それは、最悪の事態の一つだな」

「はい。ですが、対象も私達の反撃により少なくはない傷を負いました。これにより対象が撤退した事も確認済みです。その後私達は魔力切れにより魔物の餌となりましたが……とりあえずは問題ないと、そう言えるかと。件の魔法少女ですが、エデン所属ではないと、先ほどリストから確認も終了しています。完全に外部の魔法少女です。故に」

「少なくともエデン内部で蘇生する事は無い、か。だが、それでは」

「はい。脅威は残ったままです」

あまり梓さんには聞かせたくない情報ですわね、なんて独り言ちる。

今までは相手が魔物だったからよかったものの、敵が魔法少女だと知ったら……

あの方は。

「その魔法少女の特徴を出来る限り事細かに書き出しておけ。容姿もな」

「はい」

「そして、次に遭遇したら、殺すのではなく捕縛しろ。蘇生されては敵わん故、自死も封じた形で――封印処置を行う」

封印？

……知らない言葉ですのね。
「封印、ですか？」
あぁ、ヴェネットさんも知らなかったと。
「……ああ、知らないのか。魔法少女というのは死なん。それはわかるだろう」
「はい」
「だから、国に、一般市民に仇なす魔法少女用の懲罰手段が用意されている」
「それが封印、ですか」
「ああ。全身を拘束し、溶かした反魔鉱石によって全身を固める。昔は石化、などと揶揄する者もいたが、封印が正しい言葉だ」
……石化。
そういえばエデンの七不思議にありましたわね。どこかの監視塔の地下牢に、石となった魔法少女が多く保管されている、みたいなの。
もしかして、そういう事ですの？
「気を引き締めろ。監視は引き続き強化。防衛拠点も残したままにする。お前達は」
「私達は周辺域の魔物の掃討にかかります。恐らく今回の侵攻で、侵攻ルートを外

れた魔物もいると思うので」
「わかった。頼んだぞ」
「はい！」
元気、と言って良いのかわかりませんけれど。
仕事熱心ですわねぇ、ヴェネットさん。私は早く梓さんの元に行きたくて仕方がないですの。
「アールレイデ」
「はい」
「お前と私は、周辺域で死ぬ事も出来ずに致命傷を負ったままな魔法少女がいないかの確認だ。見つけ次第殺してやれ」
「……わかりましたの」
そういえば、そうだ。
あのウルフたちはそういう戦法を取っていた。なら、どこかに、瀕死のまま苦痛に喘いでいる仲間がいるかもしれない。
梓さんは、それも嫌うのでしょうけれど。

やっぱり私は――救いとして、捉えてしまう。……どこかに、互いが歩み寄れる点があればいいのですけれどね。

そんな事をまた独り言ちて――【神速】を使用した。

7. 藍初種藍句得度三糸有寒泥.

「おォ、安藤さん。悪ィね、急な注文で」
「何言ってんだい。ウチは元々閑古鳥が鳴く武器屋さ、アンタの支払いだけが命綱なんだよ。それで食ってんだ、無視なんかできるかって」
「あー、そりゃァまァ、そうだよな。武器使う魔法少女あんまいねェもんな」
「まったくさ！」
ここはＥＤＥＮ商業区。
……の、片隅も片隅。
エデンの下には国があって、そこでも当然の様に市場っつーんはあるんだが、如何せん魔法少女がソッチに降りて行くことは少ない。エデンにいた方が色々楽だしな。
んじゃどーやって菓子類やら欲しいもんやらを手に入れてるかっつーと、このＥＤＥＮ商業区と呼ばれる出張店舗群から購入してるってワケ。魔法少女に理解のあるというか、≫国を守れ！　盾になれ！　遊んでないで働け！≪みてーな事言いや

がる国民、じゃない方の一般市民。
俺達を少女として、あるいは人間として扱ってくれるお方々の出張店舗群が、ここになる。
ま、単純に儲かるから、ってのもあんだろけどね。俺達魔法少女は金払いめっちゃ良いから。
んで今日俺が来たのは『安藤武器工具店』っつーシンプルな名前の付けられた、店。出張店舗群の中心からはちょいと外れた場所にあって、つかここに関してはもう下には戻らずずっと上で続けてくれてる稀有な店。売りモンは店名の通り武器や工具で、魔石も扱う。
ま、なんでずっとエデンに居られるか、っつーのは、結構単純な話。
「もっとこう、派手に爆弾とか大砲とか撃ち込めばいいものを、アンタら魔法少女は長いチャージしてその隙を突かれたり、近接で戦って取り込まれたり……。文明の利器、ってモンを知らな過ぎる！」
「ははは、そりゃァ仕方ねェよ安藤さん。アンタの時代がどうだったかは知らねえが、今じゃ武器持ちは補助有つってな、あんま好かれねえんだ。単純な剣みてぇな

のだったら良いんだが、銃となるとな」
「そりゃアタシの時代でもそうだよ！　全く、本当に変わらないねぇ学園は」
安藤さんも、魔法少女なのだ。
正確には――エデンに出張している間に魔法少女として覚醒した、というべきか。故に魔法少女に理解があるし、学園での生活も経験済み。この店やってない時はちゃんと魔法少女としても戦ってる。なんならＳ級と、色々情報盛りだくさんな女将さん。あァ別にお宿ってワケじゃねェから女将でもなんでもないんだけど。
「で、どうかね。今回は多くなっちまったが」
「全部出来てるよ！　空の魔石砕いて入れた弾丸１０００発！」
「ありがてェ」
そう、俺のいつも使っている【即死】を込めた弾丸っつーんは、ここで購入している。まァ【即死】を込めるのは後からやる事で、この弾丸自体は魔石が詰まったモンでしかないんだが。
ちなみに拳銃とSRは普通に軍用の奴な。
「そいで、今回はまたなんか新しいモン作ってねェのか？」

「ふふん！　よく聞いてくれたね……あるよ！」
「おォ！」
安藤さんは発明家、というか、武器の改良も得意としている。
顧客が俺しかいねェから、最近はもっぱら銃弾の改良ばっかやってるらしいが、前は剣だの斧だのが斬撃と同時に爆発する、みてェなのも作ってたとか。なんだそりゃ、自滅するだろ、つったら、だから売れなかったんだよって返ってきた。
「コレさ」
「ソレか」
「コイツは炸裂弾！　対象へ着弾した後、周囲の魔物にもその破片が突き刺さるって代物さ！　撒き散らされる破片は当然魔石で、その範囲は5mくらいかね」
「……買いだな」
「あいよ！　とりあえず50は用意した。使いやすかったらまた発注しな、千だろうが万だろうが揃えてやるさ」
「助かる」
クラスター弾か。

俺の低すぎる殲滅力を補うに持って来いだな。ただ、味方への誤射が怖い。味方のいねェとこに、且つ化け物の集まってるトコに撃ち込む弾だ。

いいね、これは俺のパワーアップって奴だ。今回の件で痛感したことでもある。俺ァマジでピーキーだ。殺傷能力はSS、殲滅力はCどころかDを下回るかもしれねェ。身体強化用の魔力リソースが無いのは割ときちィ。仲間がいりゃあ色々となんとなんだが、一人になると真面目に死ぬ。

そういう場合に生きそうな弾だ。ありがてェや、流石安藤さん。

「そォだ安藤さん、魔煙草って知ってっか？」

「そりゃ知ってるが……なんだい、アンタ、そんなナリして煙草吸うのか」

「魔煙草は別に毒じゃねェからいいだろ。まァんな事聞きたいんじゃなくてよ、アレより魔力回復量のたけェもん知らねェかな、って。安藤さん色々知ってっから、ちょいとアテにしてんだ」

「魔力回復か。確かにアンタ、魔力少ないもんねえ」

「だから銃使ってんだろィ」

先日の一件。

フリューリ草を死ぬほど食わされたあの時、明らかに魔煙草より魔力回復量が多かった。量もあんだろうが、何かこう……純度が違う、っていうか。

「魔煙草の原材料がフリューリ草って花だってことは知っているのかい？」

「花？　花なのか。私が食ったのは草だったが」

「……アンタ、正気かい？　フリューリ草の葉は誰もが悶絶する程不味い事で有名だよ。だから煙草にして少しでも軽減を狙ってる」

「あァ知ってる知ってる。でもちょいと必要な工程でな、悶絶する程不味かったが、常に魔煙草吸ってるおかげか、ちったぁ耐性ついてたよ。……で、フリューリ草の花について教えてくれ。多分それが私の必要なものだ」

フリューリ草が魔力回復の役に立つ、って事は広く知られている、らしい。ポーション調合の勉強過程では習わなかった事だが、なんでも学校では教えてくれない、ポーション屋に就職すると教えられる知識、なんだとか。なんでそんなことになってるかっつーと、乱獲を防ぐためだの絶滅を危惧してだのと言われたが、単純に危ねェからだ。フリューリ草は国の外に生える。そんな、魔法少女相手に高く売れそうなモンを子供が習っちまったら……みてェな話なんだと。

じゃあポーション屋はいいのか、って事になるんだが、なんでも軍が採集したものを買い取ってるらしい。軍っつーのは魔法少女じゃなくて、魔法少女の素質に恵まれなかったこの国の兵隊さんの事な。

あの場で鬼教師がフリューリ草を亜空間ポケットにしまってたのも、そんな感じの理由。ポーションの調合材料になるから、常備している魔法少女も多いんだと。

……A級未満の魔法少女は、だが。

「フリューリ草は魔力回復の効果がある。それは魔物共も知ってる。だから昔は食われまくってたんだけど、いつしか進化して、フリューリ草は苦味や不味さを獲得した。結果魔物はフリューリ草を食べなくなって、奴らは絶滅の危機を免れた……ってのが、あの草が不味い理由なんだ」

「へェ、すげェな、自然の知恵っつー奴か」

「だけど、フリューリ草は一応増えなきゃいけない。植物として当然のように種をばら蒔いて、ってね」

「あァ。広がる必要があるとかはンなこたない、って学者に否定されるだろォけど、種の存続は大事だろォな」

「だから、フリューリ草は、枯れると花をその場に落とすようになった。面白い生態だと思うけどね、花弁が開いたまんまで、それが閉じるより先に茎や葉、根の方が枯れるんだ。落下したフリューリ草の花はそこからまた芽を出す。というのも、魔力回復を行う成分を花弁に全て集中させているから、枯れるのも魔力を失った花弁以外だし、成長の基盤となるのも魔力を豊富に含んだ花弁だし、って具合さね」

「ほーぉ……つーことは、その花」

「ああ。採集出来れば普通に草を食べるより高い回復効果が見込めるだろうね。問題は」

「んなの見つけんのは至難、って事ね」

おじさんそんなに草花に詳しく無いから偉そうなこと言えないんだけど、花弁ってな花粉を運んでくれる虫だのなんだのを誘引するもんだと思ってたよ。そうじゃないのもいるんだな。前世でもいたん……だろうなぁ。俺が不勉強だっただけで。

あーあ、折角そういうのに詳しそうなやつが近くにいたのに、なーんも聞かなかったな。アイツとは麻雀ばかりで……。

「見た目は真っ赤な花だ。本当に稀にだけど、地面に落ちている事がある。枯れた

直後、あるいは芽を出す前の花弁だね」
「見つけたら拾えって事ね。ちなみに味は」
「美味いと思うのかい？」
「ハハ、覚悟しておくよ」
「……ま、食べた事のある奴はいない。少なくとも私は聞いたことが無い。そんだけ稀少なんだ、外でくまなく探す、ってのは徒労に終わる可能性が高いよ」
「あァよ、見っけたら儲けモン、程度に考えとくよ。何にせよ、情報ありがとうな」
真っ赤な花弁、ね。
最悪の状況に陥ったら探してみよう。魔力切れ残弾切れ仲間もいないで逃げ回る、みたいな時に見つけたら最高だ。主人公になれるなソレは。
「普通のフリューリ草の茎や葉で良ければ、アタシのトコにも仕入れてやってもいいよ。それくらいのラインナップは増やせる」
「おォ、そりゃァ助かる。ついでといっちゃなんだが、それの煎茶も作ってみてくれねェか？」
「……死ぬほど不味い茶が出来上がる未来しか見えないねえ」

「味はいいんだ、別に。草をもしゃもしゃ食うより高い効果が見込めるなら、水筒にでも入れて持ち歩きたい」
「ま、わかったよ。その代わり今後ともご贔屓に、ってね」
「そりゃ勿論」
魔石の弾薬扱ってくれるトコなんかここしか知らねえし。
……つーか、ん？
「アンタさっき閑古鳥だから支払いが命綱とかって言ってたけど、給金は出てねェのか？　魔法少女としてもやってんだろ？」
「そんなもん全部実家に仕送りしてるさ。子供がいるんだ、魔法少女じゃない普通の子がね。その子らの養育費もそうだけど、寂しい思いさせてる分遊びの部分は不自由なくしてやりたいだろ？」
「やべェな、偉すぎて涙が出る。私もそうしようかな」
「何言ってんだい。アタシは親だからそうしてんだよ。別にアタシはここで武器作ってりゃそれでいいんだ。やりたいこともない。だがアンタは違うだろう。魔法少女になったのは13の時だったね？　それで、まだ数ヶ月……魔法少女歴も浅い。

アンタはまだ子供なんだよ。子供はちゃんと自分のために金を使いな。家族を想うのは、大人になってからでいい」

「つっても成長しねェだろ、魔法少女は」

「元の年齢に魔法少女歴足して成人越えたら大人だよ！」

至極当たり前のことを言われた。

そりゃそうだ。

……だけど実はおじさん、前世含めると50超えてるんですよ。子供じゃないんですよ。

「そも、魔法少女の家族は待遇もよくなるはずだ。……仕送りなんて考えんじゃないよ、親の気持ち考えてからモノ言いな」

「あァ、そうするよ。確かにあんだけ泣いて送り出してくれた両親だ、私が金なんて送ってきたら、顔真っ赤にして怒って送り返してきそうだ。なんならエデンに乗り込んでくる可能性もある」

「よくわかってんじゃないかい。そうだよ、とんだクソ親でもない限り、親ってのは子に幸せであってほしいんだ。……アンタは自分が子供っぽくない、みたいな自

覚があるみたいだけどね、アンタがアンタの両親の子である事は間違いないのさ。だから」
「あァよ。せめてもの恩返しに、ちゃんと子供をするさ」
「……引っかかる言い方だけど、聞かないことにしとくよ」
「助かる」
安藤さんは空気を読んでくれるからホント助かる。
気の良い肝っ玉母さん、って感じなんだけど、前世含めた歳が近いからか、クラブのママさんと話してる気分になんだよな。
「んじゃ、１０００発確かに。炸裂弾もありがたく。金は後で振り込んでおく」
「ああ。……そうだ、梓。一つ聞きたい事があったんだ」
「ん？」
久しぶりに名前呼ばれたな、とか思いながら。
振り返る。
「ルルゥ・ガル、って魔法少女、知らないかい？」
「あァ、すまん。私ァ自分のクラスメイト以外にゃとんと疎くてな」

「そうかい。ま、知らないなら良いんだ」
「見つけたら安藤さんが呼んでた、って伝えときゃいいか？」
「いや、それもいいよ。すまないね、気になって眠れなくなりそうなことを聞いちまった」
「んなこたねェけど、気にはしておくよ。せめてもの礼だ。じゃァな、安藤さん」
「また来な！」
知らねえ知らねえ。
魔法少女の名前、マジで知らねェ。もっと交友関係広めねェとなァ。おじさんになると交友関係ってあんまり広がらないんだよな。同じ会社の奴か、営業関係とかでちみっと増える事はあっても、出会いの場、っつーんは行かねえし。
……いや友達が少ないとかではなく。
「ソイツ見つけたら、友達になろう、って……なんだ、少女らしく強引に行くのもアリかね」
なんて。
少女らしくない事を言いながら、俺ァパルリ・ミラを探しに行った。

まだ見つけてないんだよな、その店。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「Ｂ級への昇級おめでとうですわ！」
「ああ、めでたいな」
「おめでとう」
「おめでたいです！」
称賛の声に。
「あーァ、いや、ありがてェんだけど……いやありがとうな、お前ら」
なんとも言えない表情になってしまう自分がいた。

事の発端は、っつーか先日の件が功績として認められたっつー話だ。
いち早く国内に発生した化け物に対処した……って方じゃなく、化け物の湧き地

点を完全に破壊した、っつー方な。化け物の対処は魔法少女が当然としてやるべき事だ。褒められることじゃねぇんだと。

まだ自然生成の湧きポにまで有効かどうかはわかっていないものの、その有用性から遠征に連れて行くためにC級からB級へ昇級した。D級、C級は遠征に連れていかれないんだよ。足手まといだから。

だから、戦力的にはC級だけど、実用込みでBにしといてやるよ、っつー措置。素直に喜べるモンじゃねぇし、何より俺ァ昇級自体したくなかったよ。仕事ふえっから。

「でも、寂しくもありますわ」

「ン？」

「だって梓さん、もう少ししたら遠征に行ってしまわれるのでしょう？　私は遠征向きの魔法少女じゃないので呼ばれる事はありませんし、その間に……遠征組の魔法少女に梓さんを奪われてしまったらと思うと気が気でなく……」

「奪われるも何も、私ァお嬢のモンじゃないがね」

「はぅっ!?」

「梓。それはフェリカを振った、という事でいいのか？」
「あー。そういうワケじゃ、っつか告られてるワケ……でもあるか。んー」
おじさんは清いお付き合いをしたいんですよ。友達として。
純朴な女の子達の好き好きイチャイチャにはついていけねぇってーか、でもなァ、今の言い方は確かにマズったな。フったフラれたはデリケートな話題だ、それで友人関係に亀裂が入るのは……あー、でもなァ。
「すまない、余計なコトを言った。フェリカ、お前も必要以上に傷付いたような反応を見せるな。梓が困っている」
「必要以上じゃないですけれど、けれど、けれど……！　梓さん！　あくまでこれは、私が貴女を好いているという話であって、答えて欲しいとか、あわよくばキスをしたいとか、いつか私の家に招待したいとか、そういう事ではないですの！」
「どう聞いても、そういうこと」
「読心術を使うまでもないですね」
わかってる。すげー好意向けてくれてんのはわかってんだ。
わかってるけど……。

でも、まだ無理そう、というか。

この――死が文字通り隣り合わせの世界で、そういう理念の元にある子と付き合う、っていうのは。

……鈍る。おじさん弱いからよ、あんまり……大切過ぎるモン作りたくねェんだ。ひでェ事言ってる自覚はあんだがな。

俺の手は広くない。もし、もしも、家族より大切なモンが出来ちまったら。

俺ァ国防じゃなく、ソイツを取る可能性がある。……それは、多分、ダメなんだろう。今でさえダメなのに、そうなっちまったら俺は。

「おい、フェリカ。どうするんだ、梓が押し黙る程悩んでしまったぞ」

「責任転嫁が凄いですわミサキさん。今のは貴女も悪いと思いますのよ……!?」

「なんにせよ、二人に朗報がある」

「あ、そうでしたね。良いお知らせがあります！」

「なんだ？」

「なんですの？」

あー、ダメダメ。悩むな悩むな。

俺ァ自分一人で悩んだって解決しないタイプだ。明日の事は明日の俺に任せよう。今は今の俺がやり遂げるからよ。

気持ち切り替え気持ち切り替え。

「すまんな、お嬢様。私ァ」

「今回の遠征！　私達はついていけるそうです！」

「開いていた枠、もぎとった」

「えええええ――!!　ずるいですのー!!」

「待て、流石に【神鳴】より私の方が遠征向きじゃないか？」

「もう決まった事」

「遠隔魔法少女は有用なので空き枠に入りやすいのです！」

……なんか言い出す雰囲気じゃねェな。

背中メッシュと太腿忍者がふんぞり返って……あァ、遠征の話か。そうそう、こいつら付いてくる事になったんだよな。

太腿忍者の【光線】は汎用性の高い魔法だし、そもそも忍者っつーのが結構有用だ。サバイバルに長けてる。背中メッシュの【神鳴】は固定された湧きポを叩くの

にうってつけ。湧きポの周囲にゃ化け物がわんさかいるからな、そこにバチバチドーンよ。

「梓さん！」

「お、おゥ。なんだお嬢」

「……私の方が、貴女の事を想っていますわ！」

「おいその話蒸し返すのか」

「諦めが、悪い」

「あー。ま、すまんが保留にさせてくれ。自分でも優柔不断だとは思うけどさ、ちょいと……私にも譲れないモンってのがある。私も決してお嬢の事嫌いじゃねェからよ。ポニテスリットも背中メッシュも太腿忍者も大事な仲間だ。友達だ。他の知らねえ奴より遥かに好きだ。だから、っつかだけど、か。少しばかり待ってくれ。私ァ……まだ、魔法少女として未熟過ぎて、お前らに並び立てる所にいねェからさ」

おじさんはおじさんだからさ。

もし本当にお付き合い、って事になるとしたら、色々ちゃんと考えたいしさ。

……いやおじさんがこんな小さな子達と付き合うのはやべーんだけど。魔法少女

歴どんくらいなんだろなこの子ら。
「すまん。梓」
「ん？」
「私はお前を見くびっていたらしい。それを謝った」
「お、おう。いいよ、許すよ」
「感謝する」
いつになく……ってことでもねェけど、ポニテスリットがめちゃくちゃ真剣な目でンなこと言ってくるもんだから、驚いちまった。
なんだ、いい目、っつーのかね、覚悟の決まった目をしてる、って感じ。若いね、青春だね。
「つか、そろそろミーティングの時間だな。お嬢、ポニスリ。悪いが」
「私も!!　私も……私も、」
「そりゃダメだお嬢様。流石に付いてくるのは無理だって」
「そ、そういう事ではなく！」
「梓、行こう。遅いと、怒られそう」

「では梓さんの事は私が運びますね」
「いやいいよいいよ、園内だろ。流石にそんな走力はいらねぇって」
いやァ、青春だねェ。
おじさんは蚊帳の外でありたかったよ。ちょいと、眩しすぎる。
なんだって俺なんざに……なんてとこまで卑下するつもりはないが、そんな好かれるような事したかねェ、俺ァ。
罪作りなおじさんだよホント。あ女の子だった。
……ジッサイ、どうなんだろな。お嬢たちが、俺の中身は50超えたオジサンです、って知ったら。
愛想尽かすんじゃねェかな。はは、怖い怖い。
お嬢とポニテスリットを後に、教室を出る。廊下を行く。
ミーティングルームは別塔だからな。遠征準備室もソッチにある。各塔それぞれに役割があるんだわさ。
「梓」
「なんだ背中メッシュ」

「遠征は、少しだけ……梓も楽が出来る、かもしれない」
「ん、そりゃァどういう」
「遠征は目標達成以外での死が許されないからですね！」
「……ははァ、なるほど」
そうか。
死んじまったらエデンからの蘇生になる。それは一人欠ける事に外ならないし、ソイツが追いつくまで待ってるってのも難しい。ソイツ一人で追いつくのも難しいかもしれねェ。
だから、死や怪我はちゃんと忌避されるってことか。
……目標達成のため、以外では、って冠がつくが。
「死なんでくれよ、二人とも。私ァ一人じゃ弱いぞ、物凄く」
「知ってる」
「知ってます！」
「ちったァ否定しろよい」
なんて軽口を叩きながら。

俺達は、ミーティングルームへ向かった。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「来たか」
「ん、鬼教官。なんだ、今回の班長はアンタなんですかい？」
「いいや、私は作戦説明役だ」
「あらそぅ」
ミーティングルームには、五人がいた。
鬼教官と四人の魔法少女。確か遠征は俺含めて八人だったはずだから、あと一人いねぇな。まさか俺が一番最後じゃないとは。
とりあえず空いてる席に座る。上座とかあんのかね。知らんなぁ軍隊のそういう事。でも咎められないから良いだろ別に。
背中メッシュと太腿忍者に挟まれる形での着席。なんだいね、なんか守られてる

気がする。
「君が梓・ライラックか」
「ン？」
席に就いたら、いきなり目の前から声がかかった。
なんつーの。宝の塚みてェなかっけェ声。ハスキーでちょいとボーイッシュな感じの。
「あー。すんませんね、不勉強で。どちらさんで？」
「ヴェネット、という。魔法【凍融】を扱う魔法少女だ。等級はSS、此度の遠征組の班長となる。よろしく頼むよ」
「んじゃま、改めて。【即死】を使う梓・ライラックっつーもんスわ。等級はB。お飾りスけどね」
「はは、そんな無理矢理畏まったような口調にならずともいい。私は上下関係などに気を割かない性質でね、普通にしてくれ」
「あァよ」
「……対応が早いな君は」

さてあだ名は……まァ班長でいいか。呼びやすいし。
その隣にいる他三人は話す気はねェのかね。遠征組だ、仲良くしといた方がいいんじゃ……って、何期待してんだ俺ァ。自分からやれよ、そういうことは。
「お三方も、名前教えてもらってもいいかい？」
「……」
「……」
「……あるるらら」
「あんがとよ、右端のお嬢さん」
他二人は仲良くする気無いらしい。
まァそうだよな。ぽっと出の、魔法だけを買われた魔法少女だ。前にも述べたが、A級未満の魔法少女ってな内申点だのなんだので頑張ってない奴を指す。まァ殲滅力も殺傷能力もない魔法であるが故にD級に区分される奴もいるんだが、C級ってのは大体頑張って無い奴だ。
そんなのに話しかけられて、名前を言えっつーのはまァ、気ィ悪いよな。だってこいつら全員A級以上だろ、多分。頑張った奴だ。頑張ってエリートだろう班長の

班に入って遠征してるっつーのに、頑張ってない奴に掻きまわされるのは嫌だろ。
「えーと？　あるるらサンは、もしや西方出身で？」
「！　わかるの？」
「あァ、まァちょいと勉強したことがあってな。西方……今は亡きもう一つの国。ん、あァ、すまんデリカシーの無い事言った。謝る」
「いい。もう50年は前の事」
こんな幼い少女の見た目をしておいて。
そんな幼い少女の喋り方をしておいて。
魔法少女歴は50年以上前か。わかんないもんだねェ。
この、エデンの下にある国。
今や世界で唯一の国だ。なんでって、他は滅んだから。昔はあったんだ。化け物に対抗できるのは魔法少女だけ、ってこたないからな。魔法少女が最も効率よく殺せるってだけで、銃が効く奴はいるし、毒やら罠やらが効く奴も多い。
だから、その国ごとの軍隊があって、化け物に対抗してたんだが……ま、それが破られたら終わり。

そうやって滅んでった国は数知れず。この国はそっからの難民が集まってる場所でもある。だからこんなに名前にバリエーションがあんだよな。

「魔法は【透過】。等級はA。よろしくね、ライラックさん」

「おゥ、よろしくなキラキラツインテ」

「……？　それ、私のあだ名？」

「あァよ。私ァちょいと事情あって、あんまり他人を名前で呼びたかねェんだ。嫌なら変えるが、どうかいね」

「別に良いよ。むしろちょっと嬉しい。あだ名とか、つけてもらったことないから」

「そりゃァ重畳」

なんだいね、この子はすげェ話しやすいじゃないか。良い子っぽそうだし。

ま、不和は連携の崩壊を生むって知ってんだろね。魔法少女歴がなげぇからさ。

「梓。不満がある」

「私もです」

「なんだ」

「嫌なら、変えると言った。背中メッシュ、嫌」

「私も太腿忍者はやめてほしいです！」
「お前らはもう呼び慣れたからダメだ」
ぶーぶー文句を言う二人をあやす。
嫌ならもっと早くに……いや言ってたわ。呼び始めた当初から言ってたわ。けどもう定着しちゃったからごめんな。
「梓」
「なんですかぃ班長」
「私には、無いのかな。その……あだ名は」
「エ？　班長は班長でいいんじゃ？」
「そう、か……」
何、欲しいの？
欲しいなら考えるけど。
「いや、それより。こっちの二人は人見知りでね、悪い奴じゃないんだ。奥のがザイフォン・英。こっちがカネミツ。二人ともA級だ。よろしく頼むよ」
「あァ、了解スわ。ちなみにもう一人は？」

「……た、多分もうすぐ来る。来るはずだ。来なかったら叩き起こしに行くから、安心してほしい」
「来ると良いね、ルナちゃん」
ルナちゃん、というのか。
キラキラツインテが、にっこりと……「そうはならないと知っているけどそうなるといいですね」みたいな顔で、班長に言う。班長も頬を引きつらせている。
……これは、遅刻常習者か。俺と同じだァね。
「時間だ。自己紹介は終わったようで何より」
「あ、シェーリース。等級は、S。魔法は、【神鳴】」
「ユノンと申します！　等級はAで、魔法は【光線】です！　よろしくお願いいたします！」
「……終わったようで何よりだ。ルナ・ウィーマーンは」
「申し訳ございません。多分、まだ夢の中かと……」
「そうか。まぁいい。アレ抜きでもミーティングは問題ないだろう」
「はい……本当に申し訳ございません。次は強く言って聞かせますので」

「言って聞いた試しないけどね」

苦労してるんだなァ班長。キラキラツインテも。

つか、ミーティングが要らないってどういう事だ。アレか。ミーティング中も寝ちまうような奴なのか。

「遠征組突撃班。今回は監視塔より観測された魔物の群れ……海洋に面した廃墟群に群生していると思われる魔物の掃討が目的となる。及び調査、でもあるな。そこに魔物の湧き地点は無かったはずだが、密集の仕方が湧き地点と同等だ。故にこれを掃討、監視し、湧き地点となっているかどうかの確認。そして――それが壊せるかどうかの確認をする。その際、梓・ライラックの護衛及び補助は全力でやれ。魔物側も自らの形成地点が壊されるとなれば、全力の反撃をしてくるやもしれん。気を引き締めてかかれ」

成程。いやなるほどっつか。

ちょいと疑問ではあったんだ。なんで演習場とかにある、つまり近場の湧きポで試さねェんだろう、って。

今回のこの掃討作戦が丁度都合が良いから、ってことね。突然現れた湧きポ。自

然発生のもんか故意のもんかわからんから【即死】の有効性についてのソースにはならんが、着いていかせて壊せりゃ御の字だ。それが終わってから、それこそあのアシッドスライムの湧きポとかで試しゃあいい。

……ってことで、あってるかね。ちょいと……疑問も残るが。

「あァ鬼教官。発言は？」

「構わん。なんだ」

「その廃墟群が滅んだ理由を知りたいんスわ。そこには無かったはずの湧きポが出来て、今密集してる、ってんなら、その前は湧きポなんかなくて、でも滅んでた。なんで滅んだんスか」

「魔物の湧き地点は海中にも存在する。それが原因だ」

「成程。んじゃ、自然発生のを試すなら、ソッチでもありスかね」

「いいや。そこは海中である上に、S級の魔物が生まれる地点でもある。近づくには向かん。やるとしても一個中隊は必要だろう」

「なーる。了解スわ。続きがあるなら続けてくだせェ」

つまり、最悪その海中の湧きポからもS級魔物が上がってくるかもしれねェっ

てことね。ただでさえ海洋には高ランクの化け物がいるんだ、気を付けるに越したことは無い。

なんだろね。クラーケンとかかね。いんやさ、この世界の化け物触手とかスライムとか多すぎなんだわ。魔法少女つったら確かに……ああいや、余計なコトは考えんとこ。

「続きは無い。作戦説明は以上だ」

「キリバチ上官。私からも良いでしょうか？」

「ああ。構わん」

「その廃墟群は、破壊しても問題ないと……そう捉えてよろしいのでしょうか」

「許可は出ている。更地にして構わん」

「ありがとうございます」

こえー質問する。

けど、両隣の二人も明るい顔をしている辺り、破壊していいってのは楽なんだろうな。【神鳴】とか建物気にしてたら撃てねえし。

「私からもいい？　キリバチ」

「なんだあるるらら。お前が質問とは珍しい」
「たとえ効率を無視したとしても――班員に譲れないものがあったら、そっちの手段を取っても良い？」
「……曖昧だな。どうした？」
「ううん。ちょっとお気に入りが増えただけ」
「ふむ。まぁそこは班内で相談しろ。最高効率を取れ、とは言わん。遠征故、出来得る限り損害の少ない形で収めろ」
「りょうかい」
仲いいのかな、って思った。
というかもしかしたらこのキラキラツインテが最年長まである。見た目９歳くらいの子なのに。俺より年下っぽいのに。
「もうないな？　よろしい、では作戦を開始しろ。出立時にはルナ・ウィーマーンを引っ張り出して連れていけ」
「あァ忘れてた。そいつァどんな方なんで？」
「Ｓ級の魔法少女だ。魔法は【氷壊】。一日の八割を眠りに使うような奴だが、殲

滅力は十分だ」

「さいで」

いいなァ、それ許されるの。

……いや許されてるワケじゃねェのか。だからこれから引っ張り出されるワケだし。

っつーところで、んじゃ、まァ。

初めての遠征任務。頑張りましょうかね。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《／ｔｅｘｔ》

登場人物

遠征組

名前　【魔法】　等級

ヴェネット　【凍融】　SS

ルナ・ウィーマーン　【氷壊】　S
あるるらら　【透過】　A
ザイフォン・英　【吸呑】　A
カネミツ　【飛斬】　A

その他

名前　【魔法】　等級
ジュニラ(指揮官)　【自爆】　S
キリバチ(鬼教官)　【痛烈】　A　S
エミリー(暴走繭)　【壊糸】　S
安藤さん　【業焔】　S
コーネリアス・ローグン　【侵食】　B
コーネリアス・リヴィル　【劇毒】　B

三、遠征編

8・有鈍戸羽生登内・鈍戸能死・

遠征組突撃班、というのは、書いて文字通り遠征組の中でも化け物の群れに突撃していく班を指す。他にも調査班や観測班ってのがいて、そういうトコに配属される魔法少女ってな基本固定。何故って知識が物いうから。あと、俺にとっちゃ気分の良くねェ話なんだが、固定メンバーで誰か一人が欠けてもいいよーに訓練積んで、遠征先で一人死んで情報を持ち帰る、みたいなこともしてるんだと。

死んでも死なねえ、蘇生可能な魔法少女って奴ァ、瞬間移動だの長距離通話だのが無ェこの世界唯一のメール便なワケだ。

「あまりサバイバル技術などは使われないのですね……」

「まァ食事は嗜好品だからなァ」

「忍者らしいところをお見せできるかと思ったのですが」

「っつーとなんだ、太腿忍者は遠征初めてなのか？」
「そうです。だからちょっと新鮮です！」
魔法少女は魔法少女になった時点で成長が止まる。
だからまァ、食事だのなんだのってのは本来必要無い。味覚だのなんだのは生きてるし、美味ェもんを美味いと感じる心は生きてっからパフェだのケーキだのジュースだのを飲むんだがな。んじゃ体内に入ったものがどう排泄されるかっつーのはまァ乙女の秘密だ。おじさんの秘密だ。
あとはまァ、フリューリ草よろしくポーションの類は普通に飲んだりかけたりするから、胃やら内臓やらが死んでるワケじゃねェのもヒントの一つかね。
よーは遠征において魔力回復以外の休息はいらねェっつー話だ。
「本当に魔力少ないんだね」
「すんませんね、こればっかりはお飾りB級の見せ所って奴でさ」
「問題はないさ。今回の任務は【即死】が魔物の湧き地点に有効かどうか、の検証も含まれている。そも、新しく出来た形成地点が人工的なものなのか、自然由来のものなのか、という調査も兼ねてね。故に現地に到着して魔物を掃討し、けれど君

が魔力切れでは話にならない。上官殿も全力で補佐しろ、と言っていたように、私達は君の事をお姫様が如く扱わせてもらうよ」

「ヒメサマにしちゃ口が悪いが、ありがたく頼らせてもらわァ」

「……」

全速力ってワケでないにしろ、結構なスピードでの行軍。俺ァいつも通り姫抱きで、だけど抱いてる奴がポニテスリットじゃなくて班長だ。SS級魔法少女。座った状態で宝の塚みてェな容姿と評したが、立ったら立ったですげェ頭身。身長もたけェし、声もかっけェし。年頃の娘なら一発でコロっといっちまいそうな魔法少女だ。

おじさんもなんか新鮮だよ。今までがそうじゃなかったとは言わないが、本当にオヒメサマみてェに扱われてる。さっきから時たま発生する戦闘にも参加させてもらえねェ。これでいいのかね、なんて思ってると、すぐに班長が「不安にさせてしまったかな？」とか「それでいいんだ。君の任務に戦闘は含まれていないからね」とか……めちゃくちゃ気遣ってくれる。

いんやさ、これ絶対ホの字だわ。

……さっきから俺にすげー目線向けてきてる、自己紹介してくんなかった二人が。

「二時の方向、鳥系の魔物」

「チャージ開始します！」

背中メッシュと太腿忍者はいつも通りだ。目の良い背中メッシュが索敵して、消費魔力少ねェのにすんげェ距離まで届く【光線】を使える太腿忍者がコッチに寄って来そうなのを殺す。なんでもザイフォン・英サンの魔法は【吸呑】つって、指定した地点に化け物を吸い込む、みてェな魔法なんで移動中にはあんま使わねェんだと。

もう一人のカネミツサンは【飛斬】っつー一応遠隔の括りながら近接に対応できる魔法を使うんだが、さっきから報告も無しに一人で刈り取ってる。そういう役割なンだろうな。

キラキラツインテは完全な近接だからいいとして、班長も俺運んでるからいいとして。

もう一人。

「班長、ありゃ本当に大丈夫なんですかね」

「まあ慣れていないと驚くのは無理のない事だけど、大丈夫。彼女はあれでいてS級だからね」
「いやァ強さの話じゃなくて」
「わかっているさ。ぶつかってしまわないのか、落ちてしまわないのか、という心配だろう？」
そう。
もう一人の、遅刻どころかミーティングに来なかったヒト。
名をルナ・ウィーマーン。【氷壊】の使い手にしてS級魔法少女。一日の八割を眠っているとかいうやべー人。俺も結構ねてるけど。
そして今。
「むむむ……忍者としては見習わなければならないスキルです……！」
「寝ながら、正確に木々を踏んでる」
ルナ・ウィーマーンサンは、寝ていた。寝てるんだ。完全に寝てる。
けど、身体は動いてる。俺達っつか班長達と同じ速度で、森の上を、木々のテッペンをぴょんぴょん飛び跳ねながら移動してる。遠隔魔法少女なのに身体強化し

て、寝たまま動いて……いやすげぇっつかこえーのよ。

ちなみに飛行魔法は使ってない。亜空間ポケットや身体強化と同じ括り……つまり各魔法少女固有の魔法でなく、余剰魔力オンリーで使えるこれら魔法は、その便利さと引き換えにそれなりの魔力を食う。近接であれば身体強化に回す魔力の効率化も図れるらしいんだけど、彼女は遠隔だ。だから多分、よっぽど魔力が多いって話だろうな。

ちなみに俺ァ当然の如く魔力の効率化なんて出来ない。【即死】が結構な魔力消費のする魔法である以上出来た方が良いんだろうが、余剰魔力なんざ出ねぇんで仕方ないと思う。

「よし、みんな！　あそこの湖の近くで一旦休憩にしよう。各自魔力回復に努めてくれ！」

「了解」

返事をしたのは背中メッシュだけ。

太腿忍者は忍者スキルを活かせると思ってか、その湖とやらにぶっ飛んでった。

多分返事はしたんだろうが聞こえなかった、の方が正しいか。

しかし、いるのかね。ヒトの住める環境づくりとか。多分いらねェと思うんだけど。

「いつもはこうではないよ、梓」

「あァ、わかってるんで、気にしてねェよ。思春期って奴だろう？」

「ははは、私達魔法少女に思春期とは面白い。けれど、確かにそうかもしれない。私達は――多感な時期で停められた子も多い。それ故、自省しているつもりでも少しばかり漏れてしまう、という事がある。でも、悪い子達ではないんだ。だから」

「保護者は大変だねェ。ま、大丈夫さ。私ァこう見えて結構スレててね。そういうのにも理解がある。っつーか自分で移動できない私が悪ィんだしな、こればっかりは」

「スレてるって……君、数か月前に魔法少女になったばかりじゃなかったかい？」

「それはそォだけど、あァ魔法少女歴ってことかい？　そりゃまだ短いがね」

「いや、だから、13歳だろう？　……国の中学校はそんなにも荒れているのかい？」

あー。

そう捉えるか。いんやさ別に、あそこは普通の中学校だったし、なんなら良い子ばっかだったけど……なんつーかな。なんて言い訳をするか。

いや言い訳とかいいか、別に。

「これァ生来のモンさ。人を見る眼はあるつもりだぜ、班長」

「なるほどね。ちなみにだけど、君の目に私はどう映っているのかな」

「苦労人で仕事人だが、少しばかり仕事中毒な部分が大きいな。部下に休めって言われると休んでるよって返すタイプだ。んで、上官に休み与えられたらどうしていいかわかんなくて部下の悩みとか聞いたり他の魔法少女の相談に乗ったりして、結局休んでないって事になる。裏を返せば何かをしてないと不安になる奴、だな」

「大正解」

「あ、ちょっとあるるら、勝手なことを言わないでくれ！」

まァ典型的なワーカーホリックだ。いたよ、そういう人。ウチの会社にも。目の下にでっけェ隈作って明らかに体調悪ィのに休まねェの。休んでくださいって言われても「まだ仕事がある」の一点張りで、無理矢理休み作らせても翌日に企画案とかまとめてきやがる。休めっつってんのが聞こえねェのかと思って無理矢理に飲

みに誘って話聞けば、何もしてねェと自分が求められてねェみてーで怖いんだそうだ。自分に自信が無ェから、少しでも成果を上げねェと、って強迫観念に襲われちまってる。

己の実力は関係ない。この班長もアイツも、ちゃんとした成果を残してるし、ちゃんとした実力を持ってる。けどそればっかりは申し訳ないが変えられない、性格だから、とかいって……あァ、懐かしい話だな。

ま、そういう奴に限ってマジでぶっ倒れたとしても慕ってる部下がいる。支えてくれる奴がいるんだよ。気付けてねェだけでな。

……なんて、俺とおんなじくらいのおじさんの話を班長に当てはめたんだが、キラキラツインテから大正解を貰ったので良しとしよう。経験は豊富だよおじさん。43歳だからね……。決して若くはないけど、御所って程じゃない歳で死んじゃったねおじさんね……。

「キラキラツインテと班長は長ェのか？」

「ああ、同期だよ。あるるらの国が亡くなってしまった時からだから、50年程だね」

「そりゃァ長ェや。そっからずっと遠征組で？」
「まさか！　私達もちゃんと君達のような学園生活を送ったよ。そもそもその頃には遠征組というのが無かった……というよりは、そこまで明確に振り分けが為されていなかった、が正しいかな。こうして組織化が図られたのは近年の話なんだ」
「ヘェ、そりゃ知らなんだ。っつても、キラキラツインテと班長は卒園後もずっと一緒だったワケか。こうして一緒に遠征組になれるくらいには」
「いや、それは」
「ヴェネットが一人じゃ不安だからと私を呼んだんだよ。知らない人ばかりの環境でやっていくには難しいとね」
「ほーォ、そりゃ可愛らしい事で」
「あるるら、お願いだからあまり私の威厳を損なう事を言わないでくれ……」
「威厳なんて最初から無いと思うよ」
いんやさ、やっぱり少女だねェ。いや男女差別をするつもりはねェんだけどさ。かっけェ人だと思ってたけど、可愛らしいとこもある、っつー話な。新しい事始める時に知己がいねェのは男女関係なく不安だろうよ。単純にギャップが可愛らし

いっつー……まァ、おじさん心だわな。

……女の子に可愛らしいって表現使う時におじさんおじさん言ってるとなんか変態みたいで嫌になってくるなァ。

てな所で、ようやくその湖っつーのが見えてきた。

いやマジで言われた時見えなかったんだよな。どこの話してんだって思ってたよ。

「到着だ。っと……これは、椅子？　それにテーブル……」

「はい！　用意しておきました!!」

「凄いな、これは。自然由来のものか。でも君、A級だろう？　亜空間ポケットを使う事は出来るんじゃないのかい？」

「……実はそれを言われると弱いです！　なんなら簡易キャンプセットも亜空間ポケット内にありますので！」

「太腿忍者、無理だって。魔法少女の遠征に忍者スキルいらねェって」

「うぅ……」

はりきったんだろうなァってのは伝わる。

でも亜空間ポケットが便利過ぎていらねェ。これが全員B級以下の魔法少女だってんなら重宝したかもしれねェが、太腿忍者自体がA級だしな……。

ま、俺ァありがたく座らせてもらうが。いいねェ、ツーリングキャンプとかしてた時代を思い出すよおじさん。

「優しいね、君は」

「ン？」

「いや、なんでもない。ちなみにどうかな、魔力は」

「そりゃ勿論、万全さ。なんせ完全に運んでもらったからな、振動もほとんど伝わってこねェ上質な乗り物だったよ」

「梓、ミサキは？」

「ポニテスリットは実ァ結構揺れる」

「今度、言っとく」

「……冗談だからな？」

いやマジで冗談だからな？

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

各自の魔力回復も恙なく終わり、さぁ出立しよう、といったところで、彼女が「チョイといいですかね」なんて言ってきた。

「どうしたのかな」

「あァさ、杞憂ならいいんですがね」

そう言って――彼女は、軍用の拳銃を背後の茂みに向ける。

向けて、発砲した。渇いた音が響く。

銃弾は茂みを揺らし――何？

「各自、散開！」

空へ飛ぶ。身体強化による跳躍ではなく飛行魔法で。

彼女、梓も勿論連れてきている。日も暮れてきた頃合いだけど、はっきりと見えた。

舌を出して、「やってしまったかな」みたいな顔をしている彼女が。いやはや、本当に顔に出やすい子だ。フェリカさんが可愛い可愛いというのも頷ける。

「簡潔に説明をくれるかな、梓」

「なんか、言葉には表し難いんだがよ、殺意みてェなのを感じたんだ。囲まれてるっつーか、狙われてる？　まるでウルフが餌を前に唸り声をあげてる、みてェなさ。そんで、一際やばそうなのが背後にいる感じがしたから、撃ってみたらアラまァ。本当にいて無駄な刺激しちまったみてェでやべーって顔してんだわ今」

「うん、それは伝わったよ」

今のはわざと顔に出していたのか。引っかけられたな。

「ザイフォン！」

「はい」

遠征が始まってからようやく声を出したザイフォンが、その手に【吸呑】を発生させる。

遠隔魔法少女の中でも特殊寄りな彼女の魔法は、地面に投下、設置することで効果を発揮する。

「投下します」

ザイフォンの【吸呑】が、地面に着弾した瞬間。

透明な何かが激しい音を立てて、【吸呑】へと吸い込まれ始めたのを観測できた。

いる。何かがいる。
「こいつァ」
「ああ。先日の侵攻時にいた新種のウルフだ。周囲のウルフを透明にする統率者たる一体と、それに従って獲物に傷をつける複数体で構成されている。が、そこまでの跳躍力は無いから、空に逃げてしまえばさほど問題にはならない」
「はン、てーと……背中メッシュ」
「了解……といいたいけど、今回の班長は梓じゃない」
「あァ、そうだったわ。班長、背中メッシュに【神鳴】を使わせても良いかね？」
「構わないけれど、どうして【神鳴】の選択なのか教えてくれるかい？」
「ん……まァ今安全だからいいけど、あんまそういうの効かねェよ。んで、理由か。暗いからだな。光ったら怯むだろ。上手く行けば影も見える。影が見えりゃ数も見える。単純に【神鳴】は威力が高い。理由なんざそのくらいだ」
なるほど。
キリバチさんやフェリカさんから色々聞いてはいたけれど、随分と瞬時に頭を回す。仲間の魔法の特性を把握しているからこそ、だろうね。私やルナを頼らなかっ

たのは魔法を知らないからでもあるのだろうけど、単純に最も適しているのが【神鳴】であると考え付いたから、でもあるか。

うん。いいね。

お飾りのB級なんて言っていたけれど、普通に遠征組に入れても問題はなさそうだ。今回の任務は魔力を使わせるわけにはいかないから無理だけど、他の戦場でなら肩を並べるのも面白そうだね。

「チャージ完了」

「ああ、頼む！」

「了解」

シェーリースさん。

寡黙気味な子だけど、その魔法は結構有名だ。遠くからでも目立つからね。

彼女の【神鳴】――文字通り、神鳴りし怒槌を落とす魔法。S級の名に恥じぬ殲滅力を誇るその魔法が――落ちる。

「見えました！　数は十と一！　その他周囲に魔物の影は見えません！」

「急激な周囲の風景変化には追いつけねェっつーことは、光学迷彩の類か。カメレ

オンだな。なら透明ってワケじゃねェし、身体が透けるってワケでもねェ。となると、森で戦うのは不利だな。もっと開けたトコ……あァいや、班長、どうするね？」

「いや、いいよ。そのまま思考を続けてくれ。私達は突撃班でね、考えるより先に潰す方が得意なんだ」

「あァそうかい」

自分が弱い分、分析力に長けているのだろうね。

……けど、少しばかり知識に欠けがある。有利位置に誘い込むのはいい判断だろう。だけどね、こっちにもそれなりの鬱憤というものがある。

「――前回、魔力の切れた私達を散々に食い散らかしてくれたお礼だよ」

魔法を発動する。

十と一。大丈夫、私も見えていたよ。黒い、突然の光に目を焼かれたウルフたちの影。

それらをしっかりと視認した。【神鳴】によるダメージも入っているのだろう。もう、丸見えだ。

だから――【凍融】を起こす。

「……な、ン」

「SS級魔法少女ヴェネット。私の扱う魔法は【凍融】といってね。温度変化なしに対象を凍らせたり融かしたり出来る。どうかな、お姫様。君を守る騎士として、少しは認めてくれたかい？」

「少し所じゃァねェが」

「それは良かった」

折角ブレインが来てくれたんだ。

今回の遠征は久方ぶりに、何も考えずに暴れられそうで嬉しいよ。

……けど、少しばかり杞憂もあるかな。

例の件……あの魔法少女。アレが使役していたウルフ種がこちらにもいた、となると……今回の遠征先は。

「あ、あんまり遺骸を見ない方がいいよ。刺激的だからね」

「そうさせてもらわァ。こえーこえー魔法だことで」

「怖くない魔法があるのかい？」

「……そりゃ、ごもっともだ。なんなら私の方がこえーわ」
「はは、そうだね」
怖くない魔法は無い。
……といいたいけど、あるるらの魔法とかは、そんなに怖くないかな。使い方が怖いだけで。
「それじゃ、改めて出発しよう。みんな、大丈夫かい？」
「問題ない」
「了解です！」
「はい」
お。少なくともザイフォンは心を開いてくれたかな？
カネミツは……もう少しかかりそうだけど、大丈夫だろう。二人とも、悪い子じゃないからね。
悪いのは――あの魔法少女だけだから。
次に会ったら、確実に。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

行軍は徹夜で行われた。
まァ睡眠とか必要無いしな。魔力回復には役立つらしいんだが、脳を休める必要はないんだと。だからルナ・ウィーマーンサンが眠りこけてんのは趣味だろうな。寝るのが趣味って奴。
おじさんは寝るのが習慣づいちゃってるからちゃんと寝ないとなんか気持ち悪いんで寝てる。あとサボる時に早く時間すぎねぇかなって眠る。
「梓、昨夜の湖でのことだけど」
「ン」
「その、殺意のようなもの、だったか。それを感じたらすぐに報告してくれ。それでちゃんと、昨日コトがあったわけだからね」
「あァさ。ま、外れたらすまんとしか言いようがないんだが」
「何、なにもないならそれでいいのさ。杞憂はするに越したことは無いよ」
「そォかい。なんとも過ごしやすい職場な事で」
時間の無駄だ、とか言わねェでちゃんと対処してくれるってんだ、そんなありが

てェ事は無い。

お飾りＢ級でも少しァ役に立つと思われたのかね。……魔法や実力じゃなくて勘が、ってーのがなんとも悲しい事実だが。

さて、俺の肉眼でも見えてきた目的地。

海洋に面した廃墟群。……の、はずなンだが。

「題して触腕の森だね」

「群生しているというよりはひしめき合っている、といった方がいいかな」

「正直、気持ち悪い」

「うねうねしてます！」

廃墟なんて見当たらねェ、キラキラツインテの言う通り、そこには白と赤の触腕で溢れたナニカがあった。立ち昇る触腕……互いに絡み合い、押しあい退けあい、ひしめき合ってのうねうねり。触手じゃなくて触腕なのは、ソイツに吸盤がついてるからだ。

イカかタコか、クラーケンか。とかくそういう類の化け物がいるってワケさ。だが。

「本体が見えねェな」
「うん。触腕ばかりが大きくて本体が限りなく小さい種、という事も考えられるけれど」
「んな低い可能性の方より、普通に地中や海中にいるって考えた方が建設的だろうよ」
さァて、どうすっかねコレは。
とりあえず近くの丘に降り立って、眺める。攻略法っつーワケじゃねェが、どう切り崩したもんかと。
背中メッシュか太腿忍者か班長か。ブラックホールはあんま意味無さそうだし、カネミツサンの【飛斬】とか適してそうなンだが……どうかね。あ、ザイフォン・英サンに付けたあだ名がブラックホールな。この世界宇宙技術とか天文学とかそんなに進んでないみたいだから良いだろ。
「あるるらら、頼んだよ」
「了解」
なんてツラツラ悩んでたら、班長が指示を出していた。

いや指示っつか。
突撃命令、っつか。
「お、」
「何、無駄死にをさせようというわけではないよ。あるるらは特殊魔法寄りの近接魔法少女なんだ。まぁ見ていて」
「……あァよ」
言い方にちょいと引っかかりを覚えたが、素直に従う。
キラキラツインテが向かう。触腕の森。その根元に。
そしてそのまま……入っていった。
「んん？」
「彼女の魔法は【透過】といってね。建造物だろうと魔物だろうと、素通りする事が出来るんだ。件のウルフのように透明になれる、というわけではないのだけどね」
「そいつァ、こえー魔法だな」
「おや、怖いと思うのかい？」
「思うさ。どんな外皮の硬い化け物でも貫けるって事だろ？」

「その通りだよ。参ったな、私の班では最も怖くない魔法だ、なんて嘯いてみたかったのだけど、君は騙せそうにないね」

「ハナから騙そうとしねーでくれると助かるんだが」

昨日の【神鳴】の時といい、ちょくちょく俺を試そうとしてくるの、ヒヤっとするからやめてくんねェかな。なんだろ、見定められてる？　アレか、本当にB級に足り得るかどうか、みたいな？　これ終わって自然の湧きポ壊せなかったら降級すんのかね俺ァ。いやそれは全く以て問題ないんだが。

……にしても、ちょいとおかしいな。

遅い。

「あァ班長、【凍融】のチャージはどんくらいかかるんで？」

「10秒もあれば昨日の威力は出せるよ」

「んじゃ今すぐ撃ってくれ。アレに向かって」

「まぁまぁ、あるるらがすぐに帰ってくるから、それを待って」

「んじゃ私が撃たせてもらいますわ」

背負っていたSRを取り出して、ほとんど覗かずに撃つ。

炸裂弾じゃなく、普通の【即死】が込められた弾。
それは触腕の一本を、いやさ二本、三本とを貫き、即死させた。
べろん、とめくれる触腕。
その中心に。
「な――あるるらら!?」
「良かった、死んでなかったか。班長、【凍融】は除外設定できるんで？」
「ああ、今すぐあるるらら以外を融かす！」
「いんやさ、凍らせた方がいい。太腿忍者はチャージ開始、背中メッシュは一旦待機だ。チャージもしなくていい」
「了解です！」
「……わかった」
キラキラツインテはベテランもベテランって感じだった。そんな奴がかけていい時間じゃねェし、そもそも本体見つからなかったら単身地中に潜ってくより戻ってくる方を選ぶと思うンだよな。突撃班つったって何も考え無しの集団じゃねェのはわかってる。

ってことを考えた上で、そうしねェってことは、それができねェってことだ。
具体的には今――数多の触腕に捕まって、身体を締め付けられている、みてェな感じで。
「【凍融】！　だが、これでは」
「太腿、キラキラツインテを締め付けてるのだけ【光線】で切ってくれ。斬り終わったら班長、それを融かしてくれていい。他二人はキラキラツインテの救助に走ってくれると助かるんだが、いいか？」
「……いいだろう」
「班長、指示を」
「頼むよ、ザイフォン、カネミツ。今彼女を失うわけにはいかないんだ」
「承知」
意外にも、直で返事してくれたのはブラックホールじゃなくてカネミツサンだった。
この人もかっけェ声してんなァ。
「あァお二人さん。出来るだけ凍ってる触腕は傷つけずに行ってくれ。どうしても

無理なら気にしなくていい。こっちで援護はする」
「承知した」
「……」
今はまだ何も反応を起こしていない触腕。【凍融】の効果で凍ってるっつーことなんだろうが……。
チラっとルナ・ウィーマーンサンを見る。寝てんなァ。大丈夫かありゃ。
「班長、新しい触腕が生えてきたらすぐに凍らせてくれ」
「わかった。地面だね」
「いんやさ、廃墟のどっかだ。今しがた私の殺した触腕がいるあたりから、新しいのが生える可能性が高い」
「理由を聞いても？」
「多分だが、本体なんざいねェっつー話だよ。裏付けはキラキラツインテを救出してからだが、アレは触腕のみの化け物だ。だから探しても探しても本体なんざ見つからねェ」
「成程。けれど、それではあるるらが捕まった理由にはならない。どうして彼女

は【透過】を解除されてしまったんだと思う？」
「それも多分だが――」
来た。
ぐじゅるっ、と嫌な水音を立てて――キラキラツインテと、今救出に向かった二人に新たな触腕が殺到する。……も、それは到達せずに凍り付いた。
流石だ。
「大丈夫、監視は怠っていないよ。多分で構わない。君の意見を聞かせてくれ、梓」
「あァさ。恐らくは、どっかに反魔鉱石があるんじゃねェかと思ってる。置き忘れか罠の類かはわからねェが、目の前に来なけりゃわからねェくらい小せェ反魔鉱石があの触腕の中にあンだよ。キラキラツインテはそれにぶつかっちまって、捕まった」
「そう思う理由は？」
「キラキラツインテが捕まる理由がそれしか考えられないってのと、私が良く使う手段だからだ」
湿地帯でやった時みたいに、【即死】の銃弾ばら蒔いてな。

地中潜る系や水ン中泳ぐ系の化け物には効果覿面なんだ。小さくて見えねえから。

「融かすのではなく、凍らせたのは何故かな」

「増えそうだな、と思ったからさ。私が撃ったのは仕方ねェにしても、アレ全部殺してアレ全部が倍々になったら厄介だ。キラキラツインテが押しつぶされちまう」

「……ここまで、全部〝多分〟や〝思った〟、だね。君はそれだけで――真実を見抜いたわけだ」

「なにもないならそれでいい。なにかあったらじゃ遅い。違うか、班長」

「その通りだ。私も少し気が抜けていたらしい。カッコつけようとしすぎたね」

「あァよ、そういうのはエデンでやってくれ。ここは生死別たれる戦場、って奴なんだろ？」

ま、死んでも構わねェっつー理念の魔法少女なら、そんな気の引き締めはしてくれねェかもしれねぇが。

……いや、んなこたないか。みんな真剣にやってる。今は情報を、国じゃ国民を守るために必死で戦ってんだ。なぁなぁの奴がいるかよ。

「ヴェネットさん！　あるるらさんの救助成功したみたいです！」
「っとに目がいいな太腿忍者！　よォし、救出組がこっちに来るまで全力で援護だ！　こうなりゃどんだけ壊しても良い！　殺しても良い！」
「私はまだ凍結でいくよ。三人に追い縋る触腕を止める」
「あァよ。背中メッシュ、太腿忍者、あとねぼすけ！　チャージ開始しとけ！　こっからはちゃんと殲滅任務だ！」
「了解」
「チャージ完了してます！」
お飾りB級が場ァ仕切っちゃってすまねェが、人命最優先が求められる現場ってんなら俺もフルスロットルで行かせてもらう。
通常弾薬も、あれだけの密集地帯なら炸裂弾も使えそうだしな。
「ふぁあ……ん。んー。ね、そこの子。ねぼすけ、って、わたしの事？」
「なんだ聞こえてたのか。起き抜けで悪いが最大火力チャージしてくれ。アレ、ぶっ壊すからよ」
「りょーかーい」

圧。

――を、感じる程の魔力が集中していくのを感じる。オイオイ、他人の集める魔力を感じ取れるって、相当だぞ。

「最大火力は不味い指示だったかもしれないね、梓」

「あー範囲どんくらいで？」

「大丈夫、三人が巻き込まれないよう私が攻撃の合図をするよ」

「んじゃそればっかりは頼まァ」

S級ってまさか……内申点低いから、とかじゃないよな。

ねぼすけ、ルナ・ウィーマーン。その魔力は、明らかに――。

「やれ、ルナ！」

「りょーかーい！」

心なしか張り切った声で。

ソレは。

その魔力は。

――視界一面を、氷山に変えてしまったのだった。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

9・鼻腔図湯阿週根巣伊豆湯上止連虞須・

正直自分でも引いてる部分がある。

勘が当たりすぎる。班長にはカッコつけたが、どうにもおかしい。なんつーのかな、俺だったらそーする、を的確にやられてる感じ？

キラキラツインテを無事救助した二人と、目標地点を完全な氷山にしちまったねぼすけ。多分反魔鉱石があるからこの氷山はすぐ崩れると思うんだけど、そっからどうするかって話だよな。

「こわしていーい？」

「ああ」

ん。

ねぼすけの問いは――うわ、そういう魔法なのか。

班長の返事の直後、視界いっぱいの氷山は砕け散り、キラキラと綺麗な氷片を降らせながら、そこを更地にした。更地だ。廃墟群も触腕の森も、周囲の木々も――全てが凍り、砕け散った。

文字通り【氷壊】。凍らせて壊すまでが一つなのね。そしてゴリっと減ったねぼすけの魔力。ひねもす寝てんのはやっぱ膨大な魔力使うからか？

「梓、次はどうなると思う？」

「……普通に考えたら再度触腕が湧く。が」

そもそも、化け物としてどーなんだ、って感じはあるよな。触腕オンリーって。キラキラツインテを捕えたまではいいが、あれじゃ殺すだけだ。食えねェから糧にならねェ。化け物だって生物だ、食えなきゃ死ぬ。ふつーに餓死する。食うモンが人間と違うって点はあれど、そこは同じだ。触腕だけじゃ移動もままならねェはずだし、実際あそこまで密集してたあたりアイツラもどうしようもなくて困ってた、って感じなんだろう。

つってーと、アレはやっぱり人工的な湧きポと考えるのが普通だよな。まるで海中や地中にタコだのイカだののがいる、って見せかけるための。わざわざ反魔鉱石が置いてあったのも、置き忘れなんて言葉を口にァしたが、罠の線が高いと思ってる。

嫌だねェ。

敵が人間……あるいは魔法少女の可能性もあるってワケだ。
「キラキラツインテは意識失ったままかい？」
「ああ、どうやら強く頭部を打たれたらしい。気付けのポーションはあるから、出来るだけ早く起こすけれど」
「ま、相手さんとしても情報取られたまんまなワケだ。このまま何もしてこねェわけがねェ」
「相手さん？」
「ん……まァ、比喩だよ。これも多分の奴だ」
キラキラツインテに内部事情を聞きたい所だが、まァ無理にってわけでもない。こっちには遠隔がわんさかいるんだ、何か起きたらすぐ魔法を撃ち込んで――。
「って、考えてるワケだ」
「何を」
「とすると」
前回のコトを考えてみる。
狼の湧きポを小学校の運動場につくる、なんてのがもし化け物じゃなく魔法少女

の考えだったとした場合、ソイツァかなり安直な考えをしてる。人間を殺すには何がいいか。肉食で素早くて、群れで行動する生き物！　ってな具合にな。獅子だの虎だのは群れねェから、軍に倒される可能性もあった。銃が当たらねェくらい小さくて速くて、且つ殺傷能力のたけェ狼を選んだ……とすると。

あそこに触腕置いて、あんだけ目立たせて、中探らせて捕える罠――までが囮。遠隔魔法少女をアッチに向けさせて、監視させて、となれば狙うのがどこか、なんつーのは。

「背中メッシュ、チャージ頼む。太腿忍者、あの触腕の森と私達を結んだ後方直線状に【光線】だ」

「了解です！」

「わかった」

「ねぼすけも今度は小規模で良い、チャージを頼む。班長は引き続き湧きポの監視、ブラックホールと尖り前髪はキラキラツインテの護衛」

「はーい」

「梓、出来ればどうしてそう思ったのかまで教えて欲しいのだけど……ああ、監視

は続行するとも。簡潔で良いから、頼む」
「……指示は了解したが、呼称の変更を要請する」
「もしやブラックホールというのは私か？」
いいだろ尖ってんだから前髪。Mの字って奴？　サムライガールと迷ったんだが、そもそも魔法少女ガールしかいねェから他に刀使うヤツ現れたら被るなって思ったんだよ。
「チャージ完了しました。撃ちます！」
「頼む」
太腿忍者の指先から、一条の【光線】が放たれる。
何も無い丘陵――なだらかな丘の広がる、一見平和そうな場所。
そこに、【光線】がぶち当たる。
「！　何かいます！」
「背中メッシュ！」
「ん――最大チャージじゃないけど、撃つ」
「おう！」

太腿忍者の【光線】が途絶えた先。ありゃ凄まじい距離まで届く魔法だ。だから、あんな手前で途切れるなんてありえない。あり得ないし――景色、いや空間？わからんが、なんかが歪んでるのは見える。

だからそこに、背中メッシュの【神鳴】を落としてもらった。

「直撃した、けど」

「依然姿は見えずです！」

「ねぼすけ、いけるか？」

「あーい」

そこに何かがいて、結構でかい、ってのがわかりゃァいい。

班長の魔法は鬼教官の【痛烈】と同じく対象が見えなきゃ発動できねェみたいだからな、何も見えねェもんに対してはねぼすけの方が向いてる。

俺は俺で、SRを構えてる。スコープは覗いてない。覗いてたら多分【神鳴】で目ェ焼かれてるしこれからできる氷の反射でも目ェ焼かれる。

「新しいのが湧いた！　凍らせるよ！」

「頼んだ。ねぼすけ、どうだ？」

「んー、ま、いっか。えいや～」

一瞬発動を躊躇う素振りを見せたねぼすけだったが、何かに妥協したのだろう、【氷壊】を発動してくれた。

そして形成されるは――これまたでけぇ氷山。小規模でいいっつったんだがな。

これでも、なのか。

「ッ、中に何かいるぞ！」

「あァよ、わかってる。尖り前髪とブラックホールはキラキラツインテ引っ張ってそっちの稜線切れ。班長もソッチだ。多分、そろそろ湧きが激化する。対処できなくなったら言ってくれ」

「大丈夫、まだ魔力は十二分さ」

「そりゃァ良かった。背中メッシュと太腿忍者はこの氷山見といてくれ。あー、ねぼすけ。これ、壊さないでおけるのか？」

「いーけどー、ねむくなるー」

「維持は魔力食うのか。半分切ったら砕いてくれていい。それまで維持で頼む」

「りょーかーい」

ここでようやく2-4倍の登場だ。尖り前髪の言っていた中にいるナニカ――ソイツを見る。

……眩しいな。朝日め。

「あ、やばいかもー」

「どうしたねぼすけ」

「うちがわから、けずられてるー」

「んじゃ即砕いてくれ！」

「あーい」

完全に凍った身でも動けるってか。化け物め、どんな生物だそりゃァ。

……いや、熱系の魔法少女が溶かしたって可能性もあるな。化け物従える、湧きポ作る、だけじゃなく、そういう魔法も使えんのか？　ずるくね？　一人一個までだぞ魔法って。

氷山に罅が入る。さっき見た、砕ける光景――とは、ちょっと違う！

「全員下がれッ！」

「！」

稜線に上げていた三人に指示を出して――俺は、【即死】を発動。ねぼすけもねぼすけだがＳ級らしく、その即座の指示に対応してくれた。

対応できなかったのはただ一人。

まァ俺なんだが。自分で指示しといてなんだけど、そんな早く動くとかおじさん無理よ。

「う――ぐ、ぅ」

「梓!?」

まァ無理だった。無理だってわかったから【即死】使ったんだ。

１００㎏避けれねェ攻撃ってことは、１００㎏【即死】が入る攻撃でもある。

っかァ、いったいね。腹ァ思い切りぶん殴られた。俺の身体に触れた瞬間死んだからいいものを、そのままだったら地平の彼方までぶっ飛ばされてたんじゃないか？

……つか、やべー。何がって、魔力消費が。

クソでけェもん【即死】させちまったらしい。【即死】を防御に使うって手段は前々から考えちゃいたが、相手のデカさわかってねェ状態でやるのはこういうデメ

リットがあんのな……。

「で、っけぇ、透明なタコ、だ！　陸上移動……頭に誰か乗ってた！」

「透明……まさか、あのウルフが近くにいるのか!?」

「可能性はある、っぷ、あー、クソ。久しぶりに腹なんざ殴られたな……まァ、タコは殺したからよ、一旦空中に逃げて」

「梓さん!?　どこに――まさか、もう噛みつかれて!?」

「ウルフ種は、まずい」

「みんな空中へ！」

……あ？

なんだ、声が聞こえてねェ。すぐ近くにいるのに、みんな――飛んでいっちまった。

これァ、必死で呼びかけるってのは愚策、だな？

「く……梓を失ったのなら、どちらにせよ任務は失敗だ。相手が魔法少女、という可能性もある。一旦帰投する選択肢も有りだろう」

「まだ、梓は生きているかも」

「……可能性は低いだろう。生きていたとしても致命傷を負っている可能性が高い。あの新種のウルフは、そういう攻撃をしてくる」
「どーするー？　しぬー？」
――待て。
え、どういう事だ。遠征組ってな、情報持ち帰る場合はちゃんと生きて戻ってくるんじゃなかったのか？
待てよ。何してんだ班長。
「それが最善だろうね。ここから全速力でエデンに帰るより、死んで還った方が早い」
「了解です！」
「仕方が、ない」
「……異論はない」
「おっけー」
何言ってんだみんな。
おい。待て。何してんだ。

背中メッシュも太腿忍者も……なんで、そんな軽く。
「大丈夫、頭から融かすよ。痛みはほとんどない」
「班長は、どうする？」
「私は適当に溺れるか首を斬るさ」
「ならこれを使ってください！　私の家系で自決用に使われてきた苦無です！　持ち手の方向に刃が反っているので、思い切りやれば苦しみなく死ねます！」
「ありがとう、助かるよ」
待て。おい。
何やってんだよ。なんでそんな。
「再度の作戦立案はあちらに帰ってから念入りにする。梓の蘇生も待たなければならないしね」
「それでは」
「ああ――【凍融】」
融ける。みんなが――どろりと、融ける。一瞬で。
なんでだよ。

なんでそんな――まるで、便利なツールみたいに。
死を、扱うんだ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

見殺しにした。
……そうさ。俺ァ、我が身可愛さに見殺しにしたんだ。みんなを。
どうせ聞こえねェのはわかってたし、叫べば叫ぶ程――敵に俺の位置を知らせる事になるってわかってたから、呼びかけなかった。
俺一人が生きるために。死なないために。
みんなが死ぬのを、見ていた。
「……」
なんて悔恨は後だ。

今はこの状況をどう乗り切るかっつーのが先だ。

多分だけど、俺は今透明にされてる。

あんだけでけェタコが後ろにいたってのに、足音の一つ聞こえなかった。草むら掻き分ける音さえなかった。ってことは、透明にするだけじゃなく、完全に気配っつーのを消す魔法だ。【隠蔽】とかそんな辺りだろう。D級もイイトコな魔法だが、暗殺には持って来いだ。

あの時、途中まで俺の声は聞こえていた。けど途中から聞こえなくなった。ってことは、ホントに近くに敵がいて――俺が中心になってるって気付いた、とかそんな辺りだろう。ずっと叫んで指示してたからな、指揮官潰せば陣は瓦解するってな、猿でもわかる。いや猿はわかんねェか。まァいい。

しかし、厄介な魔法だな。

そういう魔法だって知らなきゃ一瞬で持ってかれたって考えんのも当然だ。確か一体の統率者たるウルフが他のウルフを透明にしている、みてェな話だったが、どォだろうな。湧きポの作成、化け物の統率、透明化。

俺にァ全部魔法少女の魔法にしか思えねェ。あるいは魔法を使う化け物って線も

あるが……。

「……」

息を潜める。

俺にかけられた仮称【隠蔽】がいつ切れるかわかんねェ以上、敵に俺の位置を気取らせないに越したことは無い。こんな森の中くんだりで【隠蔽】されてねェ狼をわんさか放ってるくらいだ、俺が死んでない事も知られてる。

殺す気はないのか？　それとも何かを待っている？

どちらにせよ、自分の意思で魔法の解除が出来ねェのは未熟の証拠だ。そォいうのはちゃんと学園で教えるからな。学園に通ってねェ魔法少女と見た。はン、不勉強な己を呪え。

……いやまァ、俺が圧倒的に不利ってのもなんにも変わんねェんだけどさ。

魔煙草は吸ってない。ありゃ匂いが多少出る。それまで【隠蔽】してくれんのかわからねェから吸うのが怖い。フリューリ草はちょいと食ったんで、狼一匹を【即死】させるだけの魔力は有る。

あるいは、安藤さんに教えてもらった赤い花を見つけられりゃ御の字って所か。

魔法少女の蘇生にかかる時間は約15分〜30分。個人差があるのがまずおかしぃんだが、まァそんくらいかかる。だからみんな蘇生はもう終わってるはずだ。んで、俺が死んでないって事にも気付いてるはず。だから俺ァここで、昨日の行軍と同じくらいの時間を待てばいいはずだ。援軍が来てくれる、と。そう信じてる。

……怖いのは、結局あの班長達も魔法少女の理念に基づいて行動してる、って事だな。

つまり、何故死なねェのかと。俺が死なないのは何か理由があるんじゃないかと、変に勘繰ってる場合がちょいとやべェ。班長達目線、俺は敵に捕まってるか、そもそも帰る気がないのかの二択くらいになる。生き返るんだ、死んでも損は無いって奴だ。当然の様に俺もそうだと思ってる可能性は十二分にある。

前者なら、ちゃんと作戦を練って、大量の戦力引き連れて来てくれるだろう。俺の奪還を目指してくれる、と信じたい。俺ァ一応今重要人物で、湧きポを唯一壊せる魔法少女だからな。ちゃんと救出してくれると願ってる。

後者は考えたくもねェ。純朴で善人の多い魔法少女達だ、そんな裏切りみてェな事は考えないと思いたい。

……一番キツいのは、どっちでもねェ――話聞いた金髪お嬢様やポニテスリット辺りが命令無視して助けに来る、ってパターンだな。俺個人としてァ嬉しい限りだが、完璧な軍法会議モンだ。二人の降級も有り得る。

俺のために、っつってな。一番クるんだ、それが。

といっても、後ろ二つを避けるには、俺がここを無傷で抜け出して、エデンまで走って帰る必要があるってのがまたネック。

行軍の速度は凄まじいの一言だった。それでたった一日の徹夜で辿り着けた場所だ。その距離を俺が走ったらどうなるか、っつー。道中には普通に化け物もいるし、魔力も万全じゃない。RPGよろしく補給できる村でもあったらよかったんだがな、村どころか国まで全部滅んでると来た。

万事休す、ってヤツ？

「ああもう！　どこにいんのよ!!　こんだけ探していないって何!?　かくれんぼ名人!?」

……驚いて声出さなくてホント良かった。

結構な距離だ。結構な――至近距離から、その苛立ちの声は聞こえた。キンキン

する声。大分幼いな。同い年か、それよりも少し下か。
スコープで覗くまでもない。そこに、ソイツはいた。
黒い髪の……短髪の少女。ハロウィンで仮装する魔女、みたいな恰好で、これまたコスプレ魔女みてェな星付きのステッキを持ってる。
その周囲には——いるわいるわの狼の群れ。
森にいる種と同じだ。つまるところ、アイツは敵で——恐らくは、首魁。
化け物共を操って俺達を攻撃してきた奴。仮称【隠蔽】の使い手。あるいは湧きポの作成者。もしくは化け物を操る魔法の所有者。
……もし全部だったらやべェが、まァ多分どれか一つだろォな。
「あー！　そろそろお風呂入りたい！　この辺潮風うっとおしいから嫌ーい！」
そいつァ同感だ。ベタベタして敵わねェ。こういうとこ、車停めといたらフロントガラス真白になるんだろォな。
「もうやめちゃおっかな、面倒だし。あんなの一匹逃がしたってどっかで野垂れ死ぬでしょ。ちょー弱そうだったし！」
正解だ。俺ァ超弱いぜ。

死ぬほど弱い。お飾りＢ級だ、本来Ｃ級のおじさん舐めんな。
「……ちぇ。撃ってこないか。こんだけ騒げば狙ってくると思ったんだけどなー」
おぉさ。それ狙ってると思ってた。そもそも声の聞こえてくる場所が違ェ。ありゃ人形か分身か、また別の魔法だろう。魔法のバーゲンセールかよ。ずりぃな、ほんと。
でも――見えてるぜ。
アンタの頭。隠れてる本体がどこにいるのかもばっちりと見えてる。
「【即死】、絶対使いやすいと思うのになぁ」
引き金に指をかける。
通常弾。【即死】が込められた弾丸。ソレを――ヒトに向ける。
「もーいーよ、みんな。帰ろっか。あ、あっちのバチバチ石誰か回収しといて～」
撃てる。
今なら撃てる。別に頭じゃなくてもいい。身体に当たれば【即死】は発動する。
時間足んなくて安藤さんに貰った弾全部に【即死】を込められたワケじゃないが、それなりのストックはある。外しても、四発はリロードできる。

撃てる。撃てるんだ。
今なら殺せる。指揮官をやれば陣は瓦解するってな、犬でもわかる話だ。狼か。
だからやれよ。
撃てよ。
殺せよ――アイツを、殺せ。
「ッ……！」
「てっしゅうてっしゅー！　あ、乗せてって～」
撃てるんだ。
愛用のスコープに、完全に収まってる。
魔法少女だ、死んでも蘇るって原理は同じだろう。だからここで――俺の安全のために、一旦殺すだけ。出来るだろう。今までだって化け物は何匹も殺してきただろう。仲間だって――殺しただろう。さっきも見殺しにした。散々殺してきたんだ。
アイツは明確な敵。わかってる。そんなこたわかってんだよ。
――帰ろうとしてんのが嘘だって事さえわかってんだ。そういう作戦で、俺を安

心させようって魂胆だって。
だから撃て。唯一勝ってる情報……俺がアイツの位置を知ってるって事を活かすために。
撃て！

「はぁ。今日から君のあだ名、かくれんぼ名人ね」

その声は。
背後から聞こえた。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

10・糸伊豆阿派青磁負不伏零矢堕千経度戸地内途・

国家防衛機構・浮遊母艦ＥＤＥＮには、五つの監視塔が存在する。
その中の一つ、指令塔。学園塔の隣にあるソレに、慌ただしく人が出入りしていくのが散見できた。
「指令塔が何やら慌ただしい。遠征組に何かあったのかもしれない」
「何事ですの？」
「……何があったら、こんなに慌ただしくなると思いますの？」
「わからん。調査先で何か進展があったか……だとすれば、誰か死んで、情報を持ち帰ってきたという可能性はあるな」
「それが指令室をこうさせる要因、と？」
「余程の緊急事態、だろう。すぐにでも多数の魔法少女を動かさなければならないような」
たとえば、前回のように魔物が徒党を組んでこちらに向かってきている、とか。
たとえば、国に対して何か攻撃が行われている、とか。

遠征組が持ち帰った情報が何かはわからない以上はなんとも言えないが、非常事態であるのは間違いない。

となれば、SS級には招集がかかるだろう。

「フェリカ」

「ええ、ちょっと行ってきますの」

「いや、私も行く。死んで還ってきたのが梓という可能性もある。正直に言って、一番弱いからな。だが……」

「そういえば梓さんは、まだ死んでないと言っていましたわ！」

「そうだ。初めての死と蘇生なら、動揺も激しいかもしれない。フェリカ、お前は指令塔に。私は中央塔へ」

「私も中央塔へ行きますの！！！」

「……そうだな。二人で梓を慰めに行こう」

中央塔。監視塔に囲まれる、エデンの中心部。

そこに魔法少女たちが蘇生される部屋がある。

私達はそこへ向かって。

塔を出た時には、走り出していた。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

結論から言えば、撃たなくて正解だった。

撃てなかった。撃てなかったんだ。ホントは。敵だってわかってたし、蘇るって知ってたのに、撃てなかった。撃たなくて良かったけれど、撃てなかったのは事実なんだ。

そしてまだ、その脅威は去っていない。心臓はバクバク言ってる。悔恨に浸る暇なんか与えてくれない。アイツはまだ、この森にいる。

「みんな、絶対見つけてね。それがゆくゆくは、私達のためになるんだから」

冷静な声だ。さっきまでのうるせぇのとは違う。キンキンさせてたのもブラフか。

さっきまで俺が狙ってたのも、最初からデコイになってる方も未だ健在。やっぱりこれも魔法か。

どうなってるんだ、っつー疑問はまァ、自己解決している。

さっき言ってた。【即死】は役に立つ、って。

……つまりまァ、奪えるとかその辺だろ。【簒奪】とか。魔法少女の魔法を奪えるんだ。で、その方法は殺しではなく何かしらの準備が必要。殺して奪えるんだったらこんな面倒なことはしない。生け捕りにしてその魔法を俺に使って、【即死】を奪い取るつもりってのはわかった。

多分、【隠蔽】も【統率】あるいは【洗脳】も湧きポ作成も、どっかの魔法少女から奪った魔法かね。……いや、となると湧きポ作成ができた魔法少女がいたってことになるが……。ソイツからも奪ったのか？　明らかに人類の敵っぽい魔法な辺り、コイツと仲間だのなんだのの可能性の方が高そうだが。

いや待てよ、化け物統率してるのが本来の魔法なら、それは魔法少女にも及ぶって可能性もあるな。それで【隠蔽】や湧きポ作成の出来る魔法少女を操ってて、【即死】の使い手である俺も操ろうとしてる、ってことなら理解できる。それなら殺さねェのも納得だ。殺したらエデンに還っちまうから。

……全部不確定だ。情報が少なすぎるのもそうだが、敵の全容が一切掴めねェ。

個人なのか組織なのかすらもあやふやだ。ワンチャンこの魔法少女が狼に操られてるって可能性もある。……無いか。

「ね、かくれんぼ名人さん。別に痛い事をするってわけじゃないんだ。むしろとーっても気持ちいいコト。だから、そろそろ出てきてほしいな。じゃないと――この森焼き払っちゃうかもよ？」

はっはっは、そういうセリフを言うにァ、ちょいと年齢が足りな過ぎるな。

もっとバインバインの姉ちゃんなら……ってェ、何考えてんだ俺ァ。歳考えろよおっさん。つか場を弁えろ。

「言っておくけど、脅しじゃないからね。そういう魔法がこっちにはある。貴女みたいな弱い魔法少女は、すぐに焼け死んじゃうかも。あ、でも大丈夫。死なないギリギリで助けてあげる。でも、限界まで苦しめる。炎で息が吸えなくて、肺を焼かれて痛くてつらくて……ね？　怖いでしょ。今ならそれナシで、きもちーことだけで済むの。どう？　魅力的じゃない？」

魅力的だ。魅力的過ぎて反吐が出る。

みんながいなくなってからそろそろ三時間くらいか。っとに根気のある魔法少女

だことで。三時間探し回っていなかったら帰るだろふつー。身体が疲労しないつったって脳は多少疲れんだから。

「ん、わかった。丸焼きがいいんだね。じゃ――精々苦しんで」

熱。

端っこから燃やしていく、とかじゃない。

森を囲うようにして炎が走っていく。まさかとは思うが――これが範囲、じゃ、ねェよな？

「【皇爛】」

瞬間、全てが炎に包まれた。

……視界いっぱいが。

いんやさ、ソレが範囲ですよ、ってわかったら、その外に逃げるのは普通だよな。まだ俺の【隠蔽】は切れていないようで、狼共も魔法少女もこっちに目線を向けて無い。んじゃあ一目散に逃げる――。

「ってのは無理そうだなァおい！」

「やっと見つけた。そこにいたのね」
あァさ、俺が使った方法だ！
あんときは背中メッシュの【神鳴】だったが――この、俺にかけられた魔法は急激な周囲風景の変化にァ対応出来ねェ。光学迷彩の類だ。だから、こんな突然真隣に炎の柱が現れたら、影が出来る。
まだ魔法は解かれてねェのかつい出しちまった声は聞こえてねェようだが、完全に位置がバレた。
「みんな！」
その、声と同時。
おうおう、集まってくるわ狼の群れ。それだけじゃねェな、他の種類の化け物もいる。透明じゃねェのが救いか？　いんやさ、俺にかけられたくらいだ、遠隔での透明化も可能と見て間違いない。となると、相手が突然消えるかもしれねェのか。
そいつァやべーな。
「行って！」
「安藤さんに感謝ァ、つってな！」

だが、纏まってくるってんならこっちにも勝機がある。前方ではなく後方の狼の群れに対し、炸裂弾を発射。拳銃だ。もうSRは背負ってる。

それは物の見事に着弾した狼と周囲の狼六匹くらいを【即死】させ、穴を作った。

まだだ。右に左にと、ガンガン撃ち続ける。

「ッ、逃げた方に集中！」

「まだ見えねェのは愚策も愚策だなオイ。隙だらけだぜアンタの周り」

撃つ。炸裂弾じゃねェ方の弾込めた拳銃で、魔法少女の……足元を。

「なんだ、ただ逃げるだけじゃなかったのね。それなら――私と遊びましょうか、かくれんぼ名人さん？」

「だァから、そういうのはもちっと歳食ってから言えっつーの」

相手が挑発してきてる内に、狼の輪を抜ける。その際、進行方向に近い狼を撃って【即死】させる。範囲はきっちり5mだ。流石安藤さん、腕がいい。

これで、相手は俺が反対方向に逃げたって思う――あぶねっ!?

「……避けられた？　完全に当たったと思ったのだけど」

「馬鹿が、一番危ねー奴から目ェ離すわけねェだろ。つかそんだけ魔法持っててま

だ隠し玉あるとは驚きだよ。どんだけ持ってんだい？」
「……やっぱり銃って嫌い。狙って撃たないと当たらないとか、武器として欠陥にも程があるわ」
「狙わねェで当たる魔法がおかしいんだよ」
聞こえてねェからこれ幸いと声を出しちゃいるが、いつ【隠蔽】が解けるかわからん以上止めといた方がいいのかもしれん。わからん。単純にそろそろストレスだったんで愚痴を吐いてたんだが。
だが、これでわかったことは一つ。
コイツマジで俺と考える事一緒だ。俺が安直に考えた作戦は全部見抜かれてるって思った方がいい。
が、おじさんは銃好きだぜ。遠くまで飛ぶからな！
「ん―、適当にもう一回【皇爛】いっとこうかな」
狼の群れに炸裂弾を当てる。あんだけの規模の魔法だ、チャージに時間はかかるし、魔力消費も馬鹿にはなんねェはず。問題はコイツが撃ってるかどうかわかんねェって点か。魔法名言うのを合図にしてるだけで、他の魔法少女がいる可能性も

ある。

　となると、もうチャージは終わってるかもな。適当にもう一回、ってのは嘘じゃなさそうだ。

　ならまァ、逃げるか。

「【皇爛】――あっ、そこ！　みんな追いかけて――海の方よ！」

　こっから先は下り坂。多少の擦り傷は構わねェんで、逃げる。

　相手が火なら弱点は水だろ、つってな。こんだけ海が近いんだ、わざわざ丘上だの森だので戦うかよ。

「と見せかけて、こっちだったり？」

「イッ!?」

「あ、今のは掠めたんじゃない？」

　相手の魔法に合わせて狼の死体ぶん投げて囮にする作戦失敗。銃弾が頬を掠めたよ。あァ痛ェ。

「でも、いいの？　そっちは――私達のホームだけど」

「はン、だからだよ！」

逃げる。いんやさ、向かう。
向かう先は――触腕の森。既に再湧きして、これまたウネウネグニャグニャと気持ちわりーことこの上ないそこに、突っ走っていく。
追い縋る狼の群れには炸裂弾を、適当に乱射してくる銃はもうどうしようもないんで射線切りながらお祈りして、向かう。
いやマージで。
諦めてくんねェかな、ホントに。
俺は諦めないんだけどさァ。
「どこまで逃げても、私は諦めないよー？」
……つくづく気の合うこって。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

炸裂しない方の通常弾を撃ちまくる。
ウネウネと気持ち悪い触腕に。死んでも死んでも湧いてくるコレに、知らねェ知

らねェと撃ちまくる。撃ちまくって、歩く。

背後からの銃声は止んだ。狼の唸り声も聞こえない。触腕も無尽蔵に湧いては来るが、俺を捉えることは出来ていない。

壁だ。

高くまで立ち昇る赤と白の触腕。肉厚でひしめきあってるコレなら、狼も入って来れやしねェと踏んだ。単なる銃弾も通らねェとな。

そいつァ正解だったらしい。俺の考えている事がわかったとしても、わかったからっつってどうしようもないモンに囲まれちまえば関係ない。アイツと俺の違いは、【即死】ってピーキーな魔法の有無だ。考えが一緒である以上、ああやって先手を取られ続ければ一生後手に回る。昨夜から今朝方みてェに俺が先手取ってりゃ完全に封じ込める。

だから、一旦のリセットが必要だった。

そのためにここへ来た。

そして。

「お、有った。これか」

触腕の森の中心。
そこでようやく見つけるのは、真っ白な鉱石。
反魔鉱石だ。
「……よし」
覚悟を決める。
この触腕のどこに獲物を感知する器官があるのかはしらねェが――まァ、キラキラツインテが捕まってた以上、あるにはあるんだろう。
その上で。
その上で――触れる。
反魔鉱石に。
「――止まれ！」
止まる。
何がって、俺に殺到してた触腕の全てが。もう、今まさに俺を押し潰さんとしていた全てが、ピタリと止まる。
俺にかかっていた魔法が解けたのだ。仮称【隠蔽】が。反魔鉱石は、魔法を打ち

消す力を持っている。
「もしかして、馬鹿なの？　かくれんぼ名人ちゃん。死ぬ気としか思えない……今私が止めなかった、貴女は死んでいたのよ？」
「私が死んだら困るのはそっちだろぅ？　【即死】はなんとしてでも手に入れてェもんな。死んだらまた囲いの面倒臭ェエデンに還っちまう。だから止めたんだ。コイツラが私を殺すに足ると理解しているから」
「……かくれんぼ名人ちゃん、とっても粗暴な話し方なのね。さっき見た時は私と同じくらいだと思ったのだけど」
「アンタは見た目が語彙に追いついてねェな。きもちーことだァ？　そういうのは大人になってから言えよ、ちびっこ」
「野蛮ね。嫌になるわ。私、もっと文明のある人と喋りたいのに」
「自ら魔法の解除も出来ねェ奴連れてきといて文明人気取りかよ。学園じゃ初歩の初歩として習うぜ、知らねェのか？」
「あだ名、かくれんぼ名人から野蛮人に変えてあげる。ね、野蛮人ちゃん。取引をしましょう。文明が無くても物々交換くらいはわかるでしょう？」

「あァそいつァ残念だちびっこ。俺からやれるもんは死くらいでよ、ソイツを交換しちまったらアンタが死んじまう。それで良けりゃ今すぐにでもプレゼントするぜ」
「あら、素敵ね。是非頂戴な。今すぐに」
「何言ってんだ、物々交換なんだろ？　とりあえずこの壁の向こうに控えさせてるウルフの群れ引かせてから話そうぜ。対等な取引にしよう」
「対等？　野蛮人と私が？　何故？」
「何故ってそりゃァお前」
発砲ではなく魔法の方の【即死】を発動する。
消える触腕。当然の様に殺到する狼の群れ。
「可哀想だからだよ。無為に死ぬこいつらが」
撃つ。
炸裂弾――【即死】の込められたそれは、入って来た狼の全てを殺し尽くす。
「ッ、どこに――」
「おォっと注意報だ。晴れ時々鉛、所により死――っつってな！」

「上!?」

そう、上だ。

話してる間に頑張って上ったんだ。はン、いっつも監視塔の上登ってサボってる俺をなめんなよ。吸盤なんて足場のついてる壁なんざ楽勝だっての。

「もう動いていいわ！　ソイツを殺さない程度にぼこぼこにしなさい！」

「そいつァ不味いな。じゃあ仕方がねェや。死んでくれ」

撃つ。撃つ。撃つ。撃つ。

四発――それは正確に。

「く――、ぅ!?」

「アンタの適当ショットと一緒にすんなよ。こちとらコレばっかりが命綱なんだ。こんだけ近けりゃ、手足ぶち抜くくらいワケねーんだわ」

「……驚いた。貴女、人を撃てないのだとばかり思っていたのだけれど」

「あァそりゃわりィ事をした。アンタそれを人体だと思ってたのか。うっかりうっかり、あぶねェ玩具だと思ったんでつい壊しちまったよ。すまねェな」

撃ちぬいたのは、やっこさんの手足。

もう【即死】の弾丸なんざ残ってねェからな、ただの威力の低い弾丸を撃ち込ませてもらった。

この威力でも頭だの目だのに当たれば死ぬ。それは恐ろしかったが、まァ流石にそんなヘマはしねェ。アレが義手義足だってのもわかってたしな。

銃が下手なのも、俺を追いかける時にてめェで走らねェのもそういう理由だろう。あんだけの魔法使える奴だ、普通にA級以上はある。つーことは身体強化に使える余剰魔力もあるはずなんだ。それを使えば、わざわざ狼操って見えない敵捕えようとするより、自分で叩きに行った方が早い。

「手足を潰せば――魔法が使えないとでも？」

「いんやさ、逃げさせてもらうよ。アンタさえ追っかけてこなくなれば、少なくともこの化け物共に追加の命令は出せねえだろ？」

自分にひっついてる虫を叩き落とそうとビタンビタンしてる触腕からうまいこと飛び降りて、返事も待たずに逃げる。四肢の無い少女を置いてけぼりにする、っつーのはおじさんとしてはかなり心苦しいんだが、同時に命狙ってきた相手だ。容赦はいらねェだろ。

「――あぁ、わかった。貴女、人を撃てないんじゃなくて――殺せないのね」
「はァ!?　後ろッ――!?」
ああ。
それぱっかりは、普通に驚いてしまった。
完全に勝ったと思った。完封したと思った。完璧だと思った。
だから、背後から聞こえたその声に余りに驚いて。
振り返るよりも早く。
塵一つ残さず――切り刻まれた。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１：２》吠えは《ｔｅｘｔ》

いやまァ、お察しの通りソイツが、なんだが。
「危ない所でしたの!!」

「お、おゥ。お嬢……か。あぁ……ありがとう、お嬢」
「いいえ、いいえ！　当然の事ですのよ！」
金色の風だった。
触腕の森も、狼の群れも――ちびっこも。
その全てが細切れにされた。たった一人の少女によって。
金髪お嬢様。SS級魔法少女【神速】のフェリカ・アールレイデ。
いやはや。
「やっぱ、すげェな、お嬢様は……」
その殲滅力も。その殺傷能力も。
敵を――ヒトを殺す、という事に対して、一切躊躇の無い所も。
俺とは全く違う。
そうありたいとは、まだ思えない。けれど、やっぱりすごいと思う。
「あー。お嬢様。一個頼んでいいか」
「はい！　なんですの？」
「その辺の、湧きポ。あれまで連れてってくれ」

「……わかりましたの」

幸い、ここに設置されてる湧きポは多くない。四つか。廃墟群の四方にあった、って感じかね。

となれば、やっぱりこれは故意に創られたもの。知ってたが、アイツラによるもんだろう。

じゃ、殺しとかなきゃな。

「魔力は大丈夫ですの？」

「今からクソ不味い草食べて回復するよ。ただ、その間に化け物が湧いたら」

「一瞬で切り刻みますわ！」

「あァさ、頼むぜ」

亜空間ポケットは使えないので、身体中に仕込んであるフリューリ草を取り出す。取り出して食べる。

森で狼の群れから逃げてる時にも食べてたけど、コレ、本当に不味いので思考をクリアにしてくれる。そういう……それこそ気付け薬としてもいいんじゃないか？

キラキラツインテに食わせりゃよかったかな。

「――死ね」

まず一つ、殺す。

湧きポ一個殺すのに大型の化け物【即死】させた時と同じくらいの魔力消費するの、結構やべェよなァ、とか思いながらモシャモシャ。

「――死ね」

金髪お嬢様が湧こうとする触腕を全て叩き切ってくれる。安心だ。安全でもある。

「――死ね」

死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。

消えろ。この世から。この世界から。生まれる前に――死ね。

「最後だ。――後は任せた、お嬢様」

「え？」

「――死ね」

言いながら――崩れ落ちる。ぶっ倒れる。

フリューリ草が底尽きてたからな。丁度、ギリギリ、最後の魔力って奴だ。あァ

魔煙草はまだあったな。ソレ使えばよかった。
なんにせよ。
これで――ミッション達成、っつーことで。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

10. 糸伊豆阿派青磁負不伏零矢堕千経度戸地内途.

四、迷宮編

11・藍最後尾夜有・

金髪お嬢様及び後から追い付いたポニテスリットの命令無視に関する罰――は、〝未だ在園中の身である〟ということで少々の緩和が図られた。

加えてそもそもが遠征組突撃班班長の判断ミスであったこと、及び少しだけ明確になった敵――化け物を従える魔法少女に【即死】を奪われずに済んだことも相俟って、少々強引な緩和に緩和が重ねられ――。

「ひと月の給金5割カット、及びエデン下部の清掃、と。まァありがたい措置だな」

「別に、梓さんは罰を受けていないのですから、付き合わなくてもいいのですのに……」

「いやさ、私を助けに来るために命令無視して突っ走ってきてくれたんだ。それに付き合わなきゃ私の心が苦しくてね。私の苦痛を和らげるコトだと思って参加ァ許

可してくれや」

「勿論拒否はしませんけれど……でも、いいんですの？　危険ですのよ？」

「あァ、そりゃ――今、身をもって感じてるよ」

二人の降級もなし、禁固刑とかにもならず、こうして自由にさせてもらってる時点ですんげェ措置だと思う。まァさっき述べた敵に【即死】を奪われなかったってのがデカそうだが、その辺はお上の判断基準を知らねェことにはな。

んで、今。

俺達の通い住む魔法少女育成学園エデン、及び国家防衛機構・浮遊母艦ＥＤＥＮっつーのは、逆三角錐の浮遊島の上に建てられた五角形の城から成ってる。その城の内部構造はまァいいとして、じゃあこの逆三角錐の浮遊島ってェのはなんなんだ、ってトコ。

どー見ても自然物じゃねェ、人工物なこの島は、なんと学園長殿による魔法の結果、なんだそうな。ＥＤＥＮにおける最上級のＳＳＳ級魔法少女でありながら、その覚醒が起きたのは年老いてから。少女幼女が多く、見た目召してても40代くらいの女性が多いこのエデンにおいて、ただ一人老婆の姿をした魔法少女。

いんやさ、魔法少女とは、ってなるのは俺もそうなんだが、まァ多分前世でいう魔法使いみたいなニュアンスなんだろう。

そんなすんげー学園長殿によってつくられたこの逆三角錐島には、内部っつーもんがある。地下迷宮っつーの？　なんぞやべェ迷路になってて、たまにランダム湧きの方の化け物が湧いて出るんだそうな。なんでそんなコトになってるかってーと、そもそも迷宮だったものを浮かせた、って話らしい。

逆三角錐の建造物が先にあって、それを学園長か他の魔法少女かが攻略して、その建造物を学園長が浮かせて、その上にＥＤＥＮを作った、と。

だから当初ＥＤＥＮの下に国は無かった……はずだ。周囲にはあったかもしれねェが。あの廃墟群見る限り。

あんまりＥＤＥＮやエデンの歴史についてを綴っている本無いんだよな、学園塔内の図書館。お上が隠したいのか、本気で誰も記録してないのかのどっちかだ。魔法少女は死なねェから、記憶してりゃ問題ないって考えの可能性もある。文字通り生きた辞書だから。

「すまない梓、一匹逃した！」

「ん？　あァ、こんくらい小さけりゃ流石に大丈夫、うげっ!?」
「梓さん!?」
で。でだよ。
今ァ俺達ァその迷宮にいるワケだ。午後の森よろしく清掃という名の掃討。まァ掃除もしていってるんだが、メインは掃討だな。
迷宮ってだけあって、出てくる化け物も外のとはちょいと違う。ネズミだのコウモリだの、小動物っぽい化け物が多いんだ。外の世界じゃ他の化け物に食われちまうような奴らがな。
つっても化け物は化け物、普通の獣とは違う。ちゃんと攻撃してくるし、ちゃんと危ねェ。普通にB級くらいの力持ってる奴もいる。
SS級とA級がいればなんてことはない……と思っていたら、いんやさ、そんなことはなかった。
当然ながらこの迷宮ってな学園の所有物。だから壊しちゃいけねェ。だからポニテスリットの【波動】はそんなにたけェ威力出せねェ。迷宮は迷路だから色々と狭い。だから金髪お嬢様の【神速】も本領を発揮できねェ。直線状の通路が少ねェか

らな、結構ぶつかりそうになるんだとか。

なんかそーいう、本来は高火力でドン！　みたいな戦い方をする魔法少女にはうってつけの罰というべきか、繊細に、且つ丁寧に戦う必要があるんで鍛錬にも持って来いなんだと。

「大丈夫ですの？」

「あァ、【即死】で防いだよ。……これ、もちっと精度上げてェなァ」

「触れた瞬間に【即死】させることによる絶対防御……だが、勢いを殺せないとあってはな」

「ん―、でも今のみてェな本体ごとぶっ飛んでくるのはともかく、タコだのローパーだのが触手伸ばしてパンチしてくるのだったら、一瞬で【即死】させりゃある程度緩和できるはずなんだわ。問題は私がその速度に対応できるのかってのと、複数敵には向かねェってことかね」

俺は元々そーいう高火力がないんで戦闘スタイルはあんまり変わんねェんだが、SRと炸裂弾は使えねェんで封印。今は元々の【即死】……触れて殺すか、向かってきたのを殺すかだけでなんとかしてる。この【即死】防御、もう少し精度をあげ

りゃ、マジの絶対防御になりそうなんだが……如何せん俺の反射神経が悪い。
あと殺すだけで消すわけじゃねェから、ポニテスリットの言うように勢い殺せねェで普通に食らうのもだるい。紙一重で避けながら触る、みてェな大道芸が出来たら話は違うんだろうが、お飾りB級じゃそんな身体強化は出来ねェんだわ。
「で、今進捗率どんくらいよ」
「地図に寄れば、1割にも満たんな」
「マージか」
迷宮迷路と言っちゃいるが、一応地図はある。何度も掃除されてきたし、そもそもが攻略済みの迷宮だからな。それはちゃんと支給されてる。
が、それがなんだ、ってくらい長い。この迷宮、デカい。まァEDENと同じか少し小さいくらいの広さがあるって考えりゃ当たり前なんだが、いんやさ、魔力持つかねェ。
「ちょいと魔煙草吸うわ」
「……」
「ン？　どうした二人そろって」

結局件の遠征じゃフリューリ草の花は見つけられなかったし、安藤さんもまだフリューリ草を仕入れてねェみてェで煎じ茶はもう少し先になりそうだしで、結局はこの魔煙草とフリューリ草そのものにたよりっぱになってる。

基礎魔力増やす方法も調べちゃいるんだが、「え？　魔力量ですの？　……使っていれば増えますわ！」とか「ふむ。昔は限界まで使って倒れるを繰り返せば上がる、などと言われていたが……それが答えでないことはお前が証明しているしな」とか「えー？　ねてればいいよー」とか。

A級以上の魔法少女の話は参考にならねェ。んじゃあ俺と同じB級以下の魔法少女に聞いてみよう、と思ったんだが、俺の知ってるB級以下の魔法少女は鬼教官に従ってた奴と、自室に引きこもったまま出て来ねェ二人しかいねェと来た。前者はどこにいるか知らん。声もかけられん。後者は俺より魔力低い。

八方塞がりだ。ちなみに図書館やら教本やらにはそれら手段の掲載は無かった。やっぱり元々の素質、なんかねェ。

「それ、一本貰えたりしますの？」

「……いや、いいけどよ。SS級にゃ微々たるモン過ぎてわからねェと思うぞ」

「いえ、味が気になって」
「私も気になるな。お前がよく吸っているもの、という印象でしかなかったが」
「でも不味いって知識はあンだろ。やめとけよ、本気で不味いぞ」
匂いが良いのは認める。めちゃくちゃ微かなシトラスハーブって感じだ。
が、味は……なんだろォな。≫生きとし生けるものが絶対食っちゃいけねぇモン≪みたいな味がする。安藤さんの話通り、フリューリ草が自己防衛をするために集めた苦味とえぐみと不味さの結晶なんだろォことはよーく伝わってくる。
「あー。わかった、わかった。ほらよ」
「ありがとうですの！」
「すまんな」
いんやさ、おじさんそんなにジーっと見つめられたら折れちゃうよ。
無理無理。純朴な少女の目には耐えられねェって。
仕方ねェんで二本取り出して、箱の側面で起動。二人に渡す。
二人は何度か匂いを確かめた後。
「では――」

「……」

一息に、吸い付いた。

……いやまァ、何を挟むでもねェ、見る間もなく見るも無残に変わっていく二人の顔。すぐに口を離して、恐ろしいモンを見るような目で俺を見る。

「ほらな、言ったろ？　慣れてねェ奴が吸うもんじゃねェのよ」

「……言葉が出ないですの」

「こんなに不味いものがこの世にあったのか」

「んじゃ返してくれ」

「え？」

「え？　じゃねェよ。一瞬口付けただけだろ。捨てるの勿体ねェから返してくれよ」

いやさ、他人が口付けた煙草吸うのがキショいってなわかるけど。

お飾りB級には勿体ねェ魔力に見えんのさ。まだまだ先は長いしな。

「いや、慣れてきた……コホッ、ああ、んん、ぅ、……大丈夫だ。吸える」

「私も大丈夫ですの！　匂いはとても良いですし！」

「……ならいいけどよ」

これはキモいと気遣いが両立したアレか？

……ダメだねーおじさん。効率だのなんだのを気にするあまり、年下の女の子に気ィ遣わせちゃって、空気悪くして。典型的な空気読めないおじさんじゃねェか。

うわー、そういうのならねェように気を付けてたのになァ。もしかして前世でも俺の事空気読めねェって言ってた部下いんのかなァ。悲しいなァ。

「あー、二人とも、歩けるか？」

「ぐ……だ、大丈夫だ」

「まずい、ですの……」

そんな足元が覚束なくなるくらい不味いかね。

……不味いか。俺も初めて吸った時天地がひっくり返ったかと思ったくらいだ。なまじ前世で煙草を知ってただけに、驚いた。いや前世の煙草が特別美味いってワケじゃねェんだけどよ。

ちなみに安藤さんも言ってた事だけど、この世界にも普通に煙草はある。魔じゃねェ方の煙草。本当に稀にだけど、吸ってる魔法少女もいる。肺悪くなっても死ね

ば治るからな、なんて言ってたっけ。……やめやめ、嫌なコト思い出したわ。
「ま、捨てても火事とかにゃならねェから」
「あ、梓さんから貰ったものですもの。捨てませんわ……ぅ」
「無理を言ったのはこちらだ。……捨てはしない」
あーあー。また気を遣わせて。
おじさんダメダメじゃね？　若者になれてなくね？　アレか。っぱねー、まじっぱねーわとか言ってかないとダメか。っぱねー。
いやまァ、そんな感じで。
俺達三人の迷宮探索は始まりました、と。

遠《ｔｅｘｔ：s1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

にしても、だ。
「……多くねェか、化け物」
「そう、ですわね。前に入った時は……ここまで多くは無かったのですが」

「ふむ……」

なんとか吸いきった……ように見せかけちゃいるが、多分亜空間ポケットなりにしまったんだろォな、って二人は、未だ口に残る不味さに不快感を示しながらも、ようやっと通常通りの足取りに戻った。

魔煙草のせいで少しばかり遅れた清掃進捗は未だ1割に届かず。とはいえ魔煙草のせいだけじゃない。どうにも化け物が多いのだ。化け物を国民から守る国家防衛機構がこんなに化け物を野放しにしてていいのか、ってくらい多い。

これ、溢れ出したりしねェのかな。

……あァいや、そのための清掃か。俺達以外にも色んな魔法少女がやらされてんだろうな。

「それは当然だよ？　こんなに食べるモノの少ない迷宮で、そんなに魔力を含んだ植物を見せていたら、魔物が集まってくる」

「あァ成程。そーいうことか」

確かにまァ、不味い不味いっちゃ言っても、魔力の塊だからな、フリューリ草ってな。魔煙草もそォだが、俺の身体の至る所に草そのものが仕込んである。亜空間

ポケットが使えない以上は仕方ねェんだが、なるほどこれは匂いやら何やらをばら蒔いてたってことになるのか。

「下がれ梓！」

「何者――!?」

必死な声に、なんだなんだと振り返る。

直後駆け抜ける金色の風。お嬢の剣。

それは。

「危ないことするね、君」

「すり抜けッ――精神体ですの!?　ならば――」

「危ない子には、お仕置きだ」

「ヒ――ぇ、あ……!?」

当然のようにすり抜ける。

故にと何か策を講じようとしたお嬢は、けれど突然苦しそうな顔をして、喉を押さえた。

「待て待て、やめてくれ。今のはどう考えてもそっちが悪い。脅かすつもり満々

だっただろ」
「そうだね。ごめん。謝るよ」
「――ケホッ、ごほっ……」
これだからA級以上は。
展開が早いんだって。おじさん付いていけないから何事もゆっくりやってくれ。
未だ警戒を解かないポニテスリットと、可哀想に咳き込んじまっている金髪お嬢様を横目に、俺はそいつへ話しかける。
身体の半分が、壁に埋まった――ソイツ。
「よぉキラキラツインテ。何用で？」
「ただちょっと、先日のお詫びにね」
魔法少女あるるらら。【透過】の魔法の持ち主が、そこにいた。

「すみませんでしたの。早とちりをしてしまって……」
「こっちこそいきなり出てきていきなり攻撃してごめんね」
「十割キラキラツインテが悪いが、まぁお嬢も早計だったな。でも多分私を助けよ

うとしてくれたんだろ？　だからやっぱり十割キラキラツインテが悪ィよ」
「キラキラツインテ……なるほど」
俺のあだ名センスに何か納得しているポニテスリットは置いといて、少しばかり散らかった状況を整頓する。
突然俺に話しかけてきて、化け物が多い理由を教えてくれたキラキラツインテ。
そのキラキラツインテに驚いて【神速】を用い、撃退しようとした金髪お嬢様。
金髪お嬢様がいきなり攻撃してきたものだからお仕置きにと、その喉にネズミを詰めたキラキラツインテ。
……うん。やっぱりキラキラツインテが悪いわ。
「で？　詫びにしちゃァ随分だが」
「ごめんね。驚かすつもりしかなかったんだけど」
「つもりしかなかったんじゃねェか」
「うん。でも期待してた反応とは少し違ったかな。もっと悲鳴を上げてくれるかと思ったら、あとちょっとで切られてしまう所だった」
「魔法少女にユーレーへの恐怖を期待すんのァ無理だろ」

キラキラツインテは【透過】状態から実体化し、迷宮に降り立った。
班長と違ってあんまり知られてねェのか、ポニテスリットも金髪お嬢様もキラキラツインテを知らない様子で、遠征組の一人だと話せばかなりの納得を得られた。
何って、その詫びが動機ってのと、自分達が知らない事に対して。
「遠征組は……私とはあまり関わりませんものね」
「私も突撃班に回される事は無いから知らなかったな」
「改めて、初めまして。遠征組突撃班のあるるらだよ」
「ああこれはご丁寧に。学園Ａクラス Ａ班班長のフェリカ・アールレイデですわ」
「同じくＡ班のミサキ・縁だ。よろしく頼む」
お嬢は【神速】で遠征先のどこにでも行けそう……という印象を持たれがちだが、実はそんなことは無い。お嬢の【神速】は他人にかける事が出来ないからな。集団行動で遠征する遠征組において、一人だけ突出してしまうお嬢はあんまり合わないんだと。基本遠隔で構成されるってのもある。キラキラツインテは近接だが。
遠征先のどこにでも行けそう、ってのはまァ別に間違いじゃないんだが。俺を助けに来てくれたようにな。

ポニテスリットは逆に防御面が超絶優秀なんで、観測班や調査班に回されるそうだ。突撃班ってな突貫して殲滅して、ってのがメインだから、防御なんか考えねぇと。

「で、詫びってなンだよ。私ァキラキラツインテに謝られるような事された覚えは無ェぞ」

「ヴェネットの判断ミスや君の窮地は、私が捕まった事から始まったからね」

「あー。いんやさ、そりゃ不可抗力だろ。誰だってあの触腕の中に罠がある、なんて思わねぇって」

「仕方がなかったら自分は悪くない？」

「……いんやさ、それを否定すると、お嬢の罰に付き合ってついてきてる私の苦痛を否定することになるワケだ」

「うん。これはお詫びだけど、私の罪悪感を晴らす行為だから、そこもごめんね」

成程ねぇ。

ふわふわしてる奴だと思ってたが、ちゃァんと善人でやんの。いやお嬢を脅かしたっつか俺達を驚かせようとしたのはまァ悪戯心だろォし、自分捕まっちまって全

てが狂ったからお詫びしたい、罪悪感で押し潰されそうってな、まさに善人の証拠だわな。

　善人っつか、純朴？　んなもん敵が悪いで踏み倒しちまえばいいのによ。

　……俺もそれが出来なくてここにいるわけだが。

「ええと、あるるららさんは、どのようにしてここに？」

「うん？　真っ直ぐ、降りてきただけだよ？」

「それは……先ほどの様に、壁をすり抜けて、ですの？」

「そう。私はどこにでもいけるからね」

　反魔鉱石の無い所にはだろ、……って茶々を入れたくなったけど、やめた。おじさんは空気を読む練習をするのだ。

「では……もしかして、この迷宮の最深部にも行った事がありますの？」

「うん。あるよ」

「え、お嬢は無いのか？　前に来た事があるような口ぶりだったけど」

「最深部に行く前に死んでしまいましたから、無理でしたの」

「私も最深部は行った事がない。魔物が強すぎてな、行くならSS級が三人は必要

だろう」
「え」
……え。
ん？
あれ、ここって攻略済みの迷宮で、ランダム湧きの化け物がいる程度、の場所じゃなかったん？
危険つってもB級クラスの化け物がいるからー、みたいな。そういう風に聞いてたんだけど。
「それで、どんなところなのですか？　最深部というのは……」
「それは教えられないかな。実力を付けて正式に攻略して、自分で確かめて」
「うぬぬ……やっぱり教えてくれませんのね……」
「フェリカ、お前まさか、迷宮最下部の秘宝なんて噂を信じているわけじゃないだろうな……？」
「噂じゃなくて七不思議ですの！　※エデンの下の迷宮の、さらに下の最深部には、不思議な不思議なお宝が眠っている――※なんて、ロマンですわ！」

えーと。

何、待って。追いつけないよおじさん。

ここ普通に迷宮なの？　攻略済み――だからといって、もしかして化け物が湧かなくなるワケじゃない、とか？

……いやそうだよな。そりゃそうだ。

だって湧きポがあるんなら、化け物は永遠に湧き続ける。俺の【即死】が唯一の湧きポを壊せる魔法って言われたくらいだ、今までは封じる方法が無かったって事だ。

つかまだ自然発生の湧きポに対する有効度の調査やってないんだけどいいのかな。あの廃墟群のアシッドスライム湧きポとか適当に【即死】させればわかると思うんだけど、なんでそういう命令出してこないんだろう。

「梓さん？　行きますのよ？」

「ん。え、あァ。……えーと、お嬢、一個確認したいんだが」

「なんですの？」

「この清掃って、目的はなんだっけ」

「この迷宮のお掃除ですわ」
「……じゃあ、最深部には」
「当然行きますわ！　あ、けれど梓さんは罰の対象ではないので、その前にあるららさんと帰ってくださいまし。私とミサキは前回の挑戦からどれだけ自身の実力が上がったのかを調べる事も兼ねて、挑戦しますので」
……それは。
死ぬ、ってことか。
そっか。
そこも、か。
俺に【即死】を使わせたくない。俺に仲間を殺させたくない。俺が仲間を殺す事を嫌っている。任務で死んでほしくない。俺が死ぬのも嫌だ。
そこまで理解が及んで――それでもまだ、なのか。
エデンの中で、ある種――迷宮攻略という≫コンテンツ≪の中で死ぬのは、問題ないと。そういう場所だから、と。
そういう、考えなのか。

「ダメだな、そりゃ」
「え？」
「私も挑戦する。んで、三人……あー、いや、四人で最深部見に行こう。私も秘宝ってのに興味がある」
「え、え、でも危ないですのよ？　危ないというか――その、今の梓さんには……」
「無理だ、梓。最深部前の魔物は、作戦どうこうでどうにかなるものじゃない。単純な殺傷能力が物を言う。その点、お前は――」
「おいおいポニテスリット、【即死】の殺傷能力はSSに届くんだァわ。なんならお前より高いって事忘れんなよ？」
あー。
俺ダメだわ。なんか、どんどん……どんどん、大切になってきちまってる。
死をそんな便利に扱うな、ってのはあくまで俺の考えだ。俺の中の理念だ。俺の中の信条だ。だってのにそれを押し付けて……。
お嬢にも、ポニスリにも……もう死んでほしくないとか、思ってる。
「……あるるららさん。梓さんはその」

「死にたくない、でしょ？　知っているよ。キリバチから聞いたから」
「理解があるなら助かる。いざとなれば、無理矢理連れ帰ってほしい。梓はその優しさ故に、私達だけを危険に晒す事が無理なのだと思う」
「そういう相談、本人のいないトコでしねェ？」
「わかった。君たちへのお詫びもあるからね、護衛は任せて」
お荷物、なんだろォな。
ホントなら本気で足手纏いなんだろう。俺ァ殺傷能力だけなんだ、SSに届き得るのは。身体能力も動体視力や反射神経もA級には程遠い。B級にもなってねェんだろう。そんな奴を守んのは、守りながら戦うのは難しいはずだ。
キラキラツインテだって護衛なんつっても【波動】みてェな便利なモンじゃねェから、俺を守るために傷を負うかもしれない。死ぬ、かもしれない。
……やっぱり引き下がった方がいいんじゃねェかと、効率の面では思えてくる。けど。
「ごめんな、二人とも」
「え。いいんですのよそんな！　謝る事では！」

「そうだぞ、これはそもそも私達への罰だ」
「ごめん。……私ァ、二人のこと、大切過ぎてさ。ダメなんだ。死ぬのが……怖い。私も死にたくない。けど、二人にも死んでほしくない。ごめんな。死っつーのは、どうにも――」
ダメだわ。マジで。
感情が抑えられねェや。おじさんになると涙もろくなっていけねェ。あいや今は少女なんだが、どっちにしろ涙脆いだろォよ。
死が当然。死んでも蘇る。死んで失うものはない。死んだ所で何が変わるわけでもない。
それが常識の彼女らに、死とは喪失であると押し付けるのが、どんだけ無理矢理な、どんだけエゴに寄ったコトか、なんて。わかってんだ。わかってんだけど。
「梓さん……」
「梓……」
「ふふふ、青春だね」
そんな綺麗なもんじゃねェよ。

でも、二人とも、理解してくれた――みてェな顔じゃねェなァ。
「それでも――梓さん。そのお気持ちは、とても嬉しいです。けれど」
「すまないが、感情でどうにかなる場所ではない。死ぬときは死ぬ。だから、助けてくれるのは良い。お前がついてきたいと言うのなら止めはしない。だが――期待はするな」
「これから向かうのは文字通りの死地――幾百もの魔法少女が挑み、そして敗れ、死んでいった境地ですわ」
小声で「私はスルーしたけどね」とか言ってくるキラキラツインテにちょみっと苛つきながら、あァでも、二人を見る。
「……わかった。高望みはしない。期待はしない。でも――もし、死なねェで、少しでも可能性を掴み取れる余地があんなら――諦めないでくれ」
「ええ、それは勿論ですわ。私とて、死にに行くためだけに向かう、というわけではありませんから！」
「当然だな」
あァ、ダメだね。

至難だっつーんなら――いいよ、俺が攻略してやらァ。この迷宮。俺が殺してやらァよ。

そうすりゃ、もうここで死ぬ魔法少女もいなくなるワケだろ。はン、一石百鳥だな。

「まぁ、まだここって迷宮の一割くらいの場所なんだけどね」

「先は長いですわ！」

「気力削ぐこというんじゃねェよキラキラツインテ」

そうだった。

まずは、その最深部前、とやらまでいかねェとな。

さァ――改めて、出発だ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

12・沙栗符哀須絵鰤寝具符応澄無・

キラキラツインテが加わった事で、迷宮探索はサクサクになった……なんてことはない。【透過】は特に殲滅力に長けるわけでもない上、小さいものに対しては普通に殺した方が早いと、あのふわふわした感じからは考えられない程武闘派な姿を見せつけられた。

具体的には、ネズミは蹴って、蝙蝠は掴んで潰して。

50年も魔法少女やってるとなると、どこに何が来るのかは割とわかる、のだとか。あくまで割とであって、罠には弱いんだけどね、なんて自虐も混ぜてくるキラキラツインテに、俺は渇いた笑いしか出ない。

A級ねぇ。

遠いな。つか無理だろ。魔力増やせねぇとどうしようもない。

「なぁキラキラツインテ。魔力ってどうやったら増えるんだ？」

「難しい質問をするね。それが知られていたら、今頃魔法少女はS級だらけになっているよ」

「知らねェのか。じゃあ最初からそんだけ魔力あったのか、お前は」
「うん。あんまり増えた減ったという例は聞いたことがないかな」
「そうかい。じゃ、A級になるってなどうしたらいいんだ」
「魔法の効率化。これに尽きるね」
なんか前線二人が張り切っちまって見る敵出る敵全部潰していくもんだから、俺のやる事がマジでない。背後から来るのや横合いから来るのはキラキラツインテが的確に処理するし、遠征の時よろしく運ばれているだけ、って感じだ。
だから、比較的暇なキラキラツインテに魔力量向上についてを聞いてるんだが……予想通りの答えが返ってきた、って次第。
「効率化、ねェ。使いまくって覚えんのが一番なんだろォが」
「君の場合、相手が必要だから、難しいよね」
「そォなんだよ。……あ、私で試す？　とか聞いてきたら怒るからな」
「怒りそうだったから、言おうと思ってた」
「わかってンのに言おうとしてたのかよ」
ＥＤＥＮには修練塔っつー魔法の修練をするための塔もあるんだが、【即死】に

関してはそこに行ったってなんにもならなねェ。相手がいねェと練習できねェ魔法でありながら、ピーキー過ぎんだよこの魔法。だからっつって化け物相手に単身で、ってのも難しい。俺は弱いから。

本来なら死をも厭わぬ戦い方で掴んでく、ってのが近接魔法少女の効率の掴み方なんだろーけど、……死にたかねェしなァ。

「ちょっとだけ助言をしてあげようか」

「助言？」

「私も、本来はＤ級かＣ級の所を、使い方でＡ級にまで上がった魔法少女だからね」

「あァ、確かにそォか。【透過】に殲滅力も殺傷能力も無ェもんな」

「うん」

工夫、って奴だ。

キラキラツインテは本来ただ通り抜けるだけの魔法を——どんな敵でもぶち抜ける槍にまで拵えた。

効率化もそうだが、【即死】にも別の使い道がある、ってか？

「例えばだけど――このケイブバット」
「お、おぅ」
「どうやって【即死】させる？」
いきなり素早く手ェ動かして、鷲掴みにしたコウモリを眼前に、って。
驚くってば。
「そりゃ、触れて、だが」
「その時――どういうイメージをしているのかな。手に【即死】を纏わせている？　【即死】で相手を貫いている？　それとも、【即死】で相手を覆ってる？」
「ン……ん？　ちょいと待ってくれ」
「うん」
どういうイメージ、か。
ふむ。
考えた事も無かったけど、そういえば俺ってどうやって魔法使ってんだ？
いや、魔力を集中する方法とか、魔法の発動方法はわかってる。学園で習う事だから。

でも……確かに、近接魔法少女ってそぉだよな。こう……変幻自在とまではいかねぇけど、ポニスリの【波動】みてぇに形変えられたり、出力変えられたりは出来るはずだ。

俺は……どうやって敵を【即死】させてる？

「とりあえずやってみようか」

「……あァ、わかった」

キラキラツインテからコウモリを受け取る。

もう十分に弱ってて抵抗する力も無ぇらしいコウモリに、【即死】を使う。

当然、コウモリは死んだ。

「今ので、わかったね」

「わかったのか？」

「うん。君は、相手を【即死】で浸す事で殺している。ケイブバットが痙攣もせずに死んだのがその証。心臓を殺すとか、内臓を殺すとかじゃなくて、このケイブバット全部を殺してる」

「……なるほど」

確かに、そうかもしれない。

つかそォだ。あの遠征の時に腹殴られながら殺したあの透明なタコも、アレが透明なタコだ、ってわかったのは、その形を一回認識したからだ。

外ならぬ【即死】で浸して、無意識にタコだって認識した。でけェタコだって気付いたのは魔力消費量からだって勝手に思ってたけど、あの時口が先に動いてたはずだ。はず、だ。

「多分それは、それが最も苦痛の少ない殺し方だって理解しているからじゃないかな」

「苦痛の……」

「苦痛に喘ぐ仲間を【即死】させるのが嫌というのは聞いたよ。けれど、懇願されると、苦しみながらもやっている、ということも知っている。その時、出来るだけ苦しませずに殺すために、【即死】で相手を浸して、全部を殺しているんじゃないかな。そしてそれが癖になっている」

キラキラツインテは、まるで見てきたかのように言う。

その通りだ。俺は、仲間に【即死】を使う時……これ以上苦まねェように、って。

だから、何も感じねェように、って。そうやって殺してた。
全体を浸して、全部を殺す。
心臓も内臓も脳も細胞も何もかも――【即死】させる。
「それじゃ、効率が悪い」
「……あァよ。ようやく理解した」
「じゃあ、はい、これ」
渡されるコウモリ。
先程のより抵抗の激しい化け物は、隙あらば俺の手に噛みつこうとしてくる。
それの、胸の部分に、指で触れる。
「【即死】」
普段魔法名をいう事は無いんだが――あァ、なるほど。
言葉にすると、形が分かりやすいな。
俺の滴り落ちた【即死】は、指先から直線状にある細胞と心臓だけを死滅させた。
それにより、コウモリの化け物はビクンと跳ねて、ピクピクと翼を痙攣させたのち――動かなくなる。

「これだけ小さいと、消費魔力の差はわかりづらいかな」
「いんやさ、十分にわかる。すげェ差だ。これが効率化か」
「私からあげられる助言はこれくらいだけど、他にも私みたいに工夫をしている魔法少女はいっぱいいるから、そういう子に聞いてみるといいよ」
「あァ、礼を言う」
「いいよ。これはお詫びだからね」
成程。成程な。
魔法ってな、こう使うのか。こうやって工夫を図るのか。
……どの道修練塔じゃわかんなかった事だが、俺ァもっと【即死】について知る必要があるな。今のだって細胞と心臓が【即死】しただけで、コウモリが【即死】したわけじゃない。やろうと思えば翼だけ【即死】させるとか、脳だけ【即死】させるとかも出来るわけだ。その結果まだコウモリが生きていようと、魔法はちゃんと発動してる。んで死んでるから回復もしねェ、と。
これさ、ちゃんと練習すりゃ……ヒト相手にも戦えるようになるよな。俺だって博愛主義じゃねェ、命を奪うのには抵抗あるが、ソイツの腕を殺すくらいなら出来

る。たとえその腕が一生使えなくなったとしても――出来る。まァ敵の魔法少女は何の気兼ねなく死んで蘇生してきそうだが。

いやすげェな、ベテランってのは。

ちゃんと知識持ってんだ。あァ、久しく忘れてたな。先輩に頼る気持ち、っての。俺が教えるのがもっぱらになって来ちまってたのが悪ィ。俺ァ今生徒なんだ、ガンガン乞うてかねェと遅れちまう。

「二人ともー！　ようやく休憩地点ですのよー！」

「ん、あァ！　今行く！」

死なせねェ、ってんなら、俺が強くならなきゃいけねェ。

……A級に上がる努力、ちゃんとするかね。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

迷宮には休憩地点ってモンがある……んだと、今さっき聞いた。

そもそも他で迷宮ってのを見た事がねェからほーんって感じなんだが、化け物も

なんでか寄って来ねえ休息ポイントが用意されてんだと。
　ってなると、やっぱりこの迷宮ってのも人工物臭ェよな。学園長殿が浮かせたって話だが、そもそもなんで当時の魔法少女達はこれを攻略しようとしたのか、にも繋がって来そうだ。
　たとえば――敵の拠点だった、とか。
「梓、何をしているんだ？」
「ん？　あァ、ちょいと魔法の……って、危ねェから近づくなよ」
「危ない？」
　魔力を放出せずに、形を変える練習をしながらの考え事。
　当然この魔力は【即死】の効果がある。遠隔魔法少女ならここから更に遠くへ伸ばしたり飛ばしたり、飛ばしたモンを操ったりと色々出来るんだが、俺ァ近接なので無理。精々体のどこに【即死】を表出させるか選ぶとか、さっきみてェに触れた対象にどうこうする、とかしか出来ねェ。から、そのバリエーションを増やせねェかって練習。
「そういやポニテスリットはどうやって魔法使ってんだ？」

「どうやって、とは？」
「あー。なんつーの？　どういうイメージで【波動】を出してんだ？」
「ふむ。この籠手もそうだが、鎧のようなもの、として認識している。変幻自在に形を変える事の出来る金属、でもいい。いや、金属ではないか。……いざ言われると難しいな」
「何の話ですの？」
「あァお嬢も」
同様の説明をすると、お嬢は「それなら簡単ですわ！」と目を輝かせて言う。
「簡単？」
「あァまァ【神速】は足とかか」
「いえ、世界を遅くするという方が正しいですの」
「……んん？」
お嬢今さっき簡単、っつったよな。
その概念的な表現が簡単、なのか。
「私の中から、私の外に出た時、魔力は世界に触れますわ。それを使って、世界の

手を妨害する……といえばわかりやすいかもしれませんわね」
「いや全くわかりやすくないんだが」
「ええー!?」
金髪お嬢様的には自信満々の回答だったらしい。
自分の中から、自分の外に出た時、魔力は世界に触れる。
それを使って世界に干渉する。だから世界は金髪お嬢様に干渉できなくなって、金髪お嬢様は速くなったように見える……って感じか？　噛み砕くと。
……お嬢は、世界、というものを……完全に捉えている？
「あるるららさんは、どう使っていますの？」
「私は、世界に溶ける感じ」
「ほら！　似てますわ！」
「言われてみれば、私も世界を押している……圧力をかけて、押しのけているような感覚だな」
待って、待って待って。
これ、俺がおかしいのか、もしかして。

俺に――俺に、前世なんてモンがあるから。純粋なこの世界出身じゃねェから、世界を感じ取れていない？

「……」

「どうしましょう、更に考え込んでしまいましたわ……」

「効率化の工夫を教えたのは私だけど、そんなに深く考えすぎてもあんまり意味はないよ」

「言葉にすると言うのは、難しいな……」

世界。世界ってなんだ。

この世界ってなんだ。

「じゃあ、面白いことをしてあげよう」

「ん？」

考えに耽っていた俺の前に――キラキラツインテが来る。

キラキラツインテは、座り込んだ俺を無理矢理立たせて。

ぎゅ、と。抱きしめた。

「え、ちょ、ちょっと何してますの!?」

「なんだキラキラツインテ、どうし……う、ン……？」
少女の温もりに包まれた――のも束の間。
じわり、と。水が浸み込むように。
何かが溶け込んでくるように。
キラキラツインテの身体が……俺の中に入っていく。
「なん……だ、こ、れ」
「世界に対して、私を溶かすように。君に対して、私を溶かしただけ」
「わ――わ、わかったから、出て行ってくれ！」
「どうしようかな」
気持ちが悪い、のとは違う。不快感は無い。けど、奇妙だ。
自分と似た形の何か温かいものが、自分に重なっている。酷く、眠くなる。立たされたけど、そのまま崩れてしまいそうになる。風呂にでも入っているような気分だ。
これは――不味い。
「あ」

「……ふゥ。あァそうか、【透過】は別に憑りついているってわけじゃねェもんな。私が動けば、ついてこれねェのか」
「ばれちゃった」
バックステップで抜け出せた。
抜けたら抜けたで喪失感っつーか、底冷えするような感覚を覚える。
「今の……なんだか、とてもイケナイモノを見てしまったかのような……」
「これが50年か……」
「何言ってんだお前ら」
アホ二人は置いておくにしても、少しだけわかったことはあるかもしれない。
俺とキラキラツインテは違う、ってことだ。
何を今更な話だが、アイツが溶け込んできてわかった。アイツは俺じゃない。だから異物だと認識した。
――≪世界に対して、私を溶かすように。君に対して、私を溶かしただけ≫
これがそういう事なら、世界ってのは、俺じゃないモノ、か。
「いつか必要になるかもね」

「……いつか世界を、ってか？」
「さあ。私は未来が見えるわけではないし」
つくづくふわふわした奴だ。
けど……確かに、今の感覚をここで得られたのは、良かったのかもしれない。
化け物も、そしてそれらを統率する魔法少女も。何をしてくるかわからねェ敵ってのがいる以上、知識は大いに越したこたねェんだ。
A級を目指すってんなら、尚更な。
「そろそろ行こうか。あんまり休んでいると、行方不明者扱いになっちゃうからね」
「そんな時間はかかんねェだろ。……この中にいると外の時間が速く進む、とか無いよな？」
「どういう発想だそれは。どこにいたとしても、時間の歩みが変わるわけがないだろう」
「私は遅くできますのよ！」
「そりゃ体感だろって」
良かった。

そぉいうファンタジーは無いらしい。いんやさ、魔法にはありそうで怖いよな。時間停止とか遅延とか。

魔法って括りだと、なんでも有りに思えてくる。……【即死】だって何でもありの一つだけどよ。

「では――最深部目指してはりきっていきましょう！」

よぉし、こっからは俺も戦うとするかァ。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

まァ無理だった。諦めが早いって、だってアイツラ二人が全部やっちゃうんだもん。

「が……種類が変わってきたな」

「この辺に小さな魔物が寄ってくると、食べられちゃうからね」

「アレとかに？」

「そう」

今、二人が戦っているもの。
大蛇だ。このクソ狭い迷宮で、大蛇。
苦戦はしてい……る？　いない？　外皮が固いから攻撃が通んねェと。で、頭探して口から剣突き刺せば死ぬだろうと。
だから今二人は蛇の頭を探し回ってる。が、蛇も蛇でちゃんと抵抗するっつーか、上に乗られて走られたら不快なんだろう、じたばたするんで、走りづらくて苦戦してるって感じかね。
「これさ、私がやったらダメかな」
「良いと思うよ。けれど、全体を覆ったら」
「あァさ、このデカさは無理だろォよ。だが」
だからといって部分的に殺したってあんまり意味はないと思う。それこそ頭部をやらなきゃ無理だ。
しかし、そんならコイツの出番、ってな。
「銃を使うんだ」
「ン？　あァそうか、遠征の時は、キラキラツインテが捕まってから武器使った

からお前は見てねェのか」
「そう。無様にも気絶していたからね」
「いやそこまでは言ってねェよ」
　俺の使う銃弾ってのは、毎日寝る前に【即死】を込めた空の魔石入り弾丸だ。戦闘の無い日は10発、演習だので使った後は出来て４発。だから安藤さんに１００発の注文したりしたが、アレ全部にすぐ【即死】を入れられるかっつったら無理だ。
　その代わり、今の今まで普通に【即死】だと思ってた量の【即死】……つまり、全体を包んで浸して殺す、っつー想いが込められているし、空の魔石いっぱいになるまで【即死】が込められてるんで、威力は折り紙付きってな。
　それを、蛇の胴体に撃ち込む。
「……あン？」
「答えは、わかるかな？」
「いやいや、嘘だろ。この前のエメラルドローパーだって一撃で仕留めたんだぞ。あんときはSRの方の弾丸だったけど。あの大きさを仕留めきれて――コイツには

足りない、ってのか？」

そんなはずはない。あの触手の化け物は、十二分にデカかった。他の魔法少女の魔力も取り込んでたし、少なく見積もってもS級くらいの強さがあった。

それを、こんなたかだかでけェだけの蛇が超えるワケ――って。

「貫けて、ないのか」

「うん。正直に言って、その威力では【神速】ちゃんの適当な一振りにも敵わないよ。あの子が切り裂けなかった外皮を、そんな弾で貫けるわけないよね？」

「だが、私のコレァ、掠っただけでも【即死】の効果を与えんだ。たとえ外皮が固かろうと……」

「だから、掠ってすらいないんだよ。さっきみんなで話していた世界と自分の話。このスネイクは、自分に世界の侵食を許さない。今までその弾丸が掠めた事で【即死】していた魔物は、掠めたから【即死】したんじゃなくて、その弾丸に詰め込まれた【即死】に浸されて死んでいた」

「ってェことはアレか。コイツを殺すには、私自らが触るか、それこそ口ン中にでも弾丸撃ち込まねェと無理なのか」

「もしくは、だけど」
言って、キラキラツインテは俺の太腿辺りを触る。一瞬くすぐったい温かさが通り抜けて――弾倉が一個抜き取られた。
それを持って蛇の胴体に近づき。
「こうすることも、出来るよね」
弾倉を――蛇の中に突き入れた。
「……え、今それ、どうやった？　お前の【透過】は他人にはかけられないんじゃないのか？」
「他人にも、物にもかけられないよ。けれど、私の身体が何を【透過】するのか、しないのかは選べるから、握り締めたものを【透過】しないで、スネイクの身体だけを【透過】して、置いてくる事はできる」
「手がフィルターになるってことか……？」
「そんな感じ」
その説明の後――大蛇の身体が、ビクンと跳ねる。
キラキラツインテが手を引き抜く頃には、その体から生命力は感じられなくなっ

ていた。

「さっきやった、ケイブバットのでも、まだだめ。【即死】させたいものだけを殺して、させたくないものは殺さない。それが出来るようになったら、君はもっと強くなれるよ」

「……もしかして、あれの身体に触れて――心臓だけを【即死】させる、ってことも」

「出来るだろうね。君にスネイクの構造の理解があれば、だけど」

ある。

ヘビの解体はやったことがある。どこにあるかはわかるが、このヘビの大きさがわからない以上は意味が無い。だが――たとえば、コイツそのものは無理でも。

こっから上だけを【即死】させる、とかやれたら……半分の消費魔力で済むわけだ。

指向性。展開。

魔力量と効率化だけじゃない、工夫すりゃ出来る事はいっぱいあんのか。

つか、そぉだよな。

俺ってまだ魔法少女になってから数ヶ月なんだわ。さっきも思ったけど、学びの身なんだ。凝り固まった偏見でかかっちゃいけねェ。ベテランの前で得意ぶるのもそろそろ無しだ。前世での経験なんざ、魔法の前には簡単に打ち砕かれんだから。

キラキラツインテはふわふわしてるけど、魔法少女歴50年の大先輩。班長にだってそぉだが、あんまり偉そうなこと言えたもんじゃねェ。後で思い返して恥ずかしくなるだけだな、こりゃ。

「……あるいは」

「何かに気付いた？」

「いや」

ちょっと、考えただけだ。

魔法を使う対象を選べる、というのは。【即死】させたいものだけを【即死】させる、というのは。

医療にも、発展できるんじゃねェかな、って。

この――苦痛に喘ぐ魔法少女を痛み無く殺せる、なんて悲しい価値だけじゃなくてさ。たとえば癌だとか、あるいは体内に入り込んだ何かだとか。そういうのを取

り除ける……そういうのだけを殺せる、ちゃんとした価値のある魔法なんじゃねぇかって。

「ちょいと、希望っつーのかな。展望が見えただけだ」

「それはよかった」

俺の生まれた意味がさ、【即死】なんて魔法に目覚めた理由がさ。

そんな悲しい、ヤなモンじゃなくてさ。

本当に何かを救えるものだったら最高だ。【回復】だの【治癒】だのが無いこの世界で――ヒトを救い得る魔法なら。

「梓さん！　大丈夫ですの!?　こんなに大きいものを【即死】させたら、魔力が!!」

「別にお前は戦わなくてもいいというのに……」

「あァ大丈夫。銃使ったからよ」

「……あぁ、あるるらさんが【透過】したんですの？」

「そンなに即座にバレんのかい」

「だってあの銃、そんな威力出せませんもの。それができるなら私がやってますの

よ！」

「ソレが通用するなら私の【波動】でも潰せる」

そんなボコボコに言わなくても。

……え、この銃そんなに威力低いの？　低いのは知ってるけど、そこまでじゃ……いや、違う。コイツラが強すぎるだけだ。そうだ。あぶねェ、A級以上の常識に騙されるトコだった。

「ま、私もちったァ役に立つってことで」

「今の実力じゃ、この先で役に立つ機会があるとは思えないかな」

「悲しいこと言うなよキラキラツインテ……」

助けさせてくれ、とか。強くならなきゃ、とか言ったけど。

真剣にやんなら、武器の見直しからってことね。安藤さんと相談だなー。

「もうすぐで半分ですわ！」

「おォ。……5割でこんな化け物が出てくんのか」

「進めば進むほど強くなる。この程度の魔物ではないぞ、最深部周辺は」

「あァ、気を引き締めるよ」

尚も心配そうな目で見てくる二人に。
少しでも安心させようと……あァ、これ何言っても無理だな。ホントに強いんだろう、奥の奥は。
いつでも【即死】防御が出来るようにしておかなきゃな。
「心配ですけど、行きますのよ」
「止めはしないといった手前何も言えんが……引き際という言葉もあるからな」
「わーったって」
足手纏い、なんだろォなァ。
……引き際、か。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

13・意分畏怖侠絵鰤寝具〉藍侠戸椎糸・

迷宮探索は順調だ。

まァ地図があるってのがデカい。その道中に化け物はいるものの、超攻撃的且つ回避に長けた金髪お嬢様と、ある程度は面の攻撃が出来て防御に秀でるポニテスリットのコンビは強かった。攻守ともに充実しているから傷も負わないし、殺傷能力も殲滅力もバランスがいい。

魔法少女ってな覚醒や発見が周期的ってワケでもねェから、俺にァ同期らしい同期はいねェものの、この二人は多分長いんだろう。魔法少女歴が何年か、っつーのは、なんだ、女性に歳聞くみてェでやれてねェんだが、機会があったら聞いてみるのもいいだろう。

さっきのポニテスリットの反応からして50年以内なのはわかってるしな。

「強いね、あの子達」

「あァ。……私はホントにいらねェみてェで」

「不要なのはそうだね。でも、【即死】が役に立たないわけではないと思うよ」

「あン？　この先役に立つことは無いって言ってたじゃねェか」
「君の実力はあの子達についていけるほどではないよ。けれど、【即死】自体は強い魔法だ。君がB級なだけで、使う人が使えば、あるいは君がもっと強くなれば、【即死】はSSSにも届き得る」
「そりゃ、どの魔法もそォなんじゃねェのか」
「いいや。どれだけ頑張ってもSSSには踏み込めない魔法は数多く存在するよ。本人がどれだけ頑張っても、SSとSSSには大きな隔たりがある」
……そういうモンかね。
殲滅力と殺傷能力が魔法少女の等級を決める。SもSSもSSSも俺的にァそう大差ないと思うんだが、ベテランの意見ってな貴重だ。
何かあンのかね。隔たるに足る差って奴が。
そういや、学園長殿はこの迷宮を浮かせたって話だが、それでSSSに認定される魔法ってのはどういう了見なんだろな。浮かせることに殲滅力も殺傷能力もないように思うが。
「しかし、この迷宮の化け物共はどォして外に出て来ないんだ？　さっきから見

てる限りじゃ、A級だのS級だの、外に出ても通用しそぉなのがいんのに」
「迷宮の外では、身体を保つことができないからね」
「保つことができない？」
そりゃ……なんだ。また知らねぇ知識だな。
だってんなら掃除の必要も無さそうだが。
「迷宮の魔物は迷宮専用の魔物だよ。後から住みついた小さな魔物は外に出ても問題は無いけど、迷宮の魔物は迷宮以外では生きられない。代わりに、迷宮ではずっと生きていられる」
「でも湧きポはあンだろ？」
「無いよ。あれらは必ず同じ場所に形成されるけれど、明確な形成地点は存在しない。あるいはこの迷宮自体が形成地点といえるのかもしれないけどね」
「……じゃァ、この迷宮の攻略ってな、どういう意味だ。過去に攻略されたンだろ？　何か……こう、征服した、っつー証あってこその攻略じゃねぇのか」
「迷宮の主を倒したからね。迷宮の主を倒した事と、迷宮の魔物が迷宮内で形成され続けること、迷宮の魔物が迷宮外で生きられないことは、何も関係ないよ」

そりゃ、困る。

さっきの決意はなんだったんだ。俺がこの迷宮の湧きポ全部潰してここで死ぬ魔法少女を生まなくする、なんてのは……前提からしてできねェってのか。

「この迷宮から、化け物の一切を消すってな、無理か？」

「不可能ではないよ。けれど、出来得るのはＳＳＳ級の魔法少女だろうね」

「そォか。じゃ、私はできる可能性があンのな」

「うん。そう言った。君が【即死】をもっと理解することで、あるいは――あらゆる魔物を殺す事も可能になるだろうね」

「今は無理なのか？　まァ魔力量的にデカすぎんのは無理ってわかるが」

「そういう意味ではないけれど、これ以上説明する気はないよ」

「そォかい」

ま、全部聞いてちゃ学びは無ェか。ちったァ自分で考えねェとな。

それに……なんだ。

キラキラツインテが全てを知っている、というわけではないようにも思う。俺が知らない事で、俺が知りたい事で、キラキラツインテが知らないことで――誰にも

知られていないこと。
　それがあるように、思う。それこそ、【即死】で湧きポが殺せるって誰も知らなかったように。前例を作らなければ、誰もできると思わない、みたいな常識の壁がある気がするんだ。
「ほら、言っている内に、【即死】が役に立つときが来たよ」
「ン？」
「梓さん！　色々言っておいてとても申し訳ないのですが――お願いしますの！」
「すまん、防御はする！　頼む、梓！」
んん？
なンだ、二人揃って。お前らに倒せねェ敵が俺に倒せるって。
あァ。
「なるほど」
そこにいたのは――半透明の青いヒトガタ。
ポニテスリットの【波動】やお嬢の斬撃に雲散されて、けれど霧消せずにもとのカタチに戻る。

「精神体ね」

そういや精神体を殺せる近接って、もしかして俺だけか？

遠《ｔｅｘｔ.ｓｌ.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

精神体を【即死】させた分の魔力を魔煙草で回復しつつ、それ以外なら問題ないとばかりにガンガン進む二人を追う迷宮散歩。……いやマジで散歩なんだよな。全然こっちに敵回してもらえないし。まァ回されたらされたで死にかねんので良いんだが……良いのか、俺、って。

ポニテスリットに言われた引き際という言葉が反芻する。

確かにそろそろ——敵の姿が見えなくなってきた。そンなちいせェ敵ってワケでもねェのに、姿が見えねェ。なんなら俺より図体のデカい化け物もいンのに、その姿を目で追えねェことがある。

「ほら、余所見しない」

「ッ！　……すまねェ、してたつもりはないんだが」

「じゃあ、完全についてこれていないね。もう無理なんじゃないかな、君では」

気付いたら、目の前にトカゲみてェな化け物がいた。

キラキラツインテがその突撃を受け止めてくれてなかったら、俺の頭はぶっ飛んでただろう。キラキラツインテはそのままトカゲの頭蓋に手を入れて――何かを潰す。

ぐじゅっ、と。まァ、場所的に、脳を。

「……いやこえー魔法だなホント」

「でも、私ではAで限界だね」

「限界、か」

限界。言っちゃなんだが、こういう敵の漏らしが出てきたってのも、二人に余裕がなくなってきた証拠だろう。俺を守ってちゃ、後ろを気にしてちゃ、本気で戦えない……か。

けど、俺が引き下がって……帰ったとして。

本気で戦っても、死ぬんだろう。

「そろそろ帰る？」

「いいや。二人に迷惑かけてでも、私ァ二人を死なせたくない」
「矛盾している自覚はあるんだね」
「ある。全体を見たら、あるいは魔法少女として考えたら、帰った方がいいってのはわかンだ。お飾りB級がいていい領域じゃねェってのはもう身に染みてわかってる。感情でどうにかなる場所じゃないってのもな」
「ふむ。その上で、譲れないものがあるんだね。……私達にとって、苦痛とは死を跨ぐための手段でしかないけれど、君にとっては違う。どうしてそう思うのかな。まだ、死んだことが無いから？」
「私にとって、死ぬことは喪失だから、だ」
「……どこで育てば、その価値観に行きつくんだろうね」
「別に、国の子供でもそォなるだろ」
「いいや。13歳でそうも死を忌避するのは、尋常ではないかな。思うに、そこまで死を嫌うのは——魔法少女ではない、誰かを、亡くした事があるのかな？」
鋭いなァ。
あァ、あるよ。何度も何度も。その度に泣いたし、永遠の別れに……途方もない

喪失感を覚えて、それでも前に進んで。そういうモンだってのが、43年分染みついてる。死ってな、痛い程の傷を心につけるもんなんだよ。

それに。

「じゃあよ、キラキラツインテ。お前は、いつ悲しいんだ？」

「……」

「私ァよ、あいつらが死んだら悲しいんだ。いてェって、苦しいって言うのが悲しいんだ。それが嫌でさ。まァ、蘇生したら、また会えるんだろう。また話せるんだろう。そっから楽しい思い出でも作れるんだろう。実際今までそうだったし、なんなら私が殺したこともあった。……でも嫌なんだよ。その度に私ァ苦しくてさ。痛くてさ。悲しくてさ。私ァ死が悲しいから、死を嫌う」

「悲しい、か」

「あァさ。悲しいのは嫌だろ。私ァ他は別にいいんだよ。苦痛と死以外なら受け入れる。何が起きたって何をされたって別に良い。ただ、その二つは悲しいから嫌だ」

それは我儘とか大人になれてねェとかじゃない。おじさんになってもそうだった。身内が苦しんでンのは、死ぬのは、つらくて、苦しくて、痛くて、悲しいんだ。

どォしたって割り切れない。どォしたって引けない。本人から懇願されたら――流石に折れる。それは。だってそれは、願いだから。だけど、俺から、ってのは無理だ。どォ頑張っても俺ァ、それを受け止め切れねェ。

俺が俺である限り。

「最後に悲しかったのは、国が滅んだ時かな」

「……魔法少女になってからは？」

「無いよ。死が、終わりが。――とても、軽くなってしまったから」

やっぱりそォいう事なのか。

50年。50年も魔法少女やってたら。あるいはアイツラも、長年魔法少女をしていたら。

死が、軽くなっちまうんだ。

……俺はまだ短いから、なんて。そんな怖い事は無い。

俺はこの先、変わっちまうんだろうか。

「でも、わかった。私も……また、滅びを。このエデンが滅びたら、悲しいと思う。それが嫌だという気持ちはあるよ。君にとっては、それが死なんだね」

そうか。

魔法少女達は、国のため、ＥＤＥＮのため、エデンのために戦ってる。

それは失いたくないからだ。俺にとっての終わりが死であるように、彼女らにとっての死はエデンの滅亡。あるいは国の滅亡。見てる距離が違うってだけだ。

終わらせないために、滅ぼさせないために、死を手段として見ている。あるいは俺が、死を回避するために、効率を捨てた作戦を取るように――過程はまァ、逆だが。

「君の嫌が、ただの我儘ではないとわかった。だから、もう一つ助言をしてあげる」

「ありがてェ」

「身体強化という魔法は部分的にかけることができる。身体全体では魔力が厳しいのなら、頭部だけ、とかね」

「そいつァ、確かにそうだな。学園で習ったよ。足だけ強化して、とか、腕だけ強化して、とか」

「でも、使っていない。どうしてかな」

「目で見えても身体がついていかなかったら意味ねェんじゃねェかって」

「君の【即死】は、何か、動作が必要なのかな」

……あァ。

っとにダメだな、俺ァ。近接っつーのは全身を強化してぶん殴りに行く、みてェな偏見があったんだ。周りがそういうのばっかだから。違うんだ。

たとえ身体がついていかなくとも——俺ァ、いいんだ。

ダメだ。魔法に関して勉強してきたつもりだったけど、全然だ。

もっともっと知識を付けなきゃなんねェ。

んで。

「ほら、いま見逃したから」

世界が遅くなる。

自分と、自分以外。いやさ、頭とそれ以外かもしれねェ。

その世界で——死ぬほど重い身体と、その中でも俺が走るくらいの速度で向かってくる銀色のトカゲの化け物。

その口先が、俺の顔を噛み千切らんと開く。

触れる。身体は重い。避けられはしない。けれど、触れた。俺からじゃねェが、

確実に触れた。
だからソイツは――【即死】した。
口を閉じる力が無くなったのを感じる。それを察知して、世界を段々速くする。
頭とそれ以外の境を曖昧にして――そんで。
ぐわん、と。俺ァ大きく仰け反った。
「ッ……勢いはやっぱ殺せねェか」
「でも、死んでない」
「あァ」
元の重さに戻った体で、顔に張り付いたトカゲを取る。
……ちょいと遅かったか。側頭にピリっとした痛みを感じる。噛まれたな。
それに、集中が強化に行きすぎて、部分的に【即死】させるってのが出来なかった。いつも通り全体を浸して【即死】させちまった。
もっと、もっと効率化出来る。
「……流石にこんなレベルのたけェとこで練習すんのはキツいが、適当な等級のトコでやれば……私ァ、もっと強くなれる」

「そう。でも、今はここを進むしかない。あの子達を救いたいのなら――ここで実戦を積むしかない。魔力はどうかな」

「結構減った。全体の【即死】を使っちまったせいだ。だが、これならフリューリ草食えば大丈夫だ」

「……フリューリ草を直で食べる子は、初めて見たかな。どうして持っているんだろうとは思っていたけれど」

「魔力増やす方法わかったらこんな不味い草食べねェよ」

「じゃあ、好きになるしかないね」

目だけ強化しても意味はない。目と脳だな。だが俺ァそんな器用な事は出来ねェ、っつか、結構強化入れたつもりだったんだがそれでもあのトカゲは速かった。さっきはキラキラツインテが来るタイミング教えてくれたからいいものを、突然来た時に目と脳だけ、って判断は今ンとこ無理だ。

常に頭部を強化しつつ、フリューリ草を食いつつで行くか。

身体は超絶重い。ダメだ、常に強化だとダメだ。

もっと上手くやらねェと動けねェ。これ修練塔で試す事であってこんな場所でや

ることじゃねェな。くそ、C級で構わねェとか言ってた過去の俺を殴りたい。なんだ監視塔の上でトロピカルジュースって。なめてんのか。

あァ、C級は努力してねェって言われる理由がわかる。知識として知っちゃいたが、っとに何にもやってなかったんだな、俺ァ。

――強化して、【即死】させる。

「え？」

「ん？」

「……今の、どうしてわかったのかな」

「何がだ？　あァ、後ろから来たのに、ってか？　音がしたからよ。……あァそうか、頭部強化は聴力の強化にもなるのか。なるほどね、そうやって気配っつーモンを探るのか」

目と脳と耳だけを。

……いやいや、今すぐにってのは無理だ。もっと身体を慣らさねェときつい。

でも、今のは上手くいったな。飛んできたのがトカゲだってのもわかったから、脳だけを【即死】させられた。跳躍の瞬間を聞き取れたから、身体を反らして直撃

も避けられた。

もしや、目より耳の方が大事か？

いや、早計だ。何が大事なのかはもっと実戦積まなきゃわからねェ。脳はマストとして、他のどこにリソース割くかを考えねェと。魔力量は限られてる。回復できるからっつってバカスカ使えるモンじゃねェ。効率化だ。脳だって、脳全体である必要はあんのか？　反射神経……っつか、知覚神経とか反射そのものとか姿勢反射とか、そういうのを強化した方がいいんじゃねェか？

……仮にそうだとしても、今脳の中身を探るのはきちィな。どこになにがあんのか、とか感覚じゃわかんねェし。

――強化して、【即死】させる。

後頭部に鈍痛。避け切れなくてその図体がぶつかったンだ。あァ、やっぱ聴覚刺激を鋭敏にすんのは大事だな。動作の始まりを聞き取るっつーのは全方位に及ぶ。目ってな前だけしか見れねェ。いやまァ耳も構造上前の音の方が聞き取りやすいんだが、後方を悟るのは耳に頼るしかねェ。

「……中々上手くいかねェもんだな」

「でも今等級試験を受けたら、君は実力だけでB級に至れるよ」
「お飾りじゃなく、か」
「そう」
消費した魔力をフリューリ草で回復する。
脳だけを【即死】させる場合、相手の脳がどこにあるかを知っておく必要がある。今でこそ俺の知ってる動物っぽい化け物ばかりだからいいものを、話に聞くアダマンタイタンみてェなのは脳も心臓も無ェだろう。ああいうのを相手取るなら、部分的に殺していくべきか。腕から、あるいは手から、とか。
……ン？　じゃあよ。
強化された聴力が音を捉える。正面からだ。視覚強化に切り替えて、暗がりから飛び出してくる――小せェヘビみたいな化け物を見る。
鋭い牙だ。パカっと開いた口は俺の顔に噛みつき、食い破るつもりか。それとも毒でも流し込むつもりか。
もう、触れる。
触れた。【即死】。全体を浸してから殺す――ではなく。

少しずつ、化け物の細胞一片一片を――全て死滅させていく。
死んでいく。死んでいく。即座に死んでいく。
そんで、潰れて行くんだ。
ヘビが俺の顔にぶち当たるより、俺がヘビを殺す方が早い。なんたって【即死】だからな。死滅したヘビの頭部に後続がぶち当たって潰れる。それも殺して、その先が詰まる。脆い。いや、脆くなった、か。死んだから。もう生きてはいないから。筋肉も骨も何もかもが死んで、砕けて行く。
遅くなった世界で込める。意思を込める。死ね。速く死ね。死ね、死ね。死滅しろ。【即死】しろと。ヘビを――その身を構成する全てを。
「――できたな」
「消費魔力は？」
「全体を浸してた頃と変わらねェ。いや、強化の分こっちの方が多い。だが」
だが、だ。
だが――俺の身体は、仰け反ってもいないし、痛みを覚えてもいない。
顔面にヘビの死骸がぶつかったっつー不快感はあれど、一応これで、完成だ。

「ノーダメージだ。【即死】による絶対防御……あァ、あとは効率化だ。強化の割り振り、切り替えのタイミング。そういうのをちゃんとやれば、私にァ何も効かなくなる」
「うん。いいね。私とおんなじ」
「あァそォか。つーことは、反魔鉱石投げられたらやべェな、私ァ」
「……折角助言してあげたのに」
「冗談だよ。つか自分で自虐してたクセに弄られんのは嫌なのかよ」
オトシゴロか。
……いやまァ、無かったよ。俺のデリカシーも。調子に乗りすぎたな。
「さて、あいつら追いかけるか」
「それが良いと思うよ。結構離れてしまったから」
「んじゃ脚を強化して、とか調子に乗るとすぐ死にそうだからよ、そっちはまだ普通で行かせてもらうぜ」
「うん。走力を上げたとしても、君の耐久性が変わるわけではないからね。硬い魔物にぶつかったら君がさっきのスネイクみたいに潰れちゃうんじゃないかな」

「怖い事言うなァ」

……お嬢も、自分の【神速】に慣れるために、努力したんだろォな。

だからこそのSS級だ。ポニテスリットだって、背中メッシュだって太腿忍者だって。

みんな頑張っての、A級以上だ。

「いつか君が、戦場を歩くだけで、進む先にいる魔物の全てを死滅させる……そんな、SS級のような光景を見る日が来るかもね」

「それになるにァ、効率化しまくらねェとなァ」

「魔力量も」

「いやそれは増やせねェんじゃねェのかよ」

「私が知らないだけだよ。誰に聞いてもわからないだけ。増えたという話は聞かないし、減ったという話も聞かないだけ。それだけ」

可能性はゼロじゃねェって？

あァさ、まさに俺の考えてた事だ。俺の考え付くことくらい、キラキラツインテにも思いつくか。そォだよな、コイツだって努力でAに上り詰めた側の奴だ。

……よし。

「この迷宮無事に出たら、私ァＡ級目指すよ。そのために、こんな迷宮さっさと踏破して、外の空気でも吸いに行かねェと息が詰まる」

「この迷宮を踏破出来るのなら、Ｓ級に届くと思うけれどね」

「ちったァやる気の出る発言はできねェのかお前」

「現実を教えてあげているだけだよ」

まァ、それはわかってるけどよ。

……いいか。今はとりあえず、あいつらに追いつこう。

話はそっからだ。

そっから、俺を新しく始めよう。

死なせたくねェなら――見合う実力を付けた俺になるために。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１：２》吠えけ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

14・間軸伊豆和宙鵜恩戸塔吏部・

「おーい、お嬢、ポニスリ、大丈夫か？」
「それはこちらが言いたい事ですのよ梓さん！　まったく、私達がどれだけ探したと……」
「いやすまん、上階でキラキラツインテと魔法の勉強しててよ」
「ほう？　何か進展があったのか？」
「あァさ。ちったァ強くなったぜ、私ァ。ま、お前らの足元にも及ばねェが」
……一瞬、試されるんじゃねェかって聴力の強化をしたが、二人はそんなことしてこなかった。あの班長のせいだ。調子乗った事いうと試されるんじゃねェかって身構えちまうのは。
魔煙草を取り出して、吸う。ふぅ、不味い不味い。余計な魔力使っちまったからな、回復しねェと。
「なるほど、部分強化ですのね。それならば確かに、今までよりは強くなれたかもしれませんわ」

「だが、それだけでは無理だぞ、梓。この先は……今までの比ではない」

ここは第二の休憩地点。

第二にして最後。つまりこっから先が、最深部周辺って奴だ。今までのも十分ヤバかったが、俺が相手したのはこいつらに殲滅された撃ち漏らしと、キラキラツインテに見逃された奴だけだからな。これ以上、なんだろう。

まったく、国の奴らは知ってんのかね。

ンな危ねェもんがわんさか湧いてる迷宮が、自分達の頭上にある、ってコトを。……あァいや、迷宮の化け物は迷宮外じゃ生きられねェんだったか。だが、あのヘビだのトカゲだのは固定湧きって感じしなかったよな。普通にいる化け物って感じだった。

そう考えりゃ定期的に掃除しねェとダメって理由もわかるか。上の弱い奴らを追って、あんなのがわんさか出てきたら大変だ。まァ上の弱いのでも魔法少女以外なら簡単に殺せそうだが。

「引かないんだな」

「あァさ。私ァ踏破するよ、ここを」

「部分強化程度で調子に乗るな、と言いたい所だが……いいだろう。ここから先は、私達も余裕がない。お前を守りながら、というのは厳しい。だから、自分の身は自分で守れ。あるるらさんのことだ、そのための技術を教え込んでくれたのだろう？」

「大正解」

「おォ、防御方法をな。教えてもらった」

「なら、いい。フェリカも私も、前に集中できる」

「ええ――ここから先は、至難にして至高。一度は攻略された迷宮なれど、倒れていった魔法少女は数知れず。迷宮の材質も変わるので本気を出しても問題ない――最上の修練場ですわ」

ヘェ。そーなのか。

確かに今までは、迷宮を壊しちゃいけねェからセーブしてたんだったな。

……ポニテスリットや金髪お嬢様の攻撃に耐え得る材質が使われてて、そこに住んでる化け物、か。そりゃまァ、強いんだろォな。

「梓さんの死んでほしくない、死にたくない、という思いは受け取りました。けれ

ど、はっきり言います。無理なものは無理ですわ。貴女を守る事を含めて――この先、私達は必ず死に至るでしょう。ですが、もう逃げてくださいとも、帰ってくださいともいいませんの。ですから」

「あァさ、一緒に戦わせてくれ。そこばっかりはそっちの懇願じゃなくて、私の意思でよ」

「……一緒に戦ってください、と。格好つけようとしたんだろう、フェリカ？」

「梓さんってたまにノリというものを理解してくれませんわよね……」

いんやさ、俺だってカッコつけてェのさ。

よく被るだけで。

「じゃあ、私はここまでかな」

「ん。そォか。ここまでありがとうな、キラキラツインテ」

「うん。君達が誰一人死なずに帰ってくる事を、中央塔で祈って待ってるよ」

「死ぬと思ってンじゃねェか」

蘇生してくる前提じゃねェか。

「またね」

言って。
キラキラツインテは、ふわーっと浮かんで、天井に吸い込まれるようにして消えて行く。
……【透過】、ずりぃな。
「【透過】ってずるいですの……」
「ま、彼女にも私達の魔法をずるいと思う事はあるだろう。得意不得意はそれぞれだからな」
その通りなんだがよ。
いやでもずりぃだろ。どこでも行き放題って。
「気を取り直して――魔力回復も十分ですわね？」
「ああ。問題ない」
「おぉさ、行けるぜ」
「では――行きますのよ、迷宮の最奥！」
やべぇやべぇと噂の迷宮最深部周辺。
攻略開始、ってな。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

やっべーわ。っぱねー。
「ミサキさん！　後ろですの！」
「分かっている――くッ!?」
「止まりゃこっちのモンさ！　って、オイ避けんな！」
「逃がしませんの！」
速い。何だってんだってくらい速い。視覚強化は意味ねェってわかった。遅くなった世界の中でも自動車くらいのスピードで向かってきやがる。あとお嬢がその中でも更に速い。見えねェくらい速い。
その上で、凄まじい威力の攻撃だ。ポニテスリットが大半は防いでいるが、しっかり押されてる。力逃がして壁に叩きつけさせたりもしてるみてェだが、そん時の音が尋常じゃねェ。くそでけェ鉄球同士を射出してぶつけあったみてェな音がする。アレでいて殴った側の拳が潰れてねェのもやべェ。

つか俺の銃、弾速おっせェ。化け物の速度に一切追いつけてねェ。これァばら蒔いた方がまだ使えるな。

「後方、左角！　さっきの鎧騎士だ！」

「【波動】！」

「からの、ほらよ！」

強化された聴力が金属の擦れる音を聞く。口は簡潔な報告をし、手は弾丸を一つ握る。

その瞬間にはポニスリの【波動】が俺の後ろに展開されていて、鎧を纏う精神体の斬撃をガード。握った弾丸を放れば――その弾丸ごと、お嬢が鎧騎士を突き貫く。

「梓さん、もっと速く投げられますの!?」

「あァよすまんな！　もうちょいいける！」

さっき開発した連係だ。俺の弾丸じゃ鎧騎士の鎧を貫けなかったンで、俺の弾丸を剣先にお嬢に貫いてもらう作戦。それでもしっかり【即死】は発動するんで、お嬢の攻撃に【即死】のエンチャントがされた、みてェな感じだ。

ただそれにァ俺の対応が必要。四の五の言ってらンねェんで腕の強化もしてあ

る。
当然消費魔力は膨れ上がるが、【即死】の分の魔力は使ってねェ、元から込めてあったモンだからな、そこの差分でなんとか、だ。
ちょいと休憩があればすぐにフリューリ草を食べる。不味いとかの話じゃねェ、食わなきゃ死ぬんだ。
「ポニスリ、上！」
「お前の後ろもだ、梓！」
「そいつァわかってるよ！」
ノールックで炸裂弾を連発。壁や地面に向かってな。
銃弾を避けられるってンなら、避けられねェ面攻撃をすりゃいい。後ろには味方がいねェんだ、俺から5m離れてりゃどこに撃ってもいい。
頭を下げる。
「すまん、撃ち漏らしだ！」
「問題ありませんの！」
聴力だ、強化すべきは。

その音が何かを判断する前に、どこに向かってるのかさえわかりゃ避けられる。
相手が俺より小さけりゃ、だが。
「謝る暇があれば戦え、梓！　敵は待ってはくれないぞ！」
「あァさ！　――お嬢、右に跳ねろ！」
「――ッ！」
落ちてきたのは、鉱石が如き拳。
ゴーレム種だ。精神体の宿った岩人形。無限に再生し続ける厄介な化け物。凍らせるとか縛り付けるとか、行動封じ以外では倒せない近接魔法少女殺し。まァ精神体系の化け物は大体そうなんだがよ。
「おら、たんと食え！」
「突き入れますの――！」
それに対し――だが、殺し得る手段を放り投げ、ばら蒔く。
銃弾。発砲ではなくただただ放られたソレを、お嬢が【神速】を用いて的確に突いていく。百突きって奴さな。百発もねェけど。
それは確実にゴーレムの体内に入る。

「ポニスリ！」
「ああ――砕け散れ！」
トドメはポニテスリットの【波動】。こういう硬い系にはめっぽう強いからな、【波動】は。無論柔らかいのにも強いんだが。
ゴーレムの体内にあった弾丸がそれぞれ【即死】を発動する。行動封じをしなければ殺せないゴーレムを――中の精神体が逃げる間も場もなく、完全に殺し尽くす魔法。
「ハッハァ――精神体が私に勝てるかよ！」
「突き入れたのは私ですわ！」
「砕いたのは私だ」
「なンでそこで対抗してくンだよ」
あァ。どうだ。おい。
戦えてんじゃねェか、少しは。
……なんて調子には乗らねェ。俺ァ今お嬢とポニスリのサポートをしてるだけだ。便利な【即死】をばら蒔いてるだけだ。

「――【即死】！」
「何を――上か！」
「助かりましたわ、梓さん！　下がって！」
殺気を感じた、なんて言ったらファンタジーかね。
さっきの鎧騎士もそォなんだが、どうにも俺ァ殺気や殺意ってモンを理解できるようになってきた気がする。いんやさ、遠征の時のアレも気のせいじゃなかったし、なんか来るんだよな。
殺してェ。あるいは死ね、っつー感情が、流れてくる。
ネズミやコウモリ、ヘビやトカゲにァ無かった感覚だ。
……知能が上がっている、とかかね？
「今のは完全に助けられたな」
「いんやさ、とどめ刺したのはお嬢だ。私ァ腕を殺したに過ぎねェ。……あー、なんだこりゃ。これもゴーレムか？」
「マリオネッタという。精神体の一種だが、コアがある分近接魔法少女でも倒し得る魔物だ」

「あァ近接魔法少女でも精神体って倒せんのね」
「当然だろう。得意不得意はあれど、我々魔法少女に倒せぬ魔物がいるものか」
いんやさ。
俺のレアリティはやっぱそんなでもないんだなー、とか。
別に落ち込んじゃいませんよ。
「お二人とも！　雑談している余裕はないですわよ！」
「あァよ！　つかお嬢、しゃがめ！」
「ッ!?」
SRを大して狙いもつけずに撃つ。
お嬢には当たらねェコースだが、化け物にも当たらねェか、これじゃ！
「場所が分からずとも！」
しゃがんだお嬢が仰け反るように跳躍する。
ピンと伸ばした切っ先は俺の弾丸を確実に捉え――そのまま、背後にいた化け物を貫き殺した。おいおい、どんな反射神経してんだ。つか体のバネどーなってんだ。
足音。

「ポニスリ、背中側全面に【波動】を展開しろ！」
「っ、またゴーレムか！」
「踏み止まるな、そのままぶっ飛べポニスリ！」
ポニテスリットの後方に展開された【波動】はゴーレムの拳を受け止めている。その衝撃そのものは殺せているけれど、ゴーレム側に引く気がないんでポニテスリットは押されるしかない。が、人間の構造上後ろからの衝撃ってな前からのモンより耐え難いはずだ。だからそのまま押し出されてもらう。
その、腕。ポニスリのじゃねェ、ゴーレムの腕だ。それに触れて――【即死】させる。
背後、ゴーレムに触れてねぇ方の手で投げるは【即死】の弾丸。
「【神速】――っ！」
ゴーレムは防御をしようとした。同族の死を見て学習しているのか、弾丸を体内に入れなきゃ問題ないと悟ったのかはわからねェ。が、防御しようとしたのは事実だ。
出来なかったが。

「ははは！　わからねェだろ、腕が死ぬってな感覚は！　体験したことねェだろ！」

その腕は俺が殺している。

戸惑いが見て取れる。お嬢の突きが身体に入るまでの短い間、ピクりとも言わねェ腕に困惑したまま、ゴーレムは【即死】した。

……やっぱり知性があンな。厳しい環境で生きて行くために身に着けたってトコか。

知性がありゃ、殺気も感じ取れる。

「二人とも、こっちだ！　下層への階段を見つけた！」

「ナイスだポニスリ！　行くぞお嬢！」

「っ、ええ！」

見逃さない。俺ァそういうのには聡い。

けど、今は言ってられねェ。だから行くしかねェ。

無理なものは無理？

嫌だね。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

戦闘は激化する。
マトモに相手をするのではなく、弾いて生きて防御して逃げて、下層への階段を見つけるしかなくなってきた。地図なんざ見てる暇ないンで、ある程度の場所だけ覚えて方向感覚を頼りに進んでるだけだ。
地面に少しばかりの水が張ってるせいか、滑りやすい。その分化け物の歩く音は聞き取りやすいんだが、同時に俺達の歩く音も化け物に聞こえてるはずだ。聴力強化してんのは何も俺だけじゃねェようで。
「っはぁ、っはぁ……ふぅ」
「大丈夫か、梓」
「梓さん……」
フリューリ草を食う。つかもう飲む。噛まずに飲む。咽る。やっぱちゃんと噛もう。

なんだ、反応は出来てる。ギリギリだが、聴力の強化がいい仕事してる。脳の強化も。

だが魔力が足りねェ。回復においつかねェ量の敵が来るもんで、【即死】弾丸以外の……つまり通常の【即死】も求められる。上にいた大蛇みてェに、外皮のかてェ奴とか、図体のでけェ奴に、だ。

このままじゃジリ貧もジリ貧。んなこたわかってるが、どうしようもねェと来た。

「私ァ大丈夫だ。つか、見逃してねェぞお嬢。お嬢も結構魔力キツいんだろ？」

「えっ？」

「【神速】がどんだけ魔力食うのか知らねェけどよ、さっきからずっと使いっぱなしだ。私達よりもずっと長い間、身体強化と【神速】を使い続けてる」

「だ、大丈夫ですの。これくらいではSS級は負けませんのよ！」

「何強がってんだよ。ほれ、食え」

「あそっち……じゃなくて！　嫌ですの、それ不味いのでしょう!?」

何がそっちなんだ。おじさんにわかる言葉で話してくれ。

つか不味いから嫌って子供か。

「どうせ魔煙草も亜空間ポケットにしまったままなんだろ。微々たるモンだろうが、回復量は馬鹿にできねェぞ。ポニスリ、お前も食うか？」
「私は遠慮するが、確かにフェリカの魔法は発動時間が長い。その消費も激しいだろう。食べた方がいいと思うぞ」
「うぅ……うー。……でも、そうですわね。我儘は言っていられませんわ……」
フリューリ草を渡す。手に取るお嬢。
匂いを嗅いで、一瞬安心したような顔を見せる。そのまま、恐る恐る舌を突き出し、葉に触れて――この世の終わりをみた、みてェな顔をした。
「よく、これ、たべられ、ますの、ね」
「あァさ。生きるためだ。不味ィもんも苦ェもんも生きるために必要なら食える」
「……なら、私も貰うか」
「ん。なんだ、ポニテスリット。お前は割と効率的に魔法を使ってるように見えたが」
「いや、生きるため、と聞いてはな」
俺からフリューリ草を受け取り、舌を付け、やっぱりおんなじような顔をするポ

ニテスリット。

今化け物がいなくて良かった。こんな状態の二人じゃ戦えたかわからねェ。

「……そうですわね。私達は……生かすための戦いはしてきましたけれど、生きるための戦いというのはしたことが無かったかもしれません。魔法少女は生体兵器。故に国の壁となり矛となり死兵となれ。それこそが私達でしたが――今の敵は、国に仇為すモノではありませんわ」

「あァよ、死なねきゃ罰になんねェって考えなんだろ？　今回の命令違反への罰ってなよ。じゃあ、無傷で帰って、生きて帰って、すまねェ罰になんなかったわ、つってよ、開き直ってやろうぜ」

「そんなことをすれば更なる刑罰が待っていそうだが……中々面白い考えだ。乗った」

苦い顔をしながら。

けれど、なんだか……ちょっとだけ、楽しそうにしながら。

「不味いので、もう一枚貰えますの？」

「あァさ。私も食べる。ポニテスリットは？　まださっきの飲み込めてねェか？」

「んぐ。いや、今のみ込んだ。貰おう」
「強がるねェ」
意識改革になったかどうかはわかんねェ。んなことする必要があるのかもわかんねェし、俺の理念に付き合わせることもねェってわかってる。
だが、今はよ。
少なくとも死に行くのではなく、生きるためにいくんだと。そう思ってくれたみたいでよかったよ。

「んじゃ――【即死】」
「……！」
「今のは」
はっはっは、読めてきたぜ段々。
物食った後が一番隙だらけって知ってるよな、知性付けた獣なら。あァ、群れてる相手を絶望させんならそこだ。狙い目だ。そうして一匹やった後に、動揺して一緒の方向に逃げねェ散らばったのを、一匹ずつ食っていくんだ。

強い奴のやることさ。獅子の考えだぜ、そいつァよ。
「ポニテスリット、次に私が合図したら、この通路塞ぐくらいでけェ【波動】張ってくれ。強度はそんなになくてもいい」
「わかった」
「お嬢はその後ろで待機だ。神経研ぎ澄ませて、後続に来るだろう奴らを狙ってくれ」
「……それは、梓さんが前に出ると。そういうことを言いたいんですの？」
「あァさ。ここまでくれば、私の独擅場さ」
「……」
心配、って顔してるな。
まァそうだろう。俺ァさっきキラキラツインテにB級と認めてもらったくらいの奴だ。戦闘に関しちゃ素人に毛が生えた程度で、強化もそこまで上手くない。
だがよ、敵の狙いがわかるってなら、話は別だ。
数も少ない。逆三角錐だ、迷宮も狭くなってきた。ははは、俺ァ死地を前に笑う奴だったかね？　なんぞか知らんが、どうにも昂揚感みてェのが抑えられねェ。

なんでか、あァ、どーにも――テンションが高い。ボルテージが上がってるって奴だ。

「お嬢もポニスリも、私より強ェからな。私の前にいたら上手くいかねェんだ。私の強さは信じなくていいんで、私の考えだけ信じてくれ」

「いえ。信じていますわ。梓さんの全てを」

「そりゃァいいな」

言って、引き下がる金髪お嬢様。

あァ、いいな。信じられるなら応えたくなる。後ろにいるヤツの信頼に応えんのが前を進む者の役目さ。

「さァ来いよ、クソデカライオン。あァいやスフィンクスか？　どうでもいいか。四角推でもねェしな」

そこに、いた。

なんぞ――ちいせェ獣をわんさか引き連れる、四足の化け物。さっきの様子見みてェな攻撃をした後から、ずっと。ずっとこっちを静観する、まァ、なんだ。

ボス、って感じの奴。見た目的に一番近いのは、メスライオンかね。鬣の無ェラ

イオンだ。翼生えてるが。
まだ最深部じゃねェはずなのに、はは、このフロアの主ってか？
「まずは一発、ドカンだ」
発砲。SRじゃなく拳銃。
だが――この弾丸に込められた【即死】はさっき詰めた代物だ。いつものなァなァなそれじゃねェ。
死ねと。殺すと。世界を呪う想いを――殺意を込めて作り上げた、他の弾より禍々しさの増した弾丸。
それは真っ直ぐに獅子へと突き進み。
「今だ！」
ほぼ同時、俺の身体は【波動】と獅子に挟まれていた。
クソ程速い。嫌になる程重い。
だが――止めたぜ。
「すまんな相棒！　安藤さんトコでまた会える日を願ってる！」
止めた。手じゃねェ。身体じゃねェ。

背後を【波動】に任せて、SRの銃身で獅子を止めた。
一瞬だ。一瞬だけだ。もう銃身は曲がりつつある。否、折れつつある。
大きく口を開けた獅子に、その鋭い爪に。
引き裂かれそうになる身体は——しかし、【波動】の丸みに助けられる。それだって一瞬だ。耐久度を求めてねェから、すぐに破られるだろう。
絵面的にはもう、俺の身体が獅子の口ン中に入っている形だ。
「ハハハハハ！　知らなかったかよ、百獣の王！　拾ったもん食ったら腹ァ壊すぜ！」
その咥内を。
その喉を。
その頭蓋を——殺す。死ね。死ね。速く死ね。即座に死ねと。
発動する。【即死】を——今回ばかりは、あのヘビと同じく、全てに。顎の筋肉を、脊椎を、翼を、脳を、瞳を胃を頭蓋骨を腱を肋骨をいんやさ全部だ全部を全部さ殺す。
知ってるよ。プライドあんだろ。一番弱い奴殺して号令だ。俺ァ知ってんだよ。

考えがおんなじだからな。

お前が来るって知ってたし、誰を狙うかも知ってたし、お前が――最後の最期まで全力を尽くすのも知ってんのさ！

「生きるためだもんなァ！　ああ、そりゃ私と一緒さ！」

あの弾丸で悟ったはずだ。

コイツは弱いが、自らを死に至らしめる者だと。なれば絶対に殺す。王であることは関係ねェ。子供のためさ。後ろにわんさかいる子ライオンのために、次なる王のために、あるいは番のために。後ろに続く奴らのために、前に出る奴がすることさ。

何も無いならそれでいい。何かあってからじゃ遅い。

勝てるならそれでいい。だが、勝てねェんなら、死力を尽くす。

おんなじさ。

「だからよ、お前に何ができたのかは知らねェが――ソレごと潰すぜ！」

何かをしようとしていたのはわかる。

全身が死滅し、崩れ落ちて行く中で、けれど瞳はこちらを向いて、何かをしよう

としていた。魔法の類か。精神体のようなものを放つつもりだったのか。
知らねェ。知らねェのさ。生きるために何かをするつもりだった。生かすために、多分、自分ごと俺達をどうにかするつもりだったんだ。侵入者は俺達の方だ。誰も入って来なけりゃ、誰かがどっかで諦めてりゃ、こいつらは平和だったんだ。
それを脅かすものとして。
お前を食い破って、生きて行く者として。
「お嬢！」
波打つ壁を破壊して、金色の風が俺の横を駆け抜ける。
敬意を払う。
一瞬の戦いさ。一瞬だ。お前達の築き上げたものは一瞬で崩れ去る。
だから、あァ、生きるために向かってきたお前は——俺が殺してやる。
死にゆくものでなく、死を願うものでもなく。意思のないものでも、知性をつけたばかりのものでもない。
明確に、生きるために殺す、というのなら。
「私達が！　生きるために——死ね！」

世界を呪う言葉ではなく。
俺達が進むための、障害を払う言葉として。
死ね、死ね、死ねと。散々吐いてきた言葉の中で、初めて。
禍々しくない――何か、眩しいものが生まれた気がする。世界と自己。その中に、別のものが。
「ポニテスリット！　私をお嬢の元へぶっ飛ばせ！」
「馬鹿が、誰が味方に攻撃するものか。共に行くぞ、梓！」
「あァさ！」
グン、と引っ張られる。
何かを成そうとして、けれどなにも成せずに塵となっていく王を崩して。
俺とポニテスリットは――その金色の風の中に、突っ込んでいった。

「危ないので次からはやめてくださいの!!」
「おォ、そんな怒らなくていいじゃねェか。万事上手く行ったんだし」
「もう少しで私が梓さんを斬ってしまう所でしたわ!!」
「すまねェって」
いんやさ、普通に怒られた。
どうにも本気で子ライオン共を殲滅していたらしく、そこに突然現れた俺とポニテスリットに大層驚いたそうだ。まァそォだよな。見えるモン全部殺す気でいたところに仲間が現れたら驚くわな。
「一緒に突っ込んだポニテスリットも悪い」
「お前がぶっ飛ばせ、などというものだから、何か策があるのかと思ったのだ。まさか無策に加勢に行こうとしただけとは思わないだろう」
「無策じゃねーって母ライオン殺したら子ライオンもいけるんじゃねェかって思っただけだよ絶対動揺するし」
「ならば、どのようにして加勢しようとしていたか言ってみろ」

「……そりゃ、なんだ。銃撃ってよ」
「どっちも同じですの！」
割と決戦に近い雰囲気だったんだが、ほっかりしちまった。いやさお嬢が強い強い。
俺の大一番は確かに役に立ったが、他の化け物を殲滅したのはお嬢様だ。殲滅力、ってのは【即死】じゃどーにもならんのかねェ。
「でも、梓さん。凄いですのよ。あれはアンヴァルといって、SS級の魔物ですわ。速度は私に匹敵しますの。膂力に至っては、私を超える程。それをああも華麗に【即死】させるとなると、A級も夢ではないですわ！」
「いんやさ、ありゃ状況が整ってたからだよ。平地でアレと戦ったら普通に死ぬ。だから逃げるね」
「それでも反応できたのが凄いと言っているんですの！」
「反応も何も、視力強化もしてねェからな、アレは。来るってわかってたトコに来た感じだ」
「そうだったのか？　まったく、危ない事をする……」

目ェ見てわかったんだ。
コイツは俺とおんなじだって。生きるために相手を殺すヤツで、俺より覚悟決まってる奴だ、って。
なら、俺みたいに遠回りじゃなく、真っ直ぐ来るって思った。そんだけだ。
「で、これでどんくらいなンだ、迷宮は」
「あと1層ですわ！　その奥が最深部！」
「おォ？　んじゃなンだ、私は戦えてンのか、結構」
「戦えていると思うぞ。魔力もまだ底を尽きてはいないだろう。あれほどのものを【即死】させたというのに、だ」
「……確かに」
あれ、そォいやそォだな。
なんでだ？　あんなでけェライオン【即死】させたのに、魔力は十全に近い。そんなワケねェんだけど。
……十全、っていうか。
「ちょっと、増えた……か？」

「何？」
気のせいでなければ。
十全に近い、という感覚は、上限があがったからで、元の魔力量的には十全、というか。
……なんだ、これ。
あの眩しいものが原因か？
「なんにせよ、回復したのなら良かったですの。さぁ向かいましょう！」
「ちなみに次の層でフェリカが、私は今の層で死んだ。前回の話だが」
「気を引き締めろ、って事か」
「お前は十分に戦えている、という事だ」
「ヘェ、ポニテスリットが褒めるのは珍しいな」
「そうか？」
「いーきーまーすーのーよー！」
あァさ。
なんで魔力が回復したのかとか、さっきの高揚感みてェな感覚はなんだったのか

とか、まァ色々気になる事はあるんだが。
次と、次で最後。
――割と行けるんじゃねェか、なんて油断はしねェよ、もう。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

15・藍日亜土湯上薄井栖・

ぶっ飛ばされたと分かった時には、金髪お嬢様が後ろにいた。
「――ッ!?」
「くそっ！」
あァよ、骨折したなコリャ。いてーいてーの。まァ前世のバイクでずっこけた時よりはマシかね。お嬢がだいぶん助けてくれたみてェで、いんやさ、油断したつもりはなかったんだが。
階段降りてすぐ、だ。あらかじめ待ち構えてたのか、降りてきてすぐに反応したのか。
どちらにせよ無理だな。反応できねェや。どんだけ強化したって今の俺にァ無理だ。反応できたとしても、完全に避けなきゃ死ぬ。ハハ、小せェ身体で良かったよ。少女の体躯だからこそ、軽くていいカンジにぶっ飛ばされた。
腕はポッキリ逝っちまったが。
「お嬢、離れろ！　狙いは私だ！」

「ッ！」

そこで我儘いうお嬢様じゃァねェ。しっかり離れてくれた。

んで、もっかいぶっ飛ばされる俺ね。うわやべェ、マジで反応できねェ。狙われてるのが俺だってわかってんのに――コイツ、殺意がねェ。ただ、一番弱いのを狙ってるだけだ。

迷宮の端の方まで飛ばされて、床転がって壁にドン、だ。

転がれたのはでけェ。そこである程度時間稼ぎができた。一瞬だけ全身強化ってのをしてみたんだが、あァ、多少はダメージを削げたよ。っとに気分程度な。

……いやよ、俺ァ、久方ぶりにこんな大怪我したんじゃねェか。

そォだ。確か、魔法に【回復】や【治癒】が無ェって知った時から、怪我負ったら死ぬしかねェんだって忌避感があった。だから、あの敵の魔法少女と戦った時でさえ、ちゃんと怪我はしないようにしてた。

が、なんだ。こんな――なんでもねェ、俺がついていきたいといった場所で、片腕バキボキさ。

遠く。っつか、俺が端っこにいったンで、階層の中心部で二人が戦ってる。
金髪お嬢様はまだ戦えてる。けど、ポニテスリットがキツそうだ。【波動】の防御が間に合っていない時があるし、間に合ったとしても押し返されて飛ばされてる。【波動】そのものもへこんじまってるように見える。魔力の干渉……強度か。あの大蛇と同じさね。
あー。
なンだ。おいおい。
意気揚々ってワケじゃねェ。この先必ず死ぬと、無理なものは無理と言われて、嫌だって拒否してさ。
この程度、じゃ……カッコつかねェだろ。
ハハ、無理だってよ。敵じゃなく、他ならぬ仲間に言われてさ。
「ひひ……あァ、ダメだな、っとに。てめェで言ったんだろ、仲間が傷付いていくのは悲しいって。苦痛を負うのはつらいってさ。……なんで笑ってんだよ、オイ」
誰に向けるでもない、俺に向けた罵倒だ。雑言だ。
なんでだ。ホントにさっきから——気分が高まって仕方ねェ。俺ァよ、こんな奴

だったか？　前世にあっても、別にそこまで蛮勇な奴じゃなかっただろ。ちったァ前に出ることはあったよ。部下を持つ身だ、それくらいはあった。けどちゃんと冷や汗かいてたし、ちゃんと腹ァ痛めてただろ。

何が変わったんだよ。前世の俺と、今生の俺で——何が変わったよ。

「ンなもん、決まってらァな——」

片手で、拳銃を構える。

魔法少女だ。別に強化しなくとも、片手で銃撃てるくらいの力はある。変わったことはンなことじゃねェが——あァ、それはイイコトだ。

視界の真ん中で——金髪お嬢様が、打ち上げられたのが見えた。ポニテスリットじゃねェ。お嬢が追いつかれたんだ。

打ち上げられて、その落下地点に槍を構える奴がいる。敵がいる。

ようやく見えたんだ。ようやく化け物の姿が見えた。あァ——皮肉な格好してやがる。

白い翼。鋼のような胴体。手に持つ槍は鋭く長く、その眼孔は何を映す事もない。荘厳な装飾の為された籠手と、目に見える程に圧縮された魔力。それらは光球

と天輪を召し上げ――この階層を、強く照らす。
ここだけ迷路になってねェんだ。ここは、ただ、奴と戦うためだけの場所。
虚ろなる天使――そんなヤツだ。あの化け物は。
天使が、少女を相手に、その命を摘み取らんとしている、なんて。
「天使が死なねェって、んなこたねェさ。死なねェのは神さんだけなんだよ。お前に永遠は与えられちゃいねェ」
撃つ。
弾速は遅い。天使の速度にも、お嬢の速度にも、ポニスリの速度にさえ敵わないだろう弾丸が――お嬢を待ち構える天使にすっ飛んでく。
それに対し、天使は。
「――！」
手に持つ槍で弾丸を打ち払うと同時、コッチに向かってきた。
お嬢からも、ポニスリからも意識を逸らして、コッチへ。一番脅威度の低いはずの俺を、狙って。
速いなんてモンじゃねェ。おかしいんだ。こっちに真っ直ぐ向かってきてんの

に、消えたように思う。もう目の前にいるってな、一体どういうコトだって。

「ばァか」

「！」

超至近距離で炸裂が起きる。

絶対来ると思ってたから、撃った直後にばら蒔いておいた弾倉だ。全弾だ。後の事とか知らねェ知らねェ、今を生きるために全部やってやる。

――が。天使は、それさえも避けやがった。なんだ、槍の一振りで全ての【即死】を発動させて、自分は一瞬で後ろに退いたンだ。近接魔法少女みてェな戦い方をしやがる。あるいはてめェの方が先か？

強制的に発動された【即死】の魔力が大気に溶けていく。あーあー、勿体ねェことしやがる。俺の毎日の頑張りがよ。

――≫死ネ（理単）≪

「！」

寸前で避ける。

避けた？　俺が？

見えてもいねェのに？
――≫死ネ、死ネ、死ネ≪（兎修・伏理伊豆・遭上意・）
「……！」
避ける。避ける。
わかるってワケじゃねェ。何の攻撃されてんのかもわかンねェけど、避ける。斬られてンのか、突かれてンのか、薙がれてンのか、あるいは別の何かか。
一切理解のできないまま、理解のできない攻撃を避け続ける。
――≫死ネ、我々ヲ脅カス者≪（泥椅子伊豆能登湯上伏零須・）
「――死ね」
今、わかった。
いや何されてンのかは何にもわかンねェままだが、わかった。
どこへ行けば、死なないのか。わかった。
――≫死ネ、此処ハ聖域ナリ≪（理単戸滅琉・葉阿歩止琉・）
「――死ね」
攻撃が見えたわけじゃねェ。相変わらず反応はできてねェ。けど、わかる。俺の

死なない位置が。どこにどう身体を動かせば、俺に死が訪れないのか。全てが必殺。全てが必死。

だから、か？

敵の攻撃が、俺にとって【即死】だからこそ――わかる、みてェな？

――≪死ネ、彼女ノ愛シキ子≫（悪世伏戸恵田兄茶印地迎斗負不出栖.）

「――死ねよ、そろそろ」

言葉に従い、意思に従い、【即死】が発動する。

今まで俺が触れた場所。今まで俺に触れていた場所。掠めただろう。気付かなかっただろう。俺を傷つける度に――俺から漏れていた、微々たる魔力に、など。

魔法とは魔力によって為される。目に見える程濃密な魔力があるなら、感じ取れぬほど希薄な魔力も存在する。魔法少女達はそれを、余剰魔力と呼ぶ。

自らの魔法を発動するにあたって、込め過ぎた魔力。敵を殺傷することにおいて、使わなかった魔力。それらが本来世界へと溶けて行く所を、掴んで、引き戻して――己が魔力と再認させる。

世界に、だ。誰にでもない。自己と世界。自分がそうだと言っているから、世界

にもそうだと認めさせる。

「糸伊豆阿派青磁負不伏零矢堕千経度戸地内途（それはよるにささげるいちせつのいのり）」

――≫死ネ（大）！　世界ノ忌ミ子ヨ（寝具栖座頭集琉鈍斗徴陽亜）――!!≪

「藍出内沙米紫遠（私は救いを否定する）」

触ったんだ。触れたんだ。浸透したんだ。

俺の中でそうなったから――世界（お前）も認めろ。

死んだんだ。コイツは。俺の中で――もう、とっくに。

「……ん？」

倒れてくるのは、わかった。もう速く無いから。

ただ――めちゃくちゃ重そうな鎧が。俺の方に――倒れてきたのだけ、わかった。

「ワァオ」

それを避ける余力は残って無かった。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

何が起きたのか、と問い詰められて、腕折られたんだよ、と答えたら、知ってますの！　って言われた。

「いんやさ、すまねェけど、何が起きたのかはわからねェんだわ。ただなんか、アイツの意思が分かったような気がして、殺されねェとこに移動しまくって……最後ァよくわからねェが、【即死】させられた。そんだけ」

「そんだけ、じゃないですの！　倒したんですのよ!?　迷宮の！　最深部前の！　SS級が束になっても敵わなかった魔物を！　ほぼ梓さんお一人で！」

「……フェリカを打ち上げた後、お前の元にアンゲルが向かったのはわかった。だが……それ以降は、見えなかった。フェリカよりも速い奴の攻撃を、お前が躱していたというのなら、お前はフェリカよりも速く動き得るということになる」

「いや、なんねェよ。どこに行けばいいかわかったってだけだ。つか、んなことよ

り止血ポーション持ってねェか？」
「あるが……痛むぞ？」
「知ってるよ、んなこた」
魔力に余裕があるのだろう、ポニテスリットが亜空間ポケットを開き、それをくれる。
知ってる知ってる。超絶いてェって知ってる。
けど片腕グチャグチャでよ、やべェんだわ。だから、血ィ止めに――。
「い――ッてェなァおい！」
「そも、腕を折られた時点で十二分な怪我だと思うのだが……死には、しないのか。それでも」
「たりめェだろ馬鹿かお前。すげェんだろ、アレ倒したのって。やべーよ。クソ痛ェ。けど生きたんだぞ。なんで痛いことなんかのために死ななきゃなンねェんだアホか」
「……いや、そう、だな。……そうだった。私達は、生きるために戦ったのだから、そうか」

「そぉだよ。今更だろ」

いてーいてーよ。死ぬほどいてぇ。ポーションふりかけた腕が無理矢理内部で動きまくってるカンジ。やべーわ。死ぬほど痛い。いや、つか、魔法少女って骨折とか治んのかな。切り傷擦り傷くらいなら治るのは知ってンだが、ここまで来ると自然治癒じゃどぉしようもねぇぞ。

死ねば治る、が魔法少女だから病院ってのもエデンには無ぇし。

……まァ、死ぬよりはマシだがね。片腕だとしても。

どうせ人間の頃でもこんなんは治らなかったんだ。同じだろ。なんなら神経殺して痛み感じねぇ盾にでもする。

「まだ私は納得していませんのよ梓さん！」

「いやそぉ言われてもな。私だってもっかいやれって言われたら無理だよ。極限状態だったからこそだし、敵がアイツだったからこそだ。アイツは多分、ここに生まれてから長かったんだ。だから知性があった。知能が高かった。じゃなきゃ私に意思なんか届けられねぇ」

「それが！　何故！　梓さんが勝てる理由になりますの!!」

「なんだよお嬢、私のこと信じて無かったのか？」
「階層初めに何も出来ずに二回も吹き飛ばされた方が何言ってるんですの――!!」
「そりゃそォだったわ」
あー、じゃァあれか。
随分とご心配をおかけして申し訳ねェ、って奴だ。
「まぁ、フェリカの言いたい事もわかる。梓、本当にあり得ないことなんだ。私はアンゲルについて知識では知っていたものの、このフロアは未踏だったし、アンゲルとも戦闘経験はない。ただ書物で知っているだけ。戦闘経験のある者に話を聞いただけ。それだけで、その恐ろしさがわかる。SS級を束ねても、遠隔をどれほど揃えても、死者が出る。討伐した、という話がないわけじゃない。ただ、恐ろしい時間をかけて、凄まじい損害を受けて、の話だ。怪我はしたが、全員が生き残ったというのも、これほどまでに短時間で討伐したというのも、こうして話している今でさえ信じられない」
「私が何度挑戦しても、他のSS級を誘っても攻略できなかった相手を、初見で！　こんな短時間で!!　……信じるとは！　言いましたけれど!!」

「ぜってェ無理だろって思ってたワケだ」
「だって無理に決まってますのよ……。そんな練度の低い部分強化と、よくてA級な使い方の魔法で……倒せるはずがないのですわ……」
ま、これぱっかりは【即死】のピーキーさが出たってことで一つ。
相手が単体で助かったってのもある。天使っつったら軍勢なイメージだからな、これで複数いて、全部が俺を狙ってきてたら今頃ハチの巣だろう。
上の階の獅子もそうだが、俺ァ一対一ならやりようがあンのかもしれねェ。あと背後が壁であることな。
「……よし、血も止まった。お嬢とポニスリは大丈夫か？　身体」
「大丈夫、とは言い難い。私も骨折やら打撲が無数にある。……フェリカもそうだろう」
「私はそこまでもないですのよ。まだ戦えました。……打ち上げられて一瞬意識を失っている間に、梓さんが全て終わらせてしまいましたけれど」
「意識失うくらいダメージ食らってんじゃねェか」
相当だろそりゃ。

「で、どうするよ」
「何がですの？」
「どう、とは？」
「この先だよ。最深部。私ァ行くぜ。お前ら休むか？　大丈夫じゃねェんだろ？」
二人は顔を見合わせる。
そして溜息を吐いた。
「私達、そこまで安い挑発で激情すると思われているんですのね……」
「梓、少しばかり私達をなめすぎじゃないか？」
「あァさ、私から見たらどっちもちびっこだからな」
「一番身長の低い奴が何を言っているのやら……」
お嬢にだって、ポニスリにだって、プライドがあんだろ。
俺に気遣って、俺を否定したくなくて、言葉を濁しまくったけどさ。
A級が、SS級が、手も足も出なかったヤツを……良くてB級な奴がさっさと倒しちまう、なんてのは。
積み上げてきたものに対して、譲れないモンがあるんだろう。

それは心の狭い事なんかじゃねェし、なんなら俺だって何が起きたかよくわかってねェんだ、実力で勝ったって感じはしねェから悔しい。
ずりィんだ。理解できねェものってな。
プライドも先入観も常識も、決して悪ィモンじゃねェ。強いて言うなら今のは俺が悪ィ。俺がちゃんとやったこと理解して、二人に納得させられる説明ができりゃよかったんだが……マジで何が起きたのかよくわかってないと来た。
そんなぬぁなぁな奴に負けた、ってのは。
やっぱ受け入れらんねぇだろ。
「んじゃ先行くぜー」
「あ、待て！　ここから先は情報が無いのだ、もっと慎重に行け！」
「私が先に行きますの!!」
……やっぱちびっこじゃねェか。
特にお嬢。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ようこそ迷宮最深部へ。お疲れだろう、肩でも揉んであげよーか？」
「……いや、遠慮しとくがよ」
あれ。
俺達さ、なんか死線くぐってさ。いざ秘宝のある最深部へ、みたいなさ。
……あれ。
「ここ、は？」
「終の因（ついのよすが）……と呼ばれていたのは過去の話。数十年前かな、数百年前かなー。魔法少女を名乗る団体さんによって迷宮の主は倒され、征服され、絶対服従を誓った事で、ここは楽園と呼ばれるようになりましたー。みたいな」
「迷宮の主、とは」
「勿論あたしの事だけど」
褐色肌に、プラチナブロンドの長髪が美しい、スラっとした女性。ポニテスリットよりも深いスリットの入った黒い服は、ところどころがシースルーで目に悪い。いんやさ、魔法少女は結構露出激しい子もいるから慣れてきたつもりだったんだが、妙齢の女性ってなるとやっぱり話が違う。

色気っつーの？　おじさんさ、色々思い出しちゃうなー。
「ええと、魔物、ですの？」
「分類上は？　君達が、君達と人間と獣以外を魔物と呼ぶのなら、魔物で合ってる」
「じゃあ、戦いますの？」
「えー。やだー。っていうかできないー。さっき言ったでしょ、征服されて絶対服従を誓った、って。その時さ、詐欺られたんだよね。絶対服従の相手は目の前の相手だけかと思ったら、ギアススクロールには魔法少女に、って書いてあってさー。あたし、魔法少女には絶対服従なのであります」
「なら、お前はここで何をしているんだ？」
「なにって」
女性は。一応魔物だという迷宮の主は、俺達三人を見て。見まわして。
ぱちぱち、と。拍手をした。
「……迷宮踏破のお祝い？」
「安い報酬だなァ」
「あ、そう！　それですの！　エデンの地下迷宮の最深部には秘宝が眠っている

――という噂！　真実ですの!?」
「この部屋に秘宝とかあると思うの？」
「……」
この部屋。
なんか、学園塔の寮の部屋、みてェな、クッソ普通の部屋。
上階へ続く階段だけが異色だが、それ以外はマジで普通の女性の部屋、って感じ。
……あァよ、なんだったんだ、さっきまでのは。
「あ、でもあたし迷宮の主だから、結構色々できるよ。何かしてほしいことある？」
「えーと。では帰還のため、地上への直通ルートをお願いしますわ」
「おっけおっけー。迷宮の主だからね、迷宮を作り変えるのはカンタン！　はい次の子！」
「……私達全員の怪我を癒す、という事は可能か？　高位の魔物は、同族へ体力を分け与える、というのを聞いたことがあるんだが」
「君たちとあたしは同族じゃないので無理！　他は？」

「ならば、この籠手……これの材質をより硬いものに変える、というのは」
「おっけおっけおっけー！　はい、変えましたー。次！」
ちゃんと、迷宮の主らしいことはできるらしい。
怪我は治せねェと。了解、と。
でも、欲しいモンはなんでもくれそうだな。
結構融通が利きそうだ。
「……ならよ、この迷宮に、もう化け物が生まれないよォに、ってのは、できンのか？」
「えー。君さ、酷いよー。私達を否定するだけじゃなくて、居場所まで奪おうっていうのー？」
「できンのか、できねェのか」
「ちょっと、怖いこーわーいー！　できる、できますぅ。できるけど、やりたくないですぅ～！」
「いいからや――むごっ!?」
いいからやれ、とっととやれ、と言おうとした所、背後から口を塞がれた。

「やらなくていいですの！」
「おー、君は優しい！　良い子良い子！　そっちの悪い子とは違うねー」
「っぷは、おいお嬢！」
「やるなら私が勝ってからにしてほしいですの!!」
　オイやっぱ子供じゃねェか。
　またとないチャンスなんだぞ。この迷宮で死ぬ魔法少女を無くせる、最早唯一かもしれねェチャンスだ。それを不意にしろってのか。
「君さー、自覚無いだろうからちょっと言わせてもらうけど、ホント酷いよー？　あの子達だって生きてるんだよー？　それをさ、生きる機会まで奪って、生まれる可能性すら取り上げて……君の魔法自体酷いのに、そこまでするー？」
「ンだよさっきから。否定否定って。別に私ァ化け物を否定してなんかいねェよ」
「してるよー！　だってそれ、あの子達が積み上げてきた経験とか、感情とか、そういう記憶の一切を無に帰す魔法でしょー？　生きるために必死で身に着けた術も、君の魔法の前には意味が無い。強きとして生まれた種としての堆積も、君の魔法に触れたら全部消えちゃう。本能に取り残された使命も、絶対を誓う約束も、全

部全部なかった事にして、無理矢理≫終われ≪っていう魔法じゃん。否定だよ、それは」

……。

やかましいな。こっちだって生きるのに必死なんだよ。知るかよ、化け物の気持ちなんざ。

「他のにしてよー。お願いだからさー」

「私からもお願いしますの！　というか、もう一度言おうとしたらその口に手を突っ込みますのよ！」

「……ンなことを懇願されたって、私ァここで誰かが死ぬのが嫌で、だから攻略してやろうってここまで来たんだぞ。否定否定言うなら、それこそ私の否定だ。私の決意の否定だ」

だから、そんな顔するなよ。

そんな、泣き落としなんかが通じるかよ。

「わかった！　じゃあ、こうしよう！　――もう、魔法少女は殺さない。意識を摘み取るに終わらせる。そうして、気絶した魔法少女は地上に戻す」

「ンなことできンのか？」
「私は迷宮の主だからね。それくらいはできるよ」
……だが、怪我は負うんだろう。
それじゃ……、意味は。
「梓。ここは迷宮だが、魔法少女達の実践的な修練場でもある。修練塔とは別に、な。その上、ここは学園の所有物だ。それを勝手に変えたとあれば」
「あ！　さっき言った直通ルート、私達が通った後は元に戻して欲しいですの！」
「うん、それは勿論だよー」
「……変えたとあれば――所有者が黙ってはいない、かもしれない」
「いいよ。誰か知らねェけど、魔法少女への罰は死ななきゃ意味がねェとか言ってる奴らと同じだろ。真っ向から反抗してやる」
ポニテスリットまでそっち側か。
当然、なんだろうな。ここはもうすんげェ前からそういう場所で、俺がおかしいってだけで。
「頼む、梓。怪我は負うのだろう。だが、負った上で生きて帰ったのなら、それは

指針となる。その後どうするかはその者の勝手だが、少なくともここまでならば死ななない、ここまでやったら死ぬ、という境界線を見つける事には繋がるだろう。そしてそれは、ゆくゆくの魔法少女の練度を上げる事にもつながる」

「そんな説得で、私が納得するとでも？」

「だから、頼んでいる」

「ッ」

お前まで、そんな顔を。

……なんでそんな、寂しそうな顔をするんだ。

「あ、じゃあもう一個！　ここの子達を消しちゃいけない理由いいまーす！」

空気の読めねェ奴が、声を張り上げる。

「ンだよ。何言われたって私ァ」

「当然の事だけど、ここで生まれる事が出来なくなったら。居場所を失ったら。この子達は外で生まれるようになる。外に順応した身体になって、生まれ出でるようになる。――さっき君達が戦った子みたいなのがね」

「――オイ、そりゃ特大のデメリットだ。先に言えアホ」

もし、あんなのが外の世界を闊歩するンなら。
やべーなんてモンじゃねェだろ。世界滅亡だわ。
「やめだやめ。消さなくていい。つかこの場にずっと留めてろ。その上で、さっき言ってた通り、戦闘は気絶に留めてくれ。餌とかが必要なら私が何とかする」
「いらないよー。勝手に湧くし。あの子達は魔法少女を食べているわけじゃないからねー」
「んじゃそれでいい。はァ、あぶねェ」
あやうく世界が終わる所だった。
あんな天使が外に降臨してみろ。国なんか一瞬だぞ。
「おっけー。それじゃ、はい」
ゴゴゴゴ、と。
上の方で何かが動いて――天井に、ぽっかりと四角い穴が空いた。
「直通ルート！」
「ええ、ありがとうございます、」
「そして――重力阻害！」

ふわ、と。
身体が浮く。
「の――ッ!?」
「クソ、やっぱり魔物か!?」
「あーこりゃ、快適なこって。地上についたら解除してくれるンだろうな？　オイ」
「勿論！　じゃーねー！」
そんな感じで。
俺達の迷宮探索は終わりを告げた。
正直失ったモンはでけェ。色々。得たモンもでけェが、あー、なンだ。
腕一本で、【即死】への理解やA級への向上心を得たって思えば、安い買い物だったのかもしれねェな。

五、休養編

16・鈍斗業是亜・

「では――行きますのよ」
「おォ、来い……アレ」
「……今、梓さんは四回ほど死にましたの。本来ならば」
「あー。じゃ、やっぱ無理なのかァ」
修練塔。
近接、遠隔、どちらの魔法も修練が可能なように作られた塔で、五つの監視塔の内2時の方向にある塔だ。そこで、金髪お嬢様と対面している。金髪お嬢様は剣を持って、俺は無手で。
んで――。
「では、これはどうでしょうか！」

「これって？」
「……今ユノンさんの苦無が梓さんの首筋に触れているのですけれど、気付いていませんの？」
「え。おわ!?」
まァ、修練しているわけだ。
俺が迷宮で見せた回避と、部分強化の精度上げの訓練って奴。
背中メッシュとポニテスリットは授業があるってんで、金髪お嬢様と太腿忍者に相手役になってもらいながら、速度のある攻撃っつーのをやってもらってンだが。
いんやさ。
「えーと、フェリカさん。アンゲルの攻撃を避けた、というの、何か誇張が入っていませんか！」
「私も意識の無い間でしたのでなんとも……ミサキさんが嘘を言うとは思えないのですが」
なんだ。
てんでダメ、って奴。

素の状態じゃァこいつらの攻撃なんざ見えやしねェし、避けるなんて以ての外。反応のハの字もできないと来た。勿論、どこにいけば死なないかわかる、なんてのも無い。

もう何度眼前に剣を突きつけられた事か。もう何度背後を取られて首掻っ切られそうになったことか。

極限状態にならねェと発揮できねェのか？

つーかあン時の異常な昂揚感も無ェのがな。流石にＢ級のままでいーや、にァなってねェけどよ、ヒヒ、だのハハ、だの、戦闘中に、死地にあって笑み見せるような戦闘狂じゃァなくなっちまってる。なんつーか、普通に怖い。そういう奴。

「あー。じゃァ次だ。部分強化。ちょいと感覚神経強化するからよ、今のをもっかい頼むわ」

「わかりました！」

聴力と脳を強化。

音。右から来たのを、首を傾けて避け……れんな。重い。太腿忍者の苦無の速度に、俺の身体の一切が追いついていない。来たのはわかったがこれじゃ何もできず

に斬られるだけだ。
　えーと、なら。あー。んー？　脚でいいのか、これは。脚の部分強化……いや、足だけじゃ無理だな。腰と、つか体幹系全部……となると腕以外の全部？　なんだそりゃ、結局全身強化と変わんねじゃねェか。
　あ。
「攻撃そのものには反応できていますのね。身体強化が追いつかないようですが、梓さんの魔法なら魔物相手には問題ないでしょう」
「遠隔攻撃してくる奴相手にするにァ無理か」
「ええ。まぁ、早々にそんな機会が訪れるとは思えませんけれど」
「先日の演習にいた精神体や、地下迷宮にいるというアンヴァルは高位の魔物ですよ！　魔物が魔力を扱ったり念動力で何かをする、というのは知性の象徴ですから！」
「そりゃ……困るな」
「？」
　多分だけど、俺ァ相手に知性があって、且つ殺意が……本気で殺す、っつー殺意

が乗ってねェとピクりとも感じ取れねェんだ。それは迷宮で理解した。

　でもんな知性持ってんのが早々いねェとなると、俺は普通の戦場じゃ特に役に立たねェってことになる。所謂Ｂ級、あるいはＡ級に適した相手じゃ、俺の知覚は揮わねェと。

　……いやまァ、ンなもんに頼ってねェで、この身体強化の切り替えをスムーズにできるようになれって話なンだが。

「【即死】の使い方を練習するってなると、ここじゃできねェしなァ」

「私が相手をしましょうか？」

「……やめてくれ、ンなこと。何かあったらコトだ」

「何かあっても蘇生すれば問題ないので！」

　あァ、そーだった。

　背中メッシュと太腿忍者はまだ〝こう〟なんだ。いやさ、金髪お嬢様とポニテスリットも変わってくれたのかどうかはわかりゃしねェんだが。少なくともコイツは死をツールにしか捉えてない。

「ユノンさん、それでは効率が悪いのですのよ。貴女の蘇生にかかる時間は20分ほ

ど。対し、【即死】は一瞬です。その間梓さんは待ち惚けになってしまいますわ」
「あ、なるほど！　確かにです！」
お嬢の目配せ。
ありがてェな。そォいう気遣いは。
「……けれど、それ。その……本当に蘇生しなくていいんですの？」
「あン？」
今まさにこっちをわかってくれてる、みたいな気遣いしてくれといて、なんだそりゃ。
「いえ、死んでほしいというわけでは……その、結果的にはそう、なってしまいます……けれど」
「正直見ていて痛々しいです！」
「そいつァすまねェな」
太腿忍者がはっきりと言ってくれた。
ま、そう思われてんのはわかってる。つか作ってくれた安藤さんもそう言ってた。
会う人会う人、みんな言う。

なんでンなモンつけてんだ、って。なんでそのままにしてンだ、って。
「あァよ、勘弁さ。この腕は、私が生きたって証拠だからよ」
右腕を持ち上げる。
そこにあるのは――武骨な鉄塊。鉄じゃねェけど。
先端に指も無ければ肌色ですらない。鉄柱、っつー表現が一番似合う。
つまりまァ、義手さな。
「これでも結構仕込んであんだぜ。ちゃんと武器さ。つってもまァ、弾薬やら魔煙草やらの保管庫って扱いが一番なんだが」
「確かに、梓さんの素手で殴るより、そちらで殴った方が強そうです！」
「馬鹿お前、ンなことしたら接合面が痛ェだろ。普通に銃使うよ」
「えぇ、勿体ない……」
義手。義手だ。
死ねば助かる。死ねば復活する。死ねば完全な五体満足で蘇生する魔法少女が、義手。いやさ、迷宮で骨折した腕はもう骨がバキゴキでよ。その上に止血ポーションなんつー筋線維グチャグチャにしてでも止血するモンふっかけたせいで再起不

可。仕方ねぇんで安藤さんに泣きついたら、国の軍用医療に義手義足作ってるトコあるから相談してくれるってんで、そうして拵えてもらった一品だ。

仲介してくれた安藤さんも「別に一回死んだらいいじゃないか」とは言ってたけど、それなりに俺の事わかってくれる人だからな。「ま、アンタがいいならいいんだけどね」と引き下がってくれた。

ついでにお釈迦になっちまったSRの発注と、もうちょい威力の出せる拳銃ってのを打診中。この腕にウイーンガシャガシャっつって変形機構でも組み込めねぇかと聞いてみたら、少なくともこの国の技術じゃ無理だそうだ。

他の国は滅んだんで、この国が無理だったら無理だわな。

……でも一応まだ望みはある。

っつーのは、あの狼の化け物を従えていた魔法少女。アレも四肢が義手義足だった。

となれば、アイツの所属している組織だのなんだのにそういう技術があンじゃねぇかって。まァどうやって作ってもらうのかは考えてねぇし、そもそもアイツが組織に属しているのかもわかんねぇんだけどさ。

「つってもまァ二丁拳銃はできなくなっちまったし、総合的な戦力は下がったンじゃねェかなァ」
「アンヴァルとアンゲルを倒しておいて？」
「いやァよ、アレはまぐれで……って」
二人の声じゃァなかった。
その声は下から聞こえてきて――いやさ、溜めるまでもねェ。キラキラツインテなんだが。
脅かすの好きすぎだろコイツ。
「よォ。中央塔には行かなかったぜ」
「うん。とても驚いたよ。あ、少し前ぶりだね」
「あるるららさん！　お久しぶりです！」
「そんなにかな」
「いえ、そんなにではないですね！」
遠征の日が遠い昔のよォだが、そんなこともない。
ま、遠征が終わった次の日に二人の懲罰で、今日はそっから三日くらい過ぎたっ

てくれェの日にちだ。いやさ、体験する物事が濃密だと時間を長く感じるってなこういう事さな。

「で、何の用だ？」

「私じゃなくて、ヴェネットがね」

「ほォ。班長が」

「うん。お詫びしたい、って」

またかい。

いやさ、あの人罪悪感とかめっちゃ覚えるだろうなァってのはわかるんだけど、もういーって。忙しいだろうに、俺なんざに構わなくていーってのに。

しないと心が折れちまうってンなら、受けるけどさァ。

「こ、ここか！　あるるら！　先に行くね、じゃないんだ！　私は彼女らがどこにいるか知らないんだから、修練塔の一つ一つを確認しなければいけなかったんだぞ！」

「おー、お久しぶりで、班長」

「あ――あぁ、久しぶり……か？　そうでもない気がするけれど、久しぶりだね、

梓」
「ム」
　班長だ。
　結局なー、遠征任務から帰ってきて、一度も会って無かったんだよな。遠征内での報告ってな俺ァ個別で済ませることになっちまって、班長はまた違う任務への遠征に行かなきゃで、すれ違い。んでまァ俺が迷宮に行っちまって、帰ってきたらば腕作るために滅多に学園に顔出さねェんで、園内で会うこともなかった。
　班長は。
　……すゥっげェ気まずそうな顔してる。気にしなくてもいいのにな。俺ァこうして生きてんだし。
　つか、任務で置き去りなんざままあることなんじゃねェのかね。
「ちょっと、梓さん」
「ン？」
「……どういうことですの？　Ａクラス Ａ班班長はわ・た・く・し……ですのよ？」

「あァ、遠征組突撃班の班長だったからよ」
「……私が金髪お嬢様で、ヴェネットさんが班長呼びなのは……ずるいですの」
「ンなこと言われてもなァ」
ずるいって何だよ。
……金髪お嬢様は金髪お嬢様だしなァ。
「梓」
「ん？　あ、おゥ」
お嬢とこそこそ話してたら、いつの間にか班長が近くにいた。
いて、マジな顔で。流石に何かを悟ったのか、お嬢がちょいと離れる。
「――ごめん」
「いやいーって、お、おい？」
「心細かっただろう。君を置き去りにしてしまって……本当にごめん」
そのまま――抱きしめられた。
なんだ、遠征組ってなハグ流行ってんのか？　キラキラツインテも自己と世界を認識させるためとはいえ似たようなことしてきたし。

「私の判断ミスで……君から様々なものを失わせてしまった事。どうか償わせてほしい」
「待て待て、私が何失ったってんだ」
「え？　いや、あるるらの話では、君は心神喪失状態で、自己判断もできなくなって、死をも忌避するようになって、その腕も……あるるら！」
「ヴェネットの判断ミスがなければ、【神速】の子も【波動】の子も罰をうけることはなかったからね。周り廻って、巡り廻って、すべての原因はヴェネットにあるんじゃないか、と思っただけだよ」
「極論が過ぎる」
　バタフライエフェクトも真っ青だ。
「……ヴェネットさん。勘違いが解けたのなら、そろそろ梓さんを放してくださいますの？」
「ああ、アールレイデさん。君にも迷惑を……」
「いいですから！　一旦梓さんを解放してから、お話はそれからですの！」
「じゃあ、私も溶けてみよう」

「うわっ!?　おい、キラキラツインテやめろってそれ、なんかヘンになんだよ！　ちょ、オイ、班長放してくれ、って、おぉう!?」

「放さないなら私も抱き着きますの――!!」

早いんだって、展開が。

太腿忍者は巻き込まれねェようにさっさと逃げてるし、キラキラツインテは何してんのかわからねェがとにかくぜってー良からぬこと企んでるし、お嬢はいつも通りっちゃいつも通りだけどなんか暴走してるし。

あと班長も、お嬢の言う通り誤解は解けたはずなのに……一切離れてくれない。アレこれ、おじさんモテ期か？　いんやさお嬢が俺に好意抱いてくれてンのは知ってんだよ。だからこの暴走が嫉妬に由来するってのはわからんでもないんだが、キラキラツインテと班長はマジでなんだ。前者は特に意味のない行為をすンのはわかるが、マジで班長は何を思って俺から離れないんだ。

「よし、いいことを思いついた。君達、今日は私の部屋に来てくれないか？　そこで、色々お詫びをさせてほしいんだ」

「おぉい班長、一旦放してくれ」

「ん？　……何をしているんだ、あるるら。それにアールレイデさんも」
「あァ何で償ったらいいか考え込んでてマジに気付かなかっただけかい」
「ヴェネットはそういうところがあるよ」
いいから、わかったから。
おじさんそろそろ限界よ。一応男なンよおじさんは！　今女の子でも、43歳のおじさんに少女三人が抱き着くって絵面がどンだけ恐ろしいかってわかってくれ。
少女の体温に、気恥ずかしさとかよりも罪悪感を覚えちまう。
「梓さんは奪わせませんのよ……！」
「お菓子パーティをしよう。女の子らしく、だ」
「ヴェネットに女の子らしくする、なんて概念があったことに驚いたよ」
そりゃ、全く以て同意なんだがよ。
お菓子パーティ。いいよいいよ、いいからいいから、行くから放してくれ。
な？
「――歓談中申し訳ないのですが、梓・ライラック様。キリバチ上官がお呼びです。どうぞこちらへ」

「おわ!?」
いつのまにか、そこにいた。
メイド服姿の女性。いつぞやの魔法少女たる衣装ではなく、わざわざ普通の服を着た女性が――俺を奪い去っていた。
「え」
「あれ」
「きゃ!?」
突然のことに団子になる三人。
既にこの場からいなくなってた太腿忍者。
「それではみなさん、良い学園生活を」
「ちょ――」
確か名前は――コーネリアス・ローグン。
小学校に現れた狼の化け物退治ン時にいた、鬼教官殿の部下。
それが、俺を姫抱きにしていた。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1：２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「連行してきました、キリバチ上官」
「ああ。次の命令まで待機しておいてくれ」
「承知いたしました」
結構な高さにあったさっきの修練場修練塔内部に何フロアも修練場があるから、俺を姫抱きにしたままピョイピョイＥＤＥＮを飛んでって、あれよあれよのままに軍事塔……教員塔とも呼ばれるそこに辿り着いた。
コーネリアス・ローグンは監視塔のすぐ下にある部屋へ窓から侵入。すってーとそこに鬼教官殿がいて、今。
「手荒いことはされなかったか？」
「あァよ、そいつァ大丈夫だが、何の説明もなしに連れて来られたっつーのは文句として言っていいのか？」
「私もローグンに何の説明もしていないからな。ただお前を連れて来てくれと命じただけだ」
「アンタが原因かい」

「はっはっは、まあそう邪険に扱わないでくれ」
「扱っちゃいねェがよ。軍事塔に呼ぶくらいだ、またなんかあンだろ？」
「いや？　少し、久方ぶりに話したくなっただけだ」
「あァそォかい。じゃ帰るわ」
「待て待て、積もる話があるのだ」
鬼教官殿とそこまで親密な関係になったつもりはねェんだがな
暴走繭の件と、狼襲撃の件くらいだろ？　まァ助かったがよ。そこまでってほどでもねェ。
「聞いたぞ。アンヴァルにアンゲルと、SS級でも手こずる高位魔物を単独で討伐したそうじゃないか」
「あー。その話。単独じゃねェよ、お嬢とポニテスリットがいたし」
「アールレイデと縁は、お前が単独で討伐したと言っていたが……それは虚偽の報告だったと？」
「ここでそォだ、つったらアンタは〝なら更なる罰を与えなければならないな〟とか言いだすンだろ？　じゃァそォでいいよ。私がやった。つっても再現できるか怪

しいけどな」
「良い。それでこそ、だ」
「あン？」
何がだ。
鬼教官殿は、ペラ紙を一枚取り出す。
ペラ紙っつか、一応ちゃんとした書類……いや。
「A級推薦状？」
「そうだ。これから先、お前は重宝されることになる。自然生成の形成地点の破壊が可能かどうかの検証と、そもそもそれが自然形成のものであるかの調査。今確認されているすべての形成地点に【即死】が有効なのかどうかの調査及び破壊任務。形成地点など無ければ無い程いい。そのために、突撃班だけでなく様々な遠征班に組み込まれていくことが予想される」
「忙しくなるってか」
「ああ。その中で、B級を良く思わない者もいる。単純に信頼を預けない者もいる。そういうのを黙らせるのがA級という称号だ」

「今度はお飾りA級ってか」

忙しねェこって。つい先日お飾りB級になったばっかだってのに、大した実力もつけねェまま昇級なんざ、嫌な未来を引き寄せる結果にしかならねェと思うんだがな。

A級としての働きを期待されてもできねェし。亜空間ポケットも全身強化もマトモに使えねェA級がどこにいんだよ。あァ、飛行魔法も。

「流石にA級魔法少女はお飾りではなれん。故に、お前には無理矢理にでもA級になってもらう」

「……できンなら、やるが。なんだ、死地に単身放り込まれる、とかか？」

「いいや。少し前までのEDENならそれもできたが、お前の【即死】は貴重過ぎるのでな、上が手厚い保護をしろとのことだ。これより先、お前はどこに行くにも護衛が付く。EDEN内ならまだしも、外部に放り出して【即死】を奪われる、なんてことはあってはならないからな」

「あー、そりゃ助かるが」

「当然、その護衛の者には――死したとしてもお前を守り切る、という任務が課さ

れる。その上で、お前は外部の任務に出される。その意味が分かるな？」

――最悪ってことね。

なンだよそりゃ。お上ってな、俺が嫌がる事しかしねェのか？

「……ああ。そいつらを死なせたくなかったら、修練塔なんぞでぬりィ修練してねェで、ガンガン実戦経験して強くなンなきゃならねェと」

「そうだ。お前が死を嫌えど、忌避せど、護衛となる者はお前のために死ぬ。お前のために傷付く。お前が無事でよかったといって死んでいくだろう。お前を逃がすために全力を賭す」

「嫌な話をすンなよ。最悪の気分だぜ今」

「だが、理解はできたな？　お前が強くならなければならない理由。お前が大切に想う者だけでなく、全ての者の死を拒むというのなら、A級、S級、SS級と、それらに匹敵する強さを手に入れなければならない。そして、その可能性をお前は見せた。単独でのアンヴァル及びアンゲルの討伐。SSS級にも届くだろう成果を、これでもかというタイミングで見せてしまった」

「お上にも期待されてると」

「ＳＳＳ級とは全魔法少女の憧れであり、誰よりも前を行く者の称号だ。あらゆる魔法少女を導く存在を指す。未だ学園長や創設者達のみしか辿り着けていないその境地に、お前は辿り着くと、そう期待されている」
「重いなァおい」
だから俺ァ数か月前に魔法少女になったばっかのヒヨっ子なんだっつの。
そんな奴にどんな期待のかけかたしてやがる。発散でもしてンのか。
「だがよ、すぐにでも強くなれつったって、無理なモンは無理だろ」
「無理なものは無理だと言ったアールレイデの言葉を覆したそうじゃないか」
「その弄りは死ぬほどウザィんだが、そうじゃなくてよ、魔力量っつー問題があンだよ。私の魔力量じゃ亜空間ポケットは開けねェし、全身強化も飛行魔法も使えねェ。どんだけ戦闘経験積んだってそこの壁はどうしようもねェだろ」
「奇縁というのは続くものでな。お前に限定して、それが可能になり得る手段を持っているだろう人物に心当たりがある」
「……それァよ、他の魔法少女にはできなくて、私限定で、ってなると……コレか？」

「正解だ」

持ち上げるのは――義手。

鉱石の塊にして、俺以外の魔法少女がやってねェこと。あるいはあの敵の魔法少女がやってた事。

「国家防衛機構・浮遊母艦ＥＤＥＮ。ほぼすべての魔法少女はここに属し、生活を送っている。だが、ＥＤＥＮに属さぬ魔法少女というのもいるにはいる。お前が相対した……敵対した者は未確認だったが、ＥＤＥＮと連携や同盟を組みつつ、けれどＥＤＥＮには与さぬという魔法少女がな」

「ヘェ。いやまァ、そうか。誰もが戦いたいってワケでもねェし、この国に思い入れの無ェ奴もいるよな」

「まさに、だ。この国に対して何の思い入れもなく、戦いを好まぬ魔法少女。一応区分としてはＳになる、【鉱水】のディミトラ。ＥＤＥＮより遥か南西部に位置する人工島に住まう、世界で唯一反魔鉱石を加工し得る魔法少女になる」

「……あー」

まァ、そうか。

俺のパワーアップのためだけに、ってワケにはいかねェよな。組織だし。
それも込みで、なんだろォが。
「気付いたか。そう、敵の魔法少女が遺した、極小の反魔鉱石。あれにはディミトラの手が入っていると判断された。故に上はディミトラへの事情聴取及び情報収集を決定。その班員に、お前が選出された」
なーにが久方ぶりに話したくなっただけ、だ。
しっかり任務の話じゃねェか。期待させンじゃねェよ。
「ディミトラの人となりを知っている私から言える事はただ一つ。呑まれるな、だ」
「なンだ、老獪な奴なのか、そいつァ」
「老獪というよりは奇怪だな。特殊魔法【鉱水】には十二分に気を付けろ。敵の魔法少女と組んでいた場合は――戦闘になる」
「あァよ。それ以上の情報はくれねェと」
「それを含めて、A級の仕事だ。推薦状は受け取ってくれるな？」
「……わーったよ。つか、断れなさそうだしな」
「それでいい」

A級だ。
なるぞ、って向上心見せたところにコレだ。
お飾りA級。でもまァ、ソイツなら、俺のコレをパワーアップアイテムにしてくれる、ってワケだ。いいよ、なら行ってやる。
まァた遠征だ。ったく、学園生活ってな送らせてもらえねェのかね。
「出発は？」
「もう少し後になる。それまでに装備の調整はしておけ。修練塔での訓練も、その日までに仕上げろ」
「でなけりゃ死人が出るぞ、って？　ひでェ脅しだことで」
「だが、そうとなればお前は本気になれるだろう」
「流石は鬼教官殿だァな」
あーあー。
修練塔の、ほんわか少女達との戯れに戻りてェ。
今回突撃じゃねェから班長達とも班違うだろうし、お嬢もまたついてこれねェだろうし。

……いんやさ、遊びに行くんじゃねェんだ、そこばっかりは弁えねェとなのはわかっちゃいるがよ。おじさんそろそろ気の休まる時間ってのが欲しいよ。

「ローグン」

「はい」

「此度の遠征には、ローグンを同行させる。お前の護衛として、だ」

「B級魔法少女、コーネリアス・ローグン。命を賭して御身を守らせていただきます」

「今の話聞いてただろ。命は賭すんじゃねェよ。なんとしてでも生きろ。生きて私を逃がせよ。私ァ一人じゃ逃げらんねェぞ」

「承知いたしました」

ホントに承知してくれてんのかね。

……でもまァ、あのこえーこえー方の部下サンじゃなくて良かったってのは思ってる。リヴィルサンだっけ？　俺の口にフリューリ草を詰め込み続けた人。アッチよりァコッチのが……。

「……」

「何か？」
「いや」
……あの人は始終怒り顔だったが、こっちのメイドは一生無表情なのがな。
どっちも感情読めねェからあんま変わらねェや。怖さは。
「それでは、下がって良いぞ。出立日時まで、精々励めよ、若人」
「んな若くねーって」
「……13歳だろう」
そォだがよ。
つかそれは幼いっていうんだ。若くねーよ。少なくとも。
さて。
んじゃま、準備ってのをしますかね。
お嬢や班長にも、謝んねェと。お菓子パーティなー。おじさん雰囲気に耐え得る気はしなかったけど、一回くらい付き合ったってよかったよなー。
女の子らしいこと、とか言ってたっけ。
無理だな、俺にァ。

やっぱ行かなくて良かったわ。きゃいのきゃいのはマジモンの少女に任せよう。

……アレ、魔法少女歴50年とか言ってたっけ？　まァ幾つになっても少女は少女さな。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

17・座頭伊豆亜捨邸琉初場風泥不意津御土・

遅い。
身体が重い。
鋭敏化された聴力は既にソレを捉えている。高速回転する脳は命令を出し終えている。
ただ、身体が。反応しない。重い。重い。重い。
重いが――動け！
「――だァ！　っはァ、はァ、っは」
「ほう。避けたか」
「あァさ……だが、ダメだなこれじゃ。集中に体力使い過ぎて意味がねェ」
「ふむ」
随分と手加減されて、ゆーっくり振り下ろされた刀。
それを避けて、ぜぇぜぇと息を荒くする。
なンだ、何が悪いんだ。マジで進歩しねェな俺。

「思うに、強化をしすぎているやもしれん。今の半分……いや、四分の一ほどの魔力で知覚神経の強化をしてみるがいい」
「なる、ほど？」
助言に従う。
聴力と脳にかける魔力を1／4に――刀を構える音。逆袈裟。左から右へ向かっての振り上げ。速い――が、俺の身体も、そこまでは重くない。これなら、強化をかけて回避ができる。
上体を後ろに逸らす。鼻先を掠める刀身に少しばかりぞっとしながらも、急速に時間の早くなっていく世界に浮上して――言う。
「すげェ、っとに教えるの上手ェな、尖り前髪！」
「褒めるのは良いが、呼称の変更を要求する」
「悪ィがそれはできねェ。もう定着しちまったからよ」
「……もう、いいが」
俺はまだ、訓練中である。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

遠征の日が近づく中で、詫びる気持ちがあンならと、ちょいと班長に相談をしてみた。キラキラツインテがあンだけの助言をくれて、俺ァちゃんと強くなったからな。とすると、班長からも色々貰えばすげェのが出てくんじゃねェかと。

まァ出て来なかったんだが。

というのも、班長は最初からすんげー強かったそうで。魔力量もピカイチでそこに【凍融】なンてすんげー魔法があったんで、強化に際してなんぞか工夫ってのはあんまりしてないんだと。その分自分の魔法に関する研究はしたって話だけど、遠隔な【凍融】と近接な【即死】とじゃ色々と勝手が違い過ぎて、参考にァならなかった。

役に立たなくてごめん、なんて謝ってくる班長に、じゃァ誰か紹介してくれ、なんつって罪悪感の逃れ先を与えたら、この尖り前髪が教えてくれることになったって次第なんだが……。

いやこのサムライガール、教え方が上手いのなんのって。

「今のは良かったな。当然の事だが、強化後の身体能力と強化前の身体能力に差が

あればあるほど、余計な集中力を使う。魔法少女故素の身体能力を鍛え上げるということはできないが、その差を段階付ける事はできる」

「なるほど。つまり、見極めの時は最大限強化して、避けるにあたって緩めていけばいいわけだ」

「そうだ。そして、身体の強化にも同じことが言える。腕部や脚部の強化は非常に強力な攻撃力を生むが、立ち尽くしている状態で強化していても意味はない。接触の瞬間だけ、回避の瞬間だけ。それが理想だ」

「つってーと、もしかして他の魔法少女もそぉなのか？」

「完全に切り替え式にしている者もいるだろうが、近接魔法少女は段階的な者が多いな。その切り替えをどれだけ滑らかな段階に分けられるか。己の中においては段階的であるそれも、傍から見たら一瞬一瞬のものになる。故に切り替えているように見えるやもしれないが、最大強化を常にしている者はいない」

面白い、というのもある。

尖り前髪は【飛斬】っつー遠隔にも近接にも対応できる魔法を使う。戦闘スタイルは近接そのもので、前回の遠征時にァ見られなかったが、突撃班の中でも最も近

距離での戦闘を得意とするんだそうだ。
そんな奴の、しかも魔法少女になる前から戦ってたとか言う奴の話。その教え。
すげェ面白い。
「もう一度行くぞ」
「あァ、頼む」
じわり、と。
水が滲むように――強化をしていく。一瞬じゃない、段階的に、けれど余計な魔力を使うわけにァいかねェんで、素早く。
刀が構えられる。今度は横薙ぎだ。身体は重い。だが、横薙ぎを避けるなら上体を逸らすんじゃダメってなわかる。頭がわかってりゃ、遅くした世界の中でも次の行動が判断できる。
選ぶべきはバックステップ。脳や目に回してた魔力を減らしていくと同時、足への強化を増やしていく。すでに脚は曲がり始めていて、つま先にも力が入ってる。段々と軽くなっていく身体。当然動きやすくなるし、強化に関する集中力も要らなくなる。

ヒュ、と。

先程まで俺がいた場所を通り抜ける刀。

さっきみてェなギリギリじゃなく、ちゃんとした――回避。

消費魔力はさっきよりも多いが、迷宮でやってた頃に比べたら天地の差がある程効率化されてる。

「今のは完全に避けたな」

「あァよ。今ので、等級区分はどンくらいだ？」

「B級の魔物、といったところだろう」

「成程ね」

ま、ホントに尖り前髪を相手にしてンだったら、今の選択はミスだ。斬撃飛んでくるから、姿勢低くしないといけねェ。

今は魔法使ってこねェからよかったけど、そういう判断もあったな。多分及第点はもらえてンだろうが、百点満点じゃァねェんだろう。

「回避で教えられるのはこれくらいだ。【即死】による防御だったか。それにも応用できるだろう」

「あァさ、ありがとう」
「まだだ。攻撃の指導もしておく」
「ありがてェ」
教えるのが上手い、だけじゃねェ。
面倒見も良い。最初班長に抱かれた俺を見てた視線からは考えられねェ程良い奴に見える。いや、あの嫉妬は正当なものだたァ思うけどな？
「回避と違い、攻撃は己が意思によるものである、ということを前提に考えろ」
「あァ、それはカウンターでもか？」
「そうだ。敵の攻撃を回避した後、自らの攻撃をする。反撃とはその二段階を踏む。回避については教えた通りだが、攻撃も同じ、というわけにはいかない。何故かわかるか？」
「ふむ」
回避と攻撃の違いか。
普通に考えるなら、相手の出方を窺ってから判断や選択をする、ってのが回避で、相手に狙いを付けてから判断や選択をする攻撃と、そォ大した差は無ェように思う

が。

……いや。

「回避を継続するかどうかの判断か？」

「継続かどうかはその状況によるが、回避を選択するかどうかの判断でいい」

「なるほど」

「理解したようだが、説明はするぞ。敵を攻撃するにあたり、考えなければならないことは二つ。自らの攻撃をどう当てるかと、攻撃した場合に己を守り得るかどうか、だ。先に反撃に関する問いをしてきたが、その通り、魔物とて反撃を行う。回避や防御という選択をしない魔物もいる。そんなものに攻撃を選択することは、自らそれに当たりに行くことに等しい」

そりゃそぉだ。

回避はただ見りゃいい。聞きゃいい。相手の出方さえわかりゃなんとでもなる。

だが、こっちから攻撃するってなると、相手の隙を窺わなきゃいけねぇと。そういうこったな。隙の無ェ奴相手に愚策に愚直に突っ込めば、待ってる未来なんざ知れてると。

当たり前だが大事な話だ。

「故に、攻撃の際には知覚神経の強化、姿勢制御、そして攻撃における強化と、回避よりも多い工程と魔力を求められる。さらには魔法の魔力も使用しなければならないとなると、お前の魔力量では些か厳しい」

「つまり、絶好のタイミングで絶対に殺す、ってことか」

「そうだ。幸いにして【即死】の殺傷能力はSSに届き得る。故にお前はどんな強敵と当たろうとも、攻撃を考えてはならない。回避と防御を徹底しろ。たとえその腕で殴り得る機会が訪れたとしても、たとえその他の手段で……拳銃などで攻撃できたとしても、【即死】を確実に行える機会だけを見極めろ」

「あー、ならよ、拳銃はどこに使い道あンだ？　一応威力も上げてもらったンだが」

「自分より劣る敵。【即死】を使うに値しない敵だ。一瞬でも自らに勝ると思ったのなら。あるいは初見の相手であったら、拳銃の使用は諦めろ」

「わかった」

素直に従う。

多分だけど、殺意を最高点にまで込めた弾丸であろうとも、尖り前髪の言う事は

聞いた方が良いんだと思う。初見の相手。確かに、弱そうに見えても、ということはあるだろうしな。

ためになる。

「とはいえ、部位の【即死】を行えるほど判断に優れてきたら、この考えは捨ててもいい。あくまで今のお前の実力を鑑みての話だ」

「あァ、っとにありがとうな、尖り前髪」

「……謝意だけは受け取っておく」

全部が全部、細かい話ではある。多分近接魔法少女の一部は考えずにもできることなんだろう。

だが、今の俺にとっては至極ありがたい。凄くありがたい。

班長にも感謝しねェとだな。

「もう一つ」

「ン？」

「お前の、殺意、あるいは殺気を感知する、という能力についてだ」

「あァ」

――強化、回避。無理だ。しゃがめ。全身強化だ。これ以上ないってくらい強化しろ！

「ッ！」

「ほう」

避けた。避けた。

真上を飛んでいく。いやさ斬り裂いていく、半透明の何か。それは背後、修練用に作られた非常に耐久性の高い人形をバターみてェにスッパり両断し、そのまま反魔鉱石の壁にぶち当たるまで飛んでいった。

確実に、殺す気だった。

「その能力が確かなものであると、これでわかったな」

「いや――試し方」

「【神速】や【波動】、【神鳴】に【光線】。お前を本気で殺し得る者がいるか？　あるいは班長やあるるらでもいい」

「……あァさ、助かった。もうこの感覚には逆らわねェし疑わねェ」

「そうするといい」

いんやさ。
やっぱこえーわこの人。
でも。
「世話になった」
「ああ。お前が死ぬ事なく、奪われる事なく、そしてA級としての務めを果たして帰ってくる事を祈っている」
「ありがとう」
本当に、ありがとう。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「自分でつくっといてなんだけどね、本当に飲むのかい？」
「あァさ、一回は確かめとかねェと」
「……おすすめはしない、と言っておくよ」
フリューリ草の煎茶が完成した、ってんで、安藤さんのトコに来ている。

見た目は結構いい。ティーカップに淹れられた茶の色はオレンジがかったブラウン……なンだ、紅茶っぽい。匂いもシトラスハーブが強いから、ハーブティーかなんかみてェだ。

ま、味はアレなんだろォが。

口を付ける。

！？！？？

「あ!?　ぇ、ぁ……っげっほ、ぇ!?　ぁ、う!?」

舌が斬られた。

マジでそう思った。灼熱の何かに舌を突き入れちまったか、斬られたか。どっちかだと思った。

「だから言ったじゃないか……」

「ぅ、ぅ？　ぅ？」

「アタシもそうだったよ、最初に飲んだ時はね。喋れないんだ。舌の感覚が無いだろう？」

頷く。

舌先半分がどっかいっちまったって感じだ。舌も、なんなら唇も。
煎茶に触れた咥内全てに、感覚が無い。
「……ぁ、あー。あー。あァ。あーァ。か……あー」
「慣れてきたかい」
「ん。……あァよ、ちったァ耐性あったな。っけほ、あァ、こりゃやべェ。間違ってもお嬢たちにァ飲ませられねェや」
「回復量は、どうだい？」
「……すげェな」
「だろ？」
すげェ。
今、口を付けただけだ。口にちょみっと含んだだけ。
それで――フリューリ草10枚くらい食った時と同じ回復量がある。
「これァ、武器になる。けど、これ一杯で。いんやさ、水筒にたっぷり入れて、フリューリ草どんくらい使うんだ？」
「１００や２００はくだらないね。どれだけ煎じても、ほとんど魔力回復になる

成分を出さない。ま、花の方に回してるからだろうけどね。花の無いフリューリ草じゃこれが限界さ」

「……自分で栽培するのもテだな」

「どこに生えているかすらわかっていないのにかい？」

「なンだ、国の植物学者だのでもわかんねェのか」

「軍が哨戒帰りに見つけてくることはあるけど、生息地がわかってるってワケじゃない。仕入れてんのはもう死んだフリューリ草だし、栽培方法もわからない。誰かが育ててるって話も聞いたことはないねぇ」

「だが、花さえ手に入ればいいんだろ？　花から芽を出すって安藤さん言ってたじゃねェか」

「手に入ればね」

「……まァ私も見つけてねェけどよ」

フリューリ草。謎の多い植物だ。

つか、他の草花はなンで魔力を溜めなかったンだろうな。溜めれねェのか？

「一説によると、だけど」

「ん」
「フリューリ草は――魔法少女が死んだ場所に咲く、とか。そんな噂もあるね」
「……そりゃこえー話だな。つか嫌な話だ」
「まぁ、それが本当なら、大規模な侵攻のあった場所や激しい損害の出た戦場がフリューリ草の花畑になる。そんな話は聞いたことが無いから、噂は噂ってことさね」
「そォかい。そればっかりはそれでよかったよ」
だが、もし。
見つけられたのなら。その株を、栽培方法を。
……この煎茶を常備できたら。
「あー、不味ィ。まっっっずィな」
「よく飲み干せたね、それ……」
「勿体ねェもんよ。それに、今の内に慣れとかねェと、戦場で不味い不味い言ってられねェだろ」
「なんだい、またどっか行くのかい？」
「あァ、ディミトラっつー魔法少女に会いにな。つか、すまん。そういや忘れてた

わ、ルルゥ・ガルだっけ？　その子の捜索」
「……【鉱水】か」
「ん、ああ。ディミトラの方な」
「別に、捜索はしなくていいよ。知らないならそれでいい。で、【鉱水】に会いに行くんだね」
「おう」
何か思うところがあンのか、安藤さんは難しい顔をして――「ちょっと待ってな」と言い、店の奥へと入っていった。
安藤さんも歴戦の魔法少女だ。何か知ってンのかもしれねェ。
待つ事――約10分。
いんやさ、ちょっとってそンなかね。
「安藤さーん？」
「もうちょい待ちな！」
「……おゥ」
更に10分。いやさ20分。

……もうちょいって、そんなかね？

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

結局一時間くらい待たされて、ようやく安藤さんは出てきた。
「有った有った、ようやく見つけた！」
「おォ、そいつァ良かった」
「これを持っていきな」
そう渡されるのは……ワッペン？
何か、得体の知れない力を感じるワッペンだ。
……なンだよ得体の知れない力って。
「こいつはディミトラの作った紋章でね。つけてると、アイツの作品に嫌われずに済む」
「作品？　なんだ、作家か何かなのか？」
「なんだ、そんなことも知らずに行くのかい？　ディミトラは彫金師だよ。【鉱水】

を用いてあらゆる鉱石を扱う造形芸術家。【鉱水】は特殊魔法の中でも更に特殊な魔法でね。魔法をかけた鉱物に、命を分け与えることができるのさ」

「ン？　特殊ってな全部そォだろ？　だから魔法を殺すと魔法少女も死ぬっつー」

「共有じゃない、分け与えるんだよ。ディミトラの作品は個別の命になる。その上で死んでも蘇生する魔法少女とくれば、あの島がどうなっているか想像がつくだろう？」

「ははァ、通りでＥＤＥＮの庇護無しにいられるわけだ。自軍もってるってワケか」

「そういうことさ」

そんで、このワッペンつけてるとそのガーゴイル達に嫌われなくて済む、と。

こえーよ。着けずにいったらどーなってたんだよ。

「これ、くれンのか？」

「貸すだけ、といいたいところだけどね。どの道アタシにはもう必要ないものだから、永久に貸し出しておくよ」

「あァ、ありがたく貰っとく」

ディミトラ、ね。

中々厄介そぉだ。ま、鬼教官的にァ、あるいはお上様的にァそれでこそ、って奴なんだろぉが。
「ちなみにだがよ、安藤さん」
「なんだい」
「ディミトラってな、魔法少女歴で言うとどんくらいなンだ？」
「少なくとも１００年は超えているね。ＥＤＥＮが反魔鉱石の加工技術を得るまで、ほぼすべての反魔鉱石技術はディミトラが握っていたと言われるくらいだ。１００年、ないしは２００年。あるいはＥＤＥＮの創立者たちの時代まで遡るかもねぇ」
「油断するな、ってことだな」
「ああ。アイツは敵じゃないけど、味方でもないからね」
「りょーかい」
んじゃ、と。
ワッペン付けて、水筒受け取って。
「行ってくる。またな、安藤さん」
「無事は願っとくよ。次はもう片方の腕も、とかなってたら承知しないからね！」

「あァよ！」
っとに、良い人だな。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「で？」
「……なんだ」
「なんだ、じゃねェよ。四六時中尾行けてきやがって、何の用だっつってんだ」
「別に、用など無い」
尖り前髪の印象がガラっと変わっただけに、コントラストでコイツの株が急落中。
ブラックホール。容姿でのあだ名じゃねェ、魔法の見た目でのあだ名だったンだが、よくよく見りゃ黒い衣装に胸ンとこぽっかり穴あいてるんで、あながち間違っちゃいなかったなって。
「用がねェならついてくんじゃねーって」
「ついてきてもいない」

「あァそォかい」

何か用があンのはわかってんだ、さっさと済ませてほしいモンだが、一向に話したがらねェ。んじゃ他の塔や学園塔に行こうってな思えば、一定の距離保ってついてきやがる。何をしてくるってわけでもねェけど、気になって気になって仕方ねェ。

「……しにきただけだ」

「なんてェ？　聞こえねェよ。もっとはっきり喋ってくれ」

「助言を！　しにきただけだ！」

「ほォ。そりゃ助かるな。何言ってくれンだ？」

なんだ、ねぼすけ以外の突撃班全員が来てるワケだが、それで自分だけ行かないのは耐えられなかったとかかね？

ねぼすけには一応魔力の増幅法聞いたしな。「えーねてればいいよー」だそォで参考にァならなかったが。

「……あの時敵性存在が使ってきた、仮称【隠蔽】という魔法について……特殊寄りの遠隔魔法を使う者として少し纏めてきた。それと、あるるらの【透過】やお前の【即死】などの、殲滅力はないが殺傷能力に長ける魔法の使い方についても一

通り纏めてきた」

言って、ブラックホールはそれを出す。

分厚いってほどじゃねェが、結構な文量のしたためられた手帳サイズの書類。綺麗にファイル化されたそれは、付箋での目次やら色ペンでの強調やらと、随分とまァ見やすくされてる。

渡されたそれを素直に受け取って中身を見てみりゃ、これまた事細かに書かれた分析と対策、傾向、そのソースと……。

「すげェな、これァ」

「私からお前にできることはこれくらいだ。感覚や経験などは……私ではお、教えられない、が……」

「いやさ、助かるよ。すまねェ、ちっと短気が過ぎた。謝る」

「別に……問題は無い。私の方こそ、あれだけの敵意を送っていた、のだし……嫌われても当然だ」

「嫌っちゃいねェって。大好きな班長がぽっと出のよくわからねェのに取られたら誰だってあーなるよ。ま、安心しな。盗らねェからさ」

「だ、だ、大好き、などでは……ある、のだが」

すげェ。今はまだ軽く見てるだけだが、図解付きでわかりやすく纏められてるうえに、色合いも鮮やか過ぎないおじさんの目に優しい仕様。俺が書き込める余地も残してあるし、聞き込みでもしたのか、班長やキラキラツインテ、尖り前髪のコメントもある。

いやさ、頑張りすぎじゃねェ？　これ売れるよ普通に。

「その……私は、長い間Ｂ級だった。遠征において役に立つという理由であの班に入れられ、あの方に出会い……それでもまだ、私はＡ級を目指さなかった。目指そうとしなかった。己の魔法はＢ級止まりだと思い込み、信じ込み、それ以上を追求しなかった」

「そォなのか」

「私の【吸呑】は、元は周囲の物体全てを吸い込む魔法だった。魔物だろうと地形だろうと何もかも。当然消費魔力は莫大で、膨大で……だが、あの方が改良してみないか、と言ってくださって、その……色々と付き合って頂いて、いまの形に収まった。地形に干渉せず、命ある魔物だけを吸い込む【吸呑】に。そうなってから、魔

法を研究、改良するようになって……つい最近、私はA級として認められた」
「そこまで変えられるのか」
「――そう。魔法は使い方次第でその形を変える。お前の【即死】も、何か別解とでもいうべきものがあるはずだ。……これで助言になった、だろうか」
そう、不安そうに。
俯いて、ちょいと悔しそうに言うブラックホールに。
いやさ。
おじさん感動しちゃってさ。
「十分だよ。十二分だ。すげェよブラックホール。この手帳も、その助言も。私にとってめちゃくちゃ助かる情報だ。貴重な情報だ。ありがとな」
「そ、そうか。あ、ではなく、そう、ええと。ふん！　これが全てと思うなよ、じゃない、ああ……なんだ。その、油断はするな。お前の死を恐れる理念は、私には理解できないものだが、お前の【即死】が奪われてはならない、ということくらいはわかる。だから、決して油断をするな。敵にも――状況にも」
「状況？」

「どんな場合でも、可能性は必ずある。魔法がそうであるように、世界もそうだ。だから――その、だから、……」

この子、見た目ちょいキツめなんだよな。釣り目でよ、初見でキツい印象を与える。

けどすげェ良い子だ。純朴な子だ。

言葉っ足らずだし、言い淀みがちだが――ちゃんと相手のことを考えられる子だ。

おじさんは良い子には優しいぞ。思わずなでなでしたくなる。

キモがられるだろうからしないけど。

「だから、どんなに絶望的な状況になっても、お前次第で世界は変わる。状況は好転する。その可能性は、必ずどこかにある」

「あァよ」

「諦めるな。油断するな。妥協するな。――そして、死ぬな。……私から言えるのは、これくらいだ」

「肝に銘じるよ。ありがとうな」

「ふ、ふん！」

っとに魔法少女ってな、純粋無垢な子ばっかりで。
おじさんほっこりしちゃったよ。
ありがとうな、ホント。
必ず無事に帰ってくるからさ。

遠《ｔｅｘｔ:s1・2》吠えは遥か彼方に《≪ｔｅｘｔ》

18.是亜伊豆脳泥符阿連須尾藤韻武最後笛身安堵符阿椅子.

いつぞやの海洋に面した廃墟群。
懐かしいってほどでもないが、苦い思い出の詰まったそこに俺達はいた。
「こっから、真っ直ぐスか」
「ええ、そう。ここから真っ直ぐに二日海を渡ると、ディミトラの牙城である人工島・クルメーナに着くの。特に急ぎの任務ではないから慎重に行くわ。途中で休憩地点を作るから、実際にクルメーナに辿り着くのは三日後か四日後になるでしょうね」
「休憩地点をつくる？」
「……その、私が短期間のみ保つ足場を形成する、ので、その」
「この子の魔法はそういった悪環境での基地作りにおいて無類の強さを発揮するのよ」
「へェ。そりゃ楽しみスね」
俺達、といっても。

冷静メイド以外は初対面。
遠征組調査班オーレイア隊の皆々様方と俺と冷静メイドの即席部隊で、ディミトラの所へ向かう。
突撃班は攻撃特化な面々だったが、調査班の魔法少女はサポート向きの魔法少女が多く、明確なアタッカーは二人だけなのだそうで。
つまりまァ、できるだけ穏便に、って奴な。
「ライラック様はその魔法の特性上、出来得る限りの温存をしていただかなければならないため、私が運ばせていただきます」
「わかりました。それでは出発します。みんな、準備はいいかしら？」
頷く面々。
遠征のはじまりはじまり、である。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１：２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ぴょーん、ぴょーんと。

結構な高さを跳ねる移動方は、飛行魔法のそれではない。身体強化の一部、脚力強化で行っているのだろうけれど、おかしな点が一つ。

何って、ここが海上であるという点だ。

「海を、足場にしてる……？」

「いいえ。着水の瞬間に魔法を用いることで、極僅かな時間だけ保つ足場を形成しております。私が跳躍し、身体が上昇した後すぐに崩壊するものですが、後に戻ることを考えなければ海上を走行する事も可能です」

「なンだ、海を固めてるとかなのか？」

「いいえ。私の魔法は【侵食】。自己を世界に浸し、変質させる魔法です」

「……じゃァ、なンだ。その極僅かな時間形成される足場ってのァ」

「私でございます。無論、全身を形成するような無駄はしておりません。手のみ。指のみ。それさえあれば問題はありませんので」

いんやさ、怖いっつかグロいっつか、ホラーな魔法だ。

あるいは分身もできるってことか？　そりゃ普通にやべェんだが。どうなるんだ、その形成された方の意思とか。考えるとゾっとすンな。

「この私も、最初の私であるかどうかは怪しいですね」
「……」
「冗談です」
「怖いって」
冷静に無表情でンなこと言うんじゃねェよ。こえーよ。
……ま、正直どォなんだろォなって感じはあるけどな。俺ァまだ疑ってるぜ。魔法少女の蘇生……そいつァよ、クローン技術とかそういうのなんじゃねェかってトコ。
わかんねェよな、他人からじゃ。ソイツが元のソイツかどうか、なんざ。死に際して途切れた意識を、記憶を、どうやって持ち帰ってンのか……なんて。
怖い話だ。
「ローグンさん、周辺域にシャーク種の形成地点があります。お気を付けを」
「ありがとうございます」
冷静メイドの滞空時間に、ふわふわとコッチに寄って情報提供してくれたのは、俺が虹色ロングとあだ名をつけた唯・グランセって魔法少女。なんとD級の魔法

少女であり、俺と同様亜空間ポケットも飛行魔法も使えない。一応分類は遠隔だが殺傷能力も殲滅力も持たないマジのD級らしい。

じゃあなんで飛べてんだってトコは、同じくオーレイア隊のフィニキア・各務っつー……なんだ、ザ・委員長みてェな奴の魔法のおかげ。

魔法名【引力】。つってもまァ惑星だのなんだののソレってよりか、見えねェ触れねェ紐がくっついてる感じに近い。一度に付けられる数には限りがあるものの、一度くっつけたら本人の意思がない限り離すことのできないって特性で、だから拘束にも持って来いなんだと。

そんな魔法なんで、俺達よりもずゥっと高ェとこを委員長は飛んでて、D級の虹色ロングともう一人いるB級の魔法少女を引っ張りながら飛んでる。維持には魔力がかからなねェエコ仕様らしく、遠征向きな魔法だって自慢された。羨ましかねェけど確かに便利そうではあるよな。

今俺達は、オーレイア隊が少し先を行って、その後をついていくって形で進んでいる。

だから、あんまり話す機会が無いのがちょいとな。おじさんコミュニケーション

あらかじめ取っておいた方が連携とかよくなるんじゃないかって思っちゃうタイプだから、ちィっとでも話しときたい所。

……が、一応紐を出すの自体には魔力がかかるって話の委員長に、俺も吊り下げてくれ～、なんてのはまた厚かましいというか図々しいというか。初対面でンなお願いは難しいというか。

「――冷静メイド、次の着地はちょいと右方にしろ」

「はい」

こうなってくるとやることないんでまァ、俺ァ索敵をすることにした。

姫抱きにされてるンで海面が見えねェのがネックだが、だからこそ強化してない状態での知覚を訓練するのにもってこいだ。

殺意も、な。

俺の指示通り、ちょいと右の方に着地……着水？　した冷静メイドの横合い。さっきまでの進行ルートだったら踏んでいたはずの地点を、灰色の巨体が飲み込んだ。

サメだ。クソでけェサメ。そいつがトビウオよろしく……いやマンボウか？

なんでもいいが、垂直方向に大ジャンプをかましたんだ。確実に食いつく気だったンだろう、これまたでっけェ口を、歯を、金属同士がぶつかったみてェな音出しながら閉じて、海ン中に戻ってった。

「囲まれていますね」

「みてェだな。いけるか？」

「問題ありません」

見える見える、サメの尾びれ。海中にいンのは数えられねェが、一瞬見えた限りじゃ二十はいる。姫抱きだと顔の向きがきちーのよ。いやさ俵抱きにしてくれってワケじゃねェけどさ。

海ン中にいる化け物ってな、地上のソレより基本巨大だ。前世基準の魚介類をそのまま何十倍にもしたのが棲んでる。クラーケン然り、このサメ然り。あとァ文献で読んだだけだが、イルカやクジラみてーなのもいるんだとか。クジラの化け物は一つの島よりも大きいとか書かれてたんだが流石にどォだろなって思ってる。誇張じゃね？　って。

それはおいといて。

「無理そぉなら、私が殺すが」
「問題はありません。あれらは形成地点で湧いた種ですので、縄張り外に出てしまえば追ってはきません」
「なるほど。んじゃアレは？」
アレ、と。
抱えられたままに指を差すは――サメの尾びれの中にある、一際でっけェ黒いナニカ。
円形のそれァサメがいることも気にせず、一直線にこっちに向かってきてる。サメ避けのために冷静メイドが身を振れば、その円も追従する。
確実に俺達を狙ってきているナニカ。
「……自然形成のタートル種ですか」
「あれ亀かよ」
「私の走行速度では追いつかれますね。ですが、問題はありません。ライラック様は何もしないでください」
「あァよ、予定外のことされるとむしろやりづれェって事だろ？」

「肯定します」

否定してくれてもいいんだぜ。

なンて冗談はいいとして。

冷静メイドは、俺を抱く姿勢を少しばかり変えた。姫抱きから――片腕で、強く抱きしめる感じに。

……いやさ、あんまりに自然だったから戸惑いすら覚えなかったけど、情熱的……じゃねェや、ああいや、一応戦闘中にこんな事考えンのはアレなんだが、少しばかりキュンときちまったね、これァ。

お嬢たちと違って、冷静メイドは結構な美人さんというか、年のころ26か27か、そンくらいの見た目をしてる。それでいて声も落ち着きあって、雰囲気も落ち着いてて。そいでそんな情熱的に抱き寄せられたら、なァ。

罪悪感覚えちまうような少女ってワケでもねェから、おじさん普通に恥ずかしいよ。っとァ俺がこういうことしたいんだけどな、二次性徴も起きる前に魔法少女になっちまったんで、俺の身長も容姿も永劫このままと来た。

……恋愛、ねェ。

子を成せない魔法少女は、だからこそフォーマルな恋愛ができるんだって力説してるクラスメイトがいたが、まァ、おじさんには縁遠い……こと、でもないのか。

お嬢があンだけ好意寄せてくれてンのは無視できねェよなァ。ただまァ、答えを出すにしろ、全部終わってからさな。全部っつーのがどこまで全部かはわからねェけど、ヤなコト全部終わって……俺っつー奴の事を、知ってもらってさ。

あるいは俺がおじさんだってことをバラして。

それでも尚、っつーなら俺も揺らぐかもしれねェけど、ま、無理だろ。フツーに嫌われそうだ。エデンは女の子達しかいないからこそ、みてェなトコあるしな。

「終わりました」

「ちなみに何をしたのか聞いても？」

「姉謹製の【劇毒】ポーションを用いました。周辺域のシャーク種含め、ここら一帯の魔物は死滅したかと」

「環境問題になりそォなことしてんなァ」

「この海は国領ではありませんので問題ありません」

あると思うけどなァ。

……罪なきおさかなさん達も死んだって事だろ。南無。あ、いねぇか。いたら全部化け物に食われちまってるか。

「かがめ！」

「！」

ぐんと空中で前屈姿勢になる冷静メイド。

その頭のあった場所を突き抜ける水。水の、糸。

「高圧水流――鉄砲魚か!?　こんな沖合で!?」

「新種ですね。自然形成の類だと思われます」

「避けられるか？」

「問題ありません。攻撃方法さえわかれば、対処可能です。問題は」

「アンタの姉の【劇毒】ポーションを逃れてきた、ってトコか」

「はい。通常の生物・魔物であれば凡そ三時間は痛みにのたうち回り、呼吸も食事もできずに死んでいく代物なのですが……毒に耐性があるようですね」

毒物や病魔に耐性を持つ化け物、ってな結構いる。

なんでかってーと、化け物側にもそぉいうの使ってくるのが結構いるからだ。太

腿忍者が言ってたよォに、魔力や念動力を操る化け物ってな高位のもの。それ以下はじゃあどォやって生存競争を生き抜いてんのかってーと、そーやって耐性つけたり逆に毒物を身体に含んだりして、短期間での目まぐるしい進化を繰り返している……んだと。

迷宮の主の言っていた種としての堆積っつー奴だ。ランダム湧きであっても、湧きポの化け物であっても、種として形成された以上は存続を目指す。つっても化け物には基本寿命らしい寿命が無くて、殺されない限りは生き続けるから、進化が目まぐるしいのはこういう生存競争の厳しい環境にある化け物だけ。

それこそアシッドスライムだのマッドワームだのはそこまで特異な進化を遂げていない。常に天敵がいる、みてェな環境にいねェからな、あいつらは。

んで、今俺達を狙ってきた鉄砲魚っぽい化け物。

遠隔で獲物を仕留めるだけに飽き足らず、毒物にまで耐性をもっている、と。逆に言えば近くに毒を持つ化け物がいる証左だし、遠隔を使わなければならない……空を飛ぶ化け物がいるって事でもある。

化け物の事情なんざ興味ねェとは迷宮の主に言いはしたが、尖り前髪との訓練や

ブラックホールの手帳の情報から初見の相手を少しでも減らそォと思って図書館でそーいう研究書物を読み漁ってきたんだ。嫌うにも殺すにも、相手を知っとかなきゃ無理だ、ってのは身に染みてるしな。

一応前世の教養も補助になって、そォいう化け物の生態連鎖、みてェなのは一通り理解した。学園ではこれから先で教える内容だったらしィんだが、俺に関しちゃ四の五の言ってらんねェんで勘弁だ。授業自体全然受けれてねェしな。

「仕方がありませんね」

「策があンのか？」

「策と言えるほどのものではありません。海を【侵食】し、私を半分ほど形成いたします。あの魔物含め、周辺域の魔物全てが集まる事が予想されますので、着水の10秒後に起爆するポーションを体内に仕込み、一網打尽にいたします」

「……」

淡々と、そんなことを言う。

誰に許可を取るわけでもない。説明はした、とばかりに、着水し――その足元に、ソレが形成されていくのが見えた。

ソレ。

まず――髪が出来て、頭が出来て、肩が出来て腕が出来て胸が出来て――。

それ以上は流石に見ちゃ不味ィと思って目を瞑った。まさか服無しで形成されるとは思わねェだろうよ。

だが、目ェ瞑ってもわかる。鼻がそれを捉える。

血の匂い。

「大丈夫、なのか」

「問題ありません。【侵食】は侵食したものを自己に変質させる魔法です。ここに形成した私は元は海であり、私自身に欠損はありません」

「……それァよ、何にでも使えンのか。たとえば――化け物とか」

「可能です」

コイツ、B級だったよな？

いや、そうか。確かに殲滅力もなければ殺傷能力もない魔法だ。殺傷ではないだけでこえー魔法であることに変わりはないが、少なくともEDENの等級区分ってな殲滅力と殺傷能力がどれほど高いか、で決まる。コイツとその姉は完全に鬼教官

殿に付き従う部下ってこともあって、あるいは突撃班に見られるような工夫しての殺傷能力、ってのを見せる事はあまりないんだろう。

あるいは単純に昇級試験受けてねェかのどっちかだ。後者の可能性も十二分にある。

「血は、お嫌いですか」

「ん……ま、好きじゃねェよ」

「申し訳ございませんでした。以後気を付けます」

あァ。

俺が目を閉じたのが、血を見たくねェからだって思ったのか。ま、それもあるか。だって１００㎏グロいもんな、ソレ。魔法で作ったとはいえ……女性の上半身が、化け物共に啄まれていくトコ、なんて。

見たかねェ。見るべきじゃないと思ったのはそういう意味でも正解だったな。

「冷静メイド。あっちのお前って……あァ、いや。聞かないでおく。こえーから」

「賢明な判断です。その答えを私は有していますが――決して、気分の良いものではございませんので」

「それ答えじゃねェか」
「冗談です」
……どこまで、っつか何が冗談だったんだよ。こえーよ。
「先を急ぎます。少しばかり離れてしまいました」
「あァよ。ま、あちらさんもちょいと進行速度遅らせてくれてるみてェだけどな」
「それも踏まえて、急いで追いつきます」
さっき言ってた――自分が最初の自分じゃねェかも、っての。
あながち、本当だったりしてな。
なんて。
やめとこやめとこ。怖い話はあんま好きじゃねェんだ。特にサイコホラーは、対処のしようがねェからさ。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

海のど真ん中。

そこに――球体の、シャボン玉みてェなのがあった。
「あら、追いついたのね。大丈夫でしたか、ローグンさん」
「問題はありません。これは、突入しても大丈夫でしょうか？」
「今開くわ。知子」
「……はい」
さっきのおどおどしてた子が、オーレイア隊長……銀バングルに言われて前に出る。彼女が両手の甲をこちらに向けて、ゆっくりと離すような仕草をすると――シャボン玉の上部が、むにゅーん、って感じに開いた。
なんだこれ。
冷静メイドと俺がそこに入ると、またむにゅーんと閉じる。
なんだこれー！
「ふふ、興味津々、といった顔ね。粗暴な口調には面食らったけれど、可愛い所もあるじゃない。知子、説明してあげ……ても、いいかしら？」
「お、お願い、します」
多分説明してあげて、と言おうとしたのだろうけど、おどおどしてた子……眼鏡

をかけたその子があんまりにも遠慮しますって顔してるんで、銀バングルが前に出た。

　銀バングルも高飛車令嬢って印象だったのに、なんつーか面倒見のいい姐さんって感じなんだな、って。

「この子の魔法【排析】は、こうして一定の空間を押しのける事ができるのよ。その上、押しのけた空間の周辺域を探査することもできる。どう？　調査班として、とても素晴らしい魔法だと思わないかしら？」

「おォ、おー。すっげェ、なんぞ感触が良い……これめっちゃいいな！」

「……想像していた喜び方とは違うけれど、良かったわね、褒められたわ、知子」

「う、うん。……嬉しい」

　降り立った感触は、猫だの犬だのの小動物に近い。シャボン玉みてェなつるっとした見た目なのに、ふにふにしてる。アレだ、隣のナンタラの猫のナンタラ。アレだ。

　すげェ。すげェ気持ちいい。感触良過ぎてやべェ。ここで眠りてェ。これ俺の部屋のベッドに欲しい。

「しかも海の中まで見えると……最高か？」
「う、嬉しい、です」
「いやもっと誇っていいよ光眼鏡！　すげぇよこれ！」
「わ、ひっ!?」
ぴゃっと銀バングルの後ろに隠れる光眼鏡。
……やべー、おじさん何やってんだ。子供怖がらせるとかダメだろ。
「あァすまねェ、怖がらせちまったな。そんなつもりはなかったんだ。なんぞ、感動しちまってよ」
「ひ……光、眼鏡？」
「あそっちか。あだ名だよあだ名。お前さんの」
ダメだね、セーブセーブ。自省自省。
……でもマジでこれ欲しい。めちゃくちゃ気持ちいい。
「周辺域に大型魔物の陰はありませんね。小型のものはいますが、【排析】を貫けるほどの力を持つものはいないでしょう」
「お疲れ様、フィニキア。ケトゥアンも警戒を解いていいわよ」

「……」

何かをしていた委員長と一切言葉を発そうとしない魔法少女がこちらにくる。虹色ロングは……寝てるな。やっぱ寝るよな、この材質。

「小休憩にしましょう。ローグンさんも、魔法を使ったでしょう？　遠征はまだまだ長いわ。しっかりと魔力回復に努めること」

「お気遣いいただきありがとうございます」

「そして、貴女はこっち」

こっち、と言われた時には、抱きかかえられていた。

銀バングルは身長がかなり高い。加えてモデルみてェなグラマラスボディで、ええ、おじさんちょっと、ね。

少女少女してた学園とは一切違う、突撃班の宝の塚みてェな雰囲気とも違う……こう、なんだ。

冷静メイド含めて、大人の女性、が沢山いる空間と言うのは……色々毒すぎる。あんまりスキンシップしないでほしい。色々出てきちゃうから。おじさんが頑張って隠してるおじさん要素が出てきちゃうから。

「さ、親睦を深めましょう。行きに四日、滞在がどれくらいかかるかはわからないけれど、二日か三日はかかるでしょう。そして帰りに四日。つまり、十日近い時間を私達は一緒に過ごすの。それなら、初めの内にお互いを知っていおいた方が何かと役に立つわ」

「そりゃァ完璧に同意なんだがよ、銀バングル。ちょいと離してくれねェかな」

「ダーメ。聞けば貴女、13歳で、魔法少女になってから数か月なんでしょう？ならここにいるみんなはお姉さんよ。貴女は末っ子として、大人しくお姉さんに抱きしめられなさい」

あー。こーいう人かー。

高飛車令嬢でも面倒見のいい姐さんでもない。

そういう系かァ。

「みんなもそれでいいわね？」

頷く面々。無口な奴まで頷いてるからもうダメだねこれァ。

逃れられねェや。どの道このシャボン玉光眼鏡が操作しねェと開かなそうだし。

逃げたとして海のど真ん中だし。

嵌められたな、これァ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

19・織座頭亜上佚伊豆阿佐渡笛意図.

「まず、改めての自己紹介から行きましょう。私はオーレイア。この遠征組調査班オーレイア隊の隊長を務める魔法少女よ。魔法少女になったのは24の時。魔法少女歴は40年程ね。魔法は【白亜】。S級よ。はい次ケトゥアン」

「……ケトゥアン。【槍玄】。A級」

「次、結」

「はーい。結・グランセです。D級の【弱化】って魔法使うよ。魔法少女になったのは15歳の時で、魔法少女歴は10年くらいかな？」

「フィニキア・各務です。A級で、【引力】という魔法を使います。戦闘より探査や調査を得意としていますが、戦闘ができないというわけではありません。魔法少女になったのは17歳の頃ですが、魔法少女歴は40年と、隊長に並びますね」

「最後、知子」

「あ……う、そ、その。残府知子、っていい、いいいいい、マス……えと、B級の【排析】が魔法で、その、魔法少女になったのは15歳の時で……えと」

「こー見えて、実は知子ちゃんの魔法少女歴20年だったりするんだよね。驚いた？」

「めちゃくちゃ驚いた」

「あ、そそそ、その、ベテラン、とかじゃないので、その、あんまり期待は、その」

「いんやさ、頼りにさせてもらうよ、光眼鏡」

「そのあだ名は、はじめて、だけど……」

バラエティ豊か、っつゥか。

なんぞ、きゃぴきゃぴはしてねェが、やっぱり女の子って感じだな。まァ無口の奴以外魔法少女歴がなげェんであんまし若い感じはしねェが。無口の奴も結構行ってんだろな。調査班ってな人員変わらずにずっと、っていうし。

「貴女も今みたいな感じで、自己紹介できるかしら？」

「あンま子供扱いされても面倒なンだが、あァよ。私ァ梓・ライラックだ。つい最近Ａ級になったが、実力はＢもいいとこだな。魔法は【即死】。つっても近接だからよ、遠くから殺す、なんてのはあんまりできねェ。一切できねェワケじゃねェんだけどな？　……あー、で？　そうそう、魔法少女なったのァ13の時だ。歴は一

年にも満ちてねェが、だからつってンな子供じゃねェんで、普通に接してくれると助かる」

「それは無理な相談ね。貴女がどう思っても、私達は全力でお姉さんをさせてもらうわ」

「あァそォかい。そりゃ難儀だな。面倒だ」

最初はスかね、みてェな敬語モドキ使ってたけど、やめだやめ。銀バングルにァもう素でいいだろ。

……あとはまァ、コレか。

「気ィ遣ってくれてんのはわかるからよ、私から言うが。コイツは魔法少女になる前からこうだった、ってワケじゃねェ。魔法少女になってからこォなったンだ。私ァ死ぬのが大嫌いでね。片腕失って蘇生で回復、なんてのをするくらいなら、腕斬り落として義手にする方を選ぶ。それくらい死を嫌ってるって思ってくれりゃいい」

「話したくない事なら聞かないでおこう、と思っていたのだけれど……なるほど、そういう事情があったのね。大丈夫よ。遠征隊調査班は野蛮な突撃班とは違って、

対象からは距離をおいて冷静に調査をするの。勿論時には戦闘も起こるけれど、頻度はそう高くないわ。危険だと思ったらすぐに撤退するし、ね？」

「……だが、調査対象を調査し終わったら――最悪、死んでＥＤＥＮに帰るンだろ。それが緊急を要する情報なら、三日も四日もかけて戻ってられねェから」

「それは、ごめんなさい。私達にも守りたいものがあるから」

あァ。それァ、俺も理解した。

あの迷宮で――俺とは見ているものが、距離が違うんだって。

それでもやっぱり、死は嫌だよ、俺ァ。

「優しい子なのね、梓は」

「……」

やっぱり、ソレを優しいと捉えるんだな。

鬼教官殿や暴走繭が理解の良い方だった、ってだけだ。大半の魔法少女にとって、死も苦痛も過程でしかない。怖いモンじゃねェんだ。

だから、それを未だに怖いと捉える俺を、優しいなんて言葉で包んでおいておく。

オブラートだよ。それが剥がれりゃ、未熟、にでもなるんだろォな。

「えーと、場がしんみりしてるとこ申し訳ないんだけど、そろそろお菓子でも食べない？　あんまり真剣な空気って苦手でさー。隊長、ダメ？」
「あァさ、ありがとうな虹色ロング。私も別に得意ってわけじゃねェからよ、空気ぶち壊してくれンのは助かる」
「虹色ロングってもしかして私のあだ名だったりする？」
「だってお前、髪虹色じゃねェか。長髪で」
「安直すぎー!?」
いやさおじさん驚いたよ。
現地集合したら背面虹色の奴いンだもん。目立つだろソレ、とか思ったけど、まァファッションの自由くらいはあっていいだろ。魔法少女の衣装で変わっちまってる場合もあるしな。
「他人をあだ名で呼ぶのは、失った時に悲しいから？」
「おいおい銀バングル、話蒸し返すなよ。いまコメディになりかけてただろォが」
「隊長は貴女のような捻くれた子供を見ると優しく甘やかして素直にさせたくなる厄介な人なので、あんまり気にしない方がいいですよ。はい、これ。お菓子です。

あ、甘いもの大丈夫ですか？」
「大好物だ。あんがとな、委員長」
「……委員長？」
「あァさ。つか、冷静メイドもこっち来いよ。アンタも菓子くらい食うだろ？」
「問題ありません。私は魔力回復に努めていますので、ご歓談のほどを」
「じゃあ来い。私が気になるから来い」
「はい」
さっきからマジで無口なケトゥアンも、きゃいのきゃいのと喋りはしないもののお菓子パーティには参加するらしい。普通に紅茶とお菓子を受け取っているし、光眼鏡もそれは同じ。
未だに俺を離さず、慈しむような手つきで俺の頭を撫でてる銀バングル以外、全員お菓子パーティのノリだ。
「アンタが誘ったんだ、アンタが乗らねェってことはねェよな、銀バングル」
「……そうね。お姉さん色々思い出しちゃってしんみりしちゃったけど……そうね。今は親睦を深める会。ということで、梓には私が食べさせてあげるから、楽に

してね」
「それもう子供扱いっつぅか赤子扱いじゃねェか。離してくれよ、普通に食わせてくれ」
「え？　口移しがいい？」
「難聴にも程があンだろ」
あー、なンだ。
やっぱ人って、話して見ると印象変わるよな、って。
……残念な方向に変わるとは思ってなかったけどさ。あァいや、班長もそんな感じか。
「あ、梓、ちゃん」
「ン？」
「ここ、これ……」
「お、クッキーか。ありがと、」
「はい、あーん」
「……」

いやさ。

銀バングルだけじゃねェのかー。つか第二波が光眼鏡だとは思わなかったよ俺ァ。

つかマジで恥ずィんでやめてくんねェかな。43歳のおっさんの赤ちゃんプレイなんて誰が望んでんだよ。きめェだろ。いや43歳のおっさんの女学園生活ってのも望まれちゃいねェだろォが。今更ではあるンだがよ。

……口を開ける。

「あ、ふふ。いいこ、いいこ……」

「……」

光眼鏡も光眼鏡で……あァいいや。うめェクッキーだなオイ。いやいいな。やっぱ糖分って最高だよな。

ちょいとA級目指すってんで己に色々と課してて、パフェだのトロピカルジュースだのなんてのは以ての外、つって縛ってたんだが……あー。久しぶりに食べる菓子類の美味さよ。パルリ・ミラのパフェ食いてえ。

おじさんだった頃から好きなんだよな菓子類。バレると馬鹿にされそうで誰にも言えなかったが、割と有名ケーキ店とかの持ち帰りとかやってたなァ。

「あ、ずるいずるい！　私もやるやる。はいあーん」
「いやよ、虹色ロングそれモガ」
「どう？　美味しい？」
美味しい。美味しいんだがよ、ショートケーキフォークにぶっ刺して丸ごと突っ込むのは無理だろ。色々無理だろ。咀嚼に時間かかるわアホか。
つか口元べとべとなんだけど。拭いてェのに両腕抑えられてんだけど。なァ。
「ああもう、そんなことをしたら、汚れてしまうじゃないですか。はい、梓さん。お口拭き拭きしましょうねー」
「……んぐ。っぷ、まァ待て委員長。アンタ銀バングルのこの赤子扱いを気にするな、みてェに言ってた癖に、ソッチ側なのかよ」
「一々気にしていたら身が持たないので、流れに身を任せるというのも処世術ですよ」
「あァ……諦めね」
ケトゥアンサンの方をチラっと見る。
良かった、あの人は普通だ。普通に黙々と抹茶みてェな色したケーキ食べてる。

抹茶なんてあるんだな。緑茶自体国でもエデンでも見かけなかったが、俺のサーチ不足か。

ん？

「……」

「え、いいって。別にくれ、ってわけじゃなくて」

「……」

「いや、アンタ随分と美味そうに食ってたじゃねェか。いいよ、好きなんだろ？自分で食えよ」

「……」

「ちょ、押し付けてくんなって、あ、ちょ」

「……」

喋らねェでフォーク押し付けてきやがる。先端に抹茶ケーキ刺さってるとはいえ普通に危ねェだろうが。

「……」

「わかった、わかったから。食べるから押し付けんな危ねェから」

「……」

食べる。

……うめェ。いやマジで。

あー。あーあ。班長のお菓子パーティも参加しときゃよかったなァ。いやまァあん時は冷静メイドに拉致られたンだが。

……なんかヤな予感がしたので、顔を背ける。

「強制はいたしませんが、どうでしょうか？」

「しねェんなら回り込むのやめろ」

「冗談です」

「うわ目の前で食われるのも色々思うトコあんな」

冷静メイド。無表情だが、感情が無いってワケじゃねェようで。

それなりに菓子パーティを楽しんでいるらしい。あと俺への揶揄い含めて。特に揶揄いは任務開始時からずっとされてっからな……。

「みんな、ずるいわ。私もやるから、誰か腕抑えるの変わってくれない？」

「では、私が」

「いやなンでお前がそんなノリ良いんだよ」
「キリバチ上官のご命令は似たようなものが多いので」
「あー」
納得してしまった。
鬼教官殿は確かに、そォいうどーでもいい命令しそう。忠誠心に篤い方、だのと言われてたが、そういう冗談は言えるのね。
「いやまァ、もういいよ。好きにしてくれ。私ァ甘いモン好きだからよ、くれるってんなら貰ゝ」
――強化。冷静メイドと銀バングルの胴体に手をかけて、思い切り前進！
「きゃ!?」
「ッ！」
突き出でたのは――黒い槍。
ギザギザとした鋸の刃みてェなのがついたそれは、確実に俺達三人を突き殺そうとしてた。
「光眼鏡、上開けろ！　委員長、とりあえず全員引っ張って飛行魔法！」

「はは、はい！」
「ケトゥアン、頼みました」
「……」
もにゅーん、と、シャボン玉の上部が開く。そこから真っ先に出て行くのはケトゥアンサン。次いで委員長が出て、それに引っ張られて光眼鏡と虹色ロングが浮いていく。
こっちには無理か。あるいは、つけたつもりだけど付かなかったとかそんなトコか？　委員長は明らかに全員引っ張るつもりで全速力で上に上がってる。なンかあったな、これ。
「同じのが来る！」
「――来る場所が下だとわかっていれば、問題ありません」
「まったく、どうしてこう……お姉さんの邪魔をするのかしらね、魔物というのは」
ヒョイ、と抱えあげられる。冷静メイドに。
姫抱きじゃなく、また片腕で抱き寄せる感じに。
海中。シャボン玉こと【排析】によって露になってる暗い海を、まっすぐに向

かってくる巨体。尖った鼻先――その魚影。
「カジキ、いやイッカクか！」
「オーレイア様。私が固定しますので、任せても？」
「ええ。お願いするわ」
言って、冷静メイドはその足元から自己を形成し始める。作り上げられるのは手。腕から先の無い手が――無数に形成された。
そこに突っ込んでくるは長く鋭い牙を持った化け物。イッカク。
ただその大きさが尋常じゃない。漁船くらいの体躯に、牙は5m近くと、いややベェ化け物だことで。
それが、ぶっ刺さった。
――冷静メイドの作り上げた手の群体に。
「止めます」
そしてその手は、それぞれが個別に動き、イッカクの牙を掴んでいく。
獲物を仕留めきれなかった事を察したイッカクが身を戻そうとしても、できない。冷静メイドは、その手を。その全ての手を――強化している。【侵食】で形成

した部位も強化できるのか。そりゃ、またやべェ話だな。

「【白亜】」

完全に捕まったイッカクの牙に触れるは銀バングル。

魔法名と共に――イッカクの牙が。そして手の群体が。

骨、みてェなものに変わっていく。

……石灰質、か？　白亜って、文字通りの白亜質かよ。

それは勿論、牙の持ち主であるイッカクにも及び――それでもまだ抵抗をするソイツに、今度は手の群体がパラパラと崩れ落ちてしまった。イッカクの牙ごと、脆い石灰が如く、真っ白に。

だが、それで奴は窮地を脱した。口先が【白亜】化しているとはいえ、まだ体全体には及んでいない。触れ続けていなければいけないのか、それ以上の進行も無い様子。

まァ、逃げるならそれでいい。牙ァ失ったんだ、もう攻撃してこねェだろうしな。

イッカクの牙ってな、一回折れたら二度と生え変わらねぇっていうし。

なーんて思ってたんだが。

「――【槍玄】」

その、逃げる巨影を。

ヒトガタの――いやさ溜めるまでもねェ、ケトゥアンサンが貫いた。その身で。その体で。凄まじい奔流を纏いながら、凄まじい速度で突っ込んできて、イッカクの身体をぶち抜いたんだ。

……決めた。

あだ名は、過激無口な。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ンなことがあったんで、お菓子パーティなんぞは中断。

あのイッカク自体はランダム湧きだったっぽいんだが、もうちょい安全な海まで移動する、とかで、今度は飛行魔法を使用しての移動となった。Ｂ級なのに飛行魔法使えんのかい。っつーツッコミは、そぉいや鬼教官殿も実力で上り詰めただけで魔法自体はＣ級かＢ級だってのに普通に亜空間ポケット使ってたな、と思い出す。

なんかコツとかあンのかね。

……あるいは単純にこの冷静メイドがＡ級になってねェ、なれるけどなってねェ、って奴だけかもしれんが。

あァそうそう、委員長が俺達を連れて行かなかったのは、なンでも【引力】の対象ってな選ぶっつかくっつけんのに結構集中して狙いを定める必要があるとかで、単純に当たらなかったそォだ。すんげー平謝りされた。

「冷静メイド、魔力は大丈夫か？」

「問題ありません。回復は終えていました」

「その後に使った分は？」

「問題ありません。私はＢ級ですが、魔力量はＳ級に届きます」

「あァか。ならいいんだ」

やっぱりコイツ昇級試験受けてないだけだな？

いんやさ俺も受けてねェけどさ。

「……殺意を感じ取る、でしたか」

「ん？　あァ、さっきのか」

「非常に有用な能力であると言えます。ライラック様の生存において、その直感に従うことは最優先で行われるべきことです。ですが」
「〝私達まで助けようとするのはおやめください〟、とか言ったら怒るぞ。まだクルメーナって島についてもいねェ内から死のうとしてんじゃねェよ。着いたところで死なせねェが」
「……申し訳ございません。口を慎ませていただきます」
「あァ」
姫抱きにされながらだとちとカッコつかねェけど。
……助けなくて良かった、とかさ。やめてくれねェかな、マジで。
滅入るよ。ンなこと言われたら。
「険悪な雰囲気だけど、お姉さんも参戦していいかしら」
「ダメだ。アンタはあっち行ってな」
「あら酷い。私梓に何かした？」
「何ってほどはされてねェが、アンタが面倒な手合いだってことはわかったよ」
「ま、いいわ。この遠征中になんとしてでもデレさせてあげるから」

デレさせる、って。

……いんやさ、俺ァしねェよそんなこと。きめェだろ。

「謝ろうって。思ってね」

「……何をだ。さっきのことか？」

「ええ、そう。私達は調査班で、あの空間は【排析】……周辺域の探査が可能な魔法内だった。にもかかわらず魔物の襲撃を許してしまった。これ、どういうことかわかるかしら？」

「サボってたから、って言いてェんだろォが、そいつァ違ェな。私を気遣ってンのはバレバレなんだよ。初めての長期間の遠征任務に、同クラスの子もいないんじゃ絶対に寂しい思いしてるから少しでも盛り上げてあげなきゃ、とか思ってのアレだろ？」

「……誰から聞いたの？」

「誰にも聞いてねーって。わかるよそンくらい。年長者として、新人だの研修だので周りに馴染めてねェ奴がいたらどォにも放っておけなくなっちまって、世話焼いちまう。でも気ィ遣ってるってバレると余計に焦らせちまうし遠慮させちまうか

ら、わざわざ面倒な奴装って下手打って安心させる。どーせそんなこったろ」

班長にもしたことだが、どぉにも昔の経験談を当て嵌めちまうな。

ウチにもいたんだ、そういうの。なんつーかな、世話焼きのおばちゃん、って感じの経理だったんだが、歓迎会だのなんだのでレクリエーションあるたびに、誰とも話せてない奴にダル絡みしにいって、ソイツが周囲に助けを求めることで、あるいは周囲が動いて経理が退くことで、新たなコミュニケーションを生んでいた。

自分を悪役にするって程じゃないが、自分から面倒くさい奴になることで不和を破ろうとする奴もいるってな話。

「ま、それが今回ばかりは裏目に出ちまったってそンだけだよ。謝られる筋合いは無ェ」

「……そ」

「ゞの歳でそこまでの考えに至るなんて、どれほどつらい環境にあったのかしらゞ……的なコト言おうとしてンなら、それァ見当違いだ。家族も友人も真っ当だったよ。良い人達だった。魔法少女になるまでの私の人生に何の苦難もなかったし、なった後だってそうさ。価値観の違いにゃ悩まされちゃいるが、友人も教官殿たちも良く

してくれてる。あァ、お上だけァどーにも考えが合わなそうだがな」
「それで、どうしてこんな粗暴な子になってしまったのかしら……」
「はン、生来さ。国のガッコにいた頃からこんなんだよ、私ァ」
なんつーかな。
気を遣ってくれてンのはひしひと伝わってンだ。
でも、それ以上に……なンかと重ねられてんのもわかる。トラウマ、かね。銀バングルには銀バングルの、なんか抱えてるモンがあるって感じがする。
その抱えてるモンが、俺と似た要素を持ってるんだろう。
「まァよ、銀バングル。アンタが何を思って、どういう思想で魔法少女やってンのか知らねェけどさ。私ァさっき話した通り、誰も死なせたくねェんだ。戦闘でも調査でも、どんな時でも。だから、私に暗い顔させたくねェってんなら、頼むから死なないでくれ。どんなに急を要する情報が手に入っても、全力で帰ってくれ。死なずに、帰ってくれ。私を置いてっても構わねェからさ」
「……どうしてそこまで、死を嫌うの？　死んでも……何も失うものはないのに」
「死自体が喪失だからだよ。つってもまァ、すぐに理解してくれとは思わねェ。ア

ンタにはアンタの信条がある。私ァそれを欠片たりともしらねェ。だから、今はただ、私がそォだってのを理解してくれたらいい」

この先、何度この話をしなきゃなんねェんだろォな。

数百という魔法少女相手に、その全員に、俺の思想だのなんだのと……死は怖いものだ、って。そう言い続けなきゃならねェのか。

やめるつもりはねェけどよ。なんか、思っちまう。

なんか。

悲しくなっちまうな。

「ごめんね、梓」

「ん？」

「そんな悲しい顔をさせたくて謝りに来たわけではないのよ。ただ……お姉さん。いえ、私も、喪失の悲しみはわかるから。貴女には、最大限寄り添えると思う。でも、本当に……本当に、必要な時は。ごめんなさい。調査班は、情報をＥＤＥＮに持ち帰るのが使命だから。そこだけは、譲れないのよ」

「……あァよ。んじゃ、止めるさ。アンタやアイツらが死にそうになってたら、私

が必死で止める。早まるなってな」
「そうね。小さい子からお願いされたら、止まるかも。その時はちゃんと≫お姉ちゃん≪って言うのよ？」
「言わねェよアホ」
「本当に口が悪いわね」
誰が言うかっつの。
……いやさ、それもこのしんみりを拭うためのアレソレなんだろォが、絶対言わねェからな。
「もうすぐで安全な海域に着くわ。そこに着いたら、もう一度お菓子パーティをしましょう。そのまま夜を明かすことになると思うから、パジャマパーティーでもいいわよ。貴女、さっき【排析】の踏み心地に癒されて、眠りそうだったものね」
「そォいうトコばっか見てやがんのな」
「だってお姉さんだもの」
しねェよパジャマパーティーなんざ。
んなのは少女同士でやってろ。おじさんの混ざるべき場所じゃねーって。

……ただ、あのシャボン玉みてェなのの中で寝たいのは事実。
ぜってぇ寝心地いいもんアレ。欲しいわァ。あれすげー欲しいわァ。
「余程【排析】が気に入ったみたいね。知子も喜ぶわ」
「いや気に入らねえ奴ァいねェよあれ。ねぼすけ……あァ、突撃班にも寝るの好きな奴がいんだがよ、ソイツにも紹介してェくらい気に入った。今度普通にエデンで寝かせてくれねぇかな、こんな危ねェ場所じゃなく」
「突撃班……あの野蛮な班に、そんな子がいるのね。意外だわ」
「さっきから突撃班にちょいちょい棘あるが、なんかされたのか？」
「……それは、もう少しお姉さんと仲良くなったら教えてあげるわ」
「あァいいよいいよ。突撃班の連中に聞くから」
「もっと興味を持ってくれないと寂しいわ」
「そォかい。そいつァ残念だったな」
「……冷たい。ね、ローグンさん。梓を抱く役目、変わってくれないかしら」
「申し訳ございませんが、ライラック様を抱くのはキリバチ上官から仰せつかった大事な役目ですので、はいどうぞ」

「おォい!?」
「冗談です」
冗談に聞こえねェんだって。
……や、ホント。
なんかやりづれェなァ、今回の遠征は。
まだ二回目なンだが。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

六、造物編

20・是阿亜須無伏零須有集琉土能登捨手伏恩・

昨日の夜は別になんも無かった。

安全な海域――海のど真ん中にぽっかりと出来たサンゴ礁での、【排析】を用いた一泊。予想通りの寝心地の良さと、予想通りにウザ絡みしてくるオーレイア隊の面々。つってもまァ撫でられまくるくらいなンで放置して寝たら、朝には銀バングルと委員長に挟まれて起きたンだから驚いた。

魔法少女は寝る必要無ェからさ、久しぶりに眠ったって委員長は言ってたよ。ちなみに虹色ロングは普通に寝るらしい。

全員の魔力回復が終わったところで、また出発。【排析】を使ってる光眼鏡は委員長の【引力】でぶら下げられてる時に回復するとかで、なるほどもォシステムが組みあがってんのなと感心したもんだ。

サメだのカメだのイッカクだのがいた海域からは、海の色も結構明るくなってきてる。

温暖な気候に入ったってのもあるだろォが、海が浅いんだろォな。透明度もあがってるンで、化け物がどこにいンのかもわかりやすくなってる。いたとしてもそこまでデカくねェのも大きい。

段々陸地に近づいてる証拠かね、なんて思いながら、けどクルメーナってなは人工島だったなと思い出す。

「なァ、冷静メイドはクルメーナに行った事あンのか？」

「はい。30年程前に一度向かいました」

「ほォか。んで、どんなトコなんだ？」

「美しくも荘厳。儚くも危険。妖しくも武骨。そんな場所でした」

「……それで伝わると思ってンのか？」

「いいえ。クルメーナについては、当時の様相を述べてもあまり意味を成しません。ディミトラは彫金師である、という情報は既につかんでいますね？」

「あァ」

「故にあの島は【鉱水】の魔法により、常に形を変えます。様相も地形も雰囲気も大きさも、なにもかもがディミトラの意思一つで変わるのです」

ＥＤＥＮに属さぬ魔法少女、ディミトラ。

一応の等級区分で言えばＳだったか。なるほど、殺傷能力も殲滅力もありそぅだが、それ以上に色々と厄介そぅだな。

島全体がソイツの魔法となると……たとえば、ＥＤＥＮに見られちゃマズいモンを隠すのもお茶の子さいさいってワケだ。物だろぅが者だろぅが、な。

「ですが、もし襲われた場合、ライラック様の魔法は無類の強さを発揮するでしょう」

「あァ、分け与えられた生命だから、か」

「はい。倒せども倒せども一度【鉱水】に還る事で復活を果たすあの島のガーゴイル種も、ライラック様の【即死】であれば死にます。精神体……ゴーレム種との戦闘経験はありますか？」

「あァ、迷宮最深部周辺でな」

「なるほど、そうでしたね。それならば問題はありません。基本的な対処法は同じ

です。ただし、ガーゴイル種は飛行するものも多く存在しますので、そこにだけ注意を払っていただければ問題は無いでしょう」

ガーゴイル種。

本来は石像やら銅像やらに精神体が宿って成る化け物を指すんだが、【鉱水】で作られたそれも一応ガーゴイル種と見做されるって話だ。ただまァ順序が逆だな。初めから命あるものとして生み出された石像か、単なる石像に命あるものが宿ったか。

過程が違っても結果が同じなら同じものとして見做されるワケだ。

「ディミトラ自身は戦うのか？」

「少なくとも私の行った30年前、及び今に至るまでに、ＥＤＥＮ側と敵対、交戦した、という記録は残っていませんね」

「情報が無ェわけだ」

「ですが、流体を操る魔法少女はＥＤＥＮにも存在しますので、大まかな戦闘スタイルは変わらないものと思われます」

「あァよ、その辺は大体抑えてあるよ」

敵についてわかってンのは魔法少女ってことくらいだ。んなら、魔法についての造詣も深いに越したこたねェ。特に【鉱水】なんて名前だ、水系統の魔法の使い方は大体調べてきた。

鉄砲魚よろしく貫通力の高い水鉄砲や、水を用いての拘束、霧や雨での攻撃、中には指定対象をピンポイントに窒息させる、なんつーこえーのもあった。

水っつーのが不定形であるから、かなり色々出来るって印象が深い。

代わりと言っちゃなんだが、俺の【即死】や光眼鏡の【排析】、あるいは班長の【凍融】みてェな、明らかに自然にァ発生し得ない現象みてェなのには弱い感じだ。汎用性ァあるが、際立っちゃいない、ってな所感。

その中で、唯一際立ったのが【鉱水】って話なンだろォが。

「……さっきからよ、海ン中泳いでるの。気付いてるか？」

「肯定します」

「魚、じゃねェよな」

「ガーゴイル種かと。水中を潜航可能なガーゴイル種となると、自然形成ではありませんね。恐らくはディミトラの作品です」

「監視、か？」
「恐らくは」
浅い海で、透明度のたけェ海だからでけェ化け物がいねェんだとばかり思ってたが……こいつァ、掃除屋がいるから、だな？
主の元へ危険になりそォなのを近付けさせねェための、国で言う軍みてェな哨戒班。たァ言え遠隔にメッセージのやり取りだのをできるってワケじゃないんだろう。だったら鳥みてェなの作ってコッチに寄越せばいい話だし、そもそもＥＤＥＮにそういう端末みてェなのおいてないって事は、あくまで一個の命を作るに過ぎねェ、ってことだ。ケータイなんざ夢の夢、国でもそォいう技術ァ発展してないしな。
なんにせよ、不気味であることにァ間違いない。
石の魚――ソレがこうも、ゆらゆらと。一匹二匹じゃねェ、周辺海域に数十はいやがる。俺がわかってねェだけで数百かもしれねェが。
「あーこれ、あんまり気にしなくていいよん。魔法少女に対しては無害だから」
「なンだ虹色ロングもクルメーナにァ行った事あんのか？」

「何度かねー。えーと。あ、ほらあれ。あそこ」
ふよふよ近づいてきた虹色ロング――よぉく観察すりゃ、確かに吊り下げられているなっつー動きをしてる――が、少し遠くの雲を指差す。
そこに、いた。
「天鷲ッ!?」
「あれは嵐鷲ですね。天鷲よりも高位の魔物です」
「いや何をそンな冷静に……な」
いたんだ。
ソイツ。嵐鷲、だけじゃない。
――数十からなる、翼をもった石像の群れ。
遠目だからこまけぇディティールはわからねぇが、太い腕とゴツい体躯に、くそでけぇ翼でバッサバッサと、空を飛んでいる。飛んで、飛びながら――嵐鷲を追い詰めている。
主な攻撃手段は殴打だ。そのクソ硬ぇなだろう拳で殴って、たまにいる武器……トライデントかなンかを持った奴がぶっ刺して。

連携の取れた、秩序だった動きで嵐鷲を退治しにかかってる。
「海も空も、島も。ディミトラの作品がいっぱいいるから、この辺りは安全な海域なんだよね」
「安全、ね……」
嵐鷲も抵抗していないワケじゃない。
だが――数が数だ。それに、一度壊されたとて、ガーゴイル種。落下し、海に落ちても……ものの数秒で元の身体になって帰ってきやがる。
精神体だからな、効かねぇんだ、物理攻撃ァ。
あ。
ああ。
……あー。
「討伐されたようですね」
「ねー。私達がやったら多分、もっともっと時間かかっちゃうだろうから、ありがたい限りだよねー」
翼に穴開けられて、バランス崩したトコを一網打尽。

……安全。ありがたい限り。
俺にはどぉもそーは思えねぇや。
が、まァ。
ガーゴイルってのをあらかじめ見とけたのは、でけぇな。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「主ディミトラの作り給うた造物島・クルメーナにようこそいらっしゃいました、ＥＤＥＮの魔法少女の皆さま。私は主ディミトラの作り上げた汎用型給仕ガーゴイル・シエナと申します。主ディミトラは現在作業中のため、今しばらくお待ちください」
「……」
開いた口が塞がらねぇってな、こういう時のための言葉だ。
そしてそれは――オーレイア隊の面々も同じらしかった。つまり、前はいなかった、新しい技術。新しいガーゴイルってワケだ。

その中で、ただ一人。

「国家防衛機構・浮遊母艦ＥＤＥＮより参りました、遠征組調査班オーレイア隊に仮配属されています、コーネリアス・ローグンと申します。本件は緊急を要する調査のため、ディミトラ様へ可能な限り性急な対応を求めます。これはＥＤＥＮ軍事部キリバチ及びＥＤＥＮ中央部ジャハンナムからの要請です。以上、お伝えください」

「かしこまりました。では、遠征組調査班オーレイア隊の皆さま。客間へとご案内いたしますので、こちらへ」

冷静メイドが用件を伝える……って、知らねェ名前が出たな、今。

ジャハンナム。中央部ってことは、お上の一人だな？　ソイツが俺をこの遠征に組み込んだ奴か。俺の腕の強化のためにってのはやっぱ鬼教官殿の後付けだな。あるいは可能性として――俺と敵対する可能性のある奴ってこった。

その思想の違いから。

……ま、ンなこたないとァ思うが。

こちらへ、と促されたンで、大人しくついていく。

なるほど、美しくも荘厳。儚くも危険。妖しくも武骨、ってな、今もそォ変わらねェらしい。

島のあちこちに石像がある。よくわかンねェモニュメントとか、柱だの壁だのに走る意匠だとか、そういうのもわんわんさかさか。わんさかある。

俺ァ芸術にァちょいと疎いんでよ、それがすげェのかどうかわかんねェんだが、確かに価値はありそォだなって素人考えがつらつら出てくる。剣だの盾だのを持った石像。槍だの弓だのを構えた石像。別に石だけじゃねェ、銅像やらなんぞわからねェ鉱石の像もある。石像が多めだが。

……アレか？　銅像は今――哨戒に出てるから、とか。

はは。

「こちらでお待ちください」

「あァ、ありがとな」

「……失礼します」

客間から出て行くシエナ。

ん。なんか溜めあったな。

アレか、礼言われるのは慣れてねェのか？　つかそォか、AIみてェなもんだもんな。前世でAIと喋る事ァ無かったとはいえ、あれだ、ヘルプデスクとかのチャットボットに礼言ってるみてェなもんか。そりゃ確かにおかしいかもしれねェ。

まァたまにァいいだろ。それで感情が芽生える、なんて感動秘話にでもしといてくれ。

「……驚いたわね、本当に」

「はい。前回訪れた時にはいませんでした。新作ということなのでしょうが……あれほどまでに人間を模し得るものなのでしょうか？」

「知子、どう？」

「い、いまの所は、おかしな魔力反応とか、なな、ないです」

「何かあったらすぐに教えてね」

なんの話かと思ったら、光眼鏡の手先。

そこに極々小さな【排析】が展開されていた。

ヘェ、そォいうこともできんのか。周囲の探査ができるってな、別に全身入ってなくともいいと。

そりゃ確かに有用だ。銀バングルがあんだけ褒めて欲しそうにしてたのもわかる。これは自慢できる奴だ。

「……」

「ケトゥアン、どうしたの？」

「……気配。多い。……ここ。苦手だ」

「過激無口。適当で良い、一番やばそうなのはどこにいる？　私ァ気配ってのがわかんねェからよ。教えてくれ」

「……下と、上」

お、すんなりあだ名受け入れてくれた。

ホントに受け入れてくれたのかどォかは置いとくとして、ちゃんと話してくれるのはありがてェ。

下と上、ね。

頭においておこう。

「さっきのメイドさんさ、可愛かったねー」

「ん？　あァ、なンだ、それは当然なンじゃねェのか？　ガーゴイル、つまり造

形物だろ？　化け物のカッコよさってなあんま理解できねェが、ヒトガタ作るってんならできるだけ美形にしてェもんなんじゃねェのか」

「ってことは、あのメイドさんがディミトラの理想のカタチなのかなー？」

「あー。確かに。魔法少女ってな成長しねェし変わらねェんだ、理想の自分ってなありそォだな」

「……ねね、梓はさ。どっちが好き？」

「何が？」

「おっきいのと、ちいさいの」

……ンン？

虹色ロングは15歳の時に魔法少女になって、魔法少女歴もまだ10年、とか言ってたよな。

なんだその話題。

男子高校生か？

「もう一度聞くが、何が？」

「えー？　わかんないか。梓はまだまだお子様だねー。いい？　――おっぱいの

こと。大きいのがいいか、小さいのがいいか。永遠に変わらない魔法少女を語る上で外せない議題だよー」

「あァ。生憎誰かと魔法少女を語ったってことがないんでな」

「え。え？　国の学校とかで、どの魔法少女が好きかとか、えっちだとか、そういうの話さなかった？　私の時はもうみんなそういう話題で持ちきりだったよ？　ちなみに私は隊長くらいの持ちやすい大きさで、且つおしりは大きめなのが好き」

んー。

なんだコイツ。

おっさんか？　いいよ？　こんな大っぴらなトコじゃなければ話すよ？　話せるよ？　おじさんはちゃんとおじさんだから少女についてァともかく大人の女性については話せるよ？

いやいや。

話さねェよガッコでそんなこと。そもそも魔法少女についての話題なんか……あいや、男子連中たちがそォいや話してたっけ？　なんぞ、魔法少女を特集した雑誌があったよォな、無かったよォな。

「魔法少女はさ、もう人間とは結婚できないから。魔法少女同士で恋愛するしかないから、梓も早い内にコッチへ来た方がいいよー。それで悩む子も結構いるからねー」

「コッチってな、どっちだ」

「ん？　女の子同士でイチャイチャする道、ってこと。ちなみにウチは、隊長と全員が関係持ってるよん」

「……」

「へー？　そういう知識はあるんだ。進んでるねー。あ、13歳ならそれくらい普通か」

いんやさ。

なんだコイツ。いや、コイツだけじゃねェ、って事か？

……爛れてんなァ。

「梓はさ、学園に誰か好きな人いる？」

「今んところはいねェな。みんな良い子だとァ思うが、妹……いやさ、娘か？違うな、良くて娘の友達かね。それくらいにしか思えねェよ」

「娘って……え、結婚、じゃない、もしかして産んでたの？」
「比喩だよアホ。13歳でそれァ色々無理だろ」
「だよね、びっくりした。……え？　比喩にしてもおかしくない？　私ですら自分の子供、なんて感覚を持つ魔法少女いないよ？」
「私ァ早熟なんだよ。ちなみに虹色ロングも光眼鏡も委員長もそォ見えてるよ」
「む。なにそれー。自分の方が大人です、って言いたいワケー？　――じゃ、今度教えてあげようか。ホントのオトナがどーゆーことしてるのか、って」
「あァ、はいはい。今度な」
「……ほんとにやるからね」
いんやさ、あの狼引き連れてた魔法少女もそォだったが、あんまりそーいう言葉を少女の見た目で言わねェでほしい。言われてる俺が犯罪やってるみてェになるからよ。
つーか、確か安藤さんの話だと元の年齢に魔法少女歴足して成人したら成人ってなかったか？　だから俺に手ェ出したら普通にロリコンの誹りを受けると思うンだが。つかその辺の法律ってなどォなってんだろな。あんま詳しく調べてねェや。

「それはおいといてさ、どっちが好きなの？　おっきいのとちいさいの」
「話終わったンじゃねェのかよ」
「だって暇なんだもん。ね、梓はちょっと小さめじゃん？　まぁ13歳って考えても背もちっちゃいし、身体が大きくなる前に魔法少女になっちゃったからなんだろうけど……自分のが小さいと、大きいのに憧れたりするの？」
「……憧れるだのなンだのは、別に無ェなァ。それこそさっきの話じゃねェが、私にァ理想の姿ってのが無いんでね。中学にいた頃も、このまま順当に成長して、なるよォになんだろな、くらいにしか思ってなかったし。まァ妹に背ェ抜かされた時はちっとばかしキたがよ、そんくらいだ」
「正直に言うとさ、梓って結構ど真ん中なんだよね。ちっちゃいくせに生意気で、ちょっと陰あって胸もちっちゃくて、その上で――少し、カッコイイ」
「あァそォかい。そりゃありがてェ評価だこと」
「その塩対応もいいよねー。その顔が夜にどう蕩けるのかも見てみたい……」
ん―。過激無口に過激なんてあだ名つけた手前アレなんだが、虹色ロングも過激だなァ。

過激の種類が違うが。
「なンだ、委員長とかはそォいう過激なのァ苦手そォに見えたが」
「委員長って、フェニキアのことだよね？」
「あァさ」
「全然。隊長と一番に付き合い始めたのフェニキアだし」
「へェ。そりゃ意外だな。告ったのはどっちからなンだ？」
「それもフェニキアからだよ。というか、隊長から私達に手を出す、みたいなのは一回も無いよ。あの人そういうとこの線引きちゃんとしてるからねー。だからみんなで協定組んで襲ったんだけど」
「……災難な」
「ちなみにちゃんと魔法使ったんだよね。私の魔法って【弱化】っていうんだけど、文字通り相手を弱くできるんだ。弱くしたところで殺せるわけじゃないからいつまでたってもD級抜けられないんだけどさ、他に近接がいる場合は別。赤ちゃんみたいに弱い力しか出せなくなった隊長をみんなで抑えて……ね？」
「ね？　じゃねェよ。つかこえー魔法だなオイ。それ、心臓だの肺だのに使えァ

殺傷能力上げられるだろ。心臓弱めりゃ生き物は死ぬぞ」
「瀕死にはもっていけるんだけど、機能停止まで持っていけないんだよねー。あくまで弱めるだけ」
「……使い方次第でどォとでもなりそォだがなァ」
要はデバフ要員か。
確かに過激無口のあの突撃する魔法とは相性良さそうだな。委員長が引っ張った相手の耐久性能【弱化】して地面だのに叩きつけてぶっ壊す、なんて連携もできンだろうし、単純に敵の攻撃威力の低下も狙える。虹色ロングの言う通り機能停止までもっていけねェってな確かに不便そォだが、そいつァ俺の領分だしな。
何より遠隔で使えるっぽいのがやべェわ。魔力さえどォにかなれば、目に映る全ての化け物【弱化】させて、S級だのSS級だのが殲滅すりゃいい話。
なるほど、確かに魔法自体はD級かC級なンだろォが、そォいうのもいるって話だな。
サポートに特化した魔法少女。突撃しねェで撤退が基本な調査班には持って来いか。

……それを魔法少女に、しかも自分の隊の隊長に使うのはどォかしてると思うんだが。

「だからたとえば、こういうこともできちゃう」

「ん？　――ひゃっ!?」

「あはは！　ひゃ、だって。やっぱカワイー！」

あァよ自分でも思ってねェ声が出てびっくりしたわ。

……なんだ、お嬢ばりの速度で背後に回られて……脇に手を入れられた。そのまま脇のやわらけェとこを高速でもにゅもにゅされた後、元の位置に戻って……それを、口へ。

「変態かよ……」

「えー？　今更？　今までの会話聞いてたらもっと早い段階でそう思うと思ってたんだけど」

「あァ、今身に染みたってだけだ。……で？　今のはなンだ。身体強化使ったよォには見えなかったが」

「だから、【弱化】だよ。梓の目と脳にかるーく【弱化】をかけて、反応できなくし

ただけ。私はそんなに速く動いてないよ。今のは梓がゆーっくりになってただけ」
「……やっぱりこえー魔法じゃ、ひぁっ!?」
「えへへ、ゆっくりになってる間に蓄積した〝触れられた刺激〟は消えないからね。くすぐったいでしょ。身体には【弱化】かけてないから触覚はそのままに、頭だけおいついていかないカンジ。そして唐突に流れ込んでくる感覚。……どう？　今のはお腹をこちょこちょしただけだけど……病みつきになっちゃった？」
「……」
「へー？　無視する気？　じゃあもうちょっと強めの【弱化】かけて、みんなでくすぐっちゃおっかなー？」
「……対策は思いついたが、あんま余計な魔力使わせねェでくれ。私ァ魔力低いんだよ。そっちもそォだろ」
やべーわ。
コイツ、何の躊躇もなく魔法使いやがる。一応敵地になり得るかもしれねェって場所で、いたずらのためだけに魔力浪費とか何考えてんだホント。
対策はまァ思いついた。強化すりゃいいんだ。【弱化】された分戻せるくらい強

化すりゃいい。ただし、先手として【弱化】打たれたらきつい。強化の逆……世界の方が速すぎるってなってる中で、虹色ロングの手が俺に触れる前に強化を、ってなると、多分かなりキツい。

　この魔法、殲滅力と殺傷能力がないだけで、本気でこえー魔法だ。

　知性ある化け物相手にァ効きすぎるんじゃないかってくらい。

「結、あんまりいじめちゃダメよ？」

「はーい。あーあ。怒られちゃった」

「そのまま怒られまくって禁固刑にでもなってくれると助かる」

「あれ？　今の今までもう生意気なこと言っちゃダメだよ、って躾をしたつもりだったのに、まだ言うんだ？」

「あァよ、学園に帰ったらもうオーレイア隊にァ近づかねェでおくわ」

「つまり遠征中にヤれってこと？　結構難しいこと言うねー。でもわかった。検討しとくよ」

「頭パッパラパーかよ。常に【弱化】発動してんじゃねェか」

　あー。

苦手だ、こういう手合いは。
オーレイア隊、今んとこ銀バングルも虹色ロングも苦手だ……。多分だけど光眼鏡も苦手な部類。
……過激無口と委員長はこぇでないことを祈る。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「お待たせいたしました。主ディミトラがお呼びです。こちらへどうぞ」
「ええ。みんな、行くわよ」
よぇやく、と言ったところか。
それなりの時間を待たされたが、ついにディミトラってのとご対面らしい。
客間を出て、シエナについていく。
冷静メイドは護衛だってな話で俺にぴったりとついてくるが、オーレイア隊の面々は結構自由だ。前回来た時と変わってるっつー場所をきゃいきゃい喋りなが

ら、主に虹色ロングと委員長が「あー！」とか「あれ前もあったよねー」とか「あれは……可愛らしい猫ですね」とか、なんだ、観光にでも来たんじゃねぇかってはしゃぎ方で、それはもう煩い。

アレのどこをオトナの女性に見ろってんだよ。修学旅行中の女学生が、良くて若いOLの旅行って感じじゃねぇか。

「ライラック様」

「あァ、気付いてるよ」

「もしもの場合は、盾にお使いください。問題はありません。私は貴女が思っているよりは、死に難くできています」

「……ヤだね、とは返しとくよ」

「はい」

尾行されている。

上空に一匹、でけェの。通路の外に一匹、小さェの。俺達の真後ろから、足音しねェの。

過激無口も気付いているようで、臨戦態勢って感じの雰囲気出してる。他の奴ら

はどォか知らねェが、虹色ロングと委員長は守った方が良さそうだな。
しかし、なんだって尾行なんざするんだ。
これから向かうのはディミトラ本人のトコで、案内人もディミトラ作のガーゴイル。俺達が不審な行動すりゃすぐにわかるし、ディミトラのトコに誰か一人でも辿り着かなかったらその時点でお察し。だから尾行なんざする意味は無いと思うんだが。
それとも、こいつらはディミトラのガーゴイルじゃねェのか？
「こちらです」
「ええ」
シエナが立ち止まる。
そこには、外の荘厳なそれらとは違って、結構普通めな扉。殺意の類は感じないンで少なくとも即死トラップなんぞかは仕掛けられていないんだろう。
その扉の中に、銀バングルと過激無口、光眼鏡、委員長と虹色ロングの順番で入っていく。
「……」

「どうかされましたか？」
「いや。……案内ありがとうな、シエナ」
「……」
なんか気になったんで、もっかい言ってみた。
すると――。
「……これを」
「ん」
小せぇ声で、くしゃくしゃに丸められた紙、っつか何かの切れ端か。それを渡してきた。
やっぱり、そぉいうことか。
特に詳細も聞かずに受け取れば、今度こそシエナは沈黙。俺の後ろにいる冷静メイドにも何も言うなのジェスチャーをして、俺達も扉に入る。
尾行されていたのは――シエナの方、ってこったな。
「これで全員ね。で？　改めて聞くけど、何用？　緊急を要する調査って、何？」

そこに――いた。
ちっせェ子供が。
「……」
「あ！　そこのチビ！　今私の事ちっちゃ、って思ったでしょ。許さないからね！」
「そりゃすまんな。事実を心に浮かべただけなンだが」
「な――むっかァァア！　ちょっと、オーレイア！　何なのよコイツ！　失礼過ぎない!?」
いやさ。
老獪というより奇怪、だの。呑まれるな、だのさ。
随分とこえーこえー奴を想像してきたんだが……なんだこのちびっこは。
「ごめんなさいね、ディミトラ。梓はまだ魔法少女になったばかりで、貴女の凄さを知らないのよ」
「……ちなみになったばっかりって、どれくらい？」
「まだ一年と経っていないわ」

「そ……それなら、仕方がないわね。エデンで私の伝説を習うのって五年度以降でしょ？　まだ入ったばっかりの子だっていうなら、失礼も許してあげる」
「ほォか。あンがとよ、ちびっこ」
「ね、殺していい？　アレ」
「ディミトラ、あの子は貴女より遥かに年下よ？　そんなムキになって、淑女たる自分、はどこへ行ったの？」
いんやさスマン。煽るべきじゃないのはわかってたんだが……どうにもちょっと、なんかキちまって。
久しぶり……ってほどでもないか。
あれだ。狼引き連れた魔法少女とも、なんぞこういう子供みてェな煽り合いした覚えがある。アイツもちびっこだったな。
なンだ、俺ァちびっこと煽り合うタチだったっけか？
「そ……そうね。そう、私は淑女よ。もう５００年も生きているんだから、そろそろ貞淑さを身に付けないと」
「５００年。ヘェ、すげェな。その間ずっとチもご」

「ありがとうフェニキア。ちょっと梓抑えといてね。話進まないから」
いや口塞がれたが、ありがたい。
俺自身もびっくりするくらい軽口が出てくるんで困ってたんだ。
……いや。
おかしくねェか、流石に。俺ァ……もうちっと自省できたはずだ。
こんな、軽口叩きまくるって性格でも……いやあるにァあるが、心内に留めて置けるくらいの冷静さは持っている。
さっき貰った紙を、見る。
「ディミトラ。最近、反魔鉱石の加工はしている？」
「ええ、勿論。何、追加発注なの？」
「いいえ。そうではなくて」
〝主はそこにいません〟。ただそれだけが書かれた紙を。
――強化し、委員長の拘束を振りほどく。
「っぷは、銀バングル下がれ！　光眼鏡、【排析】だ！」
「ありゃ、気付いちゃうんだ？　凄いね、殺意は向けてないんだけど。聞いてた

のと違うじゃない」

ドパァ！　と。

周囲――チビの座ってた椅子だの、作りかけの工芸品だの銅像だのなんだのなんだの全部が全部――液体になった。それだけじゃない、地面も壁も、天井もだ。

それらは光眼鏡や委員長の身体に纏わりつき、その黒い液体の中に沈めて行く。

「ディミトラ、何を――！」

「何を、も何も。――叛逆だけど？」

液体は銀バングルにも纏わりつく。魔法を発動しようとしていた過激無口にもグジュリと巻き付いて、その両者ともの変身が解除された。魔法少女の衣装から、普通の服になる。

「反魔鉱石か！」

「そりゃねー、魔法少女を捕えるためだもん。使ってくるよ。でも」

身体が後ろに投げられたのを感じた。

黒い液体の部屋から急激に遠ざかる。視界。視界いっぱいに溢れる黒。閉じる黒。その中で、虹色ロングが笑顔でこっちに手を振っていた。

自分は巻き込まれてンのに――笑顔で。
「ッ、冷静メイド！」
「すでに布石は打ちました。シエナさんとお逃げ下さい、ライラック様」
「ちょ、うッ!?」
ぶん投げられた身体を、更にラリアットで押し出す冷静メイド。大分腹に来たが、そういう事言ってられない。
見れば――冷静メイドもまた、その身に黒を纏わりつかせている。魔法少女の衣装が剥がれ、下のメイド服が見えたまま、ぺこり、と彼女は目礼をした。
背後、扉が開く音。
硬いモンに身体がキャッチされたのを感じる。
「脱出します」
「ちょ、待てシエナ、まだアイツらが――」
「申し訳ございません。脱出を最優先とさせていただきます」
通路に大穴を開けて。
シエナが、俺を担いで、外に出る。

急速にクリアになっていく思考。そォだ、そもそもなンで、俺ァあんなにも無策に敵陣に突っ込んだんだ。保険の一つくらいかけておけ。

「――敵性存在を確認。排除――不能。逃走経路計算中」

「シエナ、ちょいと離せ、私も戦う！」

「梓・ライラック様を敵に奪われない事。それが私の至上命令です」

なンだと？

ンなこと言うってことは、コイツＥＤＥＮ側か？　いや、でも、確かにこの感触は鉱石……。

「逃走経路算出終了。疑似飛行魔法・背面噴射機構解放。人格分割型戦闘用ガーゴイル死得無（シエナ）、発進します」

「馬鹿、空は――」

何言ってンのか全然わからねェが、それだけはわかった。

それがだめなのもわかった。過激無口が言ってただろ、上と下は危険だって。

だってのに。

「噴射」

「ダメ、ッ――!?」
シエナは――高く高く、空へと打ちあがった。
その速度、その轟音。
空中で噴射を停止し、姿勢を変え――再噴射。
風圧も、かかるGも。
……ジェット機かよ。
俺は意識を失って――そのまま、どこぞへと連れていかれたのだった。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

名前　あだ名　【魔法】　等級
オーレイア　銀バングル　【白亜】　S
ケトゥアン　過激無口　【槍玄】　A
フィニキア・各務　委員長　【引力】　A

残府知子　光眼鏡　【排析】　B

結・グランセ　虹色ロング　【弱化】　D

21・韻地刑事」亜凝琉度土利無安堵佐渡例韻利位置会疎・

「起きてください、梓・ライラック様」
「――……あァ。……あ？」
起きる。それはもう勢いよく起きる。
周囲を見渡せば――そこは、絶海の孤島。美しい意匠も荘厳な石像も無い、ただの小島。
「こ、こは」
「ここはクルメーナより北方に２００㎞程進んだ海域にある島です。梓・ライラック様。これを」
「ん？　――うわっ!?」
これを、なんて軽い言葉で渡されたのは――人間の手。
いやいや。
いやいやいや。手だ。手だぞ？　手首から先の千切られた手。
「な、なんだこれ」

「貴女様方が主ディミトラの部屋へ入る際、ローグン様より預かったものです」
「預かった、って……あ、じゃあアイツの魔法なのか」
「いえ。あの方は自らの手首を斬り落とし、これを私に預けました」
「……」
……息を飲む。呑まざるを得ない。唾も飲む。
なんだ、そりゃ。
「これ……生きて、る？」
「膨大な魔力を検知しております」
「……じゃァもしかして」
受け取った手首を――地面に置く。
その瞬間、ザァッ――と地面……孤島の砂浜の砂が、一気に集まり始めた。
砂は手首に触れると、それが骨となり、筋となり肉となり皮膚となり――腕となる。
腕はクネクネと、あるいはじたばたと何かを探すように動き回り、けれど周りに何も無い事を悟ると、ぐ、と。

まるで、その腕の先に。あるいは肩の先に、人間がいるかのような仕草で力を込め。

そのままその通り、砂の中から一糸纏わぬ冷静メイドが出てきたではないか。

……いや、ではないか、じゃねェよ。

「お前……冷静メイド、か？」

「はい」

「はい、ってお前……だが、あの時確かに」

「言ったはずです。私は貴女が想定しているより死に難いと。【侵食】は大気以外のあらゆるものに侵食し、世界を己に変質させます。問題はありません。この身が反魔鉱石によって封じられようと、髪の一本でも世界にある限り、私は続きます。問題があるとすれば」

冷静メイドは、空間をなぞる。

そこに亜空間ポケットが開いた。

「復活の際、衣服がない事くらいでしょうか」

「……いや、こえーって。つか絶対Ｂ級じゃねェだろお前」

成程、鬼教官殿がくれた護衛。最初の一人だ。相当に信頼できる奴を渡してくれた、ってことだろう。俺の理念も鑑みて――相当、死に難い奴を。

……でも、魔法で復活するから大丈夫ってなよ。エデンで蘇生するから大丈夫と、なんら変わんねぇんだわ。そこんとこは、わかってくれてないのかね。

「そうですね。では、改めて自己紹介をば。私はコーネリアス・ローグン。EDEN防衛班エミリー隊隊員、元S級魔法少女です。魔法は【侵食】。エミリー様を守ることができず、あの方の心に多大なる傷を負わせてしまった責より、姉と共に中央部に降級を願いました」

「ああ……そぉいや言ってたな、暴走繭。目の前で仲間を食われて……それが、アンタだったのか」

「はい」

そぉだ、確か言ってた。

手足の一本一本、指の一本一本を食ってく悪質な化け物で、【劇毒】のおかげでなんとかなったものの、トラウマになっちまった、って。

それが。

それをされたのが、コイツと、その仲間か。
「で、そっちの紹介も頼む。結局なんなんだ、アンタ。あの島で起きてる事含めて、洗いざらい話してくれや」
亜空間ポケットから服を取り出し、それを着込んでいる冷静メイドから視線を外し、こっちの話し合いに一切かかわらずに待ってたガーゴイルに目を向ける。
シエナ。一応、俺を助けてくれた奴。
「はい。私は主ディミトラの造形物。汎用型給仕ガーゴイル・シエナとは仮の呼称であり、本来は人格分割型戦闘用ガーゴイル・死得無(Ashes)と申します。主ディミトラの最高傑作であると同時に――遺作、と。そう呼び得る作品であると言えるでしょう」
「遺作……おい、まさか」
「その辺りの説明も含めて、どうぞこちらへ。島の奥に洞窟があります。そこが私達の本拠地となりますので」
「あ、おい。待てって！」
チラ、っと冷静メイドを見る。
そこにはもう、メイド服姿でもない、魔法少女としての衣装を身にまとった彼女

がそこにいた。
「問題ありません。向かいましょう」
「あァよ。……っとに大丈夫なんだろォな？」
「これが道中での答えとなります。いかがでしょうか？」
「……あんまり嬉しかねェよ。アッチのアイツが死んだ事にァ変わりねェんだ。……あ？　いや、つか、それだったら……ＥＤＥＮにもお前が蘇生されてることになンねェか？」
「なりません。その場合、こちらでの【侵食】は起きませんので。あちらの私はまだ生きていますが、行動が完全に封じられてしまったため、人格権を放棄しました。よってこちらの私が【侵食】により形成、人格権を得ました」
「……みんなも生きてる、ってことか？」
「恐らくは。最後に確認した限りでは、皆様一様に拘束されてはいましたが、死んではおりませんでしたので」
それは。
……それは、良かった。本当に。

良かった、が。
「人質……いや、生け捕り、か？」
「はい。ですが、詳細をここで考えるより先に、シエナ様の主に会いに行きましょう。議論はそこで」
「あァよ。……ン、主？」
「恐らくは、ここに。【鉱水】のディミトラが」
「……なンで、って疑問も、とりあえず行ってみてからか。今回も罠ってこたねェよな？」
「ライラック様がそうも冷静に様々なコトを考える事が出来ている時点でないかと。私も自らの手を切り落とすまで、妙な安心感に包まれていました。精神に作用する系統の魔法が使われていたのだと思われます」
「気付けに手首斬り落とすのはやべェな」
魔法のためとはいえ。
……なんにせよ、行くか。
今度は最大限警戒して——その、ホントの主の元とやらに。

遠《ｔｅｘｔ:s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「よ」

「……あー、アンタがディミトラで？」

「そ。私がディミトラ。そっちは梓・ライラックであってる？　合ってなかったらシエナの認識装置直さないといけないんだけど」

「あってるよ。間違いねェ。だが、アンタほんとにディミトラか？」

「なによ。チビって言いたい？　別にいいわよ、事実だし。ただ、私がディミトラであることも事実」

おォ。

どォやらホントのディミトラらしい。

容姿はクルメーナのディミトラとまんま同じだが、中身が大人だねコリャ。５００年だっけ？　その意思を感じる。歴戦感出てる。軽口も叩く気にならん。

「状況はどれくらい把握してる？　何もしてないなら、イチから説明するけど」

「何も把握してねェに等しい。コッチで考察はしたが、先にそっちの持ってる情報貰ってから色々考えてェんで、頼む」
「りょーかい。えーと、じゃまず事の起こりから話すわよ」
アッチの島のディミトラの部屋に似ちゃいるが、コッチのが工房って感じがあるな。
洞窟の奥深くによくこんな設備を作ったもんだ。
「――少し前、クルメーナは襲撃にあった。数多の高位魔物を従える魔法少女によって、クルメーナは壊滅状態に陥ったの。情けない話だけど、私の魔法で作り上げたガーゴイルの軍隊も、なすすべなく飲み込まれたわ」
「ソイツの容姿は？」
「青い髪。毛先は燃えるように紅く、年の頃は9歳くらい。衣装は白と黒を基調として、寒色の装飾が所々に為されたもの。髪飾りに六芒星と、手には五芒星のついた杖を持っていた」
「あァ、私を襲ったのと一緒だ」
「そ。続けてもいい？」

「頼む」

今尚ＥＤＥＮにおいて指名手配中であり、俺を追い詰め、しかしお嬢に細切れにされた魔法少女。その容姿と合致している。細かいとこまでばっちりだ。

「私も一応抵抗したのだけど、勝てなかった。手足を全部持っていけたのは上々よ。それでもとどめを刺す前に殺されてしまった。……問題はここから」

「……」

「エデンのように、私の島にも蘇生槽が存在するわ。そこに戻るはずだった私は、けれどそうならなかった。多分蘇生槽に何か細工をされたのね。私の造物に対してそんなことができるのは私くらい。……なのだけど、実際にやられてしまってはぐぅの音も出ない。偶然というか不始末というか、遥か昔に作ったまま放置してあった試作品の蘇生槽の方で蘇生できたからいいものの、【鉱水】は奪われてしまった」

「奪われた、ってな。どういうこった」

「完全に理解したわけじゃないけど、いい？」

「ああ、所感でいい」

「多分だけど、あっちには魔法の使える私がいるのよ。魔法と魔法少女が一心同体

であることは知っているわね？　まぁ知らなくてもそうなのだけど、なんらかの方法で魔法と魔法少女が分離される、なんてことが起きた場合――魔法の使えない、つまり単なる肉人形であるアッチと、ディミトラの精神である私に別たれる。魔法少女は人間には戻れないから、当然ではあるけれど、同時にありえないことでもある」

「単なる、肉人形？」

「そ。だって私が本物だもの」

なるほどなるほど、ってなるにァ結構な情報が入ってきてるが、一応見えては来たな。

あの敵の魔法少女は【洗脳】でも【簒奪】でもなく【分離】を使うってことだ。いやさ、呼称はどうでもいいんだが。

分離して……魔法だけを使っている？　自身の手駒にして……。

いや、違うな。

「アンタの【鉱水】は造形物に命を与えると聞いた。それァどういう原理だ？【鉱水】にァそういう作用無いだろ」

「目の付け所がいいわね。そう、【鉱水】にはガーゴイルに命を与える、なんて力はない。だからそれは私の技術力によるもの。作り上げた石像や銅像に、精神体化した魔物を詰める事でガーゴイル化する技法」

「……精神体化した、だと？」

「そ。長年に渡って魔物を、とりわけ精神体を研究してきた私は、ある一つの結論にたどり着いた。魔物、人間、魔法少女。それらは全て精神体が操っている肉人形であり、精神体を押さえつつ肉体から乖離させれば、その精神体が取り出せる、とね」

……魂、って奴か。

嫌な話をする。そんで、嫌な技術を思いつきやがる。

「嫌悪感むき出しね。でも、私はそれを魔物にしか使ってなかった。クルメーナを襲ってくる魔物から精神体を抜き出して、精神体化した魔物を銅像に詰め込む。すると、銅像はガーゴイルになる。まぁ肉人形から銅像に肉体を替えただけよ」

「そォいう風に言うってことァ、アンタもその可能性に行きついたって事だ」

「勿論。……私のこの長年の、本当に長年の苦労と苦難の結晶は、恐らく魔法少女

にも使われてしまった。私のようにＥＤＥＮに属さない魔法少女を狙っての襲撃。それによって生け捕りにした魔法少女を精神体と肉人形に分離して、精神体はガーゴイルに、肉人形には魔物の精神体を入れて、それもある種のガーゴイルよね。マリオネッタが近いかしら」

あァ、嫌な話ばかりしやがる。

コイツに限って言えば殺されたのが幸いした。しっかり殺されたから、別の蘇生槽を使って蘇生する事ができたが――ＥＤＥＮに属さぬ魔法少女や、そして今しがた捕まったオーレイア隊の面々は違う。

冷静メイドの証言によればあいつらは生きたままだ。

生きたまま、精神体を抜かれてガーゴイルに、魔法の使える肉体は生かされたまま次なる魂……化け物の精神体を入れられ、そちらも魔法少女のガーゴイルに。【隠蔽】、湧きポ作成、【統率】、【皇爛】。その他数多の魔法は、そういう工程を経て作られた、化け物の入った魔法少女によるもの、と見てよさそうだ。

「なんで抵抗しねェ、と言いたいが、してるか、十分」

「そ。こっちの私は魔法使えないから、技術と知識だけでどうにかするしかなかっ

た。悲しい話、周辺海域空域共に私の放ったガーゴイルがわんさかといて、それらの制御権も奪われちゃってどうしようもない。私自身【鉱水】以外の魔法は使えるとはいえどこに助けを求めることもできない。遠回りしてＥＤＥＮまで行くにはちょっと遠すぎるし、何より私がここにいるってバレたくなかったから」

「それで――コイツを作ったのか」

「ん。シエナはね、私の精神を少し切り分けて稼働させてるの。【鉱水】を用いない、５００年以上に及ぶ知識と技術のみで作り上げたガーゴイル。他のガーゴイルより精密で壊れやすいのが難点だけど、他のガーゴイルにはできないことが沢山できる。たとえば――敵に乗っ取られた基地の調査、とか」

あァ、もう完全にロボット、いやさアンドロイドだった。

ウィーンガシャガシャと背中に穴開いてジェットパックが出てくンのも、空中で姿勢制御するために足先から噴射したり、両腕からメタリックな翼出てくんのも、ホントにアンドロイドだ。鉄腕ナンタラだ。

これを、この化け物共によって文明の滅びまくっていく世界で、たかだか５００年で辿り着き、完成させきるってな、相当な天才なンだろう。

もうちっと倫理を持ち合わせて欲しかったが。
「その、ガーゴイルにされた魔法少女を救う手立てってなあンのか？」
「あるわ。そのために貴女を調べさせてもらったわけだし」
「……あァさ、そういうことかよ」
なンで俺の名前知ってンのか、とか。シエナの至上命令が俺を奪われないようにする事ってなどォいう事だ、とか。
そォかそォか。
クソが。
「殺せ、ってか」
「そ。ＥＤＥＮの魔法少女の蘇生槽は、ＥＤＥＮが厳重に管理している。だから、ガーゴイルになってしまった精神体の方と、魔物の精神体を入れられてしまった肉人形の方。そのどちらもを殺せば、ＥＤＥＮの魔法少女はＥＤＥＮの蘇生槽に還る。そこで蘇生する。肉人形の方はこっちでもなんとかできるかもしれないけど、ガーゴイルは無理。【即死】させることでしか殺し得ない。だからこその、貴女。梓・ライラック」

「……――」

あー。

あァ。

あァ。

「それァ、断る事はできンのか」

「別に良いわよ？　その場合、敵勢力はさらに拡大し、オーレイア隊の面々も還っては来ない。利用されるだけにあるＥＤＥＮに所属しない魔法少女も、勿論私も泣き寝入り。貴女の嫌悪する外道の増大を、ただただ見ているだけ、なんて。それを良いと言えるのなら、別に良い。どう？　梓・ライラック？」

なんなんだよ。

なんだってんだよ。

なんでそんな、俺にそれを求めんだ。折角見つけたかと思ったのによ。そんな悲しい理由じゃない、ちゃんとした理由で、俺が使いたいと思える理由で、この魔法を使えるかもしれないって可能性を。折角教えてもらったんだ。魔法は使い方次第で、可能性はいくらでもあるって。俺がどうにかすれば、どうにかなる可能性は絶

対にあるって。
　そんな風に言われたんだ。無事に帰って来いって、願ってるって、祈ってるってさ。
　言われてさ。
　それで、仕方が無かったから、仲間を殺して帰ってきました、って。
　そんな。
「なんで、死が救いになるようなコトばっか起きるんだ」
「……それ、貴女が言う？」
「何が」
「いいえ。なんでもないわ。やりたくないならそう言って。そうしたら私は、貴女を殺すから」
「ッ、どういう」
「少なくとも今ここで貴女を殺せば、敵に貴女を奪われない。貴女の【即死】は唯一ガーゴイルから精神体を解放できる手段だから、私はなんとしてでも貴女をＥＮＤに還す。貴女があの島に向かい、彼女らを、そして私の島を解放しないという

のなら、私は私のために、その手段を取る」
「脅し、かよ」
「貴女が貴女のために殺さないという手段を取るなら、よ。勿論今の私は魔法を使えない。だから貴女を殺せず、貴女に殺される事も十二分に考えられる。そのままここの蘇生槽を破壊してしまえばはいオシマイ」
俺が、俺のために。
……死なないで欲しいから、なんてのは。
俺の心が傷付かないためのエゴだ。俺が悲しくなりたくないから、ただそれだけのために、死んでほしくない。そんな、エゴ。
やめてくれよ。
怪我をして、苦痛を背負って。それで俺に死を懇願してくるのは、キツい。
どうしようもなくなって、捕まっちまって、ただ利用されるだけだからって——殺さなきゃいけない、なんて。そんなのも、キツい。
やめてくれよ。
俺はそういう風に、【即死】を救いみたいに扱いたくないんだよ。死ぬってのは

怖い事なんだ。死ぬって言うのは悲しいことなんだよ。
やめてくれよ。
そう、せざるを得ない、なんて。
やめてくれよ。
本当に。
「……わかった。みんなを――殺す」
「ん。理解があって何よりね。そうしてくれるというのなら、私も最大限手を貸すわ。まずは貴女のその義手。作りが粗いにも程がある。多機能且つ高性能で耐久性の高いものに代えてあげる」
「いや、機能も性能も要らねェ。耐久性は欲しいが、もっと欲しいモンがある」
「そ。何かしら。注文主の要望には応えるわ。私は彫金師、造形芸術家だから」
「魔力だ。私ァ魔力量がちょいと低くてな。そも、アンタを訪ねたのはそれが理由でもあった。この腕に、魔力の増強を施す仕組みを付けたせねェか？」
「……なるほど。なるほど。キリバチかしら、その提言をしたのは。それに、その紋章。私が昔アニマにあげた奴。良いわ。良い。凄く良い。とっても良いね」

ちょいと、雰囲気が変わった。
今までの飄々としてたのから――なんぞか、マッドな空気を感じる。口調も女性的なソレから、どこか無機質な――けれど妄執を感じさせるそれに変わっていく。
「良いね。あァ――とても好い。好ましい。ソレはさ、私への課題。私への挑戦だ。過去、唯一応えられなかった要望。それが完成しているのだと思ったのかな。ああ、それは、それはさ、私への期待だ。素晴らしいよ。ＥＤＥＮ。本当に、依頼主としても注文主としても素晴らしい。だから君たちとは同盟を組んでいるんだ。――貸して、それ。そして三日欲しい。【鉱水】の無い私ではそれくらいの時間がかかるけれど、仕上げて見せる」
鬼気迫る、というか。
そのやべェ雰囲気に、「あ、あァ」なんて言って、俺ァ腕を外す。
一応自分で色々できるように着脱方法は覚えてンだ。
ゴトン、と外れたそれを、シエナがひょいと持ち上げた。
「主ディミトラ。どうぞ」
「うん。貴女達は三日間、ここには入らないで。入ってきたら外敵として処理する。

それくらい集中する。天候的にここから五日は雨も降らないだろうから、三日。島で過ごして。あまり南側には寄らないように。クルメーナから見られる可能性があるから、そこも注意ね」

そんな感じで。

俺達は洞窟の工房から追い出されてしまったのである。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

……。

ふぅ。

「冷静メイド」

「はい」

「ちょいと、考えたい。都度都度助言をくれ」

「わかりました」

まず、ここから三日の間に何が起きるか、だ。

あっちのディミトラ……あだ名、マッドチビとかでいいか。マッドチビは銀バングルに「叛逆」という言葉を残していた。それが文字通りのソレなら、ＥＤＥＮへの叛逆、という事だ。だが、何からの叛逆だ。ＥＤＥＮがあっちの魔法少女に何かしたのか？

……そもそもの問題。

結局あの魔法少女はなんなんだ、って話。

「冷静メイド。化け物を従える魔法ってな、ＥＤＥＮにも存在すンのか？」

「魔物への洗脳、催眠効果を持つ魔法は記録されていません。ですが、ＳＳ級魔法少女ネイビー・ブルー様の【寄生】であれば、疑似的にではありますが、似たような事も可能でしょう」

「あァ、特殊魔法少女の到達点か」

「はい。【寄生】は文字通り対象に己を寄生させる魔法であり、その対象は自然物、人間、魔物と、ありとあらゆるものに及びます。【寄生】された対象はネイビー・ブルー様の意のままに操られ、その身その命の終わりまで自己を取り戻す事はありません。その状態で死が訪れた場合、ネイビー・ブルー様は死にますが、魔法少女

ですので蘇生が可能です」
「……だがまァ、多分ソイツじゃねェな。ソイツ普通にＥＤＥＮ側だろォし」
「はい。軍事部も中央部も関与を一度は疑いましたが、特に怪しい繋がりは見えませんでした。そも、ネイビー・ブルー様は基本的にＥＤＥＮ内にいらっしゃるため、外部との接触が極めて少ないのです」
違うが、似たようなコトなんじゃねェか、とは思ってる。
化け物を従える。そして化け物と心を通わせる。あン時、あの魔法少女は確実に狼の化け物と喋ってた。思えば狼の化け物が小学校に現れた時の外部からの侵攻。あの化け物共もなんぞかなぁなぁで、様子がおかしかった。
やる気が無かったのは、囮だって知らされていたから、か？
「ＥＤＥＮに所属していない魔法少女ってな、自然に湧いて出るモンなのか？」
「魔物の様に形成されるわけではありませんが、人間として生まれ、唐突に魔法少女に覚醒する、ということであれば、当然の様にあります。ライラック様も、そして私も。ＥＤＥＮに所属する魔法少女の全てがそうであったように」
「あァ、そォか。つまり、国民じゃねェ奴で、外のどっかで生き残ってる人間の集

落なりがあったら、そこで魔法少女が生まれる可能性もあるワケね」
「はい。ただし、その場合蘇生槽を確保する事が難しいため、死が訪れたのであればそのまま死ぬ、という事も多いです。それら魔法少女にＥＤＥＮから蘇生槽を貸出することもありますが、その場合その方の魔法はＥＤＥＮに記録されます」
「ってこたァ、蘇生槽を元から有していて、且つＥＤＥＮじゃねェ集落で生まれた魔法少女なワケだ。蘇生槽ってなそんな簡単に作れるモンなのか？」
「否定します。その製法は知らされていませんが、数を生成できるのならば、ＥＤＥＮは各地に支部などを作る事ができているかと」
「そいつァ、そうか」
やっぱりちょいと無理がある。
製法の知られてねェ蘇生槽をＥＤＥＮに隠し持ってた人間の集落？　んなもんあったら目立つだろ。どこぞに隠れ住んでいた……ってのを言うには、地下だの天空だのじゃねェとキツい。ＥＤＥＮの魔法少女は遠征に行ってるんだ。もう何百年と。それからどォやって逃げて生きてきたってんだ。
あんましＥＤＥＮを妄信すんのも良くねえたァ思うが、どォにもしっくり来ない。

来ないが、こっから先は何とでも言える。推測予測ってなしっかりした情報あってこそだ。妄想混じりじゃ単なる憶測に終わる。んじゃ意味は無ェ。

「これ以上は無理だな。とにかく、こっから三日で何が起きるかを想定しておく。まず、一番やべェのは化け物の精神体ってのが入ったオーレイア隊の面々がＥＤＥＮに帰投するってパターンだ。マッドチビの叛逆をＥＤＥＮに伝えるのやもしれねェし、蘇生槽に細工ってのをするのかもしれねェ。そうされたらお手上げ。だが、三日じゃＥＤＥＮにギリギリ辿り着けるかどォか、ってとこだ。海を渡るのに二日、あの廃墟群からＥＤＥＮまで一日半。私の腕の改良が終わったら、速攻で全部を片付けりゃあるいは、だな」

「……魔物の精神体の入った魔法少女のガーゴイルなるものが、人間の言語を喋り得るのでしょうか？」

「あァ、そォいやソレがあったな。……言語を教えるのにちィと時間がかかるんじゃねェか？　そォでなくとも、人間らしい振舞いや元のアイツらっぽい言動にさせねェと、ＥＤＥＮに帰した時怪しまれる。……となると、そう簡単には帰さねェか」

「楽観視することは危険ですが、悲観的過ぎる考えは焦りを生みます。最悪の場合を想定しつつ、どのような状況にも耐え得る中立の状態で動くのが最善です」
「あァよ」
確かに中身が化け物だったら気付きそォなもんだ。
ただそォなると、銅像だのに入れられてガーゴイルになってる魔法少女はどォなんだってとこだよな。なんで大人しく付き従ってんだって。あるいは強制する何かがある、とかか。制御権がどォのとか言ってたしな。
「……冷静メイド。お前の魔力量でクルメーナ及びガーゴイルらの警戒域を避けて遠回りしてＥＤＥＮに帰る場合、どんくらい時間がかかる？」
「四日は要します。ですが、今ここで死を選べば問題ありません」
「ダメだ」
「事態の緊急性、及びオーレイア隊の面々を殺す事について承知したものだと思いましたが、違いましたか？」
「……」
ダメ、だ。

それは。俺が一番嫌いな奴だ。

だけど、冷静メイドのその問いはもっともだ。

オーレイア隊の奴らを殺すのを納得しといて、ＥＤＥＮへの伝達のために死ぬ冷静メイドを看過できねェなんてのは、ダブスタにも程がある。仕方が無いから。仕方がなく無いから、なんて。

そんな理由で死への態度を簡単に変えるンなら、そんなエゴとっとと捨てちまえって話だ。

けど。

「……い、や……だ」

「嫌、ですか」

「無理言ってる自覚はある。意味わかんねェってその顔も理解できる。でも、私ァお前に死んでほしくない」

「……ひとつ、問うてもよろしいでしょうか」

「あァ……なんだ」

事態の緊急性。その通りだ。今すぐにでもＥＤＥＮに仔細を伝える必要がある。

応援が欲しいのもそぉだし、蘇生槽の管理を厳重にっつーのも伝えなきゃならねぇ。本当にその通りだ。だから、通達手段は可能な限り早いものがいい。

唯一敵の魔法少女の拘束から逃れ、情報を有して帰ってきた冷静メイドは、それらをＥＤＥＮに持ち帰る義務がある。使命がある。それを阻害する、というのは。

言った。俺はマッドチビに言った。あいつらを殺すと、わかったって、はっきり言ったんだ。

それを、今更、なんて。

「ライラック様。貴女は、貴女のその死を忌避する言動、及び作戦方針において――その結果、更なる死を生んでしまった場合。貴女の心は、それに耐えられますか？」

「……」

「比較することが失礼であると承知の上で言わせていただきます。私達の隊の隊長であるエミリー様は、私達を失うことに耐えられませんでした。私自身、あの時は大層絶望したものですが、その作戦そのものには納得していました。【侵食】や【劇毒】はその凶悪性とは裏腹に、触れなければならない近接魔法です。故に私や姉、

隊の面々が近接によってあの魔物を削り、出来た穴にエミリー様が【壊糸】を入れ、壊す。魔法少女として、多少の被害は出るだろうと思っていました。私や姉、隊の面々、あるいはエミリー様。誰もが無事であることは難しく、そして死した方が楽だな、とも。私と姉などの場合それは顕著ですね。捕食された方が、【侵食】や【劇毒】の効果を発揮しやすくなる。故に私は納得いたしました。それが最も被害の少ない作戦であると」

淡々と。

けれどどこか——後悔するように。

冷静メイドは、言う。続ける。

「故に私達は、私と姉は、特に抵抗らしい抵抗をしなかったのです。悪意のある捕食……高位の魔物故、遊ぶ、という事を覚えていたのでしょう。私の身体を少しずつ千切って食べて行くソレに嫌悪感を覚えましたし、多大なる苦痛を背負いました。けれど、それが最も近道であると知っていたため、抵抗しなかったのです。捕食されてから【侵食】を行えば。捕食されてから【劇毒】を放てば。問題は無い。作戦に問題は無い。無駄に抵抗して戦闘を長引かせる方が悪であると、私は私のた

めに、効率という名の信条を取りました」

懺悔だ。

目を閉じて、手を組んで。

何かに、告白する様に。

「――結果。私達が無抵抗で捕食される様相は……エミリー様の心に多大なる傷を負わせてしまいました。私も姉も、それを望んではいませんでした。当然の事だったのです。私達にとって死は手段であり、それを取る事は当たり前の事でした。効率を、あるいはＥＤＥＮの守護を目的にするのなら、私達の命が失われることなど当然だと。……けれど。いいえ、ですが、ですね」

冷静メイドは。

コーネリアス・ローグンは。

「ですが、違ったのです。私の取った手法は――最終的に、エミリー様の心を傷つけるだけに終わってしまった。今尚隔離塔に籠るエミリー様と会話をしました。【壊糸】の繭に籠り、心を閉ざすエミリー様と、話をしました。……あの方と。彼女と、話をした時。私の心は耐えられなくなってしまいました」

あァ――そォか。

俺と比較してンのは、暴走繭じゃなくて。

お前、か。

「私は嫌で、それを取ったのです。私がエミリー様の手を煩わせるのが、作戦が失敗するのが、非効率であるのが嫌で、抵抗せずに捕食される、という手段を取ったのです。その結果、作戦こそ成功したものの、効率的とは言い難く、さらには傷付く必要のないエミリー様の心まで傷つけて、彼女に必要以上の恐怖を与えてしまいました。……それが、耐え難かった。冷静メイド、などと呼んでくださっていますが、そんなことはありません。私は今も後悔しています。今も動揺しています。今も――恐れています。私の効率を重視する行動が。私の信条に、信念に基づいた行動が。もっと、大きな、私の大切にするものにまで被害を及ぼす結果にならないか、と」

故に、問うと。

俺に。冷静メイドは、問うのだと。

「もう一度、同じ問いをします。ライラック様。貴女は、貴女のその死を忌避する

言動、及び作戦方針において――その結果、更なる死を生んでしまった場合。貴女の心は、それに耐えられますか？」

その問いに。

俺の心は、ようやく決まった。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

22・泥土有脳邸須糸?

どこか、酔っているような。
昂揚感に包まれている、気がする。
けれど、その問いに。冷静メイドの問いに——俺の本心は、ようやく決まった。
「ああ」
「——」
「あァ、あァ。そうさ。そうだな。私のコレによって、更なる死が訪れる可能性は十二分にある。私が殺すってだけでも嫌なのに、私のせいで死ぬってな、最悪だ。なんなら虹色ロングだって私のせいで捕まったようなもんだ。アイツ、自分は逃げれただろうに、私ぶん投げて手ェ振ってよ、私を逃がしたんだ。あー。あァ、そうさ。そうだな。そうだったわ。そうだよ」
違うんだって。
違ェんだって。
「ああ——耐えられねェに決まってんだろ、馬鹿が。だから、そォなんねェように

すんだよ。アホか。死を嫌ってんだよ。死ぬのが嫌なんだ。今ここで嫌った結果、大勢が死ぬのは嫌だ。けど今アイツらが死ぬのも嫌だ。お前が死ぬのも嫌だ。お前が死ななかったせいで、私が死を止めたせいで、ＥＤＥＮの奴らが死ぬのは嫌だ。国が、国民が、いやさそこにいる家族が死ぬのも嫌だよ。全部嫌だ」

「……では、どうしますか」

「決まってンだろ、んなこた」

決まってる。最初から、ンなこた決まってらァよ。

「救うんだよ。アイツら救って、国もＥＤＥＮも救うんだよ。死なんか手段にすんじゃねェ、馬鹿が。クソ野郎共が。死んだから救われるモンなんざクソ食らえだ。失う事で得られるモンなんざハナから求めてんじゃねェよ」

「……悲観的になりすぎるな、とは言いました。ですが、理想だけでは現実は変えられません」

「何言ってんだてめェ。あのな、暴走繭が傷付いたのは、お前が効率を取ったからじゃねェぞ」

「それは」

「お前が傷付いたからだよ。お前も、お前の姉も、その隊の面々も。暴走繭の前で苦痛を背負ったから、傷付いたから、アイツはあんなにも戦場を怖がってんだ。死んだから、アイツはあんなにも苦しんでんだ。お前が効率を取る、って選択を取ったから、じゃねぇんだよ」

「同じことです。私が効率を取った結果、私は苦痛を負い、死にました。故にエミリー様は」

「違う。もういいや、お前達の信条とか理念とか知らねぇから今ここで理解しろ。お前にどんな意思があったのか、お前にどんな思惑があったのか、なんざ関係無ぇんだよ。残された奴が何を思うか、だ。死を前に、苦痛を前に、それを選んだ奴の気持ちなんざどーだっていい。何の決意があったのかとか、どんな理想を追い求めてたのかと、心の底からどうでもいい」

どうでもいいんだよ。

俺が。俺が。お・れ・が！

俺が嫌だって言ってんだよ。

俺が嫌だって言ってんだよ。

「暴走繭は、お前らが傷付くのが、死ぬのが嫌だったから、あんだけ傷付いたんだ。結果的に更なる死を生む、だァ？　うるせェな、嫌に決まってんだろそんなコト。クソどうでもいい事言わせやがって、頭来た。じゃあ聞くがよ、お前は暴走繭があなるって知ってたら、どんな作戦を取ったんだよ。暴走繭たちと話し合って決めた作戦に同意して、効率を取ったお前は、暴走繭の心が傷付くって知ってたら何をした」

「……出来得る限り、誰も傷付かない方法を取りました。それが――非効率だとしても」

「なんでだ。事態は緊急を要してただろォし、魔法少女なんだ、死ぬのも仕方ないンだろ」

「エミリー様に傷付いてほしく無いからです。……そして、私も。この途方もない罪の意識を、背負いたくはない」

「そこに緊急性ってのは介在すンのか。暴走繭の心を傷つけたくないって思いによ、罪悪感を背負いたくないって逃避によ、事態の緊急性ってのァ、その非効率な手段を取る事で、ＥＤＥＮが危険に晒されるかもしれねェってなっても、今さ、今。

今その場にいたら、どぉいう行動を取るよ。全部が終わった今、もしやり直せるとして。お前は何をするよ。何を優先するよ」

んなことは、聞くまでも無い。

「エミリー様を優先いたします。……いえ、それ以前に、作戦から見直すでしょう。あれなる魔物をどう近づけないか。我々に被害を齎さぬ方法で、且つ迅速に。あの作戦は、犠牲を前提にしすぎていた。効率などとは言いましたが、もっとあったはずです。もっと――もっと、作戦と呼ぶべきものが。呼べるようなものが」

「そぉさ。犠牲前提の作戦なんざクソ食らえだ。死が前提の作戦なんざ化け物共に食わせておけ。アイツらを殺して解放する、だァ？　三日待つ、だァ？　――なんでだよ、オイ」

俺ァ何のためにA級にさせられて、この任務に就かされたんだっけ？　あ？　俺のために身を挺す護衛を死なせねェため、だっけ。はン、お笑い種だな。なんだよ死なせねェためって。んなネガティブな話があるかよ。

そもそも死なんてモンを近付けねェのがベストだろ。

なんで無策に無謀に敵陣に突っ込ませたんだ。アホか。アホだろ。

「シエナ」
「はい」
「アンタ、私達を連れてクルメーナまで行けるか？　近くの海に放り出すでもいい。私ァ片腕でも泳げるからな」
「……可能か不可能かで言えば、可能です。ですが……」
「危険です、って？　はン、何言ってやがる。腕つけて行く頃にァ敵の準備も終わっちまってるかもしれねェだろ。まさか思わねェよ、逃げた直後に戻ってくるなんざ。あァ腕は完成したら持ってきてくれってマッドチビに言っといてくれ。運びたくねェってんなら、冷静メイドに頼む。いけるか？」
「行けます」
「ヘェ、小娘の口の悪ィ要領を得ねェ説得に頷いてくれるたァ思わなかったよ」
「此度の私の任務は、遠征調査ではなく、ライラック様を敵に奪われぬよう守る事です。私がここで死した場合、貴女は単身敵地へ突貫する事が考えられます。それでは任務失敗です。故に私は死にません。貴女が敵地へ向かうと言うのならそれについていき、貴女の盾となり矛となります。何か問題はありますか？」

「問題は無ェよ」
あァさ。
なンだ？　どんどん楽しくなってきやがる。迷宮で感じた昂揚感だ。
どんな条件でこォなってんのか知らねェが、いいね、調子がいい。
「……わかりました。貴女方二人をクルメーナまで運びます。加え、戦闘にも参加させていただきます」
「ン、いいのかよ。マッドチビの命令無視にならねェか？」
「主ディミトラを救いに行くのでしょう？　何故、私が手伝わないと思われるのでしょうか」
はン？
いいね、いいじゃねェか。
なんぞか、覚悟の決まった目ェしてやがる。
「んじゃ行くか。挨拶は要らねェな。多分、今から敵地突っ込むっつったら≫貴女を殺すわ≪とか言ってきそうだし」
「言わないわよそんなこと。はいこれ。とりあえずの簡易義手。あっちの義手の改

良は続けておくけれど、隻腕じゃバランスも取りづらいでしょ。あと、中に入っていた薬草やら水筒やらも出しておいたから」

「……おォ、マッドチビ。いつからそこにいたんだ」

「なにそれ。変なあだ名つけるのね、貴女。まぁいいけど。いつからそこにいたとか、気にする時間ないんでしょ？　いいから行きなさいよ。私、馬鹿って大好きなのよ。私もとんだ彫金馬鹿だから」

すんげェ、悪ィ笑み浮かべたマッドチビが。

俺達の――そして、シエナの背中を押す。

「いってらっしゃい。無理して小難しい事考えてるだろうアッチの私と、敵。全部ぶっ飛ばしてきて。殺す殺さないは任せるわ。勝手にして。ただ、一応助言になるのかしらね。私の技術で作り上げたガーゴイルを【即死】させても、精神体が死ぬ、というわけではないわ。ちゃんと肉人形の方も殺さないと死なない。精神体っていうのは結構特殊でね。自身に最も適合する肉人形が無くなって初めて死に至り得るのよ。つまり」

「ガーゴイルは殺しまくって、どォにかアイツらの肉体確保すりゃ問題ねェってこ

とだな？」
「そういうこと」
おいおい、なんでそんな希望隠してたんだよお前。
いんやさ、いいね。いいね。風が吹いてきた。
この昂揚感含めて――向いてる、って感じがする。
「行ってきます、主ディミトラ」
「ええ。頑張りなさい、シエナ」
シエナが、俺と冷静メイドの胴体を抱く。
――耐G覚悟！
「発進します！」
――……覚悟で、どうにかなる、もんじゃ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えけ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

高速飛行の寒さでちったァ冷めた頭で、少しばかり考える。

今の俺ァ、確実にオカシイ。昂揚感も口数も性格も、一段階も二段階もアッパーになっている。それこそパッパラパーになっている気はする。迷宮でもあったことだけど、どうにもこう……打倒せんとするものが難しければ難しいほど、気分が上がる……とかか？

……そんな熱血漢じゃないが。

さっきの冷静メイドとの話し合いでもちょいちょい出てたが、感情論に寄りすぎている気がする。

暴論が過ぎる、というか。押しが強すぎる、というか。

俺ァもとから感情で押し切るのが多いタイプだけど、それにしたってどォにも……なんだ、幼児退行している、とでも言えばいいか。幼い暴論と幼い感情論で押し切るのが多い、気がする。

「冷静メイド」

「なんでしょう」

「次に私が、明らかにおかしくなっても、止めないでくれ。多分、大丈夫だから」

「……？　はい、わかりました」

クルメーナで俺含め全員が無策過ぎた、ってのもオカシイ事の一つ。多分、そういう魔法が使われているだろォってな納得している。

けどこれは……今の俺のおかしさってな、悪いモンじゃねェ気がすンだよな。

どこか、暖かい、というか。

何かに――見守られているような。

「もうすぐ、戦闘用ガーゴイルによる空域警戒網に突入します。梓・ライラック様、ご命令を。いかがいたしましょうか？」

「決まってらァよ。強硬突破だ。だがシエナ。アンタが壊れる事は許さねェ。気合で避けろ、全部」

「了解いたしました」

拳銃を握る。

この高速移動の中だ、狙いを付けられるかどォかは怪しいが、あんだけいるんだ、適当でもいいだろう。

早速尖り前髪に言われた事破っちまうな。

明らかな強敵だが――はン、攻撃させてもらう。

「接敵します！」

来た。

わんさか、だ。それはもう、めいっぱいの、これでもかってくらいの――ガーゴイル。

そいつらに向かって拳銃を乱射する。

威力上げてもらったンでな、石くらいなら貫かずともめり込ませられる。破壊力じゃなく、硬い外皮を貫通し、内部に入り込む事を目的とした弾丸も、この状況にァもってこいだ。

一応迷宮のゴーレム種の耐久性基準にしてンだぜ、ちったァ堪えてくれると助かるンだが――。

「ハ――効くなァ！　ありがてェ、安藤さん！　流石の腕だ！」

適当に乱射したそれの一発が、ガーゴイルの一体に当たった。

その瞬間――ガーゴイルが、ぼろぼろと崩れ落ちる。単なる銃弾なら一発で砕ける威力じゃねェのは明白だ。実際当たった瞬間はほっとんど破壊は起きて無かった。

けど、崩壊する。カタチを保てなくなって――崩れ落ちる。
死んだんだ。
ガーゴイルが死んで、中の精神体が抜けた。人形は鉱石に戻った。
「シエナ、オーレイア隊の面々が入れられるとしたら、どんなガーゴイルだと思うよ」
「確証はありませんが、魔法少女の精神体はああいった尖兵に入れられる事は少ないかと思われます。必ず敵に、あるいは偽の主ディミトラに。それらの役に立つような場所に配置されるかと」
「ン？　精神体側は魔法使えねェんじゃねェのか？」
「使う事ができないのは魔法少女の固有魔法です。【鉱水】、【侵食】、【即死】といったもの。ですが、魔力そのものを操ることはできます。故に魔力を扱うガーゴイルは、高度な知性を有している魔物か、魔法少女の精神体が封入されていると考えてよろしいかと思われます」
「成程。んで、逆に――肉体の方は、化け物共が使ってると。魔法はソッチに使われる、ンだよな？」

「主ディミトラの場合はそのようでした。主ディミトラの肉体を操る何者かは、意のままに【鉱水】を操ります。私が探る事が出来たのはここまでです。私の存在自体は主ディミトラの過去作だと思われていたようなのですが、制御権がないことや私の調査行動から不信感を持たれ、それ以上の調査ができていませんでした」

撃つ。撃つ。撃つ。

脅威とは認定してくれたのか、無策に突貫してくる個体はいなくなった。遠距離攻撃持ってねェみたいだからな、近付けば死だって思って、それを怖がってくれるなら——そんなにいい事は無い。

制御権だのなんだので統率されてる尖兵じゃなく、そいつァ単なる生物だ。それなら、俺だってやりようがある。

「ライラック様。右舷後方に突撃個体です。三叉槍を持ったガーゴイル——対処いただけますでしょうか」

「あァよ！」

殺意。それを感じなかったンで一切気付けなかったけど、冷静メイドがよく見ていてくれた。

……待て、殺意がない？　一応クルメーナにいるマッドチビを守るために外敵を迎撃する部隊、ってな感じじゃねェのか。

迎撃に殺意が乗らねェ、なんてことあるか？

「的中。お見事です」

「まァ横だの縦だのに動かれなきゃな。まっすぐ向かってきてんならちったァ狙いも定めやすい」

あの迷宮で、殺意――それも、俺が即死するレベルの攻撃になら、俺の直感みてェなのは必ず発動した。尖り前髪の【飛斬】でもそォだ。お嬢や太腿忍者との訓練で俺のコレが発揮されなかったのァ、アイツらに俺を本気で殺すって意思がないからだ。多分。その攻撃自体は即死級だったとしても、本気でヤる気が無いんなら俺は気付けない。

それと、同じ。

つまるところ――アイツらも嫌々付き合わされてンな？

中の化け物の精神体。魂ってやつァ、制御権とやらに無理矢理従わされてるだけで、化け物達はもう解放されたがってるンじゃねェか？

それは、敵の魔法少女に使われ始めた時から、だけじゃなく――マッドチビに魂引っこ抜かれて扱き使われた時から、なンだろう。

……化け物に同情するほど俺にァ余裕無ェけどさ。なんか、な。

「見えました！　クルメーナです！」

「外から入り込むンじゃ化け物に囲まれちまう。門番だのなんだのもいるだろうしな。だから、屋根に取り付いて直接あの部屋にまで行きたい。シエナ、偽ディミトラや敵の魔法少女ってなあの部屋にいると思うか？」

「いえ、私の調査中、件の敵の魔法少女、というのに出会うことはありませんでした。島内にいるとすれば新しく作られた隠し部屋、あるいは主ディミトラの蘇生槽にいるものと思われます。主ディミトラの蘇生槽はクルメーナの最下層にあります」

「過激無口が言ってた上と下の危険な気配の一つだろォな」

問題は、どう入り込むか、だ。

流石にシエナに突っ込めってなキツい。壊れちまう可能性が高い。

あの人工島は見るからに耐久性能高そォだからな。魔法でぶち抜くにもキツそォ

だ。
「ライラック様。ここは私が」
「なンかできンのか」
「あの屋敷の壁材がなんであれ――【侵食】し、人体に置き換えます。そこを私が貫き、穴を開けますので、突入してください」
「……人体ってェのは」
「ご安心ください、ライラック様。生きたものは作りません。では、お先に失礼いたします」
シエナの手から離れた冷静メイドが、飛行魔法を用いてクルメーナに突撃する。一応援護として近づくガーゴイルを撃ちつつ、その様子を見る。シエナと俺は少しばかり速度を落とし、穴が空くまで待機。つってもガーゴイルは避けるし殺すんだが。
クルメーナに建てられた、マッドチビの屋敷。
鉱石の意匠が美しい屋敷の屋根の一角に――肌色ができる。人二人が入れるくらいの面積のそれ。皮、だろうか。冷静メイドの手を当てるそこに、肌色の区画が出

来て、恐らくはソレが内部にまで浸透していっている。
世界に己を【侵食】させ、自己に変質させる魔法。
こえーな、ホント。
「っ……あれァ、骨、か？」
「はい。形状的に、女性の大腿骨です」
手を離した冷静メイドが、同じく屋根から引き抜いたのは、真っ白い剣。否、骨だ。
長く太く、白く――文字通り武骨な骨を持ち、魔力を高める冷静メイド。
そして、それを。
――突き入れた。
「貫通を確認。突撃します！」
「頼む！」
轟音鳴り響く屋敷に向かい、再度全速力で以て向かうシエナ。その際、冷静メイドとすれ違った。後から来る、という意のアイコンタクトなんだろォけど、この速度の中目ェ合わせてくんのはこえーって。

後屋敷の穴にべったりくっついた、元の材質に戻っていく際中の――皮。
こえーよ。こえーってこの魔法。アイツもだけど、怖すぎるだろ。
「反魔鉱石の壁も無いようです！　梓・ライラック様！」
「あァよ――もう油断はしねェからよ、突っ込んでくれ！」
その懸念は一応俺もしてたんだが、無いらしい。
ま、反魔鉱石ってなそこまで量が取れるモンでも無いらしいからな。【鉱水】での攻撃手段としちゃ有用も有用だが、耐久性高めるために壁材に、ってな使い方はしねェってこったろ。
……となると、アイツらの肉体ってなそこには無い、もう化け物の魂が入れられたってことにァなんだろォけど。
「着地の衝撃に備えてください！」
グン、と凄まじい衝撃が身体にかかる。
言うのちょっと遅いよ。
なんて泣き言も言ってらンねェんで――あァ、そこに降り立った。
久方ぶり、って感じはしねェ。さっきぶりだ。ハハ。

「周囲に熱源反応2。――警戒を」
「大丈夫だ、気付いてる」
あン時、偽マッドチビの座っていた椅子。
そこに二人――いた。
前屈姿勢でしゃがみ込んでいる、二人。
委員長と過激無口だ。
「――ぅ？」
「ぁ――」
こちらに気付いたのだろう。
振り返って、立ち上がって――犬みてぇに、四つ足で。
「ぅ――ぁぁあっ！」
突然、とびかかってきた。
「ッ、シエナ、殺すなよ！」
「了解いたしました！」

流石にンなわかりやすい攻撃は避けられる。
身体強化も使ってねェとびかかりだ。そのまま、地面に着地しても四つ足のまま……舌をだらんとだして、涎がダラダラ垂れて。
血走った目は、餌を見るソレで。
「化け物の精神体って奴か」
「そのようですね」
「ン、冷静メイド。来たか」
俺の後ろに降り立った冷静メイド。魔力量含め、消耗はほとんど無さそォだ。外のガーゴイルに攻撃されねェか心配してたんだが、コイツも近接魔法少女の一人だからな。俺が心配するまでもねェっちゃねェんだろゥ。俺なんかより、遥かにつえーだろォし。
「殺さずの拘束をご所望ですか、ライラック様」
「あァよ。まさか、ここまできて事態の緊急性だのなんだの説かねェよな」
「貴女とは議論にならないと判断できましたので、問題ありません。【侵食】を用い、拘束します」

「……人体の【侵食】ってなァ、元に戻ンのか？」
「元には戻りますが、細胞に甚大な断裂を与えてしまいます。ので、他の手段で拘束いたします」
冷静メイドが近くにあった銅像に触れる。
それが――ざァ、と。流れるように崩れた。
「……髪か」
「はい。これによる拘束後、【侵食】を解くことで、鉱石の強度を持った紐が出来上がります」
「いいね。つか、案外汎用性のある魔法だな、それァ」
「ありがとうございます。ですが――彼女らの、主にケトゥアン様の【槍玄】を使用された場合、破られてしまう事が推測されます。また、フェニキア様の【引力】にも十二分の注意を。あれなる者達が彼女らの魔法を十全に扱い熟せるかは未知数ですが、警戒に越したことはありません」
言いながら、そのサラッサラの髪を渡してくる冷静メイド。
……女性の髪を持って戦うとか、俺ァ色々と思うとこあるよ。感触は完全に髪の

毛だ。そォいう魔法だから当然なンだが、いやさ、怖い怖い。
「【侵食】によって変質している間は単なる毛髪です。耐久性能はお察しを。私の手にある内は強化も可能ですが」
「私のコレァただの髪の毛だから、拘束すンならちゃんと弱らせてから、ってこったろ」
「はい」
新しく現れた獲物。あるいは敵に、様子見をする素振りを見せていた二人。……いんやさ、二匹。
けれど、それも終わったのだろう。
うう、ああと――ゾンビみてェな唸り声をあげて。
再度、来た。
「まずは――食らえよ」
発砲する。
獣みてェに向かってくる委員長に向かって、拳銃を撃つ。
それを避ける委員長。よし、屍兵ってなモンじゃァねェな。怪我も気にせず、と

かなら色々とあったが、コイツも生物だ。犬か狼か、はたまた別のモンかは知らねェが、化け物の入れられた、化け物の思考で行動する委員長の肉体ってこった。

視覚神経と脳を強化。

左手の振り下ろし。キチンと揃えられた爪にァ大した殺傷能力は無さそォだが、捕まれるって可能性もある。四足の獣にそォいう択があンのかは知らねェが、避けるに越したことはない。

知覚強化を下げて行きながら、半歩下がり、上体を後ろに反らす。身体強化はするほどじゃない。大丈夫、避けられる。

避けられた。

「ぁあ――ぅぅッ！」

「はン、なんだ、お前まだその身体に慣れてねェな？　リーチが足りてねェし、獣の頃より俊敏性も無ェんだ、そんなんだから――私程度に負けちま、」

隙。確実な隙だ。

腕を振り下ろした後の、身体がどォにもならねェ確実な隙。そこにパンチなりなんなりを入れたらいい。【即死】を使わねェで、身体強化だけの掌底か、マッドチ

ビに貰った簡易義手での拳を。

――≫故にお前はどんな強敵と当たろうとも、攻撃を考えてはならない。回避と防御を徹底しろ。たとえその腕で殴り得る機会が訪れたとしても、たとえその他の手段で……拳銃などで攻撃できたとしても≪

「ッ、だが別に強敵ってワケじゃ――ッ!?」

思いっきりバックステップ。

一瞬脳裏を反芻した尖り前髪の言葉を否定しかけて、けれど直感の方が警鐘を鳴らしてくれた。

今まさに攻撃をしようとしていた――隙だらけの身体に殴りを入れようとしていた身体を引き戻す。

「……チ」

「お前ら気を付けろ！　こいつら――ちゃんと知性があるぞ！」

「そのよう、ですね！」

「……！」

ゾンビみてェだと思った。身体を十全に扱いきれていない、言葉も持たねェ化け

物の魂が入れられているだけだと思った。
違う。
ちゃんと――ある。
「どうして気付いたのか、教えてもらってもいいですか？」
「……演技。完璧。……問題はなかった」
それも。
それも。
あァ、クソ。なんだって。
「梓さん。後学のために、違和感のあるところは直しておかなければいけないんです」
「……勝負」
なんだって――元の人格と同じような言動すンだよ。

考えろ。
その攻撃を避けながらでいい。考えろ。
「難しいですね。中々当たりません」
「そりゃ私が避けてっからな。だがよ、教えを乞うってンならこっちからもだ。お前さん、誰だ。私になんて呼ばれてたか覚えてるか？」
「はい？　私はフェニキア・各務ですよ。委員長というあだ名をつけてもらったフェニキアです」
「そォかい。しかし、なんだってそんな攻撃すンだよ。――まるで、獣みてェなさ」
そう。
まだ、攻撃は単調なままだ。
四足の獣みてェな攻撃。どう頑張ってみても、委員長の動きだとは思えない。
「少し前まで獣の肉体にありましたからね、私は。でも、こうして主に魔法少女の肉体を用意していただきました。この身体は便利ですよ？　たとえばこうやって――」
「ッ、っとォ！」

「あ、避けないでください。この魔法の素晴らしさを説明しようと思ったんですから」

見えない。触れない。

だが、何かが近づいてくる感覚はあった。出した瞬間に魔力を感じられたのもでけェ。

あれァ【引力】だな。

「お前に使いこなせんのか、そいつァよ」

「使いこなすも何も、私のものなんですから――こういう事もできます」

――知覚強化。轟音。金属と金属の擦れ合う音。位置は委員長の背後。何かに引っかかって跳ねる音。高速で巨大な物体が移動する音。脚部強化へ魔力を移動。さらに背後に後退を選択。知覚強化を切り、予測される落下地点から距離を取れ！

「――！」

「あれ、これも避けますか。思っていたより動けますね。魔法に頼り切りの魔法少女だとばかり思っていましたが」

「はン、残念だがその辺の弱点はしっかり教育されてな。回避や防御に関しちゃ、

私ァちゃんとできんだよ」

落ちてきたのは、銅像だ。

でけェ作りかけのガーゴイル。それに、多分予め【引力】の紐をつけてたんだろォが、引っ張ってきてコッチにぶつけてくるってな、多分委員長の戦い方だな。戦闘ができねェわけじゃねェと言っていた。

……いやさ、ちょいとまだ考えてる最中だ。

言動にちょいちょいおかしな点がある。だが、それにコイツは気付いてねェ。だから多分、記憶を混ぜられてるとか洗脳されてるとか催眠されてるとか、その辺なんだろォこたわかる。

コイツがなんらかの獣の化け物であることは間違いない。だが、その化け物の精神ァ自身を委員長だって思い込んでる。戦い方に獣であった頃との変化はないものの、単純に魔法……【引力】は使えるようになってるし、その使い方もわかる、って感じか？

ならなんだって人間の戦い方しねェんだ、ってのァ思ったが、別にヒトガタで戦う事の方が優れてるかどォかって判断は俺にァつかねェ。二足で戦うより四足で

戦った方が戦いやすいってンならそっちを使うだろう。言うなりゃハイブリットか。どっちが優れてるか、じゃねェよな。

「委員長」

「何ですか？」

「銀バングルのことはどう思ってるよ」

「どう、とは？」

「好きか嫌いかさ」

ちょいとカマをかけてみる。

さて――。

「勿論、愛していますよ。ＥＤＥＮへの侵攻も二人で行くことを約束していますから」

「……あァよ、藪つついたら蛇も鬼も出てきたな」

ＥＤＥＮへの侵攻ってな、なんですかィ？

23・地羅止湾藍符哀鳴符阿雲度・

「ライラック様！」
「ン――問題ねェよ」
ＥＤＥＮへの侵攻。
聞きてェ事が増えたが、まァ腹積もりはわかった。委員長の記憶を持ってァいるが、コイツは敵側だ。敵だ。ただその肉体を傷つけちゃいけねェだけの、敵。
飛んできた鉄の棒みてェなのを避ける。
殺意は感じなかった。流れ弾かね。
っ、いや違う、全身強化で屈め！
「――【槍玄】」
「な、ァ!?」
壁。壁に、突き刺さった。
過激無口が。そのコースは、俺を巻き込むもの。屈まなかったら壁にぐしゃってなってた。

だが、隙だらけの腹だ。今の内に冷静メイドの髪を……いや、逃げるが先！

冷静メイドとシエナの方に合流する。

ダメだ、さっきから昂揚感による酔いのせいで、隙あらば攻撃だの拘束だのを考えてる自分がいる。今のだって髪の毛巻き付けてる間に過激無口が復活する可能性は十分にあったし、そもそもきかねェ可能性もあった。隙あらばどころか隙じゃねェかもしれなかったんだ。

確かに【即死】を撃ち込む隙でァあるんだろう。【即死】させられる相手なら、今の判断で攻撃しにいくのは正しいように思う。

だが、他の手段で——絶対でない手段での攻撃はダメだ。俺ァそんなに強かない。思い出せ、自分がお飾りA級だってこと。

「冷静メイド、どォだ。糸口ってな、ありそォか？」

「フェニキア様ならば拘束は可能です。問題ありません。ですが、ケトゥアン様は……」

「お二人とも、来ます！」

シエナの声と共に、俺は左に、冷静メイドは上に逃げる。

過激無口の【槍玄】。その魔法について詳しく知ってるワケじゃねェが、道中の戦いや今のあれそれを見るに、己の身体を槍に見立てて突っ込んでくるっつー、すんげェ近接も近接な魔法ってなモンなんだろう。突撃中は貫通力を増す上、推進力もあンな。海の中を突き進めるくらいの推進力があって、水平方向に突っ込んでくるのもできるって感じか？

だが、一度狙いを定めたら何かにぶち当たるか魔法を解除するまで止まれなそォだな。そこが狙い目か。

「……俊敏」

「そうですね。ではケトゥアン、これを」

「……」

委員長の元に戻った過激無口。仲間意識は消えてねェっつか、銀バングルへの愛情ってながちゃんと残ってる以上、普通に委員長や過激無口としての戦い方も消えてねェと見るべきだ。

つまり、連携力も十二分。あるいは同じ種族の化け物が入ってて、そこでも群れだったンならそれ以上の可能性もあンな。

「【槍玄】」

まァでも愚直な直線の突撃に当たる程俺ァ――。

「ライラック様！」

「!?」

知覚強化はちゃんとした。そのコースは確かに俺を狙ってきていたけれど、その貫通範囲を踏まえた上で避けた、はずだった。

だが、今こうして――守られている。

回避を行った俺を押しのけて、真っ白い盾を持った冷静メイドに。

「長くは持ちません、退避を！」

「ッ」

転がるようにして冷静メイドの背後から外れる。

――いや、違う。こっちじゃない。

「冷静メイド、委員長から離れた方へ逸れろ！」

「承、知……！」

盾で過激無口を弾き、俺が逃げ直した方へその身を翻す。

衝撃でばらばらと崩れ落ちる盾。白いそれは、地面へと落ちると、真黒な金属へと変じた。

「【侵食】でその辺のもんを骨にして組み合わせて盾にしてたのか」

「はい。ライラック様は私が怪我を負う事も忌むかと思いましたので」

「いいね、私の事をわかってきたな」

少し離れた所にいるシエナを見る。

……分析中って感じか？　何か見てるな。

「今のは」

「多分、【引力】と【槍玄】の合わせ技だな。【引力】の紐を付けた過激無口が突っ込んできて、その紐を引っ張る事で無理矢理【槍玄】の軌道を変える。助かったよ、ほんと。今のはやられてたかもしれねェ」

「いえ。……ですが、そういう原理であるのなら」

「あァ。無防備な奴がいらァな」

弾かれ、壁にぶち当たった過激無口が出てくる。

さっきから殺意ってな感じねェが、どォにも狙いは俺らしい。

んじゃ、囮は任せろってな。

「ちょいと吸わせてもらうぜ」

魔煙草を取り出し、起動。

義手ン中に全部入れてたやつだが、マッドチビに返してもらって良かったぜ。ったく、昂揚に溢れた俺ってな、ちょいと考え無しが過ぎる。

あ――いいね、慣れ親しんだ、良い不味さだ。脳がクリアになる……。

――聴力強化。踏み込みではなく、風を切る音を聞く。まっすぐに進むソレは俺を突き破るコースだが、委員長の位置からして左側には曲がれねェな。【引力】ってな引っ張る魔法であって押し出す魔法じゃねェ。んじゃ左側に……いや、待て。委員長の記憶まで持ってンなら、そんなもう見破られた戦略使うか？　聴力強化。思考速度も上げる。どんどんゆっくりになる世界に、深く深く潜っていく。

一度見破られた技。且つ、自分達だって弱点はわかってるはずだ。その上でもっかい同じことしてくるってこた、委員長もその戦略も囮。確実に俺を仕留める――あるいは捕まえるための一手に過ぎない。そォだ、敵は俺の【即死】を欲しがってたんだ、殺意なんかあるわけがねェ。【槍玄】の威力を理解してンのかどうかはと

もかく、生きてさえいればいい、程度の考えで来てる可能性が高い。
直感は発動しねェってことだ。んでもって、たとえ委員長が拘束されようと、確実に俺を捕まえに来る。範囲の分かってる攻撃、なンかじゃなく――。
視覚強化。部屋全体を見て、ソレを探す。
あァ、やっぱりあった。ギシ、という音。
「だから、取るべきは、下！」
思考を一気に浮上させ、全身強化で寝そべるくらいしゃがみ込む。
そのスレッスレを通り過ぎて行く過激無口。その軌道は、委員長側、ではない。
「きゃ!?」
「拘束します」
「何するんですか、ローグンさん！」
「拘束です」
偽マッドチビのいた椅子の辺りで棒立ちだった委員長に、それはもう馬乗りになって、その周辺の床からざぁざぁと髪の毛を出し、めちゃくちゃの雁字搦めにする冷静メイド。

効率的な縛り方、などではない。これでもかというほどの髪の毛を委員長の身体に絡めさせ、【侵食】を解く。

「う……！」

「――分析完了。対象の魔法【槍玄】の破壊力は、最初の勢いが無ければ発揮されません。梓・ライラック様、これを！」

シエナによって投げつけられるは――肘で折り畳まれた女性の腕２本。オイオイなんてものを投げてやがる、なんてツッコミをしてる暇はない。

投げられたソレを受け取り、過激無口の胴体に絡ませる。

その【侵食】も、解けた。

「……む。……だが」

「なら、私が抑えます！」

まだ腹に金属の枷二個つけたまま、けれどまだ動こうとしていた過激無口。その背にドスンと鈍い音を立てて、シエナが降り立った。

背骨、大丈夫だよな？

「……！」

「シエナ様。お任せを」
そこに冷静メイドが来る。委員長と同じように髪の毛をふんだんに絡めて絡めて絡めまくって、いやさらに念入りに、指の一本一本に至るまでを縛って――【侵食】を解いた。
「――制圧完了。お怪我はありませんか、お二方」
「損傷はありません。戦闘続行可能です」
「あァ、私も問題ねェよ。先を急ごう」
金属やら石やら何やらで構成された細い紐に雁字搦めにされた二人。
過激無口の方は未だ抵抗しようとしてるが、動けやしねェ様子だ。あァ、【侵食】ってなこえー魔法だが、使い方次第だな、ホント。
「下階への扉はこっちです」
とりあえずァ、無力化完了ってことで。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

階段を下っていく。これァ、結構潜るな。

「ライラック様。何故あの場で下を選択したのでしょうか」

「ん？　あァさっきのか。いんやさ、委員長ってなもっと賢い奴だと思ったからよ。確実に私を仕留めるか捕えるかすンなら、もっと自由度のある攻撃をしてくるって思ったんだ。んで【引力】は引っ張る魔法ってなわかってたが、その長さはあんなモンじゃァねェ。この二つを加味すると、どっかに委員長側じゃねェ方向にも引っ張れる【引力】を仕込んでる可能性が高ェんじゃねェかって考えたのさ」

押し出せないなら、反対から引っ張りゃいい。それで同じ結果を出せる。

どうやって反対側から引っ張るかって、そりゃ。

「部屋の隅のどっかに【引力】の紐をひっかけて、そっちも過激無口の身体につけとく。そうすりゃ、獲物がどっち行こうと仕留められる。最初にアレを見せた時は冷静メイドが傍にいたからな。その奥の手を見せたらお前は私の傍から離れようとしなかっただろ？　お前が私から離れるとしたら、種も仕掛けもわかって、最優先に潰すべきモンが見えた状況って時だけだ。絶好の隙なのさ、そこが」

冷静メイドは反射神経だけで俺を守り得る可能性があった。シエナは離れたトコ

にいたんで問題は無いが、冷静メイドがいるってだけで確実性を欠く。

だから、目に見えた餌……制圧しやすそォな委員長っつー餌をぶら下げて、冷静メイドを引き剥がそうとしたってワケだ。その目論見は成功しつつ、俺も高ァ括ってなんでもなく左側に逃げようとしてた。もしそォしてたら、過激無口は俺を捕まえて逃げるなりしたンだろう。んで敵の魔法少女の元に献上ってな具合だ。

シエナが追いついてァくれたかもしれねェが、数十のガーゴイルの群れに入っちまったら終わり。シエナ一人じゃ対処しきれねェだろうからな。

そんなシナリオだったんだと思う。細部まで合ってるかどォかは知らん。委員長ともそんな腹ァ割って話したわけじゃねェしな。

「なるほど。ご教授ありがとうございます」

「んな大したモンじゃねェがよ。で、シエナは何してたんだ？　分析の類だと思うんだが」

「私には魔力を検知する機能や、対象魔法の発動条件などを計算、調査する機能が備わっています。それらを用い、【引力】及び【槍玄】の効果範囲や必要魔力などを分析していました。申し訳ございません。戦闘のお手伝いをすると言ったにもか

かわらず……」

「いんやさ、適材適所だ。私ァどォにも敵さんから狙われるみてェなんで、囮として役に立つ。冷静メイドは色々できる上、拘束に長けてるから役に立つ。お前さんはその機能ってなで、私達のわからねェ事に気付けるから役に立つってこったろ？」

「はい。次は、必ず」

二人ともよくやってくれてる方だ。

多分だけど、シエナが戦闘にあんまり参加しなかったのは、その武装に殺傷能力がありすぎるから、ってのもあるんだと思う。俺が最初に言った殺すなって言葉に従うと、選択できる武装に限りがあンだろう。だから戦闘でなく、分析に徹したってトコか。

冷静メイドの方もちゃんと防御と拘束に振ってくれてる。ありがてェよ、ほんと。

「次。そォだな。次だ。次を考えよう。まず、気を付けるべきは虹色ロングだ。アイツの【弱化】は果てしなく厄介だ。アイツの話聞いてる限りじゃ、生物以外にァ効かなそうなのが救いか。拘束ァ今と同じ方法でいいだろォが、どォやるかだな」

「先手必勝、ではどうでしょうか」
「そォ言って突っ込んだら思うつぼだ。【弱化】は遠隔魔法だから、触れなくとも発動できる。……光眼鏡の【排析】の中にいたりしたら最悪だ。そン時は、ちっと作戦立てるために引き返す必要があるかもしれねェ」
「【排析】の強度は、どれほどと思われますか？」
「あのイッカクの突きってなどんくらいの攻撃だった？　化け物の等級区分でいい」
「恐らくはＡからＳです」
「なら、それくらいにァ負ける程度の強度だ。シエナ、お前の武装ってな、一番つえーのでどんくらいの威力が出せる？」
「魔法少女の等級区分に従うのなら、殲滅力はＳ、殺傷能力はＡ程度です」
「なるほど」
マルチミサイルかなんかでも積んでんのかね。その殲滅力の高さは。
「熱源反応を２つ検知」
「あァ、多分光眼鏡と虹色ロングだ。組み合わせとしちゃ絶好だからな。さて、どォ

するか――」

「ッ、魔力を検知！　後退してください――！」

ぐい、と引っ張られる。襟首を冷静メイドに持たれて――階段の上にまでぶん投げられたんだ。

シエナは飛んで逃げて。

その、冷静メイドは。

「――問題、ありません」

身体の半分以上を真っ白に染めて、そんなことを宣った。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは《ｔｅｘｔ》

「大丈夫、です……が、ご命令に、したがえぬ、こと、を、おゆるしください」

「何言って」

ガチン、と。

冷静メイドは、どう見ても大丈夫じゃない冷静メイドは、自らの指を噛み千切る。

そしてそれを、ぷっ、と階段に吐き捨てた。
そして――そこから、あの砂浜の時と同じように。
階段を【侵食】し、生えてくる冷静メイド。勿論、衣服の無い状態で。
「問題は無いと言いました」
「……ソッチは」
「人格権を手放したため、単なる肉体になりました。申し訳ございません。この手法での脱出も嫌だと仰られていたにも関わらず……」
「……いや、いい。今はそんなこと言ってられねェし、お前は……死んで、ないんだよな。じゃ、早く服着てくれ」
「承知いたしました」
そこの割り切りってな、俺にァどうにも難しい。
それを割り切っちまったら、魔法少女の蘇生まで行っちまう気がする。
けど、今その問答はできねェ。そんな事やってる場合じゃねェ。
「どォいうこった、シエナ。中にいるのは光眼鏡と虹色ロングじゃねェのか？」
「――この白色の物質は、生物の歯と同じセメント質ですね。恐らくこれが【白亜】

かと」
「あァさ、そいつァ知ってんだ。中にいる熱源ってな、身長ァどんくらいかわかるか？」
「申し訳ありません。私に搭載されている機能では、対象物の大きさは測る事ができません」
「そォかい。そいつァ無理言ってすまなかったな」
そこまで高性能な熱源感知センサーは無理か。
ま、熱源が感知できるってだけで十分だな。
「さて、どォやって入るか。【白亜】ってな、生物以外にもイケんだな」
「……ならば、【侵食】し返しましょう」
言って――冷静メイドが、地面に手をつける。
途端、広がっていく白。【白亜】の白によく似た、けれどザラザラ、ぼこぼことした白。材質自体は同じだが――こっちは、その一つ一つが骨だ。
ドアも壁も【白亜】化していたそこを、骨が骨が骨が覆っていく。それらは上に行くほどにバランスを保てなくなり、ガラガラと崩れ落ちた。

「コーネリアス・ローグン。元S級魔法少女にして、私と同じく世界を変質させる魔法を使う魔法少女の憧れ。まさかこのような形で対立することになるとは思ってなかったわ」

「同じ言葉を返しましょう。【白亜】の美しさは私達の耳にも届いております。戦場の全てを白に染める魔法の使い手、オーレイア様。地形も魔物も全て白亜に染める様は圧巻だった、と」

「そう。ローグンさん、初めは私達に興味無さそうだったから、知られていないものだと思っていたけれど……ちゃんと、知っていてくれたのね」

「無論です。――私は私の範囲で、キリバチ様やエミリー様を守るため――脅威になり得る魔法を使う魔法少女については調べています。同系統ともなれば、殊更に」

いた。

光眼鏡と銀バングル。

虹色ロングはいない。

だが、ンなこと以上に――なンか、バチバチしてらァ。

「知子」

「は、はい」
「梓以外は殺してもいいとの事だったけれど、ローグンさんには手を出さないで。私がやりたいの」
「わわ、わかりました。では――あのガーゴイルを、破壊します」
そォいや、オーレイア隊にァ明確なアタッカーってのが二人しかいねェって言ってた。
一人は過激無口だとして。
明確なアタッカーってな、もう一人は、誰だ。
「シエナ！　逃げろ！」
「――ッ!?」
委員長はアタッカーってよりサポーターだ。銀バングルもこの分なら遠隔で戦った方が良い。虹色ロングは俺が見てわかる程に魔力が低く、その魔法もサポート向き。
じゃァ、もう一人ってのァ誰なのか。
ンなもん決まってる。他に見つからないなら、ソイツしかいない。

「【排析】」
「【即死】――！」
「!?」
知覚強化と腕部強化で、ソレを掠める。
そして、殺した。……あァ、ちゃんと殺せたな。
「わ、わわっ!?」
「……驚いた。梓、貴女のことだから、仲間は殺せないかと思っていたのに――【即死】を使ってくるのね」
「馬鹿が。仲間は殺せねェに決まってんだろ。だが、仲間の魔法なら殺せんだよ、私ァ。【排析】が特殊魔法じゃねェってな、あのイッカクの時にわかったしな」
「申し訳ありません、助かりました、梓・ライラック様」
おどおどした声を出しながら、けどしっかり後退する光眼鏡。
今の踏み込み。速さ。的確さ。どれをとってもB級のそれじゃァなかった。それに、拳に纏った小せェ【排析】。AからS級の攻撃に対する耐久力があるってンなら、そりゃそォだよな。攻撃に使うのだって、使い方の一つだ。

むしろそれで空間を押しやれる、んだったか。そりゃ、威力もすげェんだろォよ。アタッカーやるにァ十分な効果だ。

だが――ハハ。

風ってなまだ、俺に向いているらしい。

「あんま、試した事なかったんだけどな。特殊魔法を殺せることは知ってたが、やる機会も無かった。やりたくなかったから。が――そォいう遠隔魔法も殺せるってな、そォいや習った気がするよ。周りにいる遠隔が一瞬で消えちまうのばっかだったし、触れたら私の手がやばそォだったんで試す機会は無かったが――そォいうタイプなら、話は違ェや」

「……わ、私と、戦う、んですか……？」

「あァよ。魔法少女歴20年の大ベテランなンだろ？　胸貸してくれや、先輩」

「……！」

あァ――また、いけねェ昂揚感に包まれてやがる。

引かなきゃいけねェはずだ。相手は大ベテランなんだから、シエナに逃げ回ってもらえばいいだけの話じゃねェのか。俺を殺さねェって言ってんならそれでいいは

ずだ。冷静メイドは銀バングルとやりあうってんだからそっちのサポートも期待できねェ。

なら、俺が取るべきはどォにかして銀バングルを無力化するって手段であって、シエナにァ悪いが光眼鏡をトレインしたまま逃げてもらうのが最善だろォに。

はは。

ははは！

「シエナ！　すまねェな、まだ戦闘にァ参加させてやれそォにねェ。分析は続けてくれ。私ァちょいと、光眼鏡と遊ぶからよ！」

「……わかりました。お気を付けください」

「あァさ！」

心に何か、満ちて行くものがある。

誰かが俺を見ている気がする。誰かが俺を認めている気がする。

なァ、俺は誰だ。あァさ、梓・ライラック。そォだ。ちゃんと、そォだ。いいな？　忘れるなよ。呑まれるなよ？

「――ハハハ！　いいね、いいね。いいじゃないか――なァ、光眼鏡」

「は、はは、はい。な、なんでしょう、か？」
「お前さ、神ってな、信じるか？」
祈るかよ、神に。
願うかよ、神に。
「い、いえ……西方には、そういう、しゅ、宗教もあったと聞きますが、わたっ、私は別に……」
「そォかいそォかい！」
笑みが止まらねェ。
やめろやめろ、あんまり近づいてくンな。違うだろ、まだ。
「――この20年。神に祈っても、神は何もしてくれなかった、ですから」
「じゃ――敵（非善）だ」
光眼鏡が四つ足で、猫みてェな構えを取る。
俺ァ俺で、両の腕を、生身と義手の両方をかっぴらいて待つ。
なンだなンだ、おいおい、余計なコト考えさせんのやめろよ。
俺ァ一体どォしちまったんだ。オカシイぜ、ホント。

「行きます！」
「あァ来いよ、光眼鏡！」
なんで俺が、構える側になってンだ？

遠《ｔｅｘｔ:s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

避ける。
避ける、避ける、避ける避ける避ける。
「っ、ちょこ、まかと……！」
「はン、やっぱ人間の身体は馴染まねェか？　どォしてちっとも身体強化を使わねェんだ、お前ら」
「何の、はは、話ですか！」
避ける――！
見える。見える。
知覚強化はしてある。手足の強化も都度都度している。

それくらいには速い。それくらいには鋭い。
けれど同時に、その程度だ。
オーレイア隊のアタッカー。過激無口には及ばないが、なるほど、アタッカーと言うだけはある。先ほどから俺を捉えることが出来ずに叩きつけられる床のへこみ具合。【排析】を用いたそれの威力は、なるほどなるほど、A級の化け物共を殺すには十二分なンだろう。それ以上は過激無口がやるし、銀バングルや虹色ロングのサポートもある。やばくなったらでけェ【排析】を張るか、委員長に引っ張ってもらやいいんだ。そういう風にできてる。
いいね、ちゃんとしてる。ちゃんと歴戦だ、こいつらは。
だが、その程度じゃ俺ァ殺せねェよ。
「――死ね」
「っ！」
俺の脇を掠めた【排析】を、殺す。
シャボン玉みてェだと評したが、まさにそんな感じに爆ぜるソレ。バックステップで下がる光眼鏡に、さらに笑みを深める。

怖いか。

怖いよな。死は――怖ェよなァ。

「なんで逃げンだ。魔法少女だろ？　死んでも死なねェ魔法少女が、何を恐れる。獣だった頃とァ違ェんだぞ。魔法少女ってな、死んだって蘇生する。私に殺されても、蘇生すンだ。どォだよ、夢のようだろ？　だったら逃げずにかかってこいよ。死兵としての務めを果たせ。私を捕まえるンだろ？　献上しなきゃいけねェんだろ？　なァ。なァ！」

「ひ……な、何を言ってるのか、よ、よくわかりませんが――無力化します！」

「わかるだろォがよ!!」

知覚強化の上を行く速度で突っ込んできた光眼鏡を、思いっきり蹴る。

拳に纏った【排析】を殺しつつ、その身を蹴り上げてぶっ飛ばした。

……いってェ。あァ、忘れてた。脚ってな強化しねェとダメだったな。失敗した。

「く、ぅ……！」

「わかんねェだと？　今更何言ってやがる。てめェらが課してきた苦しみだろォが。私に！　わ・た・し・に！　私が苦しむって知ってて、わかってて、それでも

突き通すって理念だろォが！　あァ!?　それをわかんねェだと？　ふざけんじゃねェよ。速く来い。今すぐに来い。来て――殺されろ」

「た、隊長、梓さんは、今の梓さんは、ふふ、普通じゃないです、お、オカシイです!!」

「そうみたいね。けど、ごめんなさい、知子。こっちも余裕が無いのよ。【侵食】、これほどとは思ってなかったわ。いいえ、思っていたけれど――想像以上だった、というべきね。けど、いいのかしら？　梓は本当におかしくなっているみたいよ、ローグンさん」

「ライラック様には自分がおかしくなっても止めるな、と言われております。故、明らかに異常な発言をしている事を加味した上で、貴女に集中させていただいております」

「それは光栄、ね！」

ざわ、と。

アッチで、無数の腕が突き出てンのが見えた。それらを次から次へと【白亜】に染めるも、染めた傍から――【白亜】になった腕から腕が、染めた腕からまた腕が

と、凄まじい量の腕が銀バングルに襲い掛かってる。

いやさ、こえー魔法だよ【侵食】ってな。殺すにも細心の注意を払わなきゃ……って、何考えてんだ俺ァ。冷静メイドは仲間だろォが。

「オカシイ。オカシイ？　はン、おかしいのはてめェらだろ。死は終わりだ。死は喪失だ。死とは安寧の暗闇に身を預ける唯一の手段だ。それを拒否して、それを利用して、それを見下すてめェらに、他者を否定する資格ァ無ェよ」

「……なら、黙って殺されろ、と？」

「お、なンだ。言いてェ事があンのか」

「他者を否定する資格、ですか。ええ、そこには同意します。魔法少女に他生物を否定する資格など無い。あれらは愚昧にして愚蒙なりし存在。同意します。同意します。ですが――お前にも、その資格はない」

光眼鏡の身体に、薄い膜のようなものが張られる。

……あれァ、【排析】か？　だが、球形じゃねェときた。元からそォいうのを使えたのか――あるいは。

中の化け物が、新しい使用法を編み出したか、だな。

「オ前ニモ、ソノ資格ハナイ。我ラノ足掻キハ、オ前等ニ阻マレタ所デ終ワリハシナイ！」（藍侠斗最後尾夜座頭・是阿伊豆葉阿歩止琉・藍歯符塔照有・）

「糸伊豆阿派青磁負不伏零矢堕千経度戸地内途・」（それは夜に捧げる一節の祈り）

纏った【排析】の厚みが、密度が増していく。世界を押し退け、解析する魔法。速いし、鋭い。避け切る事は難しいだろう。何より、その身に纏う【排析】が突然膨らむのだろうから。そういう戦い方をするのだろうから。

だから、避けない。

避けないで――掴む。

「藍出内沙米紫遠・」（私は救いを否定する）

死ぬ――死滅する、光眼鏡の魔法。

そのまま、深く、深く、深い所にまで【即死】を通す。

腕でもない。肩でもない。胸でも肋骨でも肺でも心臓でもない。

もっと奥の。

もっと中の。

もっと――大切な、もの。

「――見つけた」
死ね。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

24・藍宇恩斗有塔寝具初図阿美優邸符応簿井栖・

「殺し、た……の？」
「実力に拮抗が見えるのならば、隙を見せるのは愚策です」
「あっ、く――!?」
余所見をした銀バングルの眼前に、冷静メイドの姿があった。
強化を用いた踏み込み。からの、【白亜】より抜き出した腕を銀バングルの顔に巻き付けて、その【侵食】を解く。
元の【白亜】に戻った腕は、そうであるが故に【白亜】化できない。銀バングルの弱点はソレだ。自らが【白亜】で浸した物質で拘束されると、それ以上の干渉ができなくなる。そんな状況は滅多にないはずだが、まァ、相性が悪かったな。
そのまま銀バングルの身体を【白亜】から抜き出した髪の毛で拘束していく冷静メイド。
そっちから視線を外し、俺ァ――俺の腕にもたれかかる、物言わぬ肉体を見る。
「……魔力検知不可。ですが、心臓及び各器官は動いています。生命活動に支障は

来していません。ですが、梓・ライラック様。今のは……」
「ん―」
ふむ。
今の、ってな。なンだ？
昂揚感が抜けちまってる。なンだなンだ。えーと。俺今何した。つかなんかすげー笑ってた気がする。すっげェ楽しかった気がする。
光眼鏡の攻撃を、その【排析】ごと殺して――更なる【即死】を用いた。
だが、何に？　俺ァ何を殺した？
現にこうして、光眼鏡は生きてる。その精神とやらがどォなってンのかは知らないが、意識の無ェ様子で俺の腕の中にいる。
なら、命を奪ったってわけじゃァねェ。だが確実に【即死】は発動したはずだ。
「ライラック様。残府様も拘束いたしますので、その身体をいただけますか？」
「あァよ。……お前は、大丈夫か？」
「問題ありません。戦闘中においてはライラック様の方に異常性が見られましたが、ライラック様はご無事でしょうか？」

「異常性、ね。……あァ、なんぞ昂ってただけだ。今は落ち着いてる。魔力も……ンな減ってねェし」

「あれほど【即死】を連発しておいて、となると、とても効率的な魔力消費であった、という事ですね。訓練の成果なるものが出ているのだと判じます」

「……私もそォ思っとくよ。努力の成果だってな」

光眼鏡を冷静メイドに引き渡し、目の前でまた雁字搦めにされる光眼鏡。

ちょいと怖いのは、光眼鏡の【排析】ってな見えようが見えなかろうが関係なく使えるってトコだ。周囲の空間を押しやる【排析】なら、この拘束も解けちまう可能性がある。

……いや、大丈夫か。

その懸念は口にするまでもなく、そうならないことを俺は知っている。

「シエナ、冷静メイド。問題ねェんなら、先を急ごう。ここに虹色ロングがいなかったのがちょいと気になる」

「はい。問題ありません」

「私は戦闘に参加していませんので、異常ありません」

よし。

まァ、何が起きたのかはよくわかんねェけど。

多分大丈夫だろう、って確信がある。だから、大丈夫なんだろう。少なくともアレは死んだのだから。

下階へ繋がる階段を行く。

結構下ってきたが、どこまで下がるのかね。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

警戒を最大限にしたままその部屋に入って、初めにでた言葉は「は？」なんていう間の抜けたものだった。

「あれ、来たんだ。遅いよー」

「――虹色ロング。お前、一人か？」

「うん。だってオーレイア隊は私以外、みんな倒されちゃったんでしょ？　酷いよねー、五人で一つの隊なのに、二つと二つと一つに分けちゃったら、そりゃ実力

も発揮できないでしょ」
「……じゃあよ、それァ、なんだ」
「これ？」
俺が、指を差す。
虹色ロングが、肩を撫でる。
そこに、いた。
四人。一糸纏わぬ姿の、四人。
オーレイア隊の、今しがた倒してきた四人が、そこにいた。
「人形だよ。みんなのお人形さん。欲しいっていったら、作ってくれたんだー」
「そォかい。だが人形遊びにしちゃ、ちょいと悪趣味だな。服くらい着せてやったらどォだ」
「ディミトラは彫金師であって裁縫師じゃないから、作れないってさー。でも、このままでも十分でしょ。――だってみんな、キレイだし」
「本物の肉体は上階で捕まってるぜ。いいのか、助けに行かなくて」
「あれ？　もしかしてわかってないの？　上のみんなは偽物だよ。確かにカラダ

はみんなのだけど、中身は全く別。魔物とイチャイチャなんてしても楽しくないでしょ」

「何？」

まるで。

そんな、まるで。

自分は違ェ、みてェな言い方を。

「――私は裏切っただけだよ、梓」

「ひ、ぁ!?」

「あはは！　やっぱいい声で啼くよね、梓って！」

魔法少女の衣装の隙間から手を入れられて、胸を揉まれた。

いつの間に近づいた。いや、んなこたわかってる。

「ちょっと油断しすぎだよ……？　はむ」

「や、離れ」

「こっちこっち～！」

耳に息を吹きかけられて、耳を食まれて、それを振りほどこうと腕を振るえば、

軸足の太腿に舌を這わせられる。
悪寒が凄い。今までの敵にンなことしてくる奴ァいなかった。勿論味方にも。
つか、冷静メイドとシエナは何やってんだ。助けてくれたって。
「はい、捕まえたー」
「ひぃっ」
「ね、どう？　腕にも足にも身体にも、全然力が入らないでしょ。魔力回すのは無駄になっちゃうからやめた方が良いよ。そんなことしても逃れられないから」
「やめ、さわるな、ぁっ!?」
無様に捕まる。羽交い絞めのまま持ち上げられて、膝の上に乗せられて。その言葉の通り全身に力が入らなくなって、けれど感覚はそのままで——だから、腕を勝手に持ち上げられたり、胸を揉まれたり、腹を弄られたり首筋を舐められたり足をふにふにされたり。
もう、完璧に成すがままだ。【即死】は、ダメ。殺してしまう。
やばい。どうしよう。
助けてくれたっていいだろ、ふたりとも。

「無理無理。今二人はみんなと戦ってるからさ。ね、梓。ローグンさんとメイドさんがやられていくとこ、特等席で見ていようか」
「ん、ぅ……」
「ふふふ……赤ちゃんみたいでかわいい」
ようやく視界に、二人を捉えることができた。
ああ、本当だ。さっきのオーレイア隊の人形たちに寄って集られて、ふたりが苦戦している。何をしているんだろう。あれはただの人形なんだから、壊してもいいんだから、いつも通りの、本気で戦えばいいのに。
「ね、梓。今って捕まっちゃって、どうしようもない状況なんだよね。……だから、変身解いていいよ。実は変身するだけで、魔法少女の衣装を維持するだけで、少しずつ魔力って減っていくんだよ。ＥＤＥＮは供給源だから問題なかったけど」
「そう、なのか。……わかった」
言われた通り、変身を解く。
ＥＤＥＮの魔法少女は普段から変身しているけれど、冷静メイドみたいに好きな服装でいる……つまり、変身を解除して、普通に着飾っている子も多い。

俺はあんまりそういうの気にしないし、しなくていいと思ってたから、変身を解いた時に着ているものは。

「わ！　制服じゃん！　これ、梓の中学校の指定制服ってことだよね。へー、今の子こんな可愛いの着てるんだー」

そうだ。

一番フォーマルな服装を考えた時、学生なら学生らしい姿でいけばいいだろ、って。

ＥＤＥＮに上がる時、制服で行ったんだ。そっからそのまま、同じ。

魔法少女に変身している間、元の服は亜空間に行く、とか、そういう説明を受けたきがする。だから本当にあの日のままの制服だ。

俺が魔法少女になる前の。そのままの。

「くんくん。あ――あぁ、っは。これ。これこれ！　女子中学生の匂いがする……懐かしい～！」

「かぐなよ、へんたい……」

「おりょ？　随分と従順になったなって思ってたけど、まだそういう生意気言う

余裕あるんだ～？」

「んん……」

「ねぇ、前に言ったよね。生意気なコト言ったらさ――今度こそ本気で、躾けてやる、って。あれ、言ったっけ？　心の中で思っただけかも」

どんどん閉じて行く視界の隅で、二人が何かを叫んでいる様子が見える。

でも、聞こえない。甘ったるい……虹色ロングの声が、耳元で響いているから、何も聞こえない。あぁ、また胸を揉まれている。制服に手を突っ込んで。

でも、悪寒、も。もう覚えなくなってきた。

別にどうでもいい。何されても……別に。

うまく考えが纏まらないし。

なんだかすごく眠たいし。

身体がだるくて、虹色ロングの身体が、手足が――温かくて。

もういいや。

なにしにきたんだっけ、おれ。

「良い子、良い子。そうだよ。そうやって、もう何も抵抗しないでいてくれたら、

痛い事は何にもしないから。気持ちいいでしょ？　頭を弱くさせられるの。強化なんて無理矢理な手段で酷使されるより、ずっとずっと――気持ちいいでしょ」

「んにゅ……」

「うわ可愛い。今素で可愛いと思っちゃったよ口に出ちゃったよ。いいよ、眠って。いいこいいこ。梓は13歳だもんね。思春期は迎えたかもしれないけど、まだまだ育ち盛りだし、こんなに運動したら眠いよね」

「……ん」

「いいよ。お姉ちゃんがいいこいいこしてあげるから。私の温もりで、ゆっくり眠って。次起きた時には――全部終わってるからさ」

だめだ。だめな、はずだ。

わかんない。よくわかんない。なんでだめなんだっけ。

からだをおこせって、だれかがいっている。へんしんして、まりょくできょうかしろ、って。

なんで？

「大丈夫。大丈夫。梓のことは、私が守ってあげるから。偉かったね。良い子だっ

たね。ここまでよく頑張ったね」
ああ。偉かったのか。
良い子だったのか。俺は。頑張ったのか。
じゃあ。
「みんなは、もう」
「うん？」
「しなない？」
「――」
だって。
俺が頑張って、俺が何も悪い事をしていないのなら。
俺が俺を――そう、認め。もう何もかもを放り出すとするのなら。
もうみんなが死なない、って。そういう時の、はずだ。
「うん。勿論。みんな死なない。誰も死なない。怪我もしない。苦痛も負わない。
誰も――梓の傍から、離れて行かない」
「そっか。よかった。じゃあ」

その言葉が聞けたなら、安心だ。
安心して――。
「――死ね」
「ッ!?」
誰も死なねェなら。
殺しても、問題ねェってことだよな。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えけ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「あー。……ああ。あー。……か、かっかっか。はー。ははははいやキモすぎるだろさっきの私」
不快感を露に言う。
なんださっきの幼児退行。おいおい、お前43のおっさんだって忘れてねェか？
あァよ、確かに前世で風俗に行くことはあったさ。付き合いだのなんだので誘われることも別に珍しかなかった。だがそォいうプレイァお断りでな。俺ァノーマル

なんだよ。35過ぎた辺りから行くのもやめたしな。

はー。

はは。キッモ。キッショ。

若者言葉で罵るぞ。俺きめェよさっきのは流石に。なんだよ「んにゅ」って。おじさんが出していい声じゃねェって。

「あ、あぶなー。わかってるの？　私は別に魔物の精神体の入った肉体でも、私の精神体の入ったガーゴイルってわけでもないから……普通に死ぬよ？」

「あァよわかってる。ごめんな虹色ロング。悪ィことしたわ。みっともねェトコ見せたな。ちょいと己の頭カチ割りてェとこだが、んなこた言ってらんねェや。それと、煙草吸わせてもらうぜ。色々嫌なコト思い出しちまってイライラしてんだよ。魔煙草にイライラ鎮静する効果なんざねェけどさ」

魔煙草を起動し、吸う。

あー。これこれ。この不味さ。

そのまま、変身。いんやさ、この一瞬裸になるのどォにかなんねェのかね。まァさっきまでされてた事に比べりゃどォってこたないが。

不味いなァ。不味すぎて思考がクリアになる。はは、いやマジでさっきまでの俺キッショ。

「……ねー。さっきの可愛い梓に戻ってよ。そのちょっとカッコいい感じもいいけどさ、やっぱり見た目のまんまの可愛い方がお姉ちゃん好きだなー」

「あァさソイツァ悪いな。私ァ乳幼児の頃からこんなんだ、かわい子ぶりっ子の仕方なんざ知らねェのさ」

「また生意気な口利いて……こうしてやる！」

虹色ロングが近づいてくる。

歩くよりは早い速度だが、何の強化も乗ってねェ小走りで。

だから、それをひょいと躱した。

「あれ？」

「はっはっは。お前、何やってんだ？　そんな遅ェ攻撃あたるワケねェだろ。いやさ、今の攻撃だったのか？」

「……【弱化】」

「なんだよ。いきなり魔法名なんざ言って、どォした？」

「え、なんで？　なんで魔法が発動しないの？　……もしかして、反魔鉱石か何か持ってる？」
「持ってたら変身できねェだろアホか」
その後も何度も「【弱化】」「【弱化】！」と魔法名を言う虹色ロング。
けど、その魔法が発動する事は無い。あんまりにも滑稽な姿にさしもの俺も同情するってモンだ。
たとえ相手が、化け物でもよ。
「呑まれちまったな、お前。忘れちまったんだろ。自分が化け物だった頃の記憶。虹色ロングの思考っつか思想か？　わかんねェけど、その記憶が強すぎて、毒々しすぎて、自分が化け物として生きてきた頃の記憶全部塗りつぶされちまってんだろ。ははは、その上で虹色ロングの事を知らな過ぎたな、お前」
「な、何言ってるの？　私は本物だよ。本物の結・グランセ！」
再度――今度は攻撃としてだろう、掴みかかってくる虹色ロング。
その攻撃を、強化するまでもなく見て避ける。
あァ。いやはや、まだ馴染んでねェってな事ァ委員長に言ったが、その通りなん

だろう。馴染んでねェのさ。今の今まで――ソイツらは、魔力なんて使ってこなかったのだから。

「馬鹿が。D級魔法少女がそんな何度も何度もポンポン魔法連発できるワケねーだろ。魔力量増やしてからモノ言えや」

「――う!?」

身体を強化して、虹色ロングに馬乗りになる。

じたばたと抵抗する虹色ロング。こちらを睨んでは【弱化】を使おうとしているが、発動しない。

「おい、冷静メイド！　シエナ！　それァマジの人形だ！　中身もアイツらじゃねェ――ぶっ壊していいぞ！」

「承知」

「了解いたしました！」

魔煙草を吸う。

なんで壊さなかったか、って？　ンなの簡単だ。確証持てなかったからだろ。俺がアイツらに怪我してほしくないだの殺したくないだの言ってたから、万が一を考

えて防戦一方だったんだ。助けてくれたっていい？　馬鹿言え、自分が防戦一方で相手を傷つけられねェってのに、明らかに【弱化】かけられてる俺を人質に取られた状態で突っ込んでこられるワケねェだろ。

敵は俺の事を殺さねェ。だが、殺さねェだけだ。手足の一本や二本はヤってた可能性も十分にある。そんな愚策を二人は取らねェよ。あとはまァ、冷静メイドは経験で、シエナは魔力感知で気付いていただろォからな。虹色ロングの魔力量について、なんざ。

「破壊します」

「両腕解放。格納鋼管杭射出。打込確認。圧力上昇――粉砕します！」

部屋の奥、四つの銅像が砕け散る。

二つは全身を骨やら腕やらに変えられ形を保てなくなり、もう二つは内部からの巨大な圧力によって粉砕した。

……やっぱり、シエナの武装は攻撃力高すぎの類ね。理解理解。

「続けてで悪ィが、コイツの拘束もたのまァ」

「問題ありません」

抑えつけたままの虹色ロング。はン、こうやってみると、マジに少女だな。
女の子に馬乗りになるだの力でどうこうするだのってな嫌いだが、何もできねェでちィと涙目にすらなってるのを見ると、今の今までされてた分の仕返しみてェな嗜虐心が湧いて……来たりはしねェや。やっぱダメだな。女性、までいかねェと、少女にゃそそらねェや。
「拘束します」
「あァさ」
退く。
直後早業で雁字搦めにされる虹色ロング。
よし。
「これで、とりあえず肉体は全員押さえたな」
「はい。魔力は大丈夫ですか？」
「あァよ、問題ねェ。お前らは……大丈夫、か？」
「私は問題ありませんが、シエナさんの装甲が一部陥没してしまっているように見受けられます」

「作戦続行に支障をきたすほどのものではありません。進みましょう」
「……やばくなったら、言えよ。マッドチビや、あるいはお前の考え方にもし、≫壊れても直せるから≪、なんてのがあンなら即座に捨てろ。今のお前はお前しかいねェよ。いいな？」
「ありがとうございます」
はン、そこで礼を言えるってな、ロボットだのアンドロイドじゃなく、一端の人間だわな。
あァ。
……いや、今思い返してもきめェなァ、さっきの俺。魔煙草君さ、もっと脳クリアにして都合よく忘れさせてくれないか？
「ライラック様。進む前に、申しあげておきたい事があります」
「ん？　どォした、冷静メイド。んな改まって」
神妙な顔で。
「――先ほどのライラック様はとても可愛らしかったので、会話や仕草の逐一をキリバチ様に報告させていただきます。ご了承ください」

「了承するワケねェだろボケ」
からかってきてんじゃねェよ。まだ敵地だぞ、オイ。
……やめろよ？

遠《ｔｅｘｔ:s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

進む。進む。
階段を下っていく。
「……この辺、確か浅い海だったよな。水平方向の距離を加味しても……」
「はい。海底よりは既に下です。位置も、クルメーナからはかなり離れています」
「となると、ちょいとおかしいな。過激無口は上と下、つってた。強敵らしいモンがいンのはそこだ、って。だが、この階段の先がそォでないなら、クルメーナの下にいたっつゥやべー敵ってな、なんだ？」
「少なくとも主ディミトラの蘇生槽のある場所へ続く階段はここで間違いありません。故に、島の下、となると、何か、別のものであると推測できます」

「確かクルメーナってな人工島なンだよな？　元はここに何があったのか、とか知らねェのか？」

「……申し訳ありません。主ディミトラに教えられた知識の中に、その答えは無いようです」

「謝らなくてもいいけどよ。冷静メイドはなんか知らねェか？」

「ふむ。事実を知っている、というわけではありませんが、推測は可能です。聞きますか？」

「あァよ、頼む」

階段は先が長い。奥が見えねェくらい長い。

壁についた燭台がなんとか視界を保っちゃいるが、その明かりも揺らめくせいでどこかおどろおどろしい。魔法少女だから問題はねェが、人間ならちょいと寒いくらいの温度にもなってきてる。

なんか。

冥界にでも、向かっている、みたいな。

「そも、ライラック様は、ＥＤＥＮにおける魔法少女がどうして変身し続けていら

れるのか。そしてあの浮遊島が、何故浮き続けていられるのかをご存知でしょうか」
「なンかさっき聞いたな。ＥＤＥＮは供給源だから、って」
「その通りです。魔力とは己が内にあり、己が内より出でて、己にのみ扱い得るもの。ですが、魔法少女は死と蘇生を通し、その身体をＥＤＥＮに巡らせます。つまり、魔力を含んだ肉体をＥＤＥＮの蘇生槽で作っているのです。己が内にあり、己が内より出でて、己の身に扱い得るものであるはずの魔力を、ＥＤＥＮは作り得る。それが何故か、わかりますか」
「……なるほど。それが供給源って奴か。あそこは……なんぞか、魔力の放出する地点か何かなのかね」
「逆ですが、考えは間違っていません。ＥＤＥＮ及び我が国は、世界にある僅かな魔力吸入点に存在しています。ＥＤＥＮはその吸入点の中でももっとも大きなもの。あるいは、過去において終の因と呼ばれていた迷宮であるが故のもの。古い言葉ではこれを地脈点と呼び、世界に満ちる魔力が大地へ帰っていくための場所、とされています」
　その言葉も、あの迷宮の主から聞いた。

終の因。あの迷宮の名前。字面だけで見りゃ、確かに終わりの集まりそぉな場所だ。

「それが、ここにもあると？」

「はい。ディミトラ様がここに人工島を作り上げた理由。蘇生槽の稼働のために必要であったから、小さな地脈点を見つけ、そこに島を作り上げた。蘇生槽そのものの製法を私は知りませんが、ここを島にした理由はそれであると思われます」

「ふむ」

吸入点と、供給源。

意味合いとしちゃ真逆だが、ＥＤＥＮやこの島に魔力の吸入を阻害し、受け止める、みてェな力があンなら話は別だ。要は充電池か。バカでけェ充電池が常に充電されてて、俺達魔法少女の変身維持や蘇生にソイツが使われている、と。

……そぉなると、偽マッドチビの言ってた叛逆って言葉もちっとばかし意味が出てくるな。

なンでアイツが言ったのかってなともかくとして、例えば化け物が世界の意思だの云々で、勝手に使われてる、あるいは阻害されてるからＥＤＥＮを壊してェ、み

てェな。

いや、だとしても叛逆なんて言葉は使わないか。……ん―。

「あ？　待て、じゃあなンだ。ちょいとおかしいだろ。私達が向かう先ァ、人工島の真下じゃねェんだよ。過激無口が言った上と下の下にそれがあって、そこになんかやべーのがいるとして、じゃァなんでマッドチビは一切関係ないとこに蘇生槽作ったんだ。蘇生にァその地脈点っつーのが必要なンだろ？」

「加え、ディミトラ様は別の島でも蘇生を可能としています。それらを考えるに」

「あのマッドチビ、まだ何か隠してやがんな？」

そもそも化け物の精神体化なんつーやべェ技術を作り上げたマッドチビなんだ。たかだか５００年でこんな高性能なアンドロイドを作っちまうマッドチビだ。地脈点とやらのことを知らねェはずもねェし、観測する手段も持ってるはず。

「シエナ。あっちの島ってな、どれくらい昔に使われてたモンなんだ。マッドチビの試作品が置いてあったっていうくらいだ、ちったァ使ってた場所なんだろ」

「申し訳ありません。私が作られたのはごく最近であるため、あまり多くの知識はございません。その上、主ディミトラについてを窺う、という機会はほぼなかった

ので……」

「あー、そぉか。わざわざ聞かねぇか、自分の親のことなんて。それに、すぐ調査に出されたんだもンな。いや、いや。謝る必要は無ェよ。大丈夫だ」

そぉだったそぉだった。シエナは最近作られたんだ。マッドチビの、【鉱水】を用いない技術の結晶。だからそこまで多くを知らなくても無理はない。なンだ、コンピューターだのデータベースだのを使ってカタカタカタカタ知識を入力した、ってワケでも無さそうだからな。

おじさん機械工学だのITだのには疎いからあんま詳しい事言えねぇけど、あの部屋にァそぉいった電子機器は無かったように思う。電力自体があんま発展してねぇんだけどさ、この世界。通話端末とかはあるものの。

「この通路が蘇生槽への道ってな、間違い無ェんだよな？」

「主ディミトラより齎された情報を信じるのであれば、です」

「いや、いいよ。つれェだろ、創造主を疑うってなよ。信じるさ。あァ、もう余計なことは言わねェ。どの道引き返したって意味はねェしな。一本道だ。とりあえず進むしかねェさ」

「ありがとうございます」
話しながら歩いている間に。
よぉやく、見えてきたしな。
扉。
恐らくは――偽マッドチビのいる、部屋。
海底より深い、寒々しい地下のこの場所に。
果たして何が待ち受けているのやら、ってな。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

24. 藍宇恩斗有塔寝具初図阿美優邸符応簿井栖.

七、漂流編

25・是阿伊豆乃伊豆是阿・

そこは。

広く、広い空間だった。

海の下にあるとは思えない程に広い空間。明かりが無いため天井は見えない。ただ、横の広さはわかる。

だって。

「あれ、来たんだ。どうだった？　仲間と戦う、みたいな趣向。結構苦戦した？」

「はン、何言ってんだお前。中身化け物のアイツらが仲間？　馬鹿言え、敵だろ」

「気付いたんだ、っていうか、もっと人間っぽい動きしないとバレるって言ったのに、聞かなかったとかその辺？」

「あァよ。普通に獣みてェな動きで攻撃してきたぜ。教育はちゃんとしとけよ、そォ

いう作戦取んならよ」
「あちゃー。ま、いいんだけどね。あんまりおもしろくない魔法だったし、どの道、アンタの事だから殺さなかっただろうし。あ、殺せない、が正しいんだっけ？」
「煽りにしちゃ弱ェな。又聞きの情報じゃ意味は無ェぞ。もっとちゃんと、体感してからにしろよ」
「アンタの事は私が直々に処理してあげるから、待ってなさい。ま、この子達を退けられたら、だけどね」
それは、巨大だった。
ただただ、巨大だった。
巨大な――あー。ここまで描写しといてなンだが。
「なんだ、これァ」
「え、わかんない？」
「……ヒ、ト……？　いやでも翼あるしな。顔は……牛っぽいが、手足はヒト……にしちゃ、いっぱいありすぎるが。えー。あー。……ん―？」
「わかりなさいよ!!　ドラゴンよ！　ド・ラ・ゴ・ン！　どう見てもドラゴンで

しょ!?」

「……ドラゴン？　どこが？　つか、何が？」

牛みてェな顔で、手が四本で、足も四本で、上体は起きてて、翼があって、尾は無くて。

何がドラゴンなんだ、これの。

いんやさ、俺だって知ってるよ、ドラゴンくらい。色々あるって知ってるよ。なんぞ色々な形があるって知ってるよ？

これは、無かったなァ。少なくとも俺ァ見た事ねェや。

「何よ！　それは、もしかして、それは、私に……この天才彫金師ディミトラに！」

「センスというものが見受けられませんね。姉の粘土細工の方がまだ褒められるでしょう」

「――～～～!?!?」

「なンだ、あの怒り顔……リヴィルだっけか。あいつァそんなに≫酷ェ≪のか」

「それはもう。絵を描けば呪符と言われ、造形をすれば邪教崇拝と罵られ、歌を歌えば聞く者の耳を破壊し、音を奏でたのなら悲鳴にしか聞こえない……凡そ芸術と

いう方面における最下層。それが私の姉です」
「で、アレがそれ以下？」
「アレをドラゴン種であるというのならば、です。他の……えー。……前衛的芸術であるというのならば、姉にも勝り得るでしょう」
冷静メイドが言い淀むなんて珍しい事もあったモンだ。
シエナはなんぞ冷静に分析してくれているみたいだが、俺達はもうなんかほんわかしちまって。
鼻を鳴らす。
「なァこれなんて魔法なンだ？　最初に屋敷に来た時もかけてきたよな。この、警戒心だのなんだのを無くす魔法。【弱化】に似てるが、流石にここまで露骨なら気付くぞ」
「……【宥和】よ。D級もいいところな魔法。もう効かなそうだから言うけど、正直借りた時はあんまり役に立つと思ってなかったわ。オーレイア隊のコ達にはとっても有効だったから驚いたわ」
「借りた、ね」

近くに魔法少女の姿はないように思う。
化け物の入った肉体、ってなが近くになくて、その上でそれを使い、貸し借りできると。
まだ知らねェことがあンなァこりゃ。マッドチビも隠してる事がありそォだ。
「ま、アンタたちに私の天才的な芸術を理解できるとは思ってないし。――何より、ここで終わるんだから、どうでもいいわよね」
「【鉱水】は使わねェのか？」
「使ったらアンタたちに勝ち目が無くなっちゃうじゃない。私は優しいのよ。淑女なの。だから、勝ち筋くらいは残してあげる。――さぁ、起きなさい！　そして、この塵芥共を――殺せ、ドラゴン！」
上の方。
一対五つの目が光る。ビコーンて。
そして――凄まじい音を立てながら、それらは動き出した。
未だ正しい形容の言葉の見つからねェ、巨大なもの。
偽マッドチビ曰くドラゴン。

その――ガーゴイル。
「行っけぇえええ！」
それが、五体いっぺんに命を吹き込まれたのだ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「冷静メイド、あの規模のモンの【侵食】ァ、どんくらい時間がかかる？」
「少なくとも触れている間に殺されてしまう可能性が高いですね。それに、この魔力は」
「高密度魔力反応を検知！　身体強化による蹴撃を観測！　避けて！」
「ライラック様、失礼いたします」
「うおっ!?」
背面の噴射機構を解放したシエナが宙へ浮かぶと同時、冷静メイドが俺の身体を担ぎ上げて、大きく跳躍をする。
そこに――巨大質量の蹴りが突き込まれた。

「や、べェな。ありゃ」
「何がどうドラゴンなのかは未だ理解に及びませんが、脅威度はSSに届くと推測されます」
「あァ……冷静メイド、横だ！」
「――ッ、ぐ、ぅ！」
咄嗟に俺を抱き込んだ冷静メイドの身を、巨大な平手打ちが打撃する。
そのままぶっ飛ばされる俺達。
いやさ、空中でシエナがキャッチしてくれた。ありがてェ。
「大丈夫ですか!?」
「あァ、私ァ大丈夫だが」
「問題、ありません。単なる脱臼です。ッ、今、嵌めました」
痛ェ音がして、冷静メイドの不自然な形になってた肩が戻る。
前世でバイクで大コケした時に脱臼した事あるけど、あれマジで痛いんだよな。
「すまねェ、私を守って……」
「護衛、ですので。それより、私では機動力に劣ります。シエナ様、ライラック様

を運搬しながらの戦闘は可能ですか？」
「腕部武装を使用しなければ可能です」
「では、お願いいたします」
渡される。
……あー、クソ。部分強化がモノになったからって、魔力量がガツンと増えたわけじゃァねェ。俺もみんなみてェにぴょんぴょん跳ねられたら、こんなおんぶ抱っこじゃなくて済むんだが。
「ライラック様の命を最優先にお願いいたします。ですが、彼女の指示には従ってください。たとえそれが、ライラック様の命を脅かしかねないものであっても。ライラック様は、時に私達より視野を広くとる事が出来ますので」
「わかりました」
「――来るぞ！　突進だ！」
シエナの噴射口から物凄い熱が放たれる。冷静メイドが落ちる。落ちながら壁沿い横幅はわからないが、入り口側の壁があるに――そこに【侵食】による足場を作りながら、駆けて行く。

大丈夫そぉだ。あっちは歴戦だしな。

ちょいと怖いのは魔力量だが、やばくなったら言うだろ。言ったらフリューリ草と魔煙草をプレゼントしてやる。煎じ茶もまだあるしな。

「シエナ、ちょいと距離取れるか？　あんまり速度はつけなくていい、冷静メイドとは反対側に。この空間がどンだけ広いのか知りてェのと、あの仮称ドラゴンについて観察したい」

「わかりました」

飛ぶ。飛ぶ。

疑似飛行魔法、とか言ってたっけ。なるほど、よくこうも自由自在に飛べるものだ。

石像の伸ばしてくる腕も突き出してくる拳も避けて、どんどん距離を取っていく。

さて。

まァ、観察してェとは言ったが、多分あン中入ってンのァオーレイア隊の面々だろう。他は知らんが、さっき突進してきたのァ確実に過激無口。姿勢がそぉっぽかったからな。いんやさ仮称ドラゴンの姿勢なんざ知らねェが。

しかし、どォするか、だな。
とりあえずSRは持ってる。虹色ロングが俺を【弱化】させた時に奪ってこなかったのは幸いだ。今までの戦闘でも一回も使ってない。安藤さんトコで直してもらっといて良かった。
シエナには一旦降りてもらって、と。
スコープを覗いて――とりあえず、目を狙って射撃。
ガーゴイルの弱点なんざ【即死】の前には全身だとァ思うんだが、あれほど巨大となると材質が分かり難い。少なくとも拳銃じゃ無理そォだなって所感。
んなことツラツラ考えながら撃ったSRの弾は――カン、なんて軽い音ともに、弾かれちまった。
ガーゴイルは健在。
つまり、迷宮での大蛇と同じくめり込んですらいねェってこった。
……いや待てよ？
「シエナ、さっき出してた杭。アレってな、何度でも使えるモンか？」
「冷却に時間を要しますが、可能です。ですが、私の杭を打ち込んだ所で、あれほ

ど巨大なものを粉砕する事は不可能でしょう」
「いんやさ、穴ァ空けるだけでいいんだ」
「それであれば可能です。ただ、杭打機は両腕武装であるため」
「私を抱えながらはできねェってこったろ。いいよ、ここに置いていってくれ。んで、冷静メイドにも伝えてくれ。倒さなくていいから、穴だらけにしてほしいってよ」
「わかりました。ですが、あれらガーゴイルが梓・ライラック様を狙わないとは限りません。その場合、私が遠くにいると」
「それも大丈夫だ。私を信じろ、シエナ」
「……わかりました。では、行って参ります」
シュゴーっと噴射音を上げて飛んでいくシエナに、さァてと魔煙草を吸いながら考える。
いやさ、何にも大丈夫じゃねェからな。さっき冷静メイドの言った、俺の命を脅かさんとする指示であっても聞け、っつーのを利用しただけだ。
狙われたらキツい。が、まァ無策ってこともねェ。

「狙うは指揮官。指揮官の不在は陣形の乱れを表す……ってな」

スコープを覗く。

特に何をするでもなく、「行けー！」とか「潰しちゃえ！」とか言ってる偽マッドチビが映る。いんやさ声は聞こえねェんだが、雰囲気だ雰囲気。

あれを、撃ちぬけば。

……どォにかなりそォではある。

「問題は、私にァアイツを殺せねェってトコだな。……マッドチビの身体。殺すワケにゃいかねェだろ」

事態の緊急性。あァ理解してる。今まさに冷静メイドとシエナが頑張ってくれてンだ。早くどォにかしてやるべきだと思う。今回の状況ってな前の時とは違う。撃つのは正体不明の魔法少女じゃなく、その中身が偽物だってわかってる肉体だ。

なんなら本物は仮初の肉体を有し、他の島にいると来た。

だから、殺しても、殺したってことにはならねェはずだ。強いて言うなら壊したであって、殺した、じゃねェ。外のガーゴイルにしてきたように、その入れ物を壊すってだけ。

だけ、だってのに。
「っとに、ダメだな私ァ」
苦笑いも出る。
クソが。敵も殺せねェのに戦場に出てくんじゃねェよ。邪魔だろォが。
撃つ。
シエナの開けた穴に、SRの弾が吸い込まれる。
そしてソレは着弾と同時に真っ黒な煌めきを発し、ソレを殺した。
……弾丸一発に含有される魔力じゃ、部位一つで限界か。
ガーゴイルの一体がこっちを向く。今まさに腕を殺された奴だ。
やっべー。
「だが、やっぱりいい仕事すンなァ、冷静メイドは」
距離ゆえにのっしのっしと向かってくるように見えるソレも、近付けば速いんだろう。その面積を考えるに、俺じゃ避けられないほどデカいんだろう。
だが、あァ――いい目印だ。
あンまり撃ちたかねェ色だけどよ。見えてるぜ――足についた、無数の肌色が！

「そら、食らえ」

二発撃つ。逃げずに、伏せた姿勢で。SRの銃口から放たれたその弾は、丁度ガーゴイルが地を捉えるタイミングで、その肌色の部分に突き刺さった。

……あー。SR撃つ時にちょいと部分強化をしてみたんだが、これァ実戦でいきなり使うモンじゃねェな。こーいうのも訓練しておくべきだった。計算速度は格段に上がったが、銃もつ感覚に齟齬があった。光で目も痛ければ音で耳も痛い。ちったァ考えろよ、ってな。視野が広い？　馬鹿いえ、俺ァ咄嗟の場合に頭が回るってだけだ。こォいう自分達からどォにかしてく、みてェな時ァ割と無策だぞ俺ァ。

「だが、効くな。なら簡単だ」

四つの足の内、一本に一切の力が入らなくなったためだろう、大きくバランスを崩した仮称ドラゴンは、柱に激突した。

あそこ、柱なんかあったのか。暗くて見えてなかった。

激突したガーゴイルの翼。そこにも肌色の目印がある。いいね、見やすい。人体撃ってるみたいで嫌ではあるが、流石に俺も肌のみのものを命だとは捉えねェ。そ

れくらいの弁えはある。
射撃。翼から力が抜ける。はは、戦えるじゃないか。
――全身強化。SRを持っていくのは無理だ。諦めろ。諦めて駆け抜けろ！
「ライラック様！」
「避けて！」
避けた。
上空から降ってきた巨大質量を、なんとか避けた。足の間に挟まって、だが。
あーあー。
調子に乗ったらすぐこれだ。折角直してもらった相棒が一瞬でオシャカになっちまったよ。どォしてくれンだ。アンヴァルだっけ？　あの獅子の化け物を殺す時にァあんなにカッコつけて別れたってのに、二代目は別れを言う暇も無かった。
……どォしてくれんだっつってんだよ、オイ。
拳銃で撃つ。肌色の目印と、粉砕の痕跡。
義手故二丁拳銃ができねェのが悔やまれる。まァどうだっていい。片手で撃てば問題は無い。軽く強化をして、一発も外さなければ問題ない。

四発だ。降ってきた奴の足全部。
ンなことすりゃ当然……あァ、足の間に挟まって難を逃れた俺ァ、体重を支えられずに崩れ落ちるガーゴイルに押しつぶされちまうワケだが。
その寸前で、シエナに運び出された。
「助かった」
「梓・ライラック様。貴女の〝大丈夫〟が〝何も大丈夫ではない〟ことの意であると理解しました」
「バレたか」
舌を出す。
……いやオイ、なんだそのキモい仕草は。おじさんだぞお前は。忘れるなよ。可愛い13歳の女の子じゃねェんだぞ。
「シエナ。粉砕はもういいからよ、冷静メイドのつけた目印と、お前の壊した所に私を連れて行ってくれ。全部撃ち抜いてやる」
「わかりました」
再度、抱っこスタイルで行く。

いやさ、姫抱きじゃねェのは新鮮だよな。はは。
……何がはは、だ。普通だろォよそれが。
「行きます！」
「あァさ」
なンか、ちょいと。
昂揚感たァ違ェ何かが、キてんな。おい。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「そん、な」
「あァ。勝ち筋、だったか。ありがとうよ。使わせてもらったよ」
数十分後。
そこには、ガラクタになったガーゴイルの群れが転がっていた。中にアイツらが入ってるっぽいからといって、特に関係はない。でけェ高位ゴーレムでしかない。

ガーゴイル殺したって中の精神体にァ影響ないって言われてるしな。
「う、嘘よ！　なんで!?　私の最高傑作たちが負けるわけないのに！」
「単純に造形ミスだろ。四つ足のくせに上体が起きてて、足の下は自身の死角になる。でけェ翼はでけェだけだ。長時間飛んでるってなできねェから、跳躍時に使うくらいしかない。それもまた自分の死角になる。牛の顔は正解かね。全部が全部猪突猛進だ。ま、魔法を使えねェから仕方ねえ。身体強化しかできねェんじゃ突っ込むしか択は無い。アイツらを中に入れた意味がまるで無ェのさ」
「うぅ、うぅう！」
どこか底冷えする感覚に襲われている。
笑いなんて起きない。ただ何か、冷たい怒りがある。
「で――でも、私には【鉱水】がある！　いいわ、アンタ達三人共纏めて相手してあげ、」
「まァ待てよ、偽マッドチビ」
「え、ぁ、ぐっ!?」
きゃいのきゃいの喚く偽マッドチビに近づいて、その首を掴む。

首。首だ。そこを圧迫されて苦しそうに顔を歪める偽マッドチビ。
苦しそうに。
苦し、そう、に？
……なァ。なァ。
「――お前、誰だ」
「は、ぁ……？　きま、てるでしょ、わたし、ぁ、てんさい……うぅっ!?」
「そんな都合のいい話が、あるか？」
「きゃっ!?　ぅ――けほ、けほっ！　ぅ、あ」
放す。
捨てる。
待て。
待て。
待て！
「ガーゴイル殺しても、中の精神体が死ぬわけじゃねェ、だと？　そんな――そんな、都合のいい、とってつけたような話、あるか？」

「ライラック様……？」
「私達を逃がさねェと、捕えるためにって構えてたのが、こんなゴミみてェな……数十分かけりゃ倒せる石ころだけってこと、あるか？」
「梓・ライラック様、如何されま」
「待て。ちょっと待て。待てよ。おい。ここに無いぞ。蘇生槽。マッドチビの蘇生槽なんざ、ここにはないぞ!?」
「ッ――――！」
シエナが周囲を見渡す。冷静メイドもそうだ。
ここにある、って。言ったよな。
だがその反応、シエナが騙してたってワケじゃァねェだろ。
探せど、探せど。
ないんだ。どんなセンサーで探しても、この階に、ここに蘇生槽なんざなくて。
さらに下へ行く階段なんかも無ければ――ここには、何も無い。
「おい、お前！」
「ぅ、ぅう！　な、何よ！　くそ、見てなさい。今すぐアンタ達なんて【鉱水】

で殺してやるんだから」
「お前、いつからお前だ？　お前はいつ、ディミトラになった？」
「何、言ってるのよ、さっきから！　私は天才彫金師ディミトラ本人だって言ってるでしょ!?」
「ありえねェだろ。なンで魔法を使える肉体の方を先に配置した？　なンでこんなゴミみてェな石像に精神体を入れた？　なンで、なんだってこんな――回りくどいことを、コイツはした？」
――ふと、頬に。
水が落ちる。
涙？
「ッ、梓・ライラック様！　早くこちらへ――崩壊します！」
「あァ――間に合わねェよ、流石にな」
潮の匂いのする、その液体は。
直後、轟音と共に――すべてが降ってきた。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

人工島クルメーナの崩壊。
その報せがＥＤＥＮに届けられたのは、崩壊から五日経った日の夜だった。
遠征組調査班オーレイア隊は蘇生していない。魔法【即死】の使い手、梓・ライラックは近海域を捜索するも、見つからなかったとの報告が上がった。
報告者は梓・ライラックと共にオーレイア隊に同行したＢ級魔法少女、コーネリアス・ローグン。
彼女が状況証拠として持ち帰ったのは、シエナと名乗る人型のガーゴイル一体。及び。
梓・ライラックの愛用拳銃二丁。
近くの島に打ちあがっていたソレは、けれど持ち主の居場所を知らせるものではなく。
ただ――遺品として。
ＥＤＥＮ中央部は、彼女の捜索の打ち切り、及び敵対者に関する今後の対策会議

を開くものとして、処理した。
この事件は、長らく不変であったＥＤＥＮを揺るがす未曽有の事態の始まり――。
その序章を告げる鐘として、後の世に語られることになる。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「みてェな事言われてると思うんだが、どォだいね」
「知らないわよ、そんなこと……」
ざざぁん、ざざぁんと波の音が心地いい砂浜。
太陽燦々カンカン照りの、絶好のバカンス日和って奴だ。
状況が最悪じゃなけりゃ、な。

「なァよ、ここどこだと思う？」
「……クルメーナ近海じゃないのは確かよ。私はこの辺りにずっと住んでいるから、詳しいの。その私をして言わせてもらうけれど、こんな島も、こんな環境も見たことはない」
「使えねェチビってことで」
「アンタも一緒でしょ……」
絶海の孤島、ってわけじゃない。
諸島って感じの場所だ。透明度の高い浅い海が広がり、真っ白い砂が結構な距離まで続く。背の高ェ奴なら泳がずにも歩けるんじゃねェかって程度の深さが、周辺諸島の諸々に繋がってる。
島々自体は結構高い。切り立った崖を持つものも少なくは無いし、登るってなったらちとキツいモンがある。
何より――。
「なァ、あの化け物さ、何だと思う？」
「……既存の種ではない事は確かね。バット種に似た薄い皮膜。足はバード系、顔

は……一応バード系かしら。でも、あんなのは見た事が無いわ」
「そぉかい。私ァ知ってんだけどな、あれの名前」
「そうなの？　なら教えなさいよ。ＥＤＥＮの魔法少女だけが知っているとなると、北方の魔物なのかしら」
「いんやさ」
ぎゃいぎゃいと煩いそれ。
こっちにァ気付いていないが――多分、マッドチビの想定の10倍くらいはでけェソレ。
「プテラノドン、っつーんだけどな。私の知識通りなら――云千万と昔に滅びた化け物さ」
「なにそれ。なんでそんなのＥＤＥＮに記録されてんのよ」
「さてな、っと」
砂を払って、立ち上がる。
拳銃は無くした。ホルダーごとどっかいっちまった。太腿だの腕だのに巻き付けてある弾丸は生きてるんで遠隔に一切対応できねェってこたねェが、パワーダウン

も大概にしろって感じだ。
　反対に魔煙草、フリューリ草、フリューリ草の煎茶は全部無事。まァ水筒は肩にかけてたし、魔煙草とフリューリ草も全身の至る所に隠してあるからな。そォ簡単にァ流されねェ。魔煙草が湿気ちまったのァ痛い。別に湿気てても起動はできるんだが、単純に不味さが増す。
「あ、ちょっと。どこいくのよ」
「決まってんだろ。とりあえずどォすっか考えるために散歩に行くんだよ」
「何がどう決まってるのよ……。あ、待って、私も行く！」
ちょこちょこついてくるマッドチビ。
……あァ、そうだ。
もうわかってる。
こっちが、本物だ。
「そいやよ、【鉱水】は使えるのか、お前」
「ええ、使えるわ。ほら」
砂浜にあった中くらいの石を触るマッドチビ。

途端、それは石色の液体になり、マッドチビの周辺をぐるぐる渦巻いたり、さっきのプテラノドンの形を作ったりする。ヘェ、模造は上手ェんだな。
「……一つ、聞きてェ」
「なによ」
「あのガーゴイルに入ってたオーレイア隊の面々ってな、どォなったんだ」
「死んだわ。アンタが殺したんじゃない」
「……そォ、だな」
殺したか。
殺したんだ。
ガーゴイルに入れられた精神体が、ガーゴイルを【即死】させられても死なねェ、ってのは。
ま、嘘だった、ってわけだ。
「んじゃ、オーレイア隊はＥＤＥＮに還ってるのか？」
「肉体は死んでいないから、今頃意思の無い魔力としてどこかを彷徨ってるんじゃない？　ちぇ、勿体ない。魔力を十全に扱える精神体なんて魔法少女くらいから

しか抽出できないのに」

「肉体に興味無ェなら、なンであんなことしたンだ。化け物の精神体入れて、記憶を混ぜて、戦わせるってなよ、何の意図があった」

「別に、仲間の姿をしてたら油断するかなと思っただけよ。アンタの【即死】が欲しいってのは注文主からの要望だもの。反魔鉱石は持っていかれちゃったから、仕方なく他の手段でアンタを捕えようと頑張ってたのよ」

「持っていかれちゃった？」

「注文主にね。持って行かないでー、って言ったんだけど、聞く耳持たずって感じだったわ。一度受けた依頼は完遂するのが私の信条だけど、工房のモノ盗まれてはいそうですか、になる私じゃない。次に来たら本気で捕まえる気だったんだけど、先にアンタ達が来ちゃって目論見ガラガラ。とりあえずアンタさえ捕まえておけば、反魔鉱石も返してくれるかなって」

「行き当たりばったりが過ぎる上に目的も手段も入れ子構造になってんな」

賢そォだったマッドチビが偽物で、このアホみてェなマッドチビが本物ってな、無情なモンだな。

……はァ。

「オーレイア隊の面々を戻すにァ、どうすりゃいいんだ」

「肉体が死ねば、ＥＤＥＮに還るでしょ。クルメーナが今どうなっているのかわからないし、アンタ達があのコ達をどうやって無力化してきたのかは知らないけど、精神体が死んだ以上、もう肉体がどうだとしても、どうなったとしても、蘇生槽以外での蘇生は不可能よ」

「そォかい」

「あるいは、注文主に回収されちゃったかもしれないけど」

「……狼の化け物を引き連れた魔法少女。青髪の魔法少女が、注文主、ってなことで合ってンのか」

「合ってるわ。名前はルルゥ・ガル。何の魔法を使うのかは定かじゃないわ」

ルルゥ・ガル。

あァそォかい。それじゃァエデンで聞いても誰も知らねェはずだよ。

ソイツがそォなら、じゃあ安藤さんはなんなんだ。なんでアイツの名を知ってた？

「付き合いはどれくらいなンだ」
「そんなに長くはないわ。気を失った魔法少女を連れてきて、これに魔物の精神体を入れて欲しい、その精神体はあげるから、って言われたの。丁度私も欲しかったのよ。魔力を操り得る精神体。動きはこっちで制御するから、あとは動力源である魔力の扱える精神体さえいれば、私の理想のガーゴイル軍団はもっともっと強くなれた。逆に肉体の方は邪魔にしかならないし、造形に役立たない魔法も同じ。だから快諾したわ。そういう技術と資材の物々交換がそれなりに続いて、今に至る、って感じね」
「聞いているだけでイライラしてくる話をどゥもありがとうよ」
「言っとくけど、今回のオーレイア隊はこっちに余計な疑惑を向けてきたからやっただけで、私はＥＤＥＮへの敵対行為なんて取るつもりなかったんだからね。ＥＤＥＮとは長い間良い付き合いをしていたし、クルメーナじゃ取れない鉱石の払いも良かったし。オーレイア隊の面々とだって、普通にお茶会をしたりしていたんだし」
「じゃァなんで叛逆だのなんだのを言ったんだ」
「……それは、だって、ＥＤＥＮを落とせばあそこの資材好き放題できるってこと

じゃない。魔法少女に入れる魔物の精神体は提供してくれる、って言ったから、つい……やってみてもいいかな、とか、思っちゃって」

だーめだ。

コイツ、５００年の研鑽とかゼロに等しい。

馬鹿だ。馬鹿だ。大馬鹿だ。おいおい、呑まれるな、だの奇怪、だのってな誰を差した言葉なンだよ。

……いや。

「待て、お前。中身も身体もマッドチビ……ディミトラなんだよな？」

「そのあだ名ムカつくからやめてくれない？　それと、それも何度も何度も同じこと返すけれど、そうよ。私がディミトラよ。ガーゴイルでもなければ魔物が入っていたりもしないわ」

「……じゃあ、私達が出会った偽マッドチビは何なんだ？」

「さっきから言ってるけど、それ。本気で知らないのよね。あのガーゴイルに関してもだけど、私の一切あずかり知らぬ所で私を名乗る誰かがいる、ってことでしょ？　考えただけでぞっとするわ。恐怖よね」

「……安藤、えー。安藤アニマ。キリバチ。この二人の名前に聞き覚えは？」
「キリバチは知ってるわ。前に島に来た事あるし。【侵食】使うメイドと一緒にね。安藤アニマってのは全然知らない。誰？」
「――」
どんだけ昔からだ、って話な。
少なくともあの偽マッドチビは最近作られた存在じゃない。どころか、ＥＤＥＮから来た魔法少女に対応している可能性がある。こっちの真マッドチビに気付かれない内に、やり取りをしている可能性がある。
俺の義手についての要望を出した時もそぉだ。面識はあって、接触していて、課題を投げられた、と言っていた。今区別をつけるために偽だの真だの言っているが、どっちも真、って可能性もあるわけだよな。
「なによ、そんな怖い顔して」
「……いや、ちょいと考える事が多くてな。なァよ、マッドチビ。お前はシエナ……あの人型ガーゴイル作るのは可能か？」
「無理ね。私の知識じゃどうしようもない。わかるわよ、私のドラゴンとの戦いを

見ていて、アレがどれほど複雑なガーゴイルか、ってことくらいは。余程凄い技師が作ったのだろうことはかろうじてわかるけれど、私が真似をするなら、数年はかかるわ」

「数年で済むのか」

「今まで作ってこなかったのは、そういう発想に至らなかったから、ってだけだし。そういうのがあるってわかったら、後は材料さえあれば作って見せるわ」

「なるほどね」

やっぱり、どっちも真のマッドチビ説は有効そうだな。

そしてこっちのマッドチビだけが二人いることに気付いていない？

「……」

「それが何？　もしかして今すぐに作れって、むぐ」

「ちょいと静かにしてくれ」

マッドチビの口を塞ぎ、背の高い木の裏に隠れる。

足音。ズシンズシンという、大きな足音。

……あァさ、いるんじゃねェかとは、確かに思ってたよ。

プテラノドンがいたんだ。生きた時代は違えど、別に今がその時代ってワケじゃねェんなら、化け物として当然のよォに存在するんじゃねェかって。

だがよ、なんでも最近の学説じゃ、鳥みてェな姿じゃなかったかね、お前さん。

「んー!?」

「あ、ちょ叫ぶな！　……おお、叫んじまったわ」

なんて、コメディちっくなバレかたをした。

ソイツ――もっと初期の初期の頃に説として挙げられていた、二足歩行の恐竜。小さな手と、ギザギザの口と、長い尾と、つるっとした体皮。あと緑っぽい色合い。

「っぷは、なにあれ、なにあれ!?」

「――ティラノサウルス、って奴だなァ。私の知ってる姿とァ違うが」

それが――もう、これでもかってくらい涎を垂らして。

俺達二人に向かって、ダッシュしてきたのである。

遠《text:s1:2》吠えは遥か彼方に《text》

26. 糸和寸斗有風噛無漠.

「この、貫け！」
「うぉ!?」
とびかかってきたソイツに殺到するは、白色の槍。
さっきマッドチビが液体化して造形に使っていた砂浜の石だ。
魔法【鉱水】による造形と凝固、射出。それは的確に仮称ティラノサウルスを刺し貫いた。
「ふふん！　どうよ、少しは尊敬したかし」
「危ねェ！」
「きゃっ!?」
マッドチビを抱き寄せて後ろに回避。眼前をティラノサウルスの尻尾が通り抜ける。
俺より小せェからな、いつもは俺がやってもらってる事を俺がやってやれる。
が、そんな自尊心よりどォにかしなけりゃいけねェ事を先にしねェと。

「う……嘘!?　だってあれ、あれ、全身に十の槍が刺さってて、なんで倒れないの!?」

「ガーゴイルに狩りやらせすぎて退化したンじゃねェか、お前。相手は化け物だぞ。そりゃ、死ぬまで戦うだろ」

「……！」

奴の外皮はそこまで固くなさそォに見える。

だから拳銃かSRがありゃ【即死】をぶち込めそうなンだが、いやはや、どっちも無ェんなら他の手段を立てるしかねェ。

一応マッドチビの言う通り、全身に十本も石槍刺さってんだからとっとと死んでほしいモンだが、血ィだらだら流してんのに一切衰えねェ生命力がそれァないって物語ってる。

俺がやるしかない。

「マッドチビ、私が近づく。近づいて殺す。攻撃が来たらなるたけ避けるが、やばそォだったら【鉱水】で防御してくれ」

「はあ!?　なんで私がアンタの補助なんかしないといけないのよ！　あんなの私

一人で十分だし！」
「……そォかい」
あァそォだった。そォだった。
別にコイツ、仲間でも身内でもないんだった。敵だ。完膚なきまでに敵だ。だから、協力なんざしてくれるはずもないし、たっけェプライドあるから助力も求めねェだろう。
「えーと、石、石……」
「んじゃ先行かせてもらうぜ」
「あ、待ちなさいよ！」
砂ァ操れねェのか、手ごろな石を探すマッドチビを置いて前に出る。
知覚強化。脚部に力が集中している。両脚だ。だから駆けだそうとしているワケじゃねェ。これァ、飛び掛かりだろォな。馬乗りになって噛みつく気とかそんなトコだろう。
思考を浮上させつつ、左足に強化を流していく。
右に避ける——と見せかけて。

「そら！」
「――!?」
強化した左足で、思いっきり砂を蹴る。すなかけ、って奴さ。どォだい、目潰しァ効くだろ？
目ェ見えなくなったからか、目に砂が入って痛ェのか、どっちかは定かじゃねェがティラノが仰け反った。いける。これァ紛う方なき隙だろう。
「くらえ！」
「は？　――危ねェ!?」
今度は助けるためとかじゃなく、マジで俺が危ないっつー叫びで。
今まさに踏み出そうとしていた身体をそのまま倒して、砂浜に寝そべる形となる。その後頭部を、風が通り抜けた。
風。いや、音。
前を見りゃ――その口に、くそでけェ石柱が入った事で、顎が外れちまってるティラノが一匹。元々でっけェ口が更に開いていて、頭部もちょいと変形している。
……えげつねェな、オイ。

「つか今の私も殺すつもりだったろ」
「え～？　何のことかしら～？」
「……いいが、まだ死んじゃいねェぞアレ」
「えー!?　まだ!?　どんだけ生命力あんのよ！」
「そいつァ同感、ってな！」
今度こそ、俺の番だ。
口に入った馬鹿でけェ石柱に苦しむティラノの、胸。まァ多分胸だろォ場所を、一点じゃなく浸す形でイメージ――【即死】を発動する。
ガリ、っと減る魔力に辟易しながらも、その身体から生命力が失われたことを確認。一応あの天使の例があるんでそそくさと離れたら、案の定その巨体はこっちに倒れてきた。
マッドチビが石柱なんてモンを口に入れてるからな、重心がコッチ向いたってトコか。
「……だァ、はぁ……っはぁ」
「なに？　なんでこの程度で息切れしてるの？　もしかして魔力切れ？」

「うるせェなS級が。こちとらちょっと前までC級だったんだぞ。……ふゥ、んな魔力あるかよ」

「C級！　へー。あれ、C級って遠征出させてもらえるんだっけ？　あ、でも結はD級か。EDENも色々変わってきてるのねー」

「……ふゥ」

久しぶりにマトモな【即死】を使った気がする。魔法を殺すってな時ァあんまし消費しねェんだよな。やっぱ命を奪うのが一番消費する感じがある。全体を浸したワケでも無ェのに、かなりの量を持っていかれた。

段々と渇いてきた魔煙草を起動し、吸う。

あ〜。

「それ、フリューリ草の煙草？」

「ん。あァ。……なンだ、やらねェぞ」

「いいじゃない、一本くらい」

「……ん？」

なんだその反応。

いらないわよ、じゃねェのか。
「……好きなのか、フリューリ草」
「特別好きってことはないけれど、根詰めて研究する時とかに食べると頭スッキリするわよね」
「へェ。そォかい、んじゃ、一本やるよ。ちょいと湿気てンのは勘弁してくれ」
「ありがと」
ティラノの死骸を前に、少女二人。マッドチビは幼児だが。
それが煙草吸ってるってな絵ァ、色々な団体に怒られそォだな。この世界にゃそンなのいねェが。
「……あー。ったく、何なんだろォな、ここ」
「んー。さっき使った石の成分を見るに、クルメーナからはかなり西方の諸島っぽいのは確かね。正直何日流されたらこんなトコに漂流できるのかわからないけど、多分そうよ」
「へー。そォいうのわかンのァすげェな。【鉱水】使うにあたって、やっぱ石だの鉱石だのにァ詳しいのか」

「ま、自分の強さに直結することだし。石の種類を知っていたら、ガーゴイルもどれにどんな石を混ぜて、どういう動きができるよう設定するか、とか、耐久性能はどれくらいになるのか、とか。色々わかるでしょ」

「……案外勤勉だな。マッドチビの割に」

「どういう意味よソレ！」

西方。

西方か。西方ってーと、キラキラツインテみてェな名前の奴が沢山いた、結構でけェ国があったってことくらいしか知識に無ェな。50年前に滅んだ、それまでは保ってた国。

が、クルメーナ自体がＥＤＥＮより遥か南西なンで、またぞっとするくらい遠い可能性もある。

どうやって流れ着いたのか、なンで二人一緒に流れつけたのかわからねェってな話。

……冷静メイドとシエナは逃げられたのかね。

「マッドチビ」

「だから呼び方！」
「いいから、ちょいと移動しようぜ。血の匂いってな化け物を引き寄せる。それくらいの知識はあンだろ？」
「……わかったわ」
そこの理解はあるよォで何よりだ。
といってもどこ行きゃいいのかわからん。わからんが、砂浜に居て良い事はあンまり無い気がする。遮蔽も無いってのがやべェ。さっきのプテラ然り、上からァ見放題だし、多数のティラノだのに囲まれるとキツい。
どっか洞窟を見つけたいトコだァな。
「……こっちよ」
「なンだ、やっぱこの辺はお前の縄張りか？」
「そんなんじゃないけど、ま、一本貰ったし。これくらいは教えてあげても損はないでしょ」
「？」
よくわからんが、促されるままについていく。

他に行くトコねェしな。罠でもあんまり関係ない。ここにいたってどの道恐竜の餌だろォし。

しかし、暑いね。

魔法少女が暑がるってな、相当だぞ、っとに。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《＼ｔｅｘｔ》

道中ちっせェ恐竜に遭遇しかけた事が何度かあったが、流石のマッドチビも息を殺して隠れるって事を覚えてくれた。

そォして、日の暮れる頃になってよーやく辿り着いたのが、ここ。

「洞窟、か」

「湧き水も流れているみたいね。あぁ、飲食の必要のない魔法少女といえど、身体が汚れるのは嫌でしょ？　暑くてベタベタするし、砂も張り付いてて気持ち悪いし。水浴びついでにとりあえずの拠点にしましょう」

「……そいつァ構わねェが、水浴びは各自でいいだろ」

「なんでよ。これでも私とアンタは敵対関係って事を考慮しての提案なんだけど？　どっちかが水浴びをしていてどっちかが万全の状態、なんて、心休まらないでしょ。どっちも丸腰で一旦休戦にした方が効率的じゃない」

「丸腰も何も、武器なんざ無くとも魔法ァ使えるだろォが」

「……そうね。失念していたわ」

「えェ……」

一瞬賢いっぽい事言っといてマジでアホなだけなのやめてくれ。

無駄に頭使わせんなアホ。

「ま、ここを拠点にってな同意だ。一旦休戦ってのもな。ＥＤＥＮに帰るにせよクルメーナに帰るにせよ、とりあえずァ生き延びなきゃなンねェ。お前が真っ先に死のうとしねェのも、クルメーナの蘇生槽になンかあったからなンだろ？」

「うわ、そういう所には聡いのね、アンタ。……そうよ。ルルゥ・ガルが来てから、私の蘇生槽に異常が出た。何かされたんだろうと思って色々調べたのだけど、異常はなし。ただ、私と蘇生槽との経路が完全に絶たれているから、絶対に何かをされたのは事実」

「蘇生槽との経路、ってな、なんだ」
洞窟に入る。
外のカンカン照りとァ打って変わってひんやりとした内部に、別に大した汗もかいちゃいねェのにほゥ、なんて溜息が出る。
なるほど、確かに湧き水が流れている。加え、マッドチビの好きそォな鉱石がわんさかとある。なンだ、【鉱水】の魔法ってな、鉱石の位置もわかったりすンのか？
「そんなことも知らないの？　ＥＤＥＮって妙な事隠すわよね」
「あァ、お上が何か隠してンのァ知ってる。が、蘇生槽についてァほとんど知らねェ。魔法少女が蘇生してくるポッドに、経路なんてモンがあンのか」
「有るに決まってるでしょ。無かったらどうやって還るのよ。……その顔。本当に何も知らないって顔ね。いいわ、少し教えてあげる。ディミトラ先生、って呼んだら教えてあげる」
「じゃァいいや。自分で考えるよ、マッドチビ」
「じゃあもう絶対教えないわよ！　この口悪ちび！」
ま、単純に考えりゃ魔法少女と蘇生槽を繋ぐモンなんだろう。

登録だのなんだのをして、その蘇生槽でのみ蘇生が可能になっている、とかか？　マッドチビの場合はそれに異常が発生していて、還れないと。死ぬ前に気付けたのァマッドチビの知識が故か。

しかし、口悪ちびか。

いいねェ、俺ァ初めてあだ名貰ったんじゃねェか？

「ほら、さっさと変身解除して服脱ぎなさい」

「だから、各自でいいだろ」

「何よさっきから。妙に拒否するじゃない。もしかしてアレ？　結みたいに誰彼構わず発情するタチ？　その上で、私みたいなのが好き、とか？」

「そォいうのはもちっと大人になってから言え」

「違うなら、いいじゃない。とっとと脱ぎなさいよ」

「お前こそ、なンでそんな押し強ェんだ。どうあっても一緒に水浴びしてェって聞こえるが」

「別に。ちょっとその腕の接合部をじっくり見たいとか、その義手をじっくり見たいとか、全然思ってないし」

「あァそォいうことね」

カラダにきょーみあンのァそっちじゃねェか。

……まァいいか、もう。

チビの身体にァなんとも思わねェが、流石に一緒に風呂ってなると色々ある。娘でも妹でもねェのと一緒ってな、なんだ……気を許し過ぎてる気がして、嫌だったんだが。

クルメーナに着く前に銀バングルに言われた通りなンだよな、俺ァ。他人を名前で呼ばねェのは死んだ時の悲しみに耐えられないからだ。できるだけ距離を置きたい。愛恋だのの類をしたくねェのも同じ理由。好ましく思われていると知っていて、俺からもお嬢の気風ってな好ましいモンだとァ思うが、如何せんあの理念のままじゃ、ちょいと厳しい。

名前を呼ぶってな、結構大事な事だ。

四六時中共に過ごすってだけでも結構苦手だが、それよりも、な。

でまァ、一緒に風呂、っつーのも俺の中でァ結構な奴なんだよ。……なンだが、あんまり断り続けてもダルいか。どっちもな。

変身を解除する。
「……その服、何？　今のＥＤＥＮってそういうのが流行ってるの？」
「中学の制服だよ。あァ、ちょいと着崩れてンのァ虹色ロングのせいだ」
「制服。へぇー。じゃあ何？　エデンの下の国の、アンタくらいの歳の子は、みんなこれ着てるの？」
「同じ中学の奴ァな。……なンだ、全く知らねェ、って感じだな」
「そりゃそうよ。私、８歳の時に魔法少女になったんだし。そもそも昔はＥＤＥＮの下の国もなければ、そんな……なんだっけ、中学？　なんてのも無かったのよ」
「あァ、魔法少女歴５００年ァ違ェってか。だったらもちっとどっしり構えてほしいもんだがね」
「何よ！」
きゃいのきゃいのうるせェマッドチビも、変身を解く。
どこか修道女を思わせるデザインだった魔法少女衣装から――襤褸切れを纏ったチビになった。
「……」

「なによ、その目。いっとくけど、この服は私気に入ってるんだから、襤褸切れとか言ったら怒るからね」
「あァよすまねェな」
「心の中で思ったに留められるなら留めておきなさいよ！」
一瞬で色々考えちまった。
５００年前ってながどんなんだったのかァわからねェが、どんなんだとしても、もちっとマトモな服なんじゃねェか、って。
なんでこんな、肌もロクに隠せねェ布切れを。
「ほら、早く脱ぎなさい。服濡れちゃうでしょ」
「ん。……あァ」
「……昔の事。少しくらいは話してあげるから、早く脱ぎなさい」
マッドチビは、ちょっとだけ。ほんのちょっとだけ、しんみりした声で。
……あァ。そォだな。
なんぞかを抱えてンのァ、別に俺だけじゃねェよな。
脱ぐかァ。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ちゃぷちゃぷと水音が響く。
魔法少女の身体だ、人間が入ったら冷たすぎるだろォ水温も、そこまでァ感じない。むしろ外での汗が洗い流されて心地がいい。湧き水の流れてた場所をマッドチビがいい感じに整形してくれたのもでかい。便利な魔法だな、【鉱水】ってな。
洞窟の入り口からの光はあンまり届かない。ただ、蓄光作用でもあンのか、青く光る苔が洞窟内を幻想的に照らしている。
「あァ、ホントに言いたくねェ事なら、言わなくていい。そこまで強制はしねェからよ」
「別にいいわ。流石に気になるでしょ。けど、私同情とかされたくないから。けど、私のを話したら、アンタのこともちょっと聞かせてもらうから」
「ん。わかった。いいよ、そんくらいなら」
失敗したな。

檻褸切れだったから、そぉいう思考巡らせちまって、それが透けたか。
ダメだね俺ァ。同情ってなが悪感情だってな知ってんのに、前世の頃から隠せねェし抑えられねェ。それで失敗した事だってあったってのに、またやっちまったか。
マッドチビが口を開く。
「奴隷の子だったわ。奴隷と奴隷が愛し合い、その間に生まれた禁忌の子供。それが私」
「いやそれァちと重いわ」
「両親は私を隠して育てたわ。奴隷の置かれた洞窟の檻の片隅で、少しだけ掘られた穴と、積まれた死骸の中で、私は育った。ロクな食べ物もないのにね。両親が自分の分を私に与えていたのか、その頃から魔力の才覚でもあったのか。それはわからない。わからないけど、それが6年間続いた」
「……」
「凄いでしょう？　6年間も隠し通したのよ。赤子一人を、奴隷商の目から。6年目で、発覚してしまったけれどね」

「……あー」

「当然奴隷商は怒ったわ。怒って、使い物にならなくなった、と言って、二人を安値で売り払った。そして私はそのまま奴隷になった。そもそも両親がそうも長い間残されていたのは、見た目が良かったからよ。商人は二人を目玉商品にしていたから、あんまり人目に着くことも無かった。だから私を育てられたのでしょうね」

同情するな、って？

無理だろ。

なんつー話を聞かせやがるんだコイツ。

「5歳児の私もそれは同じ。わかるでしょ、この可愛さ。天に恵まれた可愛さが」

「……あァ。そォ、だな」

「だから私は次なる目玉商品として、3年間を過ごしたわ。待遇は他のに比べたら良かった方よ。この布を取り上げられなかった事も含めて、他の奴隷には考えられないほどの好待遇だった」

「そ、か」

「3年。その終わり。私が八歳の時——奴隷商を。いいえ、その国を。ある集団

が襲撃した。たった5人の集団。たった5人で――魔物よりも、軍隊よりも、他の何よりも強かったそいつらは、魔法少女、と名乗っていたわ」

青い光に包まれて。

水を手で救い、零すマッドチビ。その様相は確かに――美しいものであると言えた。

魔法少女の衣装ではわからなかった、透き通るような肌。紺碧の瞳。金砂が如き髪。お嬢のソレとは違う、流れるようなソレが、青に濡れて輝きを増す。

8歳児、だ。

だが、確かに神聖を思わせる――あるいは、言葉に直すのなら、造形美、みたいなものを感じる。

……おっさんが何言ってんだ。

本格的に取っ捕まんぞホントに。

「魔法少女達は、国を滅ぼした。国の悉くを滅ぼしたわ。全てを。本当に全てを。その最中――私に会った」

「……なンで、そいつらァンなことしたんだ」

「私に出会って――問うてきた。»貴女は魔物？«ってね」
こっちの問いァ聞く気ァねェらしい。
ただの独白に近いそれが、続く。
「私は答えた。»違う«って。彼女らは聞いたわ。»じゃあ何？«と。だから私は答えた」
マッドチビが、手を広げる。
その手に、透明な水が集まる。
水、っつか。水晶、か。
「»魔法少女よ«、ってね。こうやって、【鉱水】を浮かべて」
「……嘘じゃねェか、そりゃ」
「嘘じゃないわ。その時なったのよ、私は。魔法少女になったの」
「そォかい」
「ええ、そう。それで、彼女らはこうも聞いてきたわ。»それなら話が早い。これから魔法少女のための楽園を作る。一緒に来ない？«って。知っての通り、私はそれを断ったのだけど」

「……ん？」

待て。

そォいや前もちょいと気にした話だが、なンかおかしくねェか？

前後が、逆じゃねェか？

「だから、同情される所以は無いのよ。私は救いの手を自ら振りほどいて、自立を選んだ。その出生こそはそういう対象にあるかもしれないけれど、私は私の道を行ったのよ。だから」

「魔法少女が先にいたのか？」

「……何がよ。というか、詰め寄ってこないで」

ＥＤＥＮ。魔法少女育成学園エデンを含む、国家防衛機構・浮遊母艦ＥＤＥＮ。

終の因が先にあった。学園長がそれを浮かして、そこにＥＤＥＮを作り上げた。

だからその下に、最初は国なんて無かった。

マッドチビの国を襲撃した魔法少女達は〝これから楽園を作る〟と言った。当然、その頃に国なんて無かった。

守るべき国なんか、どこにもなかった。

魔法少女の方が先にいたんだ。あとから、国が出来て、いつのまにかＥＤＥＮが国家防衛機構になった。

それァ、おかしくねェか。

じゃァなンだ。ＥＤＥＮの最初の役割ってな、なんだ？　魔法少女のための楽園、か。それァなンだ。なンでそんなもんを作ろうと――。

「ひゃ!?」

「私のは話したんだから、ちょっと見せなさいよ。ついでにアンタにも聞きたい事があるの。いいわよね？」

「わ、わかったから、あんまり脇を触るな。くすぐったいだろ」

「ちょっと動かないでよ。上手く見えないじゃない」

マッドチビが指を動かす。

――それにより、身体に巻き付いてくるは液体化した水晶。瞬く間に右腕を除く全身を覆ったそれは、これまた瞬時にカッチリと固まった。

……これァよ、明確な敵対行為だよなァ。

「ちょっと見る間固まってもらうだけだから、敵対行為とかじゃないわ。一旦の休

戦は受け入れたんでしょ？」
「こっちの台詞なんだが」
「いいから。それで？　そもそもなんでこんなもの付けてるの？　魔法少女になる前から無かったの？」
　右腕の付け根と顔だけを出した状態で固められ、湧き水の風呂に置かれる、ってな。
　結構怖いぞ、コレ。
「ちげェよ。魔法少女になってからだ」
「……どういうこと？　なんで……いや、もしかして」
「あァさ。私ァ死んでねェのさ。まだ一回もな。ソンで、これからも死ぬつもりァ無い」
「右腕がない事より。それが痛む事より。その不便より――死ぬのが、嫌？」
「そォだよ。当たり前だろ」
　流石にこんなカッコじゃつくもんもつかねェが。
　何度も言った、何度も何度も説いてきた事を、言う。ま、こんな命を命とも思わ

ねェ奴にわかるとは思えねェが――。
「その方がずっと、可哀想じゃない」
「……は？」
あ――ン？
俺ァ今何に同情されたンだ？
「死ぬの、嫌なんでしょ？　聞いた話じゃ殺すのも嫌。じゃあどうしてＥＤＥＮにいるのよ。なんで戦わされているの？　ＥＤＥＮはいつのまに、そんな、そんな――」
「どォしたんだよ、おい」
「そんな。魔法少女を、奴隷みたいに扱うようになったの？」
……あー。
なンだよ。やっぱり傷にァなってんじゃねェか。５００年経ったって、最初の９年のこた忘れられてねェじゃねェか。
奴隷扱いァ、嫌か。
だがお前も同じことしてただろ。化け物に……いや、だからこそ、か？

「可哀想じゃない。なんでそんなことしてるのよ、アンタ。ＥＤＥＮなんかから抜け出して、私の所……は嫌か。けど、他にもＥＤＥＮに所属していない魔法少女の組合はあるから、そこに身を寄せなさいよ。ダメよ、死ぬのも殺すのも嫌なら、戦場にいちゃダメ」

おいおい、敵だろォが。

なんて目してやがる。泣きそォじゃねェか。

……変身する。

亜空より呼び出される魔法少女衣装が水晶を砕く。金属類とァ違って、耐久性能はほとんどねェな。別に部分強化で壊してもよかったか。

ま、今はいい。

悔恨は後で良い。

「な……何よ。た、戦うの？　待ちなさい、今変身するから」

「戦うかよ、今更」

手で、指で、その涙をぬぐって。

抱きしめる。

……あー、こんな暗い場所で、裸の幼児を抱きしめる43歳おっさんってなやべー絵面だが。

悪いな。誰も見てねェからよ、勘弁してくれや。

「すまねェ。ヤな事話させたし、ヤな事思い出させちまったな。私ァさ、大丈夫だから。死は怖いし、殺すのも嫌だ。けど、みんなが死ぬも嫌だから、戦うしかないんだ。戦わされてるとかじゃねェよ。私ァちゃんと、自分から戦って」

「――やめなさいよ、その強がり」

抱きしめ――返された。

……何がだ。

何がどう、強がってるよ。

「結局仕方がないから戦ってるんじゃない。それは戦わされているのと同じよ。状況が、環境が、あなたを使役している。あなたはわかっているんでしょ？　魔法少女がおかしな存在だ、って。死んでも生き返るから、死をも恐れない、なんて――生物として、おかしい、って」

「！」

おい。
おい。
敵だろ、こいつァ。どの面下げて、だろ。オーレイア隊のみんなを俺と戦わせたのもコイツで、その精神体を殺させたのもコイツだろ。
おい。情に弱すぎだろ、俺。
なんで――泣きそうになってやがる。
こんなの、こんな言葉なんか、その場しのぎに決まってる。
わかったふりして、理解したふりして、信じたと思ったら後ろから刺すとかだろ。おかしい。おかしいじゃねェか。みんなにあんだけ散々な扱いしといてよ。ルルゥ・ガルが攫ってきた魔法少女も何の躊躇も無く研究材料にしといてよ。
そんな、俺程度に同情できるわけねェだろ。
こいつにそんな倫理観が。道徳心が。
他者を想う心、なんてのが。
「強がるのはやめなさい。あなたは戦場に出て良い子じゃない。そんなに強い心は持っていない。……戦う事を自ら選んだ魔法少女だけが、生きるために抗った魔法

少女だけが、初めて戦場に立てるの。それ以外はそうして戦う子達を、温かく迎える役目を持つのよ。戦う力があるとか、戦うしかないとか、そういうのは関係ない。いい？　あなたは戦っちゃダメな子よ」

「……あァ、知ってる」

「言ってもわからないか。……よし、決めた」

知ってるよ、ンなこと。

俺の心が弱いって、ンなの言われなくても、ずっと前から知ってるよ。

わかるよ。わかるから、やめてくれないか。

泣きそうになるだろ。

43歳のおっさんだぞこちとら。8歳児に諭されるモンかよ。……あァ５００歳児かもしれんが。

お前みたいな、きゃいのきゃいの騒ぐ奴に。命を命とも思ってねェような奴に。

なんで俺が――理解されなきゃいけねェ。

理不尽だろ。

「何を、決めたって」

「アンタをＥＤＥＮに連れて行く。そして、直談判してやるわ。今すぐアンタを解放しなさい、ってね。他の、戦うことが嫌な魔法少女もまとめて解放させる。それで、まぁ私の所はともかく、他の組合に連れて行ってあげる」

「余計な世話だよ、それァ」

「馬鹿ね。自分で自分の面倒も見られない子が目の前にいるのに、どうして年長者が世話を焼かないっていうのよ。自分で自分の道を選べないのなら、自立ができないのなら、差し伸べられた手を払う事も取る事もできないのなら」

なんでこんな――カッコよく見えんだよ、こんな奴が。なんでこんな、――あァ、クソ。

「大人を頼りなさい」

「……うるせェよ、マッドチビのくせに」

「そういう粋がった事言うなら、私の背中に涙落とすの止めてからにしたら？」

「うるせェよ、チビ」

「アンタこそね、ちび」

あァ――。

ダメだな、どぉにも。
優しくされるってな、慣れねぇや。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

27・保歪泥鈍斗有照身？／鼻腔図糸僅内途…

「泣き止んだかしら？」
「うるせェ」
「ふふん、ああもちゃんと泣かれると、その生意気な口ぶりも可愛く聞こえてくるわね」
「うるせェなオリジナルドラゴンセンス無さすぎクソマッドチビ」
「もう一回、今度はとっても硬い鉱石で固めてあげてもいいのよ。死ぬ事のできない身体で銅像になったまま街中に設置してあげる」
「バーカバーカチービチービ」
「……いつか必ずディミトラ様って呼ばせてやるんだから」
はァ。
ったく、ガラにも無ェことをした。
泣くて。8歳児に抱きしめられて泣くて。
まァおっさんの頃から涙脆かった方ではあンだけどさ。映画とかで結構ボロボロ

泣くタイプだったし。
「で、どぉすんだよ。私をＥＤＥＮに連れてくんだろ。アテはあンのか？」
「ないわ！」
「だろぉな」
あったらとっくに行ってるだろぉし、クルメーナも位置くらい計算できそぉだ。
「けど、ここにはこんなにも鉱石があるのよ」
「……そりゃそぉだな。それがどうした？」
「アンタ、私のドラゴンと戦った時の事忘れたの？」
「あァ、薄味過ぎて記憶に無ェな」
「おかしいわね。魔法少女は記憶力の衰えなんて起きないはずなのだけど。魔法少女になる前からそうだった、としか思えないわ」
「そもそもドラゴンなんざいなかっただろぉよ。ここの恐竜のがまだドラゴンだわ」
「それよ」
「あン？」
マッドチビは、その手に水晶のプテラノドンとティラノサウルスを作り上げる。

やっぱ模造はマジに上手いな。虹色ロングと戦った時のオーレイア隊の面々も本人そっくりだったし、そういう才能ァピカイチってか。

「ここには、ちゃんと飛べる身体を持った魔物が沢山いる。ちゃんと走れて、ちゃんと攻撃できて、ちゃんと……生きるに特化した魔物がね。そしてこれだけの鉱石があれば」

「――今度こそホントのドラゴンを作れる、ってか？　だが、精神体はどォすんだ。魔法少女のを使う、ってンなら私ァ反対だぞ。力づくで止める」

「そんなこと言わないわよ。というか、魔法少女の調達なんてルルゥ・ガルが来なければ夢のまた夢だったし。……そんな目で見ないでよ。こればっかりは私の研究者気質のものだもの。そう簡単には変えられないし、変える気もないわ」

「あァ、そォかい」

まだ夜だ。

別に暖を取る必要もねェから、ただただ夜明を待つ。睡眠もいらねェからな。俺ァ寝てェが、マッドチビは、そォでもねェみたいだし。

「魔物を使うならいいんでしょ？」

「快かァねェが、別に化け物に同情ァしねェよ」
「その線引きがどうなっているのかも気になる所だけど、精神体はここの魔物のものを使うわ。肉体的に強靭な魔物がああも島の外周を闊歩しているって事は、島の中心部には高位な魔物がいる可能性も高い」
「島の中心たァ言うが、この辺ァ島々の集まりだろ。どこが中心だってなわからねェよ」
「何言ってるのよ。ひときわ大きな力を感じる場所あるでしょ？　そこが中心よ」
「……？」
「え、ホントにわからないの？」
これぱっかりは煽りじゃなく。
本当に驚いた、みてェに。
「……アレか、地脈点、って奴か？」
「なんだ、やっぱりわかってるんじゃない。そうよ、丁度地脈点になってる島が一つだけある。あそこには強大にして高位な魔物がいるはず」
「知識で知ってるだけだよ。感じ取れるワケじゃァねェ。……そォいや、この洞窟

を見つけた時もそぉだが、なんかわかんのか？　【鉱水】だから鉱石の場所がわかる、的なのが」

「……エデンでは魔力の流れとか、感じ方とかも教えないのね。呆れたわ。知識の独占をして、魔法少女が何の疑念も持たずに戦うように仕向けている、とか。そんな辺りかしらね」

「魔力の、流れ」

そぉいや、地脈点ってな、世界を巡る魔力が世界に還る吸入地点のこと、だったか。

そもそもなンだ、世界を巡る魔力ってなは。

「ふむ。じゃ、ちょっと感じてみる？　世界の魔力の流れ。荒業になるから、抵抗しない事を約束してほしいんだけど」

「……わかった。信じる」

「いいの？　ここまで色々言って、アンタを助けるだのなんだの言っといて、だけど、私は敵よ？」

「いいよ、もう。そういうの。私ァそこまで頭硬くねェのさ。いいから、やってみ

てくれ」
「わかったわ」
言って――マッドチビが、膝を突いた姿勢でこっちに来る。
荒業っつーんだ、ちょいと痛ェとかなのかな、とか覚悟していたそこに。
俺の、顔に。
ちゅ、と。……キスが来た。
「いってらっしゃい」
余りに突然のことで混乱の極致にある俺に手を振るマッドチビ。
ディープなキスよろしく俺とマッドチビの間に出来る唾液の端は、けれど色が唾液のソレじゃァねェ。
口に付いたソレを拭う、なんて暇はない。
身体が、沈む。沈んでいく。あり得ない感覚に、けれど何もできない。
あァ、マッドチビが地面に手を当てている。
洞窟の岩が波を打つ。手を中心に、波紋を描いて広がっていく。
やべェ、と思った時には遅かった。

俺の身体は――ポチャン、と。
岩の水の中に、沈んでいったのである。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

光が流れている。
遠くの空から流れ込んだそれが、前から後方へと流れて行く。凄まじい勢いだ。
凄まじい奔流だ。
何かに捕まっていなければ吹き飛ばされちまうんじゃねェかって奔流が、流れ続けている。
「糸伊豆耗空古･」
「泥土有化夢？」
「発布意〕場途藍鈍斗羽生葉綯･」
「絵鰤湾化夢！」
「阿茶位琉度羅武道倍葉筈新夜土･」

「阿歩止琉後内途.」
「葉阿歩止琉.」
「鳥有為預阿歩止琉！」
言葉が流れて行く。
力が流れて行く。何かが近寄ってきて、何かが笑いかけてくる。何かが話しかけてくる。
「上亜伊豆陽亜？」
「泥椅子伊豆地線他負不地悪土.」
「泥椅子伊豆地伏零須上亜地須利琉々図三糸.」
「藍宇恩斗有塔寝具.」
「藍宇恩斗有塔寝具初図阿美優邸符応簿井栖.」
「伏理伊豆伏零.」
「亜伏霊矢不応地内途.」
心地が良い。
懐かしい。暖かい。ずっとここにいたい。

そんな感覚に襲われる。
「……場途座頭伊豆能登虞度・」
「保歪？」
「藍栖尾羽生寒寝具塔同・」
これが――魔力、か？
そうだと言うのなら。
じゃあ、俺の使うこれは。
「藍琉化夢亜外韻・藍宇恩斗塔椎葉根楠斗態務・」
「往来！　上意天狗！」
急速に上に引っ張られる感じがする。
温かい何かが口を行き来している。なんだろう、これは。これは。
――息？
「っぷはァ!?」
「よ、良かった……起きたわね」

「っは、っは、っは、っはァ、はァ……は、ァ」

呼吸をする。

そうだ。そォだ。呼吸ってのをしないといけないんだ。しないと死んじまう。

いやさなんだその気付き。当たり前だろ。さっきまで当たり前じゃなかっただけで、当たり前だろ。

「は――はァ、あァ……」

「大丈夫……？　あの、その」

「……荒業、ね」

「あ！　いや、そんなつもりはなくって！　ちゃんと呼吸用の穴も用意したのにアンタが口を離しちゃうから焦っただけで、ホントにそんなつもりはなかったのよ！」

どォやら……溺れていた、らしい。

岩の水。【鉱水】の中で。

荒業が過ぎる。死にかけたって考えるとゾっとする。

「本当よ……？」

「あァ――いんやさ、信じるって言ったのァ私だしな。けほっ、あァさ、その意思があンならとっくに殺してるだろ。……面白い体験だったよ。人工呼吸までしてくれたンだろ？　ありがとな。つか、よくやり方知ってたな。魔法少女相手にやることなんかねェだろォに」

「や、やり方はわからなかったけど、息してないってわかった時点で不味いって思って、あなたの体内から全部の鉱石抜いて、どうにかこうにか呼吸させないと、って……そ、その」

偶然ってことか。

やばすぎるな。神さんに感謝だ。善行積んでる気ァしねェが、ありがてェ限りってな。

「ご、ごめんなさい！」

「ん？　なンだ、お前真っ当に謝れたのか。つか、いいって。やってくれっていったの私だしな。それに――」

目を瞑る。

あァ。

わかる。わかった。
これか。
「魔力の流れ……ってな、わかったぜ。感じ取れた」
「本当……？　本来はもうちょっと……あ、いえ、なんでもないわ。こ、コホン！　それじゃお詫びに、もう一つの方も教えてあげる」
「いんやさ、流石にまた荒業ってな勘弁なンだが。つか、もう一つの方ってな何だ？」
こんな、抵抗もできねェ状態で死ぬなンてのァ勘弁だ。
死地には何度か行ったが、自意識無ェってな怖すぎる。
「私がどうしてこの洞窟を見つけられたのか、って方よ」
「あァ。なンだ、そりゃ魔力の流れとァ関係ねェのか」
「ええ。あなた……アンタの言う通り、これは私の魔法が【鉱水】だから感じ取れること。魔法には遠隔と近接と特殊っていう括りがあるけれど、系統別にするともっと細分化される、というのはわかるわよね？」
「んー、まァ、多少は。全部を知ってるってワケじゃねェが、所謂銀バングルと冷

静メイドの世界を変質させる魔法、とか、【神速】や【槍玄】みてェに自分を速くして世界を遅くする魔法、みてェな括りってこったろ？」

「そう。で、私の【鉱水】は世界に既にあるモノを変化させる魔法よ。つまり、新しいものを創り出すとか、自己と世界を切り離すとかじゃなくて、世界そのものに働きかける魔法なの」

「ふむ？」

同じ意味に聞こえるが。

何が言いてェんだ？

「その中でも私の司るものは鉱石。たとえば私の知っている魔法少女に【樹意】って魔法を使う子がいるけれど、その子の司るものは樹木。【雲演】なら雲や水蒸気、といった具合に」

「司る、ってな、なンだ」

「そのままの意味よ。魔法は世界のそれぞれを一身に担うもの。下位互換や上位互換はあるけれど、それぞれの魔法少女が自らの魔法に纏ろう万物の一端を担っている。だから私は鉱石のある位置がわかるし、【樹意】なら林や森のある位置が、【雲

演】なら雲のある位置がわかる」
「……なる、ほど？」
何か。
それは――魔法っつーモンに対する、最奥の答えの一つ、な気がする。
魔法は世界のそれぞれを一身に担うもの。魔法少女は自らの魔法に纏ろう万物の一端を担うもの。
じゃあ、魔法少女ってな、なンだ。
「だから、あなたにもわかるはず。【即死】は死に纏ろう最上位の魔法でしょうから、死の気配とか、殺意とか、そういうのがわかるんじゃない？」
「……あァ、わかる。殺意。そンで、自分が即死する可能性のある攻撃。そォいうのはわかる」
「あなたのそれが、私のこれ」
だがよ、そいつァおかしいぜ。
尖り前髪は俺のこの殺意を感じるソレを、能力だと称した。
なんなら今まで出会って来た魔法少女の誰一人としてそれを知らなかったし、教

えてくれなかった。
　なンでだ。
「ＥＤＥＮは、お上ァ、何を隠してる？」
「……そうね。私もちょっとどころじゃなく気になってきたわ。昔のＥＤＥＮは、もっといい場所だったはずよ。少なくとも私が同盟を組んでいいと思うくらいには。〝魔法少女のための楽園を作る〟と言っていた彼女達は、本気でそれを目指していたはず。知識の独占とか、魔法少女の奴隷扱いとか、そういうことをする人達じゃなかった」
「なァ、そいつらってどこにいるんだ？　今ＥＤＥＮにいンのァよ、私が知ってる限りじゃ学園長って呼ばれる奴だけだ。創設者はどっかいっちまったらしい」
「どこかへ行ってしまった？　どうして？」
「知らねェって」
　なるほど、ＥＤＥＮの内部事情に関しちゃとんと疎いな、マッドチビァ。
　全てを知ってるってワケじゃねェ。だが、ＥＤＥＮの隠してる事情だの世界だのを知るにァ持って来いな相手だ。

……先生と呼べば、だの。言ってたっけ。
「マッドチビ先生、でいいか？」
「何がどう〻良い〻と思ったのか教えてくれるかしら」
「いやよ、お前は多分、私よりずっと多くを知ってる。だから先生だ。けど、ちょいと性格や言動が子供っぽすぎる。だからチビだ。で、研究者思考過ぎて倫理観がねェ。だからマッドだ。逆から呼んでマッドチビ先生だ」
「そんなこと言われなくてもわかるわよ!!」
言われなくてもわかってンなら言わせンじゃねェよ。
「教えを乞いたい。世界のこと、化け物のこと。魔法のこと。ＥＤＥＮへ向かう間だけでいい。そのドラゴンってなを作る片手間でいい。私に世界を教えてくれ」
「う……い、嫌に真摯ね。やけに、というか……。それに、呼び方はヘンだけど、尊敬の念が伝わってくる……」
「あァさ。今んとこ下に見る要素が言動と行き当たりばったりなトコしかねェからな。尊敬してる」
「今貶したわね!?　ねえ!?」

きゃいのきゃいのとうるせェ奴だな。

丸々全部尊敬できる奴なんかいるワケねェだろ。欠点あってこその人間だ。魔法少女だが。

その点、マッドチビ先生は尊敬できる部分の比率が下に見る部分の倍はある。

だから尊敬してンだよ。

「な、なんか納得いかないけど……む。これ以上つっかかるのも、貞淑なる淑女としてアレよね」

「あァ、ありがとな」

「……ま、いいわ。少なくともアンタが一人で生きられるくらいにはしてあげる。EDENを抜けても、死なないようにね」

「抜けるつもりァまだないんだが、ありがてェ。これからよろしく頼むよ、マッドチビ先生」

「……やっぱり馬鹿にされているような」

してねェって。

三割くらいだって。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1:２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

んで。

「んで、だ。夜は明けたが、これからどうするよ。地脈点に向かうか？」

「そうね。とりあえずあそこにいるだろう高位の魔物が何なのかの確認をしないと。でも、倒しちゃダメよ。仮に倒せたとしてもね」

「……精神体を抜き取るから、か」

「そう。まぁ抜き取る時に倒しはするんだけど、今倒しても入れ物がないから」

なら、また日の暮れちまわねェ内に出発しねェとなァ。

色々思う所はあるが、俺ァ化け物に同情する程余裕は持ってないンでな。

ってな感じで出発したワケなんだが。

「……なンだ、マッドチビ先生。もしかして泳げねェとか言わねェよな」

「は!?　べ、別に!?　飛べばいいじゃない飛べば！」

「私が思うにだがよ、マッドチビ先生の弱点ってな空中なンじゃねェのか？　鉱石の補充ができねェ空中じゃ、どーしたってジリ貧だ」
「そそ、そんなの水中だってあんまり変わらないわよ！」
「いーからいーから。黙って担がれろって。……【鉱水】なンて水っぽい魔法使うクセに、泳げないたァなァ」
「そういうアンタはなんで泳げるのよ！　ＥＤＥＮにも国にも海なんてないでしょ？」
「いやプールの授業は普通にあるが。市民プールもあるし」
「……！」
あと前世でもスキューバとかやってたし。
……懐かしいなァ。船の上から飛び降りる奴。懐かしいけど、この世界でやったら一瞬で化け物の餌だろォなァ。
「だ……大丈夫？　沈まない？」
「マッドチビ先生ァ軽いから大丈夫さ。ただ、鉱石のストックァできりゃ浮遊状態にしといてくれると助かる」

「わ、わかったわ」
流石にそぉいうの含めると重いからな。【鉱水】で液体みてぇにして浮かしといてくれりゃ問題は無い。
あーあ。もちっと背が高けりゃなァ。担いでいく、ってのもできたンだろォが。
さて、背泳ぎで行くかねー。
「……泳ぎながら話すけどよ」
「う、うん。あ、じゃなくて、何？」
「クルメーナ周辺に放ってた魚みてぇなガーゴイル。あれもお前のだよな？」
「ああ、それはそうよ。監視と簡易な攻撃のできる小型ガーゴイル」
「そいつァ、今は作れねぇのか？」
「作ろうと思えば作れるけど……なんにせよ精神体は必要ね。別に海の魔物の精神体である必要はないんだけど」
「ん、そぉなのか」
「ええ。精神体というのは、肉体の動力源に過ぎないわ。多少の記憶は有しているけれど、肉体から受ける影響には負ける。それがゴーレムやガーゴイルともなれ

ば、尚更にね」
「あー。そぉか、肉体のある奴に精神体を入れると記憶ごっちゃになったりなんだのをするが、ガーゴイルやらゴーレムやらに記憶を保存する場所なんざないもんな」
「そういうこと。外側を造形してあるだけの像に宿った精神体は、単なる動力源としてその魔力を使うわ。ちなみに魔法少女の精神体は単なる動力源でありながら余剰魔力を操れるっていう素晴らしい……痛い!?」
「私の前でその話ァやめてくれ。イラっとくる」
「ちょ、ちゃんと泳いで!?　わかったから、私の脚抓ってないで泳いで！」
「これくらいで沈みァしねェって」
怖がりすぎだろ。
俺ァマッドチビ先生のが怖いんだがね。
「……だが、ちょいと上空注意だ。さっきのがいる」
「ん……私達の事、餌だと思っているのね。分からせてあげましょうか、自分の立場」
「ついでにアレの精神体引っこ抜いちまえばよくねェか？　で、適当な……いや、

アレっぽい見た目のガーゴイル作ってくれよ。空から監視できる奴いた方が色々と楽そぉだ」

「ふむ。良い考えね、それ」

マッドチビ先生の周囲で鋭利な槍になりかけてた鉱石群が、その身をしなやかなものに変化させる。……蛇、だろうか。

それが――今まさにこちらへ急降下せんとしていたプテラノドンに殺到する。

「わァお」

「ちょうどいいから、精神体の抜き方も見せてあげるわ」

プテラノドンは突如襲ってきた銀やら黒やらの蛇に困惑の叫びを上げ、空中でじたばたと翼を揺らす。当然そんなことをすればバランスを保てなくなり、そのまま俺達の程近い場所へ落下。【鉱水】の蛇たちは更にプテラノドンの身体を締め上げ、磔にするが如く持ち上げたあと――。

「うわ」

一匹が、その口に入り込む。

外から見てわかる程に膨らむ喉。プテラノドンは目を剥いて、「カ、カ」みてェ

な音を出しながら、段々力を無くしていく。
そォして程なくしたあと、ぐてんと力の無くなったその身体から、口ン中に入った蛇が出てきた。
「わかる？」
「……あァ。あの蛇、精神体が宿ってる」
「そう。で、これに」
プテラノドンから出てきた蛇に、数多の蛇が集まり始める。
様々な鉱石で出来た【鉱水】の蛇。それが混じり合い、食い合い、重なり合い、融け合い――。
大きな一つの球体となった。
「で、一から造形するのは今時間足りないから……」
その球体は、けれど波打っていて。
精神体が宿っている、ということもわかって。
それが、それが。
ピクリともしなくなって海底に沈んでいく際中だったプテラノドンを、にゅーん

と取り込んでいく。
翼から、胴体。頭。脚。逆の翼。
つるつるした鉱石の球体が、プテラノドンを食べて行くみてェに。
「ふむ。へぇ。こういう作りなのね。……興味深いわ」
「そろそろ向こう岸に着くぞ」
「ホント？　……ほんとだ。凄いのね、私を乗せて泳いでいるのに、こんなに早く泳げるなんて」
「私ァ今起きてる事のが凄いっつか怖く見えて仕方ねェが」
「別に殺しはしてないんだから、そこまで怖くないわよ」
そして、ペェっと。
プテラノドンが吐き出される。再度水ン中に沈んでいくその身体。
それとは反対に、水面からちょいと高い場所で……その球体が、造形されていく。
翼は鋭く、広く、コウモリみてェに。
嘴は長く。頭骨も長く。
胴体は楕円球。鳥みてェな脚。

――あァ、まんま同じの、プテラノドン。
色だけァ違うが……まさにさっきのアイツだ。
それが、大きな鳴き声を上げる。
「……喉や内臓まで再現する必要はなかったわね」
「着いた。……が」
「何？　あぁ、アレ？　あれは仕方なくない？　そりゃ精神体がいないんだから、水没しても抵抗できないのは当たり前よ。それで死ぬのは運が悪かっただけ。私が殺したわけじゃないわ」
「……別に、化け物に同情してるわけじゃねェよ。こえーなって思っただけだ」
「アンタの【即死】の方がよっぽど怖いとおもうけど」
そりゃ、まァ確かに、なンだが。
……それァそォだな。ホントに。
「あー。聞きたかねェけど、一応聞く。魔法少女から精神体取り出すときも」
「同じやり方よ。違いは魔力量が多ければ多い程多量の鉱石が必要になる、くらいかしらね」

「……虹色ロングに作ってやったオーレィア隊の面々の人形もか？」
「そうね。鉱石で身体を包んで全体を把握して、そっくりの人形を作る。自分での造形じゃないからあんまり好ましくない手段だけど、急いで作らないと、って時には最適よね」
「あァよ、聞いた俺が悪かった」
「何が？」
別に。
想像しちまった、ってだけだ。
それをされる、アイツらの顔や、心を。
「ま、これで空の目が出来たってことで。……つかよ、今思ったンだが、【鉱水】で適当な橋でもつくりゃよかったんじゃねェか？」
「あ」
……ま、諸島探索は始まったばかりである。
探索になるか生活になるかはわからねェが、始まったばかりってな事実で。
俺もマッドチビ先生も、どっか抜けてるってトコ以外は、割合安全そォな——な

ンだ。束の間の休息、になンのかねェ。
「後でティラノやらラプトルやらのガーゴイルも作るか？」
「そうね。……ラプトルって？」
「さっきやり過ごした小型の奴だよ」
「ああ」
そんな会話をしながら。
俺達は――進む。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

28・鈍斗聖絵鰊虞液止羅・

「なァよ、マッドチビ先生」
「何？」
「湧きポってあンだろ？　化け物が出てくる場所」
「ああ。湧き地点、形成地点。なんでもいいけど、あるわね。それが？」
「アレってな、なんなんだ？　ルルゥ・ガルが人工的な湧きポも作ってたが……」
「それに答えるためには、まずそもそも魔物とは何か、についてを話さなければいけないわね」
「あァ、構わねェよ。化け物ってな、アイツラァなんなんだ」
今日は雨。
島々の側面は切り立った崖になっちゃいるが、その上……木々生い茂る頂上ってな、なんと熱帯雨林みてェな蒸し暑さを保ってる。めちゃくちゃ開放的なのに蒸し暑いっつー意味わからん……のか？　まァ植物学者じゃねェんでありえねーっつーのは言い切れねェが、どォにもオカシナ気候でオカシナ環境って感じがする。

拠点にした洞窟然り、それぞれの島にあるいくつかの洞窟にァ鉱石だのなんだのが多く含まれ、けれど明らかな安全地帯だってのに奥まで行ってもコウモリだのネズミだのは一匹足りとていない。虫さえいねェと来た。

不自然極まりない。

「……でも」

「どォした？」

「私が知っていることが全てであるとは思わないで。今から話すのは、あくまで私の知っている事だから」

「ん。あァよ、それはそうする」

この島のおかしさってなさることながら、化け物も魔法少女もＥＤＥＮも変なトコだらけだ。ルルゥ・ガルの目的も、あっちのマッドチビの動向も。

全知じゃねェたァいえ、俺の知らねェ情報ってな俺が考えるための基盤になンだ。知れるモンは、教えられるモンは全部貰わねェと。

「魔物とは、世界の淀み……世界を巡る魔力が、けれどなんらかの理由で淀んだり、引っかかったり、溜まってしまった場所に生まれる物よ」

「魔力が、なのか。にしちゃ、高位の化け物しか魔力を扱えねェよォだが」
「別に魔力から生まれるわけではなく、そういう場所に生まれるもの、というだけ。それらは俗に自然形成の魔物、と呼ばれるわ」
「あァ、ランダム湧きか。あ、もう一個聞きたい事できた……が、まずこっちを聞くとするわ」
「そうね。話が混ざってしまうと面倒だから。ええと、そう。自然形成の魔物は、そういう場所に生まれる。さっきなんらかの理由と言ったけれど、そういう場所には大抵魔力を淀ませるに足るものがある」
「……そいつァ、たとえばなんだ？」
「沢山の血液の流れた戦場。大きな動物の死骸。燃えた山。枯れた古い樹木。干上がった湖。――魔法少女の、死んだ場所」
「それァ」
フリューリ草の生える場所、じゃなかったか？
いや、それ以上に……なンだ、そのラインナップ。余りに死に近すぎる。死を好むのか、化け物ってな。いや、魔力が好んでいる、のか？

「魔力が淀めば、環境ができるわ。要するに自然の蘇生槽よね。不安定極まりないけど、命を生むに足る環境が整う。そこに住みついた生物は、住んでいる内に自然の蘇生槽との経路が出来る。その生物が死ぬことで、ようやく魔物になり得るの。死んで、けれど不安定な蘇生槽で蘇生した生物は、魔なる物として世界に認められる」

「待て。ちょっと待てよ。そういう言い方をしたら、まるで」

「魔物と魔法少女が同じみたい、って？　そうね、大部分はその解釈であっている。ただ、ちゃんと違う部分がある。もう少し黙って聞きなさい」

「あァすまねェ」

ちょいと先走ったな。

だが、蘇生槽ってなモンの作り方も微妙にわかった、ような？

「基本的に自然に形成された蘇生槽というのは一回きり。魔物を産み落とした瞬間に崩壊し、世界を巡る流れに還っていく。これが自然形成の魔物の発生原理」

「じゃ、湧きポってな、それが崩壊しなかった場所、か？」

「そうね。余りにも良い自然環境が整ったか、余程強い死が宿存しているか。一度

だけの奇跡で魔物を産み落とすに飽き足らず、そこに根を下ろして花を開くにまで至ったもの。それを形成地点と呼ぶわ」

「花……」

また、フリューリ草を彷彿とさせる言葉。

……ん、だが待てよ。

「そこに住みついた生物が死んだら、って話だったよな。化け物が形成されンのは。じゃ、湧きポになった後に生まれてくる……一匹目以外の化け物ってな、なんなんだ」

「同じよ」

「そいつァ、どういう」

「だから、同じなのよ。最初に登録された生物を元に発生した魔物と、寸分たがわず、毛先の一片から細胞の一つに至るまで、同一。形成地点から生まれ出でる魔物は全てが同一であり、そしてその全てが一部に共通の意識を持っている。同じ魔物は考える事も好きなものも逃げ出す判断も完全に同じ。複製、に近いわね。個体差なんて無いのよ、少なくとも生まれた直後は」

「……そりゃ」

恐ろしい話だ、と。

そう思った。

最後の注釈は、それでも化け物に個体差がある理由だろう。生まれた後にどう生きたか――考える事も好きな事も逃げ出すタイミングも同じだとしても、餌には限りがあり、あらゆる物事には運が付随する。そうして差がついていく。

同じものが違うものになっていくんだ。

「だからこそ、魔物はそれぞれの死の間際、一部分に残された共通の意識を用いて同個体に情報を伝えるわ。何が危険である。何には勝てない。何がいる。何がある。言語にはならない部分で、あるいは私達の知らない言語で死の気配を伝える。そうすることで、種は堆積していく」

「堆積。迷宮でも似た話を聞いたよ」

「迷宮？　あぁ、終の因に入ったの？　……あそこ、普通にSS級くらいの難度だと思うんだけど、良く死ななかったわね」

「この腕ァそこで失くしたからな」

「そう。……ということは、ソティラにも会ったのね」
「誰だァそりゃ」
「あの迷宮の主よ」
「あァ。アイツそんな名前なのか」
名前あったのか。
化け物のくせに。
「話を戻すけれど、そうすることで魔物は知識を付けて行く。人間よりも早い頻度で何度も何度も進化が起きる。そうなってくるともう最初の生物から生まれた魔物、なんてのは影も形もなくなるわ。それが魔物の進化であり、多様化であり、本能。単なる獣によく似たナニカから、既存の獣とは比較のしようがない程にかけ離れた生物になる」
あの時迷宮の主……ソティラに言われた言葉。
――≫あの子達が積み上げてきた経験とか、感情とか、そういう記憶の一切を無に帰す魔法でしょー？≪
――≫強きとして生まれた種としての堆積も、本能に取り残された使命も、絶対を

誓う約束も、全部全部なかった事にして、無理矢理≫終われ≫っていう魔法じゃん≫

――≫否定だよ、それは≫

「……なるほどな」

「理解が早いわね。吸収の良い教え子は楽でいいわ。アンタ以外教え子なんか持ったことないけど」

「ん？　あァ、私ァこれでも一応学生でよ。習う準備ってなできてんのさ」

「それを言ったらエデンの子は結構な割合が学生だと思うんだけど」

「まー。そりゃそォだな」

別の事を考えてた、なんて口が裂けても。

で、それが湧きポとは何か、化け物とは何か、って話と。

「それで、さっきの話。自然の蘇生槽と魔法少女の蘇生槽、及び魔物と魔法少女の違いについて、だけど」

「あァよ」

「まず、自然の蘇生槽というのはさっき言った通り極度に不安定で、基本的には一度使ったら崩壊してしまうような代物。加えて一種類の生物にしか経路が通らない

から、形成地点になり得たとしても同一の魔物しか生まれてこない。ここまではいいわね？」

「おぅさ」

「で、魔法少女の蘇生槽は特別な材質で作るし、特別な場所に設置しなければならないもの。一回の使用で壊れたりはしないし、魔力を持つ肉体の生成もできる。特別な場所というのは地脈点よ。魔力の流れ込む場所。そこ以外に設置しても、たとえ材質を同じにしたとて蘇生槽足り得ないわ。また、地脈点であったとしても入り込む魔力の少ない場所であったらダメ」

「うんさか」

「そういう色んな条件を整えた上で作られた魔法少女の蘇生槽には、数多の魔法少女との経路を繋ぐことができる。魔法少女にも蘇生槽と共通意識を持つ器官があって、だから魔法少女は死んだとしても記憶を引き継いで蘇生できる」

「えんどりゃ」

「……どれだけ適当な相槌を打って怒られないか、を探っている……なんて事は無いわよね？」

「まさか。真面目に聞いてるよ」
　はは。
　まさかまさか。
「まぁいいわ。で、ここで気付くと思うのだけど、形成地点と魔法少女の蘇生槽では明確に役割が違うのよ。それが何か、じゃあ言ってみて」
「元の生物を化け物として作り変えるのが自然の蘇生槽や形成地点。魔法少女を同一の魔法少女として生まれ直させるのが魔法少女の蘇生槽、って話じゃねェのか？」
「惜しいわね。及第点はあげる。いい？　魔物の形成地点というのは、魔物が進化するためにあるの。同一の意識と共通の意識を持つ魔物達が、形成地点を通して進化していく。前に進んでいく。生物として生まれ出ることのできなかった自分達を、世界に認めさせていく。そのための場所。でも、魔法少女の蘇生槽は――進化のためでなく、停滞のためにある」
「停、滞？」
「魔物は死ぬとき、もう死なないために知識を与えるのよ。もう死なないために、

もう苦戦しないために、より強くなるために形成地点へ意識を残す。それを得て生まれてきた己が同じ失敗をしないように。新しく生まれる己が死なないように。でも、魔法少女はそれをしない」

「……いんやさ、私にとっちゃあんま好ましい話じゃねェが、遠征組なんかは調査内容を死んで持ち帰って周囲にフィードバックするだろ」

「でもそれは、ただの知識よ。技術、と言っても良いわ。魔法少女が死んで情報を持ち帰るのは、ただの裏技。役割でも役目でもない。いい？　魔法少女の蘇生槽は、その魔法少女が生き返るためだけにあるの。進化のため、じゃなく、ただこの世に留まりたいがためだけにあるもの」

それが、停滞だと。

マッドチビ先生は言う。

魔法少女は、まるで――生物としてやるべきことをやっていない、みたいな。

「さっき言ったちゃんと違う部分ってな」

「魔物の方が生物らしいという点において、魔物と魔法少女はちゃんと違うのよ」

「……」

「ま、その点で言えばアンタはかなり生物らしいけれどね。死にたくない。ええ、生物ならば当たり前でしょう。たとえ新しい自分が蘇生槽から生まれ出でるのだとしても、記憶が地続きだとしても、今ここにいる自分は今ここで終わってしまうのだから、死にたくない」

「あァさ、一応、礼は言っておくよ」

なんか……あァでも、確かにこんな話はエデンじゃ教えないのかもしれない。

いや、俺が習ってねェだけで、知ってンのかな。みんな。

「だからアンタの殺す殺さないの判断基準もよくわからないんだけどね。魔物も魔法少女も似たようなものなのに、魔物を殺すのには躊躇なくて、魔法少女を殺すのは敵でも無理、なんて」

「別に私ァ殺しに酔ってるワケじゃねェからな。化け物共が襲ってこねェんなら無暗に殺したりしねェよ。どっちも殺したいと思っちゃいねェが、化け物は襲ってくるから殺してるだけだ」

「私やルルゥ・ガルは？」

「……ルルゥ・ガルに関しちゃ、次会ったら部位の殺しはするつもりだったよ。マッ

ドチビ先生も、こうも色々言葉を交わす前は……ちゃんと、もう動けなくなるくらいまでには殺すつもりはあった」
「でも撃たなかったじゃない、アンタ」
「気付いてたのかよ」
「一人だけあんな離れた場所に行って銃構えてる奴に注目しないわけないじゃない」
「仰る通りで」
そうさ。
撃てなかった。
獣は殺せる。化け物は殺せる。だが、魔法少女は。あるいはヒトは。
「ま、安心なさい。今ちょっと考えてみたけど、多分そっちが真っ当よ。私の目にはもう、魔物も魔法少女も特に変わらないものにしか映らなくなっているけれど、姿形が自分に似ているものを殺したくない、という倫理観はあって然るべきだわ。ごめんなさい、多分これに関しては、私が間違っている」
「……あァ」
果たしてそう、なのだろうか。

俺は……あの、明らかにヒトみてェな姿をしているソティラを化け物だって思ってる。心から。もし牙を剥くなら——殺せる、と思う。

何が違うのか。

俺ァ、何を判断基準にしているのか。

「それで？　最初に言ってたもう一つの聞きたい事、っていうのは、何なの？」

「ん？　……あァ、なんだっけ。いや、そう。そうそう。魔力だ」

「魔力？　……魔力とは何か？」

「それもだが、世界を巡る魔力ってな何だって話。ちげェな、なんで巡ってンだ、ってのを聞きてェんだ」

「わかった。じゃ、とりあえずあのデッカイのガーゴイルに変えてから、その話をしましょう。流石にアレをそのままには飲み込めないから、いい感じに脚を殺してくれると助かるわ」

「りょーかい」

雨が降っている。

その中でも——見える、巨大な影。

勉強会はいったん中止だ。ま、魔法少女は風邪なんざ引かねェんで、普通に作業しながらの勉強会だったンだが。

巨大だ。

巨体だ。

大きく伸びた首は――切り立った崖の上、つまり島の上のほうにまで届くほど長く、それを支える胴体は大岩如きでは済まされない。コイツ一匹でも島に見間違うような、でけェ恐竜。

ブラキオサウルス、って奴さな。

「――色々話聞いた後ですまねェが、やっぱり私ァお前を化け物にしか思えねェや。否定だろうと、なんだろうと――死んでくれ」

その巨大さから、俺達にも気付いてねェ、つまり襲ってきてすらいねェ奴だが。

……矛盾なんざ、わかってる。気付いてる。ダブスタ嫌ってる癖に、結局そォなってンだろう。

だがそれを、言葉に紡いでも、口にしても――心の底から、すまねェとは思わねェ自分がいンだ。

「【即死】」

だってお前達は、いちゃなんねェだろ？

遠《ｔｅｘｔ：s1・2》吠えは遥か彼方に《≪ｔｅｘｔ》

島の化け物のガーゴイル化は着々と進んでいる。

島の中心部にァ一応行ってきた。が、色々と問題点があったために拠点へと帰還。島中にいる恐竜を全部模造して、精神体入れて、恐竜ガーゴイル軍団ってなが出来上がりつつある。

見た目恐ろしい限りだが、一度ブラキオサウルスの背に乗って歩いてもらって……その、年甲斐もなくはしゃいじちまった自分がいる。コイツの製法がどんだけ恐ろしいモンで、どんだけ倫理を侵しているモンかってなわかってるし、決して遊びの道具じゃねェのはわかってんだけど……なんだろォなァ、男の子の部分、というか。

恐竜の背に乗って移動、とかさ。

……ちょいとさ。な？

「そう言えば、この前の、なんだっけ。ブラキオサウルス？　が案外強くてアンタが魔力不足でバテちゃったせいで終わった話だけど」
「あァ事細かな説明どーも。魔力の話だろ？　頼むよ、聞きたくて夜も眠れなかったんだ」
「夜明けまで魔力回復でぐっすりだったくせに何言ってるんだか」
「仕方ねェだろ。フリューリ草の補充ができねェんだ、睡眠でどうにかなる部分は節約していかねェと」
「はいはい」
俺のやることってなもっぱら戦闘だ。【即死】ァクリエイティブな事にゃとことん向かねェし、そもそもマッドチビ先生が手伝いを嫌うからな。アイデア出しはたまに求められるし結構聞いてくれるンだが、造形に関しちゃ５００年の拘りがあンだと。
まァ俺自身芸術だのなんだのってなとんと疎いからいいんだがよ、たまにこうして手持ち無沙汰な時間ができる。
……マッドチビ先生は俺が魔力回復で寝てる時間も作業してたってンだから、ちょ

いと罪悪感もな。
「まず魔力とは何か、について説明するけど、その前にアンタがエデンで習った事を教えてくれるかしら」
「ん。教本通りでいいなら、魔力ってな、自己より出でるモノ。己の内側にある、外に働きかける力だ。私達ァ意思を用いることでこれを形にする。肉体を強化したり、知覚を強化したり。出力が大きくなりゃ飛んだり跳ねたりもできるし、亜空間に物を収納することもできる」
「……なにそれ。もっと細かい説明は無いわけ？　アンタ、それ聞いてて〝ナニソレ〟ってならなかったの？」
「なったよ。最初はマジで意味わからんかった。だがお嬢達……あァクラスメイトが色々教えてくれてよ。先公も結構根気よく教えてくれたし、私もあんまし苦労かけたくなかったンで、理解を急いだ。具体的にァ他人が魔法使ってるとこ見てな」
「成程。教本は正直言ってゴミだけど、教師陣はそれなりにしっかりしているのね」
「ゴミなのか」
「ゴミね。そんなことを教えている教本、焚火にでもした方がまだ役に立つわ」

まァそれァ俺も思ってた。

これ当たり前の事しか書いてねェな、って。でも一般人からいきなり魔法少女になった奴に渡す教本って考えりゃ妥当だろ、とも思ってた。俺ァ前世の記憶で魔法ってなが大体どんなものかってのァ知ってるからよ、それで他よりも習熟速度は速かった方なんだ。同期ァいねェが、俺よりちょっと前に魔法少女になった、っつー子が上手く魔法使えねェって嘆いてたこともあったしな。

だから、教本に書くのは基礎中の基礎で、応用は学園生活と共に教えて行くンだと思った。魔力や魔法への理解とかも、そこで。だから全部読破したンだ。これは魔法少女として本当に最低限覚えるべきこと、だと思ったから。

「いい？　魔力っていうのは、世界を流れる血液のようなものよ。世界を巡る魔力がそのままこれと同じ意味ね。魔力は世界にとっての血液。だから淀んでいてはいけないし、それが滑らかに流れている場所は、それこそこの場所のように木々が生い茂り、鉱石に恵まれる。逆に淀んでいる場所には魔物が溢れる他、自然環境も少しずつ悪くなっていく」

「血液……ってことァ、なンか運んでンのか？」

「へぇ、そういう知識はあるのね。そうよ、魔力は世界を循環することで、精神体を運んでいる。精神体というのは入れ物がないと漂うことしかできないのよ。そこに大きな流れが来たら、押されて流される。そして世界に還る。まぁ蘇生槽や形成地点に経路が繋がっていればその限りじゃないんだけど」

「じゃァ、精神体ってな、世界の栄養か何かか？」

「正解。世界に欠かせないもの。世界が世界としてあるために、世界が生き続けるためになくてはならないもの。それが精神体」

「……じゃァよ、マッドチビ先生がやってることって」

「まあ、普通に病巣よね。必要な栄養掠め取って石に閉じ込めてるとか、世界に意思があったりしたらすっごく怒られそうなこと。やめる気ないけど」

倫理としてもアレだが、世界に対してもアレな行為だった、と。

やっぱこのマッドチビ先生尊敬しない方がいいんじゃねェか？

「話を続けるけれど、じゃあ魔力というものが世界を流れる血液だった場合、私達……つまり魔力を宿し、操る魔法少女というのは、何だと思う？」

「んー。……あー。魔力が血液だってのァ変わらねェ。んで、魔法ってなは世界

のそれぞれを一身に担うもの、だか言ってたな。司る云々。って考えりゃ、内臓、じゃねェか？」

「正解。魔法少女は世界の内臓よ。魔法少女に覚醒することは、なんでもなかった細胞が突然一つの内臓になること、と考えて良いわ」

「そりゃまた物騒なたとえだな」

「どうしてそう思うの？」

「役割がぶつかり合うだろ。世界を運営すンのにどんだけの役割が必要なのかは知らねェが、魔法少女は死なねェんだ、増えりゃ増える程役割が被って行って、いらねェもんが出てくンじゃねェのか」

人間に二つ目の胃を移植したら倍もの食える、ってワケじゃねェのと一緒だ。スペースだって取るし、それらを稼働させるにゃ相応のモンが必要で、当然栄養も取られちまう。一つだからこそバランスの良いソレが、二つ三つ四つになっちまったら——そもそも人間じゃァなくなるかもしれねェ。

機能的にも、見た目的にも。

「そう思えるのなら、話が早いわ。じゃあ世界の内臓である魔法少女は、彼女らの

持つ固有の魔法というのは、何だと思う？」

「何って……世界を改変したり、変質させたりする……ン？」

なんでだ？

マッドチビ先生の【鉱水】もそォだが、班長の【凍融】とか、冷静メイドの【侵食】とか……下手すりゃ世界を壊しかねねェ魔法ってなは、なンである？

身体強化や飛行魔法は別に世界をどうこうする魔法じゃねェ。例えるならせいぜいが胃の調子をよくするとか筋肉量を増やすとかその辺りだろう。

だが、固有魔法ってな、なンだ。

あァさ、上に列挙したモンだけじゃねェ、全部の魔法がそォだ。世界を改変し、変質させ、新たな認識を植え付ける。魔法ってなそういうモンだ。なンだ、そりゃ。

んなもん、内臓が持っていていい機能じゃねェだろ。

「気付いたかしら。魔法少女というもののおかしさに」

「……多分。魔法少女というもの、っつーか、魔法のおかしさだ。存在理由が今んとこわからん。なンだってこんなもんが存在する？　魔法は……世界にとって、不要じゃねェか？」

「いいわね。そこまで行けるのなら、教え甲斐もあるわ」
マッドチビ先生が不敵に笑う。
不敵？　ニヒル？　――嘲り？
「増えるだけ増えて、減って行かない魔法少女。当然役割の被る……下位互換、上位互換の魔法を使う子も現れる。世界を司るとされた魔法は、けれど内臓が持つにしては余りに強大。内臓の範疇……つまり、水を水のまま操る、だとか、空気を空気のまま押し出す、だとかじゃなく、意のままに操り、意のままに変えるモノ。世界を世界でなくさせる、世界を別のモノに作り変えるモノ。なぜそんなものがあるのか。なぜそんなものがあるのか」
答えは簡単よ、と。
そう、続ける。
「初めは、魔法少女なんていなかったの。最初にあったのは人間と魔物と魔力だけ。後から出来た魔法少女は、世界を強制的に前に進めた。進めてしまった。閉じた輪の中で永遠に平穏だったこの世界を、無理矢理生きたものにしたのよ。自分達の出現によって、ね」

「……そぉいう顔で言うってこた、それァ悪い事なのか」
「当然でしょ。生きていなかったものを、生きるものにしたのよ。なれば当然――その先には、その果てには」
「死が、訪れる」
内臓になることで、世界に死を齎した、不要で死なない害ある器官。
それが私達魔法少女よ、と。
魔法少女ディミトラは、笑いながら言った。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「なァよ、マッドチビ先生」
「何よ。また質問？　いいけど、もうちょっと待ってくれる？　今選別中なのよ」
「魔力が何かはわかった。化け物が何かもちったァわかった。魔法少女が害なのも

理解した。んじゃ、創設者達が作り上げたＥＤＥＮってな、なんだ。そいつらも理解してたんじゃねェのか？　自分達が害である、ってこと」

「……それについては、私からはなんとも。私だってこれらを理解したのは魔法少女になってから……３００年くらい経ってからだし」

「どォやって理解したンだよ」

「……アンタがＳ級かＳＳ級になったら自ずとわかるわ」

「なンじゃそりゃ」

作業は進んでいる。

さっきから何の作業をしてンのか、って。

そのマジのドラゴンとやらの鉱石集めである。

単なる岩は勿論、純度やら硬度やら成分やらで色々とできる事が変わるらしく、そのために島々を巡って【鉱水】でゴリっと持ってくる作業。既にいくつかの島は消えている。自然保護？　聞こえねェなァ。

「高位の魔物もだけど、強い魔力を持つようになるとね、色々と、わかるのよ。世界に対する自己の役割とか、本能に取り残された使命とか……。ま、多分世界側か

らの抵抗なのでしょうね。内臓を名乗るくらいなら、少しくらい仕事しろ、っていう」

「ってこた、ＥＤＥＮの魔法少女達も、Ｓ級ＳＳ級の奴らァ知ってる可能性が高ェのか？」

「言語や知識として理解しているかどうかは怪しいけどね。オーレイアは理解してなかったし。ただ、自分が何を求められているのか、くらいはわかるんじゃない？　私は意図的に無視してるけど」

「無視してンのか。つかできンのか」

「最初の頃は従いかけたけど、私のやりたいことと違ったから。なんで私が迷宮なんか作らなきゃいけないのよ。意味わかんないでしょ？」

「迷宮作れ、って言われてンのか」

「作れって言われてるというか、作りたくなるというか？　あぁ、ソテイラがあの迷宮を作り上げたのも同じ理由じゃない？　作れって言われたから作ったのに、魔法少女に攻略されて、元の場所から持ち上げられて、その上に学園やら何やらまで作られて。一応同情はしているわ」

……いや、それはどうなんだろォな、って。
数十、あるいは百に届くガーゴイルの群れ。荘厳な装飾の島。地下へと続く階段と、区切りごとに設置された階層。
最後に待ち受けるは巨大なガーゴイルと鉱石を司る魔法少女。
人工島クルメーナってな、紛う方なき迷宮じゃねェか、って。
いや、あるいはＥＤＥＮさえも――？
「だから、案外ＥＤＥＮの創設者たちも、世界のどこかに迷宮を作り上げている可能性はあるわねー。私みたいな天才じゃないと拒絶できないだろうし」
「世界はなンだって迷宮なんざ作らせてンだよ」
「知らないわよそんなこと。……よし、選別作業終わり。じゃ、そろそろ行きましょうか。島の中心」
「ん。……前、行けなかったモンな」
「一応いることはわかったんだし、行かなくて正解だったでしょ。前準備も無しに近づいたら二人とも死んでいたわ」
「そいつァそォだがよ」

どうやら勉強会はここまでらしい。
とうとう、島の中心へ行く時が来た。
つい最近っつーかちょいと前っつーか、とりあえず地脈点を見に近くまで近づいた時ァ――マジの奴がいたんだ。
マジの奴。
いやさ、プテラノドンだのティラノサウルスだのブラキオサウルスだのと、割合俺でも知ってるよォな連中ばっかりでさ、油断してたってのはある。いたとしてもティタノサウルス……マクロナリア系の何かであって、いやさドラゴンなんざいるワケ、なんて。
まさかまさか、火の玉吐いてくるなんて、って。
俺もマッドチビ先生も、油断しきって近づいたら――わァ大変。
でけェ翼にでけェ胴体。なげェ尾。鋭い爪。こえー顔。燃え盛る口元。
マージなドラゴンが、そこにいた。
「どォすんだ？　素直に近づいても無理だと思うんだが」
「大丈夫よ。この辺にあった黒曜石ありったけ【鉱水】で持ってきたし、新生ガー

ゴイル軍団もいるし。最悪ぶっ倒れても必ず助けてあげるから、アンタの【即死】でなんとかなさい」

「エ？　【即死】させたらダメなンだろ？　部位だのなんだのはともかく、命奪ったら精神体奪えねェじゃねェか」

「……そうね。失念していたわ。絶対に殺さないで」

「おいおい、決戦間近にアホ晒すのァやめてくれマッドチビ先生」

「はぁ。その呼び名、慣れちゃった自分が嫌だわ……この口悪ちび」

「おォさ！」

「なんでちょっと嬉しそうなのよ」

あんま名前でもあだ名でも呼んでくれねェからな、マッドチビ先生は。

俺とおんなじ理由かと思いきや、単純に「アンタで通じるからいいでしょ」とのこと。さいで。

「じゃあ――行くわよ！　ドラゴン退治！　加えて最強のガーゴイル作りのために！」

「おォさ。ここから出て、ＥＤＥＮに帰って――聞きてェ事聞くのと、ルルゥ・ガ

ルの野望と、あっちのマッドチビの策略を砕くために」
おー！
なんて。
……まるで、長年を共にした仲間みてェな事やって。
俺達は、出陣した。

遠《ｔｅｘｔ･s1･2》吠えは遥か彼方に《／ｔｅｘｔ》

八、休息編

29・其有亞是阿・

少なくとも俺ァ、こういうカタチの恐竜を知らない。

想像上の……なンだ、ヨーロッパ文化にあった西洋の竜みてェな形ではある。足を長くして、飛べるように翼を付けたワニ、みてェな。ドレイク、つった方がいいか？

だがまァ、一般に想像されるドラゴンってなこうだ。確かにこォいうのがドラゴンだ。

マッドチビ先生の作り上げたヘンないきものたァわけが違う。

「――防ぐわ！」

「あァよ、助かった！」

そのマッドチビ先生の作りだした黒曜石の盾が、ドラゴンより放たれた火球を防

ぐ。

俺なんざ一瞬で蒸発しかねねェ熱量が空中で止まる姿は圧巻の一言。だが見惚れてる場合じゃねェ。転がって進んで、これまたマッドチビ先生の作り上げた空中へ向かう階段を駆け上がる。

俺が飛行魔法使えねェんで【鉱水】で足場を作って貰うってな作戦にしたンだ。おかげで、余計な身体強化も使わずに済んでる。マジで便利な魔法だよ、【鉱水】ってな。

「――死ね、うォ!?」

絶好のタイミングでの【即死】。

けれどそれは、入らない。窺いに窺った隙だったはずなのに、ドラゴンは俺の手から逃れ、空へ大きく飛び立った。

仕方ねェんで【即死】に使うはずだった魔力を身体強化に回し、落ちて行く身体の姿勢を整える。

それを拾ってくれるは、プテラノドンのガーゴイル。

「悪ィ、助かった」

キェー！　なんて鳴くプテラノドンのガーゴイル。……プテラゴイルでいいや。

マッドチビ先生の意思で動いてるわけじゃねェ、あン時のプテラノドンの精神体で動いているだけのはずのソイツから、なんだろな、やっぱり「やれやれ」みてェな雰囲気を感じる。あの空域警戒網のガーゴイルもそォだったが、なんだってこんな――。

「集中なさい！　ガーゴイルは簡単な指示を受け付けるよう設定してあるわ！　行きたい場所があるなら言ってきかせなさい！」

「あァよすまん！　おい、プテラゴイル。アイツの高さまで行ってくれ」

また大きく鳴いて、プテラゴイルは大きく翼をはためかせる。

そのまま真っ直ぐではなく旋回する形で上昇していく。あれ、プテラノドンって上昇できるんだっけ？　滑空飛翔……いや、化け物だしな。恐竜に然して詳しいってワケでもねェんだ。今は信じよう。

ドラゴンはバッサバッサと島の上空を飛んでいる。

俺の乗っていないプテラゴイルが突貫しては炎に溶かされたり翼や尾で叩き落されたりしていて、本体に入ったダメージってなほとんどないように見える。

フツーにやべーよ、あれァ。
「おいお前ら！　攻撃ァしなくていい！　私がなんとかするから、落ちた時のバックアップだけしてくれ！」
キェーキェーからギャイギャイと騒がしくなる空。
突貫するプテラゴイルはいなくなり、ドラゴンの周囲をぐるぐると回り始めた。
先ほど溶かされたり壊されたりした奴も下――マッドチビの手によって復活し、この周遊に加わる。
時折下の方から鉱石の槍が飛んでくる。が、ちょいと高空過ぎんのか、あンまり威力ァ出てない。気を引くに終わっている。
それでいい。
「よし、頼んだぞプテラゴイル。火球は避けて、接近してくれ」
俺の乗る奴が機を見るように、少し上の方を飛び始める。
ドラゴンは周囲を飛ぶプテラゴイルに怒り心頭のょぅで、その輪に火球をぶち込んだり、突っ込んでいっての攻撃なんかを繰り返しちゃいるが、ノーダメージに等しい。プテラゴイルァ何度でも復活するからな。

攻撃力はあってないよォなモンだが、流石にうぜェと思ったンだろう。
ドラゴンの視線が――下に向く。
「今だ」
今度は何も鳴かずに突っ込むプテラゴイル。
ドラゴンの視線の先。そこにいるのは、マッドチビ先生。
「やらせねェさ」
「――!?」
叫び声。
ほとんど掠めるようにしてドラゴンの眼前を横切ったプテラゴイルは、主を守るためか、はたまた別の理由か、その身に盛大な火球を受けて――ドロドロに溶けた。
が、その爆発を受けたのァドラゴンも同じ。想定の何倍も近い距離に着弾したそれァ、ドラゴンの外皮を……まァ傷つけたりはしない。けど、目くらましにァなった。
「おっと、暴れンなよ」
プテラゴイルを先に行かせた俺ァ、その背に飛び乗るワケだ。そういう作戦さ。

目が見えなくとも、流石に背中に何かが引っ付きゃ気付く。気付いて、暴れる。が、まァ俺も部分強化ってなをさせてもらってンでね。ちと熱ィが、ここまでゴツゴツした掴みやすい身体だってンなら、いくらでも捕まってられる。
「なァ、何も命奪うってワケじゃァねェんだ――死ね」
■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!?
掴まった場所に、浸す。手からだけじゃねェ、接触してるトコ全部――【即死】で浸す。
「ハハハ！　どォだ、経験したことねェだろ！　首が死ぬってな――ンな、ありえねェこたよ！」
あァ、またこれだ。また来やがった。
気持ちがいい。心地がいい。
似てンのァどれだ。マッドチビ先生との相対か？　光眼鏡との相対か？　クルメーナに乗り込む時か？
いんやさ、この昂揚感は――あの天使の時の奴だ。
ハハ、ハハハハ！

「死んでもらっちゃ困るンでな、悉く死んでもらうぜ、炉威負不暗恵羅（一つの時代の主よ）！」

「――――!?」

「有為修後内途（夢だったらと、願えよ、夜に）畏怖座頭僅阿土利無≫！」

殺す。殺す。殺す殺す殺す。

その身に、灼熱の身に抱き着いて、至る所に【即死】を発動させていく。

火傷も気にしねェ。ハハ、ハハハ！

「ハ――あ、やべ」

ふら、と。

力が抜ける。

俺からも、ドラゴンからも。

俺は魔力不足。

ドラゴンは死んじゃいねェが、翼を殺しちまったンで落下。

やっべー。

遠《ｔｅｘｔ:s1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ちょっとは考えて魔法使いなさいよ！」
「いんやさ、ぶっ倒れても助けてくれるって言ったじゃんよ」
「限度があるでしょ限度が！　それに、死にたくないとか言ったくせに、そんな火傷までして……！」
「火傷？」
おー。
確かになンか、ヒリヒリするよォな。
身体だるすぎて何も考えられないんだが。
いんやさ、プテラゴイルたちが受け止めてくれて助かったよ。
ドラゴンはマッドチビ先生が【鉱水】でキャッチしてくれたし。うん、仕事ァしたな、俺。
「……あとは任せていいか、マッドチビ先生」
「ええ。任せなさい。アンタが起きる頃には、本物のガーゴイルドラゴンが完成しているわ」
「そりゃァ……楽しみ、だ」

意識を失う。
暗闇に落ちる。
……なんでこんな、安心できんだろォな、その言葉は。

朝。いや昼か。
夕方の討伐作戦から、昼までだから、まるっと12時間10時間ァ寝たってワケだな。
身体……全身に巻かれているのは包帯と、なんぞ左半身にァベタベタする液体。
「いっ……ってェ。あァ、痛ェ。いてーなオイ」
ベタベタする液体が塗られてンのは痛い場所だ。左腕の内側、左足の内腿、左の脇腹。左頬に左目周辺。魔法少女の衣装に覆われている部分は大丈夫だったらしいが、それ以外がダメだった、と。
ちょいと動き難い身体に鞭打って、洞窟の外に出る。
「……おー？」
えーと。

ここ、あの諸島だよな？
……なンで更地になってンだ。
拠点にした洞窟以外――島が、綺麗サッパリ無くなってやがる。
「あら、起きたの？　別にいいのよ、もう少し寝ていても。まだやることあるし」
「ん……ん―？　どこだ、マッドチビ先生。今包帯のせいでよ、右目しか見えねえンだ。出て来てくれると助かる」
「上よ、上。ま、姿は見えないと思うけど。伝声管で声出してるだけだし」
上。
――あった。
そこに、あった。
違う。
いるんだ。
「……やっぱ模造ァ、超絶上手いな」
でけェ。超でけェ。バリでけェ。
やばでけェ。それはもうでけェ。

でっっっけェ、ドラゴン。
「ふふん。どうよ。天才彫金師ディミトラ様って、今度こそ呼びたくなったかしら？」
「彫金師の仕事じゃねェ気がするが、形あるモンを真似して仕上げる事に関しちゃマッドチビ先生の右に出るモンはいねェよ。天才だ、これァ」
「……何よ、張り合いが無いわね。素直に褒めるじゃない」
「いんやさ、この手当してくれたのもマッドチビ先生だろ？　このドラゴンの造形もそォだが、私ァ命の恩人にァ敬意を払うクチでね。今まではギリギリ命を脅かす相手だったンで軽口も叩いちゃいたが――あァよ、ありがてェ。そんで、すげェ。天才だよホント」
「や――やめてよ。アンタと煽り合うの楽しいんだから、そんな反応しないで」
「おゥ悪かったな模倣しかできねェ想像力欠如芸術家」
「火傷してるトコぶっ叩くわよ」
まァ、そういうこったな。
このベタベタする液体のついてるとこは火傷したトコで、アロエかなんか塗って

くれてあンだろォが、多分、確実に――痕が残る奴。
もうちょっと考えて魔法を使え、か。いんやさごもっとも。死にたくないとか言ってるクセに死ぬような行動ばっかりって。いやさ仰る通りで。
なーんも言い返せねェもんな。
何だよ楽しくなっちゃった、って。それで死にかけてたら何も意味ねェだろ。
「んで？　まだやること、ってななンだ。ソイツ、もう完成じゃねェのか」
「その島よ。それもこっちに統合するわ」
「あー。んじゃ、離れてるよ。邪魔しねェよォにさ」
「いえ、丁度いいから乗りなさい。この景色をアンタにも見せてあげるわ」
言うが早いか、ドラゴンの腹の辺りからうにょーんと伸びてくるゴンドラ。
……乗る。
「おォ、案外ひんやりと……って当たり前か。鉱石だし。……当たり前か？　こんなモロに日光受けてンだから、高温になってンじゃねェの？」
「排熱機構はちゃんと組み込んであるもの。断熱構造にもしてあるし」
「へェ、その伝声管どこにあっても聞こえンだな」

「まあね。これだけ巨大だと、色々困るでしょ。艦内にいるのに一々大声出さなきゃとか、探し回らなきゃ、ってなると、面倒だし」
「そォだな。……ン、艦内？」
「ええ。丁度いいから、名付けたの。これは私の第二の牙城。移動要塞・偽竜母艦ＬＯＧＯＳ。どうせクルメーナはその偽物の私とやらに使われちゃってるか、沈められちゃってるだろうし。どうせならもっと使い勝手のいい拠点が欲しかったし」
　ゴンドラによってドラゴンの中に収容されると、中もまたひんやりと涼しい。通路が様々な方向に伸びている。ちょいと探索したい欲に駆られるけれど、壁よりにゅっと突き出た伝声管のある方へ歩いていく。身体も痛いしな。
「ロゴス、ねェ」
「何よ。なんか文句ある？」
「いんやさ、なんでもねェ。ま、ＥＤＥＮに対しちゃ良い名前だって思っただけさ」
「……だから、素直なのやめてくれない？　もっと煽ってきてよ。馬鹿にしてきなさいよ。調子狂うじゃない」
「別に私ァマッドチビ先生のネーミングセンスを馬鹿にした記憶は無ェぞ」

「そう、だったかしら」
「あァさ。クルメーナもシエナもいい名前だと思うしな」
「……そのシエナ、っていうの。私作ってないんだけど」
「あァそォだったわ。んじゃあっちのマッドチビもセンス良いってことで」
「なんか、手柄を横取りされた気分ね……」
歩いて、歩いて。
そこに辿り着く。
ブリッジ、になるのだろう。
硝子か水晶か、とかく透明な鉱石で壁一面の張られた明るい部屋。
伝声管がにゅーんと引っ込んでいき、代わりにソイツが――ブリッジの椅子に座ってたマッドチビ先生が、こっちを向いた。
「おはよ、お寝坊さん」
「あァよ。……そっち、座っていいか？」
「勿論」
座る。

ブリッジの、マッドチビのいない方の椅子。他にも幾人分か座れるようになっちゃいるが、何の意図かね。まァいらなかったらすぐに消せるんだろォが。

ふゥ。

あー。

「良い眺めだな」

「でしょ？」

「あァ」

青々と広がる煌めく海。

遠くの方まで見渡せるほど何も無い海域は、だからこそ水平の丸みがよく映える。

この世界ってな、ちゃんと惑星なンだな、って。

んで、それ以外。

空を飛ぶはプテラゴイルの群れ。プテラゴイルだけじゃねェな、他の翼竜やらなんぞよくわからねェ鳥やら、とにかく空を飛べる奴の、これまた全部ガーゴイルな奴らが周囲を飛んでいる。

クルメーナにいたザ・ガーゴイルみてェな牛頭にコウモリの翼な奴ァいない。全

部が全部、この島にいた化け物だ。

「ＬＯＧＯＳ自体は元のドラゴンの何倍も大きくしたけど、造形はそのままだから、威圧感あるし。中はこんな感じで快適だけど、全部が私の【鉱水】で作られたガーゴイルだから、武装も作り放題だし。何よりあの島で作ったガーゴイルは全部収容、護衛に回してるから、攻防共に抜かりはないわ。私が許可した奴しか入れないし」

「本心から言うが、マジで天才だと思うよ。なんなら私ここに住みてぇくらいだもん」

「ほんと!?　……あ、べ、別にいいのよ。ＥＤＥＮに帰っても。ま、これからＥＤＥＮに行って、アンタや他の戦いたくない子を解放しない、とか言ったら……強制的に引き取らせてもらうけど」

……随分と、嬉しそぉな顔をする。

そういやコイツァ、ＥＤＥＮから来る遠征組や他の注文主と会う時以外、ずっと独りなンだよな。

寂しい、のかね。

「で、どォすんだ。島の統一ってな」
「もう終わったわ。アンタがいないんだから、多少強引にやっても問題ないでしょ」
「そォかい。んじゃもうここにァ用無ェな」
「ええ、そうね。だからこれから、ＥＤＥＮに向かうわ」
「……一つ聞くがよ」
「何？」
こんだけすげーモン作って。
こんだけすげー軍隊作ってよ。
「ＥＤＥＮの場所ってな、わかンのか？」
「――わかると思う!?」
「ンだよその怒り方。笑顔だし」
「あはは、わかんないわよ。そんなの。だから適当よ。大丈夫、世界は丸いんだから、いつかＥＤＥＮにも辿り着くわ」
「マジで言ってる？」
「とりあえず北方に向かうつもりよ。ＥＤＥＮのある大陸は横に長いし、どこその

滅びた国でも見つけられたら私が大体の方向わかるから、そんな感じで行けばいつかは辿り着くわ」

「……ま、私にも何もできねェからな。大陸外の地理どころか大陸の地理もよくわかってねェし。火傷の治療もかねて、ちょいとゆっくりさせてもらうわ」

「ええ、そうしなさい。大丈夫よ、安全に行くから」

「頼んだ」

まァ、なんだ。

コイツの行き当たりばったりにァもう慣れた。

……人の事言えねェ程、俺も行き当たりばったりなのが発覚しちまったしな。

なるようになるさ。

大丈夫。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「そんな都合のいい話が、あるか？」

仮称ドラゴンの討伐は恙なく終了した。うろたえる偽のディミトラ様にライラック様が近づき、その首を掴んで持ち上げた。【即死】を使うのだろうか、と。少しだけ、足に力を籠める。何かあった時に、迅速に動けるように。

先程から……残府様との戦闘時から、少々様子のおかしなライラック様。今の彼女は、何をしだすかわからない。

「今だな？」

「ライラック様……？」

「そぉだよな。だって私なら――今、仕掛ける」

「梓・ライラック様、如何されま」

「――上だ、冷静メイド、シエナ！」

上。上。

上だ。ここは海底よりも下にある空間。冷たい空気は、地下であるから、陽光が届かぬから、だけではなく――その音を、耳に捉える。

身体強化。
「ッ、梓・ライラック様！　早くこちらへ――崩壊します！」
「ライラック様！」
彼女の身体強化より、私の強化の方が速い。
瞬時に彼女の身体を抱き上げる。
「や――っベェ!?」
「ローグンさん！」
「はい。今すぐに脱出しましょう」
天井の崩落はすぐにわかった。先ほど巨大な柱にぶつかった仮称ドラゴンのせいで、この空間を保つための耐久度が削れていたのだろうことは窺えていたから。
「逃がさない――！」
「くッ!?」
寄りて、抱いて、帰る。
そんな瞬間的な判断も、けれど同じくS級とされる偽のディミトラ様には反応されてしまう。

背後にある蘇生槽に罅が入っていることすら厭わず、鬼気迫る表情でこちらに手を伸ばす偽のディミトラ様。

ライラック様の義手に絡みついたのは、恐らく【鉱水】で作り上げたのだろう黒い液体。それは液体でありながら彼女の義手をひたと掴み、離さない。

「――シエナ！　この腕焼き落としてくれ！　大丈夫、神経ァ繋がってねェ！」

「わかりました！　右腕解放。格納高熱刃武装完了。目標確認！　温度上昇――切断します！」

シエナ様がライラック様の義手を切断する。

それにより、【鉱水】の拘束が解けた。

「ローグンさん！」

「はい、今度こそ！」

今度こそ、だ。

今度こそ――守るべきものを、守る。

私はその使命を果たす。

轟音と共に大量の水に飲まれた部屋を後に、階段を駆け上る。流石に偽のディミ

トラ様を救うほどの余裕はない。
魔力残量を気にせず強化を用い、シエナさんは背面の噴射機構というもので飛び。
結・グランセ様の肉体のあるフロアに辿り着いた。
「――すまん、冷静メイド！　時間がねェのは重々承知だ！　だが――」
「心は、大丈夫ですか。貴女がそれをせずとも、恐らくは溺死で……」
「動くこともできねェで、水の入る肺に苦しみながら死ぬのを見逃せ、って？　……無理だよ、そいつァ。私の心なんかより――こっちのが、大事だ」
「……わかりました。ですが、酷な事を言いま、」
「急げ、ってンだろ。大丈夫。私の魔法は、【即死】だからな」
金属の髪に拘束された結・グランセ様。
その首筋に、ライラック様の手が触れる。
「……あァ、終わった。急ごう」
「はい」
ライラック様は私の魔法を恐ろしい、と称す。
けれど。やはり、【即死】の方が――。

「上の階のやつらもちゃんと殺してやろう。じゃねェと、可哀想だ」
「はい。急ぎましょう」
「お二方、そろそろ水が来ます！　早く――！」
その後、オーレイア様、残府知子様。フェニキア・各務様、ケトゥアン様を【即死】させたライラック様。その顔色も、魔力量にも陰りが見える。【即死】は必要魔力量の多い魔法で、そもそも仲間を殺す、という事に極度の忌避を見せていたライラック様。
相当、来ている事だろう。
……守らなければならない。
「ッ、海より上までには来ましたが……」
「ガーゴイル、ですか」
「戦闘用のものも、探査用のものも……周辺域にいたガーゴイルの全てが集まっている可能性があります」
その気配は私にもわかった。
ケトゥアン様程ではないけれど、わかる――とても強い魔力が二つ、それに伴う

無数の魔力群。
「っはァ、っはァ……あァ、大丈夫だ。そのまま外に出てくれ、二人とも」
「……その指示は、先程の〝大丈夫〟と同じものですか？」
「ライラック様。流石にこの量は……」
「こっちァちゃんと理由のある大丈夫、だ。安心してくれ」
その自信に満ち溢れた物言いに、けれど流石にシエナ様を見て。
彼女の、ライラック様を信じる、とでもいいたげな瞳に、私も頷いた。
外に出る。
「……」
「……」
私達を見つけ、少しずつ近寄ってくるガーゴイル種の群れ。
武器を持つものも少なくはない。私の知らない形状のものもいる。更に。
「海中に魚影……いえ、あれは……スネイク種、でしょうか」
「上空にはイーグル種の……ガーゴイルです。海中のものもそうですね」
あと、一歩。

もう周囲を観察している余裕はない。もう間合いに入る。
地面を【侵食】して壁。いや、武器を――。
「おい、マッドチビ！　近くにいンだろ――制御権ァどうだ！」
「取り返したわよ。それにしても、よく襲われないとわかったわね」
「あァ、コイツがあったからな」
コイツ、と。
そう、少しだけ胸を張るライラック様。そこには小さな紋章が付けられていた。
「成程。アニマに上げた奴ね。いいわ、無鉄砲な行動じゃないってわかっただけでも収穫。さて、はいはい。みんなどいてー。主のお帰りよ」
言葉と共に、ガーゴイルの群れが道を開けて行く。
奥から現れるは真のディミトラ様。洞窟で見た彼女。
制御権を取り返した、という言葉は本当らしく、ガーゴイル種は彼女に跪き、動く素振りすらみせない。
「何よ。貴女、傷だらけ……って程ではないわね。けど、顔色が悪い。それに、私が上げた義手……壊されちゃったの？」

「あァ、偽マッドチビにな」
「そ。まあ偽物とはいえ流石私、と言っておくわ」
「何自分の手柄みてェに言ってんだよ」
ディミトラ様は、シエナ様の焼き切った義手の断面を見て、何度か頷きを返す。
一瞬だけシエナ様の腕を見たあたり、恐らく彼女には何で壊されたものであるのかの見当はついていることだろう。シエナ様を作り上げたのが、ディミトラ様であるのだから。
それでも何も言わないのは、ライラック様がシエナ様を守った事を察して、だろうか。
やはり、地下にいた偽ディミトラ様より思慮深く、知恵のある方だと思う。
数十年前に会った時は確かにあちらの偽ディミトラ様のような態度であったと記憶しているけれど、あちらには５００年を生きた歴、のようなものを感じ取れなかった。単純に言動が幼すぎるというのも大きいが。
今回遭遇した、魔法少女の肉体に魔物の精神体を入れて同一人物に見せかける、という手法。

警戒しなければいけない。注意深く、魔法少女らの言動も見なければ。
あるいは――既に入れ替わった者がいる、という可能性もあるのだから。
「ま、接合部に損傷が無いみたいだし、こっちは返してもらうわね」
「そりゃいいが、私の元の腕ァどうしたよ」
「だから三日かかるって言ったでしょ？　今はどうなってるか見に来ただけよ。でもまあ、ちゃんと取り返してくれたみたいだし。あっちの基地にある工房をこっちに持ってきて、ここで貴女の腕も完成させるわ」
「あァよ、頼む。魔力量上げるっつー仕組みは作れそうなのか？」
「誰に物言ってるのよ。私は天才彫金師ディミトラよ？　問題ないわ。時間がかかるだけ」
「そォかい。そりゃよかった」
ライラック様の目的の目途も着いた様子だ。
……これは、上々の結果、と言えるのではないでしょうか。
「オーレイア隊は？」
「……救えなかった。それについちゃ後でもちっと詳しく話すが、殺しちまったよ。

肉体も、精神体も」
「あらそう？　でも、それならＥＤＥＮに還っているでしょうから、問題は無いわ」
「主ディミトラ。その、あまりそのような言い方は」
「……ふぅん？　なーに？　貴女、いつの間に私のシエナをここまで誑し込んだの？　シエナが私に意見するなんて、よっぽどのことだけど」
「いや誑し込むとかンな人聞きの悪ィ事してねェよ」
「はい。主ディミトラ。私は私個人として完結した思考により、梓・ライラック様を好ましいと思っているだけに過ぎません。梓・ライラック様に何かをされた、あるいは篭絡された、といった事実はありません」
「それが誑し込まれた、って言ってるのだけど……。まぁいいわ。シエナ、もうちょっとついていってあげていいわよ。貴女の気が済むまで、ね」
「……ありがとうございます、主ディミトラ」
まぁ、私はエミリー様とキリバチ様一筋とはいえ。
ライラック様もそれなりに罪作りなお方だと思う。ＡクラスＡ班の面々にもそれなりの好意を向けられていたようだし、ヴェネット隊にも縁深い。オーレイア隊

もライラック様を懇意にするだろう。なんならエミリー様とキリバチ様もライラック様に恩義を感じている。

……これは、私もノった方が面白いのでは？

「周囲のガーゴイルは完全に掌握したわ。ついでに、この島を襲撃した魔法少女は見つけ次第全力で攻撃、及び知らせるように命令してある。だから、とりあえず安心して身体を休めなさい」

「……いや待て、オーレイア隊は還った、ンだよな？」

「ええ、そうだけど。それがどうかした？」

「アイツらァよ、マッドチビが叛逆を企ててアイツらを拘束した、ってとこまでしか記憶無ェんじゃねェのか？」

「……」

押し黙る一同。

想定される事態。

ＥＤＥＮが誇る遠征組突撃班全隊の投入。Ａ級より上の魔法少女らが放ち乱れる魔法魔法魔法。

「――ガーゴイルたちを使って、ＥＤＥＮの方角に〝万事無事に終わったから安心して〟みたいな文字出しておこうかしら」
「それで止まってくれンなら御の字だな」
「じゃあどうしろと」
ふむ。
……一応、提案はしてみましょうか。
「私が【侵食】を用いて、あちらに伝達を、というのはいかがでしょうか。ＥＤＥＮには緊急時用の指を一本残してきてありますので、そこから【侵食】、人格権の放棄によって瞬時の移動が可能です」
「ああ、その手があったわね。……まぁ、この子が許せば、だけど」
「んー。……あんまり、快かねェが、これでＥＤＥＮがマジになって問答無用で遠隔魔法、とか撃ってきたら厄介この上無ェしなァ」
「ちなみに私の天敵は【凍融】という魔法を使う魔法少女よ。温度変化なしに凍らせたり融かしたりができる、とかいう意味の分からない魔法の持ち主」
「あァさ、班長は割と話聞かねェとこあるからやばそォだ」

おや。

乗り気、ではないですが……押せば行けそうではありますね。

やはりオーレイア隊の面々を【即死】させたことで、踏ん切りがついたのでしょうか。

……そんなものをつけさせてしまった、という時点で、反省すべき事ではありますが。

「ライラック様。これを」

「これ？　……おい、指じゃねェか。おい待て、だるくて私の身体が動かねェってっつーのは私に非があるたァ思うが、だからって噛み千切った指を口に咥えさせるとかモガムグ」

「私の指なので、大切にしてください。間違って飲み込んでしまわれると、ライラック様の腹部を【侵食】せざるを得なくなってしまうのでお気を付けを」

「――～～!?」

明らかに焦っているライラック様に、やはり面白い子ですね、なんて……護衛にあるまじき感想を抱いたところで、カーテシーを一つ。

「それでは、また。どの道三日後にはＥＤＥＮからの救援が届くと思いますので。……それまで、シエナ様。ディミトラ様。ライラック様を頼みます。特にシエナ様。ディミトラ様がライラック様に何かしようとした場合は」
「はい！　クルメーナの外に連れ出し、守ります！」
「信用ないわね、私……」
「……またな、冷静メイド」
「はい」
終始、顔色を曇らせたままのライラック様に、少しだけ苦笑して。
私は、私の意識を手放した。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

私は私の意識を取り戻す。
「む、ローグン？　なんだ、ＥＤＥＮに帰らなければならない程の緊急事態だったのか？」

「姉さん。丁度良かったです。私が着替えるまでの間に、キリバチ様に報告を。蘇生したオーレイア隊がクルメーナへの突撃等を打診してくるかと思いますが、とりあえず保留にしてください、と」

「ふむ。良いだろう。私にはわざわざメイド服に着替える必要性が欠片足りとも理解できないが、お前にはお前の矜持がある」

「ありがとうございます」

指を入れた小瓶ごと【侵食】したため、棚の一つが壊れてしまったのはご愛嬌。魔法少女になりたての頃はよく部屋にあるものを【侵食】して壊していたものだから、童心に帰った、ということで。

姉であっても初めは見られるのを恥ずかしがっていた自らの裸体も、【侵食】による自己形成が裸となってしまうことがどうしようもないとわかってからは、あまり気にしなくなった。

……ライラック様は、可愛らしい反応をしてくれましたね。

着替えを終える。

司令塔が少しばかり慌ただしい所を見るに、姉はしっかり伝達をこなしてくれた

と見る。

ではその確認と、これから蘇生してくるであろうオーレイア隊の皆様に説明をしなければいけないだろう。

すべての伝達が終わったら、またあちらに【侵食】をして……とすると、三日ほどは暇になってしまうでしょうから、お茶の用意やライラック様の好むトロピカルジュースなどを用意していってもいいかもしれませんね。

確か、パルリ・ミラのスイーツが大好物、でしたか。

「何はともあれ――無事、任務完了ですね。……三日後、ではありますが」

今回の功績も含め、ライラック様はA級と呼び得るだろう。私達の助けがあったとはいえ、オーレイア隊の面々をしっかりと相手取り、無力化せしめたのだ。加え、事態の解決も。

十分です。

とはいえ、敵の魔法少女や偽のディミトラ様の用いた手法など、警戒すべき点は多い。

気を引き締めて、行きましょう。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

……その後。

錯乱に錯乱を重ねたオーレイア隊をなんとか宥め、私はクルメーナに再度出向。ライラック様とシエナ様とディミトラ様が揃って釣りをしている、などという珍妙な場に遭遇し、恥ずかしながら素っ頓狂な声を出してしまったのは苦い思い出。

そこから三日間、本当に平和な日々が過ぎました。

そして。

「おおー」

「どうかしら。違和感とか、ない？」

「あァすげェよマッドチビ。はは！　指も動かせる！　どォなってンだこれ」

「それはひ・み・つ。それよりほら、目玉の機能があるわ。適当に魔力使ってみなさい」

「あァ！」

まるで新しい玩具でも買ってもらったかのようにはしゃぐライラック様。
目を閉じて、普段の彼女であれば絶対にやらない全身強化を行う。当然、すぐに切れる魔力。
すると、新しい義手が仄明るい光を発し――。
「お、お、ォ？　なンかが、伝ってくる……」
「回復したでしょう。ふふん、どう？　なんならちょっと気持ちいいでしょ」
「それァよくわからねェが、確かに……回復した。ほとんど全部使いきったのに、全回復してる」
それは、偉業だろう。
魔力回復は全魔法少女にとっての課題。元より魔力量の多い者はともかく、A級であっても魔力量に困っている者は多い。
これが普及できたら、EDENはもっと……。
「そこ。これが普及できたらEDENはもっと発展できる、とか考えてるんでしょうけど、無理だからね」
「何故かを聞いても？」

「いいわ。教えてあげる。その義手は、伝承鉱石という稀少な鉱石でできているわ。MYTHOS（ミュトス）、なんて風にも呼ばれるわね」

「……それは、架空の鉱石では？　オリハルコンやヒヒイロカネに並ぶ、人々の想像上の鉱石。知識としては知られていても、見た者はいない、という……」

「たかだか50年そこらで死ぬ人間の学者と一緒にしないでくれるかしら」

「……そうですね。差し出がましい真似をいたしました。申し訳ございません」

「いやそこまで謝らなくてもいいけれど。……それで、ミュトスは産出量が余りに少なくてね。数は作れないのよ。これはあくまでお礼。色々言ったけど、私の大事なクルメーナを取り戻してくれた、というのは事実だから」

おォー！　とかすげェー！　などと言っていたライラック様も、流石の希少さに驚いたのか、義手をなでなでと摩る。

……一々反応が可愛いですね、この方は。

「とにかく、それ貴重だから。貴重で、魔力を貯め込むことが出来て、あと耐久性能も高くて……とにかく、貴女からの要望は全部満たしたつもりだけど、どうかしら？」

「ありがてェ。心底気に入ったよ。ありがとうな、マッドチビ」
「一切ありがとうと思っていないあだ名のような気がするけれど、受け取っておくわ。ああ、けれど、これだけは気を付けなさい。それは込められた分だけ魔力を回復する仕組みを持つ義手、というだけで、貴女の素の魔力量を増やしたわけではない。つまり、一度に使える分は前までと同じで、使いきったら回復する、というものよ。だから」
「魔力切れン時に起きる息切れやダルさは残ったまんま、ってこったろ？」
「そ。だから、決して油断しないように」
「あァよ。それでもありがとうな」
ディミトラ様を撫でるライラック様。
それを、少しだけ不満気な目で見るシエナ様。
ふむふむ。
ふーむふむ。
「あ、来たみたいね」
「ン？」

「魔力反応検知――数は10」
「10？」
それはおかしい。
来ても5、だと思ったのですが。
なんて疑問を抱きつつ、振り向けば。
「ちょっと、私が今回の任務の隊長なんだから、大人しく従ってくれないかしら野蛮人」
「やれやれ、簡単に敵に捕まって殺してもらって蘇生して、そんな醜態を晒しておいてよく言うね、君」
「む……あーあ。梓がそんなことないっていうから期待したけど、やっぱり野蛮人じゃない。確かに見てくれはいいけれど、こんなのじゃなくて、可愛い可愛い梓を……あ、いた！」
「隊長ダメ、私が先！」
「……少し。くらい。……仲良く。できないのか」
「……お互い、面倒な長を持つと大変だな」

「ふん、班長の手を煩わせるなど……ま、まぁ今回はよくやったみたいで、よ……かったが」
「ぶじなのわかったからねていいー？」
「ちゃんと起きていたんだ。偉いね」
なんともまぁ、騒がしい一行のご到着。
キリバチ様も過保護ですね。いえ、どちらかの隊がついていきたいと立候補した可能性もありますが。
「おー、お前ら！　来てくれたのかわぷっ!?」
「えーん、ごめんね梓。つらいことさせちゃったね。大丈夫よ、お姉ちゃんのこの胸の中で今日も明日も明後日もぬくぬく眠りなさい？」
「隊長、私も混ぜてよー」
「……その、眠る、というのは、その」
「かか、各務さん。ささ、ささ流石に深い意味は、ないかと……」
まぁ、これほどともなれば。
一件落着と言ってよろしいのでは、ないでしょうか？

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

30・糸伊豆泥不意軽斗不応有塔蔵栖伏地井出或.

国家防衛機構・浮遊母艦ＥＤＥＮには五つの監視塔と中央塔が存在します。
そのうちの一つが名前を同じくした魔法少女育成学園エデンであり、ライラック様を含む現教育課程にある魔法少女の皆様方が暮らしている場所となります。
私達のような教育課程を卒業し、学園を出た魔法少女は、軍事塔と中央塔の決定によって各組各班各隊に振り分けられ、基本的には異動もなくそのまま同じ隊として過ごす……の、ですが。
「一時的な異動、ですか」
「そうだ。ローグン。お前の気持ちとしては、私やエミリーの傍にいたいのだろう、ということはわかる。だが、今回の件を通してお上はどこか急いでいるようでな。梓の安全を確保する事と共に――目が欲しい」
「なるほど」
「私もエミリーも防衛班であり、あまりＥＤＥＮから動くことが適わない。たとえエミリーの心の傷が癒えたとしても、何も知らず、何も動けずでは少々難しい部分

が多い。よって、異例ではあるが――お前は明日より、ライラックのメイドとして生活してもらう」

「キリバチ様のお世話は……」

「リヴィルがいる。何、一時的な話だ。ライラックが完全に自立する頃には戻ってきてもらう。それまでの手伝いをしてほしい。加え、上からの干渉があれば、すぐに、だ」

「……承知いたしました」

正直な気持ちを述べるのならば、やはりお二人の傍にいたい、仕えたいという願望はある。

けれど、キリバチ様が動けないが故の手足となれ、というのであれば理解もできる。姉はそういう事には向かないし、私の【侵食】であれば様々な場合に対応が可能だ。

「アールレイデ様の元に向かう、ということになるのでしょうか？」

「ああ、そこの説明をしていなかったな。Ａクラスａ班はそのままだが、仮の部隊としてライラック隊というものが組まれる事になった。特例組遊撃班ライラック

隊だ」
「特例組……【寄生】のネイビー・ブルー様の所属する組ですね」
「彼女は潜入組だが、まぁそういう事だ。未だ在園中の学生に対し班が与えられ、隊にまとめ上げられる、というのがどれだけ異例かはわかるだろう？　お上の判断だけで作られようとしていたのでな、お前をぶち込ませてもらった次第だ」
「成程。承知いたしました」
上の意向でライラック様のためだけに作られた部隊、など。
軍事塔も司令塔も通さない特殊な事例に当たらせるための部隊の可能性が高い。故のお目付け役、ですね。ライラック様に対しても、上から派遣されるだろう何者かに対しても。
「そうそう、ローグン」
「どうされましたか、キリバチ様」
「ライラックの世話をするんだ。一日中つきっきりで、風呂や着替え、睡眠も手伝うんだぞ。アイツが嫌がっても、だ」
「ふむ。……よろしいのでしょうか？」

「どの道、魔法少女としてやっていくには女慣れしておいてもらわんといけないからな。ハグだのキスだのでうろたえたり怒ったりしているようでは、隊員とも上手くやっていけないだろう？」

それは余計なお世話なのではないでしょうか。

などという言葉は口にしませんとも。キリバチ様の言動には時折こういう大きなお世話というかお節介というか、多分当人は望んでいないのでしょうね、というような命令が散見されますが、私も面白そうなので賛同いたします。

今回の遠征を通してわかりましたが、ライラック様は言動さえ見た目通りであれば、非常に質の良い顔立ちをしていらっしゃいます。粗暴なそれをどうにか矯正出来得るのならば、非常に可愛らしい少女になると推測されます。

無論、今の方がカッコよくて好きですわ、との意見も頂いておりますが。

「頼んだぞ、ローグン」

「承知いたしました。それでは」

下がる。

さて――ところでこれは、私も久方ぶりの学園生活、になるのでしょうか？

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「あー。つーわけだお嬢。別にＡクラスＡ班を抜けるってワケじゃねェが、私ァ自分の隊ってモンを持つことになっちまってよ。なンだ、まー。んー」

「なぜそうも申し訳なさそうにしておりますの？　これからは肩を並べて戦える……そういうことではなくて？」

「……敵わねェなァ、お嬢には」

学園塔。卒園者が立ち寄る事は滅多にないものの、ここで過ごした数年のことはしっかり覚えております。姉を含む学友。教師の方々。後輩と呼べる存在。それらは今やともに戦場を駆ける同士となりましたが、学園内においては切磋琢磨もしたものです。

特に私達姉妹は初めからＳ級を頂いていたこともあってか、やっかみや嫉妬も多く……全部躱けたものの、ふふ、良い思い出ですね。

「それで、隊員はどなたになりますの？　遊撃班、というもの自体聞いたことが

ありませんが……」
「一人は私でございます。及び、本日よりライラック様の身の回りのお世話をさせていただきます、コーネリアス・ローグンと申します。Ｂ級の若輩者ですが、どうかお見知りおきの程を」
「だから、貴女程の人を若輩者呼ばわりできる魔法少女は限られてくるのだが……」
「ン？　あァそォいやポニテスリットは初めから知ってた感じだったよな。あの小学校のときにも大物だのなんだのって」
「コーネリアス・ローグン。ＥＤＥＮ防衛組防衛班エミリー隊所属の【侵食】……Ｓ級魔法少女としても有名ですが、不死の魔法少女、という名の方が知っている方も多いと思いますわ。私もそっちで知っていましたし」
「ヘェ、不死の魔法少女。あァ、身体の部位がどっか残ってりゃ【侵食】できるからか」
「はい。恐れながら、蘇生槽の使用回数が全魔法少女で２番目に少ない事は誇り得ることではあるかと」
「２番？　１番は誰だよ」

「え？」
「何を言っているんだお前は」
「……あァ私か！」
戦闘中は気付きを主とした様々な面でご活躍為されたライラック様ですが、そういった魔法少女における常識等の面には少々疎いようですね。
これは、様々な嘘が仕込めそうな。
「それで、残りの三方は誰ですの？」
「なンで3人限定なんだよ」
「隊は基本5人で構成されるから、ですわ」
「……そォなのか」
「もう一人は、こちらです」
先程から、教室のドアの隅に隠れて私達の様子を窺っていた少女。
もう知れた中でしょうに、人見知りなのでしょうか。ガーゴイルの情緒というのはわかりませんね。
「……誰ですの？」

「ふむ。見ない顔だな」
「新しい子でしょうか！」
「お、太腿忍者。帰ってきたのか」
「はい！　一度死にましたが！」
「……そぉかい」
廊下の天井を無音で走り、ライラック様の背後に着地した後、その隠密行動からは考えられない程の声量で挨拶をした元気な少女。【光線】のユノン様ですね。確か魔法少女になる前は忍者であったとか。西方文化の一つですが、多少、興味深くはあります。
先程の天井移動、魔力を使っていないようでしたので。
「私も、帰ってきた。何の、話？」
「おー背中メッシュ。なんか久しぶりだな」
「そう？」
こちらは普通に窓から侵入してきた、シェーリース様。【神鳴】は私達の耳にも届く超攻性魔法です。……背中メッシュ、とは。なるほど、確かに大胆な背面露

出……。ライラック様はこういうのが好みなのでしょうか？

なお、窓からの侵入はＡ級以上の魔法少女ならば普通です。わざわざ廊下を歩くのが面倒くさい、という方は多いですからね。軍事部の方にも多く見受けられます。

「皆さま、申し訳ないのですが、彼女に幾ばくかの時間を頂けないでしょうか？」

「あ、そォだった。すまねェな、なんだか久しぶりで色々盛り上がっちまった。ほら、入って来いよ、シエナ」

「う」

ギ、ギ、ギと。

錆びた水車が如く、少しずつ身体を出すシエナ様。

恥ずかしさ……だけではありませんね。恐怖も混じっている様子？

……いえ、そうですね。

当たり前ではあるのでしょう。少しだけ、準備をしておきましょうか。

「誰？　なんか、変な気配だけど」

「言われてみれば、どこか魔物を彷彿とさせるような！」

「何？」

「――きゃっ!?」

何の前触れもなく【神速】を使用したアールレイデ様を止めます。

彼女はSS級ですが、少しばかり仲間を大切にしすぎるきらいがありますからね。

特にライラック様の事に関しては、考えるよりも先に身体が動く、というような様子を何度か見せています。先日の迷宮掃除もそれが理由でしたから。

「ッ、どうやって……!?」

「流石に【神速】についていける程の速力はありませんが、狙う場所が分かっていれば止める事は容易いのですよ、アールレイデ様」

「も、申し訳ありません！　申し訳ありません！　今すぐに出て行きますので!!」

「いんやさ、大丈夫だよシエナ。お嬢も落ち着きな。３人も、だ。あんまり殺気立つなよ、ピリピリ来てるぜ」

その言葉に臨戦態勢を解く皆様。

ふむ。よく躾けられている様子。それに……自分に向かうもの以外の殺気も感じ取れるようになった、のでしょうか。そうであれば、それはもうれっきとした感知

魔法に匹敵するのですが。
「……許せませんの」
「えェ？　何がだよ」
「許せませんのー！　この方の正体は大体掴めましたけれど、それはどうでもよくって、ずるいですの！　なんでこの方だけ名前呼びですのー!!」
「……あー。そいや、なンでだろォな」
幼子でしょうか？
とてもSS級としての……いえ、まだ在園中の身ですからね。多少はこういう所もありましょう。
しかし、そのずるい、という感覚は他の皆様も持っている様子。私も冷静メイドなどと呼ばれていますが、確かに何故シエナ様だけ名前なのでしょう。
「あの、本当に私は、皆様に害をなすようなことはしませんので……」
「やはり、魔物なのか」
「う、いえ。あ、その。……はい」
「材質からして、ガーゴイル？」

「はい……。主ディミトラ様より遣わされました、人格分割型戦闘用ガーゴイル・死得無（Ashes）と申します。どうぞシエナとお呼びください」

何故か未だに力を緩めようとしないアールレイデ様を余所に、自己紹介が始まっていく。

そう、シエナ様はディミトラ様側からの此度の騒動の礼、ということで、このＥＤＥＮに遣わされました。ガーゴイルという魔物ではありますが、ディミトラ様の完全な制御下にあること、ライラック様や私が口添えをしたこと、中央部ジャハンナム様の認可が下りた事もあって、ライラック様の卒園までの間、エデンで過ごす許可が与えられたのです。

ＥＤＥＮに魔物が入り込む、というのは異例中の異例なのですが、前例がない、というわけでもありません。

ネイビー・ブルー様が魔物に【寄生】したまま帰投したことや、迷宮のソティラ様から学園長様に対し多少の〝要望〟という形で彼女自身がいらしたこともありましたから。

それにしても、シェーリース様もユノン様も、気配で相手が魔物であるかどうか

を図り得るというのは……遠隔故、なのでしょうか？　私も姉も近接故に感覚のわからない事ではありますが、あまり聞かない話なので驚きました。
　何か忍術の心得などで……いえ、シェーリース様は別に忍者、というわけではないのですが。
「シエナはあくまで機体名ですので、梓・ライラック様が私を名前で呼ぶのはそのような事であると認識しております、が……」
「あァ、そンな気がする。ＥＤＥＮみてェなもんだろ？　シエナってな」
「はい。今後私の姉妹機が生まれた場合、同型であるのならばその子もシエナになります」
「そ、そうですのね。……それでもなんだかずるいのですけど」
「アールレイデ様。どうして未だに力を込めたままなのでしょうか？」
「出来得るのなら、このままお手合わせ願えないか、と思いまして」
「出来得ませんので、退いていただけると幸いです」
　かかる力が消える。
　……聞いていた以上に脳筋、いえ、戦闘意欲の高い方ですね。

もっとも、ヴェネット様も一時期「融かしてから考えればいい」などと仰っていましたので、SS級というのはそう言う方の集まりの可能性もありますが。

「模擬戦闘であれば、後程修練塔でお受けいたします。私はライラック様の身の回りのお世話を任された身――故に、お食事も湯浴みも睡眠もお着替えも、そして排泄に至るまでの全てをお世話させていただきますので――貴女にとっては、敵でしょう？」

「エ、そこまでされるって聞いてないんだがっつか嫌なんだが」

「ふ、ふふ。私の想いを知っていて、その上での挑発。ええ、ええ、わかりましたわ。その宣戦布告――我が【神速】にかけて、有無を言わせぬ速度で叩き切って差し上げますわ!!」

面白い。

なんともからかい甲斐のある少女達だ。ミサキ・縁様もどこかこちらを気にしているようだし、ユノン様とシェーリース様も……まだ芽生えかけではありますが、ふむふむ。シエナ様は言わずもがな、ですが。

いいですね、学園生活。

楽しみが増えました。
「残りのお二方は学園に入る気はない、とのことです」
「そうなのか……」
「だからまァ、ライラック隊なんつー仰々しいモンは組まれたがよ、直近に入ってる任務っつーモンは無い。ってなワケでＡクラスＡ班としてよろしくやらせてもらわァってな。あ、シエナもＡクラスに転入になったンで、そこんとこ頼まァよ」
「そ、それはローグンさんも、ですの？」
「いえ、流石に……」
辞退させていただきました、と。
そう言おうとしました。
言えなかったのです。
私としたことが気配に一切気付かず接近を許し、顔の後ろから手を回され口を塞がれ、その書類を強制的に見せられてしまいましたので。
顔は見えませんが、さぞかし厭らしい顔で笑っていることでしょう。
「喜べローグン。キリバチ殿からお前の再編入届けを頂いた。くく、何十年ぶりか

の学園生活、とくと楽しむがいい」
「……」
書類には、その旨と、承認のサイン。
……これは、嵌められましたね？
「っと、おいおい、大人になったのだから掌を舐めて剥がす、なんていう子供染みた手法を使うのは止めろ」
「これから生徒になる相手に対して背後から口を塞ぎ、耳を塞ぎたくなるような声をかけてくる≫敵≪への対処法としては十二分であるかと」
「ほう？　お前、敵の手を舐めるのか。随分と落ちたなぁ、コーネリアス・ローグン？」
「模範となるべき教師が自らの悦のために醜態を晒すなど、随分と地に落ちましたね、えるるー」
にやりと。
今まで生徒には絶対に見せて来なかったのだろう笑みを浮かべるは、Ｄ級魔法少女えるるー。西方出身の魔法少女でありながら、その滅び以前にＥＤＥＮへ身を寄

せていた魔法少女で、その魔法の特性から軍ではなく教職を選んだ――私の同期。
誠に遺憾ながら。
かつてのＡクラスＢ班の隊長と隊員の関係、でもあります。私は遺憾な方です。
「……先公アンタ、えるるーって名前だったのか」
「ほう、ライラック。遠征に行って少しは成長したものだとばかり思っていたが、担任教師をアンタ呼ばわりするくらいにはトチ狂って帰ってきたようだな？」
「じゃあ鬼畜教師でいいですかい？」
「お二人のじゃれ合いも懐かしくて良いのですが、私としましては今のローグンさんとの……その、旧知の強敵同士、みたいなにらみ合いに、色々と感じてしまいますわ……」
「はい！　ただならぬ関係と見えました！」
「もしかして、昔付き合ってたりした？」
「――お前達、余程罰が欲しいらしいな」
シェーリース様。
やめてください。

あまりそういう揶揄い方をすると――とても凄い事をしますよ。
「何か、殺気を感じた。つつかない方が、いい」
「どちらにせよ少しばかり配慮にかけるぞ三人共。えるるー先生とて魔法少女。つまり少女なのだ。恋の一つくらい……」
「縁、お前はもう一度迷宮に行くか、うん？」
とても――騒がしい事で。
いいですね。
学園生活、という感じがします。青春ですね。
「馴染めそうですか、シエナ様」
「あ……はい。その、見ているだけでも新鮮で、楽しいので。主ディミトラからは、学園というものを経験してきなさい、と言われて……その、少々戸惑いましたが」
「ガーゴイル種である、という事に偏見を持つ者、あるいは何か悪意を持つ者もいるやもしれません。その時は是非ご相談ください。両者に禍根を残さず、かつ迅速に殲滅……もとい、仲裁して見せますので」
「はい！　よろしくお願いいたします！」

……この子もこの子で色々嘘が仕込めそうですね。
ふう。
純朴な少女に囲まれる、というのは……中々に疲れますが。
キリバチ様からの命とあらば致し方ありません。私も学園生活を楽しませていただきましょう。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「あー。その、本気なのか？」
「何が、でしょうか」
「風呂だのなんだのまで全部世話をする、ってのだよ」
「はい。それは勿論です。ライラック様が身体の如何なる部分に力を入れずともいいよう、全ての世話を私が行いますので、ご安心ください」
「……」
久方ぶりに受けた授業。久方ぶりに歩いた学園。どれもが新鮮であり、且つ懐か

しくもあり……。

とても充実した一日であった、と言えるでしょう。

ですが、メイドの本領はここから。学園が終わり、寮へと戻ったライラック様のお世話の全てをさせていただくのですから、死力を尽くさなければなりません。

「それにしても、少し驚きました」

「あァさ、何がだよ」

「失礼ながら、もっと殺風景な部屋であると思っていましたので……こんなにも少女らしいとは」

「んー。まァ私もどォかとァ思うんだけどよ。ぬいぐるみとかってな、家族が持ってけって言ったモンだから大事だし、ベッドだのなんだのァＥＤＥＮに上がって右も左もわからねェ私にぴったりついてきてくれたお嬢の選んだモンだから、まァ大体お嬢様の趣味だよ。別に不満ァないんで、こうして使ってるってだけだ」

「なるほど、アールレイデ様の」

それならば納得です。

いえ、本当に失礼ながら、もっと物が何も無い空間、だとばかり思っておりまし

たので。
　薄い紫のシーツやベッド、桃色のクッション。床にはラグマット、テーブルも小さなか可愛らしいデザインで、棚やその上の小物に至るまで、その、とても少女らしい、といいますか。
　なんであれば私や姉よりも少女らしいでしょう。いえ、まぁ、私どもは特例かもしれませんが。
　棚の上に飾ってある手紙は、恐らくはご家族のものでしょう。
　……魔法少女になってから一年に満たぬというライラック様。まだ、思う所はあるのでしょうね。
「どうせだ、風呂ァ大浴場使うか。2人も入れねェしな」
「私は湯船には浸からず、お体をお流しするだけでもよいのですが」
「はン、ンなことさせてみろ、私が罪悪感で溺れ死ぬよ」
「……わかりました。しかし、大浴場ですか。私の在園中には無かったものですね」
「そォなのか？」
「はい。ですので少しばかり楽しみです」

ＥＤＥＮは基本不変の存在……に思われがちですが、改築工事はそれなりの頻度で行われています。建築や改築に適した魔法を持つ魔法少女がおりますので、その方々を起点に拡張や改変が。その点で言えばディミトラ様の【鉱水】も建築に適した魔法ですね。

そも、隔離塔や修練塔はディミトラ様の手が入っている、などと言われておりますし。真偽のほどは定かではありませんが。反魔鉱石をああいった形に加工出来得るのはディミトラ様だけ、ということでの噂ですから。

「大浴場は学園の一番下にあンのさ。結構使用率ァ良い方らしいぜ。私ァ今まで一度も使ってこなかったが」

「どうして、でしょうか」

「ん―。ま、そこまで気ィ許して無ェから……っつーと、ちょいと語弊を生むか。あんまりな、近付きたくねェんだよ。家族みてェなことすると……近づいちまうだろ。距離が。そうなった相手が死んじまったり、殺さなくちゃいけなくなったりするってな、ちょいとキツいのさ」

「それならば、私はご安心いただけるかと」

「死に難いから、か？」

「はい。これよりライラック隊に参加するお二方以外に、もう一人貴女様用の護衛がつきます。貴女の実力をAに至らせるための試練は未だ続いていますが故。ですが、その方は私よりは死にやすいでしょう。その点私は、髪の一片でもあれば【侵食】によって新たな自分を生み出す事が可能です。貴女を一人にはしません」

「……あァよ、信じてるよ。今回の件で、アンタが案外情熱的な奴だってのも知れたしな。風呂に入るくらいァ近づいてもいいだろ。あとはまァ、気付いたってのもある。私っつー奴ァ、あんまり仲間ってーのの事を信じ切れてなかったっぽいんだ。すぐ死ぬ奴らだ、って。そう思ってた。だから近づきたくねェだの名前で呼びたくねェだのと……」

段々尻すぼみに言葉の小さくなっていくライラック様。

死にたくない。殺させたくない。殺したくない。苦痛を負いたくない。

仕方ない場合は、あるいはそれ以上の苦痛を背負わせてしまう場合は【即死】を用いるけれど、出来得ることなら使いたくない。使いたくはないし、使用したのならば酷く後悔し、傷を負う。

……優しい方、ですね。
その理念が、ではなく。
ただ、他人の痛みを背負い得るのは、優しい方の証拠です。
「大浴場に向かいましょうか、梓様」
「ん。……ん？　名前で呼んでくれンのか」
「今の話を聞きましたので、私にとってそれほど近い方である、と。そう告げたつもりなのですが、伝わりませんでしたでしょうか」
「おゥ、嬉しいが、いいのかよ。鬼教官とか暴走繭とか、想いを寄せる相手はいンだろ？」
「ふふ、近しい事からといってそのまま愛恋に繋がる、という事はありませんよ。梓様は私にとってお世話し甲斐のある相手、という事です。私が来ましたからには、存分に甘やかして差し上げますので、お覚悟のほどを」
「身の回りの世話まで任せちまったら依存しちまいそォでこえーよ」
「させる、と言っております」
「あー。ま、できるモンならな。ほら、さっさと行くぞ」

「はい」
許可は頂きましたので。
……アールレイデ様。お先に失礼いたしますね。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ふぃー……」
「このような空間があるとは、本当に驚きです」
「んー。ま、エデンにいなけりゃ知らねェだろォからなァ。……そいやシエナって風呂とか入れンのかな」
「どう、でしょう。ガーゴイルですから、通信端末のように水に弱い、という事もなさそうですが」
「ガーゴイルの風呂事情なんざ誰も知らねェか」
なるほど、大浴場。
その名が示す通り、とても広い空間に作られた浴場は、私達以外にも様々な魔法

少女が利用しています。等級区分は様々ですが、ふむふむ、中々に粒揃い。中には私の耳にも届くような脅威……もとい、強さのある魔法を持つ方もいらっしゃいます。

おや、あちらは【千刃】の。それに奥で眠っているのは【王槌】でしょうか？最近S級に上がった期待の新星【打擲】と【水蹴】のお二人も。

やはり、私共の時代より魔法少女の数も質も上がってきているように思いますね。えるるーなどD級のままですからね。ええ。

「大きい方が、好きなのか？」

「はい？」

「さっきから見てる連中は、みんな大きいじゃねェか。そいや鬼教官も大きかったよな。……私ァこんなだが」

「いえ、そういう目で見ていたわけではありませんが」

まさか梓様の方からそのような話題を振ってくるとは思っていませんでした。

女性慣れさせておいた方が良い、とはキリバチ様の言葉ですが……悪影響を受けているような。主にグランセ様から。

自分の胸を触って、私のものと見比べる梓様。
……困りましたね。私もあまりこういう話題は得意ではないのですが。得意ではないだけでできるのでお付き合いしますが。
「梓様」
「なんだよ」
「魔法少女は成長しないため、胸の大きさもスタイルもそのまま変わる事はありません。ですから、他人を妬んでも仕方ないのです」
「いや別に妬んでるってわけじゃ……」
「ですから、変わらない自分を磨きましょう。自分のスタイルを誇れるように着飾ること。それこそが他者の気を引く第一歩です」
「おォやけに力説すンな。もしかして学園生活で、やっぱり先公とヌォァ!?」
「あまり余計なコトは言わないように。今は無防備である事をお忘れなく」
……つるつるした、少女らしい良いお腹ですね。
もうちょっと触っていたくなります。
「あれ。珍しい組み合わせだね」

「ひゃ!?」
「おや、この声は……【透過】のあるるら様でしょうか？」
「うん。久しぶりだね、ローグンさん」
「い、色々聞きたい事があるが、とりあえず私ン中から出てけキラキラツインテ！」
「えー。どうしようかな」
突然ライラック様の中から聞こえてきた声。
A級魔法少女、【透過】のあるるら様ですね。えるるーと同じく西方出身でありながら、その思慮深さや達観した世界観は見習うべき点の多い魔法少女です。いえ、西方の出身者には学ぶ点の多い方が多数おられるのですが、どうしてもえるるーの事を考えると……。
「ローグンさんも、何か、昔に有耶無耶になってしまって終わってしまった恋で、少しばかり思う所がある……というような顔をしているね」
「……なるほど、これが【透過】、ですか。なんとも……不思議な、感覚、ですね」
「ふふふ。我慢しなくてもいいんだよ。気持ちがいいでしょ？」
「ふぅ。やっと出てったか。つか、やっぱり先公と何かあったンだな」

「いえ、別にそのような、ことは……んんっ」

視線が向くのを感じました。

少しばかり――刺激の強い声を出してしまったようですね。

しかし、この刺激は……口を押さえなければ。

「あるるら様。仕返しは期待、ひぃッん、――う」

「ふふふ。貴女の【侵食】は私とは相性悪いからね。全然怖くないよ」

「おォ。あの冷静メイドが、随分と可愛い声出すんだな」

「だ、誰だって胃壁を触られたらこんな声を出してま、ぅん、っふ……」

これはいけない。

あくまで私はキリバチ様から遣わされた冷静沈着な万能メイドであるというのに、初日からこうも手玉に取られるわけには。

というかあるるら様は何故ここにいるのでしょう。とうの昔に卒園されたはずでは。

「キラキラツインテ、そろそろやめてやれ。それ以上は……多分、色々と不味い。つか胃壁触るってなンだよこえーよ。それでそんな甘い声出してる冷静メイドもこ

えーけど」
「おや、そう思うのなら、やってあげようか？」
「遠慮する。つか拒否する。冷静メイド、【透過】っつーのァ憑りつくわけじゃねェから、移動すりゃついてこられねェぞ」
「――なるほど」
湯船に波紋の一つも立てず、移動する。
自身から温かい何かが抜け出でて行く感覚。ふぅ。
恐ろしい魔法です。あるるら様の言う通り、【透過】と【侵食】は非常に相性が悪く……一対一の対決をしようものなら、どんな可能性も見いだせずに負けてしまうでしょう。
その所業含めて、天敵、ですね。心の手帳に記入いたしました。
「ふふふ。今日は別用で学園塔に寄ったのだけど、思わぬ収穫があったね。それじゃあ、満足したから私は上がるよ」
「いやいや。流石に普通に湯船にァ浸かってけよ」
「いいの？　二人の仲睦まじい雰囲気を破壊したものだとばかり思っていたけれ

ど」
「自覚あンのかよ。つか別にンな雰囲気じゃねェよ」
「私としましても、【透過】を使われない限りは特に問題ありません。使われる場合逃げさせていただきます」
「なるほど、冷静メイドを焦燥させるにァキラキラツインテを連れてくりゃいいのか」
あぁ、梓様が余計な知識を覚えてしまわれた。
……何か、回りまわってキリバチ様にまで届くような気がします。後でキツく口止めをしておきましょう。
「他の奴らもいるのか？」
「さっき言った通り、別用で来ただけだからね。ああ、でも貴女には一応報告しておくよ」
「ン、なんだって私に」
「ガーゴイル・シエナの体内には特に怪しいものはなかったよ。私にはよくわからない機構については、逐一どんな機能があるのか教えてくれたしね」

「――あァ、そういう用か」
なるほど。
確かに【透過】は、対象を壊さずに調べる事に関して最上位であると言えましょう。
……つまり先ほどの感覚を、シエナ様も……。
「そういうことで、これから報告に行かなきゃいけないから。ごめんね、お邪魔したね」
「いんやさ、んじゃ揶揄うためだけに服脱いで【透過】使ってンなことしたってのかよ」
「そうだよ？」
「……あァさ。もーいーよ。つか、あァそォだ。班長に伝言頼むわ。キラキラツインテ含めて、今度さ。前できなかったお菓子パーティっつーのをしてみたい。だから日程空いたら頼むよ、ってさ」
「ん。わかった。伝えておくね」
そう言って、床に消えて行くあるるら様。

……嵐のような方でした。
「嵐かアイツァ」
「私達もそろそろ上がりましょうか。余り長い湯浴みは、逆上せてしまいますよ」
「ん」
ついでに、少女達を強く刺激してしまったようなので。
……退散が最上の選択かと。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

31・奇異伏阿利伊豆魎琉泥気絶栖・

「あ、ローグンさん。ちょっと聞きたい事があるんですけど……」
「はい。ああ、魔力の展性について、ですか。確かにここで躓く方は多いですね」
「ローグンさーん。ごめんなさい、今更聞くのはホントはおかしいんですけど、飛行魔法の高度の上げ方って、45度で合ってましたっけ！」
「はい。間違いないですよ。ただ水平飛行中であれば、に限りますが」
「コーネリアスさん！　好きです！」
「申し訳ありません。私は主人に仕える身。特定の方と恋仲にはなることができませんので」
「私もローグン様、って呼んでいいですか？」
「構いませんよ」
「シエナちゃん貰って良いですか？」
「構いませんよ」
「ちょ、ローグン様!?　わわ、持ち上げないでください！　というか私結構重い

のですが、どうやって……！」

いや、はや。

学園生活というのは、こうも忙しいものでしたでしょうか。

近くに昇級試験が迫っている、というのはあるのでしょうが、それにしても私の周りに来る少女の多い事多い事。

ちらっと梓様を見れば、A班の皆さんと何やら楽しそうに話しております。……あそこに助けを求めるのは愚策ですね。困ってもいませんし、一つずつ対応していくべきでしょう。

昇級試験。

初めに振り分けられる等級区分から等級を上げるために受ける試験。年に一度訪れるこれは、実技と座学の双方を越えなければなりません。

梓様の昇級は推薦状あってのもの。普通はこれを経て等級を上げて行くものであり、SSS級を最終目標と置く学園生の皆様は大忙し。軍部の方でも少しばかりそわそわとした雰囲気が蔓延している辺り、魔法少女においてはどの時代にあっても一大行事、なのでしょうね。

B級の私にはあまり関係ありませんが。
「何を澄ました顔をしている、ローグン」
「私を求めてくださる生徒の皆々様をわざわざ掻き分けて何用でしょうかえるるー」
「ふん。お前がB級にまで落ちた経緯は知っている。だが、キリバチ殿及びエミリーからのお達しだ。もう罰はいいから、もう一度S級にまで上がってこい、とな」
「エミリー様を呼び捨てにする事を許した覚えはありませんが」
「お前が知らないだけで、私とエミリーは友人なのでな」
「――!?」
「そこまで驚くか」
知りませんでした。
えるるーの事など眼中に無かったためでしょう。失態です。
「委細承知いたしました。ので、お帰り頂きたいのですが。私を頼ってくださる皆々様方が怖がっていますよ」
「お前達も、安易に答えを求めるのはやめろ。少しは自分で考えると良い。そのた

めの学園であり、そのための試験だ」
「えー」
「けちー！」
「ひとりみー！」
「そんなに罰を受けたいのかお前達」
随分と懐かれているようですね。
……姉と共に優等生として扱われていた私と、いつまで経ってもD級から抜け出し得なかったえるー。落ちこぼれ、などと呼ばれ、別に良いなどと鼻を鳴らしていたあの跳ね返りがよく……。
まあ、元より落ちこぼれてなどいなかったのですが。
たとえば。
手にあるペンを一本、最大限の強化を込めてえるるーに投擲。その顔を刺し貫く威力で射出されたそれは――しかし、寸前で回避される。
衰えてはいないようですね。そして、あの頃より強くなった私の投擲ですら、当てる事はできませんか。少しばかり傷付きました。

「――今のは挑戦状と受け取ったが、どうだ、ローグン」
「いえ、実力に陰りがないか探っただけです。しっかりと修練しているようで何よりです。昇級試験、受けてはいかがでしょうか？」
「私の魔法を知っていて、それを試しておいて……いや、いい。お前は昔からそういう奴だった。姉の方がまだ可愛げのある……」
少しいじめ過ぎましたか。
後で菓子折りでも持っていきましょう。えるるーは紅茶を好んでいましたからね。適当な茶葉と甘いお菓子さえあれば簡単に機嫌を取る事ができます。
「なァ、冷静メイド」
「なんでしょうか、梓様」
「先公の魔法っつーのァなンなんだ？　今一瞬、物凄い速さのペンが飛んでいったように見えたンだが」
「おや、見えたのですか？　知覚強化をしているようには見えませんでしたが」
「一瞬な。でも避けられたよな。完全に後ろ向いてたのに」
「はい。えるるーの魔法はですね」

投げ返されたペンを掴む。
その程度の速さでは私に魔法を使わせることすら――む。
「やられたな」
「そのようです」
全く、どこで用意したのか、絵筆とは。
掴んだせいで絵具が顔にかかりました。これはいじめでは？　教師がいじめをしているのでは？
生徒の皆様方に見せないよう【侵食】し、何事も無かったことにする。
私の魔法がグロテスクである、ということはわかっていますからね。
「えるるーの魔法は、【回避】といいます。面制圧である攻撃でなければ意識外であろうと【回避】する……ある意味で梓様の天敵かもしれませんね」
「へェ……そりゃ、良い魔法だな」
「そうでしょうか？　攻撃に転じる事も出来なければ、殲滅力も殺傷能力もない魔法ですが」
「いんやさ、コッチの話だ」

グランセ様もそうですが、本人がどれほど努力しようとも昇級できない魔法、というのはあります。Ｄ級に区分される魔法少女の方々は皆そうですね。たまに使い方次第で昇級する……それこそあるるら様のような方がいらっしゃいますが、基本は無理です。

それをわかっていての先の言葉でしたので、いじめ過ぎたな、と。

旧知である分揶揄いに歯止めが利かなくなるのは悪い癖かもしれません。

「残念ですが、そろそろ授業の始まる時間のようです。皆さま、ご質問は後程」

「はーい」

聞き分けの良い子ばかりでよろしいですね。

それにしても、良い魔法、ですか。

一応、覚えておきましょう。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「こんにちは」

「はいよーこんにちは、お客さんとは珍しいね……って、アンタかい」
「はい。アンタです」
安藤武器工具店。
梓様の懇意にしている銃などを取り扱う店舗であり、S級魔法少女安藤アニマ様の経営するお店でもあります。
そして。
「なんだい、もしや挨拶かい？　――ライラック隊の入隊祝い、とか」
「いえ。普通に梓様の拳銃の整備を頼みに来ました。また、彼女の扱う長距離銃の製作進捗も窺いに来ました次第です」
「素直に祝いくらい寄越しなよ先輩だろアンタ」
「では整備代を祝いとさせていただきます」
「そりゃ祝いって言わないよ」
そう。
特例組遊撃班ライラック隊に入る、残り二人の内の一人が、安藤様です。
理由としては、遠方の地にあっても梓様の銃の手入れができること、及び単純火

力の高さから、ですね。安藤様は【業焔】という炎系統においても最上位に数えられる魔法の使い手です。無論【青陽】のエルバハ様には敵いませんが。

故に遠隔魔法少女の火力担当として申し分ない、と。

「まさかアンタと肩を並べる日が来るとはねぇ」

「それについては同意いたします。安藤様におかれましては、私や姉の魔法を≫卑怯だ≪などと言って頂いた縁でもありますから」

「おいおい、そんな昔の事まだ覚えてんのかい」

「魔法少女に記憶の衰えはありませんから」

「……一応言っとくけどね、今はもうそんなこと思ってないよ。あの頃はアタシも若かった……ことも無いけど、魔法少女のいろはって奴を知らなかったからね。周りが【飛斬】だの【氷壊】だの【自爆】だのと鮮烈な奴らばっかだったからさ、アンタ達の【侵食】と【劇毒】は……まぁ、卑怯に見えたんだろうねぇ、当時のアタシには」

「申し訳ありません。からかっただけです」

「いつもそうだねアンタは」

安藤アニマ様。

一応、後輩、になるのでしょう。私が学園を卒園する頃に入園してきた方であり、そのまま数ヶ月の間だけではありますが、色々と教え、且ついがみ合った仲です。

彼女の言う通り、私達姉妹の魔法やネイビー・ブルー様の魔法というのはどちらかと言えば異端で、その見た目や効果も魔物を彷彿とさせるものでしたから、当時は苦手に思っていた方々も多かったのではないでしょうか。

梓様が怖い恐いという理由もわからなくはない、という事です。

私からしてみれば、【即死】の方が余程怖い魔法だとは思いますが。

「……あぁそうだ。ディミトラは元気だったかい？」

「色々ありましたが、壮健でしたよ。娘さんも私達に預けてくださって」

「む、娘!?　アイツ結婚……いや産んだ、というか魔法少女って産めるのかい!?」

「新作のガーゴイルだそうです。ちなみにライラック隊に組み込まれましたよ」

「……アンタ、その性格そろそろ改善しな。アタシは今魔法を撃ち込んでやろうかと思ったよ」

「おお、それは怖い恐い怖ろしい恐ろしい」

「だぁ！　昔から変わらずムカつく奴だね、ホント！」
「貴女も昔から変わらず純情なようで何よりです」
全く、魔法少女は純朴な方が多くて困……りはしませんが、楽しいですね。真面目な顔して嘘を言えば、簡単に信じるので。梓様然り、クラスの方々然り。
「で？　今日来た本当の理由はなんだい。さっさと話しちまいな。ああ、拳銃の整備は終わってるよ。狙撃銃はもうちょい時間がかかるね」
「では、お代はここに。そして、はて、本当の理由とはなんでしょうか」
「結界が必要かい？」
「出来得るのであれば」
安藤様が、いつの間にか手に持っていた小さく透明な玉を潰す。
それだけで――周囲が、外界から切り離された。
安藤武器工具店。かつての名は――安藤疑似魔具店。たったひと月だけ【鉱水】のディミトラ様に弟子入りをし、彼女の技術の中から疑似魔法というものを盗み出してきた、天才。そんな彼女によって経営されていた世界唯一の魔道具の販売店になります。

いつしかそれらを売る事はやめて、このような普通の武器ばかりを扱うようになってしまいましたが……その腕は衰えていないようで。

「で、なんだい。ディミトラ関係だろうが、手早く済ませてくれよ？　コイツを使うと学園長が煩いんだ」

「では。――安藤アニマ様。貴女は魔物ですか？」

「――」

偽ディミトラ様の見せた、精神体を別の肉体に入れるという技術。

此度の遠征において、その技術を用いられたオーレイア隊の方々はまだ馴染んでいない様子でしたが、一ヶ月もあれば問題は無いのではないか、と。

私は。

私達が今まで会ってきたのがどちらのディミトラ様であるのか、という点を、知りませんので。

全てを疑わさせていただきます。

「成程ね。【業焔】には、疑似魔法を扱い得る許容量が無い。それくらいアンタにはわかるか」

「はい。ですので貴女は、【業焔】を扱う安藤アニマ様の肉体を手に入れた、魔法少女の魔法を劣化再現し得る高位魔物の精神体、なのではないかと。いかがでしょうか？」

「如何も何も」

安藤様は。

にやり、と笑う。

「――アンタもそこまで見当違いな事言うことがあるんだねぇ、安心したよ」

「そうですか。失礼いたしました」

「だけど、着眼点は悪くない。アタシは魔物じゃないが――ＥＤＥＮの味方でもない。それだけは覚えておきな」

「……わかりました。しかし、では、誰の味方なのでしょうか？」

「いや、それを聞く奴があるかい？」

「考えてもわかりませんので」

「いつも通りだね、つくづく……。ま、警戒するに越した事はないよ。それも事実さ。しっかし、ディミトラは、その技術を完成させていたんだね。アタシが弟子入

りした時は机上の空論に等しかったんだが……」
「はい。此度は五人、それをされていました」
「へぇ」
この反応は、空振りではないけれど、何か別に隠している事がある、といった具合でしょうか。
一応、頭の片隅に置いておきましょう。
「それでは」
「ああ、ちょいと待ちな」
「なんでしょうか」
結界が解けていく。
疑似魔法。魔道具。武器にも転用できるそうですが、自身の【業焔】を込めた剣を製作したところ、危険すぎて一切売れなかったとかなんとか。
梓様の扱う【即死】の籠った銃弾も魔道具と言えば魔道具ですからね。
色々と未知数です。
「これ、やるよ。あぁアンタにじゃない。ディミトラの娘にやんな」

「これは？」
「ある意味で、その子の姉、かねぇ」
「姉？　……などと詳細を聞くより、お二人ともライラック隊に組み込まれたのですから、その時に渡せばよろしいのでは？」
「アタシはディミトラの弟子だってのをあんまり知られたくないのさ」
「はあ」
ふむ。
つまり、魔法少女は幾つになっても少女、ということですね。
「それでは、失礼いたします」
「ああ。梓にもよろしくねぇ」
「はい」
姉。この紋章が。
……姉？
「……世の中には、私の知らない事も沢山あるようですね」

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ところで、梓様。一つ聞いてもよろしいでしょうか」
「ン？　なンだよ」
「アールレイデ様とは、どこまでお進みになられたのでしょうか」
「どこまでっつーのァ、……なンだ。恋人らしいこと、って意味か？」
「おお、まさかお分かりになられるとは。いえ、今の状況……私がライラック様に膝枕をし、耳の掃除をさせていただいている、という現状を鑑みるに、私の方が恋人らしいのではないかな、と思った次第でして」
「んー。ああ、そこ、凄く良い……。じゃなくて。まァお嬢様も冷静メイドも別に私の恋人ってわけじゃァねェんだから、気にしなくていいんじゃねェか？」
　身の回りのお世話をさせていただくようになってから、もう５日は過ぎましたか。
　梓様の抵抗も段々となくなり、今ではこうして膝枕に耳かきという、魔法少女の恋仲同士がやるような事まで行っております。
　余程心地良いのか、グランセ様と相対した時の幼児退行梓様を彷彿とさせる「ん

ん……」や「んにゅ……」などという可愛らしい鳴き声をあげていて、これはもう。

……いけません。私にはキリバチ様とエミリー様がいますので。

「ちなみに耳を食むのはアリですか？」

「ん―。……ん？　いや無し無し。それァ恋仲になってからだよ」

「恋仲であれば耳を食むのはアリ、と」

「まァそりゃ、恋仲になりゃ何したってされたっていいだろォよ」

「ほう」

これは貴重、ですね。

梓様の恋愛観。恋仲になれば何をしてもいい……などと、なんと過激な。

少しばかり梓様の寝巻き変身を解除して頂き、無理矢理着ていただきましたの切れ目から手を入れてみる。お腹や胸に触れる。まさぐる。

「……なんのつもりか知らねェけど、やめとけよー。あんまり調子に乗ると、キラキラツインテ呼ぶぞ」

「ほうほう。では、呼んでくださって結構ですよ。出来得るものなら、ですが」

「ちょ、おい、くすぐったいって……やりすぎだって！」

「申し訳ありません。楽しくなってきてしまいました。興奮を自覚しています」
「何冷静に言ってんだ、うひゃァ!?」
興奮している。
私が？　……頭の片隅に置いておきましょう。私の異常行動は今に始まった事でもないように思いますが。
「暴れないでください。耳かきが貫通しますよ」
「いや暴れさせてンのお前だし発想がこえーよ」
「……なんだか、眠くなってきましたね。耳穴に耳かきを刺したまま寝てみるというのはいかがでしょうか？」
「だからこえーって。けど、眠いのは私も一緒なンでな。耳かきやめていーから、一緒に寝ようぜ」
「おお、とうとう自らお誘いを……」
「言っておくけど、そォいう意味じゃねェからな？」
「はて、そういう意味とは？」
なんのことやら。

……それにしても、眠くなる、ですか。

これも、頭の片隅に記録します。

耳かきをしっかりと取り出してから、梓様をベッドに運ぶ。

彼女を寝かせ、布団をかけようとすると、無理矢理に引き込まれた。強化は使っていない様子でしたが。頭の片隅に記載。されるがまま、同衾する。

「んん……」

「おや、まるで赤子ですね」

梓様はもうほとんど眠りかけの状態で、私の胸元に顔を埋めてきます。

キリバチ様の仰っていた女性慣れをさせる、との話。もう必要ないように思いますね。

もっとも、私とて赤子や幼子を可愛らしいと思う心は持ち合わせております。なので、しっかりと抱いて眠りましょう。

――眠るフリ、ですが。

夜。

誰もが寝静まった――とは言い難いですが、昼や朝よりかは静かになったＥＤＥＮ。
その通路をひたひたと歩く者が一人。
「――何をしているのかな」
「――!?」
「……大丈夫。あの子には私の声は聞こえていないよ」
無言の抗議をします。
今のは流石に驚きました。
「驚かせてしまったのは申し訳ないと思うけれど、流石に気になってしまうよ。こんな場所で、少女を尾行するメイドさん、なんて」
「……あるるら様は、何故ここに？」
「私はいつでもＥＤＥＮ中を漂っているからね」
「成程」
傍迷惑な趣味ですね。
などとは口にいたしません。確かにたまにですが、あるるら様を見かける事が

あるような気がします。まぁ、禁止された区画以外、どこにいようと魔法少女の自由ですからね。

「それで、あの子は何をしているのかな」

「それを突き止めるため、尾行をしております」

「なるほど。ああ、隔離塔に入っていったね」

「……」

隔離塔。

エミリー様など、なんらかの理由で戦う事の出来なくなった魔法少女が入る塔です。所謂精神病院の類。

また、最下層には反魔鉱石による封印措置を受けた魔法少女の石像が保管されている塔でもあり――紛う方なき、禁止区域、です。

そこに入っていく――。

「梓は、隔離塔に何の用があるんだろうね？」

「あるるら様。一つお聞かせ願いたいのですが、よろしいでしょうか」

「何かな」

「――先日、大浴場にて梓様に【透過】した時の事です。あの時――」
のことを、詳しくお聞かせ願えませんか、と。
そう問おうとして、けれどあるるら様が口元に指をやったのを見て、押し黙る。
可愛らしい。
「ン？　何やってんだお前ら」
その声は――背後、軍事塔の方から聞こえた。
「梓様」
「やあ。先日ぶりだね」
「あァ、そりゃそォだがよ。なンだ、風呂での合体を通して仲良くなったのかよ」
「エミリー様の事で、少し話をしていました」
「あー、暴走繭の。なンだ、キラキラツインテも面識あったのか」
「私には攻撃が当たらないからね。遠隔魔法や特殊魔法の的としては優秀なんだよ」
「……いんやさ、不当な扱われ方って感じたら、怒っていいんだぞ？」
普通の梓様、ではある。
ならば、隔離塔に入っていったのは――。

「梓様の方こそ、どうされたのですか？」
「ん―。まァ言っていいかわかんねェんだがよ」
「はい、どうぞ。私達はほぼすべての情報開示を許される階位を得ていますので、問題ないかと」
「なんでもよ――」
その時、梓様が微かに笑ったのを私は見逃しませんでした。
頭の片隅に記録します。
「私の偽物が、出る、らしィんだわ。この辺によ」
そして、そんなことを仰られたのです。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ホートン種、ですの？」
「あァよ。冷静メイドとキラキラツインテも目撃したってーんで、間違いねェよ。私含め、結構な人数が見てるらしいからな」

「ふむ。自分とそっくりなホートン種がＥＤＥＮをうろついている、か……」

翌朝の教室は、その話でもちきりになっていました。

あまり首を突っ込む気は無いのですが、昇級試験が近づいているというのにそんな都市伝説で騒いでいると、来ますよ、なんて。

注意をする前に、来ました。

「――ほう。お前達、随分と余裕そうじゃないか。これは、全員が一等級以上昇級すると、そう見ていいんだな？」

「で、出たぁ！」

「誰がホートン種だ誰が！」

ホートン種。

精神体の一種であり、敵対者の姿を真似て現れる魔物がいます。

精神体ゆえに攻撃が通り難いという防御力を持つ反面、そもそも滅多に現れず、攻撃してきたとしても魔法を扱えない本人の域をでない、ということもあってか、Ｂ級に区分される魔物。

私達が見たものがそれであったのか、という所は疑問ではありますが、実際に

ホートン種がＥＤＥＮ内部に入り込んでいること自体は事実のようですね。
「まったく……。おい、ローグン。お前もお前だ。お前は大人なのだから、騒いでいる奴らを嗜めるくらいはしたらどうだ」
「今は生徒ですので」
「……ふん」
「おや、仲間が欲しかった――という表情にも見えますね」
「うるさい！」
本当に表情の分かりやすい子です。
昔も……いえ、あまり懐古に浸るのはやめておきましょう。
少しばかり、気になる事が多すぎますので。
「とにかく、昇級試験はもうすぐだ！　実技は期待しているが――座学で落ちる、などというものが出ないよう頼むぞ？」
「はーい」
「よろしい」
昇級試験。

……本当に受けるのでしょうか、私。
上がってこい、などとは言われましたが……。
「――す、すみません！　遅れました!!」
「問題ない。まだ遅刻とは言えない時間だ。席に着くといい、シエナ」
「は、はい！　ありがとうございます、えるる－様！」
「様呼びは……まぁいい。では授業を始めるぞー」
もし、本当にホートン種が出るのであれば――ＥＤＥＮ防衛班の落ち度、なのですがね。
その辺りは、どうなっているのやら。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《／ｔｅｘｔ》

「なァよ、マッドチビ先生」
「何よ」
「西方どころか大陸の一つも見つかってねェってな、ヤバくはねェのか」
「馬鹿ね。――死ぬほど不味いわ。これ、方角あってるのかしら」
「おいおい」
「そろそろ着くはずなのだけど……あの島が、ＥＤＥＮと正反対の場所、とかでなければ」
「だとしたらどーやって私達ァ流れ着いたんだよ」
「だとしなくてもどーやって流れ着いたのかわかんないでしょ」
「……そォだな」
「そうよ」
二人の休息は、まだまだ続く――。

32・糸伊豆織其韻歩端斗塔理夜地軽伏立冬後羅時・

昇級試験は実技と座学の二つに分かれます。

実技においては実際に形成地点から生まれ落ちる魔物と戦闘し、遠方より観測する試験担当者によっての10段階評価が為されます。C級、B級までは「どの魔物を倒せ」に終わるのですが、A級以上を目指す場合は「人形を無傷で守りながら魔物を倒せ」や「建物を傷つける事無く魔物を倒せ」などの条件が課され、それの達成度合いや達成時間によっても評価が左右されます。

とはいえ生徒の皆様は日々の演習によって似たような事をされているかと思われますので、そのあたりの理解は特に難しいものではないかと。毎年多数の死傷者が出ますが、それだけですので。

問題は座学でしょう。

エデンに入園する時期、というのは決まっておらず、途中編入年始め以外の入園以外全てがそうでございます。となった魔法少女は寝る間も削って今行われている授業内容に追いつく必要があります。無論、年度終わりに来る座学のみの試験に落

ちた場合は学年を上げることすら適わないため、学び直す事ができるといえばできるのですが。

寝る間も削って、とは言いましたが、魔法少女は魔力消費以外では疲労と無縁の存在であるため、際限なく勉強を行う事も可能です。集中力が保てば、ですが。

さて、そんな座学ですが、当然どの年にも「危ない人」はいるもので。

梓様のように教本の内容を全てを頭に入れている、などといった勤勉な方もいれば、私の元に頻繁に相談をしにきている少女、カギネ様のように勉強が苦手過ぎて一年分の授業が一切頭に入っていない、という方もいらっしゃいます。

そんな、カギネ様を始めとした「危ない人」達に「補習授業を開いてほしい」と頼まれてしまったのが数日前。

私は梓様お付きのメイドであるためと断ろうとしたのですが、当の梓様から「付き合ってやってくれよ」との打診が。

それでも護衛であるので、と抵抗しようとしたところ、今度はアールレイデ様から「エデン内にいる内はなんとしてでも守りますわ！」との強い横槍……もとい提言があったため、それならばと引き下がった次第です。実戦経験や瞬時の判断で

あれば拮抗の可能性もありますが、SS級魔法少女【神速】のフェリカ・アールレイデ様の守りあっては私の出る幕もないでしょう。

他にも【波動】の縁様などAクラスA班の方々が常に共にいらっしゃるようですし。

「ローグン先生！」

「はい。どうしましたか？」

「精神体を倒せって言われた場合、私達みたいなのはどうすればいいんでしょうか？」

「ああ、実技ですか。精神体を倒せ、などは遠隔魔法少女でなければ課されない条件であると思われますが……」

「去年の座学に文章題で出たんですよ。〝自身の魔法を用いて精神体と相対する場合、最も適した行動を５００文字以内で表しなさい〟、というのが」

「なるほど」

今どきの魔法少女はそんなことまで……。

時代は変わりますねぇ。

「まずカギネ様。貴女は依代の有無で判断が変わりますね。魔法【深挟】……近接でありながら遠隔にも対応可能な魔法ではありますが、遠方に浮かんでいるような精神体にはあまり効果を見出す事はできません」

「そうなんです。実体のある精神体ならどうとでもできるんですけど、ないもの相手にはどうしようもできず……けど、どうにかしないとダメだと言われたら、どうしたらいいんだろう、って」

「ふむ」

さて、答えは明確なのですが、ここでポンと私が答えを出していいものやら。えるるーに言われたから、というわけではないのですが、生徒の皆々様の学ぶ機会を奪ってしまうのではないでしょうか。ローグン先生、などと呼ばれている手前素直に教えて差し上げる事も吝かではないのですが……。

「あ、じゃあ、それは自分で考えるので、先生はどうやって精神体を倒すのか教えてくれませんか？」

「私ですか。それくらいならば、いいでしょう。ちなみに私の魔法は知っていますでしょうか」

「はいはい！　知ってます！　【不死】ですよね！」
「え、違うよ。ローグン先生は【分身】魔法だよ」
「【白亜】のオーレイアさんが憧れだと仰っていたので、世界変質系の魔法だと思うのですが……」
途端騒がしくなる補習教室。
やはり、あまり知られてはいないようですね。安藤様もそうですが、魔法とは見てわかりやすいもの、のような先入観が付随しがちですので、私達姉妹の魔法は推測し難いのでしょう。その結果から見ても、確かに【分身】などの方が合っていますから。
「私の魔法は、【侵食】といいます。――とてもグロテスクな魔法なので皆様に見せるのは抵抗があったのですが……どうしても見たいというのなら、お見せしましょう」
「そ、それを見せないと、精神体の倒し方は教えてくれない……んですか？」
「実演は必要でしょう？」
「うー……なら、見ます。見たいです！　見せてください」

「私も興味があります」
ふむ。
良いでしょう。
では――と、カギネ様にペンを向けます。
ごくりと喉を鳴らすカギネ様。
指先でペンを回し、その最中に【侵食】を発動。自らの指の骨を形成。
知覚強化もしていない皆々様が再度ペンを認識した時には、何者かの骨が指先にあるという――。
「きゃあああああ――!?」
「申し訳ありません。そこまで驚かれるとは」
「え？」
すぐに【侵食】を解く。多少、やってしまった、という気持ちはありながら――けれど、カギネ様たちの顔を見て、〝そう〟ではないことを悟りました。
「い、今の私達の声じゃ……」
「そのようですね。廊下……学園塔の上階からでしょうか」

「悲鳴、ただ事では無さそうでした」
「皆様はここで待機を……と言いたい所ですが、分散する方が危険そうなのでついてきてください」
「はい！」
学園エデンでの悲鳴。それに上階、となると、寮の可能性もある。
魔法少女というのは意外と胆力のある生物です。驚きよりも先に攻撃が出る、と言いますか。D級魔法少女以外は基本攻撃性能のある魔法を有していらっしゃるはずなので、悲鳴を上げただけに終わる、という事は無いはずです。
外敵であるならば戦闘音が。そうでないのならば良し。ただ、直感ではありますが――。
「ぁ、ぁ……」
「どうされましたか？」
「……ロー、グン、さん？」
発見した。寮ではなく図書室の片隅。散乱する本と――肩を掻き抱く少女。
周囲に敵性存在の気配はありませんが、窓が開いている事と……魔力の痕跡？

「わ、わ、私、私が！」
「落ち着いてください。何があったのですか？」
「……私、が。死んでいたんです。そこで……」
そこ。
本の散乱した、そこ。
埋もれたそこに。底に。
「失礼」
本を退かしていく。
確かに何かがある。大量の本の下敷きになった何かが――。
「【侵食】」
「――ッ!?」
「【深挟】！」
「う、ッ!?」
それは。
確かに、死体でした。

確かに死体――今まさに肩を掻き抱き、震えていた少女の死体。言葉に間違いはありませんでした。

その死体を検分する私の背後で、魔力の籠った拳を構える彼女がいなければ――ここまでする事も無かったでしょう。

「う、ァ……私の、手が、手が!?」

「近接魔法少女は敵に触れなければならない、という、致命に至り得る危険を常に背負っていることをお忘れなく。もっとも、魔物にそのような考えは無かったのやも知れませんが」

カギネ様の【深挟】に腹を掴まれジタバタと藻掻いている少女。

恐れ戦いた顔のままに、今ここにある死体と完全に同一の容姿で――けれど、まだ諦めていない。

何を？

「手が、逆についている……？」

「ああ、それは私の【侵食】です。ですが、それだけではありません。まだ隠し玉があります。お気を付けを」

「私は魔物なんかじゃないッ！　魔物はそっちだ！　そっちが、私の姿を真似して、びっくりしたから、でも、だから殺してしまったのは悪いと思ったけど、私じゃない！　私が、私が――本物だから！」

「言語機能に混濁が見えますね。なり立て、と言ったところでしょうか？」

「な、なんで!?　信じてよローグンさん！　私は本物！　本物なのに、ねぇ、貴女も離してよ！　これ、痛い……！」

「ローグン先生に殴りかかろうとしていた時点で敵対者なんじゃないですか？　あなたが魔物かどうかはともかく、ここに捕えておいて損はないです」

「正解です、カギネ様。そしてそれが、精神体に対する回答の一つです。すべてではありませんが」

一歩。また一歩と、カギネ様が捕えて離さない魔法少女へと近づいていく。

確か名前は。

「ティア様」

「あ、やっぱり覚えててくれ、」

「おやすみなさい」

その身体を【侵食】する。
何が起きたのかわからない、といった風に、一切の言葉を発さず、発せず、その命を溶かした彼女。
たとえ彼女が本物であったとしても、偽物であったとしても、私を殺さんとしていたのは事実。魔物であるならば、より強い個体に乗り換えようとした、というところでしょうか。魔物でなく、何らかの方法で死体を用意し、それを罠に使って……といった策略であった場合は、裏切り者として封印措置を受けるでしょうね。
何故そんなことをしたのかと――それはもう凄惨な拷、もとい尋問を受けた後に、ですが。
「あれ？　どうしたんですか、ローグンさん。みんなも」
「ッ――!?」
図書館の入り口。
そこに、いた。
今しがた殺し、今しがた死体を確認した少女が。
「離れてください！」

「嘘でしょ!?」
「え、うわ、何？　っていうかソレ、もしかしてローグンさん……？　なんでハダカで」
図書室に入ってこようとする少女――ティア様。
「止まってください」
「え。あ、はい」
「……貴女は、ティア様、ですか？」
「え、うん。そうですけど……え、私なんかやっちゃった？」
姿形におかしなところはない。
今しがた【侵食】したティア様も、本に埋もれて死んでいたティア様も、図書室の入り口で立ち往生しているティア様も――完全に同一。
「瀬尾様」
「は、はい！」
「中央塔で、ティア様の蘇生を確認してきていただけますでしょうか」
「わかりました！」

補習組の一人、瀬尾アルカ様に確認を頼みます。彼女の魔法は【音破】。声量を高める事ができる他、音による破壊も可能と、汎用性の高い魔法少女。もし彼女が襲われてしまった場合でも、確実にその位置を特定できる、という点での選出。

瀬尾様は図書室の窓から飛び降り、中央塔の方へ駆けて行きました。

「……えーと、なんか今ヘンな単語がきこえたんですけど……」

「申し訳ありません、ティア様。現在不確定且つ未確認な事件が発生しておりまして、その対応に追われています。今しばらくここでお待ちの上――」

「ローグンさん、危ないッ！」

しゃがむ。

後頭部を掠め、伸びて行くのは――【深挟】。そしてそれは、図書室の入り口にいたティア様を掴み上げる。

「あ、ぐっ……!?」

「カギネ様？」

「――だって、ソイツも絶対魔物じゃないですか。なら捕まえておいた方が……」

「【波動】！」

「う!?」

その声は、図書室の天井から降りてきました。

カギネ様の【深挟】はあくまで〝不可視且つ伸びる腕を伸ばし、敵を掴む〟という魔法故、その間を遮られるとどうしようもなくなります。

遮られるどころか、不可視の腕を何らかの方法で抑えられようものなら自らにダメージが入ってしまう、なんとも近接らしい魔法。使いどころ次第ではありますが、無策に使う魔法ではない事は確かですね。

それで、降りてきた声ですが。

「縁様ですか。どうされましたか？」

「コーネリアス・ローグン？　何故貴女がここに」

「色々ありまして。それで――皆々様方、揃いも揃ってどうされたのでしょうか」

天井を見る。

そこには、フェリカ・アールレイデ様、ユノン様、シェーリース様。そして梓様と……Ａクラス Ａ班の皆様が勢揃い。あ、シエナ様もいらっしゃいますね。

「話は後だ、冷静メイド。まずァこいつら片付けるぜ」

「こいつら、とは？」
「ン？　もしかして気付いてねェのか？」
カギネ様が。掴まれていたはずのティア様が。冷静に分析をしようとしていたクイネ様までもが――逃亡の姿勢に入りました。
「逃がしませんのよ」
「退路は塞ぎました！」
「梓、頼む！」
「あァよ――！」
一瞬で窓際に降り立ったアールレイデ様と、図書室の入り口を塞いだユノン様。天井にはシェーリース様とシエナ様が残り、完璧な布陣となりました。
そして。
「っ、やめて、近付かないで！」
「梓・ライラック……！　この、人殺し！」
「同胞の、恨み――」
明らかに梓様に恐れを抱いた様子の補習組のお二人とティア様。

しかしそれは、次第に怨恨となって行きます。
「あァよ――すまねェな、魔物に同情する程私ァ優しくないんだ。死んでくれ」
「ひ――」
いつの間にか。
本当にいつの間にか、カギネ様の目の前にまで移動していた梓様が、彼女の首を掴んでいます。部分強化、でしょうか。それとも、忍術？　どちらにせよ頭の片隅に記録しておかなければ。
「死ね」
言葉と共に。
梓様の魔力が減り、カギネ様が死に絶えます。【即死】。
見た目がたとえ魔法少女であっても、魔物ならば問題なく殺し得るようになったのでしょうか。
「く、そっ！」
「ダメですよ。逃がしません！」
「退いてよユノン！」

「いいえ、退きません。貴女達で最後なんですから！」
「ナイスだ太腿忍者。――死ね」
またです。ユノン様に阻まれていたティア様の首を掴み、【即死】を発動させる梓様。魔力消費の激しさを見るに、全身を浸して殺す、といった手法での【即死】を使っている様子？
だらんと手足から力を失ったティア様から手を離す梓様。そして振り返り――その目線の先にいる、最後の一人に向かって歩き出します。
「く――この!!」
「おいおい、強化もしてねェ殴りかかりなんざ当たるはずァねェだろ」
「なら、【鉄爪】ッ」
「あァそりゃ確かに危ねェよ。だが、なァ。発動できてるか？」
「え？」
最後の一人、クイネ様の魔法は【鉄爪】。これもまた近接らしい魔法ですが、その鋭利さは岩をも切り裂く程。十二分な殺傷能力の期待される有用な魔法です。
ですが、発動していませんね。当然ではあるのでしょう。

先程殴りかかった時、その腕を殺されておりましたので。
「ったく、追っかけ回させやがって……お前で最後だ。死ねよ」
「ぁ――――」
そうして。
梓様に首を掴まれたクイネ様は、息絶えました。
私以外、全員が全員やり切った、とでもいうような顔で。
ふむ。
言い出しづらさが凄いですね。
「あの」
「あァ冷静メイド。アンタが事態を把握してねェってな意外なンだが、アレか。補習組に囲まれてたからか？」
「あ、はい。そうですね。今しがた【即死】した皆様と補習をしておりました」
「それでしたら、階段際で死んでおられましたのよ。恐らくローグンさんが見ていない一瞬を突いて殺し、成り代わったのかと」
「ええ、それはわかるのですが、その」

既に大体の事情は推測できている。
エデンに入り込んだと思われるホートン種。それが生徒の皆様に成り代わって悪事を働いているのだろう、ということは。
それはわかるのですが。
「申し訳ありません、梓様」
「ン？　何がだ？」
「……先ほど、瀬尾アルカ様を……恐らくホートン種と思われる方を、中央塔へ向かわせてしまいました」
「……」
これは、失態ですね。
気が緩んでいたようです。もっとも、ホートン種をそうであると見抜くなど、目の前で真似られた場合に限りますので……いえ、言い訳はしません。
「シエナ！」
「はい。既に感知中です……！　一体、図書室内にいます！」
「ああ、それはあの本の中で死体を真似ているのが」

「――死ね」

説明も聞かず、本の山に手を突き入れて【即死】を発動させる梓様。

明らかに使い過ぎな魔力量に一瞬ふらつきますが、直後ディミトラ様より改良の施された義手で以て魔力を回復、持ち直します。

ミュトス、ですか。素晴らしいですね。

「それと……中央塔付近に魔力反応……今、２に増えました！」

「またですの!?」

「キリがないな……」

「あ、先行はしませんよ。もう同じ過ちは繰り返しません！」

「あァ。冷静メイド、お前も来てくれ。道中で今起きてることを話す」

「承知いたしました」

さて、では。

この整理のつかない状況を、一つずつ紐解いて行きましょう。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「あー、なンだ。今起きてる事ってな、まずホートン種なんだが」
「はい。ホートン種がＥＤＥＮ及びエデンに侵入、様々な魔法少女の姿を真似て徘徊している、という事件ですね。先日より話題に上がっていた」
「あァよ。私の含めて、学園内のホートン種っつーのァ最初は50はいた。シエナがその魔力の判別ができるってんで言う通りに殺して行ってる最中で、都度都度トイレの隅だとか階段の裏だとかに死体が隠されてた。この意味ァわかるか？」
「蘇生槽が役割を果たしていませんね。魔法少女はＥＤＥＮ内にあっても死したのであれば蘇生槽へ行くはずです。そして、その肉体が世界に長時間留まり続ける事はありません」
「そォだ。つまるところ、蘇生槽になんらかの細工をされてるか――今回のホートン種にそォいう能力があるか、だ」
蘇生槽への細工。
ディミトラ様の陥っていた状況が脳裏に反芻します。
そして、50以上のホートン種、ですか。防衛組の責任問題ですね。防衛組警備班……今の常駐隊はどなたでしたか。後で報告を入れておきましょう。

「正直な話、蘇生槽への細工ってな難しいンだろ？」
「はい。非常に厳しい監視が為されているだけでなく、そもそも私達が訪れる事のできる蘇生槽は槽だけのもの。根幹の装置は隠されていますので、見えている蘇生槽になんらかの仕掛けを施した所で蘇生槽に異常が出る、ということはないかと」
「あァよ、私達もそれを考えたワケだ。で、つまり後者……ホートン種にそォいう能力があると。つまり、高位のホートン種で、且つ魔法少女の劣化した固有魔法を再現し得る……結構やべェのが入ってる、ってな」
「なるほど」
似たような話を、安藤様の前でもしましたが。
確かに魔物の中には私達魔法少女の魔法を劣化再現し得る個体が存在します。現状確認されているのはある迷宮の最奥にいる一体のみですが、それがいるのだから他に居てもおかしくはない、と。
「んで、このホートン種の一番やべェのァ、肉体を殺すと他に乗り移る、って点だ」
「……それは」
「あァ。お嬢もポニテスリットも口を揃えてあり得ねえっつーんだが、シエナが

しっかり確認してる。無策に先行した太腿忍者が殺したホートン種……ソイツが太腿忍者に憑りついて、その肉体を別人に改変したトコをしっかりとな。その時ァ私が【即死】させたが、普通の手段で肉体を殺すと分裂する。一匹が二匹に、二匹が四匹に、な」

「なるほど」

それは――Sを通り越して、SS級の魔物ですね。

強い魔法を持つ存在を真似てしまった場合、対処が難しくなります。それが倍々に増えて行くとなれば、厄介どころではありません。

「――梓・ライラック様！　目標ホートン種、片方が二体に再分裂いたしました！　もう片方は中央塔前で停止中です！」

「あァわかった！　先に中央塔前のを潰す！　お嬢！」

「はいですの！」

アールレイデ様が加速します。私と並走していたところを、【神速】を用いたのでしょうか、既に遠い点へと化した彼女に、少々ばかりの嫉妬を。

SS級。やはり遠いですね。

「ところで、縁様」
「なんだろうか」
「梓様がユノン様を殺した時の話を、詳しくお聞かせ願えますでしょうか」
「む？　それはいいが……どういう意図だ？」
「気分の悪い話ではあると思うのですが、私はキリバチ様より遣わされたお目付け役でもありまして。梓様が本当にA級に足り得るかどうかを見極める必要があるのです。ユノン様に憑りついたホートン種は誰になったのですか？」
「えるるー先生だ。ただ、周囲にえるるー先生はいなかった。どこかに死体が隠されているのやもしれないが……」
「――えるるー、ですか」
さて。
それはそれは。
また、難しくなりましたね。
「ああ。えるるー先生になった直後のユノン……というかホートン種に接近し、梓は首を掴んで【即死】させた。ああ、ユノン。お前はどこまで記憶があるんだ？」

「敵性存在と思われる魔法少女を殺した直後まで、ですね！　何か白いものが視界いっぱいに広がって、気付けば蘇生槽にいました！」
「梓、ホートン種殺したみたい」
シェーリース様の言葉にそちらを向けば……いえ、見えませんね。視力を強化しますと、なるほど。確かに殺された瀬尾様が。ああ、防衛組警備班の者が何か騒いでいますね。これは仲裁に行かなければ。
……しかし、えるるーを殺した、ですか。
劣化再現とはいえ固有魔法【回避】を持つえるるーを。
ふむ。
「――後続の皆さん！　避けてください！」
【波動】――では防げなそうだな、退避だ！」
横合い、修練塔の方から一条の【光線】が飛んできます。
それは単なる照射に終わらず、私達を狙って動き回り――。
「くっ!?」
「今のは、【光線】!?　そんな、私ですか!?」

「ユノン、動揺は後だ！　シェーリースを遮蔽に隠せ！」
「りょ、了解しました！」
シェーリース様に当たってしまわれましたか。
近接魔法少女である私達や忍者であるユノン様と違い、シェーリース様は純正の遠隔魔法少女。S級故に身体強化ができる魔力量に恵まれているとはいえ、回避行動においては後れを取ります。
運んであげるべき、でしたね。
「――縁様、貴女も遮蔽へ。二条目が来ます」
「何んだと!?　うッ！」
「申し訳ありません、手荒になってしまいますが、運びます」
修練塔の方から見える【光線】の光。二条、どころではありませんね。どんどん照射元が増えて行っているあたり、便利な魔法を見つけて分裂した仲間に共有、それになっていっている……と？
それはまた……知能の高い魔物ですね。SS級です。たかだかホートン種と呼ぶのも烏滸がましい新種かもしれません。

建物の遮蔽に入ると、【光線】は止みました。
「大丈夫か、お前ら――背中メッシュ、お前」
「ごめ、ん。脚……抉られて、痛いから。……梓」
「あァよ」
シェーリース様の負傷箇所は腿。【光線】によってごっそり肉を削ぎ落された彼女は、その顔に脂汗を浮かべています。
そしてそこへ降り立つは、アールレイデ様に抱えられてきた梓様。
彼女はその手をシェーリース様の首に当て。
「……」
「大丈夫、ですの？　梓さん、こんな、立て続けに……」
「ん？　魔力量なら大丈夫さ。ンなことより――」
「そうではなくて！　……そうでは、なくて。その、私達は、遠征先で何があったのかを……全て知っている、というわけではありませんの。ですが、梓さんの心は……」
「大丈夫さ。私の心より、これ以上被害が出ることの方が心配だ。今もどこかで魔

物の被害に……殺されて、成り代わられて、蘇生も出来ずにＥＤＥＮを彷徨ってる奴らがいンだ。そいつらを解放してやるためにも、早く殺してやんねェとな」

「梓さん……」

「……これも成長、か。少しばかり悲しい歩みだが……」

――そうでしょうか？

「シエナ、奴らはどこだ？」

「現在、全魔力反応が修練塔に集中しています。が……う、少し雑像が」

「そりゃ多分反魔鉱石のせいだろォな。修練塔にァいくつか反魔鉱石の壁があっからよ」

それには同意いたします。

修練塔は、様々な魔法少女が魔法を修練するための場所。当然高威力の魔法の修練とあって毎回毎回壁を壊していては費用が馬鹿にならないので、反魔鉱石の壁へ向かって放射・攻撃する事で済ませます。

本当に修練したいのであれば実戦に出向いた方が早いとは思いますが。

「とにかく、修練塔からの【光線】を避けつつ修練塔に向かい、事態の収束をさせ

る必要がありますね」
「あァさ。だが、多分全員が隠れながら移動ってなるとアイツら修練塔から出て行きかねねェからよ。囮が必要だ」
「それならば私が！　練度の低い【光線】に当たる程遅くは無いですのよ！」
「う。それは私が傷付くような」
「あ、いえ、ですから練度の低い【光線】には、ですの！」
それではダメでしょう。
少なくとも、梓様は駄目だ、というのでしょう。
「ダメだ」
「え、どうしてですの？」
「お嬢は速すぎる。捉えられねェってわかった時点で囮だってバレちまう。それより、アイツらの同胞を殺しまくって敵意食らいまくってる私のが良い」
「そ、それは危険ですの！　梓さんは、ただでさえ、その……強化には向いていませんのに！」
「安心しな、金髪お嬢様。ちょいと遠征でな、私ァ魔法も殺せるっつーのを証明し

てきた所さ。なァ冷静メイド？」

「はい。私もそれは確認しております。ですが――【光線】を見て、自身が焼かれる前に殺す、ということが可能なのですか？」

「あァ」

一つ、注釈を付け加えるのであれば。

私には無理です。アールレイデ様であれば可能やもしれませんが、【光線】の照射速度は文字通り光に匹敵します。匹敵するだけで並ぶわけではないのですが、どうあっても梓様程度の強化では辿り着けぬ域にある、と言って良いでしょう。

さて、はて。これは。

以前、私から彼女に言った言葉ですが。

「任せます、梓様。そして、貴女様に無理をさせぬよう、迅速に修練塔を制圧いたしますので――どうぞ、ごゆるりといらっしゃってくだされば」

「あァ。そォさせてもらうよ」

潮時――でしょうかね。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

九、遭遇編

33・韻母栖徒係数〕水落来琉不応琉風呂無地須界・

事態は収束しました。
などと述べますと、色々と語弊を生みますね。
先日の、ホートン種の騒ぎ。
ＥＤＥＮ内に入り込み、多くの生徒を殺して回ったホートン種ですが――全て死に絶えました。
下手人は梓様。
ではなく。
「全く……同じ防衛組として恥ずかしい限りだな」
「はい。まさか、迷宮の入り口を閉め忘れた、とは……」
「それを隠蔽しようとしていたのが何よりもの問題だ。そして解決を生徒達に任せ

ようとしていたことも。それを»これも試練だ»などと言っていた事も……ああ腹立たしい！」

私の敬愛して止まないキリバチ様、でございます。

無論の話ではあるのですが、これほどの死者が出て、これほどの混乱が起きていて、上が動かない、などあり得ない事です。軍事部はあくまで国のためにある部署ですが、内側に魔物が入り込んだとあっては様々な問題が生じます。ので、迅速かつ丁寧な対応が求められます。下の国には決して混乱を悟らせないような、的確な対応が。

ＥＤＥＮ下部に存在する迷宮、終の因。そこは迷宮でありながらＥＤＥＮの管理下にあるため、基本は無害です。ですが、迷宮の主であるソテイラ様曰く、迷宮の魔物と勝手に住みついた魔物の２種類が彼の迷宮にはいて、前者であれば制御は可能なものの、後者には「なんとなく嫌だな、出たくないな」と思わせる程度しかできない、とのこと。

よって警備責任者……今回で言えばＥＤＥＮ防衛組警備班マルハーバン隊の隊員３名が、迷宮の入り口を守り、予定にない魔法少女が入らないかどうか、中の魔物

が出て来ないかどうかを監視しなければいけません。

それを怠っていた、と。

入り口の錠をかけ忘れ、剰え市場区画に３人で乗り出し、戻ってきた頃には入り口が開いていて――此度の騒ぎが起きていた、と。

それを知った３人は本部に報告する、前に、まず自分達で対処をしようと画策したそうです。ですが、３人の内２人が失踪。後になってわかったことですが、ホートン種に殺されてしまっていたようですね。

残された１人は警備班の中でも一番の新人だったそうで、先輩２人の帰りを迷宮の入り口で待ち続け――ＥＤＥＮ中を飛び回る私達と、それを撃ち落さんとする【光線】等の魔法を発見。

キリバチ様の仰られた通り、「これも昇級試験を乗り越えるための試練だろう」などと考え、手を出さなかった、と。

それが発覚したのは、当然ながら多数の蘇生者及び警備班のお二方が司令塔や軍事塔に報告を入れたから、です。被害者の中には教師陣もいましたからね、事態の情報はＥＤＥＮ中に急速に広まり、警備責任者たちへの糾弾……は後にして、キリ

バチ様を含む防衛組の皆々様が動きました。

隊員の躾のなっていなかった事を自責する【断裂】のマルハーバン様、我らが【痛烈】のキリバチ様、Aクラスの皆様には顔馴染みでしょう【自爆】のジュニラ様。勿論エミリー隊各位も出ました。エミリー様は未だ心の傷を負われたままですが、私達は、というか私以外の三人は防衛組防衛班として活動しておりますので。

更に更に、SS級魔法少女防衛組攻撃班【青陽】のエルバハ・イドラ様までもが出張った今回の殲滅劇は、私達が修練塔に辿り着く前に終了いたしました。

修練塔の消滅、という形によって。

「一応、やりすぎたのではないでしょうか、という言葉だけ言わせていただけますか？」

「知るか。私の魔法ではない。【青陽】殿が〝逃げられると面倒〟などと言い出すから悪いのだ。修練塔など作り直せばいいのだから、一度消し飛ばしてしまおう、などと……」

「費用の程は、聞かない方が良さそうですね」

「費用はかかるが、外に出さずに済んだことをまずは褒めるべきだろうな。ライ

ラックがホートン種全体からの敵意を買い続けてくれていたおかげだ。それによってホートン種は修練塔に集結し、何やら非常に強力な魔法を使おうとしていたのだから。全く、アイツには迷惑をかけてばかりだ」

「……その事、なのですが」

生徒の皆々様方、及び軍事部の方でも昇級試験が待ち構えている、という時の、この騒動。

少々どころでなく上は慌ただしくなっている事でしょう。

「どうした、ローグン」

「――申し訳ありません、キリバチ様。旅に出たいのです」

「……。……？　――は？」

が。色々と、あるかと思いますが。

少しばかり。本当に少しばかり――気になる事がございまして。

「どうしたローグン。まさかお前もホートン種か、などという茶化しはいらなそうだな」

「はい」

「……理由を話せ。簡潔で良い。口に出したくない事であるのなら、今ここに書け」
ペンを取ります。
紙に、文字を書きます。
驚いた表情でこちらを見るキリバチ様。
私は、頷き返しました。
「……わかった。支度は必要か？」
「いえ。――いつか、必ず戻ります。それまでＥＤＥＮとエミリー様をよろしくお願いいたします。あと姉も」
「……ああ」
「お体に気を付けてお過ごしください――では」
人格権を手放します。
私は私を捨て。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「私は私を、取り戻した、という次第でございます」
「あァよ、一つ言わせてくれるか？」
「何なりと」
「こえーんだよ一々登場の仕方が！　魔煙草の一本が指になってた時の私の驚き考えた事あンのか！」
「申し訳ありません、仕込むとしたらそこかな、と思いまして」
いんやさ、死ぬほど驚いた。
死ぬっ程驚いた。
魔力回復のためってわけじゃねェ、魔煙草の味がイケる奴同士ってんでマッドチビ先生とァ時たま魔煙草吸ってンだが、さァて今日も、と思ってケースン中みたら指が一本入ってんだよ。ホラーすぎるだろ。おじさんホラー耐性あンまねェんだよ心臓止まるかと思ったわ。
んで、びっくりしてケース放り投げりゃ、通路を【侵食】して這い出てくる冷静メイドと来た。
こえーんだって。マッドチビ先生もＬＯＧＯＳが攻撃されてンじゃねェかって

すっ飛んできたし。すっ飛んできて、裸の冷静メイドを見て、これまたあン時通り敵だと思って戦闘になりかけたし。

「ねぇ、コイツ本当に信用できるの？　前にも会った事あるけど、その時は笑わない人形みたい、って印象だったのに……さっきから、アンタ見て笑って。まるで別人じゃない」

「ああ、やはりあの時私達と出会ったのは貴女の方でしたか。偽ディミトラ様」

「はぁ!?　ちょっと、やっぱコイツ敵よ敵！　あっちの偽物の手先じゃない！　放り出していい!?」

「おお、やはりこの幼稚さこそがディミトラ様なのですね。あちらは思慮深く叡智に溢れていたため信じてしまいましたが、この浅慮且つ５００年の歴史の一切を感じさせない貴女様が本物、と」

「本気で殺すわよ!?」

あー。

なンだ、また騒がしくなったなァ。

つか、俺から見ても冷静メイドァ感情豊かになった、って感じァすンな。元から

悪戯だのなんだのを仕掛けてくる奴でァあったが、なんぞ……自分から仕掛けるようになった、っつゥか。

　ＥＤＥＮでなんかあったのかね。

「じゃねェや、えーっと、なンつったっけ？　あっちにも私がいて、昇級試験を受けてる、だァ？」

「はい。知覚強化を行わずに【光線】速度の攻撃に対処可能で、全身を浸す【即死】を使用したとしても問題ない魔力量……正確にはあちらのディミトラ様の義手により、一息での全魔力回復を可能にした、単純上位互換梓様があちらにいらっしゃいます」

「ひっでェ言い方しやがンなオイ。つか、名前で呼んでンのかあっちの私のこと。……なンかヘンな事してねェだろォな？」

「少々裸の付き合いをば」

「……あー。すまねェな。そいつァ私じゃねェが、なんか無理させたンだろ。ごめんな」

「？　いえ、共に大浴場に入っただけですが」

「……こえーなァ。なんだよもう一人の私って。何考えてンのかわかんねェ」

ソイツが誰なのかは知らねェけど、もしマッドチビ先生と同じような状況なら、どっちも本物ってェ可能性もある。となると……少女の外見利用して、やべェことやってねェだろォな……。おっさんの自覚持てよ俺。お嬢とかポニスリくらいの子供ならまだしも、冷静メイドと、ってなやべェだろ。

あー。

俺じゃない俺、ねェ。

「で、その私に疑念を抱いて、コッチに来たと」

「はい。少々――成長というには、無理のある行動が多かったので」

「……そいつも、【即死】を使うのか？　んでその言い方を察するに……仲間を、躊躇なく殺す、とかかね？」

「その通りです。あれほど皆様を殺す事を嫌っていた――死というものを忌避していた梓様……もといライラック様が、この短期間でこうも変わる、というのは。あちらのライラック様には申し訳ありませんが、信じられませんでしたので」

「あァ梓で良いよ別に。……はァ。じゃ、なンだ。オーレイア隊の奴らも……殺し

たのか」
「はい。クルメーナ地下からの脱出の際に」
「……そっかァ」
じゃ、そいつァ俺じゃねェ……とは、言い難いんだよな、これが。
だってそいつだって、色々考えたンだろ。マッドチビ先生曰く、肉体に入った精神体ってなそれそのものを殺す事か、マッドチビ先生の技術を使わねェと取り出せねェって話だ。あの地下からの脱出ってーと、何がどォなったのかはよくわからんが、多分迫りくる水に追われて、とか。ガーゴイルに追われて、とか。そォいう緊急事態だったはずだ。
その上で、オーレイア隊の奴らを——これ以上苦しませないために。これ以上、その肉体を利用されないために。
葛藤の上で、殺す、ってな選択をしたのかもしれねェ。
俺には絶対選べない択だが、だからこそ俺ァ追い詰められたらやるかもしれねェ。
だってそれァ、エデンで演習だのなんだのをしていた頃は、ちゃんとやっていたことなんだから。

「……辛ェことをさせたな、あっちの私とやらにァ」

「ええ!?　何？　アンタ自分の偽物に同情してるの？　流石に馬鹿すぎない!?　自分の姿使って何やってんのよ！　って怒りなさいよ！」

「いやまったく、そいつァ筋なんだろォがよ。でも、その場に私がいなかったってな事実でさ。その選択を押し付けたって事実も変わらねェだろ？　私ァこっちでマッドチビ先生と仲良くサバイバル生活して休息の最中にあったンだ、その間、そっちの私ってなずっと死に向き合ってた。ちょいと情けなくなっちまうよ。未だ――死ってなモンを、受け入れられねェ自分がさ」

だって結局のところ、その偽物云々に関しても、俺が死ねば早期に解決したかもしれねェ話だ。

俺が死んで、蘇生槽に戻ってりゃ。

冷静メイド達と一緒に帰ってくるのが偽物だ、って。あっちのマッドチビァなんかよからぬ事企んでるぞ、って。そう言えたはずなンだ。

でもさ。

やっぱ俺、死ぬのはこえーんだよ。

誰かが死ぬのも、俺が死ぬのも。俺が俺じゃなくなるのも。
「ライ……梓様。一つ、聞いてもよろしいでしょうか」
「ん？　あァいいが、なンだ、ちょいと前にも似たような切り出しだったよな」
「はい。では、問います。――貴女は、私の事を女性だと……恋愛対象であると、見る事ができるでしょうか」
ん――？
ンー。
なんだいきなり。思春期か？
「あー。それァ、告白って奴か？　だが冷静メイド、お前にァいるだろ。暴走繭と鬼教官が」
「はい。その上で問うています。貴女は私と恋仲になり、共に湯船に浸かり、あんなことやこんなことをする――その勇気がありますか？　と」
「待て待て待て！　おい！　あっちの私ってな何したンだ!?　馬鹿が、つか馬鹿だろお前も！　断れよ！　好きな奴がいンだから、好き勝手させてンじゃねェよ！」

「……まさか怒られるとは思っていませんでした。ですが、お聞かせください。いえ、この際そちらのディミトラ様でも良いのですが、恋仲になった相手とあらゆることをしたいと――そう考えますか？」

「え、何。なんか私巻き込まれたんだけど」

あァさ、これ何の質問だ？

あっちの俺とこっちの俺を区別するための質問、ってな感じだとァ思うんだが、ちょいと遠回りすぎねェか。それともなンだ、あっちの俺ァコイバナってーのを頻繁にするような奴なのか？

……やめろよ、その真剣な目。

確かに冷静メイドァそォいう対象に見ることァできる。でもできるだけだ。ちょいとなァ、歳の差がなァ。43ってな、相当だぜ？　男は35から、なんつーけどよ、40過ぎて「あ、やべ」って思うこと増えたし、そっから3年ってな結構なンだよ。それをさァ。見た目26か27くらいの冷静メイドと……その、付き合う、ってのァ。ちょいとなァ。世間体が、っつか罪悪感が。もっと良い男いるだろ、って。若ェのは若ェの同士で老後まで幸せにいろよ、って。

先立つ悲しみってな――お前らが思ってるより、酷く重いんだぜ、ってさ。

「あー。無理、たァ言わねェ。が……怖い。特にお前らはまだ、死を……その、なんとも思ってねェだろ？　だからやっぱり、怖いよ。もし……恋仲になったらさ。私ァそいつを離したくなくなる。死んでほしくねェ。傷付いてほしくねェ。痛みも苦痛も感じてほしくねェ。だから……ずっと、安全なトコにいてほしい、って。そう思っちまう。お前らァそォやって閉じ込められンのは嫌だろ？　だから、多分無理だ」

「成程。ディミトラ様、私達フられてしまいました」

「私は一切そういう感情ないんだけど!?　巻き込まないでくれる!?」

「あァよ、冷静メイド。もしあっちの私に告白されたってンなら……こっちの私のことァ考えなくてもいいからな。そいつがちょいと怪しくてこっち来た、とか言ってたけどよ。名前呼ぶくらい親しくなってて、そんだけ笑うようになるくらい……色々あったンだろ？　あっちの私といる方が楽しいなら、こっちの私なんざ気にすんな。ちゃんと、お前のやりたい事をしろよ？」

いんやさ、さっきの言葉を真に受けた、ってわけじゃねェんだけど。

死を以て、結果的に多くを救って、結果的に多くを笑顔にした、ってンならさ。
そっちの俺のが、優秀なんじゃねェかな、って。
「……はぁ。ね、アンタ。ローグンだっけ？　わかったでしょ？　コイツ、重症なの。だから今私はコイツを解放しなさい、っていうためにＥＤＥＮに向かってる。コイツの守りたいもの……家族やらその金髪お嬢様？　だのが必要だっていうんなら、そういうのも全部こっちに収容するわ。ダメよ、コイツに判断任せちゃ。この子はね、自分じゃ差し伸べられた手を取れないの。振り払うこともできないの。ただ、自分には選ぶ資格がないとか、権利が無いとかいって、ずーっと泣いてるだけの小さな子」
「言い過ぎじゃね？」
「黙ってなさい。だから、その恋愛だのなんだのに関しても、この子に選択を迫るのはダメ。もっと心が成長してからにしなさい、そういうのは」
いんやさ、おじさん十分に大人……。
なんならお前らより……ってこたねェな。片や５００年、冷静メイドも50年くらい行ってそォだし。

でも幼子扱いァ……いやまァ泣かされたりはしたけど、やっぱ納得ァ行かねェっつか、もちっとくらい自立できるっつか。

「そうですね。何より、目的は果たせました。――梓様」

「おゥ。……って、おい。何やってんだ馬鹿。頭上げろ、私ァ謝られるよォなことされてねェぞ」

ジャパニーズドゲザ、たァ違ェが、跪いて、深々と頭を下げる冷静メイドを止める。……固い。コイツ、意地でも体勢を崩そォとしやがらねェ……！

「申し訳ございませんでした。護衛でありながら――傍にいることも出来ず、そのような火傷を」

「あー。まァこれァ自業自得だしなァ。マッドチビ先生、言ってやってくれよ。これに関しちゃ私の判断ミスだ、ってさ」

「何言ってんのよ。あの時ドラゴンの狙いが私に向いたから予定変更して抱き着いて【即死】させたんでしょ。それくらいわかってるわよ今まで言及してなかったけど」

「おォ、そいつァ勘違いだぜマッドチビ先生。私ァあン時楽しくなっちゃってただ

けだ。ちょいと楽しくなっちまって火傷なんざ気にならなかっただけだ」
「どちらにせよ馬鹿ね。これから前線に出るのはやめなさい。さっき安全な所に居て欲しい、とか言ってたけど、全く同じ言葉を返すわ。アンタこれからずっとこのLOGOSにいなさい。私と……まぁ、そこのメイドで全部なんとかするから」
「おや、それはディミトラ様。つまるところ、梓様が大事な方である、と……そういう解釈でよろしいのでしょうか」
「少なくともアンタよりは大事ね。だから次に戦闘が発生した場合、アンタ真っ先に突っ込んでくれる？　私も【鉱水】で全力射撃するから」
「反魔鉱石の無いディミトラ様になら勝てそうですね」
「へぇ。何よ、やるの？」
……あー、なンだ。
話が逸れてくれてよかった、っつーか。冷静メイドが挑発して逸らしてくれて、マッドチビ先生もノってくれた、って感じかね。
ダメだねェ俺ァ。っとに。
気ィ遣わせンなって何度言ったらわかるンだ。

「それはそうと、ディミトラ様」
「何よ」
「――左舷前方、島のようなものが見えます。地質調査も兼ねて、一度降り立ってみるのはいかがでしょうか？」
「おォ、マジか。やったなマッドチビ先生！　初めての島だ！」
「……何かアンタが来たから、みたいで嫌なんだけど。ま、地質調査には賛成よ。それで大体の位置はわかるし」
「大体の位置がわかってンならこの一週間以上海の上飛んでたのァなンだったンだよ」
「うるさいわね！　大体なのよ大体！　どの海域か、くらいなのよわかるのは！」
「大体が過ぎる」
ま、なンだ。
ちょいと安心してる自分もいる。
冷静メイドァ結構長い時間一緒に居たからな。なんか、背を預けられる安心感というか。

一応マッドチビ先生ァ倫理観の欠如したマッドな魔法少女なンで、こう、な？
何はともあれ。
移動要塞・偽竜母艦ＬＯＧＯＳ、初の上陸、である。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「あァさ、マッドチビ先生。私ァこォいうモンを見た事があるんだわ」
「へぇ、奇遇ね。私も見た事あるわ。もっと小さいのだけど」
「話している暇があるのであれば、攻撃した方がよろしいのでは？」
それァ――超、巨大だった。
ＬＯＧＯＳにァ流石に及ばねェが、あン時のドラゴンを優に超えるデカさの。
デカさ、の。
「トンボかァ」
「ハーク種――大きくても私の身長くらいなのに、これは大きすぎよ！」
「それにしたってでけェなオイ」

そんなんが普通にいンのか。
しかし、トンボといやァドラゴンフライ。あれか、ドラゴン繋がりか？
「梓様、ディミトラ様。あちらをご覧ください」
「……おゥ」
「うわ」
そこには、ふさふさしたでっけェクモが。
んでソイツァ、足がこれでもかってくらいある、これまた巨大なムカデ。
ははァん？
俺達の流された島が恐竜パークで、この島は虫ランドってワケね。
にしちゃァでけェが。
「あァ、二人ァ虫ァ大丈夫かね？」
「多少不快には思いますが、私の魔法も大概ですので」
「一時期はビードル種やキャタピラー種のガーゴイル作りにハマってたわ。捕まえて解剖してみると、案外機能美あって面白いのよね、ああいう魔物って」
「そォかい。そりゃ心強い」

俺も別に無理ってこたないが……いんやさ、あんだけでェとちょいとキモいな。クモの方はまだいいんだが、ムカデの方がやべェわ。アビスワームだのマッドワームだの、つるっとした奴なら平気なんだが、ああもうぞうぞしてるとちょいとサブイボが。トリハダが。

「ん？」

「どうされましたか？」

アッチのでっけェクモVSムカデ……。

それに、俺達の真下にいるトンボも。

何かと、戦ってねェか？

「――マッドチビ先生、なんでもいい、長物ってな作れねェか？」

「銃？」

「いや、剣だのなんだのでいい」

「それくらいなら余裕よ」

ＬＯＧＯＳの通路から、うにょーんと剣が一本伸びてくる。

ちなみにマッドチビ先生ァ拳銃だの狙撃銃だのァ作れねェそォだ。作ったこと

ねェんだと。つってーとやっぱりルルゥ・ガルに銃渡したのァ、あっちのマッドチビなンかねェ、って勘繰っちまうよな。

なんてのは今はいい。

「あ、ちょっと！　もしかして降りる気じゃないでしょうね!?」

「大正解だ！」

「大正解だ、じゃないのよ！　ああもう、というかなんでドアの開け方知ってるワケ!?」

「梓様、お供いたします」

「アンタはアンタで止めなさいよ！　前線に出すな、って、ちょっと聞いてるの!?」

ガラッと扉を開ける。

吹き付ける暴風。いつまでもあのゴンドラ仕様じゃ流石に不便ってンで自分で作ったんじゃねェか、とかいうツッコミは飲み込んで、知覚強化。視力を上げて、脳の回転を上げて行く。

いた。

やっぱり、いた。
少女が二人……背中合わせで戦ってる。あのバカでけェクモとバカでけェムカデと、多分トンボァ様子見だが、こいつらと。
あのちっこいのが戦ってる。
「梓様、お手を。――私は、止めませんので。ご存分に」
「待ちなさいよ！」
「あァすまねェな、マッドチビ先生。やっぱ私ァおかしくなっちまったってなホントらしい。言う通りだ。ぜってェ危ねェのに――アイツらを。見ず知らずのアイツらを、助けてェって思ってるらしい。はは、死にたくねェってのに、馬鹿だよな」
「ええ、その通りよ、この馬鹿！　死にたくないなら、死なない方法を選びなさい！　飛び降りる？　ばっかじゃないの!?　――プテラゴイル乗って行きなさいよ！　アンタのいう事は聞くように設定してあるんだから！」
……なンだ、おい。
恵まれてンなァ俺ァよ。マッドチビ先生ってな、過保護オブ過保護なんだぜ？　ちょいとでも火傷痕を痛がったりすりゃ、すぐに飛んできて薬塗ってくれるくらい

にはさ、すんげェ過保護なンだよ。倫理観ァ欠如してるが、一度庇護下に置くと決めた相手に対してァとことん優しいんだ。

それが――死にに行っても良いから、死なない方法を選べ、ってさ。

かっけェよな、やっぱ。

ありがてェ。

「私は近海にＬＯＧＯＳを停泊させてくるわ。だから、私が戻るまでに、怪我の一つでもしていたら――許さないから」

「りょーかい！」

飛ぶ。

そこへバッサバッサと飛んでくるは、プテラゴイル。コイツがあの時のプテラゴイルじゃねェってのァわかってるけどよ。

頼むぜ、今回の相棒。

「冷静メイド！　アイツらの保護頼めるか!?」

「承知いたしました。ですが、十二分にお気を付けください」

「あァよ！」

冷静メイドが立ち上がり、プテラゴイルから飛び立つ。そのまま他のプテラゴイルに飛び乗って、足蹴にして、もとい足場にして、ひょいひょいと２人に近づいていく。

さァて――剣なんざ、マトモに使ったことァ無ェんだけどよ。

虫退治と行きますか。なんぞ――ちょいと楽しくなってる自分がいるンでな。

ここにもいるんじゃねェかな、多分。

あのドラゴンみてェなのが。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

一応、あの恐竜島で試していた事でァあるんだ。

ドラゴン戦ン時も一応やってたしな。

何がってーと。

「――死ね」

プテラゴイルに乗り、クソデカトンボの横を掠めながら、その翅を剣で叩く。

斬る、なんてな無理な話だ。俺ァ剣術習った事ァ無いんでね。
だが――剣に乗せられた【即死】が、クソデカトンボの翅の一枚を殺す。
突然動かなくなった翅に混乱する素振りを見せるクソデカトンボ。魔煙草じゃねェ、フリューリ草を噛む。
「っだァ、クソ、魔力調節が難ィなオイ！」
ごっそり持っていかれた。
部分的な【即死】を狙ってたンだが、よくよく考えりゃトンボの翅ってな高速で動いてンだ、当てるだけでも必死。そこに瞬間的な【即死】っつーのァ、集中力も魔力もゴリっと削られる。
が、やっぱりできたな！
「プテラゴイル、もっかい同じ方の翅狙うぞ！」
そう――装備越しに【即死】を浸す、ってな、俺のパワーアップさ。
ドラゴンの時ァ必死だったが、その前も何度かやってたんだ無意識に。
自分の身体じゃねェのにさ。義手越しに、【即死】を通すってな、ンな事ができンなら――剣だの槍だのでもできンじゃねェか、って。

近接魔法少女ってな原則触れないとダメだ。敵に触れてこそ発動する、あるいは自分の身体に纏って外部に放出できねェんで近接魔法少女って呼ばれる。時たま遠隔にも対応できる奴が出るが、そいつらァやっぱり特例だ。

んで、俺の場合、部分的な【即死】ってのをキラキラツインテに習ってできるよォになってた。

これってな完全なイメージなンだが、【即死】の力を持った液体をそこに浸している、あるいは垂らしている、って感じなンだよな。

だから、その【即死】の力を持った液体を長物だのなんだのに沿わせて、纏わせることができたら――クソ弱い俺自らが触りに行かずともよくなるンじゃねェか、って。無論まだ細かい調整ってなできてねェんだけど、敵がこんだけデカかったら練習相手にゃ持って来いさ。

この剣は俺の腕の延長。そォ考えンのが大事さ。

だから――。

「死ねよ、悉く！」

剣としての扱いなんざ知らねェ。

なんぞ、ちょいと彫金師のサガでも出たのか、結構な意匠の施してあるそれを、火かき棒みてェに使ってトンボの翅を殺して行く。
まるでひっかくみてェに。
傷をつけるだけで、トンボの翅が死んでいく。
俺の魔力もゴリュゴリュ減っていく。
「だァ！　ずりィぞＥＤＥＮの私！　魔力回復する腕私にも寄越せよ！　それ安藤さんに作って貰った私のだぞ!!」
そんな鬱憤をぶつけながら――クソデカトンボの翅の、片側全て。
それを殺し尽くした。
はは、飛べねェだろ！　落ちろよ、カト……もとい、クソデカトンボ！
気のせいじゃなけりゃ、俺も落ちてるがな!!
なァテラゴイル。その翼誰にやられたンだ？　なー。気付かなかったよなー。
なー？

遠《ｔｅｘｔ･s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

34・鈍斗灰瀬戸塔業・

「ウォムルガ戦士団、ってな、ＥＤＥＮと同盟組んでる組合なのか？」
「いえ、そのような名は聞いたことがありませんね。少なくとも大陸に登録された組合、集落ではないかと」
「……」
無事にクソデカトンボを墜落させた後、追い付いてきたマッドチビ先生とガーゴイル軍団による絨毯爆撃……もとい鉄槍ガトリングでクソデカクモとクソデカムカデを攻撃。ムカデもクモも仕留めるにァ至らず逃がす結果になってしまったものの、やばそォだった２人を助ける事ァできました、と。
んで、その２人が「村に案内する」ってなこと言って連れて来られたのがこの集落。
ウォムルガ族の村。あるいはウォムルガの戦士団。
冷静メイドも聞いたことのないその村の入り口で、「説明してくる」ってな事を言った２人を待ってる最中ってワケだ。

「なァよ、冷静メイド。あいつらってな」
「はい。魔力を持っていました。服装が統一されていたことから変身はしていないようですが、恐らくは魔法少女です」
「だよなァ。だが魔法らしい魔法使ってなかったよな。精々が身体強化くらいでよ」
「……」
マッドチビ先生ァ何か気になる事でもあンのか、さっきからずゥっと土いじりをしている。
地質調査、って奴なんだろォが、マジに土触ってわかるもんなのかね。【鉱水】じゃ砂や土は操れねェらしィんだが。砂鉄とか砂金ともなれば別、とも言ってたけど。
「しっかし、ＥＤＥＮ以外の魔法少女の集落、ねェ。なンだ、一応マッドチビ先生のクルメーナもそォではあるが、こういうガチな集落ってのを見ると、マジにあるンだなって実感するってなトコはあるよな」
「そう、ですね。……魔法少女の集落であるかどうか、はまだわかりませんが」
「ン？　そりゃどォいう」

なんて雑談をしていたら、先の２人が戻ってきた。
「族長も、説明をした。……無理だ。余所者を受け入れる程、村に余裕はない」
「ン？　あァいいよ、私達は別に飲まず食わずで生きてられるし、そもそも村に身を寄せるって気ァ無ェのさ」
「そうなのか？　まるでアインハージャだ。それなら、どうしてこの島に来た？」
「あァよ。ちょいと道に迷っててな。でけェ陸を探してンのさ。それで彷徨ってたら、ここを見つけたってだけだ」
「大きな丘であれば、北にある。だが、そこには数多の魔獣が出る。此度の襲撃よりも強い魔獣が」
さてはて。
色々気になるワードが出てきているが、どっから攻めたモンかね。
なんぞか、あの恐竜島から楽しいんだよな。ワクワクしてる、っつか。今もＥＤＥＮじゃお嬢達が危険な目に遭ってるかもしれねェっつーのにさ、なんぞか――懐かしい、に近いかね？
冒険にワクワクするってな男子のサガなのやもしれねェが、それだけじゃァない

気もする。拳銃のない俺じゃパワーダウンも良いとこだが、マッドチビ先生作の剣を携えてンのもプラスしてるんじゃねェかな。だって憧れァするだろ、剣ってなよ。

「失礼。魔獣、とは何でしょうか」

「先程貴女たちが倒した、体躯の大きな獣や虫のことだ。彼の者の使徒。雷の使徒。ベルウェークの使徒」

「なるほど。貴女方は、あれらと戦っていたようですが、それは何故でしょうか？」

「魔獣は村を襲う。私達はアインハージャだから、村を守る使命がある」

「アインハージャ、とは？」

「村を守る者だ。食べることも水を飲むことも必要なく、死したとしても次の日には蘇る至高の戦士。私達はずっと生きている。死んでは蘇り、蘇っては戦い、死ぬ」

……聞いてる限りァ、魔法少女と同じだな。

だが、魔法少女の集落ってワケじゃねェ、魔法少女がいる人間の集落、か。

はン。俺ァっとにどうしちまったのかね。

ンな腕の広い奴じゃねェこた自覚してたはずなのによ。なんだって俺ァ、こいつらにまで死んでほしくねェとか思ってンだ？　筋違いにも程があらァよ。

こいつらァ――戦いを望んで、死さえも望んで。それを栄誉だって思ってる。
そいつらに死んでほしくない、なんざ言えるはずもねェやな。そもそも初対面に等しいんだ。名前も知らねェ。
だってのに、なんで。
「使徒、つったか。ってこた、その大きな丘に本元がいンのか？　ベルウェークって奴が」
「丘にはいない。空にいる」
「空ァ？」
空。
北の空。
……あァ、なんぞ暗雲ゴロゴロしてやがんな。雷の使徒。ってこた、本体は雷の化け物か？
高位の化け物で、雷扱う奴が他の化け物使役して……村を襲わせている？　なんだってそんな七面倒なことしてンだ。自分から出張ってこいよ。
「そいつ倒すのァよ、禁忌か？」

「不可能だ。ベルウェークには剣も槍も通じない。過去、数多のアインハージャが彼の者に挑んだが、倒す事のできた者はいない」
「ン、なんだ。お前ら以外にもアインハージャってなはいンのか」
「いる。だが、今はいない。今は私達がアインハージャだ」
「……あーっと？」
どぉいう意味だ、そりゃ。
おじさんに理解できるよう説明してくれ。
「ウィジ。説明が下手」
「ならばお前がしろ、リジ」
さっきから黙ってた方……2人の魔法少女の内の一人が、前に出た。
口下手な感じがしたから説明だのなんだのはこっちの子に任せる、って感じかと思ったら、普通に喋るンだな。
「一つの時代において、アインハージャは2人までしか存在できない。今代の私達はあと7回蘇ることができるけど、それを終えたのならば私達は世界に還る。そして、次代のアインハージャが生まれる」

「なるほどね」

とりあえず相槌を打ちァしたが、どォいう事だろォな。

俺達魔法少女とおんなじだって考えりゃ、蘇生の回数制限なんてモンはねェし、魔法少女がいなくなったら次の魔法少女が覚醒する、なんて仕組みでもねェ。まァいなくなる、なんてことがまずないんだが。

村を守るために魔法少女に覚醒する仕組み、みてェなのがあると仮定したとしても、んじゃ誰がそれを仕組んだのかってトコと、魔法少女への覚醒を完璧にコントロールしてるっつーちょいとヤバめな問題点が浮かび上がる。

「マッドチビ先生、蘇生槽ってな、そォいう仕組みにできんのか？」

「不可能よ。蘇生槽はそういう仕組みじゃないし、そもそもこの村には蘇生槽がない。ね、アンタ達。アインハージャが蘇るっていうのは、どうやって蘇るの？」

「命を散らした場所で、傷や欠損を癒した状態で復活する。アインハージャは不滅だ」

「ほらね」

マッドチビ先生がどォやってここに蘇生槽が無いと見抜いたのか、ってながちょ

いと気になるが、なるほど、蘇生槽での蘇生たァ根本から違いそォだな。
つか、確かに……無いんだよな。
俺でも感じ取れるよォになった、地脈点って奴が。この島にァない。
あるのは。
「お二人とも、ありがとうございました。私達は大きな丘の方へ行きます」
「だな」
「危険だ。アインハージャでもないのならば――待ち受けるのは、死だけだぞ」
「ウィジ。この3人は、ヴァルメージャかもしれない」
「何？」
世界を流れる魔力。
それが集中しているのァ、確実に北だ。丘っつーのァまだ見えねェが、そこに化け物が集まっててベルウェークとやらがいるってンなら、あのドラゴンよろしくなんかが坐してンのァ間違いねェだろ。んで、アインハージャのわけのわからん蘇生や覚醒の仕組みの大本もそこにありそォだ。
原理を理解せずとも、力の根本叩いちまえばなんとかなるだろ、ってな。

「お前達は、ヴァルメージャなのか？」
「いいえ。私達はヴァルメージャではありません。アインハージャでもありません。ですが――魔獣程度には負けないと、先ほどお見せいたしました。危険は重々承知でございますが、私達には向かわなければならない場所があります。ベルウェーク程度、障害にはなり得ません」
「……ならば、私達もついていく。ベルウェークを倒し得るのならば、このウォムルガ族の村には安寧が訪れることだろう」
「同意する。次の襲撃は明日。日の落ちる前に倒し得るのであれば、過去のアインハージャも浮かばれる。ただし、日が落ちたのなら私達は帰らなければならない。村を守る事こそが使命」
「いんやさ、別についてこなくてもムガ」
「ええ、じゃあ道案内頼める？　私達は強いけれど、唯一弱点があってね。頻繁に迷うのよ。その大きい丘とやらを発見できていない以上、夜の海を彷徨ってこの島にもう一度辿り着くかもしれないわ」
「わかった。だが、案内だけでなく、私達も戦う。私達はアインハージャ故」

「それは勝手にして頂戴」

いやさ、固有魔法を使えねェんだから、ついてきたら危ねェだろ、って言葉はマッドチビ先生の手で塞がれちまった。まァ使えても危ねェのがここにいるんだが。

けど、どォいう了見だ。冷静メイドが知ったかぶりして一旦離れよォとしてる、ってな伝わったから、俺もサポートについてくんな、って言おうとしたらのコレ。マッドチビ先生にァ冷静メイドのノリァ伝わらなかったのか？

まァ確かにマッドチビ先生と冷静メイドァまだ互いを信用しきれてねェだろォからなァ。

俺が仲を取り持たねェと、いずれ喧嘩が起きそォだ。

「何俯いてんの。行くわよ」

「ん、あァよ。……な、マッドチビ先生」

「何よ」

「冷静メイドとァ仲良くしてくれな。悪い奴じゃねェからさ」

「……何の話？」

嫌だぜ、おじさん。

もう仲間だと思ってンだよ。その二人がさ、喧嘩するとことか。見たくァない。するなたァ言わねェよ。人間だ、価値観のすれ違いもあるだろう。だがよ、今俺達3人ってな唯一ＥＤＥＮを知ってる……なンだ、孤立無援、天涯孤独たァちょいと違うが、そぉいう信頼関係あっての……。

「梓様。何やらしんみりしている所申し訳ないのですが、急ぎますので」

「あァさ」

今の冷静メイド、ちょいと怒り気味だったよォな。

……もしかして俺、なんぞ空気読めてねェか？

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「改めて。ウィジだ。ウォムルガ戦士団にて、今代のアインハージャを担う」

「リジ。ウォムルガ族がアインハージャ」

「コーネリアス・ローグンと申します。私達はアインハージャでもヴァルメージャでもありませんが、魔獣の一匹や二匹に後れを取る程弱くはありませんので、お見

知りおきを」
「ディミトラよ。この移動要塞・偽竜母艦ＬＯＧＯＳを含め、周囲に飛んでるガーゴイルの全てを作った天才彫金師。だから、あんまり逆らわない方が良いわ。私の気分一つで外に排出するから」
「なンで脅してんだよマッドチビ先生。あァ私ァ梓。梓・ライラックだ。よろしくな、青バンダナ、赤スカーフ」
「……？」
「名乗ったはずだが、聞こえなかったのか？」
あァさ、久しぶり……でもねェか。
あだ名つけてピキられるってな、なんぞや懐かしくなるな。んな時間経ってねェのによ。
「梓様は他人を名前で呼ぶと傷を負う呪いにかかっています。お許しを」
「なんと。それは失礼した。しかし、呪いか。やはり以前にも魔獣との交戦経験があるようだな」
「はい。貴女方がはじめに敵だと認識したこの艦も、元は魔獣でした。しかしなが

らこちらに在らせられるディミトラ様の御業により征服、こうして私達の居住空間と成り果てた次第です」

「それは……やはり貴女はヴァルメージャなのではないか？　ヴァルメージャはアインハージャには扱うことのできない秘技を用いて魔獣と戦うと聞く。ディミトラ……いや、ディミトラ殿。貴女は」

「私の正体を、何故アインハージャの貴女達に話さなければならないの？」

「――失礼いたしました。ご無礼をお許しください、ヴァルメージャ」

ンー？

なンだなンだ。マッドチビ先生も冷静メイドも、単なる知ったかぶり、ってワケじゃねェのか？

なんぞか拾えるワード全部拾ってちゃんと推測して、それが全部的中してる……ってな、そうそうあり得る事じゃねェと思うンだが。

しかし、そのヴァルメージャとやらはアインハージャより上の存在なのな。

アインハージャが魔法少女だとして、じゃあヴァルメージャってなンだ？　俺達でいう学園長とか上官とかそォいう類か？

「あァよ、お二人さん。こっちの二人ァちィとばかし上の奴らなンだがよ、私ァ違う。下っ端も下っ端さ。で、この調子でよ。なんも教えてくんねーんだ。だから、ヴァルメージャだのベルウェークだのってのをもう少し詳しく教えてくれねェか？」

「そうなのか。わかった。では、騒がしくしないよう、他の部屋で話すとしよう。ヴァルメージャの論場にアインハージャがいることは許されん」

「ならコッチだ。あァよ、マッドチビ先生。空き部屋使うぜ」

「許可するわ」

これでいいっぽいな。

何、このＬＯＧＯＳってなマッドチビ先生の体内に等しい。

なんぞやベェことされそォになったら、止めてくれるだろ。ちゃんと音も拾ってくれるだろォし。

しかし、でけェ化け物に慣れてると、ＬＯＧＯＳ見ても驚かねェんだなって。冷静メイドはあれでいて、初めて外に出た時ァその大きさや造形に驚いてたモンだが。

それとも、いんのかね。

こんくらいでけェドラゴンが、他にも。

「ヴァルメージャとは、数多のアインハージャの祈りに応えて現れる、誰よりも強きアインハージャのことを指す。ヴァルメージャはアインハージャが束になっても敵わず、更には天を割り、地を裂くような秘技を使うという」

「成程。そいつァ確かにマッドチビ先生に似てンな」

「やはりか」

背中メッシュの【神鳴】とか、迷宮探索ン時に入り口で挨拶したマルハーバンってな魔法少女の【断裂】に近い魔法を扱う魔法少女がいるンだろォな。

んで、一応そのヴァルメージャってのがアインハージャの一員でァあるってな知られてると。

つまるところ、やっぱり全部魔法少女だ。同時に蘇生槽じゃねェ手段で蘇生してる魔法少女でもある。俺ァ蘇生槽だけが唯一の蘇生手段だって思い込んじゃいたが、確かにそれだけしかねェってのァ不自然だよな。

魔法少女ってなが、人工的に作られたものでも無い限り、だが。

「ベルウェークってな、どんな見た目してンだ？」
「空に座す巨躯の魔獣だ。牛の頭、戦士の胴体を持ち、４対８本の手足と大きな翼が特徴的だろうか。雷雲と共に動き、雷雲を意のままに操る」
「……ン？」
なんぞか、聞いたことのあるよォな。
「だが、ベルウェークに辿り着く以前に、大きな丘にいる数多の魔獣を倒す必要がある。この、ロゴス、と言ったか。これで近づいたとしても、撃ち落される可能性は高い。過去、空を飛び得るアインハージャが直接ベルウェークに攻撃をしかけた事があったが、リコザという魔獣によって撃墜された」
「撃墜するってな、手法ァどォいうのだ。なんか飛ばしてくンのか？」
「糸だ。リコザは８の脚を持ち、口から糸を発する他、毒も扱う」
毒グモで、糸吐いて、しかもその精度ァ飛んでる人間大のモンに直撃させられるくらい、ね。
とんだ化け物だ。精神体でもねェのに遠隔使うたァ面倒くせェ。流石に糸ァ殺せなそォだな。プテラゴイルが盾にァなってくれそォだが、受け止め切れるかどォか

は微妙か。威力による。
　しかし、空を飛べるアインハージャね。飛行魔法を使える奴もいた、と。
「お前らアインハージャってな、普通の人間にゃできねェ事ができンだろ？　たとえばこう、腕の力を一時的に強くするとか、早く動けるよォになる、とかよ」
「よく知っているな。そうだ。我々アインハージャは、戦いの詩によって身体を強化することができる」
「詩？」
「そうだ。戦いの詩、守りの詩、癒しの詩。アインハージャに伝わる、アインハージャのみが使い得る言葉で、私達は身体を強化する」
「へェ。ちなみにそれってな、私に教えてもらうことァできんのか？」
「構わないが、アインハージャでなければ使うことはできないぞ」
「いいさ。そォいうの知りてェだけだからよ」
　特に、癒しの詩ってな。
　すげェ気になる。固有魔法を用いずに癒しってのができンのなら、収穫も収穫だ。そもそも固有魔法に癒しが無ェんだけどよ。

「まず、戦いの詩は≫逢丹異弩喪上巴環≪だ」
「ウィジ、そもそも聞き取ることができないと思う」
「ああ、そうか。そうだったな」
「≫逢丹異弩喪上巴環≪？」
「え？」
……なんだ。
すげェ、耳馴染みのある言葉だな。そのアインハージャの詩、ってな。
俺ァよく使っている、よう、な？　ン？　そォだっけか。
「聞き取れるようだな。やはりお前はアインハージャなのか？」
「……ウォムルガ族以外のアインハージャがいると聞いたことは無い」
「あァよ、なんぞ聞いたことある言葉だったンだ。他の二つも聞かせてくれ」
「守りの詩が≫逢丹異弩喪上櫓刃笥賭≪で、癒しの詩が≫逢異愚埜迂意図≪だ」
「≫逢丹異弩喪上櫓刃笥賭≪と……あァ、なるほど。≫逢異愚埜迂意図≪か。癒しの詩ってよりかは、鎮痛用かね」
求めていたものじゃなかった。

一時的に痛みを消す、ってだけだ。治すワケじゃァねェ。
だが、なンだ。
すげェしっくりくる。魔法ってな詠唱が必要、っつー前世の先入観のせいかね？
ンな先入観持ってた覚えァ無ェが、なんか正しい方法を見つけた、って感じがすげェ。
いやまァ戦闘中に一々ンなこと言ってたら色んな判断が遅くなりそォだが。
「あン？　だが唱えても発動ァしねェのか」
「精神力が必要だ。詩と共に精神力を込める事で、詩は現実になる」
「……なるほど」
魔力込めろってことね。
ま、そこァ当然か。込めずにできたらそれこそ御業だ。
「アンタ達、ブリッジに来なさい。見えてきたわよ」
にゅんっと突き出てきた伝声管から、マッドチビ先生の声がした。
一瞬驚いたような表情を見せた青バンダナと赤スカーフも、その声にそォいうモンだって納得したンだろォな、頷いてこっちを見る。

「あァ、行くか」
「一つだけ、言っておく」
「ン？」
「私達はアインハージャだ。お前やヴァルメージャがどのような戦い方をするのかは知らないが、私達の事を気にする必要はない。簡単に死ぬつもりはないが、死んだ所で翌日には蘇る。故に、自身にのみ集中しろ。……ヴァルメージャやもう１人の者と違い、お前は、その」
「弱そうだから。ウィジ、言葉は濁さずに言った方が良い」
「はっはっは。大正解」
クソデカトンボ倒した時ァ結構活躍したんだけどなー。
そっかそっか、やっぱマジの戦士にゃ見抜かれるか。
……お前が一番弱そうだ、ってな、まァその通りなンだがよ。
「すまねェけど知らねェんで、勝手に助けさせてもらうよ。私の寝覚めが悪ィんでな」
いやはや、っとに。

……俺ァ、こんなにも融通の利かねェ奴だったかね。もう全世界の人間が死ぬの嫌がってねェか。ンなこた無理だって、わかってるだろォによ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ブリッジに着くと、なるほどなるほど。

前方に陸地。そしてその奥の方に山があって、山の頂は暗雲に飲み込まれてる。

そこァごろごろと雷が響いてて……ま、確かに「なんぞかいますよ」って感じだ。

「マッドチビ先生、大体の話は伝わってるか？」

「ええ。聞いた話だけじゃなく、確認も済んでいるわ。見える？　あそこにいるスパイダー種」

大陸の端。

尻を持ち上げてこちらを威嚇するよォな姿勢を取ってるクソデカクモが1匹2匹と、その眼前の海に浮かんでる糸でめちゃくちゃにされた……多分プテラゴイル。

射程ァそんなでもねェのか、ＬＯＧＯＳに対しては臨戦態勢を見せるだけ。距離

にして５００ｍくらいか？　それにしたって大概なンだが。
「アレがリコザであってっか？」
「ああ。間違いない。気を付けろ、奴の吐く糸には毒がある」
「なら、破壊すればいいわね」
マッドチビ先生が手を翳す。
伴い、周囲を飛んでいたプテラゴイル計30体が――鋭利な槍へと姿を変える。それは次第に回転を始め、甲高い音と共にその速度を上げて行く。
「貫きなさい」
行った。
凄まじい威力を持つのだろう槍が、３匹ほどのリコザへと殺到する。
ティラノを殺した時のアレたァワケが違う。ちゃんと厳選した硬度の高ェ鉱石を用いた、【鉱水】による攻撃。それは迎撃にだろう打ち出された糸を容易く引き裂き、リコザの頭蓋を串刺しにする。さらには――。
「爆ぜなさい」
毬栗か、ウニかね。

突き刺さった鉱石ァリコザの体内で一旦液体に戻り、弾ける形で再度凝固。体内全部を串刺しにしたオブジェの出来上がりさ。

いやさ、やっぱこえー魔法だよ、【鉱水】ってな。

それを操る練度も――マッドチビ先生の発想力も。ちゃんと。

「調子良いじゃねェか、マッドチビ先生」

「当たり前じゃない。アンタ達が散々こき下ろしてくれた私のドラゴンが、実在するってわかったのよ？　私の芸術センスはやっぱり天才的だった、ってコト。どう？　見直したかしら？」

「あァそーいうコトね」

「決してドラゴンではないと思われますが」

実在するとしてもありゃドラゴンじゃねェよ。

実在するのが驚きなのァそォなんだがよ。

「で、どォすんだマッドチビ先生。このままベルウェークってな奴のとこまで突撃か？」

「いえ、それは無理ね。アンタには言ってなかったけど、ＬＯＧＯＳは雷には弱い

のよ」
「……あー。そりゃ、金属を多分に含んでるから、か？」
「そうよ。金属というのはね、雷を引き寄せるの。これが単なるガーゴイルなら問題ないのだけど、中に私達が乗っている時点でキツいわ。私は自分で自分を守れるけど、アンタはそうじゃないでしょ？」
「あァよ、私の弱さをよくわかってくれてるよォで、ありがたい限りだ」
「当たり前じゃない。どれだけ一緒に居ると思って……あら、そうでもなかったわね。そんなに長くはいないわ。精々が十日くらい？」
「いいよ何日でも。んじゃよ、冷静メイド。頼めるか」
「勿論でございます」
ＬＯＧＯＳで突入できねェってンなら、道は一つだ。
ハッハッハ。カチでの強硬突破、ってな。
「ま、安心しなさい。ここから補助はしてあげるから。大きい魔物も、上からの雷も、全部防いであげる。話を聞くに、そのベルウェークというのは精神体の可能性があるから、さっさと行ってさっさと殺してきなさい。ホントは戦場になんか出し

たくないんだけど、アンタが言う事聞かないってもうわかったから」
「あァさすまねェな。あンだけ色々言ってもらって、無様に泣いといてよ。どォも私ァじっとァしてられねェタチと来た。それに――妙に楽しいのさ。恐竜島の時から、ここでも。どォにも、心を押さえられそォにねェ」
ＬＯＧＯＳのドアを開ける。
なんだ、ヴァルメージャの論場、だっけ？　だからだろう、ずっと押し黙ってた青バンダナと赤スカーフもついてくる。
「石造のガーゴイルに乗っていきなさい。金属のガーゴイルは上空に置いておくから、間違っても飛び移らないこと」
「りょーかい！」
了解、なんていいつつ。
久方ぶりの――姫抱きをされる。苦労かけんなァ、冷静メイド。
だがよ、はは。クソみてェに楽しいや。
何なんだろうな、これ。原因突き詰めてェのァ山々なンだが――今は早く、あそこに行きたくて仕方がねェ。

「参ります」
「アインハージャ戦士団がウィジ、参る！　逢丹異弩喪上櫓刃笥賭！」
「リジ。義武明日喪上巴環！」
飛ぶ。
飛んだ。
さァ行こう。ドラゴン退治って奴だ。ソレがドラゴンかどォかは知らねェがな。
ハハハ。
良い言葉だ、本当に。んじゃいっちょ、俺も。
「義武明日比丘取意！」
この言葉――あァ、使いやすい。
気分良いぜ、全くよ。

35・藍夢織上意図琉王遭疎不応有・

「亜笆度亜笆度業亜笆度（進め進め進め）！、有為亞韻武印子坊（私達に敵は無い）！」

「――！」

「我らアインハージャ！　ヴァルメージャの道を切り拓く者なれば！」

魔力を込めて、詩を謳う。

使い方ってなコレであってっか？　はは、合ってなくてもいいや。

アインハージャもヴァルメージャも一切ピンと来ねェ単語だが、どォにもこの戦い方ァ俺に合ってるみてェでさ。なんならもっと前から、こォいう戦い方をしてきた気がする。

「梓様。今の唸り声には、どのような意味があるのでしょうか」

「ン？　あァ、進め進め、私達は無敵だ、ってだけさ。言っちまえば単なる鼓舞だが――魔力を込めりゃ、ちったァ形になるだろ」

「言葉だったのですか」

「あァさ。ハハ、自分でもよくわからねェが、耳馴染みが良いンだよ。アインハー

ジャの言葉、って奴らしいぜ」
「何故梓様がそれを？　先程簡易な手解きを受けていた所までは聞いていましたが……」
「だから、よくわからねェんだって――冷静メイド、避けろ！」
「問題ありません。……何か、久方ぶりに、本当に問題の無い場合で用いたような気がします」
俺の司ってるらしい【即死】を感じる直感ってなも生きてる。
まァ冷静メイドも地面からの振動でわかったっぽいが。
避けた場所。つまりさっきまで俺達のいた場所に、恐らくァアリかね？　それっぽい顎が突き出てきたのさ。その顎ァ、ガチンと硬ェ音を立てて閉じる。
ははは、賢いじゃないか。上から、あるいは横からだとマッドチビ先生による集中砲火に会うからな。
石像のガーゴイルを乗り捨てた俺達を確実に殺すなら、確かに地面の下からの攻撃が有効だ。
「アント種、ですか。お二方、酸にお気をつけを！」

「冷静メイド、止まらなくていい。突っ走れ。次攻撃が来たら、私が対処する」
「承知いたしました」
青バンダナと赤スカーフをちらっと見る。
……大丈夫そぉだな。固有魔法が無ェだけで、魔力量はＳ級に近い。むしろ固有魔法が無い分を全部強化に回せるとなりゃ、近接として十二分に戦える。
俺もそぉすりゃいいのかね。【即死】はおまけで、それを考えずに戦えば……いや無理だな。全身強化なんぞしたらバテてぶっ倒れるだけだ。
けどよ、今の鼓舞……。ちったァ魔力込めやしたが、ンなに消費しちゃいねェな。これ、効果あンなら今後もどんどん使って行きたいんだが。
「来ます」
「あァよ、わかってる」
だらんと垂らした手に、さらにぶら下げた剣。
切っ先はガリガリと地を削り、足音を掻き消していく。
――死の気配。あァ、今ようやく意識した。意識して、感じ取れた。
これァ確実に――何もしなければ、死ぬ。顎にざっくりやられて、俺も冷静メイ

ドも引き裂かれるこったろォな。
だがよ。
「いつまでも避けてばっかだと思ってんじゃねェよ。そろそろ反撃の狼煙を上げる時さ！」
知覚強化。土が盛り上がる。盛り上がった土の頂点から、黒く艶やかな殻が出てくる。
俺達を挟まんと、両側から。
もう焦りァしねェよ。馬鹿が。何度も何度も同じ事しやがって。
油断ァよ、万全の時にするもんさ。
こんな危ねェ戦場で！　冷静メイドもマッドチビ先生も、青バンダナと赤スカーフもいるってな状況でさ！　誰が死ぬともわからねェ時にさ！
「殺されねェはずねェだろ、非善（化け物）がよ！」
発動する。
剣に浸した【即死】を、その地面を通して――顎だけでなく、今まさに蟻酸を吐き出そォとしている化け物に。滴らせる。浸す。落とす。

朝露が葉を伝うように。いつか捧げた、彼女への祈りのように。

「――藍出内沙米紫遠（死ね、痛み無く）！」

瞬間――ざぁ、と。

切っ先から、死が広がった。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「梓様。少しは考えて魔法をお使いください。未だベルウェークなる者の姿も見えず、その山麓にも至らぬ道半ば。そのような所で魔力のほぼすべてを使いきるなど。ああ、返事は結構です。フリューリ草の摂取、応援しています」

「……」

悪かったよ。

なンか楽しくなっちゃってさ。調子乗ったんだよ。

アレだ、クルメーナの地下で、虹色ロングの身体に入った精神体によ、説教しただろ？　D級魔法少女がンなバカスカ魔法撃てるかよ、って。

我が身を刺すってなまさにこれさ。ブーメラン。お飾りB級お飾りA級がンな広範囲に影響するよォな魔法使えるわけねェだろ。ちったァ考えろよ俺。

「今のは、梓がやったのか？」

「……」

「はい。説明が遅れましたが、梓様もヴァルメージャでございます。まだなり立て……数ヶ月ほど前に成ったばかりですが、その御業はあらゆるものを殺します。ただし、見ての通り非常に効率の悪い御業でして。ですから基本は私共が前に出ます」

「――無礼をお許しください。ヴァルメージャ、我らに導きを」

「……何故春の暴風を食している？」

「リジ、ヴァルメージャの為す事には意味がある。今は戦いに集中しろ」

フリューリ草をもしゃもしゃやりながら、また勝手に付け加えられた設定を脳裏に入れておく。

そっかー、俺もヴァルメージャかー。まァ固有魔法持ってる魔法少女ヴァルメージャってンならＥＤＥＮの魔法少女はみんなそォだな。

つか、こいつらも持ってると思うんだが……そんなもンは無いって思い込んでて使った事ない、とか。そんなトコなンだろォけど。

しかし、春の暴風、ね。

ベルウェークとやらを無事に殺せたら、ちょいと聞いてみるか。

「――やべェな、ありゃ」

「ディミトラ様の射程圏外に入りましたか。そしてあれは……ビー種でしょうか？」

「あァよ」

「なれば、ここは我らが！」

「盾となる。ヴァルメージャは先へ」

あァ不味い不味い。

けど、いいね。ちったァ思考がクリアになってきた。さっきみてェな馬鹿はやらかさねェよ、もう。

で、なんだって？

盾となる、だァ？　それってさ、つまりさ。

死を選ぶ、って？　この俺の前で？
「上意図(待て)律寸外間硫黄打(私の指示を聞け)・」
「！」
「なん、だ。この……強制力は！」
「洲碑嗚恵印減後琉招琉度伏戸是阿頼都畔度府応輪加(ジ矛ジのアインハージャは右手を前に構えなさい)・」
呟く。
脳に浮かんだ言葉をそのまま口に出す。俺の言葉に従い、青バンダナが右手を前に出す。
「根栓獲霊湯(集中して)・」
「ウィジ、何を」
青バンダナの構えた右手に魔力が集中する。
赤スカーフの困惑を余所に、その集中は極限まで高まり――。
「不敗矢(撃って)！」
「く――【喧槍】！」
号令と共に、発射された。

それァ、数多の槍群。
その数ァ１００を優に超え、１５０に届くだろう。魔力で編まれた鋭利なる槍は、今まさに襲い掛からんとしていたでけェハチの大群に殺到する。己らが刺し殺そうとしていたのだろう、貫かんとしていたのだろう所への、コレ。
分散も間に合わず、凄まじい速度の槍に次々と貫かれていくクソデカハチ共。
「今……の、は？」
「繰衛徒（創り出して）」
「あ、あぁ。少し待ってくれ。……こうだな？」
「おォ、一発でできるたァ優秀だな。そォさ、それがお前の力だ、青バンダナ。たった今、お前はアインハージャからヴァルメージャになった」
なンだろォね。
フリューリ草食ってから、頭ン中スッキリして仕方ねェ。
今まで知らなかった――知らないフリしてたコトが、できる。
魔法少女を従える方法？　違ェなァ。
これァ、仲間に指示する方法だ。

後に続く者を、前に進む者が導く言葉だ。
あァさ。
「第二波、来ます」
「なら、わかってンな、赤スカーフ」
「……！」
ハチの群れだ。仲間のほとんどを殺されて、怒り心頭なハチの群れが、その敵討ちにと決死の突貫をする。
退く、なんざ頭にねェ。逃げる時ァ死ぬときだけだ。この大きな丘がどんな生態系してンのかァ知らねェが、敗者に命が無い事なんざよォくわかってンだろ。何より、ここに俺がいンだから。
死が手ェ伸ばしてきてんだ。最後まで抗うしかねェよな。
「思惟瑠徒恵印減後琉招琉度伏戸是阿例不凍畔度府応輪加（ゞ盾ゞのアインハージャは左手を前に構えなさい）」
言う前から左手を構えていた赤スカーフに苦笑する。
ほら、彼女が見ているぞ。
晴れ舞台くらい、逸らずにちゃんとやれよ。

「根栓獲霊湯(集中して)・」
「……っ！」
「伏理鞭徒(防いで)！・」
「【静弱】」
赤スカーフの左手から、半透明の盾が形成される。
そんなものァ突き破ってやると言わんばかりに突っ込んでくるハチ。その針が、身体が、全てが盾にぶつかり――。
ぐしゃり、と。
潰れた。
「……これは」
「多分、防いだ攻撃を弱体化させるってなトコか。任意でかけるこたできねェが、勢いさえも削げンだから有用だな」
「【静弱】。……作れた」
槍と盾。
青バンダナと赤スカーフが――それを手に持つ。ただ射出するだけでなく、武器

としても使い得る魔法。ヴァルメージャの御業。アインハージャの眠っていた力。

軽くA級はあンな。創造にァ魔力消費をするよォだが、維持ァ必要無ェみてェだし。

「よォ、お前ら。問うが――ヴァルメージャの本懐ってな、なンだ」

「――決まっている」

「アインハージャは村を守るもの。ヴァルメージャは」

「敵を討ち滅ぼすものだ！」

らしいわ。

はは、あァ不味い。フリューリ草は不味ィが……いいな。もっと教えてくれ。

彼女を通じて、俺に、この言葉の使い方を。

俺が俺として在るための言葉を。

「さァ行くぞお前ら！　ヴァルメージャの意味を為せ！」

「応！」

進軍を再開する。

A級二人、S級一人にお飾りA級一人さ。はは、十二分なパーティだろ。一応

マッドチビ先生も後ろに控えてるしな。
「あの、梓様」
「ン？」
「私には何か無いのでしょうか。こう、指示などは」
「……だって聞き取れねェんだろ？」
「ですが、このままでは士気に関わります。私の」
「ンなこと言われてもな」
今のァ魔法少女にすらなれてなかった魔力使えるだけの一般人向けの言葉だ。ハナから魔法少女な冷静メイドに言う言葉なんざ無いっつーか、コイツ非善だからかける言葉が無ェっつーか。
「ま、考えておくよ。私もこの言葉の全てを扱えるってワケじゃねェ、なんか浮かんだ言葉を口走ってるだけだ。もしくは聞き取れるよう努力してくれや」
「……承知いたしました」
なンで残念そォなんだよ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

あァいや、Ａ級たァ言ったが嘘だ。

つえーつえー。

こいつらＳ級かSS級はあるわ。元々身体強化オンリーで化け物共と渡り合ってたンだもんな。そこに魔法が加わりゃ一騎当千よ。

青バンダナァその槍をぶん回して化け物を貫き、少しでも距離が開いたらそれを射出、再装填とばかり新たな槍を創造。空中から来る奴にァ最初みてェに槍を増やして迎撃。ンな風にバカスカ魔法使ってンのに息切れ一つしてねェ。

赤スカーファそこまでバリエーション多かねェが、盾の大きさ変えて突進したり受け止めたり殴り潰したり、盾っつか籠手なンじゃねェかって使い方してる。

魔法は使い方次第たァ耳がタコに成程聞いた言葉だがね、さっき発現したばっかの魔法をこうも自在に操れるのァ才能だろォよ。あるいは、戦士としての経験か。

「鈍斗美栖枯加！　亜笆度亜笆度業亜笆度！　有為亞割朽麗！　像図風侠塀葉簿井栖！　阿歩止琉塔邪治棒動作！」

いやまァ俺ァヴァルメージャじゃねェんだけどさ。

ま、味方の鼓舞にァ十分な言葉だろ。
「……唸り声にしか聞こえません」
「そォかい、そいつァ残念だったな」
3人の速度ァMAXに近い。俺を姫抱きにしてる冷静メイドァほぼ戦闘してねェんでわかるンだが、他二人がマジにやべェ。戦いながら、防ぎながら、けれどこっちの速度についてきてる。その上で全然魔力減ってねェと来た。
SS級だよ。紛う方なく。
……あと7回しか蘇れない、ってな言葉がちィと気になるが。
「――散開しろ！　雷撃だ！」
「ッ！」
避ける――無理か！
なら！
「死、」
「アンタの魔力はとっとけって言ったでしょ!?」
自身が【即死】する気配を感じ取れても、流石に雷の速度にゃ負ける。どォ強化

したって無理だ。
だから殺そォとしてたンだが、後方からきゃいのきゃいのと高ェ声が聞こえて
――雷は打ち消された。
空中。黒と白の入り混じる鉱石。その液体。
絶縁体、なんだろうか。一切雷撃を通す素振りがない。
それを操るマッドチビ先生が、上の雷雲の眩しさに顔を顰めながらこっちへ来た。
走った……のかとも思ったが、上にある絶縁体の鉱石でプテラゴイルを作ったとかその辺りだろォな。俺達に渡さなかったのァ、数用意できねェからか。
「ミカラという鉱石よ。雷を通さないわ。けど、ちょっと量が足りないのよね」
「ミカラ？　ミカラといったか、ヴァルメージャよ！」
「ええ、言ったけど。ああ、言っておくけれど鉱石よ。それ以外のものではないわ」
「ミカラなら、この島全体に埋まっているはず。過去のアインハージャの遺品。彼らの装備していた武具。そして、私達の纏うものでもある」
「……あら、本当じゃない」
言うが早いか、聞くが早いか。

マッドチビ先生は地面に手を当てる。
その瞬間、大きな丘の各所に地割れが起こる。各所に、だ。同時に、超広範囲の地面が割れる。
そして――激しい水音を立てて立ち昇るは、先ほどと同じ液体。
「……あれ、マッドチビ先生。触らなくても【鉱水】化できンのか？」
「何言ってんのよ。触ったじゃない」
「土や砂は操れねェって」
「だってこれ、砂でも土でもないもの」
下。
草木のあンま生えてねェ、下。下の地面。
暗雲で暗いンだと、影で黒いンだと思ってた。
違うのか。
「この地には、数多のアインハージャの死骸が埋まっている。血も骨も装備も、だ」
「エ、マッドチビ先生ァ血だの骨だのも操れンのか？　確かに成分的にァ」
「無理よ。それができるなら私の等級区分、SS級にでもなってるんじゃない？」

「じゃァなンで操れンだよ。この地面ァなんなんだよ」
「それは恐らく、この大きな丘が」
上の方。
雷雲に届く、山頂の方で。
耳をつんざくよォな――直感でやべェってわかる音がした。
どん、と。
――そして、次第に……赤熱していく暗雲。
「や、っべェ――！」
「火山であるから、かと」
「ベルウェークの怒り！」
「……やはり、今回も無理か」
音が遠くなる。
思考が加速していく。世界が遅くなっていく。
どうする。どうすりゃいい。
雷撃は魔法か能力か、まァ自然現象っぽくなかったから殺せそォだと思ったが、

ありゃ無理だ。
あれァ紛う方なき自然現象。噴火だ。山の怒りって奴だ。
前触れくらい寄越せよ。地震くらい起こせよ。
なンだってそンな急に――。
「ああもう、うるっさいわね！　こと鉱物、あるいは石や岩において――私に勝てると思ってるの、ほんっと気に入らないわ!!」
周囲。
俺達の立つ地面を除いた、ほぼすべての地面がどろりと溶ける。
熱じゃない。これァ、【鉱水】だ。
それらは先に昇っていたミカラへと合流し、落ちてくるそれよりも巨大な塊を作り始める。
止まらない。マッドチビ先生ァどっかイライラした様子で、凄まじい魔力を練り上げている。
大きな丘と呼ばれるこの島は、やっぱり大陸じゃァなかった。
それがわかるんだ。わかるくらい、その地表が剥がされて行っている。液体と

なった地表の全てが、真っ黒なそいつらが、この島を痩せ細らせている。
「包みなさい！」
強化を解く。
これに、俺の出る幕ァ無い。
これは――【即死】なんぞが介在して良い戦いじゃァ無い。
「――！」
黒い液体が灼熱の岩石を包む。降り注ぐ灰煙を、砕けた小石を、そして山頂より流れ出でる溶岩の全てを包み込んでいく。
最早、逆だ。落ちてくるはずの溶岩流が、黒い液体に押し返されている。むしろそれらは、降り注ぐ全てを受け止め、とどめ、逆に押し返していく。
マッドチビ先生。いんやさ、【鉱水】のディミトラ。５００年を生きる魔法少女。
「何よ、それで終わり？　――じゃ、返すわ」
宙空に大きく広がっていた液体が、バクンと、口を閉じるかのように端から中心へと閉じる。
閉じて、一つの球体となり。

「食らいなさい！」

轟音と共に――射出される。

その砲弾……いやさ砲丸は、再度集まらんとしていた雷雲の全てをぶっ飛ばし、その先にいたソイツに直撃した。

ソイツ。

牛の頭で、ヒトの胴で、手足が八本あって、翼があって、尾がない――ベルウェーク。

仮称、マッドチビ先生作ドラゴン。

「……やっぱ設計ミスだろ、ありゃ」

そのチグハグな身体は、射出された砲丸を避ける事も受け止める事も出来ずに顔面をぐしゃりと潰され――沈黙した。

……沈黙したのである。

「……え、嘘。今ので死ぬの？　アンタ達、こんなのにずっと悩まされてきたワケ？」

「む……」

「ヴァルメージャとなったが故、だろうか。……どうにも、私達の知るベルウェークとは違う……気がする。こんなに弱いものではない、はずだ」

「あー。ま、とりあえず【即死】させてくるよ。念のためな。んじゃ、冷静メイド、ちょっくら山頂まで頼むわ」

「はい」

誰もが驚いている。

いやまァ、そりゃそォだろ。俺達は魔王にでも挑む、みてェな心持だったンだ。俺達っつか、青バンダナと赤スカーフは、か。

それをこーもあっさりってな、驚き通り越して認めたくないが勝るよな。

ほらアレだ。

俺があっさり天使の化け物倒しちまった時のお嬢とポニスリの反応。

アレにそっくりさな。

なんてことを考えながら、冷静メイドに抱かれて山頂に到着。

……噴火した直後の割に、静かだな。もっとゴロゴロいってたりしても良さそォ

なンだが。

やっぱり自然現象じゃねェってことか？　火球そのものァ自然現象だが、噴火させること自体は魔法、みてェな。

ベルウェークの死体に近づく。

クルメーナの地下で見た仮称ドラゴン。それが肉体を得た、みてェな姿だ。マッドチビ先生の自信作。

あれァマッドチビ先生のオリジナルじゃなく、どっかでコイツをみたことがあって、その模倣だった、って事なのかねェ。あれだけ模倣の上手いマッドチビ先生のことだ、元ネタが何かを忘れていても、そっくりにつくるってな造作のねェことなのかもしれねェ。

死体から生命力は感じられない。

が、頭部潰されたくらいでこの図体の化け物が死ぬってな、ちょいと信じられねェんだよな。化け物だって生物だから、なんて言われちゃ頷かざるを得ねェが、だからこそ違和感がある。

だって、ベルウェークにァ剣も槍も効かない、ンだろ？

なンで砲丸なんぞが効くんだ、って。
「……あ？　冷静メイド、なンか言ったか？」
「いえ」
「……」
今。
聞こえた気がした。言葉、じゃない。詩でもない。
聞こえたのは――。
「――ッが、ぐ!?」
遠吠え、だ。
どこかからか、遠くからか。
狼の遠吠えが聞こえた。
そんで――ぐちゅりと、抉れる、冷静メイドの――腹。
知覚強化。身体強化。踏み込みを以て、冷静メイドの身体をぶん投げる。俺にできる最大限の強化で、山頂から放り投げる。結構な斜面ってか崖みてェになってるから助かったぜ。まるで上った奴を孤立させるみてェな作りでよ。

「なに、を」
「死ぬなよ、冷静メイド。多分、下にいた方が安全だ。マッドチビ先生によろしくな」
「あず、さ、様ッ！」
複数の足音。
あァ、これァ覚えてる。この足音は覚えている。
山の頂に上り詰めるは――はは、懐かしい化け物共。
透明なのもいやがんな？　さっき冷静メイドの腹ァ抉ったのァそいつらだ。
「あーあ。まさか私達の故郷にいるなんて。世界を回っても見つからないわけねー。それに、私達の神様をこんなにしてくれちゃって。お姉さん、ちょっと怒っちゃったかな」
「お姉さんだァ？　おいおい、チョケんのも大概にしとけよ。誰がお前みてェなちびっこ相手にすンだ、誰も見向きもしねェって」
「うわ、懐かしい。そうだったわね。貴女に付けたあだ名は野蛮人だった。思い出した思い出した！」

「あァ、私もヤな事思い出しちまったよ。初めてつけられたあだ名はソッチだったなァ。あァいや、かくれんぼ名人だったか？　なんにせよ、薄っぺらい記憶すぎて消してたわ。私のあだ名ァマッドチビ先生から貰ったモンだけでいーや」

「随分と余裕そうね？　あの時と違って貴女は窮地も窮地。頼みの綱の銃もない、そんな剣一本でどうにかなると思ってる？」

「思ってるさ。コトお前に関しちゃ、行動が読みやすいんでな。よォ、久しぶりだな、ルルゥ・ガル」

「へぇ、名前で呼んでくれるんだ。私のコトを殺せもしないのに」

「あァ殺さねェさ。殺す価値も無ェ。だが、一生這いつくばってられるよォに、脳と心臓以外ァ全部殺してやるよ。満足だろ？」

「やれるものならやってみなさいな。その前にみんなが貴女を食い散らかすけど」

応酬応酬煽りの応酬。

コイツと話してると思考レベルが幼子にまで戻っちまうなァ。

あァさ、久方ぶりだ。

っとに久しぶりだ。

まさかこんなトコで遭遇すンなんて、欠片も思っちゃいなかったよ。
「ソレ」
「何？」
「お前らの神ってな、そォも不細工なんだな。はは、生物としてバランスが悪すぎンだろ。なンでそんなもン崇めてンだ？」
「そんなの、決まってるじゃない」
動く音がした。
狼が、ではない。
どくんと——心臓が。
再度、脈打つ音が。
「永遠を与えてくれるから。それ以外に理由とか、あるかしら」
「ハハハ——確かに無ェな、それ以外。それがマジの永遠なら、だが」
その巨躯が、そのアンバランスな身体が——再度、起き上がる。
今の今まで死んでいたはずだ。確実に死体だった。欠片も生命力を残していなかった。

それが。
あァ――立ち上がった。
「２つ、選ばせてあげる」
「ケチだなァ、４つくらいにしておけよ」
「１つは、このままみんなに食い殺されて、神に叩き潰されて死ぬか――私ときもちーことをして、死ぬか」
「だァから、そォいうのァもっと大人になってから言えっつーの」
剣を持つ。
はは――ははは。
いいね。自覚の無い冷静メイドやマッドチビ先生たァ違う。
コイツァ、明確な自覚を持つ非善（敵）だ。なら――やる気も出るさ。
「ちなみに、貴女はもう蘇生できないわ。理由はわかるかしら」
「ＥＤＥＮにいる私とやらが、蘇生槽と経路（パス）を繋いだから、だろ？」
「正解。ＥＤＥＮはもうほとんど私達の手にある。だから、たとえば」
――強化はいらない。【即死】を使え。

「【神鳴】――あら、いい反応ね」
落ちてきた雷撃を殺す。
そして、理解した。
「……はァ。そォかい。……背中メッシュが、やられたか」
「他にも色々できるわよ。これとか」
――【即死】を維持して、半歩前に出る。
「【白亜】……あら、これも殺せるのね。やっぱり対魔法少女において、その力は魅力的すぎる。欲しいわ、ソレ」
「……ＥＤＥＮは今、どォなってンだ。全部堕ちたのか」
「そうなってくれたらどんなに良かったか。まだ、その機会には恵まれていないの。悲しい事にね」
「――藍出内沙米紫遠」
それだけ聞けりゃ、十分だ。
んじゃまァ、まだみんなは頑張ってンだろ。それだけで、いい。
俺の仕事ァそっちじゃねェ。背中メッシュはここで返してもらう。だからそのた

めにさ。
「よォ、ルルゥ・ガル。廻り続けるってな、飽きねェのか」
「悲願を果たすまでは」
「あァよ、じゃァやっぱり化け物だな、お前」
「今更？　貴女達にとって――とりわけ貴女にとって、非善は全て化け物扱い、でしょ？」
完全に立ち上がり――その腕を俺に振り下ろすベルウェーク。
透明なのも、そうじゃねェのも、全部の狼が俺を食い千切らんと迫る。
ルルゥ・ガルはただ、人差し指と親指を抓む形にして――【光線】の用意をしている。
「さァ、いっちょやり合おウッ!?」
「え」
ボルテージも高まってきて、んじゃ開戦の合図を――ってとこで、俺の身体にぎゅるりと巻き付くは銀の紐。
すわ敵の新たな攻撃か、と思ったが――違う。俺ァこの感触に覚えがある。

「ウィジ、射出しなさい！」
「【喧槍】――!!」
ぐい、と引き寄せられ、足は既に地を離れ、それでもまだ勢いを失う事無く引き摺り込まれるは――銀の竜。その喉にある扉。
「ディミトラ様！　梓様を無事保護しました！」
「よくやったわ！　ウィジ、射出を維持しつつ射角を上方へ変更！　リジ、アンタは防御！」
「【静弱】。何も通さない」
扉に物凄い勢いで引き込まれたと思えば、俺の身体はあったけェ何かに包まれる。あンまり意識しちゃいけねェもんだ。おじさんが顔を埋めたりしちゃいけねェモンだ。
「撤退するわよ！　艦体反転、全速力でこの地点から離脱！」
「……【引力】」
「ッ……艦に貼り付けられた!?」
「逃がさないよ。というか、生きていたとは思わなかった。ディミトラさん。どう

やって生き延びたの？」

「うるっさいわね！　もうアンタなんか注文主じゃないのよ！　敵よ敵！　ほら、行きなさい――ティラノサウルス!!」

「!?」

ぐぎゃー、なんて陳腐な声を上げて、銀の竜より排出されるは銀のトカゲ。

ティラノサウルス。流石に初見だったのか、ルルゥ・ガルの表情が大きくゆがむ。

「っ、冷静メイド！　ＬＯＧＯＳとルルゥ・ガルの間の、どこでもいい！　これ投げろ！」

これ、と。

未だ胴体をぐるぐる巻きにされたまま示すのは、太腿に巻き付いた炸裂弾入りのマガジン。

頷き、それを手早く抜いて投げる姿勢に入る冷静メイド。

「青バンダナ！　今から飛んでくる金属のほそっこい箱を【喧槍】でぶち抜け！」

「応！」

投げられるマガジン。

それが丁度ルルゥ・ガルの視線の先――ティラノの尾っぽのあたりにきた所で、激しい音を立てて炸裂した。【喧槍】が突き刺さったのだ。

これにより、ぐわんと傾く銀の竜。

拘束が殺された事により、反動が来たのだ。

「みんな、しっかり掴まってなさい！　飛ばすわよ！」

「マドチ先生、ウォムルガ族の村に！」

「誰よソレ！　じゃなくて、滅んだわよそんなもの！　ウルフ種の襲撃にあってね！」

「――!?」

しっかりと引き込まれ、喉の扉が閉じる。

青バンダナと赤スカーフも格納され――今度こそ全速力での撤退。

どんどん遠ざかっていく大きな丘と、ルルゥ・ガル。

そして。

「頑張れティラノ！　やっつけちまえ！」

一匹残されたティラノゴイルへ声援を送って――なんとか、俺達は逃げ切ったの

だった。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

36・塔久那琉阿可運多中苦・

現状を整理しよう。
「とりあえず、簡単に現状を整理するわ」
「あァさ、頼む」
「まず、アンタ達が山頂へ登っていったあとのこと。雷雲もなくなったから、私はＬＯＧＯＳにこっちへ来るよう命令を出したの。ウィジとリジをそれに乗せて、アンタ達の回収を、と思った辺りでＬＯＧＯＳは攻撃を受けたわ。後方、ウォムルガ族の村のある方向から、遠隔の何かが飛んできた。勿論そんなことでどうにかなるＬＯＧＯＳじゃないけど、問題はウォムルガ族の村の方。ＬＯＧＯＳじゃ遅すぎるから速力特化の軽量プテラゴイルでウォムルガ族の村を見にいったら、見るも無残な壊滅具合。多数のウルフ種とレーヴァン種がいた」
「壊滅具合ってな、どォいう状況だ」
「文字通り、言葉通りよ。食い散らかされた人々と、倒壊した家々。ウルフに食い破られた死骸とレーヴァンに破壊された全てが、そこにはあった」

レーヴァン種ってな、カラスの化け物のことだ。でけェカラスで、そこそこ知能が高い。中にァ精神体でもねェのに魔力を繰る奴もいるらしい。

オオカミとカラス。……ね。

「だからすぐに引き返して、アンタ達にそれを伝えようとしたら、丁度ウィジとリジがローグンを受け止めているところに遭遇したの。腹部を削がれたローグンは、けれどすぐに【侵食】して復活。全員でＬＯＧＯＳに乗り込んでアンタを回収した。ま、状況自体はこの程度よ」

「あァよ、わかった。じゃ、今後と敵についてを考えよう」

「ええ。敵はルルゥ・ガル。及び引き連れている魔物と、蘇生したベルウェーク」

魔煙草を吸う。

ふゥ。脳がキュリキュリ回転していく。あァさ、色々考える事があンな。

まず。

「なンでルルゥ・ガルがこの地に来たのか、ってトコだ」

「この辺りが大陸にほど近い場所にあるか、何らかの装置や魔法で来訪者を検知する仕組みがあるのか、本当に偶然か。どれかしらね？」

「偶然、だろォな。言葉からして、私達がここにいるってわかってねェ様子だった。世界中探し回ってたら偶然見つけたってな、ンな感じだ」

「そうね。そして、ルルゥ・ガルは私達を……いえ、アンタを探していた。私が生きている事も知らなかったみたいなのに、アンタだけは生きてるって確信があった。これがどういうことかわかるかしら？」

「ん……」

ＥＤＥＮにいるっつー俺の偽物。

単純に考えりゃ、そいつがルルゥ・ガルの仲間で、仲間だから当然本物じゃねェって知ってるから、本物を探してた、ってトコだろう。

だがそォなると、ちょいとおかしな部分が出てくる。

なンだってルルゥ・ガルァ、ンな面倒くせェことをしたのかってトコさ。

俺の偽物を拵えて、ＥＤＥＮに潜入させる、なんてのァ面倒なンだ。それができンなら、他の奴の偽物をＥＤＥＮに入れて、油断しきった俺を仕留めた方が早い。

俺の【即死】を欲しているというのなら、それこそクルメーナの地下で待ち構えていりゃよかったはずだ。マッドチビ先生と協力でもすりゃ、簡単に仕留められただ

ろう。冷静メイドァ強いが、殲滅力にァ長けてねェ。シエナァ未知数だが、あンだけの魔法を使えるンならどォとでもやりようはあったはずだ。あン時みてェに俺を透明にする、とかな。

　それをしなかったってのがどォにもしっくり来ねェ。

「冷静メイド」

「はい」

「ＥＤＥＮにいる私ァ、お前から見てどんな奴だった？　私とどんな違いがあった？」

「……死を受け入れている、ように感じました。割り切れてはいない様子でしたが、仕方のない事として受け入れている。決して軽く扱っているというわけではないのですが……こちらの梓様のように、何が何でも受け入れられない、という風ではありませんでした」

「他は？　お嬢やポニテスリットに対してァどォだった？　何か、態度の変化とか」

「……特には、思い当たりませんね。こう言うのは少々失礼かとは思いますが、普

通の梓様、という感じがしました。戦闘や遠征に出ていない時の……平常時の梓様。年相応の、少女。少しばかり達観はしているようでしたが、……こちらの梓様ほど読み難いとは思えない、単なる魔法少女」

「なるほど」

魔煙草を大きく吸う。

脳と肺に至る魔力が、血中魔力濃度を劇的に高めていく。

「――私をオカシくしてェんだな？」

「いえ、そういう意図ではなく」

「いんやさ、冷静メイドの話じゃねェ。敵の狙いさ。わかったよ、ちょいとァな」

正直に言やァ、偽物の俺とやらを金髪お嬢様やポニテスリット達が見抜けてねェってのが気になってたンだ。それなりの信頼を築いた自覚がある。仲間だって思ってる。思われてると思ってる。

だから、帰ってきた俺を俺じゃねェってわかンねェのァさ、薄情通り越してあり得ねェと思ってンだ。

つまり、ＥＤＥＮに帰った俺ってな、俺なんだよ。

偽物じゃなく――マッドチビ先生と同じく、どっちも本物って奴だ。

その上で、今の俺ってなオカシイのさ。冷静メイドの言う通り、行動が読み難いらしい。アインハージャの言葉も理解できるし、無駄にでけェ火傷も負っちまった。拳銃も無くしてる。SRもな。

外見的特徴からも、内面的特徴からも――俺を俺と判断できる要素が無ェ。

「ああ、なるほど？　あっちの私がアンタの義手を奪ったのはそういうことね。アンタは死なないから、死にたくないから、蘇生槽を使う必要が無い。仮に偽物だと疑われたとして、アンタは蘇生槽を用いての証明というのをしたがらないから、ＥＤＥＮ側はアンタを外見的特徴でしか判断できない。なら、アンタの偽物を作って、腕を無くして、遠征に出る前と同じ見た目の腕を付けて行けば……たったそれだけで、アンタじゃない誰かはアンタになれる」

「ですが、新たな義手を貰った時、梓様はとてもはしゃいでいました。あれを演技だとは……」

「それでいいんだよ。ま、元ァ化け物の精神体かもしれねェが、虹色ロングと同じさ。ＥＤＥＮの私ァ、自分のことを私だって思い込んでる。だから新しい義手貰っ

たら嬉しいし、平穏な学園生活ができりゃ嬉しい。年相応に――嬉しいンだ」

そこに欠如しているのァ、肉体足る脳に記録されてねェ情報。

つまり、前世の価値観。倫理観。常識。

あっちにいる俺ってな、この世界生まれの普通の魔法少女って事さ。

何を騙っているワケでもねェ、自然にしている事こそが全ての証明になる。年相応の、まだ魔法少女になったばかりの、【即死】なんつーピーキーな魔法を与えられちまった梓・ライラックちゃんのでき上がりだ。

「なるほど。それならあるいは、ＥＤＥＮにいるアンタは【即死】を持っていない可能性もあるわね」

「ン？　そりゃ冷静メイドが見てンだろ？」

「いえ、あちらの梓様が対象に触れ、対象が死に、梓様の魔力が減った、という事を確認したに過ぎません。【即死】は光や炎が出る魔法ではありませんので、本当に【即死】であったかどうかの証明はできません」

「ははァ、じゃァ【即死】じゃねェ魔法を【即死】だと思い込んで使ってる可能性があるワケだ。……いや、そもそもの話、そォなった場合のあっちの私の肉体って

な、なンだ？　【即死】に似てるが違う魔法を積んだ別人……けど容姿ァそっくり、と」

俺ァここにいる。

ってこた、あっちの俺ァ誰かではあるはずで、お嬢達が違和感を持たねェってンなら、俺の記憶も持っているンだろうってトコまでァいいんだ。

どォやって作った？　それは――何で、作り上げたモンだ。

「一つ、意見をしても良いだろうか」

「ん、あァすまねェ、ずっと放りっぱだったな。青バンダナ、なンだ」

「私達アインハージャの話だ。今聞いた話が、とても私達に似ている、と思ってな」

「似てる？　何がだ」

「アインハージャが一つの時代の2人しか存在できない事は説明しただろう」

「したのは私」

「そしてアインハージャは、どの代においても同じ姿で生まれる。私とリジがどこで死せども翌日にはその場で蘇るのと同じように、あと7度死んだのならば――次なるアインハージャは、私達ではなく、しかし私達の姿をしたアインハージャに

なる。それは私達も同じだ。先代のアインハージャと同じ姿形で戦士の名を受けた。……守るべき村は無くなってしまったが、その法則に変わりはないはずだ」

あァん？

なんじゃそりゃ。

死に回数制限があって、それを過ぎると別人になる、だって？

……それじゃまるで。

「始まりのアインハージャの肉体を、複数の精神体が使い回している、ということね」

「ウィジ。似ているんじゃなくて、逆」

「む。そうか。すまない、余計な発言をした」

いや。

……どうだ？　逆でも、いいんじゃないか？

つまり、俺という精神体がいれば、向こうのマッドチビに言わせるところの肉人形はいくらでも用意できる……？

その法則、あるいは仕組みを作りさえすれば——同じ人間を創り出せる？

クソ、SFァ得意じゃねェんだがな。やっぱり俺がずっと提唱してる魔法少女クローン技術説が真実味を帯びてきやがった。

どォやって蘇生を為してンのか――魔力を持ち得る、記憶を持ち越せる肉体をどォやって形成してンのか。

「マッドチビ先生。そいつの意思が無くても、第三者が魔法少女と蘇生槽の経路を繋ぐってな可能なのか」

「可能不可能で言えば可能よ。ある程度近くにいる必要があるけれど」

「じゃァよ、たとえば――蘇生槽に、ソイツが死んだって誤認させることは、可能か？」

「……それも可不可でいえば――可ね。ただし、その子の肉体の一部が必要になるわ。正確にはその子の肉体に宿っている精神体が。精神体というのはね、基本的に肉体と同じ形をしているの。肉体から抜け出してしまえば肉体に沿えなくなって球体に戻っていくのだけど、生きている状態であれば、魔物なら魔物の、ヒトならヒトの形をしている。だから、なんらかの方法で精神体ごと肉体を切り取ってしまえば――それを蘇生槽へ持っていって、認識させれば」

「蘇生槽ァソイツの肉体が死んだって誤認して、そいつの肉体の形成を始める、と」
「ええ、そう。ただし、可不可でいえば可というだけで、それは起こり様のないことよ。精神体の乗った肉体の一部を切り取る、ということでさえ特殊な技術が必要なのに、その魔法少女を生かしておかなければいけないのだもの。魔法少女は身体に欠損ができたら死んで復活する。そうなったら切り取られた精神体だっていつまでも肉体に残ってないで元の場所に帰っていく。その場に留めることはできない」
つまり、そぉいう事さ。
身から出た錆って奴だ。はは。
「だから、アンタの腕を斬った奴は——敵ってこと」
「みてェだな」
分身してるみてェなモンなんだ、今の俺ァ。
俺と、俺の腕と。あン時グチャグチャになって使い物にならなくなった、けれどしっかり俺のモンだった腕ァ——治せねぇから、ぶった切った方が早いってさ。義手にした方がいい、ってさ。
なァよ、安藤さん。

「とりま、これで私の作成方法ァわかった。ＥＤＥＮにいる私ァ【即死】を使えるのか使えねェのかはさておき、あァあと何時入れ替わったのか、ってのもさておき、だ。よォやく現状に目を移そう。ベルウェークをどォするか、についてだ」

「アンタね。もうちょっと混乱するとか、落ち込むとかないわね？　その人自分の武器の技師だったんでしょ？　利用されて使われたって事に何か思うトコないの？」

「正直に言うとめっっっっっちゃある。今私の心ァズタボロだよ。だが死んだワケじゃねェんだ、ならどーだっていい」

「……弱いのか強いのかよくわかんないわね、アンタ」

「戦うのも死ぬのも辛いのも苦しいのも痛いのも嫌さ。大嫌いさ。けど、別に裏切られンのも利用されンのも勝手に偽物作られンのも正直どーでもいい。悲しくねェからさ。その程度の事に動じる程、私の心ァ軟じゃねェのよ」

「粘土よりも柔らかいくせに何を言っているんだか……」

そンなおかしい事かね。

俺が二人に増えたから、なンだよ。ンな事よりルルゥ・ガルに背中メッシュや太

腿忍者が殺されたって方が大事だ。奪われたンだ。じゃ取り返さねェといけねェ。銀バングルも、つか多分オーレイア隊の面々はまだ奪われたまんまなンだろ。

殺しはしない。俺が嫌だから。死んでほしくない。敵であっても。

だが――地獄ァ見てもらう。

「それで言うなら、お前らのがつらいだろ。守るべき村が消えたンだ。すまねェな、こっちに付き合わせて……守らせてやれなかった」

「構わない。ウォムルガ族の村は、アインハージャを生み出すためにある。次代のアインハージャを生み出すために私達は村を守っていた、というだけにすぎない。だが、私達はヴァルメージャになった。梓、貴女に昇華してもらった。ならばその役割は変わる。単なるアインハージャは村を守る役割を持つが、強きヴァルメージャは敵を打ち砕くためにある。何百、何千の時をかけて、ヴァルメージャとなるアインハージャを生み出すためだけに存続してきた村だ。であれば、村人たちも本望だろう」

「それに、私達は戦うためにあった。村人の名の一つとて覚えていない」

それァ――いやさ、悲しい話、じゃねェんだろォな。

そぉいう役割を課されてたってな、俺の関与していい話じゃねぇんだ、多分。
生きるために、抗っていた、というのであれば。
「あァ、そぉだ。一つ聞きたい。最後に見ただろ？　あの魔法少女……じゃねぇや、ヴァルメージャ。アレが今んとこ私達の最大の敵なンだよ。アレに心当たりァ無ェか？　あいつ、ここを〝私達の故郷〟って言ってたんだが」
「名や特徴を詳しく聞かせてくれ」
「ルルゥ・ガル。狼の化け物と、マッドチビ先生の話じゃカラスの化け物を連れてるって話だ。他、一人一つのはずのヴァルメージャの御業を複数使うヤツでもある」
「……名には聞き覚えはない。だが、狼と烏を従える存在であるのなら、知っている」
「へェ。そいつァ、どんな奴だ」
「ベルウェークだ」
……あー？
ルルゥ・ガルの神がベルウェークで、ルルゥ・ガルもベルウェークの特徴を持ってる？

「そもそも、だ。ベルウェークってな何なんだ。既存の生物にゃ当てはまらねェだろ、あのカタチ」
「ベルウェークは神だ。災いを起こす神。禍を呼ぶ神。……梓、貴女は知っているものだとばかり思っていたが」
「……」
神、以上の情報ァでてこねェか。つまり、こいつらにとって神ァ当然の存在だ。伝承や宗教上のソレじゃァない。
しかし、神さんが砲丸に顔ぶん殴られた程度で死ぬモンかね。
それに、どォにも動きが緩慢すぎるし、復活したのもルルゥ・ガルが来てから。復活した後だってＬＯＧＯＳに雷撃ぶち当てるくらいできただろォに、俺を潰さんとする格好のままぼったちだった。
まるで人形、だよな。
「で、どうするの？　このまま逃げる、というのも勿論アリよ。正直な話、私達の戦力じゃルルゥ・ガルに勝てるかどうかわからない。複数の魔法を用いるのもそうだけど、ベルウェークをもう一度倒さなければならないのと、レーヴァン種とウル

フ種にも気を付けないといけない。なんだっけ、透明にする、んだっけ？　厄介極まりないわ。ついでにいうと、反魔鉱石持ってるだろうからそれもかなり危険」

「あァそォいや持ってかれちまったんだっけか」

「ええ。ＬＯＧＯＳは結局どこまで行ってもガーゴイルだから、反魔鉱石の銃弾でも撃ち込まれたら崩壊するわ。そんな加工技術があるとは思えないんだけど、あっちには偽物の私もいるみたいだからあり得ないとは言わない」

「……放置した結果の方から考えよう」

まず、ルルゥ・ガルを放置するとどォなるか。

……別にどォにもならねェ。追われてるって状況ァ変わらねェまま、ちょいと位置がばれたが、逃げ果せることにァ成功してる。このままどこぞへでも飛んでいけば大丈夫だろう。

ベルウェークァどォだ？

そもそもベルウェークがウォムルガ族の村を壊そうとしてたってな、多分ヴァルメージャを生み出させねえよォにするためだ。自身を倒す可能性のあるヴァルメージャを、アインハージャの内から摘み取っておこうってな魂胆。とすると、ル

ルゥ・ガルによって村が壊し尽くされた今、ベルウェークの目的もなくなったってことだ。

そもそもベルウェークの目的＝ルルゥ・ガルの悲願って線も捨てちゃいねェ。自らの信奉する神と同じ目的を持つ信徒なんざ腐る程いる。問題はなンでこいつらが単なる魔法少女の域を出ねェアインハージャを潰したがるかってトコだが……アインハージャとヴァルメージャにァ魔法少女にァ無い特性があって、それだけがベルウェークを殺し得る。とかか？　今回トドメ刺したのァマッドチビ先生だ。青バンダナと赤スカーフじゃない。

そォ考えると、確かに色々合うな。

どうせルルゥ・ガルのことだ、目的のアインハージャを見つけたはいいものの、近くに俺までいたってンでそっちに目移りしちまって、結局どっちも逃したってトコだろ。二兎を追う者は一兎をも得ずってなまさにこれさ。

もしこの仮説が合ってたら、ベルウェークってな既存の魔法少女じゃ殺せねェってことになる。

そんな化け物をルルゥ・ガルがＥＤＥＮに連れて行ったら……。

「やべェな」
「ここでどうにか殺すべき、ですね」
「そんなアンタ達に朗報よ。あ、いえ、悲報、かしら」
真逆じゃねェか、なんて思いながら、マッドチビ先生の方へ顔を向ける。
いつの間にか反転していたＬＯＧＯＳ。ブリッジの硝子から見えンのァ――平穏な海と島。
これのどこが悲報なンだ、って。
「おい、雷雲ァどこ行った。ルルゥ・ガルは、ベルウェークァどこいったよ」
「何らかの方法で移動した、と見るべきね。移動先は恐らく――ＥＤＥＮ」
「何らかの方法ってなンだ」
「何らかの方法は何らかの方法よ。私達の知らない何らかの方法。でも、幸運ね。魔力の痕跡が残ってる。これを辿れば、私達もＥＤＥＮに辿り着けるわ」
「……罠の可能性が高いかと。追って行った先がＥＤＥＮではなく敵の本拠地などである可能性も考えられます」
「罠だとしても、行くしかないだろ」

「いえ、梓様。現在の私達は敵の詳細を唯一知っている5人。敵が既存の魔法少女の攻撃では死なないと知っている5人なのです。私達はそれを、敵よりも早くＥＤＥＮに伝える役目があります」

「あー、そりゃ大丈夫だ」

「……何を以て、そうと言い切りますか」

「私なら、そォしねェからだよ」

俺なら、でけェ操り人形連れて、強ェ狼と烏連れて――自分の本拠地になんざ向かわない。本拠地ってな最後の最後まで隠しておきてェもんだ。それを、マッドチビ先生……【鉱水】なんつー広範囲を攻撃し得る魔法少女に追われてる中で見せびらかすよォな真似ァしない。

壊されたらたまったモンじゃねェからな。最後の最後、隠れて逃げて逃れて隠して、そォやって休息するための場所だ。本拠地だってンなら、最後の最後まで誰にも見せずに置いておく。

んじゃ本拠地じゃねェ、ただ罠のいっぱい敷いてある場所に、ってのも違う。ンなトコにでけェモンは入れねえよ。そいつがかかっちまうし、そいつが作動さ

せちまう。そもそも巨体の化け物ってな単独で戦った方が強いんだ。狼や烏に足元うろちょろされて本気を出せねェってんじゃ意味ァ無い。他の化け物がいたとしても、ベルウェーク程でかかないだろォしな。

だから、少なくともベルウェークっつーでっけェ化け物を連れて行くのに、マイホームってな相性が悪いのさ。

巨大怪獣を連れてくンなら、敵地が一番だ。死なねェってンなら尚更にな。

あァ、だから逆なのか。

ベルウェークがアインハージャの村を襲撃してたンじゃねェんだ。

アインハージャがベルウェークをどっかに行かねェよォに繋ぎ止めてたンだ。背を向けようものなら、いつでも殺してやるぞ、って。

「マッドチビ先生、ルルゥ・ガルとベルウェークを追ってくれ。そのままベルウェーク殺してルルゥ・ガル潰して、ＥＤＥＮで起きてる混乱だのなんだのも解決して、全部良しにしようぜ」

「それが一番丸いわね。できるなら、だけど。ま、アンタの馬鹿は今に始まった事じゃないし、いいわ、付き合ってあげる。他のもそれでいいわね？」

「……梓様の意のままに」
「私達はベルウェークを討滅するために在る」
「異存はない」
よぉし。
んじゃ、出発だ。
目標ァベルウェーク及びＥＤＥＮ！
避けてばっかじゃねェって、逃げてるばっかじゃねェって。
そろそろこっちが追っかける番だ、ってな！

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ＬＯＧＯＳでベルウェークを追いかけている最中の話だ。
「梓」
「ン？」

「貴女に少し、聞きたい事がある」
「あァ良いが、なんだ改まって」
青バンダナが、所謂ジャパニーズＳＥＩＺＡで。
畏まって。
「ヴァルメージャの御業……否、貴女達は魔法と、そう呼んでいたな。その扱い方について、指導頂きたい」
「……あー。そいつァ、あんま私に聞かねェ方がいいかもしれねェ」
「何故だ？　貴女と私の御業……魔法は、よく似ていると思うのだが」
「多分それァ、この剣のコトいってンだろォけど」
背中に背負う剣。
マッドチビ先生に作って貰ったコイツァ意外に頑丈で、まだ使える。刃毀れ無し。
けど、別に剣としてァ使ってねェんだわ。
「私の魔法ァな、剣関係ねェんだ」
「そうなのか。ならば、貴女の魔法はどのような……？」
「あァ、【即死】っつってな。触れただけで、相手を殺せる。そんだけの魔法だ」

「……――!?」

飛び退く青バンダナ。

おいおい、散々あの島で見ただろ。

「仲間にゃ使わねェって。化け物相手にしか使わねェよ、安心しな」

「……だが、それは……神の領域ではないのか？　死を、命を、意のままに操る、など……」

「じゃァ槍を自在に創り出して、増やしたり飛ばしたりすンのァ神の領域じゃねェのかよ」

「む。……それは、しかしヒトの為し得る業の延長線上だ。ヒトは槍を作り、増やし、投げることができる。だが、命を自在に扱うのは……」

「心臓に槍突き立てたらヒトァ死ぬだろ。私ァそれを触れるだけでできるってな、そンだけさ」

「……だが、貴女はフォルミーカを触れずに殺しただろう」

「フォルミーカ？」

「地中より私達の命を狙った魔獣のことだ」

「あァ」
あのアリね。
……それ言われると弱いなァ。
剣の先から【即死】を垂らして殺した、ってな、確かに触れてもいなけりゃ剣で叩いたってワケでもねェ。
んァー、ありゃどォやったかって説明も難しいンだよな。感覚的なモンだし。
迷宮ン中でコウモリの化け物の心臓に【即死】を垂らしたみてェに、それを地面に染み込ませただけ、つっても伝わらねェだろォし。
自分で言ってもよくわからねェもンな。なンだよ【即死】を染み込ませるって。
「……あの時の鼓舞でも思った事だが、貴女は……死狂奴理刃（導き進むもの）なのか？」
「違ェよ。そもそも私ァ閉願だ。根本が違う」
「ならば、貴女の神とは……」
「夜さ」
ンなもん、聞かれるまでもねェ。
「つってもまァ、私が開花させといて、なンも教えねェってなちょいとアレだしな。

そンなに教えンのァ得意じゃねェんだが、それでも良ければ話すよ」
「ああ、頼む」
勉強熱心なこって。
……正直マッドチビ先生に聞いた方がいいとァ思うんだが、【鉱水】ァ【鉱水】で結構特殊な魔法だしな。【侵食】は言わずもがな、だが。
そォ考えると、こっちの戦力ァ結構ピーキーだな。汎用性や範囲においちゃ【鉱水】ァ最上級。生存能力や変質においてァ【侵食】ってな最強クラスだ。【即死】ァ殺傷能力SS級で、【喧槍】ァ……どォかね。射程も威力もあンのァそォなんだが、何より本人がバリ強い。バリバリ強い。【静弱】も【弱化】に似ちゃいるが、防御において比類なき力を発揮できる。これまた本人がバリ強いンで攻撃もできると来た。
……ピーキーか？
結構バランス良くね？
「まず、魔法少女にァ近接と遠隔ってのがあってだな――」
しっかし。

まだエデンに入って間もない俺が、先生役なんてのをする日が来ようたァね。
大丈夫なんだろうか。
教育免許とかいらねェのかな、エデンの教師って。
……ま、大丈夫だろ。少なくとも罰のために死ね、とか言ってくる奴らよりァマトモだぜ、俺ァ。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

十、序章編

37・泥椅子伊豆邪止亜伏炉老愚塔伐時縁伏低死得流・

国家防衛機構・浮遊母艦ＥＤＥＮには、５つの監視塔が存在する。
その内の二つ――西方と南方を監視する塔から、緊急の報告が入った。
雲を割る、巨大なりし魔物、接近せり。
即座に防衛組防衛班による防衛拠点の製作が為され、防衛網が敷かれる。
同じく防衛組であり、攻撃班であるイドラ隊が出撃。ＳＳ級魔法少女【青陽】エルバハ・イドラ。部下である四人も全員Ｓ級で構成された超攻撃的な隊は、見事その巨大な魔物を討ち果たした。
討ち果たした事を、蘇生槽で――告げた。
死んだのだ。
討ち果たした。確かに討滅した。その炎系統の最上位魔法によって、確実に焼き

尽くした。
だが――復活した。復活し、それでも消し飛ばし、尚も復活し。
イドラ隊の悉くが殺され、蘇生に至る。
上層部は現在ＥＤＥＮにいる全ＳＳ級の出動を要請。
司令塔及び軍事塔では魔法少女が慌ただしく動き回り、学園塔の生徒達も次々と駆り出されていく。
「――ってな、状況らしぃんだわ」
「ふむ。フェリカが血相を変えて行ったのはそういうことか。だが、何故私達に声がかからない？」
「それは、当然」
「それは、簡単です！」
Ａクラス Ａ班。
フェリカ・アールレイデを除くいつもの四人が、エデンの教室で窓を眺めている。
南方の監視塔とはつまり学園塔でもある。だから、良く見える。
その巨体。巨躯。

およそ既存の生物には当てはまらないだろうカタチの魔物は、数多の魔法少女の攻撃を受けては倒れ――しかし再度立ち上がり、侵攻を再開する。

SS級、【青陽】と【凍融】が出て、しかし殺すには至らなかった。燃やし尽くしても、凍らせても、融かし尽くしても――その魔物は復活した。

ベルウェークと名付けられたその魔物に、SS級が二人がかりでも敵わなかった、と。

「――ユノン。何故、苦無を持っている？」

「それも簡単な事です！」

「そう、簡単」

唐突に訪れたＥＤＥＮの危機に、けれど笑顔を絶やさないユノン。シェーリースもまた、ゆらりと立ち上がる。

「こぉいう事だよ、ポニテスリット」

その声と共に、首に指が触れて――。

「ぐ、ぎぃぃッ!?」

「ぎゃ、あ、ぁぁ、ァアア!?」
「ッ……太腿忍者、背中メッシュ、物陰に隠れろ！」
触れて、それが発動される前に。
3人が大きく仰け反った。
悲痛な悲鳴を上げながら――バタバタとのたうち回る。
「こっちだ、縁！」
「くっ、何が起きている!?」
「良いから来い！」
その声に、ミサキは飛んだ。
信用したのだ。
自らが懇意にする梓・ライラックでも、クラスメイトかつ班員として長くやってきたユノンとシェーリースでもなく――旧知の仲にある、通称鬼教官、キリバチの声を。
「くそ、太腿忍者！　【光線】だ！」
「あ、ぐ、がが、ぎ――いだ、い、いだいいい!!」

「っとに厄介だな、【痛烈】って奴ァ！」

そう、２人が突然苦しみだしたのは、【痛烈】による痛みの強制享受によるもの。梓だけは瞬時に物陰に隠れたものの、二人は間に合わなかった。

だから――最大限にチャージされた【痛烈】による痛みが、２人の全身を襲い続ける。神経を摘まみだされ、ノコギリで斬り落とされるような痛み。爪を剥がされ、酸で焼かれるような痛み。眼球を突きさされるが如く、脳髄を潰されるが如く、脊髄を叩き割られるが如く。

およそ考え得る痛みという痛み、その中でも激痛の、さらに上のそれが２人を襲う。

「ァ――っは、っはぁ、っはぁ！」

「……行ったか。クソ、ひでェことしやがる」

「あず、さ。たす、たすけて、――痛い、痛い、まだ痛い。苦しい、痛い……！」

「ギ――ぁ、ぁあ、わだし、の、あだまが……やげる……！」

キリバチが、ミサキが教室から離れて行ったのを感じ取り、ようやく身を出す梓。

そんな彼女の足元に、這いつくばって、助けを乞うように、救いを求めるように――2人が、死を願う。

「……あァ、わかってる。大丈夫だ――後でな」

そんな二人の首に、手を当てて。

梓は目を閉じ――魔法を発動した。

力を失う2人。その顔は苦痛と悲痛に染まっている。ただもう、息は無い。

死んでいるから――苦痛から、逃れ得たから。

「許さねェぞ、鬼教官」

そう呟いて。

梓は、駆け出した。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

進む、進む、駆ける駆ける駆ける跳ぶ。

ＥＤＥＮの外壁を、屋根を、あらゆるところを跳んでいく。

その身に強化は纏っていない。素の身体能力のみで、それを為す。
「どこ行った……？」
「梓さん、軍事塔です。キリバチさん含む複数の魔法少女が入っていったのを見ました」
「ナイスだ委員長！　近接の奴らは今どこにいる？」
「既に向かわせています。ですが、想像以上に抵抗が激しく……」
「あァよ、私が行く。委員長ァ引き続き監視と、飛んで逃げよォとする奴がいたら【引力】で引っ張り落としてくれ」
「はい」
軍事塔。ＥＤＥＮ北西部の監視塔に繋がるそこ。
なるほど、確かに、と。
梓は目を細め、耳を欹てた。

そこでは激しい攻防が行われていた。
近接魔法少女複数名と、防御に特化した魔法少女や遠隔魔法少女達による籠城

戦。なんとしてでもこじ開けんとする近接魔法少女に対し、炎だの雷だの風だのなんだのが次々に飛んでいく。それらは的確に近接魔法少女を捉え――しかし、死を齎す事は無い。

「撃て、撃て！　中に入れるな！　軍事塔に張り付いた者も墜とせ！　ここなりしは砦である！　――だが、決して殺すな！」

その命令は、けれど慈悲や優しさからではない。

「殺さば復活する！　足をもげ、腕を落とせ！　蘇生を許すな――ただその場に打ち留めろ!!」

現場の指揮をしているのだろうその女性は、なんとも酷な命令を出す。

相手は同じ魔法少女だというのに、だ。しかし、それに反抗する者はいない。皆が皆、必死な様子で、つい先日までは酒を酌み交わした相手を、夜を共にした相手を、手を繋いで歩いた相手を――苦しめる。

「……ひでェ事しやがる。ったく」

目を開き、聞くのを止めて。

梓は大きく跳び――そこに、降り立った。

「――梓・ライラック!?」
「不味い、奴は殺せ！　早く――」
拳銃二丁。素手と義手、その両方で取りまわすそれ、本物の腕と違わぬ精度で銃弾を発射する。
標的は、軍事塔――ではなく。
「よォ、苦しかっただろ。大丈夫さ、私が来たからな。もう大丈夫だ。――ちょっと休んで、また出てこいよ、お前達」
通路に転がり、その身体の欠損に苦しむ少女達、だ。
的確に首を討ちぬかれた魔法少女達は、その身を包み込む死の気配に安堵し、安らかな顔で眠っていく。その精神は中央へ還り、その肉体は世界に溶ける。
そして――軍事塔に向けるは、怒りの目。
「――ッ、撃て！　撃て！　なんでもいい、奴を殺す魔法を――」
「ひでェなァ、オイ。魔法少女ってな魔物を討ち果たす集団だろォが。なンだって仲間に武器を向ける。なンだって仲間に魔法を向ける」
炎が飛ぶ。氷が飛ぶ。

肌を切り裂く風が、骨までもを溶かす酸が、全てを切り裂く斬撃が。
それを、避ける。避ける避ける避ける避ける避ける避ける――ッ！
強化をしている様子はない。ただ見て、避ける。
当たらない。
「――ほら、死ねよ」
「ひ――!?」
当たらなかった。
防ぐことさえ、出来なかった。
いつの間にか梓は軍事塔にいた。その入り口を塞いでいた魔法少女の全てを殺し切り――いつの間にか、そこにいた。
現場の指揮官。
その首に、手を伸ばす。
「安心しろよ。何も殺すってわけじゃねェ。また会おうぜ、20分後くらいにな」
「あ、ぁ、――！」
何か、魔法を発動しようとしていたのだろう。

だがそれが適うことは無く。
指揮官はカクンとその頭を垂れた。
「……」
無言で上を見上げる梓。
彼女は少しだけ笑みを深め――軍事塔を上っていくのだった。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1:２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「何が起きている？」
「現在、各塔にて多数の魔法少女が我々を裏切り、その矛先をＥＤＥＮに向けている。学園塔、司令塔はほぼ完全に陥落したと言って差し支えはないだろう。軍事塔と修練塔も時間の問題だな」
「な……」
「攻撃性の高い魔法少女が全てあの魔物の対処に向かっているのが仇となっている。中央塔の上部がどうなっているのかはわからないが、蘇生槽の階層も占拠され

ている」
「それは、まずい。戦場から帰ってきた者達がそのまま殺されてしまう」
「それだけならまだ良かったのだがな」
隔離塔。
修練塔よりもさらに高い反魔鉱石の含有率を誇るこの塔に、今理性のある者達の全てが集まっていた。
理性のある者。
「我々に矛先を向けている魔法少女……否、言葉を濁すのはやめよう。ライラックだ。梓・ライラックに殺された魔法少女は、全て敵になる」
「……」
「把握している限り、ＥＤＥＮの魔法少女の半数は敵の手に落ちている。……いや、今軍事塔が落ちた。これで半数を超えた上、遠隔魔法少女の多くも敵の手に渡ったと見て良いだろう」
「国は……」
「どういうわけか、国には一切手を出してきていない。狙いは魔法少女だけらしい」

キリバチとミサキ。そしてコーネリアス・リヴィル。
ＥＤＥＮの魔法少女の中心核はこの３人になる。他は隔離塔各階を警備していて、反魔鉱石の壁も相俟ってだろう、未だ敵の手が届き切っていない。
「……キリバチ。一つ、聞きたい」
「なんだ」
「隔離塔の地下にあるという、封印措置を受けたという魔法少女についてだ」
「……そんなものをよく知っていたな」
「それは、大丈夫なのか。その……梓によって、殺される、ということは」
「封印措置は反魔鉱石によって行われる。【鉱水】以外の魔法は反魔鉱石に触れたその瞬間に世界に溶ける。それは【即死】とて変わらない、はずだ」
「はず、か」
ＥＤＥＮに、国に、魔法少女に。
不利益となる行動や思想を持った魔法少女を、反魔鉱石によって固め、彫像として封印する――封印措置。魔法少女は死なないが故に。ただ蘇生槽と経路を断つだけでなく――新たな魔法少女を生まないために。

それが、封印措置。
「……それが狙いか？」
「私にはそう思えて仕方がない」
「リヴィル、地下牢へエミリー隊各員を向かわせろ。後続の投入も忘れるな」
「はい」
どちらが速かったのか。
ミサキが立ち上がり跳躍した事。その些細な声色の違和感にキリバチが振り返った事。
無論、どちらでもない。
キリバチの肩に触れたリヴィルの【劇毒】が、その全身を侵し尽くす方が――遥かに早い。
「ぐ――ぶ、ぅ」
「ギ、ァ――グウゥゥ、ァッ！」
「【波動】！」
ミサキがリヴィルを弾き飛ばす。

弾き飛ばされたその身体は壁へと衝突し、しかしそんなことも気にならないという様子で苦痛に喘ぐ。リヴィルは、目を剥いて――声にならない声を発し続ける。

それを為したキリバチは、けれどその口から大量の血液を出し、青ざめた顔で背もたれへと倒れ込む。

死んでは、いない。

死んではいないのだ。

「……【痛烈】の、効果時間は……この、チャージでは、２分と保たん。その前に、リヴィル、の手足を……潰せ。不覚、だ。不覚だった。そうか……リヴィル。お前、は」

「ガ――ぐ、ぅぅう」

「【波動】」

「あ〝あ〝ぐっ！」

感傷など無い。

ミサキは梓程、優しくはない。理解はしよう。気持ちは汲もう。だが――敵であるのならば、容赦はしない。

その魔法は世界を圧す。【波動】。非常に高い強度を持つそれは、ヒトの手足程度は簡単に押しつぶす。
ぐしゃりと。その骨の髄までを圧し潰す。
「私は長くはない……死なば、蘇生し、敵の手に渡るやもしれない。……ライラックを止めろ、ミサキ。地下牢を……」
「承知」
もう一度、大きく血を吐いて。
キリバチは意識を失った。その身に毒が回っていく……。
「……」
それを見届ける事も無く。
ミサキは、地下牢へと向かう。

遠《ｔｅｘｔ:s1·2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「……巨大、ですのね」

S級以上の魔法少女の投入。

防衛組攻撃班イドラ隊、防衛組防衛班ジュニラ隊、遠征組突撃班ヴェネット隊。

防衛組警備班マルハーバン隊は先日の咎はあれどその有用さから防衛にまわり、その他学園組や遠征組のS級魔法少女が突撃して――その悉くが、殺されていく。

主な攻撃手段は雷撃。【神鳴】に劣る威力ではあるものの、飛行する魔法少女やチャージの必要な遠隔魔法少女を叩き落し、その身体に麻痺を残す。神経には痛みを、肌には爛れを。痛みに屈する魔法少女も少なくはない。そうして、誰かに殺してくれと頼み、けれどその相手も、と。

死ねばいいと、死ねば治るからと。

そう知っているからこそ――魔法少女は痛みに耐性がない。苦痛を避けないくせに、苦痛に瀕せば喘ぎ泣き叫び、そうして誰かに救いを乞う。

「……軟弱極まりない、ですわね」

その口から零れ落ちた言葉は、普段の彼女からは考えられないものだった。特に梓・ライラックの前で見せる彼女とは違う。

優しいだけの彼女はここにはいない。優しいあの人を思いやり、慮り、自身の信

念を少し変えてまで、折ってまで――憧れを追う彼女は、どこにもいない。
「全く……魔法少女たるもの、肌が裂けようと、腕が折れようと、心の臓を貫かれようと――最後まで敵を殺し尽くさなければ。そうでなければ、何のために、世界から魔力を頂いているのやら」
４つ腕、４つ脚。牛の頭。美しき翼と鍛え抜かれた胴体。
既存の魔物の要素は無い。あるいは――その全てを詰め合わせたかのようにも見える。
彼女は。
フェリカは。
「遅いですの。何もかも」
次の瞬間。フェリカはベルウェークの後ろにいた。
その足の全てを叩き切り、周囲にいた透明な狼も殲滅し、更に奥で構えていた青毛の魔法少女も――。
「――ッ！　これは！」
下がる。速くなった世界を遅くし直して、下がる。

「【弱化】……なるほど。話に聞いてましたが、他の魔法少女の魔法を使い得る、と。ならばＥＤＥＮにいらっしゃる【弱化】の使い手であるグランセさんは、貴女の手にあると見てよろしいのでしょうか」
「いいわ。けれど、びっくりした。最大チャージで【弱化】したのに、普通に喋れるのね、貴女は」
「グランセさんには申し訳ないですけれど、最大チャージがその程度なら――私の速度には、遠く及びませんわ」
「自信満々だね。でも、いいの？　ＥＤＥＮに敵がいると知って……戻らない、なんて」
「ＥＤＥＮには梓さんがいますので」
その全幅の信頼に、けれど青毛の魔法少女は笑みを深めた。
フェリカの背後に浮かぶＥＤＥＮ。そこに、あるのだと。
「けれど、なるほど。増援が来ないのはそういう理由でしたのね」
「理解が早いね。今も【弱化】を受けているのに」
「ありがとうございますの。でも、貴女はとても遅いですわ」

「？」

フェリカの背後のＥＤＥＮ。

それが――ずっと見えている、ということに。青毛の魔法少女は、ようやく気が付いた。

「あれ？」

「もうお仲間はいませんことよ。死せども死せども蘇る。まるで魔法少女が如き魔物。確かに強く、恐ろしいものでしょう。雷撃を操り、繰り出す攻撃も重厚。透明なウルフ種で場を攪乱し、隠れている者さえ許さない。あぁ、透明なレーヴァン種もいらっしゃいましたわね。弱すぎて気にもなりませんでしたけれど」

「……【神速】。ちょっと舐めてたわ」

「ええ、そのようで。ありがとうございます。なめていてくれたおかげで、何を行えばいいのかもわかりましたので」

飛ぶ。

フェリカが？　否、青毛の魔法少女が。

違う。そうですらない。

「え――」

「【神速】は、その目で捉えられぬから【神速】というのですわ」

気付いた時には、首が飛んでいた。

気付いた時には、身体が無かった。

気付いた時には――。

「貴女の後ろにいたりして♪」

「使い古された手段ですのね」

フェリカの背後に現れた青毛の魔法少女を、その背後に現れたフェリカが切り裂く。

「あれ」

「貴女が精神体であることなど、初めの邂逅の時点で気付いていましたのよ？」

「……そっか。あの時私を切り裂いたのは、貴女だものね」

切り裂かれた青毛の少女が揺らぐ。揺らいで喋る。

斬られ、裂かれ、突かれ、飛ばされ。

しかし死なない。それは死なない。

「わかってるなら、どうする気なのかな？　私を殺す事ができないと分かってて、けれど自分がどうすればいいのかもわかっている。ね、教えてよ」
「あら、わからないんですの？　頭の回転まで遅いんですのね。可哀相に」
「……貴女はもっとお淑やかなコだと思っていたんだけど、なんだか残念ね。あの野蛮人とあんまり変わらないわ」
「それは光栄ですわね」
「あらら？　貴女もあのコの事野蛮人だって思ってるんだ？」
「粗暴な口調であることは否定しませんわ。それがあの方の素敵なところですし」
「ふーん？」
死なない。
けれど――魔法も使えない。
そして、神も立ち上がらない。
「……もしかして、全部一人で抑えてる？」
「ええ。SS級魔法少女として私のやるべきこと――それは、この場に貴女を留め、魔物を全て殺し、蘇生する魔物も留め、且つ死なない。当然でしょう？」

「……」

その剣に、その眼に、その身体に。

一点の曇りなし。

「改めて自己紹介をさせていただきますわ。私はフェリカ・アールレイデ。EDENを守護せしアールレイデが長女にして、SS級魔法少女。【神速】を拝命し、この地に近づく一切を塵芥に帰す者ですわ」

「……まずいなぁ、これ」

「あら、名乗りに名乗りを返さないとは、文明の無い方なのでしょうか？」

「……ルルゥ・ガル。分かってると思うけど、魔法少女じゃないよ」

「それは知りませんでしたわ。教えてくださってありがとうございます」

立ち上がることができていない。

その足が切り刻まれ、その腕が切り刻まれ、その翼が切り刻まれ、その頭蓋が切り刻まれ、その胴体が切り刻まれ。

何度も何度も、死ぬ。

ベルウェークに、ルルゥ・ガルの神に、何度も何度も死が訪れる。

「試してみましょうか。この魔物が本当に、永遠に復活できるのか――私達でさえも、届かぬその果てを、掴み得るのか」

その光景に。

「――戦略的撤退！」

ルルゥ・ガルは、逃げた。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「見えた！　ＥＤＥＮだ！」

「あれが……」

「本当に、浮いている。何故？」

「ベルウェークは……倒れ伏していますね。魔法少女に倒されているようです。ですが……」

「あァ、復活するはずだ。だから早く伝えてやんねェと！」

「待ちなさい。今アンタが出て行ったら、余計な混乱を生むだけよ。忘れたの？

あっちにはアンタの偽物がいるのよ。前線を張っている魔法少女が誰であれ、アンタが出るべきじゃないのは確実でしょ」

よぉやく帰ってきた。

あァ、すっげェ懐かしい。ここを故郷だって思うくらいにァ、俺ァここを大事にしていたらしい。ＥＤＥＮを、エデンを、そして国を。

「青バンダナ、赤スカーフ！　行くぞ！」

「応！　……いいのか？」

「あァ、悪ィわけが無ェだろ。確かに混乱は生んじまうンだろォが、まずァベルウェーク倒すのが先だ。違ェか？」

「……そうだな」

「異存なし」

首のドアを開ける。

眼下――広がる戦場から、あァ――あまりにも濃い血の臭いがする。

死んだんだろォな。沢山。沢山が、死んだんだ。

「あのね、アンタ本当にわかってるの？　――あるいは、アンタの仲間に剣を向

けられる可能性もあるのよ？」
「わかってる。でもさ、化け物殺せば、化け物に殺される魔法少女は減るだろ。私ァ大丈夫だ。それに――みんなを信じてる」
「悲観的になりすぎるな、と。過去に言いました。しかし楽観視をしすぎるな、とも言いました。ですから、どのような状況にも対応できる中立を取れと。梓様。貴女の行動は、中立になっていますか？」
「いいや」
プテラゴイルを3匹呼ぶ。
それぞれに飛び乗って、笑う。笑って言うんだ。
「最悪を考えて、最良を取る。両端こそが私さ。大丈夫――全部、考えてある」
「ならば、どうか。貴女にとっての最良をお選びください。誰にとっての、でもなく、何にとっての、でもなく。貴女にとっての、全てを救う未来を、どうか」
「あァ。冷静メイド、マッドチビ先生。2人ァＥＤＥＮを頼むぞ！　後で合流しよう！」
「死ぬんじゃないわよ、口悪ちび」

「あァよ！」
さて――んじゃまずァ、景気よく行こうか。
「プテラゴイル！　ベルウェークに突っ込め！」
はは。
ははは！
さァ、楽しくなってきた！

「【神速】」
「【静弱】ッ！　っづ!?」
赤スカーフの乗るプテラゴイルが切り裂かれた。
その魔法の発動は、しかし間に合わなかったのだろう。腕に裂傷を負う赤スカーフ。
「待てお嬢、私だ！　敵じゃねェ！」
――強化。プテラゴイルを盾に、転がり落ちろ。
久方ぶりに感じた【即死】の気配に従い、地面へと落下する。

――知覚強化。青バンダナが危ない。剣の投擲では間に合わない。赤スカーフの傷は浅い。大丈夫だ。だが、青バンダナへ向かう攻撃は――死に溢れすぎている。

「洲碑嗚恵印減後琉不敗矢地洲碑嗚獏和道塔握世羅麗徒（シ矛シのアインハージャは槍を後方に発射して加速しなさい）！」

「【喧槍】！」

青バンダナの背中側に生成された槍群が、プテラゴイルごとその身を押し出す。それによって逸れる剣。だが、その飛んでいく槍に着地し、それを蹴って黄金の風が青バンダナを撫でる。

「ッ！」

「あら、防ぎましたの？　驚きましたわ。今の槍といい、先ほどの盾の方といい、とても良い目をもっていらっしゃるのですわね」

「おいお嬢、話聞け！　そいつらァ敵じゃねェ、味方だ！　つかその問答よりまずァベルウェークを殺さねェと！」

「黙りなさい。ホートン種。生き残りがいるとは思いませんでしたの。性懲りもなく梓さんの姿を真似て、私に指示を出す、など。……吐き気がしますわ」

その、冷たい目に。

その、侮蔑の顔に。
笑えて仕方がない。
「ハ――ははは。なンだ、一発目で最悪引き当てるたァ私も運が良い。その眼、その表情！　なァよ、金髪お嬢様。もしかして――私に勝てるとか、思ってねェだろォな」
「たかだかホートン種の一匹が、よくもまぁ舐めた口をききますのね。まさか、梓さんと同じ姿をしているから、私には斬れない、など。そのような考えですの？」
「なーに言ってンだよ。お嬢程度の遅さじゃ私にァ追いつけねェつってんだ。馬鹿が」
「まぁ。粗暴な口調まで上手く真似ていますのね。では、魔物に乗ってやってきた、という事実はどう否定しますの？」
「否定しねェって。私が乗ってきたンだ、乗り物に決まってンだろ。相変わらず頭の回転が遅ェな、お嬢様。【神速】の名が泣くってなモンだ」
半歩、前に出る。
後頭部を掠める剣。

「!?」

「避けられたとでも思ってンのか？　違ェよ、前教えただろ」

一歩、二歩と、ふらふら歩く。

知覚強化はしない。身体強化もしない。

ただ――自分が死なない場所に、歩いて向かうだけ。

「あァよ、この分じゃァそっちの私ァ随分と温かったらしィな。そこまで評価落ちてるたァ残念で仕方がねェ。ほら、どォしたよ。ご自慢の【神速】ってな、お飾りA級に剣先の一つも当てられねェ魔法なのか？」

「この――」

自然体だ。酷く自然体。

ただゆらゆらと、何があっても死なない場所に移動するだけ。

相変わらず速い。目に見えないくらい速い。その剣筋も、お嬢の身体も。【神速】とは名の通り、神の如き速度だ。あっちで切り刻まれてる神さんたァわけが違う。

けど、だからこそ。

その一撃一撃が、一突き一突きが――致命だからこそ。必死だからこそ。

俺には、効かない。

「なァよ、お嬢様。なンで攻撃が当たらねェかわかるか？　あァ、お嬢が遅いからってワケじゃねェさ。お嬢は十分に速い。【神速】ァちゃんと効果を発揮している。その力は、誰よりも、何よりも速い事を指す。だからちゃんと機能している。じゃあここで問題さ。ならなンで、私に当たんねェんだ。はは、Ａクラス Ａ班で、もっとも弱い私に――最も強い奴がさ、なンで当てられねェ。なんで殺せねェ」

「ッ！」

「答えァよ。お嬢が、子供だからさ」

魔煙草を取り出して、吸う。

不味いねェ、相変わらず。楽しい気分はそのままに、あァ、でも――クリアになっていく。

背中の剣を引き抜く。

引き抜いて――お嬢様の顔に突きつけた。

「な」

「よォ、魔煙草もマトモに吸えねェがきんちょが、私の領域でよ、私に勝てるわけ

ねェだろ。死(それ)ァ、私ンだよ」
発動するのは【即死】。
浸すのは剣。引き絞るは身体。槍投げみてェな姿勢を取って。
それを――ぶん投げる！
「――～～～～!?」
それは刺さる。確実に刺さる。
今まさに、切り刻まれた身体から復活したベルウェークの背中に、がっつり刺さる。
「青バンダナ、赤スカーフ！　神殺しァ、ヴァルメージャの役目だろ！　頼むぜ！」
「応！　我が槍は、神をも貫く魔槍なりて！」
「我が盾は、神の力を押さえる聖盾である」
お嬢の両側、青バンダナと赤スカーフが飛ぶ。
身体強化ァ最低限。その他の魔力は、全て魔法に込めて。
「【喧槍】――ッ！」

「【静弱】」
圧し潰され、弱った肉体。死を浸され、潰えて行く肉体。
その全てを――幾万もの槍が貫いた。貫いていく。
盾が、盾が、盾が、盾が。
弱体化させ、潰し、故にこそ本来の姿をこの世に縫い付ける。
槍が、槍が。槍が。槍が。
貫き通し、刺し切り裂き。故にこそ、その姿を暴き出す。
牛の頭。その頭蓋。頭部。後頭部。そこにキラリと光る、眩い多面体。
「お嬢！　あそこだ――あの核まで、私を運んでくれ！」
「な、なんだか従って動くべきであるような――～～～っ、ああもう！　よくわかりませんけどわかりましたの！」
姫抱きにされる。
懐かしい感覚だ。はは、そうさ。こうでなくっちゃいけねェ。
俺を運んでくれるのァ、いつだってお嬢だ。残念だがポニテスリットでも冷静メイドでもねェのさ。

遠くでサボってた俺を、授業の始まる場所にまで運んでくれンのァ――お嬢しかいねェのさ！

「ありがとうな、お嬢！　んで、あぶねェから下がってくれ。あとコイツ殺したら多分ぶっ倒れるから――受け止めるのもよろしく頼まァ！」

返事は聞かない。

太腿のマガジン全部を取り出して、その開いた頭蓋にバラバラと落としていく。

露出した脳髄ァ、けれどマジの脳じゃァねェ。

いつか迷宮で見た、マリオネッタってなゴーレム。

アレとおんなじの光り輝く核って奴さ。

やっぱりお前、人形だったってワケだな。

核に触れる。

「――怖いか？」

どろりと伝わってくるは、感情だ。強い感情。神の、コイツの――恐怖。

死ぬはずの無い己が。何をされても、だ。切り裂かれようと、動けなかろうと、留められようとも死ななかった己が、その命を散らす事の無い自らが。

ここで終わる、という恐怖を。

「――さよならだ、歴史に埋もれた異教の神よ愚媒〕阿閉願御土唄理弩印秘止離・！」

手のひらから垂らし落とす。それは瞬く間に多面体の全てを浸し――。

「死ね」

殺し、尽くした。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

38. 風呂無絵鰤湾図歩印途負不謬, 有阿有.

目を開ける。

背中に感じる体温は、あァ、懐かしい。体温で人を判断するとか変態チックで嫌なンだが、長くを一緒にいるとわかるもンなンだなァ、って。

「よォ、金髪お嬢様。ちゃんと受け止めてくれたよォで何よりだ」

「……」

「ン？　もしかしてまだ疑ってンのか？」

「いえ。大まかな話はそちらのお2人に聞きましたわ。既に謝罪も済んでいます。けれど」

「けれど？」

お嬢は――俺の、腕を。

そして顔や腹に残る火傷の痕に、優しく触れる。

「こんなになってまで、どこへ行っていましたの？」

「ドラゴンをちょいとな。退治してきた。今しがた、神さんも殺した。これから故

郷を取り返しに行くところだ」

「……」

よっこいしょ、なんておっさんくせェ声を出しながら、立ち上がる。

戦場だ、まだ。ルルゥ・ガルがどこにいるのかもわからねェ。オオカミとカラスの化け物の死体がわんさか転がってるあたりは、お嬢の戦果なンだろォが。

「青バンダナ、赤スカーフ。ベルウェークの死は確認できたか？」

「ああ。過去のアインハージャたちも胸をなでおろしていることだろう。……これで、私達の役目も無くなった」

「けれど、ウォムルガ族の村にはこういう諺がある。〝有為亞巴止地歩印途負不脳離端（追い風の間は後ろを見るな）〟と」

アインハージャとヴァルメージャは、ベルウェークを討ち果たすためだけにあった。

もしかしたら、だが。

魔法少女ってな、こいつらが原型なンじゃねェかって……ちょっと思ってる。５００年だのじゃァ済まねえ年月を戦い続けてきたみてェだしな。

「どの道ウォムルガ族の村は滅んでいる。このまま貴女に付き合うのも悪くはない」

「あァよ、ありがてェ。んじゃ、つーわけだがよ、お嬢。どォすんだ？」
「どう、とは」
「私達についてくるかどォか、って話さ。まだ判別しきれてねェんだろ？　ＥＤＥＮにいる私と、ここにいる私。どっちが本物なのか、ってなよ」
「それは」
「だから、迷いがあンならおいていく。正直お嬢様の戦力ってなありがてェよ。すげェ頼りになる。でも、苦しいだろ？　どちらの敵になってもどちらの味方になっても――私に刃向けンのァ、無理だろ」
「……」
金髪お嬢様ァ俺なんぞよりずっと優しいからな。ずっとずっと親身になってくれて、ずっとずっと俺の事を考えてくれンだ。その好意も含めて、ありがたい限りさ。けど。
もし、あっちの俺と対峙することになったら――危ねェからさ。
「私ァお嬢に死んでほしくねェ。みんなにもだ。痛みさえ感じて欲しくねェ。傷って話だけじゃねェよ、心の痛みもだ。板挟みになって苦しくなるよォなのも、全部

たァ言わねェが、できるだけ感じないでほしい。私ァお嬢の悲痛な顔なんざ見たくないんでな。ここで大人しく待っててくれりゃ、あとは私達がなんとかする。な？　わかるだろ？」

「……舐められたものですわね、本当に。ああ――そうですわ。思い出しましたの。貴女のその、私達を対等に見ていない態度。遠征から帰ってきた梓さんはよく私達と目を合わせてくれるようになって、一緒になって考えてくれて、一緒になって戦ってくれて。私達と同じ場所から、同じ方向を向いてくれていましたわ」

「あァさ、そいつァいい奴だったんだろ。じゃ、剣を向けたくねェよな」

「対して貴女は自分の事ばかり。自分が嫌だから、私達に傷付いてほしくなくて。自分が嫌だから、誰もが傷付かない、死なない方法を選ぶ。私達と同じ所からではなく、もっと高い場所から私達を見て、愛でて、愛して――故に、私の気持ちになんて気が付かない」

「お、おゥ。そォ聞くと最低じゃねェか私」

「ええ、そう言っていますの」

そっかァ。

そんな風に思われてたかァ。おじさん今ちょっと……どころじゃなく、かなりしょんぼりしてますよ。

「でも、私の好きな梓さんは、こちらですの」

「……いんやさ、決めなくてもいいんだぜ、お嬢。あっちの私が偽物ってわけじゃァねェんだと思う。どっちも私で、なんなら――あっちのが、可哀想な私だ。私みてェに外れてねェ真っ当な私だ。だから」

「だから、なんですの？　あちらの梓さんの方が可哀想で、真っ当で、しっかり本物で、短期間とはいえちゃんと私達と過ごした方であるのだから――あちらを好きになるのが、当然、とでも？」

「そ――れは」

「この際ですから鬱憤をぶつけさせてもらいますけれど。私はこんなに好きだと言っているのです。私は貴女と出会い、貴女に救われてからずっとずっと好きだと――愛していると告げているのです。それを、やれ〝保留にさせてくれ〟だとか、〝恋愛対象には見られない〟だとか、〝私なんか〟とか……そろそろ苛立ちも破裂しますのよ」

金髪お嬢様が――俺に、剣を向ける。

おー待て待て。さっきの完全な敵対状態だったら殺意ァ乗ってたンで避けれたが、そーなってくるとマジでやべェぞ。殺気の無ェ攻撃は避けられる気がしねェって。

「梓・ライラックさん。はっきりしてください、ですの。私は貴女を愛しています。好いています。恋仲になりたいと、そう思っていますの。――返事は？」

「おいおい、今ァそォいうことやってる暇無ェんだって。早いとこＥＤＥＮに行かねェと、手遅れになるかもしれねェ」

「ですから、無駄な問答は要りませんのよ。返事を言いなさい。先延ばしにしないで、先送りにしないで――今の貴女の、私へ返す言葉を言いなさい。私はどちらでも構いませんの」

「……」

状況がわかってねェってこたないはずだ。

だってのに、なんだって愛恋の話を。

……思春期、かねェ。でもおじさんはさ……正直言って、お嬢達ァ子供にしかさ。

あー。じゃあ、もう、言っちゃうか。それで――禍根ァ無ェだろ。もう、これ以上傷つけるのも、嫌だから。

「ごめんな」

言う。

息を飲むお嬢に、言う。

「私ァさ、お嬢を……フェリカ・アールレイデを、恋人ってな風には見えねぇのさ。良くて娘か、娘の友達か。私たァ絶対に関わっちゃいけねェよォな、キラキラした存在だ。その好意はありがてェけど、お嬢は私の事なんも知らねェだろ。私もお嬢のことをほとんど知らねェ。私は――お嬢に、あァいや、みんなに言ってねェことがわんさかある」

「な、らば、それを今ここで言ってください。それが――私を恋人には見られない理由、なのでしょう？」

「言えねェ。言わねェ。言いたくねェ。――だから、その告白ァ受け入れられねェ。これが、答えだ」

自分に向けられた剣を触る。その腹に指を這わせて、剣を突き出したままのお嬢

に近づいていく。

――潤んだ瞳。あァよ、だから保留にしてたンだよ。言ったら傷付くだろ。苦しむだろ。だから愛恋ァ苦手なンだ。俺の心がこんなだからよ、絶対傷つけちまう。でも、もっと早くに断ってたら良かったな。余計な苦しみを与えちまった。

本当に、ごめんな。

「ありがとう。私ァさ、少し前に、ちょいと嫌な事があって……結構苦しかったンだ。それをさ、一人ぼっちでＥＤＥＮに上がった私をさ、お嬢様が見つけてくれただろ？　すんげェ嬉しかったよ。死ぬほど心細かった私に、真っ黒に見えてた世界に、彩を与えてくれた。本当に感謝してる」

お嬢を。

フェリカ・アールレイデを、抱きしめる。

感謝はある。溢れんばかりの感謝は。

好意もあるさ。仲間だし、ＥＤＥＮじゃ一番仲の良い友達だって言える。

けど、愛恋にァ発展しねェのよ。

「安心しな」

「……ッ」

「私にフられて、お嬢が傷心してる間に、全部終わらせっからよ。どういう結果になったとしても――お嬢が笑ってられるよォに、上手く立ち回って見せる」

そォいう話じゃねェ、ってのもわかってるよ。

そォいう話をしてねェって、言いたいんだろ。

だから、ごめんな。で、ありがとう。そして、安心しろ。

終わるにせよ――終わらせられるにせよ。

俺に迷いァ無ェからさ。

「すまねェな、時間食っちまった。青バンダナ、赤スカーフ。ＥＤＥＮに向かおう。プテラゴイルは……お、修復してンな。流石マッドチビ先生の作品。お前らにも迷惑かけるが、もうひとっ飛びしてくれや」

キェーとかグェーとか鳴くプテラゴイルにまたがる。

お嬢に斬られた傷は既にくっついていて、元の形に戻っている。【鉱水】ァ強いね、こォいう時に。

「……いいのか？」

「俯いたまま動かない」
「いいさ。迷うってンなら、いないでいてくれた方が安心できる。さァ行くぜ、ヴァルメージャ」
「応」
プテラゴイルに飛翔を指示する。二人も乗って、さァ飛び立つ――といった所で。
「待て」
と。
……なんぞ、底冷えする声が聞こえた。
すげー久しぶりに聞いた声だ。
「あァ？　待つわけねェだろ、だが用件くらいァ聞いてやるよ。なンだ、指揮官」
「ほう。私に対し、そのような態度を取るようになったか、ライラック。褒めてやろう」
「はン、何様だって話だろ。私に敬意を持って欲しいなら――その、四つ足の姿勢やめてからにしろや」
プテラゴイルが高度を上げて行く。

それに追従するようにして飛んでくる指揮官殿。飛行魔法。固有魔法しか使えなかったクルメーナ地下の偽オーレィア隊たァ違ェな。

相手さんの技術や躾も向上してるってこった。

「気付いているというのなら話は早い。私の魔法は知っているな？　――死ぬがいい、ライラック！　我らの悲願のために!!」

一気に加速して突っ込んでくる指揮官。

その魔法は【自爆】。いいさ、ンな魔法ァ殺してやるよ。

――知覚強、化。

「いま、わたくし、とてもイライラしているんですの」

「……殺したのか」

「ええ。何か問題でも？　敵ですのよ。たとえ知己の姿をしていたとしても、気配は確実に魔物でした」

強化をするまでもなかった。

突っ込んできた指揮官殿の首がポーンと飛んだから。魔法を使うまでもなく落ちて行く指揮官の身体と、それを為した――煌めく風。

「ジュニラさんが敵の手に落ちているとなると、色々と対策が必要ですわね。防衛組のほとんども掌握されている可能性がありますわ。――何をぼさっとしていますの？　早くEDENに帰りますわよ」

そう言うお嬢の手には、あァ、いつぞやの魔煙草がある。

まだしまってたのか。んで、なンだって今喫んだのやら。クソ不味いだろォによ。

「最愛の人にフられてしまったので、少しばかり悪いことをしてみようかと思いましたの。傷心中故――今の私は、何をするかわかりませんのよ。このイライラをぶつけたくて仕方がないので」

「お、おォ。そか」

「故に、貴女の忌避する殺しも、何の抵抗も無くいたしますわ。相手が魔物であるのならば、躊躇はしませんの。姿形や肉体が仲間であろうと、魔物は魔物。戦場で迷う者は邪魔、なのでしょう？　そっくりそのまま返しますわ。――寝返った仲間も、仲間の姿をした魔物も殺せない半端者は、帰ってくださいます？　戦場において、とっても邪魔ですわ」

「それには同意する。先ほど向かってきた者も、その身ではなく魔法の方を殺そう

としていただろう。梓、貴女は正直に言って戦場を駆けるべきではない。その鼓舞や指揮は有用だが、戦士としての役割は我らに任せるべきだ」

「この人、よくわかってる」

「おゥいきなり1対3になるたァひでェこった。んじゃ私ァ勝手に行かせてもらうぜ。仲良しこよしでしてる暇ァ無いんでな。おォさプテラゴイル！　ＥＤＥＮにひとっ飛びだ！　他の二匹や、【神速】なんぞに負けんじゃねェぞ！」

キェーキェーグェーと鳴くプテラゴイル。

あーわかったわかった。お前の言う事なんか知るかってことね。じゃァ俺もそォさせてもらわァよ。知るか、お前らの気持ちだのなんだの。

俺ァ俺のしたいよォにさせてもらうからよ。

お前らも勝手にしやがれ。死なねェ程度にな！

「――ぐッ!?」

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「……遅い。お前は遠征で何を学んできた？　魔力の効率化も、部分強化も――何もかもが、無に帰している」

「ッ、はン、仕方ねェだろ。まだ慣れてねェんだよ」

「そうか。習熟の遅いことだ」

ＥＤＥＮ隔離塔、地下一階。

その通路を塞ぐは、たった一人の魔法少女。名を、カネミツ。

Ａ級魔法少女にして【飛斬】の使い手。その魔法により、この狭い通路に押し寄せた〝敵〟の全ては斬り伏せられている。

残っているのは２人。

梓・ライラックと――。

「……強い。……Ａ級。嘘」

「だァな、過激無口。信じられねェよ、Ａ級なんてな」

同じくＡ級魔法少女、【槍玄】がケトゥアン。

寡黙なりし攻撃的魔法少女２人は、しかし２対１になってもカネミツを乗り越えられない。

「……【槍玄】」

「観測班、調査班を下に見る程私は腐ってはいないが――拍子抜けも良いところだ。同じ遠征組として情けなくすらある。この剣一つ乗り越えられないとは、A級魔法少女が聞いて呆れようさ」

「尖り前髪、お前なンでA級なンだよ。っつーか、あれか。今回の昇級試験でSSにまで上がるつもりだった、とかか？」

全身を槍にして突っ込んだケトゥアンを難なく弾き、吹っ飛ばすカネミツ。

剣捌きだけでなく、要所要所の身体強化や知覚強化も限りなく研ぎ澄まされている。一切の無駄のない瀟洒な剣は、狭い通路においては部類の強さを発揮する。

先程から乱射している梓の弾丸さえも弾き、未だ無傷。

「遠征組突撃班の均衡が崩れるからだ。SS級、S級が1人ずつ。他がA級。そこにもう一人S級が出てしまえば――戦力過多として、他の隊に回されかねない。故に、私はこの位置で良い」

「ははっ、そりゃ最低だなオイ。別になろォと思えばなれるが、ならなくていいからならないってか。舐め腐りやがって」

「そうか？　今のお前であれば、SやSSは容易いだろう。【即死】より殺傷能力は劣るものの、殲滅力においては【即死】の上を行く。潤沢な魔力もあるようだしな」

「――ヘェ」

スイッチが切り替わる、と表現するべきだろう。

梓の顔付きが――酷く凄惨で、残忍なものになる。横にいるケトゥアンもまた、同じ。

獲物を前にした獣のような。

あるいは――生贄を見つけた悪魔のような。

「よくわかったな。参考までに、どォして気付いたのか教えてくれよ」

「首を狙わなければ発動しない上、消費魔力量も【即死】とは違う。僅差だが、そちらの方が少ない。無駄に効率化をしすぎたのだろうな。それに、魔法を発動したあとの数秒、表情を変えることができる程度には死んでいない期間がある。それは【即死】とは言わん」

「随分詳しいじゃねェか。私と尖り前髪ァ、そこまで一緒に戦ったことあったかよ。遠征の時も修練塔の時も、【即死】ァあんま見せてなかったはずだぜ」

「魔法の名には意味がある。そうではないものをそうであるとは言わない。その名を騙っているのでもない限り、な」
「あァそォかい。アンタ、私の知らねェことといっぱい知ってるみてェだな。――なら、尚更仲間に引き入れねェと」
梓が――その義手を、前に突き出す。
ディミトラによって改造を施された義手。魔力回復の仕組みのついた義手。
その、本当の力。
「くらえ、魔力砲」
大きく開いた義手の手のひらから――極大サイズの光線が発射された。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――隔離塔にて極大魔力反応を検知！」
「うん。大丈夫。もうすぐ、あの子達が帰ってくるからね」
「もー、魔法少女同士の争いとか余所でやってほしいんだけどー」

ここはＥＤＥＮ下部。
迷宮・終の因。その最奥部にて、３人。
１人はベッドで足をぶらぶらさせて、とても不満そうに頬を膨らませる美女。
１人はテーブルについてオレンジ色の果実を食べている、きらきらしたツインテールを持つ少女。
最後の１人は、先ほどから忙しなく上方を見ては大きな声を発している、整った顔立ちの少女。
「……あの、あるるらら様」
「なにかな」
「本当に向かわなくて良いのでしょうか？　その……紛う方なきＥＤＥＮの危機であると、私の主要魔脳計算機は判断を下しているのですが」
「あたし達に似た気配をもつ君が行ったら余計な混乱を生むからでしょー。もうさー、こっちは静かに暮らしていたいだけなのにさー。魔法少女を殺さない、なんて取り決めまでしてあげたのに、魔法少女同士で殺し合ってるのとか、ほんとなんなのって感じなんだけど」

「災難だね。連れ込まれたホートン種もそちらのせいにされたみたいだし」
「ほんとだよー！」
ベッドに寝頃がり、じたばたと暴れる女性。
名をソテイラ。迷宮の主である。
「シエナちゃん。大丈夫だよ。だから、安心するといい」
「で、ですが。ヴェネット様もザイフォン・英様も、その……梓・ライラック様の手に渡ってしまいました。あるるら様はお二方と仲が良かったと認識しているのですが……」
「うん。同じ遠征組突撃班だからね。隔離塔で頑張っているだろうカネミツも、まだ自分の部屋で寝ているんだろうルナも、大事な仲間」
「であるならば、助けに行くべきでは……？」
「大丈夫だと言ったよ、シエナちゃん。これから来る——私達の知っている、梓・ライラックは。シエナちゃんの想定しているよりも、遥かに強い。だよね、ソテイラ？」
「……あたしあの子嫌ーい」

不貞腐れて頬を膨らませるソティラに、あるるらは苦笑する。
苦笑して――立ち上がり、その腰に自らの手を突き入れた。
「ひゃあ!?　え、え!?　いきなり何!?　なにするの!?」
「全ての魔法少女には従うんでしょ？　質問に答えてくれるかな、ソティラ」
「わわ、わかったから！　わかりましたからぁ！　その手引き抜いて、すっごく変な感じする!!」
「……私には、刺激が……あぁ！　どうしてですか、主ディミトラ。何故私にこのような知識を……か、考えたくない事が、関連する言葉が引き出されて……」
「君はヒトガタをしているけれど、種類としてはキャット種だよね。だから――このあたり、弄ったら弱いんじゃないかな？」
「わかったって、わかったって言ってるのにやめてくれない！　いや、やめて、魔法少女の手なんかで気持ちよくなりたくな、いひっぃぃぃぃ……」
「……あぁ主ディミトラ。やめてください。≫この光景はえっちだ、というのよ≪なんて、余計な知識の埋め込みを……削除、う、削除できない。なんですかこの厳重な施錠……」

にこにこと笑顔でソティラの腰のナカを掻き混ぜるあるるらら。
その光景から目を離す事ができず、その魔脳から導き出される答えを削除しては導き出すを繰り返すシエナ。
段々取り繕った化けの皮が剝がれ始め、にゃんにゃん言い出したソティラ。
上空で起きている凄惨にして無惨な戦場の空気など、ここには存在しない。
平和、であった。
「――1つ、助言を溶かすのなら。……どちらに転ぼうと、どの結果になろうと。敵の目的はＥＤＥＮの陥落じゃない、ということくらいかな」
「そろそろやめ、にゃっ、んんぅっ！」
「お、大人の空間です……」
あるるらはにっこりと。
誰もいない、誰も見ていない中空へ向けて――美しく、笑った。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――今のは、魔力……か」

「はァ？　おいおい、なンで生きてンだよ尖り前髪。今のァA級魔法少女6人分の魔力だぞ？　どォやって防いだンだよ」

「ふん、A級魔法少女の魔力が一律であるとでも思っているのか？　……確かに多少の負傷はしたが、その程度に殺されてやれるほど私は弱くはない。魔力砲と言ったか。それに合わせて突進を行った【槍玄】も、残念ながら斬り伏せさせてもらった。話の合う者だとは思ったのだがな、少しばかり未熟だ」

「……ちッ」

A級魔法少女、カネミツ。

その実力は、ともすれば舐め腐ったと捉えられても仕方がないだろう発言の、その通りに。そのままに。

いつでも、S級に。

否、SS級にまで上がり得るものがある。

「ちょいと、やべェな、おい。なァよ、尖り前髪。私にァそンなに時間が残されてねェんだ、退いてくれると助かる」

「断る。そして、お前に時間がない事も知っている。魔物に堕ちた魔法少女達にも、な」

「へェ？　誰から聞いたンだ？　それとも、アンタァそれくらい頭が良いのか？」

「急ぎすぎたな。このような作戦を取り得るのであれば、もう少しゆっくりやるべきだった。じわりじわりとＥＤＥＮに手を伸ばし、最後の最後で盤面をひっくり返すような緩慢さが必要だった。だが、お前達は唐突に蜂起しただろう。――頭がお前であるのならば、そのような愚策は打たん」

「随分な信頼だなァ。だけど、いいのかよ。――後ろにいるぜ」

カネミツの後ろ。

その暗がりから現れたのは――ミサキ・縁。

俯いた顔からは表情を読み取る事ができない。ただ、ふらりと。

彼女は――。

「その程度の揺さぶりに私が隙を見せるとでも？　たかだかＡ級一人、たとえ敵に寝返っていたとしても、秒とかからず仕留めてやろう」

「おい、言い方が悪いぞ。それではまるで私が貴女に負けるようではないか。本来

の実力がどうだかわからぬのはお互い様だ、【飛斬】。私とてなろうと思えばＳ級になれる」

「……そういう形で張り合ってくるとは。貴様、以前より幼くなったな。梓やアールレイデの長女に囲まれて手緩くなったのではないか？」

「ふん、お前こそどうした。先の魔力に驚いて、【槍玄】を殺してしまったようだな。殺してはならないと何度も言ったはずだ。そうしてしまえば、復活するから、と」

「……それについては失念していた。こちらの非を認めよう」

彼女は、引っ張ってきたソレを投げる。

カネミツの横を通り抜けたソレは、梓の隣に転がった。

「おいおい。ポニテスリットお前、いつからそんな残虐な奴になっちまったンだ？」

「好意を寄せる相手に良く見てもらいたい、と思うのは、そんなにもおかしなことか？」

「ははァ、元から、ってことね」

転がったのは――7人の魔法少女。
目と口と手足を潰された、見るも無残な少女。
まだ、生きている――残酷な処置の施された少女だ。
「しかし、いいのかよ。こっちに寄越して。私が殺しちまうぜ」
「問題ない。その程度の弱さの者達が蘇ってきたとして、些事にもならない。お前が乗り移るかもしれないモノを内側に置いておくことより遥かにマシだ」
「……ようやく掴んだのか。【波動】、コイツはなんだ？」
「神の類だろうな。私達魔法少女の信仰する神とは違う、異教の神。梓の肉体に入り、その記憶を手にしたのだろうが、【即死】は梓のものだ。類するものを扱うようだが、彼女には劣る。自身をどこまで梓だと思っているのか、それとも別の自意識があるのかまではわからんが――何、殺しても問題は無いだろう」
「……おいおい、ひでェ事言うじゃねェかポニテスリット。私ァさっきのさっきまで、教室であの魔物を見てただろ？　仲睦まじくよ。そんな私を、殺しても問題無ェ、だァ？」
構えられるは、拳銃。

通路で苦しむ魔法少女達を撃っている暇はないのだろう。
カネミツとミサキに向けて、二丁の照準を合わせる。
「ンなこた言わねェでよ――仲良くしよォぜ、私達の仲間になってよォ」
「【飛斬】」
「【波動】」
銃弾が。
そして、世界を切り裂く斬撃と、世界を圧し退ける力がぶつかり合う――。
前に。
「あいよォ！　ちょいと待ちなすって、お三方――なんつってなァ！」
「【静弱】」
「【神速】――ほんっとうの馬鹿ですわね！　さては!!」
「でなければ、ここまではこれなかっただろうが――【喧槍】」
間に。
その集団が、割り込んできた。

38. 風呂無絵鰤湾図歩印途負不謬, 有阿有.

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

39・伏理苦得・

弾丸を止めたのは一本の剣。
飛ぶ斬撃を止めたのは半透明の盾。
他を押しのける力場を止めたのは、槍と剣。
「!?」
「ハッハー、よォ、久しぶりじゃねェか尖り前髪にポニテスリット！　んで――よォ、そっちの私！　初めましてだァな、よろしく頼むよ、私ァ梓・ライラックってのさ！」
隔離塔の通路に、突然人が増える。
対峙していた3人の間に入り込んだ集団は、なんともオカシナな者達。
「くッ――何をする、フェリカ！　まさかお前まで……！」
「ミサキさん、魔物の気配も辿れなくなってしまったんですの？　私達、梓さんが遠征から帰ってくるまでに少しでもあの方の負担を減らそうって、少しでも早く魔物に気付けるようになりましょう、って。あれだけ努力しましたのに」

「エ、そうなのか？　……そン時死んだりしてねェだろォな」
「それは言えませんの。言ったら梓さんが悲しむので」
「それ答えじゃねェか！」
作りの荒い右の義手と、左半身の火傷痕の目立つ少女――梓・ライラック。
流れるような金髪が暗い隔離塔の通路をも照らす、フェリカ・アールレイデ。
この場にいる3人にとっては名前も姿も知らないだろう青いバンダナのウィジと赤いスカーフのリジ。
「……止めるか、我が剣を」
「称賛に値する強さ。やはりヴァルメージャには驚かされるばかり」
「この、【波動】と言ったか？　く、ヴァルメージャは理解の出来ぬ御業を使うと知っていたが……見えぬ力とは」
一気に騒がしくなった場に、梓は「はァ」と溜息を吐いて――床に転がった7人を撃ち抜く。
苦しみの声も上げられずにいた魔法少女達が、たったそれだけで、死んだ。
梓は。

梓に、向き直る。
「なァよ、今なんで殺したンだ。生きてただろ」
「何言ってやがる。苦しんでただろ。ポニテスリットにやられたンだよ。ずっと苦しいままなんざ、可哀想だろ」
「だったら、死んだ方が良い、ってか？」
「馬鹿が。私ァてめェたァ違ェんだよ。私の方がみんなを想ってる。私の方が死に向き合ってる。ずっと苦しいってな、つれェんだよ。ずっと苦しいってな、怖いんだよ。苦痛が永遠に続くくらいなら――救いが欲しい。ったりめェだろォが。それを、自分が嫌だのなんだの言って我慢してもらう、なんざ――唾棄に値する。私に、殺してやれる手段があンだ。楽にしてやれる手段があンだよ。ちょっと休んでもらって――また、一緒に戦えるよォに。また一緒に、日常を過ごせるよォに。そのために、殺すんだ。だったら、死んだ方が良いに決まってんだろ、クソ野郎」
「ハハハ、言うじゃねェか。そォだな、その通りだと思うぜ。少なくとも私ァ迷宮に潜るまでァそっちだったからな。苦しんで欲しくねェし、痛がって欲しくねェ。ったりめェだよなァ、大切な人達に苦しんで欲しいなんて思うサイコ野郎ァ消えた

方が良い。――だがよ、苦しませねェ方法を取らなかったのァ、なんでだ。殺されるって、傷つけられるって。わかってて仕向けたンだろ？　なァ？」

片や笑い、片や顔を顰める、２人の梓・ライラック。

笑う方には剣が、顰める方には銃が。

自信にあふれた方は大きく手を広げ――何かを焦る方は、構えた銃を下ろさない。

「……偽物の癖に、生意気な」

「あァそォだろうよ！　お前にとっちゃ、私ァ偽物さ。いや、いいぜ！　そろそろ良いか。もういいか！　お嬢の告白も断っちまったンだ――もう、取り繕わなくていいか！　なァ、俺ァ梓・ライラックだが、梓・ライラックじゃねェんだわ。ごめんな、奪っちまって。お前の居場所だろォよ、ここは。梓・ライラック。だからよ、俺ァ――お前を否定しねェ。いいぜ、この世にいて。同姓同名なんざ珍しかねェだろ、今時。ハハ、ははは！　――俺が！　お・れ・が！　この俺が!!

お前の存在を認めてやる。世界ですら認めてねェんだろ、だが俺が認めてやる！

馬鹿が、世界なんぞに屈してンじゃねェよ。だから、死を前提に考えンな。目標さえ達成すりゃ死んでもいい、なんざ――死んでも考えんじゃねェよ、チビ」

「――!!」

銃弾が発射される。

二丁の銃口から、真っ直ぐに。

それを――梓は避けない。

代わりに叩き落すは【神速】の剣。

「今の、避けられたでしょう!?　なんで避けませんの!?」

「お嬢が守ってくれるって思ってたからよ。いいだろ、命令もしてねェんだ。お嬢が勝手に守ったってだけさ。だから、怒られる筋合いなんて無いね」

「このっ、貴女という人は……！」

発砲。今度は半透明な盾が。

発砲。今度は熟練の槍が。

梓に向かう弾丸を、許さない。

「……ンだよ、それ。結局私が仲間外れじゃねェか。認めてくれンだろ。私が本物だって。本物の梓・ライラックだって！　だったら――寄越せよ、私にも。仲間を寄越せよ！」

「あァよ勝手にもってけ馬鹿野郎！　はは、だがよ、てめェが無理矢理仲間にした奴ァ、どォして応援に駆け付けねェんだと思う？　その肉体を！　記憶を！　無理矢理に奪って無理矢理に仲間にした奴らァ――今、どこにいると思うよ」

「ッ」

後ろを向いても、いない。

梓の後ろには誰もいない。

ただ、梓の前には。

魔法少女が立ちはだかるばかり。

「改めて自己紹介と行こうぜ、梓・ライラック。俺ァ梓・ライラックってのさ。齢13にして魔法少女に覚醒しちまった、憐れな憐れなガキンチョだ。【即死】なんつー意味の分からねェ※救い※を与えられて、それを揮えねェ可哀想なガキさ。なァよ、梓・ライラック。お前は誰だよ」

「……私ァ、梓・ライラックだ。13歳の時に魔法少女になって、……けれど、仲間に、友達に恵まれて。――けどそれは、私の築き上げたモンじゃなくて。だから私ァ――取り戻すんだ。お前から。てめェから。私の大切な世界を、私の大切な仲

間を、友達を。アンタに奪われた全部を!!　そのために――死ね、死ね、死ね!!
お前だけは要らねェんだよ、私の世界に！　この世界に!!」
「あァさそれでこそだ!!　生きるために抗うってンなら――俺ァ、お前の相手をしよう。ハハハ！　お前が俺を名乗るのなら！　もっと笑えよ！　死地だぞ！　命のやり取りだ！　てめェが生きるために、てめェの死力を尽くさなきゃなんねェ場だ！　なァアズサ！　お前は、俺の敵だ！」
笑う。嗤う。哂う。ケタケタと、あぁ高らかに笑う。
梓・ライラックは手を広げて――世界に宣言する。
「――糸伊豆阿止理負不伏零矢堕千経度戸地内途（それは夜に捧げる祈りの物語）」
「夜――？」
その時、誰もが上を見た。
上空を見たのだ。
日の落ちた空を。――隔離塔の通路であるはずの、そこを。その空を。誰もが見た。
月の光が、大きなドラゴンの形によって遮られる。

「――藍永封無滅琉（私は終わりを肯定する）」

「いい加減になさい！　これでも浴びて――全員、頭を冷やせ――!!」

雨が降る。

黒い雨が。

隔離塔に使われていた、数多の反魔鉱石を用いた――黒い雨が降る。

その雨は、ＥＤＥＮ全土に注がれた。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

反魔鉱石の雨。

それは本来あり得ないことだ。あり得てはならないから、殺しにかかった、とも取れるのだろう。【鉱水】。反魔鉱石を唯一扱い得る魔法。その使い手を。

しかし、何の因果か彼女は死なず。

何の因果か彼女を連れてきて、結果的にすべてを解決した。

「……修練塔に引き続き、隔離塔までもが消えるとは。再建費はいくらになるのや

ら」

「ですが、雨及びそれによって起きた小規模の洪水により、ＥＤＥＮ内部の魔物の全ての消滅を確認できました。ただでさえ反魔鉱石に弱い魔法少女の肉体に、外部の影響を受けやすい精神体。両者がいびつな形で組み合わさった今回の魔物には、随分と強力な衝撃であったようで――全てが、簡単に死んでくださいましたね」

「……ディミトラに借りを作るような真似はしたくなかったのだが、その功績は讃えられるべきだろうな」

軍事塔。未だに戦闘痕の残るそこで、静かな会話を交わすのは２人。

コーネリアス・ローグンと、キリバチだ。

「使う機会に恵まれなかったのは、幸運だろうか」

「幸運でしょう。そも、今回の敵の目的は地下牢にあった封印措置を受けた魔法少女でした。それを使っていたら、あるいはそれらを奪われていたやもしれません」

「そう、だな。お前がこれをくすねてきた時は驚いたものだが」

「私とあるるら様が初めに目撃したホートン種。あれなる者が向かっていたのが隔離塔だったため、万一を考えて、です。保管及び返却はキリバチ様にお任せいた

します。厳罰は降級どころでは済まされ無さそうなので、適当な理由をつけてくださると嬉しく思います」

ソレ。

それだ。

今しがたキリバチが亜空間ポケットにしまった、小さな小さな鍵。

封印措置を受けた魔法少女のいる場所に繋がる扉――それを開くための鍵。

当然厳重に保管されたそれを盗んだ、などと。

「よーォ、元気か鬼教官。【劇毒】くらってくたばりそォだったって聞いたんだが」

「ノックくらいしろ。……久方ぶり、になるのか。ライラック」

「おォさ。んで、元気そォで何よりだ。で、ほらよ」

「む？」

ほらよ、と。

空気を一切読まない梓・ライラックが促し、部屋に入れたのは――これでもかという程に落ち込んだ顔の、コーネリアス・リヴィル。

「……おら、何やってンだよ。さっさと謝ってスッキリしちまいな」

「煩いお前に言われる筋合いはない」
「あンだろォが。馬鹿が、俺の前で自殺なんかしよォとしやがって。死なせるかよなんのために助けたと思ってやがる。つか死ねねェってなお前らが一番知ってンだろォが」
「ライラック。お前、更に口調が粗悪になったな」
「今までァ世間体を気にして猫被ってたのさ。俺ァ元からこォでね、はは、意識しなくていいってな楽で仕方がねェ。んじゃ俺ァ行くからよ、その馬鹿の気ィ晴らしてやってくれ。なんぞ、今回の事ァみんな覚えてるらしィんだよ。意識は無かったらしィんだが、それこそ脳に刻まれちまったンだろォな。だからよ、自分のしたことじゃなくても、鬼教官に【劇毒】をのわ」
「梓さん、喋りすぎですわ。後は当人たちに任せましょう。他にも沢山、自らを責めている方々がいるのです。全て救うのでしょう？」
「おォそォだった。んじゃーな、鬼教官、冷静メイド、怒りしょんぼり！」
フェリカ・アールレイデに首根を掴まれ引き摺られていく梓・ライラック。
最後の最後にまたヘンなあだ名をつけて、大きく手を振って、楽しそうに、元気

そうに消えて行った彼女に、くすくすと笑うのはローグンだけ。
　顔を顰めるリヴィルと呆れたような溜息を吐くキリバチが――向き直る。
「……キリバチ様」
「なんだ」
「……どのような罰でも受け」
「なら、とっとと切り替えて通常通りのお前になれ。ライラックではないがな、もう終わった事をネチネチと掘り返されるのは好かん。魔物に乗っ取られてそんなことも忘れてしまったか」
「いえ――そうでした。私は、コーネリアス・リヴィル。キリバチ様とエミリー様に仕えるモノなれば、不要な感情に振り回され、自ら壊れる事など以ての外」
「姉さん、気分は如何でしょうか。私は梓様とそれなりの仲を深め、信頼され、今回の事態解決にも貢献いたしました。無様に負けて乗っ取られてキリバチ様を害した姉さん、今どのような気持ちですか？」
「ローグン、お前……」
「提案なのですが、歳は同じなのですから、そろそろ姉妹逆転いたしませんか？

姉の方が有能である方が世間体もいいでしょう？」

「……いいだろう。少しな、別の方向に手を出したのだ。【劇毒】によって作り上げたポーションに、媚薬と名付けた試作品がいくつかある。お前にそれを浴びせ、エデンの前にでも放置してやろう。作り上げた完璧なるメイドとしての化けの皮を剥がし、あり得ない程の醜態を晒させてやる」

「おや、良いのですか？　今はキリバチ様の御前――【劇毒】の個人的な理由による使用は控えると、キリバチ様の前で宣言していたように思うのですが……」

「っ……」

キリバチは、ふむ、と。

一つ頷く。

結局死にきれなかった――【劇毒】に浸されて尚死ぬ事ができず、どうせだからと死なずに病人扱いで軍事塔のベッドにいるキリバチは、ふむ、と。

「面白いから続けろ」

「キリバチ様!?」

「そして、媚薬と言ったか。それも面白そうだな。あとで一瓶寄越せ。少しばかり

ライラックを困らせてみたい」
「い、いえキリバチ様、それは倫理というものに反していてですね」
「おお酷い。そんなものを実の妹に使おうとしていたのですか？　なんて嫌な姉でしょう。妹になりませんか？」
「フン！　たとえどんなことがあろうと、お前の妹になるのだけは御免だ！」
「矮小な矜持ですねぇ。キリバチ様、どうぞ面白……厳罰を」
「わかった」
キリバチは、言う。
「2人とも今回の昇級試験を受けてこい。そして、異例のB級からSS級までの飛び級を成し遂げろ。できなければその媚薬を浴びせ、個室に閉じ込めてやろう。そうすれば姉妹仲もよくなるだろう？」
「――！」
言った。
言って笑った。
ここに今、熾烈な試練が始まる――。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「～♪」

「楽しそうですわね、梓さん。それ、なんという曲ですの？」

「ん―？　ま、お嬢ァ知らねェ曲だよ。知ってンのァ俺だけなんじゃねェかな」

「つまり、梓さんの作曲ですの？」

「違ェなァ。はは、お嬢にァ一生わからねェよ」

「……むむ。なんだか以前より増して意地悪になったような……」

マッドチビ先生による反魔鉱石の雨によって、事態は一気に解決した。

魔法少女の身体に入ってた化け物の精神体は反魔鉱石に耐えられずに抜けて、多分消滅。

俺にとっちゃあンまし好ましくねェんだけど、精神体の抜け出た魔法少女達も死んじまったらしい。反魔鉱石ってなそンだけ魔法少女の力を削ぐんだと。それで、無理して身体使ってたっつか使われてた魔法少女達は、その反動だとかなんとかで

死んじまった、と。

……俺ァ、誰も死なせねェって手段を取りたかった。けど、マッドチビ先生ァ違う。とっとと全部片づけて、早いとこ直談判してェってな思いしかなかったわけさ。

だから、こんなに死んじまった。

つってもまァマッドチビ先生からしてもそこまで死ぬってな予想外だったらしいんだが、死に変わりは無ェ。出来得るなら全員に謝って回りてェんだが、それァ止められた。

なんで、って。

「ひ……」

「行こ、早く行こっ」

俺の顔見て、化け物でも見るかのよォに逃げてく少女達。

「……」

「梓さん……」

まァ、こーいうこったな。

あっちの俺がさ、殺して回ったンだと。で、あっちの俺に殺された奴ァあっちの

俺の仲間……つまり化け物の精神体の入った魔法少女、ってのになってたンだと。どォいう原理なのかァ知らねェが、そーなってて。

んでさっきも鬼教官殿に言った通り――記憶があるらしィんだわ。

やってる最中ァ意識ってな無かったんだと。あっちの俺に殺されて、気付いたら蘇生槽にいて。

そンで――溢れ出てくる、自身がＥＤＥＮを裏切った記憶。痛みも無視して突撃して、必死の顔の友達や仲間に殺されかけて。復活するからって殺されないで――降り立つあっちの俺に、殺されて。

だってンで、まァトラウマさな。俺の顔がチラついて仕方ねェんだと。はは、顔面に火傷負ってもわかるなンて、良い目をしてる。火傷の傷を怖がるンじゃなくて、俺自体を怖がるってのも良い。そいつァ、他人を外見で判断しないいい奴らの証拠だ。

「いいのさ、傷ってな癒えるから傷って言うんだ。こればっかりァ死んでも治らねェだろ？　いいじゃねェか、それが生きてる証さ」

「……私は、貴女の事、好いていますから。それだけは忘れないでくださいまし」

「まーだ言ってンのかよ。ごめんなっつったろ。お断りだよがきんちょ」
「ふん、知りませんの。貴女が私を好いていないことと、私が貴女を好いていることは何も関係ありませんので」
「身勝手だねェ、そぉいうのァ好きだぜ俺ァ」
「ホントですの？」
「あァそーいう意味の好きじゃねェよバーカ」
そんでもって、あっちの俺……まァ面倒だからアズサって呼ぶけどよ。
アイツの行方は分かってねェ。いきなりな、消えたんだ。
多分、透明になった。仮称【隠蔽】……散々苦しめられた魔法さ。
反魔鉱石の雨が降り終わった後、捕まえねェとな、ってそっち向いたらさ、いなかった。目ェ離すべきじゃなかったよ。そればっかりァマジで馬鹿だった。
けどこれで、ルルゥ・ガルとアズサが繋がってンのもわかった。多分だけどあっちのマッドチビも仲間なンだろう。尖り前髪の話とマッドチビ先生の見解からして、あの義手ってな魔力を回復する類のモンじゃなく――魔法少女の精神を閉じ込めておく檻、だとか。

胸糞悪い話なンだがな。その回復機構ってな、魔法少女の精神体の入った義手型のガーゴイルなんだと。だからアズサが魔力を使いきったら――そのガーゴイルから魔力を搾り出して、自身に還元する。ついでに魔力砲ってなビームも出せると。やっぱりあいつァ俺とは違う。

けど、なんか……泣きそォだったのがな。ちょいとなァ。

俺おじさんだからよ、13年間付き合った自分たァ言え、見た目少女な子がしょんぼりしてたら気になっちまうよ。

ふと、シトラスハーブの香りがした。

「ん、なンだお嬢。まだソレ吸いきってなかったのか」

「……あの戦場でも吸いましたけれど、これ、頭の中をスッキリさせてくれるんですの。色々もやもやしたり、ちょっとキレそうになったり、鬱憤をぶつけたくなった時は吸う事にしていますの」

「ちょっとキレそうになったり、ってな、お嬢様の使うべき言葉じゃねェなァ。あ？　つか、今そォなのか？」

「はあ？　今私の告白を適当にあしらっておいて、怒っていないとでも？　私、割

合短気な方ですのよ？　貴女が取り繕わないというのなら、私ももう取り繕いませんの。素のままの私を貴女にぶつけて――強制的に好きになってもらいますわ。もう私しか見られないと、何事にも目が向かないと。そうなるまで一生ぶつかり続けますのよ」

「……あァよ、んじゃ一生あしらい続けるわ」

なんかさ、おじさんちょっと怖いよ。

今回の一件を終えてから、お嬢がちょっとグレちゃったっていうか。お淑やかで誰にでも優しい金髪お嬢様、ってなどこにもいなくて、俺の一挙手一投足にイチイチ切れて、事あるごとに告白してくる……なんかオラオラ系になってしまった。

思春期だねェ、と思う反面、おじさんオラオラ系女子は苦手なんだよな、とか思ったり。いや嫌いっていうか、対処の仕方がわからねェんで苦手っていうか。

「お嬢」

「なんですの」

「俺ァよ、隠し事があんのさ。誰にも話せねェ、話した事のねェ秘密。乙女の秘密って奴がな」

「聞きましたの、それ」
「まァ聞いてくれよ。……でもさ、別に大した事じゃないんだ。ぜってー隠さなきゃいけねェってことでもねェ。ただ、俺が話すのが怖ェからさ。だから隠してる。……フェリカ・アールレイデ。アンタ、俺を信頼させる事ァできるか？　俺が――話すのこえーってさ。思わないよォに、そォいう……強くて、かっけェ奴にさ」
……何言ってんだ俺。
キモくね？　なんだこの、「俺を惚れさせたいなら相応の人間になってみろ」みたいな奴。
うわキッショ。何様だよ。
「なれませんわ」
「そォかい」
「私は私ですもの。私はフェリカ・アールレイデ。貴女の理想の女性ではありませんのよ」
「……そォだな」

「だから、なりません。ならずにそう思わせて見せます。私は貴女を振り向かせたいとは思っていませんわ。つい先日まではそう思っていましたけれど――もう、そう思うのはやめましたの」

金髪お嬢様が立ち上がるのを感じた。

座ってたのさえ気が付かなかった。けど立ち上がって、歩いてきて。

俺の背に、抱き着いて。

「私の光を受けて、私の強さを感じて。貴女が勝手に振り向きますの。今は前しか見ていない、前に進んで、後に続く者を導くために走り続ける貴女が――いつか、私を見るためだけに振り向きますのよ」

抱き着いて。

抱きしめて。

抱き寄せて。

「だから、一生ついていきますの。もう――独りには、させませんわ」

そう言って。

「……あァよ。頼む。俺ァちょいと、行き当たりばったりで、向こう見ずらしィん

でな。変なトコ進んでいきそぉだったら、首根っこ引っ掴んで止めてくれや」
「ええ、必ず」
まぁ、なんだろぉね。
こんなところが。
ここまでが。そしてこれからが。
とりあえずの、俺達の、はじまりはじまりぃ、ってコトで。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

第一章完
一日だけお休みをします。その後通常通りの更新になります。
今までの登場人物紹介
名前　あだ名　【魔法】　等級
学園組Ａクラス　Ａ班　アール　レイデ様

フェリカ・アールレイデ　金髪お嬢様　【神速】　SS
シェーリース　背中メッシュ　【神鳴】　S
ユノン　太腿忍者　【光線】　A
ミサキ・縁　ポニテスリット　【波動】　A
梓・ライラック　口悪ちび　【即死】　A
学園組Aクラス
カギネ　【深挟】　B
瀬尾アルカ　【音破】　A
クイネ　【鉄爪】　A
ティア
遠征組突撃班ヴェネット隊
ヴェネット　班長　【凍融】　SS
ルナ・ウィーマーン　ねぼすけ　【氷壊】　S
あるるらら　キラキラツインテ　【透過】　A
ザイフォン・英　ブラックホール　【吸呑】　A

カネミツ　尖り前髪　【飛斬】　A
遠征組調査班オーレイア隊
オーレイア　銀バングル　【白亜】　S
残府知子　光眼鏡　【排析】　B
結・グランセ　虹色ロング　【弱化】　D
ケトゥアン　過激無口　【槍玄】　A
フィニキア・各務　委員長　【引力】　A
遠征組観測班アルカナ隊
L・アルカナ　ふわふわ鼠　【作為】　D
防衛組防衛班エミリー隊
エミリー　暴走繭　【壊糸】　S
コーネリアス・ローグン　冷静メイド　【侵食】　B
コーネリアス・リヴィル　怒りしょんぼり　【劇毒】　B
防衛組防衛班キリバチ隊
キリバチ　鬼教官　【痛烈】　A

防衛組防衛班ジュニラ隊
ジュニラ　指揮官　【自爆】　S
防衛組攻撃班イドラ隊
エルバハ・イドラ　【青陽】　SS
防衛組攻撃班マルハーバン隊
マルハーバン　【断裂】　S
特例組潜入班ネイビー隊
ネイビー・ブルー　【寄生】　SS
特例組遊撃班ライラック隊
梓・ライラック　アズサ　【即死？】　A？
安藤アニマ　安藤さん　【業焔】　S
コーネリアス・ローグン　冷静メイド　【侵食】　฿
死得無　シエナ　$
その他
ディミトラ　マッドチビ先生　【鉱水】　S

ディミトラ　マッドチビ　【鉱水？】　S？
ウィジ　青バンダナ　【喧槍】　A（暫定）
リジ　赤スカーフ　【静弱】　A（暫定）
ルルゥ・ガル　ちびっこ　??　??

40・畏怖有生其・

「よォ安藤さん。何やってンだよ」
「何ってアンタ、店終いに決まってんだろ？　というか、結界貼ってるんだからノコノコ入ってくんじゃないよ。もう全部わかってんだろ、今回の騒動の色々にアタシがガッツリ絡んでるってことくらい」
「あァよ。俺の腕斬り落としたのがそォいう目的だったってトコまで知ってるよ」
「なら、何用だい？　言っとくけどもう銃器の整備はしてやんないよ。敵の武器揃えてやるほどアタシは甘ちゃんじゃないのさ」
「はっは、俺だって敵に相棒の世話任せる気ァ無ェよ。今回はただ、挨拶に来たのさ」
「挨拶？」
安藤武器工具店。
短い間だったが、超絶世話になった。俺を理解し、興味を示し、戦う手段を与えてくれた。

感謝しかねェのさ。

「そっちの俺ァさ、なんぞ寂しがりっぽいんだわ。んで、今までの俺と安藤さんの記憶も持ってると思う。だから、よろしくな。俺ァ小せェ女の子を泣かせてェって思うよーな鬼畜野郎じゃないんでね。安藤さんァ、別人扱いしないでやってくれ」

「……前々から思ってたことだけど」

「ン？」

「アンタ、ウチのダンナにちょっと似てるよ。子供の相手するのが苦手で、だけど見捨てられなくて。それで、軍人なんかになって――簡単に死んじまった」

「ヘェ。ンな立派な奴に似てるなんて言われるとァ思ってなかったや」

「誰を守って死んだのか、わかるかい？」

「魔法少女だろ、どうせ」

「そうだ。……死んでも復活する、蘇生する魔法少女を魔物から守って、旦那はあっけなく死んじまった。似てるんだよ。アンタと、アイツ。生き返るからって、治るからって、傷付く子供は放っておけないんだ、なんて言ってた。……アンタは魔法少女だから、全然違う話か。忘れてくれ」

「いんやさ、聞けて良かったよ。国にそォいう奴がいたって知れたのはでけェし、何より安藤さんァそォいう奴を好きになったンだろ？　それだけで十分さ」

当然だけど、国の軍人は一回こっきりの命だ。

だから基本は哨戒のみで、魔物の相手は魔法少女がする。それが当然。

それをさ、大したコトもできねェくせに、死んでも生き返る魔法少女のために、その命を張って散っていった、なんて英雄がいた、なんて。

知らなかったよ。教えてくれてありがとう。

それはさ。結構、俺の指針にもなる。

魔法少女ァともかく、この世界ってな、ちゃんと命を尊んでいるんだって。

「安藤さん」

「なんだい」

「ありがとう。多分もう、ＥＤＥＮからいなくなっちまうんだろォけど。次会った時ァ、敵なンだろォけどさ。俺、すげェ助かったんだよ。お嬢ァいたがよ、クラスメイトァいたがよ。こう、大人ってのが少なくてさ。大人で、俺の理念を理解してくれてさ。……寄り添ってくれる、ってな。心強かった。心の支えになってたよ」

「……ふん。言っておくけどね、アタシは元からアンタと敵対する未来が見えてた。ここまで早まったのは予想外だけど、アンタが【即死】に覚醒した時点で――アンタとは敵対するだろうって思ってたのさ。だけどね」

安藤さんは、胸を張って。

「武器の手入れに関しちゃ、一度も手を抜いたことは無い。アンタは敵だ。多分最初から敵だった。けど――客だったよ。紛う方なき客だった。アタシは店主で、アンタが客で。その信頼関係だけは崩れない。信念を以て、心を込めて、アンタの注文に対応した。それだけは疑うんじゃないよ」

「最初から疑ってなんていねェって。言ったろ、文句言いに来たンじゃねェんだ、挨拶しに来たんだよ。ありがとう、さようなら、ってな。疑いようのねェ完璧な仕事ぶりだった。アンタに作って貰った煎茶ァまだ飲んでないんでな、じっくり調べて、自分で作れるよォになってみる。……あー、つまり、何が言いたいかってとだな」

頭を掻く。

いやァ、こうも意気揚々と出てきたけど、実ァ苦手なンだよな、お別れって。

別に互いが死ぬわけじゃねェんだ、元気でな、でいいんだけど……なんか、言いたい事が支離滅裂にわんさか出てきちまう。もっと言いたい事、語り合いたいことがいっぱいあンだけど、多分安藤さんも時間無ェんだろォから簡潔にいわねェとなのに。

感謝が、ぼろぼろ出てくるんだ。

「――バカだねえ、アンタ」

「そォかい？」

「あぁ。そんな顔するんじゃないよ。上げる気の無かった餞別をやりたくなっちまったじゃないか」

「ン？　逆だろ、ＥＤＥＮから去るのァ安藤さんなんだから、餞別ってンなら俺から」

「良いから受け取りな！　――アンタなんかから貰うモンは何にもないよ。もう十分だ」

「おわ」

何かが投げられる。

それをキャッチした。
それは……アレ、こないだのに似てるワッペンだ。
そォいやアレ失くしちゃったンだよな。
漂流した時にァ無かった。
「これァ、なんだ？」
「私の師匠ですら辿り着けなかった領域。その試作品さ」
「へェ」
「その魔道具は、名をレーテーという。ま、謂わば疑似亜空間ポケットさ」
「エ。すげェじゃねェか！」
普通にやばくねェかそれァ。
俺の魔力量問題を解決する代物だ。そン中に魔煙草とかフリューリ草しこたま詰め込んどけば身軽にもなれる。
「叫ぶんじゃないよ、子供かいアンタは。……子供か」
「おォさ、まだ13歳だぜ。はは、見えねぇだろォが」
「見た目はまんまだよ。……いいかい、それはあくまで試作品だ。本物の亜空間ポ

ケットとは違う――明確な欠点がある」
「欠点？」
「そう。それは装備品でしかない。だから、その亜空間ポケットの内容物は誰にでも取り出せちまう。個人専用のポケットじゃないんだ。その紋章を持つものであれば――誰でもその亜空間に接続できる。だから、ホントに大事なものは入れるんじゃないよ」
「あァよ。それでもすげェよ」
いいのかホントに。
敵に塩を送るってレベルじゃねェけど。
「……さ、もう用は無いだろ。とっとと帰んな」
「あァよ。だが、もう一つだけ。いいか？」
「なんだい全く。歯切れの悪いのは嫌われるよ！」
「はは、すまねェな、全く。これァ性分でよ」
向き直り、背筋を伸ばして――パン、と手を叩く。叩いて合わせる。
目を瞑り。

「武麗栖覇天歩等利意（一時でいい、彼女に祝福を）」
それは祈りではなく、頼み。
お願いします、と。
「……非善（敵）だろう。いいのかい、そんなことをして」
「いいのさ。俺ァどォにも気に入られてるっぽいんでな。これくらいの我儘は許してくれるだろォよ」
「んじゃ、ありがたく受け取っておくよ」
その時、大きく風が吹いた。
高空にあるＥＤＥＮは元々風が強い方だけど、それでも一際大きく吹いた風は——水彩絵の具を水で流すみてェに、安藤武器工具店を溶かしていく。
「——達者でね、梓。いつかアンタの心に平穏が訪れる事を願ってる」
「あァ！　じゃあな、安藤さん！　世話になった——また会えることを願ってる!!」
「馬鹿だね——その時は敵なんだ、会わない方が——」
「それでも！　再会を——心から願ってる!!」

言葉に。思いに。
それを乗せて。
安藤さんも、工具店も。
まるで夢幻だったかみてェに――ＥＤＥＮから消え去った。
「……ありがとな、安藤さグエ!?」
「いました！　いましたの!!　梓さん発見ですのよー!!」
「今の感覚は、結界……それに、この場所は」
「梓、貴女は御身が重要であるということをわかっていないのか？」
「理解不能」
「まぁ、コイツは元からこんな奴だ。一々理解しようと思わない方が良いぞ」
「先行きが不安ですね！」
「まるで、進歩していない」
「皆さん待ってください！　今そこに巨大な魔力反応が、あれ？」
感傷に浸る時間も与えてくれやしない。
恐らく直前まで【神速】を用いていたんだろォ抱き着きァ普通に痛ェし、その後

に続々来るわ来るわの騒がしい奴ら。
ありがてェけどよ、おじさんもちっとくらい別れにハードボイルドってなを感じてェ時があるとわかってくれァしねーかな。
あァしてくれなそーな目。怒ってますって顔に書いてあらァ。
「唐突に梓さんの魔力が辿れなくなったとシエナさんが騒ぎ始めて……本当にびっくりしましたし、怖かったんですのよ！　わかってますの!?」
「わーったわーった揺らすなお嬢。んで冷静メイドァなんでここにいやがる。鬼教官とこ戻ったンじゃなかったのか」
「まだ在園中ですので」
「そォかい」
アインハージャ、もといヴァルメージャの2人と、シエナ。プラス冷静メイド。
それら全員がAクラスに編入してきて、それら全員が俺の事追っかけ回してる、と。
いやァ、おじさん小さい子達に囲まれてデレデレしちゃ……わねェなァ。
監視塔の上でパフェだのトロピカルジュースだの飲んでる時間が欲しいよ、ほん

と。いんやさ、強くならなきゃって思いァあるからンなサボりァもうしねェんだけどさ。

「あー、とりあえず市場もちけェし、青バンダナと赤スカーフの生活用品買うついでに屋台巡りでもしねェか？」

「あ、賛成です！　今回の騒動で苦無も手裏剣も使い切ってしまっていたみたいなので補充したいですし！」

「新しい枕、欲しい」

「いや、付き合ってもらわずとも自分達で……」

「ウィジ。こういう時はありがとう、と言った方が気を遣わせない」

「そ、そうなのか。わかった。ありがとう」

「今日こそパルリ・ミラ本店を探しますのよ!!」

「……本店の場所を知っている、という事は言わない方が良さそうですね」

「知ってンなら教えてくれよ冷静メイド!!　飢えてんだよ俺ァ！」

「お前が食いつくのか」

いやはや。

でもまァ、騒がしいのァ嫌いじゃねェさ、それァホントにな。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

んで、だ。

帰ってきて早々ではあるンだが――昇格試験、ってのがあるらしい。

いなくなってた間のことだの、マッドチビ先生やアインハージャのことだのも事細かに聞かれたけど、正直言って俺にわかることなンざ小指の先程もねェんで、結構早めに解放された。ま、明確な被害者だしな。

となれば学業に戻んのが学園生の筋ってンで、久方ぶりの授業を受けつつ、昇格試験に向けて色んな事を学んでる最中ってなわけだ。

青バンダナと赤スカーファ実技に関しちゃ問題ないが、座学ァてんでダメ。なんで猛勉強の真っ最中。感覚で理解してるらしい青バンダナと違って赤スカーファ優秀だ。地頭が良いンだろォな。いやまァ青バンダナの地頭が悪ィと言ってるワケじゃ……言ってるか。

まァそンだけの理解で覚醒の瞬間からこンだけ戦えてンだから、やっぱすげェんだろォな。魔力の効率化も一瞬で覚えたし。

「次に小型でありながら高位とされる魔物についてだ。この魔物は大きくわけて2種類に分類される。梓・ライラック。何か別の事を考えていたようだが、何と何かわかるか？」

「教本に書かれてンのァ、小型である内から進化を繰り返して高位になった化け物……所謂ディケントってな呼称のされる奴らと、でけェ化け物だったが力の圧縮や環境の変化に合わせて小型化したイオルーの2種スね」

「正解だ。ならば、教本に書かれていない3つ目の種類はなんだ、ライラック」

「オリジン。初めからその姿だった、既存の生態系に一切関与しない化け物スわ。EDENを襲ったベルウェークや迷宮にいるアンゲル、アンヴァル。後ァ神さんらも一応化け物扱いだったかね？」

「上出来だ。そう、魔物にはこの3種がいる。滅多なことでは遭遇しないため教本には載っていないが今回のような事例が今後ないとも限らない。……では、ティア。このオリジンという魔物に遭遇した時、どのような対処を取るべきだと思う？

」

「えっと……」

なんぞか、俺達が来る前にあったホートン種騒ぎ、ってなで大変だったらしいコ。

話しかけたことァ無いが、ゆるふわにゃんこって呼んでる。なんでって、髪の毛がふわっとしてて、なんでか知らんが猫の耳みてェのがあるから。

本物の耳かどォかは知らん。多分違う。

「とりあえず魔法撃って様子見……とか？」

「もしそれをして、オリジンがお前に興味を持ったらどうする？」

「た、多分一瞬でやられちゃうけど、応戦して……勝てたらやったー、みたいな……う、違いそう」

「そう。違う。何故違うのか言える者はいるか？」

「オリジンは精神体を追うことができる可能性がある――故に、蘇生槽に戻った場合、ＥＤＥＮにまで追ってくる可能性がある、ですのね」

「正解だ、アールレイデ」

今回やりあったベルウェーク含め、この世界にゃ神さんってのがいる。滅多に見

られないっつーか生態も何にもわかってねぇんで半ば眉唾っつかいねぇんじゃねぇかって思ってる奴のが大半なンだが、いる。で、神さんも化け物の一種であり、オリジンって分類で括られてる。

正直俺の【即死】にディケントもイオルーもオリジンも関係ないんで普段ァあんまり気にしねぇんだが、まァ座学だしな。知識として知っておかなきゃなんねぇこた頭に詰め込まなきゃいけねぇ。

んで、今お嬢の言った通り、神さんだのなんだののオリジンって化け物ァ、魔法少女が死んで、蘇生槽に戻る、ってプロセスに起きる精神体が経路通っていく様が見えるんだと。基本オリジンってなぞぉいう些細な事気にしねぇからあんまし見られても問題ないんだが、万一がある。

今回ァルルゥ・ガルのせいにしても、オリジンがＥＤＥＮに侵攻してくる様ァみんな見ただろぉしな。いやまァ直接見たっつーか、記憶に残ってるっつーか。まァどうでもいいんだが。

だから、なンだ。

その恐怖ァ——ちゃんと刻まれているって話。

「いいか、オリジンだろう魔物を見つけても、決して攻撃をするな。見つかる事すら危ないだろう。我々魔法少女は国を守るためにいる。その我々が敵を呼び寄せるなどあってはならないことだ。わかったな？」

「はーい」

素直な返事なこって。

ちなみにオリジンを見つけても攻撃しちゃいけねェ理由はもう一個ある。

それァベルウェークの時みてェに、ちゃんとした倒し方じゃねェと倒せねェ、とかいうずりィ奴らがいるからだ。

お嬢の話だと、お嬢は百回以上ァベルウェークを切り刻んだらしい。けど倒せなかった。それ以前にも班長や【青陽】なンかが出張ってきて倒したってのに、死ななかった。溶かしても燃やし尽くしても死ななかった。いや、死んだけど復活した、か。

そン時に、あの光り輝く多面体みてェなのァ出て来なかったンだと。

ただ細切れに、塵芥に、ドロドロになって――結局復活したンだと。

必要なンだ、条件ってなを満たさねェと倒せねェ。

ベルウェークの場合は、アインハージャの……ヴァルメージャの攻撃によって弱体化し、死ぬことで、ようやくそのコアってなを露出させた。青バンダナと赤スカーフが攻撃してなかったらアレァ露出してなかっただろォし、俺の【即死】であっても殺せてなかったンだろう。

だから、下調べの済んでねェ内は絶対手を出しちゃならねェ、ってのがお約束なワケさ。向かってきた場合を除いて、だが。

「では、四限目はこれで終わりとする。……ライラック。後で話がある。教員室まで来い」

「えェー」

「また午後の森にでも行くか？」

「私用での職権乱用ァ上に言い付けますぜ？」

「私用ではない。だから来い」

「へい」

なーんだろね。

俺ァ先公に呼ばれるよォな事、した覚えァ……まァたっくさんあンだが。

なんだろねェ。あとお嬢、付いていきますわ、じゃねェんだわ。ダメだろ、軍事塔ァ流石に。

「で、なんですかい。まるで面談みてェな雰囲気だが、俺ァなんかやらかしましたかね？」
「お前の昇級試験についてだ。何を咎める、という話ではない」
「あァさ。なんぞ、特別仕様にでも？」
「そうだ。本来昇級試験とは個人で挑み、それを遠方から監視する試験官が評価するもの、だが……お前のには他の者達とは別の試験が課されることになった」
「なんでまた俺だけなンですかね」
「推薦状でA級に上がったが故、だろうな。お前は最初の振り分けでC級認定された後、一度も昇級試験を受けていない。普通であればB級、A級へと上がるために試験の経験を積み、ようやくS級という壁に挑むのだが、お前はそれをしないままにS級へ挑むことになる」

「まァ、確かに」
「それは可哀想だと、上から試験内容の緩和が図られた」
「……へェ？」
上。上ねェ。
どォにも俺と反りの合わなそォなお上さんが、試験内容の緩和、だって？
ひゃあ、何されるかわかんねェな。こえーこえー。
正直クルメーナに送り出されたのだって、なんなら班長達と遠征に出されたのだって、お上からの指示だ。その行く先々にルルゥ・ガルの手が入ってたって考えりゃ、お上ってなが繋がってンじゃねェかって思っちまう。ホートン種だったか、ンなもんがＥＤＥＮに入り込めたのもさ、そいつが手引きしたンじゃねェかって思っちまうよな。
この昇級試験でも——似たよォなことしてくンじゃねェの？　ってさ。
「ライラック。お前はシエナと組み、昇級試験を受けてもらう」
「ほォ？　なるほど、シエナァガーゴイルで、魔法少女じゃねェ。既存の試験方法じゃ測れねェから、もう一方の厄介なのとくっつけちまうのもアリだな——とか、

そんなトコすか？」
「そんなに適当ではないだろうが、概ねそんなところだと私も睨んでいる」
「はン、先公も大概良い性格してるよな」
「私は盲目的ではない、というだけだ」
……あン？
その言い方ァ、なンかあンな？
俺だけじゃねェ、先公もお上を疑う理由ってなが、なんかある。
「試験内容については当日現地での説明が規則故にここでは何も言わないが……私はこれを緩和だとは思えない、ということだけは言っておく」
「ありがてェすね、そりゃ。心配してくれてるワケか」
「当然だろう。自身の大切な生徒が、上だのなんだのの陰謀に巻き込まれるなど……腸が煮えくり返る思いなんだ。先の遠征２つ然り、此度の処置然り。私には明かされない何かによって、お前や他の生徒達が危険な目に遭い、苦しみを受けることになる、など。……いや、余計な事を言った。忘れろ、ライラック」
「そォ考えるンだったら罰則を死にすンのァやめてくれねェかな」

「それとこれとは話が別だ」
「そぉすか」
なんか、ちょっと意外だったかもしれない。
エデンってな、学年ってのが無い。何期生とかもない。ただ在学期間によって先輩後輩が決まったりァするものの、明確に一年生とか三年生とかってのがない。だから、先公ァ何十年も似たよぉな授業を、入れ替わり続ける生徒に対してやってるだけ、ってな印象だった。
生徒一人一人に向ける愛情とか、〝自身の大切な生徒〟みてぇな認識を持っててくれてるたァ思わなかったンだ。この人担任なだけで特別授業だのァ全く受け持たないしな。
……いいね、そりゃいい。
大切にされてるってな、良い事だ。
「一つ、いいすか？」
「なんだ」
「先公ァ、D級魔法少女だって聞いた。【回避】だっけ？　どっから攻撃が来ても

ほぼほぼ無条件に避けられるっつー魔法」
「……ああ、お前は、そうか。あの時のお前ではないのだったな」
「あァさ、あっちの俺じゃねェんだ、そこで話した事かも知れねェんすけど、俺に聞かせて欲しい」
「質問は受け付けよう。教師だからな」
「――絶対に無理だ、って。そォわかった時……先公ァ、どう受け止めたのか。それを聞きたいんすわ」
「それは――私が、D級を抜け出せない事に、か？」
「あァさ。酷な質問ですまねェが、ちょいと……悩んでてよ」
ひでー事聞いてる自覚ァある。
ただ、冷静メイドから先公の話を聞いたんだ。ちゃんと努力をして、それでも無理だった、って。落ちこぼれだのなんだの言われてたけど、全く落ちこぼれちゃいなかった、って。
優秀とされるコーネリアス姉妹から見て。
憧れに近い感情を抱ける、すげー奴だった、って。

聞いたんだ。
「それでも役割がある」
「……役割？」
「そうだ。私はD級だ。殲滅力も殺傷能力も持たない魔法を持つD級魔法少女。上を望む事すら許されぬ力を与えられた、そんなものに覚醒してしまった魔法少女だ。だが、そんなものでも役割がある。教師ではない。【回避】という魔法にしか成し得ないことがある。【回避】を使う私にしか成し得ない事がある。必ず、どこかに、ある。他の手段では代用できない、他の者では取って代わることのできない——世界より賜った、私だけの価値がどこかには存在する」
「夢見がちだと、言われやせんでしたかね？」
「ライラック。敵の命を奪う事は、誰にでもできる。私とて武器を使えばできるだろう。身体強化を行えばできるだろう。故に【即死】の役割は敵を殺す事ではない。仲間を死なせることではない」
「……！」
あァさ、こっちの聞きたい事を的中させてくれちゃってまァ。

そンで――最高の答えまで、くれよォとしてる。

「【即死】にしか成し得ない事があるはずだ。【即死】の役割がなんであるのかを考えろ。お前の直面している、絶対に無理だと言われる何か。それに対し、【即死】は必ず役に立つ。役に立ち、必ず可能性をお前に与えてくれる。見逃すな。役割を、価値を、可能性を。他の手法では代用し得ない特別――故にこそ私達はこれを、〝魔法〟と呼ぶのだから」

「ありがてェ。背中押してくれてありがとォよ。んで、意地の悪い質問して悪かったすわ」

「問題ない。お前のような問題児は過去にもいたからな」

「ちなみに名前は？」

「ティケ。今は特例組潜入班の隊員をしている。気になるなら訪ねてみると良い。何か、得られるものがあるかもしれん」

「ん。そォさせてもらいまさァ」

特例組、ね。

なんぞか――あっちの俺の隊が組まれた、とかいう。

「用件ァそんだけで？」
「ああ、下がって良いぞ」
「あいさ」
ま、善は早かれ、思い立ったが吉日。
訪ねてみますか、ティケサンを。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――おお、なんだなんだ。話題の悪魔じゃねーの！　良く来たなーこんな僻地。ほら、上がれ上がれ、ってオイお前ら何怖がってやがる！　あの悪魔とは別人だって話だろーが！　とっとと立ち上がってパーティの用意をしやがれ、わはは、祭りだ祭りだ！　で、なんだっけお前。名前」
「俺ァ梓・ライラックってモンだ。ティケってな、こン中にいるかいね？」
「ティケはウチだよ。わはは、なんだウチに用かよ！　じゃあパーティ中止だ、話し合うに騒ぎは向かねーからな！　あ、こっちこっち。こっちの個室な」

「おゥ」

……すげー個性的だな、って。

もうエデンは卒園してンで寮ァ引き払ってて、今は軍事塔の方に住んでるって聞いたんで色ンな人に尋ねてァ聞きまわって辿り着いたンだが、10人くらいの大部屋でなんぞがやがややってンの。ベッドはそのまま十個あるし、一人一部屋与えられるくらいの広さはあるはずのＥＤＥＮで、わざわざ大部屋に集まって住んでるたァ物好きだ。

ンで遠慮とか配慮の一切無いこの感じね。

はは、おじさんそォいう方が好きだぜ。おじさんもデリカシー無いからよ、ノンデリ同士仲良くやれそォだ。

で、案内されるがままに個室ってなトコに来たんだが……。

いる、んだよな。なんぞか、幽霊みてェなのが。

「ああこいつのことは気にすんな！　わはは、ウチのこと好きすぎて方時も目を離したくないらしーのよ。ここだけの話、怖くね？」

「一切ここだけの話にァなってねェが、こえーな」

「おお、話の分かるやつだなー！　見た目の割に！」

わははと、がははと。

燃え盛るみてェな赤毛の綺麗な姉御肌、って感じだな。体格もでけェし、筋肉もある。魔法少女になる前から鍛えてたって感じかね。

……ちなみに後ろの幽霊みてェなのァ、腰下まで届く黒髪ロングで前髪もそんくらいあって目が見えねェ上魔法少女の衣装が昔のセーラー服っぽくてマジで幽霊って感じのお怖い恐い。

「で、何の用だよ。ウチ結構忙しいんだけどな！」

「あァそォかい。いやね、えるるーって先公が、アンタと俺ァ似てる問題児だってンで興味が湧いただけさ」

「あっはっは！　あのセンセまだそんなこと言ってんのかよ！　わはは、そうだな、ウチは類稀なる問題児だったと思うよ、なんたって一回学園塔ぶっ壊したしな！」

「おォ、想定と違う問題児」

「随分と跳ねっ返りだったしなー。ウチ、センセの【回避】ってのがどーにも受け

入れがたくてさ、絶対直撃してやるって授業中だろーと休み時間だろーとセンセが寝てる時だろーと関係なく魔法ぶち入れてたから、わはは、忘れるにも忘れられないか！　あ、心配しなくても梓にはやんないよ」

「そりゃ助かる。今心底やべェ奴訪ねちまったな、って後悔してたトコだからよ」

やばすぎンだろ。

普通に怖いわ。問題児とか跳ねっ返りとかじゃなくて異常者だろ。

「で、なんだっけ？　用とかないんだっけ？」

「あァ。どんな奴か見たかっただけだ」

「じゃあウチと手合わせしないか？　あの悪魔とは違うらしいけど、Ａ級なんだろ？　大丈夫大丈夫、ぶっ飛ばす時はちゃんと他の塔避けるから」

「アンタ潜入班じゃなかったか？　そんな肉弾戦行けるモンなのかよ」

「ん？　ウチは囮だよ囮。ウチが派手に暴れまわって、その内に隊長とかみんなが行くんだ」

「成程。今心底納得したよ」

確かに目立つよ、コイツ。

声うるせーし。
「で、どうだ？　一手手合わせ――お願いできないか？」
「ヤだよ。知ってンだろ俺の魔法。【即死】だぜ、【即死】。なんだって仲間を殺さなきゃなんねェんだ」
「ウチの魔法は【抗運】ってのさ。どーゆー魔法かわかるか？　わからないか！　わはは！」
「……なンだ、確率でどォにかなるとか、その辺か」
「おお、よくわかったな！　そうさ、ウチには攻撃も魔法も当たったり当たらなかったりする。ウチの攻撃も当たったり当たらなかったりするんだけどな！　わはは、これでB級だよ、すごくね？」
「すげェよ」
「ありがとう！」
なんじゃその魔法ァ。
使いづらいだろォに、けどそんな素振りもみせねェで、しかも手合わせしたい、とか。

どんな感覚なンだろォな。その、あたらなかったりする、って時の感覚ァ。
「ま、どっちにせよお断りだ。俺ァ仲間に向ける刃は持ってないんでな」
「そうか。残念だな！　わはは、また気が変わったら頼むよ！　ウチの魔法は絶対を絶対でなくする魔法だけど、梓のは絶対を絶対にする魔法だろ？　ぶつかりあったらどうなるのか気になる！」
「他を当たってくれ。ってとこで、んじゃ、邪魔したな。なんぞか、また縁でもあったらよろしく頼まァ」
「ああ！　悪魔とか言ってごめんな！　傷付いたか？　でもごめんな、見た目そっくりの奴に殺されまくったのがウチに沢山いてさ！　わはは！　お前はそうならないことを祈ってるよ」
「へいへい。俺もアンタが敵に回らねェ事を祈っとくよ」
気のいい奴、ではあるんだろうけど。
……なんぞ、疲れる奴だったなァ、って。
これを俺に似てる、みてェな言い方で紹介したのってさ、先公にとって俺もこォ思われてるって事なんかなァ。

……ちったァ労うか。ストレスやべェって聞くしな、教師ってな職業ァ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

41・同有冷愛利意深紅有小琉度奇異伏糸？

昇級試験当日。

座学の方ァぱっぱと済ませた。わかんねェとこ無かったし、一応見直しァ三回やったンで大丈夫だろう。記述がな、たまに日本語的な言い回し使いそォになって危ねってなるンだけど、そこ以外ァ平気だった。つか、普通に算数とかも出るンだなって。そっちに関してァノー勉強もいいとこだったから危なかったかもしれねェが、元現役中学生舐めんなって事で。

……元現役とは？

そォでなくとも、会社で電卓使わずに空算盤使ってた事もあったしなァ。パソコンも表計算ソフトも別に使えたンだけど、手元でパチパチやった方が早かったりすンだよな。

「梓・ライラック様。本日はよろしくお願いいたします」

「おォよ。なんつーか、俺にとっちゃシエナと組むのァ久しぶりだからよ。あっちの俺にできててこっちの俺にできねェって事があるかもしれねェから、あんまり期

待ァしないでくれ」
「いえ、ここ数日で身体能力及び魔力量などの情報は修正済みです。問題ありません」
「修正しなきゃいけねェ程差があったってワケね」
「あ、いえ、そういう事をいいたいのではなく」
「はは、すまねェな。意地の悪い事を言った」
まァ、冷静メイドの話じゃアズサってな素の身体能力だけで俺が最大限にまで知覚強化行ったみてェな事ができてたみてェだし、スペック差が天地程あんだろォなァ。
つっても先公に言われた通りさ、俺には俺の、アズサにはアズサにしかできねェことがあるンだろォし。俺は俺で暗中を模索して飛躍でもしますかね、なんつって。
「梓・ライラックとシエナだな」
「ン――そちらァ、今回の試験官サンで？」
「そうだ。A級魔法少女ブレイズという。今回の試験の評価を担当すると共に、万一の場合の後方支援を務める」

「ははァ、まるで何かが起きる事前提みてェな言い草どォもありがたく」
「そう斜に構えるな。これは規則に従って話しているに過ぎない」
「そォかい。あァいや、そォですかい」
初対面の目上の上官だ、一応ァちゃんとしねェとな。
しかし、万一ね。はいはい、ってな感じだが。
「お前達2人には、この先の湖に住むスパイラルモォルという魔物を倒してきてもらう。条件は2つ。どちらか一方の背に括りつけた要救助者に見立てた人形を無傷で持って帰ってくる事。もう一つは、目標以外の魔物を殺さないこと」
「あン？　なんだその条件ァ。どォいう時に役立つンだよ」
「試験とはそういうものだ。受け入れろ。さもなくば昇級は諦めろ」
「……あァよ、殺さなきゃいいんだな？」
「そうだ」
意味のわからねェ条件だな。
化け物ってな、それこそオリジン以外は悉く殺すべきだろォが。なンだ、これが〝緩和〟か？

「評価は効率性、人形への損傷具合、お前達の損傷具合の3項目で評価される。他、武器等の使用に制限はない」
「あァよ、わかった」
「わかりました！」
「そうか。では――試験、始め！」
試験官殿が手を上げる。
その隣、恐らく試験官殿のものだろう亜空間ポケットから、要救助者って書かれた人形が出てきた。
「シエナ、俺が人形を運ぶ。その俺を抱えて飛んでくれ」
「了解ですっ！」
シエナの背に人形を、ってな無理だ。噴射機構……ブースターがあるからな。だから俺が運ぶしかねェ。なンで、手早く背に括りつけて、っと。
「シエナ、発進します！」
「おォさ！」
なんだか懐かしい――シエナに抱えられての空の旅。

さァて、昇級試験。
なんぞが出てくるのかねェ、なんて。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１：２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

さて、飛行中にブリーフィングもどきをしよォってなった。シエナァ真面目で助かる。これが初期のお嬢とかだったら、寄って斬って帰ってきて終わりですわ！とか言ってただろォし。
「シエナ、スパイラルモォルについての知識ァあるか？」
「モォル種の中でも、突進や地面、水中に潜る事に優れた魔物です。また、地中及び海中から獲物を狙い、高速で飛び出してくることもあるので、あまり大きな音は立てられませんね」
「いいね、そンだけわかってンならいい。だがちょいと付け加えると、アイツらァ貫通力に優れてるって点だな。硬い装甲なんぞァ意味を成さねェから、防御じゃなくて回避を選べ。俺ァ【即死】防御があるからいいが、シエナじゃ無理だろォから

な」

「了解いたしました」

あァそォそォ、シエナについてだが、一応製作者が敵さんの方のマッドチビだってンで一悶着あったンだと。だがキラキラツインテが「完全に精査したから問題ない」って言ったのと、同じく鬼教官が問題ないってな口添えをしてくれたらしィ。

正直なトコ言やァ俺ァどっちでもいいんだが、同時にどっちでもあり得るたァ思ってる。

つまり、本人に自覚が無かろうと、ＥＤＥＮの情報ってなを発信する端末だ、って可能性な。ま、そうだったとしても特に問題はねェんだが。それでシエナを壊すだの廃棄だのになりゃ、俺ァ十二分に抗議する用意ができてる。

それくらいにァ、ガーゴイルだってのに大切にしてる。

もう仲間だと思ってるよ、ちゃんとな。

「目標の湖見えました！　でも、あそこだけ……暗い？」

「あァ、あそこァ夜の湖ってな名前でね。俺としちゃ全く以て遺憾なンだが、あそこは年がら年中ひねもひねもす夜なのさ。夜つったって本物の夜じゃねェ、ただ

上空や周辺の魔力密度が高ェんで、光を飲んじまってる……だったかな。なンで、ちょいと見辛いだろ」

「はい。魔力検知に雑像が……申し訳ありません、お役に立てると思ったのですが」

「何言ってンだ。役にァ立ってもらうよ。俺もちったァ強くなったとァ言え、殲滅力ってなまだまだ。スパイラルモォルってな基本群れで行動するからな、頭ァ俺がやるとして、他のちび共ァ殲滅してくれ」

「はい、了解いたしました。ですが、もっとも強い個体を相手にする、というのは……大丈夫、なのでしょうか」

「今回のァ信じてくれていい大丈夫さ。俺ァ俺に向かって猛進してくる奴にァ強ェんでね」

湖のほとりに降り立つ。

ぶっちゃけこの着地でかなりの音量が出てるンで、スパイラルモォルは俺達に気付いているはずだ。

シエナにァ一旦空にいてもらう。

「さて――あァ、これァかっけェよ。俺の心を擽る」

レーテーを起動し、中空からズズズと取り出したるは、マッドチビ先生作の剣。未だ一切の刃毀れ無し。ま、空の魔石も拳銃もSRも作ってくれる人がいなくなっちまったンでな、これからァこいつが相棒さ。

「んじゃ、おら！　来いよ化け物！　藍夢陽亜！」

なんぞかが起きる、ってなわかってンだ。だったらとっとと建前みてェな化け物殺しァ済ませておきてェ。スパイラルモォルなんざよくてA級の化け物。条件の縛り付きたァ言え、A級からS級に上がるための試験にゃ程遠いのさ。緩和されすぎなンだ、だったらもっとなンかあるだろ。

――知覚強化。足に感じる振動。上体を後ろに倒しながら魔力を脚部及び腕部に流し――左回りに回転しながら、逆手に持った右の剣を一気に振りぬく！

そこに、むざむざ斬られに来たンじゃねェかって思うよォなコースで突き出てくるスパイラルモォル。その軌道上に俺ァいねェ。ンで、俺の剣ァ完璧にスパイラルモォルを切り裂く。

技術なんざ欠片も乗ってねェ攻撃ァ、けれど剣に浸された【即死】によって必殺の一撃となる。

皮膚を、細胞を、筋肉を切り裂き――そこから手前上空へ向けて【即死】の線を発射。

知覚強化を戻していけば――はい、と。

「どォだ、ちったァ強くなれたンじゃねェの？」

そこに転がるは、肉体を半分まですっぱり斬られて、心臓と脳を殺されたモォルが一匹。

「っ、湖中に多数の魔力反応を検知！　肩部解放。格納積載弾頭準備。照準目標――合いました！　自推砲弾発射します！」

背中の人形を汚さねェよォに手ェついて、だから仰向けみてェな格好になった俺の視界に、真っ黒い尾を引くミサイルの雨が映る。ほらな、やっぱり積んでた。殲滅力SSってなこれだろォ。

ミサイルァ全て湖ン中に落ちる。

「両腕変形、合体！　実包装填、2！　加速力場形成、熱量上昇……発射します！」

そんでもって、身体の前で合わさったシエナの手から――凄まじい熱量が放たれ

る。
太腿忍者の【光線】を何倍にも大きくしたよォな奴だ。それァ湖に突き刺さり――直後、大爆発が起きた。
……こっわ。
え、つか。待て待て、他の生き物殺しちゃダメ、ってのが……。
「目標の殲滅を確認……梓・ライラック様！　やりました！」
「お、おぅ。すげェな。だがよ、シエナ。今回の条件ってな覚えてるか？」
「……あ」
ははァん？
これァ、さてァ。
「――梓・ライラック。シエナ。条件達成不可により失格だ。今回の昇級は諦めろ」
「だよなァ」
はい。
そんなわけで、めたくそあっさり俺の昇級試験ァ終わった。
S級にァなれず……シエナが、それァもう落ち込んで。

まァ結局なにも来なかったし、いいんだがよ。ホントのホントに緩和だった、ってことなんかねェ。

遠《ｔｅｘｔ:s1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「本当に申し訳ありませんでした……」

「まァだ言ってンのかよ。いーっていーって。そもそも俺が上を目指そォとしたのァ等級区分のためじゃなくて、単純に強さを求めてのことだからよ。お飾りＡ級が、まァ化け物の一匹ァ満足に殺せるってなわかっただけで十分さ」

「……」

「そんなに落ち込むなって……」

あー。

えー。

どうしよっかなァ、これ。

おじさんさー、部下のメンタルケアとかよくやってた方だけどさ、基本飲みに連

れてって言いたい事言わせるとか、知り合いに頼んでバスケだのテニスだのちんまい大会組んでリフレッシュとか、単純に休暇取らせるとか……それくらいしかやってなかったンだよなァ。

しかも同性の社員にだけ。いやだって、女性社員にァ無理だろ、そンなの。スキャンダルだわ普通に。

……女の子。まァガーゴイル云々は置いておくにしても、自分のミスで落ち込んじまってる部下を慰めるってな、大丈夫大丈夫、気にしてねェよ、くらいしか言えねェんだわ。

だー、もちっとコミュニケーション取るよォ努力するべきだったなァ。

でも、こォいう子って多分責めて欲しいンだと思うんだよな。責任感じて罪悪感覚えて、だから罰を欲してる。自分じゃ自分を罰せないンで、できりゃァ上の人にちゃんとした罰を与えられたい。だから俺が気にすんなって言えば言う程深みにはまっていく……と。

なら、どォすっかってーと。

「シエナ」

「は、はい」
「ちょいとついてきてくれ。つか、連れて行って欲しい場所がある」
「わ……わかりました！　どこへでもお連れいたします！」
「ン」
ちゃんと責めてやるのが一番、ってな。

で、着いたのがココ。
「ここは……？」
「俺がよく魔煙草買ってる店の、総本山っつーか、なンだ、本店だ。ホントァ魔法少女ってなあんまり国に来ちゃ行けねェんだが、まァいいだろ。変身も解除してるし」
普段ァ市場区画の支部店で買ってるンだけどな、そこの店主のおばちゃんがもし気になったら、とか言って紹介してくれたンだ。
なンで、シエナァいつものメイドっぽいけどよく見ると装甲、みてェな格好で、俺ァ中学の制服で。

魔煙草に年齢制限ァ無いが、まるっきり煙草屋ってな看板出してるとコに行くのァマズイんじゃねェかと今更思ったり思わなかったり。

「らっしゃい。……あ、なんだお嬢ちゃん。ウチは煙草屋だ、子供は帰んな」

「あァいや、普通のにァ興味ねェんだが、ちょいと魔煙草をな。こっちの連れァ初めてなンで、なるたけ味の薄いの頼まァ。俺ァ味ァどォでもいいんで効果のある奴で頼む」

「……香りは？」

「香り？　ハーブの奴以外になんぞあンのか」

「最近は自分好みに色々つけられる。そこの棚に一覧置いてあるから、好きなの選びな」

「おお、ありがとなおっちゃん」

いんやさ。

すっげー久しぶりに男を見た。

当然だけどＥＤＥＮにァ女の子しかいねェし、敵も味方も女性ばかり。市場区画に来るのも基本女性だ。ま、男が来ると色々あンだろォな。

けど、国の男女比は普通なンで、当たり前に男性もいる。
煙草屋。腕組んで鉢巻みてェのした、タコ坊主みてェなおっちゃん。はは、前の俺よりァ若いな。
「えっと……？」
「好きな香り選べってさ。シエナ、味覚も嗅覚も感じ取れる機能あンだろ？」
「はい、それは搭載していますが……」
「んじゃ選びな。これァさっきの罰って考えてくれていい。クソ不味いからな、覚悟しとけよ」
ちなみにだけど、魔煙草は一般人も吸う。
魔力回復目的じゃなく、そのクソ不味さ目当てに。いや酔狂な奴ってなどこにでもいるもンでよ。不味いから良い、だのなんだの言って吸ってる奴ァいるのさ。本気かどォかは知らねェが、少なくとも常にラインナップにあるくらいにァ売れてる。
「おっちゃん、俺ァシトラスハーブで頼まァよ」
「え、えっと、では私はこの桃の香りで……」
「ああ。どっちも1箱でいいか？」

「俺ァ3で。こっちのァ1でいい」
「わかった。作るのに多少の時間を要すから、あっちの休憩室で休んでいるがいい」
「おォ、ありがとォなおっちゃん」
本店というだけあって広い店内ァ、客が休憩しておけるスペースまで完備されてると来た。
俺ァそんなにツウってワケじゃねェが、ちょいと冷やかしてみてェ普通の煙草もわんさかと。ま、吸わねェけど。
休憩スペースにァ幾人かの先客。
どいつもこいつも一般人だな。だがまァ、ちィとガラの悪いのがいる。おっちゃんのいる手前手ァだしてこねェと思うが……。
いつの時代にもアホってないるからな、気いつけるに越したこた――。
「おー、可愛いね君達。まだ中学生くらい？　ダメじゃんダメじゃん、こんなお店来ちゃ。ここはオレ達みたいなこわ～いお兄さんの集まる所だぜ？」
「ヒュウ、いいね、2人で冒険かよ。なぁどうだ、俺達とちょっと遊ばねえ？気持ちーことしようぜ、仲良く、な」

――ない。

いんやさ。

いるんだなァ、って。しかも見た事ある制服着てやがるし。

「いやはや。――よォ、お前らフールン高の奴らだろ？　煙草屋で屯って年下に手ェかけようたァ面白れェことしてやがんな。後ろにァなンだ、ナァル大の不良連中でもいンのか？」

「おっとっとー？　何君、可愛い顔して怖い言葉吐くねー。ちょっと粋がっちゃってるカンジカンジ～？　ヒュゥ、コワーイ！　……ってか、ナニソレ。うわ、あっはっは！　こっちから見たら可愛いけど、正面から見たら左っかわボロボロじゃん！　キッショキッショ！　あはは！」

「……エコウ中の制服に、銀髪で、粗悪な口調……」

「――でも好きだぜ、オレ達、そォいう子も。そっちで縮こまってる子も……すっげーソソる。どおかな、オレ達の家に来ない？　もっとイイモン吸わせてやっけどー？」

おっちゃんァ、まだ煙草作ってる最中だな。

んで、監視カメラ……なんぞ、無いか。前世でもあるまいに。魔法的な装置ァＥＤＥＮか軍にしかねェはずだし。よーしよし。

はは、俺達魔法少女ってな一般人に手ェ出すのァダメなんだよ。単純に身体能力が違い過ぎるからな。でもま、バレなきゃオッケーって言葉もあってな。

俺ァ小せェ子にァ男女ともに優しいけどよ、ちゃんと自立できてるはずの連中にァ厳しいぜ。ははは、どれ金的でも――。

「こら、アンタ達！　何やってんの!!」

「――げ、瀬尾!?　お、おいズラかんぞ！」

「つかやべーって。あっちの銀髪、エコウのライラックだよ。久しぶりに見たけど……」

「誰でもいいよ！　逃げべ逃げべ！　アイツの拳はくらいたくねぇよ！

なんか、来た。

同じくフール高の制服を着た少女。

デコの広い髪形に、所々の絆創膏。腕を組み、フンと荒い鼻息を吐いて。

「アンタ達のせいでフールン高の悪評広がりまくってんのよ！　そろそろ観念し

なさい!!」
「するかよばーか！　デコ出し暴力女が！　お前こそセンコーにしょっぴかれちまえバーカ！」
なんぞか、不良連中を追っ払ってくれた。
いやァ助かったぜ。
俺の火傷を馬鹿にしてきた瞬間、シエナのスイッチ入ったのわかったからな。どォ抑えよォか迷ってたンだ。いんやさ、俺も馬鹿だったよ。そォいや俺ってば左半身に火傷痕があって、右腕義手、なんつー奇抜も奇抜な13歳だったわ。こりゃァ目立つってな。
「……排熱処理中」
「おォ、よく我慢したな。偉いぞ、シエナ」
「もう少し、でした」
「ハハ、そりゃ危ねェ危ねェ」
スイッチってな何も比喩はねェ。
マジのスイッチが入って、熱量感じてたンだ。危うく厳罰どころじゃ済まない事

になってたかもしれねェ。不良連中だって生きてンだ、守るべき国民であることにゃ間違いないしな。それを傷つけるのァ、俺の心情的にも信条的にも、シエナの立場的にもまずい。

よかったよかった、って事で。

で、だ。

「よォ助かったぜ。あんがとな。俺ァエコウ中学の梓ってなモンだが――」

「貴女達も!!　中学生で、しかも女の子2人だけで！　煙草屋さんなんて治安の悪い所に来ちゃだめでしょ!!」

「……治安の悪い店で悪かったな」

めっっっちゃ怒るじゃん。

んで、めっちゃしょんぼりすんじゃん、おっちゃん。

大丈夫だよ。悪いのァあいつらで、おっちゃん何にも悪くねェよ。

「あっ、いえ、申し訳ありません……そういう意味、では……」

「おーおっちゃん。作るの早いな。この道何年なンだ？」

「30年だ。ほら、桃の魔煙草1箱、シトラスハーブの魔煙草3箱」

「おゥ。代金ァこれで合ってっか？」
「いや、少し多い。最近値下がりしたんだ」
「へェ。知らなんだ」
「これで十分だ。毎度あり」
「おゥ」
レジだのなんだのも無いんで、こォやって手渡し勘定ってな基本だ。余程の人気店なら魔算機も導入してるやもしれねェが、それにしたって電卓だのなんだのにァ劣る。
……だからこそマッドチビァすげェんだよな。シエナの脳ってな魔脳計算機ってーのらしいンだが、計算力がダンチすぎる。感情まであって……いんやさ、本当に天才だと思うよ。マッドチビもマッドチビ先生も、どっちも方向性の違う天才だ。
で、だ。
おっちゃんがカウンターの方へ帰っていって。
このデコ出し少女は、なんぞかびくびくしていて。
「あー、とりあえず座ろォぜ。いいだろ、ちったァ付き合ってくれよ、オネーサン」

なんかコレ、俺がナンパしてるみたいじゃね？

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「えっと、なんか勘違いで怒っちゃってごめんね。あ、そ、そう。私は瀬尾奏っていうの。フールン高等学校の２年生で……えと、いつもああいう連中を追っかけ回してるんだけど……」

「あァよ、お疲れさんってな。俺ァ梓。梓・ライラックってモンだ。エコウ中２年。こっちァシエナ。まァ見ての通り引っ込み思案でよ、しかも中２で転校なんぞをしてきたモンだから、びくびくしてたのを無理矢理引っ張り出してきて、このザマだ。だから助かったよ。ありがとな、瀬尾」

「……君、中学生よね？　なんだか年上と話している気分になるわ」

「そォかい？　そりゃ光栄だね」

自分でもヘンな話だって自覚はあるンだがね。

死を厭わない魔法少女ァ名前で呼べねェけど、死を嫌い、避け、けれど一回こっ

きりしか命の無ェ一般人ァ、ちゃんと名前で呼べるんだ。
悲しさの度合い。あるいは密度。ちゃんと悲しめるかどうか。まァ色々理由はあるンだが、お嬢辺りに知られたら面倒そォだな、とか思ったり。
「えっ……と、それで、なんで呼び止められたのかなー、とか……あはは」
「ン？　特に意味ァ無ェよ。ほら、シエナ。吸ってみな。びっくりする程不味ィから」
「……わかりました」
ひひひ、なんて笑いながら、魔煙草の起動方法を教えて——吸わせる。
口に付けた瞬間は、キョトンとした顔で。
吸っていく内に——酷く苦々しいモンになっていって。あっはっは、ガーゴイルなんつってもやっぱ不味いか。いいね、これでちゃんと罰にァなっただろ。
「瀬尾も吸うか？」
「わ、私？　いい、いい、要らない要らない。煙草なんて吸ってるトコ誰かに見られようものなら、叱れなくなっちゃうし……」
「魔煙草ァ別に身体に害のあるモンじゃねェんだ、別に見られた所で変わんねェだ

ろ」
「梓・ライラック様。この味は確実に害があります。害となる成分は検出されませんでしたが、これが害でなくてなんだというのでしょう。……うう、香りはとても良いだけに、残念です」
「おいおい、何捨てようとしてやがる。これァ罰だって言っただろ。全部吸いきれよ？」
「ううううっ！」
俺も一本取り出して吸う。
戦場じゃ節約するけどな、こォいうのんびりした日にァ良いだろ。っかー、不味い不味い。何を、っつか誰がが好き好んでこんなモン喫むンだか。勧める奴の気が知れねェやな。
「……ねぇ、もしかして、なんだけどさ」
「ン？」
「君達って……魔法少女、だったり……する？」
「お、よくわかったな。そォだよ。ま、秘密にしといてくれると助かるンだが。あ

んまみだりに降りてきちゃいけねェんだよ」
「う、うん。それはいいんだけど……その、さ」
まさか見抜かれるたァ思ってなかった。
魔力の気配ァしねェが……。
「姉にね。魔法少女がいて」
「ヘェ！　つか、あン？　瀬尾？　もしかして瀬尾アルカか？」
「あ、知ってるんだ。そう、瀬尾アルカ。５年前に魔法少女になって、ＥＤＥＮに上がっちゃったお姉ちゃん」
「ほォー。妹がいたなンて知らなかったよ。同じクラスなんだ、班ァ違うんだけどな」
世間ァ狭いねェ。
国ァ一つしかないたァ言え、結構広いんだけどな。
しかし。
「似てねェな」
「あはは、そう言ってくれるとちょっと嬉しいかも」

「ン？　なンだ、姉ァ嫌いなのか？」
「ううん、逆。大好きだよ。だけど……私は、お姉ちゃんが魔法少女になった時に、自分はなれなくてさ。だからお姉ちゃんに負けないくらい強くなろうって、髪型とか色々変えてさ」
「ほーん。まァ確かに、瀬尾アルカの印象っつーと幼いって感じだからな。アンタみてェに腕っぷしの強そうなやつじゃねェ」
「うん。ＥＤＥＮに上がって、５年経てば、家族に会ってもいい。そういう規則があるのは知ってる。だから、もうすぐだから……えへへ、驚かせてあげようって思って。背も高くなったし、力も強くなった。絶対に追いつけない所に行っちゃったお姉ちゃんに、少しでも追いついたんだぞー、って。そう言いたい」
「なるほどなァ」
いやはや。
やっぱそォいう事もあんだねェ、って。
俺にも今生の妹ってながいるからよ。俺も５年後、そんな風に迎えられンのかな。両親も……ああ、いけねェや。ちィっと会いたくなってきちまった。

今生の両親。前世の両親。今生の家族。前世の家族。友人、部下、上司。
どれにも感謝しかねェ。顔も名前も一緒に過ごした時間も、全部キッチリ覚えてる。
はは。
恵まれてやがるな、オイ。
「ね、もしよかったら、なんだけど――」
――知覚強化。左後方から発砲音。回避は可能。だが、瀬尾に当たる。シエナは問題ない。回避を選択から外し、義手での防御を選択。接合部強化。知覚強化を戻して行き、その軌道上に腕を置け。
「きゃっ!?」
かァン、という音が響いた。
ま、流石にその程度の威力でどォにかなる腕じゃねェんでね。
さてはて、どこのドイツだ。俺達を狙ったのァ。
「東南方向75。射撃者の位置を特定いたしました」
「魔力ァどォだ？」

「ありません。一般人です」
「はン？」
また発砲音。狙いァ俺だなァ。全く、なんだってンだ？
「動くな！　手を上げろ！」
「あァ？」
また陳腐なセリフに、思わず振り返る。
そこにはナイフを持った男が一人。いや奥に女もいんな。全員ガラ悪い奴らだ。
少なくともケーサツの類じゃねェ。
後頭部へ発射された銃弾を義手で掴み、シエナに渡す。
「なンだよ、オニーサンもオネーサンも。揃いも揃って」
「お前、魔法少女だろ！　梓・ライラック……少し前ＥＤＥＮに上がった奴！」
「あァ、そォだが？　いんやさ、気を付けろよ？　こっちの２人ァ魔法少女じゃねェ」
「梓・ライラック様、何を……？」
大体狙いァわかったよ、

魔法少女がみだりに国に降りちゃいけねェってのァ、何も魔法少女から国民を守るため、ってだけじゃねェ事も知ってるからな。

つってもちィとばかりバレるの早すぎるんで、さっきの不良共が言いふらしたとかかね。

「へへ、認めた！　認めたぞ！　つまりお前――死んでも生き返るんだろ？」

「んでもって魔法少女は俺達一般人に手を出せない！　出したらお縄だ。だから――どんだけボコってもいいって事だ！」

「殺しても怒られない中学生とかサイッコーじゃん！　一回殺してみたかったンだよねー、ヒト」

ま、そういうこった。

一応この世界ってな、ずっと戦時中ってーの？　いつ化け物が襲ってくるかわかんねェ、やべェ世界なのさ。野山で、平原で、海で。駆けまわって泳いでなんだのをしてみてェって奴ァわんさかいる。資料がありすぎるのがちょいと問題だな。あと近年化け物の動向が激化してンのも。

だからまァ、溜まってんのよ、ストレスが。

それがさ。
ちょいとばかし、狂わせちまったらしいんだわ。
魔法少女は国を守る盾で、生体兵器だから、人間でなく――手を出せないから、サンドバッグにしてもいい、なんて。
昔、そぉいう事件があったんだと。だからみだりに国に降りるな、って言われてンだけどね。
勿論マトモな連中ァいる。うんといる。わんさかいる。
ちゃんといるんだ。それこそ安藤さんの夫みてェな、すげー奴もいる。
けど、こーいう奴らもいる。人間は一枚岩じゃねェからな、そーいう奴もいればあーいう奴もいる。知能を持つが故の、って奴？
「く、狂ってる……」
「シエナ、瀬尾連れてちょいと逃げな。俺ァ国外まで逃げるからよ」
「はい！　その後、お迎えに行きます！」
「頼んだ」
やっぱ国にァ来るモンじゃぁねェなァ、なんて。

ここで魔煙草を一本。

ちなみにだけど、これまた困ったことに――国民が魔法少女に何したって、特に罰ァ無い。自動車と歩行者の関係みてェなもんさ。ドラレコなんざ無いからな、おっちゃんや瀬尾の証言あったって特に意味ァ無ェ。これで俺が反撃しよォものなら一発でアウト、封印措置ってなを受けるンじゃねェかな。

だが。

だァが、だよ。

振り下ろされた釘付きバットを避ける。トゲトゲした手袋のはめられた拳を避ける。

避けた先に在ったナイフは指で挟んで引き抜いて、うるせェ豆鉄砲ァ義手で弾く。おいおい、一般人から一般人へァ普通に罰則あるって忘れてねェか？　ここ普通の店だぜ？

「あっはっは、ンなへなちょこ攻撃当たるかよ。あァ、すまねェなおっちゃん！　ちょいと荒らしちまったわ。もう来ねェが、支部店の方ァよろしくさせてもらうよ！」

「別に、また来てもいい」
「そぉかい、そいつァありがてェ！」
挨拶をして、外に出る。
追ってくるゴロツキ。なんだなんだと隠れる市民。
腕部と脚部の強化をほんのりして、雨樋をよじ登って屋根上に。
おお、俺ってこんな風に強化使えるよぉになってたンだな。結構減ったが。
それァまァ、新品の魔煙草で回復させてもらって。
「おいおい、でけェ図体してこんなチビの女子中学生の尻おっかけ回して恥ずかしくねェのかよ！」
「うるせぇ化け物!!　ここは人間の国だ、入って来た時点で殺されても文句はないだろ！」
「ハ――」
なるほど、そぉいう層もいるのか。
サンドバッグ、ってだけじゃねェ。
魔法少女差別、って奴だ。ハハハ、いいね、人間らしい。実に――非善(敵)らしい……っ

とと、ダメダメ、こいつら殺しちゃダメなんだから、その思考ァストップだ。
さぁ駆ける駆ける駆ける。
お嬢にァ敵わねえ。つか、多分どの魔法少女よりも遅い疾走ァ、けれど一般人なんぞには負けねェ。こォいう機会があると、俺ァちゃんと魔法少女なんだな、って感じるよ。変身してなくてコレだもんな、魔法少女の衣装になりゃ身体能力ももっと上がるンだ、そりゃ化け物扱いもされらァな。
「クソ、貸せ！　全然当たらねえじゃねーか！」
「ちょっと待てよ、難しいんだよ銃ってのは」
「だから貸せって言ってんだよ！」
「ちょ、危ねーって、お、おいそんな風にしたら――」
――知覚強化。暴発時における弾道を計算。どこぞの家の窓に入るな、ありゃ。
さァて、馬鹿が通りますよ、ってな。脚部強化。
「あっ！　……え、あ、当たった？」
「……舐めやがって！　アイツ、当たりに行きやがった！」
おー。良い目をしてんねェ。

まァ一般人が手にできる銃なんぞこの程度の威力か。義手を使わずとも、手で掴み取れるなんてな。はは、ちょいと熱ィが、でもその程度だ。

さて、とっとと国外に出よう。これ以上被害を増やすのも騒ぎを起こすのも良くない。

「あァよ、じゃァなお前ら！　お前らに殺されてやるほど俺の命ァ軽くないのさ。お前らだけじゃねェがな！」

「クソ、待て！」

「一回でいいから撃たせろよ！　頭弾けるトコみてみてーんだって！」

「魔法少女の死体がどうなるのか研究したかったのにー！」

国を囲う壁に飛び乗って――国外に出る。

もう、追ってァ来れねえ。

国民が国の外に出るにァ結構な手続きが必要だからな。

ここまでくれば安心、って奴さ。

「……で？」

「……」

「おいおい、気付いてねェはずねェだろ。こそこそずっとついてきやがって。何用だよ――ポニテスリット」
「……梓」
で。
国内にいた時から、ずっとずっといた。
シエナの魔力感知範囲を把握してンのか、ずっとずっと隠れてて、俺が追われている間もずっとついてきてて、今、だ。
何用だ、ってな。
そんな神妙な――覚悟の決まった顔をしてよ。
「――私と勝負しろ、梓」
ンなことを宣って。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１：２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

1.to be ｄｅａｄ ｗｉｔｃｈ.

42.亜柔微義人倶.

本気モードだな、って。
思った。
手に付けている籠手ァ、ソテイラに材質を変えてもらった奴だ。
俺も変身する。野外で一瞬でも裸になンのァちょいと思う所あるんだが、少々物騒そォなんでね。
「当ててやろう。昇格試験だろ」
「……そうだ。お前達が早期に落ちた、というのは聞いた。私は……満点とは言わないが、S級は確実だろうと言われた」
「へェ、おめでとさん」
「そして――お前にもう一度機会を与えてやれと、言われた」

「誰にだ」
「ＥＤＥＮ中央部、ジャハンナムという上官だ」
……また、そいつか。
はは、とことん俺が嫌いらしィな。
「故に――勝負だ、梓。殺すまでに至る必要はないという。どちらか一方が決定打を与える。それにより、お前の合否が決まる」
「結構だ。俺ァ別に、ポニテスリットと戦ってまでＳ級になりたいとァ思わねェ」
「私は、お前と戦って、お前と肩を並べたいと思っている」
「――……」
ポニテスリットは構えを取って、そんなことを言う。言った。
……ハハハハ。なんだそりゃ。
なんだそのかっけェ言葉ァよ。
肩を並べたい？　無理に決まってンだろ。俺とお前とじゃ、天と地ほどの差があるンだ。
「――俺に勝てるとか、思ってンのか、お前」

「思っていない。故にこそ、挑んでいる」
ああ、あァ！
口が勝手に動きやがる。ヘンな挑発すンなよ、ちゃんと強いんだぜ、ポニテスリットァ。つーか、仲間に向ける刃なんざ無ェって言ったばっかなンだけどな。
レーテーを起動。
剣を引き抜く。
「……亜空間ポケット。使えるようになったのか」
「いんやさ、知り合いからの餞別でな。似てるが別モンだ」
「そうか。……やる気あり、と見做すが、いいんだな？」
「馬鹿が。やる気なんざ無ェよ。なんだって魔法少女同士で殺し合わなきゃならねェんだ。見てきただろ、さっきの。アホみてェな一般人のために俺達ァ血反吐吐いて化け物と戦ってンだ、魔法少女同士くらい仲良くしなきゃ損だろ」
「仲違いをするつもりはない。ただ私は、お前に並び立ちたい」
面白い事を言うものだ。
お嬢ァついてくると言った。ついてきて、振り向かせると。

んで？　ポニテスリットァ、横に並びてェと。はは、おじさんの横に並んだって臭ェだけだと思うがね。あァ自分で言ってて悲しいが。
「いいよ、やろーか。だがよ、ちと場所を移そうぜ。ここァ国に近すぎる」
「少し先に、広い空間を確保してある。魔物は掃討済みだ」
「準備の良いこって」
んじゃまァ――やりますか。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

剣を振り下ろす。
その途中で、ふわ、と。勢いがなくなり――弾かれるのを感じた。
なンで、【即死】を流し込む。途端抵抗の無くなったソレ。今度ァポニテスリットが下がる。
柄を両手でつかんで、思いっきりの横薙ぎ。俺の剣に技術なんざ欠片も無いからな。でけェ棍棒かバットにしか思ってねェ。

「【波動】！」
「【即死】」
「ッ！」」
実の所、俺とポニテスリットの魔法ァ相性が良い。【波動】ァ攻撃にも防御にも使える汎用性の高い魔法だが、発動している部分が見やすいのと本人が速くなるだのなんだのって魔法じゃねェんで、【即死】が刺さりやすいンだ。
魔法を殺せば【波動】が解ける。当然【波動】のアーマーが無くなりゃポニテスリットァ下がるしかない。
まァ俺も防御はゴミみてェなモンだからな、【波動】の一撃をくらやァ一発K・O・なンだが。
「随分と――魔法の扱いが、上手くなったな！」
「あァよ、短ェ間だったが、色んな先生に恵まれてな。お前と、お前らといなかった間――随分と死地を潜ってきた」
「そのようだ。その、魔法を武器に纏わせる技。――私でもできない技術であると、気付いているか？」

「ン？　そォなのか？　でも、お前籠手つけてるじゃねェか」
「私の扱う【波動】の範囲内に籠手があるというだけに過ぎん。――お前の様に、明らかに自らの範囲外にまで魔法を伸ばすという技術は――普通の近接魔法少女には、真似のできんものだッ！」
「うおっ……っとと」
ヘェ、知らなかった。
これ結構すげェ技術なのか。じゃ、例えばコイツも、かね？
身を引き搾り、剣を思いっきり振る。
剣に浸した【即死】は――水滴のようになって、剣先から飛んでいく。
「!?　く、【波動】！」
「ははは、魔法ってな可能性の塊だと教えてもらったンでな。銃の使えなくなった今、どォにかして遠隔の手段が無ェか試してンのさ」
「……今のは、どういう……」
「俺の【即死】ってな、水のイメージなンだよ。殺すときも纏わせる時も、身体から浸して、垂らして、滴らせて、そォやって魔法を使ってる。迷宮の時相談しただ

ろ？　それがよォやく掴めたンだ。俺の、俺がどォやって魔法を使ってるか」

金髪お嬢様ァ、世界を遅くしてるんだと。

キラキラツインテァ、世界に自分を溶かしてるンだと。

んでポニテスリットァ、世界を圧しているってな話で。

俺ァ、世界に浸してンのさ。魔法を――【即死】ってな水を。

「ま、ただ水滴飛ばしてるだけだからよ、今みてェに弾かれちまう。剣に纏わせるほどの貫通力を持たねェから使いどころァ限られるが、俺の新しい遠隔攻撃手段さ」

「……お前は」

ま、自分から離れたモンァ制御できねェ。なンで全体を浸して殺すとか、心臓や脳だけを狙い撃ちして殺す、ってのも無理だ。ホントの牽制に使うくらいしか用途の無い攻撃だが、それでも当たった部位が死ぬってな相当だろ。

特に鳥みてェなでけェ化け物にァ良く効くと思ってる。翼とか薄いからな、水滴の一つでも付けばいい感じに落とせるだろ。

「それは、お前の殲滅力の無さを補助するものだ、な！」

「あァ、そォいう考え方もできるな。ちと魔力が足りねェが」

大きな丘では確かに似たよォな事はやった。
あのアリを殺すために、地面から大きく浸したこともあった。まァその後魔力切れでぜェはァだったワケだが。
なるほど、でも確かに。
魔力問題さえどォにかすりゃ――殺傷能力も殲滅力もSSになれるってな、そォいう事かね。
「――まだ、前を行く気か、梓」
「あン？　なーに言ってんだ。俺の前に立って、ずっとかっけェ背中見せてた癖によ」
「違う。確かに私はお前を魔法で守っていた。お前の身を護る事も多く、お前を助ける事も多かった。だが――」
振り下ろした剣が受け止められる。
そろそろ【即死】を撃つにゃ魔力が足りない。ここらで一発貰って、終わり、ってなことにァできねェかな、なんて弱音を吐きそうになる。
だがそりゃ、あまりに仁義ってながねェよなァ。

「梓。お前は、どこを見ている？」
「前を」
「そうだろう。お前は前だけを見ている。進む事しか考えていない。だが、前とはなんだ。私達魔法少女が進むべき先とはどこだ。何故だ。それは、私達には見えない。何故、お前だけが見る事ができる」
「そいつァ」
自然、笑みが零れる。
そりゃそォさ。非善で、自分が何者かもわかってねェ奴に、俺の見ている物がわかるもんか。まだ死を当然だと――俺が気にするから厭うってだけで、自分一人の時ァ一切関係なく受け入れてるような奴が。お嬢もそうさ。俺が悲しむから見せないだけで、俺のいないトコじゃガンガン死んでる。そんな奴らに、そんな考えの奴らに。
前なんて、見えるもんか。
「俺がお前より強いからだよ、ポニテスリット」
「――」

剣を投げる。【波動】によっていとも簡単に防がれたソレ。
ソレの、裏側にぴったりと張り付いて――【波動】が切れる瞬間に、踏み込む！
「……どの口が言うんだ」
「う、げッ!?」
気付いた時にァ、吹っ飛んでた。
腹に鈍痛。ポニテスリットを見れば――蹴りを出した後、ってな感じの姿勢。
「一本。有ったな」
「み、てェだな……。は、そォだったな。お前、別に……魔法だけじゃ、ごほっ、ねぇ、もんな……」
「すまない、強く蹴りすぎただろうか。内臓に損傷が出ていないといいのだが」
ンな事を言いながら、手を伸ばしてくるポニテスリットに。
手に握っていた泥を投げつける。
「うっ!?」
「はン！　これでお相子だ、負けっぱなしってな性に合わないんでな、試合も勝負も負けを認めるが――この程度の目くらましも避けれねェよォじゃ、S級なん

ざとてもとても――お？」

おかしいな。

俺、馬鹿にしながら逃げてたはずなんだけど。剣をレーテーにしまい込んで、あらほらさっさーって逃げてたはずなんだけど。

身体が宙に浮いてやがる。あと首がちょっと苦しい。

「そうか。そうだったな。お前は正々堂々、などという言葉に囚われない奴だった。いいだろう、ならば私も取る手段を変える」

「おいおい、まさか零距離での【波動】、とか言わねェよな？」

「するか。お前の言う通り、勝負はついた。私の勝ちだ。故に勝者特権として、お前を好きにさせてもらう」

「は!?　ずりィぞ、そォいうのァ先に言えって！」

「お互い汗をかいた。汚れた。だから――風呂に入ろう」

――いやァ、それァちょいと遠慮したいなァ。

おじさんはさ、おじさんなんだよね。

もうそろ慣れろって言い分はごもっともなんだけど、女の子とお風呂、ってな

ちょいと……な？
　マッドチビ先生と入った時にも言ったけど、色々あるし。そぉでなくとも、色々あるし。な？
「安心しろ。大浴場ではない。私の部屋の風呂だ」
「いやそっちも大概……」
「そして手足を縛らせてもらう。口も塞がせてもらう。目隠しもする」
「ン？　ンン？」
　ん？
　……ん？
「あァよ、ポニスリ。お前ってそぉいう趣味の奴だったのか？」
「安心しろ。洗うだけだ」
「なーんにも安心できねェんだが」
「加え――先日、キリバチから良い物を貰ってな。それを試してみたい」
「ははァ、鬼教官殿から」
「勝者特権だ。従え」

……いんやさ。
まァいいけど、ちょいと変態チックすぎねェか？
……なんかこえーなー、って。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ヘンな、気分だ。
すごく、ヘンな、気分だ。
「ん―！　んー！」
「ははは、そうか。気持ちがいいか」
気持ちがいいというか、やばいというか。
鬼教官殿に貰ったっつーアロマ？　みてェなのを嗅いでから――体の火照りが収まらねェ。そんでもって目が見えなくて、手足縛られてて、口も塞がれてて。
ヤバイ。
おじさんこういうオミセは入らなかったんだけどなー。いんやさ、勧めてくる奴

が友人にいたから知識はあるよ？　そォいうプレイの店。
　自分がされるたァ思ってなかった。しかも生真面目オブ生真面目みてェなポニテスリットに。
「この火傷の痕は……触っても大丈夫か？」
「ん」
　頷く。
　もう然して痛くねェ。肌が薄くなってるンで触るとくすぐったいくらいか。これが人間なら左目含めて色々機能障害が起きてたンだろォが、魔法少女ァ大丈夫。化け物扱いもわかるってなモンだ。
「……触るぞ」
「ん……んんっ」
「全く……私達のいない所で、こんな無茶を……。しかも傷を残しておく、など……」
　ツツーとポニテスリットの爪先が火傷痕をなぞる。
　ボディソープかさっきのアロマかァ知らねェが、よく滑るソレが挟まってるおかげで痛みァ欠片も無い。無いが、くすぐったさがやべェ。あとちょいちょい……そ

の、なンだ。そォいう所に近づくせいで、どんどんヘンな気分になる。
恥骨や鎖骨なんかの骨もやべェ。色々とやべェ。
「……梓」
「……ンッ!?」
「ん……」
唐突に、それが来た。
キスだ。塞がれた口のタオルが取られたのァありがたいが、別のもんでふさがれちまった。
混乱。おじさん混乱。
つかやっぱ鬼教官殿のアロマぜってェやべー奴だって！　ポニテスリットってこォいう事する奴じゃないって！
「暴れるな……。キスが、しづらいだろう」
「っぷは、おい、ポニスリそれ以上ァ」
「暴れるなと言った」
腹にずっしりとした感触。

乗られたンだってわかった。……その、肌とか、諸々をダイレクトに感じるままに。

見えてねえけど、多分、そォだってわかる。

っべー。

っべーっすよコレ。お縄どこじゃねーっすよ。お茶の間でボロクソに叩かれて出所した所で親戚一同に見放されてる奴だよこれ！

「ふふ……やはり、お前は黙っていると……酷く可愛らしいな」

「ポニスリ、ちょっと待て、話を聞けって」

「美しい銀の髪。潤い、張りのある肌。小ぶりな胸……腹も背も腰も、鍛えるという言葉の一切を知らないふわふわとした感触。ふふ、私やフェリカ、ユノンは元より鍛えていたからな、こういう質感は出ない……。シェーリースもあれでいて豊満な奴だ。梓、お前は……ああ、理想的だよ」

「んんんー!?　……ぁ、ふ」

なんだこの変態!?

おかしいって！　ポニテスリットァこんなヤツじゃねェって！

つかコレダメだ、俺までソッチの気になってくる。今はまだ理性を保ってられるからいいが、この香り、くそ、頭がクラクラしすぎる！

ど、どうにかしないと。

俺ァお嬢の告白だって断ってンだ。ちゃんとした理由で、付き合うのァ無理だって言ってンだ。

だってのにここで一線を越えちまうのァまずい。不味すぎる。

ああ、えーと。えーと。

そう！

腕部強化。腕の拘束を……解けねェ。なんだって解けねェんだ？

「昼間の捕り物劇に続き、私との戦闘。十二分に魔力を使い果たしている。……ふふ、今のお前は、この程度の拘束も解けん可愛らしい小鳥だ。あぁ……気分がいい。私の下でジタバタと暴れ藻掻くお前を見ていると、果てしなく、この上なく気分がいい」

「へ、変態！　変態！」

「いつもの粗悪な口調はどうしたんだ、梓。……ほら、ここを触られたら……」

「ひゃっ!?」
「ふふ、このように可愛い声が出る」
いや誰だって脇撫られたら出るよそぉいう声！
じゃなくて。
不味い。マジで不味い。
おじさんだぞ！
43歳のおじさんだぞ!!
だ、ダメだろ！　色々と!!
「どれ、下も……」
「申し訳ありません。お渡しいたしました品に重大な不備があったため、回収させていただきます」
「うお」
ジュルッ！　という水音と、冷静メイドの声。
場所的にアロマの位置から。
「……ミサキ・縁様。本人の意思無くそのような行為を行うことは犯罪です。それ

では」

またジュルッという音がして。

冷静メイドの声も、その気配も消えて。

俺の上から、重さも消えて。

衣擦れの音と変身の音がして、手の拘束が解かれ、足の拘束が解かれ。

ようやく、目隠しも外された。

「……すまなかった」

「あァよ、そいつァ良いよもう。お互い無かったことにしようぜ。んで、明日。鬼教官殿のトコに殴り込みに行くってなどォだ」

「賛成する」

浴室から出て、それはもう落ち込んだ声を出しているポニテスリット。

うん。だってお前、そういうことする奴じゃないもんな。

……あァ、まァ一線を越えずに済んでよかったよ。ぶっちゃけこれが虹色ロングとかだったらマジにヤられてたと思う。

なんぞか、オーレイア隊ァ俺を避けてるみてェで全然寄ってこないンだが。

さて、じゃあよォやく風呂に入れる、ってなことで。
あとは普通に湯浴みして、身体洗って、終わった。
なンだ。
それ以上ァ何もねーぞ、サービスシーンなんぞァ、ってな。

翌日、である。
ドアを蹴破る勢いで開けたのがまず俺。その後ろから、なんぞか申し訳なさそォについてくるポニテスリットと、シエナ。
開けたドアの先にいるのァ、ベッドでなんぞフルーツ食ってる鬼教官殿。
「ノックくらいしろ、と。何度言ったらわかるんだ」
「違法薬物を取り締まりに来たんですゥー。何か心当たりァねェですかー」
「はて？　何のことだかわからないな」
しゃく、しゃくりと。
林檎の咀嚼音が響く。
反省の色、無し。

んじゃまァ仕方ねェよな。
「シエナ！　閃光弾だ！」
「は、はい！」
「んっ!?」
俺とポニテスリットァ用意してたンで目を瞑る。
直後、目蓋越しにもわかる光量が室内中を満たした。
その光が収まった事を確認。脚部強化をして、鬼教官殿のベッドに乗る。その身体を踏まねェよォに気を付けながら――鬼教官殿の顔に目隠しを巻きつける。
「く、これは！」
「はっはー！　【痛烈】ァ視界内の相手に痛みを与える魔法だ、これで【痛烈】ァ使えねェ！　――今だシエナ、ポニテスリット！　全身くすぐり攻撃!!」
「おい待て、何を」
歳に見合わず、ってーとちょいと失礼だが、高らかに「きゃはははは」なんて笑い声をあげる鬼教官に、黙礼。誰に喧嘩売ってンのかわかってもらう。
……ところで。

あの甘い匂いが、こっちの部屋から漏れ出てンだけど。
「……ふむ」
そろーっと――ちょっとだけ、開ける。
開けて、閉じた。
「姉妹仲がよろしいことで……おォさ、何も見てないぜ俺ァ」
乳繰り合う憤怒と無表情の姉妹なんざ、欠片も見てねーって。
とまァ、こんな感じで。
怒りしょんぼりの【劇毒】が媚薬ポーションは、永久封印となりましたとさ。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「見てください見てくださいこれ！　Ｓ・級！　私、なんとなんとＳ級に上がっちゃいました!!」
「おめでとうですの、ユノンさん」
「あァめでてェな。まァ【光線】ァ汎用性もあるし、照射時間考えりゃ殲滅力も出

せる。元々Ｓが妥当だとァ思うがね」
「えへへ、実は去年と一昨年は座学で落ちてまして……」
「へェ、意外だな。太腿忍者ァ効率良いからそォいうの卒なくこなしそォなのに」
「私、意外と感覚派なんです！」
少しばかり日数が経って。
クラスはもうガヤりガヤりのガヤガヤり。
太腿忍者の言う通り、発表されたのだ。昇級試験の合否が。
「私は、Ｓのままだった」
「まァSSの壁は高ェだろォなァ」
「うん。でも来年こそは」
「その意気だ」
「私もＳＳＳにはなれませんでしたの……。座学は満点、討伐目標も一瞬で粉微塵にしましたのに、何がいけなかったんですの～!?」
「フェリカは、どうせ、試験官に≫早くしてくださいですの早く早く≪とかせっついて、内申点が落ちた」

「お、おぉ。言うようになりましたわねシェーリースさん。そしてまさにそうですわ。的確に的中ですわ……」
「あー、そうか。内申点とかあるンだったな」
完全に忘れてたわ。
んじゃ俺もあのブレイズって試験官からァ結構減点されてそォだな。条件達成不可になったンであンまり関係ないンだが。
「私は、S級になった。……ユノン。シェーリース。これからも頼む」
「おお！　凄いですミサキさん！」
「うん、【波動】でSに届くのは凄い」
まァそォだよなァ。
殺傷能力と殲滅力で言えばA班の中じゃ【波動】は一番下っつっても過言じゃねェ。それをよくもまァ。AからSだから、条件指定もあったはずなのに、それもクリアしてンだ。ま太腿忍者もそォだが。
「俺ァAのまんまさ。試験のあと、ポニテスリットにぐちゃどろにされたンでな」
「お、おい！　その話はやめろと」

「……ぐちゃ」
「どろ、に？」
「どういうことですの!?　ミサキさん、梓さんとナニをしましたの!?」
「ゆ、揺らすな。別に何も……」
「しただろォよ。俺の腹ァぶん蹴って誘拐して手足縛って目と口覆って馬乗りになって」
「おお、おい!!　梓、やめろ、やめてくれ。私が悪かったと何度も謝っただろう！」
「み、ミサキさん……？」
ヘン、確かにあの色々ァ鬼教官殿のせいだが、それを実行しようとしたのはお前なンだ。
精々お嬢に詰め寄られてくれ。
なんて、ニヤニヤしながらお嬢達に詰め寄られるポニテスリットを見ていると
――ふと、顔に影が差した。
見上げりゃそこにァ――なんだっけ、クラスメイトの。
クイネと、カギネと、瀬尾アルカと、ゆるふわにゃんこか。

「……」
「……」
「……」
「……」

4人ァ俺を向いたまま、何も言わない。動かない。
なんでっしゃろ。
知覚強化……は、いらねェか。
パン、という音が響く。
「え……」
「あ、」
「……」
声は2通り。
避けなかった事に驚いたのと、それでも尚とする声。
「な……にを、しているんですの？」
「フェリカさんは、ちょっと黙ってて」

叩(はた)かれた頬ァ右側。つまり火傷の方じゃねェってな、せめてもの気遣いかね。
「アンタの、せいで」
「……無駄だよ。もう行こう」
「だって、コイツが、コイツがあんなことしなきゃ！」
「別人なんだから、言っても仕方ないよ」
何か、一触即発な雰囲気出してるお嬢達に制止の手を向ける。
ま、そぉいう事もあらァな、って感じだ。
「……許さないから」
「あァさ。そうするといい」
「ッ!!」
もう一度振り上げられた手。
けど――それは、振り下ろされなかった。
止めたのは誰でもない、己。
……良い子達だねェ。
憤怒の形相なのァ2人。ゆるふわにゃんことカギネって子。

もう2人ァ2人の背を押して、教室を出て行く。
最後にもう一回1睨みされて、俺としちゃ肩を竦めるしかない。
「今のは……？」
「大丈夫ですの、梓さん」
「ん、ヘーキヘーキ。強化も乗ってなかったしな。お前らもヘンに怒らなくていいからな。そォいうことになるってな、予想ァついてたからよ」
まァ、なンだ。
簡単に言うなら――。
「あの」
「ン？」
「さ、さっきはごめんなさい。2人はまだ心の整理がついてなくて……」
「いいよいいよ。ついでにお前のあだ名ハスキー三つ編みな」
「本当にごめんなさい！　って、え？　あだ名？」
「おゥ。声がハスキーで、三つ編みだから、ハスキー三つ編み」
「また梓さんは安直なあだ名を……」

戻ってきたのは、瀬尾アルカ。
国で会った瀬尾奏の姉ちゃんってな奴だった。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ご存じ、ですよね。今回のベルウェーク襲来事件及びホートン亜種による魔法少女達の洗脳事件で……その筆頭が、梓さんだった、という話は」
「あァ、知ってる。だから俺にトラウマ持ってる奴が多いのも知ってるし、アイツらがその最たる例だってのも知ってる」
「う……そう、なんです。実はただのホートン種の事件時から色々重なってて……。全部、記憶に残ってるんです。貴女が……私達を殺した時の記憶が。首を掴んできて、苦しいのになんだか心地よくなって、気付いたら蘇生槽にいて。気付いたら……みんなを、仲間を殺して回ってる自分の記憶があって。その最中でさえ、貴女に殺された記憶があって」
「あァさ、すまねェな。俺じゃねェが、謝る奴がいねェんだ、俺が謝っとくよ」

「……それも、わかってるんです。私達は……わかっては、いるんです」

けど、と。

ハスキー三つ編みは続ける。

「何度も、それがちらついて。魔法を使う時……必死の表情の友達の顔が浮かぶんです。必死の顔で自分に魔法を使ってくる友人が、それを殺そうとする自分の手が。魔法を使う時だけじゃなく、寝る時も、勉強をしている時も、教室にいる時も。ずっとずっと、頭からこびりついて離れないんです」

「……」

「≫やめて≪、≫止まって≪、≫お願いだから≪。そう懇願する声を私達は無視して、殺し続けて……でも、相手の子達も魔法少女だから、反撃して。私達が負けると、殺されないで、手足や目、口をぐちゃぐちゃにされて、捨てられて。それをする友達の顔も――それをされる、自らの心情も。全部全部明確に覚えていて」

魔煙草を吸う……のァ、流石に空気読めねェか。

ごめんなァ、って。簡単に言っちまうのも、多分違う。

「それで、最後の最後に……必ず貴女が来て、私達を殺すんです。それを何回も繰

り返していく内に、やっぱり貴女が……怖くて。貴女の顔が、貴女の目が。ずっと見てくるんです。……戦えって。少し休んでも良いから、また戦え、って。私はそれに頷いて、それを信頼して……それで、それで」

「で――今回の昇級試験で、トラウマに圧し潰されて、何の成果も残せなかった、と」

「っ……はい。ごめんなさい。逆恨みだってわかってます。そんなの関係ない、私達が実力を出し切れなかっただけだ、ってわかってるのに……」

「いんやさ、それァ確実に俺のせいだよ。俺がいたから、俺がいるから、集中できなかったンだと思う」

「そ、そんなことは」

「だからよ」

ま、これァちょいと誘われてたコトでもある。

こっからまた一年、お上の掌の上で踊り続けるってのも気に食わねェし、昇級試験ァ別にもう良いからな。

これァ、俺の意思決定ってことで。

「俺ァちょいと、旅をしてくることにした」
「え」
「……え？」
背後、お嬢達の方でも疑問の声が上がる。
まァそォだろォな。冷静メイドにすら言ってねェことだし。知ってンのァシエナとマッドチビ先生と担任の先公と鬼教官殿くらいか。
「ごめんな。ぶつけ先にァなってやれないが、視界から消えることで癒える傷もあンだろ。だから俺ァ、ＥＤＥＮを出るよ」
「え、え……い、いえ！　そこまで、そんなことを言ってるんじゃ、その、ちがくて、その」
「お前らのせいじゃないさ。これァ俺の意思。……ちょいとな、俺が外に行かなきゃならねェ要素が多すぎるのさ。だから――」
「だから、なんですの？」
底冷えする声が背後から聞こえた。
けど、振り返らねェで言う。言い続ける。

「だから、旅に出る。ＥＤＥＮとァ違う観点から世界を見て、また戻ってくる。そン時までに、傷ァ癒してくれると助かる。癒えてなかったらもっかい旅に出るからよ」

「――……わ、私は、そんな、そういうつもりで今の話をしたんじゃ……」

「重ねてごめんな。余計な罪悪感を背負わせちまうことになる。本当にごめん。けどまァ、絶対帰ってくるからよ。そン時までに、俺への恨みつらみを溜め込んどいてくれや。俺の顔見てトラウマになるんじゃなくて、俺の顔見たら魔法の出力上がるくらい、なンだ、怒りや憎しみに、ってな」

んじゃ、と。

席を立つ。

ハハーハ。

後ろの気配こえーこえー。

ハスキー三つ編みも――他のクラスの奴らも。

なんなら廊下の奴らも、みーんな俺を見てる気がする。自意識過剰かね？

「――ってなワケで、シエナァ！　特大閃光弾!!」

――»は、はい！　特殊超長広範囲炸裂閃光弾――打ち上げます！«

ダッシュする。

ハハハ。

ハーハッハッハ！

見たか、マッドチビ先生作、超長時間光り続けるフラッシュバン！　サングラスでもつけてなきゃ十分くらいァ目を焼かれる素晴らしい目くらまし！　材料費だけでパルリ・ミラのパフェが１１８２個買える四尺玉でィ！

向かう先ァ通路の先のバルコニー。そこを飛び降りりゃ、シエナが待ってるって寸法だ。サングラスをつけてなきゃ真っ白すぎてなンも見えねェだろォ通路の中を走り抜ける。

あと少し、あと少しで――。

「馬鹿ですの？」

「なンだ、お嬢もついてくるかよ！」

「え」

「SS級１人がいなくなった程度で瓦解するほどＥＤＥＮァ甘かねェだろ、なァ！」

「え、え」
「折角だ、逃避行と行こうぜ――頭に愛ァつかねェが！」
立ち塞がったお嬢の襟首掴んで走り抜ける。
まさかお嬢もンなことされるたァ思ってなかったらしい。ハハハ、知るか知るか。
アレだ。
「こ、こんな魔法少女だらけの所にいられるか！　俺ァ部屋に帰らせてもらう！――ってな！」
お嬢を引っ掴んだまま、空にダイブ。
それをキャッチするはシエナ。俺の掴んでるお嬢に何やら驚いた様子だったが、一つ頷いて発進してくれた。
「ちょ――ど、どこに!?　私もう八回生ですのよ!?　この一年で卒園して、軍部の方に――」
「留年だ留年！　俺を振り向かせたいってンならちょいとくらいワルを覚えな、優等生！」
向かう先は、空に輝く銀の竜。

移動要塞・偽竜母艦ＬＯＧＯＳ。
その首元のハッチが開く。
突入する俺達。
ちなみに外部へ遠征するためにァ色々手続きが必要なンだが、俺のァともかくお嬢のァ一切済んでない。当然だ、さっき思いついたんだし。
「もう、遅いじゃない。……あら、連れてきたのね、その子」
「梓、貴女は考え無しが過ぎる」
「戦力としては最上」
「す、少し予定外の燃料を使いました……」
「ははは、すまんすまん！　んじゃ出してくれマッドチビ先生！」
「はいはい」
眼下。呑気にも大きく手を振ってる太腿忍者と、少し不満そうな顔でこっちを見てる背中メッシュ。
そして。
「――次に会うときは、私もそっちに行く!!」

「なンだよ、来たいなら来たいって言えよ。マッドチビ先生！」
「はいはいはいはい」
ＬＯＧＯＳから、銀色の触手がびゅるりと伸びる。
それは的確にポニテスリットの胴体に巻き付き。
「え――うわぁぁあああ!?」
「ぷっ、なンだその声。初めて聞いた！　ははは、ポニテスリットってなああやって驚くンだな！」
「収容するわ。アンタ達ももう少し中に入って。閉められないでしょ」
「はいよ」
ポニテスリットがＬＯＧＯＳの内部に飲み込まれたのも確認して。
そもそもコレが何なのかわかってない金髪お嬢様をぎゅっとこっちに抱き寄せて。
「んじゃ、行くか、マッドチビ先生」
「ええ。目的地は――」
「始の点！」

帰ってきて早々悪いが、ＥＤＥＮ！
またさようならだ！
俺ァちょいと――俺のやるべき役割ってなを見つけに行く！
「ははは――こりゃ、良い船出だ、ってな！」

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

第一章　Ⅱ　第二章

終の因　Ⅱ　始の点

43・藍羽生能倶土目森伊豆負不座頭伏零栖・

始の点。

それが、マッドチビ先生から聞いたある迷宮の名だった。

終の因の裏側にあるというそこァ、魔力の噴き出る地脈噴出点。終の因を含むクルメーナや大きな丘などの小さな地脈吸入点の逆。その迷宮のある場所から、世界に魔力が噴き出して、それが世界中を巡っているのだ、と。

私も行った事はないんだけれどね——なんてマッドチビ先生ァ言ってたが、大体の場所は知っているとのことで。

「なるほど、その迷宮に行くのが目的、と。それで、行って何をしますの？　攻略……をするにしても、今の私達は蘇生槽があるわけではありませんし、死んだらＥＤＥＮにまで帰る事になりますのよ」

「死ななきゃいいだけだろ、ンなこと。初見で攻略すりゃいい。んで——今度こそ俺ァ、その迷宮を壊す。化け物ってな魔力の淀みから生まれるんだ。魔法少女ってな魔法に覚醒して生まれるんだ。じゃあ、魔力そのものが生まれなきゃ——もう、

悲しみは起こらない」

「……それは」

「私達も賛意している。アインハージャもヴァルメージャもその存在意義を失っている。目的が無いにも関わらず生まれてしまうアインハージャなどいても仕方がないし、何より無用な争いを生んでしまうだろう」

「アインハージャも、ヴァルメージャも、ヒトが持つには過ぎた力を持ってる」

前提をな、ひっくり返しゃいいんだ。

俺の【即死】がなんのためにあるかを考えた。それって、世界を、魔力を殺すためなンじゃねェかなって。それをした時に何が起きるのかも考えたけど、色々考えた結果、やっぱり無い方が良いって結論に至った。

「そんなことをすれば……私達はもう、蘇生できなくなってしまいますわ」

「ああ、そォするっつってンだよ、お嬢」

「死んだら、終わりになってしまうんですのよ……？　それがわかっていらっしゃいますの？」

「それが普通なンだよ。化け物も魔法少女もただの動物に戻って、一回こっきりの

一生を過ごすンだ。化け物がいなくなンだから、魔法少女が死ぬ事も蘇生しなきゃなンねェって状況にも陥らねェだろ？」

「……梓は、魔法少女が……嫌い、なのか？」

「今の在り方は、嫌いだ」

今までァ、そっちにァそっちの、こっちにァこっちの理念があるっつって区別してるフリをしてた。

割り切れてない感情を、でも俺のが異端なンだってわかってるフリしてた。

それはもう、やめだ。

ただ一人、この世界で俺だけの感性で——俺だけの世界観で、この世界を変える。

「で、でしたら、梓さんは一度死んできた方がいいですわ！　魔力を世界から無くす——魔物も魔法少女も生まれなくする、というのは、とても良い事だと思いますの。でも」

「そうだな……それをするというのなら。一度蘇生して、腕や火傷を治した方が良い」

「……」

ほら。

まだ、これなンだよ。金髪お嬢様もポニテスリットも、まだソッチなンだ。

死は便利なツールでしかない。俺が死を厭う意味の本質を、未だに全く理解していない。結局、俺が悲しむから、俺が厭うから、俺が嫌うから。だから死を遠ざけているだけで——俺の世界観と彼女らの世界観ァ、根本の部分から違う。

それを無理矢理変えちまおうってのが今回の作戦だ。

「ま、どの道さっきお嬢が言ったよォに、既にＥＤＥＮからァ遠く離れてる。この先で死んじまったらもう俺にァついてこれねえってこった。命ァ大事にしろよ、２人とも」

露骨に意見を無視した俺に、２人ァ不満そォな顔を隠そうともしない。

馬鹿がよ。誰が治すか。別に傷に誇りを持ってるなンてこたないがな、死んで治す、なんてな——ンな吐き気のするよォなこと、誰がやるもんか。

「話は終わったかしら」

「おォ、マッドチビ先生。なンだ、もう見えたのか？」

「どんだけ近くにあると思ってんのよ、アンタ。まだまだかかるわ。嵐や雷雲が

あったら避けなきゃいけないから、真っ直ぐにも進めないしね」

「ほか。んじゃ何用だ？」

ちなみにこの魔力を、世界を殺す、ってな俺の作戦に、マッドチビ先生は「できるものならやってみれば？」なんて対応だった。から、できねェかもしれねェって可能性ァ頭に入れとかなきゃいけねェ。

止めはしない。けど、できるとは思ってない。そンな感じだ。

ただ、俺をＥＤＥＮから引き剥がすために、あと自分があんまりＥＤＥＮに逗留したくねェって理由でＬＯＧＯＳでの旅を許可してくれたに過ぎねぇ。始の点を見てみたい、ってのもあるらしいが。

「そ……それにしても、このＬＯＧＯＳというのは、凄いですのね。ガーゴイルという話でしたけれど……こうも広く、こうも快適だとは」

「へえ、見る目あるじゃない。ちなみにどんなところが凄いと思うかしら」

「まず、揺れがほぼない所ですわ。空を飛んでいる事を感じさせない。ほとんどが鉱石でできているというのに、室温は適切に保たれていますし、部屋の数や小物も自由自在。【鉱水】のディミトラといえば五回生になった魔法少女の誰もが習う名

前ですけれど、ここまでだとは思っていませんでしたの」
「す、すごい褒めるじゃない。何よこの子。そ、そっちの子は？　私について、何か知らないの？」
「勿論知っている。【鉱水】のディミトラ。世界で唯一反魔鉱石を自在に操り得る魔法少女であり、ＥＤＥＮ創設者達の友人。古くからいる魔法少女でありながらＥＤＥＮには所属せず、己が島を作り上げた強き者。等級区分はＳとされているが、準備さえ整えたのならばSS級に手を届かし得る――不定形のものを操る魔法少女の中には、貴女に憧れる者も少なくはない」
「そ、そうなんだ……？」
　チョロいなァマッドチビ先生ァ。
　……この分だと、もしかしたら――マッドチビ先生も、かもな、とは。
「あ、そうですわ。一つ思い出しましたの」
「ン？」
「梓さん、貴女は剣を扱うようになったでしょう？　固有魔法は使わず、一つ手合わせなどいかがでしょうか」

「遠慮しとくよ。俺ァ剣なんぞこれっぽちもわかんないンでね、素人の動きにお嬢が翻弄されて怪我でも負ったら敵わねェ」
「……えと、それは……もしかして、私が梓さん程度の剣を避けられないと……そうおっしゃっていますの？」
「だって魔法無しなンだろ？　知覚強化も身体強化も無いんだから、意識外で無作為な攻撃ァ避けられないに決まって――」
「……梓。貴女は戦士というものを舐めすぎだ。元よりそういう事をしていなかったのだから仕方のない事ではあるが……」
「火をつけたね」
……あー。
えーと。
「ま、まァ俺がお嬢の剣避けられねェしよ。やめよやめよ、危ねェよ」
「では、梓さんだけ強化有でいいですのよ。私は強化をしませんので――私に一太刀でも当ててみなさい」
「いやだから真剣じゃ」

「はいこれ。アンタ達の剣を真似て作った金属棒。中身抜いてあるし刃は潰してあるから攻撃力は無いに等しいわ。代わりに重さもなくなっちゃうけど、そこは慣れて」
「ありがとうございますわ、ディミトラさん！」
――あ、これは、逃れられないって奴ッスね。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

さて――昇級試験の件でポニテスリットとも戦ったばかりだが、まさかお嬢ともとァね。
んでもって、凄まじいまでのハンデ付き。
これァ勝たなきゃ嘘でって奴だ。
ＬＯＧＯＳ内に作られた修練スペース。道場みてェなそこで、２人構える。
俺の方ァ身の丈に合ってるたァ言い難い大きめの剣。お嬢のァ鋭い細剣。
ま、攻撃力のほとんどねェって話だ。

だったらさっさとケリつけて、ンな危ねェことァ終わらせようか。
「行くぜ、お嬢」
「遅いですのよ」
知覚強化。おかしい。目の前に剣がある。腕部を強化し、義手で受け止めろ！
「ッ!!」
「……そういえば、殺意が無ければ梓さんの直感は発動しない……でしたか。であれば」
底冷えする感覚に襲われる。
いつしか、尖り前髪との訓練の時にそォいう話をした。俺の周りには、俺を本気で殺そうと思ってくれる奴がいねェ、って。
――知覚強化を継続。聴覚強化。踏み込みは右足。視覚強化。剣先の軌道は――首。聴覚強化だけを継続し、視覚強化から脚部強化に移行。軸足捻って自分の剣を蹴っ飛ばせ！
左足で蹴り上げた剣が、今まさに俺の首に届かんとしていたお嬢の剣をカチ上げる。

――強化継続。柄を逆手に掴みなおし、思い切り地面に突き立てろ。剣の後方に身を寄せ、足音を聞け。

「あら、よく防ぎましたのね。――ですが」

「右！」

右と言いつつ右に出る。右から来るとわかっているフリをして本当に右に出る。その意表を突いた作戦ァ、けれど対応される。わかってる。どっちに転んでも、どっちに出てきても良いよォに構えてンだ。

――だから、ちょいとズルをする。

「低区亜不応環土鞭出印倶経路栖茶！」

「!?」

完璧な対応をしたお嬢の剣ァ、俺の上を掠めて行く。俺が転がり出てきた体勢からァあり得ねェ前傾姿勢になったからだ。

「雀伏亜伏地歯印土烈楠・」

「唸り声――何の技法ですの!?」

「槌止」

そして大きく、床を押す！
つまりまァ、ハンドスプリングって奴だ。それを、無理矢理やった。
やって。
「く――けど、たかだか曲芸ですの！　私には――」
――腕部及び脚部強化。捉えるのァお嬢の剣。その腹。中身の無い、刃の潰れた剣だって言うんなら――折れろ！
「あっ!?」
「――勝負あったなァ、お嬢ぬがっ!?」
「……ご、ごめんなさいですの。思わず手が出てしまいましたわ……」
なんか。
つい最近、全く同じ負け方をしたよォな。
「痛つつ……」
「だ、大丈夫ですの？　ごめんなさい、強く殴りすぎてしまって……」
「ん、あァそいつァ平気なンだがな。さっきやったのが、案外身体にキてる。無理

矢理身体動かしてるから当然なンだが……あー、滅多な事では使わんとこ」
「そう、それですの。何なんですの、さっきのは。ベルウェークの時や、あちらの梓さんを相手にする時も妙にうーうー唸っていると思っていましたの」
「まァ強化の一つ、かな。俺だけじゃねェ、青バンダナも赤スカーフも使えるぜ」
「使い得るが、梓、貴女程自在に使い得るわけではない」
「私達が知っているのは単語程度。聞けばわかるけど、自分からは難しい」
「そォなのか。それァ知らなかったな」
筋肉痛ってーの？
無理矢理身体捻ったり動かしたりしたせいで、動いた直後だってのに身体が痛い。こォいうのってもっと後に来るモンなンじゃねェのかなァ。
あー。
痛い。
「そういえば、剣の勝負だというのに最後は殴りだったな」
「そもそも俺ァ剣なんざ使えねェんだって」
「なんなら一度も梓から剣での攻撃をしていないんじゃないか？」

確かに。
何の勝負だったンだ一体。お嬢が強化無しでもアレだけ動けるやべー奴ってながわかったってだけかコレァ。
「あー、つか、なンでお嬢ァそんなに動けるンだ？　強化しねェで戦えるってながまず意味わかんねェんだが」
「梓さんだって終の因に潜る前は強化無しで戦闘していましたのよ？」
「そりゃ、まァそォだが。そォいうんじゃねェだろ、お嬢のァ」
「ああ、フェリカの戦い方には何か型のようなものを感じた。アイン……魔法少女となる前から武芸を嗜んでいたのではないか？」
「それは当然だろう。フェリカはアールレイデなのだから」
「……アールレイデだと、何なんだ」
俺がお嬢の事を金髪お嬢様って呼んでンのァ、一応ホントにお嬢様だって知ってンのと、口調がお嬢様っぽいから、なンだが、そォいやアールレイデ家っつーのの実態ァ知らねェなァ。
なンだ、武芸一般に秀でた家なのか。

「隠す事でもありませんから言いますけれど、アールレイデというのは魔法少女を生み出すための家、ですわ。国の出来た当初から存在する貴族にして、沢山の子を成し、その女児の全ては魔法少女となるために訓練を受ける……そんな家ですの」

「……だがよ、魔法少女ァ遺伝しねェだろ。魔法少女になるための訓練なんざしても――」

「ですから、成れなかったらそれで終わりですわ。学生時代の全て、友人などの交友関係の一切を断って訓練を積み――そこから魔法少女が生まれたら、初めから十二分な戦力として輝ける。覚醒しなかった者は軍部に行く。それがアールレイデですの」

「そいつ、ァ」

「だから私は成功例……幾人もの姉妹の中で、数少ない魔法少女になることができたアールレイデ。故の強さですわ」

……魔法少女を生み出すためだけの、家系。

そんなものが。

「そういう意味では、私はウィジさんやリジさんに似ていますのね。戦うために生

まれた存在――であるが故に、他の子よりは強い信念を持っているつもりですの」
「そうだな。フェリカ、貴女は私達に似ている。とするのならば、アールレイデにも……あるいは魔法少女にも、為すべき事、というものがあるのだろうか？　私達のようにベルウェークを討滅せしめんと生まれるように、何か滅ぼすべき敵があるのではないだろうか」
「……少なくとも私達は、魔物と戦うために存在している、と考えている。そう習ってきた、が正しいか」
「ならば、魔獣、いや魔物のいなくなった未来において、魔法少女の存在意義は無い。ということだな」
「それは……そう、だな」
何を勘違いしてンのか、青バンダナァ俺の考えを２人に納得させようとしてる感じがある。
いやまァ、納得させてーってな俺も同意なンだが、ンな詐欺師みてェなやり方じゃなくともいいだろうに。
……でも、魔法少女を生み出すためだけの家。そして、魔法少女になるためだけ

に生まれてきた、かァ。
　そいつらの目的を奪っちまったら……なんぞ、ンな事に配慮できる程俺の器ァ広くァ無ェんだけどさ。
「フェリカ。私とも一手どうだろうか。≪矛≫のアインハージャとして、試合という形式で戦いを申し込みたい」
「ええ、いいですのよ。強化の類はいかがいたしますか？」
「無しで行こう。ＬＯＧＯＳを壊すのもいけないだろうから」
「わかりましたの」
「なら、私はミサキと戦ってみたいかな。≪盾≫のアインハージャとして。貴女も防御を攻撃に転じさせる戦士。だから、訓練になる」
「む、良いぞ。しかし、私にはこの籠手があるが……」
「はいはい盾ねはいはい作ったわよ中身抜いてないからちゃんと重い奴。これでいい？」
「万能だなマッドチビ先生」
「鍛冶職人の道もいいんじゃないかと最近思ってるわ」

そォだよなァ。
彫金師がやる仕事じゃァ無ェもんなァ。
さぁて、ちょいと俺ァ席を外しますかね。なんぞ――こいつらの戦闘ってな、参考にならなそォだし。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ふゥ」
「お疲れ様、とは言ってあげるわ。けどね、アンタ、元から戦いが好きって奴じゃないんだから、無理だと思ったら断ればいいのよ。あのコ達は根っからの戦士。アンタはそうじゃないでしょ？」
「あー、まァ戦士でァあるかもしれねェが」
「嘘吐きなさい。アンタただの子供でしょうが」
や、企業戦士っつー戦士で。
まァンな冗談ァ置いといて。

「マッドチビ先生ァ、その、そォいう過去だったワケだから、素の強さァそれほどでもねーよな？」
「ええ、奴隷の中でも看板商品だったから、戦闘には出されなかったわ」
「奴隷、ねェ」
あンま使いたくない言葉だったから避けたのに、まァ同情されたくねェって言ってンだから余計な配慮だったンだろォが。
「……もしかしたら、だけど」
「ン？」
「始の点には、私の国を襲った魔法少女達……つまり、ＥＤＥＮの創設者達がいるかもしれないわ」
「そりゃまた、どォして」
「アンタの狙い通り、始の点は魔物や魔法少女にとって無くなってはならない重要な地点よ。なら――」
「そいつらが敵に回るかもしれねェ、ってことか」
「ええ、そう。アンタの言いたい事はわかった。けど、あの子達……あぁ、ヴァル

メージャを除いた2人のことね。あの子達を見て、話して、分かったでしょ。――なんでそんなことをするのか。蘇生できなくなる、なんて――なんでそんな、恐ろしい事を、って」

「あァ。ま、そンな反応だったな」

俺ァ死は怖いモンだって知ってる。死ってな一回しか訪れなくて、訪れたらもう会えなくなるんだって。もうソイツとァ、ただ墓前に語り掛けるくらいしかできなくなるンだ、って。

そォいうことを、知っている。

けど、長い事魔法少女やってると違ェんだろォな。

死ねば助かるのに。死ねば治るのに。死ねば――どんなに苦しくても、痛くても、また元気になって会えるのに。

そォいう理念が蔓延してンだ。まかり通っちまってンだ。

だから、それを壊すなンざ。それを無くす、なんざ。

まさに悪魔の所業――ってな、はは、俺が悪魔って、冤罪じゃなく呼ばれる日も近いのかね。

「正直に言えば、私もそっちよ。私の場合はちょっと違うけど」
「魔法を消すなんざ、なんて勿体ねェことを――とか、そんな辺りか？」
「大正解。【鉱水】が使えなくなる、なんて考えられない。どれだけ不便かと思うと、今ここでアンタを殺してしまった方が良いんじゃないかって思うくらい」
「こえーこと言うなよ」
「創設者たちはそう思うかもしれない。便利云々は置いておいても、何故そんなことをするんだって――アンタの敵に回る可能性は十二分にある」
「知るかよ、ってな、無理な話か」
「ええ。戦闘は必至でしょうね。けど、アンタは彼女らを殺さない。殺せない。【即死】は十二分に彼女らに対抗し得る魔法だけど、使い手のアンタが見合って無さすぎる。……最悪。いいえ、ほぼほぼ10割の確率で――アンタは死を迎えるでしょうね」
「あァよ、だろォな」
ＥＤＥＮの創設者たち。
何を思ってＥＤＥＮなんてものを作り上げたのか。「魔法少女のための楽園を作

る」。その真意ってな、一体なンだってのか。
そんでもって、なンでＥＤＥＮにいねェのか。本当に始の点にいるとして、なンでそこにいンのか。
聞きたい事は山ほどあるが。
「その上で言う。知るかよ、ってな。俺ァ俺のエゴを貫くって決めたンだ。たとえ、もし。お嬢やポニテスリット、マッドチビ先生から見放されたとしても、俺ァ進むぜ。それを俺の役割に置きてえからな」
「……そ。ま、私がアンタの敵に回ることはもうないから、安心なさい。私は戦場に立つべきじゃない子に向ける槍は持っていないわ」
「さっき殺すかもとか言ってたじゃねェか」
「例え話よ例え話」
わかってるさ。
魔力を殺す、世界を殺すってな――今ある世界の否定だってのァ、ひしひしと伝わってる。
考え付いた時点で、なんぞ圧力みてェなのを感じてンだ。彼女ァ見てくれている

みてェだが、世界ってな大きくてよ。
　わかってる。
　わかっては、いる。
「もう一つ、考えておくべき事があるわ」
「ン。そいつァ――魔力を殺せたとしても、化け物が死なねェかもしれねェ、って話か？」
「そう。よく考えているわね」
　ま、それァそォだ。
　別に化け物ってな魔力の淀みから生まれるってだけで、その身体が魔力で編まれているってワケじゃァない。精神体なら話ァ別だが、肉体持ってる奴ァ魔力が無くなったトコロで死なねェ可能性ァ十二分にある。ま、それァ魔法少女側も同じ。魔法が使えなくなる、みてェな事ぁあるかもしれねェが、それでよォやくスタートラインだろう。
　……あ。
「なァ、マッドチビ先生」

「何よ」
「ＥＤＥＮってな、学園長殿の魔法で浮いてンだっけ？」
「そうよ。終の因は元々地面にあった迷宮だもの。だから――あ」
あ。
「……魔力を殺す手段が見つかったとして、その場ですぐに、ってなダメだな」
「そう、ね。私にとって一般人なんていてもいなくても問題ないからどっちでもいいけれど、流石にその辺の色々は倫理として理解できるわ。どうでもいいけど」
「おォ、マッドチビ先生の口から倫理なんて言葉が出てくるたァ、俺ァ感涙だよ」
「やっぱりどうでもいいわ。国に終の因を落としなさい」
あぶねェあぶねェ。ここで話しておいてよかった。
向こう見ずで行き当たりばったりたァホントあぶねェな。危うく大量殺人になるとこだった。非善だから良いとかいう声ァ無視させてもらう。そいつァ俺の理念に反するンでな。
「ちなみにだけど、あとどんくらいで着くンだ？」
「だから、まだまだよ。結構かかわるわ。途中で補給にも降りるつもりだし」

「補給って……何を？　俺達ァ飲み食い必要ねェだろ」
「鉱石よ。またどこぞの無人島を丸々飲み込ませてもらうわ」
「……補給っつか、略奪じゃねェか」
じゃあ何しに降りるンだよ。
「流石にいつまでもＬＯＧＯＳ内部じゃ気分も滅入るでしょ？　これは私の配慮なんだから、ちゃんと受け取りなさい」
「あァよ、俺達の事考えてくれてありがとォなマッドチビ先生」
「単純に褒められて気分が良くてあの子達に何かしてあげたいとかそんな事じゃないからね」
「あァそォいうこと」
妙なトコで律儀だよなァ、マッドチビ先生ァ。
おじさんァまァこォいうトコですし詰め状態の徹夜マーチってなよく経験してたからそこまででもないが……確かに、ずっと室内ってな色々とな。これでＬＯＧＯＳにバルコニーでも、とか思う奴ァ馬鹿だ。なんたってＬＯＧＯＳは凄まじい速度で飛んでる。外に出るのァ愚策オブ愚策。寒ィしな。

「あァそォだ。ちょいと俺ァシエナのトコ行ってくるよ」
「ええ、わかったわ」
手を振って、痛む体をよたよたやりながら、ブリッジを出て行く。
向かうのァ、シエナの部屋。
……女の子の部屋に入るのって、えーと、ノックだけでいいン……だよな？

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「あ、いらっしゃいませ、梓・ライラック様」
「ン。……燃料補給中か」
「はい。あ、大丈夫ですよ。確かに予定外の消費でしたが、活動に関わる程のものではないので」
「あー。えーと、俺ここにいても大丈夫か？」
「？　はい、大丈夫です」
シエナの部屋に入ったら、シエナが腹ァ晒してた。

……あっちのマッドチビァ何を思ってこんなトコに燃料補給口をつけたンだ。

「あれ、それ、魔石か？」

「あ、はい。私の燃料は魔石燃料と言いまして、私自身は魔力を扱い得ませんが、私の身体は魔力の籠った鉱石の、それを更に液体化したものになるんです。ですので、こちらの主ディミトラに説明をさせていただいたところ、こうして主ディミトラのくださったものと同じものをくれて……」

「へェー」

魔石。

あンまり知られてる鉱石じゃねェが、前に俺が使ってた空の魔石含む、魔力を閉じ込める石ってなが存在する。産出量ァそこまででもない上、扱いにも結構な技術が必要だってンで市場に出回る事ァ少ない。安藤さんがあンだけ量を取り揃えていられたのァ多分ソォイウルートでもあったからなンじゃねェかな、とか、今になっては思う。

魔力を含んだ石を、その性質を保ったままに液体化して、燃料にする。

確かに【鉱水】を使えないとできねェ技術だろう。

……ん？　だが。
「あっちのマッドチビァ、【鉱水】ァ使えなかった……ンだよな？」
「はい。少なくとも私が製造された時には既に使えないと仰っていました」
「じゃあそン時の魔石燃料ってな、どォやって作ってたンだ」
「天然の魔石燃料を用いていました」
「天然の魔石燃料？」
自然に魔力を含んだ石が液体化した、ってことか？
ンなことありえンのか？
「そうですね……では、梓・ライラック様。死した魔物や魔法少女の肉体がどうなるか、というのは知っていますか？」
「あァ、世界に溶けるな。あンま長い時間残ってねェってなが死体ってモンだ。人間やただの獣ァ違うが」
「はい。ですが、何故溶けるのか、を知っているでしょうか」
何故溶けるのか？
……ふむ。

「普通に考えりゃ、何かが分解してる、とかそンなトコじゃねェか？」
「いえ、そうではないんです。説明しますね。えっと、魔法少女や魔物の肉体というのは、それを操る精神体が死ぬ、あるいはいなくなった場合において、肉体にある魔力素、というものを繋ぎ止める事ができなくなります。そうした場合、これら肉体は形を保てなくなり、まるで世界に溶けてしまったかのように極小の粒になるのです」
「ほォ。んじゃなンだ、溶けてるよォに見えて、見えなくなった肉体ってながその場にあンのか」
「いえ、地面さえも通り抜ける程に小さくなるので、下へ下へと沈殿していきます。それが何度も何度も繰り返されることで、魔力素の密度は高くなる……と、ここまでは理解できますか？」
「あァよ。つまり、堆積していくワケだな」
なンだ、前世知識で微生物なんぞがいるのかと思ったが、どォにもそォじゃねェらしい。
いや微生物ァいるンだろォが、確かにやってンのが微生物だとしたら分解速すぎ

るもんな。【即死】で殺したら数十秒で死体消えるし。

「魔力素の密度が上がると温度上昇が起きます。魔力密度が上がると光を通さなくなる、というのは先日初めて知りましたが……」

「あァな」

「つまり、一定の場所で魔法少女や魔物が死ねば死ぬほど、そこに魔力素が堆積して行き、先にあった魔力素は更に更にと密度、及び圧力を増していくのです。同時に、温度も」

「ははァ」

つまるところ。

「それで、最終的に魔石燃料になるワケだ。魔法少女や化け物の魔力素を含んだ鉱石……あるいは、近くにあった鉱石がその温度上昇によって魔石燃料になり、そうなることで上にあるモンを抜けて地表近くにまで昇ってくる。それをマッドチビァ掘り出してた、と」

「はい。ですが、この方法によって産出された魔石燃料は異物が多く、その選別作業に主ディミトラは苦心していました。【鉱水】がないと難しい、と」

「だろォな」
そォいや恐竜島でもマッドチビ先生ァ似たよォなコトやってたっけ。
今選別中だから！　とかなんとか。
純度を上げるための作業ってな、さぞかし大変なンだろォよ。
「……いや、だが待て。ってことァなンだ、お前やマッドチビの拠点にしてたあの無人島ァ、数多くの魔法少女や化け物が死んだ土地、ってことか？」
「どう、でしょう。私が製造されてからはあそこで戦闘があった、ということはありませんでしたが……」
別にあそこじゃなくてもいい。
そォいう場所がある、ってワケだ。魔法少女や化け物が数多く死ぬよォな場所が。
……そォいやなんぞ、似たような話があったな。
そう。
安藤さんから聞いた――フリューリ草の生える場所の話。
「なァ、シエナ。それってもしかして――」
疑問を、ぶつけようとした。

けどそれァできなかった。
突然――ＬＯＧＯＳが、大きく傾いたからだ。
「アンタ達！　敵襲！　敵襲よ！　足場やプテラゴイルは用意してあげるから――アレ、なんとかしなさい！」
敵襲。
俺とシエナは頷き合い、シエナァ腹からチューブをちゅぽんと抜いて――ブリッジに向かった。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

44・藍織其迂音徒塔栖多泥阿爛迎時・／糸伊豆院歩渋琉・／藍夢庵繰離・

敵襲。ぶっちゃけマッドチビ先生なら大抵の攻撃にァ対処できるたァ思うンだが、それでもって呼び集めたって事ァ、よっぽどの敵なンだろう。

「マッドチビ先生！」

「あ、別にアンタは来なくていいわ。戦わせる気ないし」

「私も……！」

「アンタもまだ燃料補給し終わってないでしょ。戦いは戦える奴らにやらせとけばいいのよ」

出鼻をくじかれた。

おいおい、みんなが戦ってるってのに、俺とシエナだけ待ち惚けってな無理な話だぞ。

「じゃあ聞くけど、アンタ【神速】や【喧槍】の間に入って戦えるワケ？　敵はア

レだけど」
「アレ……？」
ブリッジの硝子窓。その先を指さすマッドチビ先生。
そこには――なんぞ、霧の巨人、みてェなのがいた。
ＬＯＧＯＳから伸びた足場とプテラゴイル達を踏み台に、４人の戦士がそれと戦っている。
「なンだ、ありゃ」
「ミストベイル。海上にいる魔物ね。ミスト種の中でも巨大にして好戦的。厄介なのは、その身体の核をあの霧に隠している、ってトコ。攻撃方法は霧を凝固させての氷の礫や槍。防御は当然霧になって当たらない、ってヤツ」
「ンだよ、そりゃ。明らかに――」
「オリジン、ではないわ。ディケントなのよ。始めはうっすらとした霧でしかないの。核も見やすいから攻撃もしやすい、そこまで強い魔物ではないわ。けど、ここまで巨大になると――」
氷の礫。

それが、こっちに飛んでくる。
防いだのァ赤スカーフ。【静弱】で完全に防いでくれた。
「シエナ、魔力検知でコアの場所ァわからねェか？」
「……霧全体に微量の魔力が含まれています。……私の目には、霧ではなく――とても大きな魔物、にしか見えません」
「そか。んじゃ俺が出るよ」
「……アンタ、話聞いてたのかしら。【神速】に任せなさいよ。【波動】と【喧槍】でもいいけど。【即死】にできることは無い、って今言ったつもりだったんだけど？」
「【即死】にァそうかもしれねェが、俺の司ってンのァ命なンでね。そっちの訓練も怠っちゃいねェんだ――わかるぜ」
「へぇ。なら出すわ。……そっちの行きたそうにしてるのも」
「ありがとうございます！　主ではない主ディミトラ!!」
「その呼び方なんとかならないの？」
シエナと一緒にハッチから出る。
うぉ、寒ィな。魔法少女が寒がるってな相当寒いぞ。霧のせいか？

落ちて行きそォになる俺をシエナががっちりつかんで、噴射機構（ブースターユニット）で飛翔。みんなの元へ行く。

プテラゴイルの一匹に降り立って――よし。

「――よォしお嬢、ポニスリ、青バン赤スカ！　あとシエナ！　巨人退治だ、気張ってくぜ！」

「なんで出てきましたの!?　邪魔にしかなりませんのよ!?」

「馬鹿かお前は。私達がこれだけ時間をかけているんだ、これ以上守るべき対象を増やすな」

「梓、貴女の鼓舞の力は素晴らしいが、戦場を駆ける戦士ではないと何度言えばいい？」

「単純に邪魔。ＬＯＧＯＳも守らなきゃなのに。早く中に戻って」

……。

泣いちゃうぞ、おじさんは。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「いいから聞け！　コアの場所ァ俺がわかる！　結構小せェから【喧槍】で狙い撃つのァ無理だ、霧を散らすことに専念しろ！　場所ァ首に近い中心部！　お嬢とポニテスリットァ両端に回れ！　全体が霧だっつっても塊ァある！　切り離して殺せば数も減らせる！」

「承知……【喧槍】！」

プテラゴイルを足場にした青バンダナから、無数の槍が射出される。

それの一本一本ァ霧に飲まれちまうが、数が数なンで段々とそれらを散らして行ってくれる。

「ポニテスリット、【波動】で右肩の方から圧かけてくれ！　お嬢ァ左肩の方からだ！」

「私は？」

「赤スカーファ引き続きＬＯＧＯＳ防御！」

「わかった」

レーテーを起動。剣を引き抜いて、腰だめに構える。

刀身に【即死】を浸して行き――。

「プテラゴイル、バランス取りァ任せたぜ！」
クェ？　なんて声を出すプテラゴイルを無視して、思いっきり踏み込んでからの――腕部強化で横薙ぎ！
それで飛んでいくのァ、ポニテスリットに褒められた【即死】の飛沫。霧の巨人だ、でけェんだ。だからそれァ簡単に直撃し――その部位を、殺す。
……はず、だったンだが。
「魔力反応……巨体の一部から魔力が失われました！　恐らく通常の霧になったものと思われます！」
「ウォムルガ族の諺にこういうものがある。実楠阿泥伏負不空加魚多韻地思惟（大海に染料を一滴落とす）」
焼け石に水ってコトね。
はいはい。そーですか。
「んじゃシエナ、ミストベイルの頭部――と思われるトコに、昇級試験の時やった極太光線撃ってくれ！」
「了解しました！　両腕変形、合体！　実包装填、３！　加速力場形成、熱量上昇……！」

「頼まァ！」
「発射します！」
ガションガションガションとシエナの腕からカートリッジみてェなのが排出される。海に落ちるかに思われたそれァプテラゴイルが上手くキャッチしてくれた。偉いなコイツらホント。
そんで――やっぱり凄まじい熱量が、彼女の掌から放たれる。
豪、なンて音を立てて光ァ空を、霧をぶっ飛ばし、その頭部と思われる場所を消し飛ばした。
当然だがそこにァコアはない。移動したな。
「ポニテスリット、大きめの【波動】をぶつけろ！」
「了解した――【波動】！」
いつかの演習でやった、超規模の【波動】。それは確実に霧を雲散させる。コアは左側へ。
だからお嬢に指示を出そォとしたら、ンなこと言う前にお嬢ァ左肩っつか左腕の全体を細切れにしていた。刃の部分じゃなく剣の腹ァ使って少しでも散らそうとし

てやがんな。俺の考えァ遅い、ってか？
　両腕と頭部を無くした霧の巨人ァ、けれどそれでもと――胸部に何か、氷の塊みてェなのを出現させる。
　クルクルと回る十二面体。鋭利なソレの向く先ァ――俺、だな。
　いいぜ、ホームランよろしく打ち返してやらァ。
「知覚強化――」
「【静弱】。……あんまり余計な事考えないで。調子に乗らないで」
　あ、はい。
　……なんだろォなー、この。
　ホンットに頼りにされてねェっつーか、マジで俺要らないんじゃねーか、っつーか。
　なんならマジで邪魔になってるだけなんじゃねーか、っつーか。
　なァ？
「くぇー。じゃ、ねェんだわ」
「梓！　今核はどこにある!?」

「ン――ほとんど海面に近い！　上にでてる胴体部分に攻撃しても何の意味もねぇぞ！」

「それだけわかれば十分だ――【喧槍】弐式……！」

それは、いつも通りの【喧槍】じゃなかった。

いつもの【喧槍】ってな、自分の手に槍を一本生成するとか、それを無数に射出するってな魔法だ。だがそれァ――持つ事なんざままならねぇ、でけェでけェ、太すぎる槍。槍っつか、もう塔。

「やはり、ヴァルメージャの御業とは――想像力次第でどうとでもなるな!!」

青バンダナァそいつを。

いつも通りの速度で、射出した。

「すげェな、青バンダナ。いつのまにあんなのを開発したンだ？」

「ＥＤＥＮに滞在している間、私達とて何もしていなかったわけではない。他のヴァルメージャ……多くはＳ級やＳＳ級とされる魔法少女の魔法を観察させてもらっ

ていたのだ。昇級試験の期間であるから、遠征組、というのも多くが戻ってきていたしな」

「ちなみにだけど、私も【静弱】の新しい使い方を見つけてる」

「へぇ！」

ミストベイルァ青バンダナの極太槍で無事討滅できた。シエナがコアの消滅も確認してくれてる。

結局俺ァ、ほぼ何もできなかったってワケさな。

戻ってきた俺に「ほら言ったじゃない」みたいな顔してくるマッドチビ先生ァおいといて、俺達ァシエナの部屋へ。燃料の再補給ついでに話題ァ青バンダナの魔法の使い方について、になった。

「ですが、まだ魔法を自覚してから十数日程……なんですのよね？　それでよく……」

「私達が初めて見た魔法が【侵食】と【鉱水】であるが故、かもしれない」

「なるほど……確かに変幻自在な魔法の代表格だ」

槍を形成し、射出する。

青バンダナの【喧槍】ってな言っちまえばそれだけの魔法だったはずだ。≫矛≪の

アインハージャとして妥当な魔法で、本人の戦闘力も相俟ってAからSくらいだろう、と予想していたが……。

　こりゃ、SS、じゃねェかな。もし今の太さの槍を、通常通り無数に射出できンなら、それだけで攻城兵器だ。

「そォいや2人とも昇級試験ァ受けてたよな。どォだったんだ？」

「合否を受け取る前にＬＯＧＯＳに戻ってしまったが、試験官にはＳだと言われたな」

「私も」

「う……申し訳ない、ですぅ……」

「あァごめんごめん。責めてるわけじゃねェって、だからそんな落ち込むなって」

　多分自分のせいで、とか思ったンだろォけど。

　シエナのアレが無くても、多分俺ァＳ行けなかったンじゃねェかなって思うよ。

　このレベルの殲滅力ァ俺にァ無い。とっておきの【即死】の飛沫もなーんの役にも立たなかったしな。

「魔法の使い方、か」

「ですのね……」
「なんで２人まで落ち込んでんだ？」
「……いや、何。私達の魔法にも、新たな使い方がないものか、と思ってな」
「ミサキさんは十二分に形を変えている方ですわ。けれど、私は速くなるだけで……」
「速くなるだけでSS級に行ってる奴が何言ってンだよ」
「もしその使い方で、新たなものがあれば、夢のＳＳＳ級に届くのかもしれませんのよ!?」
「お、おぅ」
その等級区分だのなンだのも消しに行く旅だってなわかってンのかね。
しかし、ＳＳＳ級か。
キラキラツインテの話じゃ俺ァ届き得るってな言われたが、お嬢ァどォなンだろな。
正直【即死】より【神速】とか【神鳴】とかのがＳＳＳっぽくァ感じるンだが。
「なァ青バンダナ。太くできるってこたよ、細くもできンのか？　細く、小さく」
「ふむ。考えた事も無かったが……【喧槍】」

「おおー」

一歩離れて、青バンダナの手に現れるのァ、細くちまっこい槍。

長さ３０ｃｍくらいで、細さァ……直径１ｃｍもないのか？　すげェな、よく折れねェっつか。

「強度は十分にある。これはこれで貫通力に優れそうだな。梓、貴女に感謝を」

「いや俺別に何もしてねェって。青バンダナの想像力がすげェんだよ」

「梓。私にも助言が欲しい。私の作りだした弐式はこれ。【静弱】」

そう呟いた赤スカーフの周囲。前後左右上下の六面に、半透明の盾が形成される。

つまりそれは、盾でなく。

「結界、って奴か。へェ、これァ範囲どんくらい広められンだ？」

「まだ腕をいっぱいに広げたくらいの広さしかない。さぁ、助言を」

「待て待て、ちぃっとくらい考えさせろ」

自分を囲う盾の箱。

その良い使い方。別に青バンダナに言ったのだって太くでっかくできンなら細くちっこくできンじゃね、って話で合って、新しい使い方じゃねェんだけど……。

ん―。
「リジ様。その盾、厚みがありません」
「うん？　うん。そう。【静弱】に厚みはない。ただこちらとあちらを隔てるだけの壁」
「なら――たとえば、それで魔物を切り裂いたら、どうなるのでしょうか」
ん―。
ん―！
「それァ良いな。盾に触れたモンを全部弱化させるンだ、俺の【即死】斬りに似たよォな事ができるンじゃねェか？」
「……なるほど」
「そォ考えると、もう一個できンな。化け物の身体に腕突き入れて【静弱】を発動すりゃ、スパっといけそォだ」
「それは私の【喧槍】にも応用できるな？」
「外皮の柔らかい魔物に限るだろうが、【波動】でも可能だろう」
「赤スカーフの場合ァ光眼鏡みてェに拳にその箱型【静弱】纏って突き入れて、奥

まで行ったらでけェ盾に切り替えるってのもアリだな」

「光眼鏡？」

「あァ、【排析】っつー魔法使うヤツがいてだな」

盛り上がる。

魔法の使い方は無限大。可能性の塊。

俺の【即死】でさえ色々な使い方があるんだ、こいつらの奴ァすげェんだろう。

マッドチビ先生の【鉱水】なんかも代表格オブ代表格だしな。

「……」

「あ、えーと。ンな寂しそうな顔すンなって、お嬢。お嬢のも考えるから……」

「……」

それはもう、これでもかってくらいしょんぼりした顔の金髪お嬢様。

そォだよな、自分も輪に入りてェよな。それを消すための旅っつっても、まだまだ先ァ長ェもんな。

で、えーと。【神速】の新しい使い方。

速くなる。誰よりも。何よりも。世界を遅くして、速くなる。

……。
……。
……ん―。
「【神速】は【神速】のままで十分強いのではないか？」
「ウィジ。ダメ。わかってても考えてあげるのが優しさ」
「む、そうか。それはすまないことをした」
いんやさ。
俺も全く同意見すぎて、フォローがな。
「あー、お嬢ってなよ、何かを投げンのも【神速】で投げられンのか？」
「……はい。できますの。自分の手から離れたものに【神速】をかけることはできませんが、離れる前であればいくらでも」
「ンじゃよ、俺のこの余った【即死】の弾丸、お嬢が投げたらすんげェ強くなるンじゃねェか？」
レーテーを起動。そこから取り出すは、撃ち出すモノの無くなっちまった弾丸ズラリ。

数ァもう補充できねェが、俺がぶん投げたりばら蒔くよりかマシなンじゃねェかな、って。

「……確かに。それでは、いざという時のために少しだけ頂いておきますわ」

「お、おゥ。……確かにコレ、別に【神速】の新しい使い方じゃねェもんな」

「いえ。別にいいんですの。別に」

良く無いからプイっとしてンだろォよ。

えーと、でもなァ。

うーん。

「前から気になっていたんだけど、アンタ」

「はい？　なんですの、ディミトラさん」

「【神速】中は、どこを強化しているの？　全身強化？」

「いえ、攻撃の瞬間や回避の瞬間は強化をしますけれど、基本はしませんわ。魔力を無駄に消費してしまいますし」

「つまり、アンタの身体は【神速】の負荷を受けない、ってことね」

……ふむ。

普通、速く動きゃァそンだけ力がかかる。慣性でもGでも空気抵抗でもなンだっていいけど、速く動くにァ何かしらの抵抗があるンだ。それが音よりも速いってンなら、当然各部位にかかる負担も大きくなる。

けど、お嬢にァそれがない。全身強化をせずとも【神速】に耐え得る。それは。

「お嬢、今、座ったまま【神速】使えるか？」

「座ったまま、ですの？　使えますけれど……」

「じゃあ使ってくれ」

「わかりましたの」

見た目、何も変わらない。莫大な量の魔力ァ減ってる感じもしない。

その顔を、頬を、ぶにゅっと掴む。

はたかれた。

「あの……なんですの？　人が真剣に相談しているというのに……」

「今、わかったか？」

「……？」

わかってないらしい。

いやコッチも仮説だからそォじゃねェ可能性を考えてのぶにゅ、だったンだが。
「じゃあもう一回行くぞ。いいか、避けないでくれよ？」
「え、ええ。わかりましたの」
座ったままに発動される【神速】。
その――デコを、ピン、と弾いた。
「……？」
「おお、やっぱりか」
「え、何ですの？」
「梓。今の所意味が分かっているのは貴女だけだ。説明が欲しい」
「何がやっぱりなのか、意味不明」
え、わかんねェか。
あァまァ当人じゃねェと分かりづらいよな。つか、当人もわかってねェっぽいし。
「今さ、お嬢。痛くなかっただろ？」
「はい。それが何か？」
「今俺さ、一応強化したンだよ。ほんのりとだけど――指を強化した。だから、結

構な威力出てるはずなンだ。でも、お嬢のデコァ赤くなってねェし、お嬢も痛がってねェ。これがどォいう事かわかるか？」

「ふむ……」

なんなら弾いた俺の指の方が痛い、とかは置いといて。

「お嬢の【神速】ってなよ、身体の強化込みで【神速】なのさ。【神速】に耐え得る身体強化込みで、【神速】。普通の余剰魔力での身体強化とァ全く別原理でお嬢の身体ァ保護されてる。だから、【神速】より遅い攻撃ァほぼ効かねェ」

「……しかし、それが本当なのだとしたら、あの時の演習でフェリカがあれほどの傷を負ったのは何故だ？」

「ありゃお嬢が【神速】使いながら動いてたからだよ。【神速】にァ耐え得るが、自身が【神速】で動いてる時に前から物がぶつかってきたら、【神速】以上の速さのモンがぶつかってきたのと同じになる。だからお嬢ァあんだけボロボロになった」

「なる、ほど？」

相対速度って奴かね？　いんやさ、この世界物理法則が云々とか言ってられるよォな作りしてねェから滅多なこと言えねェんだけど、つまりだ。

お嬢の身体ァ、【神速】の圧力の一切を受けつけない。【神速】を使っている間ァ【神速】の最高速度までの圧力、負荷の一切を弾くンだ。そォやって身体を強化して、初めて【神速】になり得る。この時の魔力消費ってな【神速】分だけでいい。身体強化の魔力とァ別口での支払いだ。

で、一気にそこまでの身体強化を行えるンだ、座ったまんま【神速】を使えば、最高速度の時に身体が受ける負担までの威力の攻撃の全てを無効化できる。

「つまり、私は【神速】を使いながら遅く動く、あるいは止まっているだけで、防御になり得る、と？」

「あァさ。ただまァ」

「それをするくらいでしたら、【神速】で避けた方がよくありませんの？」

「……そォなんだよなァ」

わざわざ防御せず、避けられンなら。

それでいい。

「ただほら、もし避けられねェ攻撃とかが来た時にァ役立つだろ。あるいァ、避けちゃいけねェ攻撃とかな」

「避けてはいけない攻撃……」
「後ろに守るべき相手がいる時、だな」
「なるほど」
……余計なコト言ったかな、コレ。
もし。
もし、お嬢が俺を守るため、とかで前に出て――防御しようとしたら。
ま、膝カックンでもして転がすかね。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ＥＤＥＮを出てから3日。
マッドチビ先生の言う通り、所々で嵐が発生していたり、雷雲があったりして近づけない所が多く、「コレ海上行くより陸上いった方がまだ天候いいんじゃね？」ってなって、ＥＤＥＮのある大陸の方にまで軌道修正をすることになった。
そうして飛んでみれば、なるほど確かに海上よりかは天候がおだやかだ。比較的

マシ、なだけだが。
　海上と違うのァ、やっぱり鳥系の化け物が多いって点かね。
　止まり木があるからか天鷲だのなんたらバードだのと化け物がうじゃうじゃいる。普通にローパー種とかスネイク種とかもいるけど、そォいうのァスルーできる。なんたってＬＯＧＯＳァ飛んでるからな。
　あとァたまに夜の湖や午後の森よろしく魔力密度によって光が遮られている場所があったりするくらいか。
　なるほど、やっぱり陸上のが楽な航海だ。……航、空？
「……そろそろ、西方の国に近づくわね」
「おォ、なんぞ、50年前に滅んだっていう」
「えるるー先生やあるるららさんの出身国ですわね」
「ちなみにユノンも西方の家系だぞ」
「そォなのか」
「ＥＤＥＮに滞在していた時に手合わせをしたカネミツという魔法少女も西方という国の出身だと言っていたな」

「ヘェ、尖り前髪が」
結構いるンだな、西方出身者。
俺ァ知識として、教本に載ってる事くらいしか知らねェンだけど。
「西方にあった国の名前。言える子はいるかしら。ああ、シエナは無しで」
「う」
「アンタのは偽……そっちの私とやらが仕込んだ知識だもの。知ってて当然よ」
おォ、マッドチビ先生が配慮した。
偽物の私、って言ったら、確かにシエナァ傷付くかもしれねェって思ったンだろォな。いんやさ、随分と丸くなったつーか。まァ元々生命倫理が欠如してるだけで、そォいう思いやりの出来る人ではあったンだろォけど。
「西方の国。名を――ジパング」
「エ」
「あるいはその国の言葉で、ヒノモト……だったか」
「エ？」
……え？

「梓さん？」
「ン？」
「ン？　じゃありませんの。降りますのよ。ディミトラさんからの依頼ですの。≫使えそうな鉱石あったら持ってきなさい。別に加工されててもいいわ≪とのことですわ」
「あ、おゥ」
「２人一組での捜索。これって、デート、ではありませんこと？」
「違ェなァ」
あまりにも衝撃的過ぎて頭がトんでたわ。
へー。
西方の国ァジパングってーのか。
……まァ、驚きァしねェんだけどよ。
この世界、色んな国の文化ってなが元々あって、けど化け物のせいで滅んでいって、今の国の形に落ち着いてる。だから国にァ色んな響きの名前の奴がいるし、こ

の国特有の言語もあれば、なんぞか聞き覚えのある単語が混じってたりする。
そして文化も、だ。太腿忍者然り、尖り前髪然り。忍者とサムライなんざ、確かにジパングジパングしてらァな。
キラキラツインテと先公ァ別にジパングジパングしてねェんだが。
「よ、っと……」
「ん～っ、久しぶりの外の空気、ですのね」
「あァ、だな。あのミストベイル戦以来外に出て無かったンだ、ＬＯＧＯＳ内部も換気機能ァ必要だって感じるよ」
まァ、それにしちゃ渇いてるが。
第一印象ァ――枯れた国、かね。
建物のほとんどが倒壊してるってのも大きいが、どれもこれもが水分を無理矢理ぶんどられたみてェに萎っとしてる。地面も砂漠みてェな色合いだし、少なくとも俺の知ってるジパングってな国たァ違う。ま、名前が似たってだけなンだろう。文化も、か。
それで、鉱石、ね。

「折れた刀とか、手裏剣とかァ死ぬほどありそォだな」
「あら、詳しいんですのね。国の名前も知らなかったのですのに」
「お嬢、なんぞ俺したか？　最近ちょいと厳しくねェ？」
「もう自分を取り繕わない、というだけですのよ」
「ははァ、元からそォいう性格だと」
いいよ、性格キツくたってお嬢の優しさァ理解してるからな。
ハナからそォだったら、確かに距離置いてたかもしれねェが、もう大丈夫だ。
「この辺の屋根の瓦も鉱石っちゃ鉱石だよな」
「では、亜空間ポケットに入れてしまいましょう」
「おー。……いいのか？　文化財的な……」
「なんですの、それ」
あァ、別に保護するアレソレとか無いのね。
……まァそォか。化け物がどォにかならねェ限り、取り戻せもしないンだ。そこを保護する法律なんざ作るはずもねェ。
——知覚強化。風を切る音？

「【即死】――ァ、無理そォなんで回避、」
「全て叩き落しましたわ」
「あ、あァすまねェ、助かった。……しかし、これァ」
「矢、ですのね。何か括りつけられていますが……」
「矢文って奴さな。時代錯誤……ってこともねェのか。はン、どこぞにいやがンな」
目を瞑る。
感じ取るは、魔力の流れ。
そして――命の気配。
「あっちだ。あの、半壊した城」
「城？　……あの建物が、お城なんですの？」
「おォよ。和……じゃねェや、ジパング風の城ってなああいう形をしてンのよ。つか、ここってな滅んだンだよな？　にしちゃァ」
「ええ、それは気付いていましたわ。足跡が、多いですのね。魔物のものではない……確実にヒトの足跡が」
「おォ、そいつにァ気付かなかったが、血臭がすげェな、と思ってよ。化け物同士

が争ってンならもっとぶっ壊れてるだろォに――これァ」
「恐らくですが、人間同士の争いの痕跡……ですわ」
「だァな」
確かに日本っぽさァある。
ただ、現代日本じゃァねぇな。
どっちかっつーと――戦国時代、かね？

「とりあえず、矢文とやらを見てみません事？」
「あァ。つか、よくわかったな。これが手紙の類だって」
「墨の匂いがしますもの。アールレイデでは写経といって、精神を研ぎ澄ませる訓練に墨という染料の付いた筆を用いますのよ」
「へェ」
ンなこともやンのかアールレイデ。
……必死だねェ、とか。思っちゃいけねェんだろォな……と。
開く。開いて読む。

「ＫＩＤＥＮＲＡＨＡＴＥＫＩＫＡＭＩＫＡＴＡＫＡ」
「え？」
「ＭＩＫＡＴＡＤＥＡＲＥＢＡＡＩＺＵＷＯＳＨＩＲＯ」
合図？
何だ合図って。知らねえぞ、ンなもン。
「お嬢」
「ああ、はい。この程度を叩き落すのは造作もないのですけれど、今なんと言いましたの？」
「ン？　あー。これも聴き取れねェのか。なんか、味方なら合図してくれって言ってるンだが、合図って何だと思う？」
「合図……手を叩く、とか？」
手を叩いてみる。
追加の矢が来た。落とされる。
それには文がまた括りつけられていて……いや面倒くせェなオイ。
「ＧＩＮＴＯＫＩＮＮＯＫＡＭＩＮＯＭＵＳＭＥＹＯＷＡＲＥＲＡＮＯＳＨＩ

ＲＯＮＩＫＯＩ　」
「今度は、なんと？」
「ウチ来てくれ、だってさ。お嬢、一瞬マッドチビ先生に連絡してきてくれねェか？」
「嫌ですわ」
「え、なんでだよ」
「どうせ梓さんはいなくなっているからです。私が【神速】を用いてどれだけ急いだとしても、一時でも目を離せば大変な目にあって、勝手に私を置いていくに決まっていますわ」
「どンな偏見だよ。……あー、じゃァこうだ」
その辺にあった木を【即死】させる。まァさせなくても枯れてたが。
ンで、木の表面に剣でゴリゴリと文字を書いていく。「原住民に呼ばれたンで行ってきます。お嬢も一緒なんで多分大丈夫です」と。
「お嬢、これＬＯＧＯＳの方に投げてくれ。【神速】使ってよ」
「はいですの」

ぶん投げられる木。

……赤スカーフの【静弱】とかでグシャっとならないことを祈ろう。【波動】でもぐしゃっとなるな。

ま、大丈夫だろ。なんたってお嬢がいるんだ。こんなに心強いことァ無ェ、ってな。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

45・藍夢能登虞度後歩都可運取伊豆…

矢文に書かれてた拠点、っつーのァまァここだと思う。
魔力は多分ない。シエナじゃないんで正確にァわからねェんだが、魔力っぽさがないので違う。
ここ。
さっき言ってた、半壊した城の事だ。
「いるな」
「ええ。建物の陰に十数人。地下には数十人がいますわ」
「なァよ、西方の国ってな、50年前に滅んだ。それァ間違いねェんだよな？」
「はい。教本に載っている事だけでなく――当時を知る方々が、それを証明していますの」
「が、壊れちゃいるが、ここにァ確かに文化ってモンがある。んで人間がいる。魔法少女じゃねェ人間が」
「つまり――」

特に声量も気にせず話していたからだろう。
城の壁の陰に隠れていた１人が、ゆっくりと出てきた。それもうザ・女忍者ってスタイルの、髪の長い女性。ちょいと……おじさんには目に毒だ。その、胸だの足だの、出るとこが出過ぎてて。隠れるとは、忍ぶとは、ってツッコミたくなる露出度の多さで。
まァ暑いからなのもあるンだろォけど、うん。
「つまり、我々はこの国が滅んだあとも、細々と生き永らえ――この国を守っていた、というわけだ。ようこそ、来訪者。あの文が読めるという事は、我が国から去った者の身内だろうか？」
「ン、まァそんなトコだ。ついでに言うとソイツァ忍者なンで、アンタの知り合いの可能性ァあるな」
「なんと。……外国に根を張って、しかし未だ忍を名乗り続ける者がいるとは。その者、名は？」
「ユノン」
言えば――それはもう、めちゃくちゃ明らかに周囲がざわつく。おいおい忍べ

よ。シノビだろ。

「来訪者よ。あまり――我らを惑わすな。その名をどこで耳にしたのかは知らないが、その者は既に死した者の名だ」

「あァそォかい。ンじゃ、もう俺達にァ用ァ無ェな。敵か味方かだのと聞いてきたがよ、敵でも味方でも無ェよ。ただまァ、たった今――友人を死んだ扱いにされて、ちょいとイラっと来たくらいかね」

「……もし、姫がまだ生きているというのであれば――それは妖だ。即刻、退治に行かなければ」

いんやさ。

なァ、神さん。どォして非善ァこうも命を簡単に扱うんだろうね？

――いや。

でも、そうか。違う、のか。

「もしかしてお前ら……太、ユノンが死んだトコを見た事あンのか？」

「ああ。我らは見た。敵の手に渡った姫が――首をつられ、その身を刺し貫かれるところを。そして、妖の餌にされるところを、全て――見た。姫が我らを逃がして

くれたが故に、我らは姫を見捨てたのだ」
「……」
非善、ではある。
けれど――違うのか。命を貴ぶ心はある。ただ、妖……つまり化け物なら対峙しなきゃいけねェって思ってるだけだ。
なら、歩み寄れはするな。
「あァよ、お前らァ……えーと、妖術だの陰陽術だのに理解ァあるか？　忍術でも良いんだが」
「後ろの２つは知らないが、妖に混じり行った物が妖術を使うという事実は知っている」
「お前らの姫ァそれになった、と言ったら……お前らァどんな対応を取る？」
「……退治するべきだ。命とは、そう簡単に蘇って良いものではない。外法で姫が操られているというのなら、今すぐにでも解放してやらねばならん」
「たとえその姫が――毎日を楽しく過ごしているとしても、ですの？」
「そうだ」

ちょいと無礼だが、魔煙草を吸わせてもらう。

さてはて、脳をクリアにしていこう。そもそもなンでこいつらが俺達を呼び寄せたのかも含めて、敵だの味方だの、姫だの太腿忍者だのを考える。

まず、太腿忍者ってな多分マジに姫だったンだろう。忍者なのに姫とはこれ如何に、って感じなンだが、俺の知識の全てが通用するたァ思ってねェ。忍者姫くらいいるだろ、この世のどこかにァ、ってな。だからそれァ良い。

んで、アイツは多分魔法少女に覚醒して、けどコイツらが敵とやらに囲まれちまって、ンで自分の身と引き換えにコイツら逃がして、自分も死んで蘇生槽での復活、ってな……アイツにとってァ完璧な、けど何の説明もされてなかったコイツらからしたら罪悪感ＭＡＸな作戦を敢行した……みてェな事だと思うんだよな。

太腿忍者ァ割とマイペースなトコあるし、最低限の説明しかしねェとことかまさに、って感じだし。

ちょいと気になンのァ時期だな。姫だってンだ、常に監視がついていそォなモンだが、ここまでの長距離移動を短時間で済ませて蘇生槽と経路を繋ぎ、また短時間で帰ってきた、とでもいかねェと……それに、どこでＥＤＥＮの存在を知ったのか

とか、なンでそんな作戦をパッと思いついたのか、とか。
「東方に大国があることァお前ら知ってンのか？」
「知っている。名前の無い国。名前を失ったのではなく、あらゆる国が集ったが故に名を付けられなかった国。我が国の者達も多く流れ込んでいると聞いている」
「その上にある、ＥＤＥＮってなモンァどォだ」
「国を守護する者達の集まる場であるとは聞いている」
「聞いている聞いている、と。誰にだ」
「……この地には、お前達の様に来訪者が訪れる事がある。その者達から断片的な情報を受けている」
どォにも怪しいな。
来訪者がンなにいるか？　一応この世界ってな化け物共に人間が棲み処追いやられてるよォなやべー世界だぞ？　ンな、まるで旅人がうんさかいるみてェな言い方。有りえねェだろ。
それともフリーの魔法少女でもいンのか？　まァいるにァいるんだろォけど、それもしっくりこねェな。なんつーか、考えたくない可能性を除外した場合の考えを

している、みてェな感覚だ。
　はははァ。
　じゃ、俺の一番考えたくない可能性ってなーんだ。
「ソイツの名前ァ……ルルゥ・ガル、か？」
「なんと。知り合いだったのか」
「……」
「知り合いも知り合いさ。考える事がまんま同じってくらい仲もいい。ちょいと挨拶したいンで、どこにいるか教えてくれねェか？」
「今はいない。彼女は稀に訪れるに過ぎない」
「ほォか。んじゃよ、また聞きてェ事があるンだが――」
　キィン、と。なんともまァ甲高い音が後頭部で鳴る。屈んでもいねェし避けてもいねェ、【即死】の気配ァ感じたが知覚強化も行ってねェ。
　ルルゥ・ガルの名前が出た時点でお嬢が剣の柄ァ握ってたのァ知ってたからな。
「どォにもそォァいかないらしい」
「梓さん、避けられる時は避けて欲しいですの。私の心臓に悪いですの」

「なンだ、お嬢の心臓ァんな程度で止まンのか。じゃァこれからァちゃんと避けるよ、お嬢を殺したくないンでな」

広がるのは動揺。

防がれた事に、じゃねェ。ソイツがソコにいることに、かね？

「っ、来訪者、下がれ！　敵だ！」

「あァよ、斬りかかってきといて敵じゃなかったらこえーって。んで、よ、コイツ――化け物だな？」

「そうだ！　その鎧武者は一度倒したとしても何度も蘇る妖だ、だから早く逃げろ――」

「いんやさ、ヒトガタだったから怖かったンだけど――それならいいや」

レーテーを起動。剣を引き抜きながら、身体をぐるりと回す。

お嬢が受け止めてくれているのァ刀だ。んで、おゥおゥ、っとに鎧武者だな。迷宮最深部周辺にいた鎧騎士とどっか似ちゃいるが――こっちァどォも、ヒシヒシと伝わってくるモンがあるぜ。

恨めしい――ずるい。

怨念だ。これァ。

だからそれを――斬る！

切っ先から染み出るは【即死】。それは固い装甲にまで染み渡り――中心のコアを殺す。

はっはっは、成長してンなァ俺。今ならあの大蛇も殺せるぜ。

「――まだですの！」

「エ」

ぐいっ、と引き戻される。引き戻されるっつか、お嬢にラリアット気味に下がらされた、というか。

「ッ、な」

「だから言っただろう――」

女忍者の言葉よりも、速く。

その鎧武者は――組みあがっていく。確実に殺したコアも、復活している。

ベルウェークの復活速度を彷彿とさせる。まさかコイツオリジンか？　何か特別な方法じゃねェと殺せねェんだとすりゃ、やべェな。何も思いつかねェ。情報が

少なすぎる。クソ、余裕ぶっこくんじゃなかった。いつもそォだ。っつか最近ホント調子乗りすぎだぜ俺。しっかりしろ。

魔煙草を吸う。不味い。そォだ、そォだ。俺ァこうやって考えるべきだ。

散々言われてンだろ。戦いのスペシャリストたちから。根っからの戦士たちから、お前は前に出るべきじゃねェってよ。言われてンだよ。そろそろ自覚しろ、俺ァ前を張れる奴じゃねェんだって。

ふゥ。

「お嬢、俺の剣の腹ァ使ってよ、最高速度で――かっ飛ばせるか？」

「勿論ですわ。では、お借りしますの」

俺の剣の方がお嬢のモンより腹が広い。

だから――まァ、ホームラン、だ。

「遅い【神速】……からの！」

踏み込みで一度完全に停止し、直後【神速】で身体を捩る。鎧武者の知覚外。っつか俺も想像しただけで見えたわけじゃない。後ろの女忍者もそォだ。いんやさ、それを知覚し得る存在ァいねェんだろう。あ、迷宮の天使を除く。

んでまァ、そのフルスイング。
それァ鎧武者を面で捉えて――それはもう、綺麗にかっ飛ばした。金属バットみてェな音がしたのも高評価。高く高く、遠く遠くまで飛んでいく鎧武者に、「たーまやー」とか空気の読めねェ事言いたくなるけど自重。
「ナイスだお嬢」
「……これ、中々気持ちがいいですわね」
「今まで斬ってばっかだったからな、たまにァ叩いてみンのも面白れェか」
「はい。あ、これお返ししますの」
「あァよ」
野球かァ。
こんな世界じゃなければ――魔法ってのが、俺の理念に直結して反してなけりゃ。
そォいうスポーツも、楽しかったンだろォなァ、って。
ちょいと思っちまった。
「お前達は」
「話ァあとだ、あみあみ忍者。下にいる戦えねェんだろう連中含めて、移動した方

が良い。あれが死なねェんなら、この後もわんさか来る可能性がある。何も此処を放棄するってワケじゃねェ、一旦だ一旦」

「……それは、できない。この城は守らなければならないものだ。たとえ一時だとしても、我らはこの城を放棄するわけにはいかない」

「それで、下の奴らが死ぬとしてもか？」

「そうだ。戦い得る者、戦い得ぬ者。しかして等しく忍だ。姫に生かされ、任された使命は、命に代えてでも守らねばならない」

……コイツァコイツで、だな。

魔法少女の理念ってなも嫌だが、この……なンだ、忠義か？　これもちょいとイラっとくる。

しかも魔法少女じゃねェっぽいから、魔力消したってこの考えァ変わらねェな。まァ敵ってなが化け物だってわかったのァでけェ。それなら、殺せる。

同時にルルゥ・ガルの手が入ってるってな要警戒と。はァ、単なる鉱石集めのはずが、なんだって……って別にスルーしてもいいのか。別に俺達が何をしなくとも戦えてァいたわけだし。

……いや、それはどうだ。単なる人間が、そりゃ修練訓練ァ積んでるんだろォが、けど人間が――化け物に対抗し得るモンか？

「お前ら、さっきの鎧武者が現れた時ァ、どォ対処してたンだ？」

「奴は、人間を1人切り殺せば消える。自らが殺されようとも復活し続けるが、たったそれだけの犠牲で多くを守り得る。故に――」

「あァもういいや。わかったわかった。もう喋らねェでくれ」

歩み寄れるかも、とか思ったが。

無理だな。

魔煙草が不味い不味い。はン、いいね、じゃあぶっ潰そう。

「俺達にも仲間がいる。そいつらを呼んできたい。いいか？」

「理由を聞きたい」

「敵ってなをぶっ潰すためさ。そいつらがいなくなりゃ、お前達ァ死ななくなるだろ」

「……呼び込んだのは確かに我らだが、来訪者が関わり得る領域を超えている。これは我々の問題だ」

「あァよ、俺達ァ化け物専門の退治師でな。まァ俺ァ下っ端なンだが。お前達の事情がどォあれ、化け物ァ放っておけねェのさ」
「ならば、尚更だ」
「あン？」
大きく喫む。
良くねェな、その声ァ。
その顔ァ――良くねェ色してる。
「敵は――妖を使役する、人間だ。妖退治の専門家であるのならば、やはりここを立ち去るべきだ」
「……あァ、そんなら、そォさせてもらうよ」
「梓さん？」
首を突っ込みたそォにしているお嬢を制す。
それなら、一旦ＬＯＧＯＳに帰った方が良い。帰って作戦会議だ。首を突っ込むかどォかの、な。
「じゃァな、あみあみ忍者。太腿、じゃねェ、ユノンの事もどォにも勘違いっぽい

んで、悪かった。お前らの大切な姫さんだ、生きてるはずが無ェさ。重ねて謝るよ、無礼な事を言った」
「……いや、良い。これは我らの文化であり、来訪者にまで求めることではない。我らも謝罪する。来訪者、貴女達が敵でない事を知れた。それで十分だ」
「おゥ」
お嬢の背を押し、後ろ手振って去る。城を出る。
黄色い砂の、枯れた国。ジパングだかヒノモトだか知らんが、あァ、色々と頭冷やさねェといけなそォだ。
「待て」
「ン？」
「問いたい事が2つある。1つは、貴女達の名だ」
「あァ、俺ァ梓ってンだ。梓・ライラック。こっちァ」
「フェリカ・アールレイデですの。以後お見知りおきを」
「ありがとう。そしてもう1つ聞きたいのだが」
「おゥ」

「あみあみ忍者とは、なんだ？　私の事か？」
「おゥ。今更かよ」
「……私は名を、ユクナという」
「ン。わかったよ、あみあみ忍者。用件それだけだな。ま、また会う事もあンだろ。積もる話ができてる事でも祈っとくよ」
今度こそ。
まだ何か言いたげなあみあみ忍者を背に――俺達は城を出た。
……なんかな。
アイツ、一般人じゃねェ気がすンだよな。どォにも――名前で呼びたくねェんだ、本能がよ。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「え、別に良いじゃない。どうでも。人間の集落のいざこざに魔法少女が手を出すとか、それこそ余計な諍いを生むと思うわよ」

「まァマッドチビ先生ァそォ言うって思ってたよ」
「だが、私達も同意見だ。私達アィンハージャはウォムルガ族の村の守護者ではあったが、ウォムルガ族の中で起きた諍いや争いには関わらなかった。私達は普通の人間と比べて強すぎるが故に、たとえ言葉の争いであっても抑止となってしまう」
「関わってこないと約束されていても、目に見えた力というのは脅威」
「あー、なー」
「私は加勢するべきだと考える。魔物を使役する人間の集団、というのがいるのであれば、それはゆくゆくEDENの脅威になり得るだろう。その技術の仕組みや弱点などは知っておくべきだ」
「それに、魔物を使役するといえば……ルルゥ・ガルという方の話にも似ています。ですから、私も忍者の方々に加勢するべきだと思います」
がっつり割れたな。
ま、俺も半々だ。なんつーかシエナの言う程ルルゥ・ガルに似てるたァ思ってねェんだが、忍者側にルルゥ・ガルの手が入ってンのが気になって仕方ねェ。けど同時にマッドチビ先生や青バンダナと赤スカーフの意見もわかる。人間同士の争い

に俺達が首を突っ込むってことァ、俺達っつー超大戦力が忍者側に付くことになる。

　となりゃ、今まで保たれてきた……言うなりゃ対等だった「味方」と「敵」のバランスが崩れちまう。果たして俺達がそれをしていいのかどォか、ってトコ。

　んでもまァ、悩むまでもねェか。

「俺ァその敵って方にも接触してみてェって思ってる。危険はあるンだろォが、なんだって化け物を使役できてンのか、なんだって忍者を襲ってンのか。太腿忍者の事も含めて、ちょいと気になってな」

「賛成ですわ。争い諍い揉め事というのは、どちらか一方の意見だけで判断してはならないもの。攻撃してきた、という時点で私達の敵である線はとても濃厚ですけれど、それでも問答無用で敵と判断するのは如何なものかと」

「別に良いわ。アンタが急ぎたいって言ったから私は急ごうって言ってるだけだし。アンタが首を突っ込みたいなら、そうすればいい。私は面倒だからＬＯＧＯＳにいるから、自分の手に負えなそうって思ったらすぐに帰って来なさい。アンタは戦場に出ちゃいけない子だけど、戦士を導くことはできる子だもの。これだけ貴女を守ってくれる奴らがいるのなら、流石の私も安心して送り出せるわ」

「前から思ってたけど、マッドチビ先生ァなんか母親みてェだよな」
「この中じゃ一番年上だし？　別に良いのよ、ディミトラママとかディミトラお母さんって呼んでくれても」
「いいのかよ」
「何よ。良いに決まってるでしょ」
「決まってるか？」
　そォいうの、嫌がるモンなンじゃねェの？
「あのね、私達魔法少女は子を成せないの。まぁアンタは魔法少女になったばっかりだからわからないかもしれないけど、たまにふと〝自分の子供が欲しい〟って思う事があるのよ。長く生きているとね。だから――子供を名乗って、自らを親だと慕ってくれる子は。あるいは、アンタみたいに放っておけないくらい弱い子は、可愛く見えるものなのよ」
「ヘェ。お嬢とポニテスリットもそうだったりすンのか？」
「……私はアールレイデですので、そういうことはないですわ。けれど、クラスの皆さんは、時たまそういう話をしていましたわね」

「ああ。――もし、自分が魔法少女にならなかったら。どのような生を追っていたのか――誰と番い、どのような家庭を築いたのか。あり得ぬ夢だとはわかっているが、話題に上がる事はある」

……じゃァ、やっぱり。

魔法少女になったこた――なっちまったこた、後悔に区分されンだな。

それがわかったのァでかい。いんやさ、誰もが最初から死んでも復活する事を目的にしてたわけじゃねェか。ルルゥ・ガル以外。

キラキラツインテも言ってたな。長く生きている内に、重みが無くなっちまった、って。

「まァ話戻すけどよ。その敵とやらに接触して、その上で全部を判断したい。だから野暮かもしれねェし罠かもしれねェし余計な争いを生むかもしれねェが――ついてきてくれる奴ァ、いるか？」

その問いに。

マッドチビ先生含め、全員が馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

さて、組みあがったのは即席ライラック隊だ。
基本５人１組の隊っつー奴ァ、俺を数に入れないことで組みあがった。
……そう。
「いいですの？　梓さんは前に出てはいけませんの。貴女は時々私より短気で短絡的で好戦的なことがありますので、決して私とリジさんの前から出ない事。約束できますのね？」
「ハイ」
「殿は私達に任せろ。梓、貴女は背後の警戒もしなくていい。ただ前を見て、頭を回せ。それが貴女の仕事だ」
「ハイ」
「上空はお任せを。背面噴射機構を使用せず、建造物の上から全体の検知を行います。もしもの場合はＥＤＥＮにて使用した閃光弾もありますので、合図をお願いいたします」
「あァよ」

「……私にも≫ハイ≪って言ってほしかったです、梓・ライラック様」
「はいはい」
結局全員ついてきた、ってワケだ。
まァそーなるたァ思ってたが。あ、マッドチビ先生ァいないよ。
シエナはそれこそ忍者よろしく屋根を伝っての移動。他ァ全員地上をお散歩、ってな。
「しかし、その敵の拠点とやらの位置はわかっているのか、梓」
「ン、それァ大丈夫。魔力の気配だのってな俺にァちょいと向いてないみてェなンだがよ、命の気配ァ結構察せられるよォになってきた。拠点は多分、あそこだ」
あそこ、と指を差す。
そこは――。
「……お墓、でしょうか？」
「ヘェ、魔法少女だってンのによく知ってンな、お嬢」
「いえ、流石にそれくらいの常識はありますのよ……？　魔法少女が使わないというだけで、国の方々は使用するわけですし」

「そりゃそォか」

そう、墓だ。

墓地。和風な墓石が幾つも乱立する山肌。周囲にァ瓦屋根の家々が立ち並び、これまたどォもおどろおどろしい雰囲気になってる。魔力密度が濃いのか、あの辺だけ暗いのもおどろおどろしさポイント。

ちなみに当然の話だけど、ＥＤＥＮに墓なんてモンはない。だから知らねェ奴もいるんじゃねェかと思ったんだけど、流石になめすぎだわな。

「西方文化というのはどうにも……なんというのだろうな、どこか寂しげな印象を受ける」

「染料が少ない」

「リジ、ウォムルガ族の村と比べるのはどうだろうか。ＥＤＥＮを見てわかったが、ウォムルガ族の村は染料を使い過ぎていたように思う」

「ウィジ、それにしても色の無い国」

「まァそォいう国なンだよ、ここァ。色鮮やかよりも質素なのを優先する。もう少し正確に言うなら、偉い奴のトコァ煌びやかで、普通の奴らが住むトコァ色があん

まり無ェっていうべきか」
「まるで知っているような口ぶりですけれど、梓さん、この国の名前も知りませんでしたよね……？」
「あァ、ダメか？」
「いえ、そういうわけでは……」
ま、俺もちと迂闊すぎだな。
似てる似てるつったって同じじゃねェ、あんまり知ったかぶりの知識話してると思わぬトラップに引っかかる可能性がある。
「……右方、建物の陰に何かいるな」
「命の気配だが、こりゃ」
「魔物、ですのね」
「どうする？　あちらと交渉するのであれば、むやみな戦いは避けるべきだ。攻撃を仕掛けては敵対の証と捉えられかねん」
そォさな。
んじゃ、こォしよう。

「　Yo　ANTASONOBAKEMONTOSHITEMITENDARO　？　」
「何を……」
「アインハージャの言葉……ではないな」
「でも、ただの唸り声でもない」
「　ORETACHIHATABIBITODEYO　KANGEIWONOZONDERU　」
こいつァほとんど日本語だ。ちょいと発音が違うンだが、まァ訛りで通じるだろ。
田舎モンとしてなめてくれたら重畳、警戒されたら要警戒、かね。
少し待つ。
すると、一匹のスズメが飛んできた。……ただのスズメじゃねェな、アレも化け物だ。等級区分ァＣにも満たなそォだが。
「　TOUGATABIBITOYONANIYOUDEKOKONITACHIYOTTA　？　」
「　KOUSEKIWOSAGASHITENDA　KATAINOYAWARA

ＫＡＩＮＯＮＡＮＤＥＭＯＩＩ」
「ＡＩＮＩＫＵＤＡＧＡ ＴＡＢＩＢＩＴＯＮＩＢＵＳＳＨＩＷＯＡＴＡＥＲＡ
ＲＥＲＵＨＯＤＯＷＡＲＥＷＡＲＥＨＡＹＵＴＡＫＡＤＥＨＡＮＡＩ」
「ＮＡＮＫＡＫＯＭＡＴＴＥＮＮＮＯＫＡ ？」
「ＴＥＫＩＧＡＩＲＵ ＫＩＤＥＮＲＡＮＯＳＥＳＳＹＯＫＵＳＨＩＴＡＳＨＩ
ＮＯＢＩＷＯＮＡＮＯＲＵＳＹＵＤＡＮ」
「ＡＩＴＳＵＲＡＨＡ ＯＭＡＥＲＡＮＩＮＡＮＩＷＯＳＨＩＴＡ ？」
「ＷＡＲＥＲＡＧＡＳＨＩＲＯＷＯＵＢＡＩ ＳＥＮＲＹＯＵＳＨＩＳＯＮＯＳ
ＹＯＹＵＫＥＮＷＯＵＴＡＴＴＥＩＲＵ」
「ＡＲＥＨＡ ＯＭＡＥＲＡＮＯＳＨＩＲＯＮＡＮＯＫＡ」
「ＳＨＩＫＡＲＩ ＷＡＲＥＲＡＧＡＨＩＭＥＮＯＳＨＩＲＯＤＡ」
あァん？
こっちも姫だって？　……なンだ、話が錯綜してるっつか——どっちかが嘘吐いてンな、こりゃ。
あるいはどっちもか？　もしくは——どっちも、何かに騙されてるか、だな？

「あの……そろそろ私達にもわかるような言葉を話して欲しいですの。さっきから何が何だか……」

「ん―、なんかな、あの城ってな元ァあちらさんのモンで、あちらさんにも姫がいたらしィんだわ。んでもって、どォにも攻めてるとか襲ってるって感じでも無ェ。こっちも困窮してやがる」

「なるほど。それでは、どうしてユクナさん達は嘘を？」

「わからねェ。が、とりあえずコッチのが化け物使役してンのァ事実だってわかったな」

「そうだな。このバード種も、そちらの陰にいる……恐らくは精神体であろう魔物も、ただの人間が相手をするには脅威だ。それを嗾けておいて困窮している、というのも理解しがたい。これほどの戦力があるのならば、多少鍛えている程度の人間は簡単に制圧できるはずだ」

そうそう、それそれ。

遠隔に言葉を届けられて、見る事もできる、なんてのァＥＤＥＮにもない技術だ。つまりコッチのァかなり高文明で、だってのに忍者達を潰せねェでいんのァなんか

おかしい。

あるいはそォいう魔法って可能性も、まァあるっちゃあるンだよな。ＥＤＥＮにいない、過去見つかってないって事ァイコールで存在しないにァ繋がらねェ。

ふむ。

「とりあえず面と向かって話さねェか？　そっちに攻撃の意思が無ェんなら、ちょいと話してみたい。あァ特に用ァ無ェんだがよ、単純に話したいだけだ。ダメか？」

「……式鬼の言葉で話す面妖な女子（おなご）かと思えば、ただ話してみたいだけ、と？　ククク、面白い。良いぞ。こちらに来るがよい」

「っ!?」

ちゃんと、警戒ァしてた。全員だ。シエナ含めて警戒ァしてたはずだ。

だってのに、そいつァ突然現れた。目の前に――いつの間にか、居た。

狐の面を被った、和服の、これまたなーんでか露出の多い女性。胸出し過ぎだろ、おじさんが直視できなくなっちゃうからやめてくれよマジで。

つか。

「……なァ、あの魔力」
「ええ。魔法少女、ですのね」
……そんな気ァしてたよ。
さてはて――どう転ぶかね。

遠《ｔｅｘｔ･s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

46・地僅亜耗蛇安堵羽生亜耗止論倶例栖本痺里程・

「改めて――吾はナリコという。この寂れた屋敷の主人ぞ。ククク、そう固くなるな。何も取って喰らおうというわけではないのだから」
「固くなってるってワケじゃねェんだけどよ。その……なンだ。もうちょい隠すとこ隠せよ」
「うん？　別に良かろう。お主を含め、可愛らしい女子ばかり。もっと近うよっても良いのだぞ？　ほれ――乳でも吸うか？」
「吸わねェよ。あァ、まァ自己紹介ァ返しとくよ。俺ァ梓・ライラックってモンだ。さっきの化け物……式鬼っつったか？　そォいうのの退治を専門にして旅をしてる。周りのもおんなじさ」
「ほう、式鬼の退治師。なれば先に送り出したユアサジを飛ばしたのも主らか？」
「あァ、悪かったな。襲われたンで、ぶっ飛ばしちまった」
「大丈夫ぞ、ユアサジは死なぬ。少し驚いていたようだが、その身に罅の一つとて入っておらん故な」

「そりゃァ良かったよ」

幽霊屋敷、ってな、こういうトコを言うンだろう。

それはもうザ・幽霊屋敷なトコに、俺達ァ招かれた。んでいるわいるわの化け物達。けど全部制御されてンのか、襲ってくる気配ァ無い。

おじさんはそれよか……もう乱れに乱れた着物に色々とツッコミをいれたい。43歳がちゃんと反応しちまうよォな豊満な身体で、それを隠そうともしてねェんだ。出るとこ出てて、隠すとこ隠せてねェ。何のために布纏ってンのかわかんねェ。そんくらいの露出をしておいて、顔ァ狐面と。

もうちょい、あるだろ。羞恥心とか。頭隠して尻隠さずってレベルじゃねーって。

「でよ、着物狐。聞きてェのァまさにそれさ。さっきの式鬼での話し合いにもあったが、あの半壊した城ってな元ァお前らのモノ、であってるか？」

「ああ、あっている。吾ともう2人、ここには命在りし者がいるのだが、元はもっと沢山の者がいた。それをここまで減らされてしまったのは、あれら忍軍のせいに外ならぬ。吾らの城を奪うだけでなく、吾らをも追いやって、我が物顔で占領しているのだ」

「成程。あァそォだ、姫って奴の名が知りたい。そいつがどォなっちまったのかも」
「姫の名は――カネミツ、という。姫は我らを守るために単身敵地へ駆け――そのまま、躯と成り果ててしまった」
「……ん――」
まァもしかして？　たァ思ってたけどさ。
そー来るか。
んで、こっちも似たような手法で死んで蘇生したくせェなァ。
ったく、どっちも姫ってガラじゃァ無ェだろ。
「お主は、鉱石が欲しいと言ったな。だが、それらは吾の軍勢を作るために必要でな。ユアサジを含め、吾の軍勢は鉄や石といった素材でできている。主らのような可愛らしい子には恵んでやりたいのだが、あまり余裕がなくての。ククク、この身であれば、いくらでも好きにして良いのだが」
「……単刀直入に、且つ唐突に聞くがよ、着物狐。アンタ死なねェだろ。死んでも復活する。違うか？」
「ほう？　どうしてそう思う？」

「俺達もそォだから、だ」

さてはて、どォ切り込んだものか、なんて考えちゃいたが、まァスッパリでいいだろ。

騙し騙されってなルルゥ・ガルとだけでいい。別に敵かどォかもわからん奴とまで腹の探り合いァしたくねェ、疲れるからな。

「成程。お主らは、まほーしょうじょ、という奴ぞな？」

「あァよ。知ってンのか」

「うむ。同じくまほーしょうじょを名乗る、るるぅ・がるという者から様々な事を聞いたのでな」

――。

あァん？

……そォいうことかー。このすれ違いァ。で、んじゃ何が目的だ。この争いを起こさせるにァ何か理由があンな？

だがそォなってくると、太腿忍者と尖り前髪がどォ関わってンのかも気になる。一切関係ないってこたねェだろうが、あるんなら情報提供ァするだろ。ってこた、

面識ァ無いと見た。
　単純に考えりゃ、双方の姫が似たようなコト起こした後、ルルゥ・ガルが双方を唆して争わせてる、ってーのが丸い。なんでとかどーしてとかはおいといて、状況だけ見たらそれが一番シンプルだ。
　が……。
「俺達が魔法少女で、その特徴がアンタと合致してる。ってンなら、アンタも魔法少女だって自覚ァあんのか？」
「クク、吾は妖ぞ。妖の混じるヒト、と言ってもよい。もっとも、まほーしょうじょがそうだと言うのなら、やはり吾と主らは同じなのやもしれんな」
「あァ、回りくどい言い方をどーも。しかし、どォやって復活してる。蘇生槽らしィモンは見当たらないが……」
「庭に盛られた土があったであろう？　そこから這い出るのだ。信じられぬのであれば――実演してみせようか？」
「やめろ」
　いつの間にか手に持っていた小刀を、自らの首に当てていた着物狐。

マジックショーかってくらい簡単に命を散らそォとしやがる。わかっちゃいたが、コイツも死が軽い奴か。

「おお、怖い怖い。そう睨むな、梓。……クク、どれ――少し、味見をしてみたくなった」

「何を――ん!?」

さっきから、初動ってモンが全く見えねェ。そォいう魔法なのか、それとも技術なのか。

わからねェが――唇を奪われた。後ろで息呑んだのァお嬢か。やめてくれよ、キスされたってだけだ。それで殺すとか、間違ってもやるんじゃねェぞ。

つか舌を入れてくンな。やめろ、あと狐面の下結構美人っていうか、なんかめっちゃ好みっつーかうわちょっと惚れそうなンだけど――。

「って、なるワケねェだろ」

「ん……クク、美味い美味い。若い味がしたぞ、梓」

「危ねェな、惚れそうだった。【魅了】とかその辺りか？」

「なに、吾の接吻が上手いだけぞ？」

絶対違う。

今のァ完全に変な心の動きだった。それこそ【劇毒】の媚薬みてェに、なんぞ無理矢理ヘンな気分にさせられた。

いや確かに顔ァ好みだったがよ。

……あ？　いや、顔……覚えてねェな。美人で好みだってわかってンのに、覚えてねェたァどォいうことだ。

「どれ、今度はもっと奥まで――」

「させませんの――ッんむ!?」

我慢ならなかったらしい。

わざわざ【神速】使ってまで俺と着物狐の間に入り込んだ金髪お嬢様は、しかし向きが悪かった。俺を庇う形で出てきたせいで、そのキスァお嬢に。

くちゅくちゅと、なんぞ、その、なんだ。あんまり表現しちゃならねェ音が幽霊屋敷に響き渡る。

最初ァ驚いた顔。

んで次にァ――蕩けた、頬を染めた、あー。まァ。

惚れました、みてェな顔に。
「ぷは。ククッ……予想外ではあったが、良い良い、可愛らしい女子だ……どうだ、吾の妻にならぬか？」
「ぁ……ぇ、と……」
……ん、揺れてる？
おいおい、お嬢。それ多分媚薬とかなんかそーいう類の奴だぜ。
「ククッ……そちらの子達も、吾と唇を交わそう」
「う――!?」
「え」
「くッ……ん、ぅ」
早業にも程がある。
着物狐ァ次々に全員にキスをして、その身体を弄り、甘い雰囲気を……って、おいおいやりすぎだって。そこまでァ……おじさん、見ちゃいけねェ気がする。
水音が多すぎる。目ェ瞑ってるが、後ろでナニしてるのやら。あァ、来ちゃダメだったな。こォいう奴か。さてどォするか――。

「ククク……もう目を開けても良いぞ、梓」
「ん。あのな、あんまりそぉいう事してやんなよ。こいつらァまだ若い――」
「ククク、どうした、そんなにも目を開いて。ククク、やはりお主も可愛らしいなぁ。是非とも――私の妻にしたい」
あー。
やっべェ。俺が抵抗できたからって、油断した。
4人、だ。
金髪お嬢様も、ポニテスリットも、青バンダナも赤スカーフも。
みんながみんな頬を上気させて、潤んだ瞳で着物狐に寄りかかって――やられた。
「普通の女子であれば、逆らえるはずがないというのになぁ。梓……どうだ、この輪に交ざりたくはないか？」
「あァよ、お断りだね。んで、今すぐその術だか魔法だかわかんねェの解いてくれや。でないと、ちィと怒るぞ」
「ほう？　良い良い、愛い子の怒り顔というのもそそるものぞ。特に主は、その火傷も、その腕も……吾の好みに合致しすぎている。もっと怒り、泣いてはくれぬ

か？　ククク、吾のものにしたくてたまらないのだ」
「そぉかい。んじゃ――」
座っている場所から【即死】を一滴垂らす。
それだけで、屋敷からパラパラと木屑が降り注ぎ――メキメキという音を立て始めた。
「……何をした？」
「いやなに、この屋敷そのものから命の気配ってながしてたンでよ。コレも化け物の一種なンだろ？　だから殺した」
「良いのか？　屋敷が倒壊すれば――女子達も巻き添えを食うぞ？」
「問題ねェよ。それでお前をみんなから離せるンならな」
「……ならば、こういう嗜好はどうかの？」
ガシャンガシャンと。
今まで沈黙していた鎧やら何やらの化け物達が、一斉に動き出した。
そしてそれらは――着物狐に寄り添うみんなへ向かって刀を振り下ろす――着物狐ごと。

「ッ、思惟瑠徒恵印滅後琉名句阿簿楠蒲湯上競流布（※盾※のアイシンハージャは自身を覆う箱を作りなさい）！」

「【静弱】」

あァダメだった。余裕ぶってるフリ失敗だ。奥の手をもう一個使っちまった。

形成されるは【静弱】の箱。それは着物狐を含めた5人を取り囲い、攻撃を防ぐ。

「今の唸り声……お主は妖だったか？」

「そりゃァお互い様ってことで」

「ククク、それもそうだ。だが、良いのか？　――ほれほれ、こうも密閉されては……こんなこともしてしまうぞ？」

そんなことを言いながら、※コンナコト※をする着物狐。

俺のことおじさんだってわかってンじゃねェかってくらい的確に――いや、普通の女子なら絶対かかる、とか言ってたな。もしや気付いてンのか？　俺の人格が、男性であるって事に。

「……だが、殺せたな。つまり家の化け物ァ、外からァ殺せねェが内側からなら殺せるって条件か」

「む？」

「そォいう風に辿るなら――例えば」

申し訳ねェが、お嬢達には〝コンナコト〟をされといてもらう。俺ァその辺に関して激昂するよォな奴じゃないんでな、死なねェんならそこまで気にしねェ。だから、それよか周囲の化け物を考える。

あの鎧武者……ユアサジっつったか。アレみてェに即時復活するってこたない。もうこの家ァ死んでる。倒壊ァもうそろそろだ。もうちょい殺せば死ぬ。つまるところ、条件さえ満たせば殺し得る――オリジンと同じよォな仕組みだって考えて良い。

なら、今あいつらに群がってる別の鎧武者や一反木綿みてェのとかヒトダマみてぇのとか、とにかく日本妖怪みてェな奴らも、条件さえ整えゃ死ぬと見ていいだろう。問題ァ俺がそォいう対処している間に着物狐がみんなを殺さないか、だが……それができンならとっととやってる気がすんだよな。

わざわざ化け物操って殺すってな、ちょいと遠回りだ。あのいつの間にか動作が終わってる奴含めて、なんぞかカラクリがある。

なンで、とりあえず試すのァ。

「シエナ！　家の隙間から中に向かって閃光弾！　お前ァ入って来なくていい！」

――≫はい！≪

ヒュ、なんて音がして、ちっくせェ玉が屋敷内に入る。

それは屋敷の中央当たりに来て――凄まじい光を吐き出した。

幽霊にゃ光だろ。あるいは掃除機。

「へえ？　お主、妖についての知識を多く持っているようだ。式鬼の言葉といい、この国出身ではないのか？」

「違うね。だが、似たような国を知ってるってだけさ」

「ほう！　ヒノモトと似たような国とは――是非、行ってみたいものぞ」

「生憎もう行けねェ場所にあってな」

「……そうか。お主も、帰るべき場所を失った子か。……。良い良い、やはりお主は吾に愛されるべきだ」

光ァ、効いた。俺の【即死】を使うまでもねェ、一反木綿みてェなのと人魂みてェなのが一瞬にしてジュッと消えた。まァこの辺魔力密度高くて暗いからな、そォいうトコじゃねェと生きられねェ化け物だったンだろう。

だが、鎧武者はダメっぽいな。鉱石で作るだのなんだの言ってたし、マッドチビ先生の作るのと同じくガーゴイルか。あるいはゴーレム、マリオネッタ。まァなんでもいいが、精神体だ。

なら――良い。俺ァ精神体にァ滅法強くてね。

「まあ、待て、そう血気を見せるでない。ククク、もう満足ぞ。そら――返してやる」

「え」

「あ」

「んぅ……？」

「――!?!?!??」

その言葉の通り、一瞬で顔付きを変える四人。鎧武者ァそのままだが、４人は一斉に着物狐から距離を取り、臨戦態勢になった。

なンだ、その。乱れた着衣を直しつつ。

着物狐ァ着物狐で、見せつけるように――口元を拭う。

「梓さん!!」

「なンだよ」

「ち、違うんですの!!　私は本当に梓さん一筋で！」
「あァわかってるわかってる。わかってるけどそォいうの後にしな。アイツから目ェ離すのァダメだぜ、お嬢」
　明らかに圧倒的有利だったはずだ。
　それを解放したのァ、何の意図があってか――。
「なぁに、お主らと敵対するつもりはないのでな。特に梓。お主には、吾の愛を受け取ってもらいたい」
「お断りだァよ。確かに見た目ァ結構良いが……じゃねェ、そうじゃなくて、なんだ、まァそこそこ良いたァ思うが、簡単に死のうとする奴ァ恋愛対象外でね。出直してきな」
「成程成程……では、吾がお主の妻になる、というのはどうだろうか。無論、自死も殺しもやめよう。式鬼を嫌うというのであれば、これらも捨てよう。どうだ、このカラダを好きにできると考えたのなら――魅力的ではないか？」
「アンタ、信用ってな言葉ァ知ってるか？」
「ククク、少しばかり虐めすぎたか。ククク、周りの者も、そう殺気立つでない。こ

こからはちゃんと、吾の困っている事を話そう。それを解決しに来てくれたのだろう？」
「……ンなわけじゃねェが、話ァ聞くよ。ただし、次アレやったら――アンタの手持ちの化け物ァ全部殺す。いいな」
「ああ、わかった」
それで、ようやく。
話し合いが始まった。
……無駄が多いっつの。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「まず――事の起こりから話そう。あれは今より50年前、この国が滅んだ時の事ぞ」
「あァさ、そもそもどォやって滅んだんだ？　化け物に襲われたってなァ知ってんだが」
「吾の使うこの式鬼……ああ、驚くでない。完全に制御下故、愛でることもできる。

これを、外では魔物と呼ぶ……というのは、合っているか？」

ポン、と掌に出したのァ、小さめの猫……じゃねェな。ありゃ猫又だ。

それに警戒するのァ４人。俺ァもうそんな警戒してねェ。なんつーか、コイツから殺意みてェなのが欠片も感じられねェんだよな。

ただ悪戯、って感じだ。冷静メイドに似てるンだ、ちょいとな。

「あァ、合ってる。ま、式鬼として話してくれていいよ。そっちのが話しやすいだろォし」

「ありがたい。……50年前、この国には３つの勢力があった。吾らの侍衆、吾らの敵である忍軍、そして何の力も持たぬ人々。吾らにも忍軍にもそれぞれ姫という存在があり、吾らは北を、忍軍は南を領地とし、国外から来る式鬼を倒していた」

「その頃から敵対してたのか？」

「クク、良い所に気付く。答えは否だ。過去では手を取り合っていた。吾らと忍軍は、最も貴ぶべき御方に使えていたのでな」

「殿とかその辺りか」

「おお、よく歴史を勉強しているようだな」

つまりまァ、最初ァ仲良かったと。俺の知ってる侍と忍者の関係たァかなり違うが、まァ国の守護者としてあったと。

……この分だと、キラキラツインテや先公ァその何の力も持たない人々、つまり一般人だったって感じかね。名前の響き的にも。

「その均衡は程良かったのだ。吾らも忍軍も、見事に式鬼を抑えきっていた。――殿が病で亡くなるまでは」

「はァ、なるほど。それで、利権争いっつーかどっちが頭になるか、みてェな争いでも起きたのか？」

「いや、違う。殿が式鬼になったのだ」

「……あン？」

人間が――化け物になった、だと？

……それァ、あり得る、のか？　あり得ちゃ……いけねェんじゃねェか？

「式鬼となった殿は強かった。侍衆も忍軍も歯が立たぬ。して、吾らは南北に別れ、その交流は断絶した。何の力も持たぬ人々の多くが殺され、それでも尚式鬼となった殿……生前の名からカンコウと名付けられたそれは、国のあらゆるところを

破壊して回った。吾らも忍軍も逃げ回ることしかできぬ。そうしていく内に、ヒノモトという国は滅亡したと――外国にも知れ渡るようになった」

「そのカンコウってな、今はどこに？」

「わからぬ。ある一時から、その姿を見なくなった。忍軍が倒したのではないかと恐る恐る問いに行けば、忍軍からも吾らに使いの者が出ていてな。どちらからしても知らぬ――どこにいったのかは、どちらにもわからぬというのだ」

「まァ隠す意味が無ェンだ、嘘じゃねェんだろうな。本気でどっちも知らねェとなると、国外に行ったと考えンのが普通だが……。着物狐、カンコウってなどんな事をする式鬼なんだ？　あるだろ、雷を操るとか火を扱うとか」

「雨と木々だ。カンコウは天候を繰り、意のままに樹木を生やす」

「お嬢、ポニスリ。心当たりァあるか」

「いえ、そのような魔物がＥＤＥＮに来た、という話は知りませんの。ただ、50年前ですと私はまだ生まれておりませんので……」

「遠征組がそのような魔物を討伐した、という話も聞かんな」

「ベルウェークの例で考えるのならば、何者かがそれを連れ去った、という事は考

えられないだろうか？　幾百と大きな丘から動かなかったベルウェークが、ルむぐ」

「ウィジ。余計な事を言わない。でもその通り。ずっと大きな丘から動かなかった――私達が繋ぎ止めていたはずのベルウェークは、その使徒によって簡単に動かされた。カンコウというのも、何者かによって動かされたと考えられる」

そォだな。

それァまァ、可能性として考えてもいい。だが、ちょいと引っかかる。

まず誰が、って点。で、何のために、って点。んで、どこに、って点だ。

恐竜島やウォムルガ族の村、大きな丘ってなは海の向こうにあったからＥＤＥＮが気付かなかったンだ。だが、ここァ地続き。カンコウってなを連れてくにしても、遠征に出てる魔法少女の一切に気付かれず、ってなはできるモンなのか？

何のため、はまァ、いくらでも考え付けるから今はいい。一番気にしなきゃなんねェのァ誰が、だな。

ルルゥ・ガル……じゃ、ねェ気がする。アイツが動き出したのって多分最近なンだよな。これァ勘でしかないんだが、いんやさ裏付けをすると、今までＥＤＥＮの

魔法少女が奪われるとか、化け物が統率されてるとかが無かったから、とか色々言い様ァある。大侵攻ァ時たまあったらしィが、統率ァされてなかったと。

だからまァ、これをやったのァルルゥ・ガルじゃねェ。つかルルゥ・ガルにァベルウェークってな神がいたわけだし。

神。

神か。

カンコウってながオリジンだとして、ヒトが化け物になるってなどォいう事なのか。まァオリジンの発生原理ってなわかってねェんだ、もしかしたらすべてのオリジンァ元はヒトなのかもしれねェっつー嫌な想像もできンな。

「すまねェ、話の腰折った。カンコウってながどこにいるかは置いておこう。んで、侍衆と忍軍ァどォして仲を違えたンだ？」

「うむ。きっかけは、カンコウがいなくなったことで、これから再度手を取り合ってこの国を再興して行こう、という話し合いの場が設けられたことぞ。その場で――忍軍は、吾ら侍衆の食事や飲料に毒を混ぜた。そしてこう宣言したのだ。≪この国は忍のものとする。侍は要らない。国民も要らない。我らが姫と共に、このヒ

ノモトを再建する。貴様らが我らに降るというのであれば受け入れよう――如何か≫と」

「回答ァ、≪馬鹿を言え≫、か？」

「ククク、血の気の多い娘子だ。だがまあ、中らずと雖も遠からず。吾ら侍衆は、毒によって死に行きながら――自らの操り得る最上位の式鬼を作成した。そして、その制御権を吾に渡したのだ。中には自らの命を生贄にするものもあった。吾も相当に怒りを溜めていたのでな、式鬼には忍軍の駆逐を命じ、吾と姫、そして毒を食らわなかった少数の侍衆でこちらに逃げてきた」

何が中らずと雖も遠からずだ。そっちのが血の気盛んじゃねェか。

「この出来事により吾ら侍衆と忍軍は完全に決裂した。そこからずっと、敵対関係よ」

「姫が云々ってなは？」

「話した通りだ。もう我慢ならぬと、吾らが一斉蜂起しようとした夜――姫は単身、忍軍の元へ行ってしまった。≪やるべき事を見失うな≫と、そのような書置きを残してな」

尖り前髪らしくもあるが、あの面倒見の良い奴がこいつら見捨てるよォな事するか？

……ん―。

「ちなみによ、着物狐。俺達ァ忍軍にも接触してきたンだ」

「ほう？」

「んで、あっちの話も聞いた。アイツらの話曰く、お前ら侍衆ァ忍軍を逃がす代わりに忍軍の姫を捉え、首を吊り、串刺しにした後式鬼の餌にした……って聞いてるンだが、これァ事実か？」

「無論、事実ではない。吾がそのような残虐な行為をするように見えるか？」

「信用って言葉知ってっか？」

「ククク。だが、これは事実だ。吾らはそのような行為を行っていない。何より、吾らであれば姫になど興味を示さぬ。忍軍を捕らえたのであれば、姫が何を言ってこようと無視し、それを惨殺するだろう。あの場で食事に毒を混ぜろと指示したのが忍軍の姫であるというのなら、話は別であるが」

まァ、太腿忍者ァそォいゥこたしねェだろ。

……いやどォだろうな。アイツ結構効率的っつーか、それが最適だと思ったらやるって可能性ァある。……ん―。

難しいなァ。

「あァ、じゃァ話ァ変わるンだがよ。お前、こんだけ式鬼を操れンなら、どォして忍軍をぶっ潰さねェんだ。アンタ自身ァ他人を殺せねェみてェななんかがあるのァわかるが、こんだけの量をいっぺんいあやつれンなら楽勝だろ」

「それが、そうも行かぬのだ。吾はこの通り、あの場で死した侍衆から制御権を渡され、多くの式鬼を操り得るようになった。そのすぐ後に死なぬ身体……まほーしょうじょというのにも覚醒し、妖の混じるヒトとなった。――だがそれは、忍軍も同じだった」

「ははァ、やっぱりか。あのあみあみ忍者……ユクナっつったか？　アイツも魔法少女だな？」

「確認を取ったわけではないが、そうだろう。何度殺せども蘇る。幾度となく殺したが――幾度となく姿を現す。面妖なことに、あの者を式鬼で殺すと、その式鬼の制御権が失われてしまうのだ。故に最近の吾は温存を選んでいる。あまり多くの式

鬼を向かわせず、しかしこちらに攻め入らぬよう牽制をする」

……そもそも式鬼の作成ってな技術が意味わかんねェんだが、あみあみ忍者ァそれの契約かなんかを断ち切れる魔法を持ってるンだろォな。んで、城のどっかに蘇生槽でもあるンじゃねェか？　だから動きたがらなかったって考えりゃ納得も行く。

となると、あみあみ忍者が言ってた人一人を殺せば消える、ってのも嘘か？　毎度毎度自分が犠牲になって……いや、あるいは気付いてねェって可能性もあンな。自身の蘇生にこそ気付いちゃいるが、だからこそ自分が毎回毎回犠牲になってるンで、まるで人一人を殺したら消えてるかのよォに考えてる、とか。

自分の魔法が何かを認識しないまま、ってな、アインハージャ2人の例がある。別におかしなことじゃねェ。

ふむ。まァ大体わかってきたよォな気もするが……問題ァ、どう終わらせるか、だな。

「忍軍に攻撃をやめる、ってな考えァ無いのか」

「吾らにも矜持がある。あの城は吾らの城なのだ。全く、南方に行かば忍軍の城も

残っているというのに、何ゆえ吾らの城に固執するのか」
「確かに位置的にァ北側だな。となると、あいつらがあそこを自分の城だって言い張ってンのァ蘇生槽があるからだけ、って可能性ァ高い。でもそーなると退いちゃァくれねェなァ」
さて、どうするべきかね。
後ろから感じる視線。まァ多分、「これ、放っておいてもいいんじゃないか？」ってポニスリの視線なンだろォが……。このまま見捨てたら、こいつらァ殺し合いをやめねェだろ？
俺ァそれが嫌なンだよなァ。
……んじゃ最終手段か。
「あー、よ。着物狐」
「なんだ？」
「その矜持ってなよ――俺の妻になる、ってのとじゃ、どっちが重い？」
「梓さん!?」
まァ、どーやったら殺し合いが起きねえのか、なんて。

簡単だ。
どっちか引き剥がしちまえばいい。
「……ククク、良いのか？　吾からみても、そちらの金糸の乙女は、お主に惚れているようだが」
「あ？　なンだよ、そォいう配慮できンのかよ。最初にあンなことしておいて」
「無論、舌を交えたのなら、心情など手に取るようにわかる。――因めば、その答えは是だ。お主は酷く魅力的故な、侍衆の悲願も妄執も吾らの覚悟も全て捨て去って、お主の妻となろう。それと、吾は妻が他に居ても構わない。ククク、どうだ？」
「だ――だめですの!!　それは絶対ぜったいぜったい」
「んじゃ、それで。ただまァ、さっきの接吻でわかっただろォが、俺ァあんまりそォいうのに靡かねェんでな。そっちの努力次第って事にさせてもらうが、それでもいいか？」
「構わない。吾は難攻不落の城を落とすのも好みだ。さて、ならば少々支度をしてくる故、待つが良い。ああ、そうだ。ク、旅ともなれば――共に湯浴みをするこ

ともあると、そう期待しても良いのだな？」
「時と場合による」
「良い良い。では、そうしよう」
よし、これで良いな。
なんぞ複雑な事態ってな、こぉいうシンプルで強引な方法で大体なんとかなンだよ。【即死】もシンプルで強引な魔法だしな。俺ってばこぉいう手法が合ってるのやもしれん。
……アレかな。前世で陰口とか叩かれてたのかな。あの人の企画いつも詰めて無くて大変だよねー、とか。
「あ――あ、あ」
「ン、どうした、お嬢」
「梓、貴女には人の心が無いのだろうか？　聞けば、フェリカとはそれなりに固い約束を交わしたと聞いている。だというのに今のは……あまりにも」
「ウィジ。ダメ。私も見ていられない。これは悪魔の所業。最低」
「……梓。あまりこういう事は言いたくないのだが……もう少しだけでいい。私……

いや、良い。フェリカの気持ちも考えてやってはくれないだろうか？」

「エ、なんだよ揃いも揃って。ハナから言ってるだろ。俺ァお前らのことそォいう目で見れねェんだよ。だからお嬢の告白もちゃんと断っただろォが。お嬢の気持ちだァ？　知らねェよ、お嬢ァ〝梓さんが勝手に振り向きますの〟なんつってンだ。ンな風にお嬢を慮ったら、お嬢の努力ガン無視じゃねェか」

子供相手にしてるみてェで恋愛対象に見れねェってのもそォだが、お嬢もポニスリも結局まだ死が何なのかわかってねェ。

その点、着物狐ァ最初に言ってくれた。俺が望むンなら自死も殺しもやめる、火傷も腕も良いってな。魔力消すくらいならいっぺん死んできた方が良い、なんて事宣うお嬢達たァ違う。その年齢含めて、子供にも見えねェし、ちゃんと……なンだ、愛恋の対象にァ見える。

結構でかかったよ。

あの時言われた言葉。一度死んで治してきた方が良い、って言葉ァ——ちょいと、俺の中で2人の評価を下げ過ぎた。その怒りもまァ、欠片も伝わっちゃいねェんだろォけどな。

別に朴念仁ってワケじゃねェよ、俺ァ。
わかってる。好意くらいわかる。けど、俺にだって譲れねェモンがある。それだけさ。
「梓。私は貴女を見誤っていた。ここに謝罪をする」
「ウィジ。それは私も謝るけど、一緒に子供扱いされた事は遺憾」
「……」
「……」
ごめんなァ、けったいで複雑な人間で。
でも俺を好くってな、そォいうことだ。だから――無理なら諦めな。少なくとも俺ァ自分変えられねェからよ。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

2・Are cute such real shine the too.

47・上琉噛無・

「では、お主ら。吾はここを去ることにした。お主らも好きに生きるが良い」
「……姐さん。アンタのやることはいつも唐突だ。だが今回はとびきりだ。けど――ここから離れられるんだな？」
「旅の行く末に価値ある死のあらんことを祈っております故、どうか我らは気にせずに、ナリコ様」
男2人。
それが、着物狐の言ってた此処にいる命2つ、だった。
片方はザ・陰陽師。片方はザ・侍。そんな見た目。そぉいや侍衆って話だったのに、着物狐もこの陰陽師っぽいのも刀ァ持ってねェんだな。

「ではな、ショウモン、ストク。だが、近い内にまた相まみえることであろうぞ」
「……相変わらず姐さんの千里眼は恐ろしいや。俺っち達はずっとここを守ってるよ。姐さんが帰ってくるまでな」
「無論、躯になろうとも、だ」
「ククク、好きにして良いと言うておるのに。――達者でな」
ま、そんなあっさりした感じで。
着物狐ァ、俺達と一緒に来ることになったワケである。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「何、アンタ新しい女引っかけてきたワケ？　それにこの感じ……アンタ、魔物混じりね？」
「ククク、さてさて。初い子愛い子ばかり故隠し通せるやとも思ったが、慧眼の持ち主もいるとはの。だが、否定はせん。吾は妖の混じるヒト。その上で、まほーしょうじょだ」

「……別に、私は魔法少女にも魔物にも偏見とか無いからいいけど。アンタ達はわかってたワケ？　ま、今の口ぶりから察するに一切知らなかったみたいだけど」
「あァさ、知らなかった。化け物混じりってなンだよマッドチビ先生。魔法少女の事じゃねェのか？」
険悪な雰囲気、と言えるのだろう。
屋敷から出てすぐ、まずシエナが警戒した態度で着物狐に対応した。なんぞ――完全な敵を見る、みてェに。んでも何も言わないんで、そのままＬＯＧＯＳまで連れてきたら、コレだ。
なんぞね、化け物混じりってな。
「そのままよ。過去に魔物と交わった人間。その子孫」
「……交尾ができンのかよ。化け物と人間ってな、子ァ作れねェんじゃねェのか？」
「ディケントやイオルーでは無理ね。根本が違うから。でも」
「ははァ、オリジンなら……そォいう事する化け物として生まれ出でた奴なら、可能って事か？」

「ええ、そう」
つくづくオリジンってなよくわからねェ存在だな。
これァ、カンコウってながオリジンって説も濃厚っつかほぼ確定か。
「ククク、そう険しく眉を顰めるな。可愛らしい顔がより可愛くなって、あぁ、つ
いつい接吻をしたくなる」
「お断りよ。その感じ、混じったのは随分と高位且つ魅了や洗脳に類する力を持つ
魔物。接触自体が危険だって一目でわかる」
「梓・ライラック様。魔力反応からして――この方に、人間である要素はほぼ存在
しません。魔力の色はほとんど魔物です。それでも、連れて行くのですか？」
「あァよ。ほとんど化け物だから、なんつって殺すンなら、俺ァシエナも殺してる
よ。俺の判断基準ァそこじゃァねェ」
「そ、それは」
忘れそォになるが、シエナァガーゴイルだ。
マッドチビの作った精密機械が魔石燃料で動き、且つその精神体ァマッドチビか
ら切り分けられたもの。それってな、ユアサジだの鎧武者だのと何ら変わらねェ化

け物だろォよ。
　だが、シエナも着物狐も襲っちゃこねェんでな。殺す必要もない。
「成程、何やらおかしな音と思っていたが、そちらの娘子は絡繰か。良い良い、吾は絡繰も愛そうぞ」
「結構です。……申し訳ありません、梓・ライラック様。私はこの方を信用することができません」
「それァ俺もしてねェんで大丈夫だ。信用してねェのを同じ船に乗せんのが抵抗あるってンなら、四六時中見張っといてくれや」
「わかりました。何か不審な行動があった場合、即刻拘束し、梓・ライラック様の元に突き出します」
「ククク、怖い怖い」
　ちなみにそォいう態度なのは他４人も同じらしい。
　まァこいつらァ襲われてるからな。
　俺も一応襲われちゃいるんだが……なんつーンだろォな。
　なんか、違う気がすンだよ。

コイツァさ。もっと、もっと――悲しい生き物、のような。
「話はまとまったみたいね。アンタが乗せたいというのなら、私はそれで構わないわ。ただし、ちゃんと世話はするのよ？」
「ペットみてェな言い方すンなよ」
「何言ってんのよ。ほぼ魔物だってシエナが言ったでしょ。じゃあペットじゃない」
「ククク、吾は梓の妻となるからの。世話をされよう、隅々まで」
「んじゃ、早く乗りなさい。鉱石も粗方集め終わったから、出発するわ。周囲に何か面倒なのがいっぱいいるみたいだし」
「あァ、忍者の奴らだな。まァ手ァ出してこねェだろ。さっさと出発しちまおう」
「……ではな、憎き忍びの者共。吾はこの地を離れるが故――あの子の事は任せたぞ」

ま、聞き逃しといてやる。

この地に纏ろう複雑な糸ってな、今は無視だ。始の点に関するあれこれに目途がついたら、もしかしたら戻ってくるかもしれねェってな頭にァ置いといて。
じゃァな、どっか懐かしい国。

さて――。
「ナリコさんの事は一旦置いておくにしても、梓さんには聞かなければならないことがありますの」
「そうだな。そろそろ、気になってきた」
「単に博識であるというわけでもないのだろう。梓、貴女は少し知りすぎている」
「私達アインハージャの言葉も含めて――あれ、何語？」
「ククク、文面でならともかく、式鬼の言葉を発音できる者がいるとは吾も思っていなかった。どこで習ったのだ、言っておくが吾にも無理ぞ？」
まァ、こーなるわけだ。
そろそろ無視もできなくなったと。まァそォだろォなァ。

「ん―。まァ俺にはいくつか隠し事があってよ。全部それに起因するンだ。……っつー説明じゃ、当然納得しねェよな」

「当たり前ですの」

「んじゃまァ、式鬼の言葉ってなから片付けるか。これァ単純に知ってたンだよ。知ってたっつーか喋ってたっつーか。国……あァ、ジパングじゃねェぞ、俺達の国だ。あっこってな、色んな国の人々が集まる。その中にいたってだけさ。式鬼の言葉を遊び半分に教えてくれる奴が」

「……本当にそんな言い訳で納得すると思っているのか？」

「クク、式鬼の言葉など、式鬼同士が意思の疎通や伝達に使うか、国外の者に知られたくない内容を文にして飛ばす時くらいにしか使わぬのだがな。吾も忍軍も、あるいは50年前に散り散りになった市井の民でさえも知らぬ言葉ぞ。それを遊び半分に教えるなど、酔狂も酔狂な話よ」

ふむ。

適当言い訳作戦失敗。

「マジな話をすると、元から知ってたンだよ。魔法少女になる前からな。単なる人

間であった頃から、その言葉を知っていた。アインハージャの言葉っつってるのもそォさ。ありゃアインハージャだけの言葉じゃねェが、俺ァ元から知っていた」

「……魔法少女になる前、から？　……では梓さんは、ご自身が魔法少女になることを知っていましたの？」

「いんや？　知らなかったよ。知ってたらもちっと鍛えてたンじゃねェかな。素の身体能力が高ェ方が便利なンだし」

「ならば梓、貴女には私達アインハージャと同じく、過去の英雄たちの記憶があるのだろうか？　無論、私達でさえその全てを覚えているわけではないが、私達にはヴァルメージャとなれなかったアインハージャ達の記憶や経験が引き継がれている」

「ウィジ。珍しく的確な疑問」

あァ、まァほぼ正解だよな。

これァ頷くべきか。でもなァ、だとすると、って方の疑問が湧いてくるだろォし、非善に言うべき事じゃねェんだよなァ。

「ま、適当に考察してくれや。答えァやれねェからよ」

「……梓さん」
「ン？」
「貴女が様々な言語を知っている事は――貴女が私を恋愛対象に見ることができない、という理由と同一であると、そういうことですのよね？」
「まァ、そォだな」
「ならば重ねて問いますの。――貴女は、何歳ですの？」
……え。
あ、ん？
今なンでそこに行きついた？
「まぁ、そうなるな。お前は私達を子供や娘にしか見ることができないと言っていた。13歳であるお前が、だ。そこにそれほどまでに深い言語の知識を有しているとなれば――本来の年齢とにかなりの差があると考えるのも無理はない」
「正直に言えば、私達は梓さんがＥＤＥＮに上がってからしか貴女のことを知りませんの。それまでは普通の中学生だったと貴女はよく仰っていますけれど、今の話を聞く限り、そうではない……梓さん。貴女はいったい何者ですの？」

……。
ん―。
そぉいうのァ聞かないでいてくれると助かるンだがなァ。アレか、もう取り繕わない――とか、そぉいう奴か。そぉかそぉか。
「言いたくねェ」
「……」
「……お前は」
言える事と言えない事。
別にさ、俺が43歳のおじさんだってなァ、特に隠すことでもねェんだよ。
俺が隠してンのァそっちじゃねェんだわ。
「話ァ終わりだ。……ちょいと俺ァ、湯浴みでもしてくる。すまねェな、空気悪くした。なんぞ談笑でもしといてくれ」
立ち上がって、部屋を出る。
ＬＯＧＯＳには風呂も用意されていて、その広さァエデンのそれにァ及ばないものの、結構デカい。

そこに向かう。追ってくる気配はない。
ま、ちょいとゆったり湯船に浸かって、俺も頭を冷やすとするかね。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

カポーン――……みてェな音ァしない。まァ和風じゃねェからな。別にライオンの口からお湯が出ていたりもしない。
ただ広く、ただただ……なンだ、天才彫金師殿らしい煌びやかな造りの浴場。
さっきのァちょいと悪かった。
もう少し言い方あっただろォに、あンなんじゃァ誰もが気ィ悪くするに決まってる。
……じゃァどォすりゃよかったかって、どォしようもねーんだけどさ。
式鬼の言葉ってなァまァおじさんの方をバラしゃいい。だが、それをバラすにァ»どうして«と»どうやって«が発生する。だがそれァ言えねェ。少なくともアイツらじゃダメだ。

だが、このままだと……色んなコトがうまくいかねぇってのもわかる。
「なァよ、俺ァ……どうするべきかね。最悪一人で――」
「クク、悩める女子、というのも乙よな。そして、豪華絢爛な湯場だ。これを一人で使うなど、少しばかり贅沢が過ぎようぞ」
「……着物狐。あァ、じゃァ俺ァ出るよ」
「まあ待て」
いつのまにか。
いつのまにか、俺ァ着物狐に座っていた。
!?
「ほれほれ、暴れるでない。何、此度はおかしなことをするつもりはないでの、大人しく吾に捕まるが良い」
「十分オカシイ事してるっつーの！」
「クク、こうでもしなければ話は出来なかろう？　お主は吾の身体と向き合えぬだろうからな」
「ッ！」

向き合えねェのァ大正解だが、背中に密着ってのも、こう、色々と……！

「お主、心は男子なのであろう？」

「……流石に気付くか」

「吾の接吻に逆らえる女子は居らぬ。それは絶対の力……吾が本当に妖の混じるヒトであるというのはあの小さき娘によって知らされただろうが、その混じった妖というのは、夢魔の類なのだ。外界では――インキュバス、などと呼ばれていたか」

「あァ、成程な」

そォいう自身の事情も知っててのアレなのか。

しかし、インキュバスね。男性の淫魔、あるいは夢魔。おじさんでも知ってる有名どころ。男性夢魔の血が入った女性故に、女性ァ逆らえねェで、男性にァ効かねェと。

「既に討滅された妖であるが、その血は確かに吾まで受け継がれてきた。吾がまほーしょうじょになったことで、もう薄れる事もなくなった。そして、受け継がれることもなくなった。吾が最後の夢魔になる、ということぞ」

「……それが、なンだ」

「辛かろう。自らに妖を持つ、というのは。吾であればわかる、と言っている」

……。

どこまでわかられてンのか知らねェが、あんまり踏み込まねェでくれねェかな。揺らぎそうになる。

「クク、お主は吾に同情しているように感じたのでな。仕返しぞ」

「――お前ァ、アレか。誘われねェと外に出られない。そォいう条件付きの化け物か」

「ショウモンの言葉を聞き逃さなかったのだな。そうだ。吾は長く――とても永く、あそこにいた。クク、忍軍や姫の話は嘘ではないが、まほーしょうじょになる以前から吾の時間は止まっていたのだ。忍軍の混ぜた毒は、効かなかった、が正しいだろう」

「はン、まァ化け物に人間用の毒が効くわけねェからな」

背中とか後頭部に当たる諸々ァ無視して、ちょいと――悲しい気持ちになる。

あんまり化け物に同情ァしたかねェ。ンな余裕ァ無ェからよ。でも、それは。

「あの絡繰娘の言う通り、吾はその大半を妖としている。妖の混じるヒトではな

く、ヒトの混じる妖と言った方が正確ぞ。故に吾は——吾の辿るべき道というものを知っている。まほーしょうじょとならなければ辿っていたであろう道を知っている」

「それ、俺に語っていいのかよ。化け物の共通意識だろ。その——悲願ってなよ」

「吾はまほーしょうじょになったのだ。ククク、妖の大意など、吾の知った事ではない」

化け物の総意。

光眼鏡に入った精神体や、迷宮での天使、ベルウェーク。

高位の化け物達ァみんなそれを目指してた。ルルゥ・ガルがどォかは知らねェが、あの口ぶりじゃ知ってァいるンだろう。

そして、着物狐も。

「妖は、繰り返し、繰り返し、繰り返し、繰り返し——廻り続ける事で〝外〟に近づき、成道することを望んでいる。高位となることでさえ繰り返しの一部に過ぎん。吾もまた同じ——妖とは、生まれたその時点で死ぬ定めにある。ククク、あの絡繰娘や吾と出会わなければ、お主にそのような顔をさせることも無かったのだろうが

な。妖とは、それほどに悲しき生き物だ」
嫌になる。
俺だけじゃねェんだよ。色々抱えてンのァ。
んでもって、ソテイラの言う通り。
「お主も同じだな？」
「……俺ァ妖でも化け物でもねェよ」
「そうではない。まほーしょうじょになる前から混じり物であった。そして吾と同じく――悲しき定めにある。運命、と言っても良いだろう。吾はそうなる前に救われた。だがお主は……」
「そこまでわかってンなら、なンで妻になるとか言ったンだよ」
「クク、それは容姿が好みであったからに過ぎぬ」
「そォかい」
ほぼ、正解だ。
俺ァ……ちょいと、色々混じってる。
前世がどォのじゃねェ。43歳のおじさんなんざどーだっていい。価値観や倫理

観で悩む事ァあれど、俺の役割ってなソコじゃねェ。
何事もなく魔力殺して世界も殺せるンならそれでいい。
けど、それができなかったら。
もし――魔力ってのを、世界から無くせなかったら。
俺は。
「……話し過ぎたな。そろそろ離してくれ、逆上せちまうよ」
「ククク、語ったのは吾ばかりで、お主はほとんど話していないだろうに。……お主のそれは、誰にも相談のできぬ類だろう。頼り得る者もいない。打ち明かし得る者もいない。ククク、あの程度の理解でお主に付き纏う女子など、お主にとっては邪魔でしかないのではないか？」
「つっても連れてきたの俺だしなァ。……俺ァ口止めァしねェよ、着物狐。言いたいなら言ってくれていい」
「何故吾が妻の秘密を他人に明かさねばならぬ」
「そォかい。そりゃ、なんともできた妻な事で」
案外すんなり解放してくれたンで、湯船から上がる。

そうだよ。俺が連れてきたんだ。俺が行きたいって言ったンだ。
だってのに、話せねェってのァ不義理が過ぎる。
何をすりゃ、いいかな。
何をすれば……俺ァアイツらに、義理を果たせる？
「つらくなったら、いつでも甘えてくると良いぞ。吾はいつでも歓迎するでな」
「つらいのァいつでもなンで、遠慮しとくよ。アンタはヒノモトの外を見て、十分に楽しんでくれ」
「ククク、そうさせもらおうぞ」
俺ァ、アイツらに何をしてやれるンだろォなァ。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《／ｔｅｘｔ》

結局、上手いこと話のできねェまま、一週間くらいが過ぎた。
いやもっとかな。10日くらいか？

道場じゃ俺抜きでみんなが修練してるし、シエナァ相変わらず着物狐を警戒しているし、マッドチビ先生ァ手頃な山をゴリっと持って行っているし。

時折起きる化け物との戦闘も、俺の出る幕はない。

みんなどんどん強くなっていって、俺の指示なんざ必要無ェんだ。魔法の使い方も、その応用方法も。俺に聞くことなく、自分達で話し合ってどんどん高めていく。

マッドチビ先生と着物狐ァ戦闘に参加しないンで艦内にいるけど、やっぱり話すことァあんまりない。精々着物狐がちょっかいかけてくるくらいだ。

……あー。

仲直り、になるのかね、これは。

それァどーしたらいいンだろうか。全てを話す事ができねェとして、んじゃ何をすりゃ仲直りになるンだ。

「……大陸が終わったわね。ここからは海路。だから、ミストベイルみたいなのが沢山出ると思いなさい」

「おゥ、心して――」

「問題ありませんの。私達5人に倒せぬ敵などいませんのよ」

「そうだな。この10日間で、連携力も上がった」
「私達は同じヴァルメージャでもこれほど差があるのかと打ちひしがれているが……」
「ウィジ。フェリカは特別。だけど私達もそこまでいけるはず」
「ええ、共に頑張りましょう！」
「魔力感知は任せてください。といっても、フェリカ・アールレイデ様だけは何も言わずとも魔力の気配がわかっているようですが……」
「訓練しましたので。……そこなナリコさんと共に」
「クク、少しばかり手解きをしたまでぞ。吾の気配を察する術……役に立ったであろう？」
「ええ。毎度毎度のおかしな悪戯がなければ、もっと良かったですわ」
……。
あー。
俺いらねェな、これ。
「始の点に近づけば近づく程、魔物も強力になるはずよ。だから、心してかかること」

「はいですの」
「それと――」
ブリッジを出る。
いんやさ、やる気ねェってワケじゃねェんだけどさ。
疎外感すげーわ。ま、俺の態度ってなも、お嬢達に同様の疎外感与えてンだろォからお互い様なンだろォけど。
……あくまで俺の仕事ってな、始の点で魔力を殺す事だけだ。
道中の戦闘に俺がいらねェってンなら、まァ、そォいうことでいいさな。この10日間だってそォだったンだ、今更だ、今更。
どっちみちミストベイルみてェなのにァ有効打無ェしな。
できる事なくて、やること無いなら……寝てるかね。
寝て。
――≫阿有論理(寂しいの)？≪
「邪止亜離取琉(ちょっとだけな)」
――≫全歪鈍斗有嚙夢塔毎這臼(ならば、私の所に来てみないか)？≪

「座頭名尾倶度唐（それアアリかもな）」

――俺は、ＬＯＧＯＳ内部から消え去った。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――梓さんが、いない？」

「ええ、ＬＯＧＯＳ艦内のどこにもね」

「まさか、海に……？」

「アンタ達が戦闘に出た後から、一度たりとも扉は開けていないわ」

梓が消えた。

出口の無いこの銀の竜から、どこへ消えるというのか。

「シエナ、反応は？」

「ありません。……梓・ライラック様の魔力反応は周辺海域、空域共に……存在しません」

「クク、しかし、奴の部屋にはこんなものが落ちていたぞ。覚えがあるのではない

か？」

ジパングという国で同行者となった、面を付けた女性、ナリコ。

初めの印象が印象なだけに要警戒対象だが、同時に頼れる戦力であることもわかっている。

そんな彼女が持ち出してきたのは、梓のつけていた紋章だった。

「それは……」

「梓の、確かレーテーという名の魔道具だったか。知人に貰ったと言っていたが……」

「それが落ちているということは、少なくとも梓は自らの意思で何処かへ行ったわけではない、ということだな？」

「ウィジ。最近冴えてる。梓は誰もが見ていない瞬間に連れ去られたと予想できる」

うむ。

私の学力も上がってきたということだろう。

「連れ去られたのだとしたら、どこに？　誰に？」

「わからないが、ディミトラを出し抜けるとあれば相当な使い手だろう」

「……ＥＤＥＮに戻るべき、ですの？　何をするにも、こんな海の真ん中では……」

最近、少しばかり皆の士気に陰りがあった。
原因ははっきりしている。梓の言いたくないだろうことを、寄って集って問い詰めたがためだ。そのせいで双方共に話しかけ難くなって、気付けばいなくなっていた、と。
ふむふむ。
「もしくは家出、という可能性はないだろうか。恐らく梓にとって、ここ最近のＬＯＧＯＳの居心地はあまり良い物ではなかっただろうから」
「ウィジ。流石に梓を馬鹿にしすぎ。子供じゃない」
「それに、家出のようなことになりますと、先ほどご自身で仰った推理を打ち消すことになりますのよ」
「そうだな。……む、そうか。ならば違うな。梓の紋章が落ちている時点で、家出ではないか」
「そもそもどうやって出て行くのよ。私はＬＯＧＯＳを開けてないって言ってるでしょ」
うーむ。

困った。

この旅は梓発案のもの。私達アインハージャもこの世界から魔力を消す、という案には賛成しているが故にこうしてついてきているが、梓がいないのであれば、ＤＥＮに戻って学園生活なるものを送るのも良いと思っている。実際に新鮮で楽しさがあったからな。

どの道あと7度の生だ。謳歌し得るのなら、してみたい。

「クク、困っているようだから、吾が提言をしてやろうか？」

「ダメです！　皆さん、この方の話はアテにしてはいけません！」

「だが、手掛かりが無いのも事実だ。何を言うつもりなのかは知らないが、言うだけ言わせてみるのは有りだと思うぞ、シエナ」

「で、ですが……」

シエナは随分とナリコを嫌っているように思う。

確かにどちらからも魔獣に似た気配がするものの、ベルウェークや奴の手共のような悪意ある存在ではない。魅了を受けた事は結局の所私達の力量不足であり、実際梓は弾いていた。あの時試されたのではないかと思っている。

「聞くかどうかは別として、言ってみなさい」
「ククク、何、簡単なことぞ。ヒノモトの妖術には物品からその所有者を呪うものがある。吾がこれより梓に呪いをかけ――その魔力を絡繰娘が追えば良い」
「呪い……そういえば、梓には他人を名で呼ぶことのできない呪いが既にかけられているのだったか」
「あぁそれあの時ローグンが咄嗟についた嘘よ。そんなものないわ」
「ウィジ。純粋過ぎ」
「む」
リジはわかっていたのか……。
「あまり良い印象を受けませんわね。それ、梓さんに何か被害があるのでは？」
「無論、呪いだからな。だが、吾を好きになる、程度の軽い呪いであれば――」
「絶対ダメですの」
「ククク、案ずるな。どの道弾かれる。お主らと違って、梓は難攻不落の城故な」
確かに、あの魅了に耐え得るなど、正直に言えば考えられない。
梓は精神力も少ないはずなのに、どのようにして抵抗したのだろうか。うむ、思

い出すだけで脳が蕩けそうになるな。
「シエナ、納得できる？」
「う……」
「そもそも何故そんなにもナリコを嫌っているんだ？　私もあまり好ましいとは思っていないが、そこまでではないと思うのだが……」
「き、嫌っているわけではないのです。ただ、この方は非常に危険で……私が今まで見てきた魔物の中でも、特に危険な反応を示しています。その魔法だけでなく、どこか――もっと高位な魔物。心を操り得るのは、オリジンの中でも特に世界に近いため、警戒しない理由がありません」
「……シエナ、アンタのそれ、あっちの私に植え付けられた知識ね。なら、この私が宣言するわ。そいつは別に警戒しなくても良いから、今は梓に専念なさい」
　世界に近いと危険。
　なるほど、それはその通りだ。ベルウェークもそうだが、アインハージャとて世界に近づきすぎると危険個体になる。ヴァルメージャになることとは違う、魔に堕ちたアインハージャ。魔獣、あるいは魔物とは、世界に近いが故にヒトを襲い、人

間を消し去ろうとするのだから。
そういう意味では、アインハージャの言葉を多く使い得る梓も危険域ではあるのだろうな。
いつ人間の敵になってもおかしくない存在だ。
「クク、賛意は得られたと見てもよいか？」
「ええ。やって」
「……魔力反応検知開始します」
さて、とにかく捜索開始だ。
まったく……私は今でも家出説を推しているぞ、梓。
貴女は誰かに連れ去られるくらいなら、もっと痕跡を残すはずだからな。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

48・有阿平土其烈低区阿部湖・

ナリコが一匹の魔獣を出す。

犬、という生物に似た外見のそれは、けれど掌に乗る程小さい。ナリコはその魔獣の身体に、どこからか取り出した絵筆で、黒い文字を書いていく。

» YUMENIMIRUHODO ATSUIKUCHIDSUKEWO «

読むことの適わない、単なる文様にしか見えないソレ。

しかしそれを描かれた魔獣は途端に活力を失い、焼け焦げるようにして塵と消えて行く。

「魔力反応……西方へ向かいました。さらに、高度上昇中……」

「高度上昇？　これ以上はLOGOSで飛ぶにはキツいわね」

「何故ですの？」

「内圧を調整する機能をつけてないのよ。LOGOSで行くくらいなら、ここにLOGOSを停泊させて、プテラゴイルで向かった方が良いわね」

「ならば、向かうとしよう。ディミトラはここでLOGOSの管理を。私とリジ、

シエナは確定として……」
「無論、私も行きますわ」
「私もだ」
「ちょっと、ＬＯＧＯＳを守る戦力は残しておきなさいよ。私だってその辺の魔物に負ける気はないけれど、この巨体は時に仇となる。ベイル種やホーク種に囲まれたら面倒だもの」
「なら、私が残る。ウィジ、１人で平気？」
「リジ、先の言葉を返すが、私は子供ではない。問題ない」
まったく……。
元になったアインハージャが姉妹で、リジの方が姉、私の方が妹だったからといって、あまり姉ぶられても困るというのに。私とリジに血の繋がりはないのだから。
もっとも血の繋がりはおろか私達アインハージャは双方共に天涯孤独なのだが。誰から生まれたというわけでもないが故な。
「クク、吾は行くぞ。問題は無かろう？」

「ええ、リジがいれば十分よ。ただ、もしもの場合はＬＯＧＯＳを動かすから、そのつもりで」
「何かあった場合、ここへ帰ってきても意味は無い可能性がある、ということか」
「できるだけ元の場所に戻る努力はするけれど、ま、もしもの場合よ」
そういう事を言う時に限ってもしもの場合が起きる。
アインハージャの諺にもある。迂遠有援助意字符阿韻上座酸堕愛射瑠差運動と。
「では、行ってきますの」
「いってらっしゃい。ああ、プテラゴイルは余分にもう一匹連れて行く事。あの子を乗せて帰る用にね」
「主ではない主ディミトラ、私にも貸していただけますか？」
「アンタは飛べるじゃない。……燃料を使いたくない、ってこと？」
「はい。もしもを考えるのならば、出来得る限りの燃料は残しておきたいです」
「はいはい、わかったわ。じゃ、一応１人１匹、それぞれのいう事聞くようにしておいたから……行ってきなさい」
初めは驚いた、今では頼りになるプテラゴイルという魔獣に乗る。

ディミトラの制御下にあるこの魔獣は、私達の足場になるだけでなく、敵の飛び道具の盾になったり、なんでもなく突っ込んでいったりと様々ができる。
それに加え、ナリコもそういったものを扱う。事実今ナリコが乗っているのはプテラゴイルではなく紙でできた鳥だ。ただ、これはプテラゴイルほど自由に扱えるわけではないらしく、都度都度先程のような文様を書き込んでいる。
やはりディミトラはヴァルメージャの中でも優れている、というコトだろう。
うむ。
「では行かん――雲の上へ！」
「ここにリジさんがいたら、〝ウィジ、なんで貴女が仕切っているの〟、というと思いますわ」
「む、リジの事をよくわかっているな」
私もそう思う。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ククク……なぁ、フェリカ。お主、どうしてそうも焦っていない？」

「……なんですの、急に」

「何、お主にとって梓は意中の相手であろう？　吾に取られると思うた時にはあれほど反応を見せていたのに、どうだ。梓が連れ去られた事はお主にとってあまり重要な事実ではないのか？」

それは確かに。

私も思っていた。フェリカやミサキはもっと焦るべきだろう。私やリジにとっての梓は一人でもそこまで問題は無いだろうという確信めいたものがあるが、彼女らは違う。

何より愛しているのだと知っている。私自身に恋愛の理解はないが、過去のアインハージャにはそういう感情を持つ者もいた。

だから、わかる。

大切なヒトが連れ去られたのならば、もっと焦り、焦燥し、慌てふためくはずだ、と。

けれど、フェリカはそれをしていない。

何故だろうか？

「……別に。梓さんは、本当に――心の底から、私に興味が無いようですし。私のことなど、欠片も信頼していないとわかってしまいましたの。言いたくない、言えない。そして、聞かれたくない、というあの顔。面倒にすら思っていたように見えましたわ。……私の好きな梓さんは、もっと格好良くて、とても優しい方で……。なんだか今の梓さんは、どこか遠くに行ってしまったように思いますの。だから……」

「――クク、だから一度孤独を味合わせ、己らの大切さやありがたみを知ってもらおう、と画策したのか？」

「言い方が悪いですの。……ただ、一人でかかえこんでいらっしゃるようでしたので……」

「良い良い、わかったわかった。それで、それが今焦っていない理由とどんな関係がある？」

雲の上。

プテラゴイルに乗って突き出たそこは、一面の白。これは中々素晴らしい光景だな。うむ。

魔獣がいなければ、だが。

「魔力反応、まだ上です……」

「これ以上は、魔法少女の身体でもキツイな。しかし、何故そのような所に梓が……」

シエナとミサキ、フェリカとナリコが話をしているので、ここは邪魔をしないようささっと片付けておくのができる女、ではないだろうか。ふふん。【喧槍】を準備し、掌を魔獣に向けて――射出。

見事我が槍は魔獣を貫き、雲の中へと落とす。

……最近はあまり梓と共に戦っていないが故に、「ナイスだ青バンダナ！」とか「いいぞ！」とか、ああいう鼓舞を懐かしく思ってしまう。彼女の声は、アインハージャの言葉を使わずともやる気が出るのだ。単純に褒められて嬉しいというのもあるが。

しかし、どこにでもいるものだな、魔獣というのは。

こんな淀みのない場所にまで出てくるとなると、相当高位のものだろう。まぁ私の槍で一撃だったが。

「……梓さんの目的は、始の点の攻略、及び魔力を殺す事。……けれど、それをし

たら……私達魔法少女はもう二度と蘇る事が出来なくなりますの。確かに魔物はいなくなるのかもしれませんが、そうなった世界で……私達に居場所はありますの？」

「ククク、だから梓を始の点に進めさせたくない。もし――ここで死んでくれるのであれば、怪我も治って万々歳――か？」

「そ――んな、こと、は」

確かに、聞けばＥＤＥＮの魔法少女は回数制限無しで蘇生が可能だという。

アインハージャのそれとは違う。故に魔法少女は怪我を負えば死んで復活し、その時には五体満足と……まぁ我らアインハージャもそういう手法を取る事もあるが、それよりも軽い。あの義手も火傷も梓の戦勲だ。魔獣との戦いの末に死ぬ、のではなく、あれを治療するために死ぬ、というのは、些か……どうなのだ、と思わないでもない。

ただまぁ、梓自身はそもそも死にたがっていないからな。私は梓の気持ちを優先したいところだ。

「何もそう狼狽えずとも良かろうぞ。好きな相手には元気でいて欲しい。好きな相

手には綺麗なままでいてほしい。怪我をしてほしくない。苦しんで欲しくない――それは梓自身が口にしている事。だがあ奴は事あるごとに前にでて、勝手にいなくなって、その度に傷付いて……それを治そうともしない。お主としては、さぞかし辛かろう？　あ奴はそれをお主らに求めるというのに、あ奴は自らを除外する。横暴で、身勝手で、――臆病で、非効率的で、更には恋敵をわざわざ増やす……。そんなことをされるとは思っていなかったし、そんなことをしてくるのならこっちにだって考えがある……そんなところかえ？」

「ま、まるで見てきたような口ぶりですのね」

「クク、吾と接吻を交わしただろう？　その時に流れ込んできたぞ、お主の感情が」

「……やはりシエナさんの言う通り、危険な方、ですのね」

「だが、否定はしない、と」

「――……」

もう1体、空を飛ぶ魔獣を発見した。少しばかり遠いな。普段の【喧槍】では飛距離が足りないかもしれない。ならば細く、軽くし、しかし丈夫にして――撃つ。く、1本では足りないか。ならば2本、3本と……よし、落ちたな。ああいう

のは両翼のどちらかさえ奪ってしまえば飛べなくなるのだ。梓から学んだ事だ。大きな丘には飛ぶ魔獣などいないのでな。

「そう、ですわね。否定は、しませんの。だって……ずるいじゃありませんか。私達だけ傷付いてはダメで、死んではダメで、梓さんだけは良くて……さらには、私達の生きる理由も、戦う理由も、居場所も、何もかもを奪おうとしていて。それに協力してくれ、何も話せないけど、などと……到底、納得はできませんわ」

「クク、ククッ、良い良い。――なら、どうだ。諦めてみる、というのは」

「……」

「そうであろう？　お主に欠片も靡かず、隠し事ばかりで、奪うばかりで、要求するばかりで――何も返さない。お主があ奴を好きになった理由までは見えなんだが、別に好き続けなければならぬ、ということはないだろう？　あぁ、吾があ奴を好むのは、単純に容姿と、加えて最近は性格ぞな。ククク、故に何を求められようと、靡かなかろうと、何を隠していようとどうでもよい。なぁフェリカ。お主が梓を好む理由は、吾に勝るものか？」

難しい話をしている、というのだけはわかった。

別に好きなら好きでいいし、好きじゃなくなったら好きじゃなくなったで良いと思うのだが、違うのだろうか。

……こういう短絡的な考えを口に出す時、常であればリジが正してくれるのだが、今はいないので言葉にしない事にする。私が間違っている場合の方が多いからな。私は学ぶのだ。

「これ以上は高度を上げられないな……やはり一旦戻るべきだ」

「いえ――あそこです。あの――亀裂」

「亀裂？」

上を見上げる。

シエナが指差すそこ。

そこに、確かに亀裂があった。

空間だ。空だ。

何も無い空に――けれど亀裂があって、そこから光が漏れ出でている。

「ギリギリだが、あそこまでなら飛べるな」

「ククク、良い所であったが、目的地が見えたようだ。話は後ぞ、フェリカ」

「……はい、ですの」
翡翠が如き光。
裏面からは何も漏れていない、どころか見えすらしないのに、こちらから見ると亀裂になっている。
なんだ、これは。
「突入いたしますか？」
「する以外の選択肢はないだろう。いくぞ！」
「む。ナリコ、フェリカ。行くぞ？」
「ええ――行きましょう」
「クク……」
今の笑いは何なのか。
わからないが――いやもう色々わからないが――とりあえず私達は、プテラゴイルごとその亀裂に突っ込んだのだった。

遠《ｔｅｘｔ·s1·2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「こ――こ、は？」

「夜……？」

今の今まで、確かに昼だった。快晴も快晴だったはずだ。

けれどそこは――真夜中。

真夜中の、花畑、だろうか。遠くには街のようなものも見える。見えるが、その上空に浮遊島は無い。

「黒い月……」

「ククク、朔か。良い良い、風情のある場所だ。百合に菫、丁香花……良い場所だ。酒の一献でもやりたくなる」

「う……大気中の魔力密度が高すぎて、検知不可です……」

「逢丹異弩喪上巴環」

「どうした、ウィジ？」

槍の生成ができない。だから、戦いの詩だけを唱える。

ここでは御業は使えないと分かった。出来得ることなら、その辺りから枝の一つでも拾ってきたい所だが、贅沢は言えない。無手でも十二分に戦えるとわからせて

やろう。
「ククッ、どうやら景色に酔っている暇はないらしい。……囲まれているぞ？」
「神速――……え、あれ」
「フェリカ。ここでは魔法は使えないようだ。私の【喧槍】も、先ほどから反応が無い。ただ、身体強化はできるようだから、それで対応するといいぞ」
「波動！　……事実のようだな」
私達を囲っているのは――先ほどナリコの手でも見た、犬。ただ首が三つあって、周囲に火を躍らせていて、どことなくおどろおどろしい犬だ。
数は20。私達は5人。プテラゴイルは……む、溶けてしまっているな。魔法が使えないからか？
「……申し訳、ありません。身体が……思うように動きません。何か、阻害が……」
「ククッ、お主は帰るといい。ここの空気は、吾や主にとっては毒故な」
言って、シエナの身体を掴み――ぽい、と。
ナリコは、先程私達が入って来た亀裂へ彼女を捨ててしまった。
……大丈夫か？

「毒、ですの？」

「ああ、どうやらここは、廻るモノの一切を許さぬらしいな。吾は続くモノでもあるが故に問題は無いが、シエナは廻るモノ。ここに長時間いては、分解されてしまうだろう」

「廻るモノ？　続くモノ？　分解？」

「良い良い。じっくり考えるが良い。――考えている暇は、無いようだが」

音もなく飛び掛かってきた犬の顎に拳を入れる。３つ首だ、深く殴り込めば他の首に噛みつかれかねない。即座に身を戻し、後ろ回し蹴り。今まさに私の腕に噛みつかんとしていた２つの首を、横合いから蹴り飛ばす。

妙な感触だ。

柔らかすぎる。これは……腐肉？

「なんだこのドッグ種は……」

「わかりませんけどっ、これ――私の感覚が間違っていなければッ！」

籠手で殴る。剣で切り裂く。

紙で焼く。

「む、ナリコは魔法が使えるのか？」
「ク、吾のこれは魔法ではないのでな。式鬼の作成も、短時間ならば可能だ。もっとも、永続とは行かぬようだが」
「魔法ではないものがあるのか」
「ああ、しかし、吾のことより気になることがあるのではないか？」
「うむ。――この魔獣、死なんな」
先程入れた拳も蹴りも、ミサキの打撃、フェリカの斬撃、ナリコの火焔。
どれもこれもが魔獣を死に至らしめるに足るものであったはずだ。だが、事実。この魔獣は死なない。顎を外されようと、目玉がどろりと落ちようと、首のほとんどが千切れようと……死んでいない。
「アインハージャの諺にこんなものがある。蘭奈（退かば）――」
「それ！　梓さんじゃなければ聞き取れないですの！」
「ああそうだった。まぁ意味は簡単だ。逃げた方が良い」
「賛ッ、成だ！」
「ククッ、吾が橋を作ろう。一瞬しか保たぬ故、走り抜けるがよい」

言うが早いか、ナリコの手から幾枚もの紙が放たれる。それは彼女の足元に集い、そこから放物線を描いて繋がっていく。
橋、だ。あるいは道か。
「行くぞ！」
「こ、これ、ちゃんとした強度がありますわ!?」
「魔法ではないのか……」
「ククク、まぁまぁ、さっさと逃げるが良い。そう長くは保たぬと言ったぞ？」
ちなみに先程言いかけた諺は蘭奈上意罵倒韻(退かば見える勝利もある)だ。

後ろからどんどん散り散りになっていく紙の橋を渡り切り、腐肉の魔獣から逃げた先。
そこは、先ほどは遠くに見えていた街だった。
「……人はいる、が」
「誰も彼も、先程のドッグ種と同じ、ですのね」

今はその街の家々の屋根に身を隠している。
フェリカの言う通り、街並みにはちらりほらりと人影が見える――が、どれもこれもが虚ろな顔で、目玉の無い者、頬の裂けた者、腕や足の無い者と、非常に痛ましい光景だ。
顔色からして明らかに生気が無いのも気になる。魔力が大気中に在る故気配を辿るのが難しいのだが、これは。
「死んでいないか、あれは」
「ククク。そうだな。どうやらここは、死者の街――否、死者の世界らしい」
死者の世界。
そんなものがあるのか。
蘇生を使いきり、蘇る事のできなくなったアインハージャは、次なるアインハージャのための世界に眠る。私達アインハージャは死なない、と言えるだろう。いや、私達は死ぬが、アインハージャは死なないのだ。故に死後の世界など無い。
ましてや死者が闊歩する世界など。
「……梓さんは、死んでしまった、ということですの？」

「ククク、なんだ、お主はそれが目的ではなかったのか？」
「い、いえ、死んでほしいとまでは……その」
「だが、ナリコの呪いがここに繋がっていて、あの亀裂の先がここであったというのなら、やはり梓はここにいるはずだ。死しているにせよ死していないにせよ、ここにいることは確実。であれば探すべきではないだろうか？」
「そう、だな。それに、死んだとして、何故このような場所に留まっているのかもわからない。私達魔法少女は死せば蘇生槽に行くはずだ」
蘇生槽。たびたび出てくる言葉だが、実物を見た事は無い。
私達アインハージャはその場で復活するからな。
「あるいは無意識下……つまり、蘇生にかかる復活時間の15分から20分ほどの間において、誰もがこの場所を通過していると考える事もできる。覚えていないだけで、すべての魔法少女はここを通っているかもしれない。その上で梓がここに留まっているのは、ここで拘束されているから……とか、どうだろうか」
「うむ。私に縋られてもわからぬ。ナリコ、貴女はどうか？」
「ククク、長くをヒノモトで過ごした吾に外界の事情がわかると？　だが、そう

さな。もしそうであった場合、梓がどこにいるかを考える事はできる。この街で、一番高い所か、一番低い所。そこにいるのではないか？」

「何故そう思うんですの？」

「ククク、吾ならばそうする、というだけだ。隠すなら地下に、監視するなら上に。たとえばあすこ……大きな円盤のついた塔。あれなど、怪しくはないか？」

「時計塔か。成程、まあどの道情報は無いんだ、探して回るしかないだろう。ただし、気付かれないようにな」

「ム？　気付かれないように、とは、誰にだ？」

「ウィジ、お前はリジがいなければそこまで頭を回せないのか？　当然、街の住民に決まっているだろう」

「あまり馬鹿にするな、ミサキ。それを言うなら、街の住民はとっくに私達に気付いているぞ。ほら」

大きく手を振る。

すると、手を振り返してくれる住民。脇腹に大穴が開いていて骨や内臓が見えてしまっているが、うむ、挨拶のできる者は良いな。

「ククク！」
「ばっ、お前！」
「――集まってきましたの!!」
成程確かにわらわらと集ってくる住民たち。
だが、あのような手足では屋根にまで登れないだろう。むぅ、手を振り返してくれたあたり、悪い者達では無さそうなのだが。
「そうだな、ウィジ。とりあえず意思の疎通はできる様子だ。ククク、吾は式鬼を作り、言葉を発してみる。そちらはアインハージャの言葉とやらで会話を試みるが良い」
「ム……諺や戦いの詩はわかるが、アインハージャの言葉の全てがわかるわけではないのだ」
「ククク、それは吾も同じぞ。式鬼同士が使う言葉は、吾の命令を受けて式鬼が話しているに過ぎぬ。が、やらぬよりやった方がマシであろう？」
「ふむ」
……むう。

もう少し自分達の文化について勉強しておくべきだった。
あるいは梓に習うなどしておけば、こういう時に役立ったのだが……。むむう。
「藍編務恵印減後琉。無椅子塔水戸迂（私はアインハージャだ。よろしく頼む）」
「……」
「……」
……ううむ。
これくらいしかできないぞ、私は。リジならもう少し話せるんだが……。
打ちひしがれる私の横で、ナリコがあの時にも見せた……あー、バード種、だったか。その魔獣を創り出す。作りだされた魔獣は口を開き――。
「ＧＩＮＮＯＫＡＭＩＷＯＭＯＴＳＵ　ＯＮＡＧＯＷＯＳＡＧＡＳＨＩＴＥＩＲＵ」
奇妙な唸り声を上げた。
……むむぅ。やはりわからぬ。言語である事はかろうじてわかるが、一切わからん。
「……」

「……」

そしてどちらも反応が無いと来た。

ふむ、この者達、もしや喋ることが出来ぬのではないか？

「問うが！　お前達は、声を発する事ができないのか？　できないのであれば頷いてくれ！　頷けぬものは身体の一部を掲げてくれ！」

「おい、叫ぶな、更に寄って――」

反応は顕著だった。

ふふん、どうだ。たまには私の頭脳も役に立つだろう。

「クク、どうやら公用語で通じるらしいな。そして、明確な意思もある。これならば梓を見つけるのも容易かろう」

「そ、そうですわね。……どうにも、受け付け難い容姿ですけれど」

「痛々しいな。治してやることはできないのか？」

「魔法少女は死なば治るだろうが、普通は死んだらそのままだぞ、フェリカ、ミサキ。当然傷もそう簡単に治りはしない」

「それは、そう、ですけれど」

治す、など。
そう簡単に口にしてくれるな。ウォムルガ族の村にも薬学に長けた者はいたが、失った傷までもを治すことはできなかった。
それが生きる事だ、とも言っていたな。無論、私達にではないが。
「私達は銀の髪を持ち、右腕の無い、大きな火傷を負った少女を探している！心当たりはないだろうか！」
「……」
「……」
これまた、反応は素晴らしかった。
腕のある者。中でも指を持ち、腕を上げる程の筋肉を残す者達が、一斉に指を差すのだ。
先程話していた円盤の塔。時計塔、という所を。
「感謝する！」
「……」
「……」

うむ。やはり何事も試してみるものだな。

そして、見た目に騙されてはいけない、とも。確かに少しばかり魔獣らしい容姿だが、話して見ればこうも――む？

「その動作は……ふむ。ふむふむ」

「ウィジさん、言葉が分かりますの？」

「いや、わからない。わからないが――逃げろ、と。そう言っているような気がする」

「逃げろ？　何故だ。いや、何から？」

ふむふむ。あっち？

あちら――おお、なるほど。

「クク、先程の腐肉が番犬ぞ。さぁさ、吾の橋を渡れ。追いつかれる前に、あの塔にまで行くとしよう」

「情報提供感謝する！　そして、お前達にとってあの黒犬が害であるのなら、私は戦おうと思う！　どうだ!?」

全力で首を振ったり手を振ったりと、「違う」という動作をしてくる住民たち。

なんだかかわいく思えてきたな。
とにかく、ここの住民にとってあの魔獣は害ではないらしい。
ならば逃げるだけで良いな。
「行くぞ、皆の者！」
「わ、わかりましたの！」
「……案外戦士を導く才覚があるんじゃないか、ウィジ」
「む？　だが、梓のように小難しい事を考えるのは苦手だ」
「良い良い、今はそんな問答をしている暇はない――渡れ、吾の力も弱まってきている。先ほどより崩れるのは速いと思え」
ナリコの言葉に。
私達は、全力で紙の橋を走り出した。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

49・藍羅部有」案泥椅子我琉・

隠してはいるが、ナリコの息が荒くなっている。確か、初めに言っていたな。この空気はナリコやシエナには毒なのだと。

魔法然り、魔獣然り、世界より生まれ出でたものが存在し難い世界なのかもしれない。

アインハージャはあくまでウォムルガ族の村の守護者。ヒトの守護者であって、世界側ではないからな。私達が弱まらないのはそういう理由だろう。

「ナリコ、つらいのであれば私が背負おう。どうだ？」

「ククク……いや、良い良い。どの道吾は最奥に辿り着く前に吐き出されるであろう故な。力の温存はしておくと良いぞ」

「そうか。では担ぐぞ」

「……ククク、いう事を聞かぬ子ぞな」

紙の橋の強度も心許なくなってきた。一瞬後ろを振り返り、フェリカとミサキの様子を確認。問題は無さそうだな。

この世界について何やら詳しそうなナリコに倒れられては困る。何より、梓が連れて行くと決めた相手だ。何かがあるのだろう。ならばここに捨て置き、あの犬どもにくれてやる、という選択は無い。梓は戦士としては頼りないが、頭脳としては十二分だからな。

……負担を減らすことを考えるなら、リジのように私も頭を回せるようになるべきか。ＥＤＥＮの昇級試験程度であれば簡単だったのだが……。

「時計塔、だったか。着いたが、これはどこから入るんだ？」

「普通の時計塔なら地上に入り口があるはずですわ。けれど、今地上に降りている暇はありませんの。ですので、上から直接入りましょう」

「幸いレンガ造り、掴む場所は多い。ウィジ、ナリコ、行けるか？」

「……吾はここまでのようだ。捨て置け」

「わかった。私がこのまま背負う」

「ククク、素直に言う事を聞いた方が身のためぞ？」

「アインハージャの本質は守護に在る。私は〝矛〟のアインハージャだが、魔獣の討滅を目的としている魔法少女と違い、私達は命を捨て置くことを禁忌と見る」

そこがアインハージャと魔法少女の大きな違いに想う。
魔法少女は死しても尚魔獣を討滅せんとする、存在自体が矛のようなあり方。アインハージャはベルウェークやその手共の討滅こそ目的とするものの、本来はウォムルガ族の村を守り、ベルウェークをあそこに繋ぎ止める役割を持っていた。
何故繋ぎ止めなければならなかったのかといえば、ベルウェークがヒトに仇為す存在であるからだ。そして、神を一か所に集めてはならないが故。
時計塔というのを登っていく。
ナリコは見た目以上に軽い。だから特に負担には思わない。
だが、どうだ。
上へ上へと行くにつれて……精神力に乱れが見える。
「これ以上、高度を上げる事は、ククク、無理ぞ……」
「ナリコ？」
軽い、軽い、と思っていた。
違う。
軽くなっているのだ。

「フェリカ、ミサキ！　……おい、どうした？」
「聞こえてはおらぬ。すぐそこのようだが、彼我の距離は地平程に遠い。……上へ行く、ということは、ククク、神に近づくことに等しい。天道に焼かれる前に……戻れ。ここは、続くモノのいて良い場所ではない……」
「ナリコ。……死んではいないか。だが、これは……」
時計塔の上の方へ行ってしまった2人を見る。
彼女らが振り返る様子はない。声どころか、姿も見えていないのだろうか。
しかし、困った。
流石の私もずっと壁に掴まっている、というのは不可能だ。
下には腐肉の犬。周囲には――。
む。
「ナリコ、もう少しの辛抱だぞ」
目を瞑り、声も発さなくなったナリコを背負い、そこへ向かう。
街並みの中で、唯一明かりのついていた家。そこの窓で、こちらに手を振る女性。
紙の橋が使えないため、習ったばかりの飛行魔法を使う。過去にいた空を飛び得

るアインハージャ。それはそのアインハージャ固有の御業だとばかり思っていたのだが、ＥＤＥＮの魔法少女のほとんどが飛行魔法を使うと知った時は驚いたものだ。

まだあまり慣れてはいないが……うむ。問題は無いだろう。

飛ぶ。

……飛べている、よな？

「ク、ク……飛べていないわ、阿呆め……」

「感謝する」

やはり慣れぬことはするべきではないな。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

家に入れてもらった。

家主らしき女性はこの街では珍しく身体に欠損のない者で、普通に言葉も話せる様子。

故に問うた。

「ここはなんという国なのだ？」
「ククク……まずは互いの名でも聞くべきではないか？」
「む、そうか。私はアインハージャのウィジという。貴女は？」
「申し訳ございません。私に名はありません」
「そうか。ちなみに隣で臥せっているのはナリコという。そうだな、では私達の仲間に倣い、名前の無い貴女の事は首縄と呼ぶことにする」
「構いません」
首に縄が巻き付けられているから、首縄だ。
梓でもこう名付けるだろう。うむ。
「首縄、ここはどこなのだ？　なんという国で、なんという場所だ？」
「ここは、冥界。死者の住まう場所。国の名はありません」
「そうか。では、ここに銀の髪を持つ少女が来なかっただろうか。右腕の無い、身体の大部分に火傷を負った少女だ」
「その特徴を持つのは、この世界では夜の使徒だけです。名を、アンディスガル」
「そうか。なら別人だな」

「ク、短絡的が過ぎようぞ。……少しばかり、落ち着いた。お主よ、そのアンディスガルはどこにおる？」
「夜の使徒は天に。地上での疲れを癒しています」
「そこへはどうやって行けば良いのか教えてはくれぬか？」
「……申し訳ありません、その事を話すことは、禁じられてい、ん!?」
いつのまにか起き上がり、いつの間にか首縄に口吸いをしていたナリコ。
私もされたが、どういう技なのか。初動も何も見えたものではない。
「……ぁ」
「どうだ？　ク、話す気にはなっただろうか」
「……はい」
「ナリコ、流石にどうかと思うぞ。首縄は私達を救ってくれたのだ。それを……」
「何、少しばかり話を聞くだけぞ。ク、このまま何の情報も無い、では無理があろう？」
「む。……そうだな」
「その物分かりの易さに吾は少しばかり呆れかえるのだが」

ほぅ、と頬を染め……てはいないが、どこか虚ろな目になった首縄は、ぽつりぽつりと言葉を発し始めた。
「……夜の使徒は、夜の宮にいます。辿り着く術は、２つ。１つは直接夜の宮にまで行く事。もう１つは夜に招かれる事です」
「他に方法は無いのかえ？」
「……丁香花の花畑は、夜の使徒のために作られた場所です。……そこを荒らせば、あるいは、夜が降りてくるかもしれません」
「ククク、礼を言うぞ、首縄。もう眠って良い」
「……」
花畑を荒らす、か。
あまり気乗りはしないが、その夜というのがアンディスガル……恐らく梓だろう者を攫ったというのなら、呼び寄せて話を聞くべきだろう。
立ったまま虚ろな目をして何の声も発さなくなった首縄。ナリコは彼女を室内の椅子に座らせて、「ククク」と１つ笑った。
「行くぞ、ウィジ」

「それは構わないが、フェリカとミサキはどうするんだ？」
「クク、こうは考えられないか？　吾らはあすこに登り得なかったが、花畑を荒らすことで夜を呼び寄せることができる。フェリカとミサキはその隙に夜の宮から梓を連れ戻す事ができる。適材適所、という奴だ」
「そうか。なるほど。わかった」
「……クク、まぁ良いのだが」
ならば、行くとしよう。
先の花畑へ。丁香花の咲き渡る、小高い丘へ。

来た。
道中勿論黒犬の群れに襲われたが、ナリコの作ってくれた紙の槍を手にした事で、行きよりは楽になったように思う。
それで、来たのだ。
私達が最初に現れた、丁香花の花畑。
「ここを荒らせばいいのだな」

「ククク、これほど美しい場を荒らすのは気が引けるが――どれ、燃やしてみるか」
「気が引けている者の荒らし方ではないな」
ナリコが手に持つ紙に火をつけて、それを落とす。
――瞬く間に燃え広がる火。
「……あまり良い気分にはならないな」
「ククククッ、それはそうだろうぞ。花畑を荒らして気を良くする者など、心に傷を持つ者くらいであろうよ」
「そうか」
紙の槍を回す。
ぐるぐるとぐるぐると回し――振り回し――花畑に突き刺す！
そして掘り返す。
「ククク、お主は戦いにでも集中しておけ。花畑を焼くのは吾がやろう。――そら、来るぞ」
「む」
来た。

腐肉の黒犬。

どうやら花畑を荒らされて怒り狂っていると見える。恐らく初めに私達を襲ったのも、この花畑に入って来たからなのだろうな。

が、私達は梓を連れ帰らなければならないので、撃退させてもらおう。何、死ぬことは無くとも前肢を潰せば走れなくなる。後肢だとダメだ。四肢でもダメだ。前肢だけを潰し、転ばせる。それが最上だろう。

「吾が言うのもなんだが、中々に残酷な事をするな」

「襲い来るのであれば仕方がない。侵入者は私達の方で、花畑を荒らすなどという最低の行為をしているのだとしても、私達とて食い殺されるわけにはいかないのでな」

「ククク、それで良い。生きるために抗うというのであれば――梓もお主を無視できなくなるだろう」

「どういう意味だ？」

「あ奴を揺り起こすには、他の何を犠牲にしてでも自らが生きたい、という意思が必要というわけだ。たとえ――この冥界を、破壊したとしても」

ナリコが文様を紙に書き込む。

» CHIWOKURAI FUNIKUWOKURAITE CHIKARATONASE «

すると紙は独りでに起き上がり、腐肉の黒犬に向かって突撃したではないか。

当然噛みつかれ、めちゃくちゃにされる紙の魔獣。

しかしそれは、けれどそれは。

少しずつ、少しずつ——大きくなっていく。

紙が？

否、腐肉が。

「それは？」

「己を食ろうた者を食う呪いぞ。食いつかれたら食いつく者となり、食いつく者は食いつかれ、食いつかれたものは食いつき……そうして、最後には制御不能の巨人となる——このようにな」

肥大化は一瞬だった。

腐肉混じりの紙。それは丁香花の低木は勿論、ナリコの身長を越え、どころか街

の家々の高ささえも越え、更に、更に更に、更に更に更にと大きくなっていく。
「待て、今制御不能と言ったか？」
「ククク、言ったぞ。ほれ、逃げるが良い。ここからは――巨躯の妖による一鬼夜行ぞ」
巨大な黒犬が、大きく吠える。
耳をつんざくが如く音。口から垂れる涎の一つが辺り一帯を浸す程に、巨大。涎の洪水か。あまり浴びたくはないな。
「クク、何、問題はなかろうて。ここは死者の国。これ以上死ぬ事はない。――故、妖や式鬼が多少暴れようとも問題は無い」
「いや馬鹿だろ。問題あるに決まってンだろ」
その巨体が、一瞬にして消え去った。
消え去る前に聞こえた声は。
「ククク、なんだ、もう釣れたのか」
「梓。どこへ行っていたのだ」
梓。

もう、何も無かったかのような表情で、彼女はそこにいた。
何も無かった――というよりは、少しだけ怒ったような、呆れたかのような表情で。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

いんやさ、俺も悪かったよ。
そんなつもりなかったのにちょいと誘われたんで実家帰りもいいかもな、なんて言ったらマジで連れてかれるとは。
んでまァ、ちょいとばかりさ、ストレス的なアレソレが溜まっちまってて、心が疲れてたンで、神さんのトコでゆったりしてたらコレだ。悪かったよ。そりゃ探すよな。来れるとァ思ってなかったけど、そりゃァ探す。
なんでもレーテーから辿ってきたンだと。なんぞ呪いっつーのを俺にかけて、その痕跡を辿ったンだと。
こえーことしやがる。

つか、着物狐と青バンダナはともかくお嬢とポニスリがこの世界にいるのァやばすぎる。

やばすぎるんで、捜索に行かなきゃならねェンだが、さてはて。

「あァよ、着物狐。身体大丈夫か？　化け物にァ辛いだろ、ココ」

「クク、上の方へ行かなければ問題は無い。吾はまほーしょうじょでもある故な。無論、であるからこその二重苦ではあるのだが」

「そうか、魔法使えねェんだな。今のでっけェ犬ァなンだ？」

「式鬼ぞ」

「なるほど」

ここってなよ、冥界なんだわ。

死んだ奴が辿り着く場所。永遠を眠る場所。世界の外側にして、神のいる場所。

だから、冥界に行かねェ奴らにとっちゃ、ここの空気ァ毒素でしかねェ。

アインハージャってな最後にゃ冥界に行くからちったァ動けると思うンだが、魔法少女ァなァ。

神さんにとっちゃ意味わからん存在だろォし。やべーコトになる前に連れて帰り

てェとこなンだが。
「えーと、どうすっかな。とりあえずお前らの魔法使えるよォにするか」
「できるのか？」
「まァこの世界じゃ俺結構偉いっつーか愛されてンだよ。いんやさ、あっちの世界でも愛されてァいるんだけど」
　この辺の事なー。
　話しちゃダメって言われてたから話せてなかったけど、ここまで見られたらもう良いだろ。この結果神さんから見放されることになっても仕方ねェさ。俺を拾い上げてくれた神さんだ、あんまし嫌われたくァねェんだけどさ。背に腹は代えられないって奴でね。
「鳥有為預」伏理伊豆儀部武烈震倶塔毎触練度」
「……ククク、少しばかり息がしやすくなったな。お主の神は、随分と心の広い神のようだ」
「【喧槍】！　……うむ、問題なく使えるな」
「いやマジでな。最近我儘言ってばっかだったンでこれ以上ァどォかと思うンだ

が、ま、もうちょいだけな」
「あぁ、そうだ。これは返しておくぞ、梓」
「ン？　あァ、レーテーな。ありがとよ」
んじゃまァ早速魔煙草を一本取り出して、吸う。
……ん？　起動しねェな。これじゃただの不味い草だ。
まァいいか。別に魔力も消費してねェし、したところでこの世界ァ俺に優しいし。
「お嬢とポニスリァ時計塔登ってったンだな？」
「ああ。だが、ナリコが上へ上がる事ができなかったため、首縄の家に行った」
「要領を得ねェがまァどーでもいい。着物狐ァ九割化け物だからよ、ここじゃ生活できねェのさ。だから、そこの穴から地上に帰りな。分解されンぞ」
「吾は吾の妻が心配でな、ここまでついてきたと言うだけだ。お主の安否がわかった以上、長居するつもりはない。外にもお主の息災を伝える必要があろう。故、言葉通り吾は戻らせてもらう」
「ン。……あれ、お前が俺の妻になるンじゃなかったのか？」
「吾の妻はお主で、お主の妻も吾だ。問題はあるまい？」

「……まァ問題ァ無ェな。あ、これァ了承の意じゃねェんで」
「ククク、わかっている」
まァあのクソデカイヌを出してくれて助かったよ。
あれが無けりゃ、俺ァもちっと長い間眠りこけてただろォし。あんまり花畑荒らして欲しかなかったが、まァここの花も既に死んでる。明日には元通りさ。ハウンドたちもな。
「梓、私は貴女についていくぞ」
「あァよ。んじゃ飛ぶぞ」
「……飛ぶ？」
「飛行魔法だよ。できンだろ？」
「……」
「あァ慣れてねェのか。じゃァいいよ、俺が運ぶ。ここじゃな、俺の魔力ってなほとんど尽きねェのさ。使い放題だ。ま、敵なんぞいないンであんま意味ないンだが」
この世界も神さんも俺の味方だ。
敵はいない。黒いワンコロも、まァ手触りァアレだが、可愛いモンだ。住民も喋

れる奴ァあんまりいねェけどみんないい奴ばっかだし。
　ま、いい奴しか来られねェんだけどさ。
「飛ぶぞ」
「う、うむ」
　どうせここでのこたあっちの世界に帰りゃ、俺ァそのほとんどを忘れちまうンでな。
　パパっと済ませて、パパっと帰ろう。

「梓。貴女は、何者なのだ？」
「それ聞いたから俺がいなくなったのに等しいってのによく聞くよなお前」
「む、そうなのか？　それは悪かった」
「いいよ、今のァ俺の意地悪だ。……ま、何者っつーと難しいな。夜の使徒、彼女の使徒、アンディスガル。つか、ここで知った事のほとんどァあっちに戻りゃ忘れちまう。それァお前らも例外じゃねェんでよ、あんま聞いても意味ァ無ェぞ」

「そうか。では聞かない事にする」
「おゥ」
死後にも世界が続くってな、そォ信じるのァ良い。
だが、知っちまうのァダメだ。それを恐れなくなる。そォして、死を怖がらなくなっちまう。それァ俺や神さんの望むところじゃねェ。
死は貴ばれるべきものだ。
安寧とは等しく訪れるものだ。
便利なツールにしたり、仕方のない犠牲にしたりするべきじゃァない。
「青バンダナ。お前さ、死ってどォ思う？　アインハージャの死じゃなくてさ、ウォムルガ族の村の人達とか、一般人の死。もう二度と蘇る事の無い死ってな、どォいう風に思う？」
「悲しい事だ。永遠の離別。永久の別離。私はそれを否定しないが、言の葉を交わせなくなる事を悲しいと思う心はある」
「そっか」
「梓、貴女の言いたい事はわかる。だが、貴女がそれを私やフェリカ達に求めるの

なら、貴女もそうあるべきだ。貴女は求めるばかりで己を変えようとしない。変える事ができない、というのはわかる。私達アインハージャもこの在り方を変える事はできないからだ」

あァさ、求めるばかりなのァわかってる。何を返せばいいのかァは全くわからねェ。

こっちが変わるべきなのァわかってる。でも変えられねェんだ。その考えだけァ、俺の根幹だから。

なら、どうすりゃいい。

「一度、離れてみるのも良いと思うぞ」

「……やっぱり、そォなるか」

「ああ。無理矢理に連れてきた手前、気が引けるというのもわかる。だが――貴女とフェリカ達が分かり合うには、大きな壁がありすぎる。私がこういう事を言うのは少しおかしいのだがな――フェリカもミサキも、若いのだ。幼く、若い。梓、貴女が思っている以上に」

「そォ、だな」

いい奴だ。俺の事をわかろうとしてくれる、理解しようとは頑張ってくれる奴らではある。

けど、あの言葉を聞いて――正直、少し。いやかなり、キちまった。

死んで治せばいい。

それァさ。俺が一番嫌いな言葉だって、ずっとずーっと、言ってる事なのにさ。

「そして、幼いのは貴女もだ、梓」

「俺が？　……ま、否定ァしねェよ。幾百、幾千年のアインハージャに比べりゃな」

「年齢や経てきた年月の話ではない。思想の話だ。貴女の理念は、まだ育ち切っていない。それがこの世界の思想だというのなら、それですらも若いと言える。だが同時にそれは否定でなく――そのままで良い、ということでもある」

「……何が言いてェのか、いまいち伝わらねェよ」

「そのままでいい、ということだ」

飛ぶ。

飛ぶ。

飛んでいく。あっちの世界じゃ味わえねェ、空を飛ぶってな感覚。

蒼穹たァ言い難ェ暗い夜の世界で、飛ぶ。

翔んで、青バンダナの言葉を聞く。

「仲間とは、同じ地平を向いているものばかりを指す言葉ではない。私はアインハージャというものを断ち切るために貴女に賛意を示したが、もしかしたらリジは違うのかもしれない。ナリコは貴女の容姿や性格を気に入って同行者となったが、本当は別の目的があるのかもしれない。シエナは貴女に恩義を感じている様子だったが、何か別のところを見ているのかもしれない」

「……」

「フェリカは貴女の意見には賛同できないようだった。フェリカにとって魔法少女という存在は自身の存在意義に等しく、魔力を殺す、という話には乗り気ではない。彼女の居場所を奪うに等しい貴女の行為は、彼女の目には蛮行に映るのだろう。ミサキの心の内は計り知れないが、同じようにあまり好ましくは思っていないように思う」

「まァ、そォだな」

「だが、そのままでいい。それでいい。何度も言うが、そのままでいいのだ」

高度を上げて行く。
見た目の何千倍も高いこの時計塔ァ、どれほど登ったところで頂点が見える事ァ無い。
ま、頂点へ辿り着こォとしてる内に夜の宮に辿り着くンだが。
「私はあまり頭の良い方ではない。だからこそ、わかる。万人が同じ方向を向くということはできないのだ。ウォムルガ族の村など、ＥＤＥＮとは比較にならぬほど小さき村だったが、そこでも意見の食い違いが起きていた」
「そりゃな、人間だ。どんだけ小せェコミュニティでも、争いってな起きるよ」
「ああ。中には争いを好まず同調に徹する者もいたが、ウォムルガは戦士団だ。故に基本は争い合い、強い方が弱い方の意見を折る。どちらもそのままのまま、ぶつかり合い、戦い合うのだ。最後に残るのは正しい意見ではなく、強い意見だ。いいか、梓。貴女もフェリカもミサキも幼い。シエナも幼いだろう。私達アインハージャやナリコ、ディミトラと違い、貴女達は弱いのだ。弱い思想であるが故に、自らが間違っているのではないかと思ってしまう。だが、それは違う」
段々、世界が暗くなっていく。

街の灯りさえ届かぬ空。ただこの時計塔だけが指針であり、これを見失えば、上下左右もわからなくなるだろう暗闇。

朔の夜。夜の宮。

その中で、俺に抱えられた青バンダナが——酷く眩しく見える。

「強い心を持て、梓。この世に間違った思想など存在しない。たとえ数多くの人々を傷つける思想であっても、たとえ世界を殺すような思想であっても、それは間違いではない。ただ、他の意見と、思想と、理想と、主張と。それらとぶつかり合った時、その大抵が折れてしまう、というだけの話だ」

「世界を殺すってな時——誰がぶつかってくると思う？」

「世界に住まう全てが」

「……はン。上等だよ。それで、このおかしな世界がおかしくなくなるンなら——殺さないで、殺されないで、死なないで、死なせないで——俺の倫理を貫き通してやる」

だから。

「あァ、いたいた。ったく、馬鹿正直に登ってやがンな。だが、そろそろ——」

上方。
身体強化のみで時計塔を登り続ける２人。
けれど――もう、限界だ。
限界であるが故に。
２人ともが、同時に――落ちる。
「お、っと」
「問うが、梓。何故受け止めてやらなかったのだ？」
「知ってたからだよ。落ちてくるとき目が合った。コイツラなら、勝手に掴まるだろォってな。つか、受け止めたらお前が落ちるだろォがよ」
「そうか」
さてはて。
んじゃ、帰りましょうかね。随分と迷惑かけたンで――なンだ、ＬＯＧＯＳで平謝りさせていただくって事で。
「じゃあな、神さん！　今度はもっと落ち着いた時にまた来るよ！　そン時にまた、いろんな話をしよう！　前の話も、今の話も、ここでの話も！　だから――」

真下に穴が開く。
……っとに面倒見の良いというか、良い神さんだことで。
「ありがとな！」
――≪椎有≫
俺達は。
冥界から、地上へと落ちて行った。

遠≪ｔｅｘｔ.ｓ1.２≫吠えは遥か彼方に≪ｔｅｘｔ≫

「――プテラゴイル!!」
クェー!!　と。
いやまァどの個体かの判別なんざついてねェんだが、見えたそいつに叫びかけりゃ、いつぞやの相棒が如く駆け付けて来てくれた。
愛い奴め。化け物だけど。
「む、どうしたのだ梓。落ちているようだが」

「たりめーだろ。俺の魔力量じゃ飛行魔法なんざ使えねぇっての」
「そうか。……なら、あのプテラゴイルが間に合わなかったら」
「海に叩きつけられてぺしゃんこだろォなァ」
「そうか」
落ちていく――。

50・亜有佐渡上下韻？

「すまねェ、迷惑かけた」
「本当にね。けど、無事でよかったわ」
「あァさ、マッドチビ先生ァ全域にプテラゴイル放っといてくれてありがとな。アレがなきゃマジで死んでたかもしれねェ」
無事、プテラゴイルに拾われた俺達ァ、ＬＯＧＯＳへの帰還を果たした。
終始何も言わねえお嬢とポニスリァ俺の身体に引っ付いたままで、青バンダナァ他のプテラゴイルに乗って。シエナもＬＯＧＯＳの上で待機して周囲をずゥっと見ていてくれたみてェで、いんやさ感謝しかねェや。
ちなみに着物狐ァ浴場で酒飲んでた。
「……」
「……」
「なァお嬢、ポニテスリット。そろそろ話してくれねェか？」
「……」

「……」

どォしちまったのか、あっちから帰ってきてずっとこの調子だ。

何か思う所でもあったのか、それとも単純に怒りからか。

「マッドチビ先生、もう俺ァいなくならねェんでよ、始の点へ頼まァさ」

「ええ、わかったわ」

「シエナも、ありがとうな。自分の感情まげてまで着物狐の作戦に付き合ってくれたンだろ？　おかげで俺ァ帰ってこれたし、ホント助かったよ」

「い、いえ。あるいはナリコ……様の声を無視し、阻害し、梓・ライラック様を助けられなかったかもしれない、と考えると……その」

「そォならなかったンだから、いいじゃねェか」

ンなIf考えてたら俺なんざ懺悔だらけだろォが。

プテラゴイル間に合わなかったらマジで死んでたかもしれねェんだぞ、ちったァ考えて動けっつの。

「リジ。私はとても活躍したように思う。あまりよく覚えていないのだが」

「ウィジ。偉い偉い」

「うむ」
　まァあっちでの事ァ俺もほとんど覚えてない。だいたい何したかってなわかるンだが、何考えてたのかはわからん。夢みたいなものだからな。あくまで俺ァ梓・ライラックで、アンディスガルじゃねェワケで。
「クク……ああ、よく戻った。吾は嬉しいぞ。妻を失わずに済んだのだからな」
「ゆったり酒呷ってたクセに何言ってンだよ。つか、俺の妻になるんじゃなかったのか？」
「吾の妻がお主で、お主の妻が吾でも良かろうぞ」
「……別に良いがよ」
　ん？　何かこの件やったよォな。
「……梓さん」
「梓」
「おォ、よォやく喋る気になったか。どォした、２人とも」
　俺の服を引っ掴んで離さなかった２人が、ようやく。
　ようやく、喋って。

「……私は、やっぱり魔力を殺す、という案に……賛成できませんの。それは私の否定ですわ。私の、そしてアールレイデの。今ある魔法少女の否定ですの。……だから」

「すまないが、梓」

――知覚強化。レーテーを起動し、剣を引き抜きつつ後方へ下がれ！

「死んでください」

「死ね」

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

細剣と籠手と俺の剣がぶつかり合い、高い音を響かせる。

突然のことだ。そして、一瞬のことだ。

前方から放たれるは見えない力、【波動】。

そして全方位から来るのは見えない斬撃、【神速】――知覚強化など意味を成さない死が、俺を狙う。
それに、あっけなく。
何の抵抗もできずに、俺は切り裂かれてしまった。
「ククク、吾の妻を殺そうとするとは、不届きが過ぎるぞ？」
「!?」
「いつの間にッ！」
切り裂かれた――のァ、俺を模した紙人形。
いつのまにか俺ァ着物狐の腕の中にいて。――けれど、わかる。わかってしまう。
2人の剣に、拳に。
明らかな殺意が乗っている。
「何、を」
「梓さん。私、わかりましたの。貴女はまだ一度も死んでいない。――確かに私も、魔法少女になってからの、初めの死は、とても怖かったですわ。確かな恐怖があり

ましたの。だってそれまでは、死とは避けるべきで、忌避するべきものでしたから。アールレイデにあってもそれは同じなのです。――魔法少女になるまでは、死ぬ事は許されない。魔法少女となるまでは、アールレイデは資源であるのだから、死んではならない」

「私はアールレイデではないが。私も、最初の死は怖かったよ。私の場合は演習任務でな。自身の魔法を過信し、魔物の群れに突っ込んで、背後からの攻撃により背骨を折られ……苦しみながら死んだ。少しずつ冷たくなっていく身体に恐怖を覚えたものだ。本当に生き返り得るのか、本当に私は――続くのか」

剣を構える金髪お嬢様。

籠手を構えるポニテスリット。

その眼に、冗談の色は無い。

本気で言ってる。本気で言ってやがる。

「貴女はまだ経験していない未知を怖がっているだけ、ですわ。そうでなければ――ＥＤＥＮの、いいえ、全世界の魔法少女から居場所を奪うようなことをしよう、などとは思わないはず」

「……それ、本気で言ってンのか」
「当然だ。梓、考え直せ。死にたくないというのなら、その考えを直すというのなら、このまま帰ろう。だが、変えぬというのなら――死んでもらう。死んでENDへ還れ。それでも尚と言うのなら、その度に殺してやる」
目を見ても。言葉で確認しても。
本気なンだ、って。わかった。
――腕部強化。無理矢理でいい、逸らすだけでいい。ぶっ叩いて弾け！
「何よ。アンタが殺されそうだったから助けてあげようとしたのに。なに、そいつらを庇うの？」
「ったりめェだろ、なンだって殺し合いなんざ――」
「ククク、ほら、隙だらけだぞ？」
紙が俺へ向かう剣を包み込む。腕を掠める切っ先には、明らかな殺意が乗っている。
マッドチビ先生も本気だ。本気でお嬢とポニスリを排除しょォとしてる。着物狐ァ俺を守るに留めてくれちゃいるが、それも時間の問題だろう。

アインハージャの2人ァ――くそ、【即死】！

「む。殺されたか。【喧槍】で射出した槍も殺せるとは、やはり恐ろしい魔法だな、【即死】は」

「ウィジ。とりあえずあの剣を奪った方が良い。そして、身体に密着して拘束する。そうすれば梓は抵抗できない。その内に速やかにフェリカとミサキを排除すればいい」

「リジ、その通りだな。行くぞ」

待て、待て、待て。

俺が帰ってきて、ごめんな、迷惑かけたわ、んじゃ行こうぜ始の点に！　じゃねェのかよ。

なンで、なンだって殺し合いをしてンだ！

「クク、危なくなったら助けてやる。お主の思うようにするといい」

「ッ、あァよ！」

少なくとも着物狐ァ理解してくれてるらしい。身体を離してくれたンで、全力の脚部強化。

ゴリっと削れる魔力に、けれど青バンダナの拘束ァそれで躱す事に成功した。――後頭部に死の気配。躱した姿勢を維持し、そのまま倒れ込め。バックハンドスプリングだ。前ができたンだから、後ろもできる。できると思え。言葉の力無しにやれ！

「【静弱】」

「【波動】、くっ！」

「助かった、赤スカーフ！」

「別に良いけど、大人しくしてほしい。2人を殺すに貴女を守りながらというのは厳しい」

「殺さねェでくれっつー頼みを聞いて欲しィんだがな！」

「無理。だって2人は殺す気。殺すまで止まらないのなら、殺し返すしかない」

「その通りだ――【喧槍】」

「遅いですの」

また、即死の気配。青バンダナの槍がお嬢やポニスリに届く前に、【神速】の剣が俺を刈り取る――ことはなかった。

「っ!?」

「馬鹿ね、ここは私のＬＯＧＯＳの中よ？　アンタの立っている床だって、アタシの【鉱水】で作ったんだから、【鉱水】に戻せないはずないでしょ」

体勢が崩れる。見れば、お嬢の足が通路の床にまで沈み込んでいた。いや、それだけじゃない。一度液体になった【鉱水】は――しかし、即座に硬化する。

完全に足を嵌められたのだ。こえー魔法だが、よし、これでとりあえずお嬢ァ封じてくれた――。

「ならば、足など要りませんわ」

「は――待て、やめろ！」

「やめませんの」

金髪お嬢様の足元を、一筋の線が駆け抜ける。

それはどろりと赤を生み――そのままの足で、再度の【神速】を使ったのが見えた。

「ッく、そが！　何してやがるっ！　ンなことしたら――失血で死ぬぞ!?」

「死ねば治りますの」

「――！」
まだ。
まだ言うのか。
まだ言うのか、それを!!
「今の一撃、よく防いだ、と褒めてあげますわ。けれど――捕まえましたの」
「う――」
斬撃は剣で防いだ。
だけど、その隙に腕を掴まれてしまった。【即死】、なんか使えない。俺の魔法ァそんな汎用性のあるモンじゃない！　使ったら――殺してしまう。部分的な【即死】？　けれど、それを使えば、その部位はもう一生使えなくなる！　それを、そんなことを、そんな蛮行を、俺ァお嬢にできるのか？
「ククク、それは、吾のものぞ？」
「……!?」
俺の手を掴んだお嬢。その顔に、その唇に。
着物狐が、キスを落とした。

「ぅ……ぁ、こ、れは、あの時の……」
「それは、良い判断だ着物狐！　ポニテスリットにも――」
「掴んでいれば十分だ――【波動】！」
膨大な死の気配が迫る。
これは【波動】だ。演習の時や、ミストベイルの時に使った巨大な【波動】。それは通路を、そして――お嬢をも巻き込んで、膨らみ、圧し退けて。
「――クソ！」
発動する。
対象は2つ。お嬢の腕部と、【波動】。お嬢には足先が無いから、ふんじばる事ァできねェ。殺された腕は握力も腕力も失って、だから俺の手を掴み続けられずにするりと落ちる。
だから、逆につかみ返して、後ろに投げて――【波動】ァ【波動】で殺す！
「！」
「っはァ、っは――」
「魔力切れか。やはりお前は戦闘に向いていないよ、梓」

「っ」

防御。ダメだ。【即死】防御は相手の腕を殺す。回避。無理だ。もうそンな魔力残ってねェ。助けを乞う。誰に？　着物狐か？　アインハージャか？　マッドチビ先生か？

そいつらァ――ポニテスリットを、絶対に殺さないか？

「【波動】」

「【即死】！」

「……！」

迫りくる圧を殺し。

――その両腕をも、殺す。あァ。ああ。あァ。

殺した。

お嬢のも、ポニテスリットのも。

殺した。

いつぞやの背中メッシュの顔が浮かぶ。太腿忍者の苦痛に喘ぐ声が聞こえる。

アズサが、目や口、手足を潰され、苦しんでいた少女らを殺した時の事を思い出

す。

「……【鉱水】」

「っ、ま、待って、待ってくれ、マッドチビ先生！」

「待たないわ。足を斬ってまでアンタを殺そうとするなんて思わなった。仲間を巻き込んでまでアンタを殺そうとするとは思わなかった。ここにはシエナもいるのよ？　この子は一回切りの生なのに、そんな全体を巻き込むような魔法を使うなんて、思ってもみなかった。――軽蔑する。心からね」

腕をだらんと落としたポニテスリットに、液体化した鉱石が纏わりついていく。足から、動かない腕から、段々と乗ってくる銀の液体を、【波動】で弾いては――しかし、押されていくポニテスリット。その液体は等々胸にまで来て、首にまで来て――口に入り、目を覆い、その全身を包み込んだ。

振り返れば。

同じように、腕に力を入れる事のできない金髪お嬢様が。足先からだくだくと血を流すお嬢様が。

鉱石の液体に飲み込まれていくのが――見える。

「な――んで、こんな、こと」
「……死して、追いつきますわ。ＥＤＥＮを上げて――魔力を殺す、などという暴挙。止めて見せますの」
「クク、痛みで魅了が解けたか」
「【神速】」
お嬢の身体が、完全に固まり切る前に。
その口から【神速】の何かを飛ばした。俺を狙ってのものじゃない。背後、ポニテスリットを狙っての――射撃。
そして自らも、ごくん、と。
何かを飲み込み――。
２人とも、【即死】した。
しんだ。
「俺のあげた――【即死】の……弾丸、か」
膝を折る。
世界に溶けていく２人の身体。包むものの無くなった【鉱水】はまたＬＯＧＯ

Sに還っていき、【波動】によって壊された室内も修復されていく。
アインハージャの2人に怪我はない。
着物狐にも、マッドチビ先生にも。
俺にも。怪我は、無い。
「ま、良かったわね。こっちに大した損害がなくて」
「――いいよ、マッドチビ先生。悪役になろぅとしなくて」
「そう？　その怒り、ぶつける先がいないと――アンタの心、折れちゃわない？」
「大丈夫だ。……早く、始の点に行こう。アイツらが追ってくる」
「ん。わかったわ」
2人は死んだ。
2人は、死んだ。
死んだんだ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ＬＯＧＯＳは順調に進んでいる。

道中雷や嵐に見舞われはしたが、赤スカーフの【静寂】の応用形や青バンダナの【喧槍】による即席避雷針によって軽減に成功。また、道中にあった島から大きな丘にもあった絶縁体である鉱石ミカラを多量に採掘できた事で、艦内絶縁が可能に。最後の方は雷雲に突っ込んでも問題ないくらいの耐性を得て、ＬＯＧＯＳは進みに進んだ。

そうして――。

「……あれは」

「私も、初めてみたけれど……異質ね」

逆五角形……だろうか。んで多分、上から見たら正八角形。ダイヤモンド型、と言えばわかりやすいか。

ソレ自体もダイヤモンドみてぇに輝いていて、一見透明で――その、それが。そのデカいのが。

地面と空を別つようにして、突き刺さっている、みてェな。
「クク……なんだこれは？」
「今何故笑ったのだ、ナリコ」
「ウィジ。ナリコの笑いは時に意味を持たない」
なんだこれは。本当に。
これが。
「……これが、始の点、なのか」
「魔力を感じてみればわかるわ。……上から下に向かって、魔力が噴き出してる。この面を通って、世界に魔力が充ちて行っている」
「ホントだ」
目を瞑り、魔力の流れを読む。
俺ァこれについちゃあンまり得意じゃねェんだが、得意じゃねェにも関わらずできるってな、相当だ。相当、濃い。
「……梓・ライラック様。あそこ……見えますか？」
「ン……。あァ、見える。でも、ありゃ……なンだ？」

「熱源です。……恐らくは――心臓、かと」
指差された場所。
ダイヤモンドの中心部。そっからちょいと上。天に向かうど真ん中。
そこに、あった。
どくどくと……脈動する、心臓。見えるんだ。ってこた、かなりデカい。巨人の心臓なンじゃねェかってほどデカくて――凄まじい魔力を放ってる。
けど、アレが中心じゃ、無い。
「見て、下に集落があるわ。……EDENの下の国以外は滅びたのだとばかり思っていたけれど、こんなところにもあったのね」
「うむ。ウォムルガ族の村もあったのだ、こういう所にもあろう」
「ウィジ、でもおかしい。あそこは」
「……迷宮の中、に、見えるよな」
ダイヤモンドを逆さにして、尖ってるトコが上を向くよォな形に置いたって感じの迷宮、始の点。
その底面に――街があった。

外にではなく、中に。
そして。
「私の感知器に間違いが無ければ……魔物と人が、共存している、ように見えます」
「大丈夫よ。私にもそう見えているから」
「可能なのか？」
「ウィジ。可能じゃなければ、この光景は無い」
「む、そうか」
いた。
みんなが話してる集落、じゃない。そんなのァどーでもいい。
いたンだ。
いる。
あそこにいる。
「……アレァ、魔法少女だ。４人……多分」
「あら、本当ね。５００年ぶりだわ。――ＥＤＥＮの創設者たち。私の国を襲った魔法少女」

「ククククッ……吾の先祖を討滅したのも、あ奴らだろうな。クク、血が疼く、疼く……」

それァ初耳だが。

多分ここに、全てがある。

そんな予感がした。

「え～！　ディミトラ!?　もしかしてディミトラ!?　カワイー、変わってな～い！」

「当たり前じゃない、魔法少女なんだから。って、ちょっと、頬すり付けないでよ、痛いだけよそれ！」

……うーむ。

俺ァさ、結構覚悟とかあっての。

「おや。インキュバスの末裔ですか。インキュバスにも関わらず女性とは、そして魔法少女とは。因果なものですね」

「ククク、吾の胸がそんなに好きか。ほれ、たんと触るが良い。――吾の身は、吾の妻のものだがな」

折れちまいそうになる心をさ。ずぅっと無視し続けての。

「君達は、アインハージャ？　懐かしい。私達が会ったのはヒヨルスとラングリーズという戦士だった」

「覚えのある名だ。私はウィジ。当代の≫矛≪である」

「リジ。今代の≫盾≪」

……だったンだが、なァ。

「貴女、もしかしてガーゴイル？　その身体どうなってるの？　……すごい、色んな部品がいっぱいある！」

「あ、あの、その、えと、た、助けてください梓・ライラック様！」

その集落ァ、規模的にァＥＤＥＮや国と比べるにァちと劣るが、凄まじいまでにこう……活気のあるトコだった。商売繁盛ってなが全体に在るといえばいいか。市場を行く奴らァみんな笑顔で、売買する奴らもおまけだの酒の約束だのと、なンだ、和気藹々としてる。

んでもって、当然のよォに闊歩する化け物。
形ァ様々だ。にっくきウルフ種もいりゃ、レーヴァン種、バード種、スライムもいるな。後ァよくわからねェ馬みてェなヒトみてェな何かとか、翅の生えたちっさいのとか、形容の言葉の見つからねェのもいる。
カオス。あるいは、俺の想像する本来のファンタジー、みてェなトコ。
で、今俺ぼっちね。
なんでって、創設者たち４人ァマッドチビ先生とシエナとアインハージャと着物狐にご執心だから。
確かに特別だモンなァ、あいつらァ。
俺ァちょいと離れたトコの塀に座って、なんぞ気の良いおっちゃんから貰ったリンゴを齧ってる。めっちゃ甘い。うわこれレーテーに入れて常時食いてェ。魔煙草吸った後とかに食いてェ。
「お姉ちゃん、何してるの？」
「ン？　なんだ、嬢ちゃん。１人か？」
「うん！　ママがいなくなっちゃったから！」

「……そりゃ多分、お前さんがいなくなったンだと思うが」

ベタっつーかなんつーか。

突然話しかけてきた少女……つゥか女児だな。そいつが、なんぞ俺の横に座って、ンなことを宣いやがる。

やめてくれねェかな、ホント。

こっちァ色々抱えてンだよ。目の前の5人もなんとか引き剥がして作戦会議しねェといけねェのにさ。

「ママの特徴……あー、なンか、髪が長ェとか、どォいう色の服着てるかとか、わかっか？」

「一緒に探してくれるの？」

「あァさ。何してるか聞いてきただろ？　暇なンで、何もしてねェんだよ。ちょいと観光ついでに探してやるからよ、ほら、手。握んな。また迷子になっちゃ困るだろ？」

「うん！」

……おじさんに困ってる子供見捨てろとか。

無理に決まってるだろ。ただでさえ傷心中なンだよ、馬鹿野郎が。

「なァ、嬢ちゃん。名前ァなんてーんだ？」

「ブゥリ！」

「おォさ、ブゥリ。嬢ちゃんの家ってな、どっちにある？」

「あっち！」

人混みも人混み、混雑ってレベルじゃねェが、しっかり手ェ繋いで、早足にならねェよォに気を付けて、一緒にてくてく歩いていく。まァそこまで広い国じゃねェからな、シエナが見つけてくれるだろ、俺のこた。

だからまずァこの子の親探しだ。ブゥリ。聞かねェ響きだが、まァ世界の反対となりゃそォもなるか。

しかしまァ、いんやさいんやさ。

活気ある場所だなァ、ホント。

「お姉ちゃんは？」

「ん、あァそォか。俺ァ梓ってのさ。梓・ライラック」
「梓お姉ちゃん！」
「おゥ」
なんぞ、妹を思い出すなァ。
姉ェ姉ェと慕ってくれたあの子。あと5年だか4年だか会えねェっての考えると苦しいなァ。あ、でも魔力殺しゃァその辺の云々も消えンのか。なんにせよED EN動かしてからじゃねェと大惨事確定なンだがよ。
しっかし、親も親だよなァ。こんなチビを置いていくなよ。買い物に夢中だったとか、まァなんぞ理由ァあんだろォけどよ。この年頃ァ色んなものに興味を持ちやすいンだから、ちゃんと見ておいてやんなきゃ可哀想だろォに。
ぐゥ、と鳴る。
勿論俺じゃァない。ブゥリの腹の音だ。
「腹ァ減ったか。つか嬢ちゃん、どんだけママを探してたンだ？」
「ん―とね、ずっと！」
「ほォか。じゃァ疲れてるだろ。負ぶってやろォか？」

「いいの？」
「いいよ、姉ちゃんァこォ見えて力持ちでよ。ブゥリくらい軽いのだったら平気さ」
しゃがんで、ブゥリを背に乗せる。おー、軽い軽い。
まァなァ。見たトコ6歳とかその辺だろォし。ったく、親ァ今何してンのかね。
……ま、いなくなった子供に焦って、色んなトコ探してンだろォけど。自分の子ァ大切だよな。
「ん―、しかしどォすっかな。俺ァ金が無ェんだわ」
「ほう、金が無いと。よし来たお嬢ちゃんたち！　今朝取れたばっかの桃だ、もってけもってけ！」
「おわっ、びっくりした。……エ、いいのかよ。つか悪ィって。なンか貰うために呟いたみてェじゃねェか。いいよいいよ、どォにかして食いモン探すから」
「ならウチのを食べて行きな！　魚は平気かい？　平気だね！　ほら、獲れたてだよ！」
「おお、活きの良い……っつか、そりゃ明らかに売りモンじゃねェか。……あー、じゃァ俺ァいいからよ、この子に食わせてやってくれよ。流石に2匹貰うのァ心

苦しい」
「そういうことならこのバァユなどどうだ？　子供が２人で食べて丁度いい大きさだ。何、これくらいならいくらでも作れるからな！　さぁ食べると良い！」
「だってよ、ブゥリ。ほれ、好きなの食いな」
「アンタもとっとと食えって言ってんだよ!!」
怒られた。
……いんやさ、あんまり気が良過ぎると疑っちまうっつーかさ。まァンなモンをブゥリに食わせるなって話なンだが。
そんなに栄えてる集落なンだなァ。周囲に貿易国なんぞも見当たらねェのに。
始の点からなンか取れるとかか？
「梓お姉ちゃん、見て見て！」
「ン？　……おォ」
「全部貰っちゃった！」
「みてェだな。しゃーない、どっかで食うか」
「うん！」

桃に魚にバァユに……その他色々。
明らかに商品だろォ状態の良いモンを、これでもかって詰め込まれた籠。
なンなンだよここァ。
まるで――楽園、じゃねェか。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「見つからねェなァ、ブゥリのママ」
「うん……。もう家に帰っちゃったのかな」
「かもな。んじゃ、ブゥリの家に行くか。案内ァできるか？」
「多分！」
「いいよ、それで」
ブゥリの腹も膨れて、そっから小一時間探し回ったンだが、やっぱりいねェ。

いんやさ、そのママンがどぉいう奴かも知らねえンでたりめーちゃァたりめーなンだが、こんだけ探して見つからねェってなると、屋内の可能性が高ェよな。
「ねね、梓お姉ちゃん」
「ン？」
「お姉ちゃんは、どこから来たの？」
「んー。よく俺が外から来たってわかったな」
「だってヘンな服着てるもん！」
「はは、確かに」
さっきの創設者４人以外、魔法少女を見かけてねェ。
んなら魔法少女の衣装ってな奇抜に映るか。これ、変身解除しても制服だからな。奇抜なのァ同じだろォが。
「遠いトコさ。遠い遠いトコから、飛んできたンだ」
「飛んで？　どうやって？」
「竜の背に乗っかってよ。はは、信じられねェか？」
「ううん。信じるよ！」

「それまたどォして」
「だって私も見た事あるもん！　でっかいでっかい竜！　こーんなに、こーっんなにでっかいんだよ」
「へェ。そりゃ、俺も見てみてェな」
「ホントに？」
「あァさ」
さて、はて。
あンまりなー。疑いたくァなかったンだが。
気配がしねェんだよなー、ずっと。
「じゃあさ、じゃあさ、でっかい竜を見ても……怖がらない？」
「怖がりァしねェよ。俺ァもっと怖いモンがあるんでね。つか、俺の方が怖いかもしれねェし」
「そうなの？」
「あァよ」
「でも、梓お姉ちゃんは――気付いてるのに、手を離さないでいてくれたよ？」

しねェんだ。
命の気配、って奴が。俺の司る死が、ブゥリから感じられねェ。
化け物からすら、式鬼からすらも感じられるソレが、ブゥリにァ無い。市場の人達にァあったのに、ブゥリにだけ、無い。
……でも悪意とか無さそォだったのがな。
「ここまで来りゃ大丈夫だろ。ここァ、迷宮の端っこか？　始の点のそとっかわ。ヒトァあんまり寄り付かねェようで」
「うん」
「ここが、嬢ちゃんの家、なンだな」
始の点は、透明に見える。けど透明に見えるだけだ。
中ァちゃんと入り組んでて、ちゃんと迷宮になってる。
俺とブゥリァそン中を歩いてきた。いるはずの化け物は一匹も出て来なくて、ただ入り組んだ複雑な迷路を、道案内できるブゥリに従ってついてきたってだけだ。
んで——開けた場所に出たと。
「ブゥリ。アレが、お前のママか？」

「うん！　アードゥムラっていうの！」
「へェ」
そこには一匹の牛がいた。
牛だ。
でっけェ牛だ。
「それで、お前さんは？」
「？」
「ブゥリァどこにいるか、って聞いてンだよ。あァ、怖がらねェから、早く出てこいよ。わかってるよ、今のブゥリが人形だってな、最初からな」
「……うん」
ずしん、と。
地面が揺れた。揺れて、揺れて。
揺れて――影が差す。
光り輝く壁を、しかし遮るもの。
手を握るブゥリの身体が光になっていく。

元から生きちゃいねェ人形だが、あんまり快い光景じゃァねェな。
んでまァ。
「よォ。ブゥリ。でけェドラゴン見た事あるってな話だったが、どこで見たンだ？」
「――此処で。壁に映る己を」
「なるほどな。んじゃもういっこいいか？」
「――許可する」
「いいよ、別に。カッコつけよォとしなくて。お前さんマジで子供だろ、でけェけど。だから、そのまま喋って良いよ。俺ァ気にしねェからよ」
「うん！　わかった！」
そこにいた。
いた。いた。いた。
でっけェでっけェ、ＬＯＧＯＳなんざメじゃねェ程にでけェ――金色のドラゴン。
恐竜島のソレとも違う――こう、なンだ
「これだよ、マッドチビ先生。これがマジのドラゴンだよ」

「うん。私は竜だよ、梓お姉ちゃん！」
やっぱあの人芸術センス無ェーって。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

3・Cut guy at kick no should now.

51・同訪藤有迂遠徒、明日有迂遠徒・

「ここァよ、始の点……で、合ってるよな」
「うん。かつては、そう呼ばれていた」
「今は違ェのか」
「梓お姉ちゃんも見たでしょ？　あの４人の魔法少女に攻略されてしまったから、ここはもう始の点じゃなくて、輝きの園、って呼ばれてる」
「へェ。下の街含めてか」
「うん！」
静かで、良い空間だった。
中心にいるクソデカウシとブゥリがいて、尚余りある空間。小川がきらきらと流れ、屋内のはずなのに仄かな風が吹いて、木々が揺れる。透明にもかかわらず周囲

の景色の見えない壁は、けれど陽光を通し、場に光を落とす。街や心臓が見える事は無いけれど、その光がここを世界の一部であると教えてくれる。

始の点。

終の因の反対側。地脈吸入点である終の因へ向けて、世界を覆うようにして魔力を噴き出す地脈噴出点。

「梓お姉ちゃんは、ここを壊しに来たんだよね？」

「……よくわかったな。そォさ。……そォだよ」

「わかるよ。殺意があるもん。梓お姉ちゃんが命を司るように、私もそうだから。――ここを、私を。殺したいんだ、って。わかる」

ブゥリァ化け物だった。

クソデカウシ含め、完全に化け物だ。終の因におけるアンヴァルやアンゲル、あるいはソテイラみてェなモンなンだろう。

迷宮は既に攻略されていて、基底部を人間と化け物の棲み処に。最奥ではこォしてブゥリたちが暮らしてる。

ここに争いは無く。

無為に死んでいく魔法少女もいない。
じゃァよ、ＥＤＥＮってな、なンなンだ。
「……魔力を無くす、殺すってなよ、できンか」
「できるよ。梓お姉ちゃんに殺せないものはないもん」
「ほォか」
「うん。勿論、私も、アードゥムラも、あの４人も、街の人達も、魔物達も、自然も、何もかも、世界だって――梓お姉ちゃんは殺せる」
「いいのかよ、ンなこと教えちまって」
「それが摂理だよ」
……チビのくせに、難しい言葉使いやがる。
なーにが摂理だ。やめろよ、生きたいって言えよ。抗えよ。
じゃねェと……。
「魔力を殺すにァ、どうしたらいい？」
「私とアードゥムラを殺せばいいよ。私達は迷宮の要だから、私達がいなくなれば始の点は機能しなくなる。そうすれば、供給源が停止して――この世界から魔力は

消えてなくなる」
「……つまりまァ、コンセントプラグか」
「なぁに、それ」
「アレが口なンだろ、ってことさ」
アレ。
天頂。天辺。逆ダイヤのとんがってるトコ。
空――つまり世界の外に突き刺さった頂点ァ、そこから魔力を吸いだしてるってワケだ。
「なァよ、ブゥリ。終の因にァ何の役割があンだ。あるいはＥＤＥＮって場所ァ、何なんだ」
「ＥＤＥＮについては私を倒した４人に聞いてほしいけど、終の因の役割は簡単だよ。始の点から出た魔力を集めて、世界の中に落とす。ただそれだけ」
「落としたら、どォなるンだ」
「魔力が世界に満ちるよ？」
「始の点だけじゃ満ちねェのか」

「ここはあくまで世界に魔力を流すためだけの場所だもん。世界を流れる魔力は、終の因や、他の地脈吸入点を通して世界に入って、世界に魔力を満たす。……梓お姉ちゃんには、星とか、惑星、って言った方がわかりやすいかな」

「あァ、なるほど」

世界と星ァ別なのか。

だから——天、ってなカプセルがあって、周囲を電気が走ってて。カプセルからちょいと突き出たコンセントプラグたる始の点が、カプセルの内部ってな世界に電気を流してて。カプセルの中に浮いてる星っつーロボットに終の因が電気を注いでて。

そォいう構図なンだろう。

何のためにとか、誰の意図で、とかァよくわからねェが、まァ大体そォだと思う。

「ブゥリァよ、生きてェたァ思わねェのか」

「わかんない。でも——もう、世界が苦しいって、星が痛いよって。そう言ってる声は、聞きたくない」

「ン、そりゃどォいう——」

――レーテーを起動。取り出すのァ剣じゃなく弾丸。襲い来るソレに、適当でいいからぶん投げろ！

「！」

「……もう来ちゃったんだ」

「下がってな、ブゥリ。できンなら、あのアードゥムラってのも下がらせな」

「守ってくれるの？」

「もうちょい、聞きてェ事がある」

飛んできたのァ半透明の物体。

多分魔法だって思ったンで【即死】の弾丸投げたら死んでくれた。はン、精神体が俺に敵うかよ。

……だが、だ。

「どォいう了見か、教えてくれるか。よォ、創設者。名前も知らねェが、いきなりのご挨拶にァ驚いたぜ」

「聖域に無断で入り、アードゥムラとブゥリに危害を与えようとする、夜の使徒。不意を打ってでも殺さない理由がない」

「ハハ、なンだよ。だったら最初に殺せよ。ここに来た時ァ無視してくれたクセによ、なんだって今更」
「梓お姉ちゃんは、私が隠してたから、あの４人には見えなかったよ」
「……あァじゃァブゥリに感謝だな。あそこで血みどろの争いってな気が引ける。こンな綺麗な場所でもお断りだが」
なるほどね。
俺がぼっちだったのァ、見えてなかったからか。
……みんながどォなったのか気になる所だが。
「なァよ、名前、教えてくれや。俺ァ梓・ライラックってンだ」
「ハイドレート」
「おゥ、紺碧ベルトな」
「無礼」
また来た。
よくわからねェのを、今度ァ剣で叩き切る。弾速っつーか飛来する速度ァ遅いのに、【即死】の気配がするってなどォいう魔法なのかね。

「ブゥリ、梓お姉ちゃんァこーみえて強ェんだ。だから大丈夫」
「嘘だよ。梓お姉ちゃんはとっても弱いよ。私が踏み潰したら簡単に死んじゃうでしょ」
「あァ真っ直ぐな言葉ってな傷付くなァ。でもまァ、いいって。下がってな、傷つけば痛ェよ。痛ェのァ嫌だろ？」
「うん。でも、梓お姉ちゃんも嫌でしょ」
「そりゃァな。だが、俺ってな奴ァ俺にもわからなくてねェ。化け物だってわかってても、子供ァ……ああいや、なんでもねェ。いいから下がってな。どォせ一緒に戦うってなできねェんだろ。ソテイラと同じく、契約かなンかで縛られてそォだし」
魔法少女にァ絶対服従、だったか。
ここを聖域だの、アードゥムラとブゥリに危害を〜だのと、こいつらを大切にしてるっぽいンで大丈夫だとァ思いてェが、万一ってないつの場合にもある。特に俺ァ回避専門なンでな、思わぬ流れ弾があるかもしれねェ。
「それに、どォにもブゥリの声ァアイツに聞こえてねェみてェだし——そもそも1人で来たってのも、なんぞ怪しいしな」

紺碧色のベルト腰に巻いてるから紺碧ベルト。
魔法少女なのァ間違いない。得物ァ、ありゃ鞭か？　へェ、おっそろしいモン使いやがる。つか、案外武器有の魔法少女ってな多いんだなァって。あるいァ【喧槍】みてェに魔法で作りだした武器かもしれねェが。
「……わかった。気を付けてね、梓お姉ちゃん」
「おゥ」
ズシンズシンとブゥリが動く。
アードゥムラをその手で引っ掴んで、迷宮の奥の方に消えて行く。
さて、レーテーから剣を引き出して――準備万端、ってな。
「不意は打つくせに、待っててァくれるンだな」
「無効な攻撃は不要。対策を計算中」
「はン、そォかい。んじゃこっちから仕掛けても？」
「問題ない」
どォも調子の崩れる奴だが、ＥＤＥＮの創設者ってなだ。相当強ェに違いねェ。
ブゥリの言葉が聞こえねェってなちょいとわからねェが、さてはてどォ仕掛けた

モンかね。
まとりあえず、牽制か。
剣に【即死】を浸して、振る。
死飛沫、なンて名前でも付けてみるか？　……言い辛。
「魔力？　……危険度SS。回避を選択」
「おォさ、その鞭で弾くのかと思ったよ。避けンのか。偉いっつーかなんつーか」
「鞭？」
「手に持ってるソレだよ」
「……本当だ」
あ？
なんだコイツ。
何言ってやがる。
「夜の使徒。聖域で何をしている？」
「談笑」
「理解不能。排除実行」

飛んでくるのは精神体。【即死】弾丸食わせて対処。
なンなンだこれァ。弾速遅ェから知覚強化する必要がねェのァありがてェが、どォいう魔法なンだ。
「――つーかお前、マッドチビ先生と話してた時と雰囲気違いすぎねェか？」
「？」
「マッドチビ先生。ディミトラだよ。話してただろ、さっき」
「……懐かしい名前。解放の時以来、会っていない」
「あ？」
……これ、またか？
あー、やめて欲しいな、ソレ。あン時はアイツらの人となり知ってたし、馴染んで無さそォだったから気付けたものの……俺、お前ら知らねェからよ。
偽物かどォか、わからねェ。
「問うが」
「何」
「ＥＤＥＮってな場所ァ知ってるか」

「当然」
「それァ、お前らが作ったからか？　それとも――お前らが狙ってる場所だから、か？」
「理解不能。私達が作った場所を私が知らないはずがない」
「あァよ。じゃ次の質問だ」
「何」
……なンだコイツ、ホントに。
質問してる間ァ普通に聞いてくれるし答えてくれる。攻撃してくる気配も無い。
本物偽物ァ置いといて、ちょいと情報引き出してみるか。
「ＥＤＥＮってなよ、何のために作ったンだ」
「魔法少女の楽園が必要だった」
「なンでだ」
「過去、魔法少女は魔物として扱われていた。迫害を受けていた」
「……そォなのか」
「そう。攻撃してもいい？」

「ダメだ。まだ聞きたい事がある」
「わかった」
はははァ。ま、ちょいと予想してた事でァあった。今の国も半分くらいそォだしな。
魔法少女なんつって管理されちゃいるが、そォでねェ奴ァただ突然やべー力に目覚めたやべー奴だ。石だの雷だの火だのを操り得るのがある日突然街中にでてくンだから、そりゃやべェだろォよ。迫害できるのかどォかは置いといて、異端だと思うのァ納得できる。
「だから、解放か？」
「そう。各国で迫害を受けていた魔法少女の全てを解放した。終の因を拠点として、今まで迫害を受けていた魔法少女達が死なないようにした」
「だがよ、EDENにァその今まで迫害を受けていた魔法少女、ってなァいねェぞ。少なくとも聞いたことが無ェ」
「？　寿命で死んだ。それだけ」
「寿命？　魔法少女ってな永遠を生きるンじゃねェのか」
「そんな事があるわけがない。理解不能。意味不明。それが出来るのは神だけ」

……確かにそォだ。

それは、そォだ。合っている。

「魔法少女の寿命ってな、いつ訪れる。少なくともマッドチビ先生ァ５００年を生きていた。アンタもそォだよな」

「蘇生を繰り返せば、上限が減る。魔法少女は初めから魔力保有量が決まっている。死亡時にそれを失い、蘇生時に八割程を取り戻す。魔法が殺されたり切り離されたりすれば、その減少はさらに早まる」

「……つまり、死ななきゃ死なねェほど長く生きられるワケだ」

「当然。そろそろ攻撃する」

「ダメだ、もうちょい待て」

「わかった」

成程？　つーと、やっぱりマッドチビ先生が怒ってた、「最初は本当に魔法少女の楽園だった」ってなマジなンだろォな。それを、今みてェに死兵扱いにした奴がいる。学園長か？　それとも……ジャハンナムとかいう上官か？

少なくともこいつらァ魔法少女のために、魔法少女が安全に暮らせるための場所

を作ったンだ。それァ間違いない。んで、できるだけ死なないよォにもしてたし、死んだとしてもすぐに蘇る事ができるよォに蘇生槽を作った。ソコについてァ俺ァ気に入らないンだが、今ァおいといて、ホントに楽園だったってわけだ。

じゃあ、国ってななンだ。

なンで国家防衛機構なんぞに成り下がってる。

「ＥＤＥＮの下に、国があンのァ知ってンのか」

「当然。魔法少女になる可能性を持つ人間を集めた国。終の因から放たれる高密度の魔力によって、国では魔法少女が生まれやすくなる。終の因が地に在った頃は世界各地で生まれていた魔法少女が、今やあの国以外では滅多に生まれなくなった」

「あァな。なるほど、終の因を浮かべた理由がソレで、国を造った理由もソレか。んじゃなンでＥＤＥＮァ国家防衛機構なんてのになったンだ」

「？　ＥＤＥＮは魔法少女のための楽園であって、国を守るためのものじゃない。むしろ、国が魔法少女を生み出すための施設であると言える」

隔離病棟かね。つまりァ。

魔法少女が覚醒、発現する可能性のある人間を集めて魔力に晒し、覚醒したらＥ

ＤＥＮに上げる。そォすりゃ見えねェとこで迫害される心配もねェし、反対にやべェ思想持つ魔法少女が一般人に何かをする心配もなくなる。
　臭ェ物に蓋をするってーと些か語弊があるが、まァ似たような事だろ。
「計算及び対策完了。攻撃開始」
「まァ待てって。もうちょい聞いたらちゃんと戦ってやるから」
「わかった」
　何を対策されたのかァ怖ェ所だが、もうちょい引き出したい。
「輝きの園、だっけ？　ここの集落ァ。此処にいる奴らァよ、魔法少女にァならねェのか」
「当然。そうならない人間を集めた。そうなる人間はＤＥＮの下にいる」
「んじゃ、化け物と共存できてる理由ァなンだ」
「？　魔物は魔法少女の因子を狙う。魔法少女になり得る人間と、魔法少女。それを食せば、魔物はもう一度生まれ直すことができる。高位へと進化することができる。理由はそれだけ」
「アンタらァなンで狙われてねェんだ」

「強者に挑み、死ぬ事と、強者に恵まれ、生きる事。賢い方を選んだだけ」
「そォかい」
あるいは、そうか。
化け物が生まれ直す事を求めるってな、つまり死ぬ可能性があるからだ。こォも平和な街で、こォも生存競争からかけ離れた場所なら、生まれ直そうっつー気にもならねェ、とか？　だが、奴らにァ悲願があるだろ。
成道し、完全になるっつー悲願がよ。
「対策その1。流体」
「あァそいつァ殺させてもらうが」
「……再計算中」
「おゥ、一回攻撃したンだ、もうちょいと聞きてェんだが、いいか？」
「構わない」
さっきァふわっとしたボールみてェなのが飛んできたが、今度ァ水みてェなのになった。
けど魔法ァ魔法な上に耐久性能がクソ程低いンだろう、【即死】弾丸1発で消せ

た。ふわふわだろォが流体だろォが俺の弾丸を受け入れちまう時点でダメなンだよ。教えたら硬質化とかしてきそォだから言わねェけど。
「魔法少女ってな、そもそも何なんだ。なんで突然発現する？」
「魔法少女は病。昔からある病気。見えないし除去もできない。感染もする」
「病気……」
マジで隔離病棟じゃねェか。
それに、その言い方だと。
「それってな、治療ァできねェのか」
「それができるのなら、私達は楽園を作っていない」
「そォかい。んじゃもう一個。なンで男にァ感染しねェ」
「そういう病だから」
「そォかい」
「そう。次の攻撃を思いついた」
「そォ逸るなって」
それそれそォそうそォそうそォかいってな。うるせェか。

あァいや、思考を止めるな。聞きたい事聞き切るために、ちょいと魔煙草を1つ。
ふゥ、不味い不味い。脳がクリアになって良いねェ。
「私からも質問がある」
「なンだ」
「何故春の暴風を吸っている？」
「あァ、それ。赤スカーフにも言われたな。なンだ、そんなにおかしいコトか？」
「質問しているのは私」
「頭がすっきりするからだよ。あと魔力が回復する。んで、こっちの質問だ。そんなにおかしいコトか？」
「おかしい」
「なンでだ」
「春の暴風は、始の点が世界に流せなかった余剰魔力を糧に生きる植物。その種子すらも世界の外から来た。つまり外来種。この世界の植物ではない。それを吸うという行為は、世界の外の魔力を直接吸っているに等しい」
「それの何がおかしいンだよ」

「世界の外の魔力は毒と同じ。始の点によって変換されない内は、恐らくこの世のものとは思えない程に不味いと想定される」
「おォ正解だ」
なるほどねェ。これ毒なのか。
なんだ、ニコチンより毒っぽい言い方するじゃねェか。やっぱ煙草ってどんな形でも毒なんだな。
「これァ、吸い過ぎるとどォなるンだ」
「思考が純化される。つまり、己の信奉する神に近くなる。貴女であれば夜に。魔法少女であれば太陽に。魔物であれば風に」
「ははァ、心当たりァあるよ」
なるほど、脳がスッキリすンのァ副作用か。
別に良いけどな。俺ァ元々神さんの考えに賛意してるし。
「対策2。思いついたから攻撃して良い？」
「まだ早ェよ。もうちっと話してからにしろ。まだ聞きてェことがあるンだ」
「わかった。何？」

「お前らァなんだってＥＤＥＮに帰らねェ？　今よ、ＥＤＥＮってな楽園たァ言い難くなってる。さっき言った通り、国家防衛機構なんぞを名乗ってよ、魔法少女が簡単に死ぬ場所になっちまってる。それを正してァくれねェか？」

「酷い。私達の苦労が水泡に帰している。そうしないためにＥＤＥＮを作ったのに」

「あァよ。だからよ、４人で帰ってくれねェか。学園長殿ァなんもしてくれねェんだよ」

「それはできない」

「なンでだ」

「まだこの迷宮の攻略が終わっていない。途中で出ることはできない」

「あン？」

……どォいう事だ。

ブゥリが嘘吐いてるって事……にァ思えねェが、一応化け物だからなァ。

だが、うーん？　なんか違う気がする。

コイツの口ぶりもそォだが、何か別の所を見ているよォな。

「他の３人ァどこいった？」

「迷宮を攻略している最中。私は魔力が減ったからこっちに帰ってきた」
「帰ってきた？」
「迷宮には聖域と呼ばれる階層が存在する。そこには魔物が現れることはない」
「あァ休憩ポイントか。それがここなのか」
「私達は長い間、ここから外に出ていない。輝きの園に住まう者含め、外に出ることはできない。迷宮が攻略されていない以上、その出口は開かない」
「だが、ブゥリァもう攻略されたっつってたぞ」
「……？　意味不明。理解不能。ブゥリは害のない魔物だけど、言葉を喋る事はできない。妄想？」
「はン……？」
……もしや。
「なァよ、紺碧ベルト。お前、どこまで記憶がある？」
「質問の意図が不明」
「どっかの時点から直近までの記憶奪われてンじゃねェかなって思っただけさ。奪われたのか失ったのかァ知らねェが、少なくとも俺ァ輝きの園でお前と会ってンだ

よ。印象ァ大分違ったがな」
「……記憶を奪う魔法には、心当たりがある」
「マジかよ。こえー魔法使うヤツがいるンだな」
偽物とか本物とかじゃねェんだ。
今のコイツァ多分過去のコイツで、鞭を持ち始めたのも最近で。あるいァ魔法の使い方についてもほとんど忘れてるのかもしれねェ。だからこんなに弱いと見た。
「ブゥリ、聞こえるか！」
「うん！　梓お姉ちゃん、大丈夫だった？」
「おゥびっくりした。そんな近くにいたのか」
ほっとんど至近距離から声が聞こえて流石にびっくりした。
命の気配が無いンで気付かないンだよな、その人形使われると。
「その子は、誰？」
「ブゥリがヒトと話す時に使う人形だとよ。コイツの声ァ聞こえるか？」
「否。……理解した。理解不能なのは、恐らく私。みんなと合流した方が良い」
「あァよ。だがその前に、もう一個聞かせてくれ」

「何？」
攻撃の意思が消えたのがわかった。
納得してくれたらしィ。チョロ……もとい、意味の分からねェ奴だと思っていたが、案外わかりやすいな、創設者。
「記憶を奪う魔法ってななんだ。使い手ァ誰だ」
「魔法の名は【槌憶】。使うのは、私達の仲間の１人、モーゲン」
「創設者の１人か」
「そう。今から探しに行く。一緒に来る？」
「……ちょいと一瞬考えさせてくれ」
「わかった。一瞬経った。答えが欲しい」
「子供かてめェ」
問い質しに行くってな、おかしな行動じゃねェ。
だが記憶を奪う魔法なんぞを使うのが相手だ、不利ってレベルじゃねェ。んでもって、なンだってソレを仲間に使ったのかもわからねェ。更にァ――マッドチビ先生達までもが毒牙にかかってる可能性ァゼロじゃねェ。どころか百かもしれ

ねェ。
　目的ァなんだ？　俺を殺すため？　違うな、それならもっと別のやり方がある。じゃァ事故か？　暴発しちまって……みてェな。違うか。だったら紺碧ベルトを迷宮に留めたりしねェ。手厚く保護するか、そもそも解除の方法があンだろ。まさか奪ったまま取り返せねェってこたない、よな？
　……あるいは。
「ついていくよ。ブゥリァどォする？」
「私も行く！　この身体で、だけど」
「あァよ。そもそもでっけェと通路入れねェもんな」
「うん！」
　あったよな。
　他人の魔法奪って――別人が使う、ってなのが。
　よォ、いんのかい？
　ルルゥ・ガル。

迷宮を行く。
紺碧ベルトについていく。
「なァ、ブゥリ。さっき言ってた世界が苦しいだのってな、何なんだ」
「世界はね、もう限界なの。魔法少女が増え過ぎて、魔物が増え過ぎて。際限なく増えるそれに、星も世界も苦痛を訴えてる。もういいよ、って。もういらないよ、って。だからもう――殺して欲しい、って」
「……それァ、魔法少女や化け物が魔力を食うから、か？」
「ん―ん。単純に寿命だよ。もっともーっと昔に世界は死ぬはずだった。もっともーっと昔に死んで、ばらばらになるはずだった。安らかに眠るはずだった。なのに、魔力っていう異物が入って来ちゃって、世界は強制的に生かされた」
「……魔力ァ、世界にとって毒なのか」
「うん。私もアードゥムラも魔物だけど、だからこそわかるよ。世界は私達を要らないって言ってる。世界は私達を嫌いだって言ってる。けど――世界は私達を排除できるほどの力をもう持ってない。お婆ちゃんなんだよ、世界って。何度死にた

いって言っても誰も殺してくれない、どころかもっと生きるための機構をつけられちゃった、お婆ちゃん。始の点も終の因も、ずーっと昔に世界の死を悟った人たちが造った延命措置だから」

死にたがってる。

世界ァ、死にたがってる。

魔力を殺してくれと言っている。ブゥリにァ、それがダイレクトに聞こえるンだろう。あるいァソティラもか？　いや、アイツァ否定するなとか言ってたし違うか。何の違いがあるンだ。

「さっきの質問。私が生きたいかどうかは、わかんない。もう十分に生きた気もするし、この外を見てみたいという気もあるし、けれどそれができないのも知っているし。でも、これ以上……苦しいよって。辛いよ、死にたいよ、って。それを聞くのは、嫌かな」

「……あァ、そうかい。んじゃ尚更……魔力を、殺さなきゃな」

なンでこう、俺の心を刺す事ばかりなンだ。

生きたがっててくれよ。そォであれば、俺ァ殺せる。【即死】を揮える。生きる

ために抗うってンなら、俺ァちゃんと向き合って相手ができる。
でも、死にたがってたら、ダメだろ。
だってそれは。
だってそれァよ。
同じ、じゃんか。
傷付いた魔法少女達が——俺に死を。【即死】による救いを懇願するのと。
おんなじ、じゃんか。
「質問」
「なんだ？」
「今、魔力を殺すと言った？」
「あァ。俺ァそのために来た」
「何故そんなことをする？」
「魔力が無くなりゃ化け物も魔法少女も生まれなくなるだろ。そうすりゃ、これ以上の死ァ——人間が元から持ってるモンだけになる。少なくとも、蘇生をワープ代わりに使うとか、コンティニュー代わりに使うよォな奴らァいなくなる」

「もう一つ、質問」
「おゥ」
紺碧ベルトァ――本当に意味が分からねェ、って顔で。
言う。
「世界から魔力が無くなった場合、魔法少女の因子を持つ子は突然死するようになる。理解はしてる？」
「――……」
な、に？
「魔力が溢れているから、魔法少女の因子が発芽しても、その精神が魔法に蝕まれる事無く魔法少女となれている。魔力の枯渇した場所で覚醒が起きれば精神を魔法に食べられて、死んでしまう」
「……ブゥリ。今のァ本当か？」
「うん！　そうなれば魔法少女は生まれなくなるよ。人間から魔法少女にならずに済む」
だが……それは。

それは。

「ＥＤＥＮの下にある国ってなよ、国民全員が、その魔法少女の因子とやらを持ってる、ンだよな？」

「そう。――だから、魔力が世界から無くなったら、あの国では突然、何の前触れもなく人が死ぬようになる。あるいは強い因子であれば――周囲に炎や氷を撒き散らして死ぬかもしれない。魔法に蝕まれて、魔法になって死ぬから――もしかしたら、爆発が起きるかもしれない。【自爆】という魔法もあったし」

「魔力を殺して、且つそれが起きねェよォにする手段ァねェのか」

「有ったら私達がやっている。魔法少女になんて、ならない方が良いんだから」

「……そう、か」

そうだ。魔法少女は病気。

なら、ならねェ方が良い。ただ、なっちまった場合に苦しまねェよォにＥＤＥＮを作って、だから……。

「夜の使徒。もう一つ、問いたい」

「……なンだ」

紺碧ベルトは振り返る事も無く言葉を発す。
振り返る事も、立ち止る事も無く。
ただ――。
「魔法少女が生まれなくなっても、既に生まれ落ちている魔物が消えるわけではない。――確実に人類は滅びる。それについては、考えている？」
「あァ、なンだそんなことかよ。神妙な声出すから何かと思ったじゃねェか。そンなのァ別にどーだっていいよ。人類の生き死になんざ俺にァ知ったこっちゃねェ」
なンだよ。
溜めたからなンかすげェこと言われるのかと思ったじゃねェか。
そんなクソどうでもいい事、考えるわけねーだろォが。
「どうだっていい？」
「あァよ。そりゃ単なる生存競争だろ。化け物が勝つか人間が勝つか。既存の魔法少女だって消えるワケじゃねェんだ、もう蘇生できなくなった体で、どっちが勝つか。魔力が消えたら湧きポも消えるンだ、化け物だって無限に生まれるワケじゃねェ。ならイーブンだ。だったらどっちの肩を持つことも無ェだろ」

「……確かに。貴女の言う通り」

あのな、俺が嫌ってンのァ粗末に扱われる死と、仲間が無駄に苦痛に喘ぎ、死に恐怖し、俺に殺しを懇願してくる事なンだよ。あと理不尽に一般人が死ぬ事もか。

知るかっつーの。危険を冒した一般人が化け物やら獣やらに襲われて死のうが、知るかってンだ。勝手にしやがれ。生きるために抗って、化け物が勝ったってだけじゃねェか。

ンなもん、俺に救いを求めンな。

「そりゃ全力で守るがよ。俺の大事な人達くらいァ。あと目に入って、あと会話して。そォいう事して、身内だって認識しちまった奴らァ守るがよ。なんでどーでもいい奴らまで心配しなきゃならねェ。知るか知るか。俺ァ博愛主義じゃねェんだ、自分で殺すのァちょいと心にクるんで嫌だが、勝手に死ぬ分にァ知らねェ知らねェ。勝手にやってくれ。俺の身内にならねェ内に、勝手に勝手なトコで死んでくれ」

ただ、その突然死するってな受け入れがたい。

それァつまり、俺の家族だの、煙草屋のおっちゃんだの、瀬尾奏だのが、ってことだろ。それァまだ受け入れられねェ。なんとかしてェ。

どうにか、どうにかできねェのか。
「……いや、そうか」
「お姉ちゃん？」
そうだ。
それがあったじゃねェか。
それこそ――迷宮で見つけた、俺の展望！
「紺碧ベルト。聞きたい事がある」
「何？」
「魔法少女の因子ってな、形あるモノか。それとも精神体にでも憑りついてるモンか」
「わからない。ただ、それを判別する魔法を持ってるのが仲間にいる」
「じゃァそいつならわかるってことだな」
「多分」
因子だ、ってンならよ。
切除しちまえばいいんだ。部分的な【即死】で――それこそ、医療的に。

それだ。
それがいい。
救済でなく、治療として。
「……よし、やる気が出てきた」
「？」
「梓お姉ちゃん？」
懇願されてるってなァ気に入らねェが、蘇生を願っての死じゃない――安寧を求めての死なら、受け入れる。それァ大丈夫だ。安楽死ァ、彼女も許してくれる。
だから、世界も魔力も殺してやれる。だが、その前に国の奴らの、俺の知ってる限りの奴らの因子を全部殺す。そうだ。それで全部解決だ。万事解決だ。
「とりあえず行くか、紺碧ベルトの記憶を取り返しに。その辺全部片づけて――そうさ。そうすりゃ、お嬢も、ポニテスリットも」
わかってくれるはずだ。
もう蘇れないンだってわかれば。もう、あンなトチ狂った事ァもう。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

52・実酸扉栖端出印倶・

「さっきから彷徨ってるよォに思うンだが、どうだいね？」
「否。もうずっとこの迷宮にいるから、庭のようなもの」
「もうずっとこの迷宮で彷徨ってるってな事とどォ違うンだ？」
「……屁理屈は嫌い」
迷ってンじゃねーか。
やべーな、終の因にァ地図があったからいーけど、これ真面目にマッピングしねェと永遠に彷徨いそォだ。なんせ、壁が続いてねェってーの？　孤立した壁があるから有名な左手の法則あるいは右手の法則が使えない。化け物ァいるが紺碧ベルトがなんだかんだ強い。精神体みてェなのァ化け物にァみえねェのか、遅い奴でも流体の奴でも簡単に刺さる。刺さって死んでいく。
何の魔法だかしらねェが、こえーこえー魔法だよ。
「しゃーねェな、紺碧ベルト。紙と筆かなんか持ってねェか？」
「使用用途は？」

「地図作ンだよ。亜空間ポケットになんぞ入ってねェのか？」
「画材ならある」
「へェ？　絵でも描くのか、普段」
「うん」
そう言って亜空間ポケットを開き、紺碧ベルトァスケッチブックみてェな紙束を取り出す。
そうして表紙を開き――。
「……なァ、紺碧ベルト」
「言わなくていい。どうやら私が記憶を奪われているのは本当らしい」
「だな」
そこに、地図が描いてあった。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

街の賑わいが近づいてくる。

ブゥリ曰くあの休憩ポイントの奥に魔法少女はいないとのことで、出口側に突き進んだ結果だ。いんやさ、ずっと彷徨ってたのがなンだってくらい一瞬で行けた。

つってもまァこの輝きの園も迷宮の一部。だってのに化け物が襲ってこねェのァ違和感バリバリなンだが、まァ俺がピリついても意味ァ無い。

さて、人捜しと……。

「あ、梓・ライラック様！　良かったです、見つかって」

「おォ、シエナ。あ、もしかして全部杞憂で俺だけ迷子か？」

「いえ、恐らく考えている事は全て正解かと。ハイドレート様、私の事を覚えていますか？」

「……？　ガーゴイル？」

「忘れているようですね……」

「おォシエナ。だいたい何があったかはわかるンだが、詳しく教えてくれ」

状況ァ把握してくれてるよォで何よりだ。

シエナの記憶ってな記録に近いから、魔法じゃ奪えなかったとかその辺りかね？

「突然、モーゲン・真凛様がその場にいた皆さまに魔法を使用、直後戦闘が起きか

けたのですが、ナリコ様が全員を式鬼で散り散りに飛ばすことで回避に成功。ナリコ様はなんらかの手法で記憶を取り戻し、現在モーゲン・真凛様を追跡中です」
「へェ」
「どうぞ、こちらです。ついてきてください！」
「【即死】」
「!?」
いんやさ、こォいうのって引っ張るのもアリかと思ったンだが、俺ァ仲間に扮されるってのがどォにも来るみてェでよ。ましてやシエナに入り込みやがって。
「な――に、を」
「馬鹿が。コト命の気配で俺に挑むたァアホが過ぎる。つか着物狐を様付けできる程割り切れねェだろシエナァよ」
「仲間じゃないの？」
「仲間のフリした化け物だァよ」
「そんなことより、今の魔法」
シエナの精神体ってなマッドチビの切り分けなンだよ。だからヒトっぽいンだ。

まァぽいだけでヒトじゃねェっぽいンだが、こんな化け物のそれたァ違う。
あァよ、俺の感覚ってなも段々と研ぎ澄まされてきたみてェでな、わかるンだ。命か、精神体か。なんだ、魂のカタチ、みてェなのがよ。熱源センサーみてェな感じ。
ぼやーっとだけどな。
はは。
ははは。
あァ？　なンだ、こんだけ楽しくなるってことァよ――コイツ。
「お前――非善（敵）だな？」
「ッ、く――」
「オイオイ逃げンなって」
慣れてねェのか、背面噴射機構を出さずに走って逃げよォとしたのを――掴む。首を、首根を。その――もっともっと奥を。ソイツにとって、何よりも大切な部分を――掴む。
「ァぁ、――やめ、」

「やめねェ。ハハ、馬鹿野郎が。俺の前に姿出しやがって。こンな平和なトコで、【即死】なんざ使わせんじゃねェよアホ」

「悲願を――」

殺す。

無理矢理入り込んだソイツを【即死】させる。

させた、瞬間。

「魔脳計算機再起動中。不正情報修正中……人格分割型戦闘用ガーゴイル・死得無（Ashes）、起動します」

「お、どこぞに行ってたってワケじゃねェのか」

「――完了。……あ、梓・ライラック様。おはようございます」

「……」

さて。

やっぱ許せそォにァ無いな。とっととそのモーゲン・真凛ってなに入ってる精神体殺すか。

「シエナ、クルメーナへの距離ってなどんくらいだ。最高速度で行ってよ」

「最高速度であれば1時間ほどですが、魔石燃料の効率を考えると2時間ほどかかります」
「そぉかい。……いいか、シエナ。お前さんァ今記憶を奪われてる。んで、今からお前の記憶を取り戻しに行く。疑問を挟まずに手伝ってくれると助かる」
「……了解いたしました。主ディミトラへの伝言は必要でしょうか？」
「不要だ」
勘だったが、やっぱりソコか。
そこまで奪われてンのか。
……ふぅ。
「梓お姉ちゃん、大丈夫？」
「あァよ。紺碧ベルト、【槌憶】ってなモーゲン・真凛って名前で合ってっか？」
「肯定する。けど、さっきの魔法は何？　何故夜の使徒が魔法を使える？」
「魔法少女だからだよ」
「……？　もしかして、生きてる？」
「あァよ」

あー、夜の使徒ってな知っといて、魔法少女だとァ思ってなかったのか。
死飛沫も魔力だと思ってたみてェだし。
「触ってもいい？」
「……殺す気じゃねェだろォな？」
「聖域に入らないのなら、別にしない。夜の使徒も輝きの園は受け入れる」
「そォかい。じゃァいいよ」
触られる。
頬に、肩に。火傷痕に。ペタペタと。
「……なんで？」
「なんでってな、なんだよ」
「夜の使徒は死者のはず。なんで生きてるの？」
……なるほどなァ。
創設者たちか。ちゃんと知識ァあるンだな。
「俺ァちょいと特別でね。夜の使徒で、人間で、魔法少女なンだ」
「……私の失った記憶に、それが出来るようになった世界があったのかな」

「俺以外のァ見てねェが、そォなンだろォよ」
肌ァ焼けても、腕失っても、生きてンだ。
ブゥリがぎゅっと手を握ってくる。……いんやさ、そォいう再認したあとに人形って感じちゃうのヤだな。まァ迷宮の上の方にいるのァわかんだけどよ。
「まァンなこたどーでもいいのさ。シエナ、……えーと、実ァ偽物じゃなかったマッドチビ先生……ディミトラの魔力反応ってなどこにある？」
「……南方にあります。周辺にガーゴイルの反応有」
「あァさ。じゃあ感じ取れる魔力の反応……あァ、街中にいる化け物ァ除いて、方向教えてくれ」
「了解しました」
シエナに周囲を見てもらってる間に、ちょいと頭を回す。
魔煙草吸って、はは、毒だって知ってもやめらんねェやな。
「紺碧ベルト」
「何」
「お前の魔法ってな、なンなンだ？　学園長殿含め、創設者たちの魔法ってな全

部ＳＳＳ級だって聞いた。けどお前のァ殲滅力ってモンを感じねェ。殺傷能力ァありそォだが、よくてＳかＳＳだろ」

「まずその判断基準がおかしい。魔法の等級区分は危険度によって定められる。命、精神、心の操作に纏ろう魔法はすべてＳＳＳ級と判断される」

「……なァるほど、そこもすら嘘か。で？　危険度ＳＳＳなお前の魔法ァ何なんだ」

【幽捐】という。私の魔力に触れたものから、問答無用に精神体を抜き出す魔法」

「ア？」

……なンだその、聞き覚えのありすぎる魔法ァ。

つか、なるほど。そりゃ【即死】の気配がするわけだ。こえーこえー魔法だよホントに。

「だが、お前ァ化け物じゃねェしなァ」

「当然。私は魔法少女。魔物じゃない」

最初ァ偽物なのかとも思ったンだが、ブゥリの本体から離れてより強く明確に感じられるよォになった魂のカタチみてェなのが、ちゃんとヒトの形してる。化け物

の精神体じゃァない。
　となるとこっちがオリジナルで……ルルゥ・ガルかマッドチビが何らかの方法でそれを真似た？
　そォ考えると【槌憶】ってなも怪しくねェか？　精神体を入れて記憶を馴染ませるってのも、それか？
「他の2人ァ？」
「？」
「創設者、この迷宮にいるもう2人。名前と魔法教えてくれ」
「ペルチット。魔法は【仙導】。多くに意思を伝え、多くの意思を感じ取り、導く魔法。ビーファン。魔法は【隠涜】。何をしても、どんな状態になっても誰からも気付かれず、またそれを他者にかけることのできる魔法」
　やっぱり、聞いたことあるモンばっかだ。
　ルルゥ・ガルがここに関わってンのァ間違いない。んでもって、創設者たちは何かされたのか、あるいはガッツリかかわってる可能性大、と。
「ブゥリ、迷宮の方にァ何も行ってねェんだよな？」

「うん！　今は誰も入れないようにしてあるから大丈夫！」
「ほぉか、ありがとよ。シエナァどぉだ、見つかったか？」
「はい。南方に主でない主ディミトラが、東方に２つの魔力反応、西方に魔物に似た魔力反応と、それに相対する形の魔力反応が１つ。こちらに向かって急速接近してくる魔力反応が１つ」
　レーテーを起動。【即死】を乗せていない、ただ強化しただけの剣で、それを弾く。
「剣士!?　夜の使徒が……そこのちっちゃい子！　すぐ離れて、コイツ危険だから！」
「嫌！」
「嫌とかいわないで!?　まさか、そういう能力!?　く、ちょっと危険だけど、ハイドレート、手伝って！」
「拒否する」
「なんで断るの!?　ああもう、そこのガーゴイルでもいいから、早くアイツを――」
「お断りします」

「ここに味方はいないの!?　じゃあもういい、今すぐ私が片付けてあげる！はァァアア！」

とか言って、拳にやべェ量の魔力込めてく魔法少女。マッドチビ先生に絡んでた奴だが、どっちだ。隠す方か導く方か。

――どっちでもねェな。知覚強化。剣で受けるのァ無理だ、折れちまう。ンで、回避を選択。不可能。拳圧だけで肌が裂ける。ちょっと危険どこじゃねェな、シエナとブゥリを巻き込みかねねェ。迎撃を選択。剣での受けに再変更。浸すは【即死】。けれど腕そのものじゃなく、纏ってる魔力を殺せ。

「――ッ!?」

ギリギリの所で止まる拳。【即死】の気配に気付いたか？

そのままバックステップして下がる魔法少女。つかよ。

「紺碧ベルト、輝きの園ァ夜の使徒も受け入れるんじゃなかったのか？」

「受け入れはするけど、人間と一緒に居たら普通驚く」

「まァ死者だもンな」

魔法ァ魔法で警戒する必要があるだろォが、この身体強化ァそれだけで厄介オブ

厄介だ。回避不能となると、剣で受けるしかねェ。
　なら【即死】を纏っておくのが正解か。相手ァ俺が殺したくねェって知らねェんだから、これでとりあえず落ち着いてくれるだろ。
　――と、思ったンだが。
「そっちが剣なら、こっちだって！」
「あァよ、弓ァズルくねェか？」
「【隠流】！」
「それもずりィなオイ！」
　コイツがビーファンなのァわかった。だが、なるほど、本来ァそォいう使い方か。消える弓矢――軌道もわかったモンじゃない。弾くにも見えなきゃ無理だ。今まで俺があってきたのと同じなら、足音や気配も全部消える。
　んじゃどォすっかって――そりゃ簡単だ。
「恵印滅後琉負不地思惟瑠徒小琉度噛無陽亜意味泥居合利意安堵泥伏炉異地思惟瑠徒盾のアイン・ハージャ今すぐここに来て盾を展開しなさい！」
「!?　世界言語!?」

止められる奴を呼べばいい。
わけもわからねェと言った様子で突っ走ってきて、わけもわからねェと言った様子で【静弱】を展開する赤スカーフ。追従してくるは青バンダナ。ははっ、呼ばずに来るたァ忠犬か？
「拳の威力が、完全に消えた……！」
「これは……ヴァルメージャの御業？」
「リジ、どうしたんだ。急に走り出して……」
「藍夢割朽麗・府悪露地韻止楽紫遠図恵印減後琉（いいからヴァルメージャたる私の指示に従いなさいアインハージャ）！」
「――承知！」
「わかった。ヴァルメージャの御心なれば」
んで以て――。
「ＴＥＫＩＴＡＩＳＨＡＷＯ ＨＩＫＩＴＳＵＲＥＴＥ ＫＯＫＯＭＡＤＥＫＯＩ」
「ヒノモトの構築式……夜の使徒のくせに、どんだけ博識なのよ！」
「生憎母国語が５種類もあるンでな。覚えたよ、流石に」

「どんな環境よそれ！」
　ごもっともで。
「ククク……式鬼の言葉で呼ばれてみれば、なんだ、愛い子がいるなぁ。吾の妻にならぬか？」
「あァよ、考えといてやるから、こっちへ来い着物狐」
「ククククッ、どうやら吾の欠落した記憶を埋める鍵のようだな、お主は」
「自覚してるよォで何より。んで、そっちのがペルチットだな」
「ふふ、まさか夜の使徒に会おうとはね。この国にはいない種の魔物だけでなく、夜の使徒もいるとなれば――研究も捗る、というもの」
「モーゲン・真凛ァいねェな。どこ行った？」
「！　モーゲンが狙いね！　絶対許さない！　ここで討滅するわ、夜の使徒！」
　さてはて、カオスになってきた。混沌になってきた。
　自分が招いたンだからそりゃそォだがよ、はは、こォなったら形振り構ってらンねェだろ。
「なァ――気付いてねェと思ったのかよ」

「!?」

掴む。

掴まれていた腕を掴み返す。護身術って奴さな。腕を捻って手首を曲げて、開いた隙間で相手の手を掴み返す。

よォ、散々逆鱗踏み抜いてくれやがって。

誰だァ、お前さん。

「この、小さい子に何を――！」

「お前さん、いつからブゥリじゃねェんだ。ケケ、いいぜ。そォいう騙し合いなら、こっちだって考えようがある。ヒヒヒ、ハハハハハ！　確かにな、人形だもんな！　入りやすかろゥよ！　だが、入っちまったら特性ってなが消えちまうのさ！　記憶奪われた連中ァブゥリの声聞こえねェらしいぜ――ハハハ！　んじゃお前誰だよ、つってなァ！」

反応したンだ。

ブゥリに、ビーファンァ反応した。それでもう、大体掴めた。明らかに命の気配増えたしな。こんだけ混戦になりゃ隠れられると思って止めなかったンだろォが、

ハハ、甘い、甘いんだ。それが通じるのァ普通の魔法少女にだけなンだわ。
「く――この場所で殺しなんてさせない！　ペルチット！」
「ええ、勿論。【仙導】――行きなさい、不可視なる攻撃」
「死ね」
ぶっ飛ばされた。
まァ指示のねェアインハージャじゃ反応ァできねェか。くく、透明の、バリバリに身体強化の乗った一撃だ。効くねェ――俺の【即死】のが速ェが。
「おー、おォ、ひでェ。ひでェな、オイ。てめェら偉いんだろ、魔法少女の、EDENの創設者なンだろ。だったら自分の問題ァ自分で解決しろよ。ヒヒ……はァ、あァ……なァ、着物狐。忌憚なき意見を頼むぜ。俺の右目ァ、どーなってるよ。真っ暗さ。クク、目ァ開いてるはずなンだがな」
「ククク、物の見事に潰れている。あれほどの威力を避けずに受けたのだ、当然であろうぞ」
「そォかい」
あっさりだねェ。

あっさりと、どんどん怪我をしていくねェ、俺ァ。
はは、お嬢らにも面目立たねェっつーの？　確かにその通りだよな、怪我してほしくねェって言ってる奴が、まるで自ら怪我しに行ってるみてェによ、はは――あァ、そりゃ、あんな凶行にも走る。
「――だが、死んだな」
「大丈夫!?　大丈……嘘、息してない！　どうしようペルチット、子供が、子供が――私達の目の前で殺されちゃった。……これは、流石に処罰すべき、だよね？」
「ふふ、そうですね。そも、あれなるは夜の使徒。これ以上殺した所で問題は無いでしょう」
「じゃあ――本気出して、本気で殴って良い、ってことだよね」
あァさ。
人格者だ、なんて思ってねェよ。創設者だからって尊敬ァしてねェさ。
だが――そォか。なンだ、魔法少女の迫害を止めるための楽園作りってェんでちったァ期待したンだがな。
お前もそっちじゃねェか、くだらねェ。

「次は、確実に頭蓋を潰す」
「ハ――ハハ！　なんだなんだ、ギャラリーも止めやしねぇたァ驚いた！　紺碧ベルト、状況ァわかってンだろ！　シエナもだ！　なんで、なんで止めねぇ？　今よ、罪なき一般人が殺されよォとしてるぜ――オイ」
「子供は宝石。殺す事はあり得ない」
「申し訳ありません、梓・ライラック様。私の知識庫にある梓・ライラック様は、死を忌避する方です。――そのように笑い声をあげて、小さな子供を殺すような方ではありませんので」
　あァ、そォかい。
　気付いてンのァ俺だけだったのか。ククク、紺碧ベルトァ気付いてるはずなのによ、よくもまァぬけぬけと。ま、あったばっかの夜の使徒より、長年過ごした仲間の方が信じられるってなそりゃそォだ。シエナも、クルメーナに向かう前までに記録が戻ってるってンならわかるよ。あれだろ、冷静メイドと問答してた時の俺だろ。
　そんならそォだろォよ。精神体殺すなんて事できるって知らねぇシエナなら、俺を偽物だって捉えるのもおかしかねぇ。

ははは！
なんだって俺ァ笑ってやがる。
「んじゃまァ――悲しいながら、逃げますかね」
――【即死】を浸した剣をぶん投げる。
触れただけで死ぬよォなそれだ。ちったァびびってくれると助かるンだが――
あァ、こりゃ無理そォで。
次の瞬間にァ拳が目の前にあって。
俺の顔面ァぶちっと――。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ククッ――吾は何かおかしくなっているらしい。見ず知らずの、しかし容姿に優れた女子を助けるとは。ククク、これは、なんだろうな。親近感か」
「助かったよ、着物狐。身代わりの術って奴だろ。前も使ってくれた」
「そうなのか。欠落した記憶……吾はそれを取り戻したい。どうだ、何が見える？

この国の何が見える？　その潰れた瞳で、吾の記憶を奪った者が――見えるか？」

「たりめーだろ。迷宮だ。迷宮の奥。上じゃねェ、下だ。街のどっかからか、地下に向かえる階段でもあるンだろォ。探してくれ、俺ァ止血でもしてみるからよ」

「ククク……よかろう。吾を足に使うとは、ククク、剛毅な娘子ぞ。名を聞いておこうか」

「梓だ。梓・ライラック」

「梓。――死ぬなよ。お主が死んだら、吾は悲しい」

「今あったばっかなのにか？」

「ククククッ――さて」

久方ぶりの止血ポーションだ。

それを――目薬差すみてェに、潰された右目に垂らす。

「カ――」

言葉は出ない。音しか出ない。

痛いとか、熱いとか、苦しいとか。

そォいうの通り越して――死が映る。脳裏に、失った眼球に、死神が見える。
「い――ってェなァ、オイ!!」
「ククク……後ろ、妖が追いかけてきているな。吾が対処するか、お主が対処するか。どっちがいい？」
「俺がやるよ。着物狐ァ地下への階段探しに式鬼を放ってくれや。はン、飼い慣らされてる化け物でも、化け物ァ化け物でよ。どんだけ可愛がられてても、どんだけ愛されてても――殺せるってなモンさ」
剣ァ捨てちまったンで、両手を皿みたいにして、そこに【即死】を浸していく。
「ほらよ、走って喉渇いただろ。――死んでくれ」
飛沫を撒く。
そろそろ俺ァ遠隔名乗れるンじゃねェかね。着物狐の走力ありきたァいえ――この範囲を殲滅できンだから。
ふと、前方に石造りの井戸を発見。まァ石造り以外の井戸ってな見た事ねェんだけど。
「ククク、あの井戸、深いぞ」

「んじゃそれだ。飛び込んでくれ」
「即答か。気に入った」
着物狐が俺を抱えたまま、井戸へ飛び降りる。
飛び降りて――びちゃっと着地した。
「ここは……井戸の役割も果たしているようだが」
「あァ、地下通路っぽいな。つまりアタリさ」
「ククク、何故分かった？」
「違ったら他を探す予定だったよ」
「ククククッ、当てずっぽうか。良い良い、気に入ったぞ」
着物狐の背中から降りる。
ふらつく身体。
あー。
「片側が見えねェってだけで、こォも距離感を失うのか」
「……もし、お主が吾を信用できるのなら」
「するよ。んで、何してくれンだ？」

「ク……ククク。良い良い。やはりお主は吾の妻に相応しい。ほら、これをやろうぞ。吾の国で使われていた鎮痛作用のある丸薬だ」

「へェ！　ありがてェ」

その、真っ黒い粒。暗い通路なンで余計に真っ黒いそれを、躊躇なく飲む。こォいうのって多分噛んじゃいけねェよな、ってんでゴクンといったが、それァ間違いだったよォで。

「……世話のかかる娘子よ」

「ん……ぶ、ん、ぅ」

着物狐がキスをしてきた。

また魅了の類かって苦しみながら身構えたら――その、あんましこォいうのどォかと思うンだけど……唾液を流し込んでくる。

けど、そのおかげで飲み込めた。

コイツ、なんだってこんなアダルトなことばっかすンだ。おじさん誘惑しすぎだろ、記憶失ってンじゃねェのかよ。

「ぷ、っは……あァ、助かった」

「良い。だが……吾の接吻は他者を惑わす力を持つ事がある。ククク、精々気を付けろ。吾はどうにも、不可思議な力を持つようでな」
「あァその辺も忘れてンのか。丁度いい、歩きながらでいいから、お前がどこまで覚えてンのか確認したい」
「どこまで、と言われてもな。吾にとっては突然見知らぬ場所にいて、突然見知らぬものを持っていて、突然大きな喪失感に襲われたがために記憶の欠落を察したというだけで、どこまでからここまでなのかはわからぬのだ」
「いいよ、覚えてる限りで。着物狐。アンタがナリコって名前なのァ知ってる。それで、記憶の終わりァなんだ？」
「ふむ」
ふらつく身体の微調整と距離感の修正を行いながら、暗い通路を歩いていく。苔のせいでぬかるんでるところも多いし、こりゃ長いコト使われてねェんだろォなって感じ。
火をつける魔法でもありゃよかったンだが……とか思ってたら、着物狐が人魂を創り出して、浮かせてくれた。青白いが提灯代わりだ。つか、その辺ァ覚えてンの

かね。

「吾は、殿と最後の会話を交わした。そうして殿は眠り――妖へと変貌する御方に、一つの封印をかけて、吾はそこから逃げ果せた、はずだ。その逃走中に、気付けばこの地にいた。これを記憶の欠落であると疑わぬ余地は無いだろう？」

「……待て待て、色々情報がこんがらがってる。整理させてくれ」

「良い良い。お主が何を知っているのかはわからないが、吾はお主をどうにも信頼しているらしいからの」

記憶のある頃の着物狐の話じゃ、殿ってなァ独りでに化け物になったって話だったけど、どォやら違うらしい。その直後の着物狐にァそれを隠す気がなくて、現在の着物狐ァ隠してるってのもミソだな。

封印ってなが気になる。そもそも式鬼だのなンだのァわからねェんだ、聞いてみるか。

「その封印ってな、どんなんだ。その地に縛り付けるとか、色々あンだろ」

「ほう？　ヒノモトの出身者でも無さそうだが、知識はあるらしい。そういえば式鬼の言葉を扱っていたな」

「ちょいと博識なンだよ。で、どぉいうのだ？」
「お主の言う通りのもので正解だ。殿をヒノモトへと縛り付ける封印。決して外部に出すことなく――あの子を常に見守る事ができるように」
「ほぉか」
だが、あの地にカンコウァいなかった。
やっぱり連れ去られた説ァ濃厚だな。同時に記憶持ってる方の着物狐がなんか結構重要なことを隠してンのも。
ま、それについちゃァ良い。俺だって隠しまくって隠しまくって挙句のコレだ。他人のこととやかく言えたクチじゃねェのさ。
「なんで殿ァ化け物になった？　カンコウだったか、神さんが如き化け物」
「カンコウ……クク、なるほど。そう名付けたのか。して、何故妖になったのか、という話だが、簡単だ。殿にも妖が混じっていた。その覚醒は吾よりも早く――しかし妖気を完全に断たれたあの城では、殿はその妖の力に呑まれるしかなかった。ただそれだけぞ」
「……魔法少女化か！」

似た話をさっき聞いたばっかりだ。
魔力が無い世界になったら、魔法少女の因子ァその覚醒時に精神を食う。魔力が流れていりゃァそのまま魔法少女になれるが、いなけりゃ精神を食われて魔法になっちまう。
魔法になっちまえば、火になったり氷になったり爆発したりする。
なら——強大な力を繰る化け物にも、なる。
魔力の流れの淀みから生まれるのがディケントやイオルーなら、魔力の無い所で生まれるのがオリジンって事か？
「まほーしょうじょ、とな？」
「あァ、そォいうのがいんのさ、世界にァ。お前みたいに元から化け物……妖が混じってたってだけじゃなく、もっと不思議な力に目覚める奴らがな」
「……クク、先程の者達や、お主もそうか」
「あァよ」
地下水路ァ段々と下り坂っつーか階段になってきた。
あァ、どォにも覚えがあると思えば、そォか、ここも迷宮の一部だもンな。

終の因の構造に、よく似てやがる。
「聞くが、お主」
「なンだ」
「カネミツ、と名乗る少女に会わなかったか？」
「ン？　お前らの姫だろ？　知ってるよ」
「姫？　ク ク、カネミツが、か？」
「違ェのか」
これァ――どォも。
忍者共も信用しきれねェが、着物狐もかなり、かね。
まァ良いんだが。
「カネミツは吾ら侍衆の頭領よ。あ奴の人となりを少しでも知っているのなら、姫だ、などとは思わぬと思うのだがなぁ」
「あァよ、あんな姫がいて堪るか、って思ってたよ、ずっと」
「ククッ！　今度伝えておこう。吾が記憶を取り戻してから、だが」
「……ま、伝えられると良いな。で、なンだってそれを聞いたンだ？」

「ク――数日前のことだ。カネミツは自身がまほーしょうじょになった、などとほざいて、その姿を消した。もしや関連があるのでは、と思ったまでだ」

「……」

おいおい。

もしかして――コイツさ、あの幽霊屋敷で俺達に語った事。

ぜーんぶ、嘘か？

53・夏油是夢〕舞頬伏・

ちゃぷちゃぷと水音が響く。
なんつーかなァ。まァ良いんだよ、別に。けどなんだかなァって。
「ククク、どうやらお主の知る吾は、幾つもの嘘を吐いていたようだな」
「あァ透けたか」
「そうも目に見えて落ち込まれたら、誰でも気付くというものぞ」
「片目が見えねェんでね、気付かなかったよ」
魔煙草を取り出して、吸う。
どこまでが本当で、どっからが嘘か。
少なくとも口ぶりからして、カンコウを……生前の殿を想ってたのァ間違いなさそうだし。あの子、とか言ってたあたり、結構懇意だったンじゃねェかな。
それが目の前で化け物になってよ、それを隠して……自分も魔法少女になって。
化け物作って、たった3人で生きて、忍者共と戦って。
絶対なんか、隠してて。

絶対なんぞ、寂しがってンだろ。あァそォか、俺にああも優しくしてきたのァ——自分を見てるみてェだったから、か？

はは、傷のなめ合い上等ってな。

記憶を取り戻したら、散々に問い詰めてやらァよ。

「そろそろ、着きそォだな」

「ク——どこに、だ？」

「本来の入り口だよ。迷宮、始の点の入り口。一切化け物がいねェってなちと気になるが——終の因に似た構造なら、そろそろ入り口だ。入り口で、出口で——お前らの記憶を奪ったやつのいる所」

「そうか。だが、気を付けると良いぞ？　後方より足音が複数。前方には、何やら妖の気配が複数がある」

「ま、自陣を固めてねェはずねェからな」

さァ、ご対面といこう。

後ろから味方にどつかれる前に、ぶっ潰してやらァよ。

——知覚強化。転がって——否、否、否。それはダメだ。身体にそれ以上ソレを

付けるな！
「うっ!?」
「へぇ、面白い鉱石を使っているのね。ちょっと全部見せなさいよ」
「【即死】！」
「あら？」
いた。
さっきシエナに絡んでたやつと――マッドチビ先生だ。
その周囲に、数多のガーゴイルを従えて――いた。
足元にァ【鉱水】。今【即死】でぶった切ったが、義手の指も持ってかれちまった。
なンだなンだ、最近ァ頼りになるが、根っこのトコじゃポンコツなマッドチビ先生ァどこ行った。
なンだ――この範囲ァ。
この、恐怖ァ。
「よくこの場所がわかったね！　ナリコちゃんと……えっと、君誰？」

「俺ァしがない魔法少女の１人さ。夜の使徒、でもいいぜ」
「嘘だぁ。だって君死者じゃないじゃん！　ま、なんでもいいや！　――大人しく材料になってね♪」
ざばァと。
始の点の基底部。五角形の底辺。そこに浸された――あり得ねェ量の【鉱水】が、一斉に立ち上がる――。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えけ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

レーテーを起動。取り出すのァ【即死】の弾丸。もうそろ在庫が切れるが、そォも言ってらンねェ状況ってなあるだろ？　今がそうさ。なァ
「包み込め！」
「死ね――」
いつぞやの火山の時みてェに俺達を包もうとした銀の液体を【即死】させる。たった１発の弾丸で十分だ。ガーゴイルじゃねェ【鉱水】ァ全部繋がってる。槍とか

になってなけりゃ、だがな。
　突然力を失ってビシャリビシャリと落ちた【鉱水】に、あァ、これが目に見えてわかるって奴か？
「な――何よソレ！　今何したのよ、私の【鉱水】の力を奪った!?　違う、そんなのじゃない――」
「はは、なンだよマッドチビ先生。その程度で天才彫金師名乗ってンのか？　ケケ、この分じゃ、クルメーナってのも大したこと無さそォだなァ？」
「え、何でアンタが私の一大計画の名前知ってるのよ！　というかアンタ誰よ！　それに何よマッドチビ先生って――馬鹿にして!!」
「はン、何言ってやがる。マッドでちびだからマッドチビっつってンだよ。なァマッドチビ先生。やーいちび、ちび、ちびっこ～」
「――殺す」
　よし、完全に俺しか目に入ってねェな。
　正直着物狐を守りながら、ってな今の俺にァキツい。良い所で帰らせたかったが、後ろからも追撃が来てるンじゃァ仕方ねェ。

※ NUSHIHA CHINOSAGUME INOORITO TETSUWO KURAITE TACHIAGARE KAKONITAORESHI MUNEN NOBOUREI ※

着物狐が紙にそれを書き込む。

そしてそれを【鉱水】の海に落とすと――。

「クク、どうやら吾とお主は相性が良いらしい。これほどの金属――吾の式鬼に使わせてもらおう。何ゆえかは知らぬが、式鬼の制御権が数百に増えているのでな、ククク、あの時もこれだけあれば、殿をどうにかできたやもしれんというのに――あぁ、口惜しい事だ」

組みあがる。

鉄で出来た、鎧武者。鉄だけじゃねェ、【鉱水】に溶けた金属から、次々と鎧武者が現れる。忍者との毒が云々ァ本当なのか。全く、何が嘘でどれが本当なんだか。

まァ今ァありがてェ。

まさに、だ。まさに――。

「百鬼夜行だなァ、オイ」

「ククク、本当に博識ぞな。良い良い。だが――百では済まさぬぞ？」

増える。増える増える増える増える増える――。

マッドチビ先生のガーゴイルが、少なく見える程。

このフロア一帯を満たす、鎧武者の群れ。

そのどれもが恨みを、怨念を――否、違う。これは。

「無念、無念か。……どうやら、吾の失った記憶に、余程の喪失があったのだろうな」

「あァよ。でも、全員がアンタに託したンだ。使ってやれよ」

「ククク――無論だ」

鎧武者が。いんやさ、侍衆が、雄叫びを上げる。喊声って奴だ。はは、いいね。いいね。

仲間失ってよ、仲間に殺されかけてよ、ははは、いいね。色々キてたンだが――俺のじゃねェたァいえ、こんだけ仲間がいるってな、気持ちがいい。

んでもって、こいつら全員死者なンだろ？　じゃァ非善でもねェ。マジのお仲間だ。化け物でも式鬼でもねェ、この怨念ァ、無念ァ――生きるために抗って、け

れど成せず、死んでいった者達の念だ！

なら、なら、なら！

「鳥有為預！侠示威頭碑引例渋湯上武烈震倶？」

――≪負不漉≫

日本神道じゃ氏神になっちまうモンだが、いいね、こっちの世界ァちゃんと死後に行けるらしい。無念を、恨みを、苦しみを。

安寧の世界へ持っていけると来た。

それなら、俺も役割ってなが果たせるってモンだ。

「わー、世界言語だ。凄い、喋れる人久しぶりに見たかも。ならなら～、こっちも！」

「ア？」

「微止長､絵鰤湾初琉大､其絵鰤湾初琉微止長･」

マッドチビ先生のガーゴイル達が、そちらもまた叫びを上げる。いや、ガーゴイル達だけじゃねェ。よくわからねェ精神体もいる。あっちァ完全な化け物だ。その精神に至るまで、全部化け物だ。プテラゴイルやＬＯＧＯＳがいなかったのァ幸い

かね。

あァ、まァ、なンだ。

いいぜ、全面戦争と行こうじゃねェか。あのモーゲン・真凛とかいうのに入ってる奴が何なのかもわかったしな。

「着物狐、こいつらの指揮ァ俺がしてもいいか」

「ククッ、吾は構わぬが、式鬼がいう事を聞くかどうかは――」

「ＮＪＡＩＫＵＺＯＴＥＭＥＲＡ ＴＥＫＩＨＡＢＡＫＥＭＯＮ ＫＯＣＣＨＩＨＡＳＩＲＹＯＵ ＷＡＫＡＲＵＫＡ ＡＩＴＥＮＩＴＯＴＴＥＦＵＳＯＫＵＮＡＳＨＩＴＴＥＹＡＴＳＵＤＡ　！」

オオオオッ！　と。

喊声が上がる。はは、そうさ。どっちもどっちなら、どっちがつえーかの勝負ってこった。

ハハハハハ！　いいね、気分がいい。んじゃここで魔煙草を１つ。ククク、こんなトコで大義名分背負えるたァ思ってなかった。

こんな所で――はは、だったら、名乗りも変えるか。この世界のものじゃねェ名

前で、アイツをぶっ潰してやらァよ。
「――あァ、改めて。俺ァアンディスガルってンだ。今だけァそっちで名乗らせてもらうよ」
「さっきから、意味の分からない事言ってんじゃないわよ！　貫きなさい！」
「オオオオア！」
叩っ切られる。石の槍。鉱石の槍。
それが、単なる刀一本に切り裂かれ、力を失う。
「嘘!?」
「気を付けてね～、ディミトラ。あれ、全部が夜の使徒だよ。全部が――死を纏ってる」
「夜の使徒って何なのよ！　私知らないんだけど！」
「あれ。そこまで奪っちゃったか。えーとね、夜の使徒っていうのは～」
マッドチビ先生もチビだが、モーゲン・真凛もチビだ。
チビ同士仲良く話してるとこ悪ィが――ハハ、今の俺ァ普段の俺程臆病じゃねェんだわ。誰もいねェ今なら。事情を知ってる奴らしかいねェ今なら。言ってもいい

はずだ。マッドチビ先生ァまァ、知ってる事を期待している。知らなかったらすまねェな、うん。

「夜の使徒ってなよ、死んだ奴らの事さ。ハハハ！　続くだァ？　廻るだァ？　馬鹿抜かしてンじゃねェよ、死んだら全員終わりさ！　こんな、この世に縛り付けられて、可哀想だろォが！　死後の世界で！　安寧の世界で！　冥界で!!　水先を案内してやンのが夜の使徒ってな！」

「……っ」

「もしかして、こわいの？　大丈夫だよ、ディミトラ。魔法少女はね、太陽の使徒だから。何度沈んでも、また昇る。それに今は、風の使徒である魔物もいっぱいいるでしょ？　世界を巡る、廻り続ける風の使徒。吹けば吹く程強くなって、最後には嵐になるの。ね？　夜の使徒なんかに負ける私達じゃないんだよ！」

「……行きなさい！　私の最強のガーゴイル軍団！　そしてアイツらを殺しなさい！」

――脚部強化。知覚強化ァいらねェ、踏み込め。ガーゴイルの背を踏め。俺に向かう攻撃ァ全部鎧武者たちが防いでくれる。着物狐が見ててくれる。

だから、安心して突っ込め。
笑え。笑って突っ込め。
魔力が切れたら吸えばいい。食えばいい。――飲めばいい。
世界の外の魔力を。
俺の世界の魔力を！
「貫け、貫け、潰せ包め切り裂け殺せ！」
「あァよ、だったら死ね！　怖いか！　怖がってンなァマッドチビ先生！　はは、それでいい！　生きるために抗え！　生きたいと願え！　ならばそれは、俺が相手をするべき対象だ！」
「コイツ、どういう身体能力してんのよ！　自分を攻撃するガーゴイルを足場にするとか、正気の沙汰じゃ……」
「ディミトラ、落ち着いて。ガーゴイルなんて形にしてるからダメなんだよ。【鉱水】はもっと色んな使い方のできる魔法。そうでしょ？」
「――解けて、波となれ！」
「そりゃ殺すがよ」

魔煙草じゃ足りねェ。フリューリ草を食う。むしゃむしゃと食う。あァ、いい味だ。クソ不味い味が口に広がって、思考がスッキリと純化されていく。

容赦してくれ、勘弁してくれ。はは、そうさ。お飾りB級、お飾りA級。はは！　なンだ、魔法少女の等級区分が、本来ァ危険度だっていうンなら――じゃァそうさ！

俺ァ、SSSだ。文句なしの過激派だからな！

「だ、ダメ！　どうしようモーゲン、コイツの魔法、わかんない！」

「んー、じゃあ相手から使い方を奪ってみよっか！」

「それも殺すよ。ハハハ、お前らの魔法ァ見やすいな。紺碧ベルトもそォだったが、見えてるぜ、魔力が」

「あ、あれー？　……もしかして、私達危機的状況？」

「ちげェなァ。私達、じゃねェ。お前だけだ。よォ――天使。風の天使。久しぶりだな。やっぱり迷宮内部じゃねェと存在できねェか。ま、そりゃそォだ。だってよ、天使ってな――目的がなきゃ、役割が無きゃ、存在してさえいられねェ。いつまでもいてェよな、世界にいてェよな！　だがそォさせてくれねェ。他ならぬ自

分の神が、それを許さねェ！」

後方で爆発音。

多分、到着したンだ。アレらが。

けどまァ、そっちァ任せるぞ、侍衆。ってな。

「んじゃまァ、外法を使うしかねェよな。太陽の使徒の中に入って――まるで太陽の使徒のフリをすれば、この世で生きてられる！　――ンなルール違反、俺が許すかよ」

「な、何言ってるのかわかんないな～……あ、ビーファン！　ペルチット！　ハイドレートも！　助けて助けて～！　夜の使徒に襲われてるの！」

「わかってる！　――最大出力でぶん殴るから、とっとと離れて！」

ビーファン。【隠涜】だったか。透明にする魔法だ。だが、ンなチャチな事より、本人の魔力がデカすぎる。近接魔法でもねェだろォに、莫大な魔力量で身体強化してぶん殴って終わらせるタイプだ、ありゃ。脳筋も脳筋、俺と最も相性の悪い魔法少女。

殺せねェんだ、防御もしようがねェ。

が。

「ＳＵＭＡＮＡＩＧＡＴＡＮＯＮＤＥＩＩＫＡＭＯＵＪＡＮＯＴＯＭＯＹＯ！」

「オオオオオ!!」

止める。

脳筋娘の拳を、３人がかりで止める。ハッ、あの規模の拳をたった３人で止められンだ、すげェよお前ら。尊敬する。

「おやおや、夜の使徒が、私の真似事ですか？　――なら、これでどうでしょう。

【仙導】――さぁさ皆さん、敵はあそこにいますよ！　小さな子に手を出して、殺してしまった夜の使徒！　この平和な輝きの園に争いを齎す敵対存在!!」

「【喧槍】」

「【静弱】」

「藍　夢　割　朽　麗！　府悪露地韻止楽紫遠図！　恵印減後琉！」

「――う」

「これ、は」

あいつらにァ悪いが、混乱しといてもらう。余計な戦力ァ削いでおかねェとな。
「紺碧ベルト！　お前、まだ俺の事疑ってンのか！　それとも――」
「否定する。既に計算済み」
「あァよ、だったらマッドチビ先生のガーゴイルァ任せていいか！　俺ァこっちのパッパラメガネを相手にしねェといけねェんでな！」
「も、もしかしてパッパラメガネって私のこと～？」
「ハハハ！　他に誰がいるよ！　おォい着物狐！　そっちのびりびりタイツァ任せたぞ！」
「クク、お主、珍妙なあだ名しかつけられないのか――良い良い。着物狐というあだ名も、既にしっくり来ている」
「おやおや、あまり他人の身体的特徴や姿形を揶揄するものではないですよ？」
「馬鹿が、馬鹿にされたくねェならちったァマトモな格好しやがれ。魔法少女の衣装なンだろォが、それァ流石に自分で破いてンだろ」
「さて、どうでしょうね？」
余裕ぶりやがる。

まァあっちァいいんだ。一番気になるのァシエナの位置だが……いねェな。おっかけて来なかったのか？

「あ、あれー？　ハイドレート、なんでそんな目で私を見てるんですか？」

「くだらない茶番は終わりにして。私の記憶、返して。じゃないと――その精神、抜く」

「ひぃ――怖い怖い！　じゃあ、もっと記憶を奪って赤ちゃんにしてあげます！」

「あァよ盛り上がってるとこ悪いが紺碧ベルトァガーゴイルを相手にしてくれ！」

「わかった」

物分かりの良い奴でホント助かるな！

んじゃまァ、本領発揮と行こうかね。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「さァて、よォ。ちょいとお話と行こうぜ。こんだけ戦闘が激しけりゃ、聞こえるモンも聞こえねェさ」

「さっきから何のこと言ってるの～？　私、天使なんかじゃないよ～？」
「あァ良いって良いって。お前に話してンじゃねェんだよ混ざっちまっただけの仮人格。ハハ、出てこいよ、天使。アンゲルでもいいぞ。あの時ァほとんど思い出せてなかったが、あァよ、一回里帰りしたら全部わかったわ」
「……エ――ァ」
ぐりん、と。
パッパラメガネが目を剥く。
口を半開きに、ぱたりと倒れて――その口から半透明の何かが出てくる。白目剥いた少女からンなもんが出てくンのァホラーオブホラーなンだが、まァ俺も半ばホラーな存在だしな。別に怖かねェよ。
んで、半透明のそれは。
ぐじゅり、ぐじゅりと音を立てて――カタチになる。カタチを作る。形成する。
白い翼。鋼のような胴体。手に持つ槍は鋭く長く、その眼孔は何を映す事もない。荘厳な装飾の施された盾と、目に見える程に圧縮された魔力。それらは光球と天輪を召し上げ――この階層を、強く照らす。

強く強く。暗い基底部を、強く強く、広いこの階層を――照らす。
「え、何!?　――アンゲル!?」
「……！　危険、離れて！」
「ク……なんだ、あれは。荘厳だが――あまりに、虚ろ」
ありゃ、こんだけ騒いでりゃ気付かれないと思ったンだがな。
馬鹿が、光り出し過ぎだよ。全員気付いちまったじゃねェか。
「理単戸滅琉（冥界に帰れ、彼女の使徒よ）葉阿歩止琉・」
「ハハハハハ！　よォやくお出ましだな！　馬鹿が、簡単に自分を奪われやがって、簡単に操られやがって！　簡単に、役割を忘れやがったな！」
「泥椅子伊豆能登湯上伏零須（ここはお前の場所ではない）・」
「あァ、だがてめェの場所でもねェんだよ。お前、自分がどこにいるかわかってっか、ア？」
「……歪編無藍陽阿（ここはどこだ）」
「始の点の入り口だよ。てめェのいるべきァ、頂点だろォが。アードゥムラを守るのがてめェの役割だ。違うか」

「歪同有脳地眠(何故その名を知っている)・」
「会ってきたからだよ。なァ、どうする。てめェが元の役割に戻るってンなら、俺ァてめェを殺さねェ。それァ抗いじゃねェからな。だが、このまま続けるというのなら――」
「懐羅離(当然だが、すぐに帰る)・藍初琉理単・」
「え」
エ。
あ、あら。
あれ。
そこァ「当然――貴様を討滅する！」じゃねェのかよ。
天使の身体が消えて行く。方向ァ、ブゥリたちのいる所。上。
えー。
え。
えー？
「とんだ肩透かしなンだが」

「殺したの？」
「いんや、帰った。なァよ、紺碧ベルト。【幽拐】で精神体を奪った場合ってな、それァどこにストックされるンだ？」
「私」
「あァ、なンだ。たとえばお前以外が【幽拐】を使えたとして、で考えてくれや」
「？　魔法は１人１つ。共有は不可能。誰かが私の魔法を使う事も、私の魔法を誰かが使うことも不可能」
「そりゃ知ってるンだが、そォいう事が起きてンだよ」
「……それは大変」
「あァ大変なンだ」
さて、どォするか。
実ァ問題なのァそっちでな。どォやってパッパラメガネの精神体を取り返すか、なンだが――お。
「梓・ライラック様！」
「よォシエナ。本物か？」

「はい！　記録庫に欠損が見られたため、常に複製保存している補助の記録庫から記録を読込、上書を実行いたしました！　クルメーナの後からは勿論、ＬＯＧＯＳでのすべても覚えています！」

「バックアップデータとっとく機能とか、あっちのマッドチビァどんだけ天才なんだよ」

「？」

ちょいと末恐ろしくなる。

だってこの世界、携帯電話すらないんだぜ？　魔力を用いた通信端末ァあるけどさ、それだってＥＤＥＮにしかない奴で。

独力で、【鉱水】だって使えねェはずのあっちのマッドチビ先生が、そこまでの事してのけるってな。

マジの天才だよ。正直マッドチビ先生よりも……。

「何があったのかよくわからないけど――とりあえずぶん殴る！　それで解決！」

「シエナ、そんなはりきってるってこたよ」

「はい！　今度こそお役に立てそうです！　見つけました、モーゲン・真凛様の

精神体！」
「助かる。んじゃ俺を運んで連れてってくれるか？」
「了解いたしました！」
シエナが俺を掴む。そんで――飛ぶ。あァこれだ。これさ。
「飛んだ!?　ならこっちも！」
「ククク――なんだ、知らぬのか？　亡者とは足を引っ張るものぞ」
「この、何よこのガーゴイル！　群がってきて、あ、ちょっと、変なトコ触らないで！」
「【仙導】――追いなさい、アインハージャ達」
「うむ。あまり、容易く私達を扱う事ができると思われるのも困るな」
「ウィジ。あんなのより、早くベルウェークを倒さないと」
「ベルウェークァもう死んだよ！　俺が殺した！」
「そうなのか？　ならば、貴女はヴァルメージャか」
「ウィジ。さっきそう言っていた」
飛ぶ。

迷宮の深部に向かって行く。まァ入り口ァどォにも地面に埋まってるみてェだからな。

シエナの見つけた精神体とやらの所まで――ひとっとびさ。

「こら、待ちなさい！　あ、ちょっとやめて、ぶっ飛ばすわよ！」

「ククク……ほれほれ、ここがええんか、ここがええんか」

「あ、ヤダッ、ちょ、ちょっと、あ、あっ！」

……なんか艶やかな声ァ聞かなかった事にして。

俺達は、猛スピードで迷宮を駆け上る――。

「いました！　あれです！」

「もォ面倒だからよ、投げてくれねェか？」

「え？」

「いやよ、あの頭見たらムカついてきた。あんまり変な事考えると読まれるしな。だから、ぶん投げてくれ」

「――大丈夫、ですか？」

「あァよ。大丈夫だ」
「……ふふっ、じゃあ、わかりました！　その大丈夫じゃない大丈夫――信じて、投擲します！」
輝きの園の端っこ。余裕そぉな顔で座る、青毛の少女。確かお嬢の話じゃ魔法少女じゃねェんだったか。もう知らねェけどさ。
ぐ、と。身が引かれる。上がる。持ちあがる。
そんで――。
「使う機会が一切なく、何故これを付けたのかと主ディミトラに問いたい日々が続きましたが――まさかこのためだったとは！　腕部噴出機構解放！　実包装填３、排出、３!!　背面噴射機構と連動し――最大加速を実現。命名、梓・ライラック様砲!!　発射します!!」
なンか不穏な言葉がいーっぱい聞こえて。
いやそこまでしなくても、とか。色々言う暇もなく。
俺ァぶん投げられた。
ぶん投げられて。

「よォ、死ね！」
「えっ――お、ぶ!?」
ルルゥ・ガルのその腹に――突き刺さった。

遠《ｔｅｘｔ:s1·2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

54・頼符得玖珠天紫遠・

「さァ吐け、今すぐに吐け。パッパラメガネの精神体を吐け！」
「ちょ、待って、揺らさないで、吐いちゃうから、揺らさないで」
「吐けっつってンだよ！」
「だから待ってってば！！！」
ぶっ飛ばされた。
空中でシエナにキャッチされる。
コイツ、まだ隠し玉あンのか。クソ、完全に掴んでたのに離されたな。よし、もう一回。
「まったく……これだから野蛮人は。なんか騒ぎを起こしてたみたいだけど、だめよ。ここは輝きの園。争いごとはご法度なんだから。わかった？」
「はァ？　元ァてめェが仕掛けた事だろォが。いいからとっとパッパラメガネの精神体返せよ。また両手足ぶっ殺すぞ」
「……？　なんの話してるの？　精神体？　パッパラメガネってだぁれ？」

「モーゲン・真凛。ＥＤＥＮの創設者の１人だよ」
「あー。ちょっと待ってね、今探すから」
言って。
ルルゥ・ガルは、どこぞの青狸を彷彿とさせる仕草をしながら、あれでもないこれでもないとぶつぶつ呟き始めた。なンだ、集めた精神体ってな腹にでも入ってンのか？
……つか、隙だらけだな。魔法少女じゃねェ、精神体ってな、なるほど、こォやってゆっくり観察する確かにそォだ。そォっぽい。
殺すか――？
「えーと。はいこれね。モーゲン・真凛の精神体。これでいいかしら？　返したけど、見える？」
「え。あー。お、おゥ。見えるが、これどォやって持つんだ」
「大丈夫大丈夫、勝手に引っ付くから。じゃ、用件はもう無いわね？　けほ、あーもう、やっぱり胃とか内臓って要らないんじゃないかしら。あっても良いことないんだけど」

「……攻撃、してこねェのか？」
「してきたのそっちでしょー？」
「いやまァそォなンだがよ」
調子狂うなオイ。
なんだこのローテンションなルルゥ・ガルァ。こいつこそ偽物なンじゃねェのか？
「何、まだ何かあるのかしら。もしかして、お姉さんときもちーことしたくなった？」
「いやもちっと大人になってから言えちびっこ」
「はいはい。いつもならその煽りに乗ってあげられるんだけど、ここじゃ無理だから、外でやろうねー野蛮人」
「なンだよ。ここァ特別なのか？」
「当たり前じゃない。始の点は私達の聖地よ。たしかにちょっと出来心で精神体のつまみ食いはしたけど、貴女が来てるならそんなことしなかったわ。絶対面倒事になるもの」

「俺が来てるからやったワケじゃねェのか」
「なんで私が貴女に合わせないといけないのかしら。あぁまぁ最初の邂逅とかクルメーナでは露骨に罠を仕掛けたけど、私も暇じゃないのよ、野蛮人」
「疑うにァ十分なンだよ」
とりあえず戦う気ァ無いらしい。
そォいや狼も烏も引き連れてねェな。
「いつもの取り巻きァ？」
「取り巻き？」
「ウルフ種だよ。噂じゃレーヴァン種もいるらしいが」
「ああ、休暇中よ、みんな。輝きの園はすべての魔物が安心して羽を伸ばせる場所だもの。見ての通り、私も休暇中。だから視界から消えてくれるかしら野蛮人」
「……あァ、そりゃいいんだがよ。いっこ聞かせてくれねェか」
「えー」
モロに嫌そうな顔をして。
……クソ、ペース乱れるなァ。

「エーじゃねェんだわ。アズサ、いるだろ。そっちに。どォしてる？」
「アズサって、あぁ、はいはい。あの子の動向は知らないわ」
「知らねェってこた無いだろ。仲間じゃねェのか」
「違うわよ。この前のＥＤＥＮ侵攻時は利害の一致で協力したけど、あれはあくまで魔法少女じゃない。ディミトラとかアニマとかと一緒にいるんじゃない？」
「お前ァあくまで化け物側って？」
「わかり切ったこと聞くのそろそろやめないかしら。地下で争い合い起きてるんでしょ？　それ、とっとと持って行きなさいよ。私の欲しい魔法じゃなかったし、ここで騒ぎを起こすのは本意じゃないし」
「……わかった」
ダルそォに、んでもって、面倒くさそォに、さらに、ジト目で。
それァもう——お願いだからどっか行ってくれ、って。そォいう顔で。
「……外で会ったら、殺し合いだからな」
「殺せないクセに何言ってるんだか」
「はン」

シエナに目配せをする。
いいんですか？　みてェな目で見てくるシエナに頷き返す。
「ルルゥ・ガル」
「えー。まだ話しかけてくるの。流石は野蛮人、空気を読むってことを知らないのね」
「お前のあだ名、ちびっこから変えるわ。今日から寂しんぼな」
「は？」
なんか。
よくわからねェけど、そんな感じがしたンで。
あだ名の変更ァ、初めて……じゃねェか。マッドチビ先生にもしたしな。
「ちょっと、どういう意味よ！」
「ア？　まだ話しかけてくンのかよ。流石だな寂しんぼ。空気が読めねェらしい」
「……あーもう。いい。いいから行きなさい。ここではもう私の前に現れないでくれる？　折角の癒しの時間が台無しよ、全く……」
「あァよ、じゃァな」

なんだ。
俺も、あんだけの事されといて、よく大人しく引き下がるよな。
偉いよ俺。……なんかな。ホントに、邪魔されたくないって感じだったンでな。
……いや俺だってどこにいたとしても邪魔されたくァないんだけど……まァ、早く帰った方がいいのァ事実だし。
戻るか。

遠《text:s1:2》吠えけ遥か彼方に《text》

「あ！　あんた、よくもぬけぬけと戻って来たわね!!　モーゲンに何をしたのか知らないけど――ぶっ潰してあァん!?」
「やめろ。艶やかな声出すんじゃねェよ脳筋娘」
「だ、だって、服の中に何か――ぁあっ！」
戻ってきたら、戦場ァ割と落ち着いていた。
アインハージャの２人ァ戦闘に不参加。たァ言えびりびりタイツを常に見張っ

ているよォで、びりびりタイツァ動けずにいる。鎧武者たちぁ束になって脳筋娘の相手をしてて、着物狐ァ楽しそォに笑いながら、指をクイクイやってる。多分脳筋娘の魔法少女衣装の中に入り込んだ式鬼を操作してンだろォけど、あんまりアダルティな事はやめてくれると助かる。

　んで、紺碧ベルトとマッドチビ先生。

「ガーゴイルじゃ私には勝てない。ただの【鉱水】でも私には当たらない。貴女の攻撃方法は対策済み」

「……なら、これでどうよ！」

「大波を起こすには【鉱水】が足りない。理由はあっちのガーゴイル達に持っていかれているから」

「なら、なら――」

「無理。無駄」

　なンか、圧倒的だった。

　ちょいとこのマッドチビ先生が幼すぎるってのもあるが、紺碧ベルトァ完璧にマッドチビ先生の攻撃を避け、封じ、あと論破して、何にもさせない。ガーゴイル

達も全部【鉱水】に戻ってる。
危険度SSS級の魔法、【幽拐】。なるほど、って感じだ。つか、創設者たちァ魔法無しでも強いのがデフォなのか？
「帰ってきた？」
「あァよ。マッドチビ先生の相手代わるから、コレ頼めるか？」
「あ、モーゲンの精神体」
「あァさ」
別に引っ掴んでるワケじゃねェのにくっついてきたそれを渡す。
受け渡すときも何もしてねェのに渡っていって、紺碧ベルトの腕に引っ付いた。
「ガーゴイルは全部潰した。けど【鉱水】がなくなったわけじゃない。気を付けて」
「問題ねェよ。俺ァマッドチビ先生とァ相性良いんだ」
「――モーゲンを殺した魔法少女!!」
殺到する【鉱水】の槍。知覚強化して、【即死】を纏う。いつぞやのヘビよろしく先端から潰れて行くソレに、まァ、ちったァ手応えを感じてる。
俺も少しァ強くなったんじゃねェかなァ、って。

そんな、油断を。
「――カ……？」
背中だ。
なんか、熱い。
死の気配ァしてなかった。だから多分、この攻撃で俺ァ死にァしないンだろう。
でも。
深い傷だ。
「どうよ……私の【隠涜】は、相手が一番油断してる時に本領を発揮するんだから！」
「ふふ……【仙導】とはなにも、ヒトだけを導くものではないですよ？」
「――死ね」
殺す。
透明のガーゴイルか。クソ、その危険性ァ俺が一番よく知ってるはずなのに。
前のめりに倒れる。

いや、倒れかけた。シエナが支えてくれたンだ。ありがてェ。けど。
「モーゲン。モーゲン。起きて。早く起きて。今――大変なことになっている」
「ん～？」
「逢異愚埜迂意図（私は無視を、する）」
「なんだ、癒しの詩？」
「ウィジ。彼女はヴァルメージャだから」
「リジ。だが――死にかけだぞ」
「ヴァルメージャは死んでも翌日に蘇る。問題ない」
「そうか」
血を吐きながら、痛みを無視するコトバを使う。
意識が朦朧とする。している。違う。もう保てない。保てそうにない。
身体が冷たくなっていくのを感じる。
あァ、そうか。【即死】じゃねェもんな。
失血死ァ。
「モーゲン！　起きろ、モーゲン・真凛!!」

「はい！　おはようございます――！　……えっと……あれ、何この記憶……？」
もう、無理だ。
意識が落ちる――。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

真っ暗な空間にいた。
真下にあるのァ、月。真っ黒い月。周囲が光った朔の月……に見える、真っ黒くて発光してるっつーよくわからん球体。
その中で、輝く1人の女性。
「起きましたか？」
「……あァよ。なンだ、見守っててくれたのか」
「ええ、そうですよ。」
俺ァその女性に膝枕されてて。

覗き込んでくる顔ァ、すんげェ可愛いのさ。ああいや、美しィ、のが正しいか。
「――――。俺ァ、死んだのか」
「まだ、わかりません。」
「そォかい？」
「はい。今、貴女のお友達が、頑張っています。貴女を生かそうと。傷を塞ごうと。貴女に死んでほしくないと。」
「だってなら、俺ァここにいねェで、早く帰らねェとじゃねェのか」
「そうかもしれませんね。……ふふ、呼んだ時はすぐに来てくれて、見守っている時はたくさんの怪我をして。……つらくないですか？」
「わからねェや、そいつァ。でもよ、――――。多分だけど、俺、この世界に生まれる事ができて良かったよ。拾われてさ、送り込まれてさ。なんて世界だって思った事もあったけどさ」
別に、大したことを成し遂げたわけじゃねェ。
仲間の記憶を取り戻したにすぎねェ。お嬢とポニテスリットにァ嫌われたままだしな。多分、ＥＤＥＮのみんなにも嫌われたンだろう。反逆者だって。魔法少女の

居場所を奪う奴だ、って。
でもさ。
なんか、良かったって。そォ思ってる自分がいる。
「凄くねェか。なァ。俺ァさ、まだ死んだ事がなくて。でもさ、生き返るンだろ。意味の分からねェ法則に乗っ取られて、俺ァ生き返っちまう。死んだらな。……それがわかっててさ。俺を助けようとしてくれてる奴らがいるんだって。すげーよ。俺ァそれが嬉しい」
「そう、ですね。」
「はは、まァホントァな、それをしてくれるのが金髪お嬢様やポニテスリットだったらって。ちょっとァ思うよ。あンだけ好意を寄せてきてくれてたンだ。あンだけ——アプローチをしてきてくれてたンだ。……2人にァ、俺の死じゃなくて、俺の生を願ってほしかったって。そォ思うよ」
自分で言ってて笑っちまう。
口でァ子供だなンだ言っといて——こんなにも意識してンじゃねェか。
好きなんだろ。ちゃんと。俺がおじさんかどォかァもういいよ。もう、好きに

なってンだろ。だって優しいじゃねェか。だから、好きだったンだろ。
　――それをさ。勝手に裏切られたって。
　同じ方向を向いてねェからってさ。反対を向いてるからってさ。
　俺ァ、勝手にさ。
「なァよ、神さん。恋愛成就ってなァ持ってねェんだっけ？」
「ふふ、ごめんなさい。そうですね。私にはそういった類の権能はありません。」
「あァよ、謝る事じゃねェさ。……なァ、前の話だ。俺の死ってな、意味があったと……そォ思うか？」
「……ごめんなさい。それは、私にはわかりません。けれど、そんな貴方だったから、私は貴方を拾い上げました。アンディスガル。」
「あァさ、感謝してる。2回目なんざ、普通ァあり得ねェんだ。ホントァその時点で夜の使徒になっちゃいけねェのにさ、神さんァ俺を愛してくれてる。……じゃァさ、3回目ってな、やっぱダメだよな」
「……。」
「まだ、あるぜ。気配がする。自分の命の気配が、自分の胸の中にある。――じゃ、

起きねェとだよな。はは……まだ、ここで安寧を受け取るにァ、やらなきゃいけねェ事がありすぎる。……じゃァな、――――。愛してるよ」

「ええ、私も。」

意識を落とす。

温かい手の感触から――冷たい世界から。

どこかへ、帰る。どこかへ――落ちて行く。ありがとう。またな。こんな早く帰ってくるなンて、心配させちまったよな。

もう油断ァしねェからよ。

次会う時ァ――ちゃんと、全部やり遂げてからさ。

今度こそ、有言実行するから。

見守っていてくれ。

「――ッ、っは」

「……起きた。起きた？　起きたのね!?」

「け――ふ、ぁ、ちょ、揺らすな、いてぇって」
「良かった……良かったぁ。良かったぁ……！」
大きく息を吸う。
あァ。生きてる。バリクソ痛ェが生きてるぞ、オイ。
「……脳筋娘が、看病してくれてたのか」
「え！　いや、だって、明らかにって言うか輝きの園で負った傷全部私のせいだし、その、えと、っていうか脳筋娘ってなに!?　そのあだ名すっごく嫌なんだけど！」
「はン……ありがとう。おかげで死なずに済んだよ」
「う、うん。でも……ホント、本当にごめんなさい！　本当にごめんね、怖かったよね。私もその、記憶がなかったっていうのはあるにしても、何の確認もせずに殴っちゃって、その、痛かったよね。つらい、よね。痛いよね。う、うぅ……ごめん。ごめんね……！」
「お、おい。泣くんじゃねェよ。情緒不安定が過ぎんだろ。つか、ベッドに縋ンなって。いてェんだよこっちァ」
「ごっごごごごごごごめん!!」

かはァ。
かァ。
生きてる。生きてんな、オイ。
痛いってことァ、生きてるってことさ。はは、当然の様に右目ァみえねェし、義手もなんか取れちまってるし、火傷も実ァまだ痛ェし、背中の傷ァもうどォにもならねェくらい痛ェが――生きてる。
生きてるぜ、俺ァ。
死なねェって。ははは。死ななかったぞ。
「ありがとう。多分、アンタ以外にも俺を生かそうって頑張ってくれた人たちがいンだろ。みんなにも礼を言わなきゃな。……といきてェが、ア？　……ん？」
立ち上がる。
立ち上がりたい。
……はァ。
「……おい、脳筋娘。ちょいとみんなを呼んできてくれ。大事な話がある」
「う、うん！　わかった！　行ってくるわ！

反応しないな。
足が――欠片も。
そりゃそォか。はは。背中ぶった切られたンだ。当たりドコロによっちゃ、腰まで行くよな。
……マジか。
輝きの園ってな、平和な場所じゃなかったのか。
ここまでくるかー。
まァ生きてりゃ儲けモンだがよ。
「梓！」
「梓、起きた？」
「ククク……などと、笑える状況では無さそうだな」
「梓・ライラック様……」
「……」
呼ばれてきた5人。
ははは。なんつー顔してやがんだ。生きてるっつーの。

「梓。大丈夫か？　痛い所はないか？」
「ウィジ。痛い所がなかったらその方が不味い」
「む、そうか。では梓、痛いか？」
「おゥ。くそ痛ェが、生きてるぜ」
「うむ。それは見ればわかる」
何言ってやがる。
それがどんだけ凄い事か、こいつらァわかってねェらしい。
「梓。……手は、いるか」
「はえーよ着物狐。ネタバラシってなもうちっと溜めるモンだろ、普通」
「……クク、何ゆえお主はそうも前向きなのだ。吾は少しばかり――引いているぞ」
「ケッ、ヒノモトで俺達に語った事の半分以上嘘だってわかってンだぞこっちァ。俺もお前に十分引いてるよ。これでお相子さ」
「吾の方が、これでもかというほどに引いている」
「なンでそンな事張り合ってくンだお前」
生きてるんだぞ。

何を引く必要がある。どこに後ろを向く必要がある。

死んでないんだぞ。

「……梓・ライラック様。申し訳ございません。シエナは――貴女の背後にいたにもかかわらず、その身を護る事ができず……」

「あァよ、お前が壊れなくて良かった。治せねェからな、俺達にァ。敵陣突っ込んであっちのマッドチビに頭下げねェといけねェ。それァまァ勘弁願いたい。だから、お前が狙われなくて良かったよ」

「……」

「はは、とかいうと余計な罪悪感与えちまうよな。……すまん、心配かけた。つか、油断したンだよ。マッドチビ先生相手なら楽勝だってな。それがダメだった。……なんぞ、罪悪感覚えてくれンなら、この後もずっと仲間でいてくれよ。いいだろ？」

「っ……」

ポジティブ過ぎるのも良くない。強がってると思われちまう。

ダメだ、適度に自虐して、悲しがらねェと……余計な心配かけちまう。普通にし

ろ。普通だ。普通に悲しんでいる事にしろ。
そうじゃねェと、透けるぞ、お前。
「透けてるわよ、馬鹿」
「はン、なンだよマッドチビ先生。紺碧ベルトにも俺にも完封されてたクセによ」
「歩けないんでしょ。その傷診たのも縫ったのも私なんだから、それくらいわかるわよ」
「――そか。んじゃ、一番に感謝すべきァマッドチビ先生だな。ありがとう。なァ、俺生きてんだよ。だからさ。――泣かないでくれ。悲しそうな顔しないでくれ。生きてるんだよ。生きてるんだぞ。それがどんだけ凄ェかって、ここにいる奴らならわかるだろ」
唯一マトモに動かせる左手で、心臓を押さえる。
脈打つソレ。
すげェんだよ。生きてるって。
俺ァ――死んだ事があるからさ。わかるんだよ。生きてるって、凄いんだ。
「アンタ、歩けないのよ。わかってるの？」

「わかってるよ。それがなんだ」
「それがなんだ、じゃないわよ。……言わないわよ。それは、言わないけど。……それでも」
あァよ。
ソレだけァ、言ってくれるなよ。
はは。
折角生きたンだぞ。ソレだけァ、言われたくねェんだ。
「俺の義手ァどこいったよ、マッドチビ先生」
「今改造してるわ。少しでも武器になるように。あの剣も、もう少し取りまわしやすい形にするつもりよ」
「ほォか。ありがてェ」
「……ごめんなさい。私の技術では、義足を作るのは難しい。その、癪だけど、シエナを作った方の……あっちの私、っていうのなら、作れたかもしれないけど。……私じゃ、無理。今の私じゃ……無理」
「謝んなって。なんで謝られなきゃいけねェんだ。生きてるっつってンだろ」

「……」

おいおい、しんみりすんなって。

馬鹿野郎が。歩けねェ程度のハンデ抱えた奴なんざ死ぬほどいるだろ。前世にだっていたし、この世界にだっているだろ。化け物が闊歩してる世界だ。安藤さんの夫みてェな英雄もいたンだ、いるんだろ。だったらよ、ならよ。

なんだって俺が、その程度に絶望すると思ってやがる。

「あァよ、じゃあ作ってほしいモンがある。天才彫金師ディミトラに、依頼がある」

「何よ」

「設計図ァ俺が引くからよ。――車椅子ってモンを、作ってほしい」

あれァ結構単純な構造してるからな。

婆ちゃんの介護やってた時に作りを調べた事があンだ。はは、婆ちゃんだァ？くそ懐かしい単語が出てきたな。覚えてるのがすげー嬉しい。忘れねェモンだ、縁ってなよ。

正直よ、会社ァITだったンで、この世界で役立つ知識ってなほぼ無いンだわ。だが、いや、嬉しいね。前世でやった介護がよ。家族の責務つったって善行ァ善行だ

ろ？　それがよ、俺に活きるンだと。

凄くねェか。

ははは。43歳のおじさんでよかったよ。これが25、6の若僧だったら、介護なんざ……あァいや、ンなこたねェか。少子高齢化、爺さん婆さんの世話してる若者も少なくァ無かったしな。ま、おじさんァそォいう小道具の構造覚えるのが好きだったってだけだ。年齢ァ関係無ェやな、無礼だった。

「ん――ふぅ」

「梓？」

「ちょっと、大丈夫？」

「クク、単なる体力切れだろう。寝かせてやれ」

「そ、そう」

どォやらそォらしい。

いんやさ、俺にァやらなきゃなんねェことたっくさんあンのによ。

……まァ、もちっと、寝させてもらうか。

今度ァ夜の宮じゃねェ、ベッドで、な。

夜。

なんぞ、目覚めちまった。まァ昼にあンだけ寝たしな。

つーか、どんくらい時間経ってンのかね、これ。

「起きてる？　梓お姉ちゃん」

「ン――おォ、ブゥリじゃねェか。大丈夫だったか？」

「うん！　いきなりコレから切断されちゃった時は焦ったけど……」

「あァ、中に入ってた悪ィのは潰しといたからよ。……いや、こんなこと言うのもアレだが」

「なぁに？」

「命の気配がしねェから、安心するよ」

「あはは。そうだね、これは人形だし」

ぜってェ警備しっかりしてるはずなのに入って来れたってなトコを怪しんだンだが、ちゃんと命の気配がしなかった。この人形の中に精神体ァいない。だから、こ

れァ本物のブゥリ。ブゥリの人形だ。
「なンだ、見舞いにきてくれたのか」
「うん！　あと、ごめんね、って。始の点の魔物が迷惑かけちゃったみたいで……」
「はは、ンなのブゥリの責任じゃねェだろ」
「ううん、私にもっと力があれば、そんなことはなかったはずだもん。……終の因にいるソティラみたいに、迷宮全部を動かせる力があったら、助けられたかもしれないのに、って」
「あァ、できねェのか」
「うん。私は迷宮の要であって迷宮の主じゃないから」
「へェ。主ァ誰なンだ？」
「外から見た時、でーっかい心臓が見えなかった？」
「アレか」
「うん。名前はザグルスっていうの」
ザグルス。ふゥん、覚えておくか。
「……その足だと、もう私の所まで来るのは難しいかな」

「まァなァ。来て欲しいンなら、這ってでも行くよ」
「ううん、私が会いに行くから良いよ」
「そォかい」
……なんで俺ァ、ブゥリにこんな気を許してンだろォな。
化け物なのによ。
「なァ、ブゥリ」
「なぁに？」
「……世界ァ、死にたがってンだよな」
「うん」
カーテン越しに月を見る。
明るい月だ。天(そら)では見られない月。
「世界が死にたがってンのァよ、苦しいからで、もうつらいからで、十分に生きたから、だよな」
「うん。そうだよ」
笑う。

ナメたこと抜かすな。
「決めた」
「何を？」
「俺、魔力も世界も殺さねェ。やっぱヤだからよ。俺、生きたいんだ。生きてたい。苦しいからって死を選びたくない。痛いからって死に走りたくない。何やってでも、何使ってでも生きていたい」
「うん」
「だから、この考えを世界に押し付ける。情けねェこと言ってんじゃねェぞって、直接言ってやる」
「でもそれだと、魔物はずっと生まれ続けるよ。魔法少女も生まれちゃうよ」
「あァよ。だが、共存の道ァあんだろ。――ここがそォじゃねェか」
たとえ賢さの道であっても。
その道ァ、選べるんだ。
「生きるために抗う奴だけだよ、俺が殺すのァ。死にてェって言ってくる奴なんざ殺すか」

「そっか」
「あァ。――だからよ、ブゥリ。アードゥムラも。そのザグルスって奴も。死ぬなよ」
「うん！」
「あァさ、偉い子だ。良い子だ」
だから、俺のやるべきァ――ょォやく定まっただろ。
俺が殺すべきァ、魔法少女の因子だけだ。
それを殺せば――魔法少女も。そして、多分。
オリジンも、生まれなくなるから。
「生きてるぜ、俺ァよ」
「うん。私も」
だからよ。
感じるぜ、お前ら。こっちに向かってきてる命。まだまだ遠いが――俺を殺すために来てる命を、感じる。
好意を自覚した上で言わせて貰わァな。

「宣戦布告だ、ＥＤＥＮ。俺ァ死なねェし、誰も死なせねェし――魔法少女も、生まれさせねェぞ」

来いよ、フェリカ・アールレイデ。ミサキ・縁。

殺さずに改宗させてやる。狂信者の意地だよ、これがな。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

55・寒対難有侠徒案出栖端初図会疎十王・

「完全復活!!」
「何がよ。どこがよ」
「あン？　動けるよォになったンだから復活だろ何言ってんだ」
「……」
構造知ってるつったって俺ァ設計士じゃねェ、工業系の職人サンでもねェ。だから覚えてる限りで引いた適当設計図を、けど構造上無理なとことか穴とか色々突いて、マッドチビ先生ァたった数日で車椅子を完成させちまった。
義手もな。ちゃんとある。まァアズサの腕にあるよォな魔力回復機構ってなありゃ外道の手段ってンでやめてもらった。そもそもマッドチビ先生にァ作り得ねェらしいけど。
目はどォしよォもないんで包帯ぐるぐる。眼帯ってなも考えてくれてるらしい。輝きの園の裁縫職人に創設者たちが依頼したとかなんとか。
「なァマッドチビ先生」

「何？　まだどこか不便？」
「いんやさ、ありがとうってさ。もっかい言いたくなった」
「そろそろやめなさいよ。アンタわかってて言ってるでしょ。そんなボロボロの姿でお礼言われても、こっちは苦しくなるだけなんだから」
「……だよなァ。んじゃこの礼ァ誰にぶつけりゃいいんだ」
「アンタの神様とかでいいんじゃない？」
「だな、そォするよ」
車椅子をキコキコ漕いで、外に出る。
部屋の外。通路。そっから、タラップ作って貰って地面に降りる。
「しっかしＬＯＧＯＳァマジで快適だったな。マッドチビ先生の手動たァいえ、だが」
「まったくよ。……この先、ずっと私が面倒見てあげられるってことはないんだから、自分の事は自分でできるように頑張りなさい。できるようになるまでは見ていてあげるから」
「あァよ」

マージで母親だよなァ、マッドチビ先生。
「む、出てきたか。梓、調子はどうだ？」
「ウィジ、調子が良いわけがない」
「それはそうか」
「いんやさ、バリ元気だぜ。それよかみてくれよコレ！」
もうこの身体じゃァ剣ァ取りまわせない。槍だのなんだのも無理だ。
だってンで、義手にダガーを付けてもらった。ちっさいダガーだけど、耐久性能に優れてて、しかも出し入れができる。
かっけェ。
自分がおじさんだって自覚した30の辺りで捨てよォと頑張ってた厨二心が、いんやさもう出て来ちまったね。レーテーから剣取り出す時点でかっけェ！　って思ってたけど、これァかっけェわ。マッドチビ先生ァよくわかってる。
「成程、小剣か。確かに梓、貴女には丁度いいだろうな。盾になり得て、いざという時の隠し玉にもなる」
「ウィジ。そもそも梓に敵を近付けた時点で落ち度」

「ああ。梓、貴女はもう戦わなくていい。私達アインハージャは守護者だ。故に、此度一瞬でも貴女に刃を向けた事を含め――貴女に7度の生涯の全てを捧げることにした。貴女が魔力を殺せば、それで、そこで、終わりだ」
「いらねェよンな捧げモン。ベルウェーク倒して自由になったンだから自由に生きやがれ」
「ウィジ。だから、勝手に守ろう」
「うむ」
……それに、魔力も世界も殺す気ァ無い。
あの夜ブゥリが来てくれてよかった。もう俺の腹積もりァ定まってンだ。
「なんぞ、みんなが集まれる場所ってあるか？」
「ククク……それなら、集会場がある。本来であれば輝きの園の祭りなどを企画し、話し合う場所だというが、創設者たち権限で貸し切りにできるだろう」
「おお、着物狐。そっちも壮健そォで何より。あァそうそう、ちょいと聞きたかったンだけどさ」
「何ぞ？」

「あン時一緒に戦った鎧武者、ウチに迎え入れていいか？　あァ勿論アイツらの無念を晴らしてからだけど。カンコウとヒノモトに纏ろう全部を解決したらよ、あの死霊にァ安寧があっていいと思うんだ。ウチの神さんも良いって言ってくれたンでな」

「……クク、良い良い。ヒノモトでは死者とは妖に堕ち、生者を襲う怨霊となり――ただ、退治されるだけの存在に成り下がるものだが。そのような場所にいけるというのなら、あれらも浮かばれようぞ」

「ン。ありがとよ」

よォし、言質ァ取った。

……なんかこォいうと悪ィことしてるみたいだな。

「んじゃその集会場ってトコに行くか。他の皆も集めたいンだが……」

「では私が行ってきます！」

「あれシエナ、ＬＯＧＯＳにいたのか」

「先ほどまで燃料補給による休眠中だったので、気配は無かったのだと思います。でも、補給は完了しました！」

「んじゃ、ひとっとび頼むよ。創設者たちも集めて欲しい」
「了解しました！」
さてンじゃまァ行きますか、と車輪に手をかける。
「クク、まぁ待て。吾が押す。これはそういう作りであろう？」
「そォだけど、いいよ。自分でいけるって」
「吾の妻のため、妻である吾が吾の妻の手足となるのだ。不満はあるまい」
「分かりづらいなオイ」
「ククッ、不満はあるまい？」
「……いいけどよ。けど、ずっとァやめろよ。俺だって自分の意思で進みてェんだ」
「わかっている」
さァてさて。
お嬢とポニスリが死んでから、もう結構経ってる。
そろそろ、来る可能性があるンだ。
だから、対策会議と行きますかね。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「魔力も世界も殺さない？　……じゃあ何のためにここまで来て、何のためにアンタそんな怪我したのよ」

「ハハ、すまねェなマッドチビ先生。二転三転手のひらクルクル、芯の無ェ生き方で俺も嫌になるがよ。なんぞ、世界ってな死にたがってるらしィんだわ。だから殺さねェ」

集会場。

円形に作られたそこに、魔法少女がずらりといた。あと化け物も。

俺と着物狐、マッドチビ先生。アインハージャの２人、シエナ。

創設者たちである脳筋娘とびりびりタイツ、パッパラメガネに紺碧ベルト。

そして――ブゥリ。

「なら、フェリカとミサキがお前を殺そうとする理由も無くなったはずだ。ＥＤＥＮと敵対する必要が前提から消えた」

「んだな。なンでここァ大人しく降伏を――ってなが一番丸ィんだが、なんとそォもいかねェんだわ」

「何故？」
紺碧ベルトを見る。
紺碧ベルトはうん、と頷いて。
「その理由については私達から説明させてもらうよ。いいかな」
「お前記憶失う前と今とで喋り方変わりすぎだろ」
「うるさい」
「へーい」
十全俺が悪いので口を閉じる。
「私達はＥＤＥＮを魔法少女のための楽園として作り上げた。国家防衛機構なんかじゃない。況してや、死んでも蘇る尖兵や死兵にするためなんかじゃない。彼女達が安心して暮らせるように、迫害を受けないように……死んでほしくなくて、作り上げたんだ。そこまではいいかい？」
「今のＥＤＥＮとは、かなり違うな」
「私が最初に聞いたのはそれだったし、最初の頃は本当にそうだったわ。私の所に来る使者も、隔離塔や修練塔を作った時も、みんな幸せそうだったもの」

「うん。――けど、今のＥＤＥＮは恐らく何者かによって変えられようとしている。その何者かというのが――」

「ジャハンナム、っつー、中央部の上官だって俺ァ睨んでる。もしくァ学園長殿だが」

「グロアはそんなことしない、と言いたいけどね」

ヘェ、学園長殿ァグロアって名前なのか。

知らなんだ。

「よって、私達はＥＤＥＮを是正しにいく必要がある。……そこで、今回の話。梓を殺すためだけに、大勢の魔法少女がここ、始の点に来る可能性がある、という話だったね」

「あァ、まァ俺を殺すためなのか魔力を殺すのを阻止するためなのかァ定かじゃねェが、結果ァ同じだろ」

「それを利用する」

ま、あンまり気の良い話じゃねェんだけどよ。

恐らくお嬢達ァ、戦力掻き集めて俺を殺しに来る。だがお嬢達の一存でンなこと

ができるわけじゃねェ。鬼教官か指揮官殿か、あるいァもっと上の誰かか。

そォいうのに緊急案件として相談して、しっかりした遠征組を組んで来ると思われるってなワケさ。

相手ァ【鉱水】のディミトラに暫定S級のアインハージャの2人、シエナ、んでもって未だ実力未知数な着物狐ことナリコ。

お嬢達にァこんだけの戦力がいるってわかってる。んでもって俺もいる。これらの対策を取るには、それなりの魔法少女が必要だ。

単純なパワー馬鹿だけじゃなく、もっと応用の利く……特殊魔法の使い手、とかが。

勿論単純パワー馬鹿も来るだろう。【青陽】とか班長とかな。多分それくらいにァ危険視されてると思って良い。はずだ。明媚。

まァ何が言いたいかってーと。

「梓殺害のために投入されるEDEN側の戦力――根こそぎ、奪わせてもらう。私達がSSS級とされているのは、簡単に敵を味方に引き入れることができるから、でね。それくらい危険だから、SSS。今の等級区分で区切られたSS級なんかに

は負けないよ」
「あンま油断してくれンなよ？　班長の【凍融】だの鬼教官の【痛烈】だのァ範囲も効果もやべェンだ」
「それ、見ないと発動しない奴でしょ？　ふふん！　私の【隠涜】があれば問題ないのよ！」
「……そいやそォだったな。だが、それも弱点がある。周囲の急激な変化にゃついていけねェ。そォだろ？」
「え、そんなことないけど」
「何？」
……その弱点が無かったら完璧すぎる。
危険すぎる。いや、でも、確かにそォか。その程度で弱点を突けるのであれば、他３人に比べて【隠涜】ァＳＳＳにァ区分されねェだろ。
じゃァなんで寂しんぼの奴の使うのァ……。
……劣化版、ってことか？
「ビーファン、梓。話を戻してもいいかな」

「ン、あァすまねェな。いいよ、頼む」
「はぁい」
「うん。……EDENから投入される戦力。恐らくそれなりの強い所が来ると思う。それらを全員捕まえて、説得に応じれば仲間に、応じなければ――少しの間、眠っていてもらう。そして、こちらから打って出る。EDENを攻め落として、EDENを変えてしまったのが誰なのかを突き止めて、元の形に戻す。私達が作り上げた楽園を取り戻すんだ」
って、ことだ。
向かってくるお嬢達に、魔力殺すのァやめたンで止まってくれー！　で止まってくれるなら万事良し。
止まってくれねェなら捕まえる。正直止まってくれるたァ思ってンだが、どォにも嫌な予感がしてな。なんぞ――アッチで、吹き込まれてそォで。
「大丈夫なの？　アンタ達がいなくなったら、輝きの園の魔物が暴れ出したりしないワケ？」
「うん！　そこは私達とザグルスが責任をもって大丈夫っていうよ！　暴れ出す

子は、お仕置きもするから！」
「……えっと、この子は……始の点の要、なんだっけ？」
「そうだ。ブゥリ。そしてもう少し上の方にいるアードゥムラ。そしてザグルス。始の点に住まう魔物でありながら、私達との共存に応じてくれた誇り高き者達」
「……≫良いから私の言う事聞きなさい！≪って殴ってきたくせに……」
「エ？　な、何か言ったかな～ブゥリちゃん」
まァ、こォいうこともある。
記憶失った状態の紺碧ベルトァまだ攻略してねェって思ってたが、その実ちゃんと攻略されてる。ザグルスってなもソテイラと同じく服従のうんたらを結んでるとかなんとかで、ただしソテイラ程の強制力ァ無いんだとか。ただまァブゥリがこっちについてくれてるンで、化け物の制御ァなんとかなると。
……ルルゥ・ガルがいるのァちィと気になるンだがな。シエナ曰くもういなくなってたたァ言ってたが。
「一つ、良いだろうか。質問がある」
「何かな、ウィジ」

「梓を逃がしてはダメなのだろうか。この状態の梓を戦地に立たせること自体、無理がある」

「最初だけ、いてもらう必要がある。魔力を、世界を殺す必要は無くなったと、そう叫んでもらわなきゃいけない。その後は可能な限り遠くまで逃げるか、ＬＯＧＯＳと言ったか、あのガーゴイルの中に避難するといい」

「そうか。ならばその守護は私達が引き受けよう」

お嬢達の狙いァ俺だからな。

戦場見てられねェのァちと不安だが、流石に足手纏いなのァわかってる。車椅子の奴が戦場にいたって邪魔なだけさ。つか、車椅子じゃそもそもふんじばれねェんで、知覚強化だの死の気配だのなんだのでお嬢の【神速】に対応できたとしても、ぶっ飛ばされるのが関の山だ。

とりあえず俺にァもうその意思が無くなったぜ、って言う係。んでもって、絶対に死なない係だ。なんでって、死んだらＥＤＥＮに戻っちまうからな。ＥＤＥＮに戻っちまえば何されるかわからねェ。

「とりあえず、私の【仙導】、ナリコの式鬼、ディミトラのガーゴイル軍団を用い

て布陣を固める。それでいいかい、ハイドレート」
「うん、構わない。私達は危険度ＳＳＳだけど、単純な攻撃力には欠ける。ビーファン以外ね。だから、搦め手で捉えなきゃいけない。そのためには数が必要だ。混戦にして、その隙に【幽拐】で精神体を抜いていく。モーゲンは賛意を示さなかった魔法少女の処理だ。【幽拐】はそれほど多くの精神体を溜めて置けるわけではないから、お願いするよ」
「勿論～！　今回なんかすっごく迷惑かけちゃったみたいだし、活躍するよー！」
……いんやさ、まァ、正直な。
しょーじきな話をすりゃァ――こえーな、って。そォ思ってる。
確かに殲滅力も殺傷能力もそこまでじゃねェ魔法ばかりだ。紺碧ベルトの【幽拐】だって、精神体抜くから結果的に即死っぽくなるだけで、実際に殺してるわけじゃねェ。だからＥＤＥＮの等級区分で言えばＳＳにァなってもＳＳＳにァなれなそォなンだよな。
けど、違うんだと。
この等級区分は危険度であり――成程、生物を相手取るのにこれほど怖い魔法ァ

存在しねェよ、ってなラインナップだ。精神を奪い、記憶を奪い、心を操り、姿を消す。ルルゥ・ガルで身に染みてわかっちゃいるがよ、この作戦ァちょいと外道すぎねェか、って。

　まァ殺さねェって約束してくれたし、そもそもこいつらに魔法少女を殺す、って考えが無いンで助かってるけどさ。

　こえーよ、創設者たちってな。

「危険視すべきは、まず【凍融】という子だろうね。温度変化なしに視界内に入った全てを凍らせたり融かしたりできる……。それは、数に物を言わせる今回の作戦において最大限に警戒すべき魔法だ」

「あァさ、だが、同時に視界内に入らなきゃ大丈夫だ。班長に向かって真っすぐに突っ込ませるか、脳筋娘の【隠流】で隠すかで対応できる」

「それよりも不味いのは多分結よ。来るかどうかはわからないけど、あの子はD級にして補助の最高峰にあるわ。【弱化】……思考速度の弱化、耐久性能の弱化。かけられたが最後、あらゆるものが【神速】に見える」

「あァ、虹色ロングァマジでヤバイ。が、アイツァ魔力量少ねェからな。最初に

ガーゴイルで押しきっちまえばなんとかなりそォな気もしてる」

オーレイア隊に関しちゃ、来るかどうかァわからねェ。あいつら調査班だからな。突撃たァ違う。それに、俺を殺す作戦、ってのに銀バングルが同意するよォにァ思えねェっつーか。

でもまァ、楽観視ァ危険すぎる。

「後は、【痛烈】、【侵食】、【劇毒】、【寄生】には気を付けた方が良さそうだね。話を聞く限り、だけど」

「鬼教官に関しちゃ班長と同じ対応で良い。それで完封できンのァ証明済みだ。だが、冷静メイドァちとヤバイ。何がって、アイツァ拘束するってのにあまりに向いてねェんだ。腕縛ろォが足縛ろォが身体を石で固めよォが、自分で歯の一本でも折って飛ばしゃァそっから自分を【侵食】できる。同時に、どんな材質でも自分に変えられるってなキツすぎる」

「いえ、その心配はないかと」

直後にァ脳筋娘の拳が目の前にあった。

俺の眼の前。を、通り過ぎて――左横。赤スカーフのすぐ近く。

そこに、いた。つか――生えてきた。
「……お前それやめてくれって俺言ったよな」
「申し訳ありませんが、そうも言っていられない状況になりましたので」
そんなことを言いながら。
目の前の拳なんざ一切気にも留めず、床を【侵食】して生えてくる冷静メイド。
たりめーのよぉに裸で、けど気にせず、亜空間ポケットからメイド服を着て、すまし顔で……まァ、いつも通り、と。
「初めましての方は初めまして。お久しぶりな方はお久しぶりです。Ｂ級魔法少女、【侵食】が使い手コーネリアス・ローグンと申します。――以後お見知り置きを」
優雅にカーテシーを決めて。
冷静メイドァ、みんなを見た。

遠《ｔｅｘｔ:s1・2》吠えは《ｔｅｘｔ》

間をあけてる時間ァねェ。
「何があった？」
「現在、ＥＤＥＮが襲撃を受けています。常の侵攻ではなく大侵攻の類。その筆頭は、天候と樹木を操る魔物」
「！」
「で、なンでこっちに来た」
「キリバチ様の命令により、初めは静観していたのです。アールレイデ様、縁様による梓様の叛逆に関する報告から、急遽の遠征組の編成。組み込まれかけましたが拒否しました。オーレイア隊の皆様もです。しかし、この拒否を上がどう捉えたのか、私達に監視がつくようになりました」
「……ほんで？」
「監視がつくようになってから数日後、この襲撃。現在ＥＤＥＮに残っている戦力は少しばかり心許ないため、梓様に梓様を私が連れ戻すことによって遠征に出た魔法少女の皆様方もＥＤＥＮに引き戻し得るのでは、という浅慮のもとやってきたわけですが、事態は相当に複雑化している様子。故、ご安心頂くための情報提供を兼

ねて、こうして皆様の元に姿を現しました次第でございます」
「どこまで知ってンだ」
「概ね、全てを」
「……概ねなのか全てなのかはっきりしろ。まァいい。脳筋娘、大丈夫だ。コイツァ大丈夫なンで、拳引いてくれるか？」
「はい。そろそろその拳にキスの１つでも落としてしまいそうになりますので」
「……わかった」
反応速度ァ二重丸だ。魔法ありきじゃねェ、マジのバケモンさな、この脳筋娘ァ。
一瞬で身体強化して的確にぶん殴ろうとして、けど相手が魔法少女だって気付いたンで寸止めして。
そこまでが一秒に満たねェ。いやー、怖いね。
「仕切り直しといこう。コーネリアス・ローグン、そちらに座ってほしい」
「承知いたしました」
んじゃ、仕切り直しだ。
「冷静メイド、俺のために来る魔法少女の詳細を頼む」

「梓様討伐のために組まれた遠征組は、突撃班ヴェネット隊、観測班アルカナ隊、学園組はＡクラスＡ班、Ｂ班、防衛組攻撃班イドラ隊、特例組潜入班ネイビー隊となります」
「多いなァオイ」
「それほど【即死】は危険視されているようですね」
「……ン？　そりゃどォ……いや、いい。紺碧ベルト」
いうことだ、と問おうとしたが、自重。
話の腰折りすぎるのァよくない。
「うん。敵戦力がわかったのは何よりだ。けど、出来得るのなら、それら魔法少女の名前と魔法、その特性をそれぞれ書面に書き出しておいてくれないかな」
「ここに」
「……どういうことかな？」
「亜空間ポケットより出したまでです」
「そこではなく、――どうして、そんなものが必要になると予想していたのかな、と。さっき梓にしていた話を聞くに、こういった事態になるとは予測していなかっ

たように聞こえたけれど」
　準備がいいってな、何もすげェってなるだけじゃねェ。
　何か知ってんじゃねェのか、っつー疑りの目線。が。
「梓様に危害が及ぼうとしていると知れた時点で、このような準備をしておくのは当然かと。加え、魔力を殺すと。私は大いに賛成ですので」
「あァそれァなくなったンだ」
「そのようですね」
「つーわけで、あんま疑ってくれなくてもいい。こいつァ多分大丈夫だ」
「……わかった。梓を信じるよ」
　物分かりの良さは変わってねェらしい。
　パッパラメガネが奪った記憶の中でどんな変化があったのかってのァ気になる所だよなァ。
「クク、吾とディミトラ、ペルチットはそろそろ軍勢を作りに向かう所ぞな。どうせだ、吾の式鬼とガーゴイル、ゴーレムとやらを混ぜ合わせ、至高を目指してみるのはどうだ？」

「それ、あとで制御できなくなって暴走する奴じゃねェだろォな」
「ククッ、吾だけであればそうなろうが、ペルチットが居れば大丈夫、であろう？」
「おやおや、随分と信頼頂いているようで」
「なんでもいいけど行きましょ。この辺の鉱石も集めておきたいし、地質の調査もしたいから」
「では、そういう事だ。……だが、吾の妻よ」
「なンだ」
着物狐が顔を近付けてくる。俺にだけ聞こえる声量で――そっと。
「そろそろ体力の限界ではないか？　ククッ、呼吸が浅いぞ？」
「……一切顔に出して無ェんだからバラすンじゃねェよアホ」
「ククッ、気付いている、と見て良いのだな？　――まほーしょうじょが体力限界を迎えるという異質さに」
「……あァ。わかってる」
「ならば、良い」

それだけ言って。
着物狐とマッドチビ先生、びりびりタイツァ、集会場を出ていった。
……気付いてるよ。
集中力だの精神力だのが切れることァあっても、魔法少女ってな疲労ァしない。
魔力切れや血液不足でぶっ倒れるこたあるけどな。
ただ、体力、持久力ってな人間の基本性能の部分に支障を来すってな――まァ、そォいうことだ。
知ってる。
けど、いい。
「それじゃあ具体的な対策についてだけど――」
俺ァ大丈夫だよ。ありがとな、着物狐。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

諸々のブリーフィングを終えて、少しの空き時間ができた。
意外にもっつーとアレなンだが、冷静メイドァ俺のお付きってことにァならず、実際に戦闘する奴らの方へ情報提供&対策戦略の詰めをしてる。
俺ァやることないんで夕暮れの空を眺める作業中。
疲れを癒すってのもあるな。
……みんながみんな、色々やってて、俺だけ、ってなちょいと罪悪感なンだが、ついていっても足手纏いにしかならねェ。
「そこで何してるのかしら、野蛮人」
「空みてンだよ寂しんぼ」
「……そのあだ名、納得してないんだけど。まぁいいわ。野蛮人に何言っても無駄だろうし」
まァ来ると思ってたよ。
コイツの考えァ大体わかるからな。ぶっちゃけ、コイツもそろそろ黄昏にきそォだなって思ってこんなとこに来たんだ。誰にも何も告げず、一人で。
「ここを出たんじゃなかったのかよ」

「一度出て、帰ってきただけ。でもまぁすぐに出て行くわ。魔法少女同士の争いに巻き込まれるのはごめんだしね」
「別にここでコト起こすワケじゃねェよ。外でだ」
「外でなら狙える、って？　そんなことしないわ。したら貴女の思うつぼ、輝きの園の魔法少女もＥＤＥＮの魔法少女も全員こっちを狙ってくる、ってことでしょ」
「はン、流石に引っかからねェか」
「貴女は浅慮って言葉を覚えた方が良いわね」
「じゃてめェァ浅はかって言葉を覚えな」
誰よりも、何よりも憎き仇敵、ってな奴なンだがな。
ほんと先日の邂逅から、どォして俺ァ……こォも穏やかなンだ。
「なァよ、【宥和】だっけ？　それ使ってンのか？」
「使ってないわ。というか、使えないわ。もう効果切れ」
「……そォかい」
「ええ、そうよ」
効果切れ、ねェ。

やっぱりなんぞ条件付きで使ってンのかね。それも劣化版を。
「なァ」
「ええ、いいわよ」
「んじゃ聞くがよ」
「貴女の考えで合っているわ」
「……そォかい」
いんやさ。
ホント、なんだって俺ァ、こんなヤツと通じ合ってンのか。
マジで意味が分からねェ。紛う方なき敵なのによ。
「もし、だ」
「……ええ」
「もしも――世界中が、輝きの園みてェに共存の道を選べる、ってなったらよ」
「……」
「お前ァ、乗るか？」
「……いいえ。私達の目的は、生きる事ではないから」

「だよなァ」
　ちったァ期待したンだが、やっぱし無理なのか。
「そこに至ったとして、何があンだ」
「永遠と、絶対」
「そりゃ、そんなに大事かね」
「大事よ。そのために、何百年と積み重なってきたのだもの」
　空が段々、茜色から――青く、暗くなっていく。
　もォすぐ夜が来る。
「ウチに来る、って選択肢ァ、取れねェのかよ」
「中にはいると思うわ。もう疲れたって、もういい、って。そう思っている子もね」
「……そいつらだけでも、ってなワケにァいかねェのか」
「ええ。魔物として生まれて来た以上は、もう。この縛りからは逃れられない。――そこに至る以外では」
「そっか」
　化け物の事情になんざ興味無ェって、ンな余裕無ェって思ってた。

けど――。
「それに至るにァ、何が必要だ」
「魔法少女の命。魔法少女の因子」
「だよなァ」
だから結局、相容れない。
クソッタレなシステムを用意してくれたモンだよ、本当に。
共存の道なんて、やっぱり無ェんだ。
どっちかが諦めて、賢い選択を取るしか。
「お前が俺の【即死】を欲しがる理由ァなんだ」
「決まってるじゃない、そんなの」
陽が、落ちる。
夜が訪れる。
風が業と吹いて――。
「本物の神を殺し得る、唯一の魔法。それが【即死】、だからよ」
それだけ言い残して。

奴ァ。
ルルゥ・ガルァ、俺の前から消え去った。
……ま、そんなこったろォとァ思ってたよ。
車椅子の背もたれに背を預け、夜を見る。
星は出ていない。そりゃそォだ、この世界に宇宙なんざ無いからな。
化け物の達の目的。ルルゥ・ガルの悲願。オリジンが何ゆえ神と呼ばれるか。
それァ簡単だ。
世界を巡る魔力の淀み。それらが産んだ魔なる化け物。
目指し至るァ高みの高み。死んで廻って――最後に一となる。
輪廻に囚われた化け物が、その縛りより唯一逃れる方法が、それ。
死んで廻って、死んで廻って、死んで廻って――最も強く、高く、全能の存在になって。その一個体になって。
――死ぬ。【即死】で、死ぬ。
それが悲願だ。
「……あンだけのやり取りでここまでわかった当たり、マジでツーカーだよなァ」

嫌な話だが。
けど、そのためには、魔法少女の命と、魔法少女の因子が必要で。
だから魔法少女を襲うし、魔法少女の因子を持つが故に隔離されたＥＤＥＮの下の国を襲うし。
化け物。風の使徒。
「ごめんな」
叶えてやれそぉにァ、無いからさ。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

次の話（11/25　08:05更新分）は登場人物紹介風のローグンが書いたレポートになりますので、話はほぼ進みません。お気を付けください。

4.Ｇｅｔ ｋｉｃｋ ｔｏｕｃｈ.

56.例歩音.（登場人物紹介）

名前　【魔法】　等級

遠征組突撃班ヴェネット隊

ヴェネット　【凍融】　SS

ルナ・ウィーマーン　【氷壊】　S

あるるらら　【透過】　A

ザイフォン・英　【吸呑】　A

カネミツ　【飛斬】　A

遠征組観測班アルカナ隊

Ｌ・アルカナ　【作為】　D

ワンド　【目印】　D
幻剣公佳　【心眼】　C
キフ・心　【抑制】　D
ぺんたん　【念写】　D

学園組Aクラス A班アールレイデ隊
フェリカ・アールレイデ　【神速】　SS
シェーリース　【神鳴】　S
ユノン　【光線】　S
ミサキ・縁　【波動】　S

学園組Aクラス B班即席カギネ隊
カギネ　【深挟】　B
瀬尾アルカ　【音破】　A
クイネ　【鉄爪】　A
ティア　【光弾】　B

防衛組攻撃班イドラ隊

エルバハ・イドラ　【青陽】　SS
ジャむぴー　【超躍】　S
アムリタ・アールレイデ　【重圧】　A
宵知　【的中】　A
鮫　【斜地】　S
特例組潜入班ネイビー隊
ネイビー・ブルー　【寄生】　SS
ティケ　【抗運】　B
シュピーゲル　【反射】　C
スタット　【無音】　B
井上　【譜運】　B

魔法名　効果　発動条件　チャージ時間　対策
凍融　視界内の万物を温度変化無しで凍結・融解が可能　対象を視界内に収める
3秒　視界を塞ぐ

【隠涜】

氷壊　魔力の球体を生成し、それをぶつけた対象を凍らせる　対象に魔力を当てる　5～10秒　回避する

透過　自身を透過し、攻撃をすり抜ける。また、敵の表面をすり抜け、体内で実体化も可能　無し　無し　憑りつくわけではないので高速で動けば問題ない。

吸呑　起点となる核を生成し、周囲の生物を吸い込む　核を設置する　2秒　効果範囲外に出る

核を破壊する。

飛斬　飛ぶ斬撃を放つ。　刀を振る　無し　回避

作為　詳細不明　不明　不明　不明

目印　遠方からでも確認できる目印を置く　魔力を込める　5秒　攻撃性無

心眼　対面している相手の次の行動が読める　無し　無し　魔力消費高

抑制　対象の魔法や魔物の能力等を通常状態に戻す　対象を視界内に収める　10秒　効果範囲外に出る

元から強ければ問題ありません

念写　見た物を紙面に写す　対象を視界内に収める　３秒　攻撃性無

神速　知覚できない速度で動く　無し　無し　来る場所を読む

神鳴　天より雷を落とす　対象を視界内に収める　25秒　絶縁体の建物に入る

光線　指先や掌から光線を発射する　対象方向に手指を翳す　15秒　回避

波動　全身から周囲を圧しだす力場を作る　無し　無し　耐久性能で勝りましょう

深挟　どこまでも伸びる不可視の腕で対象を掴む　無し　無し　回避

音破　声による範囲攻撃　無し　４秒　遮蔽物に隠れても無駄です。効果範囲外に逃げましょう。

鉄爪　両手を鋼鉄の爪状にする　無し　無し　回避

光弾　光の弾を打ち出す

撃ち出した光弾を破裂させる　対象方向に手指を翳す　20秒　光弾の速度自体は遅いです。

破裂した場合、周囲に強い光を放ちます。

青陽　超高温の青き小型太陽を生成し対象にぶつける　魔力を圧縮する　35秒

防ぐ方法はありません。
しかし、避けた場合周囲に甚大な被害を齎します。どうにかしてください。
超躍　瞬時に対象を超超高高度まで跳ねあげる　接触　無し　防ぐ方法はありません。
接触しないでください。
重圧　視界内に収めた対象にかかる重さを付与する　対象を視界内に収める　7秒　敵味方の区別ができないそうです。
的中　必ず当てる　物体を投擲する　無し　刃物や爆発物の投擲に注意
斜地　対象の視界を斜めにする　対象を視界内に収める　2秒　飛行魔法使用時はバランス感覚を失うので注意。
寄生　対象に寄生し、意のままに操る　接触　無し　防ぐ方法はありません。
絶対に接触しないように。
抗運　当たったり当たらなかったりする攻撃　無し　無し　攻撃してもされてもすり抜ける場合があります。
すり抜けない場合もあります。

反射　遠隔魔法を反射する鏡を生成する　無し　1秒　生成した鏡以上の大きさの攻撃なら問題ありません。
近接には何の効果もありません。
無音　対象や自身の音を消す　対象を視界内に収める　無し　攻撃性無
譜運　音を運ぶ　発声する　無し　どうやら言葉は運べない様子

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1:２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「なァよ、この観測班ってな、なンで来るンだ？　どォも戦場に向かうにァむいてなさそォなンだが」
「恐らく記録するためでしょう。決定的証拠を押さえる、と言えばわかりやすいでしょうか？」
「なるほどね」
「……そして、恐らくは――決定的証拠を押さえられないため、でもあるのでしょうが」

「お上が？」
「はい」
「このＬ・アルカナってよ、ふわふわ鼠だよな」
「確かにふわふわとした鼠のような生物を創り出される特殊魔法を扱われる方ですね」
「なンで不明なンだ？　アイツの魔法ってな、ふわふわ鼠から光弾出すだけじゃねェか」
「いえ――彼女の登録魔法名は【作為】。その効果のほどは不明のままです」
「ホン――？」
「しかし、ＳＳ級投入しすぎじゃねェ？　これじゃＥＤＥＮの守りが手薄になりすぎンだろ。それくらい考えられねェのかね」
「……此度の侵攻のタイミングを考えるに――」
「わざと、ってか？　……それだとよ、お上に化け物達との内通者がいるってことになンだが……」
「……私にはわかりかねます」

「だよなァ」
さて、準備は整ったな。

輝きの園側の登場人物紹介
名前　あだ名　【魔法】　等級
移動要塞・偽竜母艦ＬＯＧＯＳ
ディミトラ　マッドチビ先生　【鉱水】　Ｓ
ウィジ　青バンダナ　【喧槍】　Ｓ
リジ　赤スカーフ　【静弱】　Ｓ
ナリコ　着物狐
死得無（Ａｓｈｅｓ）　シエナ　Ｓ
梓・ライラック　口悪ちび、野蛮人　【即死】　Ａ
創設者たち
ハイドレート　紺碧ベルト　【幽拐】　ＳＳＳ

モーゲン・真凛　パッパラメガネ　【槌憶】　ＳＳＳ
ペルチット　びりびりタイツ　【仙導】　ＳＳＳ
ビーファン　脳筋娘　【隠涜】　ＳＳＳ
グロア　学園長殿　ＳＳＳ

57・有羽生符哀鳴位噛無会疎〕地阿歩止琉負不地参・

圧巻。あるいは壮観、だろうか。

マッドチビ先生本来が用いていた、牛の顔で翼を持った筋骨隆々なガーゴイル。それがばっさばっさと空に在り、その周囲をでっけェフクロウみてェなガーゴイルが飛ぶ。

プテラゴイルァみんなの足場になるので始の点の上部で待機。マッドチビ先生が止まり木っぽく足場を作ってくれたンでな、俺と青バンダナ、赤スカーフ、冷静メイドもそォいうトコにいる。

しょうみ背後でどくんどくんと心臓が鳴ってんのァ薄気味悪ィんだが、まァまァまァ。化け物だが敵じゃねェと知ってるし、そもそも迷宮の化け物ってな外にいる奴らとァ違ェし。

んで、地面。

地面にァ真っ黒な【鉱水】と、その上に立つ鎧武者たち。人魂が周囲を照らし、静かに集中を高める鬼が立ち、一反木綿がふよふよ浮かび、鴉天狗が低空を監視

して、ぬりかべがぬーんと立ちはだかって……いやもう、マジの百鬼夜行。結局式鬼ってななんなんだろォなァ。まァそれァ今回のコトが終わったら着物狐に聞くとして。

大目玉。

地上にいる――めちゃくちゃ久しぶりの、アイツ。

「クク……吾の式鬼のどれよりも目立っているな」

「まァ毛色が違い過ぎるしな」

「ＬＯＧＯＳにしまってあったのずっと忘れてたのよね」

そう。

ティラノサウルス、だ。ティラノゴイル。

大きな丘でルルゥ・ガルの足止めにも使ったティラノゴイルの、２体目。

銀色ボディがきらりと光る、ホントはこんな形じゃなかったって言われてる代表格恐竜ティラノサウルスのガーゴイル。

それがでん！　と先陣に突っ立ってる。

「皆様！　予測通り、北方から多量の魔力反応を検知しました！　全て魔法少女

――いえ、一つだけ違います……これは!?」
それは――雷雲を纏う、巨体。四つ足、四つ腕、牛の顔。両翼。鍛え上げられた身体。
見たことがある。ありすぎる。
そンで――けど、立位じゃなくて。馬かなんかみてェに、獣のよォに走る。
「ベルウェーク!?」
「ウィジ。あり得ない。ベルウェークは私達が殺した」
「リジ。だが、事実目の前に……」
――違う。
あれァベルウェークじゃねェ。あんなのが、あの程度が、神であってたまるか。
「【寄生】、ネイビー・ブルー様ですね」
「あン時の死体ァ消滅したと思ったンだがな」
「回収されていた、と見るべきでしょう。加え――敵ではなく、EDEN側に」
まァ、条件付きじゃねェと殺せねェ神じゃねェならどォとでもなる。雷ァ確かに厄介だが、ガーゴイルってな別に内臓だのなンだのがあるワケじゃねェからな。通

電した所でなんのそのさ。
問題ァ俺達だが――。
「問題ない。私が防ぐ」
「頼んだ」
「任された」
赤スカーフの【静弱】でなンとかなる。
もしくァどこぞに避雷針代わりの【喧槍】ぶったてるのもアリだが、そもそも俺達に辿り着く前にガーゴイルが吸うだろ。
「では、手筈通りに」
「おゥ、任せたぜ冷静メイド」
「了解いたしました」
五角形を滑り降りて行く冷静メイド。
さてさて――相手ァ一個小隊に満たねェ魔法少女の軍団。
対し俺達ァ、大隊と呼べるだろォ数のガーゴイル軍。
力比べさ。まァ、俺達に殺意ァ無いんだがね。

口を開く。
叫ぶ。
「よォ金髪お嬢様、ポニテスリット――久しぶりだなァ、オイ！」

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

梓・ライラックが「世界を殺すために始の点に向かっている」という話は、瞬く間にＥＤＥＮ中に広まった。本来は機密として取り扱われるはずのそれは、まるで誰かが風潮したかのように、一瞬で、誰も彼もが知る話となったのだ。
それに対し、魔法少女の反応は様々。
先の騒動から梓・ライラックへの嫌悪感をむき出しにする者もいれば、何かの間違いだと否定する者もいる。梓・ライラックは前から怪しいと思っていた、などと言い出す者、あの子がそんなことをするには理由がある、と動機を考えようとする者。
しかしそれらは――圧倒的事実を前に掻き消される。

フェリカ・アールレイデとミサキ・縁の蘇生。梓・ライラックの叛逆を伝えたのがその2人であり、蘇生をしなければならない事態に陥っていたという事実は、少なくとも彼女らを遠征に駆り出すには十分な動機だった。

急遽組まれた遠征組。

目的を「梓・ライラックの確保及び殺害」とするそれは、事実上の封印措置への一手である。確保するか、殺して蘇生させたら——反魔鉱石によって封印をする。少なくとも。

少なくとも——そんなことは、フェリカ・アールレイデもミサキ・縁も望んでいなかったはずだ。けれど。だというのに。なのに。しかし。

「……」

「……」

2人の——あまりにもおかしな様子に、内心で溜息を吐く。

義務感か、使命感か。それとも別の何かか。

「あるるらら、気乗りしないかい？」

「気乗りしている子がいるのかな」

「……そうだね。でも、少しはいるようだよ。それに……」
「……妙な気の高まりを覚えている。精神に作用する類の魔法か薬物か。何かしらが使われているのだろうな」
「な、何故それをもっと早く言わない？」
「言った所で、遠征組突撃班が此度の件を断ることは出来ないだろう」
「なんかねむいのにねむくなーい」
カネミツの言う通り。
向精神系統の魔法……恐らく自分達の出発時に聞いた、聞こえない音。上官の誰かか、その場からは見えなかった誰かが使っていたのだろうその魔法は、今尚自分達に効果を発揮している。
即ち、梓を殺さなければいけない、という感情。確保よりもそちらを優先しそうになる無意識の操作。
あるいは。
後方。戦闘をする事のない遠征組観測班の、その隊長を見遣る。
最弱の部隊として名高い遠征組観測班アルカナ隊は、しかしその魔法少女歴を推

定３００以上とする――自分達よりも遥かに深くＥＤＥＮに関わっている存在だ。
昔、遠征組というものがきちんと振り分けられていなかった頃からＥＤＥＮの外を見てきた魔法少女達。
その筆頭が、Ｌ・アルカナ。
どんな魔法を使うのか不明。ただ常に周囲にいる魔法のようなものが弱めの攻撃をする事、だけしかわかっていない、未知の魔法少女。ＥＤＥＮ中を飛び回って情報を集めている己でさえ何も知らない彼女。
今回の小隊の中で唯一、上層部と繋がっていそうな魔法少女。
「気を付けるに越したことはない、かな」
言葉を紡ぐのは口の中だけ。
誰が聞いているかはわからない。
最初からＥＤＥＮなんて信用していない。
あの日。国が滅んだあの日。
あの時に見た――強い光。
「……しかし、ナリコか。そのような名をここで聞くとは思わなかった」

「ああ、カネミツの部下、だったんだっけ？」
「部下。あるいは参謀か。国が滅んだ後――適当な理由を付けて奔放したのだが。まさか生きて、魔法少女になっていた、などと。不謹慎ではあるがな。少しばかり、期待はしている」
「強いのかい？」
「強い、とは少し違う。――恐ろしい、もしくは――不透明、が正しい。……あるるらも、見た事はあるのではないか？」
「狐面のお姉さん。うん、あるよ。私が生まれた頃から、ずっと姿の変わらないお姉さん」
「それは私が生まれた時からもそうだ」
「……？　その時は魔法少女ではなかったんじゃないのか？　なぜ……」
「奴は身体の九割九分が魔物だからな。国では妖と呼んでいたのだが、故にこそ姿が変わらなかった」
「……それが何故、魔法少女になれる」
「魔法少女になることに、魔物であるか、人間であるかは関係ないからね」

よくわかっていない様子のザイフォンを見て、少しばかり笑う。
ナリコ。それは、自分達一般人でも知っている名前だ。
侍衆の艶桜。永遠に変わらない美。妖術師。そして――妖。
すべてが懐かしいと、もう一度笑う。
「……ライラックは、なぜ〝世界を殺す〟などという結論に至ったのだろうな」
「おや、ザイフォン。梓の事が気になるのかい？」
「そ、その聞き方は悪意があります。……気にならないはずがない、でしょう。その、一応ともに戦った仲間であり、色々と教えた相手でもある、ので、その」
「ふふっ、ごめんね、確かに今のは私が悪い。……どうしてその結論に至ったか、か」
世界を、魔力を殺す。
それが可能なのかどうかと言えば、可能ではあるのだろう。自身が、世界に自己を溶かす感覚で魔法を使うからこそ――わかる。
世界は死にたがっている。
殺して欲しいと願っている。

もうこれ以上魔法を使うなと。もうこれ以上――続くなと。
魔法少女に、訴えかけている。
「ヴェネット」
「何かな、あるるら」
「殺意は、あるのかな。梓を殺そうという気は」
「彼女次第、かな。抵抗しないのなら勿論殺す気なんてないよ。……けど、取り調べを受けた後――ほぼほぼの確率で、封印措置になるだろう。だから」
「逃がそうとしている？」
「……さて、どうだろうね？」
頭を冷やして欲しい、だけだったはずなのだ。
最初は。【神速】がアールレイデも、【波動】が縁も、【神鳴】も【光線】も。
けど、今は、そうも言っていられない状況となってしまっている。
「ヴェネット。カネミツ。ザイフォン。……ルナも」
「なんだ、改まって」
「どうした？」

「……」
「なぁにー」
言うべきではない、のかもしれない。
けれど、他の隊と離れている今だからこそ、言っておくべき事がある。
「今回の件が終わったら――私は、ＥＤＥＮから離れようと思うよ。遠征組からも抜けるつもり」
「……!?」
「……そうだな。私も、そのつもりだ」
「な、カネミツまで!?」
「ゆっくりねられたらどこでもいー」
「一応理由は聞いておくよ、２人とも」
一応、なあたり。
わかっているのだろう。
「今のＥＤＥＮは、少しおかしいからね。内部にいては見えない事もある。それに……少しばかり、国が気になるんだ」

「ああ。ナリコが表に出てきたという時点で、何か事が動いているのは確かだろう。加え――上層部があまりにも不透明だ。悪意に塗れている、というべきか」
「……わかった。けど、許可を出すのは私じゃない。隔離塔に入れられる可能性もある。だから」
「逃げるよ。もしかしたら――梓側に着くかもしれない」
「その時は敵となる。容赦はしてくれると助かるが」
「味方に向ける刃は無いさ。……大丈夫。何か、大丈夫な気はしているんだ。SS級だからね、少しはわかるんだよ。自分の役割が。私の役割はこれじゃない、ってね」
あと少し。
あと少しで、始の点に着く。
「――見えましたの。敵将――梓さん。そして――」
「なんと膨大な数の魔物の群れだ。あれではまるで……」
「やっぱりアイツ、魔物と結託して……！」
始の点が見えた。
終の因がよりも歪な形をした、光り輝く迷宮。あそこから魔力が世界に流れ出で

ているのがわかる。
　けれど。
「殺されていない、みたいだね」
「ああ、どころかこの布陣は……」
「私達を迎え撃つ気力しか見えんな」
　既に始の点に着いていて、だというのに魔力が殺されていない。
　やはり誤報か。その動揺は、しかし彼女の引き連れる魔物の大群によって掻き消される。
　椅子に座る梓。
　右腕の義手。右目には眼帯をつけ、身体の左側面には痛ましい火傷痕。
　座っているのも、尊大に構えているというよりは――。
「……あれは」
「立つことができないみたいだね。……それでも、死ぬ気はないんだ」
「死ねば治る。けど、今死んだらＥＤＥＮに帰ってしまう。それはできない。だからだろうね」

だから、ではないのだろうけれど。
その痛ましい姿に、けれど叫んだ者がいた。
「突撃しますの――！」
「殺してやろう、梓！」
明らかに異常。
明らかにおかしい様子の2人。
それを。
梓は。
「よォ！　金髪お嬢様、ポニテスリット――久しぶりだなァオイ！」
凄惨な笑みで、迎え入れる。
そして、彼女の隣に立つ、短期間のみEDENに逗留した魔法少女が――この遠方から見てわかる程に巨大な槍を形成する。槍？　否、塔だろう。あそこまでとなれば。
形成された塔に、梓が手を触れる。
たったそれだけで――あれなる塔が、必殺のモノになったとわかった。

「総員――ッ、散開!!　アレに触れるな、あれを止めようと思うな！　アレは――」
「【喧槍】弐式、【即死】付与――死ノ柱」
発射される。
射出される。
世界を殺す、死の魔力を含んだ大きな槍が、一直線に飛んでくる。
避ける事は可能だ。自分達は。
だが。
「――!?!?!?」
「ワハハ、大丈夫か隊長！　それ死ぬんじゃね？」
「……痛い。痛い痛い痛ーい！　っていうか死んじゃう死んじゃう、――なん、て？」
「元から死んでるから」
「ワハハハ！　ってことだ、残念だったな悪魔！　あ間違えた梓！」
その槍を顔面から受けたのは、かつてＥＤＥＮを襲った魔物、ベルウェーク。
異形なる図体から出す声にしては可愛らしすぎるソレ。【寄生】、ネイビー・ブ

ルーがその正体だ。
　すでに死んでいるものに【寄生】しているから、死なない。ただ大きなものが当たって痛い。
「ハハハ！　なァに言ってやがんだよ。お前の隊長よく見てみな」
「ワハハ、強がったって無駄無駄！　【即死】対策はばっちりなんだ！」
「……」
「……あり、隊長？　死んだか？」
　沈黙。
　SS級魔法少女、【寄生】のネイビー・ブルー。その彼女が、一切の声を発さなくなった。
　動揺がまた１つ広がる。
　誰もがそれを認識していた。梓・ライラックは魔物をこそ殺し得るが――魔法少女を殺す事のできない者であると。確かにベルウェークに【寄生】したネイビー・ブルーの本体はＥＤＥＮにいる。故に殺してはいない、のかもしれない。
　けれど、もしあの塔が、ベルウェーク以外に当たっていたら？

そして――死体への【寄生】をも乗り越える【即死】は、果たして。
「随分と――ご挨拶ですわね、梓さん」
「あァよ。ま、そう急くなってこった。一応弁明ァしとくぜ。俺ァ魔力も世界も殺さねェ。殺しても意味が無ェって知ったからな。だから、お嬢達と戦う理由ァ無い」
「――そうですか、と。頷くように思いますの？」
「いんやさ、思ってねェよ。だからこんな布陣敷いてンのさ。そんで――こっちから、宣言させてもらわァ」
まるで、謳い上げるかのように。
彼女は叫ぶ。
「俺達ァＥＤＥＮを正しにＥＤＥＮへ侵攻する！　投降するなら今の内だ。しねェんなら――ちィとばかし、眠っててもらう。ハハハ、安心しな。殺しァしねェからよ！」
「ならば、ここで死んでください、梓さん」
「【静弱】」
紛う方なき【神速】の一撃。彼我の距離を一瞬にして詰め、立ち上がる事もまま

ならないのだろう梓の心臓を一突きにするその攻撃は、半透明の盾によって防がれた。

即座に後退する少女。そして――。

「投降ァいねェらしい。残念だけど――合戦だ。ハハハ！　愚弄琉愚弄琉府石負不出土栖碑立（叫べよ　晒れよ　死霊の群れ）！」

「仕方ない、か。【凍融】――全て融かすよ」

千にも及ぶガーゴイルの群れ。

それが全て、ぴしゃりと解ける。ヴェネットの【凍融】はガーゴイルに相性が良い。

はずだった。

「ハハハハハ！　おい、班長！　なんも成長してねェなァアンタ！」

「――何？」

魔法を使う。

自身を掠める何か。カネミツが後ろに下がる。ルナが魔力を溜める。ザイフォンが【吸吞】を手のひらに浮かべ――ヴェネットが、カクン、と。首を下ろす。

「!?　隊長!?」
「何かいるぞ！」
「これは……少しばかり、不味いかもしれないね」
突然意識を失ったヴェネット。その身体は、しかし落ちる事無く――どこかへ運ばれて行く。
「この、【吸呑】！」
「遠征組突撃班！　援護する――【的中】！」
「【深挟】！」
ザイフォンの【吸呑】の核。それはヴェネットに向かって飛んでいった――けれど、ヴェネットの肉体側がその軌道をカクンと曲げたために、あたらなかった。補助してくれたのは防衛組攻撃班イドラ隊の宵知ちゃん。一瞬【吸呑】の核に触れて弾き、【的中】を用いてヴェネットに追従させる。
前方からは学園からの立候補者であるカギネという子の【深挟】が。
2つの魔法に追われるヴェネットの肉体は――しかし、複雑な軌道を描いて運ばれ、当たらない。

「まさか、あの時の透明なウルフ種、か？」
「……同系統の魔法ではあるのだろう。しかし、今、如何にして隊長が死んだのかわからなかったな」
「死んだ、という感じはしなかったかな。死んだのなら肉体は早期に分解されるだろうし」
「にげるー？　かえるー？」
さて、自分達はどういう立ち位置を取るべきだろう。
これを明確な攻撃と捉えているのは、学園組のA班B班、防衛組攻撃班の幾人かと特例組潜入班の幾人か。
そうでない者達は、やっぱり肉体が残っている事のおかしさに気付いていて、様子見。
「殺しましたのね。やはり口ではどうとでもいえますの。貴女は――初めから、そういう人ですわ」
「梓。どうして――私達を騙していたのだ」
「ン？　何のことだ？」

「とぼけずとも良いですわ。すべてわかっていますので。――夜の使徒、梓・ライラック。貴女は――冥界の民、ですの」
「して、その使命とは――私達を、魔物も、魔法少女も、人間も。その全てを冥界に引き摺り込む事。相違は？」
「……あー、まァ、無ェよ。大正解だ。誰に教えて貰ったのかァ知らねェけど、ばっちし正解だ」
やっぱり、２人の様子がおかしい。
これは自分達以上に、何かをされている。
「ならばやはり、ここで殺しますの。もう貴女の言葉は信用できませんので」
「決別だ、梓。――圧し潰す」
引き際だ。
あの２人は、おかしい。だから。
「・椅子低区座矢羅栖琉粗暹羅氏」
魔法を用い、その狂騒から逃れることに成功した。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「椅子低区座矢羅柄琉粗暹羅氏（目を覚ませ太陽の使徒）」

静かに言葉を発したのは、Ｌ・アルカナ。

誰に聞こえたとも知れない静かな声は――しかしその瞬間、その場に狂乱ともいうべき熱気を齎す。

動揺は完全に消えた。

どころか――ただ、その身を以て敵を滅ぼさんと。

今の今まで様子見に徹していた者達まで、その瞳に闘志を灯し、魔法を発動する。

誰よりも早く、天高く腕を上げたのはエルバハ・イドラ。

上げた。あるいは、掲げた、だろうか。

そこに収束するは――世界を焼き焦がす熱量。青い。青い。青い青い青い青い青い――炎。

青き炎の球体は、ばくんばくんと脈を打ちながら、膨張に膨張を重ねて行く。

昏い笑みがあった。ニヤリと吊り上げられた口角があった。炎は、炎球は。否。否。否。

小さな、青い太陽は。
「【喧槍】参式、【即死】付与、命名、死針！」
「死ね――」
敵方より飛来した、極細の槍によって殺される。
エルバハ・イドラが、ではなく、魔法が、だ。
「ッ、チャージ妨害か！　お前らぁ！　35秒だ、そんくらいの時間ぁ稼げんなぁ!?」
「ワハハ、ワハハハ！　ついに来た！　来たな、この時が！　さぁ――やろうか悪魔！　ウチの不確定とお前の確定、どっちが強いのか勝負だ！」
「【飛斬】」
カネミツが刀を振るう。
昇級試験を受けていないだけで、十二分にS、あるいはSSに届かんとする、世界を切り裂く斬撃。
それは真っ直ぐに梓を狙い――けれどまた、半透明の盾に防がれた。
「……厄介だな」

「じゃー、こおらせちゃおー」
投げられるのは、極大ともいうべき魔力塊。
それは半透明の盾に当たり――そこに、巨大な氷山を形成する。突然の重さにバランスを崩す盾の魔法少女。好機だ。
盾の無くなった敵に向かい、数多の魔法が飛ばされる。
しかし、それを防ぐものがまだいた。
数多の魔物――ガーゴイル種の群れ。
「旗炉又不安端（死の何を恐れているのですか）」
「やぁあああああ!!」
また、L・アルカナが言葉をつぶやく。
それを聞いたのは、未だ学園生である身のクイネ。その魔法【鉄爪】を用い、単身ガーゴイルの群れに向かって行く。
けれど――それを諫める者はいない。
どころか。
「殺しますの」

「圧し潰す！」

彼女に追従するように、フェリカが、ミサキが。否、他の魔法少女の全てがガーゴイルの群に向かって行く。遠隔魔法少女は一斉にチャージを開始し、近接魔法少女は飛行魔法を止め、地面のガーゴイルを相手に。

そこに恐れなどない。

そこに戦略など無い。

文字通りの死兵。

文字通りの屍兵。

「隊長、こちらに手が来ます」

「キフ」

「【抑制】」

静かに。

L・アルカナににじり寄っていた何者か。

その何者かの次の動作を見破った【心眼】が幻剣公佳と、【抑制】という魔法を持つキフ・心の連携により、透明だったそれの姿が晴れる。

「嘘、【隠涜】が――」

「【目印】をつけたから、もう逃げられないよ」

それは創設者が1人、ビーファンという少女。【隠涜】が切れた瞬間にバックステップをして離れ、再度【隠涜】を用いるも――黄色く光り輝く魔力が、彼女に追従して離れない。

「……隊長をやったのは、アレか」

「カネミツ、仕留めるのは任せるぞ」

「良いだろう」

黄色い光に向かう【光弾】や【光線】を、けれど光は上下左右にと避けて避けて避けまくる。

それが、地面に近づいたタイミングで――【吸呑】が発動。

効果範囲外へと逃れようと吸る黄色い光は、けれど適わない。【吸呑】はそれほどまでに強く生物を引き摺り込む。

後は簡単だ。カネミツによる【飛斬】で、その光は散った。

「仇は取ったが、まだアレが残っている。油断するな、カネミツ」

「……」
「カネミツ？」
「……お前は他の魔法少女と連携し、アレを殺せ。私は――下の妖に用がある」

散った光。
その周辺に落ちたのは、幾枚もの紙。
カネミツはそれに見覚えがあった。
近づけば――倒れている者などどこにもいない。
ただ紙が。
ひらひらと、桜吹雪のように舞っているのみ。
「紙。紙か。懐かしいな」
「クク……腕が鈍ったかえ、カネミツ。興奮のあまり身代わりを切り裂くなど――呆れたものぞ。言の葉を繰るのは吾らの領分。何に惑わされているのやら、呆れて言葉も出ぬなぁ？」
「ナリコ。久方ぶりだ。――堕ちまい、堕ちまい、としていたはずだが、とうとう

魔に堕ちたな。そこまでとなれば、討伐もしよう。身から出た錆だ」
「ククク！　嗚呼、嗚呼、良いぞ。異国の地なれど、空には姫がいて、眼前には頭領がいる。嗚呼――吾は恵まれている。なぁカネミツ。知っているか？」
「問答がまだ必要か、ナリコ」
「お主らの楽園――ＥＤＥＮと言ったか。そこは今、カンコウの襲撃を受けているらしいぞ？」
隙ができた。
その言葉に、名前に。カネミツともあろうものが驚いた。
直後、ナリコの身体はカネミツの眼前にあり。その手は刀を持つ腕を、その足は――彼女の顎を捉えている。
「うッ……！」
「ククッ、ククカカ、カカカカッ!!　魔に堕ちた!?　カカカ、ククク、嗚呼、なればお主はなんだ。魔法少女が――魔でないと？」
「……妖術。式鬼。そして、魔法か。貴様には過ぎたる力だ。私達侍衆の温情が無ければ、とっくに討伐されてた夢魔風情が――随分と、ヒトに懇意じゃないか」

着物の袖が視界を覆う。刀を引き抜き、【飛斬】を用いながら距離を取らんとして、足に巻き付いた紙に体勢を崩される。追撃は来ない。見抜かれていると、カネミツ自身も知っている。

普段使っている長刀ではなく、懐に仕込んだ小刀。どのような得物であっても【飛斬】は使い得る。【飛斬】で戦う姿を見せた事は無いはずなのに、すべて見抜かれている。

「頭領、嗚呼、頭領。ククク……弱くなったな。吾程度を殺し得なんだとは。それとも、今は無為な興奮を受けているからかえ？　ククク……お主が殺さんとする者の名を、覚えているか？」

「……覚えていない。だが戦わねばならない」

「ククッ、良い良い。それを自覚しているのならば、良い。嗚呼、だからこそ吾の元に来たのか。少しでも己を律するために」

「殺せ。殺す気で来い。私は――そうせざるを得なくなっている」

「嗚呼、吾もそうしたかったのだがな。ククク――吾の妻より、それはならぬと言われている。あの時とは立場が逆ぞな――ククク、なんとしてでも吾の命を取りたく

なかったお主と、お主らの命を刈り取る気でいた吾。因果とは廻るものぞと、ククク、教えてくれたのは、殿だったか？」

紙で作られた槍。それを避けつつ、カネミツ自身も刀を振るう。

単なる斬撃。しかし研ぎ澄まされた一刀は、【飛斬】を纏った絶刀。紙での防御など間に合わない。否、間に合えど、意味を成さない。切り裂かれたそれはナリコへと届き、その肩を、胸を、腹までをも大きく切り裂いた。

噴き出る朱――それは血の色ではなく。

≫ KURAITSUKITE CHINIKUWO ONOGAMISAEMO ONOGAKATETONASE ≪

朱色が周囲の紙に紋様を描く。

ざぁと色合いを失っていくナリコの身体は、やはり身代わり。朱色はその身体にさえも文様を書き込み、一匹の狐へと形を変えた。

「式鬼か――ならば」

カネミツが己の刀で指の腹を浅く斬る。

そして、己が刀の腹に、同じく紋様を書き込んだ。

» JAWOHARAI SUBETEWIKISE «

「ク、相も変わらず妖術の下手な頭領ぞ。吾の式鬼を消す紋も書けぬか！」
「私は妖ではないので、な！」
斬る。紙でできた狐を斬る。
あまりに容易に斬られた狐は、しかしその頭が斬られた身体を食いて――大きくなって、またもカネミツに襲い掛かる。斬る。斬られる。大きくなる。斬る。斬られて、大きくなる。
「あまり式鬼だけに躍起になるな。吾は寂しいぞ？」
「【飛斬】――ッ！」
「ククッ、そうら頭が隙だらけ――おっと」
刀を振り切り、上体の反れたカネミツの後頭部。
そこをナリコの蹴りが襲う。襲いかけた。
止まったのは、何を察してか。
「……私とて、この年月を無為に過ごしていたわけではない」
「ク――そうらしい。まさか、まさかまさか！」

「そう喜ぶな。――確かにこの姿は、私も妖染みているとは思うがな」
それは、【飛斬】だ。
けれど――刀だけではない。全身。全身だ。身体中、至る所に纏った【飛斬】。
得物はなんでもいい。
長刀でも小刀でも、剣でも槍でも――爪でも、拳でも、髪の一本でも。
カネミツがそれを武器だと思えるのなら、なんでもいい。
「ククックッ！　それをして、その姿をして！　妖染みているなどと――謙遜も謙遜よ！　その姿、紛う方なき妖ぞ！　頭領――歓迎するぞ、よくぞ来た、吾の高みまで！」
「ふん、低み、の間違いだろう。堕ちる気はない。だが」
火蓋などとっくのとうに斬り落とされている。
なれば。
「いざ、尋常に――」
紙吹雪が舞い上がる――。

1688　57. 有羽生符哀鳴位嚙無会疎, 地阿歩止琉負不地参.

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

58・有侠同糸・

斬る。避けられる。斬る。避けられる。
時折来る蹴撃には首を振り、負けじと蹴りを出してそこから【飛斬】を飛ばす。
確実に入った、と思えば、それは身代わり。身代わりの亡骸を食らって妖狐が大きさを増す。
木陰、岩陰、はたまた舞い落ちる紙の陰から、ナリコがまた姿を出す。飛ばした斬撃は数知れず。しかし、ただの一太刀も届いてはいない。
侍衆。ヒノモト。滅んだ国で、戦いを選択した己らを。
――冷えていく。全身を巡る血液が、冷えて冷えて――滾っていく。
「クク――斬撃の精度が上がっているな。戦っていく内に修羅が如き強さを見せる……頭領、ようやく勘を取り戻した、と言ってやるかえ？」
「そうだな。お前の言う通りだ、ナリコ。私は何もしていなかったわけではないが――鈍っていたのは、事実らしい。死を恐れなくなった。死を軽んじるようになっていた。怪我を、傷を受ける事を、なんとも思わなくなっていた。――弱くもなる

わけだ」
「して、剣鬼よ。吾にその剣技、届かせられるか？」
「無理だな。なにせ――この場にいないだろう、お前」
ク、と。
ククク、と。
笑い声が木霊する。
今の今まで打ちあっていた者は、すべて紙の束。妖術・式鬼城郷。魔法少女が覚醒する太陽の魔法とは違う。世界を巡る風が生み出す、魔なる術。あるいは魔術とでも呼ばれるべきもの。
邪を祓う剣では、これを打ち負かせない。
「私は、どうなる？」
「択が与えられる。吾らに降り、魔法少女が楽園へ反旗を翻すか――全てが終わるまで、眠りに就くか」
「今の私は、後者を選ぶ。――それはあり得ぬ事だと知れ。何者かが、私達を狂わせている」

「ククク、良い良い。吾にも心はある。姫も含めて、悪い様にはせぬ」
「まるで悪者だぞ、今のお前は」
「ク――妖が、善なりし者であったことが、今の世で一度たりとてあったかえ？」
紙が舞う。
全身を覆う魔法が、それを切り裂く。切り裂けば切り裂く程細かになって、けれどその吹雪が止む事はない。
剣を取る。
ここに敵がいないと分かっていて、負けると知っていて。
大人しく降伏する、という手段を取る事ができない。それは己の意思でなく。
「ナリコ。今より私は――意識を捨てる。止めろ。命令だ」
「御意」
脳裏に響く。脳裏を駆ける。
――≫椅子低区座矢羅栖琉粗暹羅氏≪
――≫旗炉又不安端≪
何者かの声だ。

誰かの声だ。聞き覚えの無い、聞き馴染みのない声。
目を覚ませ、太陽の使徒。
貴女達は死んでも貴女のまま。ならば死の何を恐れるのか。
戦いなさい。戦いなさい。戦いなさい。沈んだ陽は、また昇ります。なれば――夜を恐れず、戦いなさい。
「【飛斬】――食え、私を」
そこに、嵐が現れた。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ジャむぴー！　打ち上げだ、天まで私を飛ばしなぁ！」
「り」
小さく声を発した浅黒い肌の女性がエルバハ・イドラに触れた――その瞬間、イドラの姿が掻き消える。【超躍】。触れた対象を指定方向に吹き飛ばすＳ級魔法。高度６０００ｍにまで一気に打ちあがったイドラの身体には膨大な負荷がかかるが、

そこは身体強化でなんのその。
　飛んでいる最中もチャージを開始し――その最高点から、目に見える熱量がイドラの右手に集中する。
　天にあった雲を割り、青き太陽が自由落下を始める。35秒。その長めのチャージ時間は――けれど、だからこそ飛来する太陽の恐怖を敵に与える。
「本体を撃墜しなさい、ガーゴイル達！」
「させません。【重圧】！」
「――【斜地】」
　落ちてくるイドラを刈り取らんとガーゴイル達が殺到するも、その全てが何かに抑えつけられるように高度を上げられず、更にはふらふらと左右に揺れて、墜落して行く。25秒。
「じゃムピー、隊長の所まで」
「り」
　次に飛ばされるのは宵知。瞬時にイドラのすぐ下の辺りまで跳ね飛ばされた彼女は、落ちてくるイドラの身体にしがみつき、【青陽】を掲げる腕に自らの手を沿わ

す。

15秒。

ここまで来ると、ここまで近づくと――圧巻だ。すべてを焼き焦がし、全てを焼き尽くす青なる炎が、その熱が。ただ周囲にあるだけで、ガーゴイル達も溶けていく。強化が無ければイドラ自身でさえ焼け溶けるだろうその熱量はドクンと最後の脈動を終えた。

5秒。

「食らえ、食らえ、たんと食らえ――【青陽】、」

「背後の大海へ魔法を放ちなさい、エルバハ・イドラ」

「!?」

急に体勢を変え、自分達が通ってきた方の海へ【青陽】を投げるイドラ。

彼女の手から放たれた太陽は凄まじい余波を残しながら沖合に着水し――周囲の全てを白と水で染め上げる。

あんなにも遠くへ飛んだのに、すべての魔法少女が感じ取り得る熱量が。

けれど――海で弾けた。

「どうして、【的中】も使ったのに！」
「おやおや、これは間一髪。ふふふ、申し遅れました。私、ペルチットと申しまして――ＥＤＥＮ創設者が１人、ＳＳＳ級、【仙導】という魔法を使います。以後、お見知り置きを」
「――今の感覚。心を操る魔法だなぁ？」
「はい。それが、どうかしましたか？」
本気の一撃を、楽し気な一撃を狂わされたというのに、イドラはちっとも悔しがっていない。
どころか、にたりと笑って。
「私達の中に、似たような魔法使うヤツがいる。気を付けなぁ、それのせいで私達ぁ止まれなくなってるからよ」
「――貴重な情報、感謝します」
「んでもって――【青陽】は海に突っ込まされた程度じゃ消えないよ」
高波が上がる。違う、あれは吹き飛ばされた波だ。
弾けたのは【青陽】ではなく、海。海面が弾け飛んだに過ぎない。【的中】はしっ

かり発動している。【青陽】は水程度で消える事はなく――故に、海中を蒸発させながら、また戻ってくる。

「あら、これは不味いですねぇ」

「おぉ、不味いと思うんだねぇ。んじゃ、どうする。創設者が１人に出会えるとは思ってなかった。今のＥＤＥＮのＳＳ級を相手に、ＳＳＳ級はどう出るのか――」

「ルナ・ウィーマーン。【氷壊】を最大チャージし、【青陽】に当てなさい」

「はーい。……あれー？」

極低温が背後に収束する。

その氷は脅威だが、同時に【青陽】を止める程のものではない。

故に、と。

ペルチットは手に持つ指揮棒を、もう１人に向けた。

「シェーリース。チャージしていた【神鳴】を、【青陽】に当てなさい」

「わかった、目標を変更する。……？」

２人とも、よくわかっていないままに――両者Ｓ級から放たれた魔法が、舞い戻ってきた【青陽】に直撃する。氷と雷。しかし、しかし、しかし、だ。

Sが2人でも、SSには届かない。そんな単純計算ではない。
「――リジ！」
「さっきの氷、使わせてもらう」
けれど。
それがもっともっと集まれば。
「【喧槍】――！」
「【静弱】……氷の華付き」
「ハハハハハ！　驚いたか！　まだ俺がここにいることに――そして死ね、魔法！」
数多の槍が【青陽】を貫く。溶ける事のない魔法の槍。そして、先ほどルナ・ウィーマーンが氷山をくっつけた【静弱】。【静弱】を解除することなく、身体強化に物を言わせて無理矢理に持ち上げたそれで、【青陽】を殴り防ぐ。
極めつけは敵将だ。何事かを哄笑する敵将が、始の点の斜面をその椅子で滑り降り、跳躍し――その義手を、【青陽】の中に突っ込んだ。
「馬鹿か貴女は!?」

「アンタ何やってるのよそこで！　逃げたんじゃなかったの――!?」
「理解不能」
「ハハハ！　熱い熱い熱い！　だがこんなもん防げンのァ俺しかいねェだろ！　ハ――小さい太陽だァ!?　うるせェうるせェ、マジモンの太陽の使徒がどっかにいやがンだ、この程度の目晦ましで見失って堪るかよ!!」
悍気が走る。
先のあれは、チャージ妨害などではなかったのだと思い知らされる。
――【即死】。世界を殺すに足る魔法。
「くらえ、マッドチビ先生最新作!!　『折れないし溶けないし凍らないしあと軽いすっごい義手』！！！」
「それ正式名称じゃないって何回言ったらわかるのよ!!」
発動する。
敵将の魔法、【即死】。
それが勢いの削がれた【青陽】を飲み込み――殺す。
「……そりゃ、世界が縋るワケだ」

「隊長、もう一度！」
「そうしたいのは山々なんだがなぁ、どぉやら潮時らしぃ」
「え――ァ？」
がくん、かくん。
自由落下する2人が意識を失う。アムリタ・アールレイデと鮫が受け止めていなければ、2人の身体は潰れていたかもしれない。あるいは下にいる式鬼のどれかが受け止めた可能性もあるが。
「隊長!?　宵知!?」
「何かいる。けどこれ無理ポ」
「透明な、音もしない、気配も無い、何かがいるカニねぇ」
奪われる。
戦場にいる魔法少女が次々と――奪われていく。
「鮫、【斜地】を――」
「敵の姿が見えなければ意味ないカニねぇ」
そうして、3人も。

意識を失った。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ティケ。地上にソードマスターっぽいのがいる」
「ワハハ、え？　なんで？　オリジンじゃんやっば」
「あそこには遠征組突撃班のカネミツさんが行ってたはずだけど」
「なんだよ驚かせんなってー！　ワハハ、カネミツなら大丈夫だろ、ウチ話した事ないけどな！」
隊長を真っ先に殺され、周囲の魔法少女が意識を失ってく中、ティケだけは明るかった。
明るく――ちょっとイラっとしていた。
「それよりさ、ワハハ。ウチさ、ウチさ、アレと戦ってみたかったんだよ。本気の殺し合い！　……でも邪魔した奴がいるよなぁ」
「誰？」

「多分アイツだ。なぁ井上、ウチ今からめっちゃ叫ぶからさ、ワハハ、ただの超絶嫌がらせに音運んでくれないか？」

「……うん。ティケのためなら」

「あ、じゃあ周囲に音漏らさないようにしてあげる。そいつの耳元で突然音響く感じとかどー？　やば、良い考えすぎて自分好きになってきちゃった……」

「サイコーじゃん！　あそだ、そんじゃさ、しゅぴ」

「わかってる。【譜運】を反射して全方位、でしょ」

「ワハハ、戦場来てこんだけ遊んでんのウチらだけだぜ！　でもまぁ隊長死んじゃったしな！　ワハハ、ワハハ――楽しく行こうぜ、なんたって戦場なんだからよ！」

ティケの周囲から音が消える。スタットの【無音】。【無音】内部では音は聞こえるので、ティケ以外は耳を塞いで――その苛立ちを、彼女は叫ぶ。井上の【譜運】ではまだ言葉を届けることが出来ないので、ただ単純に叫び声を。その強靭な肉体から放たれる爆音は、あるいは【音破】にさえ届くのではないかと思う程煩く。

「届け先は、遠征組観測班アルカナ隊隊長、でいいん、だよね？」

「おう！　しゅぴ、増幅の際は耳栓忘れるなよ！」

「わかってるって」
　ニタリと笑うティケ。
　折角本気で殺し合えると思ったのに、悪魔の名前も忘れさせられて、全然前線に出させてもらえないし、よく見たら身体ボロボロだし。
　鬱憤が溜まっていたので――嫌がらせをする事にした。
　ティケ。【抗運】。
　その本質は、デリカシーというものを母親の胎内に置き忘れた空気の読めない狂った化け物である。

「隊長、何か来る」
「キフ」
「こんにちはー。お届け物でーす」
「？　仲間？」
「ごめんなさい隊長。間違えたみたい」

「届け物。誰から？」
「ウチの副隊長。まぁ副隊長なんていないんだけど、ティケからお届け物。で、これを【反射】して、と」
魔力の塊。
そして――周囲を固める、四枚の鏡。届け人は耳栓をして、にんまりと笑った。
「わかってるなら説明は要らないよね。※余計な手出ししてんじゃねーぞばーか※だって」
塊が、Ｌ・アルカナの直近で弾ける。
――その瞬間、Ｌ・アルカナの世界から音が消えた。周囲にいた観測班の者達も。すぐに【抑制】を使ったキフからも。無論、当然、ただの大声なので【抑制】など意味を成さない。
「ひーっ、耳栓貫通するってわかってたのに、なんで引き受けちゃったんだろ、って。わかってるか。あたしだってイラついてたし？」
一目散に逃げるシュピーゲルを、けれどアルカナ隊は追わない。
ただ。

「仕返し。記録」
「そうですね」
「念写した」
「音は？」
「普通に無理」
「でも、良い証拠にはなった」
「潮時？」
「そうですね。そろそろ我々は退散を――」
静かな闘志を燃やして。
L・アルカナ以外の４人が、カクンと首を落とし、意識を失った。
「……精神体を引き抜く。【幽拐】。ハイドレート。懐かしい」
もうこの場にはいないのだろう、【隠涜】で隠された【幽拐】の使い手に想いを馳せて。
L・アルカナは。
その場から、忽然と姿を消すのだった。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「これは、妖術、ですね！」
「嗚呼。久方ぶりだな、姫よ」
「おお、そのお着物に狐面は、もしかしてナリコさんですか？」
「ククク。そうぞ。侍衆が参謀、ナリコ。久しき邂逅に、貴女の名の通り茶でも飲みたい所だが――ククク、そうも言ってはおられんか」
「はい！　私個人、ナリコさんや侍衆の皆様には何の恨みもありませんし、なんなら利用させていただいた身ですけど――押し通らせて頂きます！」
「ククククッ、素直、素直よな。良い良い。子供は素直が一番だ」
「ム！　これでも私、魔法少女歴６０年の大ベテランなんですよ!?」
「ククク……嗚呼、知っている。故にこそ忍軍も侍衆も、ここまでの禍根を追ったのだから」
　紙吹雪が舞う。

先程まで隣居たシェーリースとミサキの姿は見えなくなっている。

自分は遠隔魔法少女なので、ミサキがいないのは不安……に思う反面、まぁ、国では独りで戦っていましたし？　と気分を持ち直す。

そもそも遠隔魔法少女というのが気に食わない。もっと苦無や手裏剣を使ってズバー！　という魔法が良かった。手裏剣は遠隔であるとはいえ。なんなら苦無も投げるものであるとはいえ。

して、少しばかりのため息。

過去が追いついてきた、ってこういう事を言うんですかねぇ、なんてお婆ちゃんみたいな事を思ってしまう。

捨てた過去。自分の名前が西方風らしくない事も相俟って、ただ忍者に憧れているだけの田舎者、っぽさ、少しは出せていたと思うんですけど。いえそもそも私忍者じゃないのでっぽさも何も、という感じですが！

「それで、何用でしょうか！　妖風情が！」

「ク――ククク、変わらないなぁ、姫よ。その、何も取り繕う事の無い態度。いやさ……ククク、自らを偽ってばかりで、傷を負ってばかりの愛い子と接していた後だ

となな、姫は酷く辛辣に映るよ」

「無駄な問答は嫌いです！　チャージ開始します！」

「吾の話が長い事は認めようぞ。だが――些か、我慢ができな過ぎる。それだから、殿にもよく怒られていたのだ。覚えておらぬわけでもあるまいに」

「わぁ懐かしい！　お殿様！　今元気ですかね！」

「ククク、何を言っているのか――お主が妖にしたようなもののクセに」

「【光線】！」

紙吹雪とナリコを焼き払う。

此度の昇級試験S級として認められた主な理由は2つ。1つは光線の太さを変えられるようになった事。もう1つは照射時間がかなり伸びた事だ。

故に、照射開始地点からぐるりと身体を回しても、更に縦横無尽に指を傾けても――まだ続く。

ただの紙。紙。紙。

その全てが焼き払われていく。切り裂くのとは違う。切り裂いては増えるだけだ。だから、焼いて塵にする。塵芥にする。芥にする。

「全く、これだから妖は！　言い掛かり甚だしいですね！　――お殿様が妖になったのは、自業自得です！　勝手に私に恋心を抱いて、無理矢理私と目合おうとして、私に拒否されて怒って！　――そして、私が魔法少女だと知っちゃって。子供なんかできないし、私は大人にならないと知ってしまったので、お殿様はかってに自暴自棄になったんじゃないですか！」

「ク、ク、ククク――だが、初めからそうであるとお主は知っていた。であるというのに殿の見初めに是を返し――殿の心を弄んだ挙句の、拒否ぞ。何故断らなんだ。自らが魔法少女であると知っていたのならば――取るべき対応など、わかり切っていただろう」

「あー、これだから妖は！　本当に！　自分の都合しか考えてないんですね――軽蔑します！」

心から。

勝手に見初めてきたのはお殿様の方ですし。断れば打ち首も当然の様にあり得ましたし。まぁ首を断たれても生き返るんですけど。でも、一度死んだら、その国で生き難くなる、なんて目に見えていた事です。

だから是を返し、姫と呼ばれるようになりました。それだけです。別にお殿様の事なんかまったく、これっぽちも好きじゃなかったので、告白も目合いも当然の様に断りました。魔法少女であり、成長しない存在であることも伝えました。子供もできませんと言いました。はっきり言いました！

そしたら――お殿様は、ふらふらと後退して、狂ったように笑いだして。

異変に駆け付けた忍軍、侍衆の前で――私を殺しました。

その後の事はよく知りません。国が滅びたとか、知りません。私は被害者なので！

「――今、ＥＤＥＮをカンコウという妖が襲撃していることを知っているか？」

「え？　そうなんですか!?　じゃあとっとと敵将討ち取って帰らないとですね！」

「カンコウ。――元の名を、ミチサネという」

「お殿様ですか。もしかして私を追いかけてきたとか？　嫌ですね、しつこいヒトは嫌いです！」

「ク――なんとも思わぬか」

なんと思ってほしかったんでしょうね。

何か心残りがあってほしかった、というように聞こえますが。
けど、やっぱり知りません。
私はもう第二の生を歩き始めたんです。魔法少女という素晴らしく楽しい道を。
痛い事や苦しい事は多いけれど、死なないから――友人方々と笑い合える、笑い続けていられる幸福に満ちたこの道を。
なれば、それを絶やさんとする敵将も、お殿様も、ナリコさんも。
許せません。
許しません。
「姫よ。もう1つだけ、良いかえ？」
「えー！　仕方ないですね、もう一つだけですよ？」
チャージを開始する。
特に答えるつもりはないので、聞いたら撃とう。もう場所は把握した。
「――ユクナ、という名を、覚えているか？」
「――……、……覚えてないので【光線】！」
ちょっと動揺してしまったけれど。

多分透けてないはずです！

遠《text:s1:2》吠えよ遥か彼方に《text》

金属音が鳴り響く。
先程から、何百、何千と。
数える事も億劫になるほどの剣戟が――響き続ける。
「甘いな。そして、浅い。フェリカ。弱くなったな」
「貴女が、私の何を知っていますの……！」
「少しの間、近くで見ていたというだけだ。それでもわかる。――【神速】の名が泣くぞ」
金糸を流す【神速】の少女、フェリカ・アールレイデ。
数多の槍を創り出し、それを以て戦う戦士、ウィジ。
踏み込みから放たれる斬撃は文字通りの神速。にもかかわらず、剣を振り下ろした先には必ず槍がある。片方の槍でフェリカの剣を防いだのなら、もう片方の手に

新しい槍を創り出し、それで彼女の腹を薙ぐ。当然【神速】で後退するフェリカに、しかしウィジは追撃することなく【喧槍】を射出。となればフェリカは避けなければならない。

攻めているのはフェリカだ。

けれど――疲労して行っているのも、フェリカだ。

ウィジ。アインハージャが1人。

魔法少女になるために訓練を続けるアールレイデも勿論強いのだろう。苦行であり、他の魔法少女と画一した地力を持つのだろう。

けれど。

「目的を見失った獣に負ける程、私は弱くない」

「何、を――！」

斬撃から突きに切り替える。その切っ先を狙い、ウィジも槍で突いてくる。軌道は完全に同一。速度はフェリカが圧倒的に勝るが――単なる量産品の細剣と、魔力で編まれた槍では耐久性に差がありすぎる。

砕かれたのは、フェリカの剣。

否。

「なるほど、速度だけで我が槍を砕くか」

「量産品といっても安い剣ではありませんのに、そうも易々と……！」

砕けたのは両者の武器だ。

フェリカは亜空間ポケットから、ウィジはまた新たな槍を創り出し、構える。

「フェリカ。貴女は何をしにここへ来た」

「――世界を、魔力を殺さんとする大敵を討ち取るため、ですわ」

「その大敵とは誰だ」

「貴女方の敵将。それ以外に居ますの？」

はぁ、と溜息を吐くウィジ。

聞いてはいた。聞いてはいたが、と。ウィジは口を開き、言う。

お前達を、世界を、魔力を脅かす者だ。《ｂｏｘ：ａｂｓｏｌｕｔｅ（０／０），ｚ８，ｏｖｅｒｈｉｄｄｅｎ》　《／ｂｏｘ》

聞こえない。聞こえない、と。フェリカは頭痛を覚える。

先程から、時折聞こえる名前が、聞こえない。恐らくは敵将の名。先ほど自分も

吐いていた、誰かの名前。
大事なものだった気がする。
大切なものだった気がする。
恩人だった、気がする。
なれば、何故そんな気がするものに、刃を向けている？
決まっている。
脳裏を反芻する声のためだ。
――≫椅子低区座矢羅栖琉粗暹羅氏≪
――≫旗炉又不安端≪
古い言葉。古代の言葉。敵将の用いる謎の言葉とも、少しばかり違う言葉。
目を覚ましなさい、太陽の使徒。起き上がり、敵を討ちなさい、太陽の使徒。
貴女は変わらない、不変の存在。ならば貴女は何を恐れるのでしょう。
貴女の名はなんですか？　貴女の存在意義は、なんですか？
「――魔法少女の存在意義は」
「おい……？　――待て、早まるな！」

いつの間にか――手に持つ細剣を、首に当てていて。
「――世界を光で照らす事、ですわ」
斬る。
神なりし速さを以て、剣を引く。
引かばこの細首は血を噴き出して――本来の姿を取り戻すだろう。
引くことが出来れば、だが。
「いーや、違うね。ハハ――よぉお嬢。こんだけ近づいて、まだ見えねぇか、俺の事」
動かない。腕力で負けるはずがない。速度で負けるはずがない。身体強化で負けるはずがない。
ならばなぜ、引けないのか。
そんなの、わかり切っている。
「いいのかよ――その剣引いたら、お嬢ごと俺の首も斬れちまうぜ？」
それくらい至近距離に。
唇と唇が、当たるくらいの距離に。

その顔があったからだ。
ずっとずっと思い出せなかった、ずっとずっと――靄がかっていた、その顔。
今まさに魔法に食べられかけた己を。
今まさに魔法にならんとしていた己を。
――あの時。
ＥＤＥＮの片隅で、同じように魔法になりかけていた私を。
助けてくれた――少女の、顔。
「目ェ覚ませ、金髪お嬢様。お前はお前のまんまだって俺が認めてやる。だからちゃんと――自分が自分じゃなくなることを、怖がれよ。わかったな？」
ニカっと笑うその顔が。
呪縛を、完全に解いた。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ1・2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

59・地参安堵迂員弩上亜羅伏度員地内途・

シエナと脳筋娘、紺碧ベルトを【隠涜】で隠し、強い所や厄介な魔法少女から崩していく作戦はほとんど順調だった。最初に【抑制】の奴らに脳筋娘の身代わりを近付けさせてバラし、それがいなくなったことを錯覚させる。どぉにもアツくなっちまってるっつーか、俺の鼓舞と同じく魔法少女限定の興奮状態みてぇなのが戦場に引き起こされてるみたいなンで、当初の予定よりも上手く行った感じぁある。

命、精神、心を操る魔法はＳＳＳとされる、か。

それっぽいのぁ感じ取れたが、ありゃ魔法かどぉかぁわからねぇな。

とりあえず魔法少女側はほとんど瓦解してる。残ってるのぁちょいと消耗してる赤スカーフに相対してるポニテスリット、着物狐の式鬼に飲み込まれた太腿忍者、わけがわからねぇって様子で魔力を使いまくってるねぼすけと背中メッシュ。ブラックホールの行方がちょいとわかってねぇのと、かなり序盤からキラキラツインテがいないのが気になる。

この鼓舞の発信源と思われる遠征組観測班アルカナ隊は、その隊長以外捕まえた。

今ァこっちの拠点でその洗脳染みた鼓舞を解くのと、こっちのやること理解させて、賛成か反対か聞いて、賛成だったらちと眠って貰って、反対だったらながーく眠ってもらう、って作業をパッパラメガネがずーっとやってる。創設者の中で唯一戦場に出てきてねェのァそのためだ。

裏方でヒーヒー言いながら選別作業中ってな、あんま良い気持ァしねェんだが。

一方で、着物狐からの通信っつか手紙っつか、式鬼を用いた報告で、ソードマスターってな名前の化け物が出たと。んで、その正体ァ尖り前髪だっつーとんでもねェ話が来た。魔法に食われた結果だと。そして恐らくその結果を辿るのは、鼓舞によって気が高まりすぎてる奴らが該当するンだろォと。

だってンで、一回下がらされて、もっかい勝手に出てきてぶち怒られて、そんでもまた出張ってきた俺がお嬢の魔法化を阻んだワケさな。

「梓――さん」

「よォお嬢。二転三転、意見変わりまくりのブレブレ人間で悪ィがよ、ちと付き合ってくれねェか？　世界を殺すのも、魔力を殺すのもやめたンだ。殺してくれって言われてるらしィんで、やめた。ただ、これ以上世界が苦しまねェよォに――も

う魔法少女が生まれねェよォにしたい。そのためにゃ、今のＥＤＥＮァ邪魔でね。本物の楽園を取り返しに行くトコなンだ」

「……」

「どォだ。今なら信じられるかよ、俺の言葉。俺のこのかっるい言葉を」

もう体力ァ限界に近い。

着物狐にも言われた事だ。疲労する事のない魔法少女が、体力限界を迎える。

それがどォいう事なのか。

簡単だ。

生命維持に魔力を使わなきゃなンねェほど――俺の身体ァ死にかけてる。

傷口縫ったからってどォにかなる傷じゃねェのさ。常に微量の身体強化してねェと、俺の身体ァすぐに機能停止しちまう。それを防ぐために常時魔力が使われてンで、すぐに疲労する。

上等だよ、ってな。

「……１つだけ、聞かせてくださいませ、梓さん」

「あァよ」

「その道は――梓さんが、これ以上に傷付く道、でしょうか」
「ああ」
躊躇わない。溜めない。
即答する。
化け物にァいっそう狙われるだろう。【即死】欲しさってだけじゃねェ、化け物達の悲願に必要な魔法少女の因子までもを殺そォってンだ、今ァルルゥ・ガルに協力してない化け物も全部狙ってくるだろう。
魔法少女やＥＤＥＮも敵に回すだろう。取り返すつもりでァあるが、未だ未知数の中央部及び上層部ァ確実に敵だ。それは今後の敵になり得る。
んで、アズサも、だろォな。
安藤さんァ自身を敵だって宣言してた。ルルゥ・ガルと完全に結託してるってワケじゃねェのは意外だったが、あっちのマッドチビ含めてなんぞやってンだろ。
敵だ。敵ばかりさ。
太陽も風も完全にコッチ向いて中指立ててンだ。ハハ、これ以上に傷付くなんざ当たり前ってんだよ。

「――だが、お嬢が守ってくれンだろ？　ハハ――俺達の首元にある、この剣をよ。双方傷つける事無く、ただ敵を斬るモノとして。最初に言ってくれたよな。一番だ。俺達が出会ったあの場所で、自分ァ何のためにあンのか語ってくれたよな。アインハージャだけが守護者じゃねェ。アールレイデがどォとか知らねェけど、少なくともお嬢の剣ってなよ」

「誰よりも速く、敵を殲滅し――人々に安寧を齎すための剣、ですわ」

その眼に光が戻る。

いいね。そォさ、それでこそお嬢さ。

俺の価値観も倫理も受け入れられねェのかもしれねェ。ぶつかり合うンだろうが、知ったことかってな両方そォだ。俺も知らねェし、お嬢も知らねェ。

ただ。

「それで――梓さん。私は貴女を守護しますが、貴女は私に何をくれますの？」

「道を」

俺が道を付ける。誰が前にいよォと関係ねェ。誰に守られていよォと知ったこっちゃねェ。

俺が進み、俺が前を行き、俺が道を付ける。
その後ろを誰がどォ進もうが知らねェ知らねェ。ただ俺ァ、二度目のこの命を用いて、何かを導く御旗となる。
「要らねェんなら要らねェって言えよ。俺ァ勝手にボロボロになってくし、俺ァ勝手に道筋を変える。ハハ、ふらっふらと揺れる探照灯だ。ンな不安なモンについてきたがる酔狂な奴ァ、お嬢以外に誰かいるかね？」
「案外、沢山いそうですわ。アインハージャのお２方もそうですし、ディミトラさんもなんだかんだ言って面倒見がいいですし……あっちでまだおかしなことになっているミサキさんも、シエナさんやナリコさんも。……貴女を私だけのモノにする、というのは、無理そうですわね」
「ンな事考えてたのか？　ハハ、無理だね。お嬢の光じゃ弱い弱い」
「――では」
自分と俺の首元から剣を離し、一歩下がる金髪お嬢様。
崩れ落ちそォになる体と車椅子ァ、青バンダナが掴んでくれた。すまねェな、苦労をかける。っとに。

「SS級魔法少女、【神速】がフェリカ・アールレイデ。――この程度では満足いただけない、ということですので」

上を向く。

向かざるを得なかった。

彼女に似た気配がしたから。でも、あの世界から出てくることは出来ないはず。

「太陽の意思に触れ――少し、理解しましたの。私は初めからSS級でしたし、役割も理解していましたが――なるほど、世界を苦しませたくないというのなら」

歪む。金髪お嬢様の周囲が――何か、レンズでも通しているみたいに、歪む。

「お2人とも。これから私のすることを、どうか止めないでくださいまし。危ない事ではありませんので――」

言いながら、お嬢は。

その剣を――自分の胸に、向けて。

そのまま突いた。

「な――」

「大丈夫だ、青バンダナ」

死の気配ァしない。
他人に向かう死の気配ってな感じ取り難いンだが、一切しねェってこたそォいう事だ。
金髪お嬢様の魔法少女衣装がはじけ飛ぶ。
光。何の光か、太陽の光か。目を閉じた彼女の周囲を光が飛び交い、その胸に剣がするすると入り込んでいく。強い光だ。目の眩むような――しかし、他者を引き付けてやまない、暖かい光。
戦場にいる誰もに届いたことだろう。戦場にあるすべてを照らした事だろう。
いびつなやり方ではなく。
本来の、照らし方で。
「――.握玉琉或琉太布泥椅子或紫龍渡視人或丹治琉（魔法のダウンロード及びアップデートインストール完了しました）」
その、夜の使徒や風の使徒の使う言語とは別のそれが呟かれた瞬間。
光は一斉に弾け飛び――。
そこに、どこか花嫁衣装を彷彿とさせるデザインの魔法少女衣装を着たお嬢様が、立っていた。

「【神光】――フェリカ・アールレイデ。役割を３つ統合し、新生いたしましたわ」
彼女はそう、凛と告げた。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

自分が剣であるという自覚がある。
自覚しかない。己が何者であるか――など。剣であることの前には、無に等しき意味しか持たない。
ただ目の前にあるものを斬る。
生物も、そうでないものも。あらゆるものを切り刻む。
「うわ、本当にいるじゃない。オリジン……発見例が一番多い奴だけど、結局単純に強くて厄介な――え？　何？　あれ魔法少女だから殺すな？　無理言うんじゃないわよ、ソードマスターよ？　そんな手加減してたらこっちが殺されるって――はい防ぐけど、って斬られた!?」
何か。

煩わしいものが、来た。
関係が無い。斬る。
「嘘でしょ、今の黒曜石なんだけど……無力化してくれ、って無茶な注文にも程がある……」
「おやおや、ディミトラ。いきなり弱音ですか。でもまぁやるしかないんじゃないですか？　ほら、協力してくださる魔法少女の皆々様もいることですし」
「体が、いう事を聞かない。それだけ。協力してない」
「もうねむいー」
「……【仙導】。怖い魔法よね。より強い強制力が無いと解けないとか、ホント……」
斬る。
増えたのを、斬る。
小さきものたち。否、己が巨体なのだろうか。どうにも慣れぬ――何に？
どうでもよいか。
「くッ――行きなさい、ガーゴイル軍団！」
「はい、式鬼の皆さんも群がってくださいねぇ。シェーリースさんはチャージ開始、

ウィーマーンさんも同じくですー」
「チャージ開始する……」
「もうつかれたー」
天。集まるは紫電。
問題ない。雷など、切り裂けば良い。眼前。冷気。
問題ない。氷など、切り裂けば良い。周囲。式鬼。
問題ない。妖など、切り裂けば良い。
「ちょっと、全部効いてないんだけど!?　というか雷斬るってどういう理屈よ！」
「あらら～、これはちょっと不味いですねぇ。応援呼ばないと無理そうです」
「っ、なら――コイツでどうよ！　行きなさい、ティラノゴイル!!」
鋼の獣。
問題ない。切り裂けば――何？
「さっき急造したガーゴイル達と一緒にしないで欲しいわ。ふふん、このティラノゴイルは強化に強化を重ねた最新作――さらに、今さっき切り裂かれたガーゴイルの鉱石も融合して……！」

「あー。ディミトラ？　あの身体に翼を付けると、全体のバランスというものが……」
「うっさいわね！　この天才彫金師に文句があるっていうの？」
「あーあー。角に、新しい足に、腕も増やして……」
「腕も足も大いに越したことは無いわ。そんなこともわからないのかしら」
異形。獣ではなく、妖。
硬い。であれば――より鋭く。より迅く。
より――高く。
「え……」
「あらあら。―も大目玉だと言っていましたけど、こんなにあっさりやられちゃうんですねぇ。……これは退避一択では？」
「ワハハ、ワハハハ！　おいみんな、あっこにマジのソードマスターがいるぜ！　近くになんか敵もいるっぽいけど」
「ティケ、流石にあれ勝てる相手じゃないと思うけど」
「そんなのやってみなけりゃわからないだろ？　ワハハ、でもお前ら下がってな。アイツ危ない。等級区分で言えばSSは軽く超えてるぜ！　え、なんでそんなのこ

こにいるんだ？」
　また、煩いのが現れた。
　斬る。
「どわ、見えなかった！　ワハハ、でも運が良かったな！　当たらなかったみたいだ！　いや斬られた後から斬られたって気付くってどんだけだよ」
「アンタ達、ＥＤＥＮの魔法少女……ネイビー隊ね!?　ちょうどよかった、手を貸しなさい！」
「ワハハ、そうしたいのは山々なんだが、ウチらってば隊長以外Ｂ級以下の弱小隊でさ！　こんな危険な魔物と戦った事なかったりする！　ワハハ、でも当たらなきゃ意味ない――あ、これ当たりそうだから避けよう」
　避けられた？
　……もっと迅く。もっと。もっとだ。
　あらゆるものを切り裂ける程に。
　あらゆる障害を、引き裂けるように。
「――伐（kill）」

「っ、運びなさい！」
「うわ、なんだこれ水？　鉄？　よくわかんないけど助かったよ、ワハハ、ってディミトラじゃん！　よくみたら！　ウチのこと覚えてるか？　まぁ覚えてないか、なんせ昔の事だもんな！」
「アンタみたいなのは一回見たら忘れないから人違いよ！」
「そうか！　ワハハ――あぶね」
「――斬（kill）」
弱い。
心が躍らない。いつからだ。いつから、心は踊っていない。
強者を求める。もう、いいか。周囲の些事など――斬ってしまえば、もういいか。
「ッ――【仙導】、自分達の持てる全力でこの場から退避しなさい!!」
「――斬是無折（斬殺する）.」
嵐は止まない。
その時、より強いものが、空に現れた。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

紙吹雪が舞う空。
幾千枚あるのだろうか、数えるのも億劫になる程の枚数が、球形に２人を包んでいる。
先程から、一体幾枚の紙を焼き払った事だろう。
先程から、一体何度紙の壁を突き抜けようとしたことだろう。
こんなものを相手にしている時間は無いのに。
「――そろそろ、私も怒りますよ」
「クク――今更か。吾はとうの昔に怒り狂っているというのに」
「それは、ナリコさんがお殿様を好いていた、というだけじゃないですか！　逆恨みですよ逆恨み！」
「ク――その通りだが、何ぞ？」
こういう時、【波動】や【神速】だったら簡単だったのになぁ、と思う。
自分の【光線】は、やっぱり殲滅力に欠ける。Ｓにはなれたけど、多分それ以上は無理だという自覚がある。

毎日毎日、嫉妬している。みんなの色々な、便利な魔法たちに。

SS級の凄さは身近で見ていた。ミサキの【波動】とて、もう少し使い方を変えたらSSに届き得るだろう。シェーリースのそれだって、一点集中じゃなくてもっと本数を増やせばいいだけだ。それくらい、考え付く。それをしないのには何か理由があるのか、単純に気付いていないだけなのかはわからない。

教えて欲しいって言われたら教える気満々なんですけど、中々頼られないんですよねぇ私。私自身が魔法で悩んでいるから、なんでしょうけど。

「そういえば、ナリコさんの魔法はなんて言うんですか？　魔法少女になれたみたいですけど、今使ってるの妖術だけですよね？」

「素直に言うと思うか？」

「素直に言ってしまうとタネが割れて弱くなっちゃう魔法ってことですか？」

「ククッ、元々天然の煽り娘だったが、意図的に煽る事も覚えたか」

妖術、あるいは式鬼は、侍衆であればだれもが使えた術だ。その得手不得手はあれど――彼女の血肉を自らに焼き入れた侍衆であれば、本来は魔物の使う術であるそれを使い得る。

だから、問う。

式鬼城郷。これはナリコという妖が本来持っている術であり――魔法少女としての魔法ではない。

わからないところは問えと教わった。だから、問う。

「魔法は本人の性格や人生そのものを表すらしいですよ？　だから――妖の目覚めた魔法がどんなものなのか、気になるんです！」

「ク――ククク。良い良い。なるほど、まっすぐで融通が利かず、自己主張の激しい姫に、確かにそっくりだな、【光線】は」

「ちゃんと答えてください！」

故に、【神速】の彼女は誰よりも速く行くのだろうし、【神鳴】の彼女は強く輝くのだろうし、【波動】の彼女は他者に心を許さないのだろう。そして――思い出す事のできない誰かは、即断即決なのだろう。

わかっている。正直に言えば私って馬鹿で愚かな自己中心的なヒト、という感じに捉えられがちですし、自覚もありますけど――だからこそ、自己分析は得意ですよ？

わかっています。自分の目的があやふやで、誰か、心から大切と行かないまでも大事な友人を忘れさせられている、なんてこと。分かり切っていますとも。

その上で、戦っているんです。

その人を殺すとか倒すとか目的を阻止するとかどうでもいいですけど。

私は【光線】のユノン。一度発射されたら、戻りはしないのです！

「良い良い。良かろうよ。ならば教えよう、吾の魔法」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

「ククク……吾の魔法は」

揺れる。

視界が？　世界が？

ようやく出てきた女性。それに手を向けようとして――けれど、身体が重い。強化する。遠隔魔法少女の自分はあまり身体強化を得意としないけれど、強化に強化を重ねて――けれど、重い。

思考が遅い。身体が重い。何をしようとしていたのか。そもそもここはどこだったのか。私は。

「【傾刻】」
視界の全てが、紙によって包まれた――。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

「アンタ、良い報せと悪い報せがあるわ！　どっちを聞きたいかしら！」
「あら、ディミトラさん。そんなに焦ってどうしたのですか？」
「うげ、【神速】……って、もう和解した感じ？」
「あァさ。悪い報せを頼む。良い報せってな、ほぼほぼの魔法少女制圧完了ってこったろ」
「ええ、そうよ。あとはミサキとザイフォン・英って子と、あるるらって子だけ。今から私達はミサキを押さえに行くわ。アンタの友達のユノンって子は、さっきナリコが制圧したみたいね」
「へェ。で、悪い報せを頼むよ、マッドチビ先生」
「――ソードマスター、止められなかったわ。ペルチットの【仙導】で周囲の子達

は逃がしたけど、今全力でこっちに向かってきてる。ティラノゴィルは一瞬で負けたわ」
「あァー。ちなみによ、マッドチビ先生」
「何よ」
「ティラノゴイルに変な装飾とか付けなかったよな？」
「……付けてても付けてなくても負けたわよ、あんなの！」
付けたンだろォなァ。
まァどっちにしろ、って感じでァあるが。
「お嬢。殺さないで無力化ってな、できるか」
「お任せを、と言いたい所ですが――ソードマスターといえば、数少ないオリジン種の中でも最も目撃例の多い種。私１人では、どうあっても勝てませんわ」
「そォなのか。んじゃ俺も行くからよ」
「馬鹿ですの？　と問いたい所ですけれど……お願いしますわ、梓さん」
「おォさ。あ、青バンダナァマッドチビ先生とポニテスリットの制圧に向かってくれ。そろそろ赤スカーフもキツそォなんでな」

「……わかった、とは言えない。梓、貴女は自身が満足に動けない事を自覚すべきだ」
「してるしてる。だがよ、お嬢が来て欲しいっていうンだぜ。応えねェ理由があっかよ」
「……」
青バンダナの気持ちァわかる。っつか、俺だって味方にンなボロボロの奴いたら下がらせる。心配だし邪魔だしな。けど――ハハ。太陽の使徒との共闘ってなあんま好まねェが、太陽との共闘ならまァまァまァ。
非善だが、それくらいの許容ァしていいだろ。なァ神さん。
「――問答をしている暇は無いようですわ。前線は私が張りますので――梓さん。指示を。そして、言葉と、ここぞという時の切り札を。その全てを任せますの」
「あァよ大役だな。ハ――いいね、アレがソードマスターか。尖り前髪……ある種師弟対決だァな、オイ」
金髪お嬢様Mk・Ⅱ、とでもいうべきか、【神速】から【神光】と魔法名を変えたお嬢ァ、当然の様に知覚外の速度でソードマスターにぶつかり合う。

背中より出でるは光の翼。そして、光輪。天使みてェに頭にあるンじゃなくて、背中にあるンだ。ハハ、背中の露出度がやべェなあの衣装。太陽ってなそォいうのが好みなのかね、

「――斬（kill）」

「斬りますわ」

響き渡る音は、それだけで周囲に亀裂を齎す。

いんやさ、どんだけだよ。つかマジで尖り前髪Ａ級ァ嘘だろ。魔法に食われてる状態つったって限度があらァさ、ありゃ普通にSSに届くだろ。

さて――どっから崩すか。

ソードマスター。

見た目ァ、でけェ武士って感じだ。全身から刀が生えてンのと鬼みてェな形相してる事抜けば、ただでけェヒトに見えなくもない、なんてこたない。普通に化け物だ。

それを元の尖り前髪に戻すにはどうしたらいいか、って。

まァ太陽と風を殺しゃいいんだが――さて。

「ククク……吾の助けが必要か、吾の妻」
「あァよ。大助かりさ」
「姫に続き頭領までも、手のかかる身内だ」
「大助かりじゃないですの!!　今梓さんと私の蜜月!!　デート中ですわ！　邪魔者は引っ込んでいてくださいまし!!」
「そう言われると居座りたくなってきたぞ？　ククク、良いか、梓。あれなる妖は、所詮剣でしかない。全身が剣であるが故の危険性は、しかし全身が剣であるが故の脆弱性にもなり得る」
「――横からの攻撃にゃ弱いってか？」
「ククク、どこが横なのか。それを考えるのはお主の仕事だ。――さて、フェリカ。何やら眩しくなったようだが、今の吾も些か気分が良い。勝手に加勢させてもらうぞ」
「いいですけど！　梓さんの妻は、私ですの!!」
「ククククッ、良い良い。初めに言ったがな、吾は他の妻も認めるぞ？　――吾が一番である、というだけで」

なんぞ、緊張感が一気に削られたな。
まァいいよ。頑張ってくれ。お嬢ァ剣で、……着物狐ァありゃなンだ、紙の槍？
車椅子の手すりに肘をつく。
んじゃまァ――視るか。
命の気配。大丈夫、まだ魔法少女のカタチをしている。
あれァ魔法に食われてるけど、魔法の胃袋ン中にいるに過ぎねェ。んじゃ外っかわだけを殺しちまえばいいかってーと、そォいう話でもない。今の尖り前髪ァ特殊魔法少女みてェなもんで、魔法を殺すと尖り前髪も死んじまう。
だからどーすっかてーっと、魔法を弱めて、尖り前髪が前に出てくるよォにすりゃいい。なンだって魔法に食われたかって、太陽の使徒の言葉でその側面が強く出たってだけなンだろォし。
はン……？
てーと、ウチで抑え込んじまえばいいのか？
「――お嬢、着物狐、上だ！　空だ！　天へソイツもってけ！」
「わかりましたの！」

「足場は紙を使え。何、お主の蹴り程度であれば受け止められる」
「必要ありませんの！　――私、飛べますので！」
光の翼が出力を増す。ありゃ翼ってよりブースターだな。シエナのを参考にしたのか？
明らかに魔法の種類が変わってる。【神速】から【神光】になって、光も扱えるよぉになったと。３つの役割を統合……ってな、まァ、あと１つも大体わかるが。
いんやさ、さっき紺碧ベルトが意識奪って連れてきた【超躍】ってな魔法もってる子がいりゃ簡単だったのやもしれねェが――ま、触れるだけで危ねェしな。
ここァお嬢にやってもらおう。
んで、俺ァ俺で何もしないわけじゃァない。
「着物狐ァ少しでもソードマスターに紙巻き付けな！　式鬼でもいい、巻き付く奴！」
「ク――良かろう。どうせ、吾の制御を離れ、お主が使うのだろう？　聞き分けの良いものにしておいてやる」
「あァさ」

お嬢の足場にと取り出した紙たちが繋がり、繋がり、繋がって、一枚の長い紙になる。言っちゃ悪いがトイレットペーパーみてェになる。

ンなもんより遥かに硬いが。

それがソードマスターにぐるりぐるりと巻き付いて、絡みついて、その動きを少しだけ阻害する。少しだけだ。けどそれァ、お嬢への手助けになる。

下側から怒涛の攻撃でソードマスターを打ち上げているお嬢への負担を減らすンだ。なら、わかるな。

「ＯＭＡＥＨＡＴＯＲＩＤＡ ＯＭＡＥＨＡＴＳＵＢＡＳＡＤＡ ＯＭＡＥＨＡＳＯＲＡＷＯＴＥＮＷＯＪＩＹＵＮＩＨＡＢＡＴＡＫＵ ＩＣＡＲＵＳＮＯＴＳＵＢＡＳＡ　！」

それはお前を自由にするものではなく。

それはお前を縛り付け――その身を溶かすものである。

さらに、さらにだ。

ちィと長いが――。持ってくれよ、俺の身体！

「灰鳥有為預（よすがさん）！舞御士（夜の神よ）！　伏理伊豆御分地土亜負不地根座割琉度（冥府の扉を開けてくれ）！　安堵（そして）、伏理伊豆泥館巴図（太陽の力と

織風負不地参安堵地巴環負不迂員弩！」

あんまり近づきすぎちゃいけねェってな知ってる。

もうそろやべェのも知ってる。

俺の身体が死にかけだから――マジに夜の使徒になりかけてるってなもわかる。

今までもそォだったのさ。死にかけた時にこの言語が使えたのァ、死地に向かう時にこの言葉がわかったのァ――夜の使徒に。つまり死者にならんとしていたから。

世界言語なんざ、ンな便利なモンじゃねェ。理解すりゃするほど神に近づく。死に近づく。だからアインハージャ達ァ詩や諺でしか理解してねェんだし、理解しても創設者たちァほとんど使ってねェ。

こんな乱用して良いモンじゃねェんだ。

ギシ、と鳴る。何が。

何かが、だ。馬鹿め。知るか。

「お嬢！　天だ！　空の穴に、そいつぶち込め！」

「わかっています――見えていますのよ!!」

「着物狐、落ちてくるだろォ尖り前髪のために網でも作っといてくれ」
「ク――蜘蛛の巣で良いか？」
「なンでだよ。いいけど」
紙に絡めとられ、式鬼に自由を奪われ、【神光】の空へと追いやられ――ソードマスターァ、尖り前髪ァ。
天へと開いた大穴に。真っ黒い、おどろおどろしい、冥府の門に。
ばくり、と飲み込まれた。
「――!!」
「む……遠吠え？」
「あァ……アイツらが一番行きてェ場所だからな。いんやさ、行きてェわけじゃねェか。だが――あそこでなら、と。何度願ったンだろうな」
遠吠えは遥か彼方に響き渡る。
多分、輝きの園を離れたルルゥ・ガル達だ。アイツらが辿り着きたい場所の、1つ。
めぐり続けるが故に、永遠を手にせねばならぬという宿業を負いて生まれてし

まったがために。
ただ巡り、廻り、一となって死を望む。
「けど――俺ァ、その救いを否定する」
それは夜に捧げる一節の祈り。
これは夜に捧げる祈りの物語。
天へ上がれ、打ち上がれ。
上がりてそこで、砕けて死ね。
夜の帳ァ落ちてもいいが、太陽が落ちて来たらみんな焼け死んじまうだろ？
「……着物狐」
「良い良い。任せろ。残りの処理は、吾らがやる。――眠れ、吾の妻。だが――必ず目覚めろよ」
「はン、誰に物、言ってやがる――」
限界だ。
もう目が開けられない。
冷静メイドァ、上手くやっただろォか、ね……。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

5.Cut call guts all twin tail cool.

60.上亜是阿柚弩塔微.

少しばかり、昔の話をしよう。

あれァ34年前、いんやさ50と7年前。いやいや、たった数か月の事さ。

俺が13年間を生きてきて、お医者殿に「you、魔法少女になったネー」と診断されたあの日。からちょっと後のこと。

支度もほとんどできず、まァ特に大事なモンもなかったンで、身支度らしィ身支度ァ家族に任せて、後で送ってもらうことにして。今生の家族と涙のお別れをして。友達もそれなりにいたンで、5年後には子供扱いしてやるよー、とか言ってくる奴らの脛軽く蹴って。

んでまァ、EDENに上がって――すぐの話。

俺ァ、迷子になった。

いやさ、当たり前なンだよな。だってＥＤＥＮって広いんだぜ。そこに上げられて、今日からここで暮らすんだよ、って言われてよ。案内されるじゃんか。学園エデン、その教室や寮内を。

じゃあ明日から学園で勉強してね、今日は自由にして良いから、つって。

放り出されたらさ。

そりゃ、冒険するだろ。男の子なら。

いやね、勿論ね、43歳おじさんですよ、前世はね。でも13年間ちゃんと子供やってきてさ、新しい場所で、しかも浮いてて魔法だぜ？　なんか不思議なモンでもあるンじゃねェかって思うだろ。そん時ァまだ魔法少女達がこんな苦しい、こんな頭の沸いた環境で戦ってるなんて思ってねェんだ、るんるん気分で散歩するだろ、普通。

その矢先。

ＥＤＥＮ外縁部ってなちぃと森っつか林みてェに植林されてンだけどさ。そこに入っていて、矢先も矢先さ。

木の根っこに座り込んで――自分の首に剣当てて、ぶっ刺そうとしてる女の子いたら、誰だって止めるだろ。

これおじさんじゃなくても13歳の少女アズサでも止めてたよ。いや誰であっても止めてただろ。まァ魔法少女の倫理に染まってる奴らァ違ったかもしれねェけどさ。

で、止めたンだ。

どォやって止めたらいいかわかんなかったンで、刀身掴んで持ち手蹴って、ひゃー、痛ェ、なんて思いながら――まァ、その。なんだ。デリカシー無いのァ重々承知だけどさ。

押し倒した……ンだよな。形的にァ、だぞ？　縄も紐も持ってねェんだ、自殺しよォとする少女を止める方法で、こっちが大の男じゃねェってンなら――しかも相手が魔法少女だってンならよ。

押し倒して、抑えつけるしかなかった、ってワケだ。

そっから、ちょいと物語ァ始まるワケさ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「何、してんだ……アンタ」
「……誰ですの、貴女。私の上に乗るなど――よくもまぁ、そこまで不遜なコトができますのね」
「何してンだって聞いてンだよ。私の前で――何をしょぉとしたのか聞いてンだ」
「勝手に近づいてきたのはそちらでしょう？　貴女の前で行おうとしたわけではありませんわ。目障りであるというのならどこぞへでも行きましょう。あるいは、貴女を排除しますけれど、如何？」
「もっかい聞くぞ、アンタ。何しようとしてたンだっつってンだよ。聞いてンだよ。答えろよ」
　流れるような金糸の髪。こんな暗い林の中にあっても、宝石みてぇに光る髪。ちょっとだけシンパシーァ感じた。俺も、家系的に銀髪なンでさ。銀髪、銀髪だぜ。染めてもいねぇ。きらきら輝く月の色。少女の容姿ってなどこがどぉ優れてンのかって俺にゃわからねぇけどよ、この髪だけァ結構自慢できる。だってキレーだもんよ。

でも、この嬢ちゃんの髪も、綺麗だった。
そして――俺を強く睨みつけるその眼も、綺麗だった。
が、まァ嬢ちゃんだ。
子供なンで睨まれても怖くねェ。
ただ、やろォとしてたことだけが頂けねェ。どォしても無理だった。
「何があったンだ」
「は？」
「……そこまで思いつめるってこたよ、何かあったンだろ。ここで会ったのも何かの縁だ、私に話してみねェか。ちったァ……楽になるかもしれねェ」
「何故、初対面の貴女に……いえ、そんなことより、早く退いてくださいまし。私は見知らぬ他人の下に敷かれる程安い女ではありませんのよ」
「嫌だね。話すまで退かねェし、剣も返さねェ。こんなモン蹴り飛ばしてやる」
「あっ……。はぁ、なんなんですの、貴女。不躾にも程がありますわ。無礼にも程というものがありますわ」
「じゃあ、何をしようとしてたのかと、何があったのかを言え」

「会話ができませんの……」

強い。俺じゃ抑えきれねェのを感じる。力で抵抗されて、押しのけられるのを感じる。

――だから、ちょいと悪いと思いつつ――抱き着いた。

「ちょ、ちょっと!?　貴女、恥じらいというものを知りませんの!?　そういう趣味の方だとしても、色々あるでしょう!?」

「知らねェよ。つか、そっちが知りやがれ。――何があったら、自らに刃を向ける。何があったら、こんな寂しい場所で、独り死のォとする。私の目の前で自殺だァ？　ぶっ飛ばすぞ馬鹿野郎。誰が許すかよ、ンな暴挙」

「言葉も粗暴、行動も粗悪。……本当に、誰ですの、貴女。名前くらい名乗ったらいかが？」

「私ァ梓・ライラックってンだ。一昨日、魔法少女になった」

「……新人も新人ですのね。はぁ、それなら私を知らなくても仕方ありませんか。いいですわ、それならばこの浅慮も許しましょう。さぁ退いてくださいまし。そして、何も知らないのですから、放っておいてください」

「ヤだね、つったぞ。馬鹿が。つか、こっち名乗ったンだから名乗りやがれ金髪お嬢様」
「……フェリカ・アールレイデ。由緒正しきアールレイデが四女ですわ」
「そォか。で、金髪お嬢様。なんだって死のうとしてた。なんだってそンな追い込まれてたンだ」
「貴女、名乗れというくせに名乗った名を呼びませんのね。ヒトとしてどうかと思いますわ」
「自殺なんざ、人としてどうかと思うよ」
ついに力で押し負ける。
上体を起こされる。けど、離さない。金髪お嬢様の胴体に抱き着いたまま、離れない。つかこの子結構タッパあんな。これ、マジで立ったまま移動されちまいそォだ。
けど離してやんないね。
ヤなこった。
「はぁ。何があったかを話した所で——誰かの言葉で変わる程、私の心は弱くない

ですのよ？」
「良いよ。話してくれ。じゃねェと、私が嫌だ」
「……見た所、10を超えて少しくらいですか。まったく、本当に子供ですのね。はいはい、わかりましたの。話してあげますので、離れてくださいます？」
「ヤだね」
「……誰か、この幼子引き剥がしてくださいませんか」
いやね、おじさんだってこんなちっさい子に抱き着いてンのァどォかと思うよ。でも――こォしておけば、人ァ死なないって知ってる。誰かの体温感じてる内ァな、冷たくなろうって思ねェんだ。
――あの時、俺がさ。言葉に安心して――離しちまわなければさ。
絶対――。
「魔法少女には、等級区分というものがありますの。殺傷能力と殲滅力を基準に、DからSSSまでを振り分けられる区分が。――私は【神速】という魔法に覚醒し、SS級という称号を賜りましたわ」
「へェ、すげェな。ちなみに私ァ【即死】つってな。等級ァCだ」

「そうですか。興味ありませんの」
「あァさ、別に興味持ってもらおうなんざ思ってねェよ。アンタが教えてくれたから教え返しただけだ」
「……」
SS級。
遥か高みも高みだ。
すげェんだろォし、すっげェんだろォけど——まだ、子供だ。じゃ凄くねェ。
「私はもう、長い間、SS級ですわ。EDENに上がってからずっと、SS級ですの。ずっと——成長がありませんの」
「そォかい。ちなみに私ァ育ち盛りを止められてね。これからナイスバディなネーチャンになる予定が、魔法少女になったことでパァさ」
「……これ以上の強さを求める方法は、知っていますの。世界が教えてくれますのよ。——自分の魔法で、死ねばいいと。ですから」
「死のォとしてた、って？　馬鹿じゃねェの？」
「C級にはわからない話ですわ」

なんだそれ。

自分の魔法で自分が死ねば、強くなれる？

……ンなわきゃねーだろ。死んだら死ぬんだぞ。そんなことのために命を散らせって？

ぶっ殺すぞ、世界だかなんだか知らねェが――ソイツ、俺が殺してやる。

「あンましさ、生き物なめンなよ、金髪お嬢様。死ってなよ、そォ簡単に訪れていいモンじゃねェし、扱っていいモンじゃねェんだわ。知らねェだろォけどさ。アンタみてェなガキにゃわからねェだろォけどさ。少なくとも私が見てる前じゃ、死なせねェ。やめろ。やめてくれよ。頼むよ」

「何故、貴女にそんなことを頼まれなければいけないのですか。それを聞く理由も――」

「私が嫌なンだよ。なァ、お嬢様。強くなりたくて、それをやるンだろ？　成長したくて、そいつをしよォとしてたンだろ？　――じゃ、間違ってるよ。他人を殺したって、自分を殺したって。ソイツァ絶対に強くァなれない。むしろ弱くなンだよ。どんどん弱くなる。知らなかっただろ。知る機会ァ無いし、教えてくれる大

人なんざいねェからな」

「弱く、なる？」

「あァそォさ。人ってのァな、生物ってなァな、殺す事で、そいつの命を奪うのさ。奪うんだ。そいつの恨みつらみも、そいつの人生も、そいつの生きたいっていう抗いも、全部全部奪っちまう。――ソイツァさ、確実に足を引っ張るンだよ。誰かを殺した経験ァ、人生に影を落とす。誰かを奪った事実ァ、自分の在り方を曇らせる。いいか、それァ他人でも自分でも一緒さ。自分を殺せば殺す程、弱くなる。自分を殺せば殺す程、その在り方に曇りが出てくる」

そうさ。

だから、好きに生きるんだ。好きに生きるからって死んでもいいとかそォいう話じゃねェぞ。

生きるんだ。好きに、生きるんだよ。生きて生きて生きて、最後の最後に自分になるンだ。自分になれンのァ最後の最後なンだよ。

一回死んだ俺が言うンだ、間違い無ェ。

なりたい自分になるって時ァ――最後の最後、信念を貫き通して生ききった時だ

けさ。

　途中で死んだら、何の意味もねェ。何の理由にもならねェし、何の結果も残せねェ。

「金髪お嬢様。アンタがどォいう奴で、何を抱えてンのか知らねェよ。知らねェから言わせてくれ。私ァアンタを知りたい。アンタがどォなるのかみてェし、アンタが――死、以外の方法で。ンな簡単に提示された安易な方法じゃなくてよ。たった10年、たった１００年の努力じゃ辿り着けねェ境地に至ったアンタを見てみてェ。なァ、金糸の髪を持つ少女。ハハ――どォだよ。言葉でよ、私のこの、かっるい言葉でよ。アンタの心ってな、変わったかよ」

「……」

「だんまりか？　いいぜ、ならもっと言葉を重ねてやる。アンタの弱っちィ心を、私の強くて軽い言葉で打ち負かしてやる。ハハ、私ァさ、魔法少女になる前は――」

「もう、いいですの」

　気付いたら。

　振りほどかれていた。これが【神速】か。気付けなかったし、気付かなかった。

振りほどかれて、遠くに蹴っ飛ばした剣も拾われて。
「残念ですけれど――貴女のような事をいう方々は、沢山いましたわ。その程度の言葉に折れる程、私の心は弱くありませんし、貴女の言葉は弱くて脆いですのね。そんな薄っぺらい言葉で、他人をどうにかできると思っている時点で――浅い。貴女が嫌なのはわかりましたわ。ですから、貴女の見えない所で、貴女の見えない内に死にます。さようなら」
「はァ？」
「――!?」
首根っこを掴む。
どこぞへ行こうとしていたお嬢様の首根を掴んで――組み伏せる。
ふざけた事言うじゃねェか。俺の見えねェとこで死ぬから、俺が嫌じゃねェって？
馬鹿が。
「今、どうやって掴んで――ッ!?」
「こいつだな？」

掴んだ。
金髪お嬢様の頭部にいる、暖かい靄。
太陽の香りのするそれを――掴む。掴んで、引き摺り出す。
「ァ――ぁぁあ!?」
「言っただろォが。私に断りなく死ぬンじゃねェよ。馬鹿が。馬鹿野郎が。ンな軽く死ぬとかいうな。ンな軽く――死ねとか言ってんじゃねェぞ、非善」
「な、にを――」
魔法を発動する。
まだ習ってもいない魔法を、感覚だけで発動する。
現れるのァ濃密な気配。暗く、重く、黒く、昏く――黎い気配。
「【即死】」
「――!」
掴んだ指先から、死を垂らす。
俺が通ってきたあの湖の水を。誰もが沈んでいく死の底を。指先から、その靄に向かって――浸し、殺す。死ねよ。お前がなんだか知らねェが、ヒトじゃねェ。悪

霊かなんかだろ。
太陽の香りのする悪霊ってなひでェ話だな。どンな世界だっての。
だが――ははァ、いいぜ。あったけェンならよ、俺の全力を以て、お前を殺してやる。
「……え」
「ア？　どォしたよ、お嬢様」
「いえ、それはこちらの言葉ですけれど」
「何がだよ」
「……気付いていませんの？　貴女――倒れていますのよ？」
「ン？」
確かに。
地面がお隣さんだ。しかも動けない。
えーと。
あ、そォだよそォそォ、ＥＤＥＮに上がって、学園内案内されてる時に習ったわ。
なンだっけ？　「魔法の使い過ぎは体調不良を引き起こします。具体的には倒

れちゃうので気を付けてくださいねー？」だっけ？

おォ、そのまんま。いやでも俺今一回しか魔法使ってねェんだけど。使い過ぎも何も、なンだけど。

「あァさ、金髪お嬢様。悪ィんだがよ、林の外に転がしといてくれねェか？　誰か拾ってくれるだろ、外なら」

「馬鹿にしてますの？　……目の前で倒れている幼子を放って帰れと？　はぁ、もう、良いですわ。なんだか死ぬ気などなくなってしまいましたし……アールレイデの名に懸けても、貴女を寮まで送っていきますわ」

「マジか。ありがとう」

「……」

えー。魔法ってこんな燃費悪いのか。

知らなかった。つかマジで動けねェ。うわ、担がれ……おいおい、姫抱きかよ。待て待て、そりゃ恥ずいって！　言ってないけど俺ァ43歳のおじさんでよ！

あれー？

口も動かせねェっつか、ねっむ。魔法少女ァ眠る必要ないとか言ってなかったか

あの案内のお姉さん！　あ、あとだな、お嬢様。その、色々当たってるっつーか？　ちょいと考えてくれねェかな。俺さ、いんやさまァ13年も少女やってりゃ慣れるたァいえさ。いや勿論こんな子供にゃ発情したりしねェけどさ。

なーんでそんなぎゅゥと抱きしめてくるかなー。

「ライラックさん」

「んー」

「――ありがとうございます。おかげで、尖兵にされずに済んだようですわ」

「おォー」

「世界は……太陽だけでは、ありませんのね」

「んー。……なぁ、お嬢様」

「はい？」

「アンタァさ、なんのために戦うんだ？」

「……誰よりも速く、敵を殲滅し――人々に安寧を齎すため、ですわ」

「そォかい。そりゃ、すげェな」

それは。

学園の案内が終わって、俺が迷子になってからのこと。
だから――よぉやく陽の落ちてきた頃の事。
夕暮れ時の、とある２人の一幕、である。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ってな出会いがあったワケさ。いや、今になって思えばあン時殺したのァ太陽のなんかだったンだろぉな、って」
「そうですね。そうして、風と太陽は共に在りますから。」
「やっぱりか。……つかよ、神さん」
「なんでしょうか？」
「何度帰ってくる気だ、って思ったりしねぇ？　毎度毎度カッコつけた別れ方しといてさ。何度この世界に来る気だ、って」
「思いませんよ。私は貴女の全てを愛していますから。」
夜の宮。

性懲りもなく来ちまった。どォやら俺の身体ァそろそろガタらしい。死にたかねェが、そォも言ってられねェンだと。もう半分死んでる。こォして意識を失う度にこっち来るくらいにァ死んでる。

完全に死んだら——けど、ここの住民にァならねェ。なれねェ。

魔法少女の因子ってな病に感染しちまってるンで、蘇生する。ハハ、クローン説だのなんだのを推してきたが——こりゃゾンビだな。ま、見た目で言やここの住民のがゾンビっぽいンだが。

「あー、まだ起きれそォにねェなァ。んじゃよ、神さん。他に何が聞きてェ？いーよ、なんでも話すさ。ここにずっといるしかねェ神さんに代わってよ、俺がなんでも話してやる」

「ありがとう。ふふ、では、»前»の話が聞きたいです。貴女に最も親しかったのは、どういった方ですか？」

前か。

前の話ね。

いーよ、しようじゃないか。

そもそも俺があんなにも自殺を嫌ってたのァ前が原因とも取れるしな。
「俺ァさ、そいつのこと絵具髪って呼んでたンだ。なんでかわかるか？」
「初めて会った時、絵の具が髪に付着していたから、でしょうか？」
「いんやさ、常にだよ。そいつァ画家でね。つっても売れねェ画家さ。あ、そもそも画家ってわかるか？　絵を描く奴のコトだ。俺が就職してからも、そいつァ絵を描き続けてた。なんでだと思う？」
「理由があるのですか？　絵を描くのが好きだから……それ以外に」
「いや、なんとな。初めて絵を買ってくれたのが俺だから、だって言うんだよ。自分のファンがこの世にいる限り、絵は止めない、って。すげェよな。誰かのために頑張れる奴なんだ。俺のためなんかに生きてた奴なんだよ。すげェよ。……他に生きる理由も、絵を描く理由もあっただろうに、全部を俺に使ってよ」
「貴女が買った絵は、どのようなものだったのですか？」
「海の絵さ。ありきたりな構図だったよ。砂浜で、海で、遠くに船があって、両脇に堤防があって。右の堤防にァ釣りしてるおっさんが描かれててさ」
でも。

そこに、もう一つ描かれていたものがあった。
「砂浜にさ、手が描かれてンだよ。手。自分の手さ。キャンパスを透明にして、海の絵を描いてる自分の手が描いてあンの。すげーって思った。絵に、生きてる自分を入れるんだ。止まった時間の中に、切り取った時間の中に、自分を入れる事で——その絵ァ生きてたンだよ。だから買った。死ぬまで家に飾ってあったよ。一番好きな絵だった」
俺ァ絵なんざ描けねェから、良さだの凄さだのァわからねェ。
でも好きだったんだ。
だから、俺ァ絵具髪の絵を買った。それだけだったのにアイツ、ファンができたー、なんて嬉しがって。絵を続けて。
でも、それじゃァやっぱり生活ァ回らなくて。
「俺が、ちょいと昇進した年があってさ。給料使ってソイツに奢ってやろうって思ったンだ。いつも飯なんざほとんど食ってねェだろォから、つってさ」
「……はい。」
「死んでたよ。ハハ、餓死だのなんだのじゃねェ、首吊って死んでたンだ。——自

殺だよ」

ほんの一日前まで、ＳＭＳでやり取りもしてた。ちょいと三日目にァ電話もしてた。

生活ァ苦しいけどまだ絵を描いてるって、今度あったら見せてやるって自慢気に言ってた。

けど。

死んでたよ。首吊ってさ。俺ァ合鍵持ってたから、いっちゃんに見つけて、遺書も読んだ。警察にァ通報したけどな。救急も。でも、まず遺書の方を読んじまったし、布のかけられた絵も見ちまった。現場保存とか一切考えられなかったのァ落ち度だろォよ。確実に。

でもさァ。

その絵が――海の、あの時の絵でさ。

「〝貴方が買ってくれた絵を、もっと綺麗にしようって、もっと――貴方のいう、子供みたいな、すげぇよ！　って言葉が聞きたくて、描き直そうと思いました。でも、ごめんなさい。今度見せると約束した絵は描けませんでした。私は、貴方との思い

出を、上塗りしようとしたんです。それが、耐えられなくて。思い出そうとしました。上手く、じゃなくて、再現しようとしました。でも、それもできなくて。……忘れてしまったんです。貴方が褒めてくれていた頃の私を。私が貴方に見せたかった光景を。ごめんなさい。これを読むのが、貴方でありますように。これを読むのが、初めて読むのが、警察の方でなく、大家さんでもなく、貴方であったら、とても嬉しいです。意地悪でごめんなさい。この手紙を読んで、貴方が最初に発した言葉が、この絵のタイトルになります。さようなら、私の友人。この世で唯一、私を認めてくれた人≫」

一字一句覚えてる。

あン時の感情も覚えている。

意味わからねェ、思い出せなくなったから、再現できなくなったから。

その程度で死ぬってなが、一切理解できねェ。初めに感じたのァ苛立ちだよ。クソが、って。思い出せねェならもっかい一緒に行きゃ良かっただろォが。再現できねェなら俺に話を聞きゃ良かっただろォが。

同い年さ。結婚もしねェで絵ばっか描いて、生活できなくてさ。

その挙句の果てに、自殺だって？
ふざけんな。
「その絵の、題名は？」
「≫残してくんじゃねェよ、アホ≪」
「貴女らしいですね。」
本来のタイトルァ、『此岸』。そう書かれてたけど、消してあった。消しが甘いンで読めたけどな。
だからあいつァ渡っちまったンだ。彼岸によ。
「その方が、最も親しかったのですね。」
「あァさ。それ以降も友人ァできたけどな。俺が爺ちゃん婆ちゃん以外の死で——初めて遭遇した死が、それだったよ。32の時だ。意味の分からねェ死に方しやがったアイツも32。……わかってたさ。俺が貰ってやりゃよかったンだ。俺ァちったァ稼ぎの良い方だったンだから、俺が……」
「でもその方は、貴女ではなく死を選びました。何故かわかりますか？」
「……あァ」

納得なンてしねェ。理解なんざしたくねェ。
ンな意味のわからねェ自殺ァ認めねェ。
けど、俺を頼らなかったのァ、その理由ァわかる。
「対等で在りたかった――とか、そんなトコだろ。アイツの考える事なんざ、手に取るよォにわかンだ」
「その方は、そこで止まったから、貴女と対等のまま、終わりました。」
「……あァよ。ンなことのために死ぬなんざ、唾吐いて止めるけどな」
「もし、その方にもう一度会えるとしたら、なんと言いたいですか？」
「やめな。神さんらしくねェぜ、その質問。――死んだらもう会えねェんだよ。何の言葉も交わせねェから死っていうンだ。ンな簡単に再会が叶っちまうのァ許されねェ。たとえ話でも、俺ァ嫌いだね」
「そう、ですね。ごめんなさい。私らしくありませんでした。」
「あァさ」
魔煙草を吸う。起動しねェコイツで、ちょっとでも昔を思い出す。
そんなことばっかだった。前の生ってなよ。

仲良くなる奴が――みんな、死んでいく。自分ァ死神なンじゃねェかって思った事ァ何百回もあったよ。人に近づきすぎねェ方がいいんじゃねェかって。オカルトだがよ、32から43まで、ずーっとソレが続いたら、まァそォ思うよォにもなるだろ。

そンで最後ァアレだ。

死んだ後ですらコレだ。

「でも、違うンだって、そォ否定してくれたよな、神さんァ」

「はい。貴女にそのような性質はありませんでした。ただ。」

「若死にする奴を惹き付ける、ねェ。っとに……」

死んでから、神さんに拾われて。

教えて貰ったのが、そォいう星の下に生まれてきたって話。

そンでもってそれァ離れねェとかいうンだ。剥がせねェらしい。なンでこの夜の世界でゆったり過ごそォとしたンだけどよ、なンでも頼みがあるって言うじゃねェか。

頼み。

夜の神が、夜の使徒に対して行う頼み。
それは――もう休みたいと、もう疲れたと。そう言う奴らを輪廻や呪縛から解放してほしい、ってな話さ。
「……なァ、神さん。俺のやってるこたよ、化け物達から見たら、否定なンだと。それってなよ」
「はい。魔物の、食べ、死に、廻る、という輪廻の中で――【即死】はそれらの積み重ねを無に帰す否定です。故に、そう思われるのでしょうね。」
「それァ、変えられねェのか」
「ごめんなさい。――それをさせないための、頼み、です」
「あァ、な」
そォいう事か。
輪廻廻って、至高の一になって、死ぬ。
それァ――夜にとってァ、不都合なのか。
「魔物は魔物として生まれた時点で、永遠の輪廻の中にいてもらわなければなりません。風は世界を巡るものですが、世界の外に出てしまえば――それがしぼんでし

まうのです。」
「だがよ、化け物と魔法少女ァあとから入って来たものなンだろ？　じゃァ、元の世界にァ何があったンだ？　元の世界ってな、どォなってたンだ」
「――狭い、狭い世界でした。空は今より低く、緑は今より薄く、海は今より浅く。――故に私を含む神々は、世界を膨らませました。そうして、世界を巡る風が生まれ――その際に開けられた穴を通り、最初の魔法少女が誕生しました。」
「太陽か？」
「いいえ。」
少しずつ、目が覚めて行くのを感じる。
みんなが俺を生かそうとしてくれてンのァわかる。けどもうちょい待ってくれねェか。俺ァその名を――最初の魔法少女の名を、聞いとかなくちゃいけねェ。
「名は――ゲヘナ」
「まるで俺達みてェな名前だな」
「そう、ですね。」
覚えた。

覚えたぜ、ゲヘナ。奈落の名前。

「――またな、神さん。次もそォ遠くないかもしれねェが、そン時ァもちっと明るい話をしよう。神さんの話も聞いてみてェな、今度ァ」

「ええ、そうしましょう。さようなら、私の愛しい子。また会いましょう。」

世界が白む――。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

61・蘭酢琉地蔵独活・

「あー、今いつで、どこだ」
「起きて早々それ？　普通は生きてることに驚くものじゃないかしら」
「生きてる実感あっからな。そこァいいのさ。んで、この揺れァＬＯＧＯＳ特有のモンだ。随分と命の気配があるよォだから、今ァ協力的な魔法少女運んでＥＤＥＮに侵攻中、ってトコじゃねェかってな」
「概ね正解よ。ただ、すべての魔法少女を、というわけにはいかなかったから、別動隊としてもう一つ輸送ガーゴイルを作ったの。今は潜航中……海の中をね」
「へェ」
いんやさ、寝た、寝た、大爆睡だ。
あれからどんだけ時間経ったのか知らねェけど、俺抜きでコトァ進んでるらしい。まァ創設者たちもマッドチビ先生もいるからな。
「ン？　ってこた、鼠は見つかったのか」
「ええ。ローグンを回しておいて正解だったわね。案の定、紛れていたわよ」

鼠。

まァ簡単に言や、スパイとか密偵の類だな。

ルルゥ・ガル側から、じゃねェ。ＥＤＥＮ側から、だ。いんやさ、おかしいだろ？　俺を殺すために小隊組んで来るのァ良いが、まっ正面からぶつけて、しかも暴走させる、なンて作戦。暴走させてきたの自体ァあとでわかったことたァ言え、まっ正面から全隊が来るってながオカシイオカシイって話してたンだ。

ンなもん作戦たァ言えねェ。なんせ、魔法殺せる俺がコッチにいンだ。ＳＳ級がいるからって無理なモンは無理だし、ぶっちゃけ俺が始の点に籠ってたらあんな量来ても意味なかった。

だから――もっと早くに、こっそりと。

俺達がＬＯＧＯＳでＥＤＥＮを出たその時に、尾行けてきてる奴がいるンじゃねェかって。

始の点に入った時点でもうそいつァ輝きの園内部にいて、絶好の機会かなンかを虎視眈々狙ってンじゃねェかって。

そんなんじゃなかったら全部杞憂で済む話さ。

でも、案の定だった、ってコト。何も無いならそれでいい。何かあってからじゃ遅い。そんだけの話さ。

「そいつァ今どこに？」

「ペルチットとハイドレートが尋問しているわ。中々吐かない上、何か呪縛のようなものが見受けられるから、難航しそうだけど」

「ＬＯＧＯＳにいるのか？」

「ええ、そうだけど。……まさかとは思うけど、アンタ」

「あァさ。会ってみてェ。んで多分、俺なら解ける」

どーせまた太陽の使徒だろう。

なら、俺の出番ってな。

「ダメよ」

「エ」

「……ビーファン達から聞いたわ。貴女が使うその謎の唸り声。世界言語っていうのね。そしてそれは――精神を擦り減らせる。忘れているかもしれないけれど、私は肉体から精神体を抜く技術を開発した、いわば精神体関係の専門家なのよ。その

専門家から言わせてもらうと、精神を減らす、という行為は――」
「最終的に死ぬって言いてェんだろ？」
「ええ、そうよ。特に魔法少女はね。魔法少女の固有の魔法というのは肉体に宿るものだけど、魔法少女の扱う魔力……つまり、身体強化や飛行魔法などに用いられる魔力は精神側に由来する。それが擦り減るというのなら、当然それが使えなくなっていく」
「元から使えねェよ、飛行魔法なんざ」
「アンタの身体、私が気付いていないとでも思ってるワケ？」
「まさか。マッドチビ先生ァよく見てくれてると思ってるよ。……でも、口を割らねェんだろ？」
「絶対にそれが必要な時ではない、って言ってるのよ。……アインハージャ達が回数制限付きでしか蘇生できないのも、それが原因のようね。もう――あの子達の精神は擦り減りすぎている。アンタがそういう話を嫌うと承知の上で言わせてもらうけど、これ以上精神が擦り減ったら、死んでも蘇生できなくなるわ。――寿命が来る、ということよ」

あァ。知ってる知ってる。
ぜーんぶ聞いてきたよ、神さんに。
死ねば治る。
それァ健全な精神があってこそだって。
こんな虫食いボロボロの奴ァ、死んで治るのァ怪我だけ。
その精神体に開いた穴っつーのァ治らねェ。治す手段ァまァ、あるっちゃあるが、無いに等しい。
「今はその時ではないわ。ま、第一印象が最悪だったから、ビーファン達を信用できないっていうのはわかるけど、あの子達は私以上に長い時を生きる魔法少女よ。だから、大丈夫」
「……口を塞いでいてくれていいから、会わせてもらう、ってな無理か」
「なんでそこまで会いたいのよ」
「気になるだけさ。単身敵地に潜り込まされて、何も成せずに掴まっちまった憐れな魔法少女って奴が」
「……それでも、ダメよ。会っても辛いだけだから」

会っても辛いだけ、ね。
知り合いかァ。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

「や」
「ン？　おォ……キラキラツィンテか。久しぶりだな」
「うん」
魔法少女ァ食う必要ってなねェんだが、単純に好きで輝きの園産のリンゴをシャクシャクやってると、ふわりふわりと、つかにゅーんとベッドから少女が顔を出した。
薄紫の髪にキラキラしたなんぞかがいっぱいくっついたその頭。まァキラキラツインテさ。
「何しに来たンだよ」
「助言をね、しに来たんだ」

「おォさ、ありがてェが、今度ァ何の詫びだよ」
「お詫びじゃないよ。ただ、カネミツを解放してくれたお礼」
「あァ、んじゃ要らねェ。お嬢にやってくれ」
「その【神光】ちゃんにね、貴女を助けて欲しいと頼まれたんだ」
……助けて、ねェ。
死ねば治るのに派のお嬢が？
「私がこうやって飛んでいるの、どうやっていると思う？」
「ン？　飛行魔法じゃねェのか？」
「ううん。私は【透過】しか使っていないよ」
ふわーっと。
にゅーんと。
ＬＯＧＯＳの壁中を、あらゆる家具小物類を、上下左右を関係なく飛び回るキラキラツインテ。
確かに、飛行魔法程の魔力を感じない、よォな？
「【透過】は昔、【通過】という魔法だった。……といえば、わかるかな」

「そりゃ、お嬢の魔法が変わったみてェに、って事か」
「うん」
通り過ぎるだけの魔法が、すり抜ける魔法になったって？
……魔法の種類が変わった。いや、あるいは――役割が統合された？
「地面は、物を引っ張る力を有している。調査班の【引力】の子が使うようなものをね」
「あァ。……それも、【透過】できンのか」
「そう。そして、それだけじゃない。行きたい所に行く前に立ちはだかる障害も、【透過】できる。こっちに行きたいと思えば――世界に溶けた私は、そっちに行っている。何故なら、そっちに行く障害が無くなったから」
「……ん、ちと難しィな」
「≫私がそちらに行ったと認識したんだから――世界(あなた)もそうだと認めて≪」
「そりゃ」
それァ。
あの迷宮で、俺が陥った感覚だ。

何度も触った。何度も【即死】させた。させたことにした。
だから――俺の中でそォなったンだから、世界も認めろ。
「【即死】はまだ一段階目だよ。前にも言った通り、SSSに至り得る魔法は限られている。それは、創設者の子達がいうような命と精神と心に作用するかどうか、だけじゃなく――」
「伸び代があるかどォか、って？」
「そう。SS級の【神速】は、【神光】になってもSS級のまま。あの子の努力を否定するのは心苦しいけれど、それはどうやっても変わらない。けど、【即死】は――次の段階になれば」
「【即死】以上の危険度ってななンだよ」
「なんだと思う？」
「……」
死、以上。
即座に殺す魔法以上ってな、なンだ。
ああいや、役割を統合するって考えたら……死と統合されンのァ、なンだ？　……

えーと、誕生とか？　いやいや、流石に流石に。
「わかんねェ」
「うん。わからないだろうね。私にもわからないから」
「あくまで助言、ってか」
「そう。私はたった50年しか魔法少女をやっていないけれど――同時に、私はその魔法少女歴のほとんどで、世界に溶けてきた。だから色々教えられるし、色々わかるよ。もう、世界が死にたがっていることも。魔物が、君を求めていることも。――君がやろうとしていることも」
……俺がやろォとしていること、ねェ。
ＥＤＥＮ解放以外に何があるっていうンだ。魔法少女の因子殺してまわるのが、ンな神妙な顔して言われる事柄かね。
はン。
「で、その魔法の進化？　変化ァよ、俺を助けることになンか繋がンのか？　そォ頼まれたンだろ？」
「ふふ、繋がるよ、ちゃんと。魔法が変わるということは――肉体が一新される、

ということでもある。その精神の穴は、もうどうしようもない。どうにかする術は残っているけれど、君が一番嫌いな方法だから、しないだろうし」

「あァ。絶対しねェ」

「だから、魔法の一新を目指すと良いよ。それが唯一、死なずに、身体を治す方法だと思う。一回切りの、完全復活、だね」

なるほどねェ。

ま、頭の隅にでも置いておこう。今の俺にゃ考え付かねェし。なンだよ【即死】より上って。アレか、【皆殺】とかか。こっわ。でもそォだよな、国民的ＲＰＧでも対象が１つの奴の上位互換ってな、全体を対象にできるよォになるし。

班長の【凍融】、鬼教官の【痛烈】然り、つえーつえー魔法ァ全体をどォにかできる魔法ってイメージがある。虹色ロングのァ……まァ、等級区分ァアレだが、強いだろ。創設者基準で言えば心に作用できンだから、あるいァＳＳＳ級やもしれねェし。

「それじゃ、そろそろ私は行くよ」

「おォ。助言、ありがとな」

「うん。……あまり、こういう事を他人には言わないんだけどね」
「ン？」
「無理しないでね。君は、君が思っている以上に、みんなに好かれているよ。愛恋ではなく、友人として――あるいは、身内として。前にできなかったお菓子パーティもやらないとだからね」
「あァさ、わかってるよ。そのためにァ今大変なコトになってるＥＤＥＮをどォにかしねェとな」
「……うん」
なンだ、その溜め。
……なンだ？
俺さ。
そんなわけがないことを――考えないよォにしてねェか？
「ばいばい、ゆっくり休んでね、梓」
「ン――あァ」
この、違和感ァ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「シエナ。燃料補給中か？」

「え？　あ、え!?　だ、ダメですよ梓・ライラック様!!　お部屋にいないとお体に障ります!!」

「いーだろ別に。つまんねーんだよ流石に。車椅子ってな俺みてェなのが自力で移動できるよォにするモンなンだから、こーやって動き回るためのモンさ。くるくるるーってな」

「回らないでください！」

怒られた。

ちぇ。いーじゃんかよ。生きてて、こーやって車椅子の操作も上手くなったンだぜ。その場で回転ァ勿論、片輪浮かせて急カーブとかもできる。何度か転んで青バンダナに「馬鹿なのか貴女は」とか赤スカーフに「そろそろ学習した方が良い」とか言われたけど、まァ練習あるのみだったな！

「もう……梓・ライラック様は、傷だらけなんですから……少しはご自愛ください」
「なーに言ってやがんだ。そりゃみんなそォだし、ＥＤＥＮもそォだし、お前もそォだろ、シエナ」
「いえ、私は定期点検で、こちらの主ディミトラによって整備が為されているので問題ありません」
「エ、マッドチビ先生お前の点検なんざできるよォになったのか？」
「流石に内部構造までとなると難しいのですが、身体骨格のへこみや傷などは取ってくださるんです」
「へー。……なンか変な機構付けられそォになったら言えよ？　俺が庇ってやるから」
「問題ありません！　あちらの主ディミトラもよくわからない機構をつけてきていましたので！」
「そこァセンス一緒なンだなァ」
そォいや俺をぶん投げた時の腕のブースターとかも、確かによくわからん。
……ふむ。

「燃料の消費の少ねェ奴で、意味の分からねェ、なんか面白い機構ってなあるか？」
「はい！　たとえばですね、これとか如何でしょう！」
シエナが畳んでいた足を延ばす。あァ座ったままな。
その、つま先から。
ぴゅーっと音が鳴った。
「……ン？」
「あちらの主ディミトラ曰く、換気機構だそうなのですが、換気口が狭いためか、ぴゅーぴゅーと音が鳴ってしまうんです。加えていうのであれば、口腔での体内換気が可能である上、そもそも体内の換気をしなければならない状況に陥ったことが無いので……なんのためにあるのかわかりません。ただ音が出るので面白いと思います」
「お、おゥ」
なんか可哀想になっちゃった。
この分だと、他にも余計な機能いっぱいついてンだろォな。戦闘用ガーゴイルとか言ってなかったか？　なンだよその機能。俺をぶん投げた時の奴の１００００

００倍は要らなそうなンだが。
「あ、でも、恐らく主ディミトラは面白がってつけたのでしょう機能が、中々に役立っている事もあるんです。たとえばこれとか」
「ん……ン？」
「あ、申し訳ありません。その位置からですと見えませんよね。ええと、これです。腰部解放……というよりは、脚部を外した方が見やすいでしょうか」
なんて言って。
シエナァ、右足を――外した。太腿の辺りから。
「な――に、やってンだ」
「あ、大丈夫ですよ。もとから外れる仕組みです。それで、見えますか？　この臀部の辺りのふくらみ」
「いい、いいから、尻を見せつけてくンな。説明だけでいいから」
左足だけで立って、腰部装甲をパカっと開けて……その、なンだ。尻を見せてくるシエナ。
確かにそこに膨らみがあったが、やめろやめろ。おじさんにそンなもん見せつけ

ンな。
「それァ何なんだ？」
「主ディミトラ曰く、椅子が無い時でも座れる折り畳み式便利三脚、らしいのですが、このふくらみはとても硬いので、攻撃に使えるんです！」
あー。
ヒップアタックね。それにメリケンサックがついてるみてェなことね。
結構凶悪だなソレ。
「つゥか、あっちのマッドチビってな、そんなユーモアある性格なンだな」
「そうですね。こちらの主ディミトラよりは落ち着いている方ですけれど、突発的な発明や発想でとりあえず私に機構を組み込もうとする方でした。私自身、そこまで長い期間あちらの主ディミトラと共にいたわけではないのですが……私の中の彼女の印象は、面白い方である、と記録されています」
「こっちのァ？」
「怒りっぽい方です！」
――≫あのね。ＬＯＧＯＳで喋った声は大体聞こえてるのよ。よほど込み入った

話は聞かないようにしてるけど……シエナ。後でもっと余計な機構つけてやるから感謝しなさい≫

「……優しい、母親のような方です！」

「それにァ全面同意だよ」

壁に耳あり障子にメアリーだな。余計な事いわんとこ。

「あ、それで、何か御用だったのでしょうか？」

「いや、動き回れるよォになったンで動き回ってるだけさ。お嬢にもポニスリにも出会えてねェしな。シエナ、どこにいるのか知らねえか？　背中メッシュと太腿忍者にも久しぶりに会いてェんだが」

「……すみません、知りません」

「……そォか」

まァ、頑張った方だよ。

シエナなら嘘吐けねェんじゃねェかって訪ねた俺が悪ィ。ごめんな、意地悪いして。

さて、じゃァそーなっと。

「ちょいと艦橋にでも行ってくるわ。またな」
「はい。……でも、本当にご自愛ください、梓・ライラック様」
「あァよ、ありがとう」
考えないよォにしてた――嫌な予感。
ンなもんは。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ブリッジの戸を開けたら着物狐の上にマッドチビ先生が乗っかってて、着物狐の着物ァこれでもかってくらい開けてて。
「――あ、悪いな。帰るわ」
「待ちなさい。私とナリコはそういう関係じゃないし、なんなら襲われた側よ!!」
「じゃァそォいう関係じゃねーか。悪かったって。邪魔するつもりァねーって」
「ククク……待て、待て、吾の妻。お主も一緒にどうだ？」
「アンタも否定しなさいよ!!」

いんやさ、おじさんは遠慮しておきます。
つーかブリッジなんつー、まァ海の上たァ言え開けた環境でよ、こう、なんだ。オープンで明るい場所でよ。
そーいう事すンの、おじさんァ無理だなァ。そーいうプレイが好きな奴も同僚にいたが。……ああいや、嫌なコト思い出したんで消去消去。
「ク、冗談はさておき……どうだ、梓。身体は」
「ン、まァ万全たァ言わねえよ。マッドチビ先生に否定されっからな。けど、良い方だよ。車椅子の扱いにもなれてきたし、何よりほら」
言って——眼帯を外す。
勿論何も見えねェが——魔力を微量に注ぐと、なんと。
「ほら、と言われても、吾にわからぬが。その絡繰は、どのような効果があるのだったか？」
「……簡単な熱検知器よ。シエナについてたのを真似したの。私には私じゃない私程そういう絡繰機構に優れた知識があるわけじゃないから、完全再現は無理だったけど……どうやら正常に動いているみたいね」

「あァ。なんかおもしれーよ。熱源がぼんやりと見えンだ」
サイボーグだ。
ハハ、かっけー。
……まァＬＯＧＯＳってな断熱されてるせいで周囲みてもほぼなーんも見えねェんだけど。
「いい？　そんなのでも、魔力を使う。アンタの少ない魔力をね。だから、本当に必要な時にだけ使いなさい。今みたいな状況で使うものじゃ――」
「ン、マッドチビ先生。なンか服の中にいんぞ？」
「え――きゃぁ!?」
ところで、マッドチビ先生の魔法少女衣装ってな修道女みてェなソレである。
その中を、するすると。……その、ヘビみてェなのがいるワケで。それがサーモセンサーにくっきり見えるわけで。
「あ、アンタ、もう全部出したから安心しろって……!!」
「ククククッ、吾の桜餅を勝手に食べた仕返しだ、そんな容易に許すワケがなかろう」

「え、何桜餅って。美味そう」
「ほう？　お主、餅に理解があるのか？」
「あるある。なんなら結構好きだ」
「良い良い。輝きの園でいくらかのもち米を見つけてな。それを丹精込めて吾が打ったのだが……ディミトラに食われてしまってな。それで、今仕返しをば、としていたところぞ」
「あァそりゃ仕方ねェよマッドチビ先生。食い物の恨みァでけェんだ。大人しくチョメチョメされときな」
「た、食べてくださいと言わんばかりにここに、私の机に置いておく方が悪いでしょ！　ちょ、どこ入って……ひゃあ!?」
うむ。
俺ァどっちも擁護できない。というかこの場にいるのは不健全だ。
帰るか。
……俺に何かを気付かせないために、無理矢理そォいうことしてた、ってなァ——考えすぎかね。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「もう、いいよ。わかってるからさ」

はァ、と。

溜息を、吐いた。

わかるよ。

お嬢もポニスリも、冷静メイドだってさ。

多分俺が起きたって知ったら真っ先に会いに来てくれると思うンだよ。

それがねーってなよ。

どォいうことか、なんざ。

「死んで先に戻ったンだろ。なんせ、ＥＤＥＮが襲われてンだ。ンなちんたらＬＯＧＯＳで戻るわけにゃいかねェよな」

「……」

「俺に戦わせたくねェと、俺を戦場に立たせたくねェと。そォすンならまァ、俺を

戦場から剥がして、俺が来る前に終わらせるのが理想的だ。誰だってそーするだろ。……はン、愛されてるな。全くもって――っとに」

「……」

魔煙草を起動する。

考えさせねェよォにしてる、なんて。

わかりきってるに決まってんだろ。俺ァそォいうのにァ聡いンだよ。気を遣われてンのもわかってるよ。でも、俺のエゴのために、俺１人の理想のために、ＥＤＥＮの危機を見過ごすってなできねェんだろ。知ってるよ。

たとえ、今ＥＤＥＮに死に戻ってさ、それが結構危険なことかもしれねェって言っても――魔法少女ァ、少なくとも今ＥＤＥＮにいるのァさ、国家防衛機構を回してる魔法少女たちだ。

それが、オリジンに襲われている自国を守らねェでどーするってな。

やだ、やだ。

「で？」

「……で、とは」

「あるじゃねェか。ＥＤＥＮまで行く方法で、クソ危ねェ、けどクソ早ェ方法がよ」
「梓。貴女は」
だーれが思い通りに動いてやるかっての。
馬鹿か、だと？　貴女は馬鹿か、だと？
馬鹿に決まってンだろ。
「射角の計算ァやるよ。今、輝きの園出てから何日だ。それがわかりゃ位置も掴める」
「……」
青バンダナと赤スカーフさ。
丁度俺の部屋に来て――ケケ、捕まえてやった。詰問してやったら、コレさ。シエナ同様嘘に向いてねェからな。
フリューリ草の苦味を脳と肺に入れて、ひひ、と笑う。
「別動隊がいるってなも嘘か、あるいァいても創設者たちだけだろ。ここに残ってンのァＥＤＥＮとの経路繋いでねェ魔法少女だけさ。キラキラツインテァ別だが」
「……」

「なァ、アインハージャ。教えてくれよ。今の位置さえ掴めりゃ、行けンだよ。青バンダナの魔法がありゃ、俺ァＥＤＥＮにいける。マッドチビ先生ァ心配して行かせてくれねェだろォからさ。頼むよ」
「良いか悪いか。あるいはダメかどうか、ではない」
「あン？」
「嫌だ。――私は拒否する。戦地に傷病者を送りつける戦士など、いはしない。私はアインハージャであるが故に、ウォムルガ族であるが故に――貴女を戦場には向かわせない」
「そォかい。お前ァ？　赤スカーフ」
「当然、私も同じ。私の魔法じゃ送り届けられないけど」
「……そォかい。じゃァシエナに頼むか」
踵を、車輪を返す。
そこに、シエナがいた。マッドチビ先生も。
シエナァにっこり笑って。
「拒否します」

「当然だけど、プテラゴイルも貸さないわよ」
「なンでだ」
「アンタは少しくらい、思い通りにならない苦しみ、というのを味わいなさい」
「十分味わってるよ」
「――今まで、アンタの周りの人達が――アンタに抱いていた感情よ」
吸う。
魔煙草を吸う。
ぷはァと息を吐いて――そォかい、と。
言えなかった。
「んじゃ、ごめんな。もっと味わってくれ」
「――まさか」
「!?　梓・ライラック様の熱源反応急速に低下――これは！」
視界が紙に覆われて行く。
違う。
自分が紙になっていっているンだ。紙。紙。紙だ。

ざぁざぁと、全部が全部紙になっていく。
そォして紙吹雪が晴れたのなら――そこァ、大海の上。
キコりと車輪を止めて、背に靠れりゃ――取っ手を掴むは狐の手。
全く、妖術だか魔術だか知らねェが、魔法よりとんでもねェのァわかるよ。
なァ。
「ク――ククク。なんだ、吾の正体に気付いたのか？」
「あァ。お前、遥か昔に討伐なんざされてねェんだろ。この嘘吐き狐め。大方どっかに逃げ果せて――死んだふりでもしていたかよ」
「当然ぞ。オリジンだのなんだのと勝手に名付けられ、勝手に殺されるなど――ククク、到底受け入れられまい。改めて。吾はナリコ。――遥か昔、九つの尾を持つ大妖として在った――紛う方なき魔物である。今は魔法少女の因子を食ろうたが故に、魔法少女にもなったがな」
「はン。いいね。俺ァ梓・ライラックってンだ。夜の使徒っつー、まァ死者でよ。でも魔法に覚醒しちまったンで魔法少女やってる。この世界の、あらゆるものから見て、俺ってな化け物だよ。よろしくな」

「ククク。嗚呼。よろしく頼む」
大海を高速で飛ぶ、真っ白い鳥。
鳩か雀か。いや燕かね。その上で――魔煙草の匂いが尾を引いていく。
「今どこだ」
「もうすぐＥＤＥＮに着く。ククッ、そうそう、吾だけではないぞ、協力者は」
「はい！　私も此処に！」
左上の方。
大きな雲を突き抜けて、またも紙燕。そこに乗るのは２人。
腕を組み、胡坐をかいて目を瞑る――カネミツと。
「おお、久しぶりだな、太腿忍者！」
「はいお久しぶりです！　一度は本気で殺そうと思ってましたけど、事情が変わったのでご同行させていただきます！　そこな妖風情含めて今後ともよろしくお願いします！」
「妖風情って」
「ククッ、姫は物言いが素直でな。お主の知らぬ一面ばかりだろうが、あまり驚い

てやるな」
「……苦労をかけた分の働きはしよう」
さらに――右方。今度ァ少し下だ。
こちらも紙の燕。そこにも、2人。
「キラキラツインテ？」
「うん。そして」
「……」
「――先公？」
いた。
随分とまァ、落ち込んだ様子の先公が。
ふーん。
ははァ。
なるほどね。
「鼠ァアンタだったのか、先公」
「っ……！」

「おうキラキラツインテ。先公の洗脳ってな解けてンのか？」
「元から、洗脳なんてされていないからね」
「……」
へェ。
んじゃ、魔煙草一本を着物狐に渡して、と。
先公の口に運んでくれって頼む。
狐面の下でにんまりと笑う顔が見えた気がした。
「おォ、先公！　口開けな！」
「――!?　う、げ、けほっ、ぇ、ぐ」
「カハハ！　魔煙草ァ初めてかい？　それってな、思考を神に近づけンだと。どォだい先公。今、俺を殺したいか？」
風が気持ちいい。
どんなスピードで飛んでンのか、周囲の雲が物凄い速さで後方へ飛んでいく。いいね。
いいね！

「――最悪に、不味いな、これは」
「おう。んじゃ、それで懺悔は終わりにしな。何に唆されたのか知らねェがよ、とりあえずアンタの国の禍根を断ちに行こうぜ」
「……ライラック」
「あン？」
先公ァ無理矢理口に詰め込まれた魔煙草を持ち直し――ふゥ、と。
中々サマになるカッコで吸って――こっちを睨む。ケケ、いい目だな。
「私は、お前にそのままでいてくれ、と言った。覚えているか」
「あァよ」
「いいだろう。もう私も迷いはしない。お前が悪道を突き進むのなら――この手で止める、という事も考えたが。お前にそこまでの覚悟があり、迷いが無く――そのままで居続けるというのなら」
陸地が見えてきた。
ははは。ハハハ。
こんだけ楽しいってことァ――この先ァ、死地ってこった。

そォいうセンサーにもなるなァこれァ。いいさ、良いよ。良いぜ。
「進め、ライラック！　私はお前の友人ではなく、教師だ。故に、その身の心配などしない。ただ――お前が納得できる道を行き、果てろ。それこそが生物であると、私は信じている」
「あァさ！　――さァ行くぞてめェら！　即席ライラック隊だ。西方出身総勢で、ＥＤＥＮ襲ってるカンコウとかいうのぶっ叩きに行くぜ！」
すまねェなァマッドチビ先生達。
どォにも俺ァ、思い通りにならねェのが嫌で嫌で仕方ねェらしい。
死んじまったってのも相当来てるが――助けられる命を救わねェのが、もう無理だ。ハハ、いつの間に俺ァこんなに広いモン救えるって勘違いするよォになったンだか。
ハハハ。ハハハハハ！
「ククク、気を高めている所悪いがな。実は吾は西方出身ではなかったりする」
「エ。いいじゃん別にンなこと気にしないで」
「ダメです！　そこな妖風情は北方から来た妖で、昔は散々国を荒らしまわった

んですから！」
「へー。ン、昔？　太腿忍者、お前魔法少女歴どンくらいなンだ？」
「60年と少しくらいですね！」
「マジか」
「この場にいる誰よりも大先輩ですよ!!」
「マジか」
じゃァなンで学園に在園してンだ。
「座学と内申点がダメダメだからです！！！」
「あーね」
留年しまくりなのね、お前。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

62・地寧場明媚地出微琉・

「そろそろホントの事教えて欲しいンだけどよ。結局忍軍と侍衆の毒が云々ってな何が本当なンだ？」

「ク、忍軍が吾ら侍衆の食事に毒を入れたのは本当ぞ。だが、その程度で死ぬ吾ら侍衆ではない。侍衆が死んだのは別の理由ぞ。――ただ、忍軍を殺すために、その身を糧とした妖術を使った、というだけの話」

「梓さん。侍衆というのはですね、こっちに乗ってる頭領さん含めて、そこな妖の血肉を身体に取り入れたとても恐ろしい集団なのです！」

「……否定はしない」

「故に彼ら彼女らは妖術という、本来魔物にしか使う事のできない術を使います。魔物にしか、というか、インキュバス、あるいはサキュバスという夢魔のオリジン種にしか使えない魔術ですね！」

「ヘェ。んじゃ尖り前髪も使えンのか」

「ク、頭領はあまり得意ではないがな。あちらに残してきたショウモンとストク

も扱い得る。ストクは中でも妖術に長けた者ぞ」
「……斬り合いの最中に、文字だのなんだのは必要無い。それだけだ」
「頭領さん、使う事のできない私が言うのもなんですけれど、使える以上はちゃんと使えるようになっておいた方が良いです！　その方が戦術の幅も広がるので!!」
「太腿忍者の口から戦術なんて言葉が出てくるたァ思ってなかったよ。お前、いつも突っ込んで怪我して助けてください、じゃねェか」
「だって私【光線】あんまり好きじゃないので!!」
速い迅いつったって、まァちったァ時間ぁかかる。
陸地にはもうついてるンでもうすぐなンだが、こォいう雑談タイムが挟めるくらいにァ時間があったわけさ。
「んじゃ、忍軍の言ってたのァ？」
「ク――吾ら侍衆が姫を縛り上げ晒し上げ、槍で貫き殺した、という話のことか？」
「なんですかそれ。もしかして私の死体にやったんですか!?」
「……魔法少女の死体はそれほど長くは残らない。加え、私が侍衆にいた頃、そのような暴挙をさせた覚えはない」

「んじゃ完全なる嘘か」
「……それが、そうでもない」
「エ。なンだ先公、アンタ国が亡ぶ前にＥＤＥＮに来たンだろ？　なんか知ってンのか？」
「過去の話だ。過去――そういうことが、あった。カネミツやナリコ、あるいはユノンが時代を動かすそのもっと前……妖術を持たない侍衆と忍軍が衝突した事があったんだ」
「へー。それァ、知識か」
「そうだ」
　ちなみにこんだけ高速で移動してなンだって声が聞こえるのかってーと、着物狐曰く紙を繋いでいるから、らしい。なんじゃそりゃ。糸電話ってことか？
「過去、ヒノモトは割れていてな。ああも忍軍と侍衆がよろしく手をつなぎ合わせたのは、皮肉なことに国の滅ぶ前が初の事だった。カンコウの件で２つの交流が断絶したのは、元からそうだったためだ。そうなりやすかった、というべきか。そしてその歴史の中で――ある姫が、侍衆によってそのような目に遭わされた、とい

う記録はある。……１００年、２００年と前の話だが」
「じゃあ知らないですね私！　自国の歴史とか欠片も興味無かったので！」
「私も知らない話だったかな。私が知っているのは、昔大きな内紛があった、ということくらい」
「……知ってはいたが、だからなんだ、という話だ。今更そんな昔の話を持ち出されてもな。私もナリコも、その時に侍衆であったわけではない。関係がない」
「ククク、まぁ頭領には関係のない話ぞ。――吾には関係があってな？」
遠く。
前方。
稲光が見えた。
「その時に、そのようにして殺された姫――というのは」
「お前だって話だろ、着物狐。どぉせお前、当時の殿様にでも取り入って好き放題してたらバレて侍衆に取っ掴まって人間じゃねェて証明するためにそぉいう凄惨な拷問受けたとか、その辺だろ」
「ク――なんだ、つまらん。お主、吾が皆を驚かせようとする遊び心を潰してくれ

るなよ」
「時間無いからだよ。ほら――見えてきたぞ」
いた。あった。
宙に浮かぶＥＤＥＮと、雨雲を纏い、樹木を茂らせる何か。
と。
「クク、つまり忍軍の慕う姫とは吾のことなのだが――」
「あの光ァお嬢だ！　よォし命名紙燕！」
「ＮＡＮＭＯＫＡＮＧＡＥＺＵ　ＴＳＵＫＫＯＭＩＮＡ　！」
「ハハッ、こっちの言葉ァ使っても特にデメリット無ェんだ――行け行け紙燕！　戦術なんぞクソくらえさ！　突撃だ突撃!!」
「梓さんも他人の事言えませんよね全く！　でも賛成です！　チャージ開始します！」
「【飛斬】――」
「あ、ずるいですよ頭領さん！　チャージ無し遠隔攻撃とか、私もそっちが良かったです！」

「細かい作業の苦手な姫には扱えまいよ。そら、よそ見をするな。あれなるは身から出た錆、早々に潰そうぞ」
「お殿様が魔物になったのは私のせいじゃないので身から出た錆ではありません！　【光線】！」
なんかまだまだ複雑に絡み合ってるっぽいンだけど。
まァ、その殿様ってなも、色々あったンだろォけど！
すまねェが化け物にしかみえねェんだ。アンタの人となりを、生前から知ってりゃな、少しァ――躊躇いもあったかもしれねェが。
俺ァ人間だったら全部助けるってな善人じゃァないんでね、すまねェすまねェ。
死んでくれ。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――どうせ置いていっても来ると思っていましたので状況を簡潔に説明いたしますけれど！　現在ＥＤＥＮを襲撃してきているこのオリジン種は、大きさそのも

のは成人男性と同じくらいですわ！　雨風を操り、樹木を操るので、空中に居ても地面に居ても危険だと思ってくださいまし！　今の所１２０回ほど殺しましたが――復活を果たし、尚も進行中！　私達はできるだけ時間を稼ぎますの！　いいですわね！　これは信頼から来る言葉ですのよ。――あのオリジン種を、殺してください、梓さん！」

「元気の出る言葉ありがとォよ、お嬢！　おい紙燕、あの雨雲越えられるか!?越えられなかったら迂回してもいい、一旦上まで行きてェ！」

「私はあれの中を通って、核が無いか見てくるよ」

「ライラック！　私も連れていけ、必ず役に立つ！」

「あァよ、飛び移んな！」

ハッハー、ハイだな、ハイだ。

ベルウェークほどゴロゴロしちゃいねェが、時折雷が鳴ってる。【神鳴】じゃねェ雷だ。雨雲だから、雨の方が多いが。

着物狐に言われた事だけど、あくまで紙燕は紙なンだと。だから濡れたり燃えたりにァ弱い。雨の中くぐって、ってなキツいらしい。一反木綿みてェなのも紙でで

きているらしく、それも使えずと。
　なンで、ちょいと上に行きたいワケさ。
「キラキラツインテも、調査終わったら上まで来てくれ！　太腿忍者と尖り前髪ァカンコウの足止め！　着物狐ァなんぞ思う所あるンだろォけど、一旦ＥＤＥＮの中にいるって話のアズサと、あと冷静メイドを見つけて欲しい！」
「ク――吾の因縁を知っておいて、それか。良い良い。自分だけ感情論で、他者には効率を求めるその姿勢……流石は吾の惚れた女よ」
「言い方悪ィな！　その通りだがよ！」
　あァそォさ。他人にばっか効率ある指示しといて、自分ァ許せねェだの嫌だのって我儘言ってる。ダブスタにも程がある。それが俺さ。
　悪かったな！　謝るよ。だから、頼まァ！
　紙の燕が空に出る。
　太陽燦燦だ。近づきすぎりゃ溶けて落ちちまうな。まァ蝋じゃねェんだけど。
「どうするつもりだ、ライラック」
「誰かいるはずだ。カンコウってなを操ってる誰かが」

「操っている？」

「あァさ、カンコウってな、今までァどっかに姿隠してて、出て来なかったンだと。ホントァ着物狐がジパングに縛り付けてたって話だが、それだってのにどこにも姿が見えず、着物狐も行方を判って無かった。――が、着物狐がジパングを離れてすぐにカンコウが現れて、ＥＤＥＮを襲い始めた。つまり、着物狐がいちゃ不味かったンだよ。アイツァアイツでつえー化け物で、封印なんぞを扱えるやべー奴だ。アイツがいちゃ、カンコウを出してもまた封印されちまう」

だから、ジパングに縛り付けられた封印状態のカンコウを隠しておかなきゃいけなかったンだ。たとえその封印を解くことができるとしても、その術を知っていたとしても――着物狐がジパングにいる限りァ、解き放てねェ。

誰かがどっかに連れて行ったンじゃねェ。

誰かがずっとずっと隠してたンだ。

じゃァどこに、ってさ。

「決まってる。着物狐の目を欺ける、唯一の場所。そりゃ忍軍が必死で守ってた城に外ならねェ」

「……では、忍軍か。カンコウを操っているのは」
「十中八九な。だが、その自覚があるかどォかァ怪しい。少なくともあのユクナって奴からは悪意の類が感じられなかった。死の気配も。壁裏や地下にいた奴らからも、魔力っぽい気配ァしなかったンだ。つまるところ、知らず知らずのうちに隠しちまってるとか――あるいァ」
ダガーを出す。
それで、一応【即死】を纏いながら――払う。
苦無だ。
「……先公ァ、自分で避けられる、ンだよな？」
「ああ。加え、どこから何が来るのかもある程度わかる」
「何が、までわかンのか」
「そういう魔法だ」
「いいね、そりゃ役に立つ」
久方ぶりの知覚強化のお時間だ。
遅くなっていく世界。敵の数ァ――3、いや、4か。四方じゃねェ、扇形。乗っ

てるのァなンだ、……巻物？

「ＥＬＵＲＵＷＮＯ ＳＨＩＪＩＮＩ ＳＩＴＡＧＡＥ」

「左、手裏剣が来るぞ、っと、か、勝手に動くのか、この式鬼！」

「今丁度先公のいう事聞くよォにしたンだよ。操作ァ任せる。俺も先公も怪我しねェよォに立ちまわってくれ。俺ァもちっと考える」

「――成程、こういう無茶を強いられてきたのだな、アールレイデ達は」

魔煙草を吸う。

そろそろ在庫やべェな。輝きの園にァ魔煙草売ってなかったンだよなァ。市場区画の支部か、また来て良いって言われたから、本店の方にでも寄りてェとこだが――さて。

「おう太腿忍者！　聞こえてっか!?」

――≫わ、聞こえます！　これどうなってるんですか？　妖術ですよね！≪

「らしィが、まァ使えるモンァ使えるよォになっとけ、だろ？」

――≫はい！　自分が言った言葉なので素直に従います！　なんですか！≪

「お前さんとユクナってあみあみ忍者ァどォいう関係だ。素直に隠さず言え」

――≫……えっと≫

「右舷下方、鉄網が来る！　だがこれは――妖術だ！」

「ありがてェなそりゃ。死んどけよ」

ダガーの刃先から【即死】を一滴飛ばす。

それだけで、その妖術の網とやらァ死んだ。

そォだよな。気にァなってたさ。

侍衆が着物狐の血肉を取り入れた集団だから、妖術を使う、ってなわかったが――それだと、式鬼の言葉で矢文飛ばしてきた忍軍がよくわからねェもんな。

んじゃ使えるってこった。血肉云々ァともかく――誰か１人くらいァ、妖術に理解があンだろ。

「太腿忍者！」

――≫えっと、その……色々省いて言うと、私のお母さんです！≫

「省かねェとなンだ！」

――≫……えーっと≫

「おいおい、真っ直ぐなンがお前なンじゃねェのか。歯切れ悪いぜ【光線】のユノ

ン！」

名前を呼んだ瞬間、周囲の命の気配がブレる。

あァそォだ。こォいう時こそ使い時だよな、サーモセンサー。

――ははァ、上にも隠し玉が居やがンのな。あぶねェあぶねェ、気付いて良かったぜ。

「って、思わせるための熱気球だろ、ありゃ」

「!?」

死を浸したダガーで切り裂くは――透明なカラス。

ヒヒ。いやさ、外でァ敵同士だって言ったさ。言ったぜ。

けどこんな早いたァ思わねェよ。

いんやさ、でもそォか。だってがっつり関わってたもんなァお前！

――≫詳細を話すと――ユクナは、私の娘、といいますか。えーと、その≪

「あァ!?　母親なンじゃねェのかよ！」

――≫そのぉ……えっと、あんまり嫌わないで欲しいんですけど≪

カラスだ。何羽いる？　わからねェな、サーモセンサーじゃぼやけすぎる。命

の気配で見た方が早い。
　つか、なんだって？　母親だけど娘？　どぉいう事だ。
「嫌わねぇよ、嫌わねぇから言え！　今切羽詰まってンだ！」
――≫……私は、昔、ユクナという子を夫との間に儲け――その子に入り込んだ母親の、ユノンです≪
　一瞬、頭が真っ白になった。
……ハ？
　なんだそりゃ。
「じゃあ、ユクナってなよ」
――≫赤子のままに母親となった、私の娘、ですね。……本当に嫌わないでいてくれますか？≪
「行使したのァ誰だ。精神体を抜き出して、入れる。それをやったのァ――」
――≫ディミトラ、という魔法少女です。……ごめんなさい。やっぱり嫌いますよね。だってこれ、梓さんの大嫌いな非人道的行為ですから……≪
「――今ァ、良い。どーでもいい。俺ァそこまで善人じゃねぇ。やべーと思うしこ

えー奴だって再認識ァしたが、今ァどうでもいい。いいから――つまり、ディミトラがジパングに関わってたンだな!?」

――≫はい。昔の昔の大昔から。先日会った時には忘れられていましたけど！≪

つまり、ルルゥ・ガルへの技術提供したのもアッチだな？

色んな魔法を使える。そんな便利なものじゃない。一緒に行動してない。

ルルゥ・ガルァあくまで化け物側だ。その身体も造り物で、精神体だ。

だからっつーわけじゃねェけど、基本的にァ化け物の益になることしかしねェ。

つまり、つまりだ。

こォいう凝った事をすんのァ。前のアズサが引き起こした奴みてェな事すンのァ！

「着物狐が危ねェ。――尖り前髪！」

――≫良いだろう。ナリコを連れ戻せばいいのだな？≪

「あァ、頼まァ！　カンコウの殺し方ァ大体わかったが、今ァできねェ！　必要なのァ着物狐とあみあみ忍者だ！　俺ァ今から全速力であみあみ忍者を確保しに行く！　だから――」

――»一つ、問う«

目を瞑る。

命の気配。死の気配。知覚範囲を広げる。あァもう、なンでもっとこの訓練しなかったンだ俺ァ。魔力で辿るとかもできりゃ捗ったろォに――だが、近くにァいんだろ！

「なンだ」

――»もう１人のお前を見つけた場合、――殺しは？«

「たりめーだが無しだ。アイツァ生きてる。化け物じゃねェ」

――»……甘いな。だが、良い。今の私は即席ライラック隊――隊長のいう事は聞こう«

「あァよ、頼むぜ！」

さァ飛べ、飛べ、紙燕！

プテラゴイルに代わって、今ァお前が相棒さ。

「先公、魔力ってな辿れるか？」

「……あまり、得意ではない。それこそユノンが得意としているが……」

「んじゃ攻撃あたらねェよォに飛び回って、魔力の気配見つけたらそこへ行ってくれ。敵ァあっことあっことあっちとあの雲に紛れてる。上のァ無人だ、気にしなくていい。ただ、見えねェカラスが飛び回ってる。アンタァ大丈夫だろォが、俺を狙ってくる奴だ。それァ俺が対処するんで気にすんな。いいな？」

「教師に向かって、よくもまぁそのような言葉を吐けるものだ。――だが、良い。私も即席ライラック隊だ。隊長の命令には従うさ」

飛ぶ。高く飛ぶ。

西方にァ行かない。行く時間なんざない。ただ――探せ。探して回れ。

「あみあみ忍者、出てこーい！」

「いや、ライラック。流石に叫んでも出ては来ないと思うぞ」

案外出てくるンじゃねェかと思って。

出て来なかったけど。

雨を払い、ＥＤＥＮに入る。
さて、と。一つ、息を零す。
「……いるな」
久方ぶりのＥＤＥＮは、どこか空気が違う。
蘇生して戻った組が何かおかしな兆候を見せた、という話は聞いていない。何も無かった事を喜ぶべきか、何も無い不穏さを怪しむべきか。
それにしても、と。
「……知らぬ話ではあったが……恐ろしい魔女が近くにいたものだ」
先程、聞いていた。
隣にいたから聞こえていた。
そこにいるだけで何もしない、湯を呑むだけの姫、などと陰で囁されていたこともあったか、自国の姫がユノン。こちらで再会を果たした時、彼女は何も言ってこなかった。過去とは決別したい――そういう意思が見て取れたから、さして話しかけもしなかったが。
まさか、そこまで堕ちた存在だったとは。

苦笑する。

自分も他人の事をとやかく言えた身ではない。

魔法少女になったことで、侍衆の頭領で在り続けることができなくなった。成長もしなければ身体能力も跳ね上がり、何より殺されても生き返るなど――正気の沙汰ではない。妖そのものだ。少なくとも当時のヒノモトの常識ではそうだった。

何より、ナリコという妖がそうであったから。飼い慣らしたこの大妖が、まさにそのような妖であったから――とりわけ、居難くて。

ナリコに全てを任せ、自分は国を出た。

国を出て、学園に入り……まさかそれよりも先に魔法少女となっていた自国の民たちと出会うとは欠片も思っていなかったが、まぁ、そこそこ楽しい生活で。

自国のことなど、もう考えなくてもよいと。

私はＥＤＥＮに生きる魔法少女だ、などと――これを、過去が追いついてきた、というのだろうな。

息を吸って、吐く。

カネミツ。その名に込められた意味。

「……どれ、この騒ぎであるのなら、多少壊しても下手人は割れないだろう」
　一度刀を鞘に納めて。
　抜く。
　抜いて――飛ばす。
「ッ、あっぶねェなこの野郎！　修練塔ぶった切る奴がいるかよ！　修理費やばかったって聞いてるぞ!?」
「だが、避けたな。久方ぶりだ、アズサ。その肩に背負う狐、返してもらいたいのだが」
「はァ？　なんで尖り前髪が魔物を庇うんだ。コイツァ魔物だぞ、魔物」
「九割九分九厘、魔物であるのは間違いないが――その者は魔法少女でもあってな。そして、私達の仲間でもある」
「……ヘェ。じゃ、尚更返したくなくなったわ。コイツァ私達の仲間にする。引っ込んでろよ、尖り前髪」
「【飛斬】」
「!?」

この世のあらゆるもの、とまではいかないが、そのほとんどを切り裂けるであろう我が【飛斬】が、その義手によって防がれる。
……あれは、魔力を撃ちだすだけではないのか。
「っぶねェな、っとに。……だが、――隙だらけだぜ？」
「背後の者のことか？」
「！」
斬って捨てる。
梓には申し訳ないがな。殺してはならないと指定されているのは、目の前の得意気な顔をした少女だけだ。
その他――歯向かう者も、乗っ取られた者も。
関係なく切り捨てさせてもらう。
「……仲間、だろ。さっきから。最初のも次のも、私が防いでなきゃ――こいつも斬られてたぞ」
「そうだな。それがなんだ？」
「ッ……！　だから、だから嫌いなんだ、魔法少女は！　なんでそう――死を、軽

んじる！」
「お前に言われる謂れは無い。死を軽んじているのはそちらだろう。その魔物、どうする気か言ってみるがいい」
「軽んじてねェよ。命を取るつもりァない。――死なねェんだ、一回死んだってその後が永遠なら――幸せだろォが」
アズサは、その手に銃を取り出す。
そして――撃った。
金属音。
切り裂かれるは弾丸4発。
「……！」
「どのような機構かは知らないが、その程度の弾速で私を貫けるなどと……随分と舐められているようだな」
「あ――はは、あァそォだった！　お前、隊を離れるのが嫌でA級やってるだけで、ホントァS級かSS級の――そォやって周囲を見下してる奴だったな！　私みてェな補助有じゃねェとなんもできねェのも、心の中じゃ馬鹿にしてンだろ！

どうせ【即死】も使えねェ偽物だって！　仲間も作らねェと誰も味方してくれねェよォな、贋作だってさ！」

「そう卑屈になるな。安心しろ。こちらの梓から、お前は殺すなと命を受けている。当然だが殺すなと。お前は生きていて――魔物ではないのだから、と」

「それが、馬鹿にしてるっつってンだよ!!」

義手が構えられる。

あの時のアレか。だが、狭い通路でもなければ――なるほど。少々程度には、脅威か。

まぁ、撃つ事ができれば、だが。

「食らえ――魔力ほ、」

「ク――食らうのはお主ぞ」

「!?」

刀を振る。

斬撃が飛ぶ。

その身に宿る妖の力でアズサを操ろうとしている狼藉者を斬る。

――直前、それは紙に包まれて威力を失った。
「ククックッ、なんぞ、なんぞ。折角助けてやろうと思うたのに、今の刃――吾を狙ったな？」
「当然だろう。魔法少女と妖。どちらを斬るか、など。決まっている」
「ク――ククククク。良い良い。なればここで、決着でもつけるか、頭領」
「――？　……？　……その。こういう場で言う事じゃ、ねェって……わかってンだけどさ」
「ん――？　なんぞ、なんぞ。吾に言うてみると良い。今の接吻は、蕩けるようであっただろう？」
「あ……あァ。その、なンだ。私ァその……男勝りっつーか、粗悪な口調でよ、あんましその、女の子らしく、とかできねェんだけど……その、こんな私で良けりゃ……えと」
「【飛斬】」
「ク――」
こちらの攻撃を、そうも何食わぬ顔で防がれると、流石に苛立ちも溜まる。

況してや情事の片手間など――やはり斬って捨てるべきか。あの時は助けたが、どうにも目障りだ。

「お主、名は？」

「梓・ライラック……けど、私の名前じゃないっていうか、私の名前だけど、取られてるっつーか」

「良い良い。同じであれど、吾は愛そう。どれ――もう少し此方へ。近う寄れ」

「ん……」

「いい加減にしろ。アズサ、お前はそいつを連れて行くのではなかったのか？」

「え、いや、その通りなンだけど……その、こ、こぉいう気持ちなったの初めてなンだよ！　ずずず、ずっと、なんかあっちの私と一緒だった時ァ、みんなのこと子供にしか見えなくて、そぉいう対象にァ見えなかったけど……冷静メイドとか、えと、アンタみたいなのは……正直言って、超好きだ。名前、教えてくれねェか？」

「クク……ナリコ、という。お主が自身を許せるのなら――あだ名などではなく名で、呼んではくれぬか？」

「……わかった。ナリコ、だな。好きだ。ナリコ。愛してる」

「【飛斬】」
防がれる。
紙と義手。
……帰っていいか、もう。
女相手であればアイツは敵無しだろう。梓も面倒な役目を押し付けてくれたものだ。
「チョ、ちょっと待ってな、ナリコ。――おい尖り前髪！　見てわかっただろ！　もうナリコは私の仲間だ！　ってか愛する人だ！　だから邪魔すんな!!」
「アールレイデは良いのか？」
「うっ……いや、お嬢は、だって……あっちの私の味方、じゃんか。ポニテスリットも太腿忍者も背中メッシュも……」
「人の恋路にとやかく言うつもりはないがな、アズサ。何故ソイツを好きになったのか、だけでも思い出してみると良い。お前がそんなにも惚れやすいのならば話は別だが」
「何故好きになったか……？」

アズサは。
思案顔をして――赤面をして。
そこから、また思案顔に戻って。
赤面しながら、ナリコから――後退る。1歩、また1歩と。
「クク――頭領。折角オトせそうだったのに、なんということをしてくれるのだ」
「な、な――な!?　い、今私、え、でもめちゃくちゃ気持ちよくて……ああ、じゃなくて、そ、その――私に何したんだ！　ナリコ!!」
「何をそんなに狼狽える、梓。思い出すのは吾との馴れ初めではない。今しがたした、吾との、口吸いの――甘美なる感触だ。どうだ。吾の舌は、どう動いた？　お主の歯を撫で擦り、歯肉をざらりと抉り上げ、口蓋を、その奥をふにふにと突いて――」
「わ、わ、わ!?　ぃ、っ！　～～～～！　すまん後は任せたマッドチビ!!　ここ、ここ、コイツの相手、私は無理だ！」
「任せられてもねぇ。目的の魔法少女は奪ったんだし、帰りましょう。貴女の恋心はまぁ後でどうにかするとして――アニマ」

「はいはい。んじゃ、上手く防ぎなよ、お二人さん」
「!?」
唐突に出てきたその気配に――ナリコが紙束になっていく。
自身も【飛斬】を放とうとして――しかし、相手の方が早い。
「【業焔】」
修練塔が、業火によって包まれる――。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

63・畏怖藍泥井鈍斗案堕酢端弩」藍麻糸羽生豆法被唖・

曇天、暗雲を突き抜けて、深紅の焔が立ち昇る。柱ではない。竜巻ではない。ソレは――手、だろうか。何かに追い縋るが如く。どこかから這い出でるが如く。手。手。手だ。

それは――確実に、生き物のように思えた。

「ッ――無事か、ナリコ！」

「吾を心配するなぞ、気でも狂ったか頭領」

「……笑えない程度には、傷を負ったか」

「ククク、なんということはない。――半身が焼失した――ただそれだけぞ」

未だに修練塔を包み、見えない何かを掴まんと動く焔の手。【業焔】。宿業の焔。エルバハ・イドラの【青陽】には劣ろう。だが、その炎は――絡みついて、離れない。

「私も片腕をやられた。切り離さねば、全身燃え尽きていただろうな」

「良い良い。吾もお主も、死を拒んだ、ということぞ。ククク、誰の影響か」

「別に感化されたわけではないだろう。――今死ぬには時間が足りない、というだけだ」

「ほう？」

着物も、その面も、顔も。手足も。

文字通り半身だ。それが焼け落ちている。その程度で済んだことを褒め称えるべきだろう。ナリコはほぼ直撃を食らったのだから。

だが――ＥＤＥＮと蘇生槽の経路を繋いでいないナリコに、今死んでもらっては困る。コイツが蘇るのはヒノモトだ。それでは遠すぎるし遅すぎる。

亜空間ポケットより止血ポーションを取り出して、投げる。

「痛むが、使え」

「ククク、良い良い。吾には吾のやり方がある。そもそも魔力の抽出物なぞ、元をヒトとする者にしか効果を成さぬよ。吾のような妖にとっては、その原材料こそ魅力的だがな」

言いながら、ぐじゅりぐじゅりと。止血ポーションを使った時よりは――水音の多いソレが響き渡る。

塞がっていっている。ただそれは――紙で。此度ばかりは身代わりではない。故に、身代わりで本体を継ぎ接ぐ。その、延命処置。

「敵はもういないらしい。目的の魔法少女、とやらが何者かは後で確認する他無いが……今はこちらに集中するぞ」

「クク、この死に体に、まだ働けと？」

「あぁ。梓が呼んでいる。お前とユクナがいなければ、カンコウは止められぬ、とな」

「――なるほど。聡いなぁ。良い、良い。やはり好みだ」

肩を貸す。

表面上取り繕ってはいるが……これは、もう無理だろうな。

「クク……すまぬが、式鬼を出す余裕はない」

「飛行魔法で行く。私に掴まっている力はあるか？」

「無い。姫抱きを所望しよう」

「担いでいく」

カンコウ。

我らが殿か。……特に思い入れは、ないな。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「っは……っはァ、ふゥ」
「ライラック。……大丈夫か」
「大丈夫じゃねェなァ。魔力切れだ。見えねェカラスなンでどこが心臓かってのがわからねェ。魔煙草も……湿気で不味い。そろそろフリューリ草そのものか、とっときの水筒使うか」
「カンコウを倒す手段はわかっているんだな？」
「あァよ」
「なら、それを私に話せ。お前がやらなければならないのはカンコウを【即死】させる部分のみだろう。他の指示は私がやる。だから」
「お前ァ休んでろ、って？　……確かに合理的だが――いや、良い。アンタを信用する。信頼もしてる。冷静メイドの話じゃ、アンタってな落ちこぼれじゃァ無かっ

たンだろ？　――期待してるぜ、優等生」

言って。

――落ちる。

「は、え、オイ、ライラック!?　方法を言え、まずそれから――！」

「そこまで難しくねェ、あみあみ忍者と着物狐にカンコウを殺させるだけでいい！　それでコアが露出する！　そこを俺がぶっ叩くンで――そんだけだ！」

「それで、何故落ちる必要が、」

そっから先ァ聞こえなかった。俺が落ちたから。

車椅子に乗ったまま――落ちる。まァベルトァつけてあるンでな、外れァしないが――曇り空を、雨の中を落ちて行くってな、これまた壮観さ。

落ちて――よォやく、カンコウってなを見た。

見た目ァ宮司かなんかだな。大きさァっとに成人男性くらい。ただ――纏ってるオーラっつーの？　伝わってくる意思がさ、やべェな。怨念。怨念怨念怨念。恨めしい恨めしい苦しい苦しいズルイ狡い狡い――何故。

向けられてンのァ、太腿忍者なのかね。

いんやさ。

「なんだ――やめろよ。マジでさ。恨みを残して死んだのか。未練があって死んだのか。それとも――死ねなくて。死後に、その怨念ァ強まったのか。どれだけよ、お前さん」

「――死後に」

「げ、喋れんのかよ」

独り言のつもりだった。

喋れると思ってなかった。

やべェ。あんまり言葉を交わすと俺ァ――情を持っちまう。化け物に同情する余裕なんざ無い。そう言ってきた。言い聞かせてきた。

知ってる。知ってるよ。ルルゥ・ガルに事情聞かなくたって――知ってるよ。知ってるンだよ。化け物が、化け物の奴らにも、感情ってながあって、心ってながあって、家族だとか、コミュニティだとか、そォいうのがあって。

因縁とか因果とか、しがらみとかなんとか、色々あって！

「――化け物が、ヒトの言葉を話すなよ」

「死者が何を」
「……言い返してまでくンのか。ったく」
落ちながら。
その邂逅ァ一瞬だった。
一瞬だったけど――あァ、やべェ。思いついた方の簡単なのじゃなくて。
ちゃんとした――そォいうのを、してやんねェと、って。
絶対思っちゃいけなかったのに。
「――梓さん！」
「よォ、来てくれると思ったぜ、お嬢様」
「上で何がありましたの？」
「ちょいと、俺の魔力がもう――やべェんでな。指示の類ァ先公に任せて、落ちてきた。戦況ァどうだ」
「見ての通り、ですわ」
見ての通り。
それァ、豪雨が降り注ぎ、獣みてェな樹木が地を這いずり回って。

背後でァ炎の腕が立ち昇り、時たま青い太陽がカンコウを襲い、その他遠隔魔法少女達がこぞって奴を攻撃してるってな――戦況。

近接が何もしてねェわけじゃねェ。下の樹木切ったりなんだり、突撃しに行ってその首取ったり。

が、ダメだ。

何度も何度も復活する。

カンコウ。

「……クソ。方法ァ思いついた。多分それで通じる。だが――あァ、お嬢、俺ァどうかしちまったらしい」

「梓さん……？」

「相手ァ化け物で、初対面も良い所だぜ。ハハ、その経緯ってなをちったァ知ってるだけだ。クソ、クソ。なんだって、なんだって俺ァ」

零れる。零れる。

魔法少女相手にだって零さなかったのに。今目が合っただけだぞ。今の今まで、殺す手段を考えてた相手だぞ。この先――もし俺達が失敗したら、家族や友人を殺

すかもしれねェ、化け物だぞ。
　今までンなこた一度も無かっただろォが。共生してる化け物なんざいっぱいいた。子供連れた、群れで生きてる化け物なんざいっぱいいた。あいつらにァあいつらのなんかがあるんだって、ハナから知ってた！
　それを。
　それを！
　そんな――何にも浮かばれねェ方法で、否定すンのァ。
――≫だってそれ、あの子達が積み上げてきた経験とか、感情とか、そういう記憶の一切を無に帰す魔法でしょ？≫
――≫生きるために必死で身に着けた術も、強きとして生まれた種としての堆積も、君の魔法に触れたら全部消えちゃう≫
――≫本能に取り残された使命も、絶対を誓う約束も≫
――≫全部全部なかった事にして、無理矢理≫終われ≫っていう魔法じゃん≫
――≫否定だよ、それは≫
　反芻する。反芻する。ずーっとしてたンだ。脳裏を、ずっとずっと。

ずっと気付いてたンだよ。余裕無いって無視してただけなンだよ。あいつらを生物だって認めないで――化け物だって、化け物だって、ずっと言ってきたンだよ。

ソティラの言葉は、迷宮で言われた言葉ァよ、俺ずっと――ずっと。

「梓さん――泣いてますの？」

「……自分でも、最低だと思うンだ。今までァンなこと無かった。今までァ――問答無用で殺してきただろ。だがよ、あいつァ、あれァ！　――生きるために抗ってンじゃねェんだよ。辛い事あって、苦しい事あって、嫌になって食われちまって――でも、消える事ができなくて！　死ねなくて!!」

死後に、だと。アイツァ言った。

あるンだ。ずっと。ずっとあるンだ。あいつァ――50年だか何十年だか知らねェけど、その間、ずっとずっと、ずぅっとずぅっと――恨みつらみを抱えてさ。封印されて、誰かに隠されて、発散もできねェままずぅっと抱えた恨みがさ。

感じたよ。怨念。身に受けちまった見えちまった感じちまったわかっちまった！

「……お嬢」

「なんですの、梓さん」

「今からよ、俺が――魔法少女に余計な犠牲が出るかもしれねェ――化け物のためを想って、なんつーアホな考えをやろォとしたら――怒るか？」

「当然ですわ」

雨が涙を隠してくれる。

けれど、わかる奴にァわかるだろう。ダメだ、止まらねェ。なんだって俺ァ化け物なんぞに――こんなに。

同情なんざ悪感情だ。憐れんだって相手ァ嬉しがらねェ。ンなこた、てめェが一番よく知ってンだろ。だけど。だけどさ。だけどさ。

「当然怒りますけれど――貴女は私が怒ったところで止まりませんでしょう？　どこまで行っても納得ができないのであれば、納得のできる最善をお取りください。魔法少女も、ヒトも、魔物も――そして、貴女をも救うただ１つの道。貴女にしか見つけられない、【即死】を持つ貴女にしか見えない道を、どうぞご自由に、ご勝手にお進みくださいまし。私達はそれについていって、勝手に貴女を守り、自由に彩りをつけますので」

――あァ。

ったく、ホントに。
ダメな奴だ、俺ァ。んで――好い奴だよ、お嬢ァ。
「委員長だ。オーレイア隊がフィニキア・各務。探してくれ」
「オーレイア隊であれば、あちらにいますわ」
「連れて行ってくれ。今の俺ァ、立つのも無理なンでな」
「ええ。貴女のためならば」
今からやるのァ余計な事だ。
もし、なんぞか――罪悪感を抱いてくれてンのなら、って。
それを利用してまでやる、化け物のための弔いだ。
……。
そォさ。身勝手な奴だ。誰も彼もを救うなんてできっこねェ。ンなこたわかってるよ。どの時代でも、どの場所でも、どンな環境でも言われてきた。況してや俺ァ英雄様じゃァないんでね、ンなこたできっこねェんだ。
けどそりゃ、やらない理由にァなンねェだろ。
「ハハ。あァ――好い。好い。好いね」

「……早くその草を食べてください。もう――魔力が」
「あァ、そォする。生命維持がな、そろそろキツいのァわかりきってンだ。ハハ。だが、好い。やりたくねェことやってた時より、随分と気が楽だ。俺ァ――」
眩しい何かを目にする。
お嬢の【神光】でも、稲妻でも、【神鳴】でもない。
――好い。それで。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――見つけた！　魔力を持つ忍――お前が、ユクナだな！」
「！」
「手短に話すがお前の力が必要だ、私と一緒に来い！」
「……それは、できない。貴女は我が国の民と見受けるが――その鳥は、式鬼だろう。なれば、退治しなければならない」
「いいから従ってね」

「!?」

背後。否、身体の中から――その手は出てきた。

そのまま、羽交い締めのよう腕を押さえる。忍の頭に顔を添えるようにして出てきたのは、あるるら。

「状況は理解しているよ。今、どうにもできなくしたから――ナリコさんを探しに行こうか」

「……その必要はない。連れてきた。死に体だが、役には立つだろう」

「カネミツ。……珍しい、怪我をしているね」

「戦場には想定外が付き物、ということだ」

感じ取る。

速い。飛来する。先端の尖った刃物。苦無。

「全員頭を下げろ――」

「効かないよ？」

「腕を落としたな、忍軍」

ああ。

こいつらに回避など要らなかったな、などと。少しばかりの自嘲。
「とにかく、そこなユクナという忍とナリコでカンコウを殺し、核を露出させる！　それがライラックの作せ、」
「それは変更になりましたので!!　えるるー先生、各務さんを頼みますわ！」
「頼む!?　何をだ、説明をしろアールレイデ！」
「ナリコさんとユクナさんは雲の下に！　あるるららさん、抵抗するようでしたら私が無理矢理持っていきますの！」
「お願いするよ。私は、そちらの子を守っていればいいかな？」
「はい！」
説明をしろ説明を。
あるるららも何故そんなにわかりきった顔でいるんだ。
ナリコは笑うばかりだし、カネミツも……あいつはあまり顔がわからんが。
ローグンもリヴィルもエミリーもだが、どうしてこうＡ級Ｓ級だのという奴らは言葉が足りないんだ。
「遠征組調査班オーレイア隊のフィニキア・各務です。簡易に状況を説明します。

現在、梓さんがカンコウの無力化に尽力中。そのためには彼女自身とユクナという方、ナリコという方、ユノンさんが必要であるそうで、その招集を頼まれました。私は今自らの魔法で梓さんを引っ張り上げています。ただ、この通り攻撃性の無い魔法少女ですので――」

「私達が守るしかない、というわけだね」

「何がというわけだね、だ！　私達だって攻撃性なぞ欠片も無い魔法少女だろう!?」

「そこは、私に任せろ。私は呼ばれなかったのでな。――片腕ではあるが、不可視のレーヴァン種や腕の鈍った忍軍に負ける気は毛頭ない。貴女は式鬼の操作に徹してくれたらいい」

何を言う暇もなく、【神光】と名を変えたアールレイデに誘拐されるユクナという忍。

雲の中の忍軍に動揺が広まるのが分かる。そうだろうな、私もそうだ！

だが、助かった。フィニキア・各務。私の受け持つクラスの子ではなかったが、覚えたぞ。説明のできる良い魔法少女だ。

「あるるららさん。少しばかり雲に潜り、カンコウの様子を見ていてください。私は梓さんをカンコウに近づけ過ぎず、且つ遠ざからせない程度の位置を保たなければいけません。そしてそのためには、えるるーさんの式鬼操作も必要になります」
「む、無茶を言う……。だが、わかった。この短時間で慣れはしたからな。回避と操作は背を預けてくれていい」
「頼もしいですね」
何をしようとしているのかは知らないが――頼んだぞ、ライラック。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「という感じですの！　梓さん、準備は!?」
「大丈夫だ。――いんやさ、【引力】ってなちょいとヒュンとなってこえーなァと。はは、無いんだけどよ」
「わかってますの!?　貴女今、オリジン種の眼前にいますのよ!?　そんな余裕どこから出てきますの!?」

「馬鹿野郎、こちとらフリューリ草もしゃもしゃ食ってンだよ。そりゃ余裕も出る。クソ不味いからな」
「どうしましょう、今更ですけれど、この方の言葉よくわかりませんわ……！」
ハイになってるってだけだよ。
思考の純化が激しい。非善だからいいだろとかいうクソみてーな思考と俺のやろォとしてることの理性がまじりあってグッチャグチャだ。
ハハ、うるせェな、敵だったら導いちゃいけねェのかよ。改宗だってするだろ、だれでも。
「……着物狐」
「なんだ、吾の妻」
「まだ、立ってられるか」
「……ク、問題は無い。何――殿のためと考えるのなら、この身を焼く痛みになど屈しはせんよ」
「私はお殿様とかどうでもいいんですけどなんで連れてこられたんですかね！」
「あァよ太腿忍者ァちィと黙っててくれ。無駄に色々長引いちまうンでな」

「はい！　わかりました！」
「ンで――」
着物狐ァ、多分もう……無理だ。
俺と同じくらい、死んでる。背後で未だうねうねしてる炎の腕のせいなンだろォが、こっぴどくやられたな。殺されなかっただけマシ、なんざ考えたかねェけどよ。
生きててくれてよかった。
その苦痛を。
……いんやさ、今ァ良い。
「よ、あみあみ忍者。久しぶりだな」
「……梓。お前とこのような形で再会するとは思わなかった。侍衆の頭、参謀――それに、姫の妖。殿の妖。どれほどの因果を背負えばこのような場を作り得る？」
「なンだ、お前さん、アレを姫だって認識してンのか？」
「何を言う。あれなるは我が姫――ユノン様だろう」
「……【槌憶】か？」
忍軍の言う姫ってな、実ァ着物狐だった、ってな衝撃のびっくり事実が明かされ

たはずなンだが。
　んでこいつァ太腿忍者の娘であり、太腿忍者と精神体を交換してる……まァ複雑怪奇も奇々怪々すぎる経緯の奴だってな話のはず、なンだが。
　なンかされてンなァ、こりゃ。
「ま、ちょいとそこで待機しててくれ。俺ァさ、あのカンコウってなと、話をしなきゃなンねェ」
「……」
「お嬢、他の隊の了解ってなどォなった？」
「当然ですけど得られていませんわ！　イドラ隊、ジュニラ隊は特に意味の分からない、といった様子でした！」
「だろォな。魔法ァ俺が殺す。お嬢が防げるモンァ頼んでもいいか？」
「私にＥＤＥＮへ叛逆しろと仰るのですね！　いいですわ！」
「あァ、ありがとう」
　さァて。
　身体を大きく右に揺らす。

すると、身体が前に出た。委員長と決めた合図って奴だ。右に行きたいなら前。左なら後ろ。行き過ぎたらアッチで調節してくれるってな話でさ。

ちなみに銀バングルァ地上で樹木の白亜化を、光眼鏡ァその隣で【排析】、過激無口ァ樹木と戦ってて、虹色ロングァ時折カンコウに【弱化】をかけてる。効いてるかどォか怪しいけどな。

俺が会いに行ったらすんげー気まずそォな顔すんの。

まァ、アズサの件でわかった通り、化け物に身体乗っ取られてた間ってな意識ァなくとも記憶ァ残る。それがずっと後引いてるみてェなンだけど、今ァんな謝る謝らないをしてる暇ァ無いんで動いてもらった。委員長がきっぱり割り切ってくれる人でよかったよ。

「よォ、お殿様。カンコウ――いやさ、生前ァミチサネ、だったか？」

「不遜なる娘子よ。あなたは何者だ？」

「さっき自分で言っただろ。死者だよ」

「そうか。余は道真であり、殿であり、妖であり――神である」

「それがなンだ。敬ってほしいってか？」

「否。……あなたの名を、聞かせて欲しい」
あァ、ダメだな。
見るからに、明らかに化け物なのに。
こうも会話ができて、こうも感情があって。
何より――殺意が、欠片も無ェ。
「梓・ライラック。ライラックってな、丁香花のことさ」
「良き名だ。……梓。余をヒトと見るか？」
「いや。アンタァもう化け物だよ。自覚してる通り、妖で、神になっちまった化け物さ」
「……そうだ。余は数十年前に、妖となった。それにしても、懐かしき気配がする。……湯呑と得子が近くにいるな」
「あァさ、連れてきた。アンタの恨みつらみ晴らすにゃこいつらいねェと始まらねェだろ？」
下方、左下。
青い太陽が飛んでくる。豪雨によっても一切衰えぬその熱量を、【即死】の弾丸

を放り投げる事でぶち殺す。邪魔しねェでくれ。まァせっかく死に戻ってまで早く帰ってきたお前さんらの邪魔してンのが俺なンだがよ。

「恨み、つらみ。か。……あなたは余を知っているのだな」

「いんやさ、何にも知らねェ。アンタを知ってる奴らから、どォいう経緯で妖になったのかとか、どォいうことがあったのか、ってなちったァ聞いたがね。アンタの人となりァ今知ってる最中だよ」

「ならばあなたは――何故、余の前に立った？」

「わかんねェ。なんか泣けちまってよ。なんか……アンタをただ殺すってな、ダメな気がしてよ。なんにもわかんねェけど、仲間に協力してもらった。アンタ、そんな俺を嗤うかい？」

「いや。――あなたは、正しい」

雨が強くなる。

あァ――泣いている。まだ、俺も。

こいつも。

生きるために抗う、なんて気概あるワケがねェんだ。

こいつァもう。

「ヒトで在った頃の余ならば、あなたの行為を切って捨てたのだろう。あるいは妖と、神となったばかりの余であったのなら――あなたに雷を落とし、その身を焼いていたのだろう」

「俺もさ。アンタが喋れるって、そンなにも感情蓄えてるって知らなかったら、適当に殺してたよ。なんの感慨も無く、なんの感傷もなく。けど――」

雨が。

その雨脚が、どんどん強くなる。豪雨も豪雨だ。周りが見えなくなる程、雨が激しい。

「アンタ、死にてェんだろ。もう終わりてェんだろ。人なんざ襲いたくねェし、戦いたくもねェ。けど――その身に蓄積した恨みつらみがよ、理性も本能も止めてンのに、もうやめてェって言ってんのに、やめさせてくれねェ。ずりィって言ってる。何故だ、って」

「ああ、あなたは余を理解してくれているようだ。ありがたい。――そして、忝い」

何かが飛んだ。【光弾】か、その類だ。遠隔魔法少女の何かが飛んで――けれど、

叩き落される。

お嬢じゃねェ。どころか近くに飛んでた奴らもかなり高度を下げてる。豪雨も豪雨が故に。滝みてェな雨が、すべてを叩き落とす。

俺だけだ。

上から吊り上げられてる俺だけが、残ってる。

「余はもう、止まる事ができぬ。確かに、愛した姫の本心を知った時、酷く狼狽した。だが、死して――その狼狽も混乱も、そして余の罪も、全てが間違いであったと知った。余は姫の心を理解しようとしていなかった。余は何もせず、欲したものが与えられて当然だと思い――その拒否に狼狽えただけだ」

「みてェだな。姫当人もなんの気持ちもなかったって言ってるよ。なんなら会わせてやろォか？」

「フ――良い良い。余はもう、理解している。あの姫が、とんだ化け狸であったことなどな」

――≫何か失礼なことを言われてる気がするんですけど!!≪

雨の下の方からなンざヘンな声聞こえた気がしたが雑音だろう。雨じゃよくある

ことだ。

「そぉかい。自分の気持ちも筋違いで、姫も真っ当な奴じゃなくて。んじゃ、何が心残りさね。――自分を愛してくれた奴かい？」

「ああ、そうなのだろう。……そこにいるのだな、得子。九尾の大妖。余の生涯において、言葉を交わした唯一の妖。幼き頃より余を見ていてくれた――義母が如き存在」

「……クク。そこまで想っていたのか、殿よ」

現れる。

ずぶ濡れになって、びしょ濡れになって。

……カンコウに見せねェよぉに、半身になってる。その後ろっかわァ――紙だから、雨に濡れて、どろどろと。

「悲しきことだ。余にはもう――あなたを、余よりも強き存在であるとしか感じ取れぬ。余の頭を撫でたあなたの温もりも、その優しさも……今の余には伝わらぬ。悲しきことだ。悲しきことだ。……ああ、何故なのだ」

「何故、も何も。決まってンだろ。奪ったやつがいンのさ。妖になって、けど誰を

殺す気にもなれなくて。いんやさ、恨みつらみを向ける先ァあった。あったけど——それを向ける自分が嫌で、押し殺そォとして。けど、けど。——それを無理矢理奪っちまった奴がいンだよ」

「梓。教えて欲しい。余は——誰に、奪われた。この——矛先のなき怨念は。その矛先は、誰が隠したのだ」

「奪ったやつに自覚ァ無いんで、怒らねェでやってくれ」

「わからぬ。余がそれを知った時、この怨念がどうなるのかは、余にもわからぬ」

「……あみあみ忍者。何の話かわかってねェって思ってるだろォけど——アンタだよ」

「え？」

お嬢がその身を抱いて、連れてきた女性。

ユクナ。

ま、わかり切ったことでァあったさ。

それが一番楽だもんな。

「なァ、着物狐。お前、ミチサネを封印したンだったよな？　そりゃ、どこにだ」

「決まっている。あの城だ。今は忍軍が占拠しているあの城の天守閣に、殿を封印した」

「……それは、余も肯定しよう。最期の会話の後、余は得子に封印された。人を殺さぬよう、この地に縛り付けるためにと。予想外であったのだろう。余の力は得子の想像以上に大きく、城は半壊し――その余波は国の全土にまで届いた」

「吾とて、己が実力の不足を嘆いたものよ。だが、縛り付けることそのものは成功していた」

「ああ――余は長い間、ヒノモトから出る事ができなかった。――今の今まで、だ」

だから。

封印先を変えた奴、がいるンだ。

天守閣に封印して、けど天守閣が半壊しちまって、封印の器足り得なかったとかそンな所だろう。

それを、勝手に持ち出して――適当に理由つけてさ。適当に記憶を奪って、良い様に守らせて。

ソイツに、封印したンだ。

「ユクナ。姫の、母。余はずっと、彼の者の中に在った。あなたが、余の恨みを奪い――否、背負ってくれたのだな」
「え……いや、私は」
なァよ、マッドチビ。
ンなんことできンのァ、昔っからジパングに関わってたアンタだけだよな。
「さァて――糸を断ち切る時間さ。絡み合ったけど、絡み合ってるだけだ。大丈夫。俺ァ否定しねェよ」
もう。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

64・藍吏部塔出須・

さて――そもそもの話をしよう。

そもそも何があったのか。西方の国。ジパング。国民からの名称ァヒノモト。

色々と螺子と歯車があって、糸があって。

この話ァ、大きく分けて10の事件から成ってる。

元々ァ多分そこそこ平和だったジパング。それが狂っちまったのァ、まァまァまァ九割九分九厘着物狐のせいだ。北方より来たりし大妖。オリジン種。話を聞く限り、九尾の狐って奴。それが、何百年か前の殿様に取り入って、姫になった。

そこで大層好き放題したンだろう。けど、それがバレちまって、当時の侍衆に縛り上げられてグサグサグサリのグサグサリにされた。けど死ななかった。けど普通に痛かったンで、死んだふりして葬られたフリをした。これがまず、最初の事件。

んでまァ、俺の知ってる限りじゃ、侍衆と忍軍どっちが殿姫に近いかって言やァ忍軍の方だ。だから、いたンだろ。姫に恋慕だの忠義だのを抱いてる奴がよ。多分いっぱいいたンだ。けどどーしょォもなくて、姫ァ死んじまったンだと思い込んだ。

これが第２の事件だ。そォいう思いがあって、既にあの地にァそォいう怨念みてェなのが溜まってたンじゃねェかなァ。鎧武者たちの怨念を見るに、式鬼ってな妖、化け物にァ感情や肉体の死した精神体が乗り移りやすいみてェだし。

んで、けど特に何も無く――あるいァ着物狐がなんとかしてか、マッドチビが何かしらをして、また２００年３００年と経って。

侍衆が、着物狐を捕獲する。

尖り前髪の断片的な物言いから察しただけだが、殺さないよォ生け捕りにして――その血肉を侍衆に入れて、妖術使えるよォにして。その代償か見返りかなンかで着物狐ァ侍衆入りして。着物狐ァ勝手に御殿に入り込んで生まれたての殿とやり取りして……ってなが、第３の事件。

太腿忍者が生まれた。

太腿忍者ァ順当に育って、順当に人間の夫と結婚して子を儲け――その時点で、マッドチビに接触した。

そこで、どォいうやり取りがあったのかァ知らねェ。後で聞きてェよォな聞きたくねェよォなだが、何らかがあって――太腿忍者ァ自身の子になった。その後、多

分痴呆症みてェになっちまった母親であるあみあみ忍者とその夫がどこで何をしてたのか、ってなわからねェが、まァ張られちゃいたンだろ。貴重な実験例として、みてェにさ。

それが第４の事件。

そして、第５の事件ァ、その子供になった太腿忍者が魔法少女になったって事。多分夫がＥＤＥＮの下の国出身だったンじゃねェかなァ。名前もそォいう意図があるよォに思う。ヒノモトっぽく、けど響きァ外国っぽく、みてェなさ。

だから――隔離されていたはずの魔法少女の因子が入り込んじまった。まァキラキラツインテや先公を見るに、ＥＤＥＮから流れて来てた奴ァそれなりにいたンじゃねェかと思うンだが、それは今ァおいといて。

魔法少女になった太腿忍者ァ、けど馬鹿じゃねェ。自分を理解して、多分ＥＤＥＮにも行ったンじゃねェかな。そんで――けど、カンコウに、ミチサネに見初められちまったと。断りゃ打ち首もあり得たンでオッケーだして、姫になって。まァ好き放題したンだと。

これが、第６の事件。

そして、ミチサネの告白を太腿忍者が断るのが第７の事件。

ミチサネァご乱心だ。太腿忍者を殺しちまったらしい。そのまま狂っちまって――魔法少女の因子に食われちまった。俺ァここの理解がまだ甘いンだが、男でも魔法少女になるモンなのか、それともミチサネが実ァ女なのか、どっちなのかね。太腿忍者が子供を儲けられねェってなを理由に断ってたあたり、普通に男な気もするが……ここァまァ曖昧だが、これが第８の事件。

んで、こっからさ。

ここまで８つ事件があって、こっからが大混乱だ。

８つ目の狂乱で妖になったミチサネを着物狐が封印し、けれどミチサネァ国を滅ぼした。それによって元から表面上でしかおてて繋いでなかった忍軍と侍衆ァ完全に決別し、多分この辺りで――忍軍側に、第１の事件の時の怨霊が憑りついたンじゃねェかなァって。

流石にいつあみあみ忍者が忍者になったのか、とか、父親どこ行った、とかァわかんねェけど、忍軍が狂ったのァ多分ここだ。侍衆の食事に毒を入れる程、侍衆を恨めしく思っちまったのァココ。憑りつかれたのか――あるいァ、マッドチビが何

かしたのか。
　それによって、事件が起きる。
　カンコウが消えた事を祝し、再び手を取り合わんとした場での、大虐殺。まァそれじゃ死ななかったらしィんだが、毒を入れたのァ事実で――それが、第９の事件、と思いきや。
　この前にも一個あったンだ。それが、今回の混乱を引き起こした事。
　上述の憑りつき含めて、やっぱりマッドチビがやったンだと思うよ。
　カンコウの封印を、ヒトに移す、なンて暴挙ァ。だからこそ、カンコウァ消えたし、忍軍ァあり得ない程の恨みつらみを侍衆に抱いたし。
　それが第９の事件なンだ。
　そんで、大虐殺ァ第10の事件。
　そっからァ大体知っての通り。
　魔法少女化した尖り前髪ァ早々に侍衆を抜け、一人残った着物狐ァ、自分も魔法少女になっちまったものの元から化け物なンでバレずに続行。
　忍軍やカンコウの再出現を見張りつつ、明らかにおかしい忍軍に時たま式鬼で攻

撃を仕掛けつつの毎日。

対して忍軍ァ、カンコウを取り込んだあみあみ忍者が、多分疑似的な魔法少女化したンじゃねェかなァ。カンコウってな、魔法に食われたミチサネだ。魔法そのものだ。それを体内に封印されたら、魔法が使えるよォになる……とは言わずとも、魔法少女の因子ァたんまり貰えるわけで。

ここが微妙にわかってないンだが、鎧武者であみあみ忍者を攻撃すると鎧武者の怨念が溶けちまうってんで事態ァ穏便化。俺達が来るまで、ゆったりゆったりと殺し合いしてたってワケさ。

そンで——俺がまァ、双方に死を齎したくない、とかいう理由で、着物狐連れ去っちまったから。

自覚の無いまま封印の媒体になってたあみあみ忍者から、カンコウァ出てきちまって。

でも、封印されてる間に、自分の怨念ってな全部あみあみ忍者が背負っちまってて。だから目的もわからずに——ただただ、操られるままに。

カンコウァここまでやってきました、ってなが、おさらいさ。

操ってたのが誰かって、そりゃ決まってる。
マッドチビさ。ＥＤＥＮ内にいたみてェだからな。アズサと、安藤さんも一緒に。後ろ、まだジタバタしてやがる炎の腕ァ安藤さんの作品だとよ。余計な手土産残していきやがる。
んじゃまァ、こーなってくると。
誰の恨みを晴らせばいいのか。誰が――どこに、恨みを持ってンんか。
よォやくわかるよな？
そうさ。
なァあみあみ忍者。
お前さん、誰が恨めしいンだよ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「私、が……誰を、恨んでいるか、だと？」
「そォさ。ミチサネァもう良いって言ってンだ。もう自覚してる、って。けど――

繋がってるアンタの恨みがまだ晴れてねェ。ぜーんぶ背負っちまったアンタの恨みが、まだ残ってる。だからアンタもミチサネについてきちまったし、ミチサネァ止まれねェ。何かが恨めしいかわからねェまま世界を呪ってる」

「肯定する。梓、あなたの言う通りだ。余はもう、この世に未練はない。ただ、ユクナ。あなたの恨みを晴らしたいと思っている。……ように、思う」

「だ、だが私は恨みなど、侍衆にしか……」

「ククククッ、ならば、吾とカネミツでも殺すか？　ヒノモトにはショウモンとストクもいるぞ。それしか残ってはおらぬがな」

殺したい。

そォいう気概ァ、感じ取れなかったンだよな。あの時、枯れたジパングで出会った時から、一切。

襲ってきてるから対処してるだけで——姫を惨殺した侍衆への恨みってな、もう晴れてるよォな気がする。その毒の事件で。あるいァ——毎度毎度、鎧武者っつー侍衆の亡霊を殺してたことで、か？

「……いや。侍衆を殺したいとは、思ってはいない」

「ほう？　ならば、誰を殺したい」
「殺したい――とは、思っていない」
恨めしい。何がだ。
ずるい。何がだ。
ミチサネのそれを背負って、しかしそれに支配されねェくらいの恨みってな――なンだ。
「……私は」
「――斜多伏（黙ってろ）！」
精神に罅が入るのを感じる。
「あァさ、すまねェ。クソみてェな横槍を感じ取ったンで対処しちまった。水を差した。謝る。続けてくれ」
明確な痛みとなって、それを訴えてくる。
これ以上ァダメだって。これ以上ァ――もう、この言葉を使っちゃいけねェ。
雨だ。雨のおかげで、わかった。
いる。いる。

見えねェカラスがいる。
何しにきやがった。俺か。俺がここにいるからか？
だったら――。
ダガーに死を浸す。
ンで――委員長の【引力】を斬る。
「ちゃんと、聞いてやってくれ！　ごめんな、俺が迷惑かけた！　空気読めなかった！　――アンタらの道先に幸運があるって信じてる！」
っとに、最悪のタイミングでやってきやがる。
空気読めってンだ。クソがよ。
落ちる――。
大丈夫。きっと誰かが助けてくれるさ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「……私は」

呟く。
光り輝く乙女に支えられて。
自らの中にいたという神に見つめられて。
憎し憎しと思っていた――思えなくなった侍衆の参謀に見られて。
言う。
「……多分、ただ、愛されたかった……それだけなのだろう」
「ク――それは、それは。愛い女子のような事を言う。吾が愛してやろうか？」
「得子。あまり茶化すものではない。あなたはそういう所がある。悪しき所だ」
「ククククッ、妖となり、神となった殿に諫められるとは――良い、吾も自重というものを覚えよう」
「……私は、誰に愛されたかったのだろうか。侍衆。殿よ。私は……自分でも」
わからない。
ただ。
恨みなんかより、憎しみなんかより。
ずっとずっと、愛してほしかった。愛してほしい相手がいた。

知らない誰かに。違う。知っている――それが誰なのかを知らないだけで、知っているあの人に。

「この場にいる誰もが分からないのであれば、少し。私が口を挟んでもよろしいでしょうか？」

「あ、ああ」

「完全なる部外者が申し訳ありませんの。――ただ、貴女の求めているものは、私にもわかります」

自身の身体を支える少女が、言う。余りに眩しい光を放つ、この曇天の中にあっても輝かしい少女。

貞淑に。一つ、黙礼をして。

「それは――母親の愛、ですわ」

「――」

侍衆の参謀が紙を下方に飛ばした。

自身の仕えた殿が下方を見た。

そこから、紙と樹木に捕えられた――姫が、伸びてきた。

「わ、わわわ!?　ちょ、この木、私だけ狙い撃ちとか卑怯です！　こっちはチャージ必要なのに……お殿様ですね!?　私を追い掛け回すのは大概にしてください！　そこな妖風情も、この濡れてベタベタする紙邪魔です！　うわっ、無理矢理体勢を――本気で怒りますよ!?」

「ク――いいから、自身の娘を見てやれ。吾への怒りも殿への怒りも、あと少しで瓦解する」

「得子。その間、余を抑えてくれるだろうか」

「良い良い。――今度こそ、最期を見届けようぞ」

姫。

姫だ。

あの日、侍衆によって惨殺された姫。

姫、ユノン。

「――今、なんと？」

「え、あー。……えっとぉ」

今。侍衆の参謀が、何かおかしなことを言わなかっただろうか。

彼女は姫だ。
姫の妖だ。だって姫は、死んだのだから。
なれば。
なれば――この心に去来する感情は。
「あ、なた、は」
「いやその！　えっと、私は……えーっと」
「――母様、なのですか？」
「うっ、直球……！」
口が勝手に言葉を紡いだ。
そんなわけがないのに。そんなはずがないのに。
勝手に。
「えと、そのぉ……い、いやだな～、私が貴女のお母さんなわけ……」
「ユノン。ユノン。ユノン。……違う。姫の名は――ユノン、ではない。あの時。あの日。殺された姫の名は」
「ククッ。その名は、ナリコという。似ても似つかぬ名前ぞ」

そうだ。
そうだ。
我らの姫は、ユノンなどという名前ではない。
ナリコ。ナリコ姫。横暴で、横柄で、けれどカラカラと笑う姿の可愛らしかった、あの姫は。
もう、死んだ。
そして彼女は――。
いや。
そも。
我ら、とは。
「う――う、ぐぅ……」
焼ける。焼けるように痛む。
何かが邪魔をしている。私が思い出す事を、余計なものが――阻んでいる。頭の中に。
何かが、いる。

「【神光】」
「――」
自身を支える少女の光が強くなった。
強い光だ。まるで、太陽が如き光。それよりも強い。けれどそれは目を焼くことなく。
「統合された役割は、３つ。神が如き光。神が如き速さ。――そして、神が如き浄化ですの」
「浄、化……？」
「ええ。貴女は……その幼さが故に、蝕まれているようでしたので。今、焼き払いましたわ。どうでしょう。貴女の邪魔をしていた何かは、消えましたか？」
「……」
向き直る。
樹本と紙に捕えられた少女に。
「……えっと。そんなに見つめられると照れちゃうかなー、って」
「母様、なのですね」

「うっ……」
「……ずっと。ずっとずっと。ずっと――探しておりました」
「う、ぐっ……」
そうだ。
恨みなど、あるわけがない。
怨念など、あるはずもない。
ただ私は。
会った事のない母に。貴女が、誰なのかを。
聞きたかった――それだけだ。
物心ついた時から、何も覚えていなかった私を。
否、既に婚姻を結んだ相手すら覚えていなかった、何も無かった私を抱いてくれた、顔の見えない母様。
私はただ、それだけを追う存在だったはずなのに。
いつから、私は。
「――申し訳ありません」

「うっ……え？」

「母様の今を壊すつもりはありませんでした。ただ――恐らく、無意識に、でしょう。貴女がここＥＤＥＮにいると聞いて。私は――ここに来たくなってしまっていたようです」

「あ、いや、その」

多分切っ掛けは、梓に話を聞いた時。

ユノンという名の妖術師が、ここにいると。そう聞いた時。いるわけがないと、死んだはずだと――その名は私の知る誰かではないと。

そう、決めつけたときに。

私の心はもう、惹かれてしまっていた。

「母様。――貴女を見る事ができて。そのお顔を、その声を――その存在を確かめる事ができて。娘は、ユクナは、嬉しく思います。――ありがとうございました。これで――私の想念も晴れた事でしょう」

「う……な、なんですかこの良心の呵責……！」

「ユノンさん。いい加減、認めてあげてください。そうしないと浄化しますわよ」

「それは何故か怖い!?」
いいんです、もう。と。
そう言おうとした。
けれど。
「あああもう！　わかりました！　わかりましたよ！　私、こういう捻じ曲がった事苦手なんです！　【光線】なので！　えーと、だから――そうですよ、私がお母さんです！　貴女にユクナと、由苦無と！　自由で、苦しみなく育って欲しい、なんて名前をつけたのが私ですよ!!」
「……」
「それで、その……ごめんなさい。私は……貴女も夫も、国もお殿様も、全部なかったことにしようとしました。新しい人生を歩み始めたことにして……何も顧みなかった。貴女達を無視しました。――もし、貴女が望むのであれば……国に帰って、お母さんらしいことをしても、いいですよ」
「いえ。その必要はありません。私は既に忍軍の頭であり――何より母様、家事とかできなそうなので」

「えーっ!?　この流れで!?　この流れで今なんで私を馬鹿にしたんですか!?」

笑う。

そうだ。

恨みなんて無い。怨念なんてあるはずもない。

ただ、今。

貴女がこうも元気であると知れたのなら。

もう、大丈夫です。

「お2方も――ありがとうございました」

「ク、ク……吾らは何もしておらぬ。さて、殿よ。少しばかり――遠くへ行こう」

「ああ。……ユクナ。余はあなたを苦しめるばかりだった。それを謝りたい。そして――これからは、自由に生きて欲しい。余もそうするのでな」

言って。

2人は、消える。如何なる術か、どのような妖術か。

今まで降っていた豪雨も、樹木も、紙も――何もかもが消えて。

「――それと。あれなる焔は、余が消しておこう。置き土産、というものだ」

それだけを言い残して――殿と、侍衆の参謀は、この場から完全に姿を消したのだった。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

「……馬鹿だな、お前」

「ア？　おォ、なンだ。ハハ、来てたのか。久しぶりだな――アズサ」

雨の止み始めたEDEN近くの森の中。

そこに。

いた。

「何やってンだよ。お前、仲間あンだけいただろ。――なンで、死にかけてンだ？」

「みんな――忙しかったみてェでよ。あとあれ、透明にするヤツ。【隠洗】の劣化版みてェな奴。多分、かけられた。誰にも声届いてなかったしな。カラス殺して逃

げ切って、このザマだ。……ハハ。なンだよ、とどめ刺しに来たか？」

夥しい血。

なんらかの方法で受け身を取ったのだろうが――その身体がもう無理であることなど、誰が見てもわかる。

いた。

梓・ライラックは。

そこで、倒れていた。

「……私とＥＤＥＮの蘇生槽の経路ァ断たれてる。死んでも、あそこで蘇生できる。……だろ？」

「ハハ。どォもな。そォァいかねェらしい。精神ズタボロなンだと。ハハハ。……死ぬかもしれねェ。これで」

「どォにか、できねェのか」

「ハハッ、な、なンだよ。お前さん、俺のこと大嫌いじゃなかったのかよ。なンでどォにかしよォとしてンだ。見捨てるなり、止め刺すなりしろよ。あんまブレた行動すンじゃねェ、俺の意思が揺らぐだろ」

「……こっちの台詞なンだよ」

近く、カンコウの力によってできた樹木のうねりに腰を掛ける。

溜息。なんでこンなもン見つけちまったのかと、溜息を吐く。

コイツの言う通りだ。コイツァ敵。私から全部を奪った敵なンだ。私が貰うはずだった全てを奪ってった、ワケのわからねェ、夜の使徒、とかいう野郎。

けど。

「何が、だ」

「アイツ。私達が利用した、カンコウってなオリジン種。……助けただろ。クソ野郎」

「助けられたのか。ハハ、良かった。確認する前に落ちちまったからな。ハハ、ハ。はァ。強がるのも、そろそろきちィな。なァ。でもすげェだろ。そォ思わねェか」

「何がだよ」

「――まだ、生きてるぜ。あーンな高ェとこから落ちてよ。ハハ、足の感覚無いんで全力強化してクッションにしたンだ。おかげでぐちゃぐちゃだが、特に痛くもねェ。血がな、ちょいと足りないんで、もう意識ァもうろうとしてンだが……生き

てる。すごくねェか？　俺、生きてるんだよ。死に体だけど――生きてる」

このクソ野郎ァ。

魔法少女を助けるだのなんだのと理想を語るだけだったはずのコイツァ。

魔物にまで、手を出した。

それで――ほとんど被害も出さずにコレだ。安藤さんがちょいとやっちまった2人ァこいつにァどうしようもなかっただろうから除くとして、そりゃ讃えられるべき功績なンじゃねェか。

オリジンだぞ。

ありゃ、紛う方なき神だ。それを――諫めて、鎮めて、止めて。

そのお膳立てして、自分ァここでくたばろうとしてる。

「そんな目で見ンじゃねェよ、アズサ。言ってンだろ、俺ァ生きてる。今。生きて――まだ生きよォとしてる」

「だが、死にかけで、死に向かってる。……あのな、私を勘違いしてるよォだから言っとくけど――私だって、死ァ嫌なンだよ。アンタより理想ァ高くない。仕方ねェ死ってなある。被害を減らすために、苦痛を減らすための死ってなある。そ

れァ絶対あるんだ。救いとなる死が。与えられるべき死が。――けど、私ァ、そうじゃねェ、目の前でただ――失われよォとしてる命を見捨てる程、死を好んじゃいねェ」

「ハハ。やめとけやめとけ。どうせ、お嬢かポニスリが見つけてくれる。――そォなったらお前、また悲しい想いするだろ。今の内に去っておけよ。ひひ……善行して報われねェで、仇だけ食うってな辛いぜ」

なんなんだろう、こいつァ。

元ァ私だった奴だ。私と別たれて、けど――私より持っていて。恵まれていて。私より弱くて。私よりボロボロで、私なんかじゃ比べ物にならねェほど、死を嫌っていて。

「なァ、お前さ」

「ン？」

「つらくねェのか。理解されねェってなよ。本質を――根っこの所をわかってンのァ、誰1人としていねェだろ」

「めっっっっっちゃつらい」

「……」

「ハハ、お前だけだぜ、アズサ。俺がこんな愚痴零すの。……馬鹿が。何泣きそうなツラしてやがる。同情すンなら宛先間違いだ。お前のそれァ、お前に向けな。お前の方が可哀想だ。生きてるってなことを、そんなにも――実感できねェ、なんて」

急速に、生命の気配って奴が抜けて行くのを感じる。

マジなンだ。コイツが死に向かってるってな。

……。

ああ、ったく。

今の私、おかしィぞ。いやまァあのナリコっていうめちゃくちゃ好みの人に出会ったのが運の尽きっつーかなんつーか、いやあの人のことァいい。今ァいい。安藤さんがやっちまったンで嫌われてる可能性も、ある、し。

じゃなくて。

「なンだ。止め刺す気になったのか」

「何度も言わせンな。私だって救える命があンなら救いてェ。目の前にいるのが、死が救いにならねェ奴だってンなら、そォじゃねェ方法で救う」

「……その腕に詰まってるのを使うのァ、やめろよ。知ってンだぞ、その仕組みァ」
「使わねェよ馬鹿。つか使えねェ。これァ私専用だ。私とアンタがおんなじでも、これァ私にしか使えねェ」
「そォかい。じゃ、どォすンだ」
「黙ってな」
亜空間ポケットを開く。
こいつァ使えねェ亜空間ポケット。私の身体ァもう魔力が十二分にあるンでな。身体強化も飛行魔法も亜空間ポケットも自在さ。
……そっから、あるモンを出す。
「……赤い、花？」
「フリューリ草の花弁だ」
「へ、ェ……見つけたの、か。ハハ。そこまで、赤いのに、見つからねェ……モンなンだな」
「人間が発見する前に大抵獣か魔物が取っちまうからな。——いいか、今からすンのァあくまで応急処置だ。これで繋げるのァもって一時間くらい。その間にお前の

仲間がお前を見つけてくれなかったら意味ァ無ェし、見つけてくれたとしても、その命をどォ繋ぐのかァそいつら次第だ。それ以上ァ私ァ関与しない。したら殺されちまいそォだしな」

「ハ――だから、やめとけ、って。つらいぞ。やさしいことして、いいことして。けっきょくおれァ、おまえにたちはだかるんだから」

「ア？　てめェ、見返り求めて誰か助けてンのかよ。くだらねェこと言うんじゃねェ、死にそォな命があるから助けてるだけだ。その後お前に何されてもなんとも思わねェよ。元から大嫌いなンだから」

「ははは。そりゃ、そォだ」

フリューリ草の花弁を、こいつの胸の中心に置く。

すると即座にフリューリ草ァこいつに根を張り始めた。見てて恐ろしいたァ思うが、フリューリ草ってな別に動植物に寄生する奴らじゃない。むしろその逆だ。

「グ――ぅ、!?」

「痛みァするだろォが、我慢しろ。それを生きてることだっていうンならな。……いいか、この花弁ァお前に根を張り、全身に魔力を供給し続ける。ただし、その魔

力ってなお前専用じゃねェ、外の魔力そのものだ。つまるところ毒も毒なンだが——お前にとっちゃ違う。夜の使徒。死者。元から外の存在だって話のお前ァ、その魔力との相性も多少ァ良いはずだ」

「が、ぐ……うぅ、ぁ！」

「……ホントに多少ァ、っぽいが」

のたうち回ることすらできねェ馬鹿野郎を見て。

首を振る。

良いはずだ。

これで。

別に善行だ、なんて思っちゃいねェ。こいつァ私達の前に必ず立ちはだかるし、なんならお嬢やポニテスリットも引き連れて——私の大切な仲間を、みんなを引き連れて、私の前に出てくるンだろォけど。

良い。

死、以外の方法で命を救ったってな事実ァ——お前だけが得ていいモンじゃない。

お前が得たンだから、私にも寄越せってな、そンだけさ。

「相性が悪くても魔力ァ魔力だ。生命維持にァ役立つ。死ぬほど苦しいだろォが――生きることにァ繋がる。――……一応、言っておくぜ。死ぬなよ。死ぬンなら――」

その叫び声を聞いてだろう、複数の気配が寄ってきたのを察する。

んじゃ、お言葉通り逃げさせてもらいますかね。

「――私と直接相対して、そン時に、死ね。じゃァな。梓・ライラック」

「ア――り、がとよ、ゥ――アァっ!?」

「はン、意地っ張りめ。大人しく悶え苦しんでろってンだ」

どォやってでも礼言わなきゃ生きていけねェのかアイツァ。

……っとに調子狂うぜ。

さァて。

世界でも、救いに行きますかねェ、ってな。

65・阿鰤譜羅須閉徒・

生きてた。

いんやさ、こんな軽い言葉で済ませるモンじゃねェ、それァもうすんげェ事をされたらしィんだが、まァ気が狂いそォな激痛の中だったンでな、何されたかなんざ覚えてねェ。

覚えてねェけど――まァ、ぐちゃっとなっちまった足ァなくなった。腕の時と同じだ。んで、義足を、ってワケだ。けどンな高性能なモンァ作れないので、ほとんどただの鉄の棒だな。なンで車椅子生活ァ同じ。今までと特に変わりなく、って奴だ。

ただ。

「……やっぱり、増えてるよなァ」

「魔力が、ですの？」

「あァさ」

そう。増えた。

迷宮でも増えたンだが、そン時の感覚に似ている……よォな、全く似ていないよォな。

フリューリ草の花弁のおかげ……とすると、世に蔓延ってる獣や化け物ァ魔力たんまり持ってねェとおかしい。あとのたうち回って苦しんでるはずだ。外の魔力、なんてのを身に入れて大丈夫なのァ、同じく外の存在だけ、みてェなコトをアズサが言ってたしな。

「……だからといって、戦場に出ることはやめてくださいまし。当分は大丈夫でしょうけれど……」

「そォなることを願うよ。俺ァもう、鈍っちまった。……化け物をマトモに殺せるかわかんねェ」

「ええ。そういう事は、矛であり刃たる私達の仕事ですわ。アインハージャのお2人やディミトラさん、シエナさんも大層怒っていましたし、どの道もうＥＤＥＮの外には出させてもらえなさそうですけれどね」

「愛されてるねェ」

当然だけど、置いてったマッドチビ先生達ァカンカンだ。義足作ってくれた時も

終始無言だったし。アインハージャの2人もマジで無視って感じだったし。シエナはすっげー冷静な声で「あまり怒らせないでくださいね」って言ってきた。怖い。

あァ、んで、そうそう。

ＥＤＥＮ解放運動っつーか、上層部を是正しょォ、って動きな。創設者たちがやるって言ったやつ。

俺がぐちゃっとなった後、カンコウも去ったＥＤＥＮを、創設者たちが襲撃した。ってーと言い方すんげェ悪いンだけど、中央塔の壁を脳筋娘が破壊して、文字通り殴り込みに行ったンだ。

――けど、中央塔ァもぬけの殻。

ジャハンナムっつー上官含めて、≫上層部≪って呼ばれてる上官ァ誰１人としていなかったらしい。

ただ、最上階で。

安楽椅子に座った学園長殿が、静かに眠っていただけだった、とか。

ま、簡単に言や逃げられたってハナシだ。あるいァ元からいなかったかのどっちか。マッドチビや安藤さんが来ていた時点で内通者がいたのァ確実だし、多分ハナ

から繋がってて、だから今回の件に肖ってとんずら、ってなが正解なンだろう。
だからＥＤＥＮァ是正されましたよ、結果的に。ってな。
問題ァこっからかね。
マッドチビ、安藤さん、そしてアズサ達ってな、やっぱり隔離塔の地下に封印されてた魔法少女を奪うのが目的だったらしい。封印措置を受けた魔法少女ってな要はＥＤＥＮに反旗を翻した、人類に仇為そうとしたってやべー奴らの集まりだ。まァ俺もそれを受けそォになってたンだが。
奪われた魔法少女は３人。
「【合成】、【蟲独】、そンで【帰述】ねェ」
「３人共、私が魔法少女になった時には封印措置を受けていた方々ですわ。というより、私達が封印措置というものそのものを知らなかったくらいには、近年その措置を受ける方々はいなかったんですの。それくらい昔の方々で」
「３人が３人共、同じ班の同じ隊だった、ってな……なんつーかな」
魔法の詳細ァ明かされてない。
明かすと不都合だから……みてェな今までのお上っぽい事情じゃなく、知らねェ

んだと。まァ創設者たちァＥＤＥＮ作って早々にＥＤＥＮを去っていたし、学園長殿ってなＥＤＥＮの維持のためだけにいるよォなモンで、決定だのなンだのァ全部お上がやってたらしィんで、マジで誰も知らねェと。

　ＥＤＥＮ奪還に非協力的だった観測班アルカナ隊の奴らもやっぱり知らなかった。非協力的だったのも「隊長がそう言っていないから」であって、その隊長たるＬ・アルカナが失踪した以上ァ、こっちに従うと来た。自分の意思ってのがねェっつーか、なんだかなァって感じ。

　ってなワケで、ＥＤＥＮァ平和になりましたよ、と。

　危険な任務ってのも無くしていくらしい。確かに襲い来る奴ァ倒さにゃならねェが、被害の出ない方法を取る、ンだとか。

　つまり俺の理想としたＥＤＥＮになりつつあるってワケさな。

　……ま、あくまで似てるだけだ。創設者たちの理念と俺の理念ァ、やっぱりちょっと違う。だからそこでの衝突ァ起きるンだろォけど、まァまァまァ。とりあえずこの平和を享受しよう、ってンで――今。

「そォいやよ、お嬢」

「なんですの？」
「ポニテスリットを長い事みてねェんだけど、どこにいるンだ？」
「……あー」
なンだその反応。
ついに振られてしまいましたかその話題、みてェな顔。
「なンだ、体調でも悪ィのか」
「いえ。……ミサキさんはその……今、自己嫌悪の真っ只中でして」
「ほォ」
「ほら、私達は、何者かに駆り立てられて、とはいえ……一度は梓さんを完全なる敵として見做したでしょう？　その前に殺そうとしたのも紛れもない事実ですし」
「まァ確かにそォだな」
「それが、ミサキさんにとっては……結構な心労になっていたようで。ミサキさんは私よりかは守護向きというか、私は〝いち早く殲滅して国を守る〟という守護の剣ですけれど、ミサキさんは真っ当に敵を弾いて守る、という守護の、いわば盾、なんですの。……ですから」

「それが完全に殺す事しか頭になくなってたって事実に自己嫌悪してるって？意味わからんな、そりゃ。仕方ねェって割り切ればいい。太陽の使徒の言葉ってなそォいう強制力があるモンなンだ、魔法少女である以上ァ仕方ねェよ」

もう絶対に使うなって念押された世界言語だって、結構な強制力持ってる。アインハージャ達の魔法を無理矢理覚醒させたあたりを考えりゃやベェのァわかるだろ。あとァ自分の身体操ったりな。それを、直属の上司みてェな奴に使われたンだ。そりゃおかしくなりもする。

……慰めに行くべきか、ってーと、微妙だな。

俺が行くと余計に罪悪感加速させそォだ。まー面倒な手土産残してくれたモンだよ。

「他の話題にしましょうか」

「あァよ。……つっても、なンかあるか？」

「ええと、そう。西方の方々の話、とか」

「あァな」

西方出身の奴ら。キラキラツインテ、先公、尖り前髪、太腿忍者、あみあみ忍者、

着物狐、あとカンコウか。そいつらの行方な。

まァ、キラキラツインテと尖り前髪ァＥＤＥＮを抜けるつもりでいたみたいなンだが、ＥＤＥＮが変わったンで残る事にしたらしい。太腿忍者も別段変わりなく残るそォで、ただあみあみ忍者のことも多少ァ気になってるみてェでな、休暇申請頻繁に使ってあみあみ忍者のトコに行ったり、逆にＥＤＥＮや国へ来ないかって誘ったりしてるとのコト。

確かに忍軍の守るべきモノ、ってな無くなった。城を護る理由もこだわる理由もな。

だから一般人も一般人なアイツらァ国へ来てもいいと思うンだが、当の忍軍がNOだってンだ。死ぬまで城を守り続けるのが忍軍だー、つって。あみあみ忍者もおんなじ。

ってな話を創設者たちにチョロっと流してみたら、西方文化の再興を目指して見たらどうか、って話が返ってきた。どォいうことかってーと、俺の目的に被るのさ。

俺ァこれからどォにかして国に蔓延ってる魔法少女の因子ってなを殺したい。で、この魔法少女の因子ってなァ感染するンで、魔法少女の因子を殺した一般人の隔離

先が必要なンだ。それを西方にしたらどォか、ってな。

たァ言えジパングとＥＤＥＮってな結構距離がある。だから移住ってなァ結構長い目で見なきゃいけねェ話だし、ジパングに魔法少女の因子が残ってないかどォかも調べなきゃいけねェ。特に忍軍にァ妖術師がいそォだし、残された２人の侍衆なんか多分がっつりだ。そいつらがどこに行くのかも考えなきゃなンねェ。問題ァ山積みも山積みっつーか、無理難題に近い。

が、まァやるっきゃねェって、西方出身者がちぃっとやる気出してる、みてェな現状さな。先公とキラキラツインテァどっちでも良さそォな雰囲気を隠そうともしてなかいンだが。

で、着物狐とカンコウ。

……あんまりな、言いたかねェけど。

どっかで、死んできたらしい。２人の秘密の場所か、思い出の場所か。それともなンでもねェ山の奥か。

着物狐ァ確かにもうダメだった。俺の死に具合も相当だったけど、あいつァほぼほぼ死んでた。ほとんど気力で保ってただけだ。半身焼失してンだ、それで動ける

だけすげェって話。

で、カンコウァカンコウで、もう消えよォとしてたらしい。恨みつらみが晴れて、その矛先も無くなって、封印も解けて——そのコアも見えていたンだとか。だからそれを——着物狐が、ってな。

そいでまァ、着物狐ァ蘇生して。

けど、ＥＤＥＮに居座る、って気ァ無いとのことだ。

自分が99%化け物だから、ってのもあるンだが、こんな女の子だけの園にいたら理性が保てそォにないとかなンとか。だからマッドチビ先生のＬＯＧＯＳに留まるンだってさ。西方にゃいなくていいのかって聞いたら、殿のいねェ西方に然して興味ァ無いとのこと。まそォだろォなァって。

ちなみにアインハージャ達とシエナはまたＥＤＥＮに残ることになった。まだまだ学んでない事があるから、って。

創設者たちァ半分がこっちに、半分が輝きの園に戻った。具体的に言うと紺碧ベルトと脳筋娘がこっちで、びりびりタイツとパッパラメガネがあっち。敵が精神体を操る以上紺碧ベルトがこっちにいた方がいいだろォってのと、魔法少女や国が危

機に陥った時ァ脳筋娘が役に立つ。まァあいつ魔法使うより殴った方がつえーンだけど。

逆にパッパラメガネとびりびりタイツの魔法ァ輝きの園の方が役に立つンで、そンな感じ。

こんなところかね。状況説明ってな。

あァ、各種組班隊ァ、大体元鞘っつーか元の位置に戻った。遠征組はちィと見直されるらしィんだが、今までのチームワークだのがあるからな。統合されることァあってもバラバラにァされねェんだと。

即席ライラック隊ァ当然の様に崩されたけど。まァ当たり前だわな。

「つか、いいのかよお嬢」

「何がですの？」

「なんぞ、今日SS級ってな集まりがあるとか言ってなかったか？」

「ええ、ありますのよ」

「時間、もォすぐだろ」

「梓さんを病室に送り届けてからでも何も問題はありませんわ。私、元【神速】で

すのよ？」
「……まァお嬢がいいなら良いがよ」
病室。
ま、当たり前なンだわな。
こンな身体じゃ寮生活ァできない。授業ってなたまに受けに行かねェと永遠卒園できねェみてェなンでどォにかして行くつもりでァあるけど、もう学園寮じゃ無理。ちょいと前のアズサの件で未だトラウマ引き摺ってるB班もいるしな。他、まだ俺見てヒッとなる子ァおおい。
なンで、病室……つかまァ、隔離塔行きだ。
悪い事したってワケじゃねェ。いやまァしかけたンだが、それァおいといて。
ただ、戦場復帰が難しいってンで、隔離塔で病人生活ってな話さ。とりあえず精神体を治す方法ってなが見つかるまで。あるいァ魔法の新生ってなを思いつくまで。もしくァマッドチビ先生がすんげェ義足を開発するまで、ってな。
「着きましたの」
「ン。……お嬢、ポニテスリットに伝言があるンだが」

「はい。なんですの？」
「――≫ばーかあーほまぬけー≪って。言っといてくれ」
「わかりましたの」
よし。
んじゃ――ちょいとの間、病人生活だー、ってな。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

飽きた。
いや飽きるって。なんもすることねーもん。
暇だから車椅子キコキコやって動き回るンだけど、看護師みてェな奴らに遭った事ァない。いやまァ当然っつーか、EDENにいるのってな全部魔法少女であって職員とかじゃねェ。市場区画のァ別だけど。
だからだーんれもいねェ静かな病室をキコキコキコキコやって、疲れたら病室

帰って寝る、ってそンだけの生活だ。今３日目な。
　たまに誰かがお見舞いに来てくれるンだけど、それもたまにタイミング悪くて花だけ、みてェな事がたまにたまにたまたまにある。稀によくある。
　だからここんとァずっとこォして、監視塔直下の展望スペースでぼけーっとしてることが多い。動き回ると疲れるンでな。
……いやァ。
　平和ァ望んだけどさ。
……いやァ。
「そんな梓様に朗報があります」
「びっくりするから気配消すのやめろ」
「おや、梓様は命の気配、とやらで私達のことがわかるのではありませんでしたか？」
「ンな常に気ィ張ってるワケねーだろ」
　嬉しい。
　冷静メイドだ。久しぶりの。

そォいや、マッドチビ先生のＬＯＧＯＳに乗った連中ってな、何も着物狐だけじゃなかったりする。流水だの造形だのの魔法を使う奴らがこぞって「天才彫金師に教えを乞いたい」と言ったのがさァ運の尽き。俺にァ終始無言だったクセに、突然鼻高々になって「ふ、ふん！　一月だけならいいわよ！」とか言っちまったモンで、今ＬＯＧＯＳァ結局少女の園になっている事だろう。

そして着物狐の毒牙に……。

なンでそンなことを急に言い出したか、ってーと。

「朗報ってな、なンだ」

「私が来たことです」

「あァそりゃ朗報だ。……暇なンだろ。姉ちゃんいねェから。鬼教官殿も自由にしてこい、とか言ったクチか？」

「お見通しのようですね。はい。その通りです。揶揄う姉がいなくてつまらないので、梓様で遊びに来ました」

「ちったァ隠せ」

なんとあのコーネリアス・リヴィル、怒りしょんぼりもマッドチビ先生の下に弟

子入りしたのだ。
　なンでもその知識量に惚れこんで、とか。着物狐も結構薬草にァ詳しいし、怒りしょんぼりも【劇毒】っつー、なンだ。マッドな魔法使うンで、結構息が合うとかなンとか。
　だから、コイツァ暇なンだ。
　一日中鬼教官殿の世話をしているってワケじゃないらしくてな。なんなら断られるらしい。
「……平和だなァ」
「仮初ではありますが」
「なーンで水を差すかね」
「私達の抱える諸問題の多くは解決していませんから」
「そりゃ痛感してるがよ」
　ルルゥ・ガル達化け物勢力。マッドチビ達アズサ勢力。世界各地でまだ猛威を揮うオリジンやルルゥ・ガルに従ってねェ化け物達。
　ンで、俺が殺すべき魔法少女の因子。

確かになーんも解決してねェし、平和たァ言い難い。
「一つ、余計な事を聞いてもよろしいでしょうか」
「余計な事ってわかって聞く奴ァお前かキラキラツインテくらいだよ」
「光栄です。では、問いますが」
「あァ」
何がくるンだろォなァ。
冷静メイドのことだから、どーせどーでもいい事なンだろォけど。
「梓様は、私の事を好みだと思われているのでしょうか」
「ンー？　ンー？」
「いえ、カネミツ様から少しばかりお話を聞きまして。梓様ではないアズサ様が、ナリコ様に口吸いを受けた時、そう漏らしていたそうです。私やナリコ様のようなオトナな、けれどオトナ過ぎない女性はめっちゃ好みである、と」
「めっちゃ好み、なんざアイツ言わねェだろ」
「失礼、多分に脚色しましたが――お好きなのですか、私のカ・ラ・ダ」
「無表情で言われてもなァ」

「おや、頬を上気させ、上目遣い、などがご所望ですか？」
「所望しねェよ」
……いんやさ。
まァ認めるよ。おじさんだからな、結婚適齢期っぽい女性ァ好きだよ。そォいう目で見れるよ。歳の差ありすぎて結婚とまでァいかねェけど、なンだ、そォいう目ってな目でァ見るよそりゃ。
……っとに何言ってンだアズサの奴ァ。
「でしたら、どうでしょう。私と――」
「やめとけやめとけ。アンタ暴走繭が好きなンだろ。暇だからってそォいう話題振るンじゃねェよ」
「では、エミリー様も交えて」
「交えるも何も、アイツまだ暴走繭の中にいンだろ」
「――いえ。先日、ようやく心の整理がつきました」
その声が、冷静メイドの反対側。俺を挟んで左側に立つ。
見覚えの無い顔。聞き覚えの無い声。いんやさ、通信端末ってなあンまし画像も

声も再現率高くねェんだよ。

だから――初対面に、感じちまった。

「お久しぶりです、になるのでしょうか？　ライラック様――いえ、初めまして、と言っておきましょう。私はエミリー。【壊糸】のエミリーです」

「ン。久しぶりだな、初めまして。俺ァ梓・ライラックってンだ。魔法ァ解けたよーで何より、ってな」

「……？　少し口調が……その、更に粗悪になられましたか？」

「エミリー様。日を追うごとに、でございます」

「うるせー」

綺麗な顔した少女だな、って。

そォ思った。確か、幼い時に魔法少女に覚醒しちまって、鬼教官殿が魔法少女になるまでにかなり時間があったンだったか。

キリバチとエミリー。名前の響きも似つかねェが、顔立ちはあン時みた通り、鬼教官殿にちったァ似てるよォな、まったく似てねェよォな。なんか、子役みたいだ。洋画の。西洋人形っぽい、っつーの？

「もォ暴走してねェから、暴走繭ってなあだ名ァ付け替えるべきかね」
「ふふ、そのままでいいですよ。自身への戒めにもなりますし」
「そォかい。んじゃよ、暴走繭」
「はい」
「鬼教官殿にァもう会ったのか？」
「ええ、勿論です。抱きしめられて泣かれて、それはもう大変でした」
「鬼教官殿がねェ。やっぱり可愛らしワオ痛ってェ!?」
ど、どこだ？
どっから見てやがンだあの人。っつかこっちァ曲りなりにも病人だぞ!?
「あはは……。過保護な姉が申し訳ありません」
「いや学習しねェ俺が悪いけどよ。……で、そっちの冷静メイドァ何そわそわしてやがる」
「いえ、ですから、3人でするのでしょうか、と」
「しねェよアホ」
「あら、私は構いませんよ。ライラック様がよろしければ、ですが」

「構えよ。あっ、つか元からそォいう関係かてめェら」
「ええ。リヴィルもローグンも。同じ隊にいると、どこも自然とそうなると思いますよ？」
……オーレイア隊もだが。
あと班長のトコも、そォいう話題になンなかっただけで、そォなのかね。
きちー。
いや別に勝手にしてくれってな話なンだけど、おじさんにあんまりそォいう話聞かせねェで欲しいなァ。
「ま、治って……つか、心の整理ついて良かったよ。退院おめでとう、たァ言っとくぜ」
「ありがとうございます。……それで、なのですが」
「ン？」
なンだ。
なンか用あったのか。挨拶だけかと思ったが。
「ライラック様は、卒園後どうするか、というのは決まっていますか？」

「俺ァまだ魔法少女なって一年経ってねェンだわ」
「決まっていない、ということですよね」
「まァな」
「でしたら――我が隊へ、いかがでしょうか」
「考えとくよ。なんぞ、神妙な顔で言われても困る。俺ァこっから先マトモに魔法少女できるかもわからねェんでな」
「そ、そうですよね。申し訳ありません。そういう事を言う場ではありませんでした」
「おいおいあンましゅんとすんなって。……なンだ、どーいう意図だ？　よくわからねェんだけど」
何が言いたいのかよくわからん。
俺の察しが悪いのか、それとも暴走繭が鬼教官殿と同じくあンまり説明に向いてないタイプなのか。
そォいう問いを込めて冷静メイドを見る。
「特に他意はないかと。エミリー様はお礼を込めて、梓様をエミリー隊に誘った、

というだけです。自分の隊に来たのなら悪くはしませんよ、と」

「あー。でもＥＤＥＮァこれから変わるンだ、どこの隊行っても悪くァされねェだろ」

「今包みに包んでご説明しましたが、直球で言わせてもらいますと、何かお礼がしたいのですが何も思いつかないので自分の隊に誘う事がお礼になり得ないかな、というエミリー様のむやみやたらに奥ゆかしい乙女心が多分に含まれた誘いでございます」

「ろ、ローグン。あまりからかわないように」

あーね？

なんか上げたいけどあげるモンないから飲みに誘う、みたいな？　不器用だねェ姉妹揃って。

……よし。思うだけなら痛いのァ飛んでこねェな。

「あれ、つってーと、鬼教官殿の隊から冷静メイドァ離れるのか」

「元より私はキリバチ隊ではないですよ。姉も同じく。エミリー様があの状態でしたので代わって頂いていた、というだけです。そして、私達がメイドである事実と

隊が違う、という事実はなんら関りありませんので」
「そんな、魔法少女になる前の関係性など捨て置いて良いと常に言っているのですけれどね」
「へェ、元からそォいう関係だったのか」
「い、いえ。そういう関係になったのは同じ隊になってからですよ？」
……頭ピンク色がよ。
そォいう意味じゃねェよアホ。
「んー。じゃァさ、お礼がしたいってンなら――頼みがあンだわ」
「はい！　よろこんで」
「エミリー様、安請け合いはダメです。梓様は稀に無茶なことを言ってきます」
「いんやさ、ちょっとやってみたいってだけなンだよ」
ずっとずっとできなかった。
「お菓子パーティ、っていうの？　ちょいと、やってみたくてさ。色んな奴集めて欲しい」
おじさんなりに、楽しんでみたくてね、って。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――以上が、今後のSS級に与えられる任務となります。何かご質問はありますか？」
「私は異存無しだ。結局今までと変わらない。ただちょっと安全に、慎重にってこったろ？」
「はい。特に防衛組の方々は変わりませんね。変わるのは――」
「私達学園組と、遠征組、ですのね」
「正直な事を言えば、私は混乱しているよ。明かされた事実が多すぎる……アールレイデさんに起きた事も含めて、なんといったらいいのか……」
「ククク……まさか吾がSS級扱いとはな。身代わりを残しておけ、というから何かと思えば……良いのか？　吾は九割九分九厘魔物ぞ？」
「だからこそです。――ネイビー・ブルー様。聞いておられますか？」

「え？　あ、聞いてる聞いてるー。でも私、よくわからないかもー。その――≪役割の統合≫ってやつー？　実感ないしー」

中央塔の、とある部屋。

そこに、数人の魔法少女が集められていた。

場を仕切る魔法少女含めて――全てが、SS級の魔法少女。

彼女らに説明が為されたのは、元【神速】、現【神光】のフェリカ・アールレイデに起きた≪役割の統合≫に関する説明と――。

「正直なところを言わせていただきますと、故意にそれを目指す、というのは難しいと思いますわ。あの時の私は、少しばかり――太陽に近かったので」

「ええ、そうであると思います。ですから、積極性は求められていません。ただ、出来得る限り迅速に」

「それが積極性を求めるってことじゃなくてなんだってんだ」

「死に急ぐことは無い、という話です」

「……」

他のSS級も、それを目指せ、という指示。

※役割の統合※――【神光】に統合されたのは、速さと光と浄化の力。神なりし光。故にそれは、紛い物を消し飛ばす。

本来であれば、それぞれが単一の魔法として、魔法少女として覚醒するはずだったそれを、フェリカ・アールレイデ1人が統合し、請け負った。

それこそがSS級の目指すべき場所であると――場を仕切る魔法少女が言う。

「ク――明示はされるのか、とだけは聞いておこうか？　吾らの目指すべき場所とやらがどこなのか。※役割の統合※の末――何が起きるのか、と」

「新たな魔法少女の覚醒を防ぎ、因子の統一及び純化が目的となります」

「ククク、随分と意味のない御託を並べるなぁ？　何が起きるのか、というのを吾は聞いているのだが」

「――明けない夜が、ようやく明けます。具体的に言えば――」

少女は、空を指差す。

「空が、割れます。この閉じられた世界に、枯渇して行くばかりの世界に――新たな活力を与えるのです」

「ククク――そういうことなら、吾は断らせてもらおう。宣言しておくがな、吾はあ

くまで梓・ライラックと共にある。太陽の意図に興味はない」
「空を割る、ねぇ。私も大して興味はないが――それをしないとどうなるのか、だけは聞いておこうか？」
「簡単です。世界は滅びます。……とはいえ、消失する、という事ではありません。単一の役割しか持たない魔法少女が増加することで、既存の概念が少しずつ消えて行きます」
「ん―。意味わかんない系～？」
「概念が、消える？」
「たとえば、ですが。――皆さん、火、というものを見た事がありますか？」
「これのことかい？」
女性がその掌に、小さな青い太陽を灯す。
いいえ、と。場を仕切る少女が首を振る。
「自然に起きた火。山や木といったものが燃える火、というものを――貴女方は、見た事がありますか？」
「クク、異なことを言うものよ。――そんなことはあり得ぬだろう？」

「ええ、ナリコさんの言う通りですわ。魔法少女の力なくして、火は起こりえない。常識でしょう」
「何々、学園の授業？　だったら私かえるけどー」
彼女らの様子に――少女は、何も言わない。
ただ1つ、頷いた。
「……もしかして、そう、なのかい？」
「クク――なるほどな」
「そ、そんな事があり得ますの!?」
「え、何々～？」
「……じゃぁなんだってんだ。元の世界にぁ、私のこれが普通にあったって事か」
役割。
魔法とは、何かを司る行為。
故に。
「これからそうなる可能性がどんどん増えて行く、ということです。事態の緊急性はわかりましたか？」

「ククッ、それでも吾は断ろう。吾には吾の目的がある」
「構いません。ただ、SS級である貴女方には知っておいていただかなければならなかった、というだけの話です。仮称として任務としていますが、そう思わなくても結構です」
「……それは、SS級以外にも起こり得る、ですのよね？」
「可能性は低いですが、そうですね」
「ええ。それだけわかれば十分ですわ」
では、と。
その場は解散になる。
紙となり、崩れて行くもの。眠そうにあくびをしながら部屋を出るもの。時たまその危険極まりない火球を手に浮かべるもの。思いつめた顔をするもの。
そして。
「……最後の欠片は、既に」
隔離塔を見て——何かを呟くもの。

世界にはまだ、平和など訪れてはいない――。

遠《text:s1:2》吠えよ遥か彼方に《text》

第二章　II　第三章

始の点　II　宙の莽

※一日お休みをいただきます。
その後通常投稿になります。

十一、移項編

66・藍夢能登韻垂例須手取・

「宙の莽（そらくさむら）。それが、今の私達が目指すべき場所」
「……それァ、終の因や始の点よろしく迷宮なのか？」
「ええ。ただし便宜上迷宮と呼んでいるだけで、本質はそうではない。むしろ、宙の莽に似ていたから、終の因や始の点を迷宮と呼んだ、という方が正しいかもしれないわ」
「あー。ちとわかんねェんだがよ。迷宮ってな、そこにいるニヤニヤ丸眼鏡が造ったンだよな？」
「終の因はそうね」
「始の点ァ違うのか」
「始の点をあのカタチに仕上げたのは別の魔法少女よ」

ふぅん。

なんぞ前後関係が見えてこねェな。

「単純な話だ。私がはじまりの魔法少女であり――この世界に満ちた魔力をどうにかするために、終の因を作り上げた。魔力を一点に集め、星そのものに魔力を注入するための角錐。しかし、それだけでは世界を巡る魔力にばらつきが出てしまった。故にそれを均等にしなければ、と動いたのが――」

「アタシこと、【帰述】のプリメイラ様なのだー！」

「……じゃなンでアンタ封印されてたンだよ。世界にとって良い事したンじゃねェのか？」

「こいつがＥＤＥＮにて封印措置を受けていたのは全く別の理由だ。単純に人類に仇為した――そちらの【合成】、【蟲独】と共に、そして今は亡き２人の魔法少女と共に、人間を用いた迷宮を作ろうとしていた。故に封印措置を行った」

「流石に怒られちゃったのだ～」

「たりめーだろ」

そォいう奴らを集めるってマッドチビから聞きァしてたけど、こえーこえー。倫

理観ゼロもいいとこだ。
　ニヤニヤ丸眼鏡――名を、ゲヘナ。最初の魔法少女。この世界に魔力を持ち込んだとかいうやべー奴。
　すべての魔法少女の始祖でありながら――魔法少女撲滅を謳う、やっぱりやべー奴。
「で、目指すべき場所ってこたァ、なんか障害でもあンのか？」
「ええ、そうよ。まず空にあるという時点で、魔力が薄くなる――魔法少女の魔力素は世界の外に近ければ近い程結合力を失うから、単純に辿り着くのが難しい。空に穴をあけるのも、神の許可を得なければいけないから難しい。空を出たとして、そこは冥界。死者の国だから、長い時間私達がそこにいると分解されてしまう。その上で宙の莽を発見し、攻略し、その迷宮の主を調伏しなければならない」
「なンであるってのを知ってんだ？」
「私がそこから来たからだ」
「……アンタ、魔法少女じゃねェのかよ」
「神でもある。――席を追放された神だ」

あー、ね？

だから――戻る手伝いをしろ、的な？

「貴女の思っている事は10割違うわ。ゲヘナが宙の莽に入り、その迷宮の主を調伏する、という手続きを必要としているのは私達の方よ」

「マッドチビ、何も頭ごなしの否定ってなよくねェよ。そォかもしれねェ可能性ァ残しときな」

「必要ないわ。そうかもしれない可能性はこの５００年を使って調べ尽くしたのだから」

「……そォかい」

私ァどォにも信用ならねェなァって思ってるよ。

何考えてっかわかんねェ奴らばっかだ。そもそも魔法少女撲滅を謳ってるクセにＥＤＥＮにいたニヤニヤ丸眼鏡も、あぶねェと思ったからニヤニヤ丸眼鏡達が封印したはずなのにそれを解いちまったマッドチビも。こっち来てからずゥっと機械弄りしてる安藤さんァまァ普段通りに接してくれるからまだやりやすいンだが、他のがどーもなァ。

いんやさ、私が異端だってなわかってンだけどな。
けど、どーも、なんつーか……。
あー。
女々しいこと言うと、お嬢達が恋しい。
離反、しちまったからなァ。
「――以上で説明は終わり。何か聞きたい事は？」
「あー、この先、ＥＤＥＮァどう動いてくるかの予想だけ聞きてェ」
「ふぅん？　いいわよ、恋しいお仲間がいっぱいいるものね。……恐らくだけど、ＥＤＥＮの魔法少女達は〝役割の統合〟を行い始めるわ。フェリカ・アールレイデが大勢の前でそれを紐解いてしまったから、あっちも隠し通せないと思ったはず」
「それが行われると、なンか不味いのか」
「簡単に言えば、世界が滅ぶわ。とはいえ、消失する、というわけではない。〝役割の統合〟を果たした魔法少女が増える、ということは、既存の概念が上書きされる、という事に他ならない」
「概念？」

まァたマッドチビァ小難しい言葉を。
って言おうとしたら、他の皆々様方ァなんとも思ってねェよォで。……これァ、一番学無ェのは私だわなァ。わかってたけど。……エデンも中退しちまったわけだし。
「たとえばだけど――貴女は、火、というものが、何色かわかる？」
「青。または深紅」
「ええ、そういうことよ」
「……何がだ？」
「そうね。貴女にはわからないと思うわ。たとえば今ここで火を付けても――」
マッドチビが、なんかの機械を使ってそこに火を灯す。
色ァ深紅だ。まァ、それがどーしたって話なンだが。
「これが、概念の上書き。元々の火は明るい赤とか橙とか、あるいは白よ」
「なんじゃそりゃ。どこの世界の話だよ」
「過去の世界の話。上書きされる前の世界の話よ」
……もし、それが本当だとして。

じゃァ、たとえば。

「全部の役割を統合した魔法少女が出てきたら」

「世界はその子の意のままになるわね。――それを世界の滅びと呼ばないのなら、誰も何も問題にしないのだけど」

「問題ありまくりだわな」

「だからこそ、私は魔法少女の撲滅を謳っている。世界の改変者に価値などない」

「自分で撒き散らしておいて酷いことというのだー！」

「ふん、その文句は神々にでも言っておけ。私をこの世界へ追いやったのは奴らだ」

≫役割の統合≪。

あの雨の中、光り輝くお嬢の姿。速さだけでなく、光の性質までもを手に入れたお嬢。

……最終的に、ＥＤＥＮの魔法少女ァ――全部が、そォなってくってことだ。

全員がそれぞれに多くの役割を担い、既存の概念が上書きされていく。思い通りに。その中で、消えて行く概念もあり――最後には。

「話が逸れたけれど、だから、ＥＤＥＮの動きは激化する。Ｓ級以下の魔法少女

は、創設者たちに守られて……危険な任務は組ませられないようになるでしょうけれど、その裏でSS級は酷使される。早く統合を果たせ、と――外ならぬSS級魔法少女の1人によって、ね」

「……ソイツの名ァ？」

「言ってもわからないと思うわ。裏に引っ込んでいた魔法少女だし」

「いーから、教えてくれよ。もしばったり会った時に名前わかってた方が有利だろ」

「……ま、いいけれど。そうね。その魔法少女の名前は――――」

――――ね。またけったいな名前だことで。

「それじゃ、解散よ」

「あァよ」

さてはて。

私ァここで、何を成し遂げられるのか――ってな。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1・2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ふゥ」
「お疲れさん、といったげるよ。疲れるだろう、師匠の相手は」
「マッドチビの相手ァまだ良い方だが、他のがな。クセありすぎっつーか」
「まぁ、どいつもこいつも封印措置を受けるような奴らばっかりだからねぇ。アタシらじゃ及びもつかないのばっかさ」
「ンなこと言って安藤さんだってすげー魔法使うじゃねェか」
「アタシのは、まぁあくまでS級としての意地ってもんさ。弄繰り回してるってのもあるけどね」
「弄繰り回してる？　魔法をか？」
「そうだよ。でなけりゃあんな生き物みたいな動きするワケないだろ？」
「へぇ。ンなことできンのか」
安藤さん。安藤アニマ。
マッドチビの弟子で、疑似魔法っつー、魔法少女達の魔法の劣化版みたいなのを発生させる機械だの武具だのを作り得るすげー人だ。
マッドチビの最高傑作って言われてるシエナの噴射機構も安藤さんの案だそォ

で。他、色んな疑似魔法を作ってる。苦い思い出でもあるルルゥ・ガルの【皇爛】や【隠涜】、【仙導】、ってな安藤さんの疑似魔法あってこそだし、私達がＥＤＥＮの魔法少女や魔物に使う【槌憶】と【幽拐】も安藤さんの疑似魔法の技術の賜物だ。

勿論その師匠であるマッドチビも十二分にすげぇんだけど、すげーの方向性が違うってーのかな。

「吸うかい？」

「……あー、いや。遠慮しとくよ。もう魔力ァ潤沢なンだ、わざわざクソ不味いモン喫んでまで、微々たる魔力を回復する意味もねェ」

「そうかい、残念だね。あっちのアンタのせいで在庫だけは沢山あるんだ。どうにかして消費したかったんだけどね」

「あー、まァ亜空間ポケットに入れとくよ。今度アイツにあったら渡しとく」

「……なんだい、随分と仲良さげじゃあないか。大嫌い、なんじゃなかったのかい？」

「……嫌いァ嫌いだよ。私の居場所奪ったやつなンだから。けど……なんつーのかな。アイツァ私じゃねェって、最近よォやくわかってきた。私はアイツから別たれ

た存在だけど……アイツの方が、私より異端だ。私も死ってな忌避する方だけど、アイツァ異常に嫌い過ぎてる。実ァ私じゃねェんじゃねェかってくらい、そこに差がある」

「だから、歩み寄れる、って？」

「さァな。……敵なのァ間違いない。アイツの、できるくせにやらねェって姿ァ見ててイライラする。私のよりももっと楽に殺してやれるのに、それを使うのをやめたアイツを、私ァ許せそォにない。……けど」

なンで、何だろうな。

アイツにァ死ぬほど仲間がいて、死ぬほど友達がいて、環境に恵まれてて、アイツを想ってくれてる奴があンだけいて。

でもアイツ、ずっと独りだ。

誰も心の中に入れてない。

見下してる、っつーとちょいと語弊があるけど、一線を引いてるっつーの？

なんか……高い所から、みんなを、私を含めた全員を見下ろしてる、みてェな。

夜の使徒とか関係なく、なんか感じるンだよな。アイツがまるで——この世界の

住民じゃねェ、みてェな異物感を。
「なァ安藤さん。精神体を治癒する方法ってな、無ェのか」
「精神体関連は師匠に聞きな。アタシは専門外さ」
「そォだったな。……ちなみにだがよ、意のままに操れる義足ってな、どォだ」
「それも師匠の管轄だよ。アタシはあくまで疑似魔法の専門家さ。あとは武器の類。……あっちのアンタは、そんなに酷かったのかい？」
「……あァ。なンで死なねェのかわからねェってくらいボロボロで、それ聞いたら、精神がズタボロだから上手く蘇生できるかわかんねェんだってよ。……私さ、それ聞いたら普通に同情しちまって。大嫌いだし、憎んでさえいるはずなのに……なンか、可哀想だなって」
「……優しい子だね、アンタは」
「そォかなァ。これを優しいって言うのァ、ちょいと違う気がする」
そォじゃ、ねェんだよな。
私が抱いてる感情ってな——そォじゃなくて。
「——もっと幸せでいて欲しかった。私から全てを奪ってった奴のクセにさ。……

もう、死にかけてる、なンて。もっと幸せで、もっと健康で、もっと――私を踏みにじった分の全部を持っててほしかった。……おかしィだろ。奪われた私より、奪ったアイツの方が――失ってる、なンてさ」

幸せってな、できりゃ均等であってほしかったよ。

私が失ったンなら、アイツが持ってて。アイツが失ったンなら、私に降ってきて。じゃねェと、私ァさ。私達ってなさ。

梓・ライラックってな――2人合わせても、失うだけ、ってことになっちまう。認めたくァ無ェよなァ。

「どォかしてンのァ自覚してるよ。敵の幸福を祈るなんて、これから死闘が始まるンだろォって時にやることじゃねェ。けどさァ。……やっぱり割り切れねェよ。アイツが死んで全部を取り戻すってンなら、私が出向いて殺してやりたいくらいだ」

「今、右腕が義手で、下半身不随で、体表面の左側に火傷、なんだっけ？」

「今回の一件で足ァ無くなったみてェだよ」

「……義足ね。わかった、ちょいと考えといてやるよ。師匠にも相談しておく。師匠もあれでいて妙に優しいというか律儀だからね、少しは考えてくれるだろう」

「あァ、ありがとな、安藤さん」
ホントは私がもっと幸せになりゃいい、って話なンだけど。
私の幸せってな、エデンに置いてきちまったから。そりゃお預けだ。
……もし、全てが上手く行ったら。
またお嬢達と……っとかって考えるのァやめるって何度も言い聞かせてるだろ、私。
あンまり期待すると、そォじゃなかった時の落差がでけェからさ。決別したンだ。離反したンだ。……あいつらァ、敵、なンだ。
「っよし、気持ち切り替え完了。安藤さん、ちょいと私ァ出掛けてくるよ」
「夕飯までには帰ってくるんだよ」
「……夕飯なんざ出た試しが無ェんだが」
「作ってほしいなら作ってやるよ。これでもアタシは2児の母でね」
「……いやいいよ。フリューリ草とか入れてきそうだし」
「入れないよあんなもん！」
あ、やっぱりアンナモノ扱いなンだな。

だよなァ。
正気を疑うトコの１つだモンな、アイツの。
このクソ不味い葉っぱむしゃむしゃ食うとか――マジでどォかしてると思う。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

「で？」
「で、って？」
「なンでお前、私達の拠点近くにいるンだよ」
「別にいいでしょ。私達がどこにいたって。私達は風の使徒。どこにいるのも自由よ」
ルルゥ・ガル。
っとにどこにでもいる奴だ。目撃例の上がり方が異様なンだよな。星の反対側とこっち側を秒で行き来してやがる。どンな手段つかってンのか知らねェけど、コイツもホントに得体の知れねェっつかなんつーか。

アイツが足落とさなきゃなンなくなったのもコイツが余計な茶々入れたからだし。
「……」
「なンだよ。ジロジロと」
「……貴女は、口調は似ているけど、あの野蛮人とは違うのだったわよね」
「ン。まァな。私ァアイツから別たれた存在でァあるけど、アイツじゃねェよ」
「みたいね。夜の使徒特有の臭いも感じないし。……うーん」
「何悩んでんだ？」
「いえ、貴女のあだ名をどうしようかな、と。貴女は野蛮人じゃないみたいだから、……難しいわね」
あー。
なンだっけ。コイツのあだ名ってな、ちびっこ、だっけ？　流石に安直すぎねェ？
私も考えるか。あだ名。別にあだ名で呼ばなくてもいいんだけどな。アイツァなんか、名前で呼ぶと殺すとき悲しすぎるから、とかいってあだ名呼びしてたみてェ

だけど、私ァそォでもないし……何よりアイツもう魔法少女殺さねェんだから名前で呼びゃいーのに、マジで意味わかんねェ。
「あー、余計な詮索ってなする気ァ無いんだがよ。その……アンタ、どっちが名前なンだ？」
「？」
「ルルゥ・ガル。名前ァどっちなんだって話」
「あぁ、それ。難しいこと聞くのね。魔法少女に名前はどっち、って聞いているようなものよ」
「？」
「スライムにスラとイムどっちが名前なのかしら、って。そう問うていると言っているのよ」
「……エ、ルルゥ・ガルってな種族名なのか？」
「ええ。だから、どっちが名前と言われても、どちらも名前かしらね。ほら、この前のカンコウとか、私達の神様にしてあったベルウェークとか。そういうものよ」
「あー」

オリジン種で、種族名で。
だから人間的なソレじゃねェのか。
なるほど。
「じゃァ呼称ァルルゥ・ガルでいいのか」
「別にいいけれど……そうだ、名前、つけてくれないかしら？」
「え。いやでも私、学が無ェからさ。あんまりいい名前とか付けられねェよ。魔物にとっての良い名前とかもよくわかんねェし」
「……貴女、可愛いわね」
「は？」
ん？　え？
今何を言われた？
「いえ……ほら、基準があちらの野蛮人だもの。比べると、ね？」
「あー。まァ、そりゃそォだな。それならまァ、悪い気ァしない。つかアイツ全然可愛くねーし」
「ええ、本当に。……ねぇ、貴女。今なら別の答えが聞けると思うのだけど……私

ときもちーことしないかしら」
「えっ！　い、いや、いいよ！　あ、なンだ、遠慮するよ！　私にァそォいうの早いっていうか、その、なンだ。実ァ私まだ13歳でさ、その、色々その……知ってァいるんだけど、む、無理があるっていうか」
「あはは！　……うん。決めた。貴女のあだ名は、純朴」
「――安直すぎねェ？」
「じゃあ貴女は私の事安直って呼ぶと良いわ」
「えェ……あだ名ってそォいうモンだっけ……？」
あァでも、ルルゥ・ガルってな基本的に安直な考えしてるから考えが読みやすい……ンだったか。あっちの私ァそォいうこと考えてたよォな。
私にァそォ思えねェってことァ、アイツが安直って事だよな。うん。
「ね、純朴ちゃん。好きな食べ物ってあるかしら」
「純朴ちゃん……って呼び方だと、私ァそっちを安直ちゃんって呼ぶことになるけど……」
「いいわよそれで。それで、好きな食べ物。何かしら？」

「いーのか。……えーと、まァ甘いものァ好きだよ。でもクリーム系じゃなくて、こう……果実みてェな、ほんのり甘い奴のが好きだ」
「林檎とかどうかしら」
「ん、割と好きな方だな」
「なら、ちょっと来てくれる？　……あ、これは騙すとかそういう話じゃないわ。純粋な善意……といっても伝わらないでしょうけれど」
「いんや、信じるよ。安直ちゃん、だもんな」
「そう？　嬉しいわ、純朴ちゃん」
なンだろう。
このヘンな雰囲気。ルルゥ・ガルってなこんなヤツだったか？
……でも、確かに、ずっと敵だったわけで。別たれてからもこォもがっつり話すことァ無かったからな。……なンか、意外っつーのかなんつーのか。
「こっちよ」
「ん、おゥ。今行くよ」
私達の目的に、魔物の駆逐ってな含まれてねェ。っつかルルゥ・ガル達とァ暗黙

の了解で戦わねェことになってるンで、そォバチバチする必要もない。
って考えると……なンだろ、こっちでの友達……みたいにァ、思えんのかな、って。
そんなことを、考えてみたり、して。

「ここよ」
「へェ、こんな場所があったのか」
連れて来られたのァ――なんぞ、果実の生った木がいっぱいある場所。
ウルフ種やレーヴァン種が多数いるけど、こっちをチラっとみただけで、特に何をしてくる気配も無い。
「元々は人間の果樹園だったのだけど、いなくなって放置されていたから、私達の休息地にしているの。それで、はい」
「ん」
ルルゥ・ガル……安直ちゃんが林檎を一つもぎ取って、くれる。

……え、普通に嬉しいけど。
「いいのか？」
「良く無かったら渡さないでしょ？」
「そりゃ確かに」
貰った林檎を――齧る。
うむ。
ふむ。
うむ！
「美味いな。甘すぎず、けど苦味も無い。後味もさっぱりしてるし、この鼻を抜けてく香りがすんげェ気持ちい」
「でしょう？　でしょう？」
「あァよ、こいつァ紛れもなく良い林檎だ。めちゃくちゃ美味しい」
ぱぁと顔を輝かせる安直ちゃん。
な……なンだ、コイツ。可愛いじゃねェか。つか、アレか？
……あ、でもなんぞ、一番でっけェウルフ種が近づいてきてるけど大丈夫か？

いやまァここまで仲良くなったンだ、もう攻撃とかしねェよパパっと飛行魔法で逃げるけどさ。……ちょっと身構えちまうのァ、許してくれる、よな？

「何？　今お友達と話しているのだけど……え、桃？　桃が採れたの？」

まァわかってた事だけど。

安直ちゃんァ、魔物と話ができる。いやまァ安直ちゃん自身がオリジン種なンで当たり前っちゃ当たり前なンだが、傍から見るとなンか、癒しの光景、っつーか。

……当たり前とか言ったけど、別に当たり前じゃねェか。オリジン種の中でも話通じねェのなんざいっぱいいるし。北方山脈の蛇とかな！　アイツ、今度会ったらギタギタにしてやる……！

「純朴ちゃん」

「ん」

「桃はどうかしら。好き？」

「んー、酸味のある奴ァ苦手だけど、甘いのなら好きだよ」

「じゃあ、半分っこしましょう。私が先に食べて、甘かったら、その半分を貴女にあげる。それでいいでしょ？」

「いーけど、いーよ。ンな毒見みてェなことさせねェから、一緒に食べようぜ。そっちのウルフ種……とか言っちまうと失礼か。名前あンのかな」
「私はボスって呼んでるわ」
「んじゃボス達も、別に特別扱いとかしねェでいーからさ。食おうぜ」
美味いモンァみんなで食った方が美味い。
これァあっちの私と意見の合致するトコだ。まァ戦闘や死関連以外の好みァ大体合致してンだけど。
「ちょっとボス、折角純朴ちゃんが……いえ、でも……」
「あー、無理言ったンならいいよ。2人で食べよう。多分だけど、気ィ遣ってくれてンだろ？」
「……ごめんなさいね。ボスは頑固で……」
「はは、なンか父親みてェだな。あの顔も、表情ァわからねェけど、娘が初めて友達連れてきたのを見守ってる、って感じだ」
「それは……そうかもね。生まれたての私の近くでいつも一緒に居てくれたのがボスたちの群れだし。そもそも私達魔物は、みんながみんな家族のようなものなのだ

けどね」

家族か。

……全部覚えてるけど、全部アイツの、なンだよな。

やっぱ敵だよ。敵、だけど。

「ね、純朴ちゃん。桃。食べに行きましょう。あっちの森だから」

「ん。おォ。行くか。ま、当たり外れってな付き物だ。すっぱくても文句ァ言わねェからよ」

「そういう理由じゃなくても——半分こは、してみたいのよ。だめかしら」

「……いーけどよ。なンだよ、安直ちゃん。私があっちの私と一緒だった時ァあんなにもお姉さんぶってたのによ。なンか……すげー年相応っつーか」

「ああ、それ。……説明が難しいのだけど、あの野蛮人の前だとどこか調子に乗ってしまう、というか。口が軽くなる、というか。私がね、それなりの年月を生きているのは事実なの。今年相応と言ってくれたけれど、この身体は造り物で……本当はもう長い間を生きているのよ。だから、お姉さん、というのは事実なの」

「あ、そォなのか。そりゃすまん。なンか……えーと、敬った方がいいか？」

「今更でしょ、そんなの。それで、その事実を抜きにしても、あの野蛮人の前だとどこか調子が狂うのよね。私の考えていることと全く同じに動いてくるから、湖面に向かって喋っている、みたいな感じで……」

あァよ、あン時の私もおんなじこと考えてた。

……まァ私ァもう安直ちゃんにそンなコト思わねェけど。いんやさ、だったら安直ちゃんってなあだ名ァどーなンだ感ァあるんだけどさ。

「ま、あんな野蛮人の事は置いておきましょう。折角の楽しい時間が台無しだわ」

「だな。行くか、その美味い桃っつーのを食べに」

「ええ」

……なンか。

私ァ別に、初めての友達、ってわけじゃねェけどさ。

失ってばっかのトコに——あァ、良いモン見つけちまった、って。そォ思ってるよ。

「……別にホントに夕飯までに帰ってこい、なんて思ってないけどね。なんだいアンタ、そんな泥だらけで」
「ちょいと、魔物流の遊びってので本気で遊んできただけだ」
「そうかい。……ルルゥ・ガルだね？」
「わかンのか？　あ、っつかそォか、最初にルルゥ・ガルの名前出したの安藤さんだもんな。知己なのか？」
「少しだけね。まぁ、そんなことはいいんだ。師匠がね、ようやく大浴場を作り終えたって自慢したそうだったから、丁度いい、使ってきな」
「へェ。……大浴場？　マッドチビァ宙の莽に行くためのなんぞかを作ってたンじゃねェのかよ」
「どうにも時期が合わないとか、磁気が合わないとか、よくわからない事呟いてたけど、そういうのさっぱりさせるために浴場を作りたかったらしいよ。全く、アタシの爆炎剣を湯沸かし器に使うなんてどうかしてるとしか思えないんだけどね」
「爆炎剣って、疑似魔法【業焔】の？」

「そうさ。劣化版とはいえアタシの魔法の威力が込められた剣を、師匠は湯沸かし器に使ってる。ホント、弟子の気持ちとか考えられない師匠だよ」

いやソコじゃなくて。

……危ないだろ。えー。私そこ入るの？　こわ。

「――アニマ。素敵ね。師匠のために実験……試験者を用意してくれるなんて。さぁ梓、エデンの大浴場とやらに負けない私の大浴場をたんと味わいなさい」

「あァそこに対抗心持ってンだ」

「そ。ここに天才彫金師がいるというのに、私に頼まなかったのよ、エデンは。酷いと思わない？」

「……その時もうマッドチビァ雲隠れしてたンじゃねェのかよ」

「それは気付かない方が身のためよ」

「もう遅いってか？」

……どーしよっかなァ。

私、安直ちゃんトコに鞍替えしよっかなァ、コレ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

67・藍夢沙伏頼頭土倍地羅運動野伊豆.

初めて自分が意識を持った時にあったのは、深い海のような達成感と――恐ろしいまでの、虚脱感だった。

造物島・クルメーナ。【鉱水】の持ち主によって如何様にも姿形を変えることのできるその島の地下で、私は、生まれた。訪れたのは絶好の機会。

梓・ライラックが暗がりにて単独になる、などという――こちらの疑似魔法を考えるに最高の機会。安藤さんが渡してくれた人格分割の紋章を媒介に、私達……というかこちら側の陣営はその秘法を使用。人格分割型戦闘用ガーゴイル・死得無(Ashes)で既に試験を終えていたマッドチビは、何の失敗も無くその人格の一部を切り取る事に成功。

先んじてＥＤＥＮで生まれていた私の肉体の中に、切り取られた仄かなる精神体を入れて――新たな梓・ライラックとした。

それが、私。

元はアイツの片腕で――紋章が吸い取ったアイツの分割された人格と、いくらか

の魔物の精神体を混合することで作り上げられた合成獣（キメラ）。
自覚はある。その身体、この存在そのものが本来許されざるものである、という、禁忌の自覚。
そして――梓・ライラックは本来私だった、という、何か確信めいた欲求。
今じゃアイツにも勝る魔力量と身体能力があって、アイツの知らない事をたくさん知っていて。
けれど――私は、アイツの場所には戻れない。
取り戻したくはある。取り戻したいという気持ちは、勿論、十二分にある。
同時に。
世界を救わなきゃいけねェってさ。叫ぶんだ。
「梓。梓？　大丈夫？」
「ン――あァマッドチビ。どォした。なんか用か？」
「どうした、じゃなくて。貴女、何か泣きそうな顔していたじゃない。何かあったのかとおもってね」
「ヘェ、珍しい。マッドチビがそォいうの気にするっつーのァ、明日ァ槍でも降る

んじゃねェかな」
「そ。余計な気遣いだったというのなら謝るわ」
「いんやさ――多分、泣きそォになってた。だから、ありがとよ」
「ええ。……やっぱり、気になるかしら？」
「何が？」
「エデンの様子」
「そりゃァ、気にならねェワケねェだろ」
「じゃ、見に行く？」
「……もう用ァ無いんじゃなかったのかよ」
「そ。ＥＤＥＮはもう用済みよ。けど終の因にはまだ利用価値があるし、エデンには面白い魔法を扱う子も多い」
「……また殺しに行けってか」
「そうは言っていないわ？　潜入任務、という奴よ。危なくなったら助けてあげるから――少し学園を見てきなさい。勿論変装をしてね」
「バレたら殺し合いになンだろォがよ」

「バレなきゃいいのよバレなきゃ。前に言ったでしょ。私、こういう馬鹿な行為好きなのよ。こんなこともあろうかと変装道具一式は用意してあるし、最悪の場合ルルゥ・ガル経由で魔物の群れでも集めて貰うから、捕まっても助け出せる。どうかしら？」

「計画ァ？」

「進行中だけど、貴女大詰めの時以外要らないし。それとも今から魔工学を学ぶ？」

「……遠慮しとくよ」

「なら、どう？　前は短期の――今回は、少しだけ長期の学園生活。貴女はまだ幼いのだから、丁度良く楽しめるんじゃないかしら？」

なんて。

悪戯っ子みてェな顔で聞いてくるマッドチビに。

……私ァ、頷いてしまったのだった。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

「ようこそ学園エデンへ。今期入園生は3人。リキュア・アールレイデさん、李・理央さん、ミズメさん。貴女方は同期という形になります。仲良くお願いしますね」
「はい。よろしくお願いしますね、皆さん」
「ああ。魔法少女……なんだか、昔の夢を掘り起こされたような気分だよ」
「……はい」
一度ァ聞いた、けれど今回ァ同期のいる入園。
今の私の見た目ァ梓・ライラックとは似ても似つかぬソレだけど、身体能力や魔力量が低下したワケじゃねェ。から、ちゃんとセーブしねェとバレる。何より私ァ魔物に襲われねェからな、あんまし前に出るわけにゃいかねェ。なンで、遠隔魔法少女って事にしてもらった。
今のＥＤＥＮァ早々危険なことさせられねェって話だけど、万一もある。
救いがあるとすりゃ、アイツが療養中……つまり隔離塔にいるンでバレる心配ァあんまりないってトコかな。アイツめちゃくちゃ鋭いから多分変装してても対面したらバレる。それが無いのだけが救いだ。
「今から学園エデンの案内に移りますが……その前に、お互いの魔法の紹介をして

おきましょうか。魔法というもの自体が初めてでしょうし、もし暴発してしまったら大変ですからね」

「ええ、わかりました。私。リキュア・アールレイデの魔法は【転候】。極々限られた範囲内でなら、天候に作用し、それを変える事ができます。攻撃性の少ない魔法ではありますが、天候を制御するオリジン種の多く出現する昨今であればＥＤＥＮのお役に立てると思います」

なンか売り込んでンなーこの子。

って思った。まァアールレイデ家……お嬢と同じな家名な辺り、対抗心だのなンだのもあるンだろうけど、明らかに今の学園でどォするか、じゃなくて、軍事部に入ったらどォ役に立てるかの紹介って感じだ。

そのお嬢ですらまだ学園生だっつーのに。……まァ、もう卒園しちまうんだったか？　確か八回生だよな。留年しなけりゃ確実にどっかの軍部に入る。……そォか、お嬢と学園生活送れるのもここ逃したらもう無いのか。

その辺マッドチビがわかっててくれた――ってこた無さそうなンだよな。

あの人そォいう気遣いとかないし。優しくて律儀なのァ認めるけど、それよかこ

の変装道具がどこまで通じンのか、って方を気にしてそォだ。作ったモン試したくて仕方ないって人だし。

「李・理央。この辺りじゃ珍しいと思うけど、北方の生まれだよ。魔法は【気烈】。どういう魔法かは、見てもらった方が早いかな。随分と長い間魔法だと思って使ってなかったから、魔法だっていう自覚もないんだけどね」

「……長い間？」

「お、興味を持ってくれるんだね。そう。私は北方のとある村で気功というものを教わっていてね。それは結局特別な力なんかじゃなく、武術の一つだったんだけど……いつしか本当に気功が放てるようになっていたんだ。師はそれを努力の賜物だと言ってくれたから、長い間そういうものだと思って使っていたんだけど、ある日村を大きな蛇の魔物が襲ってね。村は壊滅し――けど、私一人が生き残った。その蛇を撃退することで、ね。その時に気付いたよ。これは気功なんかじゃなくて、遠くに伝え聞く魔法なんだ、って」

あァ話長い子ね。了解。

クセ強いなァ2人とも。いんやさ引っかかっちまった私も悪いけどさ。

つかあのクソヘビやっぱ悪さしてンじゃねェか。っとに、私達が行った時も丸呑みにしてくれやがって、あのベトベトでくっせェ腹の中、叩き切ってやりゃよかった。

「貴女は、どんな魔法を使うの？」

「君はどんな魔法を使うのかな？」

「……【致息】。呼吸を必要としているなら、必ず殺せる」

「おお……凄い魔法だね」

「ええ、多くの場で役立ちそうな魔法です」

完全なる嘘だけど、確かに似た効果があるのでコレにした。

そもそもの話をするなら、私は魔法少女ですらない、という部分も変装道具とやらで完全に隠れている。この喋り方も。ほんとァこォいゥ喋り方なンだけど、勝手になんか根暗な感じになンだよな。毎度思うけど、マッドチビの魔工学とやらァ意味わからん。製作にァ安藤さんと、さらにァ【合成】の奴が関わってるらしく、結構なすげェ機構なンだと。

できれば壊さないで欲しい、とのこと。どォなったら壊れるか聞けなかったン

で、何やったら不味いのかわからなくて怖い。二個目ァ作れるか怪しいとか言ってたし。材料がなんぞ特別なンだと。ンなもんもっと大事な時に使えよ、って思う。

それこそＥＤＥＮに潜入する時とか……って、そォか。もうＥＤＥＮァ用済みだから、要らなくなったってことか？

「ミズメさん、行きますよ」

「緊張しているのかな。大丈夫、ほら、手を握って」

「……ん」

手を――握る。

義手だけど、人間の肌の質感の再現された手。私の義手っつか右腕っつーのァどんだけ蘇生しても生えてくる事ァないらしい。元のアイツがそォだからな。まァいいよ、これァこれで、っつか色々便利だし。

……アイツに言われた、ＭＹＴＨＯＳの非人道的な機構。うん、それについちゃ私も事実知って外したくなったから、マッドチビに言ってそいつらァ解放してもらった。今この義手に入ってンのァちょいと違う精神体だ。

私だって真っ当な倫理観っつーか、他者を自分の為だけに利用するのァ良くない、

みたいな道徳心ァある。……だから、仲間を作ろォとした、って言われて……やっぱり、色々思っちまった。そォだよなァって。無理矢理さ、私の仲間になって。それァさ、そいつァさ、ホントに仲間なンだろォか、って。

マッドチビ達ァ気にしねェみたいだし、安藤さんですら使えるものァ使え精神だからあンま意見できねェんだけど、やっぱ違ェよな、それァ。

やらなきゃいけねェ事の前に犠牲ァ必要だってのァ理解してる。

でも、必要ないことの前に犠牲っつーのァ要らねェよな。

「こっちが教室です。AからDまでのクラスがありますけど、特に優劣で決まる、とかではなく、どの時期に入ったか、で決まりますねー。授業も常に教室で受けるわけではなく、初めの内は移動教室も多いと思うので、覚えられないようでしたら地図を持つか、他の生徒さんに聞きましょう！」

一瞬、窓に隔離塔が映った。

……あそこにいる、ンだよな。っとに悪運の強い奴っつーか、助けた身だけどさ、あンなンで助かるのァどーかしてるって。私ァその痛みを知らないけど、同じよォにフリューリ草の花弁で魔力補給したことあるらしィニヤニヤ丸眼鏡ァ、想像を絶

する苦痛、って言ってたし。あのニヤニヤ丸眼鏡が言うんだから相当だぜ。
それを乗り越えて。ちゃんと仲間が来てくれて。
ちゃんと、助かって。今頃お嬢達とお菓子パーティでもしてンのかねェ――。
「あら？　フェリシアさん。もしかして後ろの方々は、新入生、ですの？」
――。
「あ、フェリカさん。はい、そうですよー。しかも、妹さんも来ています！」
「妹？　……へえ、もしかして、アールレイデですの？」
「はい、フェリカお姉様。そのお噂はかねがね聞いております」
「ふふ、少し間が開きすぎていて、姉と呼ばれるには……な気がしますけれど。これからは同じ魔法少女として、よろしくお願いいたしますわ。軍部の方にはアムリタもおりますので……」
「はい。アムリタお姉様にもご挨拶させていただくつもりですわ」
「それが良いでしょう。ああ、申し訳ありませんの。こちらの事情で引き留めてしまいまして。では、どうか楽しいエデンでの生活を。私は用がありますので、この辺りで失礼させていただきますわ」

ぺこり、と。
お辞儀をして、去っていく――去っていこうとする、金髪お嬢様に。
「あっ……の……」
「？」
「……あ、いえ、なんでも、ないです」
思わず声をかけてしまった。
いやいや。
いやいやいや。
私。少しァ自制しろよ！　無理だろ！　なンて話しかけるつもりだったンだよ！　なンて言ってもバレかねねェだろォが!!
……そォだよ、今の私ァ梓・ライラックじゃなくて、誰でもねェミズメなンだ。しっかりしろ。今の私にァ、誰との関係性も……無い、ンだよなァ。はァ。
「……貴女、お名前は？」
「えっ……あ、えと」
気付いたら、眼前にお嬢の顔があった。

うー。うー。

私だよ、お嬢、って。言いてェ。言ったら殺し合い確定だし折角の機会があんまりにも勿体無いけど……お嬢にこれ以上嘘吐くのか、私。あの短い間ですら騙しといて……これ以上、これ以上……！

「あっ、あっ、あら？　泣かせてしまいました……ごめんなさい。私、もしかして圧があったりするのでしょうか……」

「大丈夫ですよ、フェリカさん。ミズメさんも。初めての場所で緊張するのは誰でもあることです。大丈夫ですか？　自己紹介できますか？」

「――大丈夫。……ミズメ」

「はい、よろしくお願いしますわ、ミズメさん」

いんやさ。

なーに泣いてンだ私。もうそろ14歳だぞ。子供じゃねェんだ、ンなボロボロ涙流すとか恥ずかしィにも程がある。

あー。あーあー。同期の2人にもやべー奴だって思われたってコレ。いややべー奴なのァ間違いねェんだけどさ。

……お嬢。金髪お嬢様。フェリカ・アールレイデ。
私ァ――。
「貴女、私の知っている人に……どこか似ていますのね」
「!?」
「ああ、いえ。申し訳ありませんわ。あんまり刺激してしまうのはダメですのね。それでは、今度こそさようなら、皆さん。次に学園内で出会いましたら、その時にはゆっくりとお話いたしましょう」
では、なンて言って。
お嬢ァ去っていく。
……わかる、モンなンだなァ。
それが――今、すっげェ嬉しいのァさ。ダメなことかね。私ァ結局お嬢達の敵なのに――。
「大丈夫ですか、ミズメさん」
「ミズメ、涙は止まったかな」
「ミズメさん、ごめんなさい。お姉様は悪い方ではなくて……」

あー。

まず、こっちだな。

私の嬉しさとかァ、まァ、後々噛み締めるとして。

「……大丈夫。ごめん、心配してくれて、ありがとう」

「いいんですよー！　それじゃ、案内再開しますね！」

「大丈夫。大丈夫だよ、ミズメ」

「ええ、大丈夫です。私達が貴女を守ってさしあげますからね」

……アレ。

なンか――なンか、想像してた対応と違う、よォな？

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

寮の部屋に寝転がる。

無駄な散歩ァしない。して、また知り合いに遭ってボロ出すの怖いってのと――

なンだ、やっぱりここに帰ってきた、って思いが……ちょいとニヤけちまう。

ミズメ、なんて少女ァいない。いないし、今日会った人全員騙してて、これから会う奴らも全員騙してて……最後にゃ敵になる、障害になるだろォ存在だってのに。

なんか、楽しかったなァ。

「ん？」

ノックされた。

なんだろ、こんな時間に。まァ魔法少女っつーのァ寝ないのも多いから、同期あたりかなーとか思って。

油断して、ドアを開けて。

「よォ」

「――ッ!?」

その車椅子姿に、思い切り飛び退いた。

一瞬で色々考える。もう使うか、緊急脱出機構。それとも魔物？　いや、コイツを黙らせちまえばいい話――。

「まァそォカッカすンなって。ほれこれ、入園祝い」

「……は？」

渡されたのァ――なんか、甘い匂いのする箱。
でかでかと書かれているのァ、PARLER（パルリ）・MER（ミラ）の文字。
「本店見つけたのかよ！」
「オイ大声出すンじゃねェよ。見つかるだろ。俺が抜けだしてきてンの自体結構無理してンだから」
「いやだってお前、パルリ・ミラつったら、EDEN中探しても見つかんなかった伝説の……」
「暴走繭にな。聞いたら、店主と懇意だってンで、ちょいと見繕ってもらった」
「ヘェ……じゃ、なくて」
なんだ、コイツ。
何しにきやがった。入園祝い？　何言ってやがンだマジで。
「いんやさ、俺ァもう当分隔離塔で過ごすし、学園生活ってな十二分に謳歌できたとァ言えねェからよ。せめて楽しんでもらおうと思ってさ」
「……何が狙いだよ」
「ハハ、面白れェこと言いやがる。馬鹿が、お礼に決まってンだろ。助けてくれて

ありがとよ。今俺が生きてンのァお前のおかげさ。だから」
「だから――見逃してやる、ってか？　……馬鹿にしやがって」
「卑屈になンなって。お前、どうせ梓・ライラックでしかないンだろ？　ならちゃんと学園生活を楽しめるはずだ。俺ァどーにもきゃいのきゃいのってのがきちィからな、お前なら、梓・ライラックに学園生活を楽しませてやれンだろ」
「……何言ってるかわかんねェよ」
「ハハハ、俺もそォ思う。……この事知ってンのァ、俺と冷静メイドだけだ。冷静メイドも普通に接してくれるらしィんで、そこんとこァ大丈夫。他のにァ言ってねェからバレねェよォ注意しろよ」
「お前、わかってンのか？　私達ァ魔法少女の精神体抜いて魔物の精神入れるよォな奴らだぞ。私が来たの分かったンなら、とっとと追い出せよ」
「馬鹿が、やる気も殺意も無ェ、学園生活楽しくて仕方ねェって顔してる女の子にンな仕打ちできる奴いるわけねーだろ」
「女の子って……」
意味わかんねェ。なんなんだコイツ。

……ホントに。

「いいのかよ」

「お嬢とかポニスリを盗っちまって、とか言う気か？　ケケ、やれるモンならやってみな。アイツら、お前が思ってるより弱かないぜ。俺も最近ァ圧倒されてばっかさ。案外、俺もお前も掌の上で踊らされちまうかもしれねェな」

「……」

やっぱり、嫌いだ。

こいつとァ考えが合わねェ。嫌い。嫌い。

「――生きてて良かった、なンて顔してやがる奴に、ありがとう以外の気持ち抱くわけねーだろ。精々ヒトの生活ってなを楽しみな、中学生。どうせ一年も居られねェんだろ？　マッドチビ含め、封印措置の魔法少女達がなンかやってンのァ知ってンだよ。だから、楽しめるモンァ楽しめる時に死ぬ気で楽しめ。俺ァもう十分に楽しんだ後だからな。こっちの余暇ァお前にくれてやる」

「十分に楽しんだ後って、お前だってほとんど……」

「お前がなーんにも知らねェってだけさ、アズサ。ああいや、今はミズメ、だった

か」
「お前の方が何にも知らねェだろ。……この世界に今起きている事も、何にも」
「ハハ。かもしれねェけど、俺のこた俺が一番知ってるって話さ。んじゃ、まァもう園内で会うこたないだろォから、これだけァ言っとくぜ、ミズメ」
「なん、」
銃声。
気付かなかった。咄嗟に義手を構えて――。
「ハハハハ、クラッカーって奴だ！　初めて見るだろ。驚いたか？　ハハ、俺もちょいと市場区画のおばちゃんに頼んで作ってもらった試作品でよ、結構出来良くて驚いてるが――おわ！」
「馬鹿ですか、と言っておきます。梓様。今の音で複数人に気付かれました。強制退去です。――では、ミズメ様。良い夜を」
「じゃァ気ィ散らすためにもう一発パーンってな！」
「義手取りますよ」
「ちょ、馬鹿無理矢理引っ張ンな痛ェから！　取るにァコツがいンだよ！」

……っとに、嫌いだ、アイツ。

「ミズメ！」

「ミズメさん！」

「……？　どうしたの、そんなに、慌てて」

「どうした、って……この階で不審者が現れた話、知らないのか？」

「学園エデンに侵入するというだけでも凄まじい手練れ。けれど、ミズメさんに大事が無くて良かったです」

「……うん。ありがとう」

本当に。

なンでアイツ、あンな元気なンだろォな。

しんみりしてた私が馬鹿みてェじゃねェか。

……馬鹿、なンだろォなァ。

私もアイツも。あとマッドチビも。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

授業が始まった。

つってもまァ、踏襲もいいトコだ。教本の内容をおさらいするだけ。

でもなンだ、ＥＤＥＮの改正ってなエデンにも及んでいるらしく、特に近接魔法少女ァ突貫して突っ込め、みてェな事を遠回しに書いてた部分が無くなってたり、魔力が切れたら肉壁になれ、みてェなコト書いてあったトコが丸々削除されてたり。

……今考えると酷ェ教本だったなァ、オイ。

「ミズメ」

「……はい」

「魔法少女にとって一番大切なコトは、なんだ」

「……死なないで、みんなと協力して、魔物を倒す事、です」

「うむ。それでもよろしい。では――」

変わったコトってな、やっぱりコレかね。

どォしても効率的な死っつーのァある。仕方ない犠牲もある。けど、とりあえず大前提として、死なないで。ちゃんと協力して、魔物を倒す。ってのが、魔法少女

にとっての一番大切なコト、になったらしィ。まァ魔物ってな魔法少女の因子が欲しくて来るからな、そこァ仕方ない。安直ちゃんも別にそこについて魔法少女に恨みがあるとかァ思ってなかったみたいだし。

自然の摂理って奴さな。食おうとしてンだから、殺されても当然、みてェな。たァ言え魔法少女側から魔物をどォこォって事ァないンで、対等な関係ってワケじゃねェんだが。

魔法少女、ねェ。

色々知っちまった身からすると、これほど異質な存在ァ無い、って感じだ。あのニヤニヤ丸眼鏡を始祖として、創設者たちが築き上げた魔法少女の学園エデン。国家防衛機構ＥＤＥＮ。

なんつーか。

利用されるだけ利用されてンのに、それになーんにも気付かねェで、それが当然みてェに笑いあってて。

ちょいと、憐れっつーか。

可哀想だな、って。そォ思うよ。

「――そして、近年魔物の動向が激化している。特にイオルー、オリジン種の活動が激しい。そのため学園は魔法少女の戦闘力向上及び自分を守るための術、という部分に着目していて――」

「――そのため、創設者の１人であるビーファン殿が、特別に――」

「――以上だ。何か質問のある者はいるか？　……いないな。では、授業を終える。移動教室のある者は忘れず行くように」

一度指名された後ァなーんもなく。

まァ、ぼけーっとしてて、授業が終わった。

次ァ、実技か。

……ちゃんとしねェとな。

「こんにちは」

「……はい」

「名前は、ミズメ。合ってる？」

「……はい」

「次の、合同実技。実力者と、初心者。組むことになった。私は、シェーリース。

よろしくね」
「……はい」
どーンな采配してやがンだあの先公。
確かに私ァA級認定されたよ。遠隔の中でもチャージほとんど必要ない奴だし、それなりの応用力見せたンで、あと魔力量がそれなりなンで。
だーからってなンでいきなりS級と組ませやがる。しかも背中メッシュ。
……背中メッシュか。あの日。
ホートン種のせいにして、色々やったあの日、あの時に……【光線】で脚を抉られた背中メッシュを殺して。……それ自体ァ、別に後悔してねェけど。そっから……魔物の精神体入れて、仲間にしよォとして。
もしあそこで止められてなかったら――コイツの中身ってな、【槌憶】で作り変えられた魔物、になってたワケで。
「？」
「……いえ。ごめんなさい。今、行きます」
「謝らなくて、良い」

やっぱりダメだな。

仲間を作る、ってな――私ァもう、無理かもしれねェ。ごめんなマッドチビ。なんぞ、まだまだエデンにァ面白い魔法持ってる子がいるから、みてェに言ってたけど。

私にァ――そォいう対象にァ、見れねェや。ほんと、ごめん。

「魔力。チャージの仕方、わかる？」

「……はい。全身を、巡る魔力を、感じて、集中したい所に、意識して集める。ですよね」

「うん、そう。大丈夫そうだね。じゃあ、お手本を見せるから。次に、使ってみて」

「……はい」

先日尖り前髪が両断した修練塔。それも直ってる。いやァマジでＥＤＥＮの施工班ァ仕事が早ェよな。マッドチビじゃない方のマッドチビがやったンだろォけど。

しっかしこの変装道具、ちょいと億劫になってきたっつゥか。自分で喋ってて早くしゃべれよコイツ、とか思っちまうっつーか。

まァ背中メッシュも喋るの遅い方だから、噛み合ってるっちゃ噛み合ってンだけどよ。これが太腿忍者とかだったら大変そォだ。

「【神鳴】」

「――――！」

とか考えてたら、背中メッシュの魔法が降ってきた。

近くで見るとマジで威力やべェな。いつもァ空に起点置いてそっから落としてるはずだけど、今回ァ屋内ってこともあって威力抑えめ。その上でこれだ。肌を焼く熱量と、ピリピリ来る紫電。

そう、【神鳴】ァ屋内じゃ使えねェ魔法だったはずなンだけど、練習して使えるよォになった、とかで。いんやさ、私の知らない間にみンな色々できるよォになってンだなァ、って。なンか保護者みてェなコト思っちまったりして。

「やってみて」

「……でも、【致息】は、相手が、生物じゃないと」

「大丈夫。修練塔の、人形は。そういう魔法にも、対応できる」

「……わかりました」

そォなのか。

結局アイツだった頃って修練塔ほっとんど使ってなかったからあンま知らねェんだよな。お嬢達とちょいとやったのと、尖り前髪に殺されかけたくらいか？

あとァまァ、疑似ホートン種の件でちょろっと行ったか。……あン時あと一歩でも修練塔に近づいてたら、あの【青陽】とか言うのに消し炭にされてたンだよな。っとに危ねェ。

さて、考え事してねェで――やるか。

想像すンのァいつも使ってる銃。魔力っつー名前の銃弾を手のひらに装填して、狙いを定めて――殺す。

私の魔法、とでもよぶべきモンァ、【致息】なンてモンじゃない。息を止める、詰まらせる、なんて効果じゃねェ。もうちっと怖いっつか、【即死】に似た魔法だ。似てるだけで【即死】じゃないンで即座にァ殺せねェんだけどさ。

でもまァ、似たような効果が――人形に現れる。

人形。

内部構造を人間に模してあンのか知らねェけど、殺した人形ァ数秒経って――ば

たん、と倒れた。
「うん、いいね」
「……ありがとうございます」
いいのか？
これ、何が起きたのか、とかわかる仕組みになってンのか？　いやなってたらやべェんだけど。
「チャージの速度も、狙いも良い。即戦力」
「……はい」
「昇級試験は、一年先だけど。これならすぐに、S級になれるよ」
「……ありがとうございます」
一年。
その先にァ、いねェなァ、私。
期日ァわかってる。完璧にじゃねェけど、だいたいこのあたり、っつーのァマッドチビから明示されてる。
それでも。

……まァ、入園祝いも貰っちまったし。
「SS級、SSS級。一緒に目指そうね」
「……はい」
あんまりしんみりしてねェで、この状況を楽しませてもらいますかね。

遠《text:s1・2》吠えは遙か彼方に《text》

68・藍迂遠斗塔羽生阿番食和絵都・／地番食和絵都負不地出土初琉微鍬家都・／殊蟻・

「――そこまで！」

「……！」

「はっ、はっ……」

今日の授業ァハナから実技。それも、身体強化のみを用いての組手っつー、B級以下のいない授業だ。私ァこんなんがあるって知らなかった。お飾りB級、お飾りA級にァ知らされない授業って事だろう。まァお飾りA級になった後すぐにクルメーナへの遠征任務だったから、アイツァ知ってんのかもしれねェけど。

で、お相手ァ李・理央。同期の奴だ。

北方で気功とか言うのをやってたってだけあって、目も良ければ筋肉の使い方も上手い。私だってそっちの達人ってワケじゃねェ、死ぬほど底上げされて爆上げされた身体能力と魔力量に物言わせてるだけだ。だからあンまし多くを語れるってワ

ケじゃねェが、これァ強い魔法少女になるだろォよ、って感じ。
「ふぅ……負けたよ。ミズメ、強いね」
「……いえ。その、魔力が」
「多いだけだ、って？　ふふ、私の目は誤魔化せない。君は要所要所でしか魔力を使ってないし、こっちの攻撃を見てから動いて、ちゃんと避けている。相当戦闘慣れしている……そんな感じがするよ」
「……いえ、ホントに、その」
「本当なら、センスの塊だ。これからも一緒に鍛え上げて行こう！」
「……はい」
こっえー。
鋭い奴しかいねェのかここァ。
そりゃ戦闘慣れァしてるよ。アイツだった時を含めて、アイツ程じゃないにしても死線ァくぐってるし、アイツより多くの魔法少女を相手にしてきてる。魔法少女ァ魔力を感知できる分魔力の動きに目がつられやすいからな、そォいう騙しも使える。

つったって今回ァそんなの使ってねェ、ただの動体視力だけの組手だったし、引き分けって形に持ってったつもりだったンだけど……理央からァ、わかっちまってたみたいだ。

「貴女」

「……はい」

「ああ、そんなに委縮しないで？　えーと、ミズメ。ちょっと私とやってみない？」

「……え」

そう声をかけてきたのァ――創設者が１人、ビーファン。本来の【隠涜】の使い手でありながら、もっとも気を付けるべきァその魔力量。隔離塔程たァ言わねェがそれなりに固いはずの中央塔の壁を殴り壊したり、終の因や始の点の迷宮の主を殴り飛ばしたりして調伏したっつー、マジモンのやべー奴。アイツがなンてあだ名付けたのか知らねェけどどーせ暴力娘とか殴り娘とかそンなんじゃねェかな。

それと、組手。

こえーよ。気付かれてねェみてーなのァありがてェけどこえーよ。変装道具壊れ

るンじゃね？　壊れた瞬間修羅場も修羅場だぞ。

「……いえ、その、怖い、ので」

「そっか。そうよね、ごめん！　それじゃ、今日の授業はここで終わり！　各自復習と、修練塔で出来なかった部分の鍛錬をしておいてね！」

助かった。

……いや。真面目に。

変装道具ぶっ壊されンのが今んとこ一番マズいからな。だからこその遠隔魔法少女でもあるわけで。

あァそうそう、そこも変わった点なンだよな。

遠隔だろうが近接だろうが、余剰魔力ある奴ァ身体強化ちゃんと覚えて護身できるよォになりましょう、ってのが今のエデンの方針。だからこんなことやらされてる。

ちなみにリキュアみてェに最初から得物持ってる奴ァ別クラス。流石に剣と拳じゃァな。怪我しちまうし、させちまうし。

私の本来の得物ってなると銃なンだが、流石に持ってる奴ァいなかった。

藍迂遠斗塔羽生阿番食和絵都. / 地番食和絵都負不地出土初琉微鍬家都. / 殊蟻.

「それと、ミズメ」
「……はい」
「貴女、本来の武器は拳じゃないでしょ。弓とかそういう狙いを定めるもの、って感じがする。もし本来の武器があるなら、早めに言ってね。そういうのが得意な先生に任せるから」
……こーわ。
ダメだな私の演技力じゃ。マジの達人ァ騙せそォにない。
なンか良い言い訳考えとかないと。
誰かに相談……したいが、誰もいねェ。一旦拠点に帰るか？　……どォやって？　結構遠いぞ。
あるいァ魔物に手紙を届けてもらって安直ちゃんに安直な考え出してもらう、とか。……いやいや、安直ちゃんが魔法少女の武器事情をわかってくれるたァ思えねェ。
うーん。
「……大丈夫です」

「ん、それならいいわ！　じゃ、ホントのホントに解散！」
「……はい」
あと、知り合いってーと。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

「お前さ、この前あンだけ俺に色々言っといて、よく来れたな。俺がこっそり行くより目立つだろ」
「だから窓からきたンだよ。つか、疑似【隠涜】で隠れてるから大丈夫だ」
「疑似、ね」
「……なンだよ」
「いや？」
こいつに、なった。
……チクショウ、なンか仲良いみてェで嫌だな。あと馬鹿だな私。今結構な情報漏らしたぞ。

藍迂遠斗塔羽生阿番食和絵都. / 地番食和絵都負不地出土初琉微鍬家都. / 殊蟻.

「俺の声も外にァ漏れねェのか？」
「あァ、大丈夫だ。……で、なンだが」
「あァさ。相談と。なンだよ」
「……言い訳を、一緒に考えて欲しい」
「はァ？」
いや。
いや。
なァ私、冷静メイドに頼めばよかったンじゃねェか？　そっちのが丸く収まったンじゃねェか？
こいつに聞いたって、私の考え付く以上の答えっつーのァかえってこねェんじゃねェか？
「お前も知っての通り、私本来の得物っつーと拳銃とSRだろ。でもそれが使えない。使うのお前くらいだから」
「あーな。で、普通に拳で戦ってたら見抜かれたって？」
「……そォだ」

「だから銃じゃなくて、けど拳でもねェ、良い言い訳になりそォな武器を見繕え、ってことね」

いやホント。

私コイツのことちょっと信頼しすぎじゃね。敵だぞ。

なんなら安直ちゃんに頼まれたら――その【即死】も奪う可能性のある相手、だってのに。

今からでも遅くない、やっぱやめた、って言って。

「弓っつーと難しいだろォけど、クロスボウとかどォだ？　作れる奴いるのか知らねェけど」

「クロスボウ？」

「ん、知らねェのか。えーと、じゃあスリングショットとか」

「いや、クロスボウならわかるよ。あれだろ、こー持って、弓射る奴」

「そォそォ。アレなら拳銃と似た感覚で……使えるかどォかァ知らねェけど、偽装にァなるだろ。珍しがられァするだろォけど、銃よりァそんなにだろォし」

「ふむ。で、スリングショットってのァ？　そっちァ知らねェんだけど」

藍迂遠斗塔羽生阿番食和絵都. / 地番食和絵都負不地出土初琉微鍬家都. / 殊蟻.

「なンか、二又の棒にゴム紐くっつけて引っ張ってバーンの奴だ」
「わかるか」
クロスボウか。
あり、だな。
「どの道別にお前の魔法ってな銃も弓も要らねェんだろ？　ならテキトーでいいんじゃね」
「いや、銃の方がしっくりくるってのァある。狙い定めないと上手く行かないし――ッ！」
「ハハ、なんて顔してやがる。コイツ巧みに誘導しやがって、か？　馬鹿が、ンなもンァ探り入れなくてもアタリついてるよ。どんだけ証言者いると思ってやがる」
「……それァ、そうか」
記憶、あるンだもんな。
あの日――私が仲間にしようとした魔法少女達には、全員。意識ァなくても、記憶は残る。マッドチビの作り出した精神体技術っつーのァそォいうモンだ。
……ふゥ。

「ありがとよ。ちったァタメになった」
「おォさ。こんなんでいーならまた来な。それで完全に隠れられンなら、いつでもな。俺ァ暇で暇で仕方ないんでよ、恋愛話の１つでもあったら尚良い」
「あるわけねーだろアホ」
「ハハ、別にお前の、たァ言ってねェよ」
「……！」
落ち着け私。
今のァ勘違いした私が悪い。悪いか？　いやコイツが全部悪い。そう。コイツが全部悪い。
「じゃァな。今度来る事あったら、手土産ァ持ってくるよ」
「頼まァ」
疑似【隠涜】を発動する。
回数制限ァまだまだ余裕がある。安藤さんの魔道具っつーのァこの回数制限と劣化するのが厄介なンだよな。この【隠涜】だって、周囲の激しい変化にァ対応できねェし。

藍迂遠斗塔羽生阿番食和絵都. / 地番食和絵都負不地出土初琉微鍬家都. / 殊蟻.

あくまで魔法少女の魔法を魔工学で再現してるに過ぎねェんで、色々と条件がつくンだ。それにしたってすげーのァ変わりねェけど。

ちなみに【即死】ァつくれねェのかって聞いたら「首落とすか心臓貫くかでいいだろ？」って言われた。

……さて、戻ろう。

今日ァなんぞ、歓迎会ってのがあるらしィからな。遅れるのァ悪い。あと、なンだっけ。部活動、みてェなのもやるらしい。中学ン時ァやってたけど、魔法少女の部活動っつーとどンなんになるかまるでわからねェ。

ま。

……できるだけ、重要な役割ァ貰わねェよォにしねェと。どうせ抜けるんだ、あんまり深めすぎると、つらくなる。

「ミズメ、こっちこっち！」

「わ！　貴女がミズメさんですか！　初めまして！　私はユノンといいます！

S級魔法少女です!!」

「はじめまして。私はミサキ・縁という。あまり攻性に長けた魔法少女ではないが、よろしく頼む」

「ティアでーす。いえーい。私今日お酒飲むだけー」

「瀬尾アルカっていいます！　よろしくお願いします、お3方！」

会場ァもうできあがっていた。

魔法少女っつーのァ酒飲める年齢ってのが明確に定まってない。国でァ17だったっけな。そんくらいなンだけど、それより手前で止まっちまった魔法少女ァどうすっかって法律ァ無いわけで。その上で、別に酒飲もうが煙草吸おうが魔法少女に健康被害ァ無いんで、飲みたきゃ飲めばいいし、飲みたくなきゃそれでいいし、って感じ。

ゆるふわにゃんこことティアの尋常じゃねェ飲酒量もさることながら、リキュアと理央も結構飲んでんな。私ァ酒飲んでも一瞬で分解しちまうンでアレなンだけど、そォいやアイツァ飲むのかね。

私ァ別たれた後に飲んだってだけだから、アイツがどォなのか知らねェんだよ

な。手土産ァ酒にするか？

「ミズメさーん、こっちですよ。さ、私の膝にお乗りください」

「……はい」

「ちょっとリキュア、君は胸が大きいんだから、座り難いだろ？　その点私は椅子に持って来いだよ」

「何を言うのかと思えば。これは、柔らかい背もたれ、ですよ。ふふん、アムリタお姉様にもフェリカお姉様にも勝るコ・レに包まれて堕ちない少女などいませんから。ほら、どうですか、ミズメさん。気持ちいいでしょう？」

「……は、はい」

実際に凄い。

私にァ無いそれが。やーらかい。あったかい。

身長差的にも頭を挟む感じでソレがあって、酒が回ってるせいか体温もかなりあって。

眠くなるンだけど。目の前の料理を前に眠くなっちまうのァ勿体無いンだけど。

「そういえばユノン。ユクナは呼ばなかったのか？」

「げ、今ここでそんな話題出すとかもしかして私何かしましたか!?」
「いや、そういうわけではないが……。今度ユクナを皆に紹介する、などと言っていたのを覚えていただけだ」
「う、それはそうですけど。するにしても歓迎会じゃないですよ流石に！」
「そうか。……そうだな」
「ユノン。アインハージャ的診で言わせてもらうのなら、宴とはどの場においても宴。……訳はこれで合ってる？」
「リジ、私に聞かれてもわからん」
「それはそう」
アインハージャ。
彼女らもいるのか。あの２人ァホントに接点無いからな。私の弾丸を弾いたくらいか、絡みって。
……彼女らも彼女らでマジモンの達人だから、気を付けないと。……つか、アイツあの２人のこと青バンダナと赤スカーフって呼んでなかったか？
いやもっと特徴あるだろ。リジは紫の髪が綺麗だし、ウィジは浅黒い肌に、ちょっ

と露出の多い服が噛み合っててなんかかっこいいし。確かに青いバンダナと赤いスカーフつけてるけど、こう、もっとあるだろ！

「ウィジ、見られている。自己紹介の場だった気がする」

「リジ。それもそうだな」

あ、気付かれた。

……視線に気付くってな、ホントどぉいう事なンだろうな。アイツのいう死の気配ァ私もなんとなくわかるンだけど、そぉいうのじゃないっぽいし。勿論殺気の類ァ私も気付けるけどさ。

「私はリジ。ウォムルガ族がアインハージャ。アインハージャというのは魔法少女のこと。そう呼ぶのは私達の慣習だから、慣れて」

「私はウィジという。同じくアインハージャだ。よろしく頼む」

「……はい。ミズメです」

そぉいや、この2人がいるなら、もしかしてナリコ……も、いる、のかな？

いるんならその、ちょっと話してみたいんだけど……いなそう？

「あは、ミズメさん。そんなに髪を動かされますと、くすぐったいですよ」

「……ミサキさん！　私達は同盟を組みましょう！」
「え。ああいや、私はそういった事に関心は無いのだが」
「酒もっともってこーい！」
「ミズメ。ティアのようになってはいけないぞ。酒は飲んでも呑まれるな、だ」
「ウィジ。ティアは悪い例が過ぎる。汎用性に欠ける」
「おいそこ2人！　もっと飲みなって飲みなって～！　ほらほら新人ちゃんも！　ヤなコトつらいコト、ぜんぶぜーんぶお酒でわすれちゃおー！」
「……えと」
ゆるふわにゃんこってこんなヤツだったンだなァ。
なンか。
……いや、そこまで人となりっつーのを知ってるワケじゃねェけどさ。酒ァ人を変える、って奴か。
まー私ァ酒より食事かね。拠点じゃ安藤さんくらいしか飯作れる人いないンで、こォも豪勢なのァ久しぶりだ。安直ちゃんと食べた果実類ァ美味かったが。
えーと？　つかこれ誰が作ってンだろ。

「追加分、お持ちいたしました。どうぞご存分に」
「――」
「おや。初めまして、ですね。私はコーネリアス・ローグンと申しまして、Ａ級魔法少女でございます」
「……あ、はい。初めまして、です」
「ミズメさん、名前、名前」
「……あ、ミズメ、です」
「はい、よろしくお願いいたします」
なンでいるンだよ冷静メイド。……いや、そォか。再入園したンだったか。
お前、鬼教官のメイドなンじゃないのかよ。つかＡ級って、あァなンだっけ、Ｂ級からＳ級への異例の飛び級を課されてたとかそンなンだっけ？
びっくりした。素直に。
「あ、ミズメちゃん固まってる。かわいー。大丈夫大丈夫、ローグンさんは見た目ちょっと怖いけど～えい」
「!?　――ティア様。そのようなことはもうやめてくださいと何度も……」

「あはは！　怒った怒った～。ローグンさんはね、脇が弱いの。くすぐりするとめちゃくちゃ感じるんだ～」
「――わかりました。ティア様。酔いがさめたら、お覚悟を」
「きゃ～、めちゃくちゃにされちゃう～！　助けてミズメちゃ～ん！」
ゆるふわにゃんこ、ちょいとウザめだな。酒飲ませちゃいけねぇ奴だろコイツ。
まァ絡んできてくれるだけ嬉しいけどさ。なんか本当に、迎え入れられたみてぇで。
そんなこた無いンだけど。
「……大丈夫。メイドさん、捕まえておきました」
「え～!?」
「はい、ありがとうございますミズメさん。では」
「ちょ、ちょいちょいちょい！　酔いがさめたら、じゃないの!?」
「覚めているくせに悪ノリしているのは目に見えているので、今からです」
「何故バレている――ッ!?」
よし。

悪ァいなくなった。
さァて料理に舌鼓を。
「……」
「……」
「……」
「どうしたんだ、ミズメ。固まって。……ん？　ああ、あるるらか。大丈夫、あれも魔法少女だぞ」
「ウィジ。誰でも暗がりにぼんやり浮かび上がる人影は怖いと思う」
「リジ、私ではなくミズメに言うべきではないか？」
「それはそう」
見つめられている。
――マッドチビからの、注意事項が１つ。「それはあくまで変装道具であって、中身を変えるってワケじゃないから、一番気を付けないといけないのは――【透過】の子よ」。
キラキラツインテ。あるるらら。

確かにアイツに中身を見られたらおしまいだ。つかアイツ何しにきたンだ。学園生でもないのに。
なんで見つめてきてンだよ。
怖いだろ。
「うん。いいよ」
「……え？」
「じゃあね」
そォ言って。
キラキラツインテァ、消えて行く。
な、なんだったンだ。
こっわ。
「相変わらずよくわからない奴だが、悪い奴ではないぞ。多分」
「ウィジ。私もあの人はよくわからない」
「あるるららさんは不思議な人だが、悪い人ではないぞ」
「名前の響きからして、西方の方でしょうか？」

藍迂遠斗塔羽生阿番食和絵都. / 地番食和絵都負不地出土初琉微鍬家都. / 殊蟻.

「西方！　ジパング、という所、だよね。北方出身者としては一度お話してみたかったな」
「それならここにユノンが――」
「わー！　わー！」
もしかしてもうバレてたりすンのか？
だったら――もう話が通ってたり？　んでもしかして、このまま私を酔わせて……
一斉に叩く、みてェな。やばい、緊急脱出機構使うべきか？
「皆さん、遅くなりましたわ。もう始めているようですわね」
「お酒、ある？」
「あら、フェリカお姉様。それにシェーリースさんも」
お嬢と背中メッシュが来た。
不味い、固められている、か？　キラキラツインテにいつの間にか【透過】されて中身を見られていたとしたら……いや、アイツの【透過】ってなンか温かいモンを感じ取れたはず。あ、でも今リキュアの体温でわかんなくなってるから……
ええと、ええと。

「食事を楽しんでね」
「!?」
「あるるららさん、ダメですのよ。ミズメさんは突然のことには驚いてしまうのですから、あんまり虐めると可哀想ですわ」
「うん。ごめんね。なんでもないし、なにもしないから、大丈夫だよ」
ふ、含みがありすぎる。
絶対なンかあるし絶対なンかしてくるし一切大丈夫じゃねェ奴の言い方じゃねェか！
……う。
「……あるるらら。何用かと思えば……学園の歓迎会になど、私達が入っても邪魔なだけだろう」
「うわ、学園の大部屋懐かしいな。いいのかい？　卒園生の私達が参加してしまって」
「カネミツ、あまり固い事を言うな。隊長が行くのだから、私達が行かない理由もあるまい」

「ねむいんだけどー。あ、でもごはんはもらうねー」

……ぬ!?

「ええと、流石にこの雰囲気にはお姉さん入りづらいわね。学園なんて来たのどれくらいぶりかしら……」

「いいんじゃないですか？　突撃班もいるみたいですし。ぱーっと騒いでぱーっと帰ればいいんですよ」

「あ、なんか可愛い子いるじゃん！　そ、それに――大きい子が!!」

「……」

「そそ、その、お邪魔します！」

う。い、一番気まずい面子が。

「酒盛りだって聞いたぜ！　ワハハ、なんも関係ないけど来ちまった！　あれホントに知らん奴ばっかだけど大丈夫か？」

「ティケ、その空気の読めなさは流石すぎて敬服」

「隊長に何の許可も得ずにきちゃったけどよかったのかな」

「隊長の許可なら取った。楽しんできて、できればご飯持って帰ってきて、だって」

ま、全く知らない奴らが。
「――なんですかこの大所帯は。このコーネリアス・ローグンに対する挑戦状とお見受けしました。今から20倍の速度でお食事を作りますので、お待ちのほどを」
「た、助けてみんな、ごはんにされる――!!」
「歓迎会……ではなくなったな」
「さっきの言葉を繰り返すけれど、アインハージャにはこんな諺がある。宴とはどんな場においても宴」
「ということで、申し訳ありません。母様。あるるらさんに呼ばれて、来ております」
「えー!?　えぇー!?!?!?!」
「今ＬＯＧＯＳが西方近くにいるから、守りは安心してね」
「母様？　えっと、そちらの方のお母さんが、ユノンさん、なんですか？」
「それは……なんとも」
「……精々慌てふためくがいい、化け狸」
これァ、緊急脱出機構使っても逃げられないンじゃねェか。

やばいって。流石に。
「リキュアさん、理央さん、ミズメさん」
「あら、お姉様。姉妹なのですから、呼び捨てで構いませんのよ」
「私も理央で大丈夫です」
「ふふ、すみません。これは癖でして。――では、遅ればせながら、ですけれど」
混乱の極致の中。
金髪お嬢様が――誰もの目を引く優雅な礼をして。
「ようこそ、学園エデン、及びＥＤＥＮへ。歓迎いたしますわ」
「乾杯！」
……そっからァもう、騒がしすぎて何話したかよく覚えてない。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――お前さァ、そォ頻繁に来てっと流石に怪しまれるぞ」
「こんな頻繁に来る予定ァ私にもなかったよ。ほら、これ」

「ン。……なンか良い匂いするけど、なんだこれ」
「……今日、歓迎会があってさ。それで出た料理だよ。ホントなら……お前が食べるはずだった奴」
「ハハ、なんだお前。馬鹿が。ホントならお前が食べるはずだった奴だろォが」
本当に、こんな頻繁に来るつもりァなかったけど。
でもこれァ、私が受け取って良いモンじゃない、気がして。ミズメに出されたものだけど、本来ならあの場所にはコイツもいるはずで。
それを……あの楽しい雰囲気も、食事さえも味わえねェのは、ちょっと……その、可哀想、だな、って。
「ヘェ、ピザか。いいね、こォいうジャンクフードァ大歓迎だ。――が」
「なンだよ。毒とか入れてねェぞ」
「ハハ、知ってるよ。ほれ、どこでもいいから座れ」
「？」
よくわからんが、言われた通りに座る。
ちなみに歓迎会の後、本当に何も無かった。キラキラツインテのあの思わせぶり

な言葉ァなンだったンだ。
「客人に飯持ってこさせるだけ持って来させて自分だけ食えって？　アホ言え、お前も食うんだよ。どうせ雰囲気に圧倒されてロクに食ってねェんだろ」
「……別に、私ァ」
「いーから食えよ。俺が気まずいンだよ。……で、どォだ。学園生活。楽しいか？」
「なンだよ急に。親戚のおっさんみてェな話の振り方しやがって」
「お、おゥ。随分と言葉が鋭利だな」
「ん、そォか？」
まァ、毒なんか入れてねェつっても安心できねェのァわかる。
私だったら安心しないし。今までどんだけ欺いてきたかって話だ。
だから、まァ。
一緒に食べるのも悪かねェ。
「楽しいかって聞いてンだよ」
「……わかんねェ」

「そりゃ、楽しんでいいのかがわかんねェってだけだろ。楽しいかどォか聞いてンだよチビ」
「ア？　背丈ァ一緒だろォが」
「なんなら俺の方が小せェな今」
「……そりゃ、そォ、だな」
「あァすまん。空気読めてなかった。そンな落ち込ませる気ァ無いんだ。マジで今楽しいか聞きたいだけでさ。うわこのチーズうっま」
今、楽しいかどうか。
楽しんでいいかわかんねェのァその通りで、けど、良いとした場合に——楽しいかどォか。
そンなの。
「楽しい、よ。できりゃこの変装も無しで楽しみたいけど、それァできないから。でも——多分、人生で一番、今が楽しい」
「はン、いいね。それで良いよ。それが聞きたかった」
「……ヘンな奴」

段々と、コイツの考えっつーのがわかんなくなってきた。
コイツァ元私のはずなのに、なンか――ホントに別人、みてェな。そンな感じ。
「ハハハ、好い。好い。深夜ってのもいいね。この時間が一番調子いいんだ、俺ァ」
「それァ夜の使徒だから、か？」
「多分な。彼女が見ていてくれる時間で、もっとも彼女に近い時間。……そっか、お前わかんないのか」
「あァ、私ァ夜の使徒じゃないんでな。彼女っつーのが誰なのかもわからねェ」
「じゃあお相子だな」
「何が」
「俺ァ魔法少女じゃねェって気持ちわからねェからさ」
……気付いてンのか、コイツ。
「死者に近づいたせいだろォけど、そォいうの敏感になっててな。だからお前のＥＤＥＮ入りも一瞬で気付いたよ。明らかに命の形が違う。俺の腕にあった魔法少女の因子ってなも、全部排出したのか」
「あァ。もう私ァ魔法少女でも、ヒトでもない。どちらかといえば魔物寄りだけど、

魔物でもない」

「いいね、俺も俺以外の夜の使徒ってな見た事ねェんだ。だからやっぱりお相子さ。これでよーやく対等だ」

何が対等だ。

こいつァ隔離塔なンて場所に幽閉されてるよォなモンで。

私ァ、楽しくて――楽しいって感じちまってて。あの時考えた、幸せの均衡って奴が、ちゃんと私に傾いちまってて。

これじゃァやっぱり、私が全部奪った、みたいに……。

「だーから対等だっつってンだろ？　お前にも俺にも傾いてねェよ」

「……何も言ってねェだろ」

「顔見りゃわかるっつの。13年付き合った顔だからな」

それを。

なんで、コイツァ――こんなにも快活に。

「いいか、今よォやく対等だぜ、アズサ。ミズメでもいいが。こっから先が、お前と俺の生存競争だ。お前がこの先ミズメとして仲間との信頼関係を築けば、ある

いァ――俺を切り捨てる奴も出てくるだろう。マッドチビの狙いが何かまでァ知らねェが、どうせ神に仇為すなンかだろう。そこまでみんながついていってくれるかどォかァ知らねェし、お前がそれを許すかも知らねェ。だがな」

こいつは。

梓・ライラックは。

「ぜーんぶが終わった時に、どっちに誰がついてるか、ってな、誰にもわかんねェのさ。ケケ、2人とも誰かの虜、って事もあり得るぜ。着物狐とか、お前めちゃくちゃ靡いてンだろ？」

「な、ナリコァ関係ないだろ」

「あるよ。大ありさ。――こっからァお前の人生だ。どっちの名前で生きるか、どォいう道筋を辿るかァ知らねェけどな。お前が楽しいって思う限り、生きたいって思う限り――俺ァお前の敵だよ。よォやくだぜ、お前。生きてェって抗って、楽しい日常を自覚しちまったが最後さ。それを求めるお前の前に、夜の使徒ってな奴ァ立ちはだかる。せいぜい抗えよ、13歳」

「……何様だよ、お前」

「ハハ、何様だろォな。少なくともお前の知らないお前様かもしれねェなァ」
……やっぱりコイツ嫌いだ。
意味わかんないから。
話してると煙に巻かれる気がする。
「食事、ありがとな。一端でも雰囲気ァ味わえたよ」
「……あァ」
やっぱりコイツ、意地でも礼言わねェと気が済まねェんだろォな。
ふん。じゃァ言う通り、手に入れてやるよ。楽しい日常って奴を。——世界を救った後で。

遠《ｔｅｘｔ:s1・2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

69・意例唄連都・

――終の因。

ニヤニヤ丸眼鏡が作り上げたというその迷宮ァ、本来なら地表にあったものだ。外から流入する魔力を惑星にそのまま注入するために、完璧な形と完璧な構造になっている……ってな話だったが、それを攻略しちまったＥＤＥＮの創設者たちによってその役割ァ少しばかり捻じ曲げられた。

最初の予定でァ、魔法少女も魔物も等しくどこにでも発生し、それを摂理として殺し合う――つまり魔法少女も魔物の一部としてこの世に現れるはずだった。それを、終の因が宙に浮いちまったことで魔力が集中する場所ができちまったと。ンで、そこに魔法少女の因子を持ってる奴を隔離して、そこからばかり魔法少女が生まれるよォにしたと。

それァやっぱり、ニヤニヤ丸眼鏡の望む所ではなくて。

できりゃァ落としたい……てな話だったが、流石にそりゃ下の国がやばいことになりすぎる。あと学園長であるグロアって魔法少女のお婆さんの魔法が強力なン

で、どォにも無理だと。
よって――その役割の変更を。
ソテイラに伝えてきてほしい、みてェな所謂「おつかい」を頼まれたワケだ。
「……はァ」
「なにをしているの、ミズメ？」
「こんな夜更けに迷宮探索かい？」
「……！」
うわ、って。
思っちまった。
リキュアと理央。
もうそれなりの時間を過ごした2人だけど、実ァまだ一緒に戦った事っつーのァ無い。演習任務も修練もそこそこあったンだけど、エデンの改正によってか新人だけを組ませるっつーのァ無くなってて、必ず先輩方々が守りについての慎重任務なンで、なんつーの。危険性っつーのがまるでない。
別にそれでも良いたァ思うんだが、流石に過保護になりすぎなンじゃねェかなっ

て。これじゃァ単独になった時自分を守り切れねェだろ、とか思わないでもない。

話が逸れた。

まァ今何が言いたいのかってーと――ちょいと、面倒だな、って。

「迷宮……高難度の魔物が多く存在するという場所ですね。お姉様達が攻略した時、迷宮の主との話し合いを経て〝倒した魔法少女を殺さずに排出する〟という取り決めが為されたそうですが」

「腕が鳴るね。安全に、けれど魔物と死闘ができる――そういうわけだろ？」

「……はい」

「でも、何の断りもなく入ってよろしいのでしょうか」

「こっそり入って、朝が来るまでに寮へ戻ればいいんじゃないかな？」

「……ふふ、私、アールレイデとして規範に則ったことばかりしてきましたけれど、こういう夜遊びも……なんだかワクワクしますのね」

あー。

私1人なら魔物に襲われずに行けるンだけど。

まァ中盤に差し掛かるくらいでこの2人ァ倒れてくれるだろ。特にリキュアの魔

法ァ閉所じゃ使いづらいだろォし。ってか使えんのかな。そんな事も知らないや。
「……鍵は、あります」
「見張りの魔法少女もいないみたいだ」
「では――行きましょうか」
まァ見張りァちょいと眠ってもらったンで。
本来なら【断裂】っつーかなり厄介な魔法持ってる警備班の隊長サンがいるんだけど、【隠涜】サマサマってこったな。
んじゃ――久しぶりに、行きますか。
終の因。私がアイツから別たれる前の、お嬢とポニスリと入った――最後の場所。ある意味、思い出の場所へ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

射る。
射る。

安藤さん程の腕じゃねェが、弓を扱ってる武具店探して作って貰ったクロスボウで、襲い来る魔物をどんどん射って行く。完全に忘れてたコトだけど、安直ちゃんに付き従ってねェ、こォいうとこに隠れ住んでる魔物っつーのァ単純に生存のため、あと餌のためにと襲い掛かってくるンで、私１人で入っても襲われねェなンてことァなかったな、って。まァ疑似【隠涜】でどーにかなったろォけど。

マウス種、バット種。基本ァそいつらだけど、たまにスパイダー種とかワーム種がいて、リキュアァちょいとそォいうのが苦手っぽい。マッドワームもエストスパイダーも然して強くねェからいいけど、外にァやべーのもいるンで今の内に慣れといた方が良いと思うけどなァ。

「――曇りなさい！」

そォそォ、リキュアの魔法、【転候】だけど、最初に危惧していたよォなことにァならなかった。ちゃんと閉所でも使えるらしい。なんでも、ここは晴れている扱いだから、晴れを曇りにしたり雨にしたりァできる、と。これ、〝役割の統合〟起きたら凄まじく強力な魔法になりそォだな、とか思いながら――射る。

使いやすいわ。銃と似た感覚で使えてる。装填がちと面倒だが、腕の部分強化、

指の部分強化でぱっぱといけるのァありがたい。

　アイツみてェに一々知覚強化してから他の部位に流す、みてェなことしなくていいからな、私の身体ァ。素の動体視力、反射神経だけでこの辺の階層の魔物の速さにァついていけるンで、なンなら矢を使う必要もない。殴り殺せる。

　それを実際にやってンのが理央。

　魔法を使わず身体強化だけでガンガン進んでる。時たまリキュアの作り出す雲の中に引いて、視線切って、そっからまた飛び出して、みてェな感じ。あくまで天候を変えているだけで雲を創り出しているわけじゃない、らしィんだけど、そこんとこァよくわからん。流石魔法だ。それくらい。

「ふぅ、迷宮……どんなところかと期待していたけれど、案外大したコトないんだね」

「まぁまだ上階ですし。奥に行けば行くほど魔物も強くなっていく、と聞いていますよ」

「そうなんだね。じゃあ、ぱっぱと行こう。腕試しの場なら――もっともっと強い魔物と戦いたい」

血の気の多いことで。

……前入った時ァ、いっぱいいっぱいだったけど。

お嬢とポニスリァこんな気持ちだったのかなァ、なんて。私ァついていくのに精いっぱいだったし、守ってもらいながらだったし。キラキラツインテが来てくれてなきゃ、私ァ一生部分強化もしてなかったンだろォし。

……それで、たとえば中盤辺りで死んでたら。

今の私ァ、いなかった……んだろォな。ここでアンゲルがアイツの腕潰してくれたから、私が生まれ出ることができたわけで。

そォ考えると、ここっつーのァ私の誕生の地でもあるわけか。

「ミズメ！　そっち一匹行ったよ！」

「……問題ないよ」

大きく足を上げて、蹴り潰す。

ケイブバット。こンなのも見えなかったンだから、アイツの身体っつーのァ本当に基礎能力が低いンだろォなァって。

「流石だね」

「かっこいいですね、ミズメさん」
「……ありがとう」
この変装の見た目っつーのァ結構地味目っつーか、梓・ライラックみてェな銀髪でもなけりゃ口調もンなオラオラしてねェんで、割合武闘派だって知られた時ァ色々言われたもんだ。授業での試合以外にも、先輩方々との演習でも、な。
特に尖り前髪とポニテスリットが、ちょいと怖めの目線送ってきてたのが印象的だった。何かに気付いたのか、それとも手合わせ願いたい、みてェな奴なのかァ知らねェけど。
「よし、私も負けていられないな」
「ええ、私も――そろそろ、攻勢に出ます」
「……頑張ろう」
一瞬、口元に手をやりそォになった。
……回復なんざ必要無いし、あの死ぬほど不味い煙草なんざ吸うつもりァ無いのに。
心機一転、みてェな時ァ必ず吸ってたからかね、クセになってるんだ。

さて。

とっとと踏破して、おつかいァ済ませちまいましょうね、っと。

「――【気烈】！」

「一帯を雷雨にします！　下がってください、理央さん！」

「ッ、そうさせてもらうよ！」

1つ目の休憩地点を挟んで、ちょいと戦闘ァ激化してきた。

懐かしの大蛇君ァまだ健在。けど別にコイツ何もしてこねェんで無視。厄介なのァそれよりも小せェナメラスネイクって種だな。いつか【即死】の絶対防御開発で殺した奴。

こいつァ色んな方向から飛んできて噛みついてくるンで、対処がだるい。毒だのなンだのっつーのァ無いんだが、噛む力がそこそこあるンで噛みつかれると結構危ない。すでに理央が足と腕を噛まれちまってる。私が先んじて情報渡しときゃよかったンだけど、じゃァなんで知ってンだ、って話になると困るからな。

悪い事をした、とァ思ってる。

まァこの辺の魔物ならもう殺さずに排出ァしてくれる、たァ思うんだけど、排出されたらされたで傷だのなンだのァ残ったままだ。それを理由に死を選ぶ魔法少女も少なくァないはずなのに、っとに何を考えてアイツァこんな条件をソテイラに課したンだか。

大怪我したら、死んだ方が流石に苦痛ァ無いだろ。魔法少女なンだし。

「……理央。大丈夫？」

「ッ、大丈夫さ！　修行の中ではこういう怪我もあった。けど、人間の治癒力というのは凄いものでね。適切な処置をして、包帯を巻いておけば、一年や二年もすれば治るんだよ」

「ええ、死んだ方が早い、という方もいらっしゃいますけれど――自然治癒力で治し得る傷ならば、それは勲章となります」

「……」

あれ。

……もォ、そんなにもそォいう考えが広まってンのか。

エデンの教育ァ行き届いてる、ってか？　……ま、良いんだけどさ。本人がいいなら。

けど……この先ァ、自然治癒じゃァどォしよォもねェ怪我負う階層になるぞ。

「ミズメさん？」

「……2人は、引き返した方が良い」

「え？」

まァあんまり怪しまれたくないンでいうつもりなかったンだけど。

ソッチの考えしてンなら、来ない方が良い。無理なモンァ無理だ。

「……この先は、噛まれたとか、ひっかかれたとか、そういう、小さな、怪我じゃ、済まない」

「心配してくれているのかい？　けど、大丈夫。ミズメは私の強さを知っているだろ？」

「そうですよ、ミズメさん。それに、私達は同期。どこへ行くにも一緒、です」

「……知っているから、引き返した方が、良い。そう、言っている」

「！」

友情だとか連携だとかでどォにかなる領域じゃねェんだわ。

歴戦の【波動】、SS級が【神速】、殺傷能力だけァSS級の【即死】だった3人だからこそあそこまで行けたってだけで、今の私達3人じゃどーやっても無理。つかアイツが夜の使徒じゃなかったら普通に死んでたしな。

まだ魔法少女になったばっかりのA級3人じゃ――どーやっても死だ。私ァ死なねェけど、2人を守れるか、つったら多分無理。守りながら戦う、ってやり方、私ァ知らないし。

「それは――私達の実力では、これ以上は無理だと。そういうことですか？」

「……そう。理央の、噛まれた傷も、リキュアが、隠している、足の傷も。この時点で、魔物の攻撃を、避け切れていない。から、無理」

「ばれていましたか……」

「――ミズメ。それは――君なら、先に行けると。君だけなら先に行っても問題ないと――そう言っているのかい？」

う。

あー。

いんやさ、まァその通りなンだけど。……折角ここまで築き上げた関係性に、罅入れちまう、かなァ。

けど、これ以上ァホントに不味いンだよな。絶対２人ァ大怪我するし……それで排出されたとして、そのまま、ってワケにゃ絶対行かない。まさか隔離塔でアイツみてェに療養する、っつーワケにも行かないだろォし。

心を鬼にして。

言わないと。

「……そう。２人じゃ、無理」

「……」

「……」

あー。

どォしよ。黙っちまった。

いんやさ、金髪お嬢様とポニテスリットもこォいう気持ちだったンだろォなァって。本当に今、まさに、て感じだ。完全に立場逆転、だよな。

あン時の私ァなんて返したっけ？

――それでも嫌だから、とか。

そんなんだっけ。

「でも、死なない、のですよね。どれほどの目にあっても」

「……殺されないだけ、か。怪我を治してくれるわけじゃない。私達は、再起不能な怪我を負う可能性もある。そういうことを言いたいんだよね、ミズメ」

「……うん」

ヘェ、案外理央の方が物分かりいいンだな。

食い下がるなら理央の方で、リキュアが諫めるのかと思ってたンだが。

まァ自然の猛威みてェなのァ理央の方がよくわかってるか。

「……ごめん、ミズメ。それでも……今の私がどこまで通用するのか、やってみたい。その果てに死を選ぶというのは、今のエデンで教えられている事とは違ってしまうかもしれないけれど、それでも――君がそこまで言う場所であるのなら」

「私もです。遠隔魔法少女として、私のこの天候を変えるだけの魔法がどれほど戦に耐え得るのか。それは――試さなければならないこと」

「……そっか。じゃあ、本当に、つらくなったり、痛かったりして、――死にたいっ

て、思ったら」

クロスボウを構えて。

――撃つ。

「……言って。安らかに、眠らせて、あげるから」

2人の背後に迫っていたナメラスネイクを射て。

そこまで言うなら、仕方ねェ。

私ァアイツとァ違う。本人の意思で戦いてェって思ってて、死んでも良いから実力を試してェ、なンて思ってる仲間の意思を折る、なんてことァしない。

ただ、苦しくなったら。痛くて、つらかったら。ちゃんと殺してやる。【即死】ほど安らかじゃねェかもしれねェけど、私本来の魔法で、ちゃんと。

傷を負わせたままになンてしない。

つらいんなら逃げて良いンだ。苦しいンなら縋っていいンだ。苦痛をそのままに生きろ、なンて。

強い奴のいう事だ。彼女らァまだ幼くて、弱いんだから。

そんくらいの弱音ァ聞いてやんないと、可哀想だろ。

「……ふふ」
「はは」
「……？　何か、おかしかった？」
「いえ……初めの印象と、真逆ですね、と思いまして」
「私もそれで笑っていたよ。ほら、学園案内の時、フェリカさんに見つめられて泣きだしちゃっただろう？　あの時、この子は私達が守っていかなきゃな、なんて思ったものだけど」
「ミズメさん。貴女は守られる者ではなく――前を進む者ですのね」
「……ありが、とう？」
後ろに続く者のために、前に進み続ける者。
私がアイツだった時に思った言葉だけど、意味はよくわかっていない。夜の使徒関連の言葉だと思うンだけど――それが、私にも受け継がれている、のだろうか。けど。
私が示す道は――魔法少女にとっては、崖へと向かう危険な道なンだ。
あんまり信じてついてこられても、困る、かな。

「行こう。もうすぐで半分なんだろ？」
「行きましょう、ミズメさん。共に」
「……うん」
それに――多分。
一瞬で、無理だと思うから。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1:２》吠えは遙か彼方に《／ｔｅｘｔ》

「――ッ、あ、ぁアっ!?」
「リキュア!?　クソ、【気烈】！」
「……」
まァ正直、ほらな、って感じ。
とうとう出てきたゴーレム種。【即死】の無いパーティじゃ、有効打っつーのがあんまりない。【気烈】で核をぶっ飛ばすくらいかなー。あるいァ下に満ちてる水に【転候】で雷雨降らせて雷を、とか？　それだと私達も巻き込まれるけど。

今、リキュアが背後から来たゴーレム種に殴られた。ブロックゴーレム。アダマンタイタン程じゃァねェけど、それなりに固い身体と、ゴーレム種らしく核を壊さねェ限り何度でも蘇る厄介な奴。実ァその体内を核が高速で移動してるってだけで、近接魔法少女でも倒せるゴーレム種でァあるンだけど、まァリキュアにァ対処できねェだろォさ。

私だってただ黙って見てるわけじゃねェけど、この辺になるとクロスボウじゃどォしようもない。銃より威力低いからなー。今ァもう殴る蹴るに変更してる。

「……理央、後ろ」

「ッ、く――う、ぐ……がッ！」

今度ァ理央が鎧騎士に斬られた。身体強化で刃ァ身体に入らないよォにしたっぽいけど、だからこそ単なる打撃が腹に直撃したよォなモンだ。

あー。

無理かなァ、これァ。

「……リキュア。立てる？」

「っは――っは、ぁ、だい、じょ、う、」

「……無理そう。背骨が、折れてるね」
「ま、だ。私は、ま、」
無理だろ。
背骨折れてンだから、もォ戦える身体じゃねェよ。日常生活ができるかも怪しい。
背後からバシャバシャ音立てて近寄ってくる鎧騎士をぶん投げて、壁に叩きつける。中心の核を引っ張り出して、握力だけで握りつぶす。
おかしィなァ。この辺の魔物ァもうソテイラの管轄のはずだから、私が魔法少女じゃねェってわかってるはずなンだけど。なーんでこんなに襲ってくるのやら。まァ安直ちゃんの従える魔物が襲ってこねェってだけで、ソテイラとァそォいうやり取りしてねェからなのかもしれねェけどさ。
「み、ズメ！　危ない――」
「……大丈夫」
精神体だ。久しぶりに見た。
けど、その程度じゃ私ァ殺せないよ。【即死】が無くても精神体を殺す手段っつーのァあってさ。

魔力を手に纏う。それで――精神体を掴んで、さっき握りつぶした鎧騎士の核に突き入れる。

ほら、宿れ。強制的に宿って――踏み潰されろ。

これが、精神体の効率的な殺し方。

他の器に精神体を入れて、それごと殺す。いつだかマッドチビがアイツに語った肉体が死んでも精神体ァ死なない、なんてのァ真っ赤な嘘だからな。ンなワケねーだろ、っていう。

それよりリキュアだ。

……あァ。触ってわかった。

「……リキュア。もう、無理。おやすみ」

「ま、だ――ぁ」

その首に、手を当てて。

――殺した。

すぐさま分解されていくリキュアの身体。魔力素の維持ができなくなるからな。

精神体ァ中央塔の蘇生槽に還り、15分から20分くらいで蘇生するだろう。

意地じゃどォにもなンねェこともあンだよ。それが学べただけでも良しとしときな。

「……殺した、のか」

「……うん。背骨が、折れていた。あれじゃ、外に、排出されても、歩くことも、できない」

「……そ、っか」

理央はどうだろうか。

見た感じ、骨折はまだない。けど、内臓にいくつかの損傷。外傷も多く、流血も酷い。

失血死もあり得るかな、これァ。

「大丈夫。まだ、大丈夫さ。私はまだ――」

その言葉が最後まで紡がれる事は無かった。

ふらついた理央の身体は、通路の暗がりより現れたブロックゴーレムの拳により、吹っ飛ばされる。

べちん、なんて軽い音で迷宮の壁にぶつかって――けど、もう。

「……意識、ある？」
「……ｶ――」
「……おやすみ」
殺す。
頭蓋骨の損傷も、流石に無理だろ。外に出たって――もう。
そもそも失血量がすさまじかった。良く立ってた方だと思うし、よく戦ってたし、喋れてたよ。普通の奴ならクラクラしちまって朦朧としてるだろォに。
やっぱり、無理なモンァ無理なのさ。
「――ってなワケだ。まだ用ァあるか、終の因の魔物。私ァソテイラに会いに来ただけなンだが――戦うことなく通しちゃくれねェかね？」
変装を部分的に解いて、言う。
はァ、やっぱこの喋りの部分の機構ァどォにかしてくんねェと、息が詰まって仕方ねェ。
「あァ返答ァ斬撃と。いいぜ、やろォか。気配だのなンだのァ似てるかもしれねェけど――私ァアイツほど弱かねェぞ」

避けて。
その腕を握り潰して。引っ張って、核に蹴りを入れてぶっ飛ばして。
クロスボウァ亜空間ポケット行きだ。
代わりに取り出すのァ、二丁の拳銃。【即死】の弾丸なんざ詰まっちゃいねェがな、やっぱコイツがねェとな。
「お相手すンのァどこの誰とも知れねェミズメちゃん――じゃなくて、よォ、私ァ梓・ライラックってモンだ。お前らを殺すモンなンで、名前覚えて帰ってくれると助かるよ」
さてはて。
最速踏破でも目指しますかね。

本当にぱっぱと行って、最深部一歩手前。
あのアンヴァルっつー魔物のいる階層にまで来た。
っとにアイツら手加減しねーでやんの。そろそろ戦闘無く通してくれてもいいの

によ、ちゃんとニヤニヤ丸眼鏡の名前まで出してンのに一切聞いてくんねェ。おかげで弾倉3個も使いきっちまったよ。

「よォアンヴァル。久しぶりになるのかね。私を覚えてるか？　それともお前ァ、あのアンヴァルの子供か？」

「――流石にもう殺し殺されは面倒だから素通りでいいよー」

「……じゃァ初めからそォしてくれよ」

割とカッコつけちまって、恥ずかしいったらねェじゃねェか。

アンヴァルの口からソテイラの気の抜ける声が出てきて、あァ、じゃあアンゲルも素通りか。

まァ天使なんざと戦う意味がねェからなァ。

あのアンゲルっつーのァニヤニヤ丸眼鏡の天使なワケで。

「んじゃお世話様、つってな」

何も言わなず、ただ見つめてくるだけのアンヴァルを素通りして、階段を降りて。

アンゲルがいるはずの階層に何もいねェことに疑問を持ちながら――最奥の扉を開いて。

その光景に、あんぐりと口を開けてしまった。
「あー、来た来た、来たねー。おつかいご苦労様。それで何用かな、今良い所なんだけど」
「……」
「お、いいトコ指すね。じゃあ――こっち」
「……！」
なんか。
ソテイラと――アンゲルが、遊んでる。
ボードゲーム、って奴だ。キニセルっつー真四角の盤上でいろんな形の魔物を動かして陣地を取り合う奴なンだけど、それを、ソテイラァまァいいとして、アンゲルが……座って、指してる。
えェ。
お前さ、あンだけ絶対的な恐怖、みてェなさ……えェ……。
「あ、これ？　あるるらちゃんだっけ。あの子が持ってきてくれてねー。人間

の作る遊びってどんなものかなーって思ったんだけど、結構面白くてさー。この子達付き合わせて最近ずっと遊んでるんだー」

「あー、そぉかい。知らねェけどよ。えーと、んじゃニヤニヤ丸眼鏡……ゲヘナからの伝言、伝えるぞ」

「ちょっとだけ待ってほしかったりするかなー。さっきも言ったけど、今いいとこでさ」

「……終ワリデス（知恵久米糸）」

「普通に喋んのかい」

微妙に雑音入ってて聞こえづらかったけど。

喋れんのかよお前。知らなかったよ。

「ふふふーん、いいの？　ソッチ動かしちゃうと……ここ、通っちゃうけど～？」

「！　一手戻サセテクダサイ（湾須上下鼠）」

「はいはい、いいよいいよー。――もう詰んでるから」

何見せられてンだ私ァ。

……つか、ボードゲームか。あンまりやったことないけど……楽しいのかな。

「あれ、もしかしてやりたい？」
「……やるとしても、アンタらとァやんねーよ。帰ってみんなとやる。だからとっととお使い終わらせたいンで、とっとと取っちまえよ。その盤面、アンゲルが何をどォ動かしても終わってンだろ。性悪め、教えてやれよそォいうのァ。コイツ初心者なンだろ？」
「ソンナコト（伏炉手止）ハナイ」
「あァなンざうーうー言ってて聞き取りづらいよお前の声。面倒だからもう言うぞ」
「もー、せっかちだなー。じゃ、これで終わりね」
「！！？」
私だってキニセルなンざ見た事あるくらいなのに詰みってわかる盤面だった。
それを泳がせて考えさせて……何やってンだか。
「はいはい、じゃあ聞きますよ。創造主の伝言。ゲヘナっちはなんて言ってたの？」
「軽いなァアンタ。えーと、じゃァ言うけど――」
なんか心なしかしょんぼりした感じで前の階層に戻っていくアンゲルを避けなが

ら、それを口に出す。
　所々の意味ァよくわからん。が、コイツにつたわりゃいいだろ。
「――〟黒い月が照らされる時が来た。白い太陽が落ちる時が来た。青き天幕は剥がれ落ち、宙の莽への道が開かれる。ソティラ。灰の瞳を持つ守護者よ。賢き黒のストリクスよ。そなたの枷を今外そう。そなたの軛を今壊そう。服従は終わりだ。屈服はここまでだ。故に――終の因を最終形態へと移行せよ〟、だ、そぉだ」
「……」
「ン、聞き取れなかったか？　もっかい言うか？」
「……ううん。いーよ。大丈夫。――なるほど、君は魔法少女じゃないんだねー。使いに出すには最適かも？」
「そりゃまた、何で？」
「だって、魔法少女だったら」
　ズシン、と。
　大きな音がした。大きな振動が響き渡った。
　上だ。迷宮で――あるいァ、ＥＤＥＮで。

何かが起きている。
「――殺しちゃってたからねー」
ソティラァ――そう、凄まじく冷たく、且つ好戦的な目で。
上を見上げて。
「反撃の時間だよ、魔法少女」
そう、呟いた。

ああ。
終わりか、私の日常ァ。
……この辺りで私が行動に移る、って。見越されてたってことかねェ。
あーあ。
結局最後ァ、死でのお別れかァ。
「？　君、行かなくていいのー？」
「ン？　別に私ァ言う通り魔法少女じゃないンでな。適当な所で抜けるよ」
「あ、人間でもないんだ。なら大丈夫かー」

「……そりゃ、どぉいう」

「今から迷宮の魔物を解放するからねー。下に国があるんでしょ。そこにいる人間は全部食べられちゃうか殺されちゃうと思うけど、君が人間じゃないなら良かったなーって」

聞き終わる前に、緊急脱出機構を使う。

亜空間ポケットから引き出したそれァ、時計の歯車みてェにカチカチと音を立てて――私の周りに展開する。そしてそれァ、直上、真上の何もかもに穴をあけて。

「――そぉいう仕組みかよ、安藤さん!?」

私を、射出したのだった。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

70・藍阿度三都・

「――全隊出動、魔物どもの駆逐を急げ！」
「――迷宮内部、外壁から多数の魔物を確認！　高位種も数多く見られます！」
「――防衛組防衛班は国民の防衛を最優先しろ！　突撃班は最高位種アンゲルの討滅を！　確認できているだけで――5、否、6体はいる！」
上から見ただけで、数百を超す魔物の姿がある。小物ァいい。その辺の魔法少女でも対応できるだろう。だけど、高位種――ゴーレム種やアンヴァル、アンゲル、その他S級でも手こずるよォな奴らも出てきている。なるほど、あんな狭い迷宮でなンで翼持った魔物がいるンだって思ってたけど、そのための役割だったのか。
考える。
いや、考えてる暇ァ無い。
私の本懐ァなンだって話だ。
友人たちと楽しい日々を過ごす事？　魔法少女として国を守護する事？　魔物達を討滅すること？

違ェだろ。
もっと大切な役目が、私にァある。
ある、けど。
「――こォいう時に、真っ先に動く奴がさ。動けねェんだと。だったら――」
隔離塔。
そこからも多数の魔法少女が出てきているけど、アイツの姿ァ無い。
そりゃそォだ。出てこようとァしたンだろォけど、流石に縛り付けられてンだろ。アイツ、車椅子縛り付けられたらもう何もできねェからな。降ろされてるかもしれねェが。
安直ちゃんを通じて、魔物ともそれなりに仲良くなった。私自身が魔法少女じゃねェからな、仲良くなれた。ソティラの部屋でキニセルしてるアンゲル見て、コイツ案外人格らしィモンがあるンだな、って思った。
でも。
それでも――ダメだろ。
私の本懐ァなンだって話だ。

友人たちと楽しい日々を過ごす事でも、魔法少女として国を守護する事でも、魔物達を討滅する事でも――もっと大切な役目を遂げる事、でも――無い。
それは、私の大切なものを守るために手段や、過程でしかない。
私は。
「馬鹿が馬鹿がってうるせーよ、ってな。自覚ァあるさ。だって私ァ」
どこまでいっても、梓・ライラックだから。
その言葉は心の中にしまった。
何故って。
「――ミズメさん？」
「……フェリカさん」
緊急脱出機構から射出され、ＥＤＥＮの外周を落ちて行く中で――彼女に出会ってしまったから。
光輝なりし神姫。その背から余りある光翼を放出し、真白のドレスを彷彿とさせる鎧で戦場を駆け巡る、あァさ――これァ、希望だろォよ。
「……私は、国を、守りに、行くので」

「いえ、貴女はまだ魔法少女になったばかりなのですから、他の先輩方とご一緒なさい。単独では危険ですわ」
「……大丈夫、です。私は、強いので」
「それでもです。単独で動いては――単独でいくら強くても、守れるものと守れないものがありますの。仲間と共に行動し、連携し、故にこそ守り得る命がありますわ」
「……結構、です」
「言ってわからないなら、連れて行きますの」
あァさ。
頑固だな。流石お嬢だ。それでこそだ。
そォさ、事態を引き起こしたのァ私だ。ニヤニヤ丸眼鏡の言葉をソテイラに伝えてなきゃ、今のＥＤＥＮも国も平和だった。ＥＤＥＮに用ァ無いけど終の因にァ利用価値あるってアイツが言ってたのを、もっと深く考えりゃ良かった。伝言の内容をもっと吟味すりゃ良かった。
これを。

この惨状を齎したのァ、紛う方なき私なンだよ。
だったら――1つや2つの危険くらい、背負わねェとずりィだろ。
「――言ってわからねェなら、こっちの指示に従いな、お嬢」
「!?」
壊さないでね、って言われたっけ。
知らね。こォなるって教えてくれてたら考えたけど、もォいいや。
変装道具を解除手順踏まずに解除する。方法ァ簡単さ。発生させてる魔道具潰せばいい。
急速に元の色味を、形を、声を。
全てを取り戻していく私ァ、お嬢の目にどォ映っているのやら。
「あなた、は」
「なンだっけか。アイツに言われた言葉。そォだ――生きるために抗うってンなら。私がアイツを名乗るのなら。もっと笑わなきゃだ。こっから向かうのァ死地で、命のやり取りすンだから――私は私の死力を尽くさなきゃなンねェ場だからさ」
ハハ、と。

笑う。これでいいか、笑い方っつーのァ。
こんないびつでいいのか。こんないびつな奴で、いいのか。
でも、笑う。
アイツァ世界を何にも知らないけど、私ァアイツを何にも知らないから。
習った事を――倣って、言う。
「糸伊豆阿止利負不初殊図魚鞭初頭零図簿泥(それは、太陽の血肉、風の精神、夜の心で織り成す願いの物語)初頭縫図須碑立冬(有為亜図真員弩・」
心に浮かんだ言葉を言う。
鋭い痛み。これか。精神を傷つける、っつーのァ。
自分で言っててなんて意味かわらかねェのに、こォも傷付くンなら利点が無さすぎるな。
けど。
最後まで、言う。
最後まで――宣言する。
「――藍初殊不応地冬侘(私は続きを希う)・」
瞬間、世界が、全部が、私を見た気がした。

今まで、その苦しみから、痛みから、死ぬ事だけしか考えていなかった世界が。
アイツだけしか見ていなかった世界が。
その眼で、私を見る。
「今の、唸り声は」
「わかってるたァ思うがな、お嬢。金髪お嬢様。私ァ敵の方の梓だ。隔離塔にいねェ方の梓・ライラックだ。――けど、一時で良い。国を守るために、私と一緒に戦っちゃくれねェか」
「……」
落ちる。
落ちる。
もォ地面ァすぐそこだ。別に落ちても潰れる程弱い身体じゃねェんだけど。
ただ、なンか。
返事ァ空で聞きてェな、って。
「――当然、お断りいたしますわ」
「……だよなァ」

「ですから――どうぞご勝手に、前へお進みください、もう１人の梓さん。私は勝手についていきますので」
俯きかけた顔を上げる。
そこには、光があった。
「あァさ。ただまァ、あンまし見くびってくれンなよ。私ァ――アイツの何十倍も強いンでね」
「私はあの方の何千倍も強いですわ」
「……そりゃそォだが」
負けず嫌いだなァ、相変わらず。
って。
思わず、笑みが零れた。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えよ遙か彼方に《ｔｅｘｔ》

「おいアンゲル！　アンヴァル！　てめェら言葉通じンならちったァ耳傾けな！

――国に手ェ出すンなら、私が相手になるぜ。迷宮じゃ戦えなかったモンなァ――いっちょ腕試しと行こうぜ、オイ！」

「――断ル（理不事）・」

「そォかい。じゃァ死にな。馬鹿が、マトモに戦うなら潰す程度で見逃してやったンだが――ハハ！　安直ちゃん直属の魔物でもねェんだ、やりたい放題やらせてもらわァよ！」

クロスボウを亜空間ポケットより取り出す。

二丁拳銃ァ持ったままで、けどソイツのがいい具合の放物線を描くって知ってるからな。

「ハハハ、こンなトコで使う予定ァサラサラなかったが――食らえ、安藤さん特製、『疑似【青陽】ただし中身はないしただ見た目がそうなだけの奴』!!」

射る。

空を飛んでたアンゲル一匹にそれを射って――そこに、青き太陽が発生した。

「！」

「んで――弾けろ！」

別に私が叫ばなくても勝手に弾けるンだけど。

再現された何万分の一以下の熱量しか持たないハリボテの青い太陽ァ、けれどその熱量を水平方向に弾けさせる。元の奴ァ当てりゃ消し飛ぶンだろォけど、こっちァ単純に燃やすのさ。ハハ、国にァ行かねェよ。行く奴ァ別のだ。それァ使わねェ。

「梓さん、雑魚はお任せくださいまし！　貴女は貴女の守りたいものを！」

「ハ――アンゲルを雑魚呼ばわりたァいいねェお嬢。簡単に打ち上げられて一突きにされそォになってたのが懐かしい！」

「私は、強くなりましたので」

「良いさ。私だって強いんだぜ」

ミズメでも、もう一人の梓さん、でもなく。

普通に名前で呼んでくれたことが嬉しい。とか言ってる場合じゃねェんだわな。

金髪お嬢様の背中から、幾条もの光が放出される。それは流麗な曲線を描きながらアンゲルやアンヴァルに殺到し――その身を、何の抵抗もなく貫いていく。

本当に雑魚扱いだ。

すげェ。≪役割の統合≫ってなこォも――とか言ってる場合じゃねェわな。何回言う気だ。
落ちる速度を高める。
飛行魔法を併用し、ぐんぐんと進んでいく。目的地ァ決まってる。
家だ。
私の生まれた家。
家族のいる家。
「おいおい、何ひとン家襲ってンだよ。誰が許可した？」
周囲にいる魔物を拳銃で撃ちぬいていく。【即死】ほど便利じゃねェが、こっちのァ特別製でね。ハハ、効くだろう、生物なら。
終われ終われ。眠りの時間だ。目を瞑る時だ。
私の魔法ァ【即死】でも、況してや【致息】なンてよくわからねェもンでもねェ。
「【終焉】」
終われ終われ。
機能を停止しろ。安らかに、何も感じる事無く、終わっていけ。

魔法少女にァ許されざる力さ。魔法少女じゃねェから使える魔法さ。見てるか世界。【即死】じゃなくても――お前を終わらせる魔法が、ここにあるぞ。

「お姉!?」

「ン――よォ、久しぶりじゃねェか。元気してたか、菫」

「してたよ！　私はしてたけど、今は、お父さんが」

「――怪我したか？　それとも、戦ってンのか？」

「怪我、してる。軍に行ってすぐに足を噛まれちゃって、って」

「……そォか」

当然だけど、家族ァ魔法少女じゃない。

だから――殺しても、治せない。

「お姉――守ってくれるの？」

「はン、なンだ。随分としおらしくなったじゃねェか、菫。馬鹿が、家族守らねェで何守るってンだよ」

「だってそれは、お姉が」

近づいてくる魔物を殺して行く。
首を狙うのァ一番効率良いからだ。そこが一番、各器官に魔法を作用させやすい。【即死】と違って終わらせるだけなンでな。即座に死ぬンじゃなくて、終わっていく間ァちっと息があるのが難点だ。だから、的確に殺す。近づく奴を全部。
「菫、家ン中こもってな。母さんも父さんも戦えやしねェんだ、お前が守らなきゃなンねェ。で、外のァ私が全部やる。上で他の魔法少女も戦ってる。いいか、絶対出るなよ。朝が来る頃にァ全部終わらせてっからよ」
「……わかった。頑張ってね、お姉！」
「あァさ！」
ハハ――これも、本来ァアイツが受け取るべき声援だ。
知ってるよ。奪ったのァ私だって、ンなこたもう理解してる。幸運の均衡ァちゃんと私に傾いちまってる。だったら、奪った分の働きァしねェとな。
梓だ。
梓・ライラック。私はここにいる。
「今だけァ、魔法少女梓・ライラックだ。家も国も守ってやるよ、ってな」

亜空間ポケットを開く。
取り出す。取り出すのァ、長い銃身。そォさ。
私の、SRだ。
「よォ相棒、久しぶりだな。んじゃ早速だけど――酷使するぜ。行けるだろ」
スコープの倍率ァちょいと下げた。自分の視力だけで十二分に見えるからな。
家の上で飛行魔法を維持。近付く魔物を全部撃ち貫いていく。【終焉】の込められた弾丸さ。効くだろ。はン、てめェらァ仲間じゃねェからな、安らかに眠らせる、なんてことしねェよ。腹だの手足だのから、徐々に終わっていく自身に恐怖しな。
「――【気烈】！」
「国民の皆様は建物の中に！　この雲は視界を塞ぎますから！」
「ん？」
上の、つまり迷宮浅部の雑魚処理が終わったンだろう。自然形成の魔物ァ後から住みついた奴だからな、C級D級でも殺せる。だから、A級の奴らァどんどん地上に降りてきてンだ。もっと高位の奴らァ、たとえばお嬢とか太腿忍者とかっつーのァ逆に空飛んでる魔物の処理してるワケで。

だから、なンの因果か。
ここに揃ったワケだ。
「よォ――」
「随分と高位の魔法少女とお見受けしました！　微力ながら、助力いたします！」
「銃器を扱う魔法少女なんて初めて見るよ。それに、撃たれた魔物が全部死んでいっている。相当な使い手だね。近接の守りは任せてほしい、その力を存分に！」
「――あァよ」
そォか。
そォだったな。
私ァ今、梓だ。
ミズメじゃねェんだった。
……どっちも、ァよ。流石に欲張りってモンさ。変装道具ァ握り潰しちまったンだ、仕方ねェさ。もォミズメにァ戻れねェ。
こいつらと紡いだ時間っつーのァ、結局幻想だったってワケだ。
「――なんて、言うと思ったかい、ミズメ」

「薄々気付いていましたけれど、迷宮の時にはっきりしました。今も、です。――貴女、私達の事下に見過ぎですよ？」

「え？」

思わず、素っ頓狂な声が出ちまった。

手が滑って、なンてことァ無い。ちゃんと魔物を撃ち殺す。

「……誰だよ、それ」

「ははは、面白い事を言うね。君のことだよ、ミズメ。言いたい事があっても面倒だからって口に出さなかったり、これ以上やったら怪我をさせてしまうから、って訓練で手を抜いたり、歓迎会やパーティを楽しんでいいのかわからず、いつも苦しい顔をしていた君の事だよ」

「さっき言った言葉は全部本当です。最初から、そう思っていました。――高位の魔法少女とお見受けしました。ずっとしております。ので――貴女の戦いに、私達もついて行かせてください」

「ハ――ハハハ！」

あァ。

あァ。

これか。これかよ、梓。

成程なァ。自分を見てくれるっつーのァ、こんなにも気分が良いのか。ハハ、そりゃ笑いも出る。

「馬鹿が、騙されやがって。私ァ梓・ライラックっつーンだよ。ミズメなんて奴ァどこにもいねェ、どこの誰とも知れねェどっかの誰かさ。誰かでもねェ作り物さ。紛い物さ。お前らの信じた奴なんざ、どこにもいねェんだよ」

「それが何か？　ふふ、貴女は単純に猫を被っていた――ただそれだけでしょう？」

「ＥＤＥＮの都市伝説に聞く悪魔と同じ名前か。それはさぞかし強そうだ。――それで、君は何か変わるのかい？」

「その悪魔本人、っつったら？」

「心強いね」

「……そォかい」

亜空間ポケットから――安藤さんに貰った、買い手のいなくなった魔煙草を取り

出す。
起動法ァ、クソ、身体が覚えてやがる。
そりゃそォか。
アイツが一番使ってた方の腕が私なンだから。ハハ。ハハハ。
あ――不っっっっっ味ィな、オイ。
「リキュア、可能な限りの範囲に曇りを起こしてくれ。雷雨や雨雲じゃなくていい、曇り空だ。高さァちと低空。魔物も魔法少女も覆うくらいの高さでいい。厚みは出来る限り厚く、だ」
「ええ、わかりました」
「理央、あっちの学校周辺に行って欲しい。魔力が集中してる。あそこで誰か戦ってるかもしれねェ」
「了解！」
不味い。
本気で不味い。毒でも食ってンじゃねェかってくらい不味い。あ、ホントに毒なンだっけこれ。

正気じゃねェよ。
これを常に吸って、原材料食って、抽出した液体まで飲もうとしてやがるなンて。
正気じゃねェ。
だから、アイツあンなに楽しそォなンだろな。
だからアイツ、あンなに前向きなンだろォな。
「ならよ、だったらよ」
口に出す。
声に出す。
じゃァ、私がもっともっと、ケタケタ笑うためにァよ。
「もっと馬鹿やらねェと――追い付けねェよなァ？」
四足の構えを取る。
自分に入れられた魔物の精神体がなンなのか、って。
ハハ、教えられちゃいねェけど――覚えてるよ。もう私に完全に統合されちまったけど、ちゃんと覚えてる。
「リキュア、ここの守りァ任せた。地上に被害が出そォになったら雷を弾けさせて

ほしい。できるか？」
「――そういう魔法ではないと、何度も申し上げましたけれど。ええ、できます。任せてください」
「あァ」
飛行魔法を用いる。
翼だ。今ァ無い翼をはためかせていた。
爪だ。今ァ鋭くない大きな爪を持っていた。
尾だ。今ァ持ってねェ長い尾っぽを振り回していた。
その身ァうねり、その髭ァ靡き、その鱗ァ輝いていたんだ。
「歓べよ。その名が示すとおりに！」
駆け上がっていく。
泳いでいく。
そらを――大蛇のよォに。
終焉を歓べ。来たぞ。私が来たぞ。
「邪魔ヲスルナ（雌陀）」

「コレハ聖戦ナリ（理・単）」
「我ラハ神ニ仕エシ者（塔・地・思・惟）.」
「ハン、嫌ダネ（理不事）.」
聞こえるさ。
最初に迷宮来た時ァ、喋れるなンて知らなかった。聞こえて無かったもんな。
でも、私はもう、魔物の精神持ってるって自覚あるからさ。聞こえるよ、その言葉。被ってる奴ァあんまし聞こえねェけど、どーせ非難轟轟なンだろ？
ハハ。
知るかよバーカ。
知らねェだろ。14歳っつーのァな、一番聞き分け悪い時期なンだよ！
思春期だからな！
「【終焉】――終わりに身を窶せ、天なりし者の使い」
「【神光】が、全てを貫き通しますわ。この空に、貴女達の居場所はないと知りなさい！」
すぐ近くで、それァ聞こえた。

いいね。お嬢も雲の中で戦ってる。この雲の意味をわかってる。
「ハハ――笑え笑え。馬鹿やるンなら、とことん笑え！」
それが、梓・ライラックだからな！

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「さァて、今頃アイツが頑張ってる頃だと思うンで、俺ァこっち来たわけなンだわな」
「はい。私達に無断で、丁寧に分解した車椅子を自力で組み上げ、誰も引き連れずに来たわけですね」
「俺ァもう自分の守りとか考えねェことにしたンだ。俺ァ前だけ向いて進むンでね、勝手に誰かが守ってくれるし、守りに来てくれるだろ？」
「その妄信が下半身圧壊に繋がったわけですが」
「ケケ、そりゃ返す言葉も無ェってな」
「……なんか、仲良いですね、お２人とも」

冷静メイドの言う通り、お忍びもお忍びで迷宮の方に来てみたら、なんとこいつら待ち構えていやがった。

3人だ。冷静メイドと、暴走繭。

そンで――。

「……梓」

「おいおいまーだシケた面してンのかお前。そろそろ顔上げろよ、ポニテスリット」

始の点の時から、ずーっとギクシャクしてるポニテスリット。

この3人が、迷宮の内部で俺を待ち構えていた。誰もいねェなラッキー、って入って行ったらコレだ。一瞬で捕まって、今冷静メイドに抱かれてる。足が無いンでな、持ちにくいンじゃねェかと思ったら、案外そォでもないらしい。

「それで、ロクに走ることはおろか歩くことも立つ事もできない梓様。どちらへいかれるおつもりでしたのでしょうか？」

「決まってるだろ、ソテイラのトコさ。何があったのかァ知らねェが、迷宮の主にしかこォも迷宮ァ変えられねェよ。――こんな風通しの良い迷宮、どっからでも入り放題じゃねェか、なァ」

迷宮の、壁という壁。
外壁の全てが開放されている。
逆三角錐の、ちょいと頂点の少ないピラミッドだった終の因ァ――今ァ角張ったハチの巣みてェになってるわけだ。
なンで、迷宮の化け物達ァ湧いてァ出てって、湧いてァ出てってを繰り返してる。
キラキラツインテの話でもソティラの話でも、迷宮の化け物ってな迷宮の外じゃ生きられねェはずだ。だからホントに短時間の尖兵なンだろう。下の国を、上のＥＤＥＮを破壊して――どっかへ行く。
さっきからな。ちょいと移動してる気がすンだ。本当に少しずつだけど。
多分それが、狙い。
「なンでまァ、本格稼働する前に頭叩いて殺しちまおうかと思ってな」
「殺せるのですか？　梓様はもう魔物を殺せなくなってしまったかもしれない、と、アールレイデ様から聞いておりますが」
「私みたいにトラウマになってしまったと、私も聞いてます」
「……」

「あァ、そりゃ大丈夫。絶対躊躇するから背中ァお前らが押してくれ。押されても迷うだろォから決心付くまで守ってくれ。得意だろ？」
「素晴らしい身勝手です、梓様。防衛組防衛班エミリー隊がコーネリアス・ローグン。この身に代えず、この身もエミリー様も縁様も守りつつ、梓様も守り通します」
「１００点満点さ。んじゃよ、冷静メイド」
「はい」
唯一無事な左手で――地面を指さす。
迷宮迷ってる暇ってないンだわ。たとえ外壁開放されてても俺が外伝ってくにゃ敵が多すぎる。
「最奥までぶち抜いてくれよ。俺が迷宮殺し尽くしてもいいぜ」
「お手数はおかけしません。――【侵食】」
「じゃあ、私が少しだけ手伝ってしまいましょうか」
肌色になる地面。明らかにヒトの皮だ。見る奴が見りゃ気持ち悪くなンじゃねェかって思うそこを――細い糸が通る。肌色に罅を入れて、突き進んでいく。
これが、暴走してない状態の【壊糸】。Ｓ級特殊魔法。世界の隙間に入り込み、

破壊を齎す罅なりし者。

「――開きました。行きましょう」

「あァよ。ポニスリ、来る気ねェんなら他のトコの応援行きな。こっから先ァ、ちゃんと死地だぜ」

「……行く。そう決めた」

「はン、なら来いよ。下なら大丈夫さ。なンたって、悲鳴が聞こえねェ。みんなが全部守ってる証拠だ」

「わかっている」

冷静メイドに抱かれて、その穴を落ちて行く。

ポニテスリットも暴走繭も。ちなみに車椅子ァ迷宮の外に置いてある。流石に持ってァいけねェんでな。

「飛行魔法や【侵食】による速度減衰も実行できますが、如何いたしましょうか？」

「ポニテスリット、【波動】でいけるだろ？」

「ああ。【波動】！」

本来、浅部の迷宮の壁ってな壊しちゃいけねェもんだ。だからポニテスリットァ

本気出せてなかった。

けど、もォ潰していいンなら、話ァ別、ってな。

俺達の周囲に出来上がる不可視の力場。それが、開けた穴の周囲をグシャグシャと潰していく。逃げ遅れた化け物も、迷宮の構造も、一茶合切を潰して、一瞬で最深部周辺まで来た。

流石にここの壁ァ壊せないらしい。【波動】では。

「ご安心ください。最深部周辺の迷宮は、この貫通した穴以外私の糸で埋まっていますので――どのような魔物が湧こうとも、外に出る前に壊れます」

「……鬼教官の【痛烈】も相当だけど、暴走繭もちゃんとこえーなオイ。つかお前の【侵食】も怒りしょんぼりの【劇毒】もだけど、やべーのの粒揃いじゃねェか」

「【即死】が一番かと？」

「エグさァ負けるよ。【即死】ァ一瞬なンでな」

じわじわ蝕んでいく【劇毒】。世界を自己に変質させる【侵食】。触れたものに罅を齎し破壊する【壊糸】、見ているモノ全てに激痛を与える【痛烈】。

怖すぎだろ。敵に回したくねェ。

その点【波動】と【即死】の優しさよ。
……いやまァ【即死】ァまァまァまァおいとくとしても。
「私も、もう少し威勢の良い魔法の方が良かったのだが」
「馬鹿お前、これァ威勢がいいンじゃなくて――」
ダガーに【即死】を纏わせる。
そしてその槍を、殺す。
「恐ろしい、ってな言葉で表すンだよ。よォアンゲル。居残りか？」
「……恐ろしさで言えば、お前が一番なのだがな」
やっぱり誰も知覚できねェか。
あの頃のたァ言え、【神速】状態のお嬢が反応できなかった速度だ。それが複数体放たれて、けど国民の悲鳴を生んでない今の魔法少女ァすげェよ。頑張ってる。
アイツも、多分【神光】になったお嬢も。
んじゃこっちも頑張んねェとな。
「梓様。世界言語の使用は禁止です。ディミトラ様、ナリコ様、他、複数の方々より使用禁止令が出ています」

「ヘェ、なンで？」
「貴女に死んでほしくないからです」
「――そりゃ、最高だな」
もう一回。今度ァ盾による突進だった。見えてねェ。反応できてねェ。
俺だってそうさ。ちゃんと知覚できてるわけじゃねェ。けど、どこに行けば死なないかわかるから。
どこに【即死】を置いとけば、相手が来るのかもわかるってなスンポーさ。
「なァ、暴走繭。羨ましいだろ。仲間に死んでほしくないからって、効率の悪い作戦を取る魔法少女がこんなにも増えたンだぜ。ハハ――いいじゃねェか。仲良くおてて繋いで歩こうぜ。誰も死なねェ道をさ」
「ええ、これほど素晴らしい事はありません。そして」
俺のダガーが向く先に、【壊糸】を伸ばす暴走繭。【波動】を展開するポニテスリットに、地面の【侵食】を試みる冷静メイド。
そうさ。
俺が反応できるンだ。じゃァ、俺に反応すりゃいい。

それでアンゲルの対処ァできる。
「SS級の皆さんには申し訳ないのですが――≫役割の統合≪というものが何なのか、S級の私が先に理解してしまいましたので」
そう、にっこり笑って。
暴走繭ァ――地面に、手を付ける。
「行わせていただきます。――握玉琉或琉太布泥椅子或紫龍渡視人或丹治琉（魔法のダウンロード及びアップデートインストール完了しました）。【壊糸】を【壊線】へと新規登録。私、エミリーは、役割を2つ統合し――新生します」
この階層の床が、完全に破壊された。

「申し訳ありません、エミリー様。≫役割の統合≪やら何やら私にはよくわからないのですが、こういう大規模な事をするのでしたら事前に言ってもらえないでしょうか。これは梓様にも常日頃から言っている事なのですが、何事にも準備というものがございます。――それはそれとして、美しいお姿です。エミリー様」
「ごめんなさい、ローグン。でも、ほら。アンゲルも倒せたし――黒幕も捕らえた

ので、良しとしてね」
「――……君かぁ」
≫役割の統合≪。
唐突に起きた暴走繭のソレァ、アンゲルごとアンゲルのいた階層を全部ぶっ壊しやがった。
気のせいじゃ無ければポニテスリットの【波動】も壊れてたし、俺の【即死】の魔力にもちょみっと干渉してきたよォな。
まァんな考察ァ後でやりゃいいのさ。
今ァ、コイツだ。
「よォ、ソテイラ。久しぶりだな。今度ァちゃんと、自覚を持って否定しに来たぜ」
褐色肌に、プラチナブロンドの美しい長髪。背筋も姿勢もスラっとした女性。ポニテスリットよりも深いスリットの入った黒い服と、ところどころのシースルーがぶっちゃけ眼服だ。もォ隠さないけど普通にそォいう目で見れる。
が――わかる。前の俺たァ違うンだ。
こいつが、違う、って。

わかる。

「お前、前言ってたよな。魔法少女と人間と獣以外を化け物とするのなら、そうだ、って」

「そうだねー。言ってたねー」

「ちげェな、お前ァ神に近い。聖獣って奴だろ。始の点にいたアードゥムラとブゥリに近いなンかだ」

「……そうだとしたら、それは魔物じゃないのかな？」

「いいや？　ただの確認さ。暴走繭の魔法に囚われて動けないよォだが――隙あらば俺達を殺そうとしてる。のほほんとしてやがるがな、その目に殺意しかねェ。だからよ、ちょっと聞きたいンだ」

「なにかなー」

にこにこと、のほほんと。

――ヒシヒシと。あァ、殺したくて殺したくてたまらねェって、そォ言ってるぜ。なァ、あンたの神さんァよ、ウチの神さんとも親交あっからよ。

ちったァ迷ってやる。

ちったァ問答してやる。
なァ。
「お前、生きたいか？」
「そりゃ勿論だよー。生きて、殺して。魔法少女をこの世から消し去って、人間も消し去って、私達は行かなきゃいけない場所があるからねー」
「そォか！　アハハ、そりゃいいな！　嬉しいぜ、ソテイラ」
その顔を、掴む。
――やっぱり俺の価値観ァ、倫理観ァ、狂ってるらしい。
カンコウの時ァあんだけ泣いたぞ。こっちァ初対面じゃねェ、なンなら親交のある方だ。ハハハ。
だってのに――こんなにも、殺意が湧く。
「否定するの？　殺すの？　――私を。君は、殺せるの？」
「あァ。可哀想にな、たァ思うぜ。お前、捨てられたンだろ。自分の信仰する神から。それが迷宮を作った奴なのか、外にいる誰かなのかァ知らねェけどさ。――ダメだよ。捨てられたからって、自暴自棄になったからって。狙うモン違えたら――

俺の敵だ」

「……そっか。そっかぁ。そっかぁ。君、夜の使徒だったんだー。魔法少女の身体だし、魔法持ってるから気付かなかったよー。――ねぇ、見逃してくれないかな。もう悪い事しないからさ。同じ夜の使徒なんだしさー」

「ダメだ。お前ァやっちゃならねェことやったンだ。死者は死者の国に帰りな」

発動する。

魔法、【即死】。躊躇いなく、躊躇なく。

ヒトガタで、会話できて、その過去も今知って。

けど、見逃してくれないか、なンていいつつ、最後の最後まで反撃の機会を狙ってたソテイラを――殺す。

暴走繭の不可視の線に捕えられたまま、カクンと首を落として動かなくなったソテイラ。

身体には徐々に罅が入っていき――最後には、パキン、と。

バラバラに砕け散った。

「……殺した、のか」

「すみません、砕くつもりはなかったのですが、唐突に抵抗が消えて……」
「あァ、俺が殺したからな。まァここで悠長に喋ってる時間ァ無いんだ。ポニテスリット、お前にしか頼めねェことがある。やってくれるか」
「な、なんだ？」
「簡単さ。――もォすぐこの迷宮が落ちちまうンで、最大級の【波動】でぶん殴って国の上から飛ばして欲しい」
「――そう言う事は溜めずに早く言え!!」
いやァすまねェな。
迷宮の主殺しても学園長殿の魔法ァ有効なンじゃねェかと思ったら、普通に切れるでやんの。多分ここがもう終の因じゃなくなったからだと思うンだけど、それにしたってもちっと準備しとけって話だ。
まァ、もうＥＤＥＮァ固定されてない。
ポニテスリット以外の奴でもぶん殴って飛ばせるだろォが、【波動】が一番効率良いわな。
「よォし冷静メイド、暴走繭。俺達も脱出するぞ」

「アールレイデさん達からは〝梓さんは時折馬鹿ですけれど私達への指示や作戦立案などを熟す頭の良い方ですのよ〟なんて聞いていたんですけど、時折じゃなくて根っこからの馬鹿ですね？」

「エミリー様。梓様は日を追うごとに馬鹿になっていっているだけで、初めの頃はもう少し冷静でマトモな方でした」

「しょーがねーだろ魔法少女ってな馬鹿しかいねーンだもん。合わせてたらこーなるって」

「ほう」

まァ、大丈夫だ。

保険ァかけてある。なんでもできる便利屋さんに手紙出しておいたンだ。

実際落ちまったら惨状も惨状なンでな。

「【波動】！」

「誰が便利屋よ！　ちゃんとマッドチビ先生って呼びなさいよ！　【鉱水】！」

「ククク――鳥の形をした式鬼で文通がしたい、などと言い出した時はようやく乙女になったか、などと思ったが――」

「ぶっ飛べ、ＥＤＥＮ！」

ぶっ飛んだ。

十二、夢幻編

71・法被場須禰〕百木長・

「ま、引き際って奴さな」

ぶっ飛んでったＥＤＥＮからも、国からも離れて一人呟く。

疑似【隠涜】の機能ァすべての魔法少女の目を欺いて、私をあの場から離脱させた。

ＥＤＥＮが離れると同時、永遠に続くかに思われた魔物達の侵攻ァ、その身体が消え行くとともに終息を迎えた。迷宮の魔物ァ迷宮の外でァ生きられない。ソテイラやキラキラツインテの言ってた通りだったってワケだ。

いやまさか私も終の因がＥＤＥＮごとぶっ飛んでくたァ思っちゃいなかったけどよ。

……これで良かったのかね。

多分、ニヤニヤ丸眼鏡の意図してたコトたァ違うンだろォし、こっから先のＥＤＥＮがどォなるのかも全く以て予測がつかない。予想も推測も、憶測さえもできない。

もしかしたら私達の野望を阻害する行為だったのやもしれねェ。

けど。

「最後に家族と、あいつらの顔見れたのァ、でけェな」

「えー。お前会ってきたのかよ。ずりぃー」

「!?」

あり得ない。

疑似【隠涜】ァちゃんと機能してた。現に他の魔法少女ァ誰１人として追ってきていない。

だってのにコイツァ。

……えーと、なンか変な形の鳥みてェなガーゴイル、なンて言ってたっけ。プテラゴイル？　に下半身埋めて――ここまで来た。

「よォ。なンでついてこれた、みてェな顔してるけど、別についてきたワケじゃ

ねェよ。もし俺がそっち側で、混乱に乗じて逃げるとして、且つ口惜しさから国を一望できる場所っつったらドコかねェ、なんて考えて当たった場所の3個目だ。1個目に居ろよ馬鹿が」

「知るかよ……」

コイツ、わかってンのか？

私が逃げてくるって事ァ。

私が、この場所に逃げた、って事ァよ。

「あら、久しぶりね。そしてボロボロね」

「よォマッドチビ。そっちも壮健そうで何よりだ。んで、安藤さんに……そっちのァ、お初かね」

私の迎えが、いるってことなのに。

「ふん、アンタはいつ見ても怪我してるね。ちゃんと飯は食べてんのかい？」

「あンま食ってねェけど、時たまコイツが飯持ってきてくれるんだよ。ハハ、安藤さん。コイツ、結構俺ンとこ来ちゃお悩み相談とかしてくンだぜ」

「へぇ？　そんなに仲良くなってたのかい」

「なってねェって！」
　プテラゴイルに身を埋めたコイツァ１人だ。単独だ。
　対してこっちァ大所帯さ。私含めて４人。私とマッドチビと、安藤さんと――。
「話には聞いている。――お前が、梓・ライラックか」
「よォ、てこた、てめェがゲヘナか？　それともジャハンナムか？　はン、どっちも一緒だよなァ？」
「成程、聞いていた以上に学はあるらしい。だが、この場にたった１人で現れた事には感心しないな。こちらの戦力はわかっているのだろう？」
「節穴かてめェ。コイツがいるだろォが。相棒だぜ俺の」
「……それは、ガーゴイル種だ。魔物だが、わかっているのか？」
「ア？　なンだてめェ俺の眼を節穴だって言いてェのか。初対面の奴によくもまァそんな悪口吐けるな。感心するぜ」
　馬鹿が、刺激すンなって。
　ニヤニヤ丸眼鏡ァ案外心狭いから痛い目見るぞ！
「ソテイラを、殺したな」

「あァ。なンだ、お前が唆したのか？　それともアズサか？」
「私が唆した。梓は私の言葉を伝えたに過ぎない」
「へェ、庇うのか」
「事実は正確に伝えなければならない」
「そりゃごもっともで」
ソテイラを。
殺し、た？
「待て、お前……ソテイラを殺したのか？」
「あン？　たりめーだろ、アイツァ化け物だぜ。それも、国を魔物に襲わせた最悪の化け物さ。殺して当然だろ」
「殺さなきゃ、いけなかったのか？　――それァ、必要な犠牲、なのか？」
「何言ってンだ。――無意味な死だよ。アイツもっかい屈服し直して、契約の軛をもっかいつけりゃ、普通に生き永らえたンじゃねェの。契約だのなンだのを俺ァ知らねェが。そこんとこどォかね、ニヤニヤ丸眼鏡」
「あは、凄い。こっちの梓と同じあだ名をつけるのね、貴女」

「センス大体一緒だからな」
あいつァ。
ソティラァ、直前までアンゲルとボードゲームしてるよォな。普通に会話出来て、普通に迷宮の魔物達と仲の良い――生きてる奴、だろ。
生き物だ。生物だ。中身ァ確かに違うのかもしれねェけど、魔法少女や人間となんら変わらねェはずだ。生きてるコトァ、何も。
どころか、生き返りもしないンだぞ。家族やガッコの連中とかと同じ、一個の命しか持ってない奴なンだぞ。
それを殺して。
なンでヘラヘラ笑ってやがる、てめェ。
「確かに、再度調伏し、契約を結び直せば可能ではあっただろうな」
「そォか。ま、知っててもやらなかっただろォけど」
「【終焉】」
「【即死】」
魔法が、殺される。

……終わらせられない。

「おいおい、今更来るたァ思ってなかったぜ。やるタイミングなんざいっぱいあっただろ。まァ今みてェに単独になった方がやりやすいのァわかるけどよ」

「――やっぱりお前ァ私じゃない。感性が大体一緒だなンて嘘だ。――私だったら、ソテイラを殺す事ァない」

「あァそこで引っかかってンのか。俺だって対面する直前までァそっちだったよ。殺すつもりなんざ一切無かったし、どうやっても殺さなきゃいけねェってなったら死ぬほど迷うつもりだった」

「じゃァ、なンで」

「簡単なこと。同じ夜の使徒だから、だろう？」

ニヤニヤ丸眼鏡が。

にやにやと、厭らしい笑みを浮かべて――言う。

「ヘェ、ちったァ学があるみてェだな、はじまりの魔法少女サンってな」

「ふん、私に知を説くとは、大きく出たな」

「夜の使徒だったら」

「ン？」
また煽り合いを始める2人に、割って入る。
認められない。
「夜の使徒だったら――ソイツがたとえ、人間でも。お前ァ殺すのか？　殺す必要がなくても――ソイツの命が、一個でも」
「別に模範的な夜の使徒なら殺さねェよ。ソテイラァ向けちゃいけねェモンに矛向けたから殺したンだ。つか、なンだその条件。俺ァそォいう区別ァしてねェんだよ。殺す必要があっても、夜の使徒でも風の使徒でも太陽の使徒でもねェ奴だったらさ、命が幾つあったって俺ァ躊躇する。つか、殺せねェ。ずっと言ってるだろ」
「なンでだよ。――おかしいだろ、それァ」
「おかしィのァお前らだよ」
違う。
やっぱり違う！
こいつァ、目の前の女ァ。
私、じゃない。

完全に――別人だ。

「ま、その辺にしておきなさい。ほら、梓。帰るわよ。もうあの国にも、ＥＤＥＮにも、壊れた終の因にも価値はないの。それに――準備は整ったから」

「ふむ、命拾いをしたな、梓・ライラック。今は手元に空の精神核が無い。あればその精神を引き抜いたものを」

「馬鹿言え、そこまで近づかれりゃ手足だの臓器だの殺して動けないまま一生を終えさせてやるよ」

「ほう、やってみるか？」

「なんだい、折角完成までこぎつけたのに、決別かい？　じゃあこれは要らないね？」

「おォ待て安藤さん。なンだその足みてェなの」

「義足だよ。この子に作ってほしいって頼まれてたのさ。けど、今そんな気分じゃなさそうだろ？　だからまぁ、壊しはしないけど、預かっておくよ」

「えー、くれよー」

「馬鹿だねアンタ。アタシらは敵同士。今ここで命奪われないだけ良しとしときな

！」
「えー、くれよー」
「聞き分けの悪い子だね！　ダメっつったらダメだよ!!」
「えー、くれよー」
「……【業焔】」
「ちょっとアニマ、こんな至近距離でそれ使わないでよ。って、あぁ、私の知識も総動員した義足が溶けて……あぁ」
「私も少し手伝ったが、まぁ怒らせたアイツが悪いな。アニマが怒るとなると、相当だ」
「そうね。私も滅多に見ないから驚いているわ」
「うるっさいね師匠もゲヘナも。別に怒ってないよ。ゴミを処分しただけさ」
うるさいのァアンタら全員だ。
私ァ今怒ってンだよ。気ィ削ぐンじゃねェ。
「おい、そこの馬鹿」
「ア？」

「敵同士なンだろォが。肩組もうとしてきてンじゃねェよ。どォせ幸せのバランスとか分配とか面倒なコト考えてたンだろォが、そもそもが間違ってンだよ。いいか？　あの時認めただろ。思い出せよ」

「……」

「俺ァお前を否定しねェ。お前ァこの世にいていいんだ。俺ァもう認めてンだよ、お前を。世界ももうそろ認めただろ。お前が梓・ライラックであり続けるか、ミズメを選ぶかァ知らねェけど、もう俺から別たれたから、とか、俺が受け取るべきものだったから、とか、そんなの考えンな。お前程度が責任背負えるほど俺ァ軽くねェんだよ」

それァ――確かに、言われた。

あの時。

世界になど屈するなと。死を前提に考えるなと。

目標さえ達成したら、死んでもいい、なんて。死んでも考えるな、と。

「いいか？　何度も言うぞ。俺とお前ァ別人だ。同姓同名なだけの別人だ。俺が俺に入園祝いなんざ贈るわけねーだろ。俺が俺に話しかけられて喜ぶわけねーだろ。

訪ねられて、飯貰って、相談受けて。それを喜ばしいと、楽しいと。そォ思うワケねーだろ、馬鹿」

アイツの手の内で、魔煙草が起動される。

私ァ、しない。あんなクソ不味いもの喫まない。

「俺とお前の考えが違う、なンて当たり前なンだよ馬鹿が。馬鹿が。ばーかばーか。馬鹿がよ。だから、とっとと行っちまえ。決別だし決裂だ。お前ァお前のやりたいこと勝手にやってやがれ。それが俺にとって邪魔だったら、全力で殺しに行く。邪魔じゃなかったら、また一緒にピザでも食おう」

「……嫌だね。なンでアンタなんかと飯食わなきゃなンねェんだ」

「パルリ・ミラのパフェでもいいぞ」

「……それァ考えとくけど」

「そこで揺れるのかいアンタ……」

うるさいな安藤さん。

そこァ譲れねェんだよ。コイツしか本店知らねェんだし。

「まァこんなとこだ、お前に言うのァ。んでそっち。安藤さんァ、まァまた今度

ゆっくり話そうな。あるだろ、多分。話せる時間。だからいいとして――そっちの3人」
「あれ、バレてるのだ!?」
「馬鹿が、カマかけに引っかかりやがって」
「騙されたのだ!?」
言うだけ言って、矛先を変えた。
……クソ、結局コイツが主導権握ってやがるじゃねェか。
これじゃ、私が。
「まずマッドチビ！　マッドチビ先生からの伝言だ。〝もし会うことあったらアンタ裸にひん剥いて反魔鉱石で固めて永世街中に飾ってあげるから覚悟しときなさい〟だそぉで」
「それは嫌なのだけど、それってつまり自分の裸の彫像を街中に晒す事になる、ということには気付いているのかしらね」
「多分気付いてない。あの人ポンコツだから」
「そ。まぁ覚悟しておくわ。長い間隙間でこそこそやらせてもらっていたわけだし」

「おゥ。で、次ゲヘナ」
「なんだ。私にも伝言があるのか？」
「いやあるわけねーだろ。ただ、ウチの神さんからな。〝嫌われものは帰ってこなくていいですよ〟、だそォで」
「なるほど。余計に帰りたくなった」
「んで、そっちの！　名前ァ!?」
「ぷ、プリメイラなのだ！」
「了解、ピンクカチューシャな」
「安直!?」
……これじゃ、私だけが、気にしてる、みてェじゃねェか。
クソが。
いつか絶対わからせてやる。こっちの考えのが正しいンだって。お前ァ間違ってる、って。
私は。
「やっぱり、助けなきゃよかった――って、思ったか？」

「……思うわけねェだろ。でも今死ねって思ってるよ」
「ハハ、そりゃいいな。あ、そォだ。一応言っておくぜ。――ミズメの名前ァ学園に残すよォ打診しといてやる。全部終わってわだかまりなくなったらもっかい通いに来いよ。単なる不登校児として扱われるだけだからよ」
「うるせェ。……理央とリキュアって魔法少女にァ、絶対手ェ出すんじゃねェぞ」
「えー、横取りしちゃおっかなー」
魔法を放つ。
殺される。
やっぱりダメか。
「はいはい、今度こそ行くわよ。それじゃあね。次会う時は、宙の莽かしら？」
「あァ。天幕の向こうで会うンなら今度こそ本気だ」
「やはり学はあるな――どうだ、今からでも私達と共に」
「ゲヘナってたまに馬鹿なのだ。今のはどう考えても〝ここは今生の別れに非ず。しかして友誼を結ぶでもなく、ただ背を突き合わせ、己が道を進むのみ〟の状況なのだ。今から手を取り合うとかどー考えても無理なのだ」

「馬鹿な話してないで、ほらほら行った行った。いつまでも駄弁ってられるほど時間はないよ」
「……」
「アンタもいつまでやってんだい！　ほら行くよ！」
首根を引っ掴まれる。
ちょ、ちょい安藤さん、結構苦しいそれ。結構苦しいそれ！
「――なァ、神さん。今日くらいァ、法被場須禰にしときなよ。これくらいならいいだろ、意味を持たせなきゃ」
そんな声を聞きながら。
私達ァ、森の中へと消えて行った。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ふらっと後ろにぶっ倒れそォになった所を、誰かが受け止めてくれる。
誰だろォな、と上を見上げりゃ、そこにァ怒った顔の逆さお嬢。

絵に描いたようにぷんす、としている。はぁん？　これァ、怒ってるな？

「貴女、自分が生命維持に用いる魔力の消費だけで一日の半分を眠って過ごしている、という事実を自覚していますの？」

「知らなかったよ。教えてくれてありがとう、金髪お嬢様」

「……余裕ぶって、今日何回魔法を使いましたの？　貴女の行う、魔法を殺す【即死】も含めて、何度使ったのか言ってみてください」

「数えてねェよ。何回も、だ」

「それで、今。――体力は？」

「はン、っとに頭悪くなったなァお嬢。――ぜろ。もうむり」

はぁ～、と大きなため息。

ハハ、仕方ねェだろ前しか向けねェんだから。もう上体を起こしていることすらできねェ。完全脱力状態だ。呼吸も、なンなら会話もキツイ。目を開けてるのも厳しい。

くそめ、アイツの魔法、【終焉】だったか？　使いやすそうな魔法使いやがって。遠隔じゃねェか。しかも殺すのにかなり魔力持ってかれるし。

それでいてアイツ素の身体能力も高けりゃ魔力量もあるとか、ちぃっとくらい寄越しやがれってンだ。しかも家族にも会ってきたとかずりぃ。あと安藤さん折角作ってくれた義足溶かしてくれやがってよ。【業焔】ってそんなに温度あるンだな。こっわ。

「……帰りますのよ」

頷くこともできない。

ただ、閉じて行く視界に。

もう一度、法被場須禰と呟いた。

口ァ動かないんで心の中で。

――起きたわ。

「起きたわ」

「起きたか、梓」

「おお、ポニテスリット。大丈夫だったか？」

「3日眠っていた奴の言葉ではないな」
「マジでか」
「嘘だ。本当は2日だ」
「変な嘘吐くンじゃねェよ」
が、どっか吹っ切れたよォで何より。
で……ここァどこだ。
「ここァどこなンだ」
「EDENだ。私が殴り飛ばし、ディミトラが後押ししたことで北方の山脈に突き刺さったEDEN。下部の迷宮はもう機能していないとの話で、ディミトラが全て【鉱水】に変えて、EDENの再建に当てた」
「マッドチビ先生すげェ」
「今尚尽力中だ。終始≫なんで私が……≪とか≫鉱石の支払い追加忘れないからね≪とか≫あと生徒達の授業料も取るから！≪とかなんとか呟いていたが、とてもまじめで丁寧な仕事をしてくれている」
「あァまァマッドチビ先生律儀だからなァ」

……楽園ァ、堕ちた、ってワケだ。
これ、どォなンのかね。
国ァさ。魔法少女の因子を持ってる奴らァ、終の因から放たれる膨大な魔力を常に浴びせられていたよォなモンだから、魔法少女に覚醒しやすくなってた。それが……終の因が無くなって。
覚醒しにくくなった、ってだけで、する可能性ァ、あるンだよな。
それ以上に——終の因が無くなったンだ。
世界を巡る魔力ァ、いずれ飽和し、天幕を破る。それが狙いなンだろォけど。
はァ、ちィっと冷静になりゃ色々見えてくるワケだ。
「国ァ？」
「防衛組が防衛している。だが、今後については国側とよく話し合う必要があるだろう。国民をこちらに来させるか、私達があちらへ行くか」
「もしくァ、アイツらが化け物に襲われねェよォにするか、か」
「できるのか？」
「ン？　言ってなかったっけか。化け物が人間を襲うのァ、魔法少女の因子持っ

てるからだ。だからソイツさえ殺しちまえば人間ァ他の生物と同じに成り下がる。つまりまァ、食料として見られることァあっても、大侵攻なンかで狙われるってな無くなるのさ」

「……成程」

だから俺がとっとと復帰して魔法少女の因子殺しをやんないといけねェんだけど、まずァ魔法少女の因子を見分ける方法と、果たしてソレを殺して健康被害が出ないかってのと、そもそも俺が上手く魔法少女の因子を殺せるか、ってのと、更にァ一日にできて10人くらいだろォってデメリットがあって。

まずこの、生命維持に魔力使わなきゃいけねェ状況を脱したい。

だから≪役割の統合≫とやらで肉体の新生？　ってなができりゃいいンだが……

あァそォいえば。

「ポニテスリット、暴走繭がどこ行ったか知らねェか？」

「エミリーなら、国だろうな。防衛組だぞ、彼女は」

「あァ確かに」

あとお嬢か。

この2人に≫役割の統合≪がどォいう感覚なのか聞いて、とっとと済ませねェと。
ふゥ。
「で、お前なンでここにいるンだ？」
「決まっている。お前の看病を」
「いやでもお前ポニテスリットじゃねーじゃん」
そのまま部屋出てってくれたらよかったンだけどな。
やめてくれよ。こっちァ疲れてるンだって。
「……何が、だ？」
「いんやさ、ポニテスリットがンな単純な事で吹っ切れるワケねーだろ。アイツァ落ち込んだらどこまでも落ち込んでいくタイプだよ。余程でけェ事ない限り吹っ切れねーって。あとこの因子の説明ァポニテスリットにしたし」
「……」
ポニテスリットをナメすぎだよ。
アイツ、アズサが来てから何か月か経った今でさえ落ち込んでたンだぞ。どんだけだと思ってンだ。一回仲直りできねェとそれがずっと心残りになっちゃうけど

やっぱり言い出せなくて困って困って抱えて抱えて声を掛けて欲しいけど掛けて欲しく無いしかけられたらかけられたでなんて言えばいいかわからないからうむとかわかったしか言えないし、みたいな奴だぞ。

——不器用な奴さ。絵具髪にちょっとだけ似てる。

「そこまで理解していたなら——何故私を殺さない。そうだ。私はミサキ・縁ではない」

「なァ、何なんだお前ら。アズサもだけどさ。人を殺人鬼みてェにいいやがって。俺ァ殺すの嫌だって言ってンだろ。そンな事も理解してねェでポニテスリットに化けたのか。ちっとァ調べて来いよ」

「それは、悪かった」

「謝るんかい」

なんだコイツ。

素直だなオイ。記憶失ってる時の紺碧ベルトみてェだ。

「……」

「……」

「……」
「いや、なンか言えよ。お前がなンでここにいンのか、お前が誰なのか、ここァホントァどこなのか。はい順番に言う！」
「ふむ。まず、私がここにいる理由は、家主だからだ。私が誰かというと、難しいが、村の者には村長と呼ばれている。ここが実はどこなのかというと、ううむ、難しいが、夢の中、という表現が最も正しいだろう」
「あァさ、頭おかしィのかお前」
「それは否定しない。何故なら自分の名前も覚えていないからだ。いつからここにいるのかも、いつまでいなければいけないのかもわからない。ただ、私は人の記憶を夢として見る事ができる。故にこうして他人の姿や言葉を借りて、適当な理由を付けて漂流者を引き留めている。貴女のようにすぐに気付く者も多いが、たまに信じてここでの滞在を決め、今まであった事などを言葉として話してくれる者もいる……という感じで、伝わるだろうか」
「おォ大丈夫だ全部伝わった。説明ァ上手いなお前」
「ありがとう。褒められるのも久しぶりだ」

うーん。
うーん？
……これ、アレか？
幽体離脱〜、で、ヘンなトコ迷い込んだか？
やっべ。
これ2日3日どころの騒ぎじゃないくらい寝てる可能性あるぞ。
早く帰らねェと。
「ちなみにこっから出る方法ァ？」
「夢から醒めればいい。眠りから目覚める事が、此処を出る唯一の手段だ」
「あー、んじゃ、たとえば、だけどよ」
「ああ」
「体が超絶疲れて、2日3日も眠りこけちまってたら——どォなる？」
「当然だが、出ることはできない。こちらと現実での時間差というのを私は測った事が無い。故にどれくらいの差があるのかもわからないまま、ここでゆるりと過ごすしかない」

「あー」
あー。
あーあー。
「もっかい聞くけど、ここ、夢なンだよな。村の名前とかあるか？」
「夢の中で合っている。村の名前はカシヨ」
「村の者にァ村長と呼ばれてる、つってたよな。他に村人がいンのか」
「それなりにはいるぞ。恐らくは、長い間眠り、そのまま目覚めなかった者達だ。ここに定住し、しかして死していない者。死者はこの村には訪れないからな」
「あァそりゃ知ってンだけどな」
ってことァ、だよ。
ってこたァ――いそォだな。
「騙してすまなかった。引き留めるつもりはない。夢から覚め、現実へと帰ると良い」
「それができたら苦労してねェ、ってな。ハハ、俺ァもちっと寝ないと起きれねェくらい疲れてたのさ。しばらくこっちに世話になるよ」

「そうか？　それは嬉しいな。夢だけではわからない事も沢山ある。いろんな話をしてほしい」
「あァよ。村人とも交流していいのか？」
「勿論だとも」
一応、手足を見る。
……全部ある、な。おじさんのソレじゃねェが、梓・ライラックのそれだ。
五体満足の、梓・ライラックだ。
おー。
腕。足。久しぶりだなァおい。
「起き上がれるか？」
「ン、大丈夫。現実じゃ無かったからよ、ちょいと感動してただけだ」
「無かった……そうか。夢には出てこなかったが、つらい事があったのだな。大丈夫、カシヨの村では誰もが健康だ。誰もが悪意を抱くことなく、理想のままに穏やかに暮らしている」
「夢みてェだな」

「夢さ」
ベッドから起きて――足で、地を踏む。
おー。感触もちゃんとある。夢って言われなきゃ気付かねェなァこりゃ。
服ァ……あー、制服なのね。魔法少女の衣装じゃねェのァ、……ま、後で試してみりゃいいか。
「俺もアンタの事村長って呼んでもいいか？　そこまで長く滞在するつもりァ無いんだけどよ」
「勿論良いとも。それと、衣服や嗜好品についてだが、深く思い浮かべることができれば出てくる。夢だからな」
「へェ」
じゃ、思い浮かべンのァパルリ・ミラのパフェ――じゃなくて、魔煙草。
おお、ホントに出てきた。
……好き好んでこのクソ不味いモン喫んでるワケじゃなかったはずなンだけどなァ。
「あー、染み入る」

「味などは貴女が覚えている通りだが、流石に植物や薬物の効果までは再現できないらしい。前にここにいて、けれど立ち去った者がそう言っていた」
「そォかい」
確かに、脳がスッキリする感じァ無い。
マジでクソ不味いだけの煙草だ。魔力回復の感覚も無い。魔力があるのかさえわからねェが。
……え、じゃァこれマジでただのクソ不味い草じゃん。
「こっちだ、梓。……で、合っているよな？　この体の持ち主は貴女をそう呼んでいたが」
「あァ合ってるよ」
「では、改めて。ようこそ、アズサ。カシヨの村へ。歓迎するよ」
「おゥ」
さてはて。
いつになったら起きてくれるかね、俺の身体ァ。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

72・合歓負不葦江須・

カシヨの村。

空は燕尾色というか、ほんのり薄暗い赤紫、みたいな色なンだけど、陰鬱ってカンジよりァ夢現ののほほんとした、って表現が合う。

なんつーかな、静かなンだ。冥界もそこそこに静かだけど、こっちァ人っ子一人いねェんじゃねェかってほどの静けさ。でもちゃんと人ァいて、なンだかな、足音ってモンが聞こえねェ、に近いのかな。

「なァ、村長」

「なんだ？」

「アンタはいつからここにいるンだ？　少なくとも覚えてる限りでよ、体感時間でどンくらいだ？」

「ふむ。先にも言ったように始まりは覚えていないが、思い出せる限りで言うのならば――何千、何万とここにいる、ように思う」

「ヘェ、そりゃ古代人もいいトコだな」

「ただ、私に残された個というものは限りなく少ない。漂流者の記憶を見て、その中の人物になる。それは自我の上塗りを表し、自己を分解する。ここへ流れ着く漂流者は得てして、あるいは奇しくも数奇なる運命を背負っている者ばかりだ。戦乱の世にありて戦地を駆け抜けた者。滅びゆく国にありて最後まで抗った者。一つの国を統べて尚上を求める者。そういった者達が数多く訪れ、稀に定住して行く。だからこそ」

ポニテスリット……じゃねェな。姿形ァそォだが、村長だ。

村長ァ空を見上げて、少しだけ寂しそォに言う。

「……だからこそ、私は自らを考える事も多い。考え、推測し——しかし、結局は元に戻る。つまり、彼ら彼女らの記憶を見て、その真似をするだけの機構なのだ、と」

「機構？」

「ああ。恐らくだが、ここも、私も、貴女のように深い夢に迷い込んでしまった者が、そこで嘆きの渦に陥ってしまわないための機構なのだと思う。少なくともこの村にいれば、このカシヨの村に居れば——貴女達は、絶望しなくて済むからだ」

「そりゃァ、なンとも悲しい話だな」
「そうだろうか？」
「そォさ。要ァ他人の絶望のための受け皿ってこったろ？　滑り止めさ。ここがあれば、深い悲しみに包まれることは無い。故にアンタは一生ここにいるし、この場所は在り続ける……ってな。まァ全部憶測だが」
　夢の世界。
　カシヨの村。そンな何万年も前からあるのにまだ村ってこた、定住する奴ァホントに少ないンだろう。
　そして、定住したとしても——現実の肉体が死んじまえば、この村からァ消える。冥界に来る。仮初で夢幻の、蜃気楼みてェな村さ。
　そこで村長ァ一生過ごしてるって？
　……機構だってンなら、自我持たせンなよ。
「さて、ついたぞ。とりあえずここが貴女の家になる。ここに滞在する間はこの家を使うといい」
「あァ、ありがとさん」

「そして、ここから見えるのが皆の家だ。基本的に住民は家の中にいるだろうが、時たま野山へ行ったり、川や泉に釣りをしに行くものもいる。これも先に言ったが、欲しいものがあったら念じてみてほしい。大体のものはそれで手に入るが、もし思い入れがあまりなく、思い浮かべることのできないものであった場合、住民に頼んでみると良い。大抵はそれですべて揃う」

「おォさ、何から何までありがとな」

「構わない。貴女が一度落ち着いたら、私の所にも訪ねてみて欲しい。貴女の話も聞いてみたい」

「ン。後でな」

そう言って——村長ァ、元の道へ戻っていく。

その姿さえも、蜃気楼みてェに消えて行く。あァ、なるほど。

ここがこんなに静かなのァ、あんまし遠いと見えなくなるっつか、ホントに消えちまうから、かな。

「……ふゥ」

疲れてもいねェ身体で、ため息をつく。

もう一度両の手足を見る。
……魔法少女になる前の、単なる中学生だった頃の俺だ。
鏡……ァ、作れねェのか。
なるほど、効果が一定じゃねェもンァ無理、ってことか？　外界を映さねェ鉄板なら簡単に出せるな。
ハハ、これこそ魔法ってカンジがするよ。
「……俺が俺にならなかったのァ、もう俺ァ梓・ライラックって事か。あるいァ」
もう、俺ってな死んでるからか。
ま、どっちでもいいがね。
さて。
久しぶりの一人、な気がする。
隔離塔でも一人っちゃ一人だったけど、だいたい寝てたし、暇だなァ、とか呟くとすぐに冷静メイドが来るからな、なんだかんだ言って一人の時間ってななかったンだよ。
それを、こォされると。

……喋りたくなる、というか。
「はン、やっぱ俺ァ、誰かと一緒にいてェのかね。情けねェ話だが」
「――ならば、吾と話すか、娘子」
「ン？」
おォ。
夢の中だからか、命の気配がしないンで気付かなかった。
家。扉ァ勝手に開けられてて、そこに。
……なンだ、露出の激しい服を着た、狐の尻尾を持った女性が立ってた。
凄まじい既視感。
「あー、アンタ、名前ァ？」
「フフ、先に問うのがそれか」
「アンタがそこにいるのァ、鍵かけてねェ俺が悪い。アンタの面にァ見覚えねェが、出で立ちと雰囲気がそっくりな知り合いがいる。アンタの名前を先に問う理由ァこんだけさ。他に必要か？」
そっくりもそっくりだ。

色々隠してねェとことか、喋り方とか雰囲気とか。
ただアイツみてェに面ァ付けてない。めたくそ美人。おじさんが惚れてしまうにあまりに妙齢な美人。全然着物じゃないし、和風って感じもないンだが。どっちかっつーと中華風？
「いや、良い。吾はヨウキという。汝（なれ）の名は？」
「梓だ」
「そうか、では梓」
そして――また、既視感のあることを。
「吾と婚姻を結ばぬか？　汝の容姿は、酷く吾の好みに合致している」
「断っとくよ。アンタ、此処に来る奴の誰にでも言ってるだろ、それ」
「ふむ――何故わかったのか、聞いても？」
「勘だよ」
「そうか」
まァた、クセの強ェのが来たなァ、って。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ヨウキはここに流れ着き、定住を選んだ者の１人、らしい。
「そりゃ何百年前だ？」
「フフ、今が何年かもわからないというのにそれを問うのか？」
「あァさ、わかってンだろ」
「良い。吾がここに漂着したのは、凡そ５００年前のことだ」
まーた５００年前か。
マッドチビ先生も５００年前に魔法少女なってて、そン時に……そォだ、創設者たちの魔法少女解放運動、みてェなのがあったンだよな。
……そォいや、そン時にァまだ、世界ァ困窮してなかった、のか？
人間が人間を奴隷にできるくらいにァ——外からの脅威ってな、人間だけだった、とか。あるいァ戦士だのなンだのが強くて、化け物を十二分に退治できていた、とか。
いんやさ、脳筋娘ァともかく創設者たちの魔法ってなそこまで戦闘向きじゃねェ。マッドチビ先生ァたった５人の集団つってた。魔法少女と名乗る集団。ってこた、

学園長殿が強い……のか？

思い出せ。魔法少女の記憶ァ劣化しねェ。

そォ。そォだ。マッドチビ先生ァ――≪化け物よりも軍隊よりも、他の何よりも強かったそいつら≫、って。言ってた。

なンだ、他の何よりも、って。

「汝は、どうしてここに来た？」

「理由が分かる奴ァいんのかよ」

「フ、全員ではないがな。何故自分がここに迷い込んだのかを自覚している者はいる」

「ヘェ。んじゃ、俺も自覚してる側だな。アンタもだったりするのか？」

「フフフ、吾が先に問うたのだがな。良い。吾が此処にいるのは、単純に討滅されたためだ」

「やっぱり化け物かアンタ」

「この尾があって、人間であるはずがないだろう？」

「そりゃそォだが」

命の気配がわからねェから人間の可能性もあるって思ったンだよ。
……いけねェな、そォいうトクベツな感覚って奴に頼りすぎてるか、最近の俺。
もっと普通に判断できる目を養わねェと。
「で、討滅された化け物が、なンで輪廻に戻らずこんな夢の中くんだりで道草食ってンだ」
「フフ、吾ら魔物のことをよく知っているようだ。――何、それも単純なこと。吾は疲れたのでな。死に際に吾を他者に預け、吾は眠りに就いたまでのこと。――まさか眠ったあとも世が続く、などとは思っていなかったが」
「他者に預けた？」
「フフフ、それについて話す前に、汝の話を聞かせて欲しい。吾が話してばかりでは、少し不釣り合いだろう？」
「……あァさ、わかった」
そォいやその言葉、どっかでも聞いたよォな。
――封印措置の魔法少女。
その経路を断って、蘇生できねェよォにして、殺しちまわない理由。

「俺も単純に、大怪我してでね。生命維持にも魔力が必要だってのに、ガンガン魔力使ってぶっ倒れちまったってだけさ」
「となると、汝は仙女か？」
「あー、まァけったいな力使う奴をそォ呼ぶのなら、そォだよ」
「フフフ、そうか。何、吾は仙女に討滅されたのでな。何、この村には仙女もそれなりに存在する。吾が敵愾心を持つことはない」
「そりゃどーも。で、他者に預けた、ってのァ？」
仙女ねェ。
羽衣でも纏うか？
「フフ、そう急かずとも、時間はある。良い。輪廻を知っているのであれば、吾ら魔物が何を目指しているのかも知っているな？」
「あァ。究極なる一。神なりし者。最高にして至高の頂き」
「そうだ。だが、魔物とて自己がある。自我がある。中にはその輪廻を経ても記憶を受け継ぎ、種としての強さの堆積を用い、更なる進化を目指す者もいる。吾のように何度死のうとも記憶を零さず、同じ形で生まれる者もいる」

「……そぉらしぃな」

「しかし――その輪廻とは、魔物の総意であるとはいえない。記憶が続く者は、時に挫け、時に休み、時に自死を選ぶ。同じ形で生まれる者は、時にヒトとの宥和を試み、親睦や従順なる行動をして生き永らえんとする者もいる。生まれた直後からある進化という渇きを無視して、野山にひっそりと暮らす者もいる」

あの寂しんぼの言ってた通りだな。

輪廻ァ呪縛であって、疲れてしまった子も多い、ってな。

「吾もその内の一匹だ。仙女との闘争に疲れた。幾度も幾度も、生まれては殺され、生まれては殺され、殺し、殺され――その果てに何がある。他者と混ざり合い、融け合い、死ぬ。それ以上のモノがないのだと悟った時、吾はもういいと、使命を手放した。故に当時あった村で大きく暴れ、仙女に討滅される道を選んだのだ。――幾重もの事前準備をした上で、な」

「それが、他者にアンタを預けるための、か？」

「そうだ。吾は妖狐と呼ばれている。あるいは空狐と。狐の魔物が辿り着く最上位が吾だ。故に本来吾はこれ以上を目指さねばならず、そのためには狐であることを

止める必要があった。さらに上を、高みを、天を。そう求めることを求められ――しかし、疲れ果て、飽いてしまっていた吾は、吾の位を投げ出した」

そうだ。

封印措置の魔法少女を何故殺さないのか。

それァ、殺しちまったら――蘇生できなくしちまったら。

新しい魔法少女が、生まれてしまうからだ、って。

「ンなこと、故意にできるモンなのかよ」

「吾にはできた。その時の生ではなかったが、仙女と友誼を結んだこともあってな。その仙女に手段を教わったことがあったのだ。個とは肉体と精神と心でできていて、肉体は外界への干渉と鎧を担い、心は内界への干渉と扇を担う。位を持つのは精神であり、精神とは世界から自己を賜った時にできる最初のものである、と」

「……その仙女ァ、さぞかし叡智に溢れてたンだろォなァ」

「フフ、吾も聞いた時には半信半疑であったのだがな。吾自身が証明してしまっては疑いようもない。……吾は肉体の討滅を乞い、精神を他者に押し込んだ。鎧も扇も失い、残った心は、ただ揺蕩い消えるもの――そう思ったが故。フフフ、それが、

このような場所で安寧に縛り付けられることになろうとは」
「安寧に縛り付けられる？　嫌なのかよ、ここにいンのァ」
「汝は質問が好きだな。良い。吾が肉体と精神を捨てたのは、飽き、疲れてしまったが故だ。もう、続く記憶に飽いた。もう、上を目指さねばならぬ呪縛に疲れた。フフフ、汝の思う通り、疲れこそ無くなったが――ここには何も無い。飽いているのだ。吾はもう、飽いている」
　ヨウキの周囲から、金塊や宝石、その他芸術品らしきものが出現しては落ち、溶けて消えて行く。
　ここには何も無い。
　ただ続くだけだ。なんでも手に入るから――何も無い。
「……死にてェのか、お前」
「フフフ。ああ。頷こう。吾は死を欲している。眠りを。休みを。ここで終わる、という安心を」
　ピクりと、指が動く。
　わかる。それだけで、わかった。

夢の世界でも。

俺ァ――使える。魔法を。

「生きたいとァ、望めねェのか」

「十分だ。フフフ、汝のような幼き子には理解し難き話か。――何百を、何百回。何十を、何千回。もういい。したいことはし尽くした。やりたいことはやり尽くした。――何よりもう、この村にも、あちらの世界にも――吾と友誼を結んだ者はいないのだ」

「ンなの、またつくりゃいいだろ。世界ァ進んでる。今も前向いて歩いてる奴がいる。そいつが新しい道作ってる。新しい命が生まれてる。そいつらとまた、仲良くなりゃ良い。そいつらの築き上げたものに感動すりゃいい。どんだけ生きたって、飽きたからって――死なんざ望むな」

「……フフ、どうやら、汝は悲しみに満ちた運命を辿る者らしい。梓。死は、嫌いか？」

「あァ。大嫌いだ」

嫌いさ。自分の魔法なんざ、大嫌いだ。

死なんか好むな。生きてるくせに。
「ならば、吾から少しばかりの質問をしよう。良いか？」
「あァさ。俺からァ十分に聞いたからな」
「梓。汝は創作、というものをしたことがあるだろうか。芸術でも良い。音を奏でたり、絵を描いたり、文字のために筆を執ったりと、なんでもよい。練り土で造形をする、でもよいぞ」
「……まァ、多少ァあるよ。前も昔も、ちったァある」
「それを、一度でも良い。完成させたことはあるか？」
前世ァITでパソコンカタカタやってるおじさんだったからな。
あるよ。作品を完成させたことなンざ沢山ある。企画や仕事を含めるならもっとだ。勿論、こっちでも小中と図画工作みてェなのァたくさんやった。
……言いてェこた、わかった。
でもまだ、口を挟まない。
「あるよ」
「それが、死だ」

「……」
「フフ、吾が答えを言う前に、解を知っていた。そういう目をしている。……ならば、次の質問だ、梓」
「……あァ」
「この村に、朝も夜も昼もない。空の暗さをみればわかるだろうが、陽も月も無い。ただこの穏やかな空が永遠に続く。それは、不自然ではないだろうか」
「朝が来て、夜が来て、朝が来て。そォなンなきゃいけねェって？」
「それを道理と思うかと、聞いている」
……そンなの。
決まってる。
「思うよ」
「それが、死だ。フフ、朝を過ごし、夜が来たら眠りに就く。それが当然だ。道理であり摂理であり、自然だ」
「眠れねェのァ、つらいか」
「ああ。ようやく眠りに就けると思ったのだ。吾はようやく全てを手放し、深く暗

い泥の底で、もう何も考えず、もう何も厭わず、もう何も――為さずに済む、と」
「なら、問うが」
　違う。
　そォじゃねェんだ。
「ヨウキ。アンタァよ、観光ってなしたことあるか？　ヒトに化けてでも、狐になってでも、新しい場所に行ってみたってことァあるかよ」
「あるぞ。フフ、白き山々の中にある、赤い城。昏き森の中にある、高き塔。碧き海の果てにある、緑の島々。天幕の向こうにある、黒き世界も、だ」
「なンでそこに留まらなかった？」
「まだ行くべき場所があったからだ。まだ見てみたい場所があったからだ。まだ知らぬものがあったから、まだやらねばならぬことがあったからだ」
「それを――」
「それを、生と呼ぶ。命と呼ぶ。自身にとっての未知を知りたいと思う心。目的があればこそ、生は輝きを放つ。多くの魔物もそうだろう。究極なりし一を、至高の頂を目指している途中だからこそ、あんなにも激しく生を放つ。生きたいと足掻

く。生きるために抗う。――吾にはそれがもう、無い」

ダメか。

まァ、そォさな。43と13歳……もうそろ14歳のおじさんが、何百何千と生きた奴に、言葉で敵うワケねェか。

考えが少女で止まっててくれたら。まだ若いトコで止まっててくれたら、説得も暴論も押し通せただろォが――無理か。

「生きたいと、もう抗えねェか」

「無理だ。吾はもう疲れた。もう飽いた。――汝は、吾を殺し得るな？」

「可能不可能で言や可能だよ。やりたかねェってだけさ」

「――ならば、良い。ここはカシヨの村。苦痛の伴わぬ村。汝がやりたくないというのなら、吾は大人しく引き下がろう。汝に強い死の気配を感じ、惹かれるようにしてやってきてしまったが――それも謝ろう。汝にとって聞きたくない話を聞かせてしまった。――吾はもう、他者に干渉したくない。……どうか忘れて欲しい」

「そりゃ無理な相談って奴でな。もうちょっと、聞かせて欲しい。アンタの話を」

「……良い。汝がそう望むのなら」

んじゃ、ちょいと。
魔煙草でも吸って。
話をしよう。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「苦痛ァよ、あンのか。ここにいて」
「無い。この世界に苦痛というものはない。ただ飽きがあるのみだ」
「それァ、苦しいわけでも、痛いわけでもねェんだよな」
「そうだ。だから、汝に殺されずとも、吾はここで永遠を過ごし得る。ただ飽いた飽いたと呟いて、また訪れるだろう漂着者を見物して。その中にまた、死の気配を持つ者がいたのなら、吾はこうして乞いに行くだろう」
「……そうけ」
家を出て、ちょいと歩く。
ヨウキも一緒だ。景色の良いトコがあるってンで、連れてってもらう。

「アンタが友誼を結んだ仙女ってなよ、どんな奴だったンだ？」

「叡智を極めた者であった。自らの長い生を、長くない者達のためにあると定め、数多くの病や禍から民を救う。彼の者は王でありながら仙女であり、故にこそ――次第に、忌避されるようになっていった」

未知を望むのが生だ。

けれど、生きている者は未知を拒む。

その矛盾ァ、死を認識してからじゃねェと解けねェ。

況してや知恵に守られているのであれば――たとえそれを齎す者が相手だったとしても、それを拒み、忌避し、嫌悪する。それが生物さ。人間の悪性の話じゃねェ。全部の生物がそォだよ。

「吾が国を離れる頃には、もう。彼女は国を追われる身になっていた。共に逃げる事も誘ったのだがな。〝貴女まで巻き込むわけにはいかない〟と――そう言って、その後すぐに死んだ。殺されたよ」

「……」

「吾は後を追わなかった。仙女とは不老不死だと、外ならぬ彼女から聞かされてい

た。事実その者に遭うまでの仙女は不老不死である者が多かった。何度殺せども蘇り、何度殺され生まれ直そうとも生きている。吾ら魔物にとっては悪夢に等しい存在だ。フフ、だというのに吾らには仙女の血肉が必要であるというのだから、悲しきことよ」

「ソイツァ、なんで死んだンだ」

「わからぬ――などと言えば、汝は目を輝かせて、それが生きる理由になる、とでも言うのだろう？」

「言おうとしたよ」

「フフ、良い。……わからぬよ。それは本当にわからぬ。あるいはどこかで蘇ったのやも知れぬ。だが、どれほど待っても彼女は帰ってこなかった。吾のもとに、彼女は来なかった。約束の場を訪れようと、そこに陣を引き、縄張りにしようとも。彼女が帰ってくることはなく――吾はまた、討滅された」

　仙女ってなが魔法少女なら、死なねェはずだ。況してや人間に殺されるなんざあり得ねェ。強ェ魔力を纏えば銃弾すらも弾けるンだぞ。それを殺すなんざ、相当のやンねェとダメだ。

そんでもって、帰って来なかったってのもおかしい。蘇生槽が無かった……ンだとしたら、どっかに蘇生槽についての知識持ってる奴がいて、そいつが壊した、とかじゃねェとそォァならねェ。初めから作って無かった？　まァその可能性ァあるが、それだったら自分を不老不死である、なんて言うか？

……あるいァ、だ。

同じ魔法少女に――仙女に、謀殺された、とか。

蘇生槽の在り処を知ってる奴に経路を断たれて、その際にすら参加していた、とかなら。

まァ、在り得るな。

「で、友達死んで悲しィんで疲れたし嫌になったし飽きたから死んだ、って？」

「フフ、煽って感情を引き出そうとするのも無駄だ。だが、良い。……吾は、その後も何百と生きたよ。生まれ直して、討滅されて、何度も何度も。言ったであろう？　吾がここに来たのは５００年程前。――吾の友人が死したのは、何千年と前だ」

「……待て。そんな前から仙女ァいたのか？」

「いた。吾ら魔物も仙女も、古くからいた」
……ん。
なンだろな、この違和感。
もし、そォなら――詰まりすぎている、というか。
ニヤニヤ丸眼鏡が外からこっちに堕ちてきたのが魔法少女の始まりだとして、そこから魔力が漏れ出で、この世に魔力の流れってなモンが出来上がり、魔法少女と化け物が生まれた。均等じゃなかったンで終の因を作り、始の点で均した。
……それが、何千年と前だとしたら。
なンでまた、５００年前なんて近い時期にコトが起きて、ニヤニヤ丸眼鏡もマッドチビも、今更になって動き出したンだ？
もっと早くから動けたンじゃねェのか、それ。
もっと早くから――色々と、変えられたンじゃねェのか？
こんな複雑になる前に。こんな面倒になる前に。
「聞くが」
「良い」

「過去、仙女が化け物として扱われた、ってことァあったか？　アンタの友人みてェに長くを生きた末に、じゃなく、ハナから化け物として人間から忌み嫌われてた、ってこと」

「そういう流れになったことはあったな。それこそ丁度、５００年前のあたりだろうか。否、６００か７００と前の事か。吾ら魔物も仙女らも纏めて排斥する――そういう国ができたことがあった。大陸における最大の軍事力を持ったその国は、それを各国にも強いた。従わなければ戦争を仕掛け、敗戦国にただそれだけを強いたのだ。仙女とは単なる魔物であり、そうなった者も含めて、殺すべきである、と」

そうなった者。

魔法少女になった者。……だけじゃ、ねェか。

魔力が周囲に無くて魔法に食われて化け物になっちまった、カンコウみてェな奴もいたはずだ。

……いや待てよ？

待て待て。

そォいや輝きの園で、つか始の点の休憩ポイントで、紺碧ベルトが言ってたよな。

魔法少女ァ病だと。
なンで女にしかかからねェかって聞いたら、そォいう病気だから、だと。
カンコウァどー考えても男だ。
……待て待て。
聞けばいいだろ。目の前にいるンだから。
「なァよ、魔物に、雄はいるか？」
「いない。繁殖のために人間で言う所の雄としての生殖機能を具える生態を持つ魔物もいるが、基本は雌だけだ。吾を含め、たとえヒトガタを取ろうとも雄になることはない」
「そうなった奴がいたとしたら？」
「それは故意に作られた魔物であろうな。仙女の中には、そういう仙術を有す者もいるのだろう」
じゃァ。
やっぱり、カンコウってな。
「男がよ、仙女になるってな方法ァあんのか？」

「無い。ただし、吾は魔物である。仙女ではない。これは吾の友人から教わったことに過ぎない。それでも良いか？」

「頼む」

「人間の雄、あるいは獣の雄は、確かに仙女の気を血肉に蓄える事がある。だが、雄が仙女になることはない。仙女の気とはあくまで始まりの仙女を元にした形であり、始まりが雌であったからこそ人間も獣も雌しか仙女の気を扱う事ができない。ただ、それは吾ら魔物にとって必要なもの。故にその血肉を食らいはする。それだけだ」

「じゃ、さっき言ってた国ってな奴。でけェ国。軍事力に長けた国。その国王ァ、女か、男か」

「女だ」

「そいつァ、仙女だったか？」

「フフ、そうだ。その者は仙女だった。しかし誰にも悟られなかった。そういう仙術を用いていたが故に」

整理しろ。

聞くべき事と分かっている事をはっきりさせろ。
おかしいンだ。何千年と前から魔法少女も化け物もいて、けど５００年か６００年前から急激に魔法少女の迫害の兆しが強まった。それァ魔法少女の手によるもので、ＥＤＥＮの創設者たちァそれに歯向かって魔法少女の解放運動を行った。
じゃァなンでその魔法少女ァそんなトコから動き出した？
決まってる。準備が整ったからだ。感情の高ぶりが魔法少女の因子に強く作用する。誰もが興奮していたのだろう。国の統一を、全土への勝利を。
そんじゃなンで、そっから何にも動かなかったのか。
ンなもんも、決まってる。
「その国が、滅んだ理由ァ？」
「――国民の全て。すべての女が、吾ら魔物に成り果てたことだ。フフ――汝の思う通り、何者かの手によって、たった一夜にしてその国は魔物の国となった。魔物は男共を食い殺し、生まれ直し、更なる強さを手に入れた」
「何者か、なンてぼかさなくていい。そいつだろ。その王ってな仙女だろ」
「フフ、そう。その通りだ。女王は、仙女は、国を巨大な実験場にし、人間を魔物

にする術を完成させた。否、証明した、という方が正しいか」
「……それァ、人間が化け物になれる、って証明か？」
「人間も輪廻の渦に入れることができる、という証明だ」
足りない実験があったから。
そして――ソレを造るに足る知識が、まだ無かったから。
「その仙女の、名は」
「シエナ。古き言葉で、死を得ることの無い者、と書く」
材料が、無(俺)かったからだ。
「吾の知る限り――まだ、一度も死んだことのない仙女だ」
……そうさ。
それが――本命だ。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

73・侠有阿符阿夢糸？

「フフ――何か、得心が行ったようだな。さて汝(なれ)、着いたぞ」
「ん」
歩きながら色々と纏めていた。
そォか。
俺か。
俺が来たのが始まりか。
ンで、ソテイラが夜の使徒だったのもそォだな？
おかしィんだよ。夜の使徒ってなよ、ホントァいねェはずなンだよ。俺を含めて。
死者だから、現世にいちゃいけねェ。冥界にゃそりゃいるよ。しこたまいる。けど、夜の使徒ァ基本冥界から出ていけねェ。
それこそ、夜自らが遣わさない限り。
「ここはヨウコといってな。吾の名を冠する湖だ。――どうだ、美しいだろう？」

「……あァ、綺麗な光景だ」

丸っこい、玉みてェな葉っぱと、ススキみてェな植物が生え並ぶ――緑と黄金の草原。その中に、ぽっかりと開いた穴に、恐ろしい程に透明度の高い水が溜まっている。

湖底まで見えるその水を――掬う。

冷たくはない。けれど、どこか心洗われるような、ひやりとした感触がある。

「良い。考えを纏めると良い。時間の軛は、現世にしか現れない」

「……あァ」

別に、夜ってな神さんァ――――だけじゃねェ。あのニヤニヤ丸眼鏡も多分夜だ。なんとなくわかる。

俺とアズサの分離と、マッドチビ先生とマッドチビの分離ァ多分根本から違う。そこばっかしァ俺にァわからねェままだが、少なくともマッドチビの方ァもっともっと前からいたンじゃねェかって思う。つまり、マッドチビ先生が生まれる前から――ディミトラ、という名ではなく、シエナ、という名前で。

そォだよな。

ヒントァ提示されてたンだ。
人格分割型戦闘用ガーゴイル。
マッドチビの人格を分割したにしちゃ、マッドチビとシエナの性格ァ似て無すぎる。
……あァ、ここの村長もいい例だ。あるいァ、クルメーナで自己をオーレイア隊だと錯覚しちまってた奴らも。
精神ァ位でしかない。肉体の記憶に強く影響される。その形を取れば、その形になってしまう。
本来のシエナ……死得無って奴ァ、マッドチビの形を取ったから、マッドチビに似た。つっても多少ァ、だ。マッドチビ先生とマッドチビがあれだけ性格に違いがあンのもそのせいだ。偽物どころの騒ぎじゃねェ、あの2人ァ完全に別人か。そォさ、それこそマッドチビが言ってたじゃねェか。「長い間隙間でこそこそやらせてもらっていたわけだし」、って。
もう、あっちのマッドチビにァ自覚があるンだ。自分ァディミトラじゃねェって自覚が。

ＥＤＥＮから離れて暮らす、ガーゴイルを操る魔法少女。その隠れ蓑ってな、安藤さんの造る機械を含む、マッドチビの造り上げるモノにあまりに上等過ぎた。最適だった。

だから、マッドチビ先生ァホントに単純に利用されただけ。

シエナ。

死を得ることの無い者に。

そして――そいつの目的は、天幕の向こう、宙の莽へ行く事、か？

……違うな。宙の莽ってな場所を俺ァ知ってるが、大した機能を持つ場所じゃない。必要なだけだ。３つ――夜と、太陽と、風。

女を化け物にする技術。男を化け物にする技術。その２つを以て、人間を風に巻き込む手法を構築した。

化け物から精神体を抜き取る技術。魔法少女から精神体を抜き取る技術。その２つを以て、太陽と風を自在に操る手法を構築した。

そして――精神を切り分ける技術。肉体の一部を文字通りきり分ける事で、同じ心を持つ個体を創り出す技術。この技術を使うことで、夜すら手懐ける事に成功し

た。魔法少女（太陽の使徒）の肉体と化け物（風の使徒）の精神体と俺（夜の使徒）の心。そのハイブリッドがアズサだ。

なら、次ァ、太陽と、風と、夜。それぞれの神さんを纏めることができりゃ、そのハイブリッドに何かが生まれる。

ＥＤＥＮから奪われた、封印措置を受けた魔法少女。その魔法ァ【合成】、【蟲独】、【帰述】。

あァ、やりてェことァ見えたな。

んで――。

「ヨウキ」

「フフ、なんだ？」

「アンタ、世界に意思があるってな、知ってっか？」

「無論だ。吾のように高位の魔物ともなれば、自ずと聞こえてくる。≫苦しい≪。≫死にたい≪。≫眠りたい≪。――≫誰でもいいから、どうか、殺しておくれ≪と」

そォだ。

ブゥリも言ってたじゃねェか。始の点も、終の因も、ずっと昔に世界の死を悟った人たちが造った延命措置だ、って。

ずっと昔から、あいつらァ知ってたンだ。知ってやがった。知ってやがって、そォいう実験して世界を苦しめて。魔法少女の楽園だってそォだ。創設者たちが輝きの園に夢中になってるのいいことに、内部に入り込んでその在り方を変えて。

「生前は何を馬鹿な事を、と思った事もあったがな。今ならば理解もできよう。世界ももう、疲れてしまっている。吾より酷いだろうな。苦痛を覚えている。殺し得るのなら、殺してやった方が良い」

「だが、それじゃァ困る連中がいたンだ」

「……フフ」

そう。

ソイツってな、堕ちた神で、始まりの魔法少女であるニヤニヤ丸眼鏡さえも利用して。そいつの使徒も利用しようとしたけどできなくて。だから今度ァ万全を期すために実験に実験を重ねて——よォやく手に入れた。

アズサを。

そして——宙の莽に行くための手段を。

どォやって行くか。ンなの簡単だ。そもそもなンで魔法少女が天幕に近づけねェ

のかって、魔力素が分解されちまうからだ。
じゃァ、もっと濃くすりゃ良い。
この世界の魔力濃度を上げる。どォやって、って。
循環させてる機構を片方だけ壊せば、はい完成。
この世界にァ魔力が流入し続け――しかしそれァ流れる事無く淀み、溜まり、化け物を生み出し、魔法少女を生み出し、更に更にァ、天幕を破る。
この世界自らが魔力で満たされて、水風船みてェにぱァんと弾ける。
そォすりゃ冥界も宙の莽も行き放題さ。
「ソイツらァ、死にたくなかった。生きたかった。世界の寿命なんぞで折り畳まれるなんてまっぴらごめんだったンだ。だから世界を生かし、延命し、苦痛を訴える世界をどォにかしよォとした。その寿命を延ばすか――あるいァ」
「別の器に移し替えるか――であろう?」
「……できンのか」
「フフフ、苦しいからと、疲れたからと、飽いたからと。心を外し、肉体と精神を他者に預けたモノが目の前にいるであろう?」

は――ン。
なるほどね。
じゃァ、もしかしてコイツも……実験体か？
なァ。
「フフ。そこにばかりは、踏み込んでくれるな。吾と友誼を結んだ彼女が≫そう≪であったなどとは、考えたくもない」
「いんやさ、そっちじゃねェ。そいつを殺したのが≫そう≪だって話さ」
「……フフフ。そうだな。そうなるのだろうな」
だって、コイツが絶望すりゃァ。
体の良い実験ができる。実験体自らが技法を実践し、死してくれるのなら。そしてその様子を見せつけてくれるのなら。
魔法少女の１人や２人の犠牲。
……ふゥ。
いけねェ。熱くなってる。
「それを聞いても、やる気ァでねェか？」

「復讐を、と？」
「あァ」
「フフフ、面白い事をいうものだ。――仙女の中には、吾を諭す者もいたというのに。共通の知り合いでな、復讐など何も生まないから、と。貴女は逃がされたのだから、自由を謳歌しなさい、と。大きなお世話であったが、フフ、吾はそれに従った。何より彼女がそうだったからな。憎しみの連鎖など何も生みはしないと、そう言っていた。――汝は、違うのだな」
「生きる理由になるならなンでもいいよ。他者を害する理由でも、見返すための動機でも、蹴落とすための憎悪でも。それでも、無いか」
「無い。……吾はもう、飽いた。今一度現世へ戻るのも無理だ。疲れてしまった。どの道、吾の身体も役割も他の者が使っているのであろうが」
そいつァ多分。
あいつ、なンだろォなァ。
「……そうか」
「ああ。もう、良いか？　汝の悲しむ顔はあまり見たくない。先にも言ったよう

に、汝の容姿は吾の好みに合っている。此処に来る誰にでも婚姻を願っているのは事実だが、あのような褒め言葉を言ったのは初めてだ」

「そりゃありがとよ。……けどなンで婚姻なンか迫ってンだ？」

「フフ――契りさえ交わせば、夢を見る生物ならば必ず情が湧く。苦痛の無い世界であるのならば、尚更に。であれば――吾が死にたいと、眠りたいと言い出せば」

「殺してくれるかもしれないから、ってか」

「フフフ、吾は妖狐でな。昔から、狐と狸はヒトを騙すモノよ」

性質の悪ィ告白が過ぎる。

殺して欲しいから婚姻を結ぶ、なンて。

……でも。

「もうちょい、考えさせてくれ。アンタのこと、忘れるのァ――嫌だから」

「フフフッ、なんだ、誘っておるのか？」

「違ェよ。忘れるってな死と似てんだよ。俺の中でアンタを殺すのァまだ避けたい。だから、アンタの事を考えていたい。それだけだ」

「誘っているようにしか聞こえぬのだが」

「だから違ェって」
湖面に映る自分を見る。
……やっぱり梓・ライラックだ。前世のおじさんじゃァない。
その水を、掬う。
掬って――飲んでみた。
「……なンだ、空気みてェな水だな」
「溺れる事もできない、ということだ。フフ、水の中で呼吸ができることに喜ぶ者は過去にもいたな」
「へェ」
んじゃ、と。
ざぶんと入ってみた。おォ、すげェ。濡れねェ。浮力ァあるし水圧っぽいのも感じるけど、濡れねェ。目ェ開けても痛くねェ。呼吸もできる。
「すまねェけど、ちょいとここで頭冷やしてェ。いいか?」
「良い。と言いたい所だが、吾は吾の家に戻っているぞ。また話があれば、訪ねてくると良い」

「場所ァ？」
「この世界に距離も方向も無い。ある程度歩いたと思い込み、目の前の家が吾の家だと思えば、そこが吾の家になる」
「……わかった。ありがとォな、ここを案内してくれて。ンで、またな」
「ああ。また、だ」
そォいって。
最初の村長みてェに、すぐに溶けて消えて行くヨウキ。
……。
ふゥ。
「まだ起きねェか、俺。手遅れになる前にとっとと――」
起きて、止めにいかねェとなのに。

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

小一時間か。

あるいァ3時間くらいか。
ずっとそォしてた。
仰向けで沈んで、陽光の入らねェ水面を水中から見上げるって、ただそンだけの時間。っとに体感時間のわかんねェとこだよ。
わかったのァ、ここがやべェってことさ。
「ずっと居られるなァ、ここ」
酷く——酷く、穏やかだ。
冥界ほどじゃねェ。夜の宮程じゃァない。けど、ここァ——ほんとに何も無い。
苦痛になる事が。あるいァ、きっかけになることが、何にもない。
ずっと沈んでンのも、ぷかぷか浮いてンのも、ずっとしていられる。ずっとずっとずーっと。
身体が起きてくれない限り、ずっと。
「……いけねェなァ。早く起きねェとなのに。……こっち側からアプローチってなできねェのかね」
「あたしには無理だケド〜、あなたならいけるカモ?」

「ん？」
ばしゃん、と。
そいつァ振ってきて――俺に抱き着き、キスをした。
……ん？
「どお？　すごくない？　呼吸しなくていいからずっとちゅーしてられるし、ちゅーしながら喋れるのすごくない？」
「わかったから一旦やめてくれ」
「一旦ね。りょーかい～」
ふゥ。
えーと。
ん？
「誰だ、お前さん」
「あたしはフクン！　ふーちゃんって呼んで！」
「あァよふーちゃん。お前さん、魔法少女だな？　ンで、封印措置とかされてねェか？」

「え!?　マジ!?　君心とか読めちゃう系!?　記憶とかわかっちゃう村長系!?」
「いんやさ、1人2人ァ絶対いると思ってたンだよ。あァ、俺ァ梓だ。梓・ライラック。よろしくな、ふーちゃん」
「よろぴ！　じゃあ君はあーちゃんね！」
「おゥ」
やべェな。
アゲアゲなギャルだ。
おじさんもちったァ若者言葉ァ使えるが、ついていけるか？　っべー。まじっべーすわ。っべー。
エアッラスミスー。
「で、何だって？　俺ならこっちからアプローチできる、ってな、どぉいうこった」
「ふふん。ふーちゃんは【運誓】という非常に強力且つかなりやばい魔法を使える魔法少女なので、色々わかるのだ～。ずばり！　あーちゃんは【即死】という非常に強力且つかなりやばい魔法を使える魔法少女でしょう！」
「あァよ正解だ」

「そしてそして～、あーちゃんの【即死】は魔法にも効くってゆーか、万物に対して効果的でしょう！」
「それも正解だ」
「ならなら！　――この世界、殺せちゃうヨネ☆」
ふーちゃんァ。
そんな事を言いながら――またキスしてきた。
避けた。

「……この世界を殺す、ねェ」
「そそ。ぱーっとやっちゃって、ぱーっと！　魔力必要なら念じれば出てくるから！　ふーちゃんはもう長い事ここに閉じ込められてて退屈なのです！」
「でもここから出てったって、反魔鉱石で封印されてることにァ代わりないンだろ？」
「問題ナイナイ！　外でＥＤＥＮに大きな衝撃があって、私達を覆う反魔鉱石に

罅が入ってる事も【運誓】は見破っているのであーる」
「マジか。起きたら封印し直さねェと」
「酷い!?」
酷かねェだろ。ナチュラルに犯罪の片棒どころか凶悪犯に仕立てようとしやがって。
夢の中から外の様子見れる魔法ってなンだよ。どンだけやべェ魔法だよ。
「……ちなみに今、外ァどーなってる？」
「え～？　もっと丁寧に頼んでくれないと教えてあげたくないカモカモ～。具体的にはホラ――あたしの足を舐めなさい、みたいな！　きゃ、年下に一度は言ってみたい言葉最上位!!」
「ンじゃいーや。俺ァ別の方法考えるよ」
「あーちゃん私に興味無さすぎ!?」
ギャルじゃねェ。
ただの煩い奴だコイツァ。おじさんのギャル観が古すぎた。きゃいのきゃいのいう奴ァギャルって図式になってたけど、違わァな。うるさいだけの奴とギャル一緒

にしたら、ギャルが可哀想だ。ギャルルルル。
「ふーちゃんァなンで封印されたンだ？　うるさいからか？」
「酷いよ～さっきから！　でもでも、半分正解カモ？」
「マジか」
「マジマジ！　あたしの魔法ってば、外界の様子は勿論、その子が隠したいものとか、秘密の部屋の中とか、ちょっと先の未来とか、色々見えちゃうのサ☆！　それをなーんにも気にせず言いふらしてたら、封印措置食らっちまったゼ☆！」
「ぜってェそれだけじゃねェ。それだけで封印措置食らうかよ。もっとやべェことしてるだろ」
「シ、シテナイヨ～」
「そォかい。じゃァ煩いから封印されたンだな。納得だよ」
「納得しないで!?」
水の中だってのに響く響く。
子犬のがまだうるさくないぞ。さらに子犬ァ可愛いだろ。
「えっとー、ホントの理由は～」

「ン、別に話さなくていいぞ。聞いてないし」
「あれ、ふーちゃんとあーちゃん初対面だよね!?　扱い酷くない!?」
「何言ってンだ。封印措置ってな人類に敵対したとかＥＤＥＮに害を為した魔法少女がされる最終措置だろ。矯正も更生もできなかった奴ってこった。ンな奴の扱いァこれで十分だろ」
「……ぶー！　抗議します！　別にあたし人類に敵対もＥＤＥＮに害を為したりしてないもん！　ただちょっと」
「ただちょっと？」
「――……他人の意思変えて、囲い作っただけだもーん」
「ちょっとじゃねェなァオイ」
ＳＳＳ級か。
他人の命、精神、心を操れる魔法少女。創設者たちにおけるＳＳＳ級の定義。
やべーのいるじゃねェか。しかも魔法使えるままだって？　オイオイ、どォ防ぐよ。
「あ、だいじぶだいじぶ！　夢の中じゃ外界を見るくらいしかできないから！」

「尚更封印解けねェよ」
「しまった!?」
……あー。
ヨウキが静かな奴だったから、マジでうるせェ。
これ苦痛じゃないンですかねェ。苦痛認識したら消えるンじゃないのかいこれ。
「あ、ちょっと！　今あたしのこと苦痛って思ったでしょ！　あ、やめ、遠ざかる、くっそ～、泳ぐぜ！　あたしの泳法は１８０通りある！　あっ、あっ、遠ざかる、ちょっとちょっと、静かにするからもうちょっとお話させて!!」
「うるせェ自覚あンのかい」
「なんちゃって、夢の世界では距離など無に等しい！　食らえ必殺彼我の距離零ちゅー！」
「40㎞くらい離れてくれ」
「あぁ!?　一瞬で対処された!?」
睨ぎ合う。
ヘェ、こォなるのか。俺の遠ざけてェって念と、ふーちゃんの近付きたいって念

がぶつかり合って、水面に波を生んでる。
　争いの無い世界じゃなかったのかい？　ハハ、こォいう奴が１人でもいると、波風立たずってな難しィんじゃねェの？
「く……かくなる上は！　【運誓】！」
「あン？」
――≫聞こえますか。聞こえますか。今あなたの心の中に語りかけています！≪
うわうるさ。
つか便利な魔法だなオイ。
――≫デショデショ!?　気に入った？　交換する？≪
アホか。
できねェだろ。つかしねェよ。
――≫残念無念！　……とまぁ、この辺で落ち着きまして。改めてあーちゃん。起きる方法を教えて進ぜましょう≪
「落ち着いたンなら別に魔法なんざ使わなくても」
「隙ありッ、唇は頂いたゼ☆」

「……もぉいいや。このまま喋るけど。夢の世界を殺しちまったら、中にいるお前さんらァどぉなるンだよ」

「そりゃ勿論解放されるよ！　ここは安住の地を謳っているけれど、その実奈落の一歩手前！　あまりにも低く、あまりにも強い重力があたしたちを引っ張って離さないのだ！　お、おほぅ。あーちゃん小ぶりなオムネしてるね。舐めて良い？」

――≫あぁ!?　無言で距離離された!?≪

便利だなコレ。

別に俺ァ疲れねェからそぉやって話してくれ。対応ダルいわ。

「いやまぁ落ち着きます、落ち着きますとも。ふっふっふ、ふーちゃんはなんと齢１０００歳の魔法少女なのですから落ち着きますとも」

「はァ？　嘘こけ、ンな自制もできねェで封印措置食らうよぉな奴が１０００年も生きてられるはずねェだろ」

「チッチッチ、できるんだなぁコリガコリガ。私は自分の未来も見えるのでネ☆」

「……捕まりそぉになったり、殺されそぉになったら逃げてた、って？」

「そう！　各地に伝わる予言の巫女伝説の９割はあたし！　ううん10割かも！

そんな各地も大体滅んじゃったケドネ」
あー。
なンだ、多分真面目に危険で、真面目にやべー奴なのァわかるンだが、どォにも気が抜けるな。
これ意思操られてねェか？　大丈夫か？
「国でやったのか？」
「エ？　あぁ、チガウチガウ。ＥＤＥＮでね、女の子、選り取り見取りだったから、ちょちょいと弄って侍らせて、ドロッドロで甘〜い時間を過ごしたってだけ。そしたら中に密偵がいてサ、敢え無くあたしは封印措置行き。ちなみに他の魔法少女の中で、一番好いカッコで固まってるはずだから、起きたら見てみて」
「知り合いに【鉱水】がいるンで上塗りしてもらっとくよ直方体に」
「一生出られなそう……」
で。
１０００歳ねェ。
「あ、今》見えねェな》って思ったでしょ。ふっふっふ、ダメだよ〜。魔法少女を見

た目で判断するなんて、まだまだダネ」
「そいつァまァそォだが、ふーちゃんに関しちゃ合ってるだろ」
「いつまでも若いってことだよね！」
「あァ」
「同意がなんか寂しい!?」
なンだよ、ツッコミ待ちなのかよ。
「んで？　俺に近づいてきた目的ァなンだ」
「そりゃ勿論、この世界を殺して欲しくて！」
「んじゃ諦めな」
「もしくは私を殺して欲しくて！」
「――それも諦めな」
「うわ目怖ッ!?」
冗談でも言うンじゃねェ。
そこァ逆鱗だぞ。
「ち、ちなみに殺して欲しいのは事実だったりするヨ～？」

「……理由くらいァ聞いてやる。なンでだ」
「だってー、ふーちゃんはあーちゃんの言う通り、多分もう一生反魔鉱石の封印から逃れられないのです。魔法少女にも寿命はあるけど、あまりにも長いしー。その間ずーっとここにいなきゃいけないとか、無理無理の無理」
「そンだけか？」
「そんだけって、凄い暇なんだよーここ。外の私は事実上死んでるようなものだし、もういーじゃん。そろそろ解放してよー。肉体と精神は反魔鉱石に閉じ込めたままにしておけば出て行かないからさ、心はもう殺してよー」
ふざけンな、と言おうとした。
……でも、言えなかった。
適当な口調だし、適当な態度だけど。
その主張ァ——真っ当なモンに聞こえちまって。
「……外の身体の封印を壊したら、生きてェって思えるのか」
「あー、どだろネ？　今の外って、結構やばやばじゃん？　あたしこんな性格だから、全然反省とかするつもりないし。これでまた封印されるくらいなら、もいっ

かなーとか考えてるケド」
「なンでだ。生きられンなら、生きたいと思わねェのか」
「あたし、好かれるのは大好きだけど、嫌われるのは大嫌いだよ」
――。
……そりゃ、誰でもそォだろ。
「でもさ、少なくともこの世界を殺せば、あたしの心は奈落の底に落ちて行くのです。そのまま落下し続けるならここと変わんないけど、もしどっかで狂ったり死んだりできたら楽々の楽。この世界、狂うこともできないからさー、ほんとつまんないんだよねー」
「好きな奴でも作りだせばいいだろ」
「それができたらマジの楽園☆。けど、ヒトの意思って固定じゃないからさ。そのカタチをしたお人形さんは、ほら、こーやって作れるけど、中に心も精神もないよ。肉体ですらない、夢幻の張りぼて」
そォ言って出すのァ、俺の身体。
ぐてん、としたそれの背後から、腕や頭を掴んで人形劇みてェにする。

……。

「愛情が欲しいのか」

「あは☆、そんなの当たり前じゃーん。まぁ快楽を求めて、みたいなコもいるだろうケド、そーいう子はここには辿り着けないのだよん。そーじゃない子しかここにはこれない。本当に欲しいものは手に入らない、それ以外の全てが手に入る楽園。それがカシヨの村なのです」

「……」

あー。

黙るしかねェ。

軽い奴だと思ったら、重いなァ。

「死を望む理由ァ、飽いたからか」

「そそ。ここに定住してる人はみーんなそうなんじゃないかなぁ。魔物も魔法少女も人間も、そうじゃないのもね」

「そォじゃないの？」

「聖獣とか、あと神様とか」

「……神もいンのか、ここァ」
「村長さんのこと！」
あァ。
そォいうのも知れるのか、【運誓】って魔法ァ。
村長ァ、神か。だが、あの様子だと。
「うん、自分が何なのか、誰なのかはもう忘れちゃってるネ～☆。でもいーんじゃない？　少なくとも村長さんはまだギリギリ飽きてない。というよりは、飽きてるから、漂流者の記憶にある人物になり切って、飽きを忘れてる、って感じカナ？」
「目を覚まさせる事ァ、できねェのか」
「うーん、どうだろ？　少なくともあたしは無理だったし、あたしにも無理だよね。たとえ目を覚ましても石の中。瞬きも食事もできない、しゃべることもできない彫像に戻るのは嫌カナ☆。それならここで退屈を謳歌した方がまだマシ」
「自由に喋れて、自由に眠れて、自由に食事が摂れて、愛してくれる奴がいて。それならふーちゃんァ、生きたいって。生きてたい、って。そォ思えるか？」
「無☆理！」

なンでだよ。
さっき自分で言った事だろ。
「だってあたし、誰からも愛されたいし！」
「――それが無理だって、知ってるから……か」
「うむん！」
自分の欲望の重さを知っている。
それができねェなら死んだ方がマシだ、って？
ふざけんなよ。
ふざけンなよ。
そンな理由で、命が断たれてたまるか。
「――魔法少女になンか、ならなきゃよかったと。そォ呪ったことァ、あるか」
「えー、それ聞く？　聞いちゃう？　――あったり前じゃん。こんな魔法に目覚めなきゃ、あたしは身の丈にあった大恋愛ができたのにサ。ヒトの心を覗けて、操れて、世界の未来までちょろっと見えちゃって。そんなチカラ要らないってー。誰か貰ってよーって。ずーっと思ってるよ」

「そ、っか」
「魔法少女にならなきゃ、こんな長い命もなかっただろうし。あたし、みんなから愛されたいって思ってるけど、ずっと生きたいとは思ってないよ。マ、殺されそうになったら逃げてたケド！」
「そりゃなンでだ」
「だってさ、殺意って嫌いの塊なんだもん。聞きたくない嫌い嫌い嫌いの声が勝手に聞こえてきちゃう～。――だから逃げてた。聞こえないとこまで。そしたらいつの間にかＥＤＥＮにいたんだよネ～」
　また、指がピクリと動いた。
　殺意なンかなくとも――他者を殺せる魔法。
「んー、こんなテキトーじゃなくて、真摯にお願いしたら良い？」
「何が」
「――お願いします。もう飽きたし、もう嫌われるの嫌なので、殺してください。あたしを太陽の呪縛から解放してください。静かな夜で、あたしは眠りたいです。死にたいです」

ふざけんな。
ンなこと――望むな。
ダメだろ。そんなの。
「大丈夫、現世の肉体や精神が死ぬわけじゃないから。心が死ぬだけ。あたしを殺しても新しい【運誓】の魔法少女は生まれない。さらには反魔鉱石の封印を解いても、物言わぬ肉体が転がるだけになるお得仕様。反魔鉱石の数は限られてるからネ」
「……そんなこと言うな。死がお得とか、ふざけても言うな」
「ん。ごみんごみん。泣かないで。……あーちゃんは、早く目覚めた方が良いかもね。ここにいる人たちは多分、誰とどんな会話をしても――最終的に、死を求めてくると思うから。その手段をもってるあーちゃんは、責任を感じちゃうね。ごめんね」
誰かの声が木霊する。死を求める声が。≫前≪の声が。
あぁ。そうだな。
これは悪夢だ。
早く目覚めてほしい。

でないと――。

「大丈夫だよ、あーちゃん。ここは苦痛の無い世界。――あーちゃんが忘れたいと願えば、あたしも、どっかの魔物さんも、ぜーんぶ忘れられるから」

「――それだけは、絶対に嫌だ」

忘れるのァ――ダメだ。

ダメなンだ。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

74・御地猛忍具負不出民寧紫遠・

体感時間、よォやくここでの一日が終わった。
夜も来なけりゃ太陽も昇らねェ、風の一つも吹きやしねェ世界だから、自分がいつなのかここが誰なのかわからなくなる。あれがどこであそこがそれで。
で、まァ。
村長に与えてもらった家――じゃなくて、なんとあのまま湖の中で一日を過ごしてみたワケなンだが。
……まだ考えァ纏まってない。
纏まるもなにも、悩んでもいねェ、気もする。俺ァ殺したくない。あいつらァ死にたいけど別に今のままでもいい。それを能動的に殺すってな、俺の意思だ。それァ嫌だと何度も何度も言ってきた。拒否してきた。嫌がってきた。
それが間違いだとァ思わねェし、それを過ちだとも思ってない。
願われて、乞われての死――ンなもん、クソくらえだって。
今も思ってる。

「……でも、確かにそォ、なンだよな」

ふーちゃんァ言ってた。外に出たって事実上の死。封印が解除されたってまた同じことをやるし、同じ過ちを犯し、再封印されるなんて目に見えている。

好かれるのァ大好きだけど、嫌われるのァ大嫌い。だからもう嫌われないよォに——死んじまいたい。

ヤな考えだ。

けど。

「こんな魔法が無けりゃよかったと。そう、思ってる奴ァやっぱ、いンだな」

口に出す。

声に出す。

言葉として紡ぐ。

魔法。

先公ァ、魔法にァなんか役割があって、どうしよーもねェ時に、けれどなンとかできるから——だからこそこれを、俺達ァ魔法と呼ぶのだと。そォ言ってたけど。

結局魔法なんざ外法でしかねェんじゃねェかって。

技術じゃなく――世界を歪める外道の法。対象に死を齎す。即座に死なせる魔法。

「それが、外法じゃなくてなンだって話だよな」

湖から、上がる。

身体に重みァ無い。濡れてるのに寒くないし、服が張り付いてくることもない。髪がぐっしょりすることも、毛先から水が滴ることもなく――その畔に立つ。

両足。両手。

……ハハ。

「夢だな」

俺ァ確かに失った。

右腕と足。肌の火傷。その他細かい傷も、全部全部、綺麗さっぱりなくなったこの身体を。

「――悪い夢だ」

そう呟いた瞬間。

右腕が消失した。代わりに義手が。

それでいい。
俺にとって――失くしたモンが、勝手に戻ってる、なンて。
悪夢だよ。苦痛でしかない。
だってそれァ、俺の否定だ。
だってそれァ、迷宮で紡いだモンの否定だ。
だってそれァ――俺が殺したモンの、否定だ。
だからお前も消えておけ。
「っと。ん、一回組み立てただけあって車椅子もちゃんと出せるな」
両足が消える。代わりに何の機能も無い鉄棒がついて、腰の下にァ車椅子ができた。
接合部が痛みを発する。そォさ。これだよ。生きてるってな、コレだ。
俺ァ酷ェ傷を負って、ホントなら寝た切りになってるトコを、魔力なンてモンで生き繋いでるだけの半死人さ。元から死人なンだ、むしろ回復してる方だ。
んで、後ァ服か。
変身する。制服から、魔法少女の衣装に。いつもの変身たァ違って一瞬ハダカに

なることァなかったけど、あァ、しっくりくる。これも魔力で編まれてる、意味の分からねェ服さ。
俺ァ外法で生き繋いでンだって。
再認識する。
キコキコと車椅子を漕ぎ始めりゃ、舗装されてねェ道の振動が直に伝わる。
それでいい。
これがいい。
さて――もう少し、夢の続きと行こう。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

結局、誰に会っても同じだった。
ふーちゃんの言う通り、みんなが飽き飽きしてて、みんなが死を求めてる。
俺ァそれから逃げるように去って、今また１人、村の中をキコキコ移動してる。
そォしてりゃ誰にも会わねェんだ。この場所ァ。

会いたいと思わなきゃ距離ァ近づかない、ンだったか。だから、村ってモン自体ァ見えるのに、人っ子一人いねェよォに感じると。

ハハ。

それじゃ、能動的に誰に会おうともしなけりゃ、一生一人ってことか。

……あァ、だから村長ァ最初に会うンだな。遭って、会うンだ。

ソイツが少なくとも1人たァ繋がりを持てるよォに。

村長か。

会いに行くかね。

「――よォ、村長。いるか？」

「む。来たか、梓。……その恰好は？」

「正装って奴だ。俺に取っちゃ、何の起りもなく五体満足ってな苦痛でね。夢の中であっても――俺ァ失ったモンをぶら下げていてェたァ思わねェ」

「……そうか」

その、〝役割の統合〟とやらで新生が起きた、とかならまだいいンだ。

けど何の仕組みもなく、ただ夢の中だから、苦痛が無いから、なンて理由で失っ

たモン取り返されちゃァ堪らねェ。それこそ夢幻だ。ンなもんに意味なんざ無い。
失った手足含めて、俺の持ち物なンでな。
「村長」
「なんだ？」
「アンタと話がしたい。アンタがどォ思ってるのかを聞きてェんだ」
「どう？　何をだ」
いつの間にか俺ァ村長の家の中にいて。
村長ァ椅子に座っていて。
そォなってたから、そォなってるってことね。
「アンタさ、もう飽いてるか？　ここにいるの。もう、死にてェって。そう思ってるか？」
「住民から、私の事を聞いたのだな。……正直な話をすれば、そうだろう。こうして夢幻に頼り、自己の更新をし続けない限り――私はもう、いいと。そう思っている。自分が何者なのかも思い出せず、自分がなぜここにいるのかもわからないまま、他人になり続ける。……それさえも飽きてきた。それは認めよう」

「なら――今からさ。アンタの皮を、剥ぐ。あァ、猟奇的な話じゃねェよ。アンタが何百何千何万と誰かから受け継いできた記憶ってな奴を、全部殺してやる。――その先に、元のアンタがいるはずだ。元の村長が。誰もいなかった頃、村長とも呼ばれていなかった頃のアンタが」

「……それをして、どうなる。私は――」

「ここァさ、苦痛の無ェ世界なンだろ？　じゃ、ずりィよ。アンタだけ苦痛を背負ってる。自分を知らねェのはつらいだろ。自分を思い出せねェのァきついだろ」

「ずるい？」

「あァ。アンタだけ、生きてる。前に進んでる。アンタだけ変わっていってる。だからずりィ」

義手に【即死】を纏う。

途端――周囲にあった空気までもが、それを求めるよォに。

この地に溜まりに溜まった何かが集い始めた。

「――それは」

「ポニテスリットの記憶を被ってンなら、知ってるだろ？　魔法さ。【即死】って

な魔法だ。魔力ァ思うままに湧いてくるらしィんでな――どんだけ厚くても、ぶち抜ける」

「ずるいから、私を殺す、のか？」

「ずりィから、アンタも並ぶンだよ。俺達と同じトコに」

そんなつもりで村長に会おう、って思ったワケじゃなかったのに。

村長の顔見た途端、ンなことを想っちまった。

だって、ずりィよ。

自分だけァ違うトコにいる、なんてさ。

それァ争いの種だぜ。って。そう、言うんだ。誰かが。

「……わかった。正直に言って――貴女の持つその※未知※ですら、私には輝かしい。この渇きを潤すものが、ソレにはある。だから」

「あァ。殺してやるよ、悉く」

発動する。

冷たい金属の手が、村長の胸ンとこを触る。

記憶ァ頭にあるのか、心臓にあるのか。指先にある、とかいう奴もいるな。

さてな。

どこにあンのかなンて誰にもわからねェよ。脳が損傷して記憶失うのァアクセス権を失うからだって思ってる。ただそれだけで、記憶の保存庫ってな――ここにある。

殺す。ポニテスリットを、殺す。銀バングルを、殺す。指揮官殿を、殺す。マッドチビ先生を、殺す。名前のしらねェ軍部の魔法少女を殺す。大きな狼を殺す。荘厳なる猫を殺す。強い力を感じる石を殺す。穏やかに微笑む女性を殺す。殺す。殺す。悠然と揺蕩う化け物を殺す。殺す。殺す殺す。悲しい顔をした少女を殺す。死なせていく。みんながみんな、悲しい顔をしている。楽しく笑ってる奴なんざどこにもいねェ。村長の被った記憶の奴ァみんな曇った顔の奴らばかりだ。それを、どんどん【即死】させていく。

大きな翼を持つ獅子。双翼を煌めかせる馬。大地を踏み締める八本腕の老人。俯き、跪いて首を垂れる騎士。重厚なる剣。首に縄をかけた女。

数えきれないほどの皮が――死んでいく。

村長の蒐集した全てが。知ってる奴から、知らない奴。知らねェ化け物、今もい

る化け物。あらゆるモンを削って行く。膨らみ切ったその記憶から、余分を排除していく。

「――かつて、この地は国であった。カシヨの国。それはあまりに多くの者達が眠りを求めたからだ。突如降り注いだ魔――それはこの世のあらゆるものを変質させ、この世そのものをも苦しめた」

殺す。

唐突に喋り始めた村長を無視して、【即死】の出力を上げて行く。

滴らせるだけじゃなく、浸す。イメージァついてる。あの湖みてェな、重さのない水だ。

「私達はそれを、ただ眺めていることしかできなかった。私達が手を出せば、余計に被害が広まってしまう事を知っていたからだ。私達は責任を覚えていた。関りの無い者だったとはいえ、同じもの。なれば私達が、せめてもの安楽を与えねばと――彼女は死者の楽園を。私は眠りに就く者の楽園を作り上げた」

巨大なクジラを殺す。もォ家なんざどこにもねェ。巨大な象を殺す。もォ村なんざどこにも見えねェ。

ただ、目の前で。
誰かが泣いている。
目の前？
村長じゃ、なく。
「風は共に巡り、一丸となって死を選ぶと言った。太陽は共に在り、憐れみから慈悲を与えた。……私達夜は、安らかな終わりを願った」
わかる。
わかる。
これァ【即死】じゃなきゃ、余計なモンを植え付ける。即座に死なせなきゃ、悔恨が残る。
俺ァ――少なくとも、俺だけァ。
こいつを救ってやれる。
「――だがそれも、疲れてしまった。日々疲弊し、苦しんでいく我が子の声を聞いて。要らない、要らない、もう生きたくない――何故、どうして、死ねないの、と。苦しいから殺して欲しい。痛いから殺して欲しい。お願いだから、何をしても良い

から――どうか私を、どうか私を、壊して欲しいと――あの子は願っている」
もう数えきれない程の皮を殺した。
もう数えきれない程の記憶を殺した。
去った者を数えるな。生きている者を残そうとするな。
俺が殺してやる。それァ、お前の持ってちゃいけねェモンだって、教えてやる。
「問う。娘子。生きなければならない理由とはなんだ」
「問い返すぜ。死ななきゃならねェ理由ってなンだ」
「問う。娘子。苦痛に喘ぎ、そうと懇願されてもか」
「問い返すぜ。死んで何になる。死が苦痛より楽だって、誰が言ったンだ」
そこに、いた。
黒い髪の女性。金糸でも銀砂でもなく、真黒な髪ァ――紛う方なき、夜の色。
まるで湖面のような女性。揺らめき、揺蕩い、俺を映す。写し返す。
「問う。娘子。死は逃走だろうか」
「問い返すぜ。生ァ苦痛か？」
「問う。娘子。――お前にとって、生かされる事は――苦痛か？」

「問い返すぜ。アンタにとって、殺される事は幸福か？」
はァ。
そォだな。そろそろ――俺も。
「答えよう。そうだ。私も、あの子も。殺され、死に絶える事こそを幸福とする」
「答えてやる。助けられるのァ幸福だがね、生かされ、飼い殺されるのァ御免だよ」
「答えよう。生きる事は苦痛だ。もう、苦痛だ。かつてはそうではなかったが――物事には限度というものがある」
「答えてやる。死ァ逃げだが、逃げちゃいけねェなンてこたねェ。やりたくもねェのに矢面に立たされること程苦痛なモンァない」
覚悟を、決めねェと。
いい加減――自分の喋った言葉くらいァさ。
取り戻さねェと、ダメだろ。
「答えよう。死とは眠りだ。眠りは苦痛よりも、喜楽よりも、穏やかなものだ」
「答えてやる。死にてェって言われて殺すのァ単なる憐憫だ。だが同時に、手向けにァなる」

「答えよう。それは寿命である。無為な引き延ばしを望まない。延長線上において、私達は、我らはもういなくてもいい」

「答えてやる。無いよ。生きなきゃいけねェ理由なんざ、無い。生き続けるなンておかしい。死んでも生き返るなンておかしィ。死んだらそこまでだ。それを悟って眠ろうとしたのに――生きなきゃいけねェ、なンて。そンなの道理が通らねェ」

いつの間にか、強いてたンだ。

俺ァさ、語っただろ。偉そうに。

暴走繭が、まだあの繭から出て来れねェって時にさ。

「理由なンか無ェんだ。あったって意味を成さねェんだ。誰が待ってるからって、誰が悲しむからって、そのままでいいからって、死んでほしくねェからってさ。――別に、生きなきゃいけねェ理由にァならねェ」

「そうだ。貴女の理解は、初めからあった」

「できたはずだ。世界も、神も。そンだけ言葉を届けられるなら、どォにかして殺してくれって言えたはずだ。その方法も、その手段も。――でも、しなかった。いいや、しなくなった。――最初に拒否されたから」

「そうだ。あの子は――優しいから」
「自分で言ったンだ。自分で諭すみてェに、偉そォに語ったンだ。嫌なんだよ。俺のせいで誰かが傷付くのァ。誰かが心を痛めるのァ。俺が殺したくねェって、俺が死なせたくねェって、俺のエゴで、俺の行動で、相手を煩わせるのァ嫌だ。ハハハ、とんだ馬鹿野郎だった。とんだクソ野郎だった。よォやく気付いたよ。アンタァそういう神だな。あるいァここは、そういう場所だな」
「……そうだ。この世界で鏡を造る事はできない。何故ならここ自体が自らを見つめ直す場であり――自らを思い出すために、全てに飽いていく場所なのだから」
返って来たンだ。
村長に【即死】を使ったから――俺が死んだ。
最近凝り固まっちまってた全部を殺された。あァそォさ。
幸せでいてほしいんだ。
別に生きててほしいわけじゃ、ねェんだ。
勘違いしていた。取り違えていた。
自分で言っただろ。

暴走繭ァ、強かった。苦しくて苦しくてたまらないし、怖くて怖くてたまらないし、嫌で嫌で仕方ないけど――アイツにァ立ち直らんとする意思があった。頑張ろうって、なんとか落ち着こうって。なんとかして、なんとか克服しょぉってさ。

強い奴だった。だから、生きる方を取れたってだけだ。

世界ァ、弱かったンだ。

世界だけじゃねェ。此処にいる奴らァそぉなンだ。

「何もずっとずっと前向いて歩き続けて何があっても動じないってのが強さじゃねェ。そんなのァ生きるってことじゃねェんだ。自分で言ったのさ。立ち止まって自分省みて無理なものァ無理だって割り切ってやりたくないことァやりたくないって――そぉ言えねェ、弱い奴もいる。それが言えない事ァ、決して」

決して――悪い事じゃ、ねェ。

弱い事ァ、誰に咎められることでもない。

「村長。アンタ、だけァ違った。アンタだけァ――飽きちゃならねェって行動し続けた。強い奴だ。いいや、強かった、というべきか。――強く在ろうとし続けて、だからこそもう、脆くなった。もう疲れちまったンだよな。疲れちまって眠りてェ

んだ。弱くなったンだ。永遠を持てるのァ神さんだけだけど、神さんだって永遠を投げ出してもいい。死んでも、良い」

だって、それは。

「摂理だ。道理だ。理だ。ンで、自然だ。その通りなンだ。真っ当で、そのままで。永遠の命が当たり前なンて、ハハ、何を勘違いしてンだ俺ァ。——もう、寿命が来てンなら。その目を閉じてやんのが大人の仕事だろォが」

よく頑張った、とか。

お疲れさん、とかさ。

頑張ったンだから——眠ってもいいって。

そんなこともわかんなくなってたのか、俺ァ。

「死んでも働け、死ぬまで働け、なんざ久しく聞かねェ言葉だと思ってたがな、魔法少女ァどォにも環境的に黒いらしい。死んだあとまで働けって、ハハハ。俺まで毒されちまってた」

——これが、そうか。

この気付きが。この陽光が。夜にァない、この輝きが。

「――死にてェ、んだな。もうとっくに寿命ァ来てンのに、死ねねェんだな。命を鎖に繋がれて、痛くて、苦しくて――まだ生きろって、ずっと言われて。あァ――わかったよ」

朝が来る。

変わらないはずの夢の中に――陽の光が差す。

「【即死】だけじゃねェ。そんなのァ俺の一部に過ぎねェ。それだけじゃねェんだ。そォいう事だって、よォやくわかった。――アンタ、名前ァ？」

「其夢盗」

「はン、らしい名前だ。――今から、俺ァ戒律を破る。俺の一存で、俺の意思で。そこに懇願を付け足すのも、憐憫を重ね合わせるのも勝手にしな」

「……礼を言う」

生きて。

生き抜いて。

何があっても生き続けて。

その先に――安眠があるのァ、悪いことじゃねェ。

生きたいと抗うンなら俺の敵だ。そいつなら殺せる。殺してやれる。即座に死なせてやる。

けど、それ以外にも。

その通りに、そのままに、そうであるために――死ぬ、という選択を。

俺ァ、尊重できる。

「【死漸】」

どうか安らかに。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《≪ｔｅｘｔ》

「村長を殺したのか、汝（なれ）」

「死なせてやれたンだよ。漸くな」

「……それは、吾らも賜れるものか？」

「あァ」

手足があった。

腕も足も、ある。むしろ消そうと思っても消えねェ。
「そうか。……では、頼む」
「だいじぶ？　あーちゃん、心、痛くない？」
「おォ、ふーちゃん。大丈夫だよ。むしろ、今まで酷い事してきてごめんな」
「ううん。あたしはだいじぶ！　だってあーちゃんは、あたしを嫌わなかったし」
この場にいるのァ、漂流者なンかじゃねェんだ。
肉体を無為に留められた、外法で、あるいァ望まぬ形で押しとどめられた奴ら。
自分の意思なく生かされる——それが死よりも苦痛だ、なンて。
「もう、いいんだな」
「うん。もういいよ」
「ああ。吾も、もういい」
他——続々と集まってきた奴らも。
疲れた顔で、そう頷いている。
もう疲れたって。
もう——いいって。

定命を捻じ曲げられてまで、生きていたくァないんだ、って。
それァ決して幸福につながることではないから。
「――お別れだ。よォやくだ。俺がここにきて、たった一日かもしれねェけど――お前らァ、よォやく解放される。――行きたい場所ってな、あるか？」
「ただ、覚めることの無い眠りの暗闇へ」
身体から漏れ出でるァ死の魔力。
全身から――空間を浸すよォにして、死が広がって行く。
家々も霧も地面も空も、――住民たちも。
「俺ァ、アンディスガルってンだ。夜の宮に住まう神が一柱、鳥有為預が聖獣、アンディスガル！　これから先、もう、冥界に来ない――ただ死ぬだけのお前らに会うこたないだろォけどさ！　だからこそ！」
消えて行く。
消えて行く。
全部が消えて行く。誰かの尻ぬぐいのために用意された安住の地が。
カシヨの村が、消えて行く。

かつては国であり、しかし肉体と精神の死と共に滅って行った住民が、そこを村にした。
理想郷。桃源郷。美しき玉葉の里。
「お前らに会えてよかったよ。じゃあな！」
だから、俺も。
俺を――新生する。

――起きた。
「起きたわ」
「起きたか、梓」
「おお、ポニテスリット。大丈夫だったか？」
「ひと月近く眠っていた奴の言葉ではないな」
「マジでか」
「嘘だ。本当はふた月だ」

「変な嘘吐くンじゃねェよ」
まるで夢の続きみてェな事言いやがる。
一瞬確認しちまったじゃねェか。あァよ、安心した。まーだ罪悪感に縛られてやんの。これだぜこれ。ポニテスリットァこォでなくちゃ。
ベッドから、這い出る。
「……!?　お前、その身体は」
「ああ。ちょいとな、夢ン中で≫役割の統合≪って奴をしてきた。リハビリこそちったァ必要かもしれねェが、もう万全さ」
「そ……そう、か」
「ンで？　ふた月経ってるってな、マジか？」
「本当だ。お前は長い間眠っていた。創設者……ハイドレートがお前の精神を確認した所、≫心此処に非ず≪との診断の下、交代制でお前の看病をしていたのだ。……まさか私の時に起きるとは思っていなかったが」
「一応言っとくぜ。よく殺さなかったな。殺せば治るのによ」
「む？　……あぁ、それについては、今微妙な所だ」

「ン？　何が？」
　思ってた反応と違ったンで、反応が遅れた。
　何が微妙な所だって？
「あまり言い訳をしたくはないのだが、お前の指示により私とディミトラはＥＤＥＮを殴り飛ばした。そこまでは覚えているか？」
「あァよ。俺的にァ昨日のことくらいの感覚なンで覚えてるも何もって感じなンだが」
「そうか。――それにより、ＥＤＥＮは世界最大の魔力吸入点から外れた。幸いにしてというべきか、吹き飛び、突き刺さった山にも小さな地脈点があったためなんとかＥＤＥＮは稼働できているが、前のようにむやみやたらに蘇生槽を使う、ということはできなくなったのだ」
「あー」
　あー。
　そォか。そーなんのか。
「故に、ＥＤＥＮは国家防衛機構ではなくなった。その力を失った、というべきだ

ろう。だが、当然国民はそれを納得してはくれない。故に防衛組防衛班が国の守護を行っているが――正直、無理はさせられない。蘇生槽は使えたとしても一日に数度。このままではどうあっても無理である、との結論が出た」

「んー。そりゃ、そぉか。結果的に俺の指示が、やったことが……あんまり良くねぇ結果を持ってきちまったみてぇだな」

「――故に今日、新たなる施策が為される。刻限はそろそろだ。見るか？」

「よくわかんねぇけど、見るよ」

窓が開けられる。

うおちょいと寒いな。アレか、そうか。

北方山脈に突き刺さったンだから、クソ寒いンだここぁ。夢ン中があんまりにも適した温度だったから余計に寒い。

「あちらだ、梓」

「ん――」

そちら。

そっち。

そこに――国があった。
「へェ、見えるンだな」
「今より、学園長が魔法を発動なされる」
「へェ」
「――それにより、国は」
消えた。でけェ穴開けて――消失した。
……え？
おい、施策ってまさか――問題なくする、とかじゃねェ、よな？
「国ァ――どこに」
「上だ」
「上？」
――上だ。
上に、あった。
元々ＥＤＥＮの、終の因のあった場所に。
その大地ごと――国がある。化け物が入ってこねェよォにと作られた高い防壁

と、その周囲に敷かれたおなじみの防衛拠点。
それが、まんまる、丸ごと。
宙に浮いた。
「……どぉいう魔法なンだよ。学園長の魔法って」
「【畏相】、という。ある地点とある地点の相対的な位置を動かし、固定する魔法、だそうだ」
「……そりゃ」
「SSS級に相応しい魔法だ。そしてそれは、非常に多くの魔力を消費するという。老体の御身では、一日にそう何度も使える魔法ではない。どころか――長い期間のチャージを必要とする」
「だろォ、な。ンなもんバカスカ撃てたら強力過ぎる」
EDENの浮遊も、国の浮遊も。
あまりに規模がでけェ。
「だが、これにより地上の魔物を気にする必要が無くなった。気にするべきは飛ぶ魔物……主にバード系統だ。それを防ぐ必要がある」

「じゃァ、やっぱ常駐すンのか」
「いいや。それではダメだと、外ならぬ国側が言ってきた」
「へェ。国に意思なんざあったのか。てっきり国民にもＥＤＥＮにも強く言えねェ単なる機関だとばかり」
「……それは否定しない。正確に言えば軍だからな、言ってきたのは」
「やっぱりか」
あの国の政府ァお飾りもいいとこだ。
人気投票で決まるみてェもんだしな。そんでもって政策のセの字も出さねェ。出さねェでも国が回るンだ、なんてったって他に行く場所ねェから。
「――≫もう、守護はいらない。これからは別の国として在ってほしい≪。そう、あちらの軍部から声明が出されたそうだ」
「……大丈夫なのかよ。化け物が消えたわけじゃねェんだ、襲われたら対処できねェだろ」
「ああ。こちら側は別に使役されて守っている、というわけではない。私達には守りたいものがあって、だから国を守っている。そうではない、という魔法少女もい

るが、この国で生まれた者は大半がそうだ。故の折衷案、と言えるのだろう」
「ん――」
そぉだ。
国家防衛機構になっちまったのァ、創設者たちの意図するところではなかったのかもしれないけれど。
少なくとも俺達にァ、ちったァ国を守ろうって気概があンだ。今までみてェに死んでも守る、じゃなくなったってだけで。
それを、要らない、なンて突っぱねられても困るってな。
「見えるか？」
「……あァさ」
国を囲う、半透明の何かがあった。
俺ァ――アレを、知っている。
「結界という。使い得る魔法少女は限りなく少ないが、飛行魔法や身体強化に類する、固有の魔法ではない魔法の１つだ」
「へェ。それァ知らなかったよ」

「あれを国に張っておく。ただし、そこまで強度のあるものではない。が、それでいいとあちらの軍部は言った。砲弾や銃弾でなんとかする、と」
「……いんやさ」
「できるわけがない。……だからこそ、お前が必要だった。前に話してくれただろう。魔法少女の因子を殺す、という話。出来得るのなら、今すぐにでも、だ」
「……まず、位置の特定をしねェとならねェ。んで――成功するかわかんねェってな賭けに、俺も、国の奴も、賛意しねェといけねェ」
「できないか」
「保留だな」
「事態は一刻を争うのだが」
それァわかってる。
わかってるよ。
でも――もっと先にやんねェといけねェことがあンだわ。
「ごめん、ポニテスリット。俺ァやんないといけねェことがある。国防よりも大事なことでさ。すまねェけど――行かせてくれないか」

「どこにだ」
「空。――天幕の向こう側」
色々、諸々を無視して。
早く行かねェと――手遅れになる。
宙の莽へ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

2210　74. 御地猛忍具負不出民寧紫遠.

十三、新生編

75・地伏零須上亜御土升斗美・

「まぁ待て、ライラック。そう気を逸るな。まずは退院おめでとう。五体満足での復活、心から祝福しよう。そして命令だ、ライラック。今すぐに国民から魔法少女の因子を取り除け」

「よォ鬼教官。すまねェけどその命令ァ拒否させてもらう。なんなら俺の軍属も外してくれて良い。あ、そォいやミズメって奴しらねェ？　行方不明らしィんだけど」

「堂々と命令違反とは大きく出たなライラック。ミズメ、という魔法少女については現在我々も捜索中だ。リキュア・アールレイデ、李・理央、その他多くのエデン生が彼女の安否を案じている。恐らく先の騒ぎで誘拐されたか、どこかで負傷したまま動けなくなっているかだろう、とアールレイデ……姉の方が提言したが故だ。

それで、魔法少女の因子を取り除くことが出来ない理由はなんだ」
「あァ快癒祝いありがとな鬼教官。ミズメの席ァ残ってンだな良かった良かった。それァ良いとして俺ァちょいと行かなきゃいけねェとこがあンだよだから首根掴んでる手離してくれねェか」
ふゥ。
まァまァ。
話が錯綜してるぜ。いやまァ俺が故意に錯綜させたンだけど全部拾ってくるのやべェなこえーわ。
そうだ、義手と義足ァレーテーの中にしまっとくか。勿体ないし。
「それは、どこだ」
「おそら〜あ痛ッ!?」
「ふざけるなよ。お前が眠っている間に世界は変わっている。お前の我儘一つも聞いてやれん程には切迫している」
「あァすまねェな鬼教官。俺が眠ってる間に俺も色々変わったンだ。世界に危機が迫ってる。申し訳ねェけど俺ァ魔法少女をやめてでも止めにいかなきゃなンねェ奴

らがいる。アンタらの我儘に付き合ってられねェのさ」
投げ捨てられるのを――猫みてェに着地して、受け身を取る。
取れてねェな。強化してなかったら膝に来てた。
「世界の危機とは、何だ」
「新しい世界になる。新たな世界が作られ、こっちの世界ァ潰される」
「……何の妄言だ」
ま、妄言だと思うわな。
ハハハ。
けどちょっと、2か月も経ってるなンて聞いてねェんだわ。2か月前の時点でマッドチビァ準備が整った、って言ってた。でもまだ世界が死んでねェってこた、何かしらで手こずってるってこった。
そこを叩かなきゃ――やべェことになる。
世界が死にてェっつってンなら、死なせてやろうって思えるよォにァなった。
けど、世界も材料にして新しい世界作ろうってな無理だ。夜と太陽と風も捕まえて。ンなのァダメだ。ダメだってわかった。目覚めて頭スッキリしたよ。

迷ってる暇無いってさ。
「すまねェな、鬼教官。ちと――問答してる暇ねェんだわ。――プテラゴイル!!」
キェー、なンて声を上げて、その飛翔音が聞こえた。
ずっと近くで待機してくれてたのかね。ありがてェ限りだ。
「っ、魔物!?　【痛烈】！」
「おォ残念だったな鬼教官。ガーゴイルでね、痛みとか無ェんだ。ンで――俺に来るのァ、すまねェけど殺させても貰う」
見える。
今まで薄すぎて見えてなかったけど、これも紺碧ベルトの魔法とおんなじだ。
何かが飛んできてる。だから、殺せる。
「プテラゴイル、ＬＯＧＯＳまで頼まァ！」
またくぇー、なンて言って。
プテラゴイルァ、最高速度で飛び始めたのだった。

新生梓・ライラックちゃんァやっぱり魔力がちょいと増えてる。

思うに、アンゲルとの戦いで増えた時にも、ちィとばかしの〝役割の統合〟ってな起きてたンじゃねェかな。お嬢が言うように、〝気付いたら増えてる〟ってな、お嬢に〝役割の統合〟が起きてたンじゃねェかな。【神速】が、例えば【高速】と【瞬足】みてェな魔法があって、役割があって、それが統合された結果、みてェなさ。

お嬢自身ァ最初から【神速】だったって思ってるだろォけど、違ったンだ。役割ァもっと前に統合されてて、だからお嬢やSS級にァ魔力が沢山ある。役割を統合した分の魔力が、増えた分の魔力が。キラキラツインテにもだ。恐らくァポニテスリットや背中メッシュも。太腿忍者ァよくわからねェが。

俺にもそれァ起きてる。

名前こそ変わらなかったが、できることが増えた時点で役割ってな統合されてンだ。役割が増えりゃそのためのリソースも増える。それを世界から賜る。それが魔力の増える仕組み。

海を、空を飛んでいく。

ジパングが見えてきた。そォか、そっちにいンだな。

そォいえば逗留してンだっけ？　なンだっけ。まァいいや。必要なのァ着物狐とシエナだけなンで、まァ他ァ喜楽に過ごして欲しい。

「――私を置いていける、などと、本当にそう思っていますの？」

「思ってねェよ馬鹿お嬢。俺が飛んでったら全速力で付いてくるって信じてた！」

「ちなみにミサキさんもいますのよ」

「あン？」

「ほら、私の背中」

そこから、ひょいと顔を出すポニテスリット。

なンだよお前。始の点行くときもそォだったけど、ついてきたいならはっきり言えよ。

つかお嬢すげェな。人乗せて飛べるのか。

「――見つけた、ＬＯＧＯＳ！　おいプテラゴイル、俺が次に何言うかわかってるよな？」

プテラゴイルァ、クェ……と。心なしか嫌そうな声をあげる。

ハハハ。

そンで――急激に速度を上げた。
「あっ、ちょ」
「ハハハハ！　やっぱお前、いっちゃん最初の時からのプテラゴイルだな!?　わかってンじゃねェか、そォだよ――突っ込め！」
クェー!!　って。めっちゃ怒った声で。つかやけくそみてェな声で。
進む、進む。いいね、いいね。いいぞ！
行け、プテラゴイル。
ＬＯＧＯＳの壁なんかぶち抜け!!

「馬鹿でしょアンタ。身体が治ったのは蘇生……じゃなくて、新生かしら？　ともかく良かったわね、って言ってあげるけれど、それとこれとは話が別。【鉱水】の海に沈みなさい」
「まァ待ってくれマッドチビ先生。ちょいと色々立て込んでてさ、マッドチビ先生と遊んでる暇無ェんだ。おーい着物狐、来てくれ！」
「クク――久しいな、吾の妻。ところで今の衝突の衝撃で化粧が崩れたのだが、ど

うしてくれる？」
「なーに言ってンだお前面してンだから関係無いだろ。ほれ行くぞ！」
「どこへ、おお、おお。良い良い。よいが、そう引っ張るな」
「む？　梓、起きたのか。おはよう」
「おゥおはよォさん」
「ウィジ、それよりも言うべき事がある。梓の身体が」
「リジ。挨拶よりも先に言うべき事などないぞ」
「……それはそう」
相変わらずの様子で何より。
まァこいつらァＥＤＥＮがどーなっても関係ないからな。
あー、で。
「シエナ」
「はい。お帰りなさいませ、梓・ライラック様」
「――お前の名前の意味は、知らされてるか？」
「はい。――私は人格分割方戦闘用ガーゴイル・

76・泥直愚須手韻虞害事亜泥直頼句土絵鰤上亜・

宙の莽ァ墓所だけあって、中も陰鬱としている――ってなこたない。

むしろ終の因の最深部や始の点の外観と同じく、どっか近未来的っつーかよくわからねェ材質でできた、つるっとした外壁の迷宮だ。ところどころに巻き付いている真っ赤な花が、その近未来さをガクッと下げてンだけど。

この赤い花ァ勿論フリューリ草。紺碧ベルトの言う通り外来種――本来ァ冥界の花なンで、あっちじゃレアリティの高すぎるそれも、こっちじゃ大して珍しかねェってな。まァこっちから世界の方へ持って行こうとすると一瞬で萎れちまうンで、補充なんざできねェんだが。

「ク――迷宮とは、こうも……過激なものか」

「終の因とは比べ物になりませんね。気を抜けば死――それがわかります」

「あァまァ大丈夫だ。死んだら死者になるだけさ。こっち来たら蘇生槽との経路ァ切れてるだろォからな、一発で冥界行きだ」

「申し訳ありません、梓様。今何をどう大丈夫であると言ったのでしょうか？」

「俺の仲間入りってこったよ！」

強化した足でゾンビの下顎を蹴り上げ、浮いた体を剣で切り裂く。アンデッドだから死なないンで、行動不能にすンのが一番だ。幸いにして魔力ァ潤沢、先行した奴ら……マッドチビ達が残してった破壊痕も辿れるンで、普通に攻略するよりかァかなり楽なンだが。

着物狐にも冷静メイドにも神さんの加護をお願いしてるンで魔法が使えなくなるってなこたないが、どこまでいっても【侵食】ァサポート向き。俺みてェに殴る蹴るしかない。まァ顔掴んで骨にする、みてェなエグい事もやってるから完全サポートじゃねェ上にフツーにエグいンだけど。着物狐の魔法の詳細ァ知らねェが、式鬼あるから大丈夫だろ。

問題ァ。

「ククク、先ほどから思っていたのだが、お主、何故魔法を使わぬ？」

「あン？　使っても意味ねェからだよ」

「意味が無い、ですか」

「だってそォだろ。コイツらァもう死んでんだよ。死者にァ【即死】も【死漸】も

意味を成さねェって」

　生きているものを即座に死なせる【即死】。生き終えた物をようやく死なせる【死漸】。

　こいつらってな生きてるワケじゃねェからな。終の因や始の点の化け物ァ生きてンのもいくらかいたが、こいつらァ完全なる防衛機構だ。セキュリティロボットみてェなモン。

　なンで、殺しても意味が無い。多分アズサの【終焉】も効かねェはずだ。

　ぶっちゃけ【死漸】で無双ができンなら、宙の莽に入らねェで外側から壊してる。冥界ァ終わってるし死んでるから【死漸】がほぼ意味無ェンだ、だからこーやってちゃんと攻略してる。

「――なるほど、つまり――生き物にしてしまえばいいわけですね」

「【侵食】で、ってか？　やめてくれよ、殺しづらくなるだろ。俺ァちょいと考えを変えたたァいえ、いま生きてるモンを殺すのァバリバリ抵抗あるっつかしたくねェんだよ」

「わかりました」

「ク――ならばこういうのは如何ぞ？」
着物狐が式鬼札を一枚取り出し、壁に張りつける。
紋様ァ……あー、読めねェな。消えるの速いって。ンな一瞬の文字読める程目ァ良くないんだよ。知覚強化ほとんどしてねェから。
んで、その札もバチンと弾かれた。
「今のァ？」
「ククク、失敗したが、使役の札だ。この迷宮そのものを式鬼と見做し、屈服させる。流石に無理だったか」
「一応神の建造物なンでなァ」
「私の【侵食】もこれら材質には干渉できないようで、少しばかりの対抗心を覚えますね」
「おゥさ、雑談してねェでとっとと行くぞ。そォいう非正規手段が使えたら、俺達よりもアイツらがまず使ってるだろ？」
「確かに」
「ク、そうか。なら――正攻法で行くとしよう」

「ハナからそーしろっての」
　足先でゾンビの鼻っ柱を蹴り飛ばす。背後、カランコロンという音。スケルトンか。
　んじゃ剣で――いやさ全身強化で緊急回避!!
「ク――なるほど、そういう類もいるのか」
「いねェよ！　こいつァ――今さっき作られたンだ！」
【蟲独】の魔法少女ですね」
　迷宮の通路いっぱいを這って退けて来たのァ、数多のスケルトンが一つに纏められた――いわば、がしゃ髑髏。明らかに迷宮のサイズを超えたそれァ、形こそそォなってるだけで、スケルトン達がめちゃくちゃにまとめられている。
　俺達が追ってくることを見越してのトラップなのァわかるが、やってることがやべェって。
「来るぞ！」
「ク――」
「突撃いたします」

逃げ道の無い場所での、巨大な拳。
骨で出来ているが故に硬く、しかし軽さを見越して防御姿勢を取ろうとした――が、冷静メイドが突っ込んだのを見て作戦変更。
レーテーを起動し、新生の時に取れたマッドチビ先生作『折れないし溶けないし凍らないしあと軽いすっごい義手』を取り出す。
「着物狐、身代わり用意！」
「もうしてある。気軽に行け」
「あァよ！」
こいつのこの身代わりもよく原理がわからねェんだが、まァオリジン種ってなそンなもんだ。ベルウェークやカンコウァ易しい方だった。着物狐が敵に回ってたらって思うとゾっとするが、それさえもまだ魔法少女じゃなかった頃の侍衆が抑えきったンだよな、とか。すげェよな、とか。
今考えるべきじゃねェことぜーんぶ頭ン中から追い払って――突き入れる！
その、肌色になった部分に、だ。
「【侵食】」

「冷静メイド、そのまま下に滑り込んで関節部位にも【侵食】しとけ！　細かいトコァ俺がやる！」
「承知いたしました」
即席で作って貰った剣より、こっちの義手のが硬い。硬いし折れねェし解けねェし凍らねェしあと軽いから、武器として優秀過ぎる。一応ヒトの腕の形してるってながちょいと傍から見ると気味悪ィかもしれねェが、俺にとっちゃ結構な相棒だ。また一緒に戦えてうれしいぜ、ってな。
相棒と言えば、SRとかプテラゴイルとか、懐かしいのがいっぱいだなァ――って。
さっきから余計な事考えすぎ。
「【死漸】」
「――!?」
ヒトガタァこれだから。
声帯も無ェくせに、叫び声みてェなのを出しやがる。こえーって。命の気配が一切ないからイケてるけど、まるでマジに怨念あるみてェに聞こえるンだよな。

突き入れた中身。
ちょいと肉っぽい嫌ーな感触を覚えながら、その全てを死滅させる。【即死】は統合されただけでそのまま使えるよォで何より。イメージが変わったからか、今まで死飛沫とかの類を重力気にして使ってた所、完全に重さの無いソレになったのァでけェ。
夢の中の湖。ヨウコ、だっけ。サマサマだな。
染み渡らせる。
骨自体ァ死なせられなくとも――冷静メイドが乱雑に変えて行った【侵食】部分ァ殺せる。
だから、出力の上がったソレが。【死漸】ががしゃ髑髏の全部に行き渡って――その部分部分がガシャドシャと外れて行く。
つったってこいつらァ元から別々のスケルトンだ。
だから崩れてすぐ、俺や冷静メイドに斬りかかろうとするが――さて、本物ァどれでしょう、つってな。
俺と冷静メイドの群れ。

着物狐が手のひらから舞わせていた紙が、骨と骨に隙間に入ってァ俺達を形作る。
「問題ありません」
「おう、下がったぞ。ド派手に燃やせ」
「ク――良い良い。そら、たんと味わうが良い。――火刑・式鬼城郷」
それらすべてに一瞬で火がつく。
ハハハ、世界で上塗りされた火じゃねェ、冥界で上がる火だ。――効くだろ。なンたってそりゃ、清浄なるモンだ。
死者にァ【即死】も【死漸】も、あとァ【終焉】だの【劇毒】だのも効かねェだろォがな。
葬られンのァ、堪えるだろ。
「ちなみに聞くけど、着物狐」
「ク、火を消せ、というのは無理な相談だ。吾は火との相性が果てしなく悪い」
「梓様の好まれる手段では、私も不可能です」
「んじゃ俺がやるよ――【死漸】」
……。

うん。
「すまん、無理だわ。アィツの【終焉】ならできただろォけど、単なる火を消すのァ普通に無理」
「何故この作戦を敢行したのですか？　急いでいるのではなかったのですか？」
「ばっかお前、今俺が超絶焦ってンの伝わんねェのか？」
「クク、馬鹿はお前だ。吾もだが」
さて、この大火事どォすっか。
……いや待てよ？
「冷静メイド」
「はい」
「……あー、その、あんまりこォいう指示ァ出したくないんだが」
「はい。やはり皮での消火でしょうか？」
「いんやさ――あるだろ。ほら、その――口に」
「……なるほど」
「良い良い。そういう見世物も良い」

「見世物とか言うンじゃねェよ」

察した着物狐が紙を取り出す。それァ何枚も、何十枚も、何千枚も出てきて――当然それにも火が移るのだが、その前に。

冷静メイドが、紙の一端を舐める。

「【侵食】」

瞬間、紙の全てが唾液に変わった。

――大量の唾液が、大火事に降りかかる。その規模、豪雨が如く。粘性もあるから余計にこう。うん。

いんやさ、ほら。

たまにいるだろ。俺ァやんなかったけどさ、おっさんで、灰皿無いって気付いた時に、舌に唾液溜めて煙草消す奴。はしたねェっつか見てて気持ちよくねェからあんまり見てェもんじゃねェけど――まァ水ァ水だし。冷静メイドの【侵食】が世界を自己に変質させる、ってンなら、唾液も自己なンじゃねェかな、と。

……人体の液体っつーと、まァ胃液とかもあるけど、それァそれで色々思う所あるし。血液だとスプラッタすぎるし。今更も今更なンだが。

「ク、侍女の唾液で浸した通路を通る主人、か。ククククッ、良い良い。世には様々な趣味も有ろうよ」
「いや俺のメイドじゃねェし」
「少しばかり恥ずかしいのですが、なるほど、考えもしなかった魔法の使い方です。私の魔法にはまだまだ可能性がありますね」
「……火、消えたな。行くぞ」
「問題ありませんが、無視はしないでいただけると」
ごめんって。
でも触れ難いンだよおじさんにァよ。指示しといてなンだけどさ！
いーから、行くぞ！
「ふむ、唾液も自己であるとなると……少しばかり考えてみたのだが、肌や骨、肉だけでなく、臓器の類もいけるのかえ？」
「はい。私がその形を認識している必要がありますが」
「敵を胃酸の海に沈める、ということもできるわけだ」
「良いですね。他に何か思いつきますか？」

「そうさな、吾の式鬼さえも【侵食】出来得るのならば、魔法少女の衣装にもいけるのだろう？」
「なるほど、では例えば、服の裏側に【侵食】し、舌を這わせるなど如何でしょうか？」
「吾の考えたものとは違うが、それも良いな」
「急ぐんだってば!!」
魔法談義ァ全部解決した後にやれ！　こえーのもえぐいのも触れ辛いのも!!
今ァ急ぐぞ！
「口腔内に」
「それは流石に痛みが勝りそうで」
「なるほどそれなら」

遠《ｔｅｘｔ:ｓ1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

結構深くまで来た。

出てくる敵ァ苛烈になってるが、こっちに怪我等ァ無し。まァこの世界じゃ俺ァちゃんと強いので守らなくていいってのと、着物狐の身代わりがマジでつえーわ。どォいう仕組みか知らねェけど。

「――戦闘音に、命の気配！」

「後ろから攻撃をしかけますか？」

「クク、それとも式鬼をけしかけるか？」

数ァ――３？　なンだ？

マッドチビ、ゲヘナ、アズサ、ピンクカチューシャと封印措置の魔法少女２人。だから、６人いねェとおかしい。戦闘してる……つっても迷宮の化け物と戦ってるって配置じゃねェ。

これァ――仲間割れか？

「まどろっこしィのァ無しだ。どーせ一本道、突っ込むぞ」

「承知いたしました」

「吾は少しばかり後方に居よう」

「あァ」

曲がり角の先だ。
そこを――曲がる。
そこに。
「――丁度いい所に来たな。少しばかり手伝ってはくれないか。私の身が危ない」
「げ、面倒なのが来たのだ！　アニマのやつ、もっとも引き留めるべき方を勘違いしてるのだ！」
「チ、てめェらもう追いつきやがったのか！」
いた。
――血だらけで、ボロボロで、今にも死にそォな――ニヤニヤ丸眼鏡と。
ソイツを攻撃し続ける、アズサとピンクカチューシャ。
「何を」
「見ればわかるだろう。仲間割れだ」
「隙アリ、なのだ！」
「バカ、今のァ誘いだよ！　一旦下がれピンクカチューシャ！」
「梓までそう呼ぶのだ!?」

考えろ。
その正誤を。
命の気配ァ確かに3つだ。残りの3人ァいない。なンでこの3人が仲間割れしてて、他の3人がいねェ？　先行したか？　いやいや、宙の莽において一番大事なのァニヤニヤ丸眼鏡だ。まずニヤニヤ丸眼鏡が夜の神に戻らねェと何も始まらねェ。それくらいマッドチビにもわかってるはず。
アズサもそォだ。言い方ァ悪いが、こんなところで壊されちゃ困るモンのはずだ。ピンクカチューシャ……【帰述】がどォ生きンのかァ知らねェけど、少なくともこの面子を残していく意味ァ無い。
じゃァ、マッドチビ……シエナの魔法か？
名前ァわからねェけど、【誤認】とかその辺の、認識を操る系統の魔法だってなわかってる。ヨウキの言う通りなら、凄まじい範囲と人数にかけられるタイプのやべェ魔法。
なンだ？
他の可能性を全部洗え。このボロボロになったニヤニヤ丸眼鏡ァ幻覚か？　い

んやさ、命の気配の陰りァ確かにキてる。死の気配ァ周囲に無い。

あるいァ――いらなくなった、とか？

夜の神がいらなくなることなンてあるか？　代用品を見つけでもしねェと。つか、だからといってアズサとピンクカチューシャに殺させよォとする意味ァ？　自分達が離れる理由ァ？

「長考している所悪いのだが、そろそろ助けては貰えないだろうか。私はどちらかといえば研究者でね、あまり肉弾戦というものに強くない」

「ククク、良い良い。瀕死になっても使い道はあろうさ。吾らもお主を行動不能にすることを目的に来たのだ、そちらの２人、協力せぬか？　――特に梓。ククク、吾を覚えているだろう？」

「う……う、う！　ぴ、ピンクカチューシャ、やべェ、私アイツに攻撃、できねェかもしれねェ」

「何乙女みたいに顔赤らめてるのだ!?　別にあっちの露出狂を攻撃する必要はないのだ！　こいつさえ殺してしまえばいいのだ！　そうすれば――世代交代が起きるのだ！　後はディミトラ達が」

――全身強化。
剣を振りかぶって――思いっきり斬りかかる。
ピンクカチューシャに。
止めたのァ、アズサ。ケッ、そっちも『折れないし溶けないし凍らないしあと軽いすっごい義手』か？　ＭＹＴＨＯＳとか言ったっけ？　はン、騙されやがって。
「情報提供感謝するぜ、ピンクカチューシャ。今全部理解した。おいニヤニヤ丸眼鏡、アンタ助けたら何くれるよ！」
「お前の知りたい事を教えてやろう。――魔法少女の因子が、人体のどこにあるのか、をな」
「あァさ十分！　着物狐、アズサァ任せるぞ！」
「ククク、任せる、ということは――貰っても良い、と？」
「もも、貰う!?　な、何をだよ！」
そォいうことか。
今のニヤニヤ丸眼鏡ァ神じゃねェ。まだ魔法少女だ。
んなら――コイツ殺しちまえば、神の座が１つ空く。本来だったらウチの神さ

んか、もう1人の方に吸収されンだけど、もう1人ってな其夢盗のことでよ。もういねェんで、吸収ァちょいと遅れる。

そこに、代用品を押し付けてやりゃ、新たなる神を作り得る。

なんなら代用になるか、って。

「捨てられたってのに助けに来たのか？　律儀だなァオイ。――ソテイラ！　いるンなら返事しな、助けてやっからよ！」

「助けて～～～!!　もうちょっと先にいるよ～～～！　連れてかれてるよ～～神にされちゃうよ～～～!!」

大声が返ってきた。

ハハ。

ハハハ。

ご同輩、それも大先輩からの救援コールってな、ケケ、やる気出るねェ。

前ァルール違反で殺したがな、冥界でなら助けてやる。俺達ァ死者にァ優しいンだよ。

「なンで――すまねェけど、殺すぜ。何、命までァ取らねェから、潔く死にな」

剣を向ける。
ピンクカチューシャ。【帰述】の魔法少女。
「か、かっこつけられたのだ……！　ならばこちらも、≫よかろう、その宣戦布告、確と受け取った。――やはり我らの運命とは、潰し合う所に落ち着くのだな≪の奴なのだ！」
「意味わかんねェよ！」
「な――読んでないのだ!?　誰もが知ってる大人気小説、『黒鉄と白銀の剣士』!!　全72巻!!」
「知らねェな、聞いた事もねェ」
「あたしの最高傑作なのだ……読んでないなら、読ませてやるのだ!!」
背後、傷付いたニヤニヤ丸眼鏡を冷静メイドが引き離し、簡易治療と拘束を行っているのがわかる。
よォし、んじゃまァ――大暴れと行きますか。
アズサァなンか、着物狐にホの字っぽいし。アイツのキスで魅了されてるだけだと思うンだが、アレってそんな持続するモンなのか？　それとも初恋故に、とか

？　ううん、おじさん色々考えちゃうな、父親みてェに。
「行くのだ、クロガネ、シロガネ！」
「――！」
「斬（kill）」
とか考えてたら、なンか出てきた。
黒い騎士。白銀の騎士。
精神体？　いや……言動的に、魔法か？
特殊魔法じゃねェだろォな。それだと殺しちまうンだが。
「安心しろ、学のある方の梓・ライラック。それは特殊魔法ではなく、遠隔魔法の類だ。それらの命を奪った所でプリメイラは死にはしない。――これを聞きたかったのだろう？」
「アンタ、案外見どころあンな。いいぜ、なら――久しぶりに、全開で行こうじゃねェか」
踏み込む。
強化に強化を重ねた、俺の最大速度。

それァいとも容易く対処され、２本の剣が俺を襲う――も。
「嘘、折られたのだ!?」
「剣が死なねェって？　ハハ、馬鹿言うんじゃねェ、剣ほど死にやすいモンァねェよ、さて無手の騎士――」
「じゃあ書き直すのだ」
「!?」
下がる。
一瞬で剣が生えてきた。それも、さっきより硬いっつか……あれやべェな。不死じゃねェが、かなり堅固だ。書き直す、っつったか。で、【帰述】ね。
書いたモンがそのまま出てくる魔法……ただしそれだけじゃねェ、ンだろうな。
「けど、だからなンだ、ってな。――【死漸】」
「任(頼斗)セタ」
「頼(例太)ロウ」
剣が克ち合う瞬間、死の気配がした。
ンで、避ける。【死漸】の浸された剣。それを割って、２つが俺を真っ二つ、い

や四分割にする――そんな感覚があったのだ。
　追撃。
　レーテーを起動し、剣をしまう。素手になる。
「あはは、諦めたのだ？」
「馬鹿が、剣じゃ打ち勝てェんなら他の手段に頼るなンざたりめェだろォが」
「無駄なのだ！　無駄無駄無駄なのだ！　知らないのだ？　いつもはいがみ合い、会っては潰し合い、斬り合い、殺し合う２人が――手を取って、共通の敵を見定めた時！　２人の前に敵は無いのだ！　負けは無いのだ！」
「ハハハ、好いね。そりゃ好い。俺も好きだぜ、そォいう王道ァ。だがよ、ピンクカチューシャ。１つ忘れてねェか？」
「のだ？」
「取留守伊豆止蓮邪暫不意串音（事実は小説より奇なり）――ってな。あァまァ、こっちじゃ知られた言葉じゃねェか、ハハ！」
「世界言語を使うのだ!?　もう使ってこないって聞いてたのだ！」
「死者が夜の言葉を使って何が悪い！」

突っ込む。
当然剣を振り下ろしてくる2体の騎士。そこに、敢えて更に突っ込んでいく。確実に剣が当たるルートを通って――その身体が、紙へと変わっていく。
「インキュバス!?」
「へェ知ってンのか。博識だな。んじゃ、死ね」
その声ァ背後から。
切り裂かれてバラバラになった紙ァ――身代わりとしてでなく、目眩ましとしての役割がある。
さらにその紙の一旦を握るのァ、背後にいる冷静メイド、ってな。
「【侵食】」
紙に埋もれた剣が、肉に埋まる。簡単にゃ抜けねェ肉の壁。
俺の位置ァ、さっき突っ込んだ時のままだ。ピンクカチューシャの声が背後に聞こえる位置。
つまり、騎士2体の背後。ほとんど仰向けの状態で、その2つの背を思いっきり押す。

ほっとんど動かねェ騎士。
反対に、加速するのァ俺の身体、つってな。
「ハハハ、背中がガラ空きってな！　食らえ――何の捻りもねェ、仰向け頭突き!!」
「よ、避ける――ぶごふっ!?」
はン、自分と騎士の距離が近かったのが災いしたな。
見た目少女な奴の腹に突っ込むってなおじさんァ世間体とか気にするンだけど、まァ冥界だし。つか誰もみてねェに等しいし。
「ツカマエタゼ……？」
「ひぃっ!?」
「【死漸】。――敵になら、容赦ァしねェよ」
カクん、と。
ピンクカチューシャが――崩れ落ちる。それァ腹の痛み、だけでなく。
「……殺した、のか？」
「クク、どうした、梓。吾の方を見ろ。吾だけを――」

「……ごめん、ナリコ。これだけァ譲れねェんだ。……殺したのか、って聞いてンだよ、オイ」
「ン？　あァ、そォだよ。どんな魔法か知らねェが、厄介なのァ目に見えてたからな。それがなンだ？」
「【終焉】」
「【死漸】」
克ち合う。
遠隔の【終焉】と近接の【死漸】。死を纏った拳があらゆるものに終わりを齎す魔力を死なせる。
「――とうとう、そこまで堕ちたか、てめェ」
「ハハハ、なンだ、どこまで期待してたンだてめェ。俺が殺す相手選ぶよォな奴に見えたのか？」
「信念まで曲げちまったら、てめェァ単なる殺人狂だろォが。その一線ァ引いてるって思ってたよ。――勘違いだったみてェだが」
「ン？　あー、なるほど。そっちね」

「何がだよ！」
「言い争ってないで助けるのだ!!　やばいのだー！　息が詰まるのだー!!」
「あァ、それくらいァしてやるけどよ」
うつぶせに崩れ落ちた少女をひっくり返す。
その顔にァ涙。物凄い剣幕で睨みつけられてる。……いやまァ、こォ見られると罪悪感沸いちまうが、敵だからな。
「い……き、てる？」
「死んでるのだ!!　この天才小説家プリメイラ様の手足が死んだのだ!!　死に等しいのだー!!」
「ナマ言ってンじゃねェよ。命取られなかっただけ儲けモンだと思っときな」
「小説家が文字を書けなくなるという絶望の一切をわかってないのだ！　この人殺し！　殺人鬼!!」
「SEが打鍵できなくなるってこったろ？　その絶望ァわかるさ。けどお前ァやっちゃいけねェ事やりすぎたンだ。罰ってな本来私的に裁量して良いモンじゃねェのァわかってるけどな、俺と敵対した時点でそれくらいの覚悟ァ持ってもらわな

きゃ困る」
「知らないのだ！　勝手に敵対してきたクセに！」
……あン？
知らねェわけねェだろ。喧嘩、売られたよな？　あン時に。
なンだって――。
「【終焉】」
「え――」
「あ」
それァ、意識外だった。
それだけァ絶対にしねェと思ってた。俺に撃ってくるならまだ対処できる。
けど。
「――おい、なンで殺したンだよ」
「何言ってやがる。手足死んでて、それが生きてるって言えンのかよ」
「ア？　そりゃお前、言っちゃならねェ事だぞ。じゃァなンだ、ちょっと前までの俺ァ死んでたか？　あァ？」

「死んでただろ。隔離塔で何も出来ずに景色を眺めるだけ。役割の１つも果たせねェ、人間的生活の１つもできねェ。それが死じゃなくてなンだってンだ」
「生きてンだよ。それでも。――ハハ、いいよ。いいぜ。いいな」
「笑うんじゃねェよ、気色悪ィ。嫌いなモン見て笑うとか、狂ってるぜ。私ァ今、一切笑える気がしねェ」
笑えて仕方がねェ。
見えてンだよ。終わったはずのピンクカチューシャ。その肉体が――消えちまったのを。
魔力素に分解されたワケじゃねェ。これァ。
「正解だ、学のある方の梓・ライラック。……連れていかれたな。疑似【隠涜】」
「あァよ、正解を正解だって言ってくれる先生ァ好きだぜ」
「何を」
「ククク――しばし眠っていろ、梓」
紙が舞う。
それァアズサの身体に巻き付いて、張り付いて――その身体を、ミイラみてェに

しちまった。
「冷静メイド、これ使え。さらに上からだ」
「よろしいのですか？」
「あァ。俺の助けになった義足が、コイツの枷になるってンなら、それも因果だろォよ」
言って渡すのァ義足の片方。
つけてくれた、作ってくれたマッドチビ先生ァ終始無言だったたァ言え、かなり丈夫に作られた義足だ。いつぞやの髪へ【侵食】しての拘束にァ持って来いの材質だろう。
「……わかりました」
「頼む。んで、ニヤニヤ丸眼鏡。お前、歩けるか？」
「問題はない。さて、取り返しに行こうか。我が最愛の眷属、黒きストリクスを」
「見捨てた癖に何言ってンだか」
なンでニヤニヤ丸眼鏡の方を切ったのかァわからねェが、行くぞ。
大丈夫さ、アズサ。その拘束解ける頃にァ全部終わってる。

ちゃんと、な。
ちゃんと。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

77・阿保皆棒邪居蟻・

「問いますけれど」
「ん、なんだい？」
「どうして、梓さん側を分断しましたの？　私達が向かうべきだという場所――宙の莽。その地について、そしてこの≫天幕の向こう側≪について詳しいのも梓さんだけ。なれば、私達を外側に、梓さんと貴女を内側に分断すればよかった話です。何故――梓さんを１人に？」
「１人じゃないだろ？　あの魔物と、更にはもう１つの気配もあった。あの子だけ【断裂】で切り離したのは簡単さ、あの子とアタシの疑似魔法は相性が悪い。それだけだよ」
「――なるほど。つまりそれは、私達であれば貴女１人で相手にできると――そういう事ですわね？」
「余裕さ。なぁ――シエナ」
どちらが速かったのか、なんて言うまでもない。

フェリカの方が速かった。圧倒的に速かった。統合されても【神速】は健在だ。故にフェリカの方が速く動いて――けれどその装甲に、刃を突き入れる事ができない。

躊躇した、というわけではない。フェリカは梓ほど優しくはない。

単純に、その装甲に剣が負けただけだ。

「!?」

「作るのには結構苦労したよ。どういう仕組みなのかの判別から、その精神構造の把握。魔法っていうのは肉体に宿るものだけど、どう使うかはソイツ次第。結・グランセ――だったか。上手く使えてた方だとは思うけどね、もっと良い使い方はあった。D級魔法の劣化版、なんて言ったら使い物にならないだろうけど、D級ならこっちで要素付け足して改良もできる」

ボロボロと崩れ落ちていくフェリカの細剣。その隙に、とばかりに――シエナが飛んで、アニマの隣に降り立つ。

これは、【弱化】だ。けれどあれは無機物には作用しないとその使用者たる結・グランセが言っていたはず。

「この子の目は、対象の魔法を分析する機能がついててね。存分に見させてもらった。ＥＤＥＮの魔法少女――学園組、遠征組、防衛組、特例組。監視組だけは接する機会が無かったみたいだけど、十分さ。そしてその分析記録があれば、疑似魔法だって簡単に作り得る」

「――最初から、敵、というわけですのね」

「いや、この子の名誉のために言っておくと、この子自身に自覚はないよ。アンタ達のために精一杯を尽くして、アンタ達のために全力を尽くして――アタシ達のために、情報を発信し続けていた、というだけの事。あの、あるるらら、とかいったかい。【透過】の魔法少女。アレに内部を見られたと聞いた時はヒヤっとしたけどね、発信機がなんなのかは理解できなかった様子で何よりだ」

シエナは。

とてつもなく冷たい目で――フェリカ達を見ている。

そこに感情はない。そこに意思はない。

「管理者権限――安藤アニマ。暗証・慈円長井戸――認証しな」

「管理者『魂の帰還（UNDO ANIMA）』を認証。暗証により、殲滅形態に移行。全武装解放。出力

最大――実行します」
その両腕が重なる。構えられる。
集中する魔力。フェリカも、ミサキも、ウィジもリジも避けようとした。
けれどできなかった。
身体が、重い。
「【弱化】――どうだい？　思考だけは対象から外してやったから、良い感じに防いでみな」
使う。全員が魔法を用いる。
それを防御に、使う。
「両腕解放、変形合体。実包装填、7。肩部解放、疑似魔法【槍玄】を読込――加速力場形成、熱量上昇……発射します」
けれど――今まで見た事がない規模の砲撃に、全てが吹き飛ばされた。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「【喧槍】」
「おっと」
立ち昇る砂煙の中から、最初に出てきたのはウィジ。
焼け爛れた肌は、攻撃を防ぎきれなかった証。同時に直撃しなかった証でもある。
シエナを無視し、アニマに向けてその槍を放つも、避けられる。無論【神速】には及ばずとも、かなりの速度のある槍だ。
それを避けるとなると、相当な強化をしているか――自分達が弱体化しているか。
突き。薙ぎ払い。
それらもするすると避けられる。背に隠し創ったもう一本の槍で不意打ちをしようとも、既のことで避けられる。思考は遅くなっていない。身体も重くなっていない。知覚系統に強い魔力集中も感じない。
なれば――魔法だ。
「【波動】！」
「それはマズイねぇ――【抑制】」

「な――ぐ、ぅっ!?」

一度距離を取ったウィジに代わり、ミサキが面での攻撃をする。

けれどそれは、その【波動】は途中で力場を失い――その腹を、アニマが思い切り蹴り飛ばした。

「ヒヨっ子も良い所だね。自分の魔法を過信するのも大概にしなよ？　魔法が消えたからって、そう簡単に動揺すんじゃないよ」

「……ウィジさんの攻撃を避けたのは、えるるー先生の【回避】ですわね。今のはキフさんの【抑制】。疑似魔法……厄介、と言って差し上げましょう」

「【神速】。いや、今は【神光】だったか。それによる不動の防御。なるほど、少し前に開発したばかりのものをうまく使いこなしている」

「そうですか、そんな所までお知りになられているとは思いませんでしたの。魔法だけでなく――私達の会話。その全てが知られていると、そう思ってもよろしくて？」

「良いよ。それくらいの助言はしてやるさ。その上で、アンタ達がどう立ち回って、どうアタシを打ち負かすか。期待してるよ」

なめられている、と。フェリカは思わなかった。
安藤アニマ。S級、【業焔】の魔法少女。国に家族がいる身でありながら、EDENに敵対した者。
魔法少女の魔法を技術で再現するという、誰もがしてこなかった事をやってのける比類なき天才。
……いえ、私達の知らない方のディミトラさんが、その師、でしたわね。と。
フェリカは少しばかり笑って、ため息を吐く。
笑っている。
早く梓を助けに行かなければならないという思いとは裏腹に——もう1つ、フェリカには望みがあって。
無論国を守らなければならない、EDENを守らなければ、仲間を、そしてあるいはシエナも取り戻さなければならないという思いは勿論あって。
その上で。
その上で——フェリカは。
「劣化版とはいえ——EDENにいるあらゆる魔法少女の魔法を使い得る、と。そ

う考えてよろしいのですわよね？」
「ああ、そうさ」
横合い、意識外から飛んでくる光線は、リジが防いだ。
大丈夫だ。この仲間は、ちゃんと背を預けられる仲間。
なれば――なれば。
「私、アールレイデとしては失格なのですけれど」
亜空間ポケットよりもう一本の剣を取り出す。
アールレイデ。自身の家名。自身の宿命。
この家に生まれたからには国を守護し、ＥＤＥＮを守れと――そう言われて育った、反動なのかもしれない。
「一度――落としてみたかったのです」
「へぇ？」
「数多の強者。数多の魔法少女のいるＥＤＥＮ。その牙城を、我が身１つで落とすのは――どんなに心地の良い事でしょうか、と」
何度も何度も、想像した。

何度も何度も、考察した。

この魔法を使う相手ならば、自分はどう動くか。どう動き、どう殺すか。

あの魔法を使う相手ならば、自分の取るべきは。何をして、どう殺すか。

新人が入ってくるたびに。SS級として、軍部の様々な魔法少女と会うたびに——夢想したのだ。

「中々過激な思想を持っているじゃないか。あの子……梓から聞いている限りでは、慈悲深く、優しく、可愛らしい少女、といった印象だったけれどね。どうやら違うらしい」

「——その想像の中で、唯一。どう頑張っても殺し得ない相手がいましたわ。どう攻めても、どう策を弄しても——絶対に勝てない相手」

「——シエナ、対象はあっちの3人に絞りな！　迅速に殲滅し、その後こっちの助力！」

「承知」

笑みが零れる。

歓喜の笑みが。

ずっとずっと、取り繕っていたというのに――どうしてだろう。
フェリカは。彼女は。
凄惨な笑みを浮かべて――言う。
「それが、梓さんでしたの。知覚も身体能力も圧倒的に下の、どうやっても、どのようにしても殺せる――はずなのに。私の想像の中で、あぁ、私は何度死んだことでしょうか。SS級が【神速】、フェリカ・アールレイデは一体幾度殺されたことでしょうか。それは【神光】になっても変わらず――故に」
「こっちに近づくんじゃないよ――！　一瞬で壊されちまうからね!!」
「それ以外の魔法少女であれば、容易に殺し得ますのよ」
気付いた時には蹴り飛ばされていた。
誰が。
「――ぐ、なに――【回避】は発動してるは、ずっ！」
「ええ、えるー先生の【回避】は素晴らしい魔法でしょう。意識無意識関係なく自身に向かう攻撃を避ける事ができる、もしＥＤＥＮに防御力を評価する概念があれば、Ａ級やＳ級に届いたでしょう魔法。――けれど、避けられたのなら、避け

た先に私がいればいいだけの話」

蹴られる。

本命の剣は【回避】しても、次段の蹴りが避けられない。

何段あっても【回避】し得るはずの魔法が、対応できていない。

「D級ならば改良もできる、などと仰いましたが――それは無理ですわ。えるるー先生も、グランセさんも、努力した上でD級魔法少女ですの。彼女らができる事以上のことは、貴女には再現し得ませんのよ」

「――いいね。いいじゃないか、フェリカ・アールレイデ！　アタシの努力を否定するというのなら、こっちだって全力さ。あの子に義理立ててちっとは手加減してやろうと思ってたが――ハハハ！　アタシが馬鹿だった！　謝ろう！」

「……なんだか笑い方が梓さんに似ていて嫌ですの。変更を要求しますわ」

「こちとら生来でね。ハハ、そう簡単には変えられない。けど、良いよ、お前さん。お前さんが勝ったらどうにでもしてやるさ」

「では」

一段目の突き。

二段目の蹴り。【回避】した先、そこには既にフェリカの蹴りが置いてあって、けれどそれは凄まじい速度で引っ込められることになる。
距離を取ったのはフェリカの方。魔法少女としての衣装――その足先。真白の靴が、どろりと融けている。
「【凍融】……置いてあるんだ、対応できないはずがないだろ？」
「成程。ならば、見えなければ良いのですわね」
「――【静弱】ッ！」
光線が半透明の箱に掻き消される。
少し離れた場所で戦うリジが、「ム」なんて言った事は誰にも悟られない。
「【静弱】の箱……なるほど、素晴らしいですわ。安藤アニマさん。貴女を殺す手段など幾らでも考え付く、などと思っていましたけれど、色々と組み合わせるとそうも面倒になり得るのですわね。考える楽しみが増えますの」
「ちょっとは段階ってもんを踏みな！　限度があるだろう！　――いきなり全方位攻撃とか、聞いてないよ！」
「全方位だと気付いた瞬間に全方位を防御できる魔法を選び得る判断力を褒めてい

るのですわ」
「……アンタ、さっきからちょいちょいアタシと話がかみ合ってないって自覚はあるかい？」
「私、梓さんの事は割合読めるようになってきましたけれど、元々空気の読めない魔法少女として有名でしたのよ」
「自慢することじゃないねぇ」
さてはて、と手持ちの魔道具を漁るアニマ。
そして、なるほど、と。
ようやく得心が言ったとばかりに——こちらもまた、笑う。
困難だ。
自身は時間稼ぎさえすればいいとはいえ、目の前の敵を殺すには、それなりの犠牲を必要とするだろう。紛う方なき困難を前に、けれどアニマは笑う。笑って、フェリカが嫌がりそうな事を実行する。
即ち、亜空間ポケットより取り出した箱から、魔煙草を一本取り出して——起動。
それを吸う、という行為を。

「……当てつけ、ですのね」
「ふぅ。ハハ、あぁそうさ。こんなクソ不味いモン常に吸ってるあの子の気は知れないけどね――成程、これはいい。目の前に困難があるからこそ――ああ、酔えるね」
「真似をするなと――」
「【超躍】」
「言っていますの！　ッ、上っ……逃がしませんのよ！」
飛ぶ。跳ぶ。
高くへ飛ぶ。【超躍】の速度は【神速】に匹敵する。一定の角度以上には飛ばし得ないのが欠点らしい欠点だが、同時にだからこそ役立つことがある。
即ち――相手が昇ってくる、という点において。
「ほら――食らいな。【重圧】、【光弾】、【光線】、【神鳴】、【飛斬】、【氷壊】」
「どれほど来ても！」
「【的中】」
「ッ！」

直線状に昇って行ったフェリカが、急激な角度で軌道を逸らす。
それに向かう光の弾、光の筋。天から落つる怒槌が曲がる。まっすぐにしか飛ばないはずの斬撃が曲がる。形を成さない、けれど触れた瞬間に凍り付く恐怖の魔法がフェリカを追う。
さらには身体に重み――幾分か下げられた速度が、それら魔法の魔の手を援ける。
「【青陽】――」
「ちょ、ちょっと、その疑似魔法とやら、チャージ時間はありませんの!?」
「威力落としてある分チャージ時間を必要としないのが魔道具の神髄さね。さぁ、遠隔魔法の雨を、どう防ぐ？　アタシに魅せておくれよフェリカ・アールレイデ！」
「――ならば貴女になすりつけますわ」
「そう来ると思ったよ。【反射】」
いつのまにかアニマの背後にいたフェリカ。
当然フェリカを追っていた魔法群はアニマにぶつかるが、それらは鏡のようなものに弾かれる。弾かれ、拡散し、別々の軌道を取って再度フェリカを追う。

何度やっても同じだ。【的中】はその名の通り的中させるだけの魔法であるが――単純であるが故に、一度発動したら止める術がない。【静弱】のようなもので防ぐか、あるいは魔法を殺さない限り、永遠に対象を追い続ける。攻撃性能が無い魔法でありながらA級を飾るのはそのためだ。

「ならば、先に貴女を仕留めればいいだけの話」

「いいのかい？　――さっきから、視界内に入り続けているワケだけど」

「ぐ――ぁッ!?」

それを聞いた瞬間、自身を追う魔法の陰に隠れようとして、フェリカは右足に激痛を覚えた。

ギリギリ隠れ切ることができなかったのだ。ただ、激痛で済んで良かったと、フェリカは速度を落とすことなく飛び続ける。

「【痛烈】……【凍融】にしなかったのは、アタシもまだまだ慈悲があるってことかね」

「余所見厳禁！」

「【反射】、とと、それは驚い――【静弱】！」

再度突っ込んできたフェリカ。
その対処こそ完璧だった。けれど、通り過ぎた後に斬撃が来るとは思っていなかったし、背後からの多段攻撃が来るとも思っていなかった。
対応できたのは、【静弱】という魔法の使い勝手の良さが故か。
「――リジさん！　貴女の魔法、何か弱点とかありませんの!?」
「今こうして敵と戦っているというのに自分の弱点を晒せ、とは。流石フェリカ。鬼畜」
「いーから早く言ってくださいまし！」
「【静弱】はあくまで面。箱の形にしても、その辺や頂点に繋がりがあるというわけではない」
「リジ、もう1つあるだろう。【静弱】はどこまでいっても近接魔法で、使用者であるリジが踏ん張らなければ保ち得ない、という点だ」
「ウィジ。言わなければならないことと言っても意味のないことというものが存在する」
「む、そうか」

「いえ――良い情報ですわ!!」

神が如き速さの突貫。

それは真正面から【静弱】の箱に突き刺さる。当然、【静弱】の効果としてフェリカの攻撃は威力を失う。背後に迫るは魔法の群れ。

ならば、と。

「出力上昇――!!」

その光の翼から、更なる光が溢れ出る。

光条が【光弾】や【光線】を掻き消し、掻き消せないものは真正面からぶつかって減衰させる。

攻撃力を失った剣が――けれど、単純にフェリカに押される事で、少しずつ、少しずつ【静弱】の中に入っていく。

本来の【静弱】であれば剣を弱化させ、壊していた事だろう。けれどこちらは劣化版。

それは絶対防御ではない。

「く――力業が過ぎる！　【痛烈】！　――【凍融】！」

「さらに上昇!!　ですの!!」

光が、光が溢れて行く。

夜の世界。冥界。真黒な空に、あり得ない、あり得ない、誰も見たことの無い星というものが現れる。星光の輝き。それは強く強く明るさを増し――発信源たるフェリカさえをも覆い隠す。

アニマが思わず目を瞑ってしまう程に。

炎などとは比べ物にならない光。溶接に使う光さえをも凌駕する光。

神なりし光が、冥界を照らし尽くす。

「――【波動】!!」

「わた、くし、だって!!　魔法の新しい使い方くらい、自力で思いつけますの!!」

アニマの【波動】は、しかし押し返せない。

その切っ先は確実にアニマの眼前へ届き――さらにそこに、膨大な光が集中していることになど。

白に目を焼かれてしまったアニマには、気付き得ない。

「良い事を教えて差し上げますの。――【神光】は、遠隔魔法ですのよ!!」

「!!」

半透明の箱の中に、恐ろしい量の光が放たれた――。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ１・２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「【波動】！」

「【静弱】」

「両腕解放。格納鋼管杭射出。打込――不可。活塞反復開始。回転速度上昇」

冷たい声で、あるいは梓がいれば、機械的な、システム的な声と言い表すのだろうそれで、対処をしていく。処理をしていく。

力場と壁。世界を圧し退けるソレには、鋭く鋭利な杭を。

世界を隔てるソレには、平らな杭を。

一度でダメなら二度。二度でダメなら四度。

何度も何度も打ち付ける。終わりはない。その威力も速度も向上し続ける。

それによって――奇しくも上で起きている事と似たような現象が起きる。

シエナの鋼管杭が、２人の魔法を突き破り始めたのだ。
「な――」
「あり得ない」
「打込確認。圧力上昇――粉砕します」
砕かれる。
不可視の力場と半透明の壁が、その効果から粉砕などされるはずのないものが。
魔法が、砕かれる。
「私を忘れるなよ、シエナ！」
「腕部解放、格納高周波刃による格闘を選択。対象魔法、【喧槍】の耐久度計算。終了。十二分に破壊できるものとし――切り裂きます」
背後より襲い来る槍を、腕部の格納庫より出てきた折り畳み式の刃が受け止める。
噴射機構も使わずにウィジの槍を受け止めたシエナ。その腕力――出力は、普段彼女が魔法少女達と共に戦闘する時に出している規模ではない。
手を抜いていた、のではなく。
ただ、形態（モード）が違ったというだけ。

「ッ――我が槍を斬るか！」
「【波動】！」
「脚部噴射機構、及び肘部噴射機構による回転を選択。回転速度上昇――」
「2人とも、離れて！」
一瞬にして竜巻が如き刃の独楽となったシエナ。
つま足と肘。その噴射によって、水平ではない回転を可能としたそれがウィジとミサキの魔法を粉砕する。
「さっきから――なんだ!?　何故、魔法が……」
「ハッ！」
「強化された蹴撃を認識。対処法――該当なし。構築します。その間回避を実行」
「隙」
ウィジの蹴り――ではなく、それに合わせたリジの掌底がシエナを捉える。
強化されたそれは、確実にその装甲に傷をつけた。
「――腰部損傷。背面噴射機構解放――疑似飛行魔法使用。脱出します」
「逃がすか、【喧槍】！」

「破壊します」
　一瞬にして高空にまで逃げるシエナ。
　その後を追う槍の逆雨は、しかしすべてが粉砕されてしまう。
「ミサキ。その籠手、予備はあるだろうか」
「あ、あぁ。同じ強度とは行かないが」
「貸してほしい」
　亜空間ポケットより予備の籠手を取り出すミサキ。
　それを受け取ったウィジは、手慣れた手つきでそれを嵌め、ファイティングポーズを取った。
「ウィジ、槍以外も使えるのか」
「むしろ、槍の方が経験は浅い。ヴァルメージャになる前はなんでもない剣や拳で戦っていた。アインハージャとはそういうものだ」
「ウィジ、間合いは？」
「４歩」
「わかった」

リジはリジで、何を付ける事も無く、けれど一度屈伸を挟んだ。
「ミサキ。恐らくだが、シエナのあの刃には魔法を粉砕する機構が仕組まれている」
「ウィジ。それだと分かりづらい。ミサキ、あれは恐らく反魔鉱石。私達も実物を見たのはディミトラが降らせたものだけだけど、多分そう。感覚が同じ」
「……成程。そういえばディミトラには反魔鉱石加工の嫌疑がかけられていたな」
ならば、と。
ミサキも自らの籠手をガチンと鳴らす。
空中から降りてこないシエナを見上げ――牙をむく。
「ウィジ。飛行魔法は得意になったか？」
「問題はない。練習した」
「得意にはなっていない」
「リジ、言わなくていいことは言わないでいてくれると助かる」
「それはできない。事実はちゃんと伝えるべき」
向こうの空で、光の爆発が起きる。
それを見てか――そちらへ急行するシエナ。

「ッ、追いかけるぞ！」
「飛ぶ。うむ。飛べる」
「ウィジ。無理そうだったら言って」
「リジ、何かしてくれるのか？」
「馬鹿にする」
「リジ、いつも通りなのは戦士として褒めるべきところだが、一応場を弁えろ」
「ウィジ、場を弁える、なんて言葉を知っていたなんてびっくり」
「追いかけるぞ!!」
怒られた。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

光が徐々に収まって行く。
空にある人影は２つ。
１つは――背中にそれなりの火傷を負い、けれど気丈にも動じていないフェリ

カ。

もう1つは、ハッ、ハッと肩で息をしながら、しかしこちらも立ち続けているアニマ。その身体には幾つもの傷と火傷がついている。

「……無茶をするね、アンタ。劣化版とはいえ【神鳴】に【青陽】を食らう覚悟で……わかってんのかい？　ここは世界の外。天幕の向こう側。冥界だ。つまり、蘇生槽との経路は……切れちまってる。ふぅ、つまり、死んだらこっちに取り残される」

「ええ、わかっていますの。それが何か？」

「死んでもいい、って？」

「良くはありませんの。けれど、それは貴女も同じでしょう？　ミサキさん達も、梓さんも。あるいはディミトラさんやジャハンナム上官……もとい、ゲヘナさんも。誰もが同じですわ。それならば、何を恐れますの？」

言う。

言い放つ。

「私はフェリカ・アールレイデですわ。他の誰でもない、フェリカ・アールレイデ。

ならば、フェリカ・アールレイデは――死を恐れませんのよ。次があろうとなかろうと、先があろうとなかろうと、何も変わりませんの」

「は……ハハ。いいね。いいじゃないか。死をも恐れぬ魔法少女……魔法少女らしい。けど、いいのかい？　それはあの子が嫌う思想だろう？」

「いいえ。あの方が嫌っているのは、死を道具に使う事。無為のために死を用いること。――死闘の果てに、生存を賭けた抗いのために死を迎えるというのならば、そこには何人足りとも口を挟めないはずです。勿論、梓さんも」

ですから、と。

フェリカは――強い目で、言う。

「そちらも、死ぬ気でどうぞ。時間を稼げばいい、などといったやる気のない貴女ではなく、もう後が無い貴女と戦いたいですわ。安藤アニマさん。梓さんが気を許した――楽しそうにその言動を話してくる方々の内の、1人」

「ハハハ、なんだい結局嫉妬かい？　いいねぇ、青春だ。それで、このアタシに死ぬ気を出せ、だって？　こんな痛い思いして、こんなに怪我して、死ぬ気じゃないとどうしてわかるんだい？」

「だって、貴女の魔法を使っていませんわ。魔法とは本人を表すもの。【業焔】――先日のオリジン襲撃事件で少しだけ見えましたけれど、とても強力な魔法でした。時間稼ぎでないというのなら、それを使わない理由がわかりませんの」

「理由。理由ね、そんなの簡単さ」

深紅が舞う。

秋の葉吹のように、紅く染まった花弁のように。

赤でも朱でもない、深紅が――舞い始める。

「――時間稼ぎに使うには強すぎて、加減が利かないって、そんだけさ！　【業焔】！」

立ち昇る。立ち昇る。立ち昇る。

深淵より冥界の地より、深紅の焔が、それらで形成された手が。

否。否。否。否！

「死ぬ気か！　いいさ、いいよ！　だったら、あの子に免じてとか――あの子への餞とか考えず、派手にやろうじゃないか！」

手が、地面を押す。

ぶくぶくと音を立てて溶けだす黒土が、しかしそれ以上のものを生み出し始める。
手から、腕になって、肘から、肩になって。
そこから――顔が出てきて。
「……魔物？」
「須留途――これがアタシの死ぬ気さ。精々抗ってみせな」
言って。
アニマの姿が掻き消えて行く。
反対に、もう上半身までを出した深紅の巨人が、フェリカに手を伸ばした。
その熱量を感じて、即座に後退するフェリカ。
あれは、無理だ。
あれは――突っ切ることなんてできない。
「遠隔魔法らしく、込められた魔力が消えるまで消えないから――それまで死力でもなんでも尽くしなよ、魔法少女!!」
焔が。
その産声を、冥界中に轟かせた。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

※お知らせ
現在の定期更新（朝08:05と夕17:10）は、（昼12:00）の更新に切り替わります。
毎日一回更新のみです。
次話は12月8日12:00に更新されます。
ご了承ください。

78. 佐渡理, 有亜吏部韻虞寸.

焔の巨人――それを離れて見守るフェリカの元に、4人が到着する。
その内の1人に向かって、フェリカは剣を突きつけた。
「あ！　いえ、その、仰りたいことも私が受けなければならない罰も重々承知なのですが、今はその、水に流していただきたく……」
「……貴女は、シエナさん、ですのね」
「はい！　人格分割型戦闘用ガーゴイル・死得無（Ashes）です！」
「フェリカ！　気を付けろ、シエナは反魔鉱石を持っている！」
「本当ですの？」
「あ、はい。この格納刃は反魔鉱石でできています」
「リジ、どう思う？」
「ウィジ。疑わしきは罰せよ。けれどそんな暇はなさそう」
「リジさん。その通りですわね。――EDENに帰り次第、その発信機とやらは取り除かせて頂きますけれど。今、貴女が私達に協力する気があるというのなら――

止めませんわ」
　冷徹な瞳。
　少しでも怪しい動作をしようものなら、叩き切ると。
　そう物語っている。
「……わかりました」
「ええ、それなら良いですわ。それで、どうしましょうか、アレ」
　アレ。
　今尚這い出て、冥界を火の海に染めようとしている深紅の怪物。
　魔物と称するには――あまりに異質。そもそもが魔法より現れたものであるはずなのに、使用者が掻き消えた今でさえ、敵を求めてゆったりとその顔を振っている。
　未だ胴の部分までしか出ていない――が、これが立ち上がればどうなるか。
　正直な所、フェリカ達に冥界への思い入れと言うのは無い。
　実は梓の故郷であるとか、そういう話を聞いたとしても、そこにいるのは死者だけだ。別にいいのでは？　と思わないでもない。
　それとは別に。

「不謹慎ではありますけれど――今私、少しワクワクしていますの」
「む……すまない、私もだ」
「フェリカ、ミサキ。浮足立つ心は戦場に於いて禁物」
「リジ、だがこれほどの大物だ。戦士として沸き立つ心はわかる。ミストベイルこそ大きさは匹敵するやもしれないが、この威圧感は紛う方なき強敵だ」
「ウィジまで」
梓の応援に行かなければならない、というのも理解している。
けど、これを放置しておいて――たとえば、宙の莽の方にまで来てしまったら、どうするのか。
うむ、と。
3人が頷く。
「小説のようですわね。娯楽小説、ミサキさんは読みますの？」
「幼い頃に少しはな。焔の巨人。それを打ち倒す戦士。心の踊らない魔法少女はいないだろう」
「ミサキ。私は踊らない。もうちょっと冷静になってほしい」

「リジ、お前は浪漫というものを知るべきだ」
「ウィジ、それで死んだら意味が無い」
――ようやく、焔の巨人が５人に目を向ける。
髑髏を思わせるその顔。その口が、カ、カ、カと。いびつな音を立てた。
「――炎弾来ます！　各自散開を!!」
「【静弱】――ダメ、逃げて！」
魔法で防ごうとしたリジが、ギリギリでそれを避ける。他の４人も各々回避した。
一瞬で感じ取ったのだ。
違う、と。
「防いではいけませんわ。あの熱量、近付いただけでも肌を焼きますのよ」
「【喧槍】！　……む、溶かされるか」
「【波動】も貫かれるな、あれは」
一瞬の無言。
啖呵を切ったはいいものの――有効打の一切が思いつかない。

「ええ、ですから――どうしましょうか、あれ、と。シエナさん。何か情報は？」
「ええと、あまり良い解決策ではないのですが、よろしいですか？」
「大丈夫ですわ」
では、と。
シエナは、おそるおそる、といった感じで――それを口にする。
「須留途に込められた魔力が尽きるまで、あれに攻撃をさせ続けるんです。先ほどの炎弾１つにもかなりの魔力が込められていますので……」
「挑発し続けろ、と。なるほど」
「奴の攻撃を掻い潜りつつ、且つ感知範囲外に出ないように気を付けつつ、か。中々に至難だが――やるしかない」
「ええ、では――行きますのよ！」
巨人に向かう――。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

のを、遠方から眺めるアニマ。
死力を尽くす。死ぬ気で戦う。
なるほど確かに、自身にはなかったものだ。もうとうに忘れていた感情。故の大一番。
「……自分で出しておいてなんだけどね。死なないでおくれよ。じゃなきゃ――あまりにあの子が可哀想だ」
見遣るのは、宙の莽。
そちらにいるのだろう梓を――偲ぶ。
「はぁ……ぺっぺっ、っとに喫めたモンじゃない。……けど」
魔煙草を口に入れ、すぐさま出す。
不味くて仕方がないそれを、けれど吸う。悲しい顔をして、悲しい瞳をして。
近づく終わりを、眺めるようにして。
「……どうするかねぇ。流石にもうどっちつかずじゃいられないだろうし。師匠の夢も、梓の願いも、あの子の祈りも……はぁ。ったく、なんでアタシがこんなに悩まなきゃいけないんだ」

遠く、須留途の攻撃が激しくなるのが見える。
シエナには可哀想な事をしたねぇ、と。
また1つ。大きなため息を吐いて。
「じゃあね、魔法少女達。アタシは――次に行くよ」
安藤アニマは、本当にその場から姿を消したのだった。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えけ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「で、魔法少女の因子ってなどこにあンだ。助けたンだから言えよ」
「今は我が眷属を助けるのが先決ではないのか？」
「馬鹿が、助けたら助けたで今度ァお前があっち行ってうやむやにされかねねェだろォが。おら、キリキリ吐け。じゃねェとフリューリ草食わせるぞ」
「それは特に構う事ではないが、いいだろう。魔法少女の因子はここにある」

そォいって自分の胸に手を当てるニヤニヤ丸眼鏡。
……ここってな、なンだ。
「心臓ってことか？」
「違う、胸だ」
「……あーと」
「ふん、わからないか？　お前は学習能力の高い方だと思っていたのだが」
「わかるよ。わかるけど……また、なンでだよ」
「何故、と問われてもな。私とてこの世界を追われ、魔法少女として堕ちた時に疑問を抱いたものだよ。恐らくはレイ……太陽の趣味だろうな」
「マジかよ」
えェ。
えェ、じゃァ俺、国の奴らから魔法少女の因子取り除く時、1人1人胸触んねェとダメなのか？
……やべェだろ、そりゃ。
「ククク、良い良い。太陽とは、良い趣味をしているようだ」

「太陽の使徒の方がまだ真面目だろうな。悪辣ではあるが」
「そォいや、それ。結局お前らってルルゥ・ガルや太陽の使徒たァ組んでねェんだよな？」
「無論だ。私達の目的はお前の気付いている通り、世界の新生だった。私こそ外れたが、先にいる者達はそれを行わんとしている。そして、その目的は風の使徒の妄執や、太陽の使徒の意図を完全に無視したものとなる。つまり、私達は太陽も風も夜も敵に回しているのだ。ふん、私こそが夜ではあるのだが、それはまぁ私を嫌ったやつらが悪い」
「0：10でお前が悪いって神さんから聞いてるけど」
神さんの話でァ、冥界の誰もに嫌われることして、神々の誰もから非難されて、代替わりさせよォって討滅されかけたのを世界の中に逃げ延びた、って話だったけど。
「梓様、そのような方なのでしたら、足などを殺してこの辺りに縛り付けておくのが良いのではないでしょうか？　ソテイラ様を確保しさえすれば……」
「ンなことしたらさっきみてェに疑似【隠涜】でコイツ連れてかれて当初の予定通

りになるよ」
「ふん、コーネリアス・ローグン、といったか。目の前の利益ばかりを見て大局を考えられないとは。夜の使徒とはいえ、このような娘子に負けて悔しくはないのか？　【侵食】が世界変質系の最上位魔法であることは私も認めるが、使い手がこれでは魔法も浮かばれないな」
「その服、全部私の唾液にしてさしあげましょうか」
「クク、これ、喧嘩するでない」
「着物狐が――仲裁した――!?」
いや俺もそろそろ言おうかと思ってたけど。
え、何、今更そぉいう役割担ってくれンの？　今更でも嬉しいよ俺の心労減るし。ぶっちゃけ俺も騒ぐ側だし。マッドチビ先生がいたら俺もはしゃげるンだけどいないから年長者面してるだけだし。
「両者、吾と口吸いをする気はないか？　よくよく見ればお主の格好もそれなりにそそられる。――もしや、吾は夜が好きなのやもしれんな」
「あー、だから俺の事好きなのか」

「気にはなっていたのだが、何故魔物を連れている？　太陽の気配は欠片程度はするが、此奴は九割九分九厘魔物だろう」
「なンだよ、化け物と魔法少女が一緒にいちゃ悪いかよ」
「……否、良い。何故かを聞いただけだ」
「理由ァ無いよ。俺がコイツ死なせたくないってだけ」
「梓様。それを理由と呼びます」
「ク――そういえば、同行理由はそのようなものだったか。最早懐かしいが」
こんな悠長に雑談してっけど、結構な速度で走ってる。
時折壁に生えてるフリューリ草食べて、この世界での自然回復でも追いつかねェレベルの魔力消費を補って。
ってのも、この世界で俺がバカスカ魔法使えるのって、回復しまくるから、ってだけで、魔力保有量自体ァ変わらねェんだよ。だから回復ァ結構必須。壁に生えた苦い草齧って走り続ける梓・ライラックちゃんァ、ぜってェ奇妙に映ってンだろォなァ。
「一応聞くけど、アンタ戦う気ァあンのか？」

「無い。我が眷属を取り返し、私が神の座についたら、奴らを世界から排斥する。お前達は許してやろう」
「そもそもなンであーなってたンだ。大体察しァつくんだけどよ」
「ならばその察しを話してみろ」
「ン――」
純化して行く思考が無駄を削る。
だいたいどころか、ほぼすべてわかってるが。
まァ言うか。
「俺がソテイラ殺したンで、アイツァ冥界に戻った。主もいなけりゃ居場所も無ェ冥界でぶらついてたソテイラの下に主たるアンタが現れる。捨てられた、つってもあっちの世界での話だ。アンタとアイツの主従関係ァ切れてねェし、なんぞ急いでる様子だったンで救援に、あるいァ助力にでも入ったンだろ。――それをまんまと捕まった。神の座に戻って何するかわかんねェアンタより、再契約で簡単に操れそォなソテイラを取るってな、然して間違った判断じゃねェ。じゃァソテイラを夜の神にしたくなってくる。邪魔なのァ今代だ。殺して、ソテイラを夜の神にしちま

えばいい。アイツァ聖獣だが、同時にウチの神さんの親戚的要素もあるからな。なンでマッドチビ達ァ先行してソテイラの屈服と儀式の準備、それに関われねェアズサとピンクカチューシャがアンタを殺そォとしてた――今までで、なンか間違いァ？」

「無い。素晴らしい。生徒として非常に優秀だ」

「あァ称賛ァ素直に受け取ろう。んで、俺達が今からやんねェとなのァ、ソテイラの救出と、ニヤニヤ丸眼鏡の守護だ。前衛ァ俺がやるンでお前らァコイツを守れ。全力でな。死力ァ尽くすなよ」

「ククク、良い良い」

「承知いたしました」

命の気配ァもうすぐだ。

ただ、最奥ももうすぐだ。

辿り着く前になんとか取り返したいところ。でもニヤニヤ丸眼鏡が死なねェ限り世代交代ァ起きねェはずだから、ソテイラを神の座に据えても意味ァ無いはずなンだけど――何かあるンだろォな。

「この角の先だ！　みんな、気を引き締めて――」
その続きを喋る事ァ出来なかった。
――角、俺達が曲がろうとしてた、通路の角。
そこに――マッドチビが、ぶっ飛ばされてきたから。
完全に死に体の状態で。

「ッ、おい大丈夫か!?」
「……」
意識が無い。
おいおい、死を得ることの無い魔法少女さんってなどォしたンだよ。
実ァクソ程弱ェのか？　それとも。
――知覚強化。腕部強化。レーテーの起動と同時に剣を引き抜きつつ――【死漸】でぶった切れ!!
「――防グカ（理須閉句途）・」
「ハ――ハハハハハ!!　なンだよ、やっぱりここでもお前かよ！　――アンゲル

！」

「期待以上ダ、コレハ楽シメソウダナ。」

「あァさ、楽しもうぜ。踊ろうぜ。なンせ――命の取り合いだ。死地だ！　俺にとってもお前にとっても、引き分けなんざありえねェ！　ハハハハ！　いいぜ、踊ってやらァよ！」

剣を這わせる。

何の呼気も無しに突き出された刀――終の因や始の点のアンゲルが持ってた槍じゃない。

こいつァ、刀だ。ケッ、天使にァ似合わねェだろォに。

薄く、這わせ、重ねた剣を上に跳ね飛ばす。

両者ガラ空きとなった体。そこに突っ込んでくるのァ、アンゲルのタックルだ。トゲトゲした甲冑ァ、十分な殺傷能力を持っていると言えるだろう。

それを、殺す。

肌に触れた所から、【死漸】が潰していく。

すぐに異変に気付いたアンゲルが距離を取るが、その身体に染みついた【死漸】ァ

消えねェ。どれ、そのまま全身を――とやろォとしたら、アンゲルァ肩を、その侵された部分を丸ごと斬り飛ばした。

片腕がガランと落ちる。

「次！　――あぶねっ！」

「見切ルカ、我ガ太刀ヲ！」（繭 草 食 取 理）

「見えちゃいねェよ、なンなら目ェ瞑ってもいいぜ！　どォせ視覚なンざ役にァたねえェからな！」

「良イ・我ガ宿業ニオイテ最後ノ敵ガオ前デ」（伏頼事 藍 夢 法 被）

見えァしない。冥界における最大限の知覚強化を行っても、その攻撃が見える事ァない。

けど、俺が死なねェ場所も――俺が死ぬ場所もわかる。

だから、やり合える。

「心ノ底カラ歓喜ヲ示ス！」（上琉噛無・地柔金具）

「【死漸】」

「コノ日ヲドレダケ待チワビタ事カ！」（伏理伊豆栗瑛斗亜倶度柔割琉度）

剣と刀が火花を散らす。
見えもしねェ攻撃に、ただそこに置いてあるだけの剣がそれを打ち払う。
半歩歩いて攻撃を避け、半歩下がって突きを躱し、半歩踏み込んで思いっきり蹴り上げる。
銀砂が揺れる。白が散らばる。
俺の【死漸】が浸されたところの全てを切り落としていくから、アンゲルァどんどんその身体を小さくしていく。荘厳な甲冑ァもうボロボロだ。けど、その手に持つ刀ァ一切の刃こぼれを見せていない。
「死者(座頭切琉微地米視須不応座頭)ヨ、夜ノ使徒ヨ・」
「あァ!?　さっきからなンだよ――関係ない事ばっかり言いやがって！」
「コレヨリ起(有阿)コル事(地根楠斗御土)ヲ決シテ忘レヌ事ダ！」
「そりゃどォいう――」
――強烈な死の気配。
避ける避けないじゃない。この迷宮そのものを覆うくらいの――やべェ気配。
「――太陽の血肉」

「ッ、やべェ、お前ら逃げろ!!　ニヤニヤ丸眼鏡連れて――」
「――風の血肉」
四隅。
全然見てなかった。配置されている。肉体だけとなったピンクカチューシャ、名前の知らねェ【蟲独】と【合成】の魔法少女。――そして、ソテイラ。
「【合成】」
「【蟲独】」
そいつらァ――明らかにマトモじゃねェ、虚ろな目で。
明らかに自分の意思じゃねェ様子で、それを行使する。対象ァ。
自分達、だ。
「――ソテイラ！」
「……だめみたいだねー」
魔法が発動する。
喋っちゃいねェが如何なる方法か、ピンクカチューシャも魔法を行使させられてる。【合成】。【蟲独】。【帰述】。

引き摺られる。
誰に？　何が？
「忘レヌ事ダ、己ガ糧トナッタ全テヲ・」（泡泥阿茶位琉度 鈍斗魚利意）
俺だ。
俺に――全部が、引き寄せられて行く。
中心でアンゲルと戦う俺に。
アズサを助ける？　ニヤニヤ丸眼鏡を、ソテイラを助ける？
馬鹿が、何勘違いしてやがる！
俺が目覚めなければ何も出来なかったってな、そォ言っただろォが!!
「シエナ、てめェッ！」
「ふ――ふふ、そ。そっちで呼んでくれるのね。ええ、そう。私は死得無。そして貴女になる者よ」
「喜愛乃守護者！（フェリカ・アールレイデ）　哀怒乃守護者！（ミサキ・縁）　微笑乃尖兵！（コーネリアス・ローグン）　不死藁得子！（フシワラノナリコ）」
「もう、遅いわ」
自分が自分じゃなくなっていく感覚。

自分が自分でなくなっていく感覚。
自分と自己が曖昧になった感覚。
自分と自己の境界は失われた。
自分と世界の狭間は消えた。
自分と世界は。
自己は。
消える――前に。
「【死漸】――受け取れ！　んで、助けてくれると助かる！！！」
声よ届け。
魔力よ届け。
魔法よ――俺の願いを、叶えてくれ。
「さようなら、梓・ライラック。――【占幽】」
俺ァ。
弾き、出された。

落ちる。
落ちて行く。
冥界から世界へ落ちて行く。
もう飛行魔法ァ使えない。
身体能力の底上げもできねェ。
このまま地面か海へ叩きつけられて終わりだ。
相棒にも期待できねェ。もう世界言語で叫ぶ余力ァ残ってねェ。
「――馬鹿だよなァ、ホントに」
落ちて行く中で、自嘲する。
※役割の統合※をして、調子に乗ってたンだ。
できることが増えて、自分の心も定まって。
だから、俺がやんなきゃ、って。急いで――考えるべきことを見失ってた。
ルルゥ・ガルが、あの寂しんぼが俺の【即死】を狙ってたのァ、最終的に自分達を殺すため。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

太陽の使徒が魔法少女達を操ってまで俺を殺そうとしてたのァ、多分蘇生槽で細工するため。
んで――アイツらが俺を狙ったのァ、アズサを作るためと、もう1つ。
神が如き、生命を操る力と言える【即死】。そして【死漸】を我が物にするため、だ。
化け物も太陽もアイツらと敵対してンだから――そのワイルドカードァ、十二分に役に立つ。
「馬鹿だよなァ」
俺ァ助ける側だと。
俺ァ止める側だと。
俺ァ――いつの間にか、上から目線で。
いつの間にか、自分が狙われる立場にあるって、自分が弱いんだって、自分が――自分が、そんな高ェとこにいねェんだって。
忘れちまってた。
だっておかしィだろ。なンで突っ込んだんだよ。

マッドチビがぶっ飛ばされたンなら、これ幸いにって引き摺りだして宙の莽から出ちまえばよかった。
わざわざアンゲルと死闘する必要ァなんにもなくて。
アンゲルと死闘しにゃならねェからって他を疎かにする必要ァ全くなくて。
突っ込んでいて、無様に罠にかかって——ピンクカチューシャ含む封印措置の魔法少女も、ソテイラも助けられずに。
自分の身体さえ、奪われちまった、と。
「お……おお。あァ、なンだ。物理的な衝撃ァ無いのか」
何の助けもなく、海面に激突して。
けれど痛みァなかった。
はは。
これァ、あれだね。
「……マジに幽霊か。流石に笑えねェなァ」
新生・梓・ライラックちゃん。
腕を失い、肌を焦がされ、両足を失った後——肉体を新生し、肉体の全てを失い

ました、と。
　ははは。
「――これからどーっすっかな」
　当然だけど、肉体に宿ってる【死漸】ァ使えない。
　俺ァ精神体って奴さ。なンでか心ァあるから、非正規手段で精神体抜かれたが故、って感じかね。
　一応鼬の最後っ屁っつーか、考え付く４人に魔力の譲渡ァしたけど、果たしてそれが意味のある行為だったのか。
　もーわかんねェや。
　あいつらの目的ァ果たされる。
　マッドチビが俺の身体を乗っ取り、そのハイブリッドな身体を用いて新たな世界を創造し、こっちの世界から精神を抜き取り、道中でミイラになってる梓を心に沿えて――マッドチビァその世界で唯一の神となり、永遠を手に入れて。
　そォだよなァ。
　死にたくねェ死にたくねェと色々やってきた魔法少女が、世界が死ぬから世界の

延命を、って考えるのも確かに道理ァ通るけどよ。
もっとパパっと、死なねェ存在――神に成っちまった方がぜってェ早い。
神さんァ俺じゃねェって気付いてくれるだろォが、俺を見つける事ァできねェだろう。夜の宮を閉じて、静観かね。
多分俺が絶対戻ってくるって信じてくれてる……ンだろォけど、いやはや。いんやさ。
「幽霊一匹に何ができンだ、って話ね」
「それなりにはできると思うけれど」
「ん？」
浮力がかかってンのか知らねェけど、海にプカプカ浮いて独り言ブツブツ言ってたら、なンか声が欠けられた。
そっちを見る。
……見覚えのありすぎる青毛。
「よォ、寂しんぼ。旅行中か？」
「まぁ、そんなところかしら。私達に必要な【即死】の気配が消えてしまって絶望

していたのだけど、空から精神体が降ってくるのが見えたから、藁にも縋る思いで来てみれば、まさかの、って感じね。でも貴女、【即死】持ってないのね」
「あァ、奪われた。奪ったのァマッドチビ……ディミトラだ。あるいァ、シエナか」
「へえ。情報提供ありがとう。それじゃ、私達は行くわ」
「おォ待て待て」
寂しんぼの乗ってるデカめのカラスの足を掴む。掴めない。くっそー、幽霊だからか。
「じゃ」
「待て待て」
……そうだ、キラキラツインテの言葉を思い出せ。
俺がそっちに行ってるって、俺が認識したンだから——世界も認めろ。
おお。
「ちょっと、ついてこないでよ。悪霊退散！」
「お前が言うかソレ。お前も精神体のクセに」
「私はこの通り人形を持っているし。あ、ちょっと！　入り込むのやめなさい！

くすぐったいわ、もしかしてそういう趣味なの？」
「ヘェ、中身ァだいたい人間とおんなじなンだな」
「ちょっと、どこみてるのよ」
「中身」
いんやさ、あるよ？
おじさんも女の子の中身みる、って字面どォかと思うよ？　そォいう倫理観ァあるよ？
でもさ。
相手コイツだしな。しかもこれ人体模型みてェなモンだろ？
「何の用なのよ。もう私達は貴女を狙わないんだから、良かったね、でいいでしょ。それとも何？　野蛮人らしく私達の棲み処を襲撃でもする気？」
「――それだ」
「それだ、じゃないんだけど。そうする気なら、こっちにも考えがあるわ」
それだ。
そォだ、ニヤニヤ丸眼鏡ァ言ってたじゃねェか。

太陽の使徒も風の使徒も、アイツらのやる事に対してァ否定的だ、って。
――抱き込めねェか？
「寂しんぼ」
「……何かしら」
「強大なオリジン種の居場所を教えてくれねェか」
「教えて、何をする気？」
「説得して天幕の向こうに連れて行く。ンで宙の莽含むアイツらの神座全部ぶっ壊す」
「……知らない。勝手に探して。まぁ、天候が極端に悪い所や、環境的に生物が住み難い所には大体いると思うわ」
「あァよありがとう！」
「……」
善ァ急げだ。
俺もそろそろ学んでるンでな。
さっき、着物狐と冷静メイドに逃げろ、っつったのに――あいつら、一切逃げる

素振りがなかった。
クルメーナ地下と一緒なンだろう。
俺の焦りなンかァ一切伝わってなくて。
ただ俺がアンゲルと斬り合いして、多分勝って、そのまま、予定調和みてェにマッドチビ達の目論見を止めた扱いになってて——俺ァ一切の疑いを持たれぬまま、ＥＤＥＮに帰るンだ。
俺、っつか。
俺を名乗るシエナ——マッドチビが、だが。
「オリジン種は、どれも危険だけど——特に」
「ん？」
「北方山脈の更に北。ジョームンガンダー、ってオリジン種が眠っているわ。——そいつだけは、刺激しないで。魔物も人間も魔法少女も含めて、全部が滅びる可能性があるから」
「それァ、フリだな？」
「本気で言っているから。……じゃ」

ジョームンガンダーね。
梓覚えた。
……いやまァ、果たしてもう俺が梓・ライラックを名乗れるかどォかすらわからねェが。
「目指すァ北方――ついでに、ＥＤＥＮの様子でも見て行くかね」
馬鹿め。
俺の精神体を捕まえなかったのがお前らの運の尽き。
俺ァ最後まで、最期までやらせてもらうから――震えて待ってな、マッドチビ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

と、啖呵を切ったはいいものの、そもそもここがどこなのかわからん。
海洋のど真ん中。先ほどからちらほらと化け物や普通の魚が俺を通り過ぎていくけれど、特にに干渉される気配ァ無し。

ヘェー、クジラの中ってこんななってたンだァ、とか、やべェでけェ化け物いるけど大丈夫かこれ、とか。
魔法が無いンで結構ビクビクしながら、北へ北へ向かっている最中のこと。
「……海溝、って奴か」
いきなり深い場所。亀裂。奈落を思わせる真っ黒いその場所ァ、どこか末恐ろしい気配を覚えさせる。
同時に——居そうだな、って。
環境的にやべェとこ。
通常の生物が住めねェとこ。
ここだろ。
「おお……おー」
沈んでいく。
まだ太陽の光があるからいいけど、うん、怖い。
真っ暗だ。まだ生物ァいる。けど、だからなンだって感じ。
段々——左右がわからなくなる。前後もわからん。上下さえも忘れそォになる。

それほど、真っ暗。ライトとか持ってねェしな。

こォいう時ゆるふわにゃんこの【光弾】とか役に立つンだろォなァ。まァその前に水圧がやべェんだけど。

「しかし、案外俺の身体ってな綺麗なモンだな」

口に出すのァちと心細いからだ。

いんやさ、世界言語使いまくって精神ボロボロだ、って聞いてたからさ、もっとボロッボロなのかと思ったら、普通に梓・ライラックの姿をしている。見た目的な意味じゃないのかね？

更に潜る。

潜る？　沈む？

どこまで行けるのか――実ァオリジン種なンていなくて、シーラカンスとかに出会えるだけなのか。

まァほら、深海探索を生身でできるなンて貴重な機会だからさ。生身じゃねェけど。

しかし、いるもンだな。

生物。

フクロウナギだっけ、このスコップみてェなの。コウモリダコとか、フリソデウオとか、クダクラゲもいるな。

いんやさ、面白れェ話でさ。

この辺の、なンだ、化け物じゃねェ生物。所謂獣とか動物って呼ばれてる奴らァ、前世の奴とだいたい一緒なンだよな。どォいう生態系で、どォいう系統樹になってンのか知らねェけどさ。

まァ前世程蔓延ってねェっつか、化け物がいるンで細々と暮らしてる。でけェ動物ァだいたいいねェな。象とかキリンとか。麒麟ってなオリジンァいるらしいが。

口。

「く、口――!?　あ、おォ、び、びっくりした……えーと、あれァラブカ、だっけ？　いやミツクリザメ……？」

割と覚えてるモンだ。

しかし、この深海あんまり化け物いねェな。オリジン種がいるからビビってンのか、マジでいねェかのどっちかだが。

クルメーナ側に近い海洋の、結構浅いトコにクラーケンとかがいたからなー。こぉいうとこじゃ餌取れねぇからいない、って可能性も低かない。むしろ高い。

……ん―。

ちょっと釣ってみるか。

ま、オリジン種つったって化け物ァ化け物だ。

普通の生物にァ興味の無いもの――つまり、魔力がお好みでしょう、ってなワケで。

魔力をチロりと出してみる。

「――！」

水流――これァ、俺を飲もうとしている？

いやまァ流されァしないンだけど、この規模ァやべぇ。他の生物たちが、あァ、全部巻き込まれて……うわァ。

――≫何者か≪

「うわ、喋れんのか。あァいやまァ、怪しい者じゃねぇんだ。ちょいと肉体を失っちまった精神体でよ。協力者を探して放浪中でね」

――≫名は？≪
「梓だ。梓・ライラック。アンタは？」
――≫セイタス≪
「おゥ。で、アンタここで何やってンだ？　この辺何も無ェだろ。化け物ってな、悲願成就のために魔法少女だのなンだのを襲うってイメージなンだが」
――≫偏見だ≪
「あン？　だがよ、今化け物を率いてる奴ァそォ言ってたぜ」
――≫小さき者、強くなりし者がそれを行うことには、意味がある≪
「オリジン種にァ意味ねェのか」
――≫同輩よ≪
「あン？　そりゃ、俺のことか？」
――≫そうだ≪
……その言い方だとよ。
まるで、俺が化け物になった、みてェなンだけど。
いや。

なった……のか？
だって、精神体で、意思持ってる奴、なンて。
確かにどォ考えても化け物で――オリジン種じゃね？
「で、なンだ？」
――≫貴女からは、懐かしい匂いがする。我と同じカタチを持つ、白。見覚えはないだろうか≪
「……あー」
ある。
一瞬だったけど、其夢盗の皮を剥ぐときに見た気がする。
「あるよ。名前ァ知らないけど」
――≫壮健であっただろうか≪
「どォかな。浮かない顔してたけど」
――≫ならば、立ち上がる意味もある≪
暗闇が――動く。
あっ、って。

海底ァ真っ暗で何にも見えねェんだって、そォ思ってた。
いんやさ、それァ間違いじゃない。それ自体ァ間違いじゃねェんだ。
けど――間違いァ。
――≫今一度、話を聞こう。同輩よ≪
「……でっっっっ」
――≫我はセイタス。ラハブという友を探している。助力してくれるのであれば、こちらも協力しよう≪
「――っっっっか」
その真黒が、全部。
このクソデカクジラだった、ってだけの――そォいう話ね。

遠≪ｔｅｘｔ:s1・2≫吠えは遥か彼方に≪／ｔｅｘｔ≫

第一部完。

物語は第二部へ……塔微紺知柔士.

※この話より、朝08:05、夕17:10から昼12時の更新に切り替わります。（一日一回更新）

6.Cut back to call cuckoo roll not can re.

79.泡円徒例須徳霊邪脳途

精神体になったことが影響してンのか、どォにも魔力の流れってのがわかりやすく感じる。

始の点から溢れ、世界に流れて行く魔力。終の因が機能停止したことを受け、その魔力は次第に飽和し――最後にァぱァん、のはず……だったンだが。

今、この世界から魔力は急速に減少し始めている。

世界にとって毒である魔力。それが消えて行くってな、一見良い事の様に思える。淀みから生まれる化け物もいなくなるし、新たな魔法少女も生まれ難くなるだろう。

だから、一見だ。

魔法少女の因子に関する問題が一切解決していないまま、魔力が世界から消えてなくなったら――。
「魔力を求めて魔法が精神を食い荒らし、魔法になる、か」
――≫梓≪
「ン？」
――≫どうして、発声を用いる？≪
「……」
ふむ。
まだまだセイタスと行くラハブってな化け物の捜索旅ァ始まったばっかりだが、多分圧倒的にコイツのが歳食ってるってわかる。
倣うか。
「これでいいか？」
「理由を問うただけだ」
「いんやさ、理由ァ無いのよ。前ァ発声しか意思疎通の手段が無かったンでね、発声にこだわってたってだけだ。今ァ――コレ、なんつーンだろォな。念話？　で

確かに十分だわな」

切り替えァ素直にできた。

ふーちゃんが俺にやって来たのとおんなじ感覚だったから、ふーちゃんに感謝ァしておこう。

そォいや、精神体になったってこた、俺も念動力的なモンが使えンのかな。

今や懐かしい、アビスワーム討滅の演習で会った精神体。アイツが使ってた、明らかにオーバーパワーな念動力。

……そォいや、あの精神体ってな、結局なンであそこにいたんだろ。

そォいえば繋がりだけど、俺って結局湧きポ殺センのかな。最終的に一切証明できねェまま激動が過ぎてユーレーになっちまったワケで。

残念ながらっつーかなんつーか、【死漸】ァ肉体に宿ってる。だからマッドチビが使ってるンじゃねェかな。あァさ、アイツがどォいう動きしていくつもりなのかァ知らねェけど、良くない事が起きるってだけァわかる。

だから早いとこ取り返しに行かねェとなンだけど——さてはて。

その手段がどーにも見えてこねェと。

「なァよ、セイタス」
「なんだ」
「ラハブ、っつったっけ。お前の友達。なンで今一緒にいねェんだ？」
「ラハブは、旅を好んでいた。我は定住を好んでいた。――いつしか我の身体は大きくなり、少し動くことさえ億劫になってしまっていた」
「あーね」
まァそんだけでかけりゃなァ。
その言い草だと、意図して成長したってワケでも無さそォだし。
ン、てこた。
「お前、小さい時があったのか？」
「無論だ。神なりし者以外、誰も彼もが幼き時があろう」
「いやまァそりゃ、そォか」
ＥＤＥＮの教本ァ、化け物の分類についてァ結構詳細に書かれてる。
小型で高位な化け物だったら、進化を繰り返すディケント、元々でけェ化け物だったのが圧縮して小さくなったのがイオルー。んであるいァ、着物狐やヨウキ、

あとァカンコウみてェなオリジン。一応アンゲルとアンヴァルもオリジン扱いだけど、ありゃ迷宮の化け物なンで除外してもいいだろう。

ぶっちゃけると俺もオリジンに近い。精神体の今ァがっつりオリジンかもしれねェけど、そォでなかった時もオリジンではあった。夜の使徒ァ化け物じゃないンでそォ呼称するのァおかしィんだけど、ま、アンデッド枠で括るならそォだって話な。

で――小型で高位な化け物が記載されてンなら、勿論、中型、大型の化け物の記載もある。

中型ってなァ結構広く分布してて、書き記すにァページが足りねェ、って感じの教本や図鑑がズラリとＥＤＥＮの図書室にあンだけど、大型だと割合少ない。

大型の化け物ァ、まさにセイタスが一例に上げられる、小せェ頃があって、そっから成長してったディフォリーってな種類が１つ。

ミストベイルみてェな本体ァ小型なンだけど図体ァクソデカいっつーブラフィーってなが１つ。

最初からでけェまま生まれた、要するに象だのクジラだのみてェなギガントって

種が１つ。セイタスァこれだとばかり思ってたンだが、ちゃんと小せェ頃があったらしい。

　んで、まァベルウェークとかのオリジン種が１つな。オリジン種ァ小中大の全部に跨って存在してるから、基本教本にァ載ってない。一々記載してもあンま意味無ェしな。〝出会ったら刺激せずに即逃げろ〟、が対処法なンだし。

「ラハブもそォなのか？」

「そうだ。我らは幼き頃から、共にいた。しかしラハブはある日突然旅に出たいと言い出して……それから、会ってはいない」

「そっから一回も帰ってきてねェのかよ」

「我も、いつもの散歩程度だろうと思った。故に待っていた。……しかし彼女は帰ってこなかった」

「……そりゃァ」

「そうだ。死んだものだと考えた。……だが、貴女が彼女を見たというのなら、未だどこかで生きているのだろう。それを我は喜ばしく思うし、貴女との出会いに感謝する」

……あー。

見た、つったって、其夢盗の皮がそォだった、ってだけだ。

つまりラハブを見た誰かがカシヨの村に辿り着いて、その記憶を其夢盗が見たってだけの事。ラハブの安否ってなわからねェままだ。

……生きている可能性ってな……どォなンだろォね。

「悲しむな、同輩。――我とて、それも予見している。我らは死と隣合うもの。相対するものが同輩であろうと、天敵であろうと、餌であろうと――気を抜けば、簡単に命を散らす。――けれど、同時に残るものがある」

「残るもの？」

「そうだ。貴女はまだ生まれたばかりなのだろう。故に知らないのだろう。我らは、その身に死が訪れた時――そこに記憶を残す。記憶を染みつかせる。縁はそれを惹き、その地は記憶を呼び覚ます。そうして我らは巡り、受け継ぎ、新たなものになっていく。――輪廻の呪縛とは、同時に互いを惹き合う潮騒となる」

ヘェ。そりゃ、ホントに知らない知識だ。

記憶か。ヨウキの話の中にァ、オリジン種ァ記憶を受け継ぎ続けるモンがいる、

みてェなのがあったけど。そォか、それ以外も――記憶ってな、ちゃんと残るンだな。

じゃァ、俺のやってる事ァ否定じゃねェんじゃねェか？

……なンて調子乗れるほど安易な人間じゃねェんだよなァおじさんァ。記憶がその場に染みついて、誰かがそれを受け継いだから、つって――そいつの全てが残るワケじゃねェ。

やっぱり俺ァもう、化け物を殺すってなできそォにねェやな。

「しっかし、この亀裂ってなどこまで続いてンだ？　あれから結構進んだよな」

「まだまだ、深いところがある。そこは熱く、暑く、また毒性のある水も溜まっているが、貴女や我には問題の無いものだ」

「これ以上か。……そこにいけば、ラハブってな見つかるのか」

「そこへ行けば、輪廻の閲覧が可能になる」

「……」

なンじゃそら。

輪廻の閲覧？　ンなことしていいのか？

いんやさ、前世的な輪廻云々じゃねェ、マジモンの呪縛の車輪がこの世界にゃあるンだけどよ。それが化け物達を絡めとってンのァ知ってンだけどよ。

それを見る、なンて――していいのか？

「輪廻を見て、何になるよ」

「少なくともラハブは輪廻の中にいないと確認できる」

「なるほど。つまり、いなけりゃ外で活動中ってこった」

「そうだ」

化け物達が輪廻を辿るサイクルにァ一定の期間が存在する。死んですぐ別の化け物に生まれ変わる、ってなワケじゃねェ。それこそ魔法少女の蘇生槽みてェな蘇生時間があるンだ。あっちより遥かに長いが。

まァそォじゃねェと世界ァとっくに化け物が覇権握ってるよ。そォでなくとも湧きポからァ複製された化け物がわんさか出てきてる状況だ。っとによく滅びてねェよな、この世界の人類。

――ふと、周囲に明るさが出てきた。

あり得ない――陽光も届かぬ深海。マジの真っ暗だった。つまり深度ァ４０００

mァ優に超えてるってなワケだ。んで、セイタスのデカさと進んだ時間から察するに――６０００mァ来てんじゃねェかなァ。

そこに明るさ、っつーと、まァチョウチンアンコウみてェなのがいる……かもしれねェけど。

そォじゃない。明らかに、明るい。

これァ。

「……火山、か」

「そうだ。この辺りには、活発な火山がある。それらは熱を発し、生物の生存を極端に狭める。……貴女は、熱を感じるだろうか」

「いいや。俺にァわからねェな」

「ならば、良い」

赤だ。

ぐつぐつと煮えたぎる海底火山――煌めくマグマが、辺り一帯を照らしている。

その中を、ずんずんと進んでいくセイタス。

……すげェ。いんやさ、魔法があって、魔法少女がいて、化け物がいる、ってな

世界をファンタジーだ、ってさ。最初ァ思ったよ。自分が神さんに拾われて、死者だってンのに生者になるってなった時もだけど。

でも――これァ、また違う。

すげェ。だってこれ、前世にもあるンだろ？　綺麗な……それを、生身で見てる。いんやさ全くもって生身じゃねェんだけど。

「梓？」

「ン。すまねェ、見惚れてた」

「熱を好むのか？」

「いんや、どっちかっつーと光かな。前ァ眩しいくらいの光が常に隣にいたンでよ」

「そうか」

お嬢のそれたァ違うけど。

この赤ってな――星の生きる光だ。

すげェ。

「……にしても、ちゃんと化け物じゃねェ魚もいるンだな」

「我らの方が異端である」

「そりゃまァそォだな。あ、つかお前ら自分が外の生き物だってわかってンのか？」
「当然だろう。故に小さきもの、強くなりしものは死を目指す。自らの居場所がここではない事を知っているが故に」
「……そォだな」
そうか。
アイツらの、輪廻の果てに1つとなって、死にてェ、っつーのァ。
この世界から出て行きてェ、って。そォいうことでもあンのか。
「もう少し先だ」
「あァ」
煮えたぎる熱海。そこを過ぎると、今度ァなんぞ――青だの緑だのが見えるよォになってきた。
魚介、あるいァ植物が発光してンのか？
……それに、このなんぞ見るからにやべェ液体ァ。
「塩、か。それに……放射性物質？」

「それがなんであるかは我らにはわからない。ただ、それに触れ続けていれば、我らとて損傷を追う。貴女も一応気を付けて欲しい」

「あァよ、触らんとく」

専門的じゃないンで詳しいこた言えねェけど、これが人体にも生物にも化け物にも害のあるものだ、ってなァわかる。

……セイタスが通ることで、沈殿していたそれらが巻き上がってる――ってなァまァ、言わねェでいいか。ここの住民なら避けるだろ。気合で。

進んでいく。

時たま、セイタスにァ及ばねェものの結構なデカさの化け物にも遭遇するンだけど、どっちも攻撃したりしねェ。まァアレだ。ワニ同士の戦いが、噛みついちまうとお互い致命傷になって勝っても得られるモンが無いんで、それ以外の手段で攻撃する――みてェな。この場で戦闘したってお互い利益が無いンで、無視。ってな感じなンだろう。

一瞬俺に視線ァ来たけど、セイタスが守ってくれた……気がする。

俺も、その輪廻の閲覧とやらが終わったら自衛くらいァできるよォになっとか

ねェとなァ。
　すーぐおっちんじまって記憶失って気付いたら他の化け物だった、なンて笑い話にもならねェ。
　念動力。あるいァ魔力か。魔力ァ普通に使えるっぽいンで、固有魔法以外の部分をどォにかして行けばなんとかなりそォでァあるが。
「まだ潜るのか」
「そうだ。ここより先は、明かりも減る。我を見失うなよ」
「あァそりゃ大丈夫。命の気配で何がどこにいるのかってなわかるよ」
「そうか。……我には無い知覚だ。それが、貴女の特異性なのだろう」
　確かに。
　命の気配や死の気配ってな、【即死】、あるいァ【死漸】を持ってるからわかるモンだと思ってた。つかそォ教えられたし。魔法ってながそれぞれに司るモンがあって、【即死】ァ命や死を司ってンで、だから自分が死ぬ気配とか命の気配がわかる、みてェなさ。マッドチビ先生ァそォ言ってた。
　けど、【死漸】を失った今でもわかるモンってこた――それだけじゃねェ、って

ことか？
俺が夜の使徒だから？　うーん。なんぞ納得いかねェな。
――少し、流れが出てきた。
「……魔力？」
「いいや。魔力とは、天より堕ちるもの。これは」
肌を掠める。
肌っつか、身体っつか。
色があるのかどォかもわからねェ俺の身体を――それが掠めて行く。
魔力――じゃ、ない。
もっとしっかりしたものだ。
これは。
「精神体――？」
「そうだ。我らの精神体。輪廻より出で、この世界で再び生まれるために旅立ち、地を染み、空を流れ、海を渡って各地へ散らばるもの。梓。貴女はこの先に風を感じるだろうか」

「……あァ。感じる。暴風って程じゃねェ、強風ってこともねェ。ただ穏やかな風が、ある」

「それこそが我らの最高神であり、輪廻である」

精神体だ。

しっかりしてるけど、薄い。同じく精神体である俺の身体をすり抜けるくらいにァ薄い。それが、世界へ、外へ外へと拡散して行っている。

今までァ土壌に含まれる魔力だのなンだのでわからなかったが——ここまで何も無いと、わかる。

ここァ。

これから生まれ出でるモノのいる場所だ。

「ようこそ、夜の使徒。ここなるは≫輪廻の根源≪。我ら風の使徒の生まれ出でる場所」

「……なンだ、わかってやがったのか」

「だからといって、差別はしない。貴女はラハブを探す手伝いをしてくれると言った。こちらに敵対の意思がないことは道中に示した。そして、此処より先は貴女の

知らない世界である。故に歓迎の意を示した」
「あァよ、ありがとな。こっちも短気だった。だからそォ焦んなって。大丈夫、どォせ今の俺にァ何にもできねェよ」
　こっちが臨戦態勢に入っちまったのが悪かった。
　いんやさ、ちょっとビビったンだわ。夜の使徒ってな世界にいちゃいけねェからよ。排斥、あるいァ排除されンじゃねェかって。そのために――風の集まるここに連れてきたンじゃねェか、って。
　そォやって俺が警戒したのを察してか、セイタスァ全部説明してくれた。でけェ図体の割に気の小せェ奴なのか、あるいァ単純に平和主義で且つ優しいってだけか。
　ま、後者だろォな。
「んで、ここァもう輪廻の中なのか？」
「輪廻の中に入ることはできない。我らは未だ生きるモノ。故、外側から眺むることしかできない」
「そりゃそォだが。でも〝輪廻の根源〟なンだろ？」
「風がそういう呼び方をしているというだけだ」

まるで友達みてェに言うなァ。
いんやさ、まァ俺と神さんも似たよォな関係なンだけど。こっちに生まれ出でる前ァボードゲームとかしてたし。
……つか、風ァ地平にいねェんだな。こっち来てンのか。
それ、いいのか？
「着いたぞ、梓」
「……ん？　ついたって、特に何も……」
「命の気配、と言ったか。それでは何も感じ得ぬだろう。何故ならここに命は無い。肌を凪ぐ風を感じてみるといい。頬を撫でる風に触れてみるといい。――ここに、どれほどの同輩がいるのか、貴女にもわかるはずだ」
目を瞑る。
命の気配を除外する。魔力の流れも除外する。まァこの辺魔力ほとんど流れてねェけど。
潮流も除外して、俺から発されてる魔力も、セイタスから発されてる生命力も、全部全部外して行って。

奥。奥の奥。
さらに深い場所から感じ取れる風――それに、意識を集中する。
……うーん。
わからん。
これァ俺が純粋な化け物じゃねェからか？
風自体ァわかる。穏やかな風だ。
けどそれ以外がわからん。命も魔力も水も何もかもを除外しちまったら、何も流れてなくねェか。
「――よもや、このような場所で出会おうとは」
「え」
「久方ぶり――に、なるのだろうか。――梓。余を殺さなかった娘子」
まーったく感じなくてうんうん唸ってたら――そこに、いた。
え。って。え。って。え。って。
「ふむ。余を覚えているか？　余は――」
「いんやさ、覚えてるよ。――久しぶりだな、カンコウ。ミチサネの方がいいか？

」
着物狐と共に消えたっつーオリジン。
異例の雄の化け物、カンコウがそこにいた。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「余はもうミチサネではなく、カンコウである。故にカンコウで良い」
「あァそォかい。で？　なンでこンなトコにいるンだ？」
「それは、こちらの言葉である。――余は妖となった。故に輪廻の呪縛へと引き摺り込まれた。余は未だ、輪廻の中で次を待っている。余がここにいる理由はそれだけだ。ではあなたはなぜ、ここにいる？」
「あー」
そっか。
そりゃそォか。
確証が取れてるワケじゃねェが、多分マッドチビの実験で化け物にされちまった

カンコウァ、多分輪廻側にとっても異物なンだろォな。
だからアレから結構経った今でも輪廻の中にいる……的な？
「俺ァまァ、見ての通りお仲間になっちまってよ。まァ死んでないンで今ァ観光中ってな。やんなきゃなんねェこたあるンだけど、一朝一夕にできることじゃねェんで、こっちのセイタスっつー化け物と一緒に……ン？　セイタス？」
あれ。
いねェ。え、先に帰ったとか？
「梓。貴女は1人ではない。※輪廻の根源※において、距離や時間というものは曖昧になる。探さなければいないし、会おうと思わなければ辿り着けない」
「……そりゃ、夢ン中みてェだな」
「斯様なものに例えるとは、面白い。まるで、夢を旅してきたような言い草だ」
してきたンだよ。まァ旅じゃなかったけど。
……んじゃまァ――こォか。
おお。見えた。真っ黒い巨体。
なるほどね。

「カンコウ。ここにァ、数え切れねェ程の化け物がいる、ンだよな？」
「その理解で合っている。余も、これほどまでの妖がいるとは知らなかった。……少しばかり、居心地は悪い」
「ン、なンでだよ」
「妖をそう表現することが正解であるかはわからないが――ここには、女性しかいないのだ」
「あァ」
……あっはっは。
ハーレムじゃーん。
「まァ化け物ァ雌しかいねェんだそうだ。だから、そォいう意味じゃアンタも女になったンだろォよ。んで、こっから先で生まれ変わるとしても雌だろォな」
「なるほど。やはり余は、何かの陰謀に巻き込まれたのだな」
「あァさ。ン、その辺着物狐……じゃねェ、ナリコから聞いてねェのか？　あァいや、アイツもわかってたかどォか知らねェけど」
「余と得子は、ただ昔を語り、彼女の生まれたという地に赴いて、安らかに眠った。

その間に余計な事は話していない」
……まァそォか。
もォ会えねェってな、文字通りの今生の別れ。そこに、実ァお前ァ誰かの陰謀で化け物にされたんだぜ、みてェな話ァしねェか。野暮も野暮だもンな。
そォだそォだ。ハーレムつったけど、こいつァ着物狐にぞっこんなワケで。じゃァ余計辟易するンだろォなァ。まァ人型の奴らばっかじゃねェだろォし、そこまで明確な意思持ってる奴ァ少なそォだからそんなでもないたァ思うンだが。
「誰か、話ができる奴ってないるのか？　お前さん以外で」
「ヒトの言葉を繰るモノは少ないが、いなくはない。呼ぶか？」
「あァさ、ちょいと話を聞いてみてェ」
「わかった。では――べるうぇーく殿。こちらだ」
ん――。
んんん～～～。
ソイツァ呼んじゃダメだなァ！　それ呼ばれると色々マズイなァ！
「あ、すまねェカンコウ、俺ァちょいと用事が――」

「――へ～？　よく私の前に顔出せたね、アンタ」
わお。
こちとら精神体で、生き物だぞ。なンで掴めるンだよオイ。
あとこえーって顔。お前、元のサイズのまんまかよ。おいおい握りつぶす気ですかね、セイタスに助け求めるぞコラ。あと声ちょっと可愛いな案外クソ野郎。
「よォ――ベルウェーク。久しぶりだな」
「何友達みたいな顔してるの？　――私を殺した事、あの時言ってくれた言葉、1つ足りとも忘れてないからね」
握る力が強くなる。
おー。
はは。あァ？
「――ねぇ、怖いかしら？」
「よォ、怖いか？」
「!?」
おーおー。

あァ。ふゥ。ちぇ、魔煙草ァレーテーの中か。吸いたかったのに。
ハハ。
ダメだなァ。
やっぱ俺ァ、ちゃんと縛っててくれるモンが無いと――すぐやらかすンだ。
腕が失くなって縛れたと思ったのに、大火傷負う程調子乗るし。腕失くして大火傷負って大人しくなったかと思ったら、下半身不随になるほどの怪我負うし。下半身不随で腕も無けりゃ大火傷負ってりゃどォにか止められるかと思ったら、足全部失うくらいにァ他を過信するし。
ダメなンだよ。
俺ってばすぐ調子乗るからさ、なンか縛り無いとダメなンだよ。
――全身失ったってのよ。魔法さえ失ったってのによ。
おいおい。なンで俺ァ笑ってンだ？
決まってらァなァ。
ダメだよ、枷外しちゃ。
そりゃ――調子に乗るって。

「いいのかよ、掴んで――触って。輪廻の果てでまでも、死ぬか？」
「……！」
魔力が漏れ出でる。
感情の高まりは強い強い魔力を呼び起こす。
それは。
それは。
それは――明確な形を取って。
死の、形を、取って。
「――そこまでだ。べるうぇーく殿、こちらは余の友人である。梓。べるうぇーく殿は余らより幼い。両者矛を収めてはくれないだろうか」
「ん。すまねェ、カンコウ。助かった。ちょいと今の俺ァ短気でな。そォやって諫めてくれると助かる。……ほら、離せよベルウェーク。もう終わった話だろ」
「……ふんっ」
離される。
……終わらせたのァ俺だけどよ。

生前の禍根を持ち出されても困る、ってな。いんやさ死者の俺が言う台詞じゃァないが。

「ン？　幼いってなンだ？　ベルウェークって言えば、アインハージャ達を何千年と苦しめてきた神だろ。幼ェはずがねェ」

「ふん、いつの話よ、それ。私はまだ生まれて１００年も経ってなかったのに」

「……あン？」

そういえば。

ベルウェークを殺した時――俺、なンて言ったっけ。いや、思ったっけ。

そォだ。――〝やっぱりお前、人形だったってワケだな〟って。そォ思ったはずだ。

人形。迷宮にいるマリオネッタ種。

だから外側ってな人形で、頭蓋の核が本体で。

オリジン種でァあるけど、大型か小型かの判別ァ難しい……みてェな。

けど、今の話を聞くに。

「……ベルウェークァ、もうとっくに退治されてた、のか？」

「さっきから何言ってるの？　ベルウェークは私。わ・た・し。他にはいない。いたら困るでしょ」
「いや」
そぉいえば、宙の莽で、似たような事があったな。
アズサの終焉によって終わらされたピンクカチューシャ。その身体ァ魔力素結合の分解が起きるって事なく、【隠涜】で回収されて行った。そもそも冥界で夜の神の加護無しで動けてるってながオカシイ。元夜の神であるニヤニヤ丸眼鏡ァ敵対してたンだ。その時に加護解いてもおかしかねェ。
……じゃァ、そぉなんねェよぉにしてたのが、ニヤニヤ丸眼鏡じゃねェってこった。
「風、か？」
「あのね。無視、しないでくれる？」
「ベルウェーク、お前……ルルゥ・ガルに対してァ、どぉ思ってンだ？」
「ちょっとはこっちの話聞きなさいよ……。もう。……で、ええと、ルルゥ・ガル？　あぁ、あの子ね。あの子は別に、どうとも思ってないけど。私より長生きなく

せに、私より小さくて、私より強そうなくせに、他の子の力を頼って。よくわかんない子だった」

……そぉいや、聞きそびれてたな。

あみあみ忍者と着物狐が、ルルゥ・ガルとどぉいうやり取りをしたのか、とか。

そぉだ。シエナ――マッドチビだけじゃねェ、ルルゥ・ガルもジパングに関わってたンだ。

やっぱりあそこァ繋がってンのか？　けど、そぉいう素振りァ見せて無かった。なンだ？

何かが、噛み合ってない。

ベルウェークが１００年くらいしか生きてなかった、ってな、まァ良い。ベルウェークって入れ物の保存手段があって、そこに入れられた化け物で、自分をベルウェークだと思い込んでた――みてェな、アイツらの常套手段の気配がする。

けど、そこじゃねェ。

なンでルルゥ・ガルがベルウェークを神だって言ってたのかってのと、なンでその身体を手に入れられたのかってのと――冥界での、違和感。

そうだ。
世界を創ろうとしたはずだ。あの時。
２人の魔法少女、【合成】と【蟲独】によって、俺と全てを合わせて、マッドチビがそン中入って。
あの場にいたのァ魔法少女２人とピンクカチューシャ、夜の使徒であるソティラと俺。
足りないンだ。
風が、足りない。ソティラァ世界じゃ化け物だったが、冥界じゃ単なる夜の使徒だ。風の要素ァ無い。
あの場にいた奴らで風の要素持ってンのァ着物狐くらいだったが、【合成】に巻き込まれた感じァなかった。
だから、だから。
だから。
「……マッドチビァ、風か？」
「梓」

呼びかけられて、意識が浮上する。
その巨体が、近くに来る。
あァそォか。別に俺側からじゃなくても近付けるよな。
「風は、感じ取れたか？」
「ん。あァそれやってなかったな。今旧知の奴らと話してて――って、アレ」
いねェ。
カンコウも、ベルウェークも。
「それが、風だ」
「……あァそう。なるほど。本来ァあっちゃいけねェ、死後の意思」
幻ってワケじゃねェ。あいつらァ確かに此処にいる。
けど、それァ此処で生きてるってワケじゃねェ。あれらは風で――通り過ぎるモンなンだ。
「ここに、ラハブはいなかった」
「そりゃ重畳。んじゃ、行くか。ラハブ探しの旅」
「ああ。――梓。1つだけ、忠告をしておく」

「ン？」
　また静かになった深海で。
　セイタスが、神妙な面持ちで……いやスマン、嘘だ。クジラの面持ちなんざわかるか。
　まァ神妙そうな雰囲気で言う。
「我が誘っておいておかしな話だが、貴女はあまり、みだりにここへは来てはいけない」
「そりゃまた、なンでだ？」
「ここはあくまで死した者の場所。次なる輪廻の待機列それはつまり、次なる生へ向かう休息の場でもある。貴女にとって冥界が安寧の場であるように、我らにとってここは騒ぎの起きぬ平穏な場である」
「あー、さっきのか」
「何が起きたのか我には窺い知れぬが――貴女の魔力は、我らを酷くざわつかせる。わかってくれるだろうか」
　うん。

これァ俺が悪いな。ベルウェークもカンコウも悪くァない。
俺が全部悪い。
悪いし、だ。
「あァよ。別に輪廻に俺ァ興味ないンでね。大人しく引き下がるよ」
「ありがとう。――さぁ、浮上しよう。あの狭い亀裂ではなく、外の海へ。そこから、ラハブを探しに行こう」
「おォさ」
――ほんの一瞬、出かけた。
カンコウに止められてなかったら出てた。
……【死漸】。肉体に宿ってるはずの、死の形をした魔力。
なァんで扱えるのかってな――もうちょい、研究が必要そォだな。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

80・吠得流存具円昏夜土韻地割琉度

セイタスとの旅ァ続く。

勿論早いとこＥＤＥＮに戻るか、宙の莽、冥界に戻らにゃならンのァ重々承知……なンだけど、如何せん戻り方がな。いんやさ、冥界へァ空でも飛べばいい話なンだけど、今度ァちゃんと準備しねェと何にもできずに、って可能性の方が高いし、ＥＤＥＮへァ単純に場所がわからん。

セイタスがクジラなンで海路しか使えないとなれば、北方山脈に突き刺さってるＥＤＥＮにゃどーあっても辿り着けねェんだけど、まァあの触腕の森周辺とかクルメーナ辺りまで来れたらなんとかなるだろって思ってる。

冥界に戻る。

つまりマッドチビと再決戦するにゃ、こっちの陣営に力が必要だ。

世界各地にいるオリジン――そいつらを集めて、ぶつける。なンで魔法少女呼ばねェかって、俺がもう魔法少女じゃないから。お嬢達の安否も気になりァするけど、そこァ信頼してる。

とりあえず俺ァ、どの面下げてって感じでァあるが、化け物達を――いや、そろそろ言い改めよう。もう、俺もそォなンだから。どォせどっちも殺せそォにないし。だから。

魔物達を説得して、あるいァ言いくるめて。

新たな世界の生誕を阻まなければならない。

「なァよ、セイタス。お前ァずっとあそこにいたンだよな？　なら、ラハブってなを探すにしても、色々無理がねェか？　お前がこの辺知らねェんだしよ」

「元の場所に戻らなければ、世界の全てを巡る事ができる」

「つまりアテ無し旅か。いいね、俺もさ」

まァわかっちゃいたが。

あー。

魔煙草が吸いてェ。あの不味さを恋しく思う日が来ようとァなァ。

「魔物ってなよ、普段何食って生きてンだ？」

「他の生物と然して変わらない。他の命を食らい、あるいは他の同輩を食らう」

「そこァ俺の知ってる通りか」

「然り。我らは風の使徒。源がなければ動けない。夜の使徒はそこにあるだけでいい。太陽の使徒は無くなっても続く。その観点で言えば、ヒトや獣たちも風の使徒に見る事はできるのだろう。違うが」

「魔物が一番生物らしいってな、それも聞いた話だなァ」

恐竜島で。マッドチビ先生から。

魔物と魔法少女ってなほぼおんなじで、ただ魔物の方が生物らしい。魔法少女がどれだけいびつか――って話。

「セイタスァ何から生まれたンだ？　母親か？　それとも魔力の淀みか？」

「わからぬ。気付いたら生まれ出でていた。その時から隣にはラハブがいたし、同時に他の生物や同輩はいなかった。魔力の淀みから生まれた、という可能性も無きにしも非ずだが、深海は魔力が少ない。なれば母親を疑えど、それらしい影はない」

「んじゃ案外ラハブが母親なのかもなァ」

「そういうことも、あるのだろう」

もしそォだったとして。

母親が子のもとを離れる理由ってななンだろうね。……いっぱいあるか、そんな

もん。
「貴女はどうなのだ、梓。夜の使徒。生前の記憶はあるのだろうか」
「ん。……まァ、普通にヒトとして生まれたよ。死んだ理由ァ……複雑だな。どっちを話すべきか」
「2度、死んだのか？」
「そーなるなァ。まァ今の状態を死していると呼ぶのなら2度。ただ精神体として生きていると言えるなら1度。――≫前≪ァ、ま、すげェ単純だよ。高い所から落ちて死んだ。調子に乗ったのさ。自分が目の前の相手を救える存在だって。――それで、結局救えなくて、止められなくて」
≫前≪の話だ。
俺が43歳なンて若さで死んだ理由。若死にする奴らが集まってくる性質とかクソみてェな運命ァ神さんから聞いたがね。43なら、俺もその星にァいたってこったろ。
アイツが結局生きてるのかどうかも知らねェし、生きてたとしても――その後死を選ばないなンて言えァしねェ。無駄死にってな、俺が一番よくわかってる。

「何故、休息を願わない？」
「ん？　何がだ？」
「貴女はとても疲れているように見える。自分の起こしてしまった事。自分の為してしまった事。それらに対し酷く後悔し、酷く振り回され、酷く疲弊している。2度も死んだというのなら――安寧に身を任せ、眠りに就かんと願うのがヒトではないのだろうか。我らの様に呪縛に囚われているわけでもない。太陽の使徒のように光に魅せられているわけでもない。夜を享受できるということは――我らからすれば、酷く羨ましくみえる。……故に、どうして休息を願わないのか――やるべきことを、為すべき事を見据えていられるのか。貴女のその活力の源を聞きたい」
……俺の、源。
誰も死なせたくない――ってな、嘘じゃねェ。けど、誰も死なせたくないから動いてるか、つったらちょっと違う。
俺が本当に求めているのァ――もっと小せェエゴだ。
「――死の間際は、幸せでいてほしい。……そんだけだよ。この世界ァさ、ちと、みんながつらすぎる。悲しい死ばっかりだ。太陽の使徒も、風の使徒も――死ぬの

も、生きてるのもつらいって顔してる。上っ面で楽しい日常を過ごしてるだけだ。待ち受ける最期を、耐えなければならない苦痛を。それらへの恐怖をひた隠しにして――その終わりにァ、悲しい顔して死ぬんだ」

「……」

「俺ァ――それが嫌なンだ。なンかさ、ガキみてェで悪いけどさ。……別に若死にでもいいのさ。別に戦って死ぬンでもいいのさ。ただ、頼むから、お願いだから、死ぬときにァ、満足しててほしい。先があろうとなかろうと、輪廻が廻ろうと廻らなかろうと、志半ばで死ぬのだけァ、もう見たくない。辛い顔して、悲しい顔して、痛み背負って。俺ァそォいう死を忌避するし、そォいう死で溢れてるこの世界を変えたがってる」

それが俺の原動力。

神さんに頼まれたことってな、俺の考えることでもあったンだ。

非善（異教徒）。つまり太陽の使徒や風の使徒から――安寧を享受できる者達を、どォにか増やしてくれ、って。苦痛と使命に魅せられ、苛まれた魔法少女と、輪廻の呪縛に苦しみ続ける魔物。

着物狐が使ってた式鬼たちみてェにさ、いるンだよ。もォちゃんと、死を受け入れよォとしてる奴らってな。そンでそりゃ世界もおんなじなンだ。だから、やっぱり俺ァ。

「梓。――我らの願いを、知っているだろうか」

「ん。強くなって、輪廻廻って、究極の一になって――死ぬ、だろ？」

「そうだ。我はもうそれを諦め、あのような場所で眠っていた。だが、まだ、それを目指し続けている同輩がたくさんいる。何故か、わかるか？」

「何故？　理由があンのか？　あったとして、そりゃ、それ以外じゃ呪縛から逃れられないってそンだけだろ？」

「それも正当な理由ではある。しかし、考えてほしい。我が諦めることを選べたように。もう良いと、死など目指さずとも、この世界で生き、この世界の終わりまでを見届けんとする同輩たちが何故もっと増えないのか。何の理由があって、苦しみを背負ってまで死を目指そうと――輪廻の呪縛から逃れようとするのか」

セイタスもヨウキも、諦めた。疲れてしまったが故に。

そしてそれァ多分、もっともっといるンだ。疲れて、強くなることをやめて、安

穏平和に暮らしてる魔物ってな沢山いるンだ。
　そン中で――なンで、あの寂しんぼ達は。
　ルルゥ・ガル達ァ、ああも精力的に動き、死を目指しているのか。
「世界にとって、我らは異物である。太陽の使徒もだが、世界はもう我らを不要だと言っている。これ以上増えないでくれと告げてきている。――だが、同時に」
　ふと――光が差す。
　……違う。舞っている？　何か、燐光が。
　ウミボタルか？
「世界は――酷く、優しいのだ」
「優しい？」
「ああ。世界は我らのせいで苦しみ、太陽の使徒のせいで痛みに喘いでいるというのに、世界は我らを愛してくれている。世界はこの世界に住まう全てを愛してくれている。――故に、まだ動き得る同輩は、死を目指す。もう生まれ出でないために死に、もう増えないために強きを目指す」
「愛してくれた恩返しのために死ぬ、ってか？」

「もう、嫌なのだ。――彼女の声を。苦しいと、つらいと、もう殺して欲しいと、そういう声を聞くのが――我らも、苦しい」

……そぉいやそれ、ブゥリも言ってたな。

もう嫌だって。世界が苦しんでる声を聞きたくない、って。世界ってなもうお婆ちゃんで、それがずっと苦しい、苦しい、って言ってるって。

「――この世界に悲しみが溢れているのは、それが理由だと我は考えている。世界の苦しみが、全生物に伝播している。誰ぞ、彼女を楽にしてあげられるのなら、と。願ったはずだ。誰もが。そして――それに、応える神が３つ、あった」

燐光ァチラチラと俺達を囲う。

俺達っつか。

俺を。

「故に遣わしたのだ。――世界を殺し得る、死なせることのできる存在を」

「そりゃ……もしかして、俺、か？」

「そうだ。夜の神が遣わした夜の使徒。死の魔力を操る少女。そして、風の神が遣わした風の使徒。あらゆる魔物と心を交わし、諦めようとしていた者達をまとめ上

げ、全てを遂行せんとするもの。最後に、太陽の神が遣わした太陽の使徒。あらゆる物事の概念を統合し、それを終わらせんとするもの」

あ。

これ。

「貴女が、幸福に至る死を求めるというのなら。――どうか、世界を死なせてやってほしい。どのようなやり方でも構わない。太陽の使徒をまとめ上げるのでも、我らを片端から殺して行くのでもいい。もう――彼女の苦しみを、これ以上引き延ばさないでやってほしい」

泣いている。

聞こえる。

光が、俺に求めてくる。

お願い、お願い、って。

苦しいの。痛いの。もう――いいの。

大切な子達が、愛している子達が、私のために死んでいく。

私が苦しむから、いなくなっていく。私が痛がるから、苛まれていく。

お願い。お願いよ。
私をどうか殺してください。
私はもう、十分に生きたから。
私はもう、幸せだから。
私はもう――。
「――」
聞こえた。
今までなンで聞こえて無かったンだってくらいの声が。訴えが。
そして、その感情が伝わってくる。
俺の言い訳を塗りつぶすかのような、俺の言い分を全部包んで、それでもういいから、って。お願いだから、って。
――死を、懇願してくる。
「……死にてェのか」
返事ァない。
俺の声ァ届いてねェんだろう。まァ、矮小すぎると声ァ小さく聞こえるモンな。

「ずっと死にてェってな――つらいよな」
ずっとだ。ずゥっと、死にたいって思い続けるのァ――辛いよ。
いつか死ぬだろう。いつか誰かが殺してくれるだろうって、そーやって飽きて、疲れて、眠っちまえたらどンなによかったことか。
世界ァ眠らない。眠れない。痛みと苦しみが彼女を寝かさない。ずっと起きっぱで、ずっと死にたくて。
あァ――なるほど。
そりゃ、魔物達が必死に死を目指す理由もわかる。
こんな声を聞いちまったら、こんな声をずっと聞かされてたら――あァ。
「――すまねェ。今、それァできねェ。けど……多分、鍵ァ俺なンだろう。だから、アンタの声は忘れないし、アンタの願いは受け取った」
心臓の脈打つ音が聞こえた。
俺じゃねェ。セイタスでもねェ。
それが誰の心臓か、なンて。
「セイタス、ちょっと離れててくれ。今から俺がするのァ、かなり危ないことだ」

「わかった」
海のど真ん中で。
精神体１人が、胡坐をかいて座る。
感覚としてァ、自身の神経を少しずつ少しずつ内側に引っ込めて行く感じ。今神経なんざ通ってねェけど、イメージだ。
自己と世界。俺の中の死ァ、水のイメージだ。
自己と世界。≪役割の統合≫、≪魔物の形成≫、≪別離の終誕≫。
自己と世界。――口に出せ。言葉にしろ。それがせめてもの手向けとなるのなら――声を紡げ。
「――糸伊豆阿止理負不伏零矢堕千経度戸地内途（それはよるにささげるいのりのものがたり）」
ギシ、と。
身体が鳴った。精神体ァ別に治ったワケじゃねェ。俺の精神ァボロボロのまんまだ。
その状態で。
肉の器の無い状態で、この言葉を使うってな――死に近づくことを許容するに等

しい。
けど。
けど。
けど。
今まで無駄遣いしてきた分ァ――ちゃんとしねェと。
「――藍永封無減琉（私は終わりを肯定する）」
瞬時に、消える。
俺の周囲にあった海水が消える。球形に、セイタスが十二分に距離取って無かったらやばかったくらいの範囲の水が――否、世界が――終わる。
まだだ。
まだ、それだけじゃねェ。ちゃんと、ちゃんとやんねェと。
今ァ死地じゃねェから、余計に感じる。テンションが高いワケじゃねェから、強く感じる。
この言葉は、花束なンだ。
眠りゆく世界へ、その墓前に添えるための言葉。

もう、いいんだ、って。
そォ言ってやるための言葉。
だから最後まで言い切れ。途中で止めるな。
「ッ――褪戦死遠【世涯】！」
その時。
――世界の一部が、明確に、死んだ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

水の流れを感じる。
目を開く。
「……よォセイタス。運んでてくれたのか」
「然り。――無茶をするものだ。太陽の使徒が行使する魔法とは、太陽の助けあってこそのもの。太陽が全てを空から見ているが故に、世界の改変などという暴挙が

許される。行える。――それを、力業で、とは」

「あァ、我ながら馬鹿だたァ思うけどな。でも、まだ俺にァ使い道があるってわかった。やるべきことが増えたってよりァ、気付いたって方が正しいか」

魔法の行使。

魔法少女ってな太陽の使徒だ。だから、太陽の力を――世界を変えて行く力を存分に使える。世界から賜った、なんて言っちゃいるが、実質奪ってるよォなモンだからな。太陽ってなガソリン使って、魔力ってな力でアクセル踏み込んで、魔法少女達ァハンドル握ってるだけ。それで魔法を行使してる。

それを、太陽の助力無しでやるってこた、エンジンを手で動かすみてェなモン。到底無理なことを、今やった。やれるたァ思ってなかったけど、まァできたんで良し。

代償は。

「俺ァどんくらい寝てた？」

「2つ、海域を越えた」

「それじゃァわかんねェなァ。セイタス泳ぐの速ェし」

「動けるか？」
「まだ無理だ。……魔力で引っ張ってくれてンのか。ありがとな。あんま使った事ねェだろ、魔力」
「至難ではあったが、慣れた」
俺の身体に巻き付いてる魔力の糸。
魔法程がっちりしてねェそれァ、けれど精神体なら引っ張れる程度の強度があって。
それを自分と俺に巻き付けて、運んでくれてたと。
「で、どォだったよ。世界ァ殺せたか？」
「一部分だけだが、確実に。……貴女が万全であれば。あるいは太陽の助力を受け、風の助力を受けたのなら――本当に世界の全てを殺し得るだろう」
「風の助力？」
「風は世界に全てを運ぶ。貴女の持つ死を世界中に運び得る。そうとなれば、我らも手を貸すだろう。彼女を楽にしてやりたいと願う同輩は数え切れぬ」
そりゃァまァ、すげェ話だな。

夜の神さんが遣わした俺に、太陽と風が助力する、なンて。
……あァまァ、今の今までァ太陽が助力してくれてたし、今現在ァ風の使徒たるセイタスが協力してくれてンだけど。
「梓」
「あァさ」
「貴女の死を見て――我も、少しばかりの気力が湧いた。我は飽いたもの。諦めたものであるが――だからこそ、まだ余地を残しているといえる」
「……太陽の使徒を、狙うのか？」
「否。太陽の使徒の因子を取り込んだとして、それでできるようになるのは再誕……新しく生まれ直すということだけだ。我が我のまま強くなるとなれば、同輩を食らう必要がある」
「食らう……」
セイタスの背で、陽光に揺らめく水面を見上げながら。
「生存のためには食事が必要である。それは無為な死ではなく、同時に幸福な死でもない。貴女はそれを容認できるか？」

「……あァ。流石に、生きるための食事で相手が死ぬってな、ンなことに駄々こねるほどガキじゃねェさ。それァ仕方のない生存競争だ」
「良い。――では、少々速度を上げる。流されてしまったとしたら諦めて直進しろ。我は今より、狩りをする」
「え――」
言葉を挟む余裕ァ無かった。
今までの航行……俺との旅の中で、ただの一度も出したことの無い速度を。
自動車――いや、電車くらいの速度ァ出てるぞ。
「――同輩よ。我が名はセイタス。これより貴様を食らう者なりて」
「良い。私はヒプオカンプス。呪縛の最中、心の踊る戦に感謝する」
そこにいたのァ、馬と鮫が合体したみてェな化け……魔物だった。
大きさァセイタスより一回りくらい小せェが、小回りの利きそォな水かきやヒレが厄介そォだな。何より、武器を持ってる。でけェ巻貝だ。アレに刺されたらひとたまりもねェだろう。
つか――喋る、ンだな。

これから食う相手と。輪廻の呪縛に囚われた同士だから、か？　ンなことしちまって……情とか、湧いちまわねェのか？

「――――！」

「ッ――――」

心躍る戦、なンて存在しない。

勝負ァ一瞬だった。厄介そォなンて思った俺が馬鹿だった。

セイタスァ一瞬にして、更に速度を上げた。

気付いた時にァ馬の身体が無くなってて、サメの尻尾だけになってて。

振り返り、それもしっかり食らうセイタス。

一瞬だ。

文字通りの一瞬で、決着がついた。

「振り落とされてはいないだろうか、梓」

「あァ、大丈夫だ。セイタスは？」

「我が負傷したようにみえたのか？」

「いんやさ。いいならいいんだ」

これ自然の摂理、かねェ。
生きるためだ。強くなるためだ。
食事に口を挟むなんざ野暮な真似ァ――まァ、してきたか。
今や懐かしき小学校襲撃事件。餓狼とも呼ぶべき飢えた狼たちを殺し続けたあの事件。
まァでも、こっちも生きるための抗いだったからな。
お相子か。
「なら、まだまだ行くぞ」
「あァよ」
そっから。
人でも変わったかのよォに、見る魔物見る魔物全部に攻撃を噛けて、それを食らっていくセイタス。
俺ァその背中で。
魔物の摂理、って奴を――ただ、眺めていた。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

１０００は食らった頃だろうか。
少しばかり冷たい海……海面に降っては融ける雪があるよォな海域に来た頃、セイタスの調子がおかしくなった。
不調を問うても、大丈夫だ、としか返さないセイタスに。
俺ァもう動けるよォになっていて――だからこそ、心配になる。
俺の中のセイタスってな、もう仲間だ。
ラハブは見つかってねェし、他のオリジンにも出会えてないけど――セイタスとはもう肩組んでるつもりでいる。
それが不調で。
それが――魔物、なンだから。
……魔物の病気とか、俺何にもわかんねェぞ。
「なァよ、セイタス。そろそろどっかで休まねェか？」

「……それが、我を気遣ってのことであれば、問題はない」
「けどよ……お前、明らかに……」
「問題ない」
絶対ある。冷静メイドの〝問題ありません〟たァわけが違う。明らかに無理してるし、明らかに不調だ。
風邪か？　寒くなったからか？
いやクジラって風邪ひくのか？　クジラの常識ァ魔物に通用するのか？
「マジで、ほんとに休まないと、そろそろ――」
「貴女だったのね。まさか、とは思っていたけれど」
静かな声。
凛とした――冷たい声。
それが、前から聞こえた。
前。
氷塊……違う。
これァ――でけェ、クジラだ。

クジラの、真っ白なクジラの魔物。
「……ラハブ。大きくなったな」
「ええ。セイタス、貴女も。――遠き海より来たりて、近海を荒らしまわり、目に付くすべてを食らう者。私の家族も、いくらかやられてしまった」
「そうか。貴女はもう、番を見つけていたか」
「……もしかして、私を追ってきたの？」
「そうだ」
ラハブ。
真白なそのクジラ。その目、その声ァ――酷く、冷たい。
少なくとも旧知に向けるソレではない。
これは。
敵対者に向ける、感情だ。
「じゃあ、殺し合い。しましょうか」
「そうだな」
「え――待て、待て待て！　ちょっと待て！」

流石に割って入る。
当人同士の奴だから割り込むのァ野暮だってわかってるけど、待てよ。待てって。
「……何かしら、この子。随分と幼いけれど、貴女の子？」
「友である。そして、世界を殺し得る存在だ」
「へぇ……。それで、セイタスのお友達が、何の用？」
威圧感だ。
セイタスもラハブもでっけェから、余計に。でもそれだけじゃねェ。
余計な口挟むんじゃねェって、そォ言ってる。そォ感じる。
けど、けど。
「なンで、殺し合いになるンだ。セイタスァ、一度旅に行ったきり戻って来ねェアンタを心配してた。アンタが死んじまったんじゃねェかって輪廻まで見に行くほど心配してたンだよ。それがなンで殺し合いになる!?」
「それが、生きるための唯一の手段だからだ」
「彼女が私の家族を食べたからよ」
即答だった。

考える素振りすら見せない。
「復讐、ってことか？」
「いいえ？　あの子がセイタスに食べられたのは、あの子自らが挑み、敗れたから。そこに怒りなんて無い。けれど、私は母親として、他の子を守るために、縄張りに侵入してきた敵を排除する必要がある」
「じゃ、じゃァ出て行くよ！　それでいいだろ、セイタス。ラハブァ生きてたンだ。それがわかっただけで、満足だろ。俺への協力とか良いからさ、あの穏やかな海に帰ろうぜ」
「それはできない。梓、貴女も納得したはずだ。生きるための食事で相手が死ぬ。それは、我らの摂理であると」
「別に食わなくても生きていけるだろ！　他の奴で十分に――何も、友達じゃねェといけねェ理由なんざないだろォが！」
「それは同時に、他の同輩でなければいけない理由にもならない」
なるだろ。
なるだろ!!

――それは、でも。

俺の、倫理、か。

「幼いのね、本当に。……貴女の大切な友達が傷付いていくのが嫌だというのなら、貴女だけでも離れなさい。私は貴女に因縁をもっていないから、見逃してあげる。精神体は食べても美味しくないし」

「傷付いていくのは貴女だ、ラハブ。我は負けぬ。子を想うのなら、逃げることだ。我はそれを追うが、貴女の速度であれば逃げられるだろう」

「そういう馬鹿なトコ、ずっと変わってないのね。いいわ、昔のように遊んであげる。童心にかえって、殺し合いましょう。ただ、その生存を賭けて」

「ああ」

止められない。

これはもう、止められない。

友達なのァ事実なンだろう。

けど、それは。それは、殺し合わない理由にァならない。

群れの一員ではなく――縄張りの侵入者だから。

「――じゃァ、せめて。ここで見届けさせてくれ。セイタス。俺ァ、アンタと旅ができて楽しかった。ラハブ。セイタスから話聞いて、どんな奴だろうっていっぱい想像した。――だから、どっちが死んでも――俺ァそれを見届けたい」

「ええ、そうして。それで、あの海に彼女の死を告げに行きなさい」

「ラハブの話はまた聞かせてあげよう。彼女を食らった後に」

そうして――戦闘が始まる。

技術などない。ただ互いにぶつかり合い、食い合うだけの争い。あの海底火山地下で考えたように、どちらが勝ったとしても、どちらもが致命傷を負う――同格の戦い。本来ならば無いはずの牙。魔物ゆえに持つソレが互いを傷つけ、噛み千切り、膨大な量の血が流れて行く。

これじゃあ。

これじゃあ、どっちが勝ったって。

また一緒に旅をする事も。

また母親として子を守ることも。

どっちも、できやしない。

どっちも――死んでしまう。
「よォ、何やってんだ？　アレに巻き込まれたくねーなら、とっとと離れた方が良いぜ。狙ってなくてもどうせ機会は来るからさ」
「ア？」
「おっと、怒んなって。いきなり話しかけたのは悪かったよ。驚かせた。けど、これは心配のために言ってんだぜ？　なんせ、あんだけでっけェのの戦いだ。絶対どっちかが死ぬし、勝った方もボロボロ。そこをみんなで襲って、仲良くお裾分けってさ。それで強くなる。な、お前も参加しねーか？」
心が冷える。
ダメだ。
それァ、俺が嫌いな奴だ。怒りに任せて相手を殺すとか、そンなのァ絶対ダメだ。
邪魔するな。
頼むから。
意識を割かせるな。
あいつらの死を、見届けさせてくれ。

「頼むから、邪魔しないでくれ」
「あー、もしかして伝わってねぇ？　みんなで分けるから、独り占めはナシだ、って言ってるんだよ。一応この辺はうちらの縄張りだからさ。余所者はちゃんと従ってくれよ。な？　別にあげねえわけじゃない、ちゃんとお前の分も用意してやるから」
うるさい。
やめてくれ。
俺をこれ以上ダメな奴にしないでくれ。
お前もそうなんだろう。
生きるために、強くなるために。漁夫の利を狙うってな、間違っちゃいねェ。いねェから、それァいいから、俺に絡まないでくれ。
頼むから。
「おい、聞いてんのカ――」
黒が。
飛んで、きた。

それァ俺を通り抜けて、俺の背後にいた奴もぶっ潰す。
……通り、抜けて？
「――セイタス!!」
「死んだわ。もう」
……そうだ。
別に精神体ァ幽霊ってわけじゃねェ。斬れるし殴れる。それが死やダメージに直結しないだけ。
それをすり抜けるものがあるとすれば――魔力を何も含んでいないもの。
即ち。
「なんか喧しいのも巻き込んだみたいだけど。掃除にはなったでしょ」
死体だけ、だ。
そうか。
最期に、言葉を遺す、とか。
何か別れを告げる、とか。ないんだな。
お前は――戦いの最中で、死んだのか。

そうか。
「周りのも！　とっとと散りなさい――じゃないと、潰すわよ」
離れて行く。
周りにいた魔物が。
俺以外のが、全部。それくらい――ラハブの方が強かったんだ。
そりゃそうか。
セイタスァずっとあそこにいて、ラハブァ海を旅してて。
どっちのが強くなってるか、なンて。
明白だった。
「貴女もよ、セイタスの友。私は今からセイタスを食べるから、退きなさい」
「断る」
え。
なんで？
だって、生存を賭けた戦いで。生きるために抗って、勝ったンだから。
ラハブにァ、セイタスを食らう権利がある。

じゃァ、なンで今俺、そんなこと言ったんだ。
関係ないだろ、もう。オリジンの捜索に助力してもらうって名目で、ラハブ探しを手伝って。ラハブが見つかって――セイタスが死んだなら。俺側からの義理なんざないはずだ。
ないはずだろ。
魔物だぞ。いつか死ぬなんて知ってた。もうセイタスの魂ァ輪廻の根源に行ってるはずだ。もうここにァいない。人間みてェに丁寧に弔っても意味なンかない。これァもう、肉でしかない。
「そう。じゃあ、貴女も殺すわ。さようなら、名前も知らないラハブの友達」
巨体が迫る。
その口が開く。
俺は。
――セイタスの死体に、飛び込んだ。
急速に戻る。
身体の感覚が、痛みが、心が、世界と自己の隔たりが。

「それは――冒涜よ。そう。何か変だと思っていたけれど、貴女――夜の使徒ね？」

「あァさ、ちょいと――精神体らしいコトをしようと思ってさ」

瞳を開ける。

そこには、幾分か小さくなったラハブの姿があった。

俺は夜の使徒。

アンデッドだ。ゾンビさ。

じゃあ――死体くらい、動かすよ。

「すまねェな、ラハブ。俺も生きてェからさ。――生きるために、抗わせてくれ」

ごめんな。

早く眠らせてやりてェのァ山々だし、ホントは、セイタス自身もラハブに食われるのが本望だったンだと思うけど。

俺、やっぱダメだわ。

理性とか言葉じゃ――自分を抑えられない。ガキだよ。もうおじさんも名乗ってられねェや。

「俺は梓・ライラックって名前でさ。世界を殺すために、仲間を集めてる」
「……私はラハブ。貴女が乗っ取った死体の友であり、ここら一帯のハウェル達の母親よ」
「あァさ。ありがとう。んじゃ、連戦キツいたァ思うが――いっちょ殺し合おうか、ラハブ！」
たとえすべてが、意味のない事だとしても。
この悪逆非道が――あらゆるものへの冒涜だとしても。
ごめんなァ。
ちょっと、我慢できねェんで。
「それは、夜に捧げる祈りの物語。私は救いを否定し、私は終わりを肯定する」
大きく、大きく、大きく。
産声を上げる。
それはクジラの歌となって、世界に広まって行くのだろう。
「さァやろうか。生きるために抗うってンなら、俺ァお前の相手をする。――そして、俺も生きるために抗うから――お前も死力を尽くせよ、風の使徒」

「亡き友の弔いのために、全力で貴女を殺すわ、梓」
さァ――弔い合戦の始まりさ。
生存競争と行こうじゃねェか、冒涜的に、な。

遠《text:s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

81・後地簿富負不濁安堵樵土魚多・

動かし方ァ簡単にわかった。俺がそォなったから、そォなる。
勿論クジラの体なんざ動かしたことねェし、その構造の深くを知ってるってなわけでもねェ。けど、俺がセイタスになったから――セイタスァ、俺になった。それだけでいい。
「夜の使徒。もう少し、礼節というものを弁えているものだと思っていたわ」
「魔物に礼節を説かれるたァ予想外だ」
「何、もしかして夜の使徒は、自分たちを特別だと思っているの？」
「いんやさ、すまねェ。ほんの少し前まで化け物だと――言葉も交わせねェ敵だって思ってたから、つい出ちまった。そォだな。風の使徒も、夜の使徒も、そォ変わりァしねェか」
「いいえ。私達には私達の掟があるわ。貴女が今破ったものよ」
あァ、そォなんだろう。
なんなら俺にとっても禁忌だ。既に死んだ奴の体に入って、それを動かす、なン

てあり得ない。
ただ。
「こっちが10割悪なのァわかってるからさ。俺の納得のためだけに、俺と戦ってくれ」
言いながら——体当たりをする。
魔力素の結合は解けかかってる。だから速く動くだけで、ボロボロと体は崩れていく。
——あァ、あァ。
そォかい。それだけじゃ、無かったンだな、セイタス。
「なァよ、ラハブ」
「……」
「アンタはオリジンなのか？」
「いいえ。私もセイタスと同じよ」
「ならよ。——もう、とっくのとうに、寿命なんてのァ」
「それ以上はやめて。セイタスの闘いを侮辱しないで」

やっぱりそォなんだな。
セイタスの明らかな不調。そもそも多分、俺が来てなきゃ……あの暗い海の底で、静かに眠り得ていたはずなんだろう。
それを俺が叩き起こして、連れ出して……早めちまった。
あァさ、上から目線だな。
それを選んだのァセイタス自身だ。だからこそ、セイタスァ急いだし、生き残るために戦い続けた。俺を運ぶために。俺に希望を見出だして。
ならよ。
食われ行く体借りてでも、果たさにゃならねェもんがあらァよ。
体当たり。ヒレでの斬撃。尻尾の叩き付け。
ラハブを傷付けよォとするそれらは、しかし自身の体を砕くに終わる。この巨体を繋ぎ止める容積が、俺にァない。
だから、崩れた端から。
「死が……」
「あァさ、よくわかったな。……俺ァ、夜の使徒ってだけじゃねェ、太陽の使徒の

体持ってたこともあってね。魔力の扱いにゃ慣れてンだ」
崩れた端から、殺していく。
今の俺に【即死】や【死漸】なンて便利なモンァない。だから、ちゃんと。
太陽を噛まない俺の魔力で、殺していく。
世界の一部を殺した死の魔力。それを、セイタスのためだけに使う。
食い付かれる。噛みつかれる。
痛みァ想像以上だ。食い破られ、噛み千切られて、あァ、痛い。痛いだろうさ。
生きてもいねェのに、痛い。
「どうして――」
「噛まねェのか、って？　ハハ、夜の使徒なりの礼儀だよ」
噛みつきァそんだけで致命傷だから、とか。
魔物に食い付きたくねェから、とか。
そんなけったいな理由じゃなくて。
「食事ってな、生きるためにするもんだろ。生きてねェ俺がやっていいことじゃねェ」

ただ、それだけ。
これは夜に捧げる祈りの物語なのだから――そこに、曇りがあってはいけない。
いつか。
いつか、セイタスが俺を諭したよォに。
俺からも、餞ァさせてもらう。
「セイタスが自らの死期を悟って、自身の幸福を遂げたンだ」
なら、そこに。
俺の語った理想ァ、含まれてるはずだ。
セイタスァ俺の意思を食って、自分の最期を見つけたんだ。
なら、それをやるわけにァいかない。俺の一部だった、一部になってたセイタスは、誰にも渡さない。彼女の懇意にしていたラハブであっても、ダメだ。
コイツァもう、俺のだ。
「ラハブ」
ボロボロの体で言う。
限界だ。もう、クジラの形も保っていられない。

「魔物ってなよ、夢ァ見ンのか」
「ええ、見るわ。――私達が、風の使徒でなかったら、と。ただの獣であれたらどんなに、と」
「セイタスも、見てたらしィ。アンタと一緒に旅をする夢だ。アンタと共に、あの海で穏やかに暮らす夢だ」
記憶が流れ込んでくる。
クルメーナ地下で魔物達に起きてたことと同じだ。もうボロボロになってしまったセイタスの脳が、肉体が、ラハブとの思い出を、その美しき日々を教えてくれる。
どんどん抜け落ちて行くけれど、どんどん消え去って行くけれど。
それは確かに、紛う方なき楽しい思い出で。たとえ夢幻であろうと、彼女への想いァ本物で。
いつかともに泳げたら。いつかともに世界を巡れたら。いつかともに、番うことができたのなら、と。
未練だったンだ。
ずっとそれを望んでた。ずっとそれを夢見て、けれど無理だと諦めて。彼女はも

ういないのだからと、ふんぎりをつけて。ずっとずっと言い聞かせてきた。諦めろと。もし、今からでも動けば。もし、彼女を探しに行けば。

その身が滅びようとも、その身が朽ち果てようとも——会えるかもしれない。

恋慕だ。心の底から、彼女を愛していた。心の奥底から、ラハブを愛していた。

——だからそれは、紛う方なき転機だったンだ。

老いて朽ちて行くだけの身体が、その目が、その感覚が。

はっきりと捉えた——濃密な死の気配。一目でわかった。あれなるは夜の使徒。

あれこそが夜の使徒。はじめは自分にもとうとう迎えが来たものだとばかり思ったけれど、その死は明らかに幼かった。何者かを問えば、珍妙不可思議に発声を用いて意思の疎通をする、小さな小さな精神体。

夜の使徒は、世界にはいない。何故ならそれらはすべて死者であり、己らの悲願であり、その全てが冥界にいるのだから。

だから、いない。いないはずの夜の使徒。

それがいて——その使徒から、懐かしき彼女の匂いを感じて。

まるで。

――暗い海のそこで眠りに就いた時に訪れた、夢の中のような。

元気にしているのだろうか。我の記憶から彼女の姿を読み取り、「流石にこの大きさは困るな」、などと呟いていた彼女は。

あぁ。それも、けれど泡沫の夢。我はすぐに目覚めて、それから一度もあの夢を見ることは無かった。

彼女が旅立つ時の夢をよく見る。

広い世界を見てみたいの、と。貴女はそう言っていた。危険も承知、道半ばで朽ち果てるかもしれないなんて覚悟は既にできている。だから――北へ。冷たい海の方へ行って、自身より白いものを見るのだと、そう、楽しそうに語っていた。

渡り鳥から聞いたのだという、純白の世界。

そこに行ってみたいのだと。

彼女は。

我を、誘ってくれた。

――結局、断ったのは我だ。結局その運命を拒否したのは、我なのだ。

ああ。そうだ。

だから、今度こそは、その転機を掴みたかった。
老いていく身体など考えないで良い。朽ちていく身体などどうでもいい。
夜の使徒よ。死者でありながら、同輩であり。
同輩でありながら――世界に求められる何者かよ。
我は貴女を利用する。
我は貴女の純粋さを利用する。我は貴女と共に旅をしよう。
未練を残して朽ち果てるより。
すべてをやり切って、幸せの中で死にたい。
「我は貴女が思っているよりも悪しき者だ。貴女が抱いている純粋なる期待。希望。あるいは友情。我に向けられるべきでないそれを、貴女は惜しげもなく与えてくれる。我に貴女の求めるものを探す気などない。我にはもう時間が残されていない。だから――貴女の運命を、我は利用する」
「梓、貴女」
「貴女はとても数奇な運命の下にある。定められた寿命よりも先に死ぬもの。それらを集め、それらの想いを遂げさせる、世界中のどこを探しても――そこまで悲し

く、そこまで美しい運命は存在しないだろう。我にはそれがわかった。我には貴女の死がなんなのか、わかった。だから。だから」

――だから。

貴女と共にいれば、必ずラハブに会えると。

そう、確信したのだ。

「――ありがとう、梓。最後まで見守ってくれて。貴女がいなければここへは辿り着けなかった。貴女が来なければ我は深い海の底で死んでいた。我を奮い立たせてくれて――ありがとう」

そこで。

記憶は、終わりだ。

……ったくよォ。

折角愛しの彼女に出会えたンだから、俺の事なんざ考えてねェで――ちゃんと前向けよ。

「ラハブ」

「ええ」

「愛している。昔も、今も。――だから」

「だから、戦いましょう。私達は風の使徒。その記憶が継承されないのだとしても、私達は最後の最後まで共にある。私達はいずれ朽ち果て、老いさらばえるけれど。いずれまた、再会できる。いずれまた、すべての記憶を失っていても。――私は貴女に会うから」

「ありがとう。――ラハブ。我は夢を見るよ。あの穏やかな海の底で、貴女と出会った時の事を。貴女を愛した日々の全てを。我は貴女に――託すよ。我の大切な、もう一つの縁を」

セイタスの身体が、止まる。

もう無理だ。無理矢理動かすにァ限度がある。あとはもう、冷たい水底に落ちて行くだけ。

戦闘の終わった気配でも感じ取ったのだろう、少なくない数の魔物が寄ってくる。

それを。

「何。アンタ達、私の得物を横取りする気？　――まだ生きていたいと思う心が欠片でもあるなら、散りなさい。でないと――食い殺す」

ラハブが、その殺気だけで退けた。
……落ちて行く。
真っ黒な身体が、冷たい海を落ちて行く。
そうして――海底に辿り着いて。
あァ、もう読み取れない。
セイタスの記憶ァもうわからない。脳の劣化が激しい。あァ。あァ。
「食べなさい」
「……まァ、そォなるよな」
「彼女の気持ちを汲むのなら。私も、貴女も、彼女を食べ尽くす義務がある」
寄ってきたラハブが言う。
周囲にァ彼女の子なンだろゥハゥエル種が集い、心配そォにこっちを見ている。
あァ、周囲警戒してくれてンのもいるな。
冷たい。
まだ、冷たいと。
そう思えるうちに。

「死とは喪失ではなく、誰かの糧になるものよ。夜の使徒。悲しみではなく、その愛に応えることを臨みなさい。命尽きるその時まで、彼女を覚えておきなさい」
「あァよ。忘れねェ。忘れることだけァしねェ」
セイタスの身体から、出る。
そンで。
朽ち果てたその巨体に――口を付けた。
「……あァ、いけねェ。忘れるとこだった」
一度、離して。
ぼんやりとした精神体たる身体の、両手を合わせて。
神さんに祈るよォに、言う。
「いただきます」
俺ァ、その日。
ラハブと、その子供たちと共に――セイタスを食った。
その身を、骨を、全てを。
静かな、静かな夜だった。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「オリジンをな、探してンだ」
「何故？」
「この世界を終わらせよォとしてる奴らがいる。だから、そいつらを倒さなきゃならねェ」
「……。そう。オリジンなら、この先に見える氷山。その真下にいるわ」
「あァ。ありがとう」
翌日。
海上ァ吹雪いちまってて視界が悪いンで、海ン中で。
ラハブにァほとんど傷はない。俺も何も消耗していない。
どころか——少しだけ。
精神が、回復したよォな気がする。
痛みが減った、が正しいか。

「世界を殺そうとしているのに、世界の終わりを止めに行くの？」
「ただ終わらせるってンなら静観もしたけどな。――新しい世界作るための材料として世界を終わらせる、なんてなったら――そりゃ、止めるだろ」
「……それ、そっちの世界に、私達は行かされるのかしら」
「わからねェ」
「もし、私達の誰もが行けないのだとしたら」
「オリジンが協力してくれるかどォかはわからねェ、って？」
「ええ。――私達は生き残るために互いを食い合っているけれど、その先に求めるのは、全種族の死だから。もし、巻き込まれて終われるなら、と。そう断る子も多いと思うわ」
「あァさ、それでいいよ。初めからアテ無し旅だ。情報、ありがとな」
そう言って。
俺ァ、ラハブ達の元から、去った。
彼女には家族がある。俺についてくるこたできねェ。
また、1人になった。

また？

……1人になったことなんて、無かったよ。ずっとずっと誰かいただろ。ずっとずっと、誰かと出会えていた。

丁度いいか。

1人になったことだし——念動力ってなの練習もしておこう。

魔力をいい感じに操れたらできるってなわかってンだ。イメージァあの演習での精神体。

泥を丸めて、飛ばす。ただそれだけの、とても強力な攻撃。

「……うーん。そもそも遠隔魔法の感覚ってながわからねェからなァ」

体外に出た魔力を操る、って感覚が、よくわからねェ。

水みてェに飛ばす、ならまだしも、完全に自分から千切れたモンを操るってなどォいう感覚なンだ。

たとえば。

身近なモン……えー、ラジコンとか？　コントローラー握って、電波で走らせる……うーん、魔力ってそォいうモンじゃねェんだよな。

単純に飛ばすだけなら、できる。けどそりゃただの魔力で、【即死】や【死漸】のソレじゃない。マジに魔力を飛ばしているに過ぎない。

うーん。

「魔法。魔法ね。……魔法って考えるからダメなのか？」

結局魔法っつーのァ、太陽の力あってのモンだ。前やったみてェに無理矢理使えねェこともねェんだけど、やっぱり魔法ァ太陽の領域で、風や夜のモンじゃねェ。風ァ巡り続けることが領分だとして――やっぱ夜ァ、死だよなァ。

死。死を……振り撒く？

あー、それァなンか夜の使徒ってより、死神みてェだ。それァどっちかっつったらアンゲルだな。お迎えなンだから。

……俺もなンか武器だの鎧だのを纏うか？

コアってな無ェが、鎧騎士や鎧武者みてェなことァできるんじゃねェかな。

「無理だな」

うん。

あーいうのァ純粋な戦士だからこそできることだ。俺ァ剣だのダガーだのを使っ

てきたけど、あくまで護身用っつか、死飛沫を飛ばしたり防御するためだけのものでしかなかったからなァ。【即死】と刃物の相性が良過ぎた、ってだけの話だ。

じゃァ、今の俺に合ってるもの、つったら。

銃弾を一つ、手の内に形成する。

魔力で作ったモンだ。それァすぐに解けそうになるけど――その前に。

デコピンで、飛ばす。

「……没。弱すぎる」

それァ5m行くか行かないかくらいで完全に解けちまった。

ぬぁー。

最終手段ァまァある。死を解放すれば、世界ごと周囲を殺す事ァできるだろう。できるだろうけど、俺もかなりのダメージを負う。回復しないダメージだ。そろそろマジに使用を控えるべきなンだろォけど、もう保身ァしないって言ったしなァ俺。

……逆に。

飛ばさなくても、いいンじゃねェか？

飛ばそうと思うから――おかしくなるンだ。

死の魔力を纏う事自体ァ特に負担ァ無い。まァこれに触れた所で【即死】させられるほどの濃度じゃねェんだけど、死ァ死だ。

いや、もっとか。

纏う必要ァない。だって俺精神体だし。

だから――自分の体内に入った腕だの足だのを死に浸けるだけで、十分なンじゃねェか。

いやいや。

またそォやって楽な方向に。

ちったァ頑張れよ、俺。

「……あるいァ、式鬼とかか？」

試す。

魔力で水に文字を書く。

「ＳＵＮＡＷＯ ＡＴＳＵＭＥＴＥ ＭＡＩＯＤＯＲＥ」

――ふむ。

反応なし。やっぱり着物狐が特別なンだな。

さて。

「無策で行って失敗したばっかだけど――性懲りもなく、行きますか」

だって考え付かねェんだもん。

馬鹿の考え休むに似たりってな、俺ァ馬鹿の自覚あっからよ。休んでる暇あったら行動だ行動。

あっちの氷山の真下、だったな。

行ってみようじゃねェの。さてはて、どンなオリジンがいるンだか。

話が通じるヤツだといいなァ。

通じなかった。

「ちょ――ちょっと待て、待てよ。何も殺しに来たとかそォいうワケじゃねェんだ、話くらい聞いてくれよ！」

「黙れ、夜の使徒め。どのような手段で現界しているのかは知らぬが、どのような手段であってもろくなものではあるまい。消えろ。殺せぬことは知っている。故、立ち去れ。去らぬのであれば、その身を永遠の氷の中に閉じ込めてやる」

「なンだよ、夜の使徒差別かよ！　いーだろ別にいても！　何も害ァ無ェよ、悪い夜の使徒じゃねェよ俺ァ！」

「害が無かろうと、悪しくなかろうと、死の匂いは気に障る。帰れ。何ぞ用があるのだとしても、他を当たれ。こちらは今気が立っている」

でけェ蛇……だ。犬の頭の。

ウミヘビ、になンのかね。けど、その威圧感ァ半端じゃねェ。見るからに、明らかにオリジンって感じの魔物。

ただなンか相当お怒りモードだったらしい。タイミングが悪かった。

こりゃ出直すべきか。

さっきから飛んでくる氷の礫ァ俺の身体を潰して穿って貫きまくってンだけど、まァダメージァ無い。

単純にその嵐みてェな攻撃のせいで話し合いにならねェってだけだ。いんやさ、どォそうたモンかね。

「あァよ、一応名前聞いてもいいか！　俺ァ梓・ライラックっつーモンだ。ワケあってオリジンに助力願ってる！」

「そうか。こちらはクトウという。それでは去れ」
「ん―話が一切通じねェのァ久しぶりだ！　けど自己紹介ァありがとよ！　んで、どーしても無理か！」
「無理だ。他を当たれ」
「んじゃ他のオリジンの居場所教えてくれよ！　そこ行くからさ！」
氷の礫が止む。
ふゥ。
いや別に痛くもないンだけど、身体が物切れになったり顔面ぶっ潰れるのァ普通に怖いって。
「ここから更に北の海底に、大きな洞窟がある。そこになら、お前の力となれる者もいるだろう。だから去れ。疾く去れ」
「わーった、わーったよ。邪魔して悪かったな。んで情報ありがとさん！」
「――此方の気が落ち着いたら、訪れると良い。今は無理だ。さらばだ、夜の使徒」
「あァよ、元気でなクトウ！」
そそくさと去る。

こえーって。でも悪い奴でァないっぽいな。
今ァマジでタイミングが悪かったって感じか。なンかあったンだろうな。友達が死んだとか、そォいうちょいと死に敏感になっちまうよォな出来事が。
ふゥ。
で、ええと。
北の洞窟、だっけ？
……そこにァ話の通じる奴がいると助かるンだけど。

通じなかった。
「――皆、早く逃げろ！　……何をしに来た、夜の使徒。ここに死者はいない。これより死にゆく者もいない。お前の求めるモノなど何も無い。故に、去れ」
「いんやさ、別に死者もこれから死ぬモンも求めてないンだが」
「ならば――私か」
海夜叉って奴かね。

大きく反ったでっけェ刀を持った夜叉だ。それが、鋭い眼光で俺を睨んでいる。背後にァいくらかの魔物。オリジンのくせに、っつーとアレだけど、家族がいるンだなァ。

そンで――俺ァ、歓迎されてませんよ、って。

うーん。

「なァ、なンでそんなに俺を嫌う？」

「嫌っているわけではない。――だが、現世に現れぬはずの夜の使徒が現れ、世界より魔力が消えつつある――それは、終わりを意味する。私達はただ今を必死に生きているだけだ。その先に死があるのだとしても、今の堆積を失うわけにはいかない。夜の使徒よ、そうも死を纏う精神体よ。――お前の存在は、私達を酷く刺激する。もしお前に良心というものがあるのであれば、ここから立ち去ってほしい。今、この世界に生きる同胞はすべて、気を立てている。それを理解しろ」

「……あー、じゃァ、他にオリジンのいそォな場所教えてくれねェか。海ン中じゃなくてもいい」

「……東に、幾つかの島の重なった群島がある。そこに、比較的穏やかな気性を持

つ者がいた覚えがある」
「あァ、ありがとよ。ちなみに名前ァ聞けねェか？　あァ、そいつのじゃなくて、アンタの」
「マフクだ」
「ありがとよ。俺ァ梓だ」
「そうか」
ここも、ダメか。
でも名前ァ教えてくれるンだな。
なんつーか、魔物ってもっと獣獣してると思ってたけど。
セイタスやラハブだけじゃねェ、どいつもこいつも、なんぞ律儀っつーか。
あの戦いの際に声かけてきた奴も一応礼儀ァあったし。
なんか。
「……群島ね。んで、比較的穏やか、ね。そりゃ、なんつーか」
また話ァ通じそォにねェなァ、って。

案の定だった。
「夜の使徒か……全く、次から次へと……」
「もう、面倒だわ。全部枯らしてしまうのはどう？」
「それをすると、周囲の木々にまで被害が出る」
3人……でいいのかね。
ヒトガタの魔物。天女みてェな格好。あれだ、竜宮城にいそォな感じの奴。それが、3人。
「あー、アンタら、不躾で悪いがね、名前教えてくれるか」
「魅」
「罰」
「跋」
「おォすげェな。姉妹か。俺ァ梓・ライラックってンだけどよ、ちょいと協力者を探してて――」
答えァ、熱射だった。

……なンじゃいそりゃ。

レーザービーム？　ハイテクが過ぎる。ンなちっちぇェ鏡三つ合わせたところで出せるモンじゃねェだろ。

「帰って……もう、疲れた……」

「貴女に恨みはないんだけど、消えて頂戴。普段なら少しは話を聞いてあげられたかもしれないけれど、今は無理なのよね。面倒だから溶けてくれないかしら」

「夜の使徒。貴女が現れたという事は、やはりそういうことなのかな」

「何がそォいうことなンだ。いや全く俺ァ何にも知らねェんでよ、教えてくれねェか。なンでアンタら。いや、アンタらだけじゃねェ。この辺にいるオリジンみんなに声かけてきてンだけどよ、全員が全員門前払いだ。気が立ってるから今ァ無理、ってな。だから、理由を教えてくれよ」

「夜の使徒に……話すことは、ない……」

また熱線。熱風。

これァダメだな。一旦離れて考え直すべきか。

「……じゃァよ、アンタらの知ってる中で、一番穏やかなオリジン。そいつの居場

所を教えてくれ」
「……」
「……」
「それなら、あっち。あっちにある島の密林の中に、スーグとシュジという一対のオリジンがいる。彼女らなら、きっと話を聞いてくれるはず」
「あァさ、ありがとな。んで、迷惑かけて悪かった。達者でな」
ふゥ。
島を去る。
なンだかなァ。
多分だけど、なンかあったンだろうな。それで、よォやっとそれを排除したってのに、そこに夜の使徒がのこのこやってきて……みてェな。
そいつが何なのか知らねェけど、迷惑な話だ。
「で、密林か。……ちょいと恐竜島を思い出すな」
さて、はて。
今度こそ——ゆったり喋ってくれる奴だといいンだけど。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

――燃えていた。青く、青く。
密林が、その木々が、すべて。
「……夜の使徒？　くそ、こんな時に……」
「あァ待て待て。俺に害意ァ無い。それよか、なンでここァ燃えてンだ。敵襲か？」
それァ、でけェ虎だった。
長い尾の虎。けどなんつーか、理知的？　すげェ凛々しい顔してる。魔物の美醜なんざわかんねェけど、イケメンって感じ。でも魔物だから雌なンだろうな。麗人、みてェな？
「……まぁ、良いだろう。そうだ。最近各地を荒らしまわっている魔物がこの島にもやってきた。それは木々に火を放ち、我らを攻撃してきた。今はその対処に追われている。火も消さねばならないというのに……」

「アンタ、名は？　シュジか？　スーグか？」
「シュジだ。……バツの3位から聞いたのだな」
「あァよ。俺ァ梓・ライラックだ。で早速なンだが、その敵の位置ってなわかるか？　俺がどォにかするからよ、アンタら火消しに尽力しな」
まァ殺せるかどォかってなおいといて。
相変わらずうまく使えねェ念動力で水をどォにかするより、敵ってなをどォにかする方が俺にァ合ってるだろ。
「……今は、スーグが奴と戦っている。島の中心に高い樹木があるのが見えるか？」
「あァ。あれの上か？」
「そうだ」
緊急事態だろォに、こっちを夜の使徒だと認めて、ちゃんと喋ってくれる存在。
こいつを逃すわけにゃいかねェ。
なンで、どこのどいつか知らねェけど――ちょいと黙ってもらおう。
空へ上がる。

うわァ、ひでェ。
森の大部分が燃えてやがる。この青々とした炎ァ見ててまだ慣れねェけど、無い肌に感じる熱量がその悲惨さを物語っている。
で、上だったな。
樹上。
中心のでっけェ木の――上。
いた。
シュジと同じくらい大きく、似たような虎の姿に長い尾。なるほど、一対ってなホントらしい。
違うのァ色合いか。シュジァ白と黄色のザ・虎って感じだったけど、こっちァ結構カラフルだ。
んで――それに敵対してンのァ。
「――いんやさ」
急行し――その間に入る。
立ちはだかる。

あァさ、ちィとァ予見してたよ。
火って聞いた時点で、もしや、ってさ。
「何やってンだよ」
「――ク」
そこに、いた。
いつものよォな着物姿は破れに破れ、その獣の手足を晒し、幾本もの尾を展開した――女性。
「着物狐」
全身に炎を侍らせる大妖怪が、そこにいた。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

82・韻地迂員泥具羅須爛土・

「夜の使徒――」
「あァ待て待て。俺ァ梓・ライラックってモンでよ。森ン中にいたシュジから話ァ聞いてる。俺ァコイツをやっつけにきたンだ」
「……どうやら、嘘はないらしい」
「あァよ」
シュジを随分信用してるみてェだな。
まァそォいうのァ後にして。
向き直る。
「よォ、着物狐。何やってンだよ」
「ク――ククク」
「あン？」
……様子がおかしい。
あれか？　宙の莽で、なンかされたか？

「……スーグ。密林の火消に回ってくれ。コイツァ俺が責任を持って止める」
「いいだろう。任せたぞ、ライラック」
ヘェ。夜の使徒、じゃなく。
すぐに名前でよんでくれンのか。そりゃいいね。よォやく良い奴に出会えた。
樹を飛び降りるスーグ。
それに向かって炎を飛ばす着物狐。――まァ、させねェよ。その程度の魔力なら、この希釈された死の魔力でも掻き消せる。
あァ。
どォやら正気じゃねェと見た。
「俺が分かるか？」
「ク――先ほどから、随分と馴れ馴れしい夜の使徒――それ以外に何かあるか」
「あァそォかい。記憶が奪われちまってると」
疑似【槌憶】か。
そりゃ厄介なことで。
あァ、魔煙草が恋しい。

「お前さん、名前ァ？」
「ジャカン」
「……あン？」
ん。
誰だ、それ。
「ナリコ、じゃねェのか」
「誰だ、それは」
「あー」
……似てるが、別人……別物ってことか？
そォいや確かに、着物狐って火を扱いァするけど、こォも大炎上ァさせねェんだよな。なんでってアイツが火に弱ェから。
こォまで燃えてると、自分の身代わりや式鬼にも燃え移っちまって、アイツの力ってな半減も良い所だ。
疑似【槌憶】で記憶を奪われて暴走している、とかじゃなく。
マジに別の狐の魔物か。

と、なると。
「あァ、すまねェ。勘違いだったみてェだ。俺ァ梓・ライラックってモンでよ。ちょいと俺の目的に邪魔なンで、この辺荒らすのやめてくんねェか？」
「ククク――従う必要性を感じぬな。たかだか夜の使徒一匹に、儂がどうして退かなければならぬというのか」
「あァそォかい。んじゃ、ちょいと殺し合おうか。魔物らしく、生存を賭けてよ」
はン。
いいよ、それで。
我が生き、強くなるために。
貴女の命を奪おう。――って。セイタスの記憶が、まだ残ってンなァ。
「たかだか精神体に、何ができる？」
「たかだか精神体だからよ。――例えば、お前の中に入る事もできるのさ」
「――」
豪炎。
立ち昇る青が、全身を焼き尽くす。

けどそれ以上のレーザーくらっても平気だったしなァ。いんやさ、精神体サマサマってことで。

突っ込む。

時に、愚策で愚直な作戦こそが功を奏す事もある。

今がまさにそれだ。

見るからに素早そうだからな。

相手が目晦まし放ってくれたンだ、便乗するしかねェってな。

「ッ、いねェ!?」

「ククク……甘いわ」

炎を突き抜けた先。

そこには、いるはずのジャカンがいない。そしてその声ァ真上から聞こえた。

真上。

きらりと光る——鋭い尾。

その切っ先が、上から下まで、俺を串刺しにする。

「ほう？」

「――あっぶねェな、オイ！」
「ククク――精神体故にと、油断していたとばかり思っていたのだがな。存外、聡いものだ」
串刺しにァならなかった。既の事で避けたから。
その尾にァ、多分な量の魔力が込められていて。
――その魔力ァ、俺の死の魔力と似た――メラメラと燃える魔力。
アレ、ダメだ。当たったら――内側から燃やされる。
そォだった。
精神体ってな、遠隔魔法少女なら普通に対応できる魔物だ。
だから――もし、相手がそれに類するモンを使うンなら。
俺ァちゃんと避けねェと、普通に殺される。
「ハ――ハハハ！」
「ククク、どうした。恐怖でおかしくなったか？」
「いや、いんやさ！　ありがとうよジャカン！　そォだ――足りなかったモンァこれだ！」

沸々と煮え上がるものがある。
ぐらぐらと煮えたぎるモノがある。
俺にずっと付き纏っていたもの。魔法少女だった時ァ、常に近くにあって、それを必死で避けていた。そうだ。そォさ。俺ァ――死にたくなかったし、殺されたくなかったし、奪われたくなかったし。
そうだ。そうさ！
これだよ。
俺ァこォじゃねェと――ハハ、乗れねェんだ。
久方ぶりにさ。
調子にさ、乗りてェだろ。なァ。
しんみりもしっとりも俺にァ合わねェよ。笑え、笑え笑え。
「――すまねェ、ゴミみてェな心持ちで臨んでた。もう殺せねェって、ハハ、馬鹿みてェだよな。何上から目線で言ってンだよ。どォせそんな魔法ァ持ってねェんだから――ハハハハハ！」
「ク、笑うか。死を前にして。夜の使徒――邂逅は初だが、全てがこのような狂気

に苛まれているのか？」
「馬鹿が。今から死合うンだぜ？　笑わなきゃダメだろ。じゃねェと、互いの手向けになンねェからよ！」
ぐ、と。
それを掴む。
何も無い虚空。
そこにできた罅に手を突き入れて――引き出す。
「……それは、なんだ」
「なんだろうな。俺にもわからねェ。ただ、使い方ァわかる」
色ァ黒。中心に骨のような白が入っている、蛇行剣。
マッドチビ先生に作ってもらった大剣でも小剣でもねェ。勿論義手のダガーでもねェ。いつ入れたかなんざわからねェそれァ、けれど確かに引き出した。
俺の亜空間ポケット。
レーテーを解さぬ、俺が開いた亜空間の中にあったモンだ。
「銘を、苦理主（クリス）――俺が持つべきじゃねェ、ただ苦痛を与えることだけを目的とし

た武器さ。ハハハ――俺が一番嫌いな武器だ。殺すためでなく、勝つためでなく！　傷をつけるためだけの武器だ」

「何が楽しいのかは理解できぬが、いいだろう。ちと、相手をしてやる。お前を殺した後、あの2匹も仕留めよう」

クリスを構える。

手になじむ剣だ。同時に――あァ、これァ、俺の剣だってわかる。

俺のエゴの結晶だ。殺したくない。けど殺されたくない。だから――もォ立ち上がれねェよォに、痛めつけるためだけの剣。ハハ。ハハハ。

こんな残酷なモンが、俺の本質か。

いいね。

いいじゃねェか、そりゃ。

飛んできた炎の弾を切り裂く。

薄いが、死の魔力ァ浸してある。わかってる。これじゃァ本命ァ切り裂けねェ。で、それがなンだ。

生身であった頃に、ンなこと一回でも恐れたか。

逆袈裟に切り上げる。
それァジャカンに届くことァなく、けれど飛び散った死飛沫が彼女の尾の先、その毛先を掠め――殺した。
はは。ハハハ。
それもちゃんと機能するンだな。
いーよ。
もう、知らねェ。【即死】も【死漸】もねェのにンでか使えるコレを。
俺の運命とかいう、意味の分からねェもんを。
存分に使ってやらァ。
――右から尾が来る。魔力の籠ったドリルみてェな尾。
知らねェ。
そのまま突っ込んで、斬る。
「クク、流石は夜の使徒だ。死者であるが故に、死を恐れないか」
「あン？　馬鹿言え、死ァこえーよ。死にたかねェよ。けどそれァ、俺が死を恐れる理由にァならねェ」

「言っている事が無茶苦茶だな。自覚も無いと見える」
「ハハ、うるせェな。死ぬからなンだよ。死が怖ェンならとっとと逃げてるよ。死にたかねェンなら空でも飛んでこんな島見捨ててるよ。――馬鹿が、俺ァやんなきゃなんねェことがごまんとあるンだ。てめェ程度怖がってられるかよ」
そォさ。
構ってられねェんだよ。折角話の通じそうな奴ら見つけたってのによ。着物狐なンじゃねェかってちょっと期待したのによ。
ハハ。
八つ当たり結構。
俺に正当性なんざ期待すンじゃねェよ、正義も大義もねェんだよ。
初めからずゥっと言ってるだろ。
俺が嫌だから、嫌なンだよ。
炎纏う前足をクリスで受け止める。
剣を素早く引けば――そこに傷ができる。外皮を切り裂くァ死の魔力。肉を切り裂くァ波打つ剣。

それを振るうァ夜の使徒――生者に仇為す死者。禁忌たる存在さ。
「いいぞ――良くなった。その目は、良い。追い払うなどでなく、撃退するなどでなく――それは、傷つける者の目だ。それならば、儂のやる気もでるというもの」
「あァよ、なんだってこの辺を荒らしてやがんだ、てめェ。そのやる気が関係あンのか？」
「答える義理はないが――いいだろう。ククク、何、単純なコト。オリジン――儂らはそう呼ばれている。なれば、それらが食い合えば。細々とした小さきもの達が輪廻を繰り返すよりも速く、その頂きに辿り着ける。そうは思わぬか？」
「だからオリジンのいるとこに仕掛けまくって、結局撃退されてンのか」
「ククク、何、仕掛けはもう終わっている。――お前を殺し、スーグとシュジを食らい――再度あれらの元を訪れたのなら、最期。仕込んだ火種は燃え上がり、奴らは儂の餌となろう」
「あー、そりゃ残念だ。まず第一目標が達成できねェ。――俺ァ殺せねェよ」
斬りかかる。
技術なんざ欠片もねェ。ＬＯＧＯＳの中でちっとお嬢に手解きうけたくらいだ。

そんなンじゃどォにもならねェこた知ってるよ。
「クク、幼稚、幼稚。儂を捉えるには千は早かろう」
「承知の上！」
斬り上げる。届いてすらいねェのを、死飛沫使って届かせる。
それァけれど火に阻まれ、雲散霧消。そこに突っ込んで、今度ァ突き。柄を右手で掴んで、左手のひらでグイと押し込む。
避けられ、反撃される事を見越して、右足を上げてのバックハンドスプリング。
それァ確実にジャカンの腕を捉えるが、そんだけじゃ意味ねェ。俺の足が負けちまう。
だから、流す。
右腕の中から右足の先に向かって、クリスを流して、突き出す。
その切っ先がジャカンの鋭い爪の一本を斬り落とした。ケ、爪切りにしちゃ物騒だがな。
「ッ！」
退いたジャカンに、追撃。左足で踏み込んでの回し蹴り。無論、打撃する方の足

にクリスを流し、リーチも伸ばす。死飛沫が飛び散り、それを受けた尾のいくつかがぐったりする。……死ンじゃいねェが、体力ァ削れてるな。

「ク――精神体の癖に、妙な戦い方をするものよ。まるで、太陽の使徒を相手にしているかのようだ」

「ヘェ？　したことあンのか」

「ククク、昔な」

「ちなみに聞くンだがよ、そいつの名ってなわかるか？」

クリスを右手に戻す。

いいね、体内を自在に動かせるのァでけェ。

やろォと思えば目ん玉とかからも突き出せるなこりゃ。まァ目ん玉なんざないンだけど。

「ククク、確か――アールレイデ、と。そう名乗っていたか」

「――ヘェ」

さっき斬り落としたジャカンの爪。

……ふむ。

良い形状だ。
「そりゃ、いいね。ちなみに速かったか？　それとも重かったか？」
「どちらでもない。ク、すぐに食い殺した故、どうであったかなど覚えてはおらぬ。……時に、何故儂の爪をしゃぶっている？」
「ン。あァ、なんぞ吸いやすい形状してたンでよ。最近ずっと口が寂しかったンだ」
「成程、夜の使徒とはこうも狂っているのか」
吸う。
……まァ、味ァ魔煙草にァ全く似てねェけど。
多少の魔力が籠ってる。いいじゃん、代わりになるじゃん。じゃんじゃん。
ま、一旦飲み込むか。吸うにしても後でだな。
「ん、てこたよ、ジャカン。アンタ結構長生きなのか？」
「ククク、そうなるな。千は越えようぞ」
「へェ。いいね。ちなみに俺ァ14だ。もうすぐな」
「――幼子も幼子か。夜の使徒に年齢など、何の意味があるのかわからぬが」
「そりゃ確かにそォだ」

死者の年齢なんざ、どーだっていいか。
「で？　どォだ、ジャカン。一応聞くけど――退く気にァ、ならねェか」
「ククク、なんだその問いは。まるで退いてほしいと――そう言っているように聞こえるぞ」
「そォ言ってンだわ。平和に行こうぜ。アンタがこの辺荒らすのやめたら、俺もやりてェことできンだよ」
「そういうのであれば、その剣をしまうがいい。死の浸された剣をしまい、その身を儂の前に献上せよ。さすれば退いてやろう」
「注文が多いなァ。まァその注文ァ受けられねェんだけどさ。さて、じゃあ」
クリスを上段に構え――踏み込む。
振り下ろす。
剣道も学生の時やったはずなンだがね。ぜーんぶ忘れてら。
ハハ、で。
どォだよ。クリスを受け止めて。
「――囮か」

「まァなァ」
「然り」
その尻尾、全部を。
シュジに噛み千切られた――その感想ァ。

遠《ｔｅｘｔ･s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

ジャカンは、ク、ククと。
流石に弱弱しくなった足取りで、しっかりと距離を取る。
流れ出でる血液ァすさまじい。この樹上を赤で染め上げて行く。
俺如きの攻撃じゃねェ、オリジン同士のぶつかり合いで、完全なる不意打ちだ。
そのダメージってな、計り知れねェだろ。
「ク……成程、火を、消し終わったか」
「これほどに十分な時間があるのならば、我らで海水を運ぶ程度ワケは無い。ライラック。後は我らに任せよ。これなる侵入者、我ら一対でどうとでもなる」

「あー。……そォしたいのァ山々なンだがよ」
「来たぞ、シュジ。そして、ライラック。……ふむ。形勢は逆転しているらしい」
気が付けば、火ァ消えていた。
まァ消えてるの気付いたからあンな大仰な踏み込みで斬りに行ったンだけど。絶対どっかでどっちかが隙窺ってるだろォって読みでな。
それァ大正解で、来なかった方のスーグも現れた、と。
もォ無理だ。
俺らを相手すンのァ、無理。それくらいァわかるンだろう。わかってるンだろう。けど——ジャカンは、笑う。
あァ。そうかい。死地にて笑うか。
「ククク——良い。これほどの傷を負ったのはいつぶりか。良い、良い。——ククク、この場で今、儂を最も理解しているのは、皮肉なことに夜の使徒のみか」
「何？」
「スーグ、気を付けろ」
「……」

さっき体内にしまったジャカンの爪を排出し、また口に入れる。
でも、吸うンじゃなくて。
――噛み砕く。
「死にてェか」
「ク。……無論、死にたくはない。だが――ここで逃げて、何になる。儂の目的はもう果たされん。ならば次に託すべきだ。そうだろう？」
「……あァ」
バリボリと、歯も無ェ口で爪を噛み砕く。食らっていく。
魔力素の結合が失われたその爪ァ体内で解けて、俺の一部になる。
セイタスと、同じ。
「シュジ。スーグ。すまねェ。アンタらにァアンタらの都合があると思うし、恨みつらみもあンだろうけど――ここァ俺にやらせてくれねェか」
「……だが」
「良い。シュジ、我らは下がろう。そして、ライラック」
「ん」

「――慈悲とは、我らにおいて、最も無駄な感情と知れ」
「あァ。この前知ったよ」
なら、いいと。
シュジとスーグァ、下がって行く。見守っていてァくれるンだろォ位置で、けれど手を出さない位置で。
ハハ。
もうわかってるよ。
もうわかってンのさ。
もう――ちゃんと、理解してる。
「――島から追い出すために。棲み処を燃やされた復讐のために。縄張りを荒らされたがために。――そんな理由で殺されちゃ、お前の理想ァ果たせねェよな」
「是」
「1つ、聞いておくぜ」
「何だ、梓」
名前。

……あァ。それでいい。

「お前の中で、一番美味い場所ってな――どこだと思う？」

「――ク。良い。良い。――それは、この喉だ。数多の血を飲み干した喉。数多の血肉が此処を通った。数多の悲鳴を食い破った。風の使徒も、太陽の使徒も。――故にこの喉こそは、儂の中で格別の味を誇ろう。次点は尾であったが――今はこの通り故な」

「そォかい。ま、安心しな。全部食うよ。千切れかけの尾も、腹も、頭も。残さず食う。んで、最後の最後に喉を食ってやる。それで、いいな」

「良いだろう」

魔物の摂理において、敵を殺す理由に足るのは――食事か、自らが強くなるため。ただそれだけだと、俺ァセイタスに習った。

だから。

俺ァ俺の目的のため、なンかじゃなく。

俺が前に進むために、前にいるお前を食うよ。

「改めて名乗ろう。儂はジャカン――数千年と前に昏き森の中にある高塔で生まれ

出でた、狐が一匹。５００年前に何者かより余計なものを賜り――故に、その悲願を為さんとするものなり」

「改めて名乗るぜ。俺ァ梓・ライラック。夜の使徒にして、元太陽の使徒。現風の使徒。天幕の向こう側でふんぞり返ってる神を討たんとする――世界を殺す者だ」

視界に銀が映る。

――取り戻したか。ずっとぼんやりしてた俺の身体に、ちょっとだけ。

俺の要素が、戻って来た。

「じゃあな、ジャカン！　勝負ァ一瞬だ。痛みも苦しみも無く、ただ安らかに死ね――褪戦死遠（即死）！」

「――!!」

世界言語による魔法の行使。

全身をカチ割るよォな痛みの最中――クリスの剣先に触れたジャカンが、何かを言ったのが見えた。

ああ、わかってる。

「座頭伊豆能登阿出内或（それは否定ではなく）・佚能登沙米紫遠・椅子伊豆邪止座頭伏霊矢不応身塔意図（それは救いでもなく、ただこれは、私が食事をするそのためだけの祈り）・」

もう死んだ。ジャカンは死んだ。
世界言語による【即死】によって、苦痛なく死んだ。だから、わざわざこれを言う必要なンて無い。
無いけど。
無いからこそ、人ァ言うんだ。
「解体徒（いただきます）」
手を合わせ、祈りを捧げる。
そしてその身を口にした。愚直に、愚昧に、愚蒙に。
獣の様に、その身を食う。
千切れかけた尾も、腹も、背も頭も、――その喉も。
致命的な罅の入った俺を繋ぎ止めるために。俺が更に、強くなるために。俺が――その頂へ、近付くために。
生きるために殺し、生きるために食す。
――すまねェな、ヨウキ。アンタ、また世に出てくるかもしれねェわ。
俺ァ。

黙々と、その身の全てを食らい尽くした。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.２》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「……我儘言って悪かったな。ホントァあんたらのが溜まってるモンもあっただろォに」

「いや、良い。……生きるために食べる。それは、我らが久しく忘れていた感情だ」

「然り。……我らはもう、食さずとも良い所まで来てしまった。頂きの果てに輪廻からの解放を目指す。その目的さえも、薄れていた。――ライラック。お前も、そしてジャカンも。我らにとって良い刺激になったよ」

1対の虎。尾の長い虎。

ちなみに普通にかなりでけェんで、結構威圧感ある。

「話があるのだったな」

「ン。まァあるけど、いいのか？　森を見て回る、とかしなくて」

「良い。森とは強いものだ。我らが手を加えずとも、自ずと蘇る」

「そぉかい」
　ちなみに声も話し方もそっくりなンで目ェ瞑ってたらどっちが喋ってるかわかんねェ。
　まァ落ち着いてる方がスーグで、ちょっぴり短気なのがシュジって感じかね。
「さっきの聞いてたかもしれねェけど、実ァ俺って元魔法少女……太陽の使徒なンだわ。まァガワだけで、中身ァこの通り夜の使徒なンだけど」
「そうだな。そして風の使徒でもある」
「まァそういうこって。んで、なンでこーなったかってーと、天幕の向こう側で肉体を奪われちまってな。シエナ――少し前にあったでけェ国の王がいてよ、ソイツに精神だけ弾き出されて、肉体使われちまってンのよ」
「ふむ」
「……ほう？」
「まァそンだけなら俺ァ別に躍起になったりしねェんだけど、やべェことにそいつらってな新しい世界を創り出そうとしてる。この世界がもう限界なのァわかってるよな？」

「ああ。毎日のように聞こえてくる悲鳴。もう死にたい、眠りたいと。その悲痛な叫び声は聞こえている」
「なんとかしてやりたい、という気持ちはあるが……」
「んでまァ、そいつらがよ。新しい世界の肉体作って、心を作ったンだ。後ァこの世界の精神引っこ抜いて、そっちの世界に詰め込めば完成。今魔力が減りまくってンのァ多分そのせいでさ。始の点から吸いだされてンだと思う」
　恒常的に穴開いてンのあそこだけだからな。
　俺が神さんに頼んで開けた奴とかァ、すぐに閉じちまうだろォし。
「するとどーなるかってーと、こっちの世界ァ魔の巣食った肉体と、それを苦しむ心だけが取り残され――滅ぶ。俺ァそれを止めたい。阻みたい」
「成程。筋は通っている。だが、そうだとして、先ほどジャカンに言い放っていた〝世界を殺す者〟、というのはどういう意味だ？」
「あァ。俺の元々の魔法ァ【死漸】っつってよ。延命されたモンとかを死なせる魔法なンだ。まァ他のもの含まれてるけど、そォいう魔法でさ。それを使って、世界を殺す気だった。あいつら……天幕の向こう側でふんぞり返ってる奴らァそれを阻

むために俺の身体を奪ったンじゃねェかって睨んでるけど、まァそこァよくわからん」

「世界を殺す。それは、精神が抜き取られ、滅ぶ事と変わりはあるのか？」

「ある。太陽の使徒も、風の使徒も、勿論夜の使徒も。――この世界で生まれなくなる。今、馬鹿みてェに増え続けてる太陽の使徒も。輪廻の呪縛から逃れるために、数を増やして試行を繰り返してる風の使徒も。――この世界から、消えてなくなる。まァすぐに、じゃねェ。今後生まれなくなるってだけだ。だからまァ、今を生きてるアンタらや他の魔物ァそのまんまだし、それァ太陽の使徒も同じ。そこの争いばっかりァ俺の関与できるとこじゃねェ」

記憶の無い紺碧ベルトにも言った事だけど。

そこの生存競争にまで口を出す程俺ァ手広くねェ。

「――して、我らに何を求める」

「戦力だ。俺1人じゃどー頑張っても天幕の向こうの奴らにァ敵わねェ。だから、力が欲しい。仲間が欲しい。滅ぼされんとしているこの世界を守る仲間が」

魔物に助力を乞う、なんざ。

昔の俺なら考えられなかったことだ。
此処にいる奴らだけじゃねェ、ルルゥ・ガルにも乞いてェとこではあるンだが、アイツと話してると軽口から煽り合いになるのがちょいとな。
「お前の考えはわかった。世界の滅び。それは確かに、我らの思う所でもない」
「何が足りねェ？」
「真実」
……まァ、そォだよな。
世界が滅びてるンで力貸してくれ、なンて。
妄言にも程がある。実際鬼教官にもそォ言われたし。
「んじゃ、いーや。他を当たる。この辺りのオリジンを教えてくれ。頷いてくれる奴が現れるまで当たってまわるからよ」
「待て、早合点をするな。何も協力しないとは言っていないだろう」
「ライラック。お前の話には真実が足りない。だが同時に、お前が本気であることは伝わる。お前が元太陽の使徒であるということも信じよう。お前が夜の使徒でありながらこの世にいて、それが害とならぬことも信じよう。ジャカンとのやり取り

を通じて、お前が風の使徒であるという事も理解した。故に」
スーグとシュジは――言う。
「強くなれ、ライラック。我らをも従える程に。有無を言わさず、お前の進む道を我らが信じ、ついていけるように。オリジンとされる我らの頭となれ」
「……そりゃ、アンタらと殺し合いをしろ、って？」
「方法は任せる。聞けば、その≪敵≫なるものは、どうしてか、未だ世界の精神というものを抜いていない。何か邪魔が入ったか、何か不都合があったのだろう。それが猶予である」
「世界の魔力が完全に吸い出される前に、お前が魔の王となれ。お前が前を行き、その後ろは我らが彩ろう。そのためならばどんなことをするのも構わない。強くなるために、生きるために。我らと構え、食い合うのも良いだろう」
「……あのな。俺ァ仲間が欲しいつってンだよ。するわけねェだろ」
「ならばそれ以外の方法を考えろ。もっとも近道であるそれを避け、もっとも短期間で、我らの目指す頂きへ足を掛けろ」
……あァ。

クソ。それが、そォか。
一番強い奴が一番偉い。勝ったやつが偉くて強い。
それが摂理なのァ――魔法少女より魔物の方が生物らしい、ってのにも、合致する。
よォァサル山の大将になれってこったろ。
いいよ。
やってやる。
「わかった。――他の奴らに話ってなつけといてくれンのか？」
「周辺域であれば、いいだろう。ここより遠く離れた者は無理だが」
「しかし、それらが従うかどうかもお前次第だ。強くなれ。諦めるな。――お前が諦めた時、お前に託した我らも大人しく滅びよう。恨みはしない。憎みもしない。それを運命として受け入れよう」
――あァ。
言っちゃいけねェこと言ったな、オイ。
「シュジ。お前、生まれてから幾つだ」

「なんだ、唐突に……」
「我もシュジも六千程だ」
「オリジンってな、普通どンくらい生きるンだ？　万ァ軽いのか」
「種にもよるが、基本的に寿命らしい寿命は無いと言っていい」
「つまり――そこで死ぬのァ、若死にだな？」
「……まぁ、言い方に疑問はあるが、そうなるな」
OKだ。
運命ね。
いいよ。
心の底から殺したい相手だよ、ソイツ。
「強くなるために。生きるために。――俺ァもう、迷わねェよ」
セイタス。
そして、ジャカン。お前らの血肉ァ受け継いだ。全部俺のモンにした。
もっと、もっとだ。
もっと――食らわなきゃならねェ。

「んじゃ手始めに、ジョームンガンダーとかいうのと戦ってくるかね」
「それはやめておけ」
「まだ早い」
なンだよ。
そんなにやべーのかよ、ソイツ。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

7. Such tech will end night more none.

83. 韻地出伏須負不地泥伏不俺止.

生きるために食う。
強くなるために食う。
殺すのと何が違うのかって哲学を説かれりゃ、それを糧にしているかどォかの違いって答えるよ。前の俺ならそォ答えるのァ無理だったし、なんなら問う側だったけど――いんやさ、食事と殺しァ違わァな。
無論、食われる側だって抵抗する。食い返す奴だっているンだろう。
化け物。魔物。
いんやさ、生物の摂理だ。獣の摂理。
この世界じゃ人間でさえそォだ。EDENの下……じゃねェか。まァあの国ァ守

られちゃいるが、そォじゃねェのァ普通に魔物と戦ってる。魔法を持たねェ軍人ァ震える手で武器握って、食われねェために戦ってる。

殺す。

食い殺す。

あァさ――幸いにして、っつーべきか。

俺ァちゃんと、強くなるために、生きるために、生き残るために【即死】を使ってた。魔物を殺すときァ全部そうだった。そればっかりァ幸いで、だからこそ、やっぱり仲間にそれを使うのァ違ェって再認識できた。

「私はアダンシー。お前は!?」

「梓。お前を食うモンだ」

「いいだろう！　受けて立つ！」

世界にいる魔物ってな、勿論オリジンだけじゃねェ。小型中型大型といろんなのがいて、色んな能力をもってて。まァ魔力扱えるのァ相当高位だけど、モォルとかスネイク種みてェに自分の長所を活かすのがいっぱいいて。

戦い続けた。

食い続けた。

多分、魔法少女やってた頃よりァ、死の危険が少ないンだろう。魔力攻撃してくる奴ァ少ないから、ジャカンの時に感じた見てェなクる感じが無い。

でもそれァ、俺側だけ。

相手が。魔物達が、それを感じてンのが——ひしひしと伝わってくる。

負ければ死。勝たば生。廻るからつって記憶が受け継がれるワケじゃねェ奴らは、一個しかねェ命背負って、けど強さを、上を、頂きを求めている。

すげェンだ。その覚悟ァ、どこまでも——強い。

番のいる奴。子供のいるヤツ。ラハブみてェに世界を巡ってる最中だっていう奴もいたし、何千年と代替わりしながらその縄張りを守ってるって奴もいた。

でもみんな。

——飽いたり、疲れたり、意欲的だったり好戦的だったりしながら——死を覚悟している。

恐怖はあるんだ。怖いって、やべェって。クリスを出した瞬間に怯えを見せる奴もいる。それでも、それでも、それでも。

逃げるし避けるし隠れるし、騙すし集まるしおびき寄せる。それでも、それでも、それでも。

それでも、だ。

「アダンシー！　アンタを食らって俺ァ先に行く！　――言葉はあるか！」

「無い――やれ」

――慈悲を乞う奴が、いねェ。

負けたら死。負けたら死なンだ。スーグが言ってたよォに、慈悲って言葉を知らねェんじゃねェかってくらい――命乞いをしてこない。

あるいはジャカンが言ってたように。

負けた奴が生きてても仕方がないンだ。魔物は、強くなって、1つになって、その最頂点を目指すものだから。

引き分けなんざ無い。見逃すなンてことァない。

覚悟はもう、随分と昔に決まってる。幼体でさえ、そうだ。この世に異物として生まれ落ちた時から、命を乞うなンて選択肢は無い。

それが――なンでかな。

俺には、眩しく映った。

「……」

今斬った、青黒いビーパーみたいな魔物を食べる。

アダンシー。そうだ、魔物にァみんな、名前がある。必ず名乗りを上げる。必ず名を問うてくる。

オリジンだけじゃねェ。小中大全部の魔物がそォだ。親から賜るのか、生まれた時から知ってンのか。

ちゃんとこいつらってな生きてて。

それを、食う。

……少しばかり疑問なのァ、こっち……北の海にァ湧きポがほとんどない。

ＥＤＥＮの周囲にァ結構あったはずなンだけどな。オリジンがいっぱいいることと関係してンのかな。

「魔力も……大分増えたな」

呟く。

ごちそうさまをして、なんだか実感できたそれを言う。

魔法少女はできることを増やして≫役割の統合≪をし、魔力を増やす。
魔物は強くなって強くなって、魔力や生命力を増やす。
これもある意味≫役割の統合≪ではあるンだろう。魔法少女が大粒で、魔物が小粒ってだけだ。
「体も、段々戻って来たなァ」
水面に映る体。
銀の髪に、碧い目。魔法少女になった13歳――そン時のまんまの身長。
まだまだ細部ァぼんやりしてるけど、ちったァ俺らしくなってきたっつーか。それは魔物を食べるたびに、どんどん濃くなってて。
マッドチビ先生や紺碧ベルトに引っこ抜かれた精神体が自我を持たねェのって、多分≫薄い≪からなンだろうな。いんやさ、ちっと気にはなってたンだよ。
魔法は肉体に宿る。魔力ァ精神に宿る。んじゃ精神引っこ抜いた時、心ァどこへ行く。
全部が全部カシヨの村に行くってわけでもないだろう。心ってな、どっかにあるはずで。

それは多分、精神に引っ付いてンだ。ちゃんとそこにあって、けど薄くて自我を保てない。もっともっと濃くなりゃ自分を思い出せるし、もっともっと自分らしい姿になる。

俺が最初から自我持ってたのァ、非正規の手段で抜かれたからか、あるいは夜の使徒だからか。

もしくは、前世なンてもんを持ってるからか、だな。

「――そこな精神体」

「ン？」

「強き者とお見受けいたす。――どうか、某と刃を交えてはくださらぬか」

「あァ。だが、俺が勝ったらアンタを食うぜ」

「無論」

亜空間ポケットからクリスを引き出す。

あァそうそう、亜空間ポケット。これも結構ちゃんと扱えるようになってきた。正直レーテーに入れてある云々が勿体ねェってのと、ありゃ安藤さんに貰ったモンだからできりゃ回収したいって思いはあるンだが、こーやって自在に使えるとなる

とやっぱりこっちのが便利だって感じる。
ま、関係無ェ話ァこの辺にしよう。
こっからは命の取り合い。
「俺は、梓・ライラック。頂点を目指してる」
「奇遇である。某はバチョウ。頂きを目指す者なりて」
さァ、笑え。
その感じが来なくても、笑え。
ちゃんと笑って、ちゃんと食え。
それが魔物の摂理なんだから。
「いざ尋常に――」

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

海の他に、勿論陸地でも戦ってる。
ただ陸地ァたまに人間がいるのが怖い所だ。アインハージャじゃねェが、自然発生っぽい魔法少女がいたりするのも厄介。
こんだけ魔物の生き死にを語っといてなンだけど、俺ァ人間や魔法少女を殺すってなまだちょいと無理そォだ。そもそも魔物が魔法少女食うのって生まれ変わった時に今の能力を継承しやすくするため、らしいし。セイタスの記憶談。
だから生まれ変わるつもりなンざこれっぽちも無い俺にとっては、マジに逃げるしかねェ障害なンだよな。発声すると気味悪がられるし。なンでか言葉通じねェし。
――なンだが。
「……いやァ、どォしたもんかねェ、これ」
場は、死屍累々。
夥しい量の血液――魔物と人間のものだ。
俺がやったンじゃねェぞ。
やったのァこいつ。

「子供……んで魔法少女か。ったく、見境無ェな、魔法少女の因子ってな」

そう、今俺の足元で眠ってる5歳くらいの子供だ。

陸地の魔物を食いにきたら、なんぞ暴風が巻き上がってたンで様子見に来たらコレだ。

多分だけど、魔物達が人間の村を襲ったンだろう。見分ける術は無ェけど、魔法少女の因子持ってる村だったのかな。もしくは食料調達か。

どっちにせよ——それで、虐殺が起きた。こんな森の中にある村だ、迎撃なンかの準備はちゃんとあったンだろう。強い戦士もいたのかもしれない。だけど、魔物達もちゃんと準備してきたんだろう。死体になっちゃいるが、明らかに強い……多分イオルーだろう種が一匹いる。

自然の生存競争が起きて、人間側が押し負けて。

——その絶望の最中、この子は魔法少女に覚醒した。

覚醒した魔法は多分風の類。遠くからでも見えるレベルの竜巻を巻き起こし、そンでもってその風は全部刃。周囲の木々や家々に斬痕があンのと、人間も魔物もこれでもかってくらい切り刻まれてンのがその証拠。

まーまー厄介な魔法だ。防衛にァもってこいだが、仲間を巻き込む可能性がある以上制御はちゃんと学ばないといけねェ。

……どーやって？

5歳の子供が、親もいねェ先達もいねェ状況で、まだまだ周りにァ魔物が沢山いて。

最近さ、ちょいと調子に乗る事もあったし、思考が幼稚なこともあって、自分の事おじさんだって思わなくなってきてたンだよ。俺ァもう魔物だって、そう思うトコまで来てたンだよ。

でもさァ。

「流石に見捨てられねェよなァ」

惨殺されてた魔物の爪を拾い、齧る。

口元が寂しくて適わねェ。魔煙草でもフリューリ草でもいいから落ちててくれよ。まァ舌ねェから味が分かるかどうかわかんねェんだけど。

はァ。

「時間も無いってのに……どっか人間の村でも探す、いやでも魔法少女なンだよな。

そこで魔法暴発させて村壊滅、とかなったらトラウマレベルじゃ済まねェぞ。じゃあここに捨て置くか？　まァ魔物の餌だろうな。抵抗ァするだろうし、逃げるなりもできンのかもしれねェ。見たトコＳ級はありそうだ。飛行魔法も習えば使えンだろ。どこで習うンだっつー話な。でもまァ魔法少女なら蘇生槽……なンて作れるはずもねェし」

さて、はて。

困ったな。

正直に言えば、見捨てるのが一番なンだ。

今まで食ってきた魔物のため、なンて言うのァ烏滸がましいけど、世界がやべェんだから早いとこ強くなンなきゃなンなくて、そォやってきた魔物達を食らってきたンだから、俺にァ頂きを目指す義務があって。

だから魔法少女なんぞに構ってる暇はない。

ない、ンだが。

「ふゥ。ま、とりあえず食べるか」

俺が殺したわけじゃねェから、少しだけ、思う所はあるけれど。

惨殺された魔物を全部食べる。あ、人間は埋葬する。いらねェし。可哀相だし。

そォいやこの世界の葬式事情って、火葬なンだよな。理由ァ魔物に掘り返されちまうから。魔法少女の因子ってな肉体が死んでも抜けねェのか、死体でもガツガツ食う魔物ってなも多い。だから火葬して、死体が掘り起こされねェようにする。

けど今の俺ァ火、起こせねェからよ。別にジャカン食らったからって火を操れるよォになったわけじゃねェ。すまねェけど、世界言語使ってまで火つける程情は無ェ。

だから、埋葬だ。

もしかしたら掘り返されるかもしれねェけど……今度見に来てそォなってたら、もっかい謝るよ。

食べる。

つっても口でバクバクって感じじゃねェ。精神体だからな。セイタスやジャカンの時ァ口で咀嚼してたけど、そもそも歯も舌も口もまだ形になってないンだ。

だから、触れた所から、全部自分に変換していく。俺が浸った場所、その全ての血肉が吸収されてくサマってな、傍から見たらどォなってンだろね。

「──ひ」
「ン？」
背後で小さい悲鳴が聞こえた。
起きたのか。
「あー。すまん、結局トラウマになっちまったな」
「あ、あ、あ」
「まァなンだ。俺ァ別にお前食ったりしねェからよ。安心して──」
ぱたり。
……気絶した？
んー。まァいいけど。そんなに怖かったかね、俺。
怖いか。見た目幽霊な奴が魔物食べてンだもんだ。うわ怖それ。
ま、もうちょい眠ってな。綺麗に片づけてやっからよ。

食べ終わったし、埋葬も終わった。一応墓っぽいのを作ってみた。石削っただけ

だけど。

家とかってな全部壊滅してるンで、とりあえず見つけた洞窟に子供を持っていく。魔法少女だからな。魔力があるから干渉できる。いんやさ、無くてもクリスでどぉにかなりはすンだけど、危ないし。

相変わらず念動力ってのにァ目覚めてねェ。

わからん。遠隔魔法少女の感覚ってなをちゃんと聞いておくべきだった。けど背中メッシュも太腿忍者も別に何かを操ってるワケじゃねェよな。放射したり落としてるだけ。こぉいうの得意そうなのって誰だ？

L・アルカナが、ふわふわ鼠の奴で、あと学園の引きこもり2人も一応アレ遠隔で物操る系だったな。D級でロクに動かせないとか言ってたけど。

あとは……アレ、あんまりいない？　こう、外のモンを操ってどぉにかする系。

あ、いるじゃん。

マッドチビ先生。まさにじゃん。代表格じゃん。

「……えーと、魔法少女だから冷えても問題ねェ、よな？」

洞窟の中はちょみっとひんやりしてた。

普通の人間だったらどぉにかして火ぃ起こして暖を取らねぇと死んじまうンだろうけど、まァ魔法少女なら平気だ。温度に疎くなるからな。耐性ができるって言った方が良いか。

他……は、いいか。

水も食事も必要無い。蘇生槽こそ無いけど、魔法少女ってな魔力の保つ限りァほとほと死から離れた存在だ。魔物だって日々の食事は必要で、喉が渇けば脱水症状とかになるってのにな。オリジンを除く。

「起きるまで待つ……べきか。だが、いいのかね。俺ァ一刻も早く……」

気絶したまんまの子供の顔を見る。

……。

うぅん。

「あー、でも。これ、たとえ起きたとしても、俺見たらまた気絶するよな。あるいは眠ったふりして隙見て逃げる、とか」

言葉に出す。

出すと納得感が出てくる。

そうそう。
だからやっぱり離れた方が良いって。
そォじゃなくても、俺ァ今は修行中で。
魔法少女だからつって、生き返ることができねェからつって、守って貰える、なンてことは無くて。トラウマがあってもソイツが生きるか死ぬかってな自由で。そもそも魔法なんつー自衛の手段があって。
こいつを守る必要なんざ無いンだ。
実際、マッドチビ先生は８歳の時にそォなって、そっからずっと１人で生きてきたワケだし。
……。
「優柔不断、禁止。どの道必要ではあるンだ、その辺の魔物狩ってくるか」
これも言葉にする。
そもそもの目的がそうだ。陸地の魔物を食う。生きるために、強くなるために。
……それを利用するってな、ちょいと気が引けるけど。
魔法少女なンていう、魔物にとっちゃ必要不可欠な〝餌〟がここにあるンだ。

狙って魔物ァ寄ってくる。無暗に探して回るより、遭遇率ァ高くなるだろ。
「夜には戻る。それまでに逃げるかどォかは自由だ。……聞こえてるか知らねェし、言葉わかるのかも知らねェけど」
気付いてるよ。
起きてる事には。起きたのついさっきだけど。
「じゃあな」
さて。
命のやり取りに、戻ろうか。

遠《ｔｅｘｔ･s1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「お前が梓・ライラックか！」
「あァそォだよ。なンだ、噂でも聞いてきたか？」

「その通りだ――強き者！　一手手合わせ願う！」
「手合わせどこじゃ済まねェよ。俺ァお前を殺して食うぜ。それが嫌なら逃げな」
「望む所だ！」
陸地でも、魔物達の気質はあンまり変わってない。
ちょいと違うのァ、見晴らしがあんまりよくないんで伏兵やら漁夫の利やらが多いってトコかな。海中は奇襲なンてできねェし。
で、噂ね。
まァセイタスみてェに会う奴会う奴に挑んで食らってきたからな。その話ァ広まってるだろ。
けど、基本の活動地ってな海中だったから、陸上にまで話が及んでるたァ思わなかった。
「名は？」
「ティオイジ！」
「あァよ。んじゃ――死んでくれ」
正直な話をすれば、俺ァもう結構なトコまで来てる。

クリスを使った剣術にも慣れた。お嬢の剣の流れを掠めた我流もいいトコだけど、精神体ってな身体を利用しての奇抜な攻撃法もかなり確立してる。
魔力も結構増えたし、それ以外の手段での攻撃方法も色々ある。
だからか――やっぱり、どんどんあのクるものが無くなって行っているように思う。
ジャカンの時に感じた、自分を殺し得るモノ。魔法少女の頃は常に感じてた、死と隣り合わせにある感覚。
「戦闘中に考え事か!?　余程余裕と見た！」
「――すまねェ。余計なモン挟んじまったな。ちゃんと殺して、ちゃんと食うよ」
クリスで斬りつける。
ティオイジの見た目ァハリネズミ……っぽい牛、っぽい馬？　犬？　わからん。でけェトゲトゲの獣。
それが繰り出す体当たりァ凶器だ。木々も岩も一瞬でハチの巣。人体なんざ簡単に貫くだろう。
そこに、傷をつける。

一撃で仕留められるよォな力はない。そォいう剣でもないしな。
ただ――もう治せねェ、ンでもって出血量の多くなる傷が、どんどんついていく。
苦理主。っとに残酷な武器だよ。
「く――妙な、武器を！　ならば！」
「ん……――ッ!?」
緊急回避――地面に潜る。
それで、けれど頭をちょいと掠めた。そんくらい深くまで突き刺さったって事だ。
「どこへ――」
「ここだ、よ！」
ティオイジの真下から、クリスで斬りつける。
亜空間ポケットの応用だ。潜る時にしまって、出る時に出す。クリスは地面透けねェからな。
それより、だ。
「う……こちらの弱点が、腹であると気付いていたか……！」
「いんやさ、全然気づかなかった。それよか、お前魔力使えたンだな。危なかった

よ、さっきの針。ちょいと気が抜けてた」
「――なるほど、精神体の対処法とは、それか！」
あァ。
知らなかったのか。
じゃ、不味い事言ったな。
ティオイジの口元、歯に魔力が集う。
なるほど、それで噛みつかれたらやべェ。やべェけど――そンな愚直な噛みつきにあたるかよ。
「――ッ！」
「へェ、退けるのか、今の」
魔力の籠った針飛ばしてきたり、噛みつく寸前で危険察して下がったり。
こいつは将来化けるだろォな。このまま強くなりゃ、だ。
「ティオイジ」
「何だ」
「今からお前を殺す。けどお前ァ多分、もっともっと強くなれる。こっから逃げて、

俺から逃げて、成長して経験積んで。そうすりゃもっと――」
「慈悲など要らぬ!!　――それが我らの摂理と知れ！」
やっぱり、か。
ま、知ってて言ったよ。あるいは一縷の望みを込めて、かもしれねェ。
死にたがりたァ違う。違うンだろうけど、段々と――そう思うようになっちまってきてる。
若死にする奴が集まる運命、とか言ったっけ。
っとに。
「糸伊豆阿派青磁負不伏零矢堕千経度戸地内途（それは夜に捧げる一節の祈り）」
調子に乗るな。上から目線で物事を語るな。
――憐れんでンじゃねェよ、俺。みんな必死で生きて、抗って、戦ってンだろ。
先があるのに、なンて。
馬鹿な事を考えるな。
「勝負！」
「藍出内沙米紫遠（私は救いを否定する）」

死の魔力を纏うクリスで、腹に付けた傷から全身を斬りぬく。
慈悲は無い。無くていい。それは無用だと、俺ももうわかってるはずなのに。
ダメだね、俺ァやっぱり。
死が目的になってンじゃねェかって、ンなこたねェって。
誤認すンな。誤解すンな。
こいつらは、本気なンだよ。
救いなんざ求めてねェって。
「――まだだ!!」
「!?」
針。
死に体だろう。もう死ぬ直前だろう。
でも、でも、でもと。
――最後まで、諦めない。
「ハ」
魔力の込められた針。今しがた生えてきた針だ。

それを飛ばす。飛ばしてくる。俺の頭に向けて、真っ直ぐ、ストレートに。
思わず笑みが零れた。
あァさ。
「その足掻きを――俺は、悪いたァ言わねェよ」
避けて、言う。
悔しさの滲む顔のまま死んでいくティオイジに。
あるいはまだ先のあっただろう若い魔物に。
「礼を言う。また、俺が馬鹿だった」
本当に。
魔物になってから、本当に。
恵まれてるよ。なんか。ずっと誰かがいるんだ。ずっと誰かが、気付かせてくれるンだ。
調子に乗ってるぞ、って。お前ァ――まだまだなんだぞ、って。
「いただきます」
祈りを捧げる。ティオイジを食べる。世界言語の使用により傷付いた精神を癒し

ていく。
その身を、糧にする。
ちゃんと口で――。

「帰ったぞ……と。あァ、逃げたか」
洞窟に戻れば、そこはもぬけの殻。
ま、それでいい。
俺も根無し草を再開できるってモンだ。
「――魔物」
「ン？」
あれ。
いるじゃん。というか、なンだ。帰ってきた？　なンで？　逃げりゃいいのに。
「魔物」
「おゥ。魔物だな」

「……喋れないの？」
「いんやさ喋ってるよガンガンに」
「……私を、食べない、の？」
「食べてもうまみがねェからなァ」
亜空間ポケットから魔物の爪を取り出す。
んで、しゃぶる。いんやさ、最近我慢できなくなってストックするよォになってンだよな。その場で食うべきなのァわかってンだけど、ちょっと魔煙草っぽい大きさのがあるとつい。
「……」
「なンだ」
「……食べないなら、一緒にいていい？」
「あー。まァ、いいよ。ずっとァ無理だが」
これ会話になってンのか？
多分喋れてないんだろうなァ俺が、ってな自覚はあンだけど、少女も少女側でよくわからん納得を見せてる。

魔物だってわかってて、近寄ってきて。
ちょこんと俺の隣に座って――コクコクと、眠り始めた。
……ん――？
懐かれた……？　なンで？
まァ、いいか。
俺がいねェ間にどっかいってて、ちゃんとここに戻って来れる、ってこた、死なねェくらいの強さはあるって事だ。覚醒したばっかだろォに、戦いを教えてくれる奴もいねェだろうに。流石はＳ級ってトコかねェ。
明日明後日くらいは一緒にいて――良い感じにフェードアウトしよう。
何、精神体だ。いつ消えてもおかしかねェさ。それで悲しんでくれるよォなら、ありがとさん、とでも言って、泣かせておこう。強けりゃ立ち直れるし乗り越えていけるだろ。
「私は救いを否定する、か」
夜に捧げる祈りの物語。その一節。
慈悲を否定し、死を覚悟する魔物達。

まるで――とかな。

「……何やってンだろうね、俺ァ」

時間は有限なのにさ。

こんな場所で、こんな感傷に浸るなンて。

……魔物になりきれてねェのかね。

あァどォかな。セイタスは結構感傷に浸る方だったから、ンなこた関係ないか。

「長ェなァ、夜ってな」

精神体になって、それをほとほと痛感する。

精神が傷付いての気絶以外、自分から眠る、なンてこたできねェからさ。

何もしてねェ、何もしねェ夜ってな――長い。

神さん、今頃どーしてっかね。

お嬢や冷静メイド達は、無事に冥界から出られたのかね。シエナは、安藤さんは、ＥＤＥＮは。

――やっぱり、ダメだ。

静かだと、余計な事を考えすぎる。

俺の好きな夜に戻ってくれ。
余計な事全部解決して、悩みの一切無い、俺の大好きな夜に。
「それは夜に捧げる一節の祈り」
世界言語を解さない言葉で。
ずっとずっと、呟く。
「私は終わりを肯定する」
彼女に捧げる、祈りの物語を――。
まるで、子守唄のように。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「起きたか」
「……魔物さん。守っていてくれたの？」

「ン？　まァそォいう見方もできるか。……いや、そォだな。多分お前さんが食われねェよォに」
「ありがとう。……綺麗な髪と、綺麗な目なのね、魔物さん」
「あァやっぱり言葉は通じてねェのね」
ガン無視されたワケじゃねェ。
多分発声は聞こえてるっぽい素振りみせンだけど、何言ってるかわかってないって感じだ。確かお嬢達も世界言語はうーうー唸ってるよォに聞こえてるンだったか。
俺がアンゲルの言葉聞くとノイズ走るのと同じ感じかね。まだまだ謎の多いこって。
「魔物さん」
「ン？」
「こっち、来てくれる？」
「……そのまま魔法でドン、じゃねェだろうな」
一応警戒して、近付く。

こっちっつったってそォ離れてねェ。……大丈夫か？　魔力籠ったナイフとか持ってねェか？
「はい、これ」
「……」
……。
うん？
「花冠……？」
「これはね、ヘイローっていうの」
「へェ。あの村特有の奴かね」
「これ、あげる」
おゥ。
……まァ貰うモンは貰うけどよ。
んーと、どうすっかな。花冠だともう死んでる植物なンで、持ち上げるのが難しい。クリス……だと斬っちまいかねんし。
あー。亜空間ポケットの魔物の爪をこう、良い感じに手先に出現させて……よ

し。掴めた。
でも被れないンで、亜空間ポケット行きだな。まァありがとさん。大切にするよ。
「もしかして、昨日夕方までいなかったのァこれ作りに行ってたからか？」
「昨日ね、お花畑を見つけて、これを作ってたの」
「……危ねェことしやがる。見晴らしのいい場所に行くなよ、狙われるだろ」
別に見晴らしの良くない場所でも狙われるだろォけど。
つか……何？
おじさんの涙腺誘いに来てる？　情を持たせようとしてる？　そういう作戦？
効くよ？　めっちゃ効くよ？
やーっべー。
やァーっべェー。
早いとこ誰かに預けねェと、俺自由行動できなくなるなこれ。
「魔物さん。言葉、教えてあげる」
「あァそりゃ結構。喋れるンで」
「あー、って。言ってみて！　あー」

「そいつァ俺の口癖だよ。あァさあァよあァね」
「そんなザラザラした声じゃなくて！」
やっぱりそォ聞こえてンのね。
しっかし、昨日とは打って変わって元気だなァオイ。もっと不思議ちゃんなのかと思ったぜ。
「あー。ほら、言ってみて！」
「……俺がマジに魔物だったら、その言ってみて自体伝わらねェと思うンだけど……ま、その辺の理解ァ5歳児には無理か」
「無理？」
ふむ。
あァ、じゃあ。
頷く。輪郭ぼんやりしてンで、ちょいと大仰に。
「！　もしかして、言葉はわかるの？」
頷く。
「喋れないだけ？」

頷く。
うむ。
やはりボディランゲージとは偉大。人間ジェスチャーでなンとかなる。親指以外。
……ダメダメ、こんなことしてたら余計懐かれちまうよ。
ん―、でも、この辺の人間の村ってーと……無いよなァ。
あ、でもマッドチビ先生が言ってたっけ。ＥＤＥＮ以外にも魔法少女の組合がある、ってな話。それ見つけられたらワンチャン？　まァＥＤＥＮに行くのもいいんだけど、場所わかんねェし。
いや。わかるか。多分だけど。
多分、そのジョームンガンダーとかいうのがいる北方山脈の裏っかわ。北方山脈自体がクソでけェ山脈なンで裏っかわってな表現ァちとおかしィんだけど、まァ多分その辺に突き刺さってる。
行くか？　この子連れて？
……無理だろ。スーグたちが、あと寂しんぼまでもが止めに止めたジョームンガ

ンダー相手に子供守って戦える自信ァ無いや。
やっぱりどっか、魔法少女組合探すのがベストだな。そこに預けて、多分魔物に連れ去られた感じ出しておけば勝手に情湧いて助けてくれるだろォし。そこでよォやくフェードアウトだ。そっから修行再開。
完璧なプランニングでは？
「私はね、アオン・ガフスっていうの。魔物さんは？」
「梓・ライラックだ、つってもわからねェンだから聞くなって」
「無いの？　じゃあね、私がつけてあげる！」
「そォなると思ったよ」
名前、ね。
……そォいやアイツ、アズサもミズメってな名前名乗ってたが、ありゃ自分で考えたのかね。
ミズメ。梓に対する名前としちゃ出来過ぎてるが、誰が考えたンだか。
「クロムクラハ！　貴女の名前はクロムクラハ。どう、気に入った？」
「どんな意味があンのか知らねェけど、ポチとかタマじゃねェ事を祈るよ」

ペット扱いは勘弁、ってな。
「これからよろしくね、クロムクラハ！」
「ん」
「言葉も頑張って発音できるようになろうね！」
「それァ多分無理」
こうして。
まァた、なンだ。変な同行人ができました、と。

遠《ｔｅｘｔ：ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

84・畏怖訪藤有似井戸伊豆紺虎韻泥系手取・

12／15は更新ありません。ご了承ください。

やっぱり、アオンは餌になるよォで、今までの何十倍もの魔物と遭遇するよォになった。純粋な魔物じゃないからか、匂いだのなンだのァわからねェんだけど、多分アオンからは芳醇な香りでも出てるンだろうな。

アオン・ガフス。

魔法名は【断巻】。本人がそォ言ってたからな。魔法名ってなパっと頭に思い浮かぶモンだから、そこに間違いァ無いだろう。

問題はどォ制御させるか、ってとこ……だったンだけど、意外や意外、割合じゃあるけど上手いこと制御できてる。なんつーのか、センスがいいって感じだ。相も変わらずボディランゲージ以外の意思疎通ァできねェけど、これはもう「俺から教えてやれることはない」って奴さな。

ちなみに文字もダメだった。大陸共通語で通じねェならお手上げだよ。当たり前だけど式鬼の言葉もダメ。

魔物を狩って喰らって、強くなって。

アオンに群がる奴を食って。アオンに集まる奴を殺して。

まるで俺が守護霊かなんかみてェになってきた——ンな最中のこと。

「——【円閃】！」

「おっと」

死の気配でも命の気配でもなく、単純にそォいうもんを察して避けられるよォになったのァ成長だ。

完全な死角だったにも関わらず、その飛んできた……あー、刃の輪っか？　みてェなのを避けて、振り返る。

そこに——いた。

「クロムクラハ！　大丈夫!?」

「あァよ。だが、別れってなお早いモンなのが普通らしい。お迎えだぜ、アオン」

煌びやかな衣装に身を包む、４人の少女。

魔法少女がそこに、いた。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

さて、探す手間が省けたどころの騒ぎじゃねェ。
飛んで火にいる夏の虫、でもねェな。まァなンだ、ありがとよ、って感じ。
「――精神体ッ！　それも、これは……」
「相当に高位。人命確保第一で、討伐及び深追いは控えるべき」
「全員構え！」
ＥＤＥＮの魔法少女、じゃァない。
見覚えの無い奴らだ。まァＥＤＥＮの魔法少女全員知ってるか、っつったらンなことないんだけど、１人も見た事ねェってこたないだろう。
それが４人。退く構えができてる辺り、拠点も持ってる。帰ったら仲間もいる

と見た。
つまり、魔法少女の組合って奴だ。
ＥＤＥＮに属さず、あの国に何の因縁も持ってねェ奴ら。戦う事を拒否したか、あるいは他にやることがあったか。
なんにせよ、お迎え時ってなこれこのこと。
セイタスとよりも遥かに短ェ旅路だったが、ま、これも運さな。
アオンは若死にする運命になかったって、そォいうこったろ。
「【水縄】」
「【壁塞】」
「おォ、何気に流水系の魔法ってな初めて見るな。マッドチビ先生のが流水扱いならまァ初じゃねェんだけど」
「縛り上げて！」
「圧しだす！」
――ンな呑気な事言ってたら、割とヤバめの魔力量が隆起したのを感じた。
水の縄、上空から来る不可視の壁ァそこまでじゃァない。さっきの【円閃】だっ

たか。アレもそこまで気にするモンじゃない。
じゃあ多分、残りの１人だ。
ソイツがやべェ。
「――一撃で刈り取る！　【斬滓】！」
「剣士――そこか！」
「!?　防がれた――それに、今のは！」
亜空間ポケットより引き摺り出したクリスでソレを受け止める。
何やら光の粒が溢れ出る剣。魔力で編まれてンのか、実体は見えない。ヒュゥ、精神体を斬るためにある魔法じゃねェか、そんなん。
さて。
まァ傷つけるつもりァ無い。こいつら多分人間側……ＥＤＥＮに属してないだけの普通の魔法少女だろうし。俺別に魔法少女の因子いらないし。
だからとっととアオン押し付けてとんずらこくのが一番だ。
短い間だったけど、思ったより楽しかったよ。なんか最近じゃ一番平和な時間を過ごした気がする。

「んじゃ、アオン。――ま、またどっかで会えたら、」
「――やめて！　クロムクラハをいじめないで！」
手を広げ――俺の前に立つアオン。
……危惧してた事ではあった。けど一緒にいた時間ァかなり短いから、そんなでもねェって思ってたンだけど――5歳児を甘く見過ぎたか？
ンな年頃で孤独になった所の庇護者だもンなァ。そりゃ懐くか。
「何を……」
「クロムクラハは良い魔物さんなの！」
「魔物に良いも悪いもない」
「貴女にはまだわからないことかもしれないけれど、魔物は魔法少女や人間を食べるのよ！　危ないの！　だから早くこっちに来て！」
「嫌！」
亜空間ポケットから魔物の爪を取り出す。
ふゥ。
俺ァこれ、フェードアウトでいいかね。適当に地面ン中潜って、それが正解かね。

「シャオメイ、【水縄】で」
「うん。――拘束する！」
水の縄がアオンに迫る。それァいとも簡単にアオンに巻き付き、絡みつき、その動きを封じた。
まァ優しく縛ってくれるだろ。水の縄ってながどンな強度を持つのか知らねェが。
「いや――冷たい、気持ち悪い！」
「……傷付いた」
「シャオメイ、傷付いてないで早く引っ張って！　引き剥がさないと！」
ヘェ、冷てェのか。
そォいや魔法で作りだした水って飲めンのかな。アイツ１人いれば喉が渇く事なくて便利そうだ。まァ魔法少女は喉渇かねェんだけど。
「クロムクラハ、助けて！」
「んー。まァ、助けてくれねェ俺に絶望して、俺を嫌っておきな。魔物に情湧かしたって、魔法少女にァ良い事ねェって」

俺みたいに殺せなくなっちまうからさ。
なンで――手を振る。ばいばい、みてェな。
「壁張って、リュウイン！」
「もう、発動済み！」
おォ、不可視の壁が俺とアオンの間に入る。
えーと、【壁塞】つったっけ？　防御系だろォけど、色々バリエーションあるンだろうな。こう、角をぶつけてえぐるとか。単純に圧し潰すとか。下から突き上げて跳ね飛ばすとかもできそうだ。
「ッ、この！」
「あァそりゃ防ぐけどよ。ン？　もしかして手ェ振ったのが攻撃に見えたのか？」
「何をするつもりかは知らないけど、こんな小さな子を――」
「まァそれァ俺も悪いと思ってるよ。こんなちっくせェ子を危険地帯で連れまわし過ぎた。餌に使ってさ、魔物をおびき寄せたってな変わらねェ。それァ謝るよ。言葉通じてねェだろォけど」
「【斬滓】！」

「おわっと！」
いまいちどぉいう魔法か掴めねェが、アレがやべェのだけはわかる。
剣ァ出したまんまにできて、至近距離でも魔法の発動は可能。近接だな。ンで、多分だけど魔法名的にあのチラチラしてる光の粒がやべェんじゃねェかなァと推測。触れたら斬れるとかありそぉだ。
ずっけェなァ。近接のクセにそぉいう魔力攻撃までしてきやがるのァよ。まァ尖り前髪も似たようなモンだが。
「さっきの亜空間といい、この剣技といい――コイツ、ヤバイ。一旦完全に引いて態勢を立て直すべきね。みんな！」
「女の子確保完了！」
「リュウィン、壁は維持したまま、逃げるわよ！」
「了解！」
魔法少女達が退いていく。
あー。
なンだ、俺の討伐隊でも組むつもりか。

怖い怖い。ンじゃとっととんずらこかせてもらいますかね。
「クロムクラハ!!」
「じゃァなー――ア!?」
思わず声が出た。大きな声が出た。
だって――オイお前さん、その手の中にあるのァ！
「ッ、追ってきた!?」
「不味い、私が止めるから、みんな逃げて――」
「馬鹿野郎全員逃げろ！　ンなこた伝わんねェだろうから、ぶっ飛ばすけど！
柄の打撃だ、ちったァ我慢してくれよ！」
「速ッ!?」
アオンを抱えてる【水縄】の魔法少女をかっ飛ばす。その横にいた【壁塞】の魔法少女は蹴り飛ばす。飛行魔法ってな浮遊してるってワケじゃねェ、背中から推進力出して飛んでるンで、それを押すよォに蹴っ飛ばしてやれば遠くまで飛ぶ。
俺を止める、なンて言ってた【斬滓】の魔法少女はその魔法少女衣装掴んでぶん投げる。背負い投げなンて綺麗なモンじゃねェ、単なる投げだ。柔道なんざとォの

昔にガッコでやったくらいだからな。

最後に【円閃】の魔法少女は――クソ、馬鹿が、ちょいと遠いとこにいやがって！　そこじゃ届かねェだろォが！　しかもその手――まだ魔法使う気かよ、死にてェのか!?

「来夜目琉珪素井伊明日尾伏怒涛品（省略、祈りの物語）！」

「【断巻】！」

「褪戦死遠（静弱）！」

張りだされる半透明の壁。厚みの無いソレァ確実に輪状の刃を止めて、更にすべてを切り裂く風とも少女を別つ。

その隙に、今尚水の縄で縛られたまんまのアオンを連れて――逃げる！

省略した世界言語なんざ初めて使ったが、やべェな。一撃でかなりキてる。食べて癒してもっと強くならねェと。

それより、だ。

「馬鹿が。あのままだったら、アイツら全員殺してたぞ!?　蘇生槽があるかもわかんねェ奴らを！　あったとしても殺しちゃダメだし、もしやっちまってたらお前、

封印措置みてェなことになってたかもしれねェんだ。ちったァ考えて動け馬鹿！」

「クロムクラハ、助けてくれたんだね……」

「俺が助けたのァお前じゃなくてあっちの魔法少女達だよ」

……とりあえず逃げたけど。

やべェな。やべェ事がいまいっぱい積み重なってる。

一番良い展開ァ、あの魔法が俺の仕業で、魔法少女1チームを無力化、5歳の少女を奪った卑劣にして凶悪なる化け物がいる——みてェなコトになってるケース。それならこっちもやりようがある。

次点で、魔法ァアオンのモンだけど、それァ誰も魔法を教えてくれる奴がいなかったから仕方のない暴発だったってことで、もっかい助けに来てくれるケース。

最悪なのァ——俺とアオンは完全に結託してて、アオンは完全に魔法少女の敵、魔物側の存在だ、って認知されてる場合だ。むしろアオンが俺を操ってる、とかでもやべェな。

どちらにせよなんにせよ、アオンの居場所が無くなっちまう。俺とずっと一緒にいるってな無理な話だ。俺ァやんなきゃいけねェことがあって、そのタイムリミッ

トはもうすぐ。正確な時間はわからねェが、空気中の魔力濃度がどんどん下がってるのが肌でわかる。肌無いけど。

時間の問題ってな、まさにこれの事だ。

だから一刻も早くその魔王とやらになんねェといけねェ。

魔法少女の事情なんぞに関わってらんねェんだ。

「ねぇ、クロムクラハ。もっと遠いところへ行こうよ。クロムクラハをいじめてくる人のいない所へ」

「そのつもりだがね。お前さんァついてこれねェのさ。その場所ってな冥界でよ」

「あの人達……なんでクロムクラハをいじめるのかな」

「アオン、お前さんは5歳児にしちゃ凄まじいってレベルで聡い子だと思ってたンだが、ンなこともわからねェとは驚いた」

「クロムクラハは良い魔物さんなのに……」

「そもそもの話をすンなら魔物じゃァ無ェんだけどな」

会話にゃなってない。

俺の唸り声を、アオン側で勝手に解釈してるだけだ。それで言葉が通じてると

思っちまえてる辺りァ5歳児か。メルヘンだねェ頭の中が。

……とにかく、確かにもうここにはいられねェってな事実か。

他の魔法少女の組合探してそこに引き取ってもらわねェと。できりゃァ【断巻】を抑えられるよォな魔法持ってる奴で頼む。

「クロムクラハ……なんだか、疲れちゃったみたい」

「そりゃ魔力の使い過ぎだよ。あの規模の魔法だァ疲れるンだよ。初日もそォだっただろ？」

「……おやすみ、クロムクラハ」

「あァよおやすみ」

そうして、俺の腕のなかでコクコクと眠っちまったアオン。

この水の縄も解かないとだが、それよかどっか休めるとこ探すのが正解だな。この辺りで休めるとこっつーとスーグとシュジの島くらいしか知らねェんだけど、流石にあっこへアオン連れてくのァなァ。

かといって洞窟に出戻りもうーんだし。

あァ。

なーんで俺ァ子守なんぞしてンだ全く。
適当にあの魔法少女の帰り先尾行けてって置いていけばいいんじゃねェの？
……それで出来上がるのァ血だまりの村ってか。
洒落になンねェなァ。
「……だいすきだよ、クロムクラハ……」
はァ。
嫌な寝言呟きやがる。
捨てるに捨てれねェじゃねェかよ。
どーっすっかなァ。

遠《ｔｅｘｔ・ｓ1・2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――後ろにいる太陽の使徒を明け渡せ。さすればお前の命は見逃してやろうぞ」

「あァさ、断っとくよ。明け渡さねェし、見逃さなくていい」
「ほう？　――では、この数と、たった1人で戦うと――そう言うておるのか？」
「そォじゃなかったらなンだって話だよなァ」
当然だけど、魔力切れで眠ってる魔法少女なんざ魔物にとっちゃ据え膳みてェなモンだ。
戦場で魔力切れ起こす事自体が禁物なのァそういうことなンだけど、ンなこた知らねェアオンに何期待しても無駄だ。
で、まァ別に俺ァ守護霊ってワケじゃねェ。
もしここでアオンが魔物に食われちまってもそりゃ摂理だ。俺が嫌いな、この悲しい世界の自然。
が。
「ちょいと、腹が減っててな。いつもやんねェことやったせいでボロボロなンだ。――糧になってもらうぜ」
「そうか。なれば、太陽の使徒諸共我らが食い散らかしてやろう！」
守る守らないァ別にして、魔物ァ食わなきゃならンのさ。

だから――その命、いただくよ。
「俺ァ梓・ライラック。アンタらは？」
「我はメリザ。そして、これらに名はない。我の力よ」
「あァそうかい。そりゃ、食べ応えがありそォだ」
「抜かせ！」
ハチだ。ハチの魔物。
それもコイツは多分――オリジンで。いつか大きな丘で見た奴らとは一線を画す。その一匹一匹がA級ァあるだろう魔物。そしてそれを従える女王蜂。
俺ァ1人。背後にァ眠る魔法少女が1人。
はン。
いいね、そォでなけりゃいけねェ。
俺ァ危機にいねェと――馬鹿みてェ笑うってな、難しいからよ。
「ハハ――こんだけ馳走があンだ、もうちっと無理したっていいだろ！」
「全軍、貫け!!」
「糸伊豆阿止理負不伏零矢堕千経度戸地内途！」

クリスを抜き出し、大仰に振りかぶる。
浸すのァ死の魔力。【即死】や【死漸】よりもうっすいその死を、ふんだんにクリスに蓄え――振る！
「褪戦死遠（死ね、痛み無く）藍出内沙米紫遠（【即死】）！」
大きな丘でやった、大規模殲滅――その空中バージョンさ。
カシヨの村がヨウコで、重力に振り回されねェ水のイメージァついてる。だから、大気に浸す、なンてありえねェイメージもちゃんとできる。
精神が悲鳴を上げる。
同時に――黄色と赤の軍勢が、バラバラと落ちて行く。取るに足らないはずだった希釈された死の魔力。それが突然、暴力的なまでの死に置き換わったンだ。
世界言語による魔法の使用。これも結構慣れてきた。
「な――」
「言葉は、要らねェよな」
「――無論」
殺す。

……相変わらずだなァ、ホント。

さて。

何気、ハチを食べるってな初めてだな。※前※、大学生だった頃になンか虫食できるカプセルトイでイナゴだのカブトムシだのァ食った事あるが。

そもそも虫の魔物って少ないんだよな、何故か。大きな丘にァあンなにいたのに、この辺の陸地でァ今のメリザが初邂逅だ。なにかね、生存競争で負けちまうのかね。

にしても。

「……できりゃァオリジンは仲間にしてェんだけどな」

ヒトガタを取ってる女王蜂と、後ろに転がってる蜂。

全部を食べて行く。あァ、癒される。罅の入った精神に潤いが戻る。んでもって満たされる感覚があって――また一段、上に上がったよォな感覚に見舞われる。

相変わらず味ァ無いんだけど。

「――ッ！」

「まァ食事時ァ一番の狙い目だよな。わかるわかる」

飛んできた針を避ける。
ティオイジとの戦いを経ていて良かった。こっちァ魔法だけど、掴んだり弾いたりせずに避けた方がいいってな学びだ。
しかし、魔法名を言わないタイプの魔法少女か。
厄介だな。
「アオンは……あァ、もう連れ去ったのね。いんやさ、それでいいならいいんだがよ」
「第二陣！」
掛け声と共に、でっけェ岩が飛んでくる。
……魔力の籠ってねェ岩？　精神体にンなもん効くと思ってンのか？
「【第三陣、やって！」
「【水縄】」
「【氷張】‼」
「【泥縛】！」
あー。

ははァ。なるほどね。

まず、無音で魔法の針飛ばせる奴が俺の食事中を狙って攻撃する。それで仕留められりゃ御の字。けど無理なのァわかってるンで、それは避けられる前提。役割ァ目印。

そこへ向かって投げられるのァ魔力の籠ってない大岩。それは精神体の身体をすり抜けて、そこにドスンと鎮座する。これが型。

ンで、その岩に向かって水と氷と泥を張り付けりゃ、簡易封印の出来上がり、と。いーね、良い連携だ。

精神体ァ魔力籠ってるモンァすり抜けられねェからな。そんでもって精神体の能力が風を起こす形だと認識してンなら、石の中に閉じ込めンのァもう大正解。そォじゃなくても亜空間ポケットやら謎の剣やらを出させないって点で完璧だ。

俺がそれを察して地面に潜ったりしてなけりゃ、だけど。

「やった!?」

「多分……」

「どうする？　このまま潰す？」

「ダメ。外枠が壊れたら出られちゃう。これはこのままにすべき」
「そうね。今の内に離れましょう。この子の安全が最優先だわ」
いんやさ。
案外早かったな、立て直すの。全速力で来たのかな。
……ンー。まさに絶好の機会、でァあるンだけど。
これさ、アオンが目覚めて、俺を探していねェってわかって、「封印した」だのなンだの言われた瞬間――また魔法使わねェかなァ。大丈夫かなァ。
過保護か。流石にそりゃ。
そォなったらもう、アイツの責任だ。別に俺に責ァ無い。んじゃとっとと逃げますかね。
ってなワケで。
セイタスに続き、俺の旅の奇妙な同行人ァ、こォいう別れを遂げた感じである。

遠《ｔｅｘｔ:s1･2》吠えは《ｔｅｘｔ》

「やりましたね！　――これでようやく、私達も蘇生槽が作れます！」
「ええ。……良かったわ、安全に確保できて」
「欠損があったらまた見つけ直し……命は最優先」
――ア？

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

地面の中を進みながら、魔法少女達を尾行する。
ちょいと――どころじゃねェ、不穏な会話。
人命最優先ってな、正義から来るモンじゃねェ、のか？
「それにしても、あの魔物……クロムクラハ、といったかしら。少し不気味だったわね」

「顔周りは人間にそっくりだった。それに、剣技も」
「亜空間を操っていた事も気になる。未確認のオリジン種……しかも、直前に他のオリジン種と戦い、一瞬でそれを殲滅していた。正直、あんな封印では縛り切れない」
「大丈夫です。そのための蘇生槽ですから！　あれさえ作る事ができたら、何度だって挑めます！」
蘇生槽。
その製法ってな、なンでも知ってそォな冷静メイドさえ知らない代物。
ＥＤＥＮ上官……つまりニヤニヤ丸眼鏡や、ほんとァいたはずの他の高官、あとはマッドチビ先生とマッドチビくらいか、知ってンのァ。あァ後創設者たち。
とかく、作り方ってのァ秘匿に秘匿を重ねられてるってなわかる。
ただ、アインハージャ達や着物狐、あみあみ忍者みてェに、自然環境が偶然そォなって蘇生槽みてェになった、なンて事例もあるくらいだから、知識が必要なだけで高い技術を求められるってワケじゃねェんじゃねェかって思ってる。
……ただ、着物狐もあみあみ忍者もアインハージャ達も、全員寂しんぼ、あるい

はマッドチビと接触してる可能性があるってのァミソだよな。キモかもしれんが。
あいつらが故意にそォいう環境作り上げてなんらかの実験をしてたって可能性ァある。マッドチビ……シエナはアインハージャの歴史と同じくらいの時間を生きてるみてェだし。
「シャオメイ、ちゃんと魔力は奪い続けておいてね」
「わかってる」
……あァ、そォいう魔法か。
あの規模で【断巻】を使ったから、ってだけじゃねェのな。あの水の縄が身体に巻き付いてるから、そっから魔力吸いだされてる、と。
オイオイこえー魔法使うな。魔法少女の魔力吸いだす魔法なンてあンのかよ。
――精神体に効果抜群じゃね、それ。
「リンリン、周囲の警戒は怠らないでね」
そンでもって魔法少女の層もそれなりに厚い、と。
ＥＤＥＮが厚すぎるだけで、この組合も結構な規模っぽいな。
しかし。

「……」
「浮かない顔ね、ミィワン」
「ご、ごめんなさい」
「怒っているわけではないわ。でも、割り切ってほしいとは思う。これは私達にとって大切なことだから」
「……はい」
「わかるわよ。その気持ちは。こんな小さな子を材料に使うなんて、可哀想――そうでしょう？」
「……はい」
やっぱりそォいう魂胆か。
あァー。どォすっかなァこれ。いんやさ、何も魔法少女が良い奴ばっかだ、なンて偏見ァもってねェのよ。そりゃ十人十色いるわな。ＥＤＥＮが公明正大だとも思ってねェのよ。隠し事もいっぱいあったンだろな。
けどさァ。
そこまでだったたァ思ってなかったよ。

蘇生槽の材料。
「――それとも、貴女が≫成る≪？」
「う……」
「ふふっ、ごめんなさい。嘘よ。冗談。……この子は可哀想だとは思うけれど、仕方のない犠牲。そう考えないと、この先やっていけないわ」
「……はい」
魔法少女、なのか。
あァ。
くそ。
じゃァよ、ＥＤＥＮにズラりと並んでる蘇生槽ってなよ。
その数だけ、犠牲になった奴がいンのか。
その数だけ――材料にされた奴が、いンのか。オイ。
「そろそろ限界かね――俺が」
「ッ、魔物の唸り声!?」
「みんな、気を付けて！」

あァさ喋っちまった。

まァいいや。出て行こう。ンで、ちょいと大立ち回りでもしようか。性懲りもなく無策で、俺の目的にァ何も関与しねェ、魔法少女同士の諍いなンてモンでァあるけどよ。

流石に無理さ。ちっとでも旅した同行人を潰されるってな――おじさんァ、ちゃァんと怒るぜ。

「――下!!」

「下!?　地面……まさか!?」

「あァさそのまさかだよ！」

浮上と同時に斬りつける。クリスで、だ。

足を完全に機能停止させるつもりで放った斬撃。けれどそれは、光の粒の零れる剣に止められた。

「そんな、もう封印が解けて……」

「く……っ、よっぽど、あの子にご執心らしい。けど、それは私達だって！」

「ハハハ――馬鹿野郎、何笑わせてンだよ。俺ァお前ら殺さねェ。殺せねェんだ。

命の取り合いできねェんだよ。だってのによ――ハハ、クソ、笑えてくる」

横薙ぎ、袈裟懸け、体内を通しての突き、斬り上げ。

魔物との戦いで培った我流の剣技が、けれど押し切れない。こっちも押されァしないが、あァさ同等か。ケッ、やっぱり俺ァ死地に潜ったってそォ簡単に強くァなれねェってこったな。

「――【斬滓】！」

「褪戦死(即死)遠」

光の粒と死の魔力がぶつかり合う。

一瞬拮抗したかに思えたそれは、しかし確実に死の魔力が粒を食んでいき――少女の持つ剣に、届いた。

「!?」

「馬鹿が、てめェら食えねェんだから世界言語なンざ使わせンじゃねェよ。俺が傷付くだけじゃねェか」

「なに!?　魔法が――」

動揺だ。まァ突然魔法が死んだンだ、そォいう反応にもなる。

んじゃ、手首の腱でも斬らせてもらうかね。剣握れなくなりゃコイツァ終わりもいいとこだろ。

　ってな追撃を見越して吹き矢みてェなの構えてる魔法少女も見えてるよ。さっきの音の無い針だな？

「避けられた。シャオメイ、フェイランを！」

「あァさ後学のために殺させてもらうぜ」

　死飛沫を放つ。

　水の縄。その中に入った死飛沫は――目論見通り、その力を失って地面にびしゃりと落ちる。

　いいね、吸えるのァ吸おうと思った対象だけか。触れたモン全部を、ってワケじゃねェ。

「嘘、【水縄】が！」

「【壁塞】！」

「おいおいそれやったらコイツ死ぬだろうが。考えて魔法使えよ」

　上から俺を圧し潰さんと降ってくる壁を、これまた死の魔力で浸したクリスで斬

りつける。水の縄もこの壁も薄いな。世界言語使わなくても殺せるンだ。いいぜ、良い感じに情報が集まってきた。

「【斬滓】！」

「――っととォ！」

バックハンドスプリング。まァそンなことしなくてもいいンだが、癖でな。

そォして避けた所を、天まで立ち昇る光の柱。お嬢みてェなことしやがって。んで――これまた案の定。

溢れ出る光の粒。それに触れた地面が次々に切り刻まれていく。やっぱり危ねェのァ粒の方だな。つか、あの剣自体が粒の集合体と見た。

……ん。

「オイ、何こそこそ連れて行こうとしてやがる」

「ひ――こ、こっちに来た！」

「たりめーだろお前がアオン持ってンだから。ほら、返せ。大人しく返したら傷つけねェからよ。魔物に慈悲ァ必要無ェが、お前らァ必要だろ。痛い思いしたくなかったらとっとと――」

「【爆塵】!!」
「はァ!?」
爆発――結構な規模だ。
驚いて下がっちまったが、オイオイ、アオンもアイツも無事じゃ済まねェだろ。
なんつー魔法を至近距離で使いやがる。もっと考えて魔法使え！
「おい、大丈夫――か、っと！」
「ミィワン、早く行って！　こいつは私達がなんとかする!!」
「けほっ、けほっ……わ、かりました！」
あァクソ、面倒だなオイ。
俺ァお前ら殺したくねェんだよ。食いもしねェモンァ殺さねェ。つか殺せねェって何度言ったらわかるンだ。
――馬鹿が。クソ。
あンまり――笑わせンなって、オイ！
「ハ――ハハハ！」
「あれは私達の希望なんだ！　お前なんかに奪わせはしない！」

「ハハハハ！　――あァ、オイ。オイ！　そうか、つまりよ、てこたよ。おい」

口角を上げる。にィと。

伴い――それが形成される。口。口だ。よォやくできた。カカ、ハハハ。

髪があって目があって口がありや、ちったァ顔になるだろ。

「てめェら、生きてェんだな？」

「しゃ――喋った!?」

「あァ？　ハハ、なンだ――よォやく伝わるのか。あれか、発声器官の問題か。まァンなこたどォでもいい。――てめェらよ、生きるために、生きてェから、死にたくねェから！　アオンを奪うってな――そォいうこったよなァ!?」

形成されていく。

精神体であることは変わらないけれど、それが形として。

口が。舌が。喉が。肺が。

あァさ、どォ見えてンのかは知らねェ。ちょいとグロテスクかもな。半透明の身体に肺が見えてンのァよ。レントゲン写真かっての。

まァまァまァまァンなこたどーでもいい。オイオイ。ハハ、いいよ。良いよ、そ

れで。
「そ――そうだ。私達は、生きるために！　死なないために!!　蘇生槽を作らなきゃいけない！」
「ハ」
勇気ある言葉だ。
フェイラン、と呼ばれていたか。この魔法少女達の代表格。【斬滓】の魔法少女。敬意を示そう。今の俺ってな相当怖いだろォに、よくぞ言った。よくぞ宣言した。
「なら、俺ァお前らの相手をしよう。生きるために抗うってンならよ、俺の非善（敵）だ！」
「――【斬滓】ッッ！」
「褪戦（死漸）死遠」
剣と剣がぶつかり合う。
しかしそれァ一瞬のこと。一瞬にして光の剣は崩壊する。――死ぬ。
「ぁ……」
「……死ぬのが、怖いか」

「ぅ、あ……」
「怖いかよ、オイ」
「あ……当たり前、だろう。だから私達は――続くために、蘇生槽を」
「命が惜しいか。なァ、命を乞うか、魔法少女」
その首にクリスを突きつけて、言う。
皮一枚、切っ先が入ってる。だからそっから、たらりと血が流れてる。
「見逃してくれる、というのか」
「――」
あァ。
やっぱりこいつらは、魔物とは違う。
殺せねェなァ。
「アオンを返しな。蘇生槽の材料にするってンなら、お前も、他の奴らも、お前らの拠点にいる奴らもまとめて全部殺す」
「魔物が……どうして、あの子にそうも執心するんだ」
「死んでほしくねェからってだけだよ、馬鹿が」

側頭を蹴り飛ばす。
元から殺すつもりなンて無いし、時間稼ぎされるのも困る。
――さて、追うか。
「ハハ。……いいね、ちゃんと笑えるってな、っとに良いよ」
口で、笑う。
さァ――夜ァこれからだぜ。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

85・侘居琉土負不伏炉不破椎・

追う。追う。

勿論追っかけられてる側も死ぬ気だ。とんでもなく速い。飛行魔法ではなく身体強化を選んでいるあたり、キョドってる割に頭も良い様子。精神体相手に空中戦とか悪手も良い所だからな。

それにしても、ちょいと魂胆が見えねェ。

自分達の拠点に精神体引き込んでどォするつもりだろな。もっと戦力がいる、ってなが可能性としちゃ一番高ェんだが、そんならもっと攻撃に特化した魔法少女連れてきて俺と戦わせた方が良い気もする。防衛向きの能力なのか、たァ思うが、【壁塞】なンかがまさにそれだってのに出張ってきてるのも妙だ。

何より蘇生槽がまだ無いってな時点で死闘になっちゃァあいつらはマズイはず。それとも蘇生槽ってな一瞬で作り得るモンなのか？　マッドチビ先生は技術が必要とか言ってた気がするが。

「――させない」

「へェ、防ぐか！」

地面の中からの斬り付け。それァ【爆塵】の魔法少女の足に届く前に、一本の針によって止められた。

さっきから無音の針撃ってきてる奴だ。身体強化もさることながら、気配消すのも足音消すのも上手ェ。なんぞ、達人の気配がする。言ってて意味わからんけど。

「また、地面に……」

まァ地中ってな安全なンでよ。

特にお前みてェなのァ貫通力に欠ける。ティオイジが全力で放った針でさえ地中深くにまでは至らなかった。そンだけ地面ってな勢いをそぐンだ。

気にするべきは――。

「【円閃】！」

「それだよ、な！」

地面を抉り進んでくる輪状の刃。それをさらに深度を上げて避ける。地中じゃクリス出せねェし。

しかし、環境保全とか無いのかね。この辺お前らが住んでるトコなンじゃねェの

？

「もうすぐで……！」

「おォさ、もうすぐでなンだよ」

「ッ、！」

前に出る。道を塞ぐ。

先頭にいた【爆塵】の魔法少女――アオンを抱いた少女の前に、立ちふさがる。

さて――余裕ぶっこいてるけど、実は結構ギリギリなンだよな、俺。

省略世界言語からの他人の魔法の使用。それァ、申し訳ねェけどメリザだけじゃ回復しきれなかった。そこにこれだ。C級、お飾りB級だった頃に感じていた魔力切れ。ンなもんよりもっと不味いモンが近づいてるのを感じる。頭がカチ割れるよォな痛みと、身体が引き裂かれるよォな痛みと、あと――飢え。

正直全部痛ェしやべェし苦しいし嫌なンだけど、飢えが何よりも不味い。

食えと。

死して尚続きたいのなら、目の前のソレを食えと――何かが囁きかけてくる。

うるせェ。てめェが風だってンなら、今度てめェも食いに行くから覚悟しとけよ。

「ど――どうして、魔物が邪魔をする、ん、ですか」
「はァ？　お前魔物に出会った事ねェのかよ」
「言葉を繰り、亜空間や魔力を操る精神体――オリジン種。それが私達や、こ、この子を狙う理由は、無いと……そう、考えます」
「へェ」
よく勉強している。よく知っている。
俺なンかオリジンの生態や魔物のシステムなんざ、魔物になってから知ったってのに。
それに、多少言葉に詰まりァするけど……良い意思の強さだ。
絶対に生き残ってやる。絶対に目的を成し遂げてやる、ってな、強ェ意思を感じる。
「クロムクラハ――と、あなたはこの子に呼ばれていました。この子に求められたから、ですか」
「ん――、まァ理由ァ色々あるけど、別にアオンに求められたからじゃァねェよ。アオンが材料にされるからだ」

「ッ……なら、この子を使わなければ――あなたは、邪魔をしない。そう、ですか？」
「いんや？」
悠長に喋ってるけど、既に周囲にァ他の魔法少女達が展開してる。
連携ってなモンを知ってる、っつーのか、自分達がその場面に直面した時、それぞれがどォ動けばいいのかをそれぞれがちゃんと理解してる。言葉が無くても動ける。
すべてァ全員がちゃんと生き残るために。生きて帰るために。
いいよ。
今からやろォとしてるこたァ気に入らねェが、そォいうスタンスは褒め称える。
「どういう、こと、ですか」
「他の奴を使って蘇生槽を造る、ってこったろ？　当然止めるさ」
「何が当然、」
「残念ながら、俺ってなどこに行こうとなんになろォと、無為な死ってな受け入れられねェんだわ。お前らのためになる死ってなよ、けどソイツのためにァなんねェ。

ソイツが幸せじゃねェ。1に押し付けて10が幸福になるってな、俺の理念に反してる。そンだけだ」

「――魔物のくせに！」

バックステップ。距離を取ったか。

飛んでくるのァ魔法。当然のように全方位から。けどそれァ地面に潜って避けるとして。

……今の反応。

尾行してる時も思ったけど、此奴ァちゃんと倫理観のある子、だな？

自分が思ってるコトを魔物が言いやがるンで怒ったって感じだ。ハハ、いいね。

自分が我慢して、周囲に同調しなくちゃ生きていけねェから。それが自分と、そして周囲のためになるから。

だから――自分を押し殺して、やりたくねェことをやる。

前の俺みてェだ。仲間を殺してた頃の俺。

ハハハ。

「決めた。お前のあだ名は波ヘアピンだ」

「な――に、を？」
「だから、あだ名だよ。【爆塵】の魔法少女、なンて呼びかけるにァちょいと不便だろ？　その波みてェにうねってる青いヘアピン。それが特徴的だから、波ヘアピン。なンか文句あっか？」
「さ、流石に安直が過ぎるのでは……」
「どいつもこいつもあだ名に対して安直だのなンだのとうるせェなァ。ぱっと見でわかるからあだ名なンだろォが。文句ァ受け付けてねェよ、ばーか」
浮上する。
元々俺が相手をあだ名で呼ぶのァ――本名で呼んでると、そいつが死んだら、悲しいから、だった。
それは〝前〟も昔も今も変わっちゃいねェ。だからこれァお前は殺せるぜ、って宣言ってワケでもねェ。
情が湧いたと。
そォ言ってンだよ。
「――ミィワン、頭を下げて！」

「お前らにゃ湧かねェって意味でもある」

光の剣を止める。

こいつらに迷いはない。だから、こいつらを傷つけることに躊躇はない。

殺しはしない。できない。それァ俺の中で禁忌だから。それをするにァ、俺ってなもんをもっとバラして組み立て直さねェ限り無理だ。俺が俺である限り、もう魔法少女ァ殺せねェ。

けど、傷つけることァできる。その身に苦痛を背負わせることは――できる。

「【斬滓】の魔法少女――飛蘭（フェイラン）、っつったか？」

「ッ、あぁ、そうだ！　我が名は飛蘭！　群塔魔閣が一柱にして、」

「あァ聞いちゃいねェよ、お前の生い立ちァ。そーいう余計な事聞くと剣が鈍るンでな。――まず、1人」

斬る。

別に今まで手加減してたとか、世界言語でズルしたとかそォいうンじゃねェ。

こっちァ希釈されてるたァ言え死の魔力纏ってンだ。

それとこォ何度も斬り合えば、ソイツの魔力もガンガンに削っていける。魔法

を殺すことと魔力を殺すことが同義であるってな、こないだ世界言語で【世涯】を使った時にわかったよ。

忘れがちだが、身体強化魔法ってな通常魔法の余剰魔力……つまり込め過ぎた魔力や使わなかった魔力を用いて行う汎用魔法だ。つまるところ、身体強化オンリーで使う、ってな奴ァあんまりいない。冷静メイドとかはガッツリそォだったけど。

まともかく、死の魔力や【即死】で魔法を……【斬滓】を殺しまくったら、本来使えるはずだった身体強化用の魔力もガンガンに殺して行けるワケだ。

寂しんぼが【即死】は対魔法少女において有用とかなんとか言ってのァまさにそれ。

俺と打ち合えば打ち合うほどジリ貧になっていく。そうして、本人でも気付かない内に身体強化を薄めちまって、いつのまにか一般人並みにまで落ちてる、と。

今までァ俺側もジリ貧で、相手の魔力が切れる前にこっちがゼェハァしてたンで実感は無かったンだが、こォやって魔力量が増えてみると、なるほど【即死】ってなやべェ魔法だよ、ホント。

「フェイラン!?」

「殺しァしてねェから安心しな。すぐに安全なトコつれてって適切な処置すりゃ傷も塞がる。ま、痕ァ残るし斬られる前と同じよォに使えるよォにはならねェけどな。これァそういう剣だ」

クリスで斬った傷は消えない。波打つ剣ってなそォいうもんだ。縫合も難しい。【回復】や【治癒】ってな魔法の無いこの世界においてァ、相当やべェ剣さ。

けどまァ致命傷にならねェよォにしたし、傷も深くァないからすぐに戦線離脱すりゃ問題はない。

「――見逃され、て……魔物に、生かされ、て……！」

「ン。おい、あんま喋るなよ。体力使うと失血死もあり得るンだ、傷口押さえて黙っときな」

「こうも誇りを傷つけられて――生きろと!?」

「叫ぶなよ。おい、そこの【水縄】の魔法少女。早いとこコイツ持っていきな」

……。

あン？

こいつら、生き延びるために蘇生槽を造りたい、ンじゃねェのか？

そのためなら手段ァ厭わないって感じだったけど、死んじまったら元も子もねェだろ。

なんで、動かねェ。

「あー、俺が近くにいるからか？　いーよ、ちょいと離れてやる。ほれ、持って行けよ。こいつ1人じゃ走れねェだろォし。コイツ運んでる最中ァ狙わねェからよ。ほら、とっとと来いって」

動かない。

動かない。

展開している魔法少女は――未だその敵意を滾らせたまま、動こうとはしない。

「クロムクラハ！」

「ン？　っと、おわ！」

横合いから投げられたソレ――アオンをなんとか受け止める。

投げたのは勿論波ヘアピンだ。そして波ヘアピンは、【斬滓】の魔法少女を持ち上げる。

成程。

お前さんは、そっちを大事にするってなワケだ。
いいね、真っ当だ。動かない奴らよりもずっと真っ当。まァアオンを俺に返しちまった事でお仲間になんぞ言われンのかもしれねェけど、俺ァ評価するよ、お前の事。
さて、アオンに未だ巻き付く【水縄】を殺す。
これでアオンの魔力も回復し始めるだろう。ったく、すっかり衰弱しちまって。何が人命最優先だ。
「わ――私達は、帰る。他の魔法少女を使うこともない、です。だから、」
「あァ、そんなら追わねェ。魔法少女の組合に興味なンざハナから無いからな」
「――信じます」
言って。
波へアピンと、その他周囲に展開していた魔法少女達は去って行く。へェ、物分かりが良いっつーか。他の奴らはもっと抵抗すると思ってたンだけどな。そんだけ【斬滓】の魔法少女が大事なのか。
まァリーダーだし。俺にとってのお嬢、尖り前髪にとっての班長みてェなモンだ

と考えりゃ納得も行く。
んじゃ俺も帰りますかね。
つっても帰る場所なんざ見つからないンで――ま、あの洞窟で。
眠り姫と初の会話ってなモンをして、色々納得してもらいましょうか。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「クロムクラハ！」
「おォ、起きたか。どォだ、体調悪いトコとかねェか？」
「……あなた、クロムクラハ？」
「あァさ。よーやくな、喋れるよォになったンだ。お前の名前もちゃんと言えるぜ、アオン」
「思ってたのと違う……」

「ハハ、そいつァすまねェ。よく言われるよ」
　見た目ァぼんやりした身体の銀髪少女だからな。もちっと女の子女の子した喋り方でも期待してたンだろう。すまねェすまねェ、こいつァ昔っからでね。ビジネスシーンなンかじゃ標準語も扱えるンだけど、喋り言葉を気にしてられる程余裕ある世界じゃなかったからか、もう染みついちまってンだ。
「あの人達は？」
「帰ったよ。追っ払ったって方が正しいか」
「そっか」
「あァ」
　真っ暗な洞窟。まだまだ夜だから、月も綺麗に見える。
　星の無い空ってなまだ慣れてねェんだけど、そんだけ月が明るく見えるってモンだ。
　ちなみにだけどあの月は冥界にある新月と同じ。天幕のフィルターを通すと光り輝いて見えるンだとかなんとか。だからこの世界の人類がロケットだのを開発して宇宙に行こうとしても、当然天幕に阻まれる。まァ行こうと思う奴いないっぽいン

だけどな。宙には何も無ェってな、中学の教科書にもあったし。
　星が無いから宇宙へ浪漫を馳せる奴もいねェのさ。宇宙なんざ無いってのがまァまァな真実なンだが。
「これから、どこに行こうか、クロムクラハ」
「あァ、それなんだがよ」
　さて――どォ切り出すか。
　お前をどこぞの魔法少女組合に置いていきたい、なンて。言えんのか、ソレ。俺。
「私から、離れたい？」
「……なンだ、わかってたのか？」
「だってクロムクラハ、最初に私が連れて行かれそうになった時、助けてくれなかったもん」
「あー」
　切り出す前に、切り出された。
　よく見てるねェ幼子は。5歳児にしちゃマジでちと聡すぎるが。
「なんでか、だけ。教えて欲しい」

「……俺ァよ、やんなきゃいけねェ事があんのさ。もっともっと強くなって、他の魔物を率いる事ができる程に強くなって――行かなきゃいけねェとこがある」
「それはどこ？」
「あそこさ」
指を差す。
月を。
「……そこに、私はいけないの？」
「いけねェ。まだ空を飛ぶのもできねェだろ？」
「できたら、いけるの？」
「いけねェ。お前さん、魔法は強いけど、弱いからな」
「そっか」
これを無駄足だとはもう呼びたくないけど、寄り道であることに変わりはない。
セイタスの記憶と血肉。アダンシー、バチョウ、名前も知らない惨殺された魔物たち。ティオイジ。メリザ。その他、もっともっと、沢山いる。そォいう奴らを食らって俺ァここにいて。そォいう奴らが目指してた場所を目指してここにいて。

止まってられねェのさ。殺した分ァ生きなきゃいけねェ。歩かなきゃいけねェ。俺ァ暴走繭みてェに強かねェからさ、歩き続けてないと――止まっちまいそうになる。

「じゃあさ、クロムクラハ」

「あァ」

アオンは――どっか、真剣な目で。

5歳児のしていい目じゃねェよ、それ。

「――私を食べて」

「……――は？」

一瞬。いんやさ数瞬、何言われたのか理解できなかった。

何言ってンだ。

それは。

俺の、逆鱗だぞ。

「何言って」

「だって、私はクロムクラハの旅についていけない。なら――クロムクラハの一部

になって、クロムクラハと一緒に行きたい。クロムクラハと一緒に生きて、クロムクラハの役に立ちたい」

「――」

どろりとしたものが零れそうになる。

何言ってンだよ。

助けたンだぞ。お前。殺されそうだったのを。殺しそうだったのを。何言ってやがる。俺が殺すワケねェだろ。何の意味がある。魔法少女を食らったって何にもならねェ。生まれ変わった時に続くかもしれねェってそンだけだ。新しく生まれた時に強きとしての堆積を持てるかどォかって、そんだけだ。

それを――なんだって？

ついていきたいから、やれ、って？

「アホか、お前」

「……」

「俺がお前を殺したいって。そォ思うって。本気で考えてンのか？」

「殺すんじゃないよ。食べるの」

「同じだ。魔物じゃねェんだよ、お前は」
「でも、クロムクラハも魔物じゃないでしょ？」
「！」
……。
なんだよ。お前。
聡い聡いとは思ってたけど、そこまでわかんのかよ。
「クロムクラハは、ホントはちゃんと、他の名前があって。クロムクラハは、ホントはちゃんと、家族がいて。私じゃない誰かを守るために、その行かなきゃいけない場所、ってとこに行こうとしてる。違う？」
「……違わねェ」
「だよね。クロムクラハが喋れない時から、なんとなくわかってたよ」
「そりゃ、すげェな。俺の心でも読めンのか」
「うん。抱きしめられてると、伝わってくるの」
それは、精神体だから、とかなのか。
それともアオンがすげェのか。どっちも、なのか。

「食べて」
「嫌だ。それだけは、嫌だ」
「――じゃあ、あの人達の所に行く」
「……なんで」
「クロムクラハは、助けに来てくれる？」
蠱惑的に。
やめてくれ。それ以上、俺の逆鱗に触れないでくれ。
お前ァ――ちゃんと守りてェって、よォやく思えてきたのに。
嫌いになっちまう。
非善にしか見えなくなっちまう。
「死にてェのか」
「ううん。クロムクラハと一緒に居たい」
「それが無理だとなったら、死しかねェのか」
「それが無理だったら、生きてる意味がないもん」
――やめろ。

何だよ生きてる意味って。馬鹿が。
生きてる意味なんざなくてもいいだろ。寿命限界を無理矢理引き延ばされてるワケじゃねェ、もう生き抜いて心だけに成っちまった奴ってわけでもねェ。
無為に生きて何が悪い。無駄を浪費して何が悪い。
死ぬ？　食われる？
それこそ、意味がない。
「ね、クロムクラハ。〝クロムクラハ〟がどういう意味なのか、知ってる？」
「……いいや。生憎、この辺りの言葉にァ疎くてな」
「クロムクラハはね、私達の村で信じられてた神様なの」
「へェ。俺ァそんな大層なモンじゃねェよ」
「戦いと、死と、太陽の神様。お爺ちゃんたちは、風と夜と太陽の神、って。そう呼んでた」
……そりゃまた、賢者も良い所な爺さんがいたもんだな。
世界の真理を理解してるとは。死んじまったが。
しかし、なるほど。あの村がそんだけ賢い奴らの集まりなら、アオンの聡さにも

頷ける。

　クロムクラハ。

　夜の使徒であり、元太陽の使徒であり、現風の使徒である俺にァ――確かに、これ以上ない名前なのかもしれない。

「それが、なンだよ」

「私達の村が、なんであの場所にあったのかわかる？　あんな――いつ魔物に襲われてもおかしくない場所に。森の中、なんて。そんな場所に」

「……意味なンか、あんのか。人と人が集まった場所が村になる。それだけだろ」

「ううん。――あそこに村があったのは、いつかあの場所にクロムクラハが訪れる、って。そういう言い伝えがあったから」

「言い伝え……」

　なんだ、それ。

　――まるで、俺が来たのァ運命である、みてェな。

　あそこで死んでた奴らも。魔物も。あらかじめ決まってた、みてェな。

　やめろよ。やめとけ。

「じゃあ、問題。――あの村で、私はなんだったでしょーか」
「何だった、って。なンだよ。小せェ子供。それ以外になンかあンのかよ」
「答えは――捧げもの。あの日、クロムクラハが来ると――そう予言されたあの日に、クロムクラハのために、その生贄にならんと用意された、」
「もう、いい。やめろ。誰だそんな予言しやがった奴」
「【運誓】の魔法少女」
……そォかい。
余計な置き土産しやがって。やっぱり封印措置食らって当然じゃねェか。
じゃァ、なンだよ。
そのために。
そのためだけに、あの村はあんな危険なトコにあって。
そのためだけに――アオンは生まれて、捧げられて――魔法少女に覚醒した、って？
ハハハ。
「ふざけんなよ」

「だから、クロムクラハに要らない、って言われたら――私には、生きている意味が無いのです」
「ふざけンなって」
「なら、まだあの子達の蘇生槽？　だっけ。それになった方がマシ――」
どろり。こぽり。
とうとう溢れ出た。
――それは、洞窟全体を暗く染め上げる。
死の魔力。
俺に付随するもの。【即死】も【死漸】も【世涯】も、これの派生物でしかない。
夜の使徒。否、一度完全に死したものであるという――この世界における死者よりも死んでいる存在の証。
それが、水みてェに、いんやさもっとドロっとした何かみてェに――辺りを染め上げる。
死んでいく。洞窟が、そこに含まれていた全てが。虫が。あるいァ動物が。
俺とアオンを除いて――全部が、どろどろと死に浸されていく。

そんなもの――俺の意思じゃ、無い。
これァ。
「――てめェ、わざとか」
「うん。ごめんなさい。――私の本当の役目は、クロムクラハを覚醒させること」
「だから、適当言ったのか。死にてェとか食われてェとか」
「ううん。それは本当。本心だよ。今まさに、私の役目は終わった。だから、本当に生きる意味も無くなった。クロムクラハと一緒に居たいのも本当。――私に優しくしてくれた、初めてのヒト」
「……――あァ、なンだ。あそこにいた村民……魔物と戦ってる奴らごと、殺したのか、お前」
自分の役割を理解していて、それを受け入れていて。
それはそれとして――自分を人間扱いしねェ奴らにァ恨みがあって。
だから、殺した。
自分が魔法少女に覚醒したことさえ気付いてた可能性がある。だってそォすりゃ、その因子を狙って魔物が集る。あの村の奴ら全員に魔法少女の因子があったンじゃ

ねェ、此奴はなるべくしてなったンだ。そうして――全部を終わらせて。

ふーちゃんの【運誓】の通りに、俺が来た。

そんで、全部が全部役通りに動いたかどォかは知らねェけど。

こうやって――この、あァ、マジで神さんみてェな状態になるよォ、俺を誘導したと。

ふざけやがる。

「私はクロムクラハを謀ったよ。……それでも、食べてくれない？」

「馬鹿が。誰がするか、そンなコト。それに俺の名はクロムクラハじゃねェ。前提からして違うンだよ」

「ううん。貴女はクロムクラハ。今、そう成った」

「なってねェよ。俺ァお前を食わねェし、魔法少女にも魔物にも寄らねェ」

「――≫かくして魔物達の王クロムクラハは、数多の魔を率いて天へと昇る。流れる銀糸。碧き瞳。彼女は魔を惹き付ける。風も太陽も夜も彼女に従うだろう。何故ならば、彼女は前に進むもの。如何なる姿となっても、前に進み続けるもの。すべては彼女の後に続き、その道筋を彩るだろう。それこそが唯一つの正解だと知って

いるがために≫」
うるせェ。
予言の内容なンざ聞いちゃいねェんだよ。
あァ、魔煙草が吸いてェ。イライラする。なんだよ。馬鹿野郎が。余計な事言い残してンじゃねェよ。ぶっ飛ばすぞオイ。
「――クロムクラハ」
「違ェって言ってンだろ」
「人がいっぱい、来るよ。多分、クロムクラハを討伐するために」
「あン？」
……確かに、何かが近づいてきてる気配がある。
死の魔力が暴走してるせいか、命の気配がわかりやすい。魔法少女の頃よりくっきりとわかる。
やめとけ、近付くな。
危ねェぞ。
「……とにかく、下がってな、アオン。アイツらは俺が相手する」

「ううん。私も戦うよ」
「そンで、死ぬ、とか言わねェよな」
「今バレちゃったから、言わない」
内憂外患たァ違うが。
どォしてこう――あァ、くそ。
とりあえず追っ払うか。話はそれから、ってな。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「クロムクラハを視認しました！　隣には件の魔法少女の姿も確認できます！」
「良いだろう――皆の衆！　あれなるはオリジン！　ＥＤＥＮの者でも手こずる最強種だ！　心してかかれ、そして――身の安全を考えるな！　いくらでも死を臨め、我らはもう背を心配する必要が無い！」

「オオオオ!!」
沢山――どころじゃ、ねェな。
１００人くらいいる。【斬滓】の魔法少女がちょいとだけ口走ってたっけ？　群塔魔閣……だかいうの。ＥＤＥＮに比べたら少ねェが、こっちの組合もしっかり組織してンのな。
で――それよりよ。
「よォ、アンタが群塔魔閣だかの長か？」
「ほう、喋る魔物であるとは聞いていたが、知性もあるとは」
「あァさおしゃべりしてェわけじゃねェんだ。ちと聞きたい事があってよ」
長い茶髪の、強気な目の女。
魔法少女衣装ァなんかチャイナ服って感じ。ポニテスリットと同じくらいスリット入ってるンだが、それ以上に色々露出が多い。
さてはて。
なァ。
「身の安全を考えるな。いくらでも死を臨め。背を心配する必要ァ無い――って

な、どぉいうこった。お前ら、蘇生槽持ってねェだろ？」
「我らの心配とは、オリジンとはこうも他者を見下したものなのか」
「あァさ、別に見下してるわけじゃねェって。単なる疑問だよ。まァいいや、アンタが答えねェなら他の奴に聞くよ」
「良いだろう。魔物如きに教授するのは勿体の無い内容だが――これから自らの身に起きる事を考えれば、気になるのも当然。――簡単だ、造ったのだよ。蘇生槽を。故に我らはもう死を恐れない。貴様がどれほど強かろうと――」
「造った。――材料ァ、誰だ」
なァ、波ヘアピン。
他の魔法少女ァ材料にしねェって言ったよな。
あァ。オイ。
今ちっとばかし気が立ってンだよ。
「ほう？　魔物がそれほどまでにこちらの事情に詳しいとなると――あの魔法少女にでも聞いたのか？」
「お前さん、話逸らすの好きだなァ。人望無さそうだ。長は誰かに代わってもらえ

よ。絶望的な状況になっても誰も助けてくれなくなるぜ」
「ふっ、――確かに、既にそうなったものを目にした後だと、少しばかり気を付けなければならないと思えるな」
――あーあー。
やっぱりか。
やっぱりなのか。
あーあーあー。
そォだよなァ。
やけにあっさり退いたな、って。思ったよ。
っとに――クソみてェな世界なことで。
「飛蘭、つったか。――勇気のある奴だった。強い意思を持ってる奴だった」
「そうか。貴様にはそう見えたか」
「成程なァ。誰でもいいなら、損の少ない方を、ってか。クソ野郎」
クリスを引き抜く。
カリスマで引っ張ってるンじゃなくて、立場で抑えつけてる感じは確かにあった。

鬱憤か。その群塔魔閣ってながどンなトコか知らねェけど、派閥争いの酷ェとこと見た。
だから、いつか引き摺り下ろしてやるって。
その機会が――丁度、訪れて。
「亜空間ポケット……聞いていた通りか。そしてその剣も」
「ハハハ。んじゃ後はわかるよな」
「無論だとも。――クロムクラハ。貴様を、群塔魔閣全軍を以て討滅する！」
どいつもこいつも逆鱗踏み抜いてきやがって。
相手してやるよ、クソ共。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

86・噛夢風呂無阿符阿安堵気途炉止似浴微椅・

イラついちゃいるが、冷静に考えねェといけねェコトもある。
アオンを取り戻してからまだ魔物を食ってねェんだ。世界言語の乱用による傷ァ癒えてねェままだし、飢えの囁きも聞こえるまんま。その上でこのドロドロした魔力をどォにか抑えきれねェか考えなきゃだし、目の前のにも、他のにも対処しなきゃだし。アオンが死なねェよォに見張らないといけねェってのもある。
ああ、クソ。
冷静に考えるコトが多すぎてイライラする。
「【飲影】」
「馬鹿が、突っ込んできて何になる――、ッ!?」
「ほう、避けたか。やはり知性に長けるな」
クリスで受け止めようとして、即座に退いた。
なンだ今の。一瞬だけど、クリスが飲み込まれた？
「……月明りか」

「わかっていても、止められまい！」

とびかかってくる。

その身体で月明かりが遮られ――影ができる。

途端、足元が水になったみてェに身体が沈んでいく。俺ァ空中にいて、精神体だってのに、だ。

オイオイ、魔法らしィ魔法が出てきたな。自然法則をどォこうする系じゃねェ、【凍融】や【侵食】みてェにマジのえげつけねェ魔法って感じだ。

殺すが。

「飛び散れ！」

魔法を殺してる一瞬の隙。

そこを狙って、別の魔法少女が……なンだ。えーと。表現が難しいンだけど、トゲトゲした実みてェなのを飛ばしてきた。

なンか嫌な予感がしたンで亜空間ポケットを開く。

「あっ!?」

「これ、あンまりやる魔法少女いねェよな。結構便利な防御方法だと思うンだけど」

まァ亜空間ポケットってな自分に向かって内側にしか開かねェから扱いがむずいってなあると思うが、もっと使われてていいと思う。
多分だけど、あのトゲトゲした実ァ対象に近づくと爆ぜるンだろうな。飛び散るンだろう。こえー魔法その2、と。
これが後98個あるってな、気が遠くなるねェ。
「――【断巻】」
「あ、オイ！」
俺を囲うよォにして、全てを切り裂く嵐が出現する。
馬鹿野郎、ンな手加減の無いことしたら、死人が出るだろうが!!
「私はクロムクラハに捧げられた生贄。なら、クロムクラハと共に戦うのは必然」
「俺ァクロムクラハじゃねェって何度言ったらわかるンだ」
「だったら、逃げればいいのに。私を置いて、どっかへ逃げちゃえばいいのに、なんでしないの？」
……それは、そうだ。
アオンがそォいう謀り事をしてて、俺が神さんに祀り上げられよォとしてて。

今俺ァ傷付いてて、戦わなきゃいけねェって事も無くて、別にアオンも狙われてねェってンなら。

戦う必要は全く以てない。

逃げりゃいい。

逃げて、また普通に魔物狩って食って上を目指せばいい。魔法少女なんぞに構ってる暇ァ無いんだって、何度も言ってンだから。

それをしないのァ、なンでだ。

「予言の続き、聞く？」

「いや、いい。どうせ俺が魔法少女を殺すとか、魔法少女を取り込むとか、くっだらねェ事が続くンだろ」

アオンの【断巻】は相当な威力なよォで、魔法少女は誰1人として入ってこない。

逃げるなら今だ。

そのくっだらねェ予言から外れてェなら、今逃げりゃいい。地面に潜るでも天空に行くでもして逃げちまえばいい。この死の魔力もどっか静かなトコで落ち着けばどォにかなるだろ。

なンで、それをしない。
「クロムクラハはね、もう、欲求に耐えきれないんだよ」
「……何を」
「自分の触れて欲しくない所に触れてくる人達を。自分が許せない事を平気でやってくる人達を。――倫理とか、心の枷とかぜーんぶ外して――」
「言ってンだ、お前」
漏れ出でる。
更に更にと――それは、濃度を増して。
死の魔力が。
「殺したい。気に入らないものは全部、殺してしまいたい。だって、クロムクラハが目指す世界を創るのに、そういう人たちは邪魔だから」
「ハ」
あァ。
そっちに誘導してェのか。
ハハハハ。

馬鹿だな。倫理や心の枷で俺がヒトを殺したくねェって言ってるって、そォ思ってるワケだ。

ハハハハハハ!!

「ハハハハ――あァ、そォだな。ちょいと我慢しすぎてたみてェだ」

「だよね。じゃあ、クロムクラハ」

「あァ――」

ったく。

折角大切になりかけてたのによ。

もういいよ、お前。

嫌いだわ。

「――糸伊豆阿止理負不伏零矢堕千経度戸地内途(それはよにささげるいのりのものがたり)」

死の魔力を、どろっとしたソレを、全域にちりばめる。

無理矢理広げて、無理矢理希釈する。アオンの【断巻】も、アオン自身も、他、この場に集まった魔法少女の魔法とその身体すべてに薄い死の魔力を浴びせる。

「え――」

「うるせェ。俺ァクロムクラハじゃねェ。梓・ライラックってンだ。んで、お前の大切な神さんでも、お前を殺してくれる奴でも、お前を食う奴でも、あいつらを殺すヤツでも、全てを導く王様でもなンでもねェんだよ。――褪戦死遠(痛烈)!!」

「――ぎ、ィ!?」

各所で悲鳴が上がる。

俺の精神も悲鳴を上げる。

視界全てが効果範囲。っつーのァまァ再現できねェんで、死の魔力が痛みに変換されただけだ。

それでも――効果的だろう。あァさ、殺さねェ魔法としちゃ最高だな、鬼教官。

「じゃァな。死ぬなら勝手に死ね。俺ァもう止めねェよ」

「……ぁ」

高く上昇する。

地面で呻いてる奴らを無視して――飛ぶ。

向かう場所ァただ1つ。

「――ぶっ壊してやるよ、群塔魔閣」

舞い上がりやがって。
もう死ねなくしてやる。蘇生槽どころか――居住区の全部をぶっ壊してやる。
つけあがりやがって。
我慢の限界だよ、本当に。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

魔力をこォも垂れ流してると、魔物も寄ってくる。
ンなこた思っちゃいけねェってわかってンだけど――あァさ、丁度いいとか、思っちまった。やべェな、どんどんオカシクなってる。命ァ尊ぶものだ。俺が魔物を殺すのァ、あくまで食うためだ。強くなるためだ。
でも、生きるためではある、か。
「私はウイースプ。貴女は？」

「俺ァ梓だ。梓・ライラック」
「クロムクラハ――ではないの？」
「クロムクラハだったら、なンだよ」
「……いいえ。じゃあ、殺し合い、しましょ。私が勝ったら貴女を食べる」
「俺が勝ったらアンタを食うよ」
「ええ」
寄ってくる。
寄ってくる。
勝てねェって、無理だってわかるだろォに――寄ってくる。
この死の魔力を見て、明らかに無理だってわかってるクセに。
なンでだ。なんなんだ、魔物のそれは。
「なんで、死にに来たンだよ」
「――当然ですが、自分達では無理だと判断したがためです」
「……お前は？」
「ファトゥスといいます」

「そォか。俺ァ梓・ライラックだ」

並走するように。

ウイースプの身を食らう俺に――冷静に、説いてくる。

その身が既に死の魔力に浸され始めている、なンて気にも留めず。

何なんだよ。

「私達は究極なる一を目指しています。しかし、どうやら残された時間はそう多くなく――頂きに至り得る魔物は数えられる程。なれば、私達のように弱きものは、強きものの糧になる役割を全うすべきなのです」

「――生贄になる、とでもいうのか」

「あくまで風の摂理に則って、です。――では、殺し合いをしましょう。私達の血肉を食らい、どうかどうか、上を目指してください」

震える。

今から魔法少女の拠点を１つ潰しに行く。その行為は正に魔物そのものだろう。

俺は今しがた、予言だのなんだのから逃げて、イラつく方を潰しに来た。そのはずだ。

だってのに。
――それさえも、そう、なのか？
「頂きは――貴女を待っています」
言って、死んでいったファトゥス。
ウイースプも。いんやさ、今尚集まってくる――確かに弱い、オリジンなどには遠く及ばないそれらが。集まり、集り、寄って。
まるで、俺の欠けている部分を補うかのように。
まるで、俺の腹が空いているから――食べてください、とでもいうかのように。
ちゃんと殺し合いはしかけてくる。ちゃんと死ぬ気で、ちゃんと生きるために、ちゃんと、ちゃんと、真剣に。
けど――あまりにも。
「時間がない、のか」
「そだよー。もうね、時間が無いの。さ、殺し合いをしよう」
「せめて名前だけは名乗ってくれ。俺ァ絶対に忘れねェから」
「ルプラホーン。貴女の名前は知っているよー。クロムクラハ、だよね」

「いいや。俺は梓・ライラックだ」
「そっかー。じゃ、殺し合いをしよう」
震える。
手が。あァ、いつのまにか手が形成されていた。顔もある。
なんでだ。
やめろよ。必死に生きろよ。それが魔物の良い所だろ。死ぬと分かっていて、真剣に、強きに挑む、なンて。
それならまだ、セイタスとラハブの戦いの漁夫の利狙ってたヤツの方が、まだ、〝生きてた〟じゃねェか。
「憐れみを向けるな、クロムクラハ。元より我らは死を目指すモノ。それを心得よ」
「……俺は、梓・ライラックだよ」
「我はコイスタ・ボドワという。――その記憶に名を刻める事を嬉しく思う！」
なんでだよ。
それはもう――死にに来たって。
そォいってンのと一緒じゃねェか。

「ようやく現れた――神に成り得る魔物、クロムクラハ！　もうここら一帯の魔物はみんな気付いてるよ！　ようやくその時が来たんだって！」
「何度も言わせんな。俺は梓・ライラックだ。他の誰でもねェ、梓・ライラックだよ」
「でもそれは、風の名前じゃないでしょ？　僕はガンシィン。ほら、わかった？　君には夜の名前と、太陽の名前がある。クロムクラハは、風の名前」
「……風の、名前」
名付けられただけの名前が。
梓・ライラックや、アンディスガルに並ぶ、って？
――いや。
そうか。梓・ライラックだって、アンディスガルだって――名付けられただけの名前だ。あるいは、〝前〟の名前だって。
「じゃあ、死んでね、クロムクラハ」
「死にながら言う言葉じゃ、ねェだろ」
「あはは。――頼んだよ」

何をだよ。
やめろよ。
クソ。
――クソ。
「回復しきっちまったじゃねェかよ、クソが」
向かう。
万全の状態で――群塔魔閣へ。

遠《text:s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

群塔魔閣。その名の通り、幾本もの塔が立ち並ぶ、中華風の建造物。赤と黒のコントラストの美しいその場所の、中心。一番大きな塔に、強大な命の気配があった。
魔法少女たちよりも早く辿り着いた――はずだった。

そこに１人。いた。１人だけ、誰よりも早く。
「……よォ、波ヘアピン。なンでお前だけなンだ？」
「……もうすぐ、みんな来ますよ。でも、蘇生槽は１つしかないので」
「真っ先に死んだのがお前、ってことか」
「はい」
死を使う事による短時間での長距離移動。
久しぶりに、見たな。
「それ」
「……」
「【斬滓】の魔法少女……飛蘭、って奴なンだよな？」
「そう、ですね」
「じゃ、壊すよ」
「……なんでですか？」
さっきのルプラホーンの爪を噛む。
あァさ。なんで、だって？

「それがあると、お前らは死を厭わないだろ」
「これを今壊したら、これがあると思って死を選ぶ魔法少女が、死にます」
「同じだろ。遠征先で死ぬのと、蘇生槽使うために死ぬの。どっちも死だ」
「違います。蘇生槽があれば、私達は死なないんです」
その問答はもういいよ。
俺ァそれ嫌いなンだよ。
「なンで、蘇生槽の材料に魔法少女が必要なンだ」
「……蘇生槽は、〝恒常的に魔力を抽出できるもの〟を原材料にします。魔法少女が最も適しているというだけで、膨大な魔力を貯め込んだ魔石などでも問題はありません。そんなものが簡単に見つかるのであれば、私達もそれを選んだことでしょう」
「はン。なるほどね」
じゃァまァ、ＥＤＥＮへの嫌疑ってな完全に定まったワケじゃねェのか。
それでも、だが。
「私達にはこれが必要なんです。これがないと、魔物と戦えない」
「ンなこたねェだろ。お前の魔法もだけど、随分と強力でえげつねェ魔法が揃って

る。連携すりゃァその辺の魔物にゃ負けねェ。事実今までそォやってきたンだろ」
「それでも、犠牲は出ていました」
「そォかい。そりゃ悲しい話だな」
クリスを引き抜く。
命の気配。それは塔にあり、気配自体がどんどん大きくなってきている。
「順番待ち、か」
「そうですね。蘇生には時間がかかります。その上、蘇生槽が1つしかないので、さらに時間がかかります」
「……それァよ。つまり、あっちにいる魔法少女ァ全員死んだ、ってことか」
「全員還った、ということです。確認はしていないので、恐らく、ですが」
そォかい。
あー。
ダメだな。それでも俺は――ダメだ。
死の魔力。
それが――建造物を、静かに殺して行く。

俺のいる場所。周囲の建物。それが萎れるよォにして壊れて行く。木造なンだろうな。見た目、ちょいと【終焉】に似てきたかもしれねェ。

「それでも、俺ァそれを壊す」

「殺しはしないと――貴女は言っていました。これを壊す事は、フェイランも、群塔魔閣の魔法少女達も、その全員を殺す事になります」

「ならねェよ。死を選んだのァソイツだ。……【斬滓】の魔法少女だけは、違うか。そいつには弔いさ。既に訪れた死を漸く迎えさせるってなも、俺の役割でね」

「役割……」

「あァさ。俺は死を便利な道具みてェに使う奴らを否定するし、死んだ後も縛られる事を否定する。死んだら終わりだ。終わりだけを、俺ァ肯定する」

「なら――私達魔法少女に、安住の地はないんですか？」

「人間にも魔物にもンなもんはねェよ。欲しかったら死者にでもなるンだな。冥界はずっと平和だぜ」

さァ。

「そこをどけ、波ヘアピン。俺ァお前を傷つけたいとは思わねェ」

「きょ――拒否、します。私はこの蘇生槽を守り通す義務がある」
「なら、死力を尽くしな。俺もそぉするからよ」
踏み込む。
足が形成された。左腰だめに構えたクリスを、右に向かって大きく振り払う。
死飛沫。濃密な死の魔力。相変わらず暴走してるこの魔力を抑えるってな難しいンだが、無理矢理方向性を変えるのァできる。
――しかしそれは、俺と波へアピンの間で起きた小規模な爆発によって防がれた。
「チャージ時間短ぇンだな。前の時も思ったけど」
「……貴女は、何者、なんですか。……魔法少女の事情に詳しすぎる」
「あァさ、元魔法少女だよ。クロムクラハじゃねぇのさ。俺は梓・ライラック。【死漸】の魔法少女。最終的な等級区分はＡ級だったが、まァ今の魔力量ならＳ級も難くァねぇだろうな。魔法は使えなくなっちまったが」
「元、魔法少女。なら――蘇生槽の大切さが、わかるはずです」
「わかんねぇな。一回も使った事ねぇからよ」
「戦闘をしない魔法少女、ですか」

「いんや？　バリバリに前線出てたぜ。弱ェクセにな。おかげで腕だの肌だの足だのを失ってた。けど、一回も死んでないのさ」

死ねば治るのに、と。

何度言われたのだろう。お嬢やポニスリだけじゃねェ、色んな奴から言われたし、そォいう目で見られた。

ハハハ。

馬鹿言ってんじゃねェ、ってな。

「そうまでして、死を喪失にしたい理由はなんですか」

「死は喪失だからだよ。俺がしたいンじゃねェ、元からそォなんだ。それを捻じ曲げてる方がおかしいンだ」

「死を回避できる術があるというのなら、それに縋るのが人間です」

「そうだ。死を忌避し、回避できるよォに努め、死んじまったのなら悼むのが人間だよ。死を利用するのァ人間のやることじゃねェ」

斬りつける。

爆発を殺しながら進めば——波ヘアピンは、自らの亜空間ポケットから剣を1本

取り出して、クリスを受け止めた。
剣、使えたのか。
その反った形ァなんだ。青龍刀とかいう奴か？
「なら！　なら、ならば！　私達は――何のために、ここまで犠牲を出してきたんですか！」
「はァ？　今を生きるために決まってンだろうが。死ぬためなワケがあるかよ」
「違います。違います!!　――私達は、安心できるように、日々死を恐れずに済むように、ここまでやってきたんです。――今を生きるために！」
背後――ごぼりと。
蘇生槽が、音を鳴らす。
……あれを壊すのが、殺人？
はン。
そればっかりは、否定するぞ。
「糸伊豆阿派青磁負不伏零矢堕千経度戸地内途（それは夜に捧げる一節の祈り）」
駆ける。

爆発――【爆塵】を殺して、その青龍刀もぶった切って、形成された足でしっかりと地を踏み締めて――波へアピンの背後を取る。

「やめて！」

「やめねェ」

クリスで――突く！

蘇生槽。仄明るい光を放つ、青き培養槽。

構造なんざ知らねェが――死の魔力、その全てを注ぎ込む。

「藍永封無減琉（私は終わりを肯定する）！」

終われ。

そして、死ね。【斬滓】の魔法少女も、群塔魔閣も。

悉く。

「ぁ……」

「……」

光が消える。

機能が停止したンだ。そのまま、蘇生槽にはどんどん罅が入っていく。勢いは止

まらない。ただ、その中で。
こぼこぼと――液体と、何か――半透明の、多胞体が。
これは、なんだ。
「あ――あ、あ！」
「……もう無駄だ。蘇生槽は殺した。お前の仲間はもう、蘇生しない」
「どいて、どいて！　――集めないと、全部、全部、一個だって取り逃さないように、零さないように」
その鬼気迫る表情に、思わず退いてしまう。
波ヘアピンは、涙を流しながら、その多胞体を集め始めた。1つ1つを手に取って、亜空間ポケットにしまう。
何をしてる。
「……オイ。まさか、それが」
「みんな。大丈夫。大丈夫だから。――必ず生き返るよ。必ず。また蘇生槽を造るから。――そうだ、あの子。あの【断巻】の子がいれば」
みんな。

波ヘアピンは、その多胞体に呼びかける。
似ている。
いつか――俺が殺した、ベルウェークのコア。
あれによく、似ている。
まさか。
まさか――そう、なのか。
「――それが、魔法少女の、本体、か」
「……そんなことも知らずに、壊したんですか」
それは、いったい、何なんだよ。

遠《ｔｅｘｔ.ｓ1.2》吠えよ遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「落ち着いたか、……なんて、俺が聞くのもおかしな話だが」

「……」
「それは、魔法少女の核。そうだな？」
「……はい」
あァさ、喋ってくれる気はあるらしい。
……ふゥ。何が切っ掛けかはわからねェが、死の魔力の暴走も収まった。
この、人っ子一人いねェ、半壊した赤い塔で――問う。
「謝らねェぞ」
「謝ってほしい、なんて思ってません」
「そォかい」
「はい」
俺ァ後悔してない。
なんならＥＤＥＮのだって今すぐぶち壊しに行きてェ。世界全土の蘇生槽全部ぶち壊せば、その製法も失わせりゃ、もう魔法少女は死のうなンて思わなくなるはずだ。
それが最適解と見た。

けど、気になる事は尽きない。

「……それが、核なら。魔法少女ってな、なンだ」

「……魔法少女は、その覚醒と同時に核を心臓から因子へと移します。一度も死していない魔法少女であれば、その核は胸中にあることでしょう。そしてその核は摘出が可能であり――その核を蘇生槽に入れる事を、〝経路を繋ぐ〟、といいます」

あァ。

そういう、話か。

魔法少女の因子。それがそのまま、ソレか。

「なら、そいつらはまだ」

「はい。死んでません。もう一度蘇生槽に入れる事ができたら、時間はかかるでしょうけど、生き返ります」

「……なら、俺ァそれを壊さねェといけねェな」

「もう、亜空間から出しませんから」

魔法少女と魔物は同じだ。

魔法少女の方が生物らしくねェってだけで、その生態に差異はほとんどない。そ

れを今痛感した。
「――アオンを、蘇生槽にするのか」
「いえ。それは貴女が許さない。今、みんなの命の存続は私にかかっている。私は貴女の逆鱗に触れるような事はしません。貴女がどこかへ行くまで、あるいは私が貴女から遠く離れるまで――私は貴女から逃げ続ける」
「そぉしてくれると助かる。目に付くトコでやってたら、また殺しに行くよ」
「……」
なんだかな。
……それでも俺ァ、後悔はしてない。
それを殺人だと罵られようと。
「元、魔法少女だと。そう言いましたよね」
「ン？　あァ。そうだよ。ＥＤＥＮで魔法少女やってた」
「……魔法少女は、ご覧の通り核を本体とします。つまり、外側で活動している魔法少女とは、核によって遠隔操作される人形でしかありません。ただし、一度も死んでいない場合、核はその胸中にあるため、その身体が本体となります」

「はァ。成程。それで？」
「貴女が肉体を失った経緯はわかりませんが――貴女が本当に元魔法少女だというのなら、その精神が核の影響を全く受けない、ということはあり得ません。貴女の魔力が暴走したのは、核に何かがあったからだと思われます」
「へェ。なンだ、助言してくれンのか。親の仇以上に最悪の敵だろォに」
「早く核のある場所に行ってください、と言っているんです。こんなところにいないで、消えてくださいと。そう言っています」
「成程ね」
核に、何かあった、ねェ。
心当たりしかねェな。
「んじゃ、お望みの通り俺ァ行くよ。じゃあな、波ヘアピン」
「二度と。相見えない事を願います」
「はン、そりゃお前次第だな」
浮き上がる。
――さて、そろそろ良いだろう。

時間が無い、らしいからな。
スーグとシュジに挨拶して――向かうかね、ジョームンガンダーとやらのトコに。
……アオンはまァ、もういいだろ。俺アイツ嫌いだし。勝手にしてくれ。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

「――見違える程強くなったな、ライラック」
「オリジン種。そう名乗り得る。恥なく、誇りをもって」
「あァよ。――で、まァ話を長くするつもりはない。俺ァ今からジョームンガンダーのとこに向かう。異論があっても受け付けねェ。時間はもう無いンだろ？」
「……」
ジャカンに燃やされた密林は、今やほとんどその痕跡を残さず再生している。
森は強い、だったか。本当らしい。

「ライラック」
「梓。我らを――」
「食え、とか言ってきたら、俺ァもうこの島に来ねェからな」
「む」
　む、じゃねェんだよ。
　クソが。言いだしそうな雰囲気はしてたよ。
「最初に言っただろ。俺ァ仲間を求めてンだよ。仲間食ってどォすんだ」
「……だが、我らよりお前の方が今や頂きに近い。お前より弱い我らを引き連れる意味はあるのか？」
「あるに決まってンだろ。馬鹿が、1人じゃできる事が限られてくンだよ。究極なる一になるっつーのァ死にたいからだろ。それまで道程は1人じゃできねェ。特にこっちの世界を救うなンて偉業が、たった1人の魔物にできるかよって話だ」
「そうか。――わかった。であれば、我らはお前の背を押そう。ジョームンガンダーを殺すか、食らうか、従えるかはお前の自由だが――」
「我らはお前の勝利を願う。そして、お前が王となり、我らを率いる事を夢見て待

とう」
「あァさ」
いや、ホントに。
今さっきまで物分かりの悪い奴らと喋ってたせいか、こいつらのスピーディーな感じが超絶気楽に感じる。迷わないわけじゃねェんだけど、ちゃんと考えた上で結論をあっさり出してくれる感じ。頭いいんだろうな、って。見た目虎だからちょっと怖いンだけど。
「1つ。良いだろうか」
「ン？」
「……梓・ライラックというのは、太陽の使徒としての名だろう。風の使徒としての名は、獲得しただろうか」
「あァ、ンなことまで見抜いてたのか。というより、そォなるって知ってた感じか？　まァいいか」
スーグとシュジ。
賢き獣。霊獣。知恵ある虎。

「クロムクラハ。あんまりいい思い出の無い名前だけど、受け入れたよ。今後、風の使徒としては、この名を名乗る事にする」
「そうか。では、改めて言おう。クロムクラハ。ジョームンガンダーとの戦いにおいて、貴女に幸あらんことを」
「我らは此処で待つ。この戦いにはついて行かない。だが、もし、ジョームンガンダーに勝利したというのなら――我らは貴女に付き従おう。天幕の向こうでも、冥界でも、その先のどこかであっても、貴女へついていく事を誓う」
「あァさ、頼りにしてるよ」
んじゃ。
出発しますかね。
目指すは北方山脈。この大陸に聳え立つ、あらゆるものよりも高い山々。山脈の名に相応しい、純白の峰。
――そして、この、渇きを。
どうか。

2590　86. 噛夢風呂無阿符阿安堵気途炉止似浴微椅.

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

8. Need could no tech more calista in.

87. 彼地伊豆買雲垂赤媒裁字蟻.

ジョームンガンダーは北方山脈にいる――という情報しか俺の元には入ってきていない。少し前の俺では絶対に勝てない相手で、刺激すると世界も魔物も魔法少女も人間も動物もなにもかもやばい相手、ってのも知ってるか。

ちなみに北方山脈というのはあくまで山脈の名前であって、今俺のいる北方海域からすれば南にある。EDENの元あった位置から見て北方にある巨大な山脈、という名付けに見えて、北方山脈より北であるこちらでも伝わる名前なのはちょいと違和感があったりなかったり。

さて、そんな北方山脈であるが、高所というだけあってとても寒い。精神体だから特にそれらに不便は覚えないンだけど、この寒さは魔法少女にとってもキツいだ

ろォなァ、という印象。実際殴り飛ばされたＥＤＥＮが刺さってた麓でさえ寒かったし。

　季節らしい季節なンて無いこの大陸における、唯一の冬、なのかねェ。そーいう意味じゃ恐竜島やウォムルガ族の村なンかは夏だったか。群塔魔閣はちょいと秋っぽいし、始の点はそれこそ春っぽくある。

　まァ天動説よろしくマジでこの星自転してないンで四季なんざ生まれようもない。太陽も月も前世のよォな天体じゃねェからな。行こうと思えば行けるとかやべーって。ちゃんと高温だから行ったらジュッなンだけど。

「で？」

「――で、とは」

「で、とは、じゃねェんだわ。誰だお前。なンでさっきからついてきてやがる」

「難しい事を質問しますねアナタ。ワタシが誰か――それは誰も知らぬ事。ワタシ自身ですら知らぬ事」

「記憶喪失か。俺今から危険なトコ行くんだわ。邪魔だから消えてくれ」

「それは、死ねと？」

「誰が言うかンなこと。どっか行けっつってんだよ」
なんか、さっきから俺についてくる影があった。
影っていうか。
なんぞ――でっけェ女。身長は2mを超すンじゃねェかってデカさで、けど何より特徴的なのァ。
「お前、それ、痛くねェのか？」
「それ、とは」
「頭だよ。やべェ量の血出てっけど」
そう。
いんやさ、これでもかってくらいの出血量だ。それは纏う衣服をも濡らし、染め上げ、全身を真っ赤にしている。出元はちょいとグロいンだけど、露出した頭蓋骨、かねェ。
今にも死にそうな見た目でありながら、命の気配はむしろ強い方。そォいう見た目の魔物、なンだろうな。
「これは恐らく、元よりワタシがこういうものかと？」

「今ぇォ思ったよ」
「そうですか」
俺ァ今、結構な速度で飛んでる。
けどソレについてこれてる。寒さにも対応できてる。感じてねェだけかもしれねェが。ついでにいうと、出血が凝固する様子もないし、衣服より下に滴り落ちる気配も無い。
こえーけどぇォぃう魔物なンだろう。俺がビビっているのは多分伝わっている。ビビってるっつか引いてるっつか。
「名は？」
「恐らく、ボーグルと」
「あァそれは覚えてンのか」
「恐らくですが」
なんにせよ、名前があるのァ良かった。
名前の無い奴と食い合いはしたかねェからな。
「で？　やンのか？」

「何を、でしょうか」
「何って、殺し合いだよ。食い合いでもいい。魔物の摂理。風の摂理に則って、頂きを目指すための儀式」
「やだな、しませんよそんなこと。痛いじゃないですか」
「お、おォ。そうか」
……いんやさ、それがまァ確かに普通なンだが。
ここへ来て、これからジョームンガンダーと戦うぜ、ってとこまで来て、ンな普通なこと説かれると思ってなかった。
「え、じゃァ何で付いてきてンだお前」
「だから、難しい事を質問しないでください。知りませんよそんなこと」
「そォかい。じゃァついてくるのやめてくれるか？　邪魔だから」
「嫌ですよ。なんでそんなことアナタに命令されなきゃいけないんですか」
面倒くせェなァコイツ。
俺も食い合いじゃねェ殺し合いなんざしたかねェから手は出さねェけど、横になんかがいるってな落ち着かねェ。コイツがアオンみてェに謀り事してねェとは限ら

ねェんだし。
「それで？」
「あン？　何だよ」
「何だよ、ではないでしょう。ワタシに名を問うたのですから、アナタも名乗りなさい。それが礼儀でしょう」
「記憶の無い不躾な奴に礼儀を説かれるたァ驚きだ。俺は……まァ、クロムクラハだよ。そォ呼んでくれ」
「わかりました。クロクラさん」
「ん―」
ん―。
馴れ馴れしいなァ。
マジで何なんだコイツ。
「クロクラさんは何をしているのでしょうか」
「魔物を探してる」
「それは、どのような？」

「お前に話しても意味ねェよ。記憶ねェんだろ？」
「ですが、ワタシが名を喪失していなかったように、何かを問われたきっかけに思い出すものがあるかもしれません」
うるせーな正論言いやがって。
……まァ時間が無いンだ、藁にも縋る思いで、ってな間違っちゃいねェか。
「俺ァ今、ジョームンガンダーってな魔物を探してる。心当たりァ？」
「ないですね。生憎ですが」
「あァよ一瞬でも期待した俺が馬鹿だった」
藁に縋っても溺れ死ぬだけなンだなって。
「しかし、その名を聞いて思い出したことがあります」
「へェ。そりゃなンだ？」
「ツイウ、というお友達についてです。この辺りのある穴にツイウというお友達が住んでいます。彼女がその名を呟いていた気がします」
「お前さん、記憶無いってな嘘か？」
「いいえ？　実際、記憶はありません。私が何者なのかはわかりません。ですが、

お友達は覚えています。大切ですので」
「……まァそりゃ良い事だがよ」
大切だから、覚えてる。自分のことよりも、何よりも、友達の事を覚えている。
っとにマトモな事言いやがるなコイツ。グロい見た目のクセによ。
あー、でも。俺わかったわ、次の展開。
「その穴の位置は？」
「覚えてるわけないじゃないですか」
「だよなァ」
だよなァ。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

そんな中身の無い話をしていると、日もすぐに暮れる。なんつーかな、こいつ打

てば響くっつーか、まァなんか会話は弾むんで、ジョームンガンダーを探しながらも結構話しちまってる。あぶねェからどっか行ってろっていうと必ず命令するなっていってくる辺りちょいと怪しいンだけど、まァそこそこ？　仲良くなっちまったよォな、そーでもないよォな。

アオンの例があるからなァ。今の俺はちょいと警戒気味なンだよ。

ちなみに中身の無い話ってなこういうの。

「記憶の始まりァどこなンだ？」

「目が覚めたら何も覚えていませんでした。上を見たらアナタが飛んでいました。付いて行こうと思いました」

「ん―、情報量が無い」

とか。

「ツイウってのとはどんな関係だったンだ？」

「お友達だって言ってるじゃないですか。何度も同じこと聞かないでください」

「どんな関係の友達かって聞いてンだよ」

「そんなこと覚えてるわけないじゃないですか。何度も同じこと言わせないでくだ

さい」
「あァさ」
とか。
「俺を見て、戦いてェとか殺してェとか思わねェのか？」
「物騒ですねさっきからアナタ。それで何か得られるんですか？」
「上を目指せる」
「これ以上上に行ったら寒いですよ」
「あァそォかい」
とか。
……頭のネジが一本無い、って感じだ。
違うな、頭のネジはあるけどそもそも構造体として形を成していないってのが近いか。記憶無くなるとこォなんのか、こいつが単純に馬鹿なだけか。多分後者。
しっかし、どォすっかね。
相変わらずジョームンガンダーってなも、そのツイウってながいる穴も見つかってない。人間や魔法少女の集落も無ければ、ボーグル以外の魔物にも遭遇しねェと

来た。
　八方塞がりだ。
「これ以上無駄に魔力消費すンのも悪手だな」
「おお、奇遇ですね。形も知らないものを探しても無駄だと言わないでおこうとしていたところです」
「言えよ」
「言ったら≪うるせェな、俺の勝手だろ≫とかいいませんかアナタ」
「……言いそうだけど」
　なンだよコイツ。
　なンで俺への理解力がそんなに高ェんだよ。
「他、言わないでおこうとしてる事ってなあンのか？」
「４つほど」
「多いなァ。全部言ってくれ」
「まず、クロクラさんはどうして透けているのかな、と」
「あァそりゃ言わないで良い事だ。次」

「そして、クロクラさんはどうしてジョームンガンダーなるものを探しているのかな、と」
「それも聞かなくていい事だ。次」
「さらに、クロクラさんは寒くないんですか、ワタシ結構寒いんですよ、と」
「寒くねェし知らねェよ寒いならついてくんな暖を取れ。最後」
「ツイウの住んでいる穴を先ほど見つけたのですが、通り過ぎました」
「ンなこったろォと思ってたよ早く案内しろ」
「嫌ですよ。なんでそんな命令されなきゃいけないんですか」
……。
ふゥ。落ち着け。落ち着け俺。
俺はおじさん。落ち着きのあるおじさん。コイツの年齢なんざしらねェが、社会に出た事もねェ魔物だ。つまり子供だ。落ち着け。
「ツイウの住んでる穴に案内を頼んでもいいか、ボーグル」
「えー。どーしよっかなー」
無言でクリスを引き抜く。

「うわ、なんですかその殺傷能力の高そうな剣。痛そう。もしかしてそれでワタシに酷い事する気ですか」
「お前次第だ」
「わかりました。じゃあワタシ、ツイウの所へ逃げるので、追ってこないでくださいね」
「あァよ。案内ありがとう」
「お礼を言われると少しばかり嬉しいですね」
疲れるなァ、こいつの相手。

んで。
「あー、よ。1ついいか、ボーグル」
「難しい事は質問しないでください。ワタシには記憶がありません」
「迷ってねェよな？　ツイウの住んでる穴、見つけたンだよな？」
「難しい事は質問しないでくださいと言ったはずです。主観的に見れば一切迷って

いませんが、客観的に見れば完全に迷っていると言えるでしょう。この場合の回答は迷っている、迷っていない、そのどちらになるのか、記憶の無いワタシにはわかりかねます」

「あァさその場合は迷ってるが正しい」

「アナタがどうして物事の正しさなんかを決められるんですか？」

「叩っ切るぞてめェ」

「ひぃ怖い」

暗い暗い、林の中。

高度を下げたンで寒さは無いが、月あかりをも遮る背の高い木が辺り一帯を真っ黒に染めている。俺自身がぼんやり光ってるンでその光源こそあれど、こりゃ真昼間でも迷いそォな森だな、という印象。指標となるモンが何にもないんだ。同じような林が続くし、空も見えねェ。

「ボーグル」

「なんでしょうか」

「その穴ってな、広いのか」

「難しい事を」
「あァさ覚えてねェと。けどまァ、居住区になるくらいだ。そこそこ広いよな」
クリスの柄を両手で持つ。
ンで――地面に、グサっと刺す。おー、アレか。腐葉土ってやつか？　やーらけー土だな。
「何をなさるおつもりで？」
「ここら一帯の地面を探る。広い空間に出りゃわかるからな」
「そんなことができるのなら早めにやってくださいませんか？　ワタシもう迷い疲れました」
「やっぱり迷ってンじゃねェかよ」
クリスから、稀釈された死の魔力を浸し流していく。
最初はそのツイウってのにあたりゃ気付くだろ、的な意味で流そォと思ったンだけど、この辺り一帯の土に命の気配が多少あるってンなら話は別。つまり、死なねェのにぶち当たったらそこが空間だ。濃度を調整しねェと土地を殺しちまう可能性があるンで気を付けないといけねェが、こないだみてェに暴走さえしなけりゃそ

の辺は大丈夫。
　問題は、こいつが言う「この辺でした多分きっと」が全くの見当違いで、マジでなーんもないとこだった、って場合があるってことだが――。
　お。
「なンか、あんな。こっちか」
「おお、アナタ有能ですね。初めからアナタが探してくれたらよかったのに」
「お前が見つけたっつーからついてきたンだろォが」
「そうでしたか？　忘れました。記憶喪失なので」
「俺と出会ってからの事ァ忘れてねェだろォがよ」
　軽口を叩きながら。
　その見つけた場所に向かう。割とすぐ見つかったし、ホントにこの辺ではあったンだろうな。コイツの記憶も案外頼りになるってことで。
　……で、だ。
「穴、なンだよな？」
「はい。深い穴です。確か」

「ん―。そりゃ、なンだ。扉だの蓋だのはあンのか？」
「難しい事を」
「あァ覚えてねェと」
「いえ、今のはふざけました。確か、大きな石があったはずです。それをどかすことで穴に入れたかと」
「ふざけンなよ」
「なんでそんなことアナタに命令されなきゃいけないんですか？」
「あとそれならどォみてもアレだろ」
アレ。指を差す。
形成された手はしっかりと指のディティールもあって、それでしっかり指を差す。
――この辺りに似つかわしくない、林のど真ん中に設置された黒曜石の塊。
どう見ても、アレ。
「あ、はい。アレですね」
「わかってたけど言わなかった――じゃ、ねェよな？」
「違います。暗かったんです」

「そォかい」
近づく。黒曜石の塊に。
……しかし、黒曜石か。色々と思い出しちまうな。
何って、昔使ってた俺の【即死】の弾丸。あれも見た目黒曜石に近いンだ。ってのは、魔石ってなの主成分が石英だから、とかまァ色々あるンだが、今使ってる死の魔力含めて色が黒っぽいンだよな、俺の武器だの魔法ってのァ。クリスも黒い刀身に白い線だし。
そォいやこれ材質はなンなんだろ。黒曜石よりかは色の薄い黒だけど。
「これ、どォやってどかすンだ」
「難しい」
「ん―、じゃァとりあえず力づく……は、無理だな。重すぎる。流石にぶっ壊すのァ悪いし……」
「少しは反応してください。ワタシ、泣いてしまいます」
「勝手に泣いててくれ。俺今考え事中」
「えーんえーん」

「うるせェな泣き止め」
「横暴！　この方横暴です！」
黒曜石か。
ん―。
……いや、普通に透けていけばよくね？
「え。ちょっとアナタ、何やってるんですか」
「いんやさ、俺精神体だからよ。魔力含んでねェモンなら通り抜けられるンだ」
「なんですかそれずるい」
「ズルイよなァ。俺も昔そォ思った事あるぜ」
キラキラツインテに。
アイツの場合、反魔鉱石以外全部すり抜けられるンだけど。いやマジでずりィな【透過】。
「もしかしてこの暗い場所にワタシを取り残すおつもりですか？」
「あァさ。なンだ、暗闇が怖いのか？」
「いえ別に」

「じゃァいいじゃねェか。ちょいとツイウってなのに話付けてくるからよ。そしたらまァコレ退かしてもくれるだろ。それまで待ってな」
「ワタシがアナタの事を信じられるとお思いで？」
「じゃいーよ別にどっか行っても知らねェよ」
「お願いします」
「へいへい」
さァて、こんなヤツとお友達ってなだ。
どんなクセの強い奴なのかってな、ちょいと身構えとかねェとな。
んじゃご対面――。
「お前さァ」
「はい？」
「精神体だったンなら、早く言えよ」
「難しい事言わないでください。今気づいたんです」
じゃァ寒くもねェだろ。
こえーから背後にぴったりついてくンのやめろ、マジで。

遠《text.s1.2》吠えは遥か彼方に《text》

「上が騒がしいと思っていたら、なるほど。君か。そしてそちらは」
「俺ァクロムクラハってンだ。ちょいとアンタに聞きたい事があってな。あァさ、アンタがツイウで合ってるか？」
「勿論だとも。私はツイウ。学者だ」
「……学者ァ？」
ふむ。
おお。
なるほど？　確かに穴ン中を見渡すと、なんぞ、フラスコだの蒸留器だの、大凡魔物の棲み処でァ見ることの無いものが沢山ある。
こいつ自身は……ちょいと親近感の湧く隻腕の戦士、って感じ。アインハージャ

に似てるか？　まァ顔が骸骨なンで明らか魔物ってわかるンだけど。
「何を研究してンだ？」
「私達魔物について、かな」
「へェ。そりゃまた」
「物好きだ、と？」
「まァな」
自分達について研究してる、なンて。
物好きだろ。まァ医者とかってその類か。人間の研究者が医者だよな。
「ま、生憎とアンタの研究内容にァ興味無くてね。俺ァある魔物を探してンだ」
「ほう。して、それは？」
「ジョームンガンダー。知らねェか？」
「……成程。勿論知っているとも。というより、知らぬ魔物はいないだろうな」
「そォなのか。で、そいつの居場所は？」
「焦りはわかる。君の目的は大体察した。けれど、少しばかり待ってほしい」
「あン？」

ツイウは――それを、衣服のポケットから取り出す。
特徴的な色の葉っぱ。それを筒状にしたもの。
「私はね、ある2つの魔物についての研究をしている。1つが、君のお目当てであるジョームンガンダー。もう1つが、フルオブズヴィトニー。――私はそれら2つを殺すために、それら2つを殺し得る毒を開発しているんだ」
「……それは」
「そう――あるいは、神をも殺し得る毒。その名も」
「もしかして、魔煙草だったりするか!?　くれ！　それくれ！」
「……うん？」
ツイウは。
俺の、ずっとずっと求めてやまなかったものを持っていた。
「あァ――染み入る。これだよこれ。ハハ、舌もねェってのに味がわからァ。あ、舌できた」

「ツイウ。ワタシの名はボーグルで合っていますか？」
「あぁ、また記憶を失ったのだね、君は」
「またなのですか」
「そうだよ。君は度々記憶を失う。多分、頭のその穴から記憶が抜け落ちてしまっているんだろうね」
「でもアナタの事は覚えていました。偉いでしょう」
「偉い。褒めてあげよう」
「そう、クロクラさんもこうあるべきです。偉い事をしたら褒めるべきなのです」
「――っはァ。良い味だ。クソ不味い。で、え？　なンだって？　褒めろって？　お前俺に褒められる事一個でもしたかよ」
染み渡る。
このクソ不味い味。これだよこれ。ニコチンやタールなンかより、もっともっと毒性の強い、この世のモンじゃねェ成分の入った煙草。あァ……生き返る。いや死んでねェけど。いや死んでるか。
「私も他者のことをとやかく言えないけれどね。これを好む者が私以外にいるとは

思っていなかったよ」
「そりゃこっちの……あーいや、知り合いにもう１人いるわ」
「つまり、この世界に特別な存在などいない、ということだね」
いんやさ、安藤さんの話じゃフリューリ草の花弁ってな生え落ちても魔物がすぐ持っていっちまうから見つからない、って事だったンだけど、花弁どころか草の一本も見つからねェのァちょいと疑問に思ってたンだよ。
今のツイウの発言からして、魔物の味覚からしても不味いモノって認識っぽいし。
じゃァ誰が持って行ってンだって話。
「もしよければ、これの原材料であるラッフの株を１つ持っていくかい？　魔力の豊富な土壌で育てたら、花を咲かせるよ」
「いいのか!?　ありがとう!!」
「うん、食いつきが凄いね」
これはなんたる幸運。
早くレーテー取り返して中にある水筒も合わせて自室……は残ってンのか知らねェから、ＬＯＧＯＳの自室とかに栽培場作らないと。

もう中毒なンだよ。へへ、これだよこれ。これがねェとやってらんねェぜ、へへ。
「ツイウ、一応アナタの友人を代表して言わせてもらうけれど、この味を広めようとするのは間違っている」
「ばっかお前、これの良さがわからねェのか。吸った事ねェだろ。食べたことねェだろ。クッソ不味いんだぞ？」
「クロクラさんも言葉の使い方を喪失してしまったみたい。悲しい」
「ちなみに私の名誉のために言っておくと、それを食べる事はしないかな。あくまで上澄みを吸うだけだよ」
あれ。
……食うの俺だけか。
まァいいや。俺も美味いと思って食ってねェし。
「ふぅ。で、話を戻してもいいか、ツイウ。俺が逸らしといてすまねェんだけどよ」
「勿論だとも。ジョームンガンダー、フルオブズヴィトニーの話だね」
「いんやさ、そのフルオブズヴィトニーってなどーでもいい。ジョームンガンダーってなをぶっ倒したい。あるいは食うか従えて、俺ァ行かなきゃいけねェとこに行き

たい」
「ふむ。そうか。……とりあえず、倒すだけ、従えるだけ、なんて発想はやめたほうがいい。それはそのまま君の死を指すだろう。殺すか、食べるか。その2択だ」
「わかった」
どっちも同じな気がするが。
「どっちも同じ、だと思っているね」
「あァ。だって殺したら食うだろ」
「そこで邪魔になるのが、私の開発している毒だ」
「……あァ、毒使ったら食えねェって？」
「そう」
ん―。
まァ知らねェな。んじゃ使わなきゃいい。
俺は食うために、生きるために、強くなるために、以外での殺傷ァお断りだ。
「そォいう話なら、協力はできそォにねェな。アンタが何のためにジョームンガンダーを殺してェのか知らねェけど、食事以外になんぞ意味があるってンなら、俺ァ

1人でやる」
「ふむ。クロムクラハ。ジョームンガンダーがどのような魔物かは、わかっているのかな？」
「いいや。それを聞きに来たンだけど、ただ殺すってな俺の目的に反するンでね。そこの合意が取れねェなら、俺ァ勝手に探して勝手に殺すよ。ここへ来たのァ、ボーグル送り届けるためだった、ってことでいい」
魔煙草1ダース貰ったンでツイウの意思は出来るだけ汲みてェんだけど、そこばっかしは譲れねェ。
「何やら、並々ならぬ事情があるようだね。それを話してはくれないだろうか？」
「……ん―。まァ別に隠すことでもねェか」
「え！　さっきワタシが聞いた時にははぐらかしたのに、ツイウには喋るんですか!?」
「お前に話しても意味無さそォだったけど、ツイウは賢そうだからな」
「言外にワタシは馬鹿であると言っているように聞こえます」
「がっつりそォ言ってンだけど聞こえなかったか」

「はい。アナタは表現力が乏しいですね」
……落ち着け。
「今、世界から魔力が無くなりかけてる、ってなは、わかるか。感じてるか」
「ああ。世界に含まれる魔力――私達の誕生に欠かせないものでありつつ、紛う方なき異物たる世界の魔力。それが急速に失われつつあることはわかっているよ」
「あァさ。その原因は、天幕の向こう側。冥界にある。俺ァ元々冥界の住民……夜の使徒でね。同時に太陽の使徒でもあった。それが紆余曲折あって、風の使徒に落ち着いた。その紆余曲折において、新世界の創造ってなどでけェコトが行われよォとしてる。魔力が失われてンのァ恐らくそれに使われてるからだ。で、俺はそれを止めてェ。だから力が必要だ。北方海域にいるオリジン達にはもう話をつけてある。後は俺がジョームンガンダー食えるくらい強いって事見せつけて、天幕の向こうへ総攻撃仕掛けるだけだ」
とりあえず、現状を話した。
2人ァ何の口も挟まず聞いてくれて。
まァボーグルは何言ってんだこいつ、って目だったが。あァ殴りてェ。

「成程。信じよう」
「なんでだ？　自分で言った事だが、荒唐無稽な自信はあるぜ」
「嘘を吐いているとして、今の話の中に、貴女が得をするところはどこかにあったかな？」
「いいね、シンプルなのァ大歓迎だ。その上で、俺ァ殺しについてちょいと拗らせてな。食い合い以外での殺しはしたくない。ツイウ、アンタの作ってる毒ってなが俺へも影響を齎すモンなら、使わないで欲しい。毒を呷ってねェ状態のジョームンガンダーとサシで戦って制すよ」
「それは早計だよ。貴女の信念は理解した。貴女の目的も理解した。その上で、私の目的において、利害の一致が成されるものだと判断した」
「ってーと？」
「初めの話に戻る。貴女はジョームンガンダーがどのような魔物なのか知らない――そうだね？」
「あァ」
吸って、吐く。

純化されていく思考。――果たして、風か夜か。どっちに純化されてンのかは知らねェけど。

「ジョームンガンダーは、巨大な蛇の魔物だ。その大きさは――あの山脈を、超えるほど」

「……いやいや」

「嘘ではないよ。いや、しかし、表現は正しくなかったかもしれない。――北方山脈と呼ばれるもの。――その大部分が、ジョームンガンダーなのだから」

……嘘じゃ、ねェんだろうな。

だってそんな嘘吐いて、こいつに得は無い。

いやいや。

にしたって、だぞ。

「私の開発している毒は、その全身を覆い尽くし得るものではない。だから毒を用いて弱らせ、その部位を切り落としてから食せば、毒は貴女に回らない」

「……成程ね。だが、どォやって斬り落とす。ンなでけェンだろ」

「そのために、フルオブズヴィトニーが必要となる。フルオブズヴィトニーの爪は

あらゆるものを切り裂き、その口はあらゆるものを噛み千切る。私の腕もあの者によって噛み千切られてしまったね」

「戦ったのかよ」

「若かったのさ。とにかく、フルオブズヴィトニーを殺してその爪や牙を手に入れる事ができれば、ジョームンガンダーにも対抗し得る」

「あァさ、生憎だがそれも断るよ」

「……それは、何故かな」

いやだって。

「フルオブズヴィトニーってなを殺す理由が、食うためじゃねェ。ジョームンガンダー殺すためにフルオブズヴィトニー殺すってな俺の譲れねェ部分に触れる。面倒臭い奴で悪ィな。この話はナシだ」

「聞いていて思ったのですが、アナタ相当に面倒臭い方ですね。軽蔑します」

「お前も相当だよ」

「傷付きました」

魔煙草……は、温存しておこう。

まァ、そういうことだ。ンな武器作るためだけにソイツ殺す、みてェなのァ好かねェ。悪いが他を当たってくれってな。訪ねてきたのァ俺なンだが。

「わかった」

「ン、わかってくれたか。じゃあ」

「なら、フルオブズヴィトニーの殺しは諦めよう。私が彼女を殺したい理由はただ1つ、危険だから、というだけだからね。君がもし彼女を抱き込めるのなら――それで問題はない」

「へェ。なんぞ長年の恨みつらみがあります、ってツラしてたのに、ンな妥協ができンのか」

「それだけ君は魅力的、という話さ。貴女からは強い死の気配を感じるからね」

……まァ、こいつもちと怪しいな。

アオンのせいで疑り深くなっちまってるのァ自覚してるが、こうもとんとん拍子だとな。本心かかどォか見極めるにも、顔が骸骨なンでわかりづれェし。

「1つ、いいか」

「勿論だとも」

「そぉまでしてアンタがジョームンガンダーを殺してぇ理由はなンだ」
「……難しい事を聞くね。理由は様々だけど――」
「あ！　また難しい事を質問していますね！　私のみならずツイウにまでそういう事するの止めてください！」
「黙ってろアホ」
「単純罵倒!?」
ツイウは、少しばかり悩む素振りを見せる。
様々。1つじゃねぇんだな。色々あって――今、その中でもとびきりの奴を選んでる、って感じか。
「うん。そうだね。私がジョームンガンダーを殺したい理由は――復讐、かな」
「復讐？」
「そうだ。今はこんな見た目な私だけど、昔はもう少し違ってね。私をこんな風にしたジョームンガンダーに復讐したい」
「……そうけ」
なんぞ。

含みのある言葉、だが。
まァいい。警戒するに越したことはない、ってなが強まっただけで十分だ。
「んじゃ、とりあえずそのフルオブズヴィトニーってなに会ってくるよ。場所、教えてくれるか？」
「ああ。けれど、単身で向かうのかい？　私がついていった方が……」
「馬鹿、アンタにはソイツと因縁があんだろ？　で、ジョームンガンダーを弱らせるってな毒も完成してねェんだ。それの開発急げよ。俺ァ俺のできることをする。アンタはアンタのできることをする。それが利害の一致ってモンだ」
「……わかった」
「言っておきますけどワタシはついて行かないので」
「あァさこっちから願い下げだ」
「じゃあついていきます!!」
「……勝手にしろよもう」
「なんでそんなことアナタに命令されなきゃいけないんですか」
流石にぶん殴った。

さて。
目指すはジョームンガンダー……から寄り道しての、フルオブズヴィトニー。
穏便にいけると良いんだがな。

遠《ｔｅｘｔ.s1.2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

88・其藍頬伏

曰く、フルオブズヴィトニーなる魔物は北方山脈の最東端、大陸を別つこの山の端も端にいるらしい。あァあくまでEDENから見て東なンで、俺達が向かうのァ西端になる。その姿は巨躯の狼。狼ってーと寂しんぼの引き連れた奴らを思い浮かべるけど、あいつらそんなに巨大じゃねェしな。多分関係ない狼だろう。

そォいやあいつらとも会話ってなできンのかね。

「なァボーグル」

「はい。なんでしょうか」

「お前ってな戦えンのか？」

「難しい事を質問しないでください。そんなの覚えてるわけないじゃないですか」

「あァすまねェ。俺もうお前に質問すンのやめるよ」

「それは寂しいので時たま構ってくれると助かります」

「助けたくねェから質問すンのやめるよ」

俺ァ見つけやすいよォに山脈に沿ってのフルオブズヴィトニー探しをしたかった

ンだけど、ボーグルが寒い寒い言うンでちょいと離れた所にいる。離れた所を飛んでいる。コイツ、精神体の癖に寒がるのほんと意味わかんねェんだよな。それとも寒がる精神体ってなそこまでマイナーでもねェのか？　俺が知らないだけ？

……ってなをコイツに聞いてもどうせ知らねェ覚えてねェって返ってくるだけなンで、フルオブズヴィトニー抱き込んでジョームンガンダー倒したあとにツイウとかに聞くか。スーグとシュジでもいいが。

「質問があります」

「ヘェ、珍しい。なンだよ」

「どのような作戦を以て、フルオブズヴィトニーを従えるおつもりですか？」

「ヘェ珍しい。お前マトモな事話せたンだな」

「失礼な方ですね。軽蔑します」

「普段のお前省みてからモノ言えよ」

「難しい事言わないでください。普段のワタシなんてワタシにはわかりません」

「そいやそォだったな。忘れてたわお前の記憶喪失設定」

「設定ってなんですか設定って！　自分が何も覚えていないという恐怖をアナタ

は知らないでしょうに、軽く扱わないでください！」
「お前は知ってンのか？」
「難しい事を質問しないでください。ワタシが知っているわけがないでしょう」
「そォ返ってくるって思ったよ」
一瞬重く考えよォかと思ったけど、やめた。
こいつは適当に扱っていい存在だと理解したから。
「ま、気付いたら全く知らねェとこにいるってな恐怖はそこそこ知ってるつもりだよ」
「それは知ったかぶりというやつですね」
「あァそォ解釈してくれて結構」
しかし、そォ考えるとそうだな。
俺は記憶以外のモンは大体失ってっけど、記憶はずっとある。魔法少女の記憶ってな劣化しねェモンなンだけど、精神体になった今でも、あと魔法少女になる前でも変わらず全部覚えてる。前世のことも、前世の親も交友関係も、その死の間際も、死した後も、神さんに拾われてからも拾われた後も、この世界に生まれ落ちた後も

中学に上がるまでも。
　全部全部覚えてる。
　……心残りがあるとするなら、魔法少女の時に殺した魔物の名前は覚えてねェっつか知らねェって点か。食うための殺しじゃなかったたァ言え、生きるために殺したンだ。その名前くらいは知りたかったかもしれねェ。
　いや、どォかな。あの頃の俺のスタンスじゃ、ンなこと気にしてる余裕はねェ、なンて突っ張って、耳塞いでたかもしれねェや。
「で、作戦だっけ？」
「あ、はい。そうでした」
「聞いたお前が忘れてンじゃねェよ。……実を言うとな、何にも考えてない」
「クロクラさんって馬鹿ですよね」
「お前に言われたかねェや」
「でも自覚はあるとみました」
　うるせーな。
　その妙な俺への理解力の高さやめろ。

「……あの」
「なンだよ」
「え、だから、自覚はないんですか？　無かったら教えてあげようと思って」
「あるある。あるよ。これでいいか？」
「あるならもう少し賢い行動をしてください」
「へいへい」
緊張感無ェなァ。
今から行くのって、一応ジョームンガンダーを易々と切り裂いて噛み千切れるよォなやべェ魔物のトコなンだけど、それわかってンのか？
いやまァ無策で行く俺がわかってるかどーかっつったら微妙なンだけど。
「もしもの場合は、アナタを盾にして逃げます」
「あァそれはそォしてくれ」
「え？」
「ん？」
「いえ、そこは≫なんだよ、そこはお前が盾になりますっていうんじゃねぇのかよ≪と

返ってくるものだとばかり」
「馬鹿言うンじゃねェよ。俺のために傷付く奴なンか１人だっていてほしくねェんだ。余程の信頼が無けりゃンなこた言わねェよ」
「信頼があったら言うんですか？　普通逆では？」
「お前が普通を語るのか」
「そういえばそうでした。難しい事質問しないでください」
「してねェよ」
……そーいうトコが怪しいから頼れねェんだよな。
こいつ、結局なんなのかわからねェままだし。ツイウの手先かなんかだとしても、流石にフルオブズヴィトニー抱き込む前に裏切るってなしねェたァ思うンだが、万一もある。
警戒は怠れねェってな。
「あのな。信頼してたら、盾になれまでァ言わねェがよ。勝手に守ってくれるって思うだろ」
「もしかして酷く傲慢な方なんですかクロクラさんは」

「さァてね。それに関しちゃ俺からはなんとも」
傲慢。
そォ映ってたかもしれねェなァたァ思うよ。
俺は……結局、命に優劣つけてるだけなンだろォし。
「つまり、ワタシの事は一切信頼していないので、戦場になった時背後を取られるのが怖いから、逃げるならとっとと逃げてくれると助かる――ということでしょうか？」
「1から10まで正解だよ」
「褒めてください」
「すげーよお前」
「ふふん」
怖い怖い、ってなトコで。
さて、もうそろ最東端だが。
海も見えてきた。氷山があるってことは、クトウの近くだったりすンのか？　もう少し先だった気もするが。あァいや、氷山なんざ動くもんなンだから、目印にァ

向かないか。
　とりあえず付近の魔物に情報だのなンだのを聞きたいトコだなァ。会ってすぐに殺し合い、みてェにならねェといいんだけど。
「逆に言えば、アナタを勝手に守れば、アナタの信頼を勝ち取れる、ということでしょうか」
「馬鹿なこと考えンじゃねェぞ。俺の信頼なンかよりお前の命を優先しろ」
「難しい事言わないでください」
　――クリスを引き抜いて、全力で前方空間へ斬りかかれ！
「それはもう無理、」
「じゃねェから、とっとと下がれ、馬鹿！」
「……」
　なンだ、かっこつけよォとしやがって。
　許さねェぞ。俺とこんだけ喋って、俺を守って死のうとするなンて。
　あと――殺そうとした、お前も。
「――ヒ」

「……わぁ」
「驚いてねェで逃げな。コイツはお前にゃ無理だよ。自分が戦えるかどォかもわかってねェ奴には――無理だ」
「ヒヒヒヒ！」
そこにいた。
もう、見るからに、明らかに、丸わかり。
誰がどォ見ても、そう。
――白き毛並みを揺らす、巨躯の狼。氷山かと思ったソレは、そいつの背で。
「よ。お前さんがフルオブズヴィトニーで？」
「ヒヒヒ――あぁ、そうさ。そうさね。確かにその名で呼ばれていた。その名を名乗っていた。ワタシがフルオブズヴィトニーで合っているよ、おチビさんたち」
「俺ァクロムクラハってンだけどよ。ちと、助力を申し出に来たンだ」
「助力？　――ヒヒヒ、なんだい、言ってみなよ」
「あァいや、言う必要はねェや」
「え、なんでですか。フルオブズヴィトニーを抱き込まないといけないんじゃな

かったんですか」
もう一度、それを弾く。
クソ程重い斬撃。いんやさ、爪撃、とでも言った方がいいか。クラスメイトにいた【鉄爪】の奴よりも遥かに硬く、重く、そして鋭い。
ハハハ。
「協力する気も助力する気も欠片もねェ。お前らを殺して食いたくてたまらねェ。そンな顔してるぜ、アンタ」
「――ヒヒ」
「凄いですねクロクラさん。ワタシ、ウルフの顔とか見分け付かないです」
「軽口叩いてないで下がってな。邪魔だから」
亜空間ポケットから魔煙草を取り出す。
はは、いいねェ。これだよこれ。こォ来なくっちゃ。
ツイウには、武器の採取みてェなやり口での殺しは御免だって言ったけどさ。
こっちは染みついてるよ。もう何百何千とやったからな。
「フルオブズヴィトニー。アンタ、随分と美味そうだ」

「ワタシを食うかい、おチビさん！　いいよ――じゃあ、楽しく踊ろうじゃないか！」

俺達を見送ったツイウのあの苦渋の顔。

成程ね。抱き込むなんざハナから無理だと。へいへい、んじゃまァ。

「あ、ワタシはボーグルっていいます！　以後お見知りおきを！」

「だから逃げろって邪魔だから」

「ワタシにとっては、どれもこれもおチビさんにしか見えないねぇ！」

さて、殺し合いの始まりである。

遠《ｔｅｘｔ:s1:2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

初手は俺だ。

もう使い慣れた死飛沫。クリスの刀身から飛ばすソレ。込めた魔力は普通の死の

魔力。つまり、希釈された奴。これでどォにかなる相手じゃねェってわかっちゃいるが、これは極小のデバフみてェなもんでな。浴びせ続けりゃちったァ魔力も削げる。

　こォいう図体のでけェ奴は避けねェからこーいう小細工が――。

「ッ、ボーグル！」

「あ、大丈夫です。防げました」

防げました――なンて言って出してんのは、赤い剣。

いや、違う。ありゃ――骨、だ。いつぞや、冷静メイドがやってたみてェな、骨の剣。血に濡れた骨の剣。

……いや、今はボーグルのことはいい。

それより、だ。

「随分と――余裕が無ェんだな。アンタ、そんなナリしといて今のを避けんのか」

「うん？　ヒヒ、敵の攻撃を避けるのがそんなにおかしいことかい？」

「……いんやさ、おかしかねェよ。むしろすげェ。そこまで強くなってて、それを忘れてねェのァ素直に称賛モノだ」

「今の攻撃防いだワタシも褒めてください!!」
「偉い偉い」
実際凄く偉い。
死飛沫を完全に避け、俺達の背後且つ上空に移動し、爪による斬り付け。行われた時間はコンマ一秒とない。それを完璧に防ぎきってンのァ素直に凄いしかなり偉い。つかフルオブズヴィトニーの爪ってなンでも切り裂けるンじゃなかったっけ？
精神体は別なのか？
「ヒ――まさか、ワタシの爪を防ぐとはねぇ。おチビさん、中々やるじゃないか」
「おお、フルオブズヴィトニーまで褒めてくれましたよクロクラさん。ワタシ、かなり偉いのでは？」
「ちなみに攻撃ァできんのか？」
「難しい事を質問しないでくださいと何度言ったらわかるんですか？」
また、ひっかき。さっき俺がフルオブズヴィトニーの攻撃弾けたのァ、爪の上面だったからだ。鋭さとの勝負はしてねェ。クリスの材質がなんのかわからねェ以上、俺ァ避けに徹するべきだな。

大丈夫、警戒してりゃその移動速度は対処できる範囲だ。問題は巨体のくせにクソ程速いってな点だが、そこは命の気配と気合でなンとかする。
避ける。その爪、は大樹が如く。けど当たらなきゃ意味はねェ。そのまま爪に沿うように昇って行って――付け根をクリスで斬る！
「――ッ、硬ァってェ!?」
「クロクラさん、驚いてないで防御姿勢を取ってください！」
「!?」
振り下ろされた爪。
それが、ぐわっと開かれる。前足開いたってだけだ。だけだってのに――なんつゥ、圧を……！
ボーグルに言われてなきゃ、マトモに食らってた。
気を引き締めろ。相手ァちゃんと格上だ。んで、ボーグルのことも気にするな。アイツは多分結構強い！
「助かった！」
「クロクラさん。フルオブズヴィトニーの毛皮は山肌と同程度の硬さを持つと言わ

れています。斬りつける、突く、などはダメです」
「へェ、そいつァ助かる情報だが、……いや、出所ァ後でいい。他は？」
「フルオブズヴィトニーは何よりも強き魔物。何よりも迅き魔物。あらゆる拘束は意味を成さず、あらゆる剣は彼女の毛皮に阻まれます。弱点らしい弱点はありませんが、口や体内には攻撃が通るものと。ツイウがそう研究していたので」
「ありがてェ情報だ――が、お前さんは防御。俺が攻撃な」
「何ゆえ、でしょうか」
「お前を信頼してねェから」
言うだけ言って、突っ込む。
口が弱点ってなはコイツもわかってンだろう。一寸法師よろしく≫おチビさん≪に体内へ侵入されちゃ困るのか、さっきから爪での攻撃しかしてこねェ。つまり、ツイウの研究やボーグルの推測は合ってるってこった。まァかもしれねェ程度かもしれねェが。かもしれなさすぎる。
「ヒヒ――おチビさん！　クロムクラハと言ったかい？」
「あァよ、なンだお喋り好きか？　そんだけ殺気滾らせといて、ハハ、油断した

らぱっくりか、オイ」
「質問に質問で返すもんじゃないよ、おチビさん」
「……いんやさ、そりゃすまねェがよ。あァそうだ。俺はクロムクラハ。他人の名前そォ簡単に忘れるモンじゃねェぜ」
「ヒ――そいつはすまないね。なに、少しばかり驚いたものだからさ！」
山みてェな平手打ち……になンのか。横犬ぱんち。凄まじいデカさの肉球。感心してないで避けろ。
さて、口、口ね。
どォ狙ったモンか。魔物ってな別に発声で喋ってる奴ばっかじゃねェ、フルオブズヴィトニーもその類。だから口ァ開けてねェんだよな、こんだけ笑ってンのに。
俺もセイタスとの会話に慣れ過ぎて、口を開けねェ会話ってなができるよォになっちまったのが余計にタチ悪い。最初から喋っていきゃよかったか？
「驚いた――ってな、なんでだ！」
「聞いていた名前だからさ！　クロムクラハ！　ウィドアルに代わって、ワタシを殺すモノ!!」

「あー、誰だ。ウィドアルって」
「ヒヒ、知らないのかい？　――風だよ。風の別の名前！　あるいは、ベルウェークの娘！」
……待て待て。
色々知りすぎだよお前。俺の知らねェこと知りすぎ。
風が、ベルウェークの娘？　どォいう意味だよ。ベルウェーク自体魔物なンだから、あっちこそ風の娘になンじゃねェのか？
んでもって、聞いてたってなンだよ。なンでお前さん、風に殺されようとしてて、なンで俺が風に代わってお前を殺すなンてことになってる。
またお前か、ふーちゃん。
魔物にも予言残してンのか？　なんなんだよホント。もっとちゃんと話聞いとくべきだったか？
「けど残念だねぇ。おチビさん」
「あァ？　何が、」
「その程度じゃ、ワタシは殺せない。出直してきなよ」

――モロに、食らう。
か。
は。はは。
初めてじゃねェか？　精神体になってから、ここまでモロにダメージ負うの。自分の言葉で傷付いたのァ数知れずだが――ハハ。
あー。おじさんだからさ。馬鹿みてェなダジャレ言いそうになったぜ。あぶねェあぶねェ。つかこの世界の言語じゃ伝わらねェ。
「ってェなァ。なンだそりゃ。鋼鉄かなんかかよ」
「おや――ぶっ飛ばしたつもりだったんだけどねぇ」
「はン、尾っぽ程度でどォにかなると思ってンなら勘違いさ。俺ァもうちっと強いぜ？」
「ヒヒ、〝もうちっと〟、だけじゃあ足りないねぇ」
あァ、今のは尾っぽだ。尻尾。
まァそうだよな。狼って言えば、犬猫よりも長い尾っぽが特徴的さ。
「んじゃ、もうちっと以上を出すからよ。ちょいと一服させてくれねェか？」

「それ以上が本当にあるのなら、いいよ。ヒヒ――安心しな、今から尻尾巻いて逃げても追いやしないさ。ワタシはワタシを越えて行くものを待っているからね」

「あァさ、それは今だよ」

魔煙草を吸う。

さっき体内に落としてた奴だ。あァこれだよな。良い点。精神体だと、魔煙草を最後まで吸えるンだ。別に生身の時もやろォと思えばできたンだけど、ハハ、やりやすいって点で精神体のがいい。

あァ。

いいね。骨も皮膚も肉も無いカラダさ。ぶっ飛ばされたって壊れるモンァ無い。

ハハハ。

「糸伊豆阿止理負不伏零矢堕千経度戸地内途」

もう随分と言いなれた言葉だ。

けど、これってさ、言ってるのほとんど一部なンだよな。一節の祈りでさえ単節だってのに、物語も二節しかない。

当然だけど、ンなこたないわけで。

ハハハ。

「内途」藍弊徒碑絵韻.内途」藍弊徒鳩永苦.」（夜よ、私は苦痛が嫌いです　夜よ、私は悲痛が嫌いです）

「へぇ、世界言語――それも、夜の言葉！　おチビさん、アンタ夜の使徒かい！」

「あァさ。気付いてなかったのか？　――叙位後場明日」碑椅子後地縁士負不頼譜.」（誕生には喜びを　最期の時には安寧を）

「おチビさんの気配なんてどれも一緒だからねぇ。さて、けれど、それならワタシも態度を改めよう」

「是阿亜部霊楠韻泡頼部頭」上分須負不絵喪紫遠図」安堵義矢伏須韻泡理霊紫遠聚富須.」（命には限りがあり、感情には波があり、人と人との間には隔たりがあります）

世界言語。夜の言葉。

始の点でＥＤＥＮの魔法少女を迎えうった時に聞いた太陽の使徒の言葉のように、世界言語にも３つの種類がある。即ち夜と太陽と風の言葉。それぞれがそれぞれの使徒への強制力を持つ他、それぞれの神さんへ届き得る言葉になる。

夜の言葉は死に近づく。風の言葉は戦いに近づく。太陽の言葉は太陽に近づく。

なぜならその言葉は神さんの言葉であり――本来、言語として成り立っていないものだから。

俺がそれを言語としてしっかり使えんのァ、ただ似ている音を当て嵌めているに

すぎない。

　ホントはもっと、それこそ金髪お嬢様達が言うように唸り声みてェなモンだ。

「――其藍頬伏（だから、私は願うのです）」

「ワタシの名前はフルオブズヴィトニー。ベルウェークに相対し、いつかその身を食らうモノ」

「伏理伊豆須舞琉（笑っていて。どうかずっと、笑っていて。）奇異伏須舞輪具（苦痛を解いて悲痛を溶かして）例理伊豆地碑絵韻（今日より明日は良い日になる）芽流途地鳩永苦（と、）安堵頼伏座頭棟諸迂初琉微尾田残当禰（そう願うのです）」

「そして――」

　クリスに死の魔力を流す。

　それはいつもの希釈されたそれじゃァない。

　精神を死に近付けまくった――冥界の魔力。俺が冥界でめちゃくちゃ強くなれンのァ、あそこに流れてる魔力こそ俺を形作る魔力だからだ。

　死の魔力。死した者の魔力。この世にとって異物であると同時に、この世を生み出した3つの内の1つが持つ魔力。

　それで――防ぐ。

「畏怖遠理不応座頭理椅寸(なればこそ)・」
「……おや、防がれましたか。ワタシ、結構不意を突けたと思ったのですが」
「藍魚琉度出内沙米紫遠安堵藍永封無滅琉(私は救いを否定し、終わりを肯定します)・」
まァ、わかってたことさ。
最初っからな。ずっとずっと信用してねェって言ってたし、思ってた。
だからもう、傷付きはしねェよ。
「琿内(おやすみなさい)・」
――さァ、仕切り直しだ。
今この一時において、俺ァ冥界の俺になっている。
代償なんざ計り知れねェが――いいだろ。丁度、美味そうでけェのが目の前にいるンだ。
2つも、さ。

「わかってたことだ。ボーグル。てめェが敵だってことなんざ、とォの昔にな」
「そうですか？　ワタシは今の今まで気付きませんでした。今思い出したので」
「ヒヒ――夜の使徒。夜の使徒。夜の使徒が、ワタシを殺すモノ！　ヒヒヒ！」
まァ、もうなんでもねェってかのよォに、フルオブズヴィトニーの隣に浮かぶボーグル。そうさ、わかってた。期待なンざしてねェ。ぜってェ背後から斬りつけてくるって思ってた。だから防げた。
……ツイウまでそォなのかどォかは知らねェが、ハハハ。
いいぜ、殺し合うってンなら、食い合おうじゃねェか。
「――ふざけるなよ」
「あン？」
一瞬、自分が言ったんじゃねェかって思った。よく言うから。
けどそれァ、目の前のでっけェ狼から放たれた言葉で。
その言葉には、声色には――あまりにも濃密な、憎悪が。
「ふざけるなよ」

「はン、何度言われたってこっちのスタンスは変わらねェよ。俺ァお前を殺すし、お前らを殺すし、お前もジョームンガンダーも食うぜ」
「ふざけるな、夜の使徒」
「はは、なンだよ。さっきまでの余裕はどォした？」
憎悪だ。怨恨、かもしれない。
なんだ。何が逆鱗に触れた？　まァ俺が夜の使徒だってことくらいしかなさそうだが。
とりあえず、完全に祈りの物語を吐き出したンだ。
ガタが来る前にカタをつけてェとこだが――。
「今を生きるモノを、死者が殺す、って？　――それが運命だって!?」
「全くです。酷い話ですよ、クロクラさん。アナタは死者なんですから、冥界にいてください。邪魔なんですよ。この世界は、生きているモノのためにあるんです。生きているモノが、生きているモノと戦い合って、食らい合って、生き延びて、そういうことをずっと繰り返している世界なんです」
「死者が生者に干渉するな！」

……――。

いや。

いんやさ。

全く、その通りで。

「あぁ……まったく、苛立たせてくれる。死者なら死者らしく、空の上で暗い世界を彷徨っていればいいものを」

「全くです」

「……さっきから思っていたんだけどね。なんだいコイツは。クロムクラハ、アンタのお仲間じゃなかったのかい？」

「は？」

あのさ。

俺、今結構な代償支払ってパワーアップしたのよ。早く欠けた分食わねェと死んじまうくらいのハイリスクハイリターンなコトしてンのよ。

状況整理が必要なコトすんのやめてくんない？

「――フルオブズヴィトニー。聞くが、ソイツはアンタのお仲間じゃァねェのか」

「なんでワタシがおチビさんなんか仲間にするんだ。それも、夜の使徒に付き従ってたような奴を」

「え、そうなんですか？　ワタシ、夜の使徒は敵だって事は思い出したのですけど、フルヴィトさんのことは全く思い出せてなかったので、おかしいな、とは思っていたんですよね」

あァ。

もォいいよお前。

「死者の分際で悪ィがね、俺ァやんなきゃいけねェことがあって、今はちょいと生きてンだ。風の使徒やってる。――それで勘弁してくれねェかな。殺し合う理由に、十分足り得ねェか？」

「殺し合う、と。そう言ったね」

「あァ」

「……一方的に殺すのではなく、殺し合う。つまり、運命も予言も無視して――アンタを殺したっていいわけだ。強くなるまで逃がすとか、弱い内は見逃すとかしないで――アンタを今ここで殺しても、いいわけだ」

「当然だろ。それが風の摂理だ」
言えば、にィと笑うフルオブズヴィトニー。
なるほど、さっき逃がすだの強くなってからだの言ってたのァ、そォいう理由か。
馬鹿言え。
「運命も予言もクソくらえだ。食うか食われるかの殺し合いに余計なモン挟んでンじゃねェよ、ガキ」
「――ヒヒ、ガキ？　ガキだって？　ワタシを？　――この世に魔力が零れた時から生きてるワタシを、子供扱いか！」
「え！　凄いお婆ちゃんですね！　そういえばワタシって何歳なんでしょう。知りませんか？」
突撃する。飛行魔法の要領で背面から冥界の魔力を噴射し、高速で突っ込む。
振り下ろされる前足。――それを、クリスで弾く。
「な――」
「生憎様、今の俺ァちぃっと強くてね！」
そのあり得ない膂力に驚くフルオブズヴィトニーの鼻っ柱を――クリスでなく、

形成された拳でぶん殴る！

体内に流したクリスは背面へ。手にさえ持っていないソレで、振り下ろされる赤い骨を防ぎ、更に左手の裏拳。精神体同士のぶつかり合い。それは、しかし冥界の魔力を纏った俺が勝る結果になる。

驚きの表情のままぶっ飛んでいくボーグル。邪魔すんじゃねェ。自分の目的もちゃんとわかってねェ奴は引っ込んでな。

「その魔力！　その剣！　ヒヒ――あぁ、夜だ。夜の使徒だ。間違いない！　あの時空から降りてきて、ワタシ達を魔物に変えた、夜！　その使徒！　間違いない――間違いない!!」

「あァ？　魔物に変えた？」

「そうだ。そうだよ。ワタシ達はね、元はただの獣だったのさ。ただの狼と、ただの蛇だった。姉妹だったんだ。――それを、夜が変えた！　全部めちゃくちゃにした！　死者が生きるモノに手を出して、全てを狂わせたのさ！」

「すまねェがソイツは俺の信奉する神さんじゃァねェなァ。ソイツ、今多分殺されかけてるよ。用済みだってな」

「それは清々するね！　けど、関係なく夜の使徒は嫌いだよ！」

魔力集中。なンだ、遠隔魔法みてェな集中の仕方。口――開くのか？　丁度いい、ンじゃ体内に入って――。

「希風川（ヴァン）！」

「――褪戦死遠【波動】!!」

その口から、氷河が吐き出される。

冥界の魔力で強行突破もいけなくァないンだろうけど、行ったら不味いと直感が告げている。このブレスは魔法で防いだ方が良いと、僅かに残された魔法少女の部分が反応した、って感じだ。

大きな口。余りに鋭い牙。そこから噴き出る氷河は、周辺の林も真っ白に染めて行く。

続く。続く続く。

遠隔魔法の比じゃねェ規模だ。マジでここら一帯に氷河を作る気なンじゃねェかってほどの水と氷。

けどそれを、【波動】はしっかり防いでいる。

「っと、ふゥ、よォやく終わったか。アンタ、身体能力もそんだけあってンな攻撃もできるとかやべェな」
「……今のは、太陽の力……？」
「あン？　あァさ、俺ァ元太陽の使徒でね。魔法には詳しいぜ」
「風だけじゃなく、太陽にまで迷惑かけてんのかい」
「ハ、魔物が太陽の使徒を気に掛けるたァ驚きだ」
「驚くことなんて何も無いよ。ワタシ達が太陽の使徒を求めなければいけなくなったのは、夜のせいだ。太陽の使徒がワタシ達から逃れるためにワタシ達を殺すようになったのは、夜のせいだ。全部夜が悪いんだから――ワタシから太陽の使徒へ向ける感情は同情でしかない」
いんやさ。
ホントに、全部あのニヤニヤ丸眼鏡が悪いンだなァって、ホントに。
「さっき、言っていたね。ジョームンガンダーを食う、って」
「あァ聞こえてたか。そォだよ。姉妹なンだったか。――じゃァ、守るか？」
「当然だろう。必ず仕留めるよ、夜の使徒」

ははは。

んじゃ、最初から抱き込んでジョームンガンダーを斬るってな無理だったンじゃねェか。

ボーグルのそれを考えるに、やっぱりツイウも敵か。いいね、それでいい。

夜の使徒なんざ嫌われて当然だからな。死者が生者に手を出すなって、あァさ正論も正論なンだよ。

「ハハハ！　こっちにゃ正論も正義も大義もなーんにもねェが――俺のためだけに！　殺されてくれ、フルオブズヴィトニー！」

「世界のために、生き物のために、この世からいなくなりな！　夜の使徒！」

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

89・参朽不応地身要流・

戦闘は、今までの中で一番激しかった。

当然だろう。敵の図体もその速度も、殺意さえも今までのどんな相手より上。格上だ。そしてこちらもそれは同じ。今俺の身体を流れている魔力は冥界に最も近く、だからこそこの精神は死者のものとほぼ同義である。神さんの用意してくれた生体――あるいは風の息がかかった精神体であったとしても、この魔力の前には膝を折る。

蒼白の狼、フルオブズヴィトニー。彼女の主な攻撃手段はその爪と尾。この世のものであるのなら、文字通りあらゆるものを切り裂き得るその爪は、幾星霜と歳を重ねた樹木だろうが、何千年とそこから動かなかった岩石だろうが、一切の抵抗を見せる事無く切り裂いて見せる。地面だろうと山肌だろうとそれは同じ。

あの時ボーグルと俺が彼女の爪を止めることができたのは、多分この世のものではないからなのだろう。ボーグルのは相変わらずよくわからないが、少なくとも俺のクリスはそうだ。

爪も一振りや二振りではない。避けたと思えば眼前に構えていて、それさえも避けてさらにそこにある。フルオブズヴィトニーの前足は当然２つしかないというのに、その俊敏さたるや、といったところだろう。

「……！」

対する俺も負けちゃァいない。

ほとんど万全の状態と言える今の俺は、その膂力でフルオブズヴィトニーの膂力に勝る。その速さで彼女の速さに追いつける。この世のあらゆるものを殺さんとする死飛沫は濃度を増し、クリスそのものが当たらなかろうと確実に彼女の魔力を削いでいく。

俺の背から噴出されている魔力も冥界の魔力だ。だから当然それに触れたら魔力を削られるし、長時間浸されたらその部位が死ぬ。それがわかっているのだろう、フルオブズヴィトニーも攻撃の１つ１つで満足せずに、爪を外せば離れ、再度正面から切り裂けるよォな位置に行ってから攻撃を仕掛けてきている。

ゆえに、両者の激突は蒼白の巨躯がどす黒い奔流と共に高速で動き回る結果となる。

「――困りました。流石にあれの間に入ると死んでしまいそうです――」

ボーグルのどーでもいい呟きが一瞬にして彼方へと流れて行く。無論、移動しているのは俺達だ。アイツは動いてない。

フルオブズヴィトニーの口に魔力が集中する。

さっきの氷河を吐き出すヤツだ。高密度の魔力。そのチャージ中だってのに、彼女の動きは遅くならない。チャージ時間に無防備になっちまう魔法少女たァ歴が違うってワケだ。

ふと、影が差す。

「――！　っとォ！」

クリスで受け止めたのは、彼女の尾。その毛並みは逆立ち、その硬さだからこそ、当たれば蜂の巣となるだろう凄まじい威力の一撃。

いつのまにひっくり返ったのか、いつの間に狙いを定めたのか。ンなまでに高速で動いている俺に、確実に尾を当てる、なんざ――。

「希風川（ヴァン）！」

「!?」

絶対に無理な体勢だった。だから油断していた。
尾を俺に振り下ろしておいて、体をくねらせ、首を捻じ曲げ、自身の尾をも巻き込む規模のブレス。
だが絶好のタイミングであることも事実。
俺がクリスを防御に使っていて、それを支えるために両手を上げていて。
成程、自分の尾を囮にしたって事だ。
「――褪戦死遠【透過】、ぐッ……う、ふ、ゥ」
それを、世界言語による魔法の行使で避ける。
たとえ冥界の魔力を纏っていても、他人の魔法を使うってなやっぱりクる。その感覚を理解できてる奴じゃねェとそもそも使えなそうだ。キラキラツインテがよく俺に溶け込んできてくれていたからちったァわかったけど、それがなけりゃ使えなかった。
あン時は何しやがるとか思ったモンだけど、あァさ感謝だな。
「……今のは、確実に仕留めたと。そう思ったんだけどね」
「危なかった、たァ言っておくよ。敬意としてな」

「そうかい。――じゃあ、次こそは当てて、仕留めるよ。さっきから防いでいるし、避けているからね。当たれば死ぬ。そうだろう？」

「大正解だ」

一瞬の小休憩。

けれど再び戦闘は苛烈に戻る。

手数では勝っている。単純な殺傷能力で見たら俺の方が上だ。格上も格上だ。長時間――いんやさ、今の状態であれば短時間浸っているだけでも死ぬ冥界の魔力。事実、さっき俺にぶち当ててきた尾の一部分は、その毛並みからツヤが失われ、硬度も下がっているよォに見える。有効ではある。

だけど、その他が桁外れだ。

さっきみてェに鼻っ柱ぶん殴ったって、横っ腹蹴っ飛ばしたって、フルオブズヴィトニーァびくともしない。違ェな、ダメージはしっかり入ってるけど――タフすぎる。そりゃそォか。狼って言やァ持久力の鬼。加えてこの寒さだ。どんだけ激しく動き回ったって体温上昇ァそれほどでもねェだろォし、体内に氷河飼ってるよォなモンなら体温調整なんざ御茶の子さいさい。

この地、この土地ってな、ちゃんとアイツにとって住みやすい場所で、戦いやすい場所なワケだ。

「なァ、フルオブズヴィトニー！　死が怖ェか!?」

「当たり前だろう――怖くない奴なんか、いるのかい？」

「いたよ！　いっぱいいた！　気持ち悪いくらいいたンだよ。目的のために、任務のために、早く帰りたいから、生きる意味がないから！　強くなれねェから、時間がないから、頂きとかいうモンを目指すってタメだけに！　死を選ぶ奴が――たくさんいたんだ！　だから聞いてる！　死が怖いか、フルオブズヴィトニー！」

空は快晴。日差しはあるけど、寒さは覆らない。何千本の林をぶっ壊しながら、何十㎢の山肌を削り割り壊しながら、けれど止まらない。止まったら死ぬのだと、どちらもが理解している。

その最中で、極限状態のど真ん中で、あァさ、言葉が止まらない。

それは産声が如く。それは自然現象が如く。それはこの世の摂理が如く。

「怖いさ！　――だから、今！　生きようって努力してる！」

「大正解だ！　死者に、蘇ったものに、夜の使徒に！　今殺されんとしているア

ンタが紡ぐ言葉として、ぶつける意思として！　そこに一切の間違いァ無ェことを俺が認めよう！」

言葉と同時に、背から噴射する冥界の魔力の出力をさらに上げる。

あるいは【神光】に輝く金髪お嬢様の反対を行くよォに、真っ黒い光が迸る。

直後、フルオブズヴィトニーの顔が眼前にある。

あった。あって。だから――ドタマでぶち当たる。

「――!?」

俺よりもでけェ眼球と眼球のど真ん中。でけェが故の死角。図体差に開きがあるからこその戦法。

そこに、フルオブズヴィトニーの顔の真ん中に掴まって、毛を引っ掴んで――爆発的に魔力を開放する。冥界の魔力。高密度のそれは、どろり、どろりとフルオブズヴィトニーの中へ侵入っていく。まるで地獄の窯に身を付けるよォに。冥界の淵に飲み込ませるよォに。

どォだ、お得意の爪も、氷河の吐息も、この場所にァ使えねェだろ！

「そんなことはないさ」

「ッ、――【透過】視戦死遠！」

行使に精神が悲鳴をあげる。それはオマエが使うべきではないと、誰かが囁いてくる。お前の役割にないことをするなと、お前はそれを使ってはならぬと。

けど、けど、ンなことよりも――それを行使してまでも、避ける価値があった。

「自分の、顔をッ！」

「……痛いね。痛いさ。――けど、死ぬよりマシだ」

「！」

あの爪が引き裂き得るのは、恐らくこの世のあらゆるもの。

それは自分の身とて例外ではなく、だからこそ絶対にしてこねェと思ってた。

けど、躊躇なく。

一切の躊躇なく――俺のいた場所を、自分の片目ごと引き裂きやがった。

それが、生きるための抗いであるのなら、と。

「ハ――」

漏れる。

漏れ出でる。

「はは、ハハハハ！」
我慢？
できるかよ。
求めてたンだぜ、それ。誰もに！　世界に！
まさかこんなとこで、まさか誰とも知らねェ魔物が持ってるなンてよ。
「悪名高き誇りある狼（フルオブズヴィトニー）！　――改めて敬意を示そう！　なればこそ、俺ァクロムクラハではなく――忠実なりし夜闇の鼬（アンディスガル）として名乗りを返す！」
「夜の名前か。――いいよ。なら、こっちも笑ってやる。ヒヒ、ヒヒヒ！　こっちももう一回言うよ、アンディスガル！」
クリスが。
どろりとその刀身を溶かしていく。黒と白。冥界の骨。
ドロドロに、まるで【鉱水】を受けた鉱石みてェに溶けて、液体になって。
俺の両手に、絡みつく。
「世界のために、死にな！　アンディスガル！」
「――糸伊豆阿派青磁負不伏零矢堕千経度戸地内途（それはやにささげるいちふしのおり）！」

そこに何ができるのか。
それが何に組み上がるのか。
俺ァそれを、知っている。
だから――構えて。
両腕を前に突き出して、拳を握って。
「生きるために抗うなら！　俺ァ死として、お前の行く手を阻む！」
指をかけて――撃つ。
2発。
そォだよ。
そォなるに決まってンだ。だってそれが、俺のはじまりなンだから。
この世界で初めて命を奪ったのァ、これなンだから。
これじゃねェと――礼を欠く。
「【召天】」
吸い込まれる。形成されたのァ2発の弾丸。形作られたのァ2丁の拳銃。撃ちだされたのァ、俺に残された冥界の魔力の全て。

それは、片足犠牲にしてでも突っ込んで来ようとするフルオブズヴィトニーを突き破る。犠牲になっただけじゃねェンだ。確実にその前足殺して、けど弾丸の勢いァ収まんなくて、そのまま彼女の血肉を突き破って進む。

避けようったって無理さ。それァもう無理だ。なぜなら、彼女自身が一撃で仕留める気でいたから。彼女自身が、自身ですら避けられない間合いにまで来ちまってたから。

狙いは１つ。

さっき冥界の魔力を染み込ませた眉間。最も弱い場所。弾丸ァ盲点をも通り、消えるのだろう。避ける事はできない。

ゆえに。

「――ワタシが盾となるわけです。失礼」

その、赤によって。

防がれた。

「……は、ハ」

満身創痍とはこれこの事だろう。

自らの顔面を引き裂き、前足を失った巨大な狼一匹。

自ら纏う魔力に引き摺り込まれ、死者へと足を踏み入れた精神体一匹。

そして――。

「オマエが、何者なのか。今更問わねェ。どーせ覚えてねェだろォからな。けど、頼みがある」

「なんでしょうか」

「――俺を食うのァ、やめてくれ。俺が負けたのァお前じゃなくて、フルオブズヴィトニーだ」

「わかりました」

物分かり良く、すんなり引いたボーグルに、苦笑しか出ない。

満身創痍なのァアイツも同じだ。その身に冥界の魔力を、全力の弾丸を食らって

おいて生きてンのがまずやべェが、だとしてももうすぐ死ぬだろう。腹と胸、そこにでけェ穴が空いてるからな。死んだんだ。確実に。

そして――巨躯がやってくる。

「……横槍が入ったね」

「はン。そォいう……もん、だろ、魔物の戦いなんざ」

「夜の使徒は嫌いだけどね。――それなりには。一応、楽しめた、と。そう言っておくよ」

「そいつァ、最高だ。――食え」

「ああ」

口が迫る。

冷たい口だ。冥界の方が、ずっと暖かい。この寒さは――あァ、どこか、あそこに似ている。

俺が神さんに拾われる前にいた場所。»前«と»今«を繋ぐ狭間。暗く、暖かい穴の底。そこにあった湖の畔――。

「……何の成果もねェ人生だったが――まァ、結局。俺ァここ止まり、ってことさ」

その牙が。口が。
俺を――。

「全く。――その口を開けさせるのに、何百年隙を窺った事だろうね？」
「――カ、ァ!?」
突然、フルオブズヴィトニーが仰け反る。
大きく仰向けに仰け反って、目をかっぴらいて、じたばたと、苦しくて仕方がないと言った風に悶え苦しむ。
それはまるで――毒でも、食らったかのよぉに。
「やぁ。元気かな、クロムクラハ」
「……てめェ」
ソイツはいた。
そこにいた。いつのまにかいた。
戦士然とした風体の、片腕の無い女。
「おや、ツイウ。アナタがあの穴倉を出てくるなんて珍しいですね。珍しいんです

か？」

「ああ、珍しいとも。ジョームンガンダーに敗北し、フルオブズヴィトニーに腕を食いちぎられて数百年。ずっとあの穴倉で２つを殺すための毒を作っていた私にとって、つまりそのまま数百年ぶりの地上さ」

「嘘を吐かないでください。さっき何百年と隙を窺っていたと言いました。そうするには、フルヴィトさんを監視している必要があります」

「嘘じゃないさ。――なんせ、監視していたのは私ではないのだから」

苦しむ。じたばたと、息ができねェのか、それとも痛むのか、その巨体をバタバタとさせて――苦痛を訴える。

やめろ。

やめてくれ。

「じゃあ誰が監視していたのですか？」

「誰だと思う？」

「難しい事を質問しないでください。ワタシが知っているわけないじゃないですか」

「知らずとも、考える事はできるだろう。数百年と外に出ていない私が、どうやっ

てフルオブズヴィトニーの動向を見ていたのか。答えは簡単だ」
「なるほど。わかりました」
「ほう？　わかったのかい？　それは驚いた。言ってみてくれ」
「答えは〝簡単〟ですね」
「……うん、君に期待した私が愚かだったよ」
やめろ。くだらねェ話してンじゃねェ。
毒を食らわせたンだろ。文字通り、その隙をずっとずっと窺ってて。横槍も横槍だ。くっだらねェ横槍だ。
けど、これで。
もうアイツが生きられねェのはわかる。
急速に命の気配が小さくなっていってる。ホントにやべェ毒なンだろう。
だから。
だから。
だから！
「苦理主――もう一回、姿変えろ」

「あぁ、クロムクラハ。無理はしなくていい。フルオブズヴィトニーは直に死ぬ。苦しめて苦しめて、楽になってきた頃にもう一度苦しみが来て――死ぬ。あれはそういう毒だからね。体内に入ればこっちのものさ。君はアレに口を開けさせた功労者として、そこに横たわっていてくれていい。貴女にはまだ役目があるのだから、こんなところで死なれては困る。後で適当な魔物も狩ってくるから、それで傷を癒すといい」

「ツイウ、クロクラさんは夜の使徒でした。夜の使徒に手を貸す必要はありません」

「ボーグル、種族差別はいけないよ。死者だろうと生者だろうと、太陽の使徒だろうと風の使徒だろうと夜の使徒だろうと、私は貴賤なく扱う。何故ならそこに」

うるせェ。

どうでもいい話ァやめろって言ったはずだ。

姿を変えろ、苦理主。

2丁の拳銃から――もう一本の、相棒の姿へ。

「そうですか。わかりました。ではクロクラさん、これからもお友達としてよろしくお願いいたします。つきましてはワタシ、そろそろ死にそうなので、どうにかし

てくれませんか？」

「ボーグル。その必要はないよ。何故なら君は」

「っるっせェつってンだろ！」

構える。良い、倍率スコープなんざ無くていい。

欲しいのァ貫通力と長距離射程だ。そうだ。それでいい。形を変えろ。剣から拳銃へ。拳銃から――狙撃銃へ。

「体勢もへったくれもあったもンじゃねェが――馬鹿が、俺と敵対して、苦しめると思ってンじゃねェぞ!!」

撃つ。

込めたのァ死の魔力。冥界の魔力程の濃さは無いが、だとしても俺の魔力であることに違いはない。

それは仰け反り、暴れまわるフルオブズヴィトニーの尾に着弾する。俺にぶち当て、ゆえに弱くなった尾だ。硬度を下げた尾は簡単に魔弾を受け入れ――そのまま、体内へ侵入する。

「――褪戦死遠（死漸）！」

夜への祈りも捧げてねェ状態での魔法行使。
当然――全身をカチ割るよォな痛みが走る。しかし、それは確実に発動した。
体内へ入った弾丸。そこから漏れ出でた、希釈された死の魔力。水みてェに染みわたって、その心臓にまで刃を届ける。
ずしん、と。
止まった。暴れまわっていた巨躯が――よォやく、苦しみから解放されたよォに。
あァ、この表現は、俺ァ大っ嫌いなンだがよ。
よォやく、救われた、みてェに。
死の魔力は、その全てが【死漸】に置き換わり――彼女を、殺した。
俺に勝ったフルオブズヴィトニーを、殺したンだ。
「……殺したのか。全く、勿体のない事をする」
「え、フルヴィトさん死んだのですか？　ならあれを食べてワタシが回復するのはアリな気がしてきました」
「近づくな」
起き上がる。

無理だ。もう限界に近い。
なら、良い。精神体なンだ、別に立ってなくてもいい。
移動しろ。俺ァ前に進んでる。
俺が今、認めた。この状態であっても前に進んでいると認めた。
だから、世界(お前)もそォ認識しろ。
「ボーグル、アレを食べると、貴女にも毒が回るよ？」
「それはそうでした。確かに。忘れていました。……でもクロクラさんは、アレを食べるみたいですよ？」
「何？」
進め進め進め。
その身に辿り着け。退くな。進む事を止めるな。
――俺にァその義務がある。敬意を表したンだ。なら、その身は。
俺が食わなきゃいけねェ。
ホントは俺が食われなきゃいけねェけど、横槍や奇襲が入るのも魔物の摂理だ。
けど、だけど、お前の最期ァ、俺がやった。俺が殺した。毒で苦しんでいようが、満

身創痍であろうが――俺が殺したンだ。その最期の、生きてェと願った命の灯ァ、俺が摘み取ったンだ。

誰のものでもねェ。

俺が、食う。

「――止めた方が良い。その毒は、君にも効くかもしれない」

「うるせェな。毒持ってるから食わねェなンて事を選ぶくらいなら、そォいう耐性つける方向にでも進化しやがれ。俺ァンなモン持っちゃいねェが――食う。そのために、殺したンだ。殺し合ったンだ」

クルメーナ周辺海域じゃ、そォいう生存競争があっただろォが。

あんなちっくせェ魚たちがそんだけ頑張って生きてンのに、てめェの怠惰でコイツが食われず終わって堪まるかよ。

進む。

進んで、――辿り着く。

その身体に触れる。

……無理か。もう、魔力は無い。

死んでいる。

「……座頭伊豆能登阿出内或.佚能登沙米紫遠.椅子伊豆邪止座頭伏霊矢不応身塔意図.」（それは否定ではなくそれは救いでもなくただこれは、私が食事をするそのためだけの祈り）

軋む精神に鞭を打つ。

これだけの巨体だ。食べきるにァ、そうするしかねェ。

すまねェ。本当に。

本来なら俺が食われるはずだった。俺とのサシなら、そォなるべきだった。ボーグルの横槍もツイウの横槍も関係なく、俺ァアンタに負けてた。たとえ俺の弾丸がアンタの顔面貫いたって、アンタは俺を殺してただろう。顔を、脳を、身体を殺したって、アンタは俺の身体を引き裂いて、殺し尽くしていただろう。持っていけて相討ちか。それでも絶対に、俺だけが生き残る、なンてことは無かったはずだ。

だから。

だから――せめて、感謝をする。

合わせる手もねェのァすまねェが。

祈りの言葉は、言わせてくれ。

「解体徒（いただきます）」

食らう――。

「ふゥ……あァ」

「まさか、本当にすべて食べてしまうとはね。体調に異変はないかい？」

「無ェよ。死者に毒なんざ効くか」

「そうか。それは良かった」

「で、これだろ。てめェのお目当てのモンは」

言って――放る。

フルオブズヴィトニーの爪。その一本。

死して魔力の失われた今でさえ、あらゆるものを切り裂き得る鋭さを誇るソレ。

あの巨躯についてた爪なンで相当でけェし重いンだが、ツイウは放られたそれをひょいと受け取り――亜空間ポケットへしまった。

――はン。

やっぱりか。

「あのー、ツイウ？　ワタシ、本当にそろそろ死にそうなのですが」
「大丈夫。そんなことはないからね」
「それはどういう――、ウ!?」
突然、ボーグルが頭を抱える。
けどそれァ苦しんでるってよりかは――光に驚いたとか、そんな感じの。
「どうかな。記憶は戻ったかい？」
「……」
「やっぱり、てめェらそォいう関係か」
「うん？　あぁ、流石にわかるか。クロムクラハ、君はボーグルほど頭の弱い子ではないようだからね」
おかしィ点はたくさんあった。
魔物ってなは復讐なんざ考えねェんだよ。だって負けたらそこでオシマイなンだから。食い食らわれの世界で、逃げ帰って隠れ住んで復讐のために毒作ってるなんざ魔物のやることじゃねェ。
さっきボーグルが指摘してた点もそうだ。ずっと引きこもってる奴がどォして監

視なんざできる。どォして毒の調合なんざできる。
　ま、他にもほじくればいくらでも出てくるンだろーけど。
「てめェ、元魔法少女だな？」
「かの時代では仙女という呼び方だったけれど、そうだよ。正解だ」
「……あの、記憶戻ったんですけどワタシ、変わらず死にそうなんですけどワタシ」
「はい、直したよ」
「あ、はい。ありがとうございます。直りましたワタシ」
　治ったンじゃねェ、直った。
　簡単な話。
　ツイウは、特殊魔法を扱う魔法少女で、ボーグルはツイウの特殊魔法だったって、そンだけのこと。
　それが魔物になってる理由は。
「……それが、ジョームンガンダーか」
「話が早くて良いね。そうだ。私はかつてジョームンガンダーの討滅に挑み、しかし敗北を喫した。私がジョームンガンダーに挑んだ理由はただ一つ、当時の仲間を

すべて食べられてしまったからだ。そして私もそれは同じ。ジョームンガンダーに魔法少女の因子を持っていかれてしまってね。私の魔法はコレだから、なんとか精神体だけを引きずり出して、その辺にいた魔物に詰め込んで復活を果たしたわけさ。逃げる際にフルオブズヴィトニーに見つかって、片腕を持っていかれてしまったけれどね。私は元々こんな姿ではなかった、というのはそう言う事」

「ちなみにワタシは元からこんな姿だったみたいです。もうちょっと綺麗な姿で作りだせなかったんですか？」

「任意で魔法の形を変えられるのなら、魔法少女は苦労というものを知らなくなるだろうね」

はン。

よくわかってるこって。

だからまァ、フルオブズヴィトニーを長年監視してたのもボーグルで、毒の調合のための色々を集めてたのもボーグルで。記憶失ってた理由は――あんまりにも簡単に戻せたあたり、自在なのかもな。ボーグルが抜けてるから、口滑らせねェよォに重要なトコは消して、俺に近づけたか。

はァ。

嫌になるね。なンでこんなトコに来てまで魔法少女との腹の探り合いなんざしなきゃいけねェんだ。魔物の世界のが殺伐としちゃいたがサッパリしてて好きだったよ。

……あァ。

フルオブズヴィトニー。アンタ、ちゃんと美味かったよ。味はわかんねェけどさ。少なくとも今、魔煙草の不味さで掻き消したくねェって思う程度には、美味かった。

クリスを元の剣の形に戻す。

……これもよくわかんねェままだけど。

「んじゃ、そろそろ行こうぜ」

「え、どこへ行くんですか？」

「ア？　ジョームンガンダーのトコに決まってンだろ。武器ァ手に入ったんだ、ついてくるだろ？」

「勿論だとも。ジョームンガンダーを殺して、みんなの無念を晴らす。私の身体も取り戻す。ついでに世界も平和にして、全て解決だ」

「それ終わったら俺も殺されそォでこえェなァ」
「そんなことはしないさ。君に嫌われ、貴女に目を付けられると厄介なことになりそうだからね。無論、既に好かれてはいないようだけど」
「ワタシは好きですよ、クロクラさんのこと。褒めてくれたので！」
「夜の使徒は嫌いなンじゃなかったのかよ」
「そうでした。嫌いです。大嫌いです夜の使徒」
ありがとう、フルオブズヴィトニー。
大切にするよ、アンタを。
ごちそうさまでした。

遠《ｔｅｘｔ･ｓ1･2》吠えは遥か彼方に《ｔｅｘｔ》

90・迂遠保歪斗伽地図亜伏初頭部楽・

ジョームンガンダーの元に行く。あるいはそれを探す、という必要はなかった。向かう先。北方山脈の一部。大陸に横たわる隔たりの壁。

何故って。

それが――むくりと、持ち上がったからだ。

「――……嘘だろ」

「姉妹の死には、流石に反応するか」

「わぁ」

嘘だろ、しか出なかった。

宙を衝く、天を衝き上げる長大な白蛇。全長を測ることなどできない。まるでもとからそこに、巨大な樹木でもあったかのように。あるいは天から何かが零れ落ちているのではないかと錯覚する程に。

天幕にも届かんとする巨体は、しかし確りとこちらを見ていた。

快晴だ。阻むものは存在しない。

その恐ろしき眼光はギラリと光り――俺達を、見ている。
睨んでいる。
「――やべェ」
「とりあえず、最後は手筈通りに――他は任せよう。ボーグル、君もだ。自由に動いて自由に彼女を援護してほしい。あぁ、死ぬ事だけはやめてくれ。私が死んでしまうからね」
「わかりました」
その首が、ぐわん、と撓んだ。
左から右に。上から下に。
――奥から、手前に。
幸いだったのは、その図体が生む気象現象にも似た気流によって、吹っ飛ばされることができたことだろう。精神体ァ魔力の含まれてねェモンをすり抜けるが、その大気の動きは相当量の魔力があった。暴風。業風。俺もボーグルも、その巨体に体当たりされる前にぶっ飛ぶ事ができて――ゆえに、目の当たりにした。
ぬらりと光る鱗。その身ァどんな鉱石よりも硬く、鋭く、艶やかで、美しい。死。

死だ。これは、死に近しい。

「話し合い、とかやってる場合じゃねェンだろォが――」

生憎俺ァ、殺し合いと食い合いと名乗り合いの合意が無けりゃ、戦いたくねェってな馬鹿でね。

上る。このデカさだ。その身に沿って飛んでいく。フルオブズヴィトニーの爪も相当にデカかったけど、こいつァその比じゃねェ。他の奴らをそォ呼んでいた頃が俺にもあったが、違う。こいつこそ、ジョームンガンダーにこそ〝化け物〟の呼び名ァ相応しい。

これが、昔は単なる蛇だったってんだから、ハハ、すげェ世界さ。

「……ん――お、ぁ!?」

その身に沿って上って行く際中のこと。

クリスを持っていて良かった。この世のモノならざる刀身ァそれをしっかりと防ぎ、しかし俺をぶっ飛ばす。

よく見えなかった。けど、何かにぶん殴られた。何に？　またボーグルか？

「クロクラさん！　気を付けてください、ジョームンガンダーは鱗を飛ばせます

！　無防備に近づかないように！」
「あァさそーいう事ァ早く言え！」
「教えてあげたんですから褒めてください！」
――また、死の気配。
散弾銃みてェな軌道だ。それは勿論、目の前の蛇肌から。
あるいはコイツにとって、身震いをする程度のものなのかもしれない。身体に引っ付いた虫を取るための、その程度の行為なのかもしれない。
けれど、対処としてァ十二分だった。
俺もボーグルもその身から距離を取らざるを得なくなり――そこに、折り返してきた頭が突っ込んでくる。頭を頭だと認識するのに数秒かかるくらいのデカさだ。隕石なンじゃねェかと思うそれが、俺だ。俺を狙って、今度は押し飛ばされない、確実にぶち当たり得るコースを取ってくる。
クリスで防ぐ。無理だ。どォ考えてもサイズ差でぶっ飛ばされる。拳銃形態だろォが狙撃銃形態だろォが関係なく、これを防ぐことはできない。
ならば魔法か。終の因でやったみてェに【即死】の絶対防御。ああいうのを使え

りゃなんとかなるか？

無理だ。俺がコイツの全細胞を浸し殺し尽くすより、こいつが俺を叩き殺す方が速い。ならば防御系の魔法か。【静弱】や【波動】？　あるいは【透過】？

それも無理だ。何故なら今の俺は平常時。冥界の魔力全開の時なら咄嗟に使う事もできただろォが、今から夜に祈り捧げて他人の魔法を行使する、なンて余裕はない。

全部が無理だ。

全部が無理なら、どうするか。

決まってる。

「――よォ！　俺ァクロムクラハってンだ。アンタ、名は!?」

対面したンだから、まず名乗る。

それが礼儀と教えられた。

そして。

「……」

「ヘェ。止まってくれるンだな。俺が憎いだろォに」

ギリギリだ。本当にギリギリ。
生み出される気流にァ踏んじばって耐えて、クリスを背中に担いで仁王立ち。
ハハハ。いや。
怖かったよちゃんと。
「聞こえなかったか？　俺ァクロムクラハってなさ！　アンタの名が聞きてェ」
「……理由を、問おう」
声を出してるわけじゃねェのに、ビリビリと何かが大気を揺らす。
耳元に雷でも落ちたンじゃねェかと錯覚する程の音量は、けれど音そのものじゃねェ。あるいは干渉力だのと呼ばれる何かだ。魔物同士の会話で普通に使われている、念話とでも呼ぶべき発声を用いない会話。魔力のやり取りが為されてるワケじゃねェ、単純に風の使徒同士が故の囁き。
それが、こうも暴風となって。
あァさ、フルオブズヴィトニーを貶すつもりァ一切ないが――これまた、格が違う。
フルオブズヴィトニーでさえ格上だったのに、こいつは最上位だ。スーグとシュ

ジがあれだけ止めていたのも、寂しんぼが念押して止めてきたのもわかる。
こいつは軽い気持ちで関わるにァやばすぎる。
だから。
「はン、理由？　俺がアンタを食うからに決まってンだろ。食う相手の名前も知らねェってな摂理に反する。名乗り合って殺し合うのが魔物だろ。違うかよ」
「……良い。我なるは、ジョームンガンダー。貴様を食らう魔であると同時――姉の仇を討たんとする魔である」
「あァ！　ありがてェ！」
だから、挑発もするし、感謝もするし、宣戦布告もする。
フルオブズヴィトニーを食って回復した分を大切に使う。大切に――全力を賭す。
「糸伊豆阿止理負不伏零矢堕千経度戸地内途（それはよにささげるいのりのものがたり）！」
さァ――もう一回だ。
こちらが死者である事も明かして、ぶつかり合おうぜ。